奥出雲

[1]

（第 1 ～ 100 号）

（1975 年 4 月～ 1983 年 8 月）

横田史談会

高橋一郎 編著

まえがき

高橋一郎

昭和三十八年（一九六三）、『島根県横田町誌』編纂にあたり、横田庄（奥出雲―島根県仁多郡）を中心に仁多郡内の中世以降の旧家・三鉄師（糸原・田辺・櫻井）・寺社・役所等所蔵の古文書、東京・広島両大学、島根・山口両県立図書館所蔵文書、さらに奥出雲に関連する伯耆、備中・備後・安芸・石見・長門の国々の諸家寺院の古文書も逐次借用し、県内で町村では最初の電子複写器を購入し、専任職員を於いて複写・製本を行った。

幸いにして好評な出版となったが、利用しない古文書は夥しかった。中学教員退職後、横田史談会を発足させ毎月、古文書を読む会・古典会読会・史跡巡りの会を開き、機関誌『奥出雲』を毎月発行し、書き残しを連載した。

他方、たたら研究会・産業考古学会の全国大会を横田で開催、地方の歴史・中世史・近世史・山陰・山陽の各歴史学会も共催し、さらに横田町独自のたたら研究会も連催し、北海道から種子島までの研究者の方々に出席頂いた。日刀保たたらの操業見学を共にして頂いたことも楽しい思い出である。

『奥出雲』は、幸いに全国各地で読んで頂き、中央・地方の研究者の執筆に御引用頂くことができた。特に中世横田庄の論文で力を注いだ、近世以降の日本の主産地となったたたら製鉄・製鉄業に関する記述は、中央でも高く評価を受けた。

社会・経済・文化・美術・人物の諸史も現代に至るまで載せた。

創刊より廿五年たった折、世話人の私が長期入院をしたため、発行を中断、退院後も執筆は続けているが、齢高齢のため会の運営と機関誌の発行は困難となり今日に至っている。

この度、拙弟や読者の奨めによって、全三百号余の『奥出雲』を三分冊として若干の冊数を複写・製本して配本することにした。応援し励まして頂いた方々の好意・信頼・期待に報いたいと思う。

八十九歳、桜の季節に。

（注）本文中（蓬）（蓬頭子）（高橋一郎）とあるのは、いずれも高橋一郎執筆である。

たたら火入れ式にて（平成4年4月2日）

50号記念 奥出雲（30号まで横田文化）総目録

普通号は4頁，(8．9．19．21．31)号は6頁，(15．17．44．50)号は8頁，右の数字は号数　完は連載の完結

1. 神話と歴史の間　号

①あめのむらくもの剣は銅剣時代　29
②神話の読み方　30
③記紀と出雲風土記の神話の違い　31
④稲田の神社　（完）　33

2. 遺跡・文化財

藤ケ瀬城趾　1
馬場八幡宮の銅剣　2
金厳山岩屋寺　3
横田における古代遺跡　4
まぼろしの高田廃寺　5
馬木の古城趾覚書き　6
小森の神楽について　7
横田の番所　10
横田の横穴古墳　10
　一附　石剣の発見
横田町の古墳調査報告　31
　－50,51,52年度分
横田のたたら遺跡一らん表　44

3. 奥出雲の古代を推理する

①鉄　9
②中国地方　10
③出雲族のひろがり　11
④大和の成立　12
⑤吉備と奥出雲　13
⑥縄文、弥生時代　14
⑦3～6世紀　15
⑧横穴墓の出現（上）　16
⑨　〃　（下）　17
⑩奥出雲と備後との交渉　18
⑪古代の出雲豪族（上）　19
⑫　〃　（下）　（完）　21

4. ふるさとの歴史

横田町広報連載(50回)の続編

⑭三沢一族　1
⑮　仝　2
⑯　仝　3
⑰　仝　4
⑱　仝　5
⑲　仝　6
⑳　仝　一附　伽羅仙台萩　7
㉑　仝　8

5. 横田庄五百年史

①中世の夜明け　21
②ねらわれた鉄資源　22
③仙洞御料所　23
④覇権への道をゆずった三沢氏　24
⑤仙洞御料所の終末（完）　25

6. 入門文化財小字めぐり

①野の仏と郷土の歴史　14
②龍の駒　23
③横田盆地　26

7. あれこれ (1)

船通山と竹崎　13
「せんちぢやま」は船通路山である　19
奥出雲の花神－馬馳の秀斉、横田の淳斉　24
横田八幡宮の放生会　41
毘沙門堂

8. 岩屋寺物語

①中興僧快円　上　34
②　仝　中　37
③　仝　3　48

9. 旧家の歴史

①稲田の土居・安部家　34
②　仝　35
③　仝　（完）　37
①大馬木の山本・杠家　46
②　仝　47

10. 寺院の成立・変遷と民間信仰

①特　色　15
②盆踊りと山伏　16
③庶民への仏教の普及　28
④墓と石塔　29
⑤横田の六部さんと経筒・経塚　40

11. 民間信仰メモ

①淡島・金毘羅　43
②稲荷さん　48

12. 庶民の哀歓が育てた伝説

①高尾の傾城岩　37

②和泉式部 39
③最明寺入道時頼の廻国 41

13. あれこれ(2)
殿さん蔵 18
㊥奥備後の雲州街道 20
狐にばかされた話 27
毛利藩鉄奉行斬殺事件 42
義民伝六の碑の建立 43
横田の角力とり (上) 44
仝 (下) 45

14. 横田のたたらの歴史
①たたらと住民(附たたら復元) 27
②たたら遺跡と記録 28
③重要視された横田庄 29
④京都御所の領地 (完) 30

15. たたら製鉄早わかり
①鋼 28
②たたら床とたたら炉 30
③鉄鋼の中の玉鋼製造 31
④歴史が生み出した文化財 32
⑤大鍛冶屋 33
⑥近代製鉄法(上) 37
⑦ 仝 (中) 38
⑧ 仝 (下) 39

16. 絹の道・鉄の道
① 45
② 46

17. 横田地域史のしるべ
①清和源について 25
②荘園と院政 35
③横田庄(上) —鎌倉時代末まで 36
④持明院統と大覚寺統 38
⑤横田庄(中の上)—14世紀 40
⑥ 仝 (中の下) 42
⑦ 仝 (下) 43
みてら泉涌寺 43

18. 年表・地図
弥生時代文化年表 2
岩屋寺並宝物年表 2
横田庄と三沢氏一族をめぐる年表 8
横田の民俗資料年表と分布図 9
備後北部と奥出雲文渉史 17
政治・土地・庄園制度発達史 35

19. 奥出雲地域史研究資料
図書 (上) 32
仝 (中) 37

20. 横田町古文書庫収蔵文書解説
①馬場の秋山善神
—若月家古代大成記 36
②岩屋寺 38

21. わらべ歌 (楽譜付)
①手遊び歌 1
②お手玉取 4
③手まり歌 10

22. 資料
観音堂(馬木) 14 疋の今昔 43

23. 古文書コーナー
① 18

24. コミュニティー
① 3号 ② 4号 ③ 5号
④ 7号 ⑤ 8号

25. 横田で生れた人
①勝平大喜 12
②角村の三名工 15
③青木実三郎 17
④妹尾勇吉 22
⑤小林徳一郎 32
⑥雲照律師 48

26. 戦後横田文化小史
①書店と本 1
②歌舞伎 2
③音楽 3
④合唱 5
⑤映画(上) 10
⑥ 仝 (中) 12
⑦ 仝 (下) 14
⑧読書会(上) 16
⑨ 仝 (下) 18

27. グループ・個人
横田民謡友の会 7
太田亀甲さん 16
森山庫一さん 30

28. 随筆・論稿
民芸と焼物つくり(安部宏) 7
㊥奥出雲歴史民俗資料館建設を 8
近代詩文書と私(米沢天崖) 14
民俗学について 39
地域文化を育てよう —横田での一つの足跡 44
㊥歴史風土論 三成と横田 49・50

(その他の小論稿は省略)

㊥は、その号全頁にわたるもの

五・六月合併号につき会員配布本号のみ一部二百円／六九九—一六 島根県仁多郡横田町横田 高橋一郎(振替松江六〇一番)／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

奥出雲51～200号内容項目別一覧表 （数字は号数）

中 世 編

① 奥出雲東部の旧家 — 未完
横田氏(99) 代官 小池・安部氏(100)
三沢氏(101) 馬来氏(104)

②○中世横田庄概観－年表・系間(127, 8)
○誇りうる中世横田庄－その社会と経済の動き (164, 165, 166)

③○飯島三沢氏物語 (106, 107, 109, 111, 112, 117, 119, 126)
○尼子家臣団の分析 (131, 132, 133, 134, 135)
○岡山県川上町の三沢氏－三宅隆道(81)
○地域史を考える －中尾慶次郎(81)

④○藤ケ瀬城主三沢氏の祖先は
木曽義仲ではない(51) 飯島氏である(52)
在来の偽系図の作者は(53)
○藤ケ瀬城の遺構－寺井 毅(167)

⑤ 陰陽の中世史・備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲(150～154, 156, 158, 160)

⑥ 杠城興亡記－浅原公章 (84, 85, 87, 88, 90～92)

⑦ 惣と一揆の行動－序論 — 未完 (90～93, 95)

時代・地域と奥出雲

⑧ 朝鮮半島と奥出雲(192～194, 198) — 未完

⑨ 太平記の時代と奥出雲(193～200) — 未完

⑩ 出雲大川流域物語 — 未完
横田の両岸(178) 安部吉重郎(184, 186)
漆仁の薬湯(191)

⑪○出雲国風土記の神話(57)
○稲田姫の戸籍と斐伊川の地籍(86, 87)
○神話の基盤 (88, 89)
○書きなおされつつある日本－出雲風土記の位置 (116)
○風土記を読む会から－出雲の四大神(118)
○スサノオの開拓地 (135)
○ヒノ川＝斐伊川はどこか (130)
○横田郷は秘境であった (143)

たたら製鉄

⑫ 出雲で古い鉄師 — 未完
③大馬木の山本・杠家(51, 56)
卜蔵家の原鈩－佐世川徳雄(129)

⑬ 山陰の鉄の始源は－朝鮮半島に於ける古代製鉄と北九州 (141～144)

⑭ 砂鉄製鉄史 (76, 77)

⑮ 奥出雲のたたら製鉄史(105～109, 113, 114 (中世) 117, 125 (近世) 160, 162, 163, (松江藩政) 165, 171, 172, 176, 179, 180, 181, 183, 185, 190, 197) — 未完

⑯○たたらの手引－砂鉄たら鉄へ(144)
○やさしい鉄滓の見方－窪田蔵郎(61)
○高殿以前の原始的な製鉄法 －仝 (65, 66)
○発掘された羽口－仝 (67, 68)

⑰ 鳥取藩政と伯耆国鉄山のうつりかわり －影山 猛 (170)
横田たたらの里を確固なものにするには(175)

寺院関係

⑱ 岩屋寺 — 未完
○傑僧快円 (53, 58, 63)
○庶民の寺岩屋寺(155)

⑲ 高田寺根元録 (79, 82)

⑳ 奥出雲の仏教 (130, 131)

⑳ 三沢蔭涼寺と安国寺恵瓊(124)

考古学から

㉓ 出雲と吉備－東森市良(54)

（1～50号の目録は50号に掲載）

㉔ 奥出雲と古代　日焼田遺跡－仝
(56, 95)
㉕ 奥出雲の古代社会－古墳文化
－中浜久喜　(93, 94, 96～98)
㉖ 産業考古学のすすめ－森口　保 (72, 73)

歴史と風土　—未完
㉗ 横田と音楽(55)　比波科学(55)
㉘ 横田の茶道・前史(74～76)
松平不昧と茶道　(102～104)
㉙ 経済更生指定村の生き方
－過去から現代へ (177)
㉚ 人間と環境
教育の風土(52)　美作の津山(53)
北備大会から(54)
㉛ 洋の西と東－聖母マリヤと観音(152)

小字の歴史　—未完
㉜ 稲田(63)　横田町①(123)
大馬木西部(137, 138)
尼子経久の母馬木氏の里－宇波
(169, 172)　下横田㊤(192)
散歩道　キミネさん(159)

人　物　—未完
㉝ 井上栄太郎(75, 77)　門野長造(118)
卜蔵孫三郎(78, 83, 86)
岡崎喜一郎(109)　卜蔵梅之丞(113)
郷学記念碑－善徳寺子代記(140)
細木芒角星(171)
安部宙之助(168, 173, 176, 178, 180, 186
187, 191, 193)
㉞ 奥出雲に関する研究書目録①と
研究者名(69)　—未完
荒木宗重(52)

文　芸
㉟ 奥出雲の歌道
(64, 66, 67, 70～73)
㊱ 奥出雲俳諧史　—未完
(80, 82, 83)
㊲ 奥出雲と文学・芸術　—未完
大町桂月(138)　与謝野夫妻(161)
頼春風・杏坪(174, 179, 180, 185, 187)
㊳ 湯の廻の文芸　(82)
㊴ 南画と奥出雲　(89)
㊵ 森欧外と中江藤樹(99)
㊶ 松平不昧の書　(185)
㊷ 菅茶山と奥出雲　(170)

碑・石仏　—未完
㊸ 石明しぐれ塚(77)　路考発句塚(87)
芭蕉の句碑(158)　細木芒角星句碑(171)
㊹ 三界萬霊塔(150)　龍の駒(151)
六日市三上さん(189)
㊺ 路傍に刻む歴史(155, 162)
㊻ 妙厳寺と袖師が浦の地蔵(135)
㊼ 宝篋印塔(三沢為忠)　(195)

諸　史　—未完
㊽ 奥出雲の民力　(120, 121)
㊾ 横田の生活(明治35年)
(145～147, 150～152, 154, 158, 159)
㊿ 雲州そろばん国指定伝統的工芸品に(124)
(51) 仁多郡畜産小史　(148, 149)
(52) 仁多郡農談会　(58～60, 62)
(53) 庶民の中の旗本武士(108, 110～112, 114,
116)

地　誌　—未完
(54) 横田銘草木集－丸山　巌
(66～81, 83)

(10頁へ続く)

(諸篤志家のお蔭により200号記念の増頁ができ総目録をつけ合併号としました)

56 船通山の鳥類を探る－内田　映 (86, 88, 90, 96, 101)

57 吾妻山・庄原・多里は海底であった (115)

58 自然との共生を文化の中心へ (184)

民具・民話・民謡 —未完

59 民具と民俗資料 (62)

除草見たら除草機へ (64)

高野山の田植早乙女ハマリさん

－岡村達男 (69, 70)

60 民間信仰

あたごさん (88)

61 むかし・いま・あす（行事）

(94～100, 102)

62 横田の民話

(145, 147, 153, 156, 158, 170)

わらべうた (145, 147)

63 鉄にまつわる話 (60)

親をいたわった話（古文書から）(71)

木地谷敵討ち事件 (120, 121)

妙好人－浅原才市 (122)

64 大東町下久野の番所 (155)

随想ほか

65 龍虎相搏つ (130)　辰のとし (153)

馬・うま・午・ご・むま (177)

年号考 (166～168)

66 東北夏の旅から (126)

もみぢのみちのくひとり旅 (139)

奥の細道と奥出雲 (182)

みちのく奥の細道ふたり旅 (189)

67 短　詩「少年の心」 (159, 168)

提言など

中世に眼を (76)

憩の丘に彫刻の森を (165)

たたらの里横田を確固なものにするには (175)

ロマンと亡霊 (90)

つくり出す文化への回帰を (119)

横田町本町の再生を (123)

イベント（偶発）的世相 (125)

歴史の真実を求めて (146)

栄光さりまた来る（7世紀の歴史） (153)

鏡・剣・玉をめぐる神話の作られた時代背景は

（7世紀の歴史） (157)

後世にのこすもの一像 (161)

古事記は偽書の重み (162)

郷土読本を読んで (163)

大岡昇平の文学 (167)

神話と歴史 (168)

歴史の面白さ楽しさと怖さ (173)

単身赴任－古代木簡から (147)

大嘗祭考 (181, 183)

このほか　町内の美術の各クラブから、写真・書・日本画をのせて頂いた（1～82）。文芸関係では、57号から短歌と俳句、78号から川柳を現在まで毎号のせて頂いている。

こゝに掲載したもので、書き直して学術論文として学会誌・研究紀要・著作集等に要請も頂いて収録して頂いた。

かなりの図書館・大学・研究所・学会等と研究物の交換の橋渡しとして、本誌が役にたっている。

（旧号がご希望によって一数号は複写－お届けできますので、ご連絡いただけばよろこびます。拙いものですが、篤志家の御協力で続いていることを、感謝しております）

祝

今、印刷はコンピューター時代！

電子編集組版＆電算植字システム

有限会社 植田軽印刷

〒699-15 島根県仁多郡仁多町大字三成453-1

TEL・FAX 0854－54－0114

会員頒布一部百五十五円／六九九－二六 島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二 編集発行責任者・高橋二郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会 印刷／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

横田文化

復刊第1号
昭和50. 4. 29
奥出雲文化協会

藤ケ瀬城址

★京都北朝の御料地

横田庄（旧鳥上、横田、八川）は、平安時代の半ば（八百年前）から、京都石清水八幡宮の料地であった。その後南北朝時代にその一部が北朝の料地となった。三沢為虎がこの地を去った天正末年までも、なお北朝の大切な料地であった。

★築城者三沢為清

こうした中央に直結した土地に対しては、代官が派遣されていて、地方武士は容易に手中に入れることが出来なかった。八幡宮料地代官は樋口の小池氏（現杠氏）、北朝料地代官は稲田土居安部氏であった。

三沢に来住した三沢氏がこの横田に勢力を扶殖したのは、百四十年もたってからであり、藤ケ瀬城が完成して来住したのは、更にそれから六十五年も時を必要とした。永正六年来住すると、安部氏が代官を退いているから、三沢氏が武力を背景に、かわったのである。しかし八幡宮の代官小池氏はなを威厳を保っていた。このことから横田がいかに犯すべからざる土地であったかを知ることができる。

★山城としての藤ケ瀬城

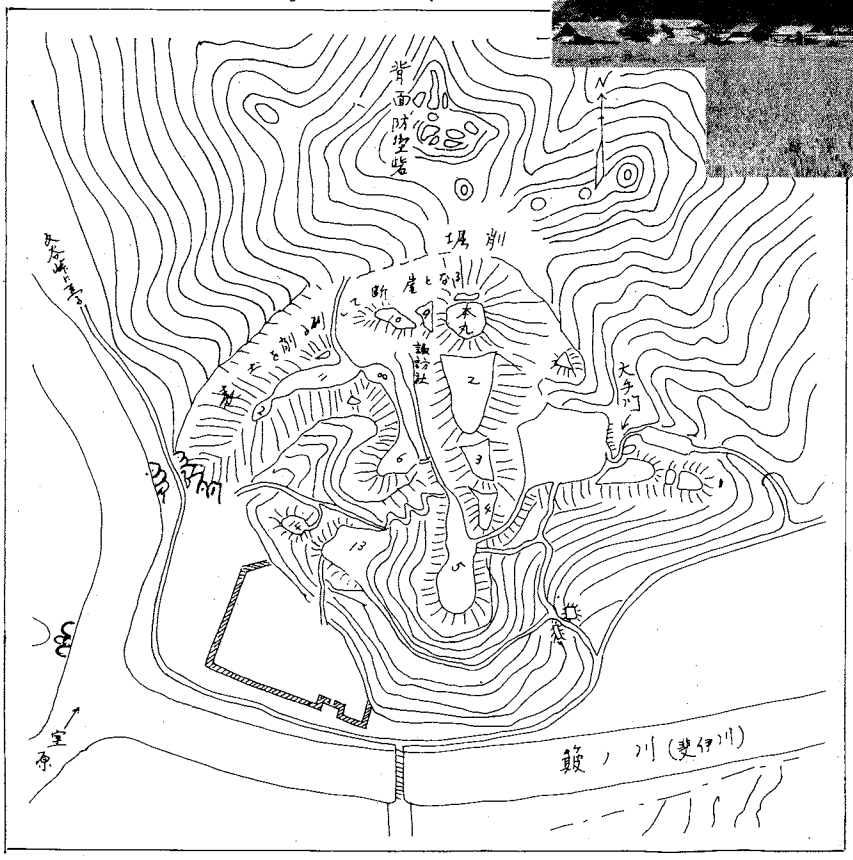
日本の城は、山城、平山城、平城の三つに分けられる。山城は築城術のあまり発達しない時代のもので、三沢氏の活躍した中世戦乱の時代に、大いに造られ活用された。独立した山上に造られたもの、連山の一峰に造られたものがあるが、当城は後者である。

山城の構造は朝鮮の山城の影響をうけているという。地形に制約されて、図面（荒木宗重作製）にみるように、不規則な郭配置となって、土地に応じて分散している。

防禦の主体は山のもつ自然の要害や堀切などの利用である。

この城は横田盆地の一角に、威厳を示すとともに、外観の美観も誇示していたであろう。位置は敵味方の軍事行動の観察に有利であり、（吾妻、三沢城も見通せる）弓矢の戦斗行為にも敵に有利であり、敵軍の肉薄も困難である。そこで尼子氏の再三の攻撃にも耐えることができた。しかし食糧、軍需品の搬入に困難であり、水の確保に不利であった。

題字は「糸原風亭氏」



（写真は東南より望む城址）

ふるさとの歴史

三沢一族 (14)

ー横田町広報連載の続篇ー

尼子毛利両氏の間に介在して、向背常になく自己の勢力保持に汲々としていた三沢氏は、尼子氏が富田城を去ってからは、出雲東部に勢力拡大を計って動いていた。

尼子再挙第二回戦

山中鹿之助幸盛は山賊となって神出鬼没、やがて元亀二年美作から上洛して、明智光秀に頼み信長に謁し、光秀に従って山陰道に進んだ。こえて三年海賊となり、丹波から因幡に上陸し、亡命中の山名豊国を助けて鳥取城主に返り咲かせ、この冬京都に入った。

元亀四年（天正元年）富田城にあって山陰をおさめていた吉川元春は、再び因幡の山名豊国をうち、更に但馬にも進出せんと出陣した。これをみて山名は使を送ったので元春は兵を引きあげた。この機会をとらえ、勢を盛り返していた尼子勝久は因幡へ進出した。豊国は尼子方に直ちに寝返りをした。この年の暮、幸盛は柴田勝家を通して織田信長に援助を願ったところ、信長は援助を約し、毛利へは援助を断った旨を伝えさせた。

翌二年九月、鳥取城へ尼子主従が入り尼子勢が振った。伯耆の毛利勢は因幡に再び進出し、豊国に変心を迫ったので鳥取城を退き、幸盛の養女（妻の妹）のむこ亀井慈矩（津和野藩主の祖）に城を守らせた。

このころ三沢為清は、本居は三沢において藤ケ瀬城に住んでいたが、この年隠居して亀嵩に城を築きはじめた。

天正三年、毛利は尼子討滅の兵を因幡に進めんとして、富田城の背後をつかれぬよう三沢、三刀屋両氏にせまり、二心なきことを誓わせた。為清とその子為虎は、三刀屋氏とともに、吉川元春、元長のもとに誓紙を差し出した。

信長が毛利台頭に備えて播磨に兵を進めるとの報が伝ったので元春は富田城に帰った。

翌四年三月、信長は元春の年頭の祝賀に答えて、鹿之助を庇護しない旨を報じた。虚虚実々の織田、毛利の謀略である。五月遂に城はおち、尼子主従は京都逃亡し、この第二回戦は終了した。

基礎がためする三沢氏

五年亀嵩城が完成したので為清は移り住んだ。これから亀嵩の町が造られていった。

二月三日付の晋叟寺文書によれば、三沢氏の菩提所であるこの寺を、亀嵩城山麓に移したいと思ったが出来ず、現在地に覚融寺を三沢から移した。翌五年、多数の僧をかかえていた岩屋寺を保護するとともに、この勢力も利用したいと掟をもうけた。六年出家、入道となっていた為清は願文を奉納した。この年為虎名による上申書が、日御碕神社に届けられている。それは神社遷宮の為の棟別銭負除の事である。横田庄は祭中御料所であって、昔からこういう賦課は受けない事になっているというのである。京都の圧力もあり、三沢氏もこれを利用していたのである。

（次ページへ続く）

手遊びの歌

田のけたに座って、れんげの花などをちぎって遊びながら歌う歌の一つである。

わらべ歌といっても、各地に似たりよったりのものが多いが、この歌は当地独特のカンナ流しを歌ったもので、この地に生れた歌である事には間違いない。そこで一番最初にこの歌をとりあげたのである。

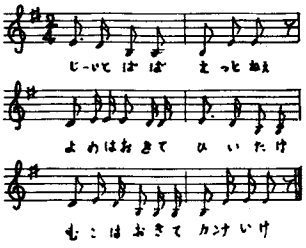
二千年も続いたであろうこの奥出雲のカンナ流しは、秋の彼岸から春の彼岸までのこの地方の重要産業であって、この為に濁る斐伊川の流れは、今日公害という言葉にはなじまない風物詩であった。この地方の台地の殆んどはカンナ流しによって出現したものであり、流された砂によって馬木の反保、八川の古市、横田などの沖積地ができて集落が生まれたのである。この歌の成立はのちの事であっても、ここに歌われている生活は実に古いものである。

歌の意味は、年寄りに対するいたわりと、ムコと嫁に代表させた、家族の仕事の分担を実に単純に素直に表現したもので、そのムダのないまとめ方にも感心させられる。

爺と婆々　えっとね
嫁は起きて　火たけ
ムコは起きて　鉄穴いけ

わらべうた　(1)

伝承者　堀江利治
採録・解説者
酒井薫美



（採譜　高橋一郎）

尼子再挙第三回戦

十月、織田方の先陣豊臣秀吉は播磨に入り姫路に進出した。尼子が従って毛利への反撃開始であった。十二月、秀吉は備前、美作、播磨の境にある上月城を占領し、勝久、幸綱、久綱らの尼子主従を入れた。天正元年以来織田方に味方していた尼子主従に漸く希望の訪れが感ぜられた。毛利の宿敵尼子を第一線に配置したのは秀吉の巧妙な戦略のあらわれでもあった。

この状況を知って毛利輝元は、天正六年三月、吉田を、元春は富田を、小早川隆景は三原を発し、総勢水陸合わせて五万の大軍となった。三沢為清、為虎親子も、三刀屋、赤穴、多賀、宍道、古志、湯、杉原らの出雲諸将と共に元春に従って参加した。二十倍余の兵力によって上月城の用水兵糧遮断の手をうった。

急報により信長の命をうけた秀吉は、荒木村重ら四万の兵をもって高倉山に対陣したが、袖手傍観する他なく、七月遂に勝久は自害し開城した。

幸盛は再起を期して捕われたが、護送の途中、甲部川阿井の渡しにおいて、吉川元春の臣天野隆重の子元明によって斬られた。幸盛の再興の夢は、遂に終止符を打った。

上月城が陥つると守兵を残して毛利方は引揚げた。元春に従う諸将は作州高田へ向って勝利に酔うて兵を帰した。

この時先陣を請うて兵を進めたのは、若冠十九才の三沢為虎で、老父為清の期待は胸一杯にふくらんでいた。高田から解散し各々の道をとって各将帰陣した。

この戦において為虎の重臣成田五郎右ヱ門尉秀綱の子彦六右ヱ門尉は奮戦、六月二十一日に討死した。為虎は感状を下し、扶持を加増した。父は子の冥福を祈るため一貫文の土地を晋叟寺に寄進した。若き武将為虎は父為清ゆずりの猛将の風ぼうに、更に智将としての素質も備えた三沢一族の棟梁であった。

（次回は備中高松城水攻めにおける、三沢の動きに動揺した毛利陣営）

祝　復　刊

大同書籍合資会社

☆戦前の書店

昭和の初め、大市の吉重橋のたもとに、藤田ヒデという方が大阪宝文館（創立者柏佐一郎はヒデの実弟）から、小学生用の参考書をとりついで販売しておられました。やがて昭和八年から、現小林薬店が松江の今井書店を通して雑誌の販売を始められ、十四年の大市の大火による類焼から現在地に移り、小説類にも拡げてゆかれました。戦後、書籍にうえた人々にわりと高級なものも取りついで、文化の窓口を開いておられました。

☆初代店主若槻正輝

私の父は、小学校卒業すると大阪宝文館に入って修業し、健文社を創設して自ら事業に乗り出すと共に、昭和二十年大同電波兵器株式会社を創立し、横田の岡田算盤工場で操業開始をしようとする時、敗戦となり中止しました。昭和二十三年より郡内小中学校めぐりの書籍販売を始めると共に、大同産業合資会社を設立し、書籍部門の外に電波兵器会社の機械を使って木工部を経営し、ローマ字積木、算数計算具、その他を製作して阪神を販路としました。食糧事情の悪かった都会が次第に良くなると共に、立地条件の悪いこの地の不利をみて、書籍販売に事業をしぼり店舗の拡張も行いました。出版の経験もありましたので、「書道手本」「島根県社会科」「郷土のしほり」、横田中学校編集の「国語の基礎学習」「数学の基礎学習」などの出版を致しました。中には版を重ねて好評を博したものもありました。

やがて平和堂印刷所を創立しましたが、今日ほどの紙の文化の栄える時代ではありませんでしたので、解散し書籍一本にし水準の向上につとめました。お蔭様で昭和二十七年頃、県下の山間部では珍らしく水準の高い書籍の売れる書店として島根新聞に紹介されました。当店の努力もさることながら、いずれこの文化小史で綴られることでありましょう戦後の横田の多彩な文化運動の中で、もたらされた町民の読書意欲によって支えられたものでありました。

☆御愛顧のほどを

私は父のこのような努力と文化愛好の意志をうけついで、今日まで書籍の水準を維持するとともに、高中小学校の教育参考書や大衆誌もあわせて販売し、時代の要請、各方面の要求に応えたいと考えております。この上とも御指導御鞭撻の上御愛顧を賜りたいと存じます。

二代目店主
若槻哲彦 啓白

戦後横田文化小史①

方言採録

奥出雲脳業短期大学入試問題より

ー暗夜行路よりー

わすりや① こんやは、よがねよびって② はしらにゃならんが、よいとどの③ あんちゃんは、どげーしーだらあか④、うまいことうんてんしてごすだらあか、あびねーもんだ。

おらーわずらーてから⑤まんだてあしが、ぶがん⑥なもんだけん、ほだいに⑦ようせんし。

わすりゃしたのにょーばんこが、ほによって⑧ やってごすかもしれんしなあ。そーだも てんぽこてんさいだ。

①若しや、ことによっては
②終 夜
③夜になると早く寝る人
④どうするか
⑤病気をしてから
⑥足弱な
⑦まったく
⑧運まかせだ

やってみましょう協力で

欠けているもの（ねらい）

●テレビに振りまわされたくない。

●何か生活の中に美しいものを、つくり出して楽しみたい。

●郷土を同じくするものは、もっと心のつながりがほしい。

これは誰も心の隅で感じていることでありましょう。一緒になって、志の同じいものが努力してみようではありませんか。

それでは

そこで、こんな機関誌を復刊してみました。

●紙面を一緒に作りましょう。考えて下さい。

●書いてみましょう。執筆者になって下さい。

経費は赤字になることが、みえていますので、最初はこの位のもので我慢せねば。

●原稿用紙二枚以内で投稿して下さい。

●大同書店の窓口にお渡し下さい。（当分の間）

●内容はこの号にのったようなことがら。

●史蹟めぐりの集い

町内からはじめて、県外へも。

●古文書を読む集い

まだまだ資料は沢山あります。苦労してみましょう、共同で。

いずれも小、中学生、高校生の参加を歓迎します。若い人に育ってもらいましょう。

●下段にあるような出版も考えています。ゆくゆくは皆さんにも、共同執筆していただきたいと思っています。期待しています。

協力して
この奥出雲から、
小さくても
ピカリと光るものを
生み出そうではありませんか
ゆっくりと

ひとこと「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」は夏目漱石の名著「草枕」の冒頭の言葉である。住みにくいから昔話という訳ではなく、住み易くするには愛郷心を、それは郷土の再認識からという訳。

戦後、紙のない時代、横田町文化祭で耳で聞く総合雑誌「横田文化」を三号迄演出した。その後横田の文化運動に好意を寄せてくれた島根新聞の協力で印刷して数号。盛んだった地方文化も食糧事情の好転と共に衰退、文化祭も横田文化も行を共にしてしまった。合唱活動は三十年の半ば迄続いたが。「地方」再建、コミュニティー再建の声の上がる時、まずそのコミュニティーの現実、その背後の住民の歴史を再認識する事も大切である。又、今印刷しておかねば忘れ去られてしまうであろうと、御協力によって印刷できた。内容についても消化についても御協力を。

奥出雲文化シリーズ（予定）

奥出雲についての記録、物語りを保存する為に次の様な計画を持っております。資料などについても御協力をお願いします。

○地場産業物語
「雲州そろばん」（今秋）
○戦国奥出雲の両雄
「三沢氏馬来氏物語」
○日本歴史を支えた
「奥出雲砂鉄製鉄史」
○出雲の名刹
「岩屋寺のすべて」
○出雲八社八幡宮の雄
「馬場八幡宮」
○奥出雲の要衝
「大市六日市町物語」
○奥出雲の製鉄師
「旧家物語」

若い同好者の研究の便のため、資料所在も明らかにしておきたいと思っています。

（編集責任者　高橋一郎）

畑田文化

復刊第2号
昭和50. 6. 6
奥出雲文化協会

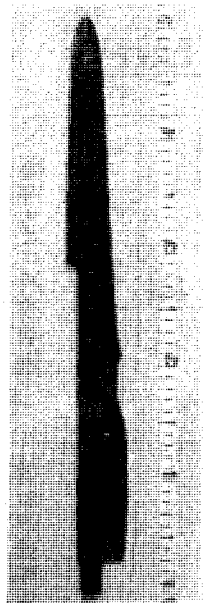
馬場八幡宮の銅剣

古代北九州文化圏をしめす

銅剣は銅鉾、銅戈とともに北九州文化圏に属し、出雲はその東端に近く、銅鐸の大和文化圏との交る地点にある。（下図参照）銅剣は武器として朝鮮から入り、のち祭器として広がったもので、日本古代国家の成立をとく鍵である。（次ページの年表参照）

県内では

平浜八幡宮蔵　竹矢出土
細形銅剣（舶載）　27.3cm



馬場八幡宮蔵　馬場出土
大形細身銅剣（仿製）55.9cm
県立博物館蔵　海士町出土
大形細身銅剣（仿製）
出雲大社蔵　大社出土
中広形銅戈（仿製）31.2cm
風土記の丘蔵　鹿島町出土
中広形、大形細身銅剣六

縄文後期に瀬戸内海沿岸に盛行したもので、仿製（国内製）で、斐伊川水系の山ごえルートで入ったものと考えられている。

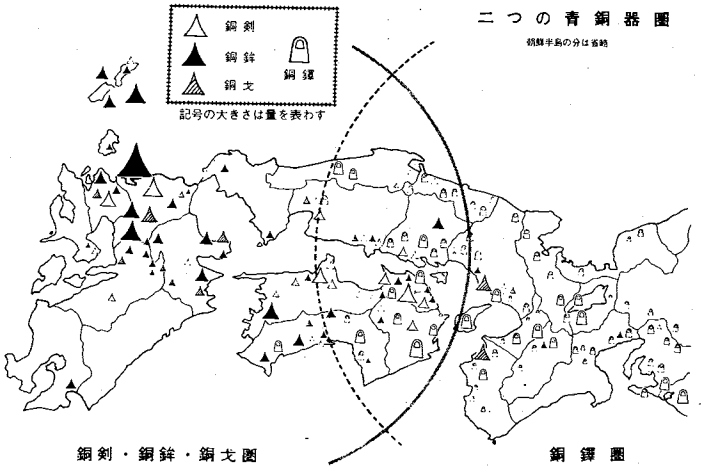
関連するもの

仁多町亀嵩出土の壺形土器と甕形土器は、土器の頸から肩にかけて櫛目文を入れたいわゆる櫛目文系の土器である。

元来この櫛目文土器は近畿地方を中心として発達した形式の土器であるが、山陰では必ずしも近畿のものと直接的な関係はなく、むしろ瀬戸内の土器にみられるような、どちらかといえば単純なもので行われている。亀嵩へは「出雲風土記の道」で、馬場八幡宮と三粁にも足らない距離にある。大和に服した吉備の吉備津彦が出雲平定のために侵入した拠点は、東南方の多里であり、簸の川を下る各地にその足跡がある。龍の駒出土の縄文土器も山陽地方の系統に属し、山越ルートで入ったものである。

大和に匹敵する古墳群のある吉備は出雲の東南である。砂鉄の道も山陽からと推理される。出土鉄器のチタン分析が進めば、それを確実にする一つの理由づけが加わることになる。

『失われた九州王朝』



—朝日新聞社刊「失われた九州王朝」より転載—

弥生時代文化年表　（朝日新聞社刊「古代史の謎」と毎日新聞社刊「邪馬台国の常識」にて作成

紀元	中国	西洋史	朝鮮	時代区分	魏志倭人伝（邪馬台国）	鏡 九州	土器 中国	古墳 大和	出土品 横田	銅 九州	器 大和	鉄 九州	器 大和
7,500				縄文早期									
3,500				前期									
2,500	周	アレキサンダー大王		中期					龍の駒 土器（瀬戸内系）				
				晩期									
800			高句麗	弥生前期									
③				前半								朝鮮より入る	
	秦	万里長城								銅剣 銅鉾（一柄） 銅戈（一柄）		初期（九州2 山口1）若干使用 石器道具多し	
200	前			後半			甕			（朝鮮より武器、として入る）			
②	漢		楽浪郡			（鏡）	（土器）					使用著しくなる	
100	新												
				中期		副葬 前漢鏡多量（福岡須玖、三雲）	棺 山陰山陽 ヘラで内から削る	畿内 ヘラで外から削る 北南 で特色異る		日本で作る 形も変わる 北九州の 奴、伊都、末 らに集中 鋳型多く出る	銅鐸（350ケ） 聞くものから 見るものへ		
①	後	ローマ帝政		前半	57 奴国遣使								
0				後半		副葬 後漢鏡 北九州海岸（奴国、伊都、末ら）	墓					鉄の道具製作する	九州地方以外はわずか
①						副葬 小鏡、貝輪敢在（福岡亀甲）						銅才（20㎝）を鉄で大型（40㎝）につくる	板状鉄斧でる（日本独創） 関東、中部に多い
100				後期		副葬 後漢鏡 九州に広く	特色うすれる	1本化する					
②	漢			前半		鏡輪入へる 小型 日本で作る（九州に40ケ 古墳から出土しない）						袋状鉄斧あらわれる 2、3世紀に南朝に出現 九州に伝わる 広島まで広がる	多くなる 西へ広がり 広島に出土する
200			帯刀郡	後半									
	三国（魏呉・蜀）		高句麗 三韓		鉄鏃あり銅鏡愛す 239 ヒミコ遣使 240 245 247 ヒミコ狗奴国と戦う 248 ヒミコ死す？ 266 トヨ西晋へ遣使 289 トヨ死す？	景初3鏡（堺、出雲） 正始元鏡（兵庫、群馬）	祭祀土器となる			祭器に盛んに使う 銅鉾20〜70㎝にたる 大きくて刃ない 瀬戸内海 特に銅剣、戈多くなる 大阪湾にも及ぶ	祭器 盛んになる 急に姿をけし 一括して埋存	道具は殆んど鉄器（普及） 石器なし、甲冑はまだなし	
③						福岡平原古墳（剣、玉、鏡）	福岡低園山 副葬品なし（特定人中心の集団墓）	岡山 方形台状墓（260〜270年の）（特定人中心の集団墓） 兵庫田能遺跡（集団墓）	馬場八幡宮 銅剣（瀬戸内系）			量多く、朝鮮の技術	
800	西晋		新羅 百済	古墳前期	（空白）			前期古墳の発生（250〜300年）			古墳から出ない		
④		百済に仏教伝る	好太王	中期		鏡をもって大和へ移動？	福岡石塚山古墳（前方後円 中国鏡11ケ）	岡山車塚古墳 前方後円 中国鏡13ケ 京都大塚山古墳 前方後円 中国鏡30ケ余				古墳時代に入ると 袋状鉄斧が主流 板状鉄斧は大形化する	
400							中国製舶載鏡（三角縁神獣鏡） これ以後の古墳からの出土鏡 近畿中心に多い 中国、朝鮮にない、同范鏡の中心 大塚山古墳						
500				後期									

『たたら』考

「天叢雲剣出顕之地」の記念碑は前熱田神宮野田宮司の御揮毫により船通山山頂に厳として出雲神話を宣揚している。素盞嗚尊の八岐大蛇退治は奇稲田姫とのロマンを織りなして、簸の川上、横田の里は俗塵をよそに、山紫に水清く清清しい生活環境を形ちつくっている。山麓の熱田講の人々は年々熱田神宮への新穀の献饌を怠らず恭々しく神威を敬仰して居る。

「神話とたたら」原料砂鉄の良さは近代製鋼技術の中にも生かされていて、たたら文化遺産の数々による玉鋼の価値の認識は最近とみに高まって、我が国美術刀剣界に論議を呼び起している。雑草に埋れて散在する　や野たたら跡或は苔燕す鉄滓の所在より偶ばれる往時のたたら製鉄の盛大さは、和鋼の古里奥出雲の持つ燦然たる歴史として誇らしく、今や又更にたたら認識を新たにする好機と考えられる。

参考書ー横田町誌
週刊朝日　2/28〜5/23
司馬遼太郎氏連載
紀行「砂鉄のみち」

（株）鳥上木炭銑工場社長）
並河孝義

ふるさとの歴史

三沢一族 (15)

織田の中国経略

上月城陥落で毛利の勢力のあなどり難いことを知った織田信長は、豊臣秀吉を中国経略の総大将とした。天正六年、おちた福山玆正は、伯耆の南条元続の下に至り、毛利を去って織田に服させ、出雲を毛利方よりとりかえそうと計った。元続は織田の日増しに勢の盛んなるに心をよせ、姫路城にあった秀吉を介して信長に通じた。信長はよろこんで伯耆、隠岐、出雲半国を約束した。七年四月、杉原盛重、三沢為虎の兵が、姫路の秀吉の下に使する者を捕え南条方の書を元春に差出したところ

祝復刊　横田と歌舞伎

文化の灯　横田劇場

事業欲に燃えていた父(白)之助)が、劇場創設を思いたったのは、昭和に入ると間もなくでありました。今でこそ大市の本通りの感がある東本町も、当時は点々と家が十数軒あるだけで、劇場も田圃の中の一軒家で不便なところでありました。町の発展を予想して場所を定めたというより、劇場が東への発展をリードしたといえるかもしれません。

一応の完成をみたのは私の生れた翌年の十年でありまして、盛大なこけら落しをしたと聞いております。奥出雲の片田舎に、文化の灯の一つがともったのは、父の執念もさることながら、横田の文化的雰囲気が、特に歌舞伎ファンのあったことが蔭の力であったと思います。花道のある舞台は山陰唯一であったといゝます。

歌舞伎と横田

徳川末期に出雲では、横田と杵築の二ヶ所が芝居御免となっていました。その理由は明らかでありませんが、中国三大市場といわれていた。横田牛馬市があったことと、馬場八幡宮の放生会が、伯耆備後の人も集め、数百の露天商などが、東は神戸、西は下関から馳せ参じといゝますから。そこからこうした御免の土地柄となったものゝようであります。地元の馬場では、これらの刺戟もうけて、幕末から田舎歌舞伎の役者が生れていました。昭和初年永祥寺前の通称岩小屋で、これらの人々によって演じられた。菅原伝授手習鑑が若い父の心をゆさぶったものでもありましょう。

伽羅仙代萩、絵本太功記などは、十八番であったようです。当時の農村の娯楽は祭りの時の神楽や角力が主なものであり、歌舞伎はやぱり高級なものでありました。ほかに俳句などは日常の庶民文化の花でありました。太田甲之助先生の、御令兄御尊父そして、御祖父様がその中心であったと聞いております。その頃の舞台に端役をつとめた方々が、今日もう一度やりたいと語っておられるようです。

当劇場と歌舞伎

落成の翌年第一陣として嵐八千代を座長とする女歌舞伎、そして市村団十郎など二、三流を毎年一回は招いたのでありました。一流では中村扇雀（現中村雁次郎）の舞台を催しました。戦時中の娯楽追放にそい、昭和十八年から二十六年までは、青年学校中学校の校舎に使って頂きました。

そして再開第一陣の歌舞伎は、現在の中村雁次郎、林又一郎、中村扇雀の弟兄子でありました。父としては最高の顔ぶれで満足したことでありましょう。そして年に一度は皆様の御愛顧にこたえてまいりました。

現在の建物も古くなりましたし、テレビの普及で父の遺志を十分に果す条件にありませんが、何か横田における文化活動の上でお役に立ちたいと考えております。

隣の「当八」は新らしい時代感覚のもとに経営しております。友情をあたゝめるとともに、文化サークルの話合いの場にも大いに御利用賜りたいと伏して御願い申し上げます。

戦後横田文化史 ②

中津興業部第二代
当八主人　中津恵吉　敬白

このことが露見した。吉川元春は激怒し、元続の一族山田直実を呼んで、「玆正を殺して人質を出せば許す」と約して帰らせた。直実は玆正を招いて家臣と共に囲碁をさせ、その最中におそい斬った。元続は直実をせめたが、直実は「玆正を殺したのは実は君のためである。伯耆の国を領しているのは、尼子に追われた君の父が、毛利によって伯耆半国を与えられたのである。君の父の遺言に毛利の恩を忘れるなとあるのを、忘れている君の心の迷いをさまさんがためである」と忠告したが、元続はかえって直重を殺そうとしたので、直重は逃げた。元春はこれを知り富田城より兵を発して元続を攻めんとした。元続おそれて使を送り、他心ないことを告げたが、元春は聞かず使を斬って攻めた。元続は度々の合戦に利あらず、敗れ続けた。

この年尼子の旧家臣河本隆政が雲陽軍実記を作って、尼子を中心とする戦記を残した。

山陰への進出

天正八年、秀吉は毛利党の山名豊国を鳥取城に囲んだ。

そして旧領因幡一国を安堵する条件で投降をさそい、ついに豊国を秀吉に内通させてしまった。しかし秀吉はわずか二郡を与えたのみで、条件を完全に履行しなかったので、豊国の部下森下通与はおこって、吉川元春に告げた。元春は通与とはかって豊国を追放し、牛尾元貞をつかわし鳥取城を守らせた。翌九年二月、元春が傷ついたので毛利家の一族吉川経家を起用して、鳥取城を援けさせた。

この春秀吉は姫路城を修築したが、これは中国経略の根拠地とするためであった。六月二十五日、秀吉は備前美作より但馬口を経て因幡に入り、数万騎をもって鳥取城をかこみ、包囲を固くして干殺しの作戦（兵糧攻め）を行った。間もなく毛利輝元自身が救援に出陣するというので、信長も自ら出陣の準備を命じた。包囲に先だち、因幡の毛利の居城鹿野城を下し、人質となっていた豊国の女をつれ出し、豊国の来降をさそった。その鹿野城には亀井玆矩を入れて守らせた。

三沢氏の去就

元春はこれを救援するため元長を先陣として八橋に送り、募兵にあたらせた。当時の地方武士の常であったが、ことに三沢の行動には不可解な行動が多い。秀吉の党伯耆の南条元続と結んで、為清為虎父子が織田方に通ずるという流言があり、毛利方からせめられ父子は誓書を出して、元春に服属を約した。しかし信ぜられざるを恐れて出陣をしなかった。伯耆の兵も多くは元続に従い、出雲伯耆の兵で従うものが少なかった。

三沢氏は前年の一月二十七日にも世間の流言によって、為虎の名で誓書を出している。

このころ終始尼子方に属していた元家臣の郡内鍋坂城主布広三郎左ェ門を、為虎が攻め亡ぼしているから、何かあったことは考えられる。

鳥取城の攻防

元春は三千五百余の手兵を率いて富田城に入り、兵を募集し九月二十日八橋に進んだ。

この時には為清為虎及び三刀屋久祐は元秋に従って加わった。毛利の総大将輝元は遂に救援のため富田まで陣を進めた。五日には小早川隆景が手兵を率いてこれに合流したが、各地に分散しているため兵は少なかった。輝元は鳥取城の窮状が極めて急なるを知り進撃をせんとしたが隆景が聞かず、一方八橋にいる元春に使を送り、「寡をもって衆に敵する危い、召募兵をまて」と伝えたが、元春は「因幡はわが管内である、まてない」と六千人をもって馬野山に至ったのは二十八日であった。

鳥取城内の飢餓は極に達し生き地獄の様相を呈し、紀家は土卒の命にかえて自殺する旨を申し出た。秀吉は酒肴を送って紀家に永訣の宴をはらせ、十月二十五日に既に城をおさめてしまっていた。「鳥取の渇泣し」といわれる悲惨な落城の姿であった。最後は美談で飾られてはいるが、攻守とも苦悩は深刻であった。

輝元の先鋒元春は馬野山に陣し、南条元続の伯耆羽衣石城に対陣した。秀吉は鹿野城に入り羽衣石城の救援におもむいた。その勢八万騎の報は毛利陣営に流れた。陣中、為虎と益田藤包（かね）はひそかに話し合い、敵兵は多い鋭鋒をさけて再挙するよう元春に進言しようと元春の陣をたずねた。元春はすでに鎧をぬいで座し、「大いに雪降る、諸君大いに飲め」と、共に炉を囲んで酒を飲みかわし、高いびきで寝込んでしまったので、二人は話すことができなかった。

秀吉は七日間在陣したが、山陰は雪のくるのも早く、合戦も困難な季節となったので、羽衣石城ほかの城の守備をかためて姫路に軍をかえした。元春もまた兵を富田へ撤し、輝元、隆景もついで富田を発して安芸に還った。あきらめきれぬ元春は、翌十年一月十七日、安芸を発し富田を経て因幡に入り、再び鳥取城を囲んだ。

ー三沢の去就にふれておくことが必要であったので、高松城水攻めは次回にー

今後毎月第一土曜日を会合と本誌発行の日とします

郷田文化

復刊第3号
昭和50. 7. 5
奥出雲文化協会

出雲の名刹 金巌山岩屋寺

近世の寺勢

出雲における名刹としては、松江藩主墓所や藩主ゆかりの寺である、松江の月照寺、天倫寺、普門院、千手院と誓願寺、平田の鰐淵寺、そして岩屋寺と三刀屋の峯寺であった。もとは古義真言宗として高野山を本山とし、本山へも高僧を当寺から送り、出雲国内へも幾多の高僧を送っていて、明治の雲照は広く知られている。

徳川時代、松江藩の崇敬を集め代々の藩主がこゝに詣うでている。この寺僧への信頼も厚く藩主の相談役になって千手院に出仕したものも多い。

毘沙門天像（藤原時代・作者不祥）

郡内、能義大原の奥部、東津田等の寺院をすべていた。

創建

天平年間に創建され、行基が開祖といわれるほどに、聖武天皇勅願所として重きをなした。当時の豪族が中央にならって競って造った寺である。

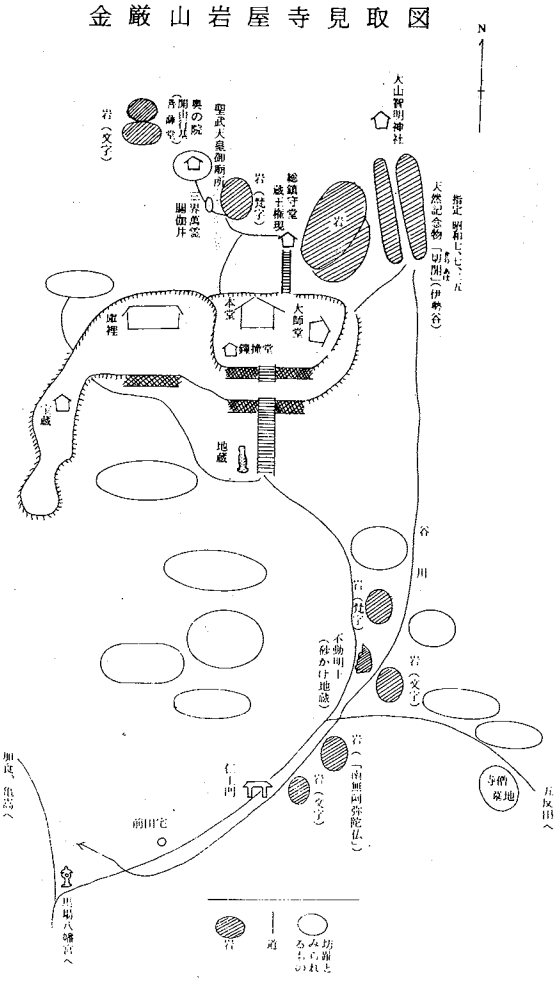
高田廃寺が郡司大領蝮部臣の租父の創建というから、当寺は郡司主張品治部の創建したものと推定してよいことは、附近の古墳時代からの歴史、横田の歴史の発展からみて確実性をもっている。

中央とのつながり

当地が石清水八幡宮荘園になったことは、寺勢を増し、北条氏の崇敬もうけて、二頁年表の如く、奥出雲の歴史に大きいかかわり合いをもった。

山名氏の、そして尼子三沢両氏の対立にもまきこまれた。永正十一年、尼子の兵火によって焼失するまでは、本堂をはじめ堂宇二十、僧坊二十一をもち、僧も兵を兼ねるものが多かった。その後、傑僧快円の十数年の努力によって、その八分通りまで復興した。毛利氏に冷遇されてより盛衰かわり来て、度々の復興もあったが、明治維新以後高僧も去って、諸国の真言密教寺院と同じく、観光に力を注がなくては維持が困難である。

金巌山岩屋寺見取図



岩屋寺略年表

———は特に寺に関係あるもの

奈良	733	天平 5	出雲風土記成る（木次に新造院あり）	①
	738			
	747	天平10代	岩屋寺創建	②
平安	1072	〃	横田庄　石清水八幡宮領となる（小池氏）	③
	1111			④
鎌倉	1229	寛喜元	これより以前三処郷地領三処氏　八幡宮の代官となる	
	1232	貞永元	三処氏我儘あり代官改易	⑤
	1233	天福元	三処氏横妨し　岩屋寺良仙法師上訴する	⑥
	〃	2	〃　再び代官となる	
	1264	文永 2	北条時輔六波羅探題（南）となる	
		5	亀山上皇　高田寺、大領権現に祈願	
	1271	8	北条時輔領ー横田、竹矢、須佐（いづれも八幡宮領）	
			三処氏領ー三処郷、大原佐世の白上八幡宮領	
			この年横田庄は八幡宮と三処氏に中分される	
		9	時輔（時宗の異母兄）一族の争いにより殺される	
	1274	11	蒙古第一回来襲	
	1275	建治元	岩屋寺安堵の勅旨、泉涌寺が勅使	
	1281	弘安 4	八幡宮馬場へ・本願妙音禅尼(時輔の母・時頼の妻)	
		10	当寺へ宇多天皇綸旨とどく（弘安の役による）	
	1300	ころ	野火により焼失　祐円の中興（三沢氏郡内へ）	
			檀那　妙音禅尼	
	1312	正和 2	妙音禅尼の四回目の土地寄進　　禅尼死す	
南北朝	1343		祐円死す	
			横田庄　北朝仙洞御所に分けられ（代官　安部氏代官として下る）さらに泉涌寺領にも岩屋寺（北朝）と高田（廃）寺（南朝）争う	
			三処郷は鶴淵寺僧頼源の所領となる	
室町	1352	観応元	横田、三処郷　伯耆守護山名氏の下に	
	1390	明徳年間	明徳の乱	⑦
	1393	応永元	三沢氏、三処郷に勢力拡大　三処氏山名方で失脚か	
	1439	永享 2	横田庄へ三沢氏勢伸張する　岩屋寺盛ん	⑭
	1462	寛正 3	一揆のため焼かれる？	
	1486	文明 18	尼子経久　富田城へ	
	1509	永正 6	三沢為忠　藤ケ瀬城へ	
		11	尼子　藤ケ瀬城を攻める　岩屋寺全山全焼	
	1520	17	僧快円復興にとりかかる　8年かかる	
	1531	享禄 4	経久　藤ケ瀬城を攻めおとす　為国ら捕えらる	
	1543	天文 12	復興8分通り成る　横田庄、尼子の領下となる	
	1558	永禄元	卜蔵氏　岩屋寺に寄進	
安土桃山		天正 5	三沢氏　岩屋寺の法度定む	
	1586	15	三沢一門　安芸へ	
			毛利御家人入り　横田庄を6人に給する	
			寺領なくなり寺僧去り、荒れ放題となる	
徳川	1601	慶長 6	堀尾氏　出雲藩主に　１５石を寄進	㉑
	1622	寛永 9	堀尾氏　加増して　３０石となる	
	1650	慶安 3	寺勢恢復する	
	1789	安政年間	当山４２世海雲　松江千手院住職となる	
	1800			
	1803	文化年間	当山４５世寛瑞　〃　１９世に	
	1817			
	1844	弘化年間	当山４８世慈雲　〃　２１世に	
	1848			
明治		明治	当山５１世宜明	
			当山５２世雲照　〃　２２世に	
			当山５３世徹明　〃　２５世に	
		明治 2	寺領は５０石	

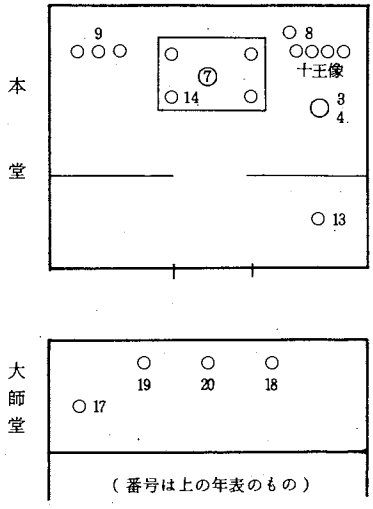
岩屋寺宝物時代順表

（昭和6年現在）

○印は価値の高いもの　このものは左の年表の右端に再掲
ー　ー内は文部省調査（昭和6年）の概要

奈良	①楊柳観音図	中国の唐時代楊貴妃の織ったといわれる掛軸
		鎌倉時代　妙音禅尼寄進
	②法華経２巻	伝弘法大師筆　実は同時代の人の写経
		高野山無量寿院澄栄（当山２８世頼雄の弟子亀嵩産）が阿本上人よりもらい慶安２年寄進
平安鎌倉	③毘沙門天	蔵屋にあったもの　ー修理悪く特相失うー
	④仝　脇立仏二体	〃　ー大修理で損っているー
	⑤仁王像二体	ー修理を誤っているー
	⑥阿弥陀三尊（軸）	
室町	⑦本尊十一面観音	ー上半身の修理悪いー
	８愛染明王	（春日作）　三沢為忠寄進
	９阿弥陀三尊	
	10蔵王権現像	焼失　当地で永観法師（34才）永正18年作る
	11立石の６字	（鎮守堂西脇）　〃　〃
		寄進　僧宗綱（為忠の息　母は馬来氏娘）
	12立石の梵字	閼伽井の東の岩　永正１８年、越後国の客僧三位房作　意味は「真言」　他の石の梵字は「大日」の意
	13びんずる尊者像（なでぼとけさん）	大師堂は天文７年新建　石原氏の息供養に僧快春の弟子快賢高野山にあり、阿本上人の同情により京仏師に依頼し作ったもの
	⑭四天王像	天文８年　京七条仏師法眼康秀が当地で作る
	15文珠菩薩像	〃　〃
	16本堂仏壇	〃　京の神右エ門が当地で作る
	17開山行基菩薩像	（奥の院にあったもの）寄進三沢七郎兵衛妻
	18薬師如来	
	19不動明王	
安・桃	20弘法大師像	伝高野山阿本上人作
江戸	21経　筒	（初期）
	22大日如来	（〃）　仏師　京都九郎左エ門

仏像安置図



（番号は上の年表のもの）

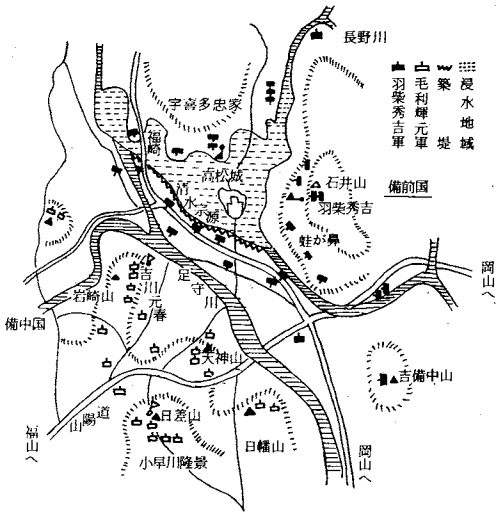
ふるさとの歴史 53

三沢一族 (16)

秀吉の高松城包囲

信長が武田征討に向っている間に、秀吉は備中において毛利征討の準備をすすめていた。一方、毛利方でも秀吉来攻に備えて三原で謀議を重ねた。東が解決すると三月十五日、播磨、但馬、因幡の兵をひきいて姫路を発し、途中の支配を確認しながら、四月十一日、六万の兵をもって高松城を囲んだ。城からの注進によって、毛利の援軍が馳せつけたのは四月二十日、先鋒の吉川元春は城の西南四キロの岩崎山に、小早川隆景は南方の小高い日差山から日幡山にかけて布陣した。本隊の毛利輝元は倉敷の近く猿掛城に本営を置いた。その勢二万余騎といわれるが、別に出雲石見備後安芸周防長門あわせて四万騎ともいう。

高松城を完全に包囲している秀吉勢を完破して、そこに援軍を入れることはむずかしかった。そこで隆景らは、二十二日を期



高松城攻囲図

祝復刊 音楽を楽しめる音響づくり

ラジオのはじめ

ラジオ放送が開始された年、山陰で最初に岡崎喜一郎氏が求められ、勤めていた松崎権三氏が、すすめられて京都でその技術を習得して帰られました。間もなく松江に出て電文社を経営されましたが、出来山広右ヱ門氏、遅れて荒金浅一氏が修理販売業をはじめられました。横田町大火の翌年、私はこの道に入り、やがて電文社NHKに勤め敗戦の年の暮れ帰って開業しました。物のない苦しい時代、せめても音を楽しむという皆様の要望に応えて明日への夢を抱いていました。二十一年頃から部品も入るようになり、空腹は満たされなくてもラジオを聞いて楽しむ風潮が訪れました。

横田でレコードコンサートが始まったのはその頃で、大型の手廻し蓄音器は極めて貴重品であったので、ポータブルをもって、駅前のだるまや旅館の一室や、小学校、青年学校の宿直などで青年有志が集まりました。

戦前のSPレコードを借り集めて、小さい音に耳を傾けたものでした。二十二年頃からアンプ装置、プレーヤーが組立てられるようになり、新しい時代が訪れました。

音の拡大

二十三年末には横田中学校（現大劇時代）にアンプ等が寄附されてからは、急速に参加者が増え、土間、講堂に百数十名の人が、気候の良い時節には月二回は集まってクラシック音楽を鑑賞しました。町内個人所有のレコードを協力によって目録にのせ、主題によって番組が作られ、三十二年頃まで百回以上続けられました。SP盤に変ってLP盤が出廻りはじめたこと、ステレオ装置があらわれたことが、急速に今までの方式にものたらなさを感ずるようになり中止されました。

私が横田電文社として業務を拡張したのはこの時代の二十六年でありました。経済成長と技術革新はめざましいものでありました。

やがてテレビが入り娯楽は家庭でこと足るようになってきますと、映画人口の急激な減少が到来しました。

高度の技術者陣をもって

四十年代に入るとステレオブームが訪れて再びレコードの爆発的売行きの傾向になりました。そしてコンポーネント方式による鑑賞の仕方は、クラシックからポピュラー、軽音楽へと急速に拡大して参りました。四十五年、高尾山にFM放送の中継所が設けられ、ラジオにステレオに、音質への関心は極めて高くなってまいりました。

この多様化した器械に対する技術は極めて高度なものが要求される時代になりました。

当社は時代に応じ、更に時代を先どりするメンバーを揃えておりますので、音楽を愛される横田の皆様の御期待に十二分に副える確信をもっております。御愛顧のほどを。

戦後横田文化小史 ③

雲南家電協業理事
KK電文社 佐藤正栄

して秀吉勢と決戦をしようと手筈をととのえたが、安国寺恵瓊の進言によって、輝元は戦斗を中止した。進言は「織田方は中四国の諸将に、もし味方に馳せ参じるならば、恩賞を与えるという誓紙を配っていて、毛利勢の武将の中にも志を通じている者があるから、軍をととのえ敵方の動向を見て合戦すべし」というものであった。

当時毛利の陣営では秀吉のこういう謀略戦術に悩まされ、動揺もあったと思われる。

一里四方の小さな盆地の周囲には両軍あわせて五万余の大軍が対峙し、色とりどりの旗が山の端をふちどって立ち並んだ。時に思い出したように、山裾の繁みの中から物見の兵の小ぜり合いもあろうか、一発二発の銃声が虚ろに響いた。盆地にある高松城からは、清水勢の城兵のあげる気勢が時折周囲にこだました。空は今にも降りそうな梅雨の重苦しさがただよっていた。時は空しく対峙したまゝ、幾日か過ぎた。

水責めの計

築城術の大家黒田官兵衛の策を入れて、水責めの計画を立てた。足守川にそう小平野の真中に、周囲を沼田をもってめぐらしている難攻の位置を占める城を、逆に利用したのである。

本陣とした城東の蛙が鼻と、城西稲崎の間に四キロの長堤をきずき、梅雨期に向って増水する足守川の水を堰入れたのである。昼夜兼行の十二日間の突貫工事で五月十九日完成し、降りしきる雨と共に水かさは刻々と増え、城をめぐって二百ヘクタールに近い湖沼ができた。二十六日頃は近くの部落の民家も水没し、城の石垣も没して城内は水びたしとなった。この頃、城中の兵糧も乏しくなり、城兵は困窮を加えた。

毛利の陣営では信長が大軍を率いて出陣するとの噂さがたち、武士の間に動揺の色があった。恵瓊を介して講和の交渉がはじまったが、条件がきびしく妥結しなかった。そこで秀吉は恵瓊の前に一束の書状を投げ出した。それは毛利勢の中で、織田へ志を通ずるものの誓紙であった。その数に驚いた恵瓊は、自らの一存で舟に乗り高松城に入り、宗治の切腹で講和を結ぶ説得をしたため、六月一日、城主清水宗治は、家臣を秀吉のもとへ遣し、船を下されば四日に切腹仕ると伝えた。その夜半、本能寺の変により織田信長が明智光秀に殺されたことを秀吉は知った。そしらぬ顔で秀吉は酒肴を送ってねぎらったので、宗治は今生の名残りにと城兵を集めて別離の宴を張った。そして秀吉と毛利との和が結ばれた。四日宗治は蛙が鼻の秀吉の面前に舟を進め、辞世の歌を残して従客と自刃した。時に四十六才。

この日の午後四時、毛利の本陣に本能寺の変の報が届いた。

吉川元春は秀吉の退陣をつけこんで追撃を主張したが、隆景は和を結んだ信義を守るべしと反対し、追撃は行われなかった。

為虎の去就

毛利陣営の中に幾多の動揺者があったが、その中に三沢為虎もあった。高松城開城の三日前、三沢為虎秀吉に通ずるという流言が伝わった。出雲石見の兵を率いていた元春は、隆景の陣する目差山へ、子の元長と共に訪れてこのことを議した。結果、元長が岩崎山の前線にある為虎の陣を訪れ膝詰めで「為虎が秀吉に通じていると聞くが、まことであるか。まことならば先づ我が首をはねて秀吉に送れ」と迫った。為虎は奮慨し、それは讒言であるとして、誓紙を出したので、最前線部隊である元春の陣内は漸く動揺がおさまった。その後恵瓊が秀吉から受取った誓書の中に、三沢の老臣三沢雲波なるものの書があったので、為虎は直ちに雲波を呼び、斬ってあかしを立てたという。

山崎の合戦で殺されて、光秀の天下も三日に終った。秀吉の時代が訪れた。(天正十年)

そして三年後には秀吉は関白となった。この年の八月、為虎はまたまた毛利に誓文を出して忠節を誓い、亀嵩城の保持も願った。このように、前後八年、三沢は毛利に対して不安な状態にあった。このことがその後毛利配下にあって優遇されず、一族の内紛もあって、各地に四散する結果になった。

⚜コミュニティー①

一九一七年、米の社会学者マッキーバーが、同名の本を出したのが使いはじめで、

o コミュニティー（地域社会）

自然発生的に人々の共同生活の行われている地域社会。

o アソシェーション（結　社）

特定の目的をもって作られた社会。

と使いわけしている。戦前日本ではこの言葉が、歴史的発展を内容に持たないので、かえり見られなかった。

ー次はドイツの考え方ー

予　告

o 八月二日（土）　第四号発行

o 八月例会　四、五日頃二日間

横田高校運動場予定地での県文化課の古墳発掘の成果をふまえて、「開パイ」進展に備えて出土品の考古学的な眼をこやす講習会を、実地を加えて、やさしく開きます。

皆さんが所有しておられる土器の鑑定も致しますし、町内の各時代を代表する出土品の展示会も考えています。

郷田文化

復刊第4号
昭和50. 8. 8
奥出雲文化協会

横田町の古代遺跡

町内に散在する遺跡は近年の諸調査によって急にその数を増し、古いものでは縄文早期に比定されるものから中近世のものまで百ケ所に近い遺跡が知られている。

図と表に掲げたものはその極く一部であるが、諸氏の調査研究と県遺跡台帳によって概観することにする。

一、縄文時代

未だ農耕は行われず、専ら狩猟と採取の生活で石器と土器を用いた時代であり、およそ紀元前数千年から紀元前後までの間と云われ、土器の様式によって早、前、中、後、晩期の五期に区分されている。

早～前、中期 ― 竹崎小方歳の工事場から出土した小土器片が、早期の特徴を有する楕円押型文であったことから、町内で最古のものと判った。この押型文土器は県下でも出土例が多くない。小方歳ではただ一片のみで器形や遺構は不祥である。

これに続くものとして大馬木曲谷で瓜型文土器片が一つ発見され中期と比定されたが、遺構は不明である。

いずれも定住的なものとは考えられていない。

後～晩期 ― 大呂龍ノ駒遺跡は戦後多くの人によって調査紹介され、県下でも有名である。出土品は土器のみで磨消縄文土器で、渦巻、レンズ状等の曲線文様が特徴であり、岡山県のそれとのつながりが言われている。

この外にこのころのものと考れられる石斧や石鏃が竹崎や大呂地内で発見されている。

隣の仁多町にも中ー後期の大きな遺跡があり、後期には確かに生活の場が認められ、現在では不便な山奥であるが採取狩猟には適していた。また山陽側との交流が想像される。

二、弥生時代

紀元前二～三世紀ごろ稲作文化が九州に導入され、山陰にもあまり遅れることなく新らしい文化 ― 弥生時代が始った。

従来の狩の生活に農耕が加わり、耕地を見下す高台に人々は定住して「むら」が出来、金属器はその首長の宝器とでも云うべきものであった、日用品はやはり石器と土器であり石器は磨製で土器を弥生式土器と呼ぶ、この土器の様式によって紀元三世紀ごろまでの間を前、中、後の三期に区分している。

横田町に於いては中期以降のものが知られている。

中期 ― 標準的な中期のものと云われる高坏が代山から出土した。ヘラで仕上げられ、沈線文が施らされている。

後期 ― 岩屋寺遺跡は多数の土器片の他に磨製石斧や、県下に数例しかない石環も出土した。こゝはまた細型銅剣（県指定文化財）の出土地と伝えられる横田八幡宮からほど遠からぬ地点でもあり、共に町の重要な遺跡、遺物である。

また横田高等学校附近からも土器（九重式）石器等が多数出土したが、ほとんど散逸している。こゝも次の古墳時代前半にわたる住居跡と推定されている。

この他に、大呂和田山附近で古式土師器片、石斧、石 が出土し、稲田神社には稲の穂摘みに用いた石包丁が県下の数少い資料として保管されているが、出土地点が明確でない。

三、古墳時代

土を盛り上げた「高塚」古墳が三世紀の終りに発生し、稲作はますます発展し、経済力と政治力は古代国家の体勢をとゝのえてきた。

この古墳時代は奈良朝八世紀ごろまで続いている。この間を通常前、中、後期の三期に分ける。石器は姿を消して鉄器に替わり、文様の付いた古式土師器から無文で変化の少ない土師器へと移り、後期（六世紀ごろ）からは新らしく須恵器が盛行するのであった。

町内に見られる古墳には前中期に相当するものは未だ確認されていない。すべて小円墳か横穴で、内部構造はいわゆる袖無形横穴石室が多く、山陽側の古墳文化の影響がうかゞわれる。横穴は簡略化された三角形プランで多くは群をなし、出雲部の周辺地帯の様式と言われている。このように古墳から見ると丁度陰陽の接点的な様相を呈している。

また製鉄関係の遺物遺跡もあり、古くから鉄の生産が行われていたことが知られる。

前・中期 ― 遺跡数は多くないが、蔵屋の下大仙子やヒエケ谷は弥生式土器の流れをくむ古式土師器が出土しており、前期に比定されている。

大馬木渋谷の住居跡は須恵器が見当らないことから大まかに中期までのものと思われる。

後期 ― 種類の多い出土品は下横田五日市遺跡で、かまど類から日用什器類の外にフイゴの羽口等製鉄遺物もあり、また糸切

底の土師質土器までも多く含まれていることなどから次の奈良時代にまでかゝる住居跡（集落跡）と云われている。

古墳について見ると、その石室の長大なものとして大谷抗木古墳があり、副葬品の豊かなものは岩屋寺山横穴や小馬木矢入一号古墳が挙げられる。古墳出土品が一セット全部保管されているものは矢入二号古墳の場合のみである。横穴群としては下横田大堀横穴群や大馬木観音原横穴群が古くから知られている。

その他、跡は所々にあるが蔵屋金屋廻は糸切底土師質土器を検出して古いことが判明した。

古墓の一つとして稲田の王一古墓からは糸切底土師質土器と古備前系の片口が出土して土器の推移の様子を示している。

以上極く少数の遺跡について概観したのであり、この他の遺跡についてもそれぞれの特徴があり貴重なものが多いが、こゝでは割愛したことを附記しておく。

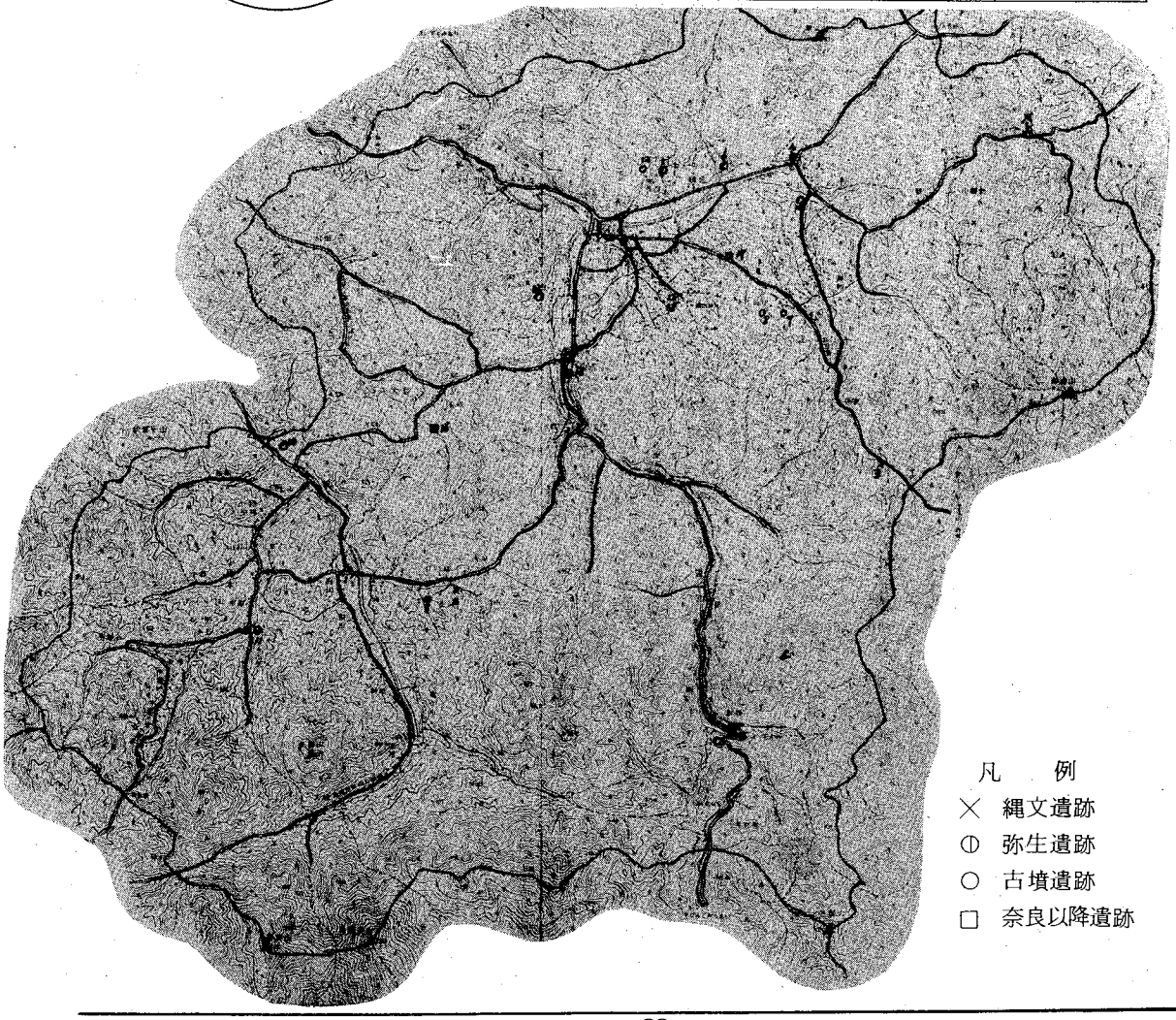
杉　原　清　一

（横田町文化財専門委員）

前三号にのせた岩屋寺の図面は荒木宗重、森山庫一、佐世川徳雄さんによって作られたものでありました。

横田町の主な古代遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺構	時代	遺物・保管者	その他
1	小万成遺跡	竹崎、小万成	？	縄 早～前	縄文土器片（高木）	遺物が土片のみで遺構不明
2	曲谷 〃	大馬木"原畑	散布地	〃 中	縄文土器片（杉原）	遺物が少く、不明の点が多い
3	龍ノ駒 〃	大呂龍ノ駒	〃	〃 後	晩酒縄文土器（横中、他）	
4	代山 〃	大呂代山並観音	〃	弥 中	高坏等（横中）	遺構消滅
5	岩屋寺 〃	中村 馬場	〃	〃 後～	土器片、紡錘石等、石器等（横田、杉原）	長期の住居跡か？
6	和田山 〃	大呂 和田山	〃	〃 〃～	土師器、石器石錘等（高山）	住居跡か？
7	大仙丁 〃	中村 後尾下大仙丁	〃	古 前	古式土師片多数（横中）	
8	ヒメヶ谷 〃	〃 〃 ヒエヶ谷	〃	〃 〃	〃 （〃）	消滅
9	巻谷 〃	大馬木 巻谷	住居跡	〃 中	有重円盤、土師片（沖田）	次穴式住居跡か遺出
10	多久野堀古墳群	大呂 多久野	古墳	〃 後		円墳群（横穴式石室か？）
11	矢入一号古墳	小馬木 矢入	〃	〃 〃	須恵器杯、高杯、壺、甕、刀子（杉原）	円墳、横穴式石室
12	岩屋寺山横穴	横田 角	横穴	〃 〃	金属製品、刀、須恵器、玉類、人骨（本田）	出土品の多くは散逸
13	大堀横穴群	下横田 用内	〃	〃 〃	須恵器類、他（横中）	〃
14	抗木古墳	大谷 抗木	古墳	〃 〃	不明	長大な横穴式石室（6m以上）
15	五日市遺跡	下横田 古市	散布地	〃～？	須恵、土師、フイゴ羽口等（横中他）	集落跡か？
16	大内谷窯跡	大谷 大内谷	窯跡	奈 ？	須恵器、高台付椀杯等（八木、土田）	未調須恵窯、形式不明消滅
17	金屋廻鉄跡	中村 城屋	鉄跡	鎌 ？	炉壁、土師質土器（杉原）	半壊
18	王一古墓	稲原 稲河	古墓	〃 ？	土師質土器、古備前系土器（稲田他）	



ふるさとの歴史 54

三沢一族 (17)

三沢氏と仏教

安楽寺 ― 三沢初代為仲の子義丸は出家して得度し、一三四七年（貞和三）横田に安楽寺を建立したという。永正六年（一五〇九）八代遠江守為忠が藤ケ瀬城に移城してその荒廃をみ、藤ケ瀬城の真南に、家臣春日氏に命じ、土居安部氏に再建をさせたという。浄土宗であり、六日市の（当時の中心地）古い家の殆んどがこの檀家である。

善徳寺 ― 為忠はのち京都に出て蓮如上人の教化をうけて浄土真宗に帰依し、帰って安楽寺の東隣接地に草庵を結んで善徳法師と号し、念仏修業の生活をしたという。既に毛利氏は中国に覇をとなえ、安芸門徒として真宗の西の雄であった。その後善徳寺は一七五〇年（寛延四）現在地に移った。元地には寺畑、奥の堂の地名が残っている。三沢氏を名残り法塔がつがれている。

こゝの檀家は、三沢氏にゆかりある者、その後真宗の盛んな地、広島、或は簸川地方よりの移住者が中心である。

総光寺（仁多町亀嵩）― は三沢三代為昆の嫡子が出家し、二十二才の時能義郡雲樹寺（臨済宗）で戒をうけ、丹波の永沢寺の開山通幼禅師に十八年侍して、八室伝法師より伝位の袈裟を授けられて不見明見禅師となり、帰って開祖になったという。

応永十二年、禅師の徳をしたった塩原の法名を明等というものが寺を建立して寄進した。為清はここにほうむられた。

晋叟寺 ― 覚融寺（亀嵩）については既述。

蔭涼寺（仁多町三沢）― は初代為仲の弟玉林和尚が開祖という。三沢氏が横田に主力を移すまでその菩提所であった。三沢氏が安芸に去るに及んで寺運が衰えたが、一六八五（貞享元）松江市奥谷の万寿寺龍開和尚の弟子開峯がこの寺に来住して中興した。それまでは妙厳寺といったが、天明二年蔭涼寺と改めた。一時は郡西部の大寺として盛んであった。こゝの古文書の中に前回書いた安国寺恵瓊の書状がある。毛利が尼子を亡ぼし出雲を領したころ、この寺より訴え事を申し出たことがあったが、輝元が上京前で多用であるから、明春まで待ってほしい旨のものである。

恵瓊は安芸安国寺の住持で、博学雄弁、かつ武事を好み、小早川隆景を介して毛利氏の陣僧となって重用された。秀吉と毛利輝元の調停に奔走し、秀吉の信任を得て伊予に六万石を与えられ、僧衣の異色大名となった。関ケ原の役には、輝元を西軍の盟主に担ぎ出した。西軍破れて京都六条河原で斬首された。

為清の死まで

高松城和睦後、伯耆の杉原景盛は秀吉方の勢が盛んなのをみて動き出した。毛利方はこれを討つため兵を出した。三沢、三刀屋ほか諸将も出陣したが、景盛は鉄砲もまじえて防戦した。この時三沢の郎等山崎与次郎が射伏せられた。

こうしてやがて、毛利は因幡と伯耆半国を秀吉にゆずることになった。そして天正十二年輝元

お手玉歌

一番はじめが一の宮
二また日光中禅寺
三また佐倉の宗五郎
四また信濃の善光寺
五つで出雲のおおやしろ
六つで村々鎮守様
七つ成田の不動さん
八つ八幡（やわた）の八幡宮
九つ高野の弘法さん
十で東京の日本橋

これほど信心かけたのに
浪子の病はなほりゃせぬ
武男が戦地へ向うとき
白い真白いハンカチを
うちふりながらネェあなた
早く帰ってちょうだいね

ゴウゴウゴウと鳴る汽車は
浪子と武男の生き別れ
二度と会われぬ汽車の窓
ないて血をはくほととぎす

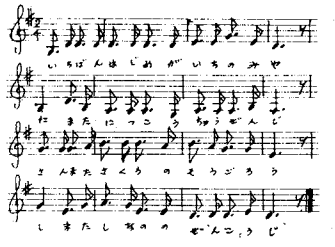
お手玉に合わせて冬の日当りの良い縁側に響くなつかしい歌である。袖なし姿、すなきり（お手玉）はもう遠い思い出の方に去ってしまったであろうか。この歌はまた「まりつき」にも用いられ、着物のすそを押さえて、両脚の間をつきまくる姿も、女の子のお転婆振りの一つであった。

「武男と浪子」のくだりは、徳富蘆花の「不如帰」（ほととぎす）から転じたものである。

日清戦争後の国民志気高揚と女性哀話は、尾崎紅葉の「金色夜叉」とともに、ベストセラーであった。

わらべうた (2)

伝承　藤原とよ(74才)



採譜　高橋一郎

は、備後北部の山内・三吉・久城の諸城主と三沢氏に、人質を出させて忠誠を誓わせて周辺の固めを計った。

翌年山内善山城主は土佐に移され、為虎は更に誓書を出して亀嵩城の保持を願出た。

天正十一年（一五八三）の賤ケ嶽の合戦は、信長時代の因縁を切りすてて、これより秀吉の時代がはじまるという画期的な合戦であった。柴田勝家が滅び福島正則・加藤清正・加藤嘉明ら、賤ケ嶽の七本槍が、功によって秀吉の近習から、多くの所領をうけて武将として活躍することになった。その秋大阪城の築城がはじまった。翌十二年、小牧・長久手の戦で、徳川家康と秀吉との宿命的対立の第一歩がはじまった。この戦は和睦でおさまり、紀伊・西国への征討へと舞台は移った。しばらく待機していた毛利輝元も、四国への出兵の準備を小早川隆景・吉川元春に命じた。

天正十四年春、九州へは吉川元春に従って三刀屋久祐が出陣した。翌十五年秀吉は本格的九州征討を計画した。動員兵力二十五万といわれ、兵糧一年分、馬二万騎の飼料をもつ行装の美観は、前古未聞といわれるほどであった。吉川元春死してその子広家の下に、豊前岩石城を攻めた三沢為虎は栗屋彦右ェ門と共に、鉄砲百挺をそろえて散々打立てたという。九州征討は薩摩の島津氏の全面的無条件降伏で終った。論功行賞の結果、隆景には豊前豊後を与えたが、広家には毛利一族の強大になることを恐れ、石田三成の進言を入れて、輝元の封内の伯耆西部三郡、安芸では山県郡それに隠岐及び石見若干あわせて十四万石余を分ちあたえた。広家は富田城に入った。仁多郡は輝元の領内に置かれた。

天正十六年、三沢氏は三沢の城を引きあげた。間もなく為清は亀嵩城で五十三才の生涯を閉じた。

その後為虎は毛利より備中国柳国貴城普請の材木引奉行を命ぜられて出張した。その留守中毛利方の検使が亀嵩城に入った。留守兵は弱兵のみで抵抗もなく、城をとりこわされたという。

翌十七年三月二十七日、為虎は藤ケ瀬をあとに、兵若干と小数の側近の将を従えて横田を去り安芸へ移った。土居安部氏も同行をすゝめられたが、この地に留まって土豪となった。樋口の表小池氏（杠）は高野山まで同行して見送ったという。時に為虎三十才。かっては雲伯石の二十四郡にわたって数多くの所領を有していた三沢氏も、三百石をもつのみという冷遇をうけることになった。毛利氏の処遇は尼子氏に対するよりも厳しかった。時を同じくして、馬来宗四郎（孝綱）は病を得ていた父道綱と兄乗綱を馬木に残し、兄の子久綱をつれて安芸へ下った。馬来氏はまだ馬木三千石を領し、その孫元氏に至まで領有していた。

コミュニティー ②

ドイツのテンニースは
ゲマインシャフト（共同社会）
は家族や村落や中世の都市のように、人間の有機的な感情融合の社会
ゲゼルシャフトは
機械的な人間結合としての交換契約にもとづく株式会社のようなもの。

とに分けた。

明治以来資本主義経済の発展により近代化してゆく中で、古い伝統的社会をのこすとともにこれをできるだけ保持しようとしてきた日本では、株式会社においてさえ、企業一家、工場一家という家族主義的経営の中で、ゲマインシャフト的な要素をできるだけ盛りこもうとする努力がされてきた。日本の社会にはゲマインシャフト的性格（共同社会）が長くのこったし、これを温存することが望ましいと考えられた。従ってこのような日本の社会的風土の、そしてそれを温存しようとする社会風潮の中では、コミュニティーは、歴史的な内容をもつものではなかったので、家族主義的傾向をもつゲマインシャフトの崩壊をくいとめようとする中では、無味乾燥な言葉として適応しにくかった。

— 次回は戦前の日本社会のようす

予告

八月例会は
出土品（縄文・弥生・古墳時代）の見分け方の初歩入門の講習とします。
講師は池田満雄先生
（日本考古学会員、飯南高校）

8・23（土）横田地区公民館
午前　見分け方入門
午后　実物による見分け方

8・24（日）仝前
午前　見分け方入門
午后　持参したものの判別

8・25・26　よこたショッピングセンターにて
展示

若干の会費をお願いします。

横田文化

第五号（九月号）
『高田の高田廃寺と大領神社について』（探訪予定）
第六号（十月号）
『馬木矢筈山・小林の両城』（探訪予定）

横田文化

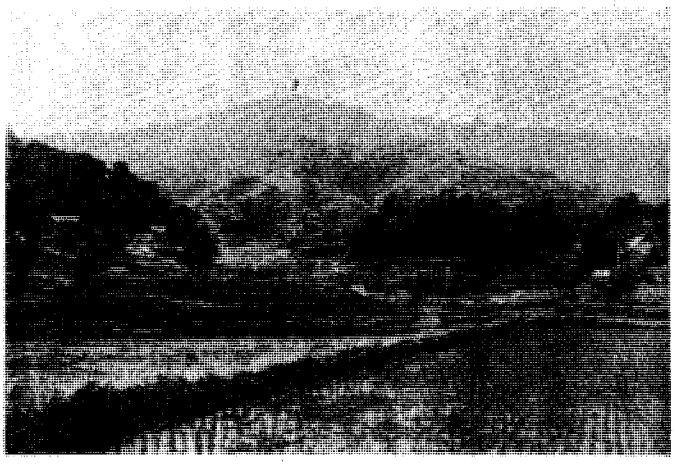
復刊第5号
昭和50. 9. 6
奥出雲文化協会

まぼろしの高田廃寺

一、二〇〇年前

このころに書かれた「出雲風土記」によれば、仁多郡の郡司は大領―蝮部臣、小領―出雲臣、主張―品治部である。

大領のいた郡家は、地図の如く考証されて、地形からも地名も当時の面影を濃厚に残している。郡司少領は三沢郷の豪族であろうか、こゝには正倉（国の米倉）があり、三沢神社があった。品治部は横田の豪族であろうか。こゝに正倉と伊賀多気神社がある。（以上二社は神祇官の神名帳に登録されている官社であり神祇令によって神事を行う）



↑寺趾

↑旧社地

高田廃寺趾附近

蝮部臣、出雲臣は国造であり意宇郡大領出雲臣の一門とみられている。品治部はそれとは別で、早くから横田に土着して相当の実力を持つ豪族であったと考えられる。備後南部の品治国との関係も考えられ、製鉄とのかゝわり合いがあろう。風土記には国内各地に新造院のことがあるが、郡内はやゝおくれ、その後横田に岩屋寺、郡村に高田寺が建立されたものである。豪族の権威そして富と信仰をしめす古墳づくりが、仏教の浸透とともに、寺院建立にかわって来たのである。

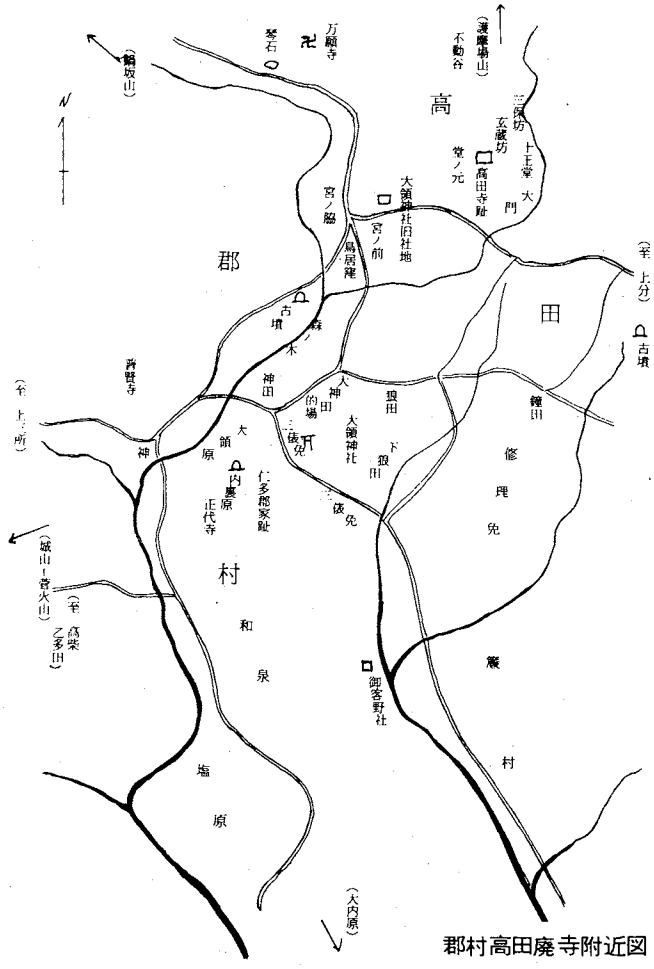
高田廃寺

大正十二年一月、新田づくりの折発見された瓦が（時代比定平安時代が保留）あり、礎石、地名その他のものによって存在が確認されている。

高田寺根元録によれば次のような記述もある。

風土記よりも百年前の推古帝時代、百済から僧観勒が来朝の時、暴風雨にあい出雲潟に漂着し、陸路吉備越えする途中、道に迷い此の地に至り石を枕に一夜をあかした。

里人の情に感じ経を唱え、鉄の金剛杖を残して去った。のちその弟子が来て、観音菩薩像を岩



郡村高田廃寺附近図

窟に彫造した。よって仏石と呼んだが、なまって琴石となり今日に伝わるという。

この地の鍛冶師数名をつれて都に帰った。

その後、郡司蝮部臣の祖父が意宇郡舎人郷（とねのさとー安来市の中央部にあたる）より来て、厳堂（本堂）と二重塔を建立した。風土記によれば、蝮部臣の一族は、秋鹿郡郡司少領におり、舎人郷の教昊寺は、今官を辞している上蝮首押猪の租父が建てたとある。仁多郡の郡司蝮部臣は古くからの豪族でなく、これらの一族として大領に任ぜられ移り住んだとも考えられる。出雲臣品治部が古い守護神をもち、官社となっているのと比べると土着性が薄い。

根元録にはさらに、郡司の従父兄刑部臣が来て、厳堂を建てたとある。風土記によれば、刑部臣は秋鹿郡大領であり（ここの少領は蝮部臣）、神門郡は少領主張とともにそれである。神門郡古志郷には元厳堂があって、建造者は刑部臣等である。考証によれば少領主張の刑部臣の祖父あたりの手によるものといわれる。

高田廃寺の建立が鮮明になってくる。

大領神社

風土記には国社（官社に準じて祭典を行うもの）として須我乃非社がある。根元録によれば、大領が須我乃非山（今の城山）から、郡家の鎮魂鬼門払いの社として高田へ移した。やがて蝮部臣の遠祖の分霊と合祀して氏神としたので、郡の一の宮と呼ばれたとある。従って出雲風土記完成以後のことで、蝮部臣の来住が新しい仕官によるものとの見解がさらに確実になる。地理的にも肯定できる。その後神仏習合思想により、大領権現となり、今日大領神社に復した。

ー以下4頁へー

高田寺の瓦

詩　一　編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々（りょうりょう）と暗をてらせる
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭かぬ渠（かれ）ゆえ
いざこゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

コミュニティー③

戦前の共同体的日本の社会

戦前の日本の地域社会は共同体的であり、また共同社会であることを理想とした。

その原型は村にあった。日本の村は水稲生産を主体としたが、この稲作のためには、水の共同体的維持管理、肥料および薪炭の採取のための山の共同体的所有管理を必要とした。従って多かれ少なかれ、村落一体となっての共同労働が要請されたのである。そして日本の家の長子相続制は、村内の身分階層的家格を比較的安定させ、上層の地主自作農家の権威的支配を存続させた。こうして村人たちはこの権威的支配に恭順し、村の大勢に順応して、村落の共同体的な生産を維持してきた。村の団結と平和が、村人にとっては何よりも重要なものと考えられたのである。この共同体的規制と、権威的支配のもとでの村人の「団結」は、個々の欲求を押さえ、村の分裂を極力回避しようとする埋没的な「平和」によって支えられる。それだけに村のことは村人一体でという強い結束をもたらすとともに、村の外に対しては封鎖的になり、村落のエゴイズムを生み出すのである。この性格は都市の町内にも一般的にみられたのである。

このような村を、明治二十一年の町村制によって、数ケ町村合併して新町村をつくったが、充分な財源がないので、昔ながらの村落自治で、村のことは村人全体で処理するものという観念は崩れなかった。

従って自ら改善する意欲も少ない上に、上部機関に要求する姿勢も生れなかった。陳情という姿勢であった。

昭和十五年からは「部落会町内会整備要領」により、この生産に結びついた共同体的な小地域社会を、農村、都市を問わず制度的にも確立した。

そして戦時体制へ進んだ。今日言う「個の確立」は生じ得なかった。日本が手本としたドイツのゲマインシャフトには、個の尊厳の確立はその基調であった。

（次回は戦後の混乱）

ふるさとの歴史 55

三沢一族 (18)

小田原城攻撃

戦国時代を通じて、東の北条氏は西の毛利氏とならんで、もっとも典型的な戦国大名の道を歩んでいた。

その道というのは、古い荘園制にとらわれることなく、新しく成長してくる郷村制を基盤として、知行制による支配体制をつくりあげることである。農民層の解体につれてひろく出現する独立小農民をその経済的地盤とし、それと同時に士豪名主らに本領を安堵し、恩地を給してこれらを知行人（給人）の名で家臣団に編成するという、郷村の知行と給人体制をうちたてることである。北条氏はその成果が最高に発揮されたところであった。しかも、その領国経済をささえるために商品流通の展開にも注意をはらい、農村から分離された商手工業を城下に集中させるとともに、郷村の市場の統制も忘れないことは、群雄の模放するところであった。このような関東の雄との対決が、ついに秀吉の天下統一の最後に予定されることになった。

天正十八年三月一日、秀吉は北条征伐のため京都を出発した。四国・中国・畿内・北陸・南海東海道の軍勢二十万騎であった。毛利輝元の家臣石見出身の吉見、益田両氏、三沢為虎、大内、熊谷氏等は一万余騎で下田の支城を攻めた。

秀吉の攻撃は長囲計画によった。小早川隆景が尼子氏を相手とした長陣の経験者であることから、その意見を入れて将士に倦怠が生じないよう、陣中の慰安には心を尽した。

これに対して小田原城内では、この間中、繰返されても繰返されても、なかなか結論のでない評定が続いていた。「小田原評定」のたとえを生んだが、団結のための民主的方法も、完璧の籠城態勢を保っていたのにもかかわらず、内応する老臣があらわれたり、精神的団結がくずれさらに包囲陣からの内部攪乱によって、城中は相互に疑心暗鬼のさまになり、和議に傾くもの

祝復刊

心の糧合唱

合唱活動

明治の末葉から、キリスト教会や、相愛女学校において宗教音楽を中心に合唱が生まれて、毎年クリスマスには美しい歌声が満員の人々に楽しまれていた。昭和十年三月、相愛女学校の生徒が、松江放送局から「浦のあけくれ」など混声合唱を放送した。混声合唱などは恐らく県下では最初であったと思う。

敗戦の年、有志が集まって「どう生きたらよいか」と懇談会を続けた。時には歌を歌った。「雲の柱」という旧約聖書の中の言葉をグループ名としたのは、新しい時代を望む心意気でもあった。

二十一年になると、青年団活動として合唱活動がはじまり、毎週木曜日の夜、当時の青年学校（現横田大劇）で行なわれた。初めは男子で、のち女子部が生まれ、そして時々合同するという時代であった。一方、一般男女による混声合唱団が間もなく生まれ、六十余名の「いづみ合唱団」となった。

その年の八月二十七日、小学校の講堂で第一回の発表会が、小、中、高校、洋裁も参加して盛大に行われた。翌年音楽協会が発足し、合唱、鑑賞の部も生まれ、機関紙「ホスペイロ」もガリ版刷で発行された。他方、青年団の演劇活動も県下の最高水準を行っていて、「演劇文化」が発行されていた。

レコード鑑賞は七月から始まり百回を数えた。音楽会は年に三回も開催したこともあったが、毎年の文化祭には、重要行事として多くの聴衆を集めた。

島根大学からは毎年吹奏楽、管絃楽、合唱に来演願い、先生方の演奏も好評であった。今でも県内の音楽教師で横田に在学中七回行ったという人がある。

町村合併後文化祭が中止されたが、音楽会はどうにか続いて、その回数は二十を越えたが、こと数年休んでいる。合唱団は、三十四年頃から質の向上がはかられたが、最近は専ら青年団活動として熱心に続けられ、青年団の全国大会県代表になって良い成績をおさめた。

今日、音楽も極めて多様化して、日本人の生活には欠かせぬものとなったし、楽器の普及と共に人々の技倆も極めて向上し、聞く人の耳も向上してきた。ムード音楽もよいし、又静かにしみじみと味わう音楽も心の奥をゆさぶって安らぎと心の糧を与えてくれる現代人の必要品である。新らしい合唱活動も広がってほしい。

戦后横田文化小史 ④

横田永生病院長
（横田音楽協会長）
藤原道夫

が多くなった。そして最後の小田原評定が和議について始まった。秀吉は石垣山の陣より鉄砲を斉砲して城兵を威脅した。遂に氏直父子は和議に応ずることになった。

広島入城

天正十六年十月より工事をはじめていた城が完成し、輝元が移ったのは、十九年四月のことであった。

吉川広家が富田城に入ったのはこの年の六月十八日であった。士農工商身分法が布告され、樋口の大催杠氏は毛利の家臣井上本助より、横田村六ケ村の村役人であることを確認され、広島へ鉄を送ることを命ぜられている。大原飯石両郡には児玉氏が、横田には杉原少右ェ門広高がそれぞれ代官として入った。八川はその臣租倉勘介宗安が住んだ。

朝鮮出兵

天正二十年（文禄元年）秀吉は朝鮮へ兵を進めた、失陣は小西行長、加藤清正で、従ったのは中国（毛利輝元、吉川広家）四国、九州都合二十萬騎で名護屋と舟出した。安部源太左ェ門は吉川広家に従って海を渡った。新しい時代の息吹きを十分に感じたであろう。

文禄三年（一五五四）冷泉民部大夫元光が亀嵩に入り、亀嵩十二ケ村を支配した。居を構えたのは谷奥の三沢氏の旧城の近くで、高田寺をこゝに移して青龍寺と称した。その後慶長二年の朝鮮出兵に、吉川広家に従って参加し、十二月二十二日蔚山の戦いにおいて奮戦、一三七人のものと共に討死した。父も兄もともに勇者として毛利に属し討死している。これに負けじと戦ったという。元光には「ばけもの退治」の武勇伝もある。慶長五年その子に郡内九千余石が給えられた。元光の墓は青龍寺境内にある。元光在住中、この寺の僧深慶は元光と不和になり、大阪玉江に去ってしまった。高田寺に関する重要な古文書、什物は散逸してしまった。間もなく住持になった快乗によって、高田寺根元録がしるされ、高田寺、大領神社の貴重な記録が残った。

三沢為虎の妻の父である毛利の家臣宍戸元秀や、三刀屋氏赤穴氏も朝鮮出兵に参加しているのに三沢氏の名は見ることができない。

尼子倫久は朝鮮の役に参加し、関ケ原の役後、長門に移り明治維新まで毛利の家臣であった。三沢氏についてはしばらくそのあとが分からない。

次回よりその考証と末孫について記述を進めることとする。

（2頁より）

高田寺は度々戦火にあったが、北朝方の岩屋寺と南朝方の当寺との対立の渦中のことである。青龍寺となったことは「三沢一族」にくわしい。

訂正　前第4号

1頁2段8行・2頁表No.2

誤 瓜型文　正 半竹管文

報告

◎考古学入門講座

八月二十四日（日）小学生から八十才の御老人まで、男女あわせて約五十人の参加を得て、まる一日熱心に勉強した。

講師の池田満雄先生には県下の指導者の学識をもってわかり易くスライドや掛図或は横田町出土品を使って講義して頂いた。初心者はもとより、新しい学界の動向も吸収して、今後への意欲をかきたてられた。町内の皆様の御協力によって約四百点の貴重な出土品が集められたのは、横田でこれこそ史上初のことである。

◎埋蔵文化財展

八月25・26日　よこたショッピングセンターで、講座のために借用した出土品のすべて約四百点を展示した。

時代別に分け説明をつけて公開したところ、大変に好評であった。

主な出土品については、横田文化第4号に表がのせてあるが、縄文時代早期の出土品（楕円押形文土器片一ケ5×4㎝）は県下で古いものでは四つ目のもので貴重なもので、紀元前五千年から八千年前のものである。戦後間もなく出土して脚光を浴びた、龍の駒の縄文土器数片。　弥生時代のもので、復元すれば県下では珍らしい逸品。岩屋寺古墳出土の銀環（耳飾）曲玉。小馬木矢入二号古墳出土の鉄剣二振他須恵器のすべて。県下でも珍らしい石包丁。県下でも最高の品と思われる稲田神社の五鈴鏡。そして鎌倉時代のものと思われる古備前様の片口など、長い長い横田の歴史の一端をのぞくことが出来た。以上は代表的なもので、町内の各所にこの十数倍の土器が保管されており、貴重なものは八幡宮の銅剣ほか数多い。今後開拓によって、あらわれて来るものも数知れない。

二日間約四百人余りの方に熱心にみて頂いた。そしてこれらの所蔵場所の必要性を主催者に力強く話して帰られる方が多かった。出土品や文化財が一堂に陣列されて、奥出雲の歴史が見て知られる場所の実現を期待したい。

予告

◎九月七日（日）仁多町郡村の高田廃寺ほかの見学

◎若い人を育てるため

十一月に意欲に燃えた新人の「作品展」を計画しています、御期待下さい。

畑田文化

復刊第6号
昭和50. 10. 3
奥出雲文化協会

馬木の古城趾の覚書き

具ノ平城趾

出雲風土記にいう遊託の剡（ゆたのせき）に近い。文化十一年の記録によると、金言寺に天承元年（一一三一）の位牌（後世の作）と、康永三年（一三四四）の寺領書（写し）がある。

ほかに建長元年（一二四九）の千家文書には馬木郷には「馬木地頭」の文字がしるされ、文永八年（一二七一）の同文書には「馬木郷　地頭多胡左衛門尉三五町二反」とある。次いで建武三年（一三三四）備中国に下って尼子毛利時代に活躍した三村氏の一族である信原宗貞が、同じ年に真木村を知行している。

感目城趾

この城についての呼称や表記にはいろいろある。

カンノミネ（寒の峰）、矢筈山、夕景（ユウゲ）山、神目山（馬来氏系図）感目山（旧島根県史）寒峯（天保十五年作　出雲国風土記）

馬来氏系図によるとこの地の初代満綱（氏綱）が、明徳の乱の前にこの城に入ったという。

小林城趾

こゝは夕景城の冬館と言い伝えられている。

築城されたのは、「杠日記」によれば天正七年（一五七七）にはじめられ、翌八年移ったとある。

裏手の成りは後世の開田のため地形が変っている。八幡宮の元宮は城趾裏手にあったが、雲陽誌の記するところによると、慶長年中（堀尾藩主の時代）現在地に移ったとある。

口伝によれば三沢氏に攻められて落城したというが、天正十七年毛利氏に従い、乗綱の孫又三郎（元貞）が外祖父宗四郎（氏俊ー乗綱の弟でその娘が母）と共に安芸国に移った。乗綱その子孝綱は知行を保持してこの地にとどまり、慶長年中この地で死んだ。

大原より矢筈山を望む

墓　地

五輪塔――大畝の足立宅附近にある石灰岩質石材のもの、口伝によれば戦死した馬来殿の墓という、

殿様墓――岩田山にあってこう伝えている。「杠日記」には、乗綱の墓は「岩田下大松一本ありし所」とあり、「馬来氏系図」には、乗綱「岩田屋敷にて卒、小馬木大坊に石塔あり」とある。

安養寺の過去帳

三年前、門司に住んでおられる馬来氏の末孫が訪れて調査された結果、系図に記入してある戒名と一致するものが、過去帳の中に鄭重に記入されていることが判明した。

道綱、乗綱、孝綱三代のものである。

次頁の見取図等の作成にあたって、馬木地区の只津幸雄、本山倉由、内田岩雄の方々に御協力頂きました。

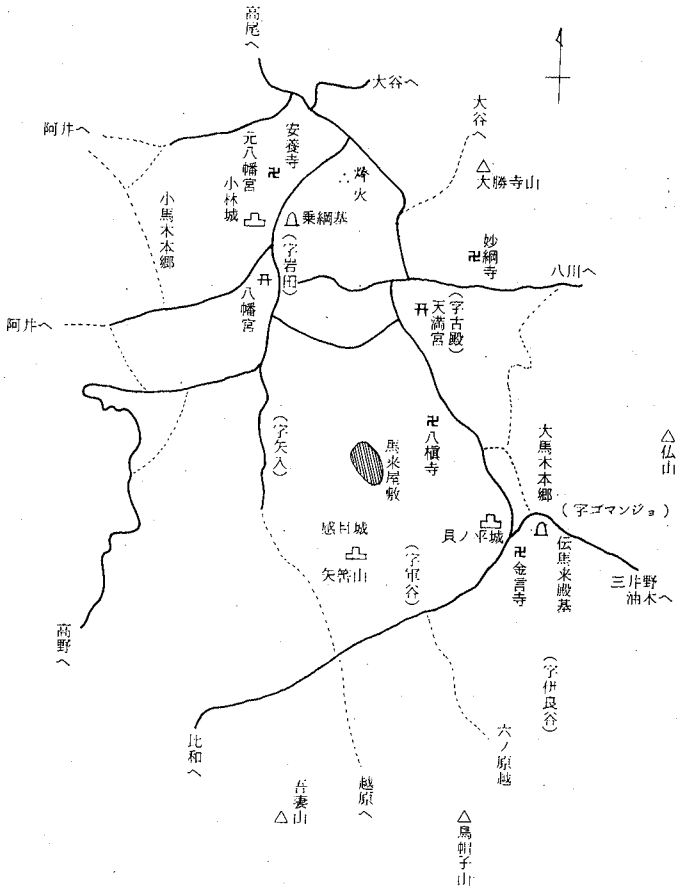
（調査記録者　杉原清一）

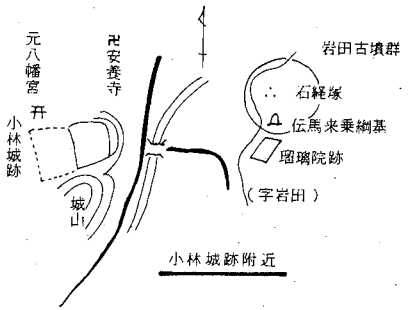
奥出雲の小京都

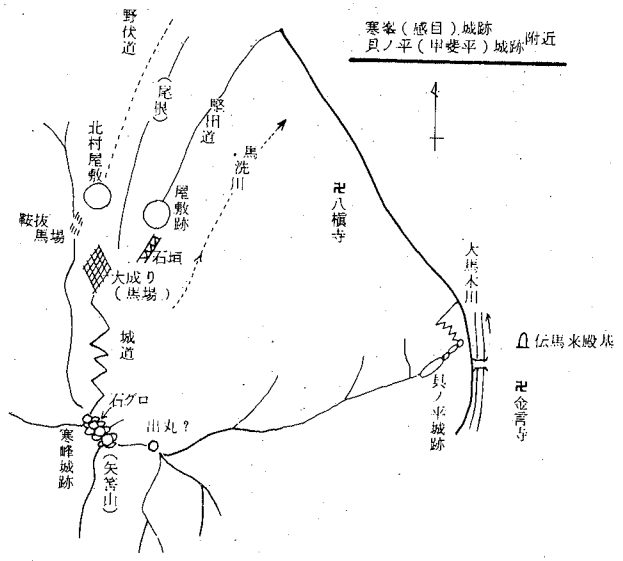
観光地「小京都」が「ディスカバージャパン（日本再発見）」の言葉と共に、全国各地に雨後のたけのこの如く出現した。❖昭和三年発行の「横田村案内」という色刷のパンフレットには「山陰の小京都といはれるもうべなるかな」と紹介の言葉を結んでいる。❖出雲風土記・岩屋寺・馬場八幡宮・岩倉寺・藤ケ瀬城　など、東山に船通山、賀茂川に斐伊川、大市、六日市を市街になぞらえている。❖そして古代からの鉄の歴史とたたら、現代に及んで仁多牛・木炭雲州そろばん。❖写真の美しさは今日のものとは格段に劣るとも、観光案内書としては極めてすぐれた内容をもったものである。❖日本列島改造の亡霊は、経済成長の夢は、さまよいただよっている。❖外来者は横田を山紫水明という。そこに人情がはぐくまれた。山もよし、この地に育った祖先の遺産の評価と保存を忘れることはふるさとの喪失でもある。

うまい料理とともに、このことはふるさとの心のよりどころを忘れないことである。

馬木地区概念図


高尾へ
大谷へ
阿井へ
安養寺
元八幡宮
小林城
小馬木本郷
乗綱基
（字岩田）
八幡宮
阿井へ
烽火
大谷へ
大勝寺山
妙綱寺
八川へ
天満宮
（字古殿）
（字矢入）
馬来尾敷
八幡寺
大馬木本郷
仏山
（字ゴマンジョ）
貝ノ平城
感田城
矢筈山
（字軍谷）
金言寺
伝馬来殿基
三井野木へ
高野へ
（字伊良谷）
六ノ原越
北和へ
越原へ
吾妻山
鳥帽子山


元八幡宮
安養寺
岩田古墳群
石経塚
小林城跡
伝馬来乗綱基
瑠璃院跡
（字岩田）
城山
小林城跡附近


寒峰（感目）城跡
貝ノ平（甲斐平）城跡
附近
野伏道
（尾根）
堅田道
北村尾敷
馬洗川
尾敷跡
鞍抜馬場
石垣
八幡寺
大成り（馬場）
城道
大馬木川
伝馬来殿基
貝ノ平城跡
金言寺
石グロ
出丸？
寒峰城跡
（矢筈山）

ふるさとの歴史 56

三沢一族 (19)

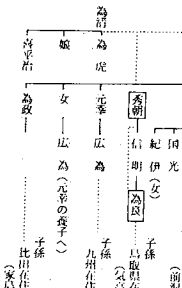
為虎の弟の孫娘初子は仙台藩主伊達公の妻となり、伊達家騒動の過中の人となる。
—NHKドラマ もみの木は残った—

為清の出生

天文七年（一、五三八）の馬場八幡宮遷宮の棟札には、地頭三沢為幸の息才竜子丸（為清）二才の長寿を祈願する意味の言葉が誌されている。

八年の八川八幡宮の棟札にも才竜子丸三才とある。九年には為幸は安芸吉田にて討死した。為清は四才である。叔父（為幸の兄）為国は既に富田にて斬られているから、ほかの叔父、三刀屋蔵人助、比田九郎左衛門、牛尾太郎馬来道綱（妻が為清の叔母）の援助によって、三沢一門の棟梁として成長していった。

十一年（馬場八幡宮）十三年（馬馳八幡宮）十七年（上三所居去神社）の棟札まで地頭才竜子である。元服していないから



で、次の年からは三沢左京亮下野守為清として登場する。死亡したのは天正十四年で五十才であった。その生涯は近畿から北九州まで、席のあたたまる暇のないほどの、合戦への参加の連続であり、すでにみた如く、大内、尼子、毛利の諸氏の間に介在して、服属常でなく かけ引きによって生きのび、その領土をひろげていったのである。

為虎の出生の推定

為清が幼にして三沢氏をついだので、早く為虎が生れたとしその初陣の時も考慮してみると、

	為虎	為清
弘治2（1,556）	1	20
天正3	20	40
6	22	42
14	30	50
17（安芸に下る）	33	

となる。仙台、鳥取、九州の三沢氏の末孫の家の所持する系図によれば、別表の如くなる。このうち為基、秀朝は弟としないと、活躍の時代は為虎の結婚前後となって不都合である。為基が後述する如く、近江の三沢の領地に赴いたとしても、遅くとも為虎が安芸に下る天正十七年までなければならぬ。それとしても妻の年令の推定は相当の年令になるから、やはり天正初年となり、近江国の領地が厳としている情勢下でなければならない。従って弟とする。

このことは秀朝についても言える。元幸やその妹は妥当である。為政は系図の年数があわないから孫かも知れない。

その妻と兄弟

為虎の資料上の初陣は天正三年の伯耆攻めで、父為清と共に参加し、六年の上月城攻撃も同じである。毛利元就の娘婿であり毛利の重臣である宍戸隆家も、この合戦に嫡子元好（初陣に近い）と参加している。元好の兄弟元季の娘が為虎の妻であるが、元好は為虎と同年輩であるから元季は戦国時代の常である、元好の庶子兄であろうか。或は為虎が安芸に下ってから、その地で幾人目かの若い妻をめとったものであろうか。為基の母ではないことは確かである。

天正九年は為虎が三沢の大将で伯耆に兵を進めている。富田城代は毛利元秋であった。

毛利元就の六男で、その妻は為虎の妹であった。病弱であったので早くなり、妹は辞して兄とともに安芸に下り、厳島神社の神官の妻に再婚した。富田城代は元秋の死後天正十八年から元康（元就の八男）となった。

為虎が秀吉の朝鮮出兵に参加したかは不明であるが、弟の喜平治は年若くして参加し、病死している。

その子

為虎の子元幸は、父の家督をついで藩主毛利秀元（照元の養子で、このあとを照元の実子秀就が藩主となった）に仕え、長門府中に住んだ。男子がなく妹の子田代広為を養嗣子に迎えた。

広瀬町布部の現家島家は、系図によれば祖先は為虎の子為政で、為虎が播州で戦死したのち、その地家島に住み、晩年布部に移り家島姓を名のったという。血統は正しいとしても、代数が不足する上、毛利氏が播州で戦った明らかな記録がないようである。

系統を重視するあまり、家を継げば子と表記することが多いことにより、このように系図化されたものであろう。

鳥取三沢氏の祖

秀朝は、明智光秀に従い、近江の坂本で一万石を領し、天正十年本能寺の変に加わったが、光秀が秀吉に殺されて間もなく京都の来福寺で、秀吉に攻められて討死した。子秀為は秀吉に仕え、のち若狭小浜九万二千石の領主京極高次に仕えた。高次は慶長六年から徳川幕府成立の全八年まで在城した。その子高忠は徳川方に属して全十九年、大阪城冬の陣に参加し、功によって徳川秀忠の娘を妻に迎えた。寛永十一年出雲松江藩主となった。

秀朝の子信明は池田忠雄に仕えて若狭に住んだが、池田氏が鳥取領主に移ったのでそれに従い、光仲の時代（寛永九～正保三）には三百石の知行をうけている。家臣としては相当な身分である。

そのあと家督を為良に譲った。系図では子とあるが、弟のよう

である。

宮城県の三沢氏

宮城県前沢町誌の中での考証によれば、為基は為虎と不和で三沢氏の所領であった近江国の坂田、犬上両郡（美濃国の西隣）におもむいた。不和の原因は為虎の毛利氏への対処の仕方にあったという。

「陰徳太平記」によれば為虎は天正八年、一月と六月の二度にわたって請書を出して服属を誓い、天正十三年八月にはまた請書を出している。その間、備後山内首藤家の文書によれば、天正十一年には、備後の三吉、久代そのほかの諸国の衆と同じく三沢氏も実子を人質として出している。誰であるか不明であるが、先にのべた為虎の妹であるかもしれない。

この時、山内隆通は抵抗して人質を出さなかったが、諸将のとりなしで遂に二男広通（のち帰って長男の後を継ぐ）を人質に送った。

姓氏家系大辞典や、伊達世臣家譜によると、為基は天正年中に江戸に移ったという。（この点からも為虎の子ではない）そこで結婚したのは坂田、犬上両郡の隣美濃国大垣領主氏家常陸介重道の娘である（天正十年城主は直元である）

為基には長男（本人かこの子を正兵ヱという）、二男清長、三男基次、四男国定、娘紀伊があった。この紀伊は家康の外孫振姫（徳川家康の娘と池田輝政との間に生まれ、のち家康の養女としてその下で成長した。）の侍女として仕え、振姫が仙台藩主伊達忠宗に興入れすると、続いて侍女として移り仕えた。

（桑名領主）氏家清忠 ― 行一 綱（慶長四年まで在城）
（大垣領主）氏家重道 ― 清直（広定）
女（清長の母）
（朽木領主）朽木 ― 宣綱 ― 女（清長の妻 初子の母）
高遠（京極家養子 長門守）

初子の父清長

為基の二男清長は、叔父の大垣領城主氏家清直に子がないので嗣子として養われた。（系図ではこうであるが、歴史上は天正十年織田信長の死後、領主を去り舞鶴領主堀川忠興に仕えている。氏家氏は織田信長に一族共特に目をかけられていたことに対する秀吉の配置換による。一説では関ケ原の役後、氏家清直は家康の命で細川家に入ったともいう）細川家に清直が仕えてから清直に実子が生れた。清長は忠興に去ることを打ちあけたところ、忠興は両家の成立をすすめたが、清長の志は堅く遂に辞し三沢氏の姓にかえった。

清長の妻は近江国高島郡朽木領主（湖西地帯）朽木宣綱の娘で、桑名領主で大叔父にあたる氏家清忠に養われていたから、大垣で結婚したであろうか。清長は浪人となり、因幡国に下り鳥取藩士で再従弟にあたる三沢為良の許に寄寓した。その間寛永十六年（一六三九）初子が、二十一年又四郎（宗直）が生れた。

清長はその後家族を伴って江戸に移り、三沢正兵ヱの家に身を寄せた。正兵ヱは兄か、或はその子である。

清長は遂に志を得ずして、慶安四年（一六五一）七月二十七日、五十四才で病没した。

今日の目黒区日蓮宗正覚寺に葬られている。この時初子十三才、宗直七才であった。

二年後母を失い、二人は親戚にあたる京極長門守や小堀土佐守の邸で養われていたが、初子は間もなく叔母の紀伊に引取られた。重なる血縁のえにしは、初子を思わぬ方へせりあげ、話の舞台は興味と波乱を生んでゆくことになる。

横田が生んだ若い陶芸作家の個展を開催します。郷里でのそしてはじめての個展です。意欲を評価し大いに育てゝ下さい。横田文化七号はその特集として製作観、作品鑑賞をのせることにします。

安部宏作陶展

十一月八日（土）九日（日）

よこたショッピングセンター

展示場にて

即売品もございます。

主催　横田青陶会

あとがき

「郷土の再発見」と「郷土に関する資料を文字に残すこと」さらに「最近の郷土の文化活動のメモ」できれば今後の文化運動の展望推進をと、大変に欲ばった考えをもって、発行しはじめて半年になりました。娯楽読物ではないが、それでも読み易くと思いつゝも、資料が多くなり内容つめこみになって困ります。やはり紙面の少ないのがそうさせるようです。活字を小さくすると値上がりするし、お年寄り向きにならない。それに、どんどん執筆して頂こうにも紙面が少ない。悩みは楽しくつきません。

若干値上げをして増頁し、なるべく多くの人に登場していただける企画をもっています。

皆様の御協力でもう少し部数をのばしたいと思っています。営利は考えておりませんが、配布の組織化など、良い案をお考え下さい。

郷土文化

復刊第7号
昭和50. 11. 3
奥出雲文化協会
特集 郷土芸能

郷土の伝統
小森神楽について

小川明男

小森神楽は横田町大字小馬木の小森部落に伝承されるもので、今から約一九〇年前に部落の古老が、松江八重垣神社において佐太神楽を直伝されて現在に至ったものと、現在社中の口伝として伝えられています。少なくともこの社中の発生が天明年間と考えられるのは、現在使用の能面、手名槌、足名槌のものに天明八年云々の墨書銘が判読できることによっても明らかであります。

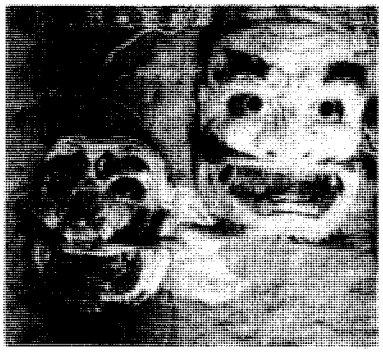
当時、坂本・廻田・宮峠・田中屋・竹ケ花・山根屋・清水屋花田・青木屋・鉄穴内の十戸に拠出により、能面、衣装の新調がなされ、この神楽社中が出来たと云われています。

爾来、部落内の若者連を中心に伝えられ、氏神（小馬木宇佐八幡宮）杉山神社等の祭例神事として、また、農村娯楽として今日に及んでいます。

戦後、時代と世相に即応しないということで、（昭和二十二年頃）解散、衣装の処分もなされたが、全二十四年頃新しく石原秀蔵・三原徳市・内田熊市氏等により復活が計られ、現在の社中の方々が習得され、ついで全二十七、八年頃、新しく衣装株を募り新社中が結成されました。なお、その後昭和四十四年横田ブラザーズクラブの後援により、衣装等の新調補充もなされ、山陰放送放映・横田町合併記念・馬木公民館開館記念公演等、種々の機会に好評を博していましたが、近年の過疎の嵐と後継者難はこの社中にもおそい、老令化現象をまぬがれず、従って神楽の公演もここ数年行われませんでした。

しかし、今夏、馬木小学校小馬木地区五、六年生により練習が始まり、はやし・舞共に不充分ながら伝承のきざしが見え、PTA研修大会・氏神社例祭等に公開発表の機会を得るようになり現在を迎えています。

演目は、神事と神能の二つに大別されますが、神事七種、神能九番が伝承され、特に他地方の神楽社中が近年除々に公演要素にショー的なものを取り入れていますが、本小森神楽は古くからの伝承を素朴に後世に伝えようと考えられています。なお特徴としては、式三番双・大社参拝の舞（諏訪大社から出雲大社へ参拝）等を口伝により伝承していることであります。


神楽のめん

神事は「神座（かみくら）」に神を迎え、その前で行われる鎮魂（たましずめ）の神事で小森には次の七座神事があります。

一、清めの舞
二、連年房の舞
三、祝詞の舞
四、幣の舞
五、莫座の舞
六、八ツ華の舞
七、柴取りの舞

つぎに、神能は神話等により取捉されたいわゆるストーリーのある演目で、早稲田大学、本田教授によると「神事を神官により神に奉納される間に能楽師により演ぜられたものが、里神楽の中に行われて現在に至ったと考えられる云々」と、小森神楽の神能演目は、

一、経津主の舞（国譲り）
二、天神の舞
三、五行の舞
四、式三番双の舞
五、三韓征伐の舞
六、出村磨将軍の舞
七、大社参拝の舞

今月の特集の意味

生活を支えるための職業に追われて暮す日々、暇をつくって、美しさを求めて、自分を燃焼させるひと時をもつことは生甲斐にも通ずる。これが生活における文化活動である。それはいつしか生涯を通して続いてゆく。決してなまやさしくはない。行づまりあり、悩みあり、貧しさもある。それを乗りこえるところに楽しみがあり、成長がある。ほとんど金を生むことはない。金で買えない楽しみがある。昨今はマスコミに踊るあぶくが如き人々（多くのスター）の華やかさに、ものまねが流行する。ものまねは自分を生むものでない。横田のその道の先達の跡をペンにしるすは易しいが、その没入のしかたはすさまじいものがある。若い時の燃え方である。男女交友の場を求めるが先になるあまり、らしいものを求めるは似て非なるものである。

八、八戸の舞（大蛇退治）
九、天の盤戸の舞
以上の九番が伝承されています。

現在、この社中として伝承されている方は次の十氏であります。

内田智富氏　森山秀芳氏
田食安徳氏　錦織善逸氏
山根正雄氏　山崎　勇氏
糸原　宏氏　三原　茂氏
田食正実氏　森山亮一氏
（馬木小学校教諭の記）

の名文句はここで発せられる。飯炊きの場面が終ると、管領山名持豊の奥方栄御前が、沖の井と八汐を従えて見舞にくる。美しい菓子折を鶴千代にすすめると、千松はかけ寄ってその一つを食べ、残りを足蹴にする。毒が廻って苦しむ千松を、八汐が懐剣で咽喉を刺し、母の前で殺害する。無礼者千松の成敗は当然と、政岡は悲しみを押さえて涙一つ落さない。栄御前は政岡が平然としているのは千松と鶴千代を取り替えておいたためと合点し、政岡も悪人の一味と認め、連判状を渡して帰る。二人が去った後で政岡は、吾子の死骸にとりすがり、「コレ千松、ようでかしやった、でかしやったよなあ」と泣く。その時の政岡のモノローグに「思廻らせば此の程から諷ふた唄に千松が、七ツ八ツから金山へ、一年たてども未だ見えぬ。二年たてども未だ見えぬ唄の中なる千松は、

（4頁へ続く）

ふるさとの歴史57

歌舞伎　伽羅仙台萩（めいぼくせんだいはぎ）

三沢初子を登場させる前に、標題に横道してみたい。第四号で横田の歌舞伎について述べた。生存者は今、福間武之助さん一人である。永祥寺前の炭小屋という仮設舞台で、私が幼ない頃演じられたのは、深い印象として残っている。最前列近くのむしろの上で、底冷えしながら、ねむい眼をこすって祖母の説明を聞いて見たのは、時折、強烈に私の脳裡に浮んでくる。五十年の昔のことで、主役は稲守久三郎・渡部文三郎・森山長吉（いずれも故人）ほかであった。馬場歌舞伎衆の十八番の一つであったという。

重要な登場人物

第二幕（竹の門）では幼君の鶴千代が乳母政岡の子千松を相手に遊んでいる。そこへ仁木弾正の名代、妹の八汐と田村右京亮の妻沖の井が、近頃殿中で起る怪事について、政岡を糾明するため現われ、八汐は鶴千代に食膳をすすめたり、女医小槇の針術をほどこしたりしようとするが、政岡はこれを拒否する。鶴千代の殺害、政岡を計略に陥れようとして失敗した八汐は、無念そうに沖の井とともに退場する。

第三幕は足利家奥御殿の場で、悪人がはびこり、忠臣は却けられた殿中で政岡がただ一人、鶴千代を守護している。

毒殺の心配があるため、政岡が自ら飯を炊いて、子供の千松に毒味をさせて進める。一粒の米にも事欠くこの頃では飯炊きの支度も容易ではない。「腹はすいてもひもじうない」の千松

グループ登場

横田民謡友の会

横田玉成団

東京は浅草の木馬館で、安来節の初代お糸が、徳之助の三味線とともに好評を博してから、全国的にブームを招来した。大正末年横田に生れたのが玉成団である。唄の足立円蔵・鳶田宇太郎・高田平八・藤原みよの（以上故人）・上田常右ヱ門、どじょうすくいの山田熊吉、銭太鼓の荒金光孝、三味線の千原伝蔵・杠良一・水岩田清一（以上故人）がその面々で、能義郡奥部にまで進出し、懸賞仁輪加の優勝旗も多数獲得する発展ぶりであった。

横田安来節保存会

昭和二十四年十一月文化の日に、小割政雄を会長に世話人高野利吉で新発足した。唄は足立円蔵ほか、太鼓は足立万之助、三味線は横山寿右ヱ門ほかで、仁多支部の看板をもらい、渡部お糸・出雲愛之助・富田徳之助の一流を招いての大発展であった。

安来節といえば、足立円蔵を思い出すほどの達人を亡くしてから休止状態が続いたが、先輩格三味線の高野利吉を中心に昭和四十四年四月より

横田民謡友の会

が生れた。銭太鼓は大先輩の荒金光孝、唄は立花英一、三味線の水岩田甚一、太鼓は白根富三郎、尺八は石原武夫、会長は安部寛（尺八）で、ほかをあわせて十五名（内男十名）の会員が安部寛宅で毎月第二、第四の水曜日の夜、三時間みっちり研究を続けている。

「民謡友の会」と看板をかえたと同じく、練習曲目は安来節は勿論、関の五本松をはじめ郷土民謡から全国各地の新旧民謡までひろげて、多彩である。

最近は船通山麓の「斐の上荘」において、町敬老会に招かれて「どじょうすくい」ほかの踊りもまじえて興し、好評を博した。

同好者の楽しみと、民謡の研究に深まりをみせている。

同好者を求めている。特に三味線演奏の後継者の若手の養成に重点をおいている。

新しい伝統づくりへ

民芸と焼き物つくり

安部　宏

陶磁器のことを一般に焼き物とよびますように、それは強く烈しい炎の作用をうけることによって成る造形芸術です。熱く猛る還元炎・酸化炎の中で赤熱し、黄色く、そして白熱して泥や石が玉にも勝る器に変質するのですから、焼き物とは全く当を得た呼び名というべきでしょう。

島根の生んだ天才的な陶芸家河井寛次郎先生はこの炎の神秘的な作用を、仏様が仕事をなさっているとか、他力からいただいたものが仕事をしているとおっしゃっています。それは、仕事は自分が成すのではなく自分を超えた大きな力が仕事を成してくれるという考え方であり、無心・無意識・自然の美を大切にする民芸の心であるとおっしゃっています。民芸の美しさにはそういった個人の力をこえた力が易々と入り込んでいます。自己のオリジナリティを主張する猿がましい小細工など一蹴する健康な無心ーそれこそ日本人の意識の中に地下水のように底流するものでしょう。

民芸の美の本質とはそういったもののようです。

民芸という言葉が初めて文字の上にあらわれるのは大正十五年、柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司・富本憲吉の四氏の連名による日本民芸美術館設立趣意書に使われたのが最初です。その中に『自然から産みなされた、健康で活々した美を求めるなら民芸の世界に来ねばならない』と説いています。品質的にしっかりした、まじめな製品の中にこそ、技巧的でない素朴な美が生ずるというのです。この高々とした理念は、島根の工芸界にも地深くすいこまれ、一つの方向さえ決定しました。

私の焼き物もその影響が多大です。民器のもつ生活の中の美が、どんなに素朴にせまり語りかけてくれるか、その言葉を聞くことが私にとっての勉強です。その言葉は、とかく忙しい現代の生活の中で一種の郷愁と、野性味をもっています。日本の茶道はそういった民器の美を高く評価しました。喜左衛門をはじめとする井戸茶碗等を見る茶人達のするどい眼には常に驚ろかされます。確かな眼を持つという事は物を作る人間にとっても使う人にとっても大切な事でしょう。民芸は数多くその新鮮な眼によって堀りおこされ、高められたように思います。より良い暮しを求めてきた日本人の生活の営みを、一つの民器を見ることによって知ることができます。思いをこめて、より丈夫な、そしてより美しい器を求めてきたか、その営みの重厚さ、深遠さに私達は深い喜びを感じます。古民芸の力強さにふれ心を高められ、その無垢の姿に頭を下げ、何度も何度もそれを見ることによって自分で納得し、満足のゆくまでくり返しくり返し作り直す。そうした積み重ねが新しい民芸をつくり上げてゆく。古来、何千万という陶工の中にうずもれて、私も又古いものの語るを聞き、その本質を守り、それを新しい形で残す仕事に徹しきることが大切のようです。

無名の無数の陶工達の、計り知れぬ努力の集積の重みに答える人間的な営みとして、僕の作陶はあるようです。泥をつくり物をつくる過程で、私は暮しにこめた日本人の心の暖かさを知ることが出来ます。ただひたすらに心をこめて、満足のゆくものを求めるーそれは祈りのようなものです。美しいものにこがれる祈りーそれは物つくりを業とする人間として忘れてはならない大切なものなのでしょう。

今、僕はこの一文を書きながら李朝白磁の朝鮮民族の祈りのような大壷を思い浮べています。荘重な容姿と情々とした雰囲気は見る人々に切々と迫ります。理屈ではかり知れぬ玄妙なフィーリングを一個の焼き物の中に住わすこの大壷は、生きて私に語りかけ宇宙の広大さを感じさせてくれます。この白磁を思い見る事で、私はふだん忘れていた次元に移行することが出来ます。そういった、何も言わずに未知の次元・忘れられた次元にひきずり込むような作品が作りたいのです。それが可能であるかどうかわからなくても、ただひたすらに努力する事が僕にとっての業のようです。

心で作り心で使うー民芸の素朴なふれあいの中で人間の充実感の回復がなされれば幸いです。私が民芸についてひかれるのは、現代というメカニックな時代の冷たさの中に感ずる人間的な暖かさへのあこがれでもあるでしょう。能率本位の目まぐるしい社会生活の合い間に、心と心がかようたたずまいを民芸とのふれあいの中で築いて行きたいものです。

はじまったばかりの僕の作陶は恥かしいものばかりですが、明日への一つのステップと考えておりますので、どうか御教示、御指導をお願い致します。

東出雲町東意東
安部宏窯　主人
（横田町出身）

安部宏作陶展

十一月八（土）、九（日）両日
よこたショッピングセンター
（入　料　自　由）
即売品もいろいろ揃えております。
（出品は五十点、目録は当日差し上げます。）

主催　横田青陶会

待つ甲斐あって父母に、顔をば見することもあらう。同じ名の附く千松の、そなたは百年待ったとて、千年万年待ったとて、何の便りがあらうぞいなあ、三千世界に子を持った、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒を物、喰べなといふて叱るのに、毒と見たら試みて、死んでくれいといふような、胴欲非道な母親が又と一人あるものか」とあり、俳優も観客もともに涙を流す、仙台萩最高の見せ場である。

涙ながらに傍で説明する祖母の話に、私もこぶしをにぎりしめていた思い出がある。

この唄は、この地方のてまり歌にも歌われている。上方の歌舞伎が、田舎芝居や人形芝居などを通して伝った名残りであろう。

政岡が悲歎の涙にくれている時、陰で聞いていた八汐が政岡に斬りかかる。政岡は懐剣で八汐の脇腹を刺し、千松の仇を討つ。その時一匹の鼠があらわれて、連判状を咬えて去る。舞台がせり上って床下が現われ、紅隈に反りを打った太刀、鉄扉を構え、足下に大鼠をふんで、荒獅子男之助が出現する。男之助は悪人の讒言で、君側から却けられていたが、御殿の床下に潜んで鶴千代君を守護していたのである。男之助が鉄扉で鼠を打つと、掛烟硝の中から鼠色の着付けをした蒼白な仁木弾正が、巻物を口に咬えてせり上ってくる。ここで男之助と弾正の対決となり、又一つの大きな見せ場が現われる。対決は引分けに終り、弾正は巻物を懐にして去る。

大詰の問注所対決では山名宗全の不公平な裁断と渡辺外記左ヱ門の苦心、細川勝元の出場と仁木弾正の服罪を描き、刃傷の場では愁眉を開いている外記左ヱ門に、前非を悔いて連判状を渡すと見せかけた弾正が、突然短刀で外記左ヱ門を刺す。渡部民部・山中鹿之助・笹野才蔵がかけつけて弾正をおさえ、深手を負った外記左ヱ門が弾正を倒す。細川勝元が現われて、外記左ヱ門の忠義を賞し、足利の御家は鶴千代が相続すること、本領は安堵されたことを告げ、外記左ヱ門は御家の安泰を知って瞑目する。

伊達騒動を室町時代の細川勝元・山名宗全の対立に舞台をたて、足利将軍の殿中の物語に書いたのである。鶴千代は伊達亀千代、後の四代藩主綱村、仁木弾正は原田甲斐、渡辺外記左ヱ門は伊達安芸、山名宗全は酒井忠清、細川勝元が板倉重矩で、政岡、千松、荒獅子男之助、弾正の妹八汐は創作された人物である。

善玉の外記と悪玉の弾正の抗争の中で政岡の悲劇があり、二つの板ばさみの中の主人公となっている。これが永い舞台的生命を附与した原因である。

コミュニティー④
戦後の共同体の解体

第一に敗戦は日本人の価値観に著しい転換をもたらした。

価値の伝統的基準が、与えられた民主化のもとで崩壊した。封建的ということで、すべてがほうむり去られた。マッカーサー指令は隣保制度まで徹底して解体してしまった。

農村は農地解放によって地主制を解体し、権威主義的地主支配もなくなった。通勤農業、出稼労働がふえ第二種兼業が多数となって、農村の共同体は変ってきた。農作業も機械化し、共同化は薄れてきた。かくして封建的と捨てられたが、良風でもあった農村の多くの慣行は、水利問題以外は全く変った。村は生きているが、それをまとめる「たが」はゆるんでしまい、共同体的村落の解体は極度に進んでしまった。

このことは、都市における町内会においては更に進んだ状態であった。

それだけではない。戦後の経済成長は、町や村の日本全体にしめる重みを軽くした。

職業は住居と職場の分離する生活形態が殆んどになり、更に日本社会全体における共同体的社会の比重の低下に拍車をかけた。

そして地域よりも職場に共同体的帰属を求める態度も生れ、労働組合がこれを強めた。

今日の人々は、ばらまよれた砂のようになった。人々の群としてとらえるしかないようになってしまった。

更に所得倍増計画、そして急速な高度成長経済がこの変動を早め、強めた。そこで「人間尊重」「社会開発」の政治へと歩みをかえねばならぬほどひずみが生じた。

くたばれGNP、となって人間性の回復という、開発優先主義修正のスローガンが生れた。マイホーム主義だけでもすまなくなった。プライバシーは尊重しながらも、目的のためには協力して、地方自治に要求するという意識も生れた。落ちるところまでおちて新しい装いをした、コミュニティーが浮びあがってくることになった。

予告

○「ふるさとの史蹟めぐり」はしばらく休み、

○十二月六日（土）には「やさしい古文書の読み方」を考えています。

○「横田文化」十二月号は横田の歴史、民族資料を語る座談会と、史蹟めぐりの楽しさの特集を考えています。

○十一月二十四日（祝日）には広島県比婆郡と鳥取県日野郡の郷土史家を多数招いて座談会を計画中です。

そして、来春は比婆郡で…。

より美しさと
早いことを
モットーに
サービスに
つとめている
芸術写真の店
よこたショッピングセンター
渡辺写真店

畑田文化

No. 8
陰陽交流
12月増頁号
昭和50. 12. 6
奥出雲文化協会

『ふるさとの史蹟めぐりの集い』に参加して

荒金勇吉
多根豪
藤木真

ぼくたち三人は、歴史に関心を持ち、この集いに、参加したわけでは ありませんでした。ただ、なんとなく参加しただけでした。

けれども、第一回目の藤ヶ瀬城に行き、その時から、郷土の歴史に関心を持ち始めたわけです。

藤ヶ瀬城の他、岩屋寺・高田廃寺・馬場八幡宮など見学したり、またお話を聞かせてもらいました。特に四回目、横田町の古代遺跡と題して、池田先生のお話を聞いた時は、それまで学校で学んできた事と考え合わせ、とても興味深い内容でした。

これらの集いは、ぼくたちにとって、とても良い事だったと思います。

これからも、この集いに 出席し、そしてもっともっと内容の深い集いにしてもらいたいと思います。

（横田中学校生徒）

史蹟めぐりに参加する人は八十才に近い老人から小学生に至るまで、広い年令層にわたり、あるけあるけで巡っているが、健脚を期待する以上に、あるくことによって、父祖の歴史を心に刻みこむねらいである。

小学生の川西慶信が感想文を書いてくれた。中学生におとらず頑張っている。

この道の大先輩である荒木宗重・森山庫一・小林房吉氏らは、昭和の初頭、当時流の国粋的ではあったが、日本再認識の時代をテンエージ（十代）の若者として過ごされ、郷土研究に生き抜いてこられたのである。

「三つ子の魂 百まで」をしみじみと感ずる。

今日の郷土再認識は単なる懐古趣味に終るものではない。観光資源にもなるがもっと重要なことは、郷土再組織の精神的支柱の一つに考えられて来ていることである。若い人々の出現と成長を期待したい。

史蹟めぐり（9月） 高田岩屋古墳

陰と陽との文化の関所

「山越しやびんご」は、子どもの頃遊びの間にも繰返した言葉である。交通不便で他境に出ることのない昔、高い山の向うへのあこがれもあった。☆だがそれは古代からの生活の道であった。切実な交流のほそ路だった。古代土器にはじまり、間もなく鉄を主軸として歴史は繰り広がり、大望も挫折も越え、ささやかな喜びも、又哀しみも越えた。

父祖の歴史民俗資料は濃厚につながっている。血のつながりも深く広い。☆陰陽庭球大会の歴史は五十数年、野球は三十年、戦前は数年間陸上の大会も開かれた。こと十年、雲州算盤の主産地として珠算競技大会は極めて盛大である。☆陰陽を隔てる山は、道の発達とともにハイウエイとして至便、交流は深まる。歴史は悠久である。深めると共に拡げよう。

ふるさとの歴史58

三沢一族(21)

初子

初子が叔母紀伊の元に引取られたころ、紀伊は江戸で仙台藩主伊達忠宗の奥方（振姫）に仕えていた。紀伊は若くして伯父三沢信教（又は細川忠興ともいう）の紹介で、輿入れ前から振姫のそばにいた。

振姫は徳川家康の娘と池田輝政の間に生まれ、家康の養女として家康の下で成長し、伊達家に嫁いだのである。

初子は美しく、聡明であったので、忠宗にかわいがられた。その子綱宗も初子に心が動き、秘かにこのことを母に打ちあけた。奥方は忠宗と相談し、この話を紀伊に持出した。

紀伊は「この子は私のところに養われてはおりますが、もと名家の娘でございますから、奥にとの仰せならば承りましょうが、御慰め物にならば御免をこうむりたい」と申しあげた。忠宗はもっともであるとして、正式に婚礼の式をあげた。綱宗十六才、初子十七才であった。

綱宗は二十一才で隠居となったので、幕府へ正室として届けてなかったから、表向きは側室であったが、伊達家ではすべて正室の取り扱いであった。別にたとえ、もと名家とはいえ、浪人の娘であったから、正室の届け出を遠慮したものともいわれている。綱宗隠居の前年、江戸屋敷で亀千代が生まれた。これがのちの綱村で、二才にして伊達藩主となり、仙台伊達騒動の渦中の人となったのである。

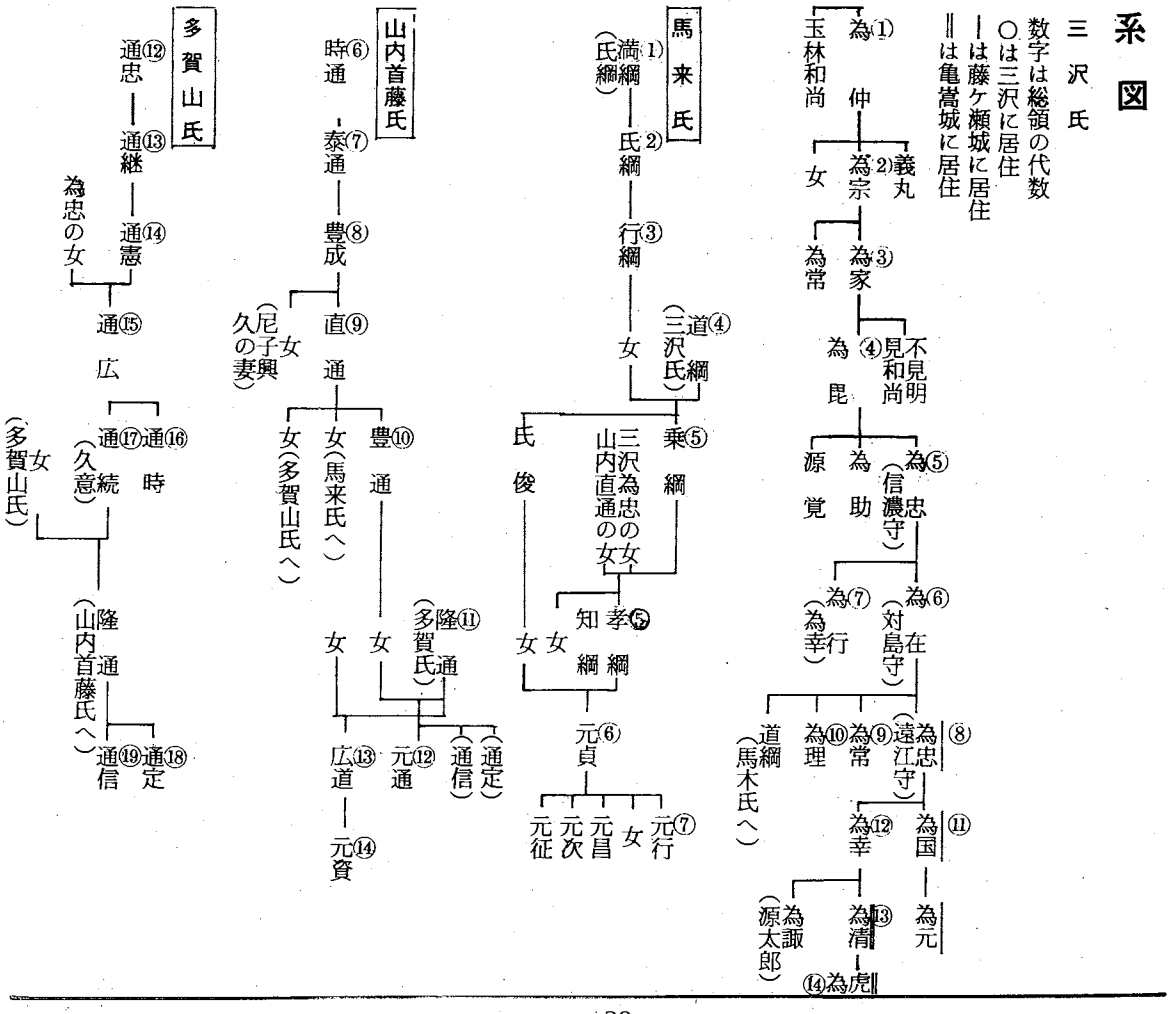
初子は三人の男子をもうけた。二男は村和で三万石に封ぜられ、三男は宗斌で伊予宇和島の伊達家を嗣いだ。一説には、さらに一女立花姫があったというが、これは側室の出であるという。

第1回考古学講座

系図

三沢氏

数字は総領の代数
○は三沢に居住
—は藤ケ瀬城に居住
‖は亀嵩城に居住



荘園「横田庄」と三沢氏一族をめぐる略年表

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	資料
奈良	701	大宝元	備後・調を鉄と願う			類聚国史
	733	天平5	出雲風土記成る	仁多郡にて製鉄、正倉あり		
	747	天平10頃		岩屋寺建立		
平安	799	延暦18	出雲を最多量として中国は調として鉄、歌			
	879	天慶3				類聚三代格
	1072〜1111の間に			石清水八幡宮横田庄出現（寄進地系か）		石清水・文
鎌倉	1184	寿永3	源平合戦	一の谷に於て、横田兵衛尉維之平氏方で、益田氏横田氏を幕府の命で追討する。		源平盛衰記 益田氏文書
	1185	文治元	西国へ源氏一門下る（地毘・山内首藤・沼田・小早川・吉田毛利他）	源頼朝　石清水八幡宮領安堵（横田庄も）		石清水・文
	1196	建久7		八川八幡宮創建（小池氏／現杠氏一下るか）		
	1199	正治元	源頼朝死す			
	1221	承久3	承久の乱			
	1229	寛喜元		これより以前三処郷地頭三処氏　横田庄代官に横田庄、年貢銭納、御用鉄上納		石清水・文
	1232	貞永元		三処氏に我儘あり代官改易		〃
	1233	天福元		三処氏横妨し　岩屋寺良仙法師上訴す		
		2		〃　ふたたび代官に		
	1249	建長元		阿井・三沢・三処・布勢郷と馬木郷地頭のことあり		千家文書
	1264	文永2	北条時輔六波羅探題に時宗執権に（時輔の異母弟）	（亀山上皇高田寺、大領権現に祈願）		
		5				
	1271	8		時輔は横田庄（55町歩）竹矢庄（62）須佐（30）いずれも八幡宮領を領有、地頭三処左衛門後家は三処郷、佐世白上八幡宮を、神保二郎は布施郷を、飯島太郎は三沢郷を、多胡氏は馬木郷を法華堂氏は阿井郷を領有。		〃
		このころ		横田庄は石清水八幡宮と三処氏によって下地中分する。		石清水・文
		9	時輔一族の争で殺さる			
	1274	11	蒙古来襲（文永の役）	文永の役による後宇多天皇の祈願文（岩屋寺へ　使は泉涌寺）		岩屋・文
	1275	建治元				
	1281	弘安4	蒙古来襲（弘安の役）	八幡宮八川より馬場へ移る　岩屋寺院主祐円、願主は妙音禅尼（時輔の実母で時頼の妻）小池氏はこのころまでは代々京都より妻を迎える。（亀山上皇綸旨、高田寺、大領権現へ）		馬場・文
		10		弘安の役による宇多天皇綸旨　岩屋寺へ（安堵状）		岩屋・文
	1302	乾元元		‖　①為仲　雨川へ下る		
	1312	正和2		北條最明寺院のため妙音尼、4回目の土地寄進　のち死す		〃
	1312 1316	正和年中	花園天皇（院政後伏見上皇）	妙音尼死後　横田庄は鶴岡八幡宮仮殿造営料所となりついで六波羅密寺造営料所となる。		〃
	1318	文保元		内裏御料所となる。		〃
		2	後醍醐天皇	〃　の一部の岩屋寺領安堵		〃
	1320	天享元	院政廃止			
	21	2		（高田寺大領権現焼失　岩屋寺衆徒によって）		
	24		正中の変			
	1331	元弘元	天皇神器を北朝光厳天皇へ	内裏御料所は岩屋寺良円が代官　この年横田庄　北朝仙洞御所料に分けられ、安部氏代官として下る（現存）		
		㊥天徳3				岩屋文・安部氏文
	1332	元弘2	天皇隠岐へ	③岩屋寺へ天皇綸旨を　⑤祐円に、高田寺にも綸旨		
	33	3		光厳天皇廃し　論功行賞		
	34	建武元		（天皇　高田寺大領権現に寄進）		
	35	2	塩冶高貞出雲を領す	天皇　横田庄を石清水八幡宮へ寄進。その中の尾蘭村を岩屋寺へ		〃
	36	3		天皇①鰐淵寺僧頼源に行賞として三処郷地頭職に、島出寺へ寄進（土地）それを		鰐淵寺・文
室町				1340興国2　1351正平6.12安堵　南朝方である。		
		㊤延元元		馬木郷地頭は信原氏に		
				②山名時氏　名和長年戦死後、因幡伯耆へ入る。⑪天皇神器を㊤光明天皇へ渡す。横田庄北朝仙洞御料所になり、八幡宮領はなくなる。		
	1340	興国元	山名時氏因、伯守護に			
	42	㊤康永元		時氏の下で代官良円横妨し、岩屋寺は院宣で停止を上申		〃
		2		祐円死す		
	47	㊤貞和3		良円にかわって弘円が横妨、院宣下る。		〃
		5		時氏に2度院より文書下る。		
	50	㊤観応元		時氏に横妨停止の2度目の院宣。		
				足利尊氏　西国から岩屋寺に祈願文		大日本史料
					‖ 飯島四郎三郎に軍忠状（諏訪氏にも）③為家	
				（㊦後村上天皇綸旨　高田寺大領権現へ		
	1352	3	伯耆守護　師義（時氏の嫡子）		全国各地このころより1369年まで南北朝に分れて争う。	
		㊤文和元				

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	
室町	1358	北文和2		師義岩屋寺へ制札	三処郷と横田庄師義の勢力下に	岩屋・文
	61	康安元	時氏・師義・出・伯因の兵を率いて美作をうつ			
	70	㊤応安3			馬木郷地頭職三村氏から再び信原氏へ	信原氏・文
	71	4	時氏死す　後円融天皇即位			
	72	5		天皇　仙洞御料所を安堵		岩屋・文
	76	永和2	師義死す　時義がつぐ			
		3		足利義満？の禁制　岩屋寺へ		〃
	79	康正元	山名一族11ケ国領す			
	82	㊤永徳2		山名時義の安堵状（院宣により）岩屋寺へ 高田寺へも	山名満幸横田庄横領代官石原氏 馬木地頭に馬来氏下る 代官安部氏しりぞく	安部氏・文
	85	㊤至徳2		時義　馬場八幡宮遷宮本願	至徳年間に不見明見（④為毟の嫡男）	
		4		〃　岩屋寺へ下中村の地寄進	郡村で寺の寄進うける	総光寺・文
	88	元中5		（高田寺大領権現焼失　岩屋寺の衆徒により）		
	89	㊤康応元		満幸　時義の祈願を岩屋寺へ		
	91	㊤明徳2	出雲守護山名満幸解易	明徳の乱起る		明徳記
		3	京極氏出雲守護に代官尼子氏 南北朝合体後小松天皇			
		4	後円融上皇崩御	横田庄　後小松天皇に伝領　岩屋寺領院宣で安堵 山名残党各地でしゅん動、馬来氏　楠（卜蔵）氏討死す。		
	94	応永元		山内首藤通忠　横田庄伊賀村宛行わる 後円融上皇追善のため菩提所泉涌寺へ半分を寄進		山内首藤家・文 大日本史料
					④為毟　高田寺へ三処郷内から土地寄進　不見明見三沢氏の外護により総光寺亀嵩に	日本洞上併灯録
	1402	2	京都高詮満幸を京都五条門高倉の宿にて誅す。	この頃代安部氏千代他国へ鉄を商売す		
		9		横田庄半分の泉涌寺領安堵		大日本史料
	12	19		後小松天皇譲位後も半分もつが5年後花園天皇にゆづる。		看聞御記
	30	永享2		安部氏　稲田へ移る		
	39	11			⑤地頭信濃守為忠　馬場八幡宮棟札で本願	馬場・文
	44	文安元			岩屋寺へ文書　綸旨院宣にまかせて。大催小池氏の仲裁を行う。	岩屋・文
	57	長禄元				杠氏・文
	62	寛正3		岩屋寺一撥のため焼ける？		
	71	文明2		山内氏と馬来道綱の契約状	⑥為在　出雲北部へ進出、末子馬来氏の養子へ、尼子氏為在と与党の知行差押え	海東諸国記
		3		岩屋寺復興		
		7			⑤為忠　近江国で京極六角の戦で討死、備後の三沢領すべて山内領へ	長興宿弥記
		8			⑧遠江守為忠馬場八幡宮本願 大催職小池氏の安堵状だす	
					⑦為幸が幼ない為忠を後見す。能義郡土一撥の後押しをして富田城攻める	
		16	尼子氏富田を追われる	三沢他国人土豪の反抗により、中心人物は為在である		
	86	18	尼子氏富田城へ復す			
	88	長享2			山中逃亡返討ちで三沢氏尼子に下る。	
	93	明応元		横田庄（禁裡御料）年貢米進あり	三沢の代官　石原重国横田へ	泉涌・文
	1509	永正6	4年から為幸、経久に従い上落、この年京都にて戦う。		⑧為忠　藤ケ瀬城築く 三沢には為幸、安部氏111年間の代官退く	
		8			為幸　尼子経久とともに京都にあり。船岡山の合戦に参加	
		11	尼子藤ケ瀬を攻める	岩屋寺全焼		
		13	尼子経久出雲に帰る			
		14	経久奥出雲より庄原へ出陣	阿用の戦で長男政久討死 杠氏討死	為忠隠居して藤ケ瀬城は⑨為国 三沢城には為忠弟⑨為常	
		17		岩屋寺快円によって復興に20年後完成	為忠死す	
	21	大永元	尼子と大内と石見に戦う	（尼子の最盛時）		
		2	尼子と大内と邑智に戦う		尼子方で参加	
		4	尼子と毛利大内備後に戦う			
		6	毛利・大内結ぶ	仙洞御料所　7月11月貢納す		
	26	7	尼子と大内備後和智で対陣		尼子方で参加	岩屋・文
	28	享禄元	経久山内隆通を攻める	〃　3月10月　〃		山内首藤家文
		2		〃　12月　〃		
	31	4	経久　藤ケ瀬を攻略す		為国ほか捕えられ大文5富田にて斬らる	
	33	天文元	興久　父経久に反す	安部氏、三沢氏の下で再び代官に	三沢為幸の代官石原義扶横田へ	
		天文3		仙洞御料所　3月に貢納す		

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	資料
		天文 5		たたら製鉄師、馬来氏元家臣杠氏ほかの名あり（今日のたたら方式となる）		杠日記
		6		仙洞御料所　4月に貢納す		
		8		〃　12月　〃		
室町	1350	9			⑫為幸　安芸吉田にて討死 ⑬為清4才　⑩為理が後見か	
		10	多賀山、山内、三沢他11人大内へ			
	1543		大内、毛利と富田城下に迫る。三沢ほか再び尼子に帰投、大内退却、経久それを石見へ追う。	岩屋寺8分通り完成、尼子横田庄直接支配　安部氏代官退く 総代官と中村は森脇家貞、竹崎は河本、大呂は河制、蔵屋は羽鳥、原口は本田で尾園は山内通続の所領で、こゝから勅定の旨に任せて岩屋寺に寄進	為清は三沢、阿井、三処郷にのみ	
		13	曇久伯、因、備後に侵入	このころ山内直通の娘馬来乗綱の後妻に		
		16		泉涌寺文書に横田庄云々あり		
		17		2月8月貢納		
		18		9月〃		
		19、22		各1回〃		
				弘治2年に2回　同3年に1回貢納		
		20		伊賀多気神社再興、願主森脇家貞		
		22	曇久、備後より高田城を攻める。		為幸出陣す	為幸出陣す
		弘治 2	尼子、毛利と石見で戦い敗れる			
	1558	永禄 元	尼子、銀山を攻める毛利敗る。	4月　千酌郷とともに代替の御礼物献上	三沢は尼子方で	
		2			三沢は毛利の配下に	
		3	毛利、石見銀山攻める	暮より郡内から尼子の勢力は一掃される。	三沢は毛利方に度々請書で忠誠誓う	陰徳太平記
	1561	4	本庄毛利に降伏	（鍋坂城主　布広左東亮は尼子方へ返る）	三沢、毛利方にとどまる	
		5	毛利赤穴より出雲へ		三沢、郡内で勢力を復う	
		6	〃　白鹿城を陥落			
	1565	8	〃　富田城絵攻撃	泉涌寺文書に尼子毛利の争乱のため滞納あった意味のことあり		
		9	富田城を開城す	7月貢納		
	1569	12	幸盛、勝久と隠岐へ作州高田城、豊後立花城を毛利攻める（三沢参加する）この時幸盛日登を攻める　留守隊大敗する		三沢、毛利へ人質を出す。 三沢多数討死す	
織豊	1570	元亀 元	尼子再起第1回の布部合戦、尼子方大敗		布部合戦、ついで末次攻撃に参加	
		2			伯耆高瀬城攻撃、真山攻略に参加	
	1575	天正 2	尼子、鳥取へ入る	朝敵赦免の綸旨（禁裡御料所）	為清隠居して亀嵩に城を築く。	
		3			為虎、毛利に三刀屋氏とともに誓紙出す。	
		5		日御崎神社仮遷宮棟別課当のこと	為清　亀嵩城へ	
		6	上月城の合戦		〃　為虎参加	
		7		禁裡御料所横田荘代官に菊亭晴季	為虎　毛利へ誓紙を出す	
		8			為虎　毛利へ誓紙を出す	
		9	秀吉鳥取城「渇泣し」の攻撃		救援に参加	
	1582	10	備中高松城攻撃和睦		三沢氏の去就の波紋 三沢雲波の手紙	
		12	輝元は山内、三吉、久城に人質を出させる。		三沢氏も人質を出す	
		13	多賀山善山城主　土佐へ		為虎誓紙を出し亀嵩城保持願う	
		14		禁裡御料所　貢納可		
		15		仁多郡は輝元の領内	為虎　九州へ出陣	
		16			為清死す（53才）	
	1589	17		三沢氏、馬来氏、安芸へ下る。		
		18	小田原城攻撃	横田庄貢納品天皇官女に分ける。	為虎参加	
	1591	19	輝元出雲ほか8ケ国を領す（仁多郡は輝元領）	吉川広家　富田城へ 大催小池氏　毛利氏より村役人を仰せつかる		

（註）資料において　文は文書　石清水・文は石清水八幡宮文書　岩屋・文は岩屋寺文書
馬場・文は馬場八幡宮文書　泉涌・文は泉涌寺文書
その他の尼子・毛利・三沢関係の記事の出典は、陰徳太平記、雲陽軍実記、吉田物語などから考証により掲載

（作成　高橋）

今年の回顧

横田史談会

ふるさとの史蹟めぐりの集い

五月　藤ケ瀬城址
六月　馬場八幡宮
七月　岩屋寺
九月　高田廃寺ほか
十月　夕景、小林城址ほか

研究・講座

八月二十五日
考古学（出土品の見方）
県文化財専門委員
池田満雄氏

十一月
陰陽郷土史愛好者懇談会

十二月　古文書を読む会
（入門第一回）

事業

八月二十六・七日
町内埋蔵文化財展　約500点
よこたショッピングセンターにて

以上のテキスト・研究記録・会合報告は「横田文化」第一号より第八号までに掲載してあります。

◎十二月より当会も規約に従い会費制によって発展を計ることにしました。

埋蔵文化財展

あとがき

「横田文化」も町外のお方が多数お求めいただいたり、グループとしてまとめて購入頂いています。それに「横田史談会」も組織が確立しましたので今月は増頁号としました。

新春号も考えています。

連載の三沢一族も終りに近づきました。今年は有難とうございました。

コミュニティー⑤
今日の課題となる

このように社会全体において、共同的地域社会の重みが薄れた。生きながらえている農村社会も内容的に著しく変化し、解体傾向にある。今や地域社会は新しい形で再建されなければならない段階である。この変動は、日本が昭和三十年前後に復興から成長に転じた日本経済が、三十五年から所得倍増計画により急速に高度成長の道を歩み出した。その過程と共に進行の度を早めた。四十年には、成長のひずみから「社会開発」の旗印が掲げられた。生活環境施設の整備、社会保障の拡充を主要な柱として、人間尊重の政治へ歩みを変えた。

しかし、GNP世界一という経済成長に日本人は酔った。未来論もあらわれたが、先見洞察でなく夢幻的であった。

公害の発生で「くたばれGNP」の潮流があらわれた。価値観の転換が要求されてきた。政府は健全な国民生活確保の方策を検討した結果、コミュニティー建設の重要性が痛感された。

他方、団地住民で個々の家庭のプライバシーに立ち入ることを拒否しながら、目的のためには協力するという新し活動をはじめるものが、各地にあらわれた。新しコミュニティー活動が理論の上でも、実際にも示唆することになった。

コミュニティー形成は、時代の課題となってきた。

安部宏作陶展

青年陶芸作家の作品に約一〇〇〇人の人々が讃辞を与える

十一月八・九両日、よこたショッピングセンターにおいて開催。主催者も予想以上の来客に驚くほどであり、優秀作品には購入申し込みが集中した。

安部君の作品の優れていることはもとよりであるが、来客の鑑賞眼の水準の高いのは、この町の文化度を示すものである。

東京銀座民芸店「たくみ」で高く評価されている安部君の精進に声援を贈ろう。

予告

横田史談会

冬季間の例会は極めて易しい『古文書を読む入門』の集いで、

○便利な手引書と
○易しい古文書を
実費で複写し、お分けします。

十二月六日　第一土曜日
「捨子教誡の謡」（上）
51年一月十日　第二土曜日
「　仝　右　」（下）
仝　二月七日　第一土曜日
仝　三月六日　第一土曜日

講師は、県立図書館より都合つく限り招く予定です。

『横田文化』
五十一年
新春増頁号

奥出雲の歴史資料は民族
どんなに豊富で
何があるか
どのように保存し
利用したらよいか

横田文化

No. 9
昭和51年1月4日
横田の文化財
特集増頁号
奥出雲文化協会

豊かな文化財が失われぬうちに

奥出雲歴史民俗資料館の建設を

世界的な砂鉄製鉄・雲州そろばん
荘園「横田庄」をめぐる古代・中世
近世・近代の遺産

負債償還の責務

私どもは敗戦後、私どもの祖先先輩に大きい負債を背負い込んでしまった。ヨーロッパ各国を廻って、良き精神・物質両文化の伝統の中に育まれているかの地を知り、戦後あまりにも伝統のないアメリカ文化追従にすぎ、古きは悪しきと捨て去った誤りを知った。公害・開発の痛手による文化財再認識もまだおそくはない。横田の私どもが受け継いできた、奥出雲の歴史民俗資料の数々は、私どもだけのものでなく、日本の宝物である。この地のものは私どもが声をあげ、努力してゆかねばならない責務がある。

世界に誇れる唯一のたたら遺跡

この遺跡のかたわらで、今日尚砂鉄採集が行われている。

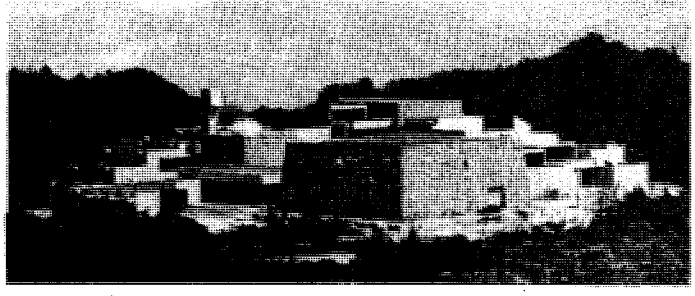
古代製鉄のメッカであったことが、古代神話の実在の地とされたのが簸の川上「横田」である。平安時代初期に石清水八幡宮の荘園となり、それが京都朝廷の御料所となり、のち平安末期から幕末までの朝廷の陵墓があり菩提寺であった、京都のみて・ら泉涌寺にも分けられて、三沢氏がこの地を去って毛利氏が領地とするまで、まさに五百年余、京都と深い関係があった。この間この荘園をめぐって、平家・源氏・北条・足利・山名・尼子毛利の諸氏の争いが繰りひろげられて波乱万丈の歴史を展開し、古文書も数多く残っている。今後の研究の余地も多い。荘園末期は、この地を維持せんと左大臣菊亭（今出川）晴季が朝廷の遙任代官となった。（秀吉を関白太政大臣に推した実力者）これは何が理由であるか。横田庄の鉄資源によるものである。

徳川時代に松江藩の財政を強力に支えたのも奥出雲の砂鉄である。日清戦争を鉄の立場からみると、その需要の約七割をみたしたのは奥出雲である。

今日、日本刀の原料玉鋼の唯一の産地もここである。また県産物輸出品の三分の一はこの地の玉鋼を材料とした鋼製品である。そして今日、玉鋼の生産の増加は各方面から望まれている。

諸外国で数学教育の上からも注目されてきた「そろばん」を今日あらしめたのは、幕末から明治初年の横田の職人の「ろくろ」改良の賜物である。そしてこれは日本工業技術史上において極めて画期的な発明でもあった。

（三頁へ）



私どもの初夢

比婆科学

昨秋の陰陽郷土史愛好者懇談会は、小さいが貴重なものを生んだり、残したりしてくれた。その一つ、

✻古墳時代の陰陽の関係について語られた庄原市の広瀬繁登さんから御礼状にあわせて、御意見や資料を沢山に頂いた。✻翌日からまた住居趾の発掘にとりくむ熱意は、敗戦後から続いているものと感ずることしきり。✻十数人で創刊した「比婆科学」は百号を超えたという。当時の会員の中学四年生は、教師であり事務局長である。

同じく会員としてこの会で育ったさる学者会員は、新発見の古生物の学名に広瀬さんの名をつけ、"Endothy ranopsis hirosei"たとのこと。私の墓碑銘であると記されてある。

✻約三十年の歳月の重みをひしひしと感ずる。

横田町内歴史民俗資料

時代別・類別表（町隣接地帯をのぞく）

時代	既に町等公有のもの			依託等により集めることの可能のもの		現地（移動不可能）			
	図書	古文書	文化財	民俗	歴史財　文化財	神社寺院	遺跡・建物	砂鉄製鉄	名勝ほか
原始 古代			縄文 弥生 古墳	← 180点	縄文 弥生 馬場八幡宮　銅剣 古墳		縄文弥生 古墳 } 60		岩屋寺切開 （鬼の舌震）
奈良	出雲風土記			斐伊川 室原川 灰火山川 阿伊川 鳥髪山	岩屋寺　法華経	伊賀多気神社 岩屋寺			動物 植物
平安	石清水八幡宮文書			遊託山 室原山 灰火山	岩屋寺　毘沙門天像 　　仝脇立仏②	毘沙門堂趾 〃　礎石			船通山 吾妻山 三井野原
鎌倉	県史料	岩屋寺文書			岩屋寺　二王像② 　　阿弥陀三尊軸 伊賀多気神社 　　随神立像② 　　狗　犬② 　　黒塗獅子頭 馬場八幡宮 　　童児形騎馬神像 　　黒塗獅子頭 　　棟札　㉚ 善徳寺　本尊	八川八幡宮 馬場八幡宮 寺院趾　4	城趾　7 平家一夜城趾		船通山 石割けやき とが 湯の　の 　きゃら木 竹崎 　桂の木
室町	〃	〃 杠（表） 　文書			馬場八幡宮 　　狗犬② 懸盤 　　紙本墨書 　　（八幡講式） 　　為清の弓 馬木八幡宮 　　釈迦三尊懸仏 出雲大社 　　三沢為幸の弓 岩屋寺　本尊十一面観音 　　愛染明王 　　四天王像④ 　　蔵王権現像 　　阿弥陀三尊③ 　　文殊菩薩 　　薬師如来① 　　びんずる尊者像 　　行基菩薩像 　　本堂仏壇 　　立石文宮③ 馬木八幡宮　蓬莱鏡 三沢為虎のよろいかぶと 岩屋寺　弘法大師像	晋叟寺山門 安養寺 安楽寺 善徳寺 金巌寺 八槙寺 妙網寺 総安寺 横田札33ケ所 　観音堂	藤ケ瀬城趾 下横田　〃 稲田安部の 　土居屋敷 夕景山城趾 小馬木　〃 　　ほか 五位橋 大市六日市 　　町並 源太いで 丹波堰 卜蔵庭園		
桃山		〃						野だたら趾 船通山の水路 けら塊	
江戸		卜蔵文書 糸原文書 杠（表） 　文書 杠（山本） 　文書 郡家文書 検地帳ほか	そろばん 製作の名工 刀匠 川島忠善 　ほか	生業 生活等 　民具 たたら製 鉄用具 そろばん 工具作品	岩屋寺　経筒 　　大日如来 竹崎　経筒 佐伯景幽の画軸物		糸原宅と庭園 民家 卜蔵宅 藤田宅 安部宅ほか	亀石たゝら 糸原 卜蔵 杠　ほか 大鍛冶屋趾 鉄穴場	
明治	〃	役場文書	出土品 （180点） 工芸品 （　60点）	民話 民謡 わらべ歌 盆踊 （700点）	刀剣類 かしらうち、田植（歌） 盆踊（歌）かさぼこ 神楽　笠踊 （100点）		横田キリスト教会 土蔵 出雲横田駅 （集計は4頁にあり）	鳥上木炭銑工場ほか	
（合計数）		（1,748冊）							

保存と利用に必要な施設案

おびたゞしい資料を収蔵し、展示し、閲覧し、研究するに必要な部屋数の試案

ー ①とは小中学校の教室と同じ大きさ ① を示す。

1考古収蔵庫 ①

考古展示室 ②

屋外展示場 各種模型

縄文早期から古墳末期そして鎌倉期までを含めて、おびただしい破片がある。これを復元修復して(180)点。このうち馬場八幡宮の大型細身銅剣、稲田神社の五鈴鏡、小万蔵出土の県下に例の少ない最古の楕円押型文上器小片など貴重なもの多数

2歴史収蔵庫 ①

歴史展示室 ②

屋外展示場 各種模型

伊賀多気神社、岩屋寺、馬場八幡宮、小馬木八幡宮ほかの県指定文化財をはじめ、為清の弓、棟札(52)点

3古文書収蔵庫 ①

古文書展示室 ②

古文書・図書閲覧室 ①

卜蔵文書は実物を他は各家の文書のリコピーを役場に所蔵する ー文書目録完成、保存完全 (数字は冊数)

中世文書

杠（表）平安時代下向の大催 (113)

杠（山本）たゝら師 (9)

安部（土居）仙洞御料所代官 (9)

たゝら文書

卜蔵（本家）(260)

〃（大迫）幕末百姓一揆関係も多数 (73)

〃（山根）(6)

〃（ほか）(4)

糸原（湯迫）(163)

〃（高口）(38)

桜井・永瀬・田部・安部（華蔵院）(84)

ほか諸家 (227)

ほか諸文書

社寺関係

岩屋寺ほか郡内 (60)

中世諸家

三沢氏ほか (27)

近世以降

検地帳 実物並フイルム及写真 (38)

横田町分(60) 仁多町ほか (49)

江戸時代郡家文書 御用留を主とし元禄から明治十五年まで 97

行政文書 横田他四ケ町村のもの整理済明治元年より昭和32年迄 (489)

ー石清水八幡宮、仙洞御所、泉涌寺の荘園関係、中世の三沢、尼子、毛利関係、たゝら関係等極めて貴重品を所蔵

(民俗資料関係)

4たゝら関係収蔵展示室 ②

たゝら屋外展示場 実物や模型

世界に誇るもの、現地遺跡と鳥上木炭銑工場と関係して

5そろばん関係展示室 ②

工具(400)点 と創業時と現代までの工程推移

製品(60)点 村上吉五郎、高橋常作、村上朝吉ほか

6生業関係収蔵庫 ②

生業関係農、林、畜展示室 ①

日常生活資料展示室 ①

生業関係屋外展示場 実物模型

収集済み保存中のもの (300)点

調査完了収集可能のもの (400)点

(以上室数 計17 屋外展示場4)

7管理関係として

会議室、研修室、研究室

未整理分収蔵庫、調査室

事務室など

たゝら遺跡の保存、開発にともなう現地の保存や出土品保存、製鉄史等の研究のため、専門員の常駐が必要とされる。

保存展示のみでなく、研究ならびに、観光としても貴重なものとなる。

（一頁より続く）

この文化財を生んだ人々

それは私どもの祖先で、生きるための必死な努力の賜物である。この地の神社仏閣に所蔵されている文化財は汗とあぶらの働きの中で、少しずつ貯えられた浄財の集りが生んだものである。それらは数多くの古文書によって知ることができる。しかるに最近、心ない人々によって、それらが散逸するやに聞く。又一方製鉄遺跡の崩壊もうれえられている。伝統の工芸「そろばん」の道具と技術の忘失も心配されている。

この地の歴史民俗資料はよそと違って、静的なものではなく、今日なお動いて保存すべき極めて貴重なものである

保存の方途を早急に考える時で本紙二頁には資料文化財の表

四頁には地区別遺跡

三頁には資料館規模

をのせ、その主なものに対する認識を新らたにするとともに保存についての試案を提示した。

最近、中四国地方では香川県が四ケ年の歳月をかけて、歴史民俗資料館を完成した。その内容が、海洋中心の貴重なものとは認めるが、海洋は各地にある。この地の砂鉄中心の資料等は、世界唯一のものであり、内容もすでにのべた如く、貴重にして、極めて豊富、しかも動いて更に発展する、生きた資料館となり得るものである。

船通山を主峰とする山々の美しい盆地に、祖先のいぶきは薫風とともにたゞよう。

この環境に適応した **保存の殿堂**が必要である。それは **学問的**にも、**経済的**にも 又 **観光資源**としても また 奥出雲横田の地域（コミュニティー）の心のより処としても、欠くべからざるものとなる。

国では国立歴史民俗資料館（千葉に計画中）、広域地方歴史民俗資料館（香川を含めて現在五県）の計画が進行し更に増置される構想がある。

是非共、郷土の人々の愛郷心の熱意を原動力として実現を計画して頂きたいと思い、構想の大要を提案したものである。

歴史民俗資料　地区別分布図

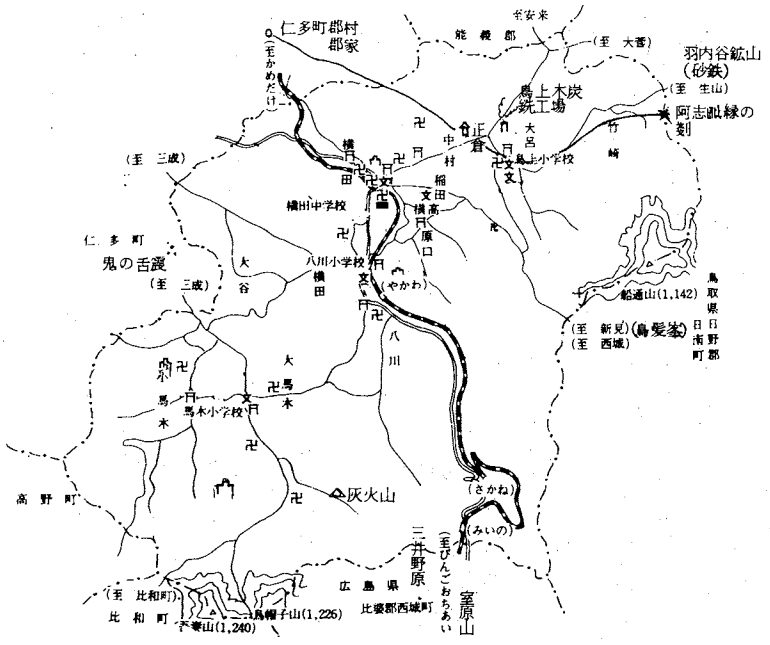
（移動不可能のもの及び民俗芸能）

横田　笠踊　盆踊

古　墳　藤ケ瀬城趾　横田札33の観音堂
住居趾　毘沙門堂趾　大市六日市町並
岩屋寺　杠（表）宅　キリスト教会
切開　源太井手　民家
馬場八幡宮　土居屋敷　伊賀多気神社
安楽寺　晋叟寺及山門　善徳寺　刀匠

鳥上　かさぼこ

古　墳
鳥上木炭銑工場　鳥髪の峯（船通山）
大鍛冶屋趾　阿志比縁の剣
五位橋　桂
城趾　石割櫻　船通山
卜蔵庭園　きゃら木　鉄穴井手
亀石たたら炉
むらくもたたら趾
野だたら趾　卜蔵宅
鈔　塊



八川

横穴古墳群
下横田城
丹波堰　八川八幡宮
惣安寺　平家一夜城
糸原宅と庭園

馬木　かしらうち　神楽

古墳　吾妻山
小林城趾　湯の迫の栂
安養寺　妙綱寺
大坊趾　八槇寺 杠(山本)
小馬木八幡宮
夕景城趾　金巌寺
遊託の剣　藤田宅
安部宅　刀匠

三成

鬼の舌震
刀匠（川島忠善）

	鳥上	横田	八川	馬木	計		鳥上	横田	八川	馬木	計
出土品散布地	5	13	2	2	22	寺院趾	2			2	4
住居趾	1	1		2	4	たゝら関係趾	33	34	46	20	4
古墳(横穴も)	4	8	7	10	29	塚	11	18	16	15	2
古墓	1	2		2	5	窯趾		1	1		2
城趾	1	1	2	3	7	計	16	29	13	21	79

発見したもののみ　50・12・1現在

世界の頭脳を育てる
雲州そろばん
奥出雲横田
雲州算盤協同組合

山砂鉄
世界の鋼資源
奥雲出横田
鳥上木炭銑工場

ふるさとの歴史59
奥出雲の古代を推理する①
—鉄—

弥生から古墳時代になると食糧を増産し生活を支え、大きい勢力をつくるには鉄器を必要とした。歴史の基本に位する鉄の問題を、資料と資料の点を推理で結んでえがき出す。

マンガンとチタン

鉄器が砂鉄を原料としたか、磁鉄鉱・褐鉄鉱であるかを判別するには、その成分の化学分析と電子顕微鏡による鉄滓・炭素量ほかの分布状態の観察によるのであるが、専門的な事はさけて、一口に言えばマンガンが微量であれば砂鉄であり、その砂鉄でチタンが少ないと真砂砂鉄である。

日本は世界にもまれな火山国で火成岩系（花崗岩・閃緑岩・安山岩）の砂鉄の産地は全国に分布し豊富であったので、鉄鉱石による製鉄技術はあまり発達せず、もっぱら砂鉄を原料とするタタラ吹きが発達した。特に中国地方は良質のものが多く、昔の技術では処理し難かった、チタン等の不純物が比較的少なく、早くからタタラ製鉄が発達した理由の一つになっている。

真砂（黒雲母花崗岩の風化・チタン・燐の含有少ない）赤目（花崗閃緑岩・半花　岩の風化から燐多い）の砂鉄の産地によって製鉄技術がちがい、真砂では日本刀や刃物類の素材となる和綱をつくる鈿（けら）押法が（山陰側山地）赤目では鋳造用や大鍛冶に廻して包丁鉄を原料とする和銑をつくる銑（づく）押法が（山陽側山地）発達した。しかし古代にはどのようであったか判然としないが、製鉄遺跡によってみると、砂鉄はカンナ流しではなく堅穴堀りによってほり出していたから極めて少量であって、山腹利用の野だたらで、梅雨あけの積乱雲のある晴天百日をねらって、自然の風力を利用して、低温でゆっくりとつくったようである。

古墳時代

鉄の考古学は、鉄が錆び、さらに腐蝕するため研究が困難で著しく遅れている。

岡山県の東北の月の輪古墳は、古墳中期（四世紀代）のものであるが、鉱滓があり、各種の刀剣やのみが、同じ期の岡山市一本松古墳などには、かなばし、かなづち、かなとこ、といし、たがね、その他の鍛冶道具一式が出土している。

このことは、朝鮮からの生産技術の伝来と吉備各地への拡がりのしるしである。北へゆくにつれ被葬者が、それらの集団の小首長であったらしいことをしめす出土品のある群小古墳がある。（六世紀）

かっては（弥生末期から古墳初期）渡来の鉄鏃や、地元の沼鉄などの低品位鉱を利用していたものが、このころから砂鉄や高品位の鉄鉱石を採掘し、高度の技術で製鉄するようになり、そして燃料の木炭、風化した砂を求めて奥地へ移動したことを示す。

播磨風土記には、吉備の鉄のことが語られ、鉄にまつわる伝承も誌されているが、出雲風土記（七二四）には、唯仁多郡の項に「鉄あり」と数字あるのみである。又古墳からの出土品にみるものも、出雲は吉備に著しく劣り、技術伝播の遅れを示している。

月の輪古墳の鉄

出土品の分析をした和島誠一氏は、すべて鍛鉄であって現地のものでなく、遠い山陽地方の赤目系砂鉄であるという。村上英之助氏は現地の鉄が主体で、それに真砂の現地砂鉄を混用しているという。そして鏃などの消耗品は大量に必要で、鉄鉱石による粗製品であり、剣・工具などは砂鉄配合率が多く、砂鉄も鉄の原料としては優秀であることを、すでに認識していたと知ることができると分析している。

法隆寺の五重塔・金堂（当初建築部分、白鳳期前の六〇七年）の釘の分析で、京大は砂鉄でないと結論し、日本鋼管は金堂と同じ時代の醍醐寺五重塔、小浜市の明通寺五重塔の釘もともに分析をして、マンガンが含まれていないから古代釘は砂鉄を原料としていると推論している。次の時代白鳳期のものである美濃の弥勒寺趾出土の古鉄釘にはマンガンが微量であるから砂鉄と考えられ、チタンが少量であるから、出雲地方産の真砂砂鉄であると考えられている。

白鳳（六四〇～七〇〇）時代の初めの孝徳天皇のころは、谷間で自然の通風を利用して鉄を吹いたとの記録がある。

—次回は一三〇〇年前の横田の豪族は誰であるか㊤—

日本技術史上の金字塔
—雲州そろばんの玉削り器械—

こけしづくりの足踏み（往復廻転式）ろくろが、箱根地方で明治二十年ごろに、まゆから糸をとる足踏み座繰機は、木曽地方で明治初年に考案された。ところが高橋常作が足踏み（クランク式）ろくろを考案したのは幕末であり、手廻しろくろが出現したのは明治初年である。後二者とも雲州が打樹てた日本工業技術史上の金字塔で誇るに足るものであるとともに、今日のそろばんを作り出した原動力である。

少量多版即納，望むところ
多様なご注文も
サット，コピー
タイプ．活版．オフセット
植田軽印刷所

横田史談会から

1. どうぞ会員として登録を。
2. 普通会員は五十名までもう一息。
3. 会費
年額二千円で千円宛分納
毎月発行の「横田文化」誌代・連絡費・事務費・主催する会合費の一部（会場費燃料費）にあてる。特別な会合はその都度実費をお願いする。
4. 役員として世話人は
鳥上地区　佐世川徳雄
横田地区　足立　文人
高橋一郎（代表）
八川地区　永浜　順子
馬木地区　杉原　清一
であるのでよろしく。
尚、横田地区は人数多く、和泉儀吉さんにも御協力頂く。
5. 規約から
「会員相互の親睦を計って主として地方同種団体との連繋を深くし、歴史関係のことがらを探究し、愛郷心の育成を通し、郷土の発展に役立つため」結成したものである。
6. 事業は、視察・見学・懇談会・研究会・総会・資料の発行等。（「横田文化」は本会とは別で、その収支についても別である。）。
7. 会員は
普通会員（会費納入者）
準会員（小・中学生）
特別会員（推薦した人）
事務局は 699-18 仁多郡横田町横田一〇六（ノ二）
電話（〇八五四五）一二一〇一九一
高橋　一郎
（振替口座松江六〇一番）

十一月二十四日 陰陽郷土史愛好者懇談会

比婆、日野両郡からも来会頂くし、出雲市からもあわせて五十名の方が予定時間をこえて話し合い頂いた。病床から研究物で参加頂いた高野町の赤水さん、参加できない方からもその他多数お便りを頂いた。陰陽研究の交流が如何に大切かということを感ずることができて、今後の交流が深まる道が開けたのは最も大きい収穫であった。
単なる好事家の著作のための郷土史、地方史でなく、多数の方方の生活に根ざしたものとして史談会の組織とともに広がってゆくことが期待できた。

第二回講座 易しい古文書を読む会

十二月六日（土）に開催、二十五名の方の参加。
古文書読みは理論よりも、馴れることである。変体仮名・くずし漢字・特殊用語等のくせを早くみなれて読むことである。「座右の手引」をもとに十二月のテキストである「捨子教誠乃謡」を、頭をつきつけて隣同志で助け合って読み合わせた。老眼鏡のお年寄り・御婦人・若い方が、小学生時代にかえったように、ひたいにしわを寄せて、楽しく語って。はじめの一枚には約一時間、あとの一時間半には八枚という熱心さと上達で終了した。
一月十日（第二土曜日）
午後一時半
横田地区公民館で、県立図書館から講師先生を招いて指導を受けながら読んでいく予定。
新しく参加なさる方は、印刷の都合上三日前までにお申込み下さい。

横田文化 バックナンバー

残部少々あります。
8号は80円他は50円。

No.1 藤ケ瀬城趾・三沢一族(14)・わらべ唄・戦后横田文化史「読書」
No.2 馬場八幡宮・三沢一族(15)・弥生時代年表・戦后横田文化史「歌舞伎」・たゝら考
No.3 岩屋寺とその略年表・三沢一族(16)・コミュニティー(1)・戦后横田文化史「レコード鑑賞」
No.4 古代遺跡とその表・三沢一族(17)・コミュニティー(2)・わらべ唄
No.5 高田廃寺・三沢一族(18)・コミュニティー(3)・戦后横田文化史「合唱」
No.6 馬木の古城趾とその地図・三沢一族(19)
No.7 小森神楽・グループ「横田民謡友の会」・三沢一族(20)・コミュニティー(4)・民芸をめざす安部窯
No.8 史蹟めぐりを顧みて・三沢一族(21)とその系図・横田庄の変遷史と三沢氏略年表・コミュニティー(5)
—増頁号—

あけましておめでとうございます

皆様のお蔭様で何とか「横田文化」も発行を続けて、年を越せたことを喜び感謝しております。
皆様からの御希望に応えることの出来る編集のゆとりも生れました。御意見や玉稿（当分原稿紙三枚以内）をお寄せ下さいますよう。

× × ×

今月は十二月に続いて、そして新年の初夢をかねて、奥出雲の誇ることのできる文化財のすべてと、その保存と利用について提案を致しました。
国の施策もこの方向に強力に動いています。失われてゆく前に、私共の熱意で実現できる夢であります。
今後、幾段階にも及ぶであろう推進を、根気強く続けてゆくつもりです。御協力をお願いします。
今年は見学に郡外県外も予定しています。今年の事ですから鬼も笑いますまい。大きい正夢にしたい。（編集責任者　高橋　一郎）

畑田文化
復刊第10号
昭和51. 2. 7
奥出雲文化協会

横田の番所

徳川時代の他国との関所

永野氏

明治維新まで小馬木の番所の役人をしていた永野氏の先代晴敏氏が、明治中頃の青年時代に経験した話はこうである。

友人二、三人と広島県へ所用で出かけ、峠を越せば小馬木という俵原の道端の一軒家の縁先でしばし休んだ。半時もたったころ一人が「おい永野、もう帰らーこい。峠で日が暮れては困ーから」と呼びかけた。ところが中から一人の老人が出てきて、手もみしながら、「あなた方は小馬木のお方でございますか」と聞くので、ほかの一人が「そうだ」と答えると、「それでは永野さんと呼ばれたお方は、もしや小馬木番所のお方ではないでしょうか」とたたみかけてたずねたので、その旨伝えると、老人は「知らぬ事とはいえ、大そうな御無礼な事を致しました。さあさ、あちらへお入り下さいませ。おいうちの者、早く酒の用意をせい。仕方もない、有りあわせで」と進められるがまゝに奥に入ると、次のような話を語り出した。

永野のお役人様には、私共この辺りの者達は大変に助けてもらった。或る年、備後は大そう不作で、百姓達は難渋したが、出雲は豊作だったことがあった。私ども元気な者六、七人が連合って、小馬木へ米買いに行き、発見された時はその時と、覚悟をきめて米袋を背負い、番所を通りかゝると、背中の荷物をとがめられた。先頭の一人が「はい、これは糠(こめぬか)でございます。備後は不作で食う事に困っております。他国へ入って悪い事とは知りながら、御法度の米をさけ、糠を買って帰るところでございます。手前どものうちでは女房や餓鬼どもが、腹をすかして待っております。早く帰って糠団子でもこしらえて食べさせようと、急いでいるところでございます。お情をもって通らせて頂きますように」と土下座をすれば、「そうか糠であるか、一応は調べてみねばならぬ。その袋をこゝにみせい」と。一同が青くなって震えていると、刀を抜いて袋の結びを切り、中をのぞいて、「おお糠だ、糠である。通ってよろしい」と。次の者にも「何か」と問われ、「糠でございます」と答えると、「ホウそちらも糠か。糠なら通ってよろしい。そのあとの者達も、みんな糠であろうな。糠ならみんな通ってよろしい」と皆通してもらった。心の中で手を合わせて番所を離れ、峠を越して備後の国へ入ると、番所の方角に向って、涙を流してお礼を申し上げた。お蔭様で家族ともども助かって喜んだ。

「永野様には御恩がございます。どうかゆっくりお召し上がり下さいませ」と丁寧なもてなしであった。とっぷり暮れた峠越えには、提灯やたい松も用意され、里人の心に感謝して帰ったという。

番所趾

○小馬木番所（俵原方面の）
木谷四六八番地　墓地あり

○大馬木番所（大峠小峠方面の）
貝の平山の東北麓、吉川米蔵宅附近。墓地はその奥庄右ヱ門林の中にあり。

○蔵屋番所（萩山方面の）
蔵屋川渡橋より百米上。左側に約一アールの地あり。墓地には文化以降の石塔。

○福頼番所（萩山方面の）
字小川原に。役人の氏名は安楽寺過去帳にあり。

○山奥番所（大菅・比田方面の）
山県の部田岩次郎宅前。近くの墓地に石塔あり。

大岡裁判

大岡越前守忠相は水戸黄門などとともに、庶民の愛する人物である。だが、いずれも流布されている物語は、殆んど二人には関係ない事である。天一坊事件をはじめ「大岡政談」は、中国裁判物の飜案であり、また忠相前後の六名余りの名奉行の事件が、彼一人に集めて作られたものである。政治家裁判官はこうあってほしいとの庶民の願望が、忠相という、黄門という特異な政治家に結びついた歴史の虚像である。しかしその庶民は、今日以上に素朴に人間的欲望をあらわに抱いていたのであるが、儒教的秩序と倫理観の社会の中で誠実に生きた。こうした社会で「大岡裁き」は可能であった。自己本位で、せいぜい人に迷惑を掛けなければという、今日の日本の社会では、全く配慮の不可能な事である。しかし配慮のされる国々が、西欧その他にあるという。わが国では、人の道の倫理が音をたてて崩れ去っている。

○竹崎番所（アビレ方面の）
日向側恩田邊宅附近に石垣、石橋を残す。「いか棒・袖からみ」各一挺が恩田宅に保存されている。墓地は恩田方の墓地にあわせられ石塔多数。
○八川番所（三井野・萩山方面の）
郡内では
○上阿井（高野山方面の）
○久比須（広瀬藩比田方面の）
にも番所が置かれていた。文化四年よりの役人の氏名は、明らかであるが省略する。
（資料・調査提供者）

ふるさとの歴史㊾

奥出雲の古代を推理する②

森山　庫一・小早川金次郎
荒木　宗重・吉岡正雄ほか

やまたい国前後の中国地方

日本の国の成立の過程をどうみるかという事は、やまたい国をどう位置付けるかにも関係がある。諸説を、特に「鉄」と「出雲」に視点をすえて考えると、九州説に加担することになる。大陸の北から、南朝鮮から、或は中国から、南方から、島伝いに小数人が幾段にもなって、日本列島に上陸したことに異議はない。

そのうち最も古いことは別として、最も早く広い勢力を拡げたのは出雲族であることもまた無難のようである。南朝鮮から直接出雲に移った部族が、北九州の一角から山陰から北陸へ、そして備後、吉備、播磨へも拡がり、更に大和を越えて紀伊の南端まで、そして濃尾西部にも及んでいた。一方朝鮮より北九州へ上陸して小国家を造り、南方の小国家との間に対立も生れた。又或る一団は、北九州を経て吉備に上陸した。播磨にも、更に東の河内平野にも、そして大和に入って出雲族の勢力に割込みもしたであろう。前三世紀弥生文化が、急速に北九州から東へ伝播したのもこの部族の移動の波と、各地のまとまりがそれを促したのである。そして長い弥生時代、土器を焼く時、浜砂鉄などから生まれる鉄片から、鉄器をつくる事も知ったであろう。これが小国家を各地に造る農耕集団の発生の原因でもあろう。やがて三世紀後半、鉄挺をもち集団としての製鉄族が北九州を経て渡来する頃になると、古墳時代が到来し、吉備に播磨に河内へ、そして大和へ、古墳文化が各々特色をもって生れた。

そして河内大和と、吉備とが最も進んで先住出雲族を押えて壮大な古墳文化を作りあげた。しかし出雲族の信仰の残存は強

左の写真は「馬場歌舞伎」大正五年撮影（第七号参照）故福間武之助氏（51・1死去）生前提供

わらべうた③

手まり歌

うちの後ろのチイやぶに
すずめが三羽とまって
一羽の雀がいうことにゃ
ゆんべ呼んだる花嫁御
けさの座敷へすわらせて
畳三枚　ござ三枚
合わせて　六枚びょうぶを
たてつめて
金らんどんすを縫いかけて
しっぽりかっぽり
泣かしゃんす
何が不足で泣かしゃんす
何だり不足はござらぬが
わしの弟の千松が
西のコウラへかね堀り行きて
一年待ってももどらんが
二年待ってもまだもどらん
三年ぶりのついたちに
人をごせとの状が来た
人はやらぬがわしが行く
あとの田地はどうしやるか
あとの田地は金にして
親に三貫　子に四貫
思うおばこの
スヤスットントン
スヤスットントン
四十四貫の銭金は
高い米買うて船に積む
安い米買うて船に積む
さあさ押せ押せ都まで
さあさこげこげ都まで
都もどりにゃ何もろた
一にこうがい二にゃ鏡
三にさらさの帯もろた
くけてやっさいおばごさま
そこでおばごが申さるにゃ
くきょうくきょうと思えども
帯にゃ短かしたすきにゃ長し
山田薬師の鏡のつり緒に
ちょうどよかろ
ちょうどよかろ

（伝承者　森山庫一（72）昭49採録
採録・解説　酒井　董美

「千松くどき」の手まり歌である。貧しい人達の多かった昔の人々の生活の中には、千松のたどった運命に似た境遇の者が多かった。この歌に対する無意識の共感が、非常に身近く感じ、雀が語り出す発想。女の子のあこがれる花嫁。それに物語が哀愁をこめた中にも、どことなくロマンチックな気分を漂わしていること、そこが子供心に焼きついたのであろう。

いものがあった様である。新しい文化はこれらを中心として四周へ伝播し、出雲に奥出雲を越えて伝った。しかし出雲の信仰は備後にも又、南紀伊にも残存した様である。出雲族と後から渡来した部族との争いが最も如実に残っているのは「播磨風土記」であろう。「記紀」に断片があるが、大和中心にたくみに吸収された様である。山本博の説を主軸に要約してみると、

播磨における争い

播磨風土記には、他のものにはない興味ある争いが書かれている。この事は当時並びにそれ以前の弥生時代、他の地方でも同様であった事の残存である。

葦原志挙乎命(あしはらしこをのみこと、以下シコオと)天日槍命(あめのひぼこのみこと、以下ヒボコと)伊和大神(いわのおおかみ、以下イワと)の三人(部族)の記述である。シコオ＝大国主命＝大穴牟遅命で出雲系の神。ヒボコは垂仁朝に来朝した南朝鮮新羅系の王子であって、のち但馬を本拠として「出石文化」を築いた。イワはシコオと同じ出雲系であったから、出雲系と但馬系が播磨で、稲作地と砂鉄産地の占有争いをし、特に西部地方ではヒボコ勢力が押えられた。この事はこの地の神社の祭神の分布をみても同じであり、この地が「千草鉄」「穴栗鉄」の本場で、良質の鉄の産地である。更に地名をみても、出雲系が実権を握り北からヒボコ勢力を押さえた事が知れる。その上製鉄に関する神とみられる。「イダテ」「兵主」の神社の分布がこれを裏付ける。出雲の勢力の中へ南と北とから来たヒボコ系が但馬の出石に拠点をかまえたと言えるのである。

「イダテ」考

九州肥後の船山古墳出土の鉄製の直刀の銘をみると、五世紀の倭五王の一人、瑞歯別(みづはわけ)　大王＝大和王朝の反正天皇とする説と、九州王朝の王とする説あり＝が贈ったもので、作刀者は「伊太□」であるが、神社名ほかの考察から□を祁と判読し、製鉄関係の部族と推定し、イダテ＝伊太氐につながる者と考察し、その神社を「延喜式」によってみると、出雲には最も多く、その上「坐韓国伊太氐神社」とあって、韓国から

戦後横田文化小史⑤　映画(上)

傷手をいやしてくれた　横田大劇

敗戦の翌年、現在の小割宅森田商店のある場所で、天幕をめぐらし、廃品一歩前のトーキー映写機で映画が上映され、やがて東新町に映画館ができるまではもっぱら母もの、またたびもので渇をいやした。常設館となると、各邦画会社の映画は殆んど上映され、戦後をのりきる意欲も与えてくれた。そして間もなく洋画の上映が加わった。

心の旅路(米)

戦争中、反ナチ、反戦映画として作られた「カサブランカ」(米)、反戦思想が底に流れている「心の旅路」(米)を見て、アメリカの自由な顔をうらやましく思うと共に人間の生きる幸わせを味わった。フランス映画の絶品といわれた「美女と野獣」「旅路の果て」の前者の監督ジャンコクトオは夢の様に美しい画面で魂をゆさぶった。美人女優ガースンの「キュリー夫人」も心をひかれた。

ソ連映画(カラー)

「石の花」は目のさめるようなドイツのアグファカラー技術によって夢幻的なストーリーとともに、戦後に明るい光を投げかけた。「シベリヤ物語」はシベリヤの雄大な大自然の美しさと、数々のロシヤ民謡を聞かせるメロドラマで人々を魅了した。シャリアピンの音盤しか知らないソ連の歌声は全くの驚きであった。

イタリヤ映画(白黒)

「戦火のかなたに」「無防備都市」「靴みがき」「自転車泥棒」は、日本と共通する敗戦国の共感も手伝って、しみ入る悲しみを味わせた。堂々と戦勝国へ対する憎しみも描き出す態度には邦画と比べてリアリズムを感じた。

情婦マノン(仏)

邦画「羅生門」がグランプリを受賞して、日本もやるぞと思った時、この映画によって横なぐりにあった感がした。戦勝国フランスの戦後に刻み込まれた青春のいたみにふれたからである。マノンの屍体をかついで砂漠をさまようロベールの姿。乾ききった砂をかきわけて、可愛い顔だけを残してマノンを埋めたその上に、力尽きて動かなくなるロベール。このラストシーンの為に、三十を半ば過ぎた私も、三度入場料を払った。

赤い靴(英・カラー)

美しい色彩と十数分に及ぶバレー場面は、全く私を魅了した。アンデルセンの童話とバレリーナの生き方に結びつけた物語は盛上がる力もあった。一昨年、日本で初めて最高賞を得た森下洋子のバレーを見た時、年を忘れてこれを思い出した。

旅と映画の思い出(伊)

ローマのテルミニ駅の構内入口で、どれがあのラストシーンのホームかと「終着駅」を思い出し、ポンペイへの道すがら、無垢・純粋なゼルソミーナが歩いたのは、どの「道」かとふり返る。ヘップバーンの「ローマの休日」のスペイン階段は夏の日に輝く。

の渡来神であり、九州にはないから、直接出雲へ渡来したと考えられる。その上出雲には通訳の神も祀られる神社がある。伊太氐神社の祭神には「五十猛神」もあるし、「五十猛」は「イダテ」とも読むので、イダテは作刀神であったといえる。

	兵主	伊太氐	奥出雲	張磨	河内	江州	摂津	尾張	三河	近江	山城	伊勢	大和	和泉	紀伊	播磨	但馬	丹波	因幡	出雲	壱岐	計
	1	1	2	1	1	2	2	2	2	6	1	2	1	5 (6)	14 (15)	18

（　）は筆者調べ

「兵主」考

この神話の分布は、ヒボコ勢力の中心地但馬に集中し、半数の九社が日本海の丹、但、因の三国に鎮座するのに、神社数では大和についで圧倒的に多い出雲には一社もない。

但馬にはイダテがない。兵主神は南朝鮮から直接但馬に渡来した製鉄神である。このルートは銅鐸の分布が山陰山陽の東半から幾内地方を中心にあるのと一致する。紀元前後以来から相当の長い間、北九州と関係なく、直接半島からこの地への部族の渡来コースを示している。

ヒボコー兵主ー但馬系（南朝鮮ー出雲）

シコオーイダテー出雲系（南ー但馬）

があって、この争いの物語が播磨風土記に展開されている。

姫路城の東南に鎮座する、射楯兵主神社はこの二神が共に祀られていて興味深い。

この神社のある地は、「金屋子神祭文」にいう播磨国志相郡の岩鍋で、製鉄神である金屋子神が降臨した所で、砂鉄の産地である。のち出雲の比田の黒田の地へ、白鷺にのって遷ったという。この地はやはり砂鉄産地である。比田に移った由来を推理する事はあとに譲るが、この事は新しい製鉄技術が、この地に伝播した事と関係がある。この地で砂鉄が盛んにつくられたのは中世末から江戸初期で、神主安部氏は、製鉄の秘術をもつたら師で、中国地方の各地を巡って伝授し、信仰を得ていたと考えられる。（柱日記をみると当時失敗が多かった事を知る）

秘伝には神秘性が伴い、信仰が結びつく。

兵主も中国の八神の中にあり、イダテとともに日本の神ではない。垂仁朝よりのち応神朝に卓素も鉄を伝えている。弥生から古墳の時代にかけて、生産向上と勢力拡大には鉄師は極めて重宝なものであった。いつ頃からとは判然としないが、半島の政治事情にも大きく左右され、諸地方に長い年月の間、いくつもの集団で自然渡来、貢納による或いは招へいによる渡来があったのである。それによって、日本国内の小国家間の勢力の消長がくりひろげられた。

ー次回は吉備を考えるー

推薦

○絵本　大阪啓林館発行

「こぞうさんのおばけたいじ」

（ジョイフルえほん17号）

「かあらスズメのかたきうち」

（クリエート50年5月号）

鳥上の安部イトさんの語る昔話が本当に美しい童画とともに、方言も生かされて載っています。

すばらしい絵本です。

○図書　NHK日本放送出版協会発行

「出雲の昔話」

馬木や亀嵩の昔話も入っています。

予告

① 横田文化向上への提案

第九号（一月号）には奥出雲歴史民俗資料館の構想をのせたところ、豊かなその内容に、松江方面の方はもとより、町内の方方も、初めて知ったと言われるのは、提案の第一の目的を達したものと喜んでいる。力強い後援を賜る方もあって、うれしい限りである。

続いて第二、第三の提案も、討論や対談を通してまとめて、掲載する予定である。

私どもの活動に刺激されて、今県内外二ケ所から、会を組織したと便りを頂いている。これもうれしいことの一つ。

2）「横田文化」（11号）

○八川の横穴古墳

現状と考察。特に備後比婆郡との関連

（三月五日発売）

③ 横田史談会

○古文書を読む集い

三月六日（土）午后一時半

四月三日（土）

横田中央公民館

○史蹟めぐりの集い

四月　八川の横穴古墳群

五月　船通山を中心に出土地、たゝら遺跡ほか

計画

長期連続講座

「奥出雲たたら製鉄」

失われぬうちに、生存中に、すべての保存をと、並河孝義氏を中心に、技術者の参加も得て、講座を開き、記録したいと立案中である。三人の顧問学者の意見によって、ゲストにわが国第一線の研究者、学者（考古・歴史・民俗・経済・製鉄・鍛造等の講学）も招いて、あらゆる角度からまとめる考えである。次号で。

あとがき

山陰中央新報が、今年一年間地域にねずいた個性ある文化サークル、グループをいろんな角度から紹介する計画で、文芸欄その他にのせていることは気持ち良い事である。本誌もバックナンバーを二度も紹介されて、同好の方が増え、資料交換が広くなったことは大変にうれしい限りである。横田史談会も、組織が出来たので、活動の発展を祈って乾杯を重ねた。

出雲文化

復刊第11号
昭和51.3.6
3月号
奥出雲文化協会

横田の横穴古墳

横穴古墳とは天然の真砂山の山腹に横入りの穴を堀って石室古墳の代りにしたものとも云われるもので、古墳時代後期の六世紀後半に始まり、七世紀にかけていわゆる民衆墓として数多く作られ、七世紀末から奈良時代に入るころまで造られたものである。

横穴は多くの場合数穴が群を成しており、墓道に続いて短かい羨道を経て玄室に至るもので玄室は一般に方形又は長方形で時に楕円形のものもあり、平入りと妻入りがある。断面の形は天井が屋根と側壁をはっきり区別した四柱式家形のものから便化して天井と側面が区別の出来ないもの、或はアーチ形のものまで種々ある。入口の閉塞は羨道の入口にふちのえぐり込みを作り、そこに切石をはめ込んだものもあるが、単に雑石を積み上げただけのものも多い。床面には時に中央に排水溝を有するものや造り付けの屍床を有するものもあるが、単に平坦な床面のものも多い。

出土品から見ると、主なものは須恵器の蓋杯、瓦、提瓶、平瓶、高杯等。次いで鉄製直刀類であり、装身具では小玉類、勾玉、金銀環等である。

希には鏡や宝冠等も出土することがあり、身分の高い人であることから横穴を単に民衆墓とすることはふさわしくない。また、構造上雨水の滲透が少いため人骨も比較的よく残り二体以上発見されることが殆んどであり、一族の墳墓として追葬されたことがよく判る。

分布を見ると、中国地方では出雲部に特に集中しており広島県では比婆郡に集中していて出雲の影響と云われている。

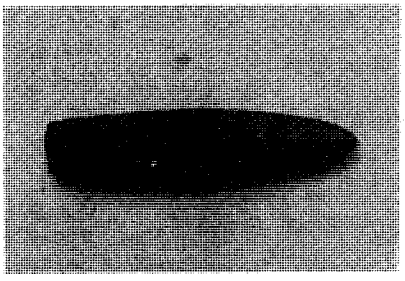
横穴古墳の形態

出雲地方でも形態上二つの分

（二頁へ）

石剣の発見

今年一月小馬木にて磨製石剣が発見された。出雲部では、大社に次いでこれが二つめの発見であると云うことである。未だ充分な検討が加えられていないが概要を記しておく。



発見された石剣

小馬木小森竹ケ鼻、内田智富氏宅の井戸堀削中、内田甚市氏が深さ約三米地点から発見したもので、やゝ黒っぽい粘板岩質のよく磨かれた両刃の石剣である。長さ十五・三センチで柄は作られていない実用具ではなく祭祈に用いたものと思われるものである。

石剣は金属製のそれを模した代用品で弥生前期に九州で始まり、瀬戸内海及び日本海沿いに本州へ伝播したとされており、石見部では数個の内一つの例外を除いて沿岸部から出土発見されている。

今度の小馬木での発見は弥生文化のルートを考える上で一つの重要な資料となるものであろう。

出土地点の土層は、地表直下から礫のすこぶる多い赤褐色粘質土で層序は認められないことから、裏山の崩土中と推定され遺構は確認し難いものと思われるのが残念である。

（杉原清一記）

たいやきくん

この歌がジャンジャン鳴っている街角をすぎて、一畑の地下へ入ると、又この歌の騒音である。

長い行列が続いて、たいやきくんを待つ人々。ほゝえましい歌の世相批判への共感、など思ってもみるが、まあなんと日本国中こうもとは、何としたことか。◇戦後のフラフープ、だっこちゃん等々。「個性のない、いわしの群が潮の流れにのってゆれ動いている」とは戦前後の日本人を評した笠信太郎の名言であった。◇劇団「四季」の「エクウス（馬）」をみた。診断する精神科医師に、少年がTVのコマーシャルばかりを歌う冒頭のシーンから、最後まで考えさせられた。医師は、少年が正常で自分が異常ではないかと考えこむ。◇流行の中心というパリの服装街をかいまみた感想は個性にあった服装をいかに作り出すかである。先端の動きに大衆は間隔を置いている。

日本の流行の感覚とは違っていることを知った。日本は一等国であるからだろうか。

布区域に分けられ、長方床平入家形は安来松江あたりを中心に主として飯梨川沿いに分布し、長方床妻入家形は出雲市を中心に斐伊川に沿って分布するが、上流の山間部に入るほどその家形が算略便化されてくる。

出土する須恵器によって年代を判断しているが、須恵器のⅢ期に始まりⅣ期に盛行し時に糸切底を有する末期のものまでであり、山間部ではその殆んどがⅣ期から末期のものである。

これはまた、横穴式石室古墳の盛行した時代と併行しておりこれとの相互関連も指摘されている。

横田地方の横穴古墳

当横田地区については、古来からの鉄穴流しや〃流し〃による開田が行われており、これによって崩壊消滅したものが数多くあったこと、また墳丘を有しないため未発見のものも同様に数多くあるものと考えられる。

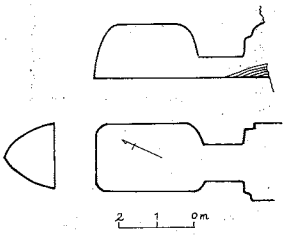
現在知られているのは別表の通りであるが、群を成しているものとして下横田川西の大堀、横田六日市藤ケ瀬及び大馬木反保観音原の三ケ所があり、横田角岩屋寺山横穴はその出土品の豊富なことで知られている。

この外にも点々と散在しているが、何故か鳥上地区には発見されていない。

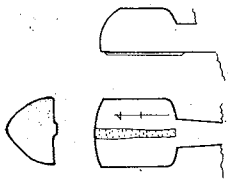
これら町内のすべてのものが長方床妻入の便化した家形の様式である。

（杉原清一）

大堀横穴郡第七号穴



岩屋寺山横穴



横田町内の横穴

名称	所在地	出土品等
岩屋寺山横穴	横田、角	金環、銀環、刀2口、須恵蓋杯、高杯、玉類、人骨3体分（排水溝あり）
（大曲横穴）	〃　大曲	（消滅）
藤ケ瀬横穴群	〃　六日市	2支群あり
（長畑横穴）	〃　蔵屋	須恵器片　人骨？（消滅）
天狗松横穴	下横田川西	須恵高杯、蓋杯
大堀横穴群	〃　〃	須恵高杯、蓋杯、平瓶、8穴開口
内田万造宅下横穴	〃　〃	
老祖山横穴	〃　〃	
観音原横穴群	大馬木反保	須恵器片、人骨片、3穴有り（外にもあるか？）
（大森横穴）	大馬木大森	（未確認）

ふるさとの歴史 ⑥1
奥出雲の古代を推理する③
—出雲族の拡がり—

前号で最も早く広く日本列島にひろがったのは出雲族であって、それに打込まれた楔の一つが、ヒボコ系日本海渡来族であるとのべた。ついで北九州瀬戸内海系の第二の楔（吉備族）第三の楔（大和族）についてふれることになっていたが、もう少しくわしく出雲族の拡がりにふれる必要があるので、水野祐氏の説を中心に述べる。奥出雲は出雲族の拡がりの中にあったが、常に古代から吉備との交渉も深かったことが再説の理由である。

水野説は、出雲風土記論（学界登場の重要論文）と、古代王朝交代論（現在では多少の違いはあるが、学界に定着した学説となっている）に裏付けられたものである。

出雲族の東国への移動をA、B、C、Dの各方面から考察する。

Ⓐ出雲系の神々

「記紀」の神話には次の四つの出雲系の神の話がある。

①須佐之男命
—中津国、根の国の統治者

②大国主命
—葦原の中っ国の経営者

③経津主命
—葦原の中っ国の平定者
大和の東国平定の遠征軍の先鋒として、香取神に。

④健御名方命—信濃国へこの物語は史実ではないが、出雲族の信仰として所有されていたもので、東国との関係の深いことを物語る。

Ⓑ東国の神社の出雲系祭神

延喜式内社の中でその数と、その全官社中にしめる割合は

上野	4	33.3	
下野	7	63.6	
常陸	8	28.6	
武蔵	20	45.5	
相模	2	15.4	
伊豆	0		
下総	2	18.2	
上総	0		
安房	1	16.1	

この信仰の分布から出雲族の進出ルートをみると

①最も古い大移動（第一次）
—古墳の出現前の三世紀前

信濃→東仙道→上野
↓下野（北関東）
甲州路→荒川 多摩川 流域
↓武蔵→相模

②第二次大移動　五世紀以降の大和国家の東征によって出雲の勢力を合流した遠征軍の進路で、

大和→（海上）→相模ー下総→常陸→上野

を結ぶもので、このルートの上に経津主命の信仰がひろがり、これらを祭神とする神社が鎮座した。

③第三次大移動　六世紀に入って大和国家の東国経略が活発化し、武蔵国造の内訌に乗じて、大和国家が南関東を完全にその下におさめて直轄領化してゆく段階に大己貴命の経国伝説がひろまり、少彦名命を祭神とする神社が南関東に分布したその中心でのちの大宝律令制下の武蔵一国の政治的中心となった古代の多磨郡にこの神社が集中したのである。（これが古墳分布、国造の自出と符号する。あとで詳述）

石田茂作博士は、新羅系の出雲の仏教文化が裏日本ー信濃ー東国と流伝し、大和の百済系仏教文化と対立することを、仏像や古瓦で論証している。これは実在する物の検討であって、七八世紀の状況である。そこで、②③のルートと、このこととを結ぶものが論証として必要になる。それが古墳から説くことができる。

Ⓒ前方後方墳よりみた伝播

古墳は発生的には、大和が根元であるという説は過去のものとなって、今日では、○北九州円墳系（六世紀は装飾古墳に）○北九州ー大和で巨大化（前方後円墳）　○北九州ー吉備で巨大化（前方後円墳）　○出雲の方墳にはじまって前方後方墳の形式がそれぞれの発生と中心と考えられている。出雲がつくり出した前方後方墳をとりあげて出雲と東国の関係を明らかにすると、

出雲	17	
中	1	
登	2	
濃	1	
河	1	
越	2	
能	6	
美	3	
駿	1	
上野	1	
下野	1	
常陸	4	
下総	3	1/3
上総	2	
磐城	1	
陸前	4	
大和	3	
伊勢	4	
摂津	2	
播磨	1	
美作	2	
備前	3	
備後	2	
	計62基	

出雲は17基で1/3、北関東11基、古墳の発生地といわれる大和4近畿合計で13基であって、明らかに出雲に発生し、東国と深い関係があることをしめす。出雲には100基を超える数があるが、九州も大和も、円墳系で前方後円墳の圧倒的分布地帯である。方墳は大陸墓制の基本的形式であり、一般的なものである。新羅との（朝鮮東南部）密接な交渉のあった出雲に、大陸朝鮮系の基本的形式が伝わって普及したことは不可思議ではない。

付表1　出雲族の古代文化の中心と伝播の仕方

世紀	古墳と形式	出雲族の東国への大移動	大移動のルート
2		第一次	出雲祭神Ⓑの1
3	西出雲 出雲方墳（主）新方		
	九州 大和 円墳 前方		
4	前期 円墳	第二次文化の伝播	出雲神話Ⓐの3・4 ／ 古墳分類Ⓒの1・2・3 ＞符号する
5	中期 前方後円墳		出雲祭神Ⓑの2 ／ 古墳分類Ⓒの4 ＞符号する
	後期 装飾古墳 前方後円墳	第三次	出雲祭神Ⓑの3 ／ 国造分布①
6	円墳・前方後円墳 前方後方墳		
7		第四次	石田茂作 ／ 出雲新羅系 東国ルート ／ 大和百済系 近畿ルート
8			

しかも前方後方墳は大陸にはないから、出雲族の独自な創造であり、その発生は東出雲（意宇川下流）である。ー西出雲は大和流の前方後円墳が中期に漸く入っているー出雲族の移動によって第二の前方後方墳の中心が東国に生じたことは明らかとなる。（その後、前方後方墳が発見されて111基になったが、その割合は変らない）この分布のルートをわけると

①日本海ルート（公玉ルート）
出雲→能登→越中

②山陽ルート（砂鉄ルート）
出雲→備後→備前→播磨→
美作
↓摂津

③中央ルート（出雲ルート）
出雲→山城→大和→美濃

④遠征ルート（王朝ルート）
大和→伊勢ー駿河→下総
↓上総→常陸　下野
上野→磐城
↓陸前

となる。①②③は「風土記」その他にみられる。Ⓐ出雲系の神神の伝承に示される出雲族のルートと符号し、④は伝説史上の経津主命の征服ルートⒶ③に近似している。

前方後方墳の存在により、出雲東国への文化的流れが、五世紀頃から行われていることがわかる。Ⓑ神社分布にしめした三つのルートの第②ルートが、Ⓒ前方後方墳分布の第④ルートに対比されるもので、それは古墳文化の分布がちょうど五世紀という年代に相当するためであり従って、Ⓑ神社分布の第①の東仙道ルートはそれよりも早い時代の、より古い出雲族の移動を示唆している。Ⓑの第③ルートはⒸ古墳分布によるいずれのルートよりも後の六世紀のルートである。それが石田茂作氏のいう七、八世紀の飛鳥奈良時代のルートに連らなるものである。出雲族が大移動の度毎に発達した文化をもって、祖先のルートを、数次にわたって移った痕跡が明らかとなってくる。

Ⓓ東国の国造の自出から

最後に国造の出身から考えると、東国における出雲族の移動が比較的古かったことは、東国における国造の中に出雲系が多いことで証明できる。

非出雲系	4	
	0	
	2	
	3	
	1	
	0	
	1	
	1	
出雲系	3	隆
	0	野
	1	総
	3	総
	1	房
	1	蔵
	2	模
	1	
	（すべて直姓）	
	（殆んど非直姓）	

北
常陸
上野
下野
上総
下総
安房
武蔵
相模

土着豪族の中で出雲族の力が非常に強かった。国造に直姓が多いのが普通である。五世紀に直姓国造の多いのは

○大和国家の主権の強く及んだ地方（近畿、大和地方）

○古くから勢力の及んだ（中国、四国地方）

○反抗しなかった。反抗したが内部分裂して服した（南関東）であり、非直姓国造は

○大和政権に抗争した（九州、出雲、吉備）

○遅くまで遠く離れて独立的性格をもった（東日本、越、尾張、北関東）である。南関東は早くから大和政権に服属したから直姓国造が多く、五世紀中葉に分布した。北関東は六世紀から七世紀初頭の大化前代に漸く独立性を失って大和政権に服属したので、非直姓国造が集中した。

このことは第一次（三世紀）の移動によって東国へ進出した出雲族が土着して、豪族化しているところへ、大和が東国に進出すると、その政権の下に早く服属した。こうした東国における出雲族の基盤があって、大和遠征軍が出雲系の神である経津主命をおしたてゝ、東国を平定したという神話がつくられたのであり、五世紀の大和国家の東国遠征に際して、出雲族が先鋒となって東国に移動して来たのである。従って早くからこの南関東（直姓国造分布地帯）に大和系古墳文化（円墳系）が浸透していた。そこへこの第二次大移動の折、新来の出雲族が半独立的相貌を帯びていた南関東から、遠征地の北関東に打込んだ楔にそって分布したのが、前方後方墳であり、そこに非直姓国造の分布する北関東にこれらが集中したのである。

こゝで Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓの各ルートと符号することがわかる。

ー付表1参照ー。

出雲から大和への移動ないし文化の伝播はそれほど強力でなく、また逆に大和の勢力へ出雲が進出したということも比較的稀薄であり、吉備の力を利用した大和政権への出雲の服属ということはあっても、そしてそれ以後、大和人の西出雲への移住ということは多少考えられるとしても、（それは隣接していて大和に服属した吉備を通していることは今後明らかにしてゆくが）　それは出雲の在地勢力に対抗もしくはそれを制圧するに足るような、大きい力をもつものではなかった。いわんや大和に原住した出雲人が出雲へ移住して国をつくったということを成立しない。弥生時代に出雲が拡がっていたところへ大和が独得に形成されたように、出雲は東国へ独創的な古墳文化を伝えたと考えたいのである。

出雲文化の経路は、山陰北陸をつらねる日本海沿岸がその文化伝播経路で、それが丹波山城大和へも入ったが、三世紀後半に大和に形成されたものが山城へとひろがり、吉備は瀬戸内海の開明性（気候風土生産の安定性、交通の便）によってそこに新しいものを、北九州を経て育てて行った。

越、尾張、東国、紀伊はそのへき地の故に、出雲的なものを残したのである。

近畿文化圏とは別に、出雲日本海東国の文化圏が構成されていった。異質なものであった。日本海文化ー新羅、瀬戸内海文化ー百済と影響しあったのである。

こうした立場に立って、次回で、大和王朝と吉備王朝（九州王朝は別の機会で）を考察し、奥出雲を浮かびあがらせて推理することにする。

法隆寺領の分布に、さらに石清水八幡宮領の分布に、そして鉄の生産の発展分布に、近世の東国における出雲信仰の分布にも関連づけて推考されることが出来るのは興味のあることである。

あとがき

日本刀を愛護する方が増加するとともに、日本刀の需要がふえ、奥出雲の砂鉄でつくられる「玉鋼」への関心が、急速に高まってきている。その生産に対する要望も強い。

一方この地方においても、古来からの諸施設を復元して保存公開しようという篤志家もおいでになるようである。

日本はもとより世界唯一つの国宝的当地の「たゝら製鉄」の遺構、さらに積極的な生産に関心をもつことは、横田の奥出雲住民の責務であると思う。

今年は講座を設け、理論と遺跡を学び、大いに啓蒙に努力したい。

訂正

十号一頁四段目

○小馬木番所（俵原方面の）は「木谷四六八番地墓地あり」を消して次に訂正

「字折渡四七五番地役宅は上方の字中山尻四八三番地にあった。尚近くに墓地あり文献「永野氏代々年数書」」

奥出雲経済の大動脈

横田町の生産と経済の主力を担い

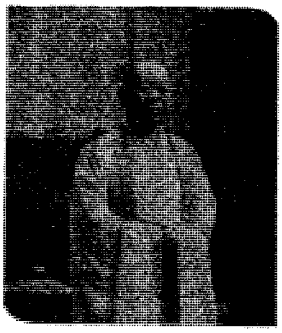
発展する

横田町商工会

横田文化

復刊第12号
昭和51. 4. 3
4月号
奥出雲文化協会

横田で生まれた人① 勝平大喜



東南アジア仏蹟行脚

横田町大市、浅山常太郎の三男として生れ、佐一郎といった。昭和十九年（一九四四）四月一日富山県国泰寺管長在籍中なくなった。（号は悦巌・江南軒）

明治三十四年松江市奥谷町万寿寺に入門し、翌年修道館に入学、廃校により松江中学に転じた。在学中は特待生として頭角をあらわし、教科書を買い求めたこともないほど、記憶力非凡頭脳明晰であった。明治四十年中学卒業後、金沢第四高等学校に入学、師宗潤（大航）の養子となり宗潤の死により、四十四年二十三才で住職となったが、大正元年同志社大学神学部英文科に入学し、全四年卒業した。住職の傍ら松江中学の英語講師をつとめた。仏籍にありながらキリスト教大学の神学科に入ったのは、次のような青年時代の悩み、そして抱負があった。一般には全く知られざる挿話である。

日本の精神界はいずこへ

大喜は中学三年の秋、一通の手紙を、近所で縁者である岡崎喜一郎に届けて悩みをうちあけた。喜一郎は中国地方における農林指導者養成を目的とする倉吉農学校に在学中、友人から新島譲を知り、同志大学に学び、新時代を知るとともに、それに処する経綸を学ぶべく、大隈重信の早稲田大学に進み、業をおえて郷里において着々と自らの抱負を実現しつつあった。

手紙は上質和紙の赤卦のものに、びっしりと毛筆で書かれた約十枚ほどのものであった。その要旨をまとめると「今日の仏教界は葬式仏教に堕している。せいぜい祖先崇拝という精神指導の役割を荷負うだけで、個人の修養もほんの一部の人のためで、発展する今日の社会の精神を養う役割は全く喪失している。しかるに西欧においては、キリスト教が個人においても、家庭においても、社会においても、社会の改良進歩の上にも、はたまた文化の向上のためにも、原動力となっている。古代の日本仏教は、物心両面ともに日本の発展に寄与しているが、今日は昔日の面影どころか、全く指導力を失っている。私は学問を深めたくて寺院に入ったのであるが、このまゝ僧侶になることは出来ない。僧籍を脱して、学問を求め西欧精神を追求すべきか」

（二頁へ）

これが遺体であるとともに、形身であると言いのこして、大喜は大正十三年五月（三十八才）単身中国へ渡り仏印・シャムの仏蹟をもたずねた。健康であれば、印度へも足をのばす予定であった。当時としては全くの快挙であるとともに冒険でもあった。身につけた仏教の学識と、卓越した語学力は、諸国の高僧名知識と交って遜色なく、幾多の道友を得て帰った。

翌年帰ると間もなくその体験をもとに、月刊誌「東亜の合掌」が生れた。青年時代以来、胸に温められていた理想実現の第一歩であった。

得度修学

大喜は明治二十年（一八八七）

願下在レ天成ニ比翼鳥一
在レ地成ニ上連理枝一
為翼逆ク友橋君萬寿悦巌

（中国唐代の詩人白楽天（七九二ー八四六）の作品による言葉で、常に一体となって飛ぶ鳥の如く、二樹が枝さしかわして連なる如くあるを願うという、友情、夫婦愛を意味する）を一幅にしたゝめ、自分には妻子も財産もない。万一のことがあれば

青い山脈

若く明るい歌声に
雪崩は消える花も咲く
青い山脈　雪割桜
空のはて
今日も吾等の夢を呼ぶ
父も夢みた母もみた・・・・
・・・旅をゆく若い吾等に
鐘が鳴る（西条八十詞）

四月は桜の花、入学と青春の月である。

石坂洋次郎により、日本文学にはじめて、明るい青春讃歌の小説が生まれた。昭和24年、日本映画にも初めて、本当の意味の健康な、若鮎のように躍る青春映画が生れた。

今井正監督のタッチも軽ろやかであり、中井朝一のカメラも明るく伸びのびしていた。

主演は当時のフレッシュコンビ、池部良と杉葉子。横田大劇の客席は昼夜連日、超満員でふくれた。楽しい場面もせいぜいため息で、今日のような　奇声喧噪（けんそう）はなく、拍手程度であった。

という堂々たるものであった。

同年輩位であった筆者はこれを読んでその卓越した所論に驚いた。幼児から聖書には親しんでいたし、たまたま聞いた安岡正篤（陽明学者）の東西文明比較論が頭の中に残っていたが、郷土先覚の識見には敬服した。

これに対する喜一郎の答えは『自分の考えで進むことだ』であったと、手紙を前にして筆者に語られた。『大喜の言うことは真実だからね』と駄目も押された。大喜の苦悩の結果が、当時のコース、旧制高校を選ばせたのである。しかしこの選択さえも師宗潤は喜ばなかった。参禅していた松江中学の名校長といわれる西村房太郎も呼びつけて、頭ごなしにどなられたという。やがて師の死去を期として大喜は自分の道を歩みはじめた。

しかし仏教革新の意欲という方向は定まって、同志社大学神学部に入ったのである。東南アジアを行脚したのも、「東亜の合掌」を発刊したのも、進んで仏教徒として社会活動に従ったのも、それは若い時代に既に育まれていたものである。

『東亜の合掌』

その後行脚に出るまで、京都の南禅寺そのほかで高僧の教えを請い禅道を深めたので、万寿寺の法席はいつも、せまいほどであったという。

岩波新書を少し従長にした型で毎号八十頁余りの「東亜の合掌」は、経文を中心とする法話と、東南アジア紀行に続いて各地の紀行文、通俗向きの説話が、極めて読み易くしるされ、当時の筆者でも、名文とともに何とか内容が理解できるものであった。口絵は毎号写真版による、大喜の書や絵が掲げられている。その中の幾つかは筆者の手元にある。毎月、十数冊の配布を手伝っていたから、この本との因縁は大喜の死去による終刊まで続いた。個人誌の面白味も脳裡に焼きつけられた。

しかし「島根百傑」にのべられているような、世界平和、民族協調の理念を与えたという内容であったという批評は、あたっていない。静かなもので、今ひもといてみても、最後まで肩のこらない文章である。ラジオ全国放送を収録した「十手図講話」の初版本の一冊とともに、「東亜の合掌」の幾冊かは書架の一隅に今もある。

富山国泰寺派管長

昭和三年博多の承天寺に移ったころは、失意の時代で、葉書の端の短歌にもうかがうことが出来た。京都を経て、再度請われて昭和九年国泰寺管長に就任した。今日訪れて当時からの従者に聞くと、着任以来、この殆んどの伽藍は大喜の献身的努力によって復興し、この本山の法燈も赫々と輝くようになったという。

山岡鉄舟が帰依した寺であってその筆になるものは極めて多いが、堂塔伽藍境内の結構は、豪壮なもので、本山の風格は一流である。中興の僧として一きわ大きい石塔が境内の一隅にしつらえてあるのもうべなるかなである。

昭和十七年青葉のころ、郷里横田に帰り、久方振りに旧友とともに、天狗松山下の河畔を散策し、帰って筆にした。

「山呼懐古情」（山は呼ぶ懐古情）の色紙は、昭和十九年四月一日の急逝によって、故郷への別れのことばとなった。

残されたもの

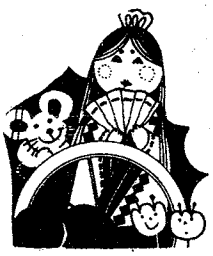
弁と筆と語学ともに秀でた特異な修道僧に対して、心ある人は、彼こそ仏教をもって敗戦後の日本人の戦傷を医やすことのできる人であり、また新しい東亜を再び結ぶ人であると惜しんだという。碩学鈴木大拙は、国泰寺ではじめて、大喜の下で参禅した人であり、大拙は大喜の禅と語学に絶大な期待をよせ、ともに禅の布教を計画していたが、急死によって絶えてしまった。

しかし大喜によって導かれた大拙の『禅の研究』は英文として、アジアを越え、世界的名著としてひろまった。

先年西欧旅行の折、スイス第一の観光都市ルッツェルンの駅前の書店の、日本コーナーで、全く偶然に「ZEN」と書かれ若い僧が坐禅している大写しの表紙をもつ、鈴木大拙の本のドイツ語版があったのは、驚きであるとともに、『因縁とは』をしきりとつぶやいたものである。大喜の師大航の下には、大喜のほかに円覚寺管長、相国寺管長と臨済宗三巨峰が育っている。その大航（宗潤）は仁多町大字郡村字簾の「下の前」（勝部）の出であって、大喜とはまた縁続きでもあった。

（高橋一郎記）

（書は大喜の筆になる「心静長興」。大市梅木千之助蔵のもの。梅木先代の妻は大喜の姉）



出雲文化

復刊 第13号
昭和 51. 5. 1
奥出雲文化協会

船通山と竹崎

荒木宗重

雲伯の舟越

竹崎という語源については「猛須佐来」と古事記風に愚考もしているが、古事記にいう「出雲国肥之河上在鳥髪地」にあたる。出雲風土記に「伯耆の国日野郡の堺なる阿志毘縁山に通うは三十五里一百五十七歩なり。常に剡（せき）あり。」とあるはこゝである。当時の郡司大領の官衛郡家（郡村の）から一八、九八六粁にあたる。竹崎から伯耆の国に通ずる堺である。横田の番所の一つ「第11号記事に）があったのは、この附近である。

雲陽誌（一七一七年編集）には、風土記にいう鳥髪山（鳥上山）を俗に船通山というとしるしている。古代の陰陽の往来の目標になっていたようである。この山の両側からは山陽系といわれる土器が出土している。

観音（廃）寺

雲陽誌にみえるこの寺は、字地名に観音寺、大龍庵、永祥庵、玉雲庵、塔の原、辻堂等があって、古伝には六坊があったという。昭和十二年に観音寺という地名である大島屋（浅沼）の宅地内で、工事中次のものを出土した。これによって古伝が裏付けられたのである。

香炉（鉄製、角耳付）
径一尺二寸位　二ケ
茶挽用石臼　一組　現存
（写真のもの）
古備前壺（完全）一ケ　現存
鰐　口（鉄製）一ケ　現存
（比田の観音寺に保管）

この観音寺趾の東に王子権現西に住吉明神の両鎮守がありこの附近の現在の山根側部落は、この寺の一山に含まれていた。「若月家古代大成記」に誌されている。「尼子が三沢を藤ケ瀬城に攻めた時、ここを本陣とした。攻めあぐんで退却する時に火を放った」ということは、これらの発掘物によって、史実の裏付けが出来たことになった。

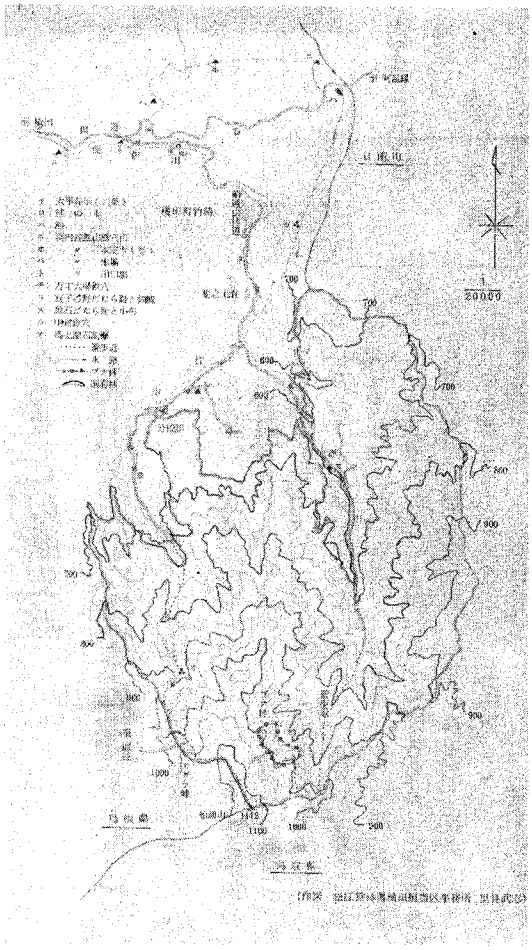
大竜寺

大龍庵はその後、山郡の新田原清六が再興したと伝えられる。慶安元年（一六四八）の竹崎村検地帳によれば、この庵の所有する水田は、一町一反八畝六歩であった。その後、追谷の卜蔵氏が、菩提寺大龍寺として現在地に移した。

この時の大工は、岩屋寺の本堂等を建築した、角村の佐佐木吉左衛門の子吉左衛門であって、父に劣らざる名工であって、近隣に知られた寺院であったが、昭和二十六年十二月焼失した。

焼失をまぬがれた境内にある秋葉社の玉殿は、卜蔵氏が明和二年（一七六五）京都でつくらせ、数人をつれて遠州（静岡県）の秋葉本社から頂いた分霊とともに持帰ったといわれている。遠路と経費をものともしないこのことは、信仰心はもとより、たゝら師として盛んであった卜蔵氏の財力をしめすものである。さらに修覆に備えた山林を寄進したという。地図にある亀石たたら跡は、元文年間（一七三六～四〇）のもので、たゝら跡並びに小舟が完全な型で残

船通山附近の図



っているのは、わが国のたゝら製鉄史上の極めて貴重な遺跡である。

永祥庵は転々と移って、横田町に落着き、のち永祥寺と称し今日に至る。

卜蔵氏については別の機会にゆずり、奥竹崎の旧蹟等についてのべると、

大平井手　大平山の六〇〇米の中腹に赤川の水を引いた二粁にわたる二条の井手は、鉄穴流しのための用水路であって、旧藩時代から水が流れて絶えることがなかった。下流の池に溜められた水は、附近の鉄穴流しには欠くことの出来ないものである。

桂の老樹　この井手の中程のかたわらにあるもので、古来からたゝら師の崇拝したもので、天然記念物である。

鳥上滝と石割欅　船通山の山腹にある一六米余の高さの滝で、かたわらの大岩石を割り分けて欅の古木が茂っている。天然記念物である。

いちいの老樹　船通山頂上の鳥取県側にある天然記念物

岩伏の湯　赤川の中流に古くからの民営の入湯場があって、傷によくきくと言う。

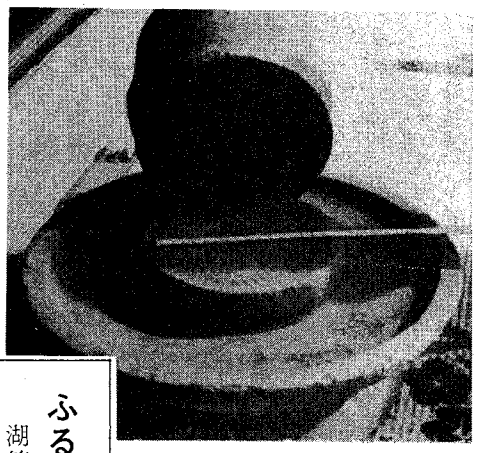
今日はその上流地に、町営の老人福祉センター「斐之上荘」も出来てよい憩場となっている。

船越　船通山の北の家内住山との間の谷のことで、古代から高山をめあてに交通した通路といわれる。経な通す、経な通す、フナコス、と転じ、これが船通路山、船通山となったともいう。

（横田史談会員）

訂正

四月号「勝平大喜」の文中「大正五年同志大学英文科卒」と読みかえて下さい。



茶挽用石臼

ふるさとの春

湖笛同人　安部夕波

○たまゆらにこぶしは散りぬ城跡に、続ける径は乾きゆくなり

（藤ケ瀬にて）

○山門の仁王の像は暗きより眼光らんらんわれをにらみき

（岩屋寺山門）

○雨晴れて霧たちのぼる山麓の、森に山鳩しきりに鳴けり

（吾妻山麓にて）

○長き旅終えて帰れば母のごとわれに対せし山は尊し

（船通山によせて）

ふるさとの歴史㊸
奥出雲の古代を推理する⑤
—吉備の成長と奥出雲—

古代の大和は、大伴、物部蘇我ほかの諸豪族の入りくんだ対立と連繋の中で、王朝が交代したのであるが、吉備は血族或は国族連合政権が続いた。これは西は九州とつながり、東は大和との競う関係の上に、鉄と塩を産する地帯という特殊事情によると思われる。

一世紀

この世紀の弥生中期後半は戦乱の時代であった。のちの備後地方が早く吉備に組入れられたのは、九州との間に位するためである。東の播磨は吉備が入る前に、大和勢力下におかれ、鉄が押さえられたことは既述した。従って播磨と吉備とはその後の発展も異質である。

一世紀の九州は細形銅剣の時代で、これが吉備本国（のちの備中）に伝わり、そこから備後、出雲に頒けられたと考えられる。その後制海権を得て勢力範囲拡大に伴い、伝授する銅剣の多量化から、生産に銅の分量が少なくてすむ広形銅剣が、吉備に独自発生し、中国各地そして四国各地へ贈られることになった。

二世紀

邪馬台国出現の時代であるが、美作の弥生後期は、集落の存在が認められ、鉄の存在も明らかで、急速にそれが増加したと考えられる時代である。その上吉備式弥生土器も交っているという。二世紀末から、吉備の統治形態がまとまりつゝあることをしめす。一方大和もそうした動に進んでいた。

三世紀

三世紀に入ると、この共同体集落の上に血縁的連合統治形態が、備中備前に出現したと考えられる。当時の出土品とそして四世紀以降五世紀へ

別表 3

世紀	時代	九州	吉備（出雲）備後	吉備 備中	吉備 備前	美作		近畿 播磨	近畿 大和ほか
1	弥生中	細形銅剣	細形銅剣 広形銅剣						
2	後		独特な土器（出雲）（四国）			集落あり鉄出土急増（伝来した弥生式土器出土）		吉備の東隣であるが 出土品は近畿的	
3	古墳前		備中前と異質（出雲ルート）	血縁連合統治形態（共同体集落）		吉備から鉄工人入り 吉備へ鉄を 備中・前と異質（出雲ルート）	製塩土器 土師器		
4	中			古墳出現	車塚古墳（畿内的） 鉄器出る		須恵器出土		
5	中		品治国の古墳はこのころから出現	造山、作山大古墳（前方後円墳）	鍛造具、鉄工具多い（新しい技術吉備へ） 刀は砂鉄が原料		製塩窯業盛ん 鉄をうばう		吉備の反乱（2回）
5	後			吉備連合政権部族同盟 下道国造最強 製鉄、農具多し（新しい鍛）反乱 巨大古墳終末（大和に服属か吉備政権解体）人的領地的支配へ			近畿政権へ		
6	後		三次に集中 南部国造 吉備から独立	小型古墳（小首長墓 北部に多い 556児島屯倉） 鍛造具多く鉄滓多い）家父長時代 第二次吉備体制		美作北部に多い 555白猪の屯倉（鉄と出雲がねらいか）			近畿政権が最強になり、中央政権的となる
7				寺院出現へ			瓦製造盛ん		
8									

かけて、大和に匹敵する大古墳が吉備に出現した前時代であることからである。

しかしのちの備後、美作はこれらと異質性が強く、出雲への流出を主流とする交流が考えられるという。

製塩土器の出土もあらわれ、美作は吉備本国への鉄の大量供給地として、吉備から鉄工人も入ったことが、出土器から考えられるという。このころ土師器があらわれるから、形の画一化即ち専業者の出現従って部族の強大になってゆくさまもしめすものと考えられる。

四世紀

四世紀になると古墳が出現して来る。近畿型の円墳で若干おくれるという。

備前の車塚古墳は、わが国で最も古いとされている、京都椿井大塚山古墳と同型であり、三角縁神獣鏡（中国製）のほか、剣、鉄、斧、やりがんな等が副葬されていて、この時代のほかのものとは全く異質であるので、大和から吉備に進出して来た武将が討死したのを葬った、古墳ではないかとも言われている。

この世紀の古墳からは鉄鏃が豊富になり、末から五世紀初頭にかけては、大和に劣らぬ、前方後円型の大古墳（造山、作山ほか）が群出する。

丁度近畿は河内王朝の時代である。近畿、吉備ともに、古墳から鉄工具、鍛造道具が出土し、刀は特に吉備においては砂鉄より鍛造したものがふえてくる。このころ以前に新らしい製鉄技術が大陸から入ったものと思われ、農耕技術の開発による農業生産の拡大、そして土木工事の進展による大型古墳の出現とつながっていったのである。

四三八年百済王から、おくられた刀が（この説をとる）熊本の船山古墳から出土している。おびたゞしい鍛冶が渡来したと思われる。このころから倭鍛冶部に対して新渡来の韓鍛冶部の区別が出来たといわれる。

新しい技術とは野だたらにおける風力が、自然通風に対して人工風力即ちフイゴに変ったことを意味し、このころから風神の信仰が、金屋信仰に変ったという。たたらで一回に出来る鋼は一Kg程度のものであったともいう。一説に言う河内王朝は大陸渡来の部族によるという考えも、こうしたことと無関係ではない。

この技術が吉備から出雲ルートを越えて出雲に入ったことは当然であろう。播磨には既述のような出雲と但馬の製鉄族の対立のあとに、新しい技術をもった製鉄族が、大和から流入して来たと考えられる。

五世紀

五世紀半ばは吉備連合政権部族同盟が強力に成立し、下道国造が最強で吉備十一の国造の中心であった。この中へ近畿政権は人的支配のくさびを打込んで来た。吉備国内の各首長を県主に任じて直接、大和の大王と結び、土地人民の一部を上番或は貢献する従属への第一歩をふみ出した。やがて名代を設置して、首長も含んだ共同体ぐるみを、五世紀の大和の大王の一族に従属させた。共同体の一部のものを大和に出仕させて雑用を負担させ、残ったものはその

食糧を供給した。

この頃の吉備の古墳は形は大和に似るが、内容は吉備色が濃厚で、独得の技術を生みつつあった。農具でも鎌も曲刃が生れているし、製鉄技術の進歩によって製塩、窯業も進歩し盛んになった。

（のちの備後地方の品治国の古墳は五世紀半ばから成立しはじめ、独立性をおびてくる）

こうした情勢は、近畿、吉備の緊張を生み、吉備国の反乱が二回にわたって起った。はじめは下道国造（備中）そして上道国造（備前）の反乱であった。

近畿政権の確立が進むと大王譜につながる豪族が中央政権の職務を分掌するようになった。従ってその名代（領地）の中から、その下に従って技術をもって労働力を提供する品部、部曲がつくられた。この工人集団は上番して労働するものと、食糧原料を貢献するものとに分れた。このことは先進技術を吉備にもたらすことにもなった。

吉備国造の反乱後は、集中的にこゝにおいたから、美作の鉄、瀬戸内の塩は、近畿に吸いあげられることになった。

（大王譜以外の近畿の豪族の領地—子代は吉備には少なかった。名代やそれに従属する各種の品部、部曲が多かったことはかえって、近畿政権にがっちりと組込まれることになった。この点出雲は色彩が違っていた）

かくして五世紀末は、吉備における巨大古墳の終末となった。近畿に服属させられ吉備体制は分解したのである。そして近畿政権が最強となり中央政権への成長をはやめたのである。これと前後して近畿が吉備を通じて、出雲の完全服属への歩を進めることになる。

六世紀

小型古墳がおびたゞしく出現する。小首長墓であり、鍛造道具が多く出土し、鉄滓も多量に伴っている。その分布の中心は、備後北部の三次、備中の北部、北部美作で爆発的に出現する。備後南の国造は吉備政権から独立する。時代は家父長時代に移り、第二次吉備政権は賀夜国造を中心とするものであったが、前世紀とは違って弱体であった。

五二七年の築紫の磐井の乱後、大和政権は、県主、国造名代、品部、部曲の設置による地方の人的支配を更にすゝめた。領域支配を打出してきた。屯倉（みやけ）の制度である。築紫についで吉備に七ケ所と多数が設置された。

それも吉備本国へ置かず、吉備西部（備後）の独立性の強いところへ、即ち吉備国の弱点へ、しかも北九州との連絡を断つことのできるところへ置いたのである。五五五年白猪屯倉が美作におかれ、北部備中も含まれて、百済よりの渡来人系の白猪が長官となった。その上蘇我氏が直接中央より乗込み、戸籍の制も布かれて、古代国家方式の統治が進んだ。

勢力拡大のためには、美作の豊富な鉄が必要であったし、こゝを本拠に出雲へ通ずる要衝も押さえて、先住民族であり、精神的支配力の豊かであった、出雲民族への制圧へと進んだと思われる。

翌年、児島屯倉がおかれ、瀬戸内海の塩と制海権も大和がにぎることになったのである。

七世紀

六七〇年、庚午年籍（こうこねんじゃく）がつくられて一人一人に国家の主権が直接に及ぶことになり、力役も租税も兵役も課せられることになった。

六七二年　壬申の乱後、吉備は備前、備中、備後に分国され、各々に国司が下った。このころから瓦製造の発達は寺院建築の普及と歩調をあわせて進んでいった。吉備には吉備一族の繁栄の残映として多数の寺院がつくられた。

「記紀」編集後、賀夜国造は土豪の郡司となり、神官ともなり、中央にも一族が出仕して力をもった。そうして、過去の吉備国の栄光を称えることから、一族の神を近畿大王家の自出に求め、吉備津彦を祖神としてまつった。吉備津神社の記録は、九世紀以降になってはじめてあらわれてくる。

（吉備については、西川宏間壁忠彦、葭子の説を中心にまとめた。いずれも岡山に於ける研究家である。）

—次回　出雲①—

あとがき

○野津渋生作品展

心あたゝまる、夢の多い作風は好評でありました。

「新緑の大山」は殆んどの方が、「ひまわり」には鑑賞を数人重ねておいでになる方々が讃辞を呈して頂きました。

○横田史談会会員の増加

熱心なお方の努力によって、多数の方が入会頂きました。財政的基盤が強くなると、発展に向います。

固定読者もふえています。よろしくお願いします。

○「古文書解読のしほり」

県立図書館から発行されました。会員の皆様には実費で、史談会でおわけします。

○「奥出雲の古代を推理する」

は固苦しくて恐縮でしたが、次回から、今までの記述の上に立って、「出雲」へ入ります。

自然をとりもどそう　金をかけても

畑田文化

復刊第14号
6月号
昭和51. 6. 5
奥出雲文化協会

静かに路傍に坐す

野の仏と郷土の歴史

足立文人

坂根奥の地蔵さん

出雲坂根駅から谷をのぼって、平家平に向うと滝谷に入る。そこには写真のような一米六〇糎もある、美しい地蔵さんがある。元はもう少し上の方にあったというが、植林のため現在地に移されたという。附近には至るところに、鉄滓（かなくそ）がごろごろしている。　そこに

杠亦左衛門
安部孫右衛門
元文戊午三年七月　日

まで文字を読みとることができる。（三年は一、七三八年）

「杠日記」によれば、杠十一代又右衛門正辰が、元文元年より寛保三年まで八年間、坂根滝谷で鈩と鍛冶屋を稼行したという。直接は安部清次（稲原村）が経営した。

当時の稼行は、技術的にやゝ安定性をもつに至った時代であるが、時々「鉄涌かず」と失敗の記録がある。その時は貧窮のドン底に落ちたもののようである。仁多郡で最も早く鉄師として成長している。天文五年（一、五三六）は三沢為国が藤ケ瀬落城後、富田城下に捕えられて五年目に斬られた年である。この頃野だたらから、高殿たゝらに技術が格段の進歩をしたのである。全国のたゝら技術の先端を行ったようである。この年から杠日記は詳細に稼行の記録とともに社会情勢を刻明に綴っている。木炭の生産地に伴って炉を移動していた時代で、二十五度目の稼行地であった。先代治兵衛久次の時代に技術も安定して急に成長した。

しかし作業は人命を損うことが多かったとみえて、死者の霊を慰めるための供養塔があちこちにある。この地方の地蔵さんの特徴の一つがこゝにある。

二百三十年の雨露風雪にさらされながらも、その温顔は生けるが如く美しい。

広島県民の森の碑

この森の中央、西城町大字油木字大岩谷（六の原）に二米近い『三界萬霊』塔がある。

天保四巳四月
願主枝木徳右衛門

と刻んである。近くにある炉趾は広島県によって発掘調査された。金屋子神社もあって桜井三郎右衛門が願主の棟社もある。峠をこえて大馬木の枝木氏（上連の屋号元小屋か）が鉄師として建てたものである。この一体の山は桜井氏の所有で、明治末にこの地の共有林となった。その代価は毎年の米をもって納入したという。部落には桜井の紋のある米蔵がある。

道後山南麓の大地蔵

東城町大字内堀の小足谷の入口には、二米に及ぶ堂々たる風貌の地蔵がある。

天明六丙午七月吉日
施主雲州人鉄師矢壁市兵衛

とある。（天明は一、七八六年）

矢壁姓は蔵屋にある。この地方の製鉄師の進出ぶりを知ることができるものである。（横田史談会会員）

塾教育のすすめ

専門家でない一般の日本人が、暇をみつけ、自分の金で自分の学びたいことに通っている状況は、他国にも例をみない普及率だという。☆この地方にも幾つかの芽が育っている。素人の域をぬけ出すまでに成長しているグループもある。☆芸ごとだけでなくいろいろに、役柄でさわりをさわるでなく、同好者が学ぶ場が横田に育ちつゝある。☆私もしているというアクセサリーでなく、それに生き甲斐と楽しみをみい出し、生活のうるおいと豊かさにはねかえるものをめざす長い道を歩むもの。☆こうした動きをやり易すくする場所とやり方を見つけよう。数の少ないグループでも、その質の良いことゝ、種類の多いことを目指そう。

地蔵をしらべて

庶民の歴史を発掘しよう

泣けて　泣けて
こらえきれずに泣けたっけ
あの娘と別れた哀しさに
山のかけすも鳴いていた
一本杉の石の地蔵さんのよ
村はずれ

は「別れの一本杉」という春日八郎のヒット曲である。歌謡曲に共通する、「泣く」「別れ」「娘」という言葉を折りこんだ哀歌である。石の地蔵さん入れて趣向を変えた歌で、勿論信仰心とはかゝわりあいはない。しかし情緒としては、石の地蔵さんは哀愁をそえる。

日本全国のどこにでも路傍の地蔵さんはござる。子供の遊び友達であり、庶民信仰の欠かせぬものである。「ふるさと」のシンボルである。信仰や思想ではなく、情緒として　石の地蔵が「ふるさと」をかき立てる。そしてすっくと一本杉があるのである。

地蔵の信仰が人々の間に広まったのは、他の仏や菩薩の信仰に比らべれば、かなり後世のことである。現世利益信仰が仏教の主流を占めて、加持祈祷中心であった時は、来世の六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）に迷うという恐怖が、それほど深まっていなかった。従って地獄の救済を最大の利益とする地蔵の信仰は、それほど人々の関心を呼ばなかったためといわれる。

十世紀に入ると天台宗の中に発生し、十一世紀（平安末期）に貴族社会から一般民衆の間にも仏教信仰がひろまると、そして浄土教が主流になると、新しい地蔵信仰が発生した。仏教を伝えた印度にも中国、韓国にも地蔵はないという。十四・五世紀ころから、仏教が民衆の中に浸透していく過程で、死者の葬式追善の儀礼として十王信仰と結びつけて強調されていった。地蔵は冥府（死後の世界）支配者として、民衆の信頼と畏怖の対象となった。民衆の地獄への恐怖を背景に、地蔵は冥界の主で生前の罪悪を裁断する畏怖すべき存在であると同時に、比丘の姿で地獄の鬼から信者を護るという慈悲の面も加わる菩薩として人々の心をとらえた。六道をめぐって衆生を導くという信仰は、町の辻々の六地蔵を生み、小僧に身を変えるという信仰は、地蔵を子供の守り神にした。地獄の鬼に苦しめられる子供を救う賽の河原の信仰は、室町時代に生れ、江戸時代に入って地方にのびたという。子供や、弱者の加護者、農民の加護者となって、村の至るところにいろんな地蔵が生まれた。江戸時代の農民哀史をみることができる。▲地蔵の呼び方　▲地蔵の建っている場所（元の場所あれば）▲建てた人　▲年号と時代の社会情勢は、庶民の歴史を浮きぼりにしてくれる。地蔵を掘り出し、分布をみて考えてみましょう。

資料（1）

観音堂

一、滝尾観音堂
（大馬木八槇寺境内）
本尊　木像　一体
棟札
元禄七甲戌年六月吉祥日奉建立観音堂一宇
天下泰平国家安全杠氏繁昌延命
此観音三百七十年以前開山日尊上人法華経勧請之観音也
施主　杠治兵衛尉久次

（註）杠治兵衛久次は杠（屋号山本）十代で、寛文九年（一、六六九）より元禄十四年（一、七〇一）まで郡内で初めて安定したたら製鉄に成功した。八槇寺は三代則久が、天文十三年（一、五四四）ー尼子氏が横田庄を押さえたころー独力で建立した。天正十三年（一、五八五）ー秀吉が関白となった年ー八槇寺と八巻庵から改めた。

二、松尾の観音
（元大馬木尻の泰正寺山）
本尊（木像）
観世音菩薩　一体
左脇仏　毘沙門天　一体
右脇仏　不動明王　一体
（いづれも現在妙綱寺に）
棟札写　三枚
o天保十四歳九月十七日
本願主　染川文兵衛
供養導師妙綱寺二十世日暢
o嘉永元戊申六月二十四日
功徳主　糸原茂右衛門
供養導師妙綱寺恵興院
o文久二戊十一月十日
本願主　反保組中
供養導師妙綱寺二十一代日等

（註）泰正寺山は観音山とも呼ぶ、昔泰正寺があったと伝える。かたわらの谷の流れに小さい瀧がある。その下のやゝ平らかな場所に観音堂の跡がある。この観音さんを松尾の観音さんとも呼んでいた。
建立の年月日は古記録や古い棟札がないので明らかでないが、明治維新の際妙綱寺に移された。

（調査、大馬木　小早川金次郎）

古いものの中にある心に愛着し　保存しよう

ふるさとの歴史 ⑥④

奥出雲の古代を推理する ⑥

—奥出雲の縄文弥生時代—

縄文文化の時代

縄文時代は中国山地文化圏と、中海宍道湖文化圏に大別出来るが、始期は山陽瀬戸内海につらなる前者が後者よりも早いという。

帝釈峡のように洞穴と清流を持たない場合は（こゝには縄文よりはるかに古い時代の遺跡もある）、人々はある期間をそれぞれの土地で採集生活をすると、またつぎの生活源をもとめて移動したと考えられる。

奥出雲の出土品には次のように、瀬戸内ー山陽との関係の深いものが多い。

○横田・龍ノ駒——山陽の中津式土器にあたる。

○仁多町・鴨倉——山陽の里木船元式と全く同じい。

○仁多町玉貫峠——福田KⅡ式と共通の要素をもつ。

椎やぶななどのどんぐりや、獣を求めての生活が、あえて山間部で行われなくてもよかったこの時代に、一時的にこの地に移り住み、物資の交換や文化の伝播の役割をもたらしつゝ、長期間住みつくこともなく、住居を転じて行ったのである。後期に増加した山間部の居住地は晩期に入ると、ふたたび低地中心の居住圏に限定される。それは縄文文化＝採集文化にかわる、弥生文化＝農耕文化の到来によるものである。

弥生文化の時代

（別表４）

縄文・弥生時代（岩波版 日本史年表より）

時代	年代	中国韓国	
縄文 早期	BC 年 7,500 前後		尖底の深鉢・竪穴住居
前期	〃3,500 〃		平底土器一般化・炉のある竪穴住居が広場囲んで集落
中期			土器大型に、集落規模大
後期	〃2,500 〃		土器の型の分化集む。東西日本の地域性明瞭
	〃1,500	殷	
	〃 400	周	
晩期			集落が低地にも、石剣小型石棒（儀礼的遺物）出現
弥生 前期前半	〃 300		弥生土器・水稲栽培ひろがる。鉄製工具・機織あり、北九州より東へ農耕技術伝わる。
〃 後半	〃 200	秦 前漢 衛氏朝鮮	共同墓地あらわれる。農耕技術東海地方西部へ伝わる。
中期前半	〃 100	高句麗	九州と中国四国近畿で土器の地方色強まる 農耕技術東海地方中部へ
〃 後半	1	後漢	朝鮮より青銅器移入、中国よりガラス器移入、製造東北地方中部へ農耕技術（「漢委奴国王」金印）
後期前半	100		櫛目文土器の拡散、青銅器鉄器の製作、農耕技術東北地方北部へ
〃 後半	147 200	魏	（奴国大乱　卑弥呼を王とする）邪馬台国時代
古墳前期	300		

戦後横田文化史 ⑦

映画（三）

—教育映画—

石見興業部

敗戦の横田に映画を通してうるおいを流したのは、石見興業部であった。邦画の殆んどと優秀洋画のすべてが、鑑賞できたのはその功績である。常設館上映のほか学校向けの教育的映画の上映から、教育映画の面に積極的に乗り出したのは昭和二十九年からであった。

教育映画

仁多郡音楽教育連盟の主催に協力して、音楽映画を続いて上映して好評を得る一方採算の見通しができたので、十六ミリ映写機による教育映画と教材映画を組せ、郡内全小中学校を毎月巡回した。学校側も委員会を構成して協力した。こうした体制は県下で初めてであった。四十年から仁多町では各校に八ミリ映写機が購入され、町のライブラリが設けられ、横田町のみが続けていたが、採算上中止した。教育委員会がナトコによる、学校巡回を行ってこれを引続いて、数年続いた。視聴覚教育の組織については、内客の高いことゝ相まって先進地であった。教育映画の配給会社がこの田舎にと驚いたほどであった。

テレビへ・テレビ離れへ

横田大劇も横田シネマとして再発足したが、テレビの普及によって、映画の斜陽化の波をうけ、四十年二月十八日、岡本喜八作の「あゝ爆弾」（伊藤雄之助、越路吹雪主演）の上映を最後に、功績を脳裡にのこし幕を下した。横になって茶を飲みながら見るテレビのドラマも転機に来ている。見ごたえのある映画を時折みる施設の出現を待望する。

紀元前三世紀のころから弥生文化の新しい浪が押しよせた。これまでの採集生活（魚具獣・果実）を大きく変動させる農耕と金属器の使用を伴った文化が訪れた。そしてこれは数次にわたるもので、第一波は日本海岸を北九州から北上したもので、伊勢湾沿岸あたりまでひろがったものである。これはのちに海の道として、政治的社会成立にさいして大きな役割をはたした、瀬戸内ルートの支脈としてではない。主流がこれに変ってからもなお、重要さを発揮する日本海ルートとしてであった。

弥生時代の

前期は海岸平野または内海水面に面した地帯が主な居住地帯である。

中期になると分布がひろがって、山間盆地の低湿地であって、やはり大きい河川の流域を中心とする。山陰の分布を各水系別にみると

千代川水系（鳥取附近）

中下流に多く、中期以降のもの

天神川水系（倉吉附近）

中下流に多く、中期以降のもので、遺物の上では中期の瀬戸内的色彩が濃い。

後期には開発が著しく、古墳時代には、山陰で最も人口密度の高い地域の一つとなる。

日野川水系（日野郡）

上流にまで遺跡群の分布がある。中期から後期にかけては、上流から下ってくる文化の伝播（瀬戸内‖山陽コース）が濃厚にみられる。

岡山県阿哲郡や広島県比婆郡、能義郡仁多郡とのつながりが注目される。

伯太川・飯梨川水系

中期にはじまるが、山越えの直接交渉ルートは見出せない。

意宇川・朝酌川水系（中海、宍道湖東半部）

居住開始は古く、前期前半の遺跡がある。日本海コースでこの地に拡大していっている。山間部からのコースは考えにくい。

斐伊川・神門川水系

奥部まで多くの遺跡がある。

前期前半は海岸部に多いが、中期以降は各地に特色があらわれ、特に横田盆地内での展開が著しく、川づたいに山陽方面からの文化が、入ってきたものである。

日野川水系と似た傾向がみられ、比婆郡、双三郡との関係が注目される。

江川水系

中流以上の地域では山陽からの文化の伝播を考えねばならない。

高津川・益田川水系

中期後半以降、山間盆地で山陽との交流の中で、生活が展開する。

このように前期前半にほとんどの水系に弥生文化は根を下しはじめる。中期になると次第に奥部へ開発されるが、他方に圧倒的強さで、山陽瀬戸内海からの影響が入りはじめる。それも山陰の東部中部西部でそれぞれ分水嶺をこえる山陽瀬戸内との交流のルートの中で影響の独自性がある。

そして第三次の大規模の文化の伝播が到来する。

弥生時代においては打製の石器が多く、磨製の石器は特定の工房で生産供給されたと考えられる。低地に位置する人々の前期以降の大規模農耕集落にあっては、おそくとも中期以降木製農具が普及し、ときに鉄製品をともなうようになる。そして遺跡によっては鉄器の主要生産具としての位置は、弥生時代後期末には確立していたといえるという。

彌生時代の青銅器

（横田文化第2号1頁の図参照）この図にみる如く、日本で独自に発達した銅鐸の分布は鳥取県に多く、銅利器である銅剣銅鉾銅戈は、出雲の地が中心である。山間の横田盆地（馬場八幡宮出土）から低地の大社や、意宇川流域そして隠岐にでた。この地には磨製石器が分布しており、分銅型土製品の分布範囲とも一致する。これは青銅器、石剣と異り、同じ祭祀に関したものでも、呪術的性格の強い個人所有物といわれる。弥生中、後期のものという。

山陰の青銅器祭祀品は、弥生時代中期から後期に比定され、とくに後期が多い。

o日本海コースによる伝来品

大社出土の中鉾銅戈

竹矢出土の細形銅剣

o日野川斐伊川水系の山ごえルート（瀬戸内海沿岸に盛行したもの）

横田八幡宮大形細身銅剣

八橋町　大形細身銅剣

これらはいずれも後期のもので、竹矢のもの舶載品であるとは仿製品（国内産）である。

弥生時代の埋葬についてはこの地方に例が発見されていないので省略する。

銅鐸や銅利器をもって代表される、祭祀形式が終末になると、山陰では高塚古墳が芽を出すことになる。青銅器の意義が薄れ、高塚古墳をつくることに移ることは、青銅器を宝器または儀器とした首長層の消滅或るいは、脱皮によって、特定の政信的族長や首長が祭り祭られるものに変ってゆく、即ち高塚古墳をもって権威とする首長の出現であった。

（この項は島根県の若手研究家池田満雄、東森市良両氏の説をもとに書いたものである。）

出雲文化

復刊 第15号
7月号
昭和51. 7. 3
奥出雲文化協会

横田で生れた人々②

角村の三名工

安部吉重郎

旧「吉重橋」を造った大工で、寛政文化年間に活躍した。

京都に上って五条大橋の改架工事に従ったり、いろいろの修業を重ねて帰った。「吉重橋」は文政の初めまでは土橋であって、一年間に幾度も洪水の度毎に流失していた。町目代中沢助七の発議によって吉重に工事をたのんだ。吉重郎は京都の修業を生かして南北十間中央の高さ両橋詰より七尺五寸上りの刎橋とし、橋脚なしの欄杆付板橋をつくった。形も美しく洪水の時にも心配のいらない橋として、たちまち評判をとった。（吉重橋の命名は、明治二十五年改架の折郡長によって）

その後、大原郡赤川尻の四十間に及ぶ川違工事を完成し洪水のために転住するものが続いていた六ケ村の田地を美田と化した。又神門郡荒木村の水田に灌漑するいわゆる「八間樋」を創成するなど、雲州国内に名声を博した。

屋号は新屋といった（現村尾熊市宅のところ）。明治三年（一八七〇）七月十四日でなくなった。妻キイは京都の武士の娘で、吉重が滞在中に結婚した。夫の死後は裁縫、茶、花の師匠として、里の娘に教えて慕われ、明治二十八年九十三才でなくなった。子がなく甥の子石原松太郎を養子とした。松太郎はのち実家の西隣に移り小西屋と改めた現在安部久之助と続いている。

佐伯景幽

水屋佐伯登の四代前で本名は歓一といゝ、安政年間に活躍した画師である。明治二年十月十八日六十才余りでなくなり、「遠山景幽法橋」とおくりなされた。

はじめは広瀬藩の画師堀江友声の弟子であった。のち京阪神地方や高野山の院内にも遊び、大いに腕を磨いたので京都で法橋の僧綱をうけた。

嵯峨御所
永宣旨景幽
宣叙法橋の旨御気色の所也
者執達如件
安政四年九月十九日
（一八五七）
右大臣法眼花押奉
（佐伯登所蔵）

終生独身を通し、弟大蔵があとをついだ。この地方には景幽の絵が多い。写真は菩提寺晋叟寺本堂の方六尺の板戸にかゝれた「鷹」である。

佐々木吉左衛門

若くて宮大工として京へ上り、外従五位下に叙せられ、禁裡の工事に従事した。帰ってからは、岩屋寺本堂をはじめ神社仏閣の建築を多く手がけるとともに、彫刻等も多い。

中でも指物「重箱」は著名で、その技工によって、京都より衣冠を授けられた。宝暦十二年（一七六二）九月二十八日になくなった。

その子吉左衛門良綱も父ゆずりの名工で、竹崎の元大龍寺本堂等を建立した。

子孫はその縁者が現在大阪に住んでいる。家は現在の面曽秀雄宅である。

吉左衛門の家は古く、永禄七年（一五六四）に、晋叟寺五代一峯元甫和尚と、当時の吉左衛門との間の土地に関する古文書が、晋叟寺にある。

訂正

13号1頁5段
「元文年間」を「明治年間（一七六四～六五）」に

14号1頁1段
「杠亦左衛門」を「杠亦右衛門」に

横田における 寺院の成立・変遷と民間信仰 ①

雲陽誌

松江藩主三代綱近が、宝永二年（一、七〇五）年番頭役兼御書方御用の黒沢長顕、斉藤豊宣に命じて、国中の寺社、古跡などを集録したもので、のち五代宣維がうけついで、享保二年（一、七一七）長顕の子長尚によって完成された、貴重な出雲の地誌である。

近世地方史研究にとっては欠くべからざる資料で、神社寺院、堂等の記述は、村明細帳や村書上によって説明を加えたもので、当時としては正確な資料である。「出雲風土記」については研究しつくされているが、「雲陽誌」についても研究が深まらねばならないものと思っている。

この文は横田町誌編集の折徳川時代のために執筆した約百頁の原稿をもとにしたものである。町誌の紙数の制約のためのぞいたもので、「雲陽誌」の分析に「杠日記」「古代よりの聴書」ほかを参考として綴った庶民の歴史であった。この連載は「雲陽誌」に重点を置いて、標題によって書きあらためたものである。「雲陽誌」研究私論であるので、御指導を賜りたい。神社寺院等の特色によって、地域性、精神的風土その成立の原因等も、日本の信仰史の研究を参考にして考察し、また神仏習合のはげしかった日本の民間信仰のこの地方の状況も明らかにしたいと思った。そして今後この地方の地蔵、塚などの調査によって、「雲陽誌」以後の庶民史を明らかにする基礎づくりを試みたつもりである。

表①の説明

中世は日本の社会の激動期で、武士も農民も発刺としたエネルギーを爆発させた時代である。日本の郷村制を生みだしたのは、農民のエネルギーであり、この地方の水田が開発されたのも中世の農民の力である。従ってそれらを支える精神的支柱も、この時代にすみずみまで発展普及したのである。これらについては号を追うて明らかにしたいが表①は神社についてのまとめである。「横田」の数は、横田庄（荘園）と、馬来氏の領内であった。大小馬木、大谷高尾の合計であり「仁多」は三沢氏の勢力範囲である、現仁多町と旧温泉村を含めた合計数である。時には三処郷内であった比田をあわせ考察することもある。（合計村数は現在の小字数となる。）

出雲風土記にみえる神社

横田には神祇官社、伊賀多気社のみ（渡来系祭神）仁多には神祇官社、三沢社とほかに添仁、石壺、大原、仰支斯里、須我乃非（現大領神社へ移る）、湯野社、玉作社（今はなし）でいずれも出雲系祭神で、比田の比田社は吉備系祭神である。大原社は大原郡から阿井に移住したものが祀ったとも考えられる。祭神の系列によって、郡内の開拓のこのころの様子が推理できる

雲陽誌で加わった神社

修験者が活動してひろまった神仏習合神社が、両地区に9宛で、部落数（当時の村）20と47から考えると横田に多い。それは後述するように、岩屋寺に修験者の強力な拠点があったからである。また仁多郡は他郡にくらべて権現社の数が割と多いことも特色である。

八幡宮は八川が最も古く、のち馬場に移されている。鎌倉時代を経て室町時代この地の武士によって武の神、鎮守として勧請されて数がふえた。

小馬木は馬来氏によって、仁多は三沢氏の有力家臣によって、その住居に勧請されている。馬場八幡宮はその総社であった。

諏訪神社は三沢氏の勢力拡張につれて家臣の住んだところに勧請され、横田は三沢氏が藤ケ瀬に築城を終ってから勧請したものが一社のみである。横田庄で八幡宮の支配下であったから、城内社として祀ったものである。

恵比須神社は横田町内に南北二ケ所で、天文末年に森脇氏によって町作りがはじまり牛馬市もはじまったという状況が勧請のおこりであろう。

貴布称社は水を豊かにする神から転じて水難を防ぐためにまつるようになったが、この六社はいずれも洪水に苦しめられたところに勧請されている。**妙見社**はせっぱつまった時に祈ると、運命を変更してもらえると信じられたはげしい神であった。**新羅社**が中湯野にあるが、究明したいものである。**荒神**は中国の神で台所を守るものといわれ、我が国に入っては土豪武士や地主百姓の土地や屋敷を守る神となり、恐ろしい祟りの神となった。やがて本家中心の同族神ともなった。そして社会の変化に部落神や氏神が成長

表① 神社

	横田（20村）	仁多（47村）
Ⓐ「出雲風土記」時代	1	8 比田社
Ⓑ「雲陽誌」で増加した主なもの		
権現（熊野、新宮ほか）	9	9
八幡宮	3	7
諏訪社	1	5
恵比須社	2	0
貴布称社	4	2
妙見社	0	4
新羅社	0	1
荒神	199（横田惣荒神含む）	271

ふるさとの歴史(65)

奥出雲の古代を推理する⑦

奥出雲の三世紀から六世紀までの時代

三世紀中頃から四世紀中頃

安来の西方には多くの古墳群がある。出雲における最古の古墳の所在地とされている

出雲において古墳の発生期に四隅突出形の方墳が出現しているのは注目すべき特色という。高塚古墳の萌芽とみられ、出雲は方墳の伝統を維持しているし、これも我が国では特色あるものとなっている。

出土する土師器には山陽から入って来たものと考えられる要素が強く、日野川や斐伊川水系を中心として、吉備との交流が盛んであったことを推測させる。

埋葬形式としては土壙に木棺を直葬したものと、弥生時代中期に北九州で盛行した甕棺葬の影響を受けつゝ成立した壺棺墓がある。後者が盛行するきざしをみせた時、畿内型古墳の築造がはじまり、これと融合したという。北九州的弥生時代的伝統要素と、葬送用の吉備的供献土器も加わり、古墳時代的新文化の要素が融合して、古墳の姿が整ってゆく過程となったという。

やがて古式古墳を築造させる首長たちが、平野をにぎり古墳時代前期の政治権力の中心となった。

四世紀中頃から

出雲的世界であった山陰に古式古墳が成立するが、畿内大和政権の浸透という形で地域差が生れてくる。

倉吉地方　米子地方
荒島地方　江川水系
の各地域の古墳の築造年代は同じ頃であるが、出雲的世界の東の一画であった倉吉平野には大和勢力が徹底して入って畿内型古墳が生れている。西の江川水系にも中央勢力の支配の影響が入って、ひとり出雲だけが、古墳の外形的伝統を保ち、方形の伝統と弥生時代の在地墳墓的色彩をのこしつゞけている（倉吉は盛土式に）。出雲は四世紀の古式古墳の築造期に、山陰的出雲から出雲一国に矮少化された世界に変ったのである。大和の勢力の拡充期であった。

荒島の古墳群には強大な政治勢力の集中出現をよみとることが出来、舶載鏡や、ガラス玉、鉄製品もあらわれる。三刀屋の松本一号古墳、加茂の神原古墳もこの時代で、舶載鏡、鉄剣、鉄器（鉄斧、鍬先、針）などが出土する。吉備的色彩が濃厚であり、内容からみて首長墓的古墳であり鉄生産と結びつけて解することも出来、軍事的性格も加わっているとみることも不可能ではないといわれる。吉備が山越ルートによって奥出雲に進出して下ったと思われる。

五世紀

新しい変化が、円系墳の出現と、古墳の水系別に展開してあらわれ、旧勢力と新しい勢力の抬頭と葛藤が生まれる。

最後まで方墳の伝統を捨てなかったのは、意宇郡と島根郡であった。

○伯太・飯梨川水系

方墳の伝統が残りつゝも新しく築造される首長墓は、平野をみおろす丘陵の至るところに円系墳を主流として造られ、平野の開発の進展をしめす。

○意宇川水系

前期の（三、四世紀）の古式古墳は顕著ではないが、五世紀－六世紀前半（古墳中期後半－後期前半）にかけて出雲第一の古墳、山代二子塚をはじめとする、出雲を代表する大型古墳が出現する。しかも奥地にひかえる大庭山代古墳群は盆地状の低地にある方墳系であって、これに対して大橋川にのぞむ竹矢古墳群は、丘陵や台地に前方後円墳として形づくられる。円系墳（畿内系）の築造が入って来ている。しかし方墳の伝統が強く密度の上でも、出雲のどの地方よりも大である。風土記の意宇郡の中心部でその勢力が体質を温存していたことを、こゝからも知ることができる。

○島根半島部

五世紀になって意宇川勢力が北進し、方墳が主流で円墳が入ってきてもいる。

○斐伊川神門川水系

とくに斐伊川の治水の悩みがからんだであろう。大規模古墳の出現は著しくない。

中央低地を囲んで、外縁部に大古墳が点在している。

とくに簸川平野の南側の丘陵地帯、健部郷にあたる地の開発の進展にあわせて円系墳が占めている。（その後の大規模開発の拠点となったことを示　する。）

する一方、廃家となるものも多く加えて仏教の普及もあずかって無縁屋敷神がいよいよ祟りの性格を濃厚にして行った。

横田の惣荒神（大市南の台地）は民俗学的にも他に例のない未解決のものであるが、荒神をまとめたものであるから、横田の荒神数はもっと多かったと考えられる。

これが究明されると、平安時代の歴史の何かが推定されると思われるが、それについては別の機会としたい。

五世紀初頭に百済を経由して須恵器の製法が入った。出雲における生産は五世紀末といわれる（詳述はさける）

このように特色ある古墳文化が展開した中で、五世紀末に出現した山代二子塚古墳は出雲最大の古墳であるが、大和はもとより吉備に比べても はるかに規模が劣り、倉吉平野に比べても百米級の古墳の数や密度でも劣っている。こゝに出雲という地域の地方豪族の勢力の一端があらわれている。この一帯は出雲国庁や、意宇郡家の存続した地域でもあり、出雲臣の根拠地でもあったわけで、歴史的背景が注意される。たゞし出雲全体の支配者としてはあまりにも古墳そのものが貧弱にすぎる。この地域の六世紀以降の古墳の様相は、あたかも中央勢力によって規制された墳墓の造り方がそこに出ているようにみえる。この時期の簸川平野や伯耆西部の淀江平野の諸豪族のあり方と極めて対象的である。

六世紀は簸川平野開発時代

五世紀には東部荘原や半島部に点在した大型古墳は、六世紀に入ると簸川平野の中心部の丘陵縁辺に姿をあらわし斐伊川西岸から神門川東岸の地につぎつぎ姿をあらわすに至った。この地の開発の進展と富と権力が生み出したものである。その特色は墳丘の規模において、この時期の第一級のものがあるのみならず、大形の切石造りの横穴式石室の内部に巨大な家形石棺をすえていることである。

山陰の穀倉地帯である出雲—簸川平野は、中国山地から北に流れる斐伊川、神門川水系であるが、沖積作用の進行とともに土地の様相も大きく変り、ひろまってきた。斐伊川は江戸時代以前は西に神門川とともに注いでいた。半島部の開発は南部にくらべると開発が貧弱で、古墳の出現も極めて少ない。

大寺古墳に続くものとして上島古墳がある。馬具が出土し、出雲においても騎馬の風習がひろがったことをしめし金銅製金具も出土するなど、豊富な副葬品を入れたものが出現する。

それにひきかえ南方の簸川平野には、多数の後期古墳が盛行し、六世紀後半に集中的に出現する。この群立する中であらゆる点で抜群のものとして、大念寺古墳と上塩冶築山古墳がある。金環など豪華なものを出土し、平地を、自己の勢力範囲を一望の下に見下す地に築かれている。きわめて有力な豪族の存在したことがうかがわれる。これらに代表される時期に、この地点を拠点とした豪族は、のちの神門郡という小地域の首長程度ではなく、さらに広い地域を統轄する政治的支配者であったとみられる。

出雲東部は五世紀以降安定した発展を続けていたが、西部は漸く平野の開発がすゝみ農業生産力が増大して、円系墳（畿内系）一色に代表される古墳の築造が進んだとみえる。意宇の勢力に対する杵築の勢力の抬頭であり、古墳は意宇のように規制されることなく、権力誇示の具として壮大につくられ、平野を望む丘陵の縁辺をうめた。意宇川水系の諸古墳の要素が六世紀に入って方系墳の伝統を保ちつつも、九州的色彩が濃厚であったと同じように、出雲も九州的要素を濃厚にもっているが、意宇のように過去の伝統に規制されないところに、新興勢力としての性格が強くあらわれている。

六世紀前半には築紫国造盤井の乱があり、半島の情勢も激変する。出雲の内部においても伝統的勢力—出雲国造と新興杵築勢力との間に、対抗関係を生じはじめて出雲国造の危機が迫っていた。地元における対決だけでなく、強大になった中央政治権力である大和とも対決せねばならなかった。新興勢力は九州ルートにのると同時に中央勢力の影響下にあるものであったから極めてやっかいであったと思われる。神門臣をして建部とするという「出雲風土記」の伝承は、このような状態をものがたるものである。大和—吉備—簸川平野のルートに位し、吉備の影響下にあった奥出雲の特に横田地方は、この関係はみのがすことの出来ない点である。この点を推理する前に六世紀後半期の庶民墳墓として出雲一円にひろがる横穴墓（古墳）を次回で考えることにする。

（本号も前号と同じく、池田・東森両氏の説をもとに書いた。記して御礼申上げる。）

あとがき

第二回研究講座（六月十八日）

「たたら製鉄研究①」は東京の窪田蔵郎先生を迎えて盛会に終りました。あとで町内蔵屋の金屋廻のたたら遺跡へ案内したところ、鉄滓の分析結果や、全面発掘によらねば決定しかねるが、室町期から徳川初期における野だたらの様相をしめしていて、わが国のたたら製鉄史で最も暗黒時代といわれるところのものとなり、極めて学問的にも貴重な遺跡となりそうである。

七月三日（土）

「たたら製鉄研究②」として並河鳥上木炭銑工場長より、奥出雲の砂鉄と鉄滓について話を聞く予定

八月七日（土）

古文書を読む会

テキストは七月例会に配布。

九月五日（日）

史蹟めぐりは、広島県の高野町、比和町、庄原市方面をマイクロバスにて行う予定。

古いものの中にある心に愛着し　保存しよう

出雲文化

復刊　第16号
8　月　号
昭和51. 8. 7
奥出雲文化協会

盆踊りと山伏

横田における寺院の成立・変遷と民間信仰②

八月は盆の月である。民族信仰や民間信仰は添えものにされがちであったが、研究が深まって仏教史ではもとより、生活史・思想史にとっても欠くことの出来ないものとなった。盆に因み、盆踊りと山伏をとりあげ、神社寺院の成立を考える基礎にすえる。

五来重・和歌森太郎の歴史・民族学者の説を中心に述べる。

菩提寺の発生

日本人が、死者、先祖をまつるのに、他民族と著しく異なる特色として両墓制がある。埋め墓は穢（けが）れが多いとし（民族信仰の考え）、そこで霊をまつらず、別の場所でまつった。谷の奥の埋め墓群の入口附近などに、詣り墓が集っていた。それが村落寺院、民間寺院の発生のもとになった。寺とも院・坊・庵とも呼んだが、はじめは一坪程度の、独立はしているが小さいものや、民家の一室を提供されたものであった。すべて庶民の零細な勧進によるものであった。やがてこの寺の中に位牌堂をもうけて、共同のまつり墓の役目をさせ、盆には施餓鬼の行事を行った。これが定着すると、初盆の霊をなぐさめるための念仏踊りが流行して来た。今日の施餓鬼・盆踊りの起りである。これらを推進したのが、後述する聖（ひじり）や山伏（修験者）である。その努力によって、講のため、儀式のため、仏教の布教のために、広い堂が建てられるようになった。それも庶民の勧進を必要としたから、いろいろと差が生じた。

これが菩提寺で、日本の寺院の九割以上がこれである。この発生した時代は中世の、室町・戦国期（十三、四、五世紀）である。中にはこの期以前に特定豪族によって建立されたものもあるが、仏教原理によって建立されたのでなく、日本の民族宗教即ち祖先崇拝信仰によって、墓をまつるために発生したもので、はじめから葬式仏教のために、これらは建てられたものである。日本の宗教の対象は、死んだ祖先であり、墓であり、位牌であった。

寺の発生の仕方の分類にもいろいろあるが、他に学問寺と祈願寺がある。奈良時代の南都七大寺に代表されるものは前者で、国家の保護のもと、国家と天皇の鎮護をいのり、その権威をしめし、庶民の威服を促す目的で、大規模な堂塔・仏像等をつくった。中世以後になると庄園制の崩壊と、それによる国家・貴族の実力喪失によって、庶民の信仰を集めねばならなくなった。こゝに中世における遊行の宗教の出現する原因があり、聖や山伏による勧進が盛んとなり、仏教を地方に庶民に普及させた（これらの寺は今日は観光寺院の主流となっている。）

祈願寺とは、各地の三十三ケ所、八十八ケ所などの霊場で、山岳寺院や村落の小堂が庶民信仰を集めたものである。

特に浅草、成田、川崎大師などのように、その本尊の霊験が遠近に知られ、江戸のような近世都市の発展とともに、爆発的に庶民信仰を集めて大きくなったものも多い。仏教教理とは関係なく、庶民の現世利益の祈願にこたえたものである。

仏檀の発生

二つの流れがあって、一つは地方の豪族の中にも氏寺をもつ者があらわれ、自分の屋敷内に先祖をまつり、礼拝の場所に持仏を納めるようになり、持仏堂へと発展した。これが普及して、家屋の一間に位置し、庶民の家には仏檀となった。他の一つは、庶民が先祖をまつる祠、詣り墓を共同で屋内に入れることから発生した。中心は位牌であるが、仏教固有のものでなく、神道の斎木（いわいぎ）と儒教の神位牌とが音が似ていたことから「位牌」と呼ぶようになり、神位牌の型が位牌の型となったという。仏檀が一般庶民の間に普及したのはずっとあとで、宗門改めの制度が整った江戸中期以降のことで、比較的新らしい。

中世の遊行の宗教

「勧進」と「苦行」と「山伏」について述べねばならない。

勧進　死者の罪業を滅して往生、又は菩提にいたらしめる行が重んぜられた。この信仰は日本の民族宗教における穢を罪とする考えを基調とし、これに仏教の罪業観が結合したもので、この滅罪信仰と勧進聖（かんじ

んひじり）とを巧に利用して庶民の心をつかんだ。罪穢を滅しはらうための作善をすゝめ、造寺・造塔・造像・造経の名のもとに庶民の喜捨を集めたのである。

これはまた法会や僧侶の資糧としての米銭を大衆から集める経済活動でもあった。やがて徳川中期以降、檀家制度が整うと、祖先の菩提を葬らうための供養が盛んになって、わが国の寺檀制が確立した。

印度や中国の仏教と比べると、仏教とはいえないまでに変形していった。勧進聖の活動は、芸能の利用に及び、幾多の庶民芸能を生んでいった。

苦行 によって滅罪を教え、霊場の巡礼や霊山の登拝となった。又六十六部回国という法華経六十六部を書写して、一国に一部ずつ納めてまわる行も起った。のちには納経札を納めることに変ったが、全国を回国する苦行であり、日本人全体に代って滅罪しようという代受苦者精神は、庶民の厚いもてなしを受けた。

これが、神道・仏教・陰陽道すべてにひろがり、神道系は、御師（おし）神人（じにん）願人などが、伊勢・熊野・八幡・愛宕・淡島等から出て、配礼・家祈禱・代参などを名として回国遊行し、各地にその分社分霊を奉斎して歩いた。陰陽道系では、法印陰陽師が暦や符をもって、各地に卜占・厭魅・方術と共に荒神祓をしてあるいた。仏教系の遊行者は、念仏系の聖と、密教系の山伏、客僧が大部分を占めていた。ほかに法華経系の六十六部、禅宗系の雲水、芸能をもって遊行する放下僧、虚無僧などがあった。

これらが活躍したのが中世で、中世寺院神社の造営や再興の大部分がかれらの勧進であった。民衆が「大師の身代り」「阿弥陀如来の使者」としてかれらを厚くもてなした。

雲陽誌にあらわれる寺庵は殆んどこうして、このころ成立したものである。

山伏 は中世における日本民衆生活の指導者、宗教的呪術師であったのみでなく、芸能の導入者であり、演出家であり、医者であり、何事につけても村人の相談役であった。

薄気味悪いがたのもしく畏敬もされた。里人がとかく抑圧されがちであった社会体制の下で、望み乏しくくらしに明けくれるのを慰め、あきらめさせる役もつとめた。村人のために不動明王などの像をもって定着し、堂をもうけて、民衆の病気をなおし、憑きものをおとしたり、個人の家の運勢もみてやったり、門付けあるきでもこれをやった。時には神主として幾つかの神社も受け持った。別当と呼ばれるものにはこの流れが多い。

遠方の山参りの代参、或は先達と、荒修業によって鍛えた山伏には、いくらでも耐えられる体力があり、諸国遊行による情報、里人のあこがれる京・大阪の物語りなど、指導者としての資格が十分に備っていた。戦にあけくれてあすの命も知れぬ武士と違った村人との、触れあいがあったのである。

仏教の名に値しないほど原始的宗教であったが、現世利益によって人々に安心を与えた。その上に、農耕生活と一体になった行事を生み出し、村の安全と幸福を求める共同体の集団の信仰へと成長させていった。郷土愛につながり、郷村制の確立の

この道平世紀
—太田亀甲さん

横田町馬場で育った亀甲さんは、狂歌が得意だった祖父、芸事に趣味のあった父の影響と、十一銭五厘の振替送金で注文して、まちこがれて読んだ「日本少年」「少年世界」で少年時代を過した。

歯科医としての出発は大東町で、大正十年そこで川柳会が生れた。旧節句であったので「ちまき」に因んで「千万亀会」と名付けられた。その時、ちまき、きままをもじって付けた「亀甲」が、とうとうきこうにも今日まで続くことになってしまった。

関東大震災後、養家の母里に帰り、柴田午朗氏らも加っていた母里川柳会の同人となった。昭和の初め、松陽新報（山陰中央新報の前身）の新年文芸の「万年筆」（青砥可明選）に次の句が一等入選をした。

万年筆ポタリ
落ちると捻をしめ

賞金は十円であったが、当時としては大金で、早速祝賀会に及んだが一度には使いつくせなかった。とうとう「亀甲」の仮名も本物となった。

間もなく松江番傘川柳会の同人となり、昭和十年郷里横田に出張診療をするようになると、斐上川柳会をつくり、三十名の天狗共とよく集った。

飛弾守・一柳・雅舟・平吉・源平の諸氏は既になく、木公は当時は末席組、野猿坊・栄川・史朗・青磁・古迷の諸氏は、いずれも老境自適の人。

幸いにも亀甲さんは、昨年発足した仁多川柳会の顧問と第一線作家を兼ねて活躍中。

『俳句は季があり、自然風詠で感情を客観化するが、川柳は人事であり、人情風詠で感情を表出するので、私の人生観と一致する』と・・・。

御健在とますますの御活躍を祈る。

※近　詠※

七人の士
高官名出すやら出さぬやら

（横田そばで語る会の記録から）

自然をとりもどそう　金をかけても

基盤ともなった。

盆踊り

半僧半俗の遊行者が、初盆の新霊を迎えて、共同のまつり墓や位牌堂の庭で踊り念仏をしたのが起りであるという。

これに渡り山伏が伝えた祭文くどきが加わり、盆踊りの内容を豊かにしていった。山野跋渉の苦行をのがれ、門付け芸や辻芸の祭文語りになったものもあった。はじめは真面目に仏や高僧の功徳や一代記、或は有名社寺の縁起などを語る説経祭文であったが、歌説経、歌祭文となり色祭文と変化して、色恋や心中をうたってゆくようになった。この地方の盆踊りうたにも濃厚に残っている。

又当初は錫杖とほら貝を伴奏にしていたのが、口で「でろれんでろれん」を繰返すようになって、「でろれん祭文」となり、三味線が入って浪花節へと変っていった。筆者も幼ない時、隣ぶれを聞いて一銭銅貨をにぎり、祭文を聞きにとんだことの記憶がある。長い間民衆芸能として伝っていたのである。

このように山伏は民族芸能や、郷土芸能の伝播をやったが、社寺の勧進活動の請負のかたわら、社寺境内とその所領を守護する僧兵の役割もした。勧進の時は聖、一方では僧兵活動をして、堂衆・行人・客僧と呼ばれたのである。

日本の山には神をまつる神社とともに、山に集まる霊をまつる寺院が共存した。神仏習合思想以前の民族信仰にもその基盤がある。

この地方の中心は岩屋寺であった。時には二十一坊があり、郷内の諸寺諸坊もその掌握下にあった。天狗岩は大峯山等の荒行場の地方版でもあった。熊野権現もまつられ、修験者の道場もあった。そしてこの地方の山伏は、真言密教系の当山派に属しており、当山派は武家派であり北朝派であった。横田郷は、北朝の仙洞御所御料所であった。

横田の民間信仰の歴史はこゝからも展開し、横田の風土文化を培うことに役立ったのである。

次回は、もう少し寺院史をさぐり、民間信仰の横田における様想を雲陽誌の行間にくみとりたい。

戦後横田文化小史⑧
読書会・懇談会と私設図書文庫（上）

前回までは比較的多くの人に影響の及んだ文化活動であったが、渦は小さくとも、心の糧としていつまでも残ったものを紹介して、若い人々の今後の努力を期待したい。

懇談会

敗戦の年、これからどう生きるかに思い悩んだのは、すべての人であった。数人で何かをさぐり出そうと試みて始めた会は、時には百人に近い人を集めて、昭和三十年代のはじめまで、百回を超えるまで続いた。駒田信次（作家・当時島大教授）氏を招いたこともある。横田を訪れた方を囲んで話すことも多かった。

横田の将来像を一般から募集して、公開討論したこともある。三十年たった今日、その将来像は九分九厘まで実現してしまっている。いや想像をこえた現実になっている。とぼしい財布は、お互いの討論に頼ることが多くなって、すべては残っていないが、共通の問題に燃えて話したことは、心にあざやかに残っていると話していた。

巡回文庫

三十年の半ばから、農業青年と読書会をもつことになった。テキストは岩波新書の「民法の話」であって、家族を中心とした問題を考えることができた。横田とちがって、金を出しあって文庫まで設けるという土地柄でなかったので、冒険を試みた。そのころ、都市部周辺ばかりをまわっていた巡回文庫の自動車を、仁多郡内にまわしてもらうことであった。大原郡をとびこえて実現できたのは、読書会の存在が大きかった。

今と違って冊数も少なく、通俗的なものも少なかったが、読書欲を満たすには大いに助かった。

（T）

読書の必要性をより感じ、私設の文庫を設立した。

文庫の設立

有志が所蔵する本を出しあい、本立を作り一ケ所にまとめた。金を出しあって毎月書籍を購入し、総合雑誌、文芸誌を数冊求めて回覧をした。話題も豊富になったが、読書会もはじめて、月二回にも及ぶようになった。主として文庫本であったが、中には林健太郎（現東大総長）の世界の歴史に関するものもあった。七、八年も続いたであろうか。これらの記録は仙花紙と称する戦後の紙に、うすいインクで誌されて残っている。

町に図書館が建設されれば、寄贈してもよい。珍らしい本もある。

当時の山陰新報が横田の読書活動を調べて、水準の高いことを報道した。この会はそのほんの一部にかゝわりあいを持ったであろう。昨年東京で二、三の当時の諸君に会った時、内容の

ふるさとの歴史㊻

奥出雲の古代を推理する⑧

横穴墓の出現（上）

六世紀に出現

四世紀まで土壙に葬られた人人はどうなったか。五世紀になると、直径十米、高さ三米程度の小型の古墳を主とする群集墳が、意宇地方にあらわれる。木棺直葬で遺物は鉄の剣、鏃、鉾などであるが、貧弱で当時の村落古墳の実態を示すという。

五世紀後半に首長の世代墓が出現するとともに、大形墳のいくつかを含む、十数基の小円形、方墳の木棺直葬という小規模の群集墳があらわれ、各地につくられていった。

葬られるのも、村落の長以上の人々であった。

六世紀後半になると、これが横穴となり、庶民村落の群集墓地の様相を示すようになる。

古墳を造ったものも、横穴墓へと変ってゆくことが、安来地方、意宇地方にみえるという。そして平野部から、しだいに山間部に及び、民衆の墳墓として広く普及していった。横穴墓を造った人々は村落を構成する人であり、かって四世紀には土壙墓に葬られ、五世紀にはいって小円墳や方墳の群集墳を造り、そして六世紀後半にはいって、大規模にこの埋葬方法をとり入れていったのである。土質のゆるす限り、村の中でこの手法をとり入れていないところがないと言ってよいほどである。

このことは簸川平野においても、六世紀後半から七世紀にかけて、同様の傾向がみられる。

型の対立

横穴の製作は専門の工人集団があったとみられている。

簸川は妻入り型、意宇は平入り型が圧倒的であるという傾向である。妻入りとは、側面をつまという、即ち梁行を正面とした建物をいう。大社造はその代表である。平入りとは、正面を平といい、正面から建物に入る形式をいう。

かつて主要古墳にみられた両者の異質性が、横穴墓という民衆墓においても敏感に反映され、旧勢力と新興勢力の対立がみえるのである。

この群集墳は共同体の内部構成の変化をもしめし、一つの群集墳内において、規模のぬきんでたものや、副葬品の豊富なものがあり、家父長的な秩序が支配的となって、新しい社会の形成をみることができる。（副葬品の中で鉄に関して、吉備地方と比較してみると、その鉄器の種類も量も劣りがみえ、鉄滓についてもその量が極めて少ない）

古墳の終りへ

六世紀に入って渡来人（帰化人）によって伝えられた仏教は、はじめは大和やその周辺にとどまっていたが、やがて各地の豪族に受容されていった。火葬の風習をともない、豪族も氏寺を建立することに力を注ぐようになった。

出雲でも七世紀後半に、能義地方に教晃寺が建てられている。出雲地方の鰐淵寺には六九二年の銘のある観世音菩薩立像がある。

次第に古墳は旧習として関心を失っていった。出雲的世界の伝統は、一層稀薄になるとともに、大和の中央政権の規制力、権力が一層浸透していったのである。

吉備の項でのべた如く、白猪、児島に屯倉がつくられたことは、地方を経済的に直接収集するための政治的配慮であった。やがて群集墳の造営を停止させることとなり、飛鳥時代、白鳳時代へとつながった。

古墳末期にも寺院はつくられているが、古墳造営のかっての莫大な労力とエネルギーは、国庁・郡衛などの国家機構の地方的中枢の造営にふりむけられ、民衆の労力の収奪ともなって、八世紀へ進んだ。

横穴の伝播

文化伝播のコースにのって朝鮮から九州北端へ新文化として、主体部が横穴式石室をもつ古墳が伝播したのは、五世紀末とされている。九州にひろまるとともに、本州を東に伝播した。最上級豪族の特権から、下級豪族が築造するようになると、大石材から小石材になり、石材の入手が自由でない地域では、いわゆる横穴が発生し、文化伝播のコースにのってひろがったが、地域によって異なり、南関東へは七世紀初に伝播したと推定される。

（前回と同じく、池田・東森両氏の見解を中心に記述した。）

あとがき

九月五日（日）

三沢氏や横田郷と関係深い広島県比婆郡の高野町・比和町・庄原市方面の史蹟めぐりの計画が進んでおります。

皆様の御協力で、史談会員が増加し、県内外からの定期購読者も増えて、漸く安定に向いました。二頁増にして紙面を豊かにしたいと思っています。

横田町の紹介写真展

十月下旬、県民会館に於いて横田町観光協会主催で開催が決定し、県下に腕を誇る横田フオトクラブ員の作品に期待が寄せられています。

会員配布一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）

特集 — 備北と雲奥の交渉史（室町期、戦国期そして横穴墓時代）

備北文化

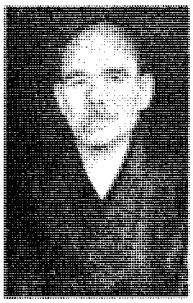
復刊 第17号
9月号
昭和51. 9. 7
奥出雲文化協会

横田で生れた人々 ③

青木実三郎

—日本の児童自由画の始祖—

石倉要一



生きた美を求めた図画教育

青木実三郎先生は明治十八年七月十二(一八八五)横田町大馬木青木由太郎氏の長男として生れ、明治二十三年島根県立松江中学校へ入学、二十六年同校を第三学年で中退して翌年島根県師範学校へ入学した。在学中から図画には特に関心が深かったらしく「その頃の師範学校の図画教育は自在画と用器画で、自在画は臨画中心で、花の写生や野外写生も相当に行われていた。その頃宍道湖畔の老松の根に坐して出雲富士を写した当時を懐想するとなつかしさがこみ上げて来る—半ケ年の付属教生で高等科の児童に相当多分な写生画をやらせたが、当時としては先端を行ったもののようである。」と「美育十年私の素描」の中に書いている先生は又師範時代当時県下に著名であった俳誌「草笛」に拠って俳句の道にも心を寄せ盛んに句作したようである。後年馬木での句作の同人で今日東京に在って俳誌「獺祭」を主宰する馬木出身の細木芒角星は句集「此土」のあとがきに「俳句をはじめていつの間にか五十六年の歳月がたった。この小さい詩にこれほどの魅力があるものかと、自分ながら不思議なくらいであるとにかく小学校のとき青木実坊先生から俳句の講義をきいたのがきっかけであった。—わずか一時間の講義をきいたことから端を発して、私の俳句はついに一生のものとなったのである。」と言っている。

輝やける先駆者

明治四十一年(一九〇八)二十三才で同校を卒業し、教育者としての第一歩を踏出した鳥上大呂小学校と八川小学校に在任三年で四十四年四月母校馬木小学校の訓導として故郷へ帰った。「さて地方の小学校へ出てみると図画は臨画のみである。殊に私の赴任した地方は出雲の奥地で一切が幼稚なものであったが、特に図画教育など全く無意味に行われていた。—私は地方に出た第一年から図画教育については不満を抱いていた。若い私としては臨画の番をして窓にすがって、うとうとしていることに堪えられないことであった」と言う、当時の図画教育にあき足りなかった先生は「—馬木校でも一、二年たった私は画手本を主体としながら若干の創作味を加えて行く方法を加味した—これが馬木校想画の第一歩であったかも知らん」と述懐している。大正四年三月訓導兼学校長に任ぜられた、三十才である。「これで自然担任学級はなくなるわけだが、図画教育だけは依然全校一手に引き受けることにした」—「かくて大正八、九年の頃になると大分度胸がすわって来た。とうとう児童の前に宣言した、画手本を離れて自分のすきな画を描くこともよいことです。自分の考えを思い切って描くことです。恐れることも困ることもありません—こうした言葉を常にくり返した」時あたかも中央では山本鼎の自由画論が抬頭していた。しかし先生は「山本先生の自由画論は知らなかった私も芦田恵之助先生の綴方革新論は知っていた。芦田先生の綴方論は綴方への灯明台であったと共に私の図画教育への羅針盤でもあったのである」と言う。しかし、「私は山家者の悲しさに天下の山本鼎先生を知らなかった先生の自由画論をちょっとでも耳にしていたら、どんなに自信を強めたであろうとその後度々思ったことである」しかしその発想は実に山本に先だつこと四年である。

子供は歓喜によつて伸ぶ

私が小学校の教育を受けたのは大正四年(一九一五)から大正十二年(一九二三)の頃、ちょうど大正デモクラシーと呼ばれる時代であった。その頃に青木先生の薫陶を受けたのである。学校には多くの児童文庫が設備されていた「学校図書館」などといういかめしい存在ではなかったが、私たちは放課後、廊下に腹ばったり、校庭の樹蔭にうづくまったりして読みふけったものである。生活を直に題材にした画を描いたり、文集を作る為に生活綴り方も書いた。又懸賞綴り方も度々行われた。又おはなし会で生活経験を人前で思い切り言葉で発表したり、少年会、少女会という自治組織で劇も度々やった。野外模擬戦も楽しかった。夏休

自然をとりもどそう　金をかけても

暇には夏季学校もあった。—そのような学校生活には生き生きと胸のわく思いがした。

「子供の自由は愛さねばならぬ」「子供は歓喜によって伸びるということを忘却してはならない」—という先生のリベラルな教育思想は三十数年の教育者生涯の根底にある思想であった。

世界にとどろく功績

大正九年初冬松陽新聞が時の帝展審査員内藤伸氏を選者とする第一回自由画懸賞募集をした。その第一席、第五席第七席、第九席の十名中四名の入選者を先生の教室から出した。大正十一年三月先生は三沢村小学校の訓導兼学校長へ転じたが、在任二年で退職し、再び馬木村小学校の代用教員として帰ることになった。これから昭和十九年五十九才で退職する迄一貫して馬木校に勤めることになる。大正十三年には東京三越で開かれた世界児童画展で出品八万点の中から馬木校児童の作品は金メダル以下十二枚の入選を見た。そうして馬木校青木百代（先生の二女）の「山道」の画はイギリス、オーストリア等の児童の絵と共に推奨画として絵葉書に刷られて発売された。これから「全国的な童画展では必ず馬木校が一等をとることに相場がきまれば、今度は世界各国の国際画展へも当然日本代表として出品され、アメリカ、チェコスロバキアの展覧会に仁多猿の描いたアンリールーソーも顔負けする傑作が堂々と幅を利かせ西洋の国々から送られた賞品の荷物が続々仁多山脈を超え馬木村に流れ込み、思いがけぬ金時計のほうびをもらって家へ持帰った。子供画家が親から盗品じゃないかと疑いをかけられたというナンセンスも生れた。—（木幡吹月「山陰綺人伝」）—という実践活動に論文、主張に或は講演にと旺盛な活動に入る。「以来傍若無人どんどん信ずる所を行った」のである。昭和十年（一九三五）五十才で「農山村図画教育の確立」を出版した。これより先、昭和八年には教育功労者として島根県知事の表彰を受けた「特ニ力ヲ図画教育ノ改善ニ致シー」という一教科の指導実績に依る異例のものであった。先生はかなり酒が強かった。酒杯を手にされた時のうれしそうな顔つき「私は酒を愛する、私は酒のうまい日を求めて生活する、否酒のうまい日を作ることを専念して生活する—私はこの一日がほしいために、悩まじ病むまじを日々のモットーとして緊張する」と雑文に書いている。同僚としても四年、よく宴席も共にした、酒も乏しい戦時下だったので残りの酒を丹念に集めて殆んど先生が始末した。カルピス会社招待の灘万料理の自慢話をしながら—。

消えない青木先生のともし火

昨年の夏、武蔵野市公立保育園の我が国では未だ極めて少数の保父さんである川崎さんが突然訪ねて来た。青木先生について知り度いというのである。早大卒が幼児の造形教育に熱心にとり組んでいる川崎君は美術教育史的な観点から先駆者の業績に謙虚に学びたいというのである。早大近くの書店の書庫で青木先生の「農山村図画教育の確立」を掘り出して心ひかれ、やって来たというのである。青木家を訪問して孫の宗一君に話を聞いたり、保存された資料を見たりして帰った。今年も又春の連休を利用して再び来訪して、先生が当時の諸雑誌新聞等に発表された論文等のおびたゞしいスクラップを貸りて帰ったが、夏に入っておぼれげながら青木実三郎の人間像がわかりかけて来たーと便りをして来た。それにしても先生の著書にある馬木という山村の子供たちの自然の中での生活実体が殆んど見かけられなかった。村の子供たちは何処にいるのでしょうーと少し残念らしい言葉をつけ加えていた。先生の三十六年間の教育者生涯は、校長としてわずか九年間、その大半はひら教員であった。教員室があっても教員室にはいない先生であった。教室の片隅の机の周囲におびたゞしい図画材料が置かれた中でうまそうに煙草をふかしていた姿が眼にうかぶ。しかも馬木という山間のへき地で教育者生涯を終始された。戦後、先生は中風で倒れ再起不可能と言われたが奇蹟的に回復された。終戦後の尖った世相の頃、先生は「馬木の自然を愛そう」という提唱をされた。しかしこの提唱には余りに牧歌的であり過ぎるという批判もなくはなかった。先生は「出来るだけ醜悪なものには眼を向けまい、苦労は出来るだけ気に病むまい、美しいこと、うれしいことに心を指向することによって人は美しくなるー」と信じていたと思う。先生はそんな人であった。言語障碍を残してほとんど健康を回復された先生は間もなく、お宅へ通ずる細道を定った時刻に機械のように正確に散歩される姿にほっとしたものである。

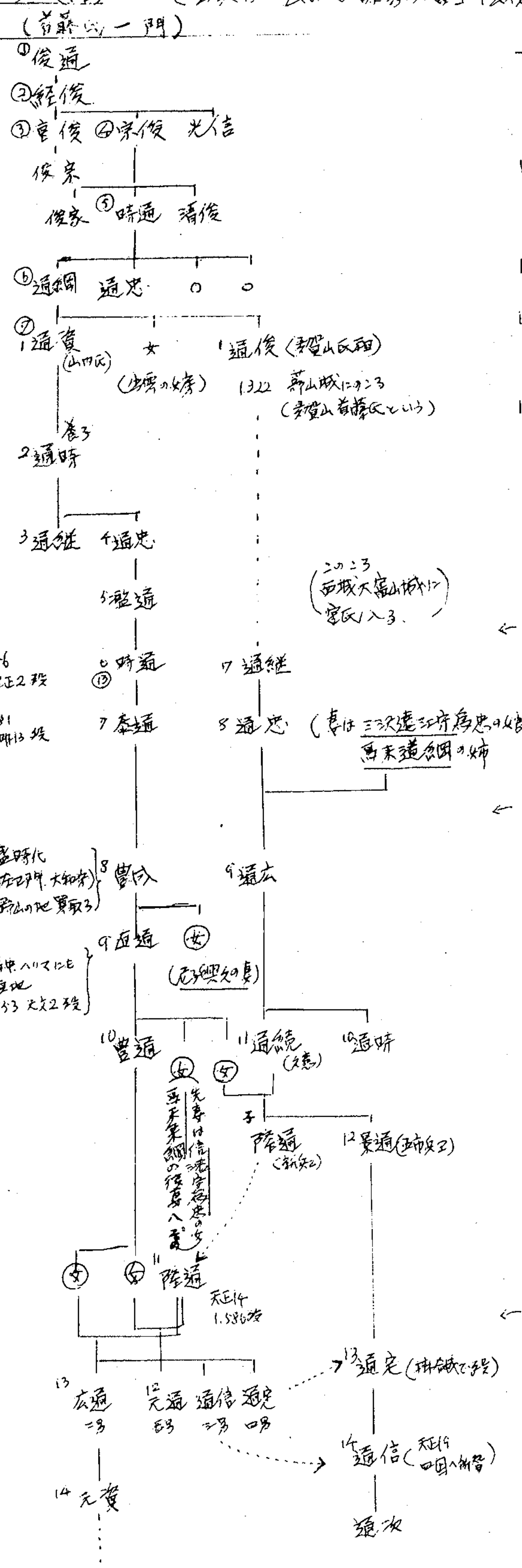
昭和二十七年（一九五二）島根県教育研究所が「すぐれた教師とその教育効果」の事例研究として青木先生が選ばれ、それを機に「青木実三郎選集—その人と自由画論—」を刊行、昭和二十九年の夏その出版記念会を開き、曽っての我が国想画教育界の雙璧であった中西良男先生が伊勢市からかけつけ、幾年ぶりかでの対

備後北部と奥出雲交渉史（略）（出典は「山内首藤家文書」「陰徳太平記」「横田町誌」）

（地毘荘）

相模山内荘の武将 首藤氏・首藤と称す
又山内氏ともいう 地毘荘（庄原・比和・高野山）
ともつ 在京を山内と呼ばせる

1,221（承久3）宗俊の子俊宗死し 弟宗俊に地毘荘を（勲功恩賞）
1,236（嘉禎2）蓮華院領 地毘荘の本郷を 預所と宗俊 知行す
この荘の領家は 京都千光寺 吾妻館蓮華院にも分れ 複雑であった
1,267（文永4）俊家と弟時通・清俊 相論す
1,303（乾元2）通綱、子通資にゆずる
（〃8）通資、雑掌通証と和与す
1,316（正和5）〃 〃 地毘荘へ下る 蔀山城（甲宝山城）へ
1,321（元亨元）〃 〃 功徳寺 菩提寺
（〃2）〃 〃 甲山城（高山・嘉祈山）へ移る
南北朝時代 尊氏に功あり 円通寺再興 大宮八幡宮造営
山内氏と改称
1,343（康永2）通忠 横田庄と田野郡 寄進
（〃3）〃〃 子通継にゆずる よって勢力が豊富となる
1,426（〃）時通にゆずる
1,446（文安3）山名持豊守護に（備後）
1,449（宝徳元）泰通にゆずる
1,470（文明2）馬来満綱 山内新左衛門と契約
75（〃7）知行権 信敷東西中（三次信濃守の跡を）
応仁の乱には 西軍山名方で戦う
1,476（〃11）山名政豊守護に（備後）
（〃13）豊成にゆずる
所領11ヶ所 諸地を各所に伝授
1487（長享元）山名政豊守護に
1,491（延徳3）豊成に 山名守護より 知行安堵
（元三次の領地の件 三次に念を押し 山内氏に安堵する）
1,498（明応7）雲州より入帰る
（天文2）横田代官（2,000貫）のこと 馬来家のこと
1,543（〃12）大内氏の富田城攻めで敗れの時
毛利氏は追われて 甲山城に入る
九死一生を得る
山内氏 岩屋寺へ寺領寄進（八川尾園村あり）
1,553（〃22）隆通 毛利と結ぶ 盟約も
天正10 備中高松城攻めに 通信参加せず
のち 功によって所替（多賀山首藤氏）
天正末 山内首藤氏 備後国内で 7000石を領し
毛利につぐ 家格
広通 朝鮮出兵
元資 萩に移る



（横田荘）

石清水八幡宮 横田庄出現
1,184（寿永4）源平合戦
益田氏 横田を攻め 備後へ
1,222（承久4）後鳥羽上皇 へ
（功徳寺 王宝山寺 阿井を経る とする説あり）
1,271（文永8）横田庄 下地中分
1,302（乾元元）三沢氏 両川の下る
1,318（文保元）後醍醐天皇 横田庄を 鶴岡八幡宮 六波羅探題の 造営料所へ
1,331（元弘元）〃 天皇 横田庄を 内裏料所 仙洞御料所 として安堵
1,341（暦応2）暦応の乱
← 1,353（文和2）横田庄 通忠（山内）の 所領が入る
1,470 馬来満綱 山内と契約
← 1,475 三沢信濃守と山内知行
1,486（文明18）尼子氏 富田城へ入る
1,492 山名の書状 三沢氏へ
1,509（永正6）三沢為忠（遠江守）
（14）尼子経久 より 庄原へ出陣
1,521（大永元）〃 備後を制す
（〃4）〃 備後で 大内・毛利と戦う
（〃7）〃 大内と備後和智で対陣
1,529（享禄2）〃 山内隆通を攻める
（天文元）〃 に 尼子晴久 を攻める
← （天文2）山内大名 横田代官のこと
1,533（〃3）毛利 高野山 久豊（通続）を攻める
尼子晴久 甲山城に 隆通を攻める 1万騎にて
（〃5）尼子 隆通が 後を継ぐ ことを承諾する
三沢氏 毛利に下ったので 晴久攻める
このころ 馬来氏 家綱の後妻 入嫁する
1,540（〃10）多賀山・山内・三沢・宮ら 11人に大内へ下る
← （〃12）尼子へ 三沢帰服する 岩屋寺へ山内・奥居する
（〃13）晴久 久代・高野山を攻める
（〃21）〃 備後守護職に
（22）八川八幡宮造営（方領 多賀山通続）
（弘治2）山内・毛利 尼子と数回 たたかう
高野山久豊（通続）石見へ 毛利加勢のため 阿井に入り 三沢に追われる
1,555（弘治元）三沢氏 毛利に下る
田部宮左衛門 八川の知行地を 用防でもらう
1,558（〃8）八川八幡宮寄進は 三沢為清に
（〃17）山内氏 仁多（佐白）大宮に所領を得る

桜井氏 1614 桜井2代 正胤 玉鋼に住する のち高野山へ 1644（正保元）阿井金屋へ移る
鉄を求め 備後の国に 2代 寛永元（1,624）大馬木三沢郷に定住 両氏いずれも ら製鉄師

森脇村の名越家

鍛城の初代城主 森脇豊前守隆綱は 山内首藤氏の流れ 安芸国大事左に所領があったので 尼子氏の台頭につれて 尼子方の被官になった 森脇山城守家貞や 三沢氏の家老をつとめた 森脇治部左衛門と共に 尼子に加わった のち 馬木矢筈山 出城となったが のち 上月城後 毛利氏に味方した 子があって 森脇村に帰り 名越家に 妻をめとり 名越（なごえ）をなのる 森脇村の名越家の始祖となる

豊成の名越家は 宗家の妻であったが 宗氏が仁田田野へ同居したと 下って 豪士となっていた

その後 森脇の名越家が 中間（なかま）と屋号を定め 中間8代が分家して 古家間（こいま）を創立
中間11代が分家して 前中間（まえなかま）を築いた

この三家を 名越三家という

古家間 家業として 製鉄業（たたら）を営み 本家をしのぐ 勢となった 多い時は 山内家が 100人いたという
明治初年に廃業 間倉者 各地にあり 前中間は現存 上中間は絶家で 本家健在

本誓寺 白根家と桜井家によって建立
白根家 首藤氏の一族で 東口より下る 土豪となり 砂鉄経営 尾道屋と称す（高野町）
桜井家 高野の すみのくに移り 阿井に移る 一族は 西城町に土着したものに
小田氏（本部屋）がある
山崎屋 掛合城 落城の時 一子が逃れたのを 白根氏がかくまい 古家間より 妻をめとり 森脇村 子安氏となる

古いものの中にある心に愛着し　保存しよう

面に中西先生は先生の手を握ったまゝ頬の涙もぬぐい得なかったが、先生はすっかり感情もなくして了ったかのようにじっと瞑目して立ちつくしていたが、今も眼に残っている。昭和四十二年（一九六七）先生は静かに八十三才の生涯を終えた。

（筆者　横田町文化財専門委員）

ふるさとの歴史 ⑥⑦

奥出雲の古代を推理する ⑧

横穴墓の出現（下）

末永雅雄の「横穴墓文化考」

横穴研究は古代文化史における重要部分をもっている。古代国家の文化的推移のどこかに大きく接点を示す事実を解明するときがくるといえる

横穴古墳時代から飛鳥、奈良時代文化の発達について、重要な連続点を示すものである。（偏在するのは地質をえらばねばならなかったといわれる）

六世紀になると各地に群小の古墳がさかんにつくられるようになるが、群小古墳が数百基もまとまってつくられた地域には、多くの場合、屯倉（みやけ）が散在していたようである。（この点原島礼二の見解）両者の関係は深かったと見てよいが、これに似たものに横穴墓がある。全国分布をみると群小古墳よりも、はるかに限られた特定地域に分布し、百基以上も密集している地域はさらに限られてくる。

東北地方の太平洋岸南部。関東地方。静岡県東半部。北陸地方一部。　奈良、大阪の一部。島根の出雲部。九州地方。であって、

東北は福島、宮城両県で北限は宮城県北であり、その時代は奈良時代初期という。

関東地方は、太平洋岸の茨城、千葉、神奈川、東京で、内陸地域にあたる群馬、山梨などには極めて少ない。

近畿地方は、大和、河内、山城にのみ限られて、しかも局地的に限定されて分布していて、その数も全国的にみて少ない。

九州では、福岡、大分、熊本、宮崎、鹿児島にわたって密度が多い。

末永氏は私見ではあるとして、朝鮮ー日本海のルートが考えられるように、横穴墓にも、北九州ー太平洋岸北上コースを一応考えてはどうかといわれる。飛躍的だが、北九州の古墳装飾の方法が、これにのって北関東地域に運ばれたとする見方も生れる。

古墳文化の中心地では、造営が消極的となったのに、東日本にはなおこの考えが強くのこり、横穴に向ったと推定してはどうかと思う。

日本海岸の特色

最後に日本海に面して帯状に連なる山陰北陸地方には、六〇〇余の横穴群の周密な分布地域である。しかも大半は**島根県**の四〇〇群、石川県の約一五〇群がこれにつぎ、鳥取、福井、富山で合せて七〇群である。島根県では出雲、隠岐に集中している。又分布の稀薄な鳥取、福井、富山の三県では、数群からなるまとまりが、海岸線に沿って飛石状に分布している。

この地方の横穴構造は基本的に、出雲で盛行しているタイプと、南加賀のタイプ（羨道の長い）が存在する。出雲と加賀、能登を主要な舞台として展開する横穴群が、日本海を介する地域間交渉の所産とされることは、構造上の二系統の存在を含めた、七世紀代を中心とする政治、社会構造の理解にとって、見のがすことのできない問題をはらんでいるといえよう。

そこでこの分布と古代有力民族との関係を、古代文献を通じて考えてゆくことができる（原島礼二）という。

山陰と山陽

山陽地方の横穴墓の存在する地域は

広島県北部の江川流域

岡山県西北部の高梁川最上流域に集中し

山口県は山口平野と海岸部のみに散在的である。

広島県北部、岡山県西北部に分布する横穴墓は、形態からも出土須恵器の形式からも、後期古墳から終末のものといわれる。

これに対して備北に接する**山陰地方**、とくに出雲の主要古墳地帯では、既にのべた如く非常に多くの横穴墓の出現をみている（山本清）。地形や土質によるだけでなく、横穴墓を標識として、文化伝播コースの北九州ー日本海で、伝わったものであると考えられる。

山陽では現在のところ、安芸、備後の沿岸部には、まったく存在しないものであるので、山陰地方の横穴中心地帯と若干の時期的ずれをもちながら、その影響のもとに形成されたものとみてよいであろう。横穴群集地は、比婆郡庄原地域の備後北部、岡山県阿哲郡などの備中北部で、備前・美作には存在しないようである。するとこれらと出雲地域との関係は、六世紀から七世紀にかけての「古代出雲」と「古代吉備」の政治的関係からも検討の余地がある。

いわゆる出雲の征定は、伝承によれば神代のこととなっているが、現在ではこのことは必ずしも古い事件とはされていない。井上光貞氏によれば、津田博士の出雲征定は帝紀、旧紀のつくられた時代に近いという所論と、「出雲国大税賑給歴名帳」分析の二つの観点から、征定の事実を六

世紀に近いころと考える。藤間生大氏は、安閑紀二年の条（紀）や、後期古墳の群集墳にみられる階級分化の状態から、六世紀を考えられ崇神紀六〇年、垂仁紀二六年の条などから、六世紀初めをさかのぼらないではないかということも考慮されている。藤間氏は、この出雲平定に関して大和と吉備、とくに吉備のはたした役割は重く、吉備による出雲への植民ということが検討に値するものだとしその例を「島根県史2」の吉備津彦を祭神とした神社の出雲における分布から指摘している。さらに原島礼二氏は、歴名帳にみえる氏姓の分析のなかで神門郡の勢力と吉備との関係を指摘され、品治部君のような備後との関連をしめすものをあげている。（筆者は仁多郡の郡司・品治部に極めて注目をしている）

このような出雲と吉備との政治的関係について、六世紀以降の古墳文化のなかにもあらわれるという推測は、現実にこれを明らかにすることが極めて困難であるが、そういう視角もこゝろみられるべきであろう。

前述の横穴も、出雲地方に集中的にみられたものが、六世紀後半から七世紀にかけて山陽地方の山間地帯に分布することも、たんなる古墳文化の波及としてのみ、とらえるべきではない。そこには古代吉備と出雲の政治的な関係を背景として、出雲地方において横穴をつくった集団を、山陽地方の山間部に移郷させたのではないかということが、考えられるであろう。吉備の辺境地域にあって（当時備後も吉備国の範囲）、あたらしく開拓される農耕集団としておかれるとか、特殊な生産部門をになうということから、山間地帯がえらばれるなどのことが推測されるが、その具体的な様相は現在の段階ではあきらかでない。

（筆者考　— 備後北部の横穴群分布圏の中心部に熊野神社があり、古来からの崇敬を集めている。意宇の熊野大社、紀伊の熊野大社の祭神とも同じである。またこの地方の神社の祭神には、素盞之鳴尊が極めて多い。これらのことと製鉄技術者、労働者を重ねあわせて考えることは無理であろうか）

このことについて別な考え方もある。吉備の内部において弥生時代からの伝統をもつ集団の古い共同体体制を打ち破ろうとする動きが六世紀以降生れてきているが、後期古墳の時期に一般的なこととして指摘される階級分化を、こうした移住者が外から促進させる要因ともなり得たのではあるまいか。（潮見浩）

— 次号は七世紀の奥出雲 —
（高橋 記）

訂正

No.15 七月号の1頁

○「安部吉重郎」の項
「南北十間」を
「南北十四間・巾一間半」に

○「佐伯景幽」の項
「佐伯登」を「佐伯清」に
「弟大蔵があとをついだ」を
「角村の馬馳屋、和泉宇左衛門が養子となりあとをついだ。」

○訂正の再訂正
「明治年間」を「明和年間」に

たたら

六月下旬の日経、七月下旬の読売、八月中旬の山陰中央とNHKのニュースで、日本美術刀剣保存協会によって、鳥上の請国炉が復活されることが報ぜられた。日本刀鍛錬のためには、こゝで作られる「玉鋼」が唯一のものであることが結論された結果であるという。そして文化庁は技術者（村下）の後継者養成にのりだして、永久に保存する計画であるという。世界に誇る文化財が横田にふえたことになる。

私共の周辺にはこれだけでなく、幾多の貴重な遺跡が埋れている。しかも世界の製鉄史上欠くことの出来ないものとなりそうで、その発掘と保存が急がれている。愛好者はもとより、横田町民としても責務を認識しなければならない。

○双子谷「野だたら遺跡」
船通山の開拓地にあり、平安時代から鎌倉時代ごろのものである。（けら）をはじめ附近は、横田町によって所有を確保されている。

○蔵屋の「金屋廻たゝら」遺跡
わが国ではまだ全く発見されていない室町期から徳川初期の時代のものではないかとみられている。「野だゝら」から「高殿たたら」に移る過渡期の極めて貴重なものである。

○船通山の国有林内の「亀石高殿たたら」遺跡
No.13に紹介した卜蔵氏経営のもので、記録にも残っており、炉跡も完全に残りしかもそれをめぐった建物の敷地遺跡も広く残っている。飯石郡吉田村の「菅谷鈩」よりも約三百年古く、これまた貴重なものである。高殿たたら跡として最古のものである。

続々と貴重な出土品

最近、川西の圃条整備の現場から、奥出雲ではじめての埋蔵文化財が出土し、蔵屋の山砂採集現場からは、完全な人骨一体ほかがあらわれた。

古代奥出雲を推理するにもこの道のためにも貴重なものである。強力な文化行政を期待したい。

会員配布一部百円／六九九一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

横田文化

復刊 第18号
10月号
昭和51.10.2
奥出雲文化協会

ふるさと回想

私の見たこと聞いたこと②

―五反田にあった殿さん蔵―

森山庫一

殿さん時代・明治の稲作

殿さん時代（江戸時代）には、所々に殿さん蔵というものがあって、百姓達は殿さんに納める年貢米を、秋のしまい口にこの蔵に持って行き、その前庭で役人に受取ってもらい、それを蔵に積んだものであるという。

当時は今日とちがって、病害虫に対する予防法、防除法ましてや農薬などもなく、天候、気象の不順も多かったようである。稲作技術も今の如く進歩しておらず、こやしも化学肥料など夢にも無く、こやしといえば夏肥（堆肥）、藁肥（厩肥）、冬中囲炉裏（いろり）で木をもやしてできた灰とが主なものであって、それに、じじとぼんぼん、これは主に苗代の肥料に使用された。その他に田植の間近になってから、山に行って楢（なら）や栗の若葉等を刈ってきて田に鋤（すき）込むこともあった。これを柴草といった。

この柴草はよほど注意して施さねば、時によって稲熟病の誘因となることもよくあった。こんなわけで豊年の年よりも不作の年の方が多かった。

年貢米

豊作で全納されるようであれば、稲は何時刈ってもよかったが、今年のこの作柄ではどうしても全納することがむづかしいと思われる年には、前もって届出ておかねばならない。そして松江から地方（じかた）さんというその係の役人がやって来て、届出してある田の検見をしたり坪刈りをして帰る。それが終って稲を刈った。上納の石高は後日通知があった。

年によって、米上納の時と籾上納の時とあった。米は三斗俵、籾は四斗俵であった。納められた俵は駄馬で八代（仁多町）の問屋へ運ばれ、更に大原郡へと転送された。

（註ー当時は一斗桝（ます）と言っても、納桝という年貢をはかる桝は最も大きく、家臣に俸給として与える米をはかるますは小さく、その差は一割二分あったというから、殿さまというものは、ありがたいものであった。そのほかに二種類の桝の使用が、法令の上で許されていた。）

五反田の殿さん蔵での話

明治維新になると、五反田の蔵も不用となり、管理するものもなくなって放置され、屋根は破れ壁はおち空屋になっていた。五反田村の百姓達はよいものがあると、その蔵を村の（今日の部落）寄合場に使用してよろこんでいた。

明治二十四、五年頃の話である。ある晩こゝで寄合があった。何か算用事のためで銭（ぜに）をならべている間にだれかの一円ばん（札）がみえなくなった。さあ大変である。そのころはまだ盛んに四角な穴のあいた寛永通宝が、一厘銭として巾をきかせていた時代であったから、一円ばんといえば大金であった。田植賃一人役が、七銭か八銭であったというから、無理もない。この一円ばんが出なければ、小便にも外に出ることはならぬというので、

「早く、戸口の戸をしめておけ。」

「行燈（あんどう）の明りをもっと大けにせい。まだ誰も外に出た者はおらんから、この蔵の中にある。だれじがふところえ、ねじこんでおるにちがいねー。」

「だれも帯をといて裸になって、着物をふるえ」

「ふんどしもはずしてふるわにやいけん」

「めいめいの財布の中を調べるがよい」

『限りなく透明に近いブルー』

えがく世界は極めて身辺的で、触覚と皮膚感覚と嗅覚と聴覚と視覚によるもので、思考的主体がない。テンポの早いポルノ映画のコンテのようで、字面の深層に何かが鄭重にかくされていて、読むものをしてくみこまれるような深さをもっていない。動物本能を人間認識の基本にしている。ことの次第のさきゆきを遠望しようとする考えがないようだ。

こうした世界の様相についてのひとつの位置からの見方であろう。このような性の蟻地獄的なところにはまりこんでいる現状でも、理屈でなくて、少しでもつきはなして遠望するような志向がほしいと思う。受賞作品であるといっても、読者にはそれなりの読み方もあってよいと思うが、ベストセラーの値打ちはどうか。

自然をとりもどそう　金をかけても

「いや、もし一円ばんをもったものが何人もいた時にはどげ始末する考えだ」と、甲論乙駁。この時一人の知恵者があって、きてんのきいた提案をした。

「なんと皆の衆、行燈を消して暗くし、盆踊りをしようではないか、その間に出てくるにちがいねー」

やがて暗やみの中で、小源口説だか、安部さん心中だか口説く者がいて、ヤンハトナーイと踊った。しばらくして行燈に火を入れて明るくしてみたら、一円ばんが床の上に落ちていた。お金は出るし、罪人もつくらずにすんだということである。

その後

ますますいたんで、村の寄合どころではなくなった。私が八つになった年の四月から横田村尋常高等小学校に通ったが、それは明治三十六年で毎日その殿さん蔵の前を通った。草屋根の横長い大きな建物は、屋根のあちこちに穴があき、竹もくさって落ちかけたものが何本もあり、雨がもって土壁が落ちて小舞の見えるところもあった。その小舞が直径二寸もある長い木で作ってあったのは、私には印象的でいつまでも心に残っている。今日の小舞はすべて竹で作ってあるのに、木であるのが不思議でもあった。

その後ますます雨もり放題で、柱も床も腐れ果ててしまって、取りこわされ、片付けられて、敷地は田になり、今は近くの人の所有地となって菜園畠になっている。

殿さん蔵のあったこと。またどこにあったかも忘れられ知っている人も少くなってしまった。まぼろしになろうとしている。

（註ー一円札を一円ばんと言ったころ、一円銀貨の大きなものがあるにはあったが、それは地方には出廻っていなかった。追々五円、十円の札が発行されたが、やはり五円ばん、十円ばんといっていた。さつ（札）というようになったのは、私の記憶では昭和に入ってから、札の使用が一般的になってからである。）

（横田史談会員八十才）

古文書コーナー①

元治元年甲子七月一日、横田町の広島屋伝兵衛がうけとった任命書である。当主は松江在住であるが、現在の大市、西田村が広島屋であった。松江藩の陣屋が置かれ、郡内地主の息子が農兵として訓練をうけ、光栄に満ちあふれた様子や組織その他についての記録が残っている。

『覚　仁多郡横田町傳兵衛
右御陣屋守并農兵取引申付候条此段可申渡候以上
子六月廿四日　松本正助』

（伊藤菊之輔蔵）

ふるさとの歴史㊽

奥出雲の古代を推理する⑨

―奥出雲と備後との交渉―

山陰後期古墳の須恵器の編年

後期古墳で最も普遍的な遺物は、大陸系の須恵器で、その量も多い。その形式の変遷をもとに、蓋杯を目安にして山陰では、四期に分けて古墳の相対年代を考えている。

Ⅰ・Ⅱ期　製作が入念で、装飾もゆきとどいて、美しい形態をもっている。

Ⅲ　期　量が多くなり一般的に発見される。形もくずれず、装飾もきちんとついている。

この時期から後期通有の横穴式石室や、横穴が盛行しはじめる。

Ⅳ　期　便化した粗略なつくり品である。後半から蓋茶碗形式の土器が現われてくるが、本来の蓋杯の系統のものがなくなり、これのみも行われるようになるころ、古墳時代が終ると思われる。およそ奈良時代のころである。

横田の古墳時代の遺跡

現在判明しているものは、すべて後期のもので、六世紀から七世紀のものである。須恵器の編年をみると

天狗松横穴群　第Ⅲ期
岩屋寺山横穴　Ⅳ
小馬木矢入一号古墳Ⅳ
下横田五日市土器散布地
Ⅳ期終
（奈良時代ころ）

で横穴式石室をもつものは

小馬木矢入一号古墳
仝　二号古墳
仝　田食氏墓山横
大馬木亀井古墳

である。

横田の古墳時代

No.14で述べたように、横田の縄文、弥生時代は、山陽系の影響が濃厚であった。No.15のように古墳時代中期になると、大和が吉備を介して出雲へ進出しているから、この時代も影響が大きいと考えられるが、前中期の古墳は検出さ

古いものの中にある心に愛着し　保存しよう

れていない。すべてが、横穴式石室や横穴等の、後期通有の構造が盛行するようになってから以後のものである。したがって海岸部の主要古墳地帯に集中的にみられるような大形古墳はなく、墳形も前方後方、方墳と認められるものもなく、多くが直径十米か、それ以下の内墳かまたは横穴の、いわゆる小規模古墳である。

内部構造についてみると、多く割石あるいは自然石積みの横穴式石室で、狭長な玄室羨道の区別の不明瞭な、いわゆる袖無形といわれるものが多い。

ところが中国山脈を越えて山陽側をみると、この種のものが甚だ多く、むしろ最も普通の後期古墳の内部構造として盛行しているものであり、その文化の影響を受けたと考えることができる。このことは石見の江川流域においても指摘される。そして横田盆地から離れた馬木地区に、この種のものが濃密に分布するということは、山陽側に距離的により近いということゝあいまって、山陽の古墳文化の影響が、より強く働いていたとみることができる。

横穴についても、主要古墳地帯に多くみられる。入念整正な家形をしめすものでない。

これは出雲地方の主要地帯の周辺部において他の形式のものとともに、多く存在するものであり、その点出雲地方の周辺部の様相をしめしているが、その数が比較して少ないところに違いがある。

No.17で横穴の分布が、出雲を中心とする山陰に極めて濃密に分布しているのに対して山陽側には極めて数が少ないことを知った。先に狭長な袖無形石室について注意したのであるが、当地において横穴が少ないという事実にも、山陽系の古墳文化の影響を考えることができる。

尚、副葬品からみても、一般的にいってあまり上層階級の墓ではないと考えられるが最近、川西の圃条整備地から金冠が出土しているから、地方相当の有力者の墓もあったに違いない。

この地方は、山陽系文化のかなりの強い影響をうけた。

戦後横田文化小史⑨
読書会・懇談会・私設図書文庫

自動車文庫の移動

郡の西の端から東の端に移ったのを機会に、横田へもと話したところ、当時の主事さんの努力で実現した。利用者が少なかったが、読書会の結成までは時間のゆとりがなかった。立場も変って新しい負担が加わったためである。

こゝでは戦中の昭和十五年ころから敗戦まで、青年の読書会がまがりなりにも営まれていた。紙の統制は本の購入も困難にしていた。焼失する前の県立図書館へ再度たのんで、箱入りの巡回文庫を借りることになった。当時なんでも特別のはからいでということがまかり通っていて、やたらにめんどうでもあった。さんどに松江から運んでもらった重い本箱を、自転車で、時には荷馬車にたのんで、石ころの多い道を運んだ。

農村振興をテーマにして貸出しをうけたのであったが、時代が時代だけに、堅苦しいものが多かった。

内原訓練所に関するもの、国体明徴、日本精神についてのものがそれであった。読まれたものは、松田甚次郎の「土に叫ぶ」とか、宮沢賢治のもの、菅原兵治の「村を護る」などであった。しかしどうして、増産するかが中心課題となり、それも利益ぬきの話であった。従って精神主義に傾いていた。だがこうした営みも、下手をすると、看板を明瞭にしないと、にらまれる時代でもあって、調査と称するしめつけがきびしかった。

新しい文庫ととりかえるために拙宅まで持帰っている時に、敗戦そして県庁焼打ち事件で、しばらくそのまゝになってしまった。当時の本箱と二宮尊徳に関する本が数冊、手元に残ったまゝである。

敗戦から

大変であった。読書会は民主主義研究会にかわり、急に人数がふえ、どうしても盛上らなかった今までの読書会と違って、志願兵帰りの諸君も加って激しくなった。風にそよぐ葦にとってはつらかった。

それでも教育をうけた時代の自由主義思想が、その時大変に役に立ったが、三十才の男には重荷であった。当時の若い諸君は、今この地方の職場で、定年を迎えようとしている人達である。

恐らく本とのかゝわり合いで、ある時間が通りすぎたことがあったという記憶しか、当時の若い人には残っていないかも知れない。が私にとっては、あちこちで借りては読み、そして抄録したノートがうず高く残されている。そして今日までその習慣が、毎日のように続いている。生活の一つになってしまった。何もしてあげられなかったのに、私には貴重なことを教えてもらったことになった。（T）

— 次回から演劇活動 —

出雲古墳文化圏の周辺部と考えられる。製鉄関係の遺物も出ていることは、八世紀の初めの「出雲風土記」の仁多郡の条の鉄のことにつながることを示すものである。（以上は主として蓮岡氏の考察を引用した。）

備後南部の古墳

広島県府中市を中心とする備南の、品治地方（一郡程度の地域）には、古墳中期後半から後期にわたる。四基の前方後円墳と一〇ケ所以上の主要古墳が、三〇〇ケのおびただしい小古墳群にとりかこまれている。しかも各形式が、年代順に営まれていることは全国としても例がなく、変遷過程が一目瞭然とわかり、年代が下降するにつれて、大陸の高度の文化を積極的に摂取している事実があるという。

品治地方の豪族の成長と底力を示している。

文献からみたこの豪族は

吉備品治国造のことが、旧事紀の国造本紀にみえる。吉備（美作、備前、備中、備後）に君臨し、大和政権に対立した吉備連合政権の統率者が吉備国造で、その支族で品治地方に住んだものである。No.13に述べた如く、六世紀に品治国造は、大和政権の吉備国分断によって、半独立している。

この六世紀には小型古墳がおびたゞしく出現する。それは小首長墓であり、鍛造具を出土する。その中心は、吉備の中国山地方面の、三次、新見、津山地区で、爆発的に出現している。

そもそも吉備族は、半島の大陸文明が日本に伝播する重要な橋がかりとなったものである。（日本海ルートに若干おくれそして主流となった瀬戸内海ルート）時には新羅と提携して大和政権に対抗するほどであった。これを証拠づける考古学上の遺跡や遺物がかなりある。品治地方（品治国）にもそれらが多い。

三代実録、清和天皇の貞観六年（八六四）には、備後国品治郡（今日の芦品郡は芦辺・品治両郡が合併したもの）の品治公（臣姓は大和に反抗した氏族に、公姓は早く大和に服属した氏族に与えられた）がある。**大化の改新**（六四五）で国造が廃官となったから、一部はその地に残り、直系は大和へ移っている。このかつての品治国造一族の奥津城が、この古墳群であると考えてよいと思われる。そして品治地方の古墳には特色があり、しかも時代の推移が歴然としていることは、その周辺地方に例がないという。

（以上は府中市、県立高校の受賞研究「古代吉備品治国の古墳」による）

奥出雲との関連

No.15でみた如く、奥出雲の口部にあたる。三刀屋と加茂の中期古墳に、吉備的色彩が濃厚であるということは、この時代にも吉備からの奥出雲越えのルートが存在したと考えられる。

このころは大和が吉備を介しての出雲への進出時代で、この地方はその集団の経過地であり、若干要所要所に転留者を残置していたものと考えられる。（次号でさらに考察）

その先端基地が三刀屋、加茂であったであろうか。一方品治国の成長、六世紀に入ると、出雲が有するよりも新らしい、大陸渡来の製鉄技術をもった集団が、吉備の海岸部から、中国地方深く移住しはじめたのであろう。その一中心が、三次市双三郡地方で、備後では圧倒的多数の二〇〇〇余（前方後円墳四四）の古墳を作り出したと考えられる。（これが波久岐国の成長と考える説にくみしたい）

この影響は当然奥出雲に及んだのである。

やがてNo.17でみた如く、出雲族の集団移動もあって、出雲系の横穴墓の出現となったではあるまいか。

（須佐之男命を祭神とする神社が備北地方には、一五〇以上あるというが、こゝらにも何かを想像することはできないであろうか？）

（次号は出雲における「品治」族）

（文責・高橋）

あとがき・さきがき

No.10で「文化を育てるために、どこかのサンプルによらないで、この地の歴史をふまえて、現状をより生かし改善する発想もあっては」と……

追々、次のような項目について、若干の具体的事項もてがかりに、文化づくりの考え方のたわことをのせてと……

△みる夏祭りを、やる夏祭りに（子どもも含めて）

△眠っているものを生きかえらせる市街地の環境づくり

△地元の大学、高校、義務制校と、地域との関連の深まり。

△生涯教育の一つの方向（青年婦人も含めて）

写真展

「奥出雲横田の願」と題してかくれた風物誌と躍動する物産・観光ならびに文化財の、芸術的記録写真展（全紙大100枚と物産展示）が、町観光協会によって、松江県民会館にて10月23・24・25日に開かれる。

鑑賞作品展

昨秋、今春に続いて、この秋、「書」の美しさを味う催を計画中。

会員配布　一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

出雲文化
復刊第19号
11月号
昭和51. 11. 6
奥出雲文化協会

△近代詩文書と私　△船通寺の存在は　△古代奥出雲の豪族（上）

「せんちぢやま」は「船通路山」である

展望台

半世紀も前の五月二十七日は海軍記念日であって、船通山まわりの小学校は、この日この山をめざして、小学生の健脚をきそわせていた。頂上へたどりついて、初夏の青空の下に、東に大山・米子を、北に宍道湖、島根半島そして隠岐島を、西に大社の弥山、三瓶山を望むことができれば何よりのよろこびとし、足下の自分達の村の盆地をみて、ふるさとへの心を強くしたものである。当時は地元から一歩も出ることなく生涯を終える人の多かった時代であるから、年寄たちは「せんちぢやま」に登って、遠くを望むことにこまごまと気を配って助言をしてくれたものである。

二十万分の一の地形図が今眼の前にある。横田盆地や八川からみると、鞍部を中央にもつ特色ある船通山のなだらかな山容が浮び上ってくる。地図をまわして、岡山（吉備）方面からみると、丁度その逆な形が浮んで来る。古代から出雲をめざして来る人々は、吉備から伯耆から、この山の形を目標にたどりつき、出雲を一望のうちにおさめてさらに動き出したのである。そして歴史がくりひろげられた。

地名のでき方

日本で地名学をはじめて完成した鏡味完二の書物によると、風土記編集の八世紀の大昔から、地名の意味を付会しようとする。よくないならわしがあったからとして、慎重に研究を進めている中に「船越」がある。北海道から九州まで五〇に及ぶ地名があるが（船通山の東北にもある）それも海岸部より内陸にあるものが多く、前者でも海辺でなく、五〇米以上の丘陵部に多い。「舟のような地形を越える山」「横からみると舟のような形」「船形にくぼんだ山の鞍部」につけられていて、海洋を渡来した人々が、めじるしにしたものであろうという。別に「経て通す」「ふな越す」「舟（ふな）通すみち」と転じたでき方もあるという。古代の通路は山の峯伝いや特色ある峯を目標と定めて下って登ったものである。このことは平安時代からの山伏達の山野踏破の記録にも明らかである。そして船通山が、それをめあてに登ってゆくと、急に眼前に突立ってそびえてくるから、「通り上の峰」　要路の通りの上にそびえる上鳥上の峯（山）となったとも考えられる。

諸記録の中から

「記」には「鳥髪の地」。「紀」には「鳥上の峯」。「出雲風土記」には「鳥上山」とある。

戦国末の備後の軍事記である「久代記」には「鳥上神の獄」とある。（但ずっと後の作と考えられ、出雲の地名には誤りも多い）

「出雲風土記抄」（天和三―一六八三）には「故に俗に船通山」とある。「雲陽誌」（宝永二～享録二―一七〇五～一七）は足利時代よりの神社仏閣について詳細にしるされて信ぴょう性の高いものであるが、これには鬼神大明神の頃に「此所を船通山という、土人船燈山とも呼ぶ」とし「鳥上山を今里俗船通山という」とある。さらに下って、宝暦年間（一七五一～六四）につくられた。松江藩の貴重な記録「雲陽大数録」には、順見帳の名所旧跡の中に、「稲田岩屋寺、横田八幡、舟通路山・鳥上峰」とある。藩主が竹崎卜蔵家に泊った詳細な記録その他によれば、稲田は鶴の飛来地として、岩屋寺は唐伝来の楊柳観音の軸物、八幡宮は武神、船通路山には瀧ありと誌されている。

田植歌の「せんちぢがヤーハし、栂の木がヤーハレ」は船通路山をなまったものと考えられる。共同作業の労働歌としての田植歌の発生の問題ともかゝわるのであるが、徳川中期に一般化したとする説に従うと、ピタリと一致することになる。

船通寺はなかった。

「日本刀及日本趣味」（編集者栗原彦三郎、昭和十一年創刊）の第三号（十一年　月号）に柳原隆の「刀匠伯耆安綱」の研究が載っている。日本精神が強調しはじめられたころの華やかな文章であり、家伝の古文書によるとして伝記がのべてあるが、今日の研究によれば（佐藤寒山ほか）

経歴には不明な点が多く、時代も百年以上も下ることになっている。安綱の銘のある国宝の刀も、大同ごろ（八〇六）の坂上田村磨の佩刀した直刀時代のものでなく、永延（九八七）ごろのものと伝えられる吉備前友成などと、共通する完成された太刀姿を示すものであるから、今日では

青年・婦人・成人の教養を深める新らしい場を生み出そう

平安後期の作とみるのが、妥当とされている。

第六号で栗原彦三郎は、「元元安綱が大和より伯耆に到りし動機は二つの方面から考えられるのである。即ち一は当時新羅の海賊船しばしば山陰北陸の沿岸を侵かし良民を脅威するを以て、朝廷は雲伯両国の国守以下庶民に到る迄刀剣を佩用すべき勅令を発したるため、同地方に急に多数の刀剣の必要起りしと、一は当時伯州大山にも数百若しくは数千の僧兵あり、雲州の鳥上山なる船通寺にも亦数百千の僧兵あり、共に刀剣の必要ありしため、安綱は一門の多数の刀匠を引率して安綱自身が宗教上多少の関係ありし船通寺と里余の地点で、良鋼の最も豊富に産する大原の地を選んで移住し、最も盛大に刀剣鍛造に従事したと云うことは、当時の事情と今日尚方一里に近き大原部落が鍛冶の鉄滓に埋まるが如き事実と総合して之を充分に相像し得るのである。……同時代製作で日本最古の木像と言われる鬼神社の木像は、直刀でなければ調和せざる服装である。……」と述べている。こゝに船通寺がみえるのである。

大原は伯耆国内に三ケ所あって、どことも確定されていない。鉄滓のことも印賀鋼の製造盛んな徳川時代のものをさしている。新羅来寇の記録はあるが武具のことは記録になく、来寇も安綱の生存時代より百余年前のことである。鬼神社の木像とは、県指定文化財となっている伊賀多気神社の神像であって鎌倉時代のものであり、直刀の服装でない。その他にも誤りがあるのは、皇国史観時代であり、しかも刀匠であった栗原にとってはやむを得ないことであった。そのすべての批判は本文をはずれるので　船通寺のことについてのみ以下ふれる。

結論を先に述べると船通寺はなく、全く栗原の創作になるものであるが、創作するに至る理由も考えられるので、その点を詳述する。「日本刀及日本趣味」の一巻八号で再び栗原は「出雲の船通寺、伯耆の大山僧兵」とかき、二巻四号には「寺院に僧兵を置くこと流行し、出雲の船通寺、伯耆の大山寺」と書いている。

栗原は編集責任者であるとともに、大日本刀匠協会副会長であった。昭和十一年四月横田を訪れて、「余が三十年の努力は結局無駄骨なりしことを発見……」と、たたら製鉄による良鋼生産地をつぶさにみた紀行文を、創刊号の紙数の殆んどを費してのせている。栗原にとっては新しい出発の意気込みがありありとみえるものである。地元の名士の歓迎振りも盛大で鄭重なものであったようである。百行に及ぶ「船通山霊を祭るの賦」の詩などには、日本精神の華も歌いこまれている。しかも短時日に、広く視察がなされ記録されているのには敬服すべきことが多い。

この紀行文の中で船通寺の確証を得たとして、こゝから安綱論が構成され、砂鉄製錬についての研究の出発がはじまったようである。文中に「瀧の上に登れば数万坪の平原あり、昔は行基菩薩の建立にかゝる船通寺あり、多数の僧房もあり、山陰の豪族信仰する者多く、隆盛を極めしも、足利時代の頃廃寺となり、今は一の堂塔も存せず、本尊のみ横田村の某寺にある由、恩田神官詳しく語らる」とある。

国府犀東がこの地を訪れたのは大正末年でこれより十余年前のことである

恩田神官とは現伊賀多気神社宮司の先代である。文中随所にみられる寺社の史実の混乱している書き振りから推理すると、郷土史にもくわしく話術に巧みであった恩田の説明が、栗原の記憶の上で混乱し、我が意と思うところが創作されていったのであろう。だが恩田は多分次のようなことから判断すると、比較的忠実な説明していたと思われるのである。

善徳寺の仏像

恩田神官の近親者に著名な郷土史家伊藤菊之輔氏（松江に現住）がある。伊藤氏は広島屋といって、現在の大市吉重橋南詰の西田村の家で、幕末までは手広い商家であった。

その菩提寺が西方の善徳寺で、そこに古文書が多い。天保八年（一八三七）七月、伊藤伝兵衛の署名のあるものによると、去る六月二十二日失火によって大市の四十六戸が焼失したが、残ったのは伊藤の住居倉庫、善徳寺だけであった。（その他の記録も同じ）七月三日の火事場の片付けの折善徳寺の仏像の台内に封書があるのがみつかった。（この仏像は善徳寺境内の奥の堂（易行庵）に安置されてあったもので前年、伝兵衛の努力によって念願の修理が行われたものである。その時には発見されていない）それは当時を去る一二五年前の正徳二年三月二十八日に、八世の立意和尚が書いた「霊夢を記する」というもので、内容は易行庵本尊への勤行おこたりなければ、火難をまぬがれることは間違いないというお告げが誌されていた。それとも知らぬ伝兵衛の本尊修復の行いが通じて、この度火難をまぬがれたということになると仏恩の有難さを讃えたものである。

「易行庵濫觴」の記

善徳寺は三沢氏八代惣領遠

（4Pへ続く）

近代詩文書と私

書家　米沢天涯

私たちの追求する近代詩文書の道は、まだ生まれて三十年しかたっていません。それだけに新鮮な魅力にあふれています。もともと中国の書は漢字が主体となっていますが、これは漢文が当時の通用文だったからです。したがって、漢詩や漢語を素材とする書は、もはや現代の日本人には読めないものとなりました。

私たちはいま、私たちに身近かな現代の詩や短歌や俳句などのいわゆる近代詩文を、日常使っている漢字かなまじりの通用文で書こうという運動を起こしています。現代に生きている私たちにとって、現代の生活感情や時代感覚にふさわしい書を作ろうと考えることは、当然のことだといえます。

思えば中国のすぐれた古典の数々は、その時代の生活の中から生まれたものです。私たちが漢詩文でなく、日本の国語を素材として、現代の若い人々にアピールする現代感覚をうたいあげることは、歴史的に大きな意味をもっています。日が

第28回毎日書道展　秀作賞　米沢天涯

な一日ハンマーをにぎり、つるはしをふり上げる労働者や、炎天下に田草取をする農村の青年たちに書かれる書、それこそが近代に横溢する新しい書ではないでしょうか。

現代に生きる私たちは、いろいろな願いや、思いや、不安を持っています。喜びや悲しみ、自然の美しさへの讃美や怖れなど誰もが抱いている共通のものから、自分の生き方に対する不安や欲求や願望など、さまざまな思いの中に生きています。それらの思いや願いをひっくるめて、その底に流れているものは「もっと人間らしく生きたい」という願いであります。

現代の社会が複雑化し、多様化し、機械化されていくにつれて、ますますこの願いは深刻になっていきます。それは素朴な人間同志の心のふれ合いが失なわれ、人間一人一人が孤立化してしまうからです。そうした中で、人間や自然のあり方をさぐりあて、とりもどし創りだそうとすることは並たいていではありません。そこから芸術への私の思慕が生れてきました。人間らしく生きたい願い、それはもはや一部の人間だけのものでもなければ、またそうした願いを満たしてくれるものの探求を人まかせにしていたのでは、ほんとうの人間らしさが得られないと思うようになったからです。

私は私の書作に詩情を求めます。詩のあるところに人生のうるおいと安らぎを感じます。私は近代詩文書を通して私の作品を見つめて下さる方々に、詩のこころを訴えたいのです。世界にとっても、日本にとっても、いま一番大切なことは「豊かなる詩情」をとり返すことです。横田の皆さんにも、私のこの切なる願いに共鳴していただきたいのです。

これからも私は、私の心をゆさぶる近代詩文を、詩情豊かに書き続けたいと思います。私たちの周囲にはたくさんのすばらしい言葉があふれています。はげましの言葉、いたわりの言葉、決意の言葉、感動の言葉、讃嘆の言葉など、私たちの心をうるおしてくれることばの数々を、いつもみずみずしい感受性をもって受けとめたいと思います。生きているあかしとして、この新鮮な感動を私たちは書作の中で、いつまでもうたい続けたいものです。

（松江市砂子町二〇五）

写真はことしの夏、第二十八回毎日書道展で秀作賞を得た作品です。西条八十詩「美しき喪失」の中に集録された「檻」の一節で、夕空のイメージを主観的幻想的にうたった象徴詩です。

「黄金の檻（てすり）あり　紫陽花（あぢさい）の蔭に　燦（きら）めく釵（かんざし）のごとし」

米沢天涯氏は前松江県民会館長「日展」入選十数回ほかの書家です。

米沢天涯
作品展
11月21(日)・22(土)・23(祭)日
横田ショッピングセンター
ギャラリーにて

江守為忠が、出家し東本願寺で真宗に帰依し、永正末年、現在の横田駅の南方台地に草庵を営んだのがはじまりである。その後大風のため倒壊し荒廃していたのを、寛延四年（一七五一）現在地に移して再建したものである。旧地の更に南の谷に通俗奥の堂とよぶ易行庵があったが、それもこの時境内に移した（現在は堂を廃して本尊は本堂にある）

鑑觴の記によると、易行庵は船通山（太古船路が通っていたからこう名づける）の鳥上力嶽にあった。慶雲三年行基菩薩が当地遊歴の折、この庵の阿弥陀如来三尊と、岩屋寺の本尊十一面観音と、蔵屋村毘沙門天をつくった。

そののち七百余年後の天正二年（一五七四）岩屋寺の快慶和尚が夢の中で『船通山へは衆生がのぼりかねて、仏像を拝することがない』との知らせを受けたので、岩屋寺の出資で善徳寺の奥に堂が建てられて安置されたという。

岩屋寺の本尊を行基の作と伝えるが作り方が全く異っているし、毘沙門天は平安時代のもので、その由来は全く別のものである。岩屋寺も、又蔵屋の毘沙門天もともに、松江藩主の崇敬が厚かったことが記録に残っているから、それらと結びあわせて権威づけようとしたものであろう。「易行」という言葉も真宗特有のものであるから、昔から易行庵があったとは考えられぬ。快慶は実在の人物である。三沢氏と縁のある寺であるから当時は三沢氏が郡内に在住時代、その意を迎えるためにここに移したものであろう。鳥上瀧のあるところは海抜八六〇米、高野山が七〇〇米余、大山寺も同じ高さのところにある。

山岳仏教の寺院も八百米以上の灌木地帯には建立が不可能であった。想像すれば鳥上瀧にうたれて修業した修験者（山伏）が堀立ての庵をあんで仏像を刻んで去ったものであろうか。修験者のこの地の中心であった岩屋寺が、放置されるのをみかねてこのようにしたものであろう。仏像のつくりも、粗末な戦国期以後のものである。岩屋寺に二十一坊が存在し得たのは、横田庄が京都石清水八幡宮の荘園で、その庄官も兼ねていたからである。僧侶も僧兵も流行したとはいえ、荘園をもつかそれにかゝわり合いのある寺院にしか許されないことであった。天文年間の快円日記の中にある、岩屋寺復興のための各僧坊への人夫割当などの記録から推定すれば、二十一坊で、六、七十人多くみて百人の僧がいたことになる。その上動員出来たのは、各村々の寺庵や権現社に一人位宛たむろする修験者即ち山伏であって、合わせてせいぜい一五〇人から二〇〇人位の僧兵がかりあつめられたのである。大山寺は大きい荘園をもっていたから岩屋寺とは格段の違いがあった。船通山麓に僧坊僧兵を維持する荘園があったこともなく、またそれほどの土地もない。もしあったとすれば、室町期の記録も残す雲陽誌に何か片鱗がなければならない。船通寺は全く栗原創作の寺で、刀剣史のために利用されたものである。

既に論究したように、砂上の楼閣にすぎない。

こうした誤りは仁多郡史にも数多くあり、島根県史（旧）にも新修島根県史にもあるので追々それも訂正してみたいと思っている。

（横田史談会　高橋一郎）

ふるさとの歴史 ⑥⑨

奥出雲の古代を推理する ⑩

—古代出雲の豪族（上）

これからの推理の上で、是非共ふれなければならないのは、部民制・氏姓制度等の問題である。これらは五、六世紀の頃の社会体制を種々な面から呼んでいるのである。しばらく御心棒頂きたい。

①部民制

は手工業の発達という視角から発生したものである。

中央政治の支配　五世紀中頃になると国家体制の整備と拡大のために、大和政権の内部に職掌の分化がみられるようになり、舎人部（とねりべ）・靫負部・大伴部ー（伴）ーをひきいた大伴氏ー（伴造）ーと物部ー（伴）ーをひきいた物部氏ー（伴造）ーで軍事を担当し忌部氏ー（伴造）ーは諸国の忌部ー（伴）ーをひきいて祭祀を掌るようになった。つまりトモノミヤツコ（伴造）→トモ（伴）という体制が生れた。

手工業の支配　五世紀の後半から戦争の需要と鉄製器具の普及のために、手工業も急速に発達しはじめた。それに応じて職業部民（品部）が広く朝廷への貢納を目的として編成設置された。特殊な手工業集団は、土師（はじ）部・玉造部・弓削（ゆげ）部・鍛冶部・楯縫部・鏡作部などで、これらの技術的発展にとくに大きな役割を果したのは帰化人であった。かれらによって新らしい技術が伝えられ指導されて発達した。

四、五世紀の頃に帰化したのは楽浪郡の滅亡によって逃れて来たものが多く、五、六

世紀の頃の帰化人は、百済に対する高句麗、新羅の圧迫によった百済人が多い。従って五世紀末から六世紀初葉にかけて急速に発展し、トモノミヤツコ ↓ トモの制度は、百済にならって 部（民）の字をあてるようになった。

帰化人系の技術に関する部民としては、韓鍛冶（からかぬち）部・陶（すえ）部・錦織（にしこり）部などである。

その後手工業者ばかりでなく、記録、財政をはじめいろいろの部が生れた。以上のように中央政府や手工業生産の運営をめぐって、部民制とその支配が確立していった。

農業生産の支配

こうした部民制支配の方式は、農業生産の上にも拡大されはじめた。

大王（天皇）直轄地、屯倉

すでに大規模な土木事業で新らしく開拓された河内平野には、次々と新しい屯倉（みやけ）が設けられた。耕作民を田部と呼んで、こゝに部民制が拡大した。本来は倉庫だけを言ったが、やがて倉庫、土地、耕作民（田部）をも総称するようになった。現地に田令を派遣して田部の耕作を監督し、収穫物は官舎に収納した。屯倉は大和政権が直接設置したものが多いが、あとで述べる豪族の私有地である田荘（たどころ）が、贖罪、献上等によって没収されたものもあった。

その後、名代（なしろ）といって、天皇の名を付した直轄地が各地に設けられ、子代（こしろ）といって皇子皇族の名を付した直轄地も各地に設けられ、その地の耕作農民は部民とされ各その長に統率されることになった。

豪族の私有地、田荘

朝廷の直轄地にならって諸豪族も私有地をもちはじめ、附近の農民を部民として支配しはじめた。管理経営の方式は屯倉と同じであった。そしてそれが次第に地方の諸豪族にも及ぶようになった。

②部民の種類

伴部　大王（天皇）の直轄地の部民で伴造に統率された。

大王（天皇）―伴造―伴部
- 屯倉の田部（耕作農民）
- 鍛冶部などの品部（手工業部民）

品部は地方へ下った技術者によって、その地で組織され、中央につながったので、各地に散在もしていた。

部曲（かきべ）　諸豪族の私有の部民で豪族の名を冠して大伴部、物部、蘇我部とよばれたことが多い。地方豪族の部民は国名をつけて吉備部などと呼んだ。

大王（天皇）―（大・中・小）―部曲
- 農業部民
- 手工業部民

中央豪族：大連・大臣

「部民」は伴部・部曲の総称でとくに六世紀以後百済の「部」の組織にならって、この字をあてるようになった。

③氏姓制度

このように支配組織が整備して来ると、大和政権は諸豪族に「氏上」として「姓」（かばね）を与えた。氏上は氏を統率し、その統制権、裁判権、氏の守護神である氏神の祭祀権をもって、氏人やその下に専門職として従っていた部民（部曲）を統制していた。

中央

大王―氏上（大氏）―氏上（小氏）―氏人―部民（部曲）

大氏、小氏に姓（臣・連・公（きみ）・別（わけ）・造（みやつこ）など）を与えた。この姓は朝廷における身分格式をしめし世襲された。とくに臣・連は尊ばれ、最強の豪族が大臣、大連として、大王を補佐し国政に当った。

地方

大王―国造
- 県主―部曲（部民）
- 稲置―部曲（部民）

姓（君・連・臣）

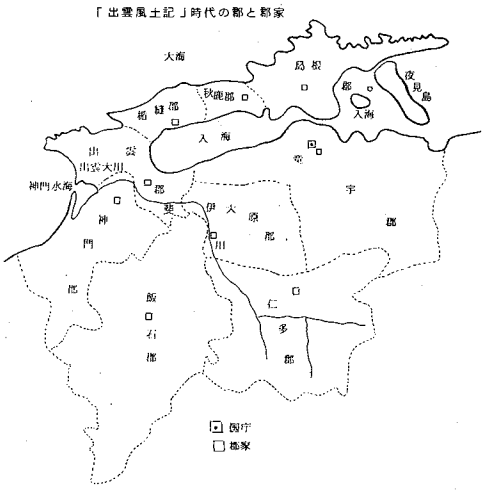
姓（首・直）

一方、地方の豪族の有力なものには、臣・連・君・首（おびと）・直（あたい）などの姓を与え、それぞれの地方を治めさせた。（姓の与え方についてはNo.11の4Pに）そして国には国造（くにのみやつこ或はこくそう）を置き、その下に県主（あがたぬし）・稲置（いなぎ）が置かれて姓は首と直、とくに直が最も多く与えられた。

④出雲に於ける有力な氏族

七世紀中葉の大化改新（六四五）以前の、直接の史料はないが、奈良時代の状況をみればおおよその推察ができるであろう。律令時代の有力豪族の中から任命されているからである。八世紀奈良時代は「出雲国風土記」（七三三）や正倉院文書の「出雲国大税給歴名帳」（七三九）等に

「出雲風土記」時代の郡と郷家



子どもが伸び伸びと育つ社会環境を作り出そう

よって知ることができる。

出雲本来の氏族

出雲臣及び一族　郡司八人
神門臣　郡司一人
他に五氏（臣姓）

出雲氏 ― 出雲第一の有力豪族である。千家、北島の祖である出雲国造の一族である。他国の国造が「直」姓であるのに、吉備などとともに「臣」姓を称える国造の中でも特異な存在であった。おそくまで強い自主性をもち、小さい地域の国でなくほぼ後の出雲の全域を配下においたのである。（臣姓は中央に遅くまで反抗し、後に服従した地方豪族に与えられ、国名に臣をつけた。）　四世紀中頃から政治的支配をゆずり、祭祀国家的性格を維持した豪族であった。

そうしたことから出雲の豪族と同族化が進行したと考えられる。

高崎正秀、青木紀元、守屋俊彦、松前健らの巫覡（ふげき）信仰宣布説によれば、出雲は、特別な政治的な勢力や武力があったのではなく、シャマニズム（神がかりして神意を告げる原始宗教）やこれに基く医療、まじないなどの呪術を持つ特殊な信仰文化の中心であり、それは地縁的な従来の氏神信仰とは異なり、出雲から中国、九州、近畿、北陸、東国などにいたるまで全国的にみこらによって宣布されたのであり、これが大和政権によって大きな宗教的勢力として映り、出雲神話がつくられたとする説もある。（No.11の出雲族の進出とも考えあわせてみると興味がある）

その他神門氏が有力で、他に五氏があるが、いずれも臣姓であることは、出雲臣と同族化された結果であろうとされている。そのほかの臣姓氏族は、名代（なしろ）、子代（こしろ）、品部などの統率者である。

その他の氏族

㋑名代（天皇の直轄地）
蝮部（たぢひべ）
― 反正天皇の直轄地
郡司二人（臣姓）
ほかに五氏

㋺子代（皇子・皇族の直轄地）
品治部（ほむちべ）
― 垂仁天皇の皇子誉津別命の直轄地　郡司一人（部）
ほかに六氏

㋩品部（ともべ）職業部で地方集団がごっそり、或は村落内の若干戸が組入れられたものとある。
日置部（戸籍に関する）
郡司三人（臣・首姓）
ほかに十六氏

㋥中央豪族の部民或は伴造
大伴部　物部

㋭地方豪族の部民の伴造
吉備部　郡司一人（臣姓）

㋬㋭はほかに一五氏

⑤各氏族の出雲における勢力

「出雲風土記」の出雲国内の郡司は三三（臣姓三〇、造姓一、首姓一、史姓一）名いた。

生えぬき　出雲臣八　神門臣一
高善史一（帰化人系か）

名代・子代　刑部臣三　蝮部臣二
蝮朝臣一　大和造一　品治部一
日下部臣一　若桜部臣一

品部　勝部臣二　社部臣一
社部石臣一　額田部臣一
海臣一　物部臣一
日置部臣一　日置首一

中央　大臣一　林臣一

地方　吉備部臣一

不明　□□部臣

臣姓以外の郡司を検討すると、大和造は皇后の封民で子代であるが、勢力があったとみえて、その下に出雲臣がいるが、のちこれは意宇郡大領と出雲国第一の郡司となり、国造もかねた。高善史は帰化系とみられ、楯縫郡の少領である。大原郡の主政に土着の日置臣、飯石郡の主張に土着の日置首がいる。

（郡司は大領、少領、主政、主張がその階層である）

仁多郡には大領 ― 蝮部臣、少領 ― 出雲臣、主張（書記役）― 品治部である。品治部は姓がないから、名代の部民であったと思われ（後で詳述）土着したのち次第に成長し、その小地域の統率者となり、特殊な職業にも従っていたと思われ、他国との往復もあって、文字を知る知識人であったと相像される。

出雲固有の氏は極めて少ない。大和政権およびそれをとりまく中央有力豪族が、出雲の人民に対して、氏という機構によって支配する組織が、少くとも大化改新までに徹底していたことをあらわすものである。出雲でさえこうであるから、石見、隠岐についてはもっと徹底していたであろう。

あとがき

好評だった写真展

町観光協会主催の「奥出雲横田の顔」写真展は、十月下旬三日間松江の県民会館で開催。横田フォトクラブ会員の一一〇点の作品は力作揃いでこの種のかたい展示会としては、記録的な入場者で、一三〇〇人を超えた。三日間とも開扉直後から閉扉まで、人の流れが絶えることなく、それもわざわざ見物に来た人が殆んどであった。ゆっくり二時間近くみる人もあり、石西や鳥取県その他の県の方もあり横田への関心を高めた。横田に縁のある方には、古きよき横田と躍進する横田を十分に感じて頂けた。中でも玉鋼製造など豊かな文化財の写真、そろばんの製造工程の実物、美しい工芸品、船通山、吾妻山の写真の前では、長くとどまる人が多かった。

本誌十二月号の特集

「奥備後の出雲街道」の興味深い陰陽交流史の長文を掲載。筆者は広島県庄原市文化財専門委員の広瀬氏。

会員配布一部百円／六九九一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

横田文化

復刊　第20号
12月号
昭和51. 12. 4
奥出雲文化協会

△奥備後と奥出雲は同一生活圏であった。　△横田史談会今年一年を振りかえって

奥備後の雲州街道

広瀬繁登
広島県庄原市文化財保護委員

新旧二線の雲州街道

雲州街道とか出雲往還なる呼称は、古文書に見られるだけで、現在の人々の言葉の中には出てこない。僅かに郷土史同好の人々や、詩歌関係の人々にはなつかしい余韻をたえた言葉として生きているにすぎない。このよい名前が消えたのは、三次・庄原・西城を結ぶ国道一八三号線の庄原から分岐した県道名がこれに代ったからである。庄原から比和を経て高野山に向う県道を高野山線と呼び、庄原から口北を経て高野山に向う県道を口北線と呼ぶ。この二線は何れも出雲街道であり、現在は高野山線が主要幹道となっているが、口北線が少なくとも中世以前は栄えた古い出雲街道であった。

現在は何れも庄原を基点としているが、旧出雲街道は庄原を基点とするのでなく、三次と庄原の中間地点に当る山内甲山城下から山越しで西城川を渡って現在の県道口北線に合している。地図の上で見ると、これが三成に向う最短距離であり、そればかりでなく三次から北上するものと口北で合流する利点があった。後にこの線が衰退して、東に迂回して現在の高野山線が栄えたのは、庄原が抬頭して奥備後の中心的勢力を持つようになったため、この庄原と比和を結ぶ必要が高まり、更には西城からの連絡も便利がよいことも要因となって、距離的にも不利であり、しかも王居峠・盤之谷峠という名にし負う難所が、特に雪期の行路を阻むに拘らずとって代ったのであろう。

その時代については、徳川秀忠の慶長七年といわれる一里塚の遺跡が、この高野山線に残存することから、少なくも江戸時代初期はこの線が出雲幹道であったことは間違いない。

旧出雲街道は、庄原が抬頭する以前であり、山内甲山城が栄えた時代及びそれ以前と考えられ、甲山城を指顧に見る七塚台地に南からの福山街道を受け、ここを基点として旧出雲街道は甲山城下を経て北上したのであろう。またこの台地は、三次からの街道を受け、庄原・西城を結ぶ伯耆街道が発し、東城を経る備中街道もこの地から発したのである。

後鳥羽院配流伝説地と旧出雲街道

後鳥羽院の隠岐配流は東鑑（あずまかがみ）によって美作を経る内陸経路が正史としてとりあげられているが、奪還を防ぐためには海路を多くとる方法が上策であり、またその経路にある備後地頭職の武士団が、何れも源家に深いゆかりをもつ点から考えても、福山から北上する備後街道、更には出雲街道を結ぶ経路は一応考えられることであって、その伝説のよってきた根拠としては何不思議のないことである。また当時の慣習として影武者をたてて奪還の目を欺いたことも考えられ、二つの経路もあり得ることである。

そしてこの伝説地が奇しくも、旧出雲街道に沿っていることは、旧街道の遺跡とともに、旧街道の位置を立証する根拠として考えるわけである。

吉舎・三良坂を経て七塚台地から出雲街道となるが、吉舎（きさ）には富士山（とみしやま）があってこの山を詠んだ御製があり、三良坂の仁賀には王渡りなる地名がある。出雲街道に入って甲山城下に暫く逗留し、黒木の御所跡・背後の山を万乗岳と呼んだという。また軍神諏訪神社を勧

「修身斉家治国」

昭和元年頃、この言葉は道徳律として、個人、社会に名実ともに生きていて、疑問を抱くものはなかった。☆自由主義思想があふれ出した昭和十年頃はこの言葉の説明が必要となった。近藤寿治らの諸書はこのための先駆的なものとして売出された。その後敗戦の昭和二十年迄は、指導者の「ためにするため」にこの言葉が強調された。☆戦後は糞食らえと放出され、治国と民主主義が短絡した。自己主張が主体性であるとされ、民主主義は集団利己主義を育てきた。昭和三十年頃、地域に根ざした地域づくりをめざしていた学校教育も、同じ風潮に流されてしまった。☆昭和四十年、経済成長は再び国の施策として、コミュニティーに眼を向けた。昨今、内外の指導者の比較に眼が向き、修身の必要さが感ぜられて、人物に関する出版はおびただしい。

流出し破損する文化財を保護しよう。

請しており、最近までその小祠があった。この辺りから現在は人家が少なくなるが、畝の市・多穂の市なる地名が続き、城下町として賑わったのであろう。

渡河地点に近い貝の平・中曽では、県道から僅かに離れて藪椿（地方名かたち）の並木が続いていたことがわかり、現在は僅かに八本を残すが、三百年と推定されるものもあり、最大のものは目通り幹囲三米に近い。

この渡河地点（江ノ川本流西城川）を中心に山内甲山城の出城及び防畳遺跡が稠密し、特に渡船場を眼下にする鈴神城は、篠津原雲井城とともに山内出城の双壁であり、雲井城は伯耆街道にあって東方宮氏に対したのであり、この鈴神城は出雲街道にあって、北方尼子氏に対した堅城であったことが考えられる。

この辺りに大内山神社があり、地名を大内谷と呼ぶ。近年まで大内山なる社号はおそれ多いというので大内谷神社と呼び、わざわざこれをおおちだにと転音して呼んでいた。

峠を越えると出雲石部落がある。いずもうしと呼び、出雲から運んだ石が段々大きくなったという怪奇な伝説もあるが、今はその実体を見ることができないけれども、おそらく出雲路を標示する珍らしい石が有名になったと考えるのが妥当ではあるまいか。

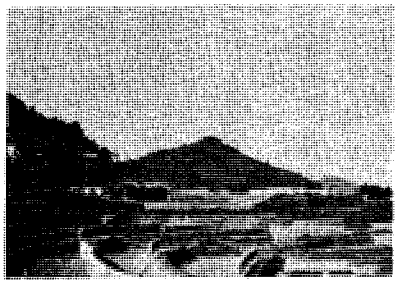
口北に入って手水の滝（ちょうず）があり、院が小憩されて手洗いをされたという。

高野山に入って更に長く滞留され、居所は現在の功徳寺であった。万歳院の名もゆかりがあり、鄰山の紅葉を愛でた御製が伝えられ、従者の公郷が使用した食箸も伝えている。附近に岡大内の地名もあり、東の村境が王居峠であり、三成への国境が王貫峠である。

雲州第一の国産・綿

文政八年と記す甲奴郡田総（たぶさ）の高田屋文書なるものがあるが、これは出雲産の綿を備後を経て福山に送り、ここから大阪に運んでいた途中の運送業者（問屋の名称を使用）の申合わせ事項であり、一面には出雲の生産業者へのゼスチャアとも考えられる節もある。

その冒頭に「綿ハ雲州第一ノ国産ナリ」としているが、当時は出雲の名物海産物より重きをなしていたのであろうか。そして駄賃づけを明記し、途中警備について記し、心配なきようという意を表わしている。そして末尾の連署名によって、運送の経路と業者の名前を知ることができる。経路は新出雲街道ー県道高野山線であり、業者は、高野山蔵栗屋・比和は津島屋・庄原は梶屋・田総は高田屋である。



更に備考として、三成の業者荒木屋武平なる者の意見書を附記している。

高野山通リニテハ川越数多ク有之不安心ニ候間三成ヨリ大馬木・油木・西城へ通リ候様心配仕可ト本人強テ専造様ヨリ仰聞ケラレ居候処今以テ何ノ返答無之如何取扱可候ヤ

この附記から考えられることであるが、運送経路の変更は業者はもちろん従業員の浮沈にかかわることで、そう簡単になされることではないはずであるが、にも拘らずこのような計画がなされているのは、当時に渡河運送が如何に困難であったかを物語るものであり、またこの綿の輸送量が如何に大きかったかを物語っていると思う。

庄原地方では大正時代まで、現在のわかめ売りと同じく、出雲絣を売る人が村々を廻っていたのである。綿の生産は必然に織物を興し、その販路を近接の奥備後に求めていたのである。

陰陽の海産・塩と魚

瀬戸内海は日本において最も雨の少ない暖地で、雨の多いことを特色とする東アジアにおいては地中海気候と呼ばれている。そしてそれは製塩の宝庫であり、昔から中国内陸山地の製鉄業と肩を並べる主要海産業であって、その歴史も同じく古い。

地理学者が指摘するように、日本の内陸都市の発達が塩市から始まったというが、中国地方においてもその例に洩れない。備後北部には、塩町・塩原の地名があり、庄原もおそらくその起源は塩原かも知れない。

昔は海岸は何処でも製塩がなされていたが、生産量の格差と生産コストの大差は、距離による輸送費の不利に勝って、山陽側から山陰へ進出したことは当然に考えられるのである。

反面他の海産物は干物として、距離の近い山陰からすべてが送られていたわけである。当地では五十年前までは、秋鯖のことを石州鯖と呼んでいたのである。また出雲のわかめ売りは、富山の薬売りとともに今日にも続く名物である。

↗山内甲山城を南麓より望む
殿垣内、本郷、多穂の市を経て北上する旧出雲街道

夫々の地域に縄張りがあって、例えば私の家の場合、本年も廻ってきた六十歳をでた女の人は三代目である。初代祖母が初めて私の家に来たのは、従って百年の昔になる勘定で、買うとか買わぬとかの問答無用の親しさである。

牛と瓦

農業の傍ら一戸に四、五頭の牛を飼うことは、自給飼料の時代は到底不可能であった。それが可能であるのは、夏季において個人としてまた共同で放牧場をもつ場合である。その放牧場は草原か疎林の台地が好適で、そのような地形は中国山地では山陰に比べて山陽側の奥備後が勝っているわけである。

また中国山地の牛の奇病である霧酔病は世界的にも類例のない特殊な風土病であるが、強力な季節風を真向に受ける山陰側に多く、これは単に牛の病気だけでなく、牛の飼育に好適でないことを意味しているのである。

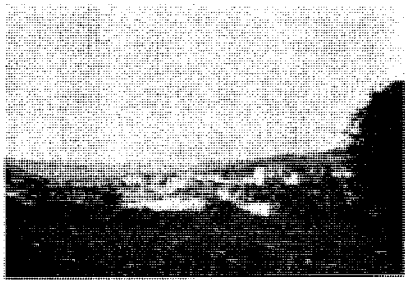
奥備後の庄原地方では、昔鉄山の鍛冶屋に関係して財をなし、その財を基にして造り酒屋か牛に資本をかけるのを常套としていたのである。

牛を自ら飼育するのではなく、牛を持たない百姓に借して、産牛を折半してその頭数を増すのである。これを用立牛（よだてうじ）と呼んだ。また余分の頭数にふえたら、これを牛を持たない百姓に田拵え時期を限って貸すのであるが、その牛は帰る時謝礼として三斗俵二俵の米を両鞍に積んで帰ってくる習慣で、これを鞍下牛（くらしたうじ）と呼び、この用立牛と鞍下牛を併せて行って利益を増すのである。

また自らの持牛ばかりでなく、至る所にいた小馬喰（ばくろう）から牛を買い集め、大馬喰となって、集団牛と牛飼人夫を引連れて遠方の牛市に出かけて大きい利益をあげていたのである。

比和町では特に村内鞍下の名称があり、これは村外鞍下があったことを表わすもので、山陽側に比べて牛の頭数が全体的に少なかった山陰へ、用立牛や鞍下牛、更には馬喰市の牛が多く国境を越えていたのではあるまいか。

私の住む庄原市の背後の山麓に沿って良質の粘土を産出するため、僅か二粁の間に瓦焼の跡が四ケ所もあり、その一ケ所は八十年前廃業するまで職人は悉く石州から来た人であった。当地では米作りと牛飼を主に炭焼を副業とするならば、瓦職を兼業する余力のある者は皆無であったろうし、第一技術的の面から、先進地の石州に職人を求めなければならなかったのである。おそらく当時他の瓦窯も同様であったに違いない。



瓦職人は春彼岸から秋彼岸までの季節仕事とされていたため次のような俗謡が残っている。

石州瓦師はつばめの鳥よ
彼岸また来て土を喰う

出雲参り

奥備後から出雲大社は距離的にも近く、その参拝は今日われわれが想像する以上に賑わったのではあるまいか。昔庄原地方では抜け参宮という慣習があり、これは伊勢神宮への参拝であるが、人々の最高の目標であり、家を建てることや田地を求めること、その次にも位いするもので、単なる篤い信仰というばかりでなく、今日の外国旅行にも匹摘するぜいたくな娯楽でもあったのである。従って貧乏百姓が伊勢参宮をすることは外聞が悪く、夜ひそかにまるで家出の如く出発したという。その伊勢参宮に比べれば外聞を気にするまでもなく、特に大黒さんは農家の深い信仰の対象でもあり、現在の如く交通機関の発達する以前がより盛んであったことが想像されるのである。

また大社教と称し出雲大社分院が各所にあったと聞くが、今日残存しているのは双三郡三良坂町にあり他を知らない。

尚神社参拝として出雲から備後へは、安芸の宮島の外、甲奴郡甲奴町の小童（しち）の祇園社があった。当地方でも今はその信仰がすたれているが、その昔は可成り広い参拝者があって、奥出雲にも及び、三成か横田の何れかの路辺に、小童祇園社までの里程標があったというが、石柱か自然石ならば今も残っているはずである。

また高野山祇園社縁日の草相撲は、比婆山祭礼の草相撲と共に恒例草相撲の奥備後における双璧であって、高野山は三成・馬木からも近く、おそらく庄原地方にも増して出雲からの参加者が多かったことであろう。比婆山の場合も雲伯からの参拝者や相撲参加者が山にこだましたと伝えている。

↗ 庄原市街地より新出雲街道の県道高野山線が越える勝光山を望む。

横田の街は歩るいて楽しめる美しい街にしたいものである

むすび

昭和三十年頃まで、道後山の東の谷の部落へは、山を越えて田植の早乙女の一団が伯耆から毎日通っていた。田植の手伝いというのは、ごく近い近隣か親類縁者に限られる習慣があり、戦後一時行われた集団出稼ぎではなく、長い歴史が続いていたのである。

高野山の県境に近い和南原では、来客に対する用語は今も出雲弁をつかうと聞いている。高野山の山林や田地の多くを出雲の地主が所有していた長い歴史があり、その支配を受ける人が多かったので、出雲の人に特別な敬意を表する習慣によったものであろう。

奥備後と出雲の方言を検討すれば、その関連を探る手がかりが得られるとする人があるが、確かに言語は長い歴史の所産であり、伝説以前へも逆ることができる生きた証者でもある。

神代の時代から、奥備後は出雲文化圏であり、鉄山業の指導者も出雲人であったろうし、製炭技術も同様であったに違いない。

明治になって、鉄道をはじめ交通機関が急激に発達することによって、逆に陰陽の交易を鎖す結果になってしまったのである。木次線や国道三一四号線は、その昔神話の神々の通路であったが、やっと近年になって元に復したと見てよい。三井野原の一角に境松と称する古い松の枯株が今も残り、昔その附近に茶店があったと土地の人は伝えている。茶店があったということは、可成りの多くの人通りがあったことで、木次線開通以前にはとても想像できないことである。

庄原と三成や横田は、地図の上では決して遠くないのに、余りにも遠いと思わせた時代が長かったと思う。

鉄道が陰陽の交流を鎖したのであるが、近年自動車道として整備され、いわゆる観光ルートとして脚光を浴びるに至り、更には奥備後を横断する中国縦貫大型自動車道の計画は、その完成の暁には、例えば奥出雲のみならず、広範の山陰地方から、新装の旧街道を利用して奥備後に南下して、この縦貫自動車道によって京阪神に向うのではあるまいか。これは陰陽交流を画期的に進める交通革命でもある。

私は、高橋先生のおすすめもあって、今この拙文を「横田文化」へ送ろうとしているのであるが、今まで御地は余りにも遠く、かつてそのような機運もなく、夢想だにしないことであった。いうならば、今私は横田の窓明かりが望み見える心境である。或はそれは今後の陰陽の深いつながりを暗示するのかも知れない。

私共の誇りうる奥出雲の歴史を保存するために

奥出雲文化シリーズ第一巻

戦国奥出雲の諸将

はじめて全面公開される
中世、奥出雲の歴史。

予定　四六版・約四百頁
予価　二、〇〇〇円

京都につながる、奥出雲諸将の夢多きロマンの香り高い物語。

三沢氏、馬来氏のすべてとこれをめぐる町内小池(杠)氏、安部氏、杠氏及び出雲の尼子、安芸の毛利、宍戸、備後の山内首藤氏、多賀山首藤氏、宮氏をからませた、雲・石・備・伯を舞台とする地方史。

(附)横田庄五百年史と年表。
奥出雲製鉄一二〇〇年小史。
豊富な写真、原典史料、地図、諸氏系図と関係考察も含めた決定版。

今日のある奥出雲の歴史を知って、明日に備えるために。

編集にも御協力のほどを……

終りに

今年の御協力に感謝し、皆様の新らしい年の夢が多かれと祈って擱筆。

訂正

No.19十一月号三頁
米沢天崖を天涯と誤りました。つつしんでおわび致します。

横田史談会　今年の歩み

古文書を読む集い　七回
一、二、三、四、六、一一、一二、月
古い文字に馴れができて、うまく読めるようになりました。県立松江図書館の御協力に感謝します。

史蹟めぐりの集い　三回
○四月　八川地区横穴古墳
池田満雄先生の御指導に感謝します。
○六月　鳥上地区だゝら関係
並河・日立工場長さんの御厚意に御礼申し上げます。
○九月　広島県庄原市方面
市の文化財専門委員の三玉、広瀬さん、高野町の功徳寺堀江さん、落合さんに、貴重な御案内頂き感謝申し上げます。

たたら研究講座　三回
○六月　東京・窪田蔵郎さん
たたら製鉄史
○十月　横田・並河孝義さん
靖国鑪と真砂砂鉄、玉鋼
○十一月　映画を通して
「靖国鑪」の記録映画と「和鋼風土記」の菅谷鑪との両者の技術の比較を通して、たゝら復元の意義を知る。

研究「横田文化」の古代史を推理するの共同研究(七月)

合計十四回の集いでした。

協力　遺跡発掘　二ケ所
五十二年度も新しい企画をもっています。
会員の増加に御努力下さい。

会員配布一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎(振替　松江六〇一番)／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

△中世の夜明け　△横田・古代の豪族　△今年の計画（横田史談会・奥出雲文化協会）

横田文化

復刊　第21号
1月号
昭和52.1.1
奥出雲文化協会

中世の夜明け

平安期より戦国期末・五百年史①

―横田庄の礎石を置いた横田氏―

横田兵衛尉維行

寿永三年。残雪深い鳥上の峯、麓の谷間の田圃のあちこちにまだ雪残る晩冬のある日。若い横田兵衛尉維行は、早朝の日課である弓の稽古（けいこ）に余念がなかった。

突然、朝の静寂を破って響くひづめの音と共に門前に現われたのは、はく息も白い二人の若武者であった。福原よりの告文をたずさえた二人の若武者の労をねぎらった維行は、直ちに父の館（やかた）におもむいた。父はすでに毘沙門堂に入って、朝の勤めに座していた。

この堂に安置してある毘沙門天の像は、維行の祖父が京都より求めて持帰ったものであった。毘沙門天はもとは北方を護る守護神として我が国に伝えられたのであるが、平安後期には病気平癒の効験があるとともに、積極的には財宝を得させ、幸福を授けるという信仰に変っていた。一門への招福はもとより、土地が命であった横田氏は、横田郷の安泰をこい願って、堂を建立し安置していたのである。丈余の豪快なこの像は、一本のクスの木から三体造られたものの一つで、他の二体は京都の鞍馬と因幡の倉吉の寺に分けられたと伝えられていた。

読経半ばにして、告文を読み終えた維行の父は、直ちに馬にまたがり丘をかけ下りて行った。伊賀多気の社に詣うで、和田山の近くの祖陵を拝し、岩屋寺に阿闍闍をたずねて館に帰ったのは、相当に日も昇ったころであった。呼び集められていた一族郎党のおもだった者を前にして、維行の父は決意を披歴した。

告文は平家の将阿波民部大輔良成からのもので、西国で平家に年来伺候していた豪族どもの名を連らねて届けられたもので、趣旨は京都に迫っている源氏を敵として、平家一門これを迎えうつため、摂津と播磨の境、難波潟一の谷に参集されたしというものであった。

一の谷へ

一日置いて維行は、十数騎の郎党とともに比田の社に詣で、大管の峠を越えてここで日野郡司義行と合流し、南して福々楽の社に額づき備中の国へと向った。新見においては新見郷司と、備後国の奴賀入道が加わり、吉備路を南下した。やがて多治部太郎、石賀入道がそれぞれ郎党を率いて加わり、吉備津の社にともに詣でて（以上の社はすべて吉備津彦を祀る）、山陽路を東へと進んだ。備前では難波次郎兄弟が加わって、その勢壱千余騎となった。

谷間谷間に残雪の厚い山陰と違って、山陽路はなま暖かい早春の風がそよいでいた。このような武士の晴着姿で勢揃いした軍勢に交って駒を進めることは、維行にとっては初めてでもあったので、若い血潮はたぎり、ともすれば心も高鳴ったが、それを引き締めるのは、平素から諭され、特に出陣にあたって父から懇々と語られた数々の事どもであった。

地方武士の命は父祖伝来の土地であり、それを耕してくれる百姓達であるということはその最も強調されたことであった。維行の父は禁裡警固の役として京都にあった若きころ、保元、平治の乱を眼のあたりに見た。保元の乱は源氏にかわって伊勢平氏が、傭兵隊長として古代国家の専制君主白河法皇にとりたてられ

北帰行

高橋和巳が昭和二十三年、旧制松江高校在学時代に抱いていたテーマを「捨子物語」という小説で発表したころ、石原慎太郎は「太陽の季節」で芥川賞作家として華々しく登場した。「限りなく透明に近いブルー」よりももっと強烈なショックを読書界に与えた。しかし、石原の作品は青年の心の糧とはなり得なかった。高橋の著作集は、戦後学ぶ青年が、心の糧を求めて一度は必ずさまよう森となって、生命を保っている。

「北帰行」も、ひっそりと文芸賞を受賞した。二十年前の石原と高橋とのように、今日村上龍と外岡秀俊は登場したようである。

啄木に心を奪われた青年の心の軌跡・精神形成の過程は若々しい文体と知性にあふれている。満腹感はあるが、精神的空白をどうするかに、村上は泡抹的現象に埋没することをもってし、外岡は透徹した凝視と思索と内観力によって対処している。後者に注目し期待したい。

横田の伝統により深さと温かさを加えることを真摯（しんし）に考えよう。

たのが原因で起ったのであるが、内輪もめの程度のことであった。それから三年、平治の乱になるとはじめて対立意識が濃厚になってきていた。

それもせまい京都を舞台とし、手元にあったありあわせの郎党だけによる対戦であった。

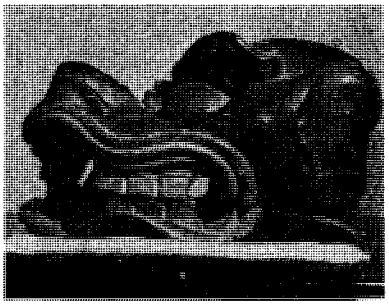
しかしこの度は、崩れゆく古代国家に抵抗し、全国的な内乱の上に、源氏と平家の決戦が始まろうとしていた。勝ち残った一方の棟梁は全国の支配者になるという、中世の開幕の時が来ていたのである。維行の父にはもとよりこうした情勢の判断は出来なかったのであるが、眼のあたりに見た対立の様相は、やがて領地を含めた争奪へと進展することを肌で感じたのである。この感覚が「土地」と「百姓」とをわが命とするのが、地方武士のよって立つところと維行に父が教えたよりどころであった。かいま見た殿上人の華やかさにみせられて野望を抱くよりも、伝来の安住の地を養うことに、生き甲斐を強調していた。

父はまた、保元・平治・平家の諸物語の述べるごとく、武士達が生死の危機にあたって仏名を唱えたり、仏の教を思い出さないものはないことをまのあたり見たこともあって、仏に向うことを祖父以上に心掛けてもいたのである。

横田庄の出現

横田郷は、横田氏の父祖が郡司に任ぜられて以来、特に心を注いで良田を拡げた地であり、山を越えて招いた砂鉄製鉄の技術者を組織して農具生産を盛んにし、今は武具の若干の製作へも手を染めていたものであった。維行の曽祖父は、隠岐に流島された源義親が出雲に舞いもどって乱妨し、朝命を受けた平正盛によって血祭にあげられたことがあった時以来、秘かに平家に心を寄せていた。そして禁裡警固で京都に滞在していた時知りあった、備中の妹尾氏を介して、平家そして院とつながり、石清水八幡宮へ横田郷内の幾つかの名田を寄進して、みずからその荘官としてそれを管理することによって、地位の保全と財力の増強を計ったのであった。

平正盛、その子忠盛は合わせて二十年間も、備前守として山陽の豪族をその家人として、平家の基礎づくりをしていた。その中に強大な戦力を構成していたのが備中妹尾（瀬尾）荘に住む妹尾太郎兼康であった。兼康は備中国賀夜郡板倉郷の豪族であったが、



妹尾荘を開発して妹尾の姓を称した。乱世の当時、開発した妹尾荘を維持するために、平家を本所と仰ぎ、その家人となってかたい主従関係を結んでいたのであった。同じくともに平家側の武将として難波次郎経遠兄弟があった。反平家派の貴族の配所として、備前、備中の地が選ばれていたことは、信頼できる平家の地盤であったからである。時は移り、兼康は備前に進撃してきた木曽義仲の大軍と戦い、壮烈な討死をとげてしまっており、一族は四散した。

維行は恩と義理のある平家のために、応える必要のあることは重々承知していたのであるが、父の訓戒も胸に慎重な動きをと思いめぐらしていた。主従ともに平家のために散って、土地と百姓を捨てることは出来なかった。四百年も前から吉備と通じて開発を進めて来た父祖に対して、強い罪悪感が湧いてくるとともに、父が毎朝対座する毘沙門天の像も、しきりと維行のまぶたの裏に明滅していた。

選んだ道

一の谷に寄った平家方は、後白河法皇の使者がもたらした文書を信じて、戦備をゆるめていた。そこへ源義経の突如の総攻撃であえなく退却し、主力は海上を屋島へ落ちた。

一の谷の守備にあたっていた維行は、主力の戦列から離れた西国の諸豪族とともに、山陽路を西へ西へと急いだ。源範頼軍の追撃は、腹心の部下土肥実平を先頭にきびしかった。

それに耐えかねて維行は、備前より北に折れ美作から出雲路へ入った。途中でかっての恩儀ある妹尾兼康の残した一族に出会い、しばしの休息を求め、つもる話のあとで、その願いを入れて、一族の幾人かを伴って横田に帰った。早い挿秧（田植）の終った横田盆地の周辺の水田が、春の日に輝いているころであった。

維行の父は、外に眼を向けることなく、横田庄を護ることを、維行や郎党に誓わせて、背水の陣を布いた。しかし源頼朝の平家残党に対する追撃は容赦なく進められた。西国は平家の地盤であり、中でも石清水八幡宮領はその核であった。今は源氏がそれを欲したのである。平静を装ってはいるが、妹尾氏の残党をかくまっている横田庄は、無気味にも思えたであろう。

（五頁へ続く）

写真は県指定文化財獅子頭（室町期・馬場八幡宮蔵）
―提供　横田フォトクラブ―

横田史談会　今年の計画

▼古文書を読む集い
六回くらい
講師二〜三回招へい

▼史蹟めぐりの集い

第8回　四月第一日曜日
● 廣瀬町月山富田、城史跡を聞いて登山
● 清水寺ほか三ケ寺の出雲孔子廟巡拝
国宝仏等見学

第9回　九月第一日曜日
● 石見銀山探訪
新らしい視点から
横田町八川の佐伯氏と銀山とのつながりをも
追求する

第千回

▼たたら研究講座

第5・6回
● たたら復元について
実地にて
● たたら経済史

創立
発刊　第三年

頌春

広島と島根の比較を通して
（講師　日本たたら研究会
前会長　河井義郎　教授
ほか）

▼考古学講座（第二回）
● 日本と日本をとりまく諸国とのつながりを知る
（朝鮮、中国・中近東ほか）

▼展示会（八月）
第二回として
「横田の文化財のすべて」
横田カントクラブ撮影の写真の構成を中心として

▼運動
① 「横田の文化財の保護・保存を」
② 「横田史談会会員の五割増と横田文化端読者の倍増」
①の運動の輪をひろげながら横田文化の部数増による増頁を行う
一頁当りの単価減による増頁可能を部数増によって見現する

（六頁より続く）
―ふるさとの歴史―

名として残る大内原・簾（すだれ）・和泉であろうと推定する。和泉式部の墓といわれるものも、中世でうらぶれた姿が京都で知りあった郡司をたずねて下った時に、和泉式部の名を語ったとも考えられる。西日本各地に特に多い和泉式部終えんの地伝説と同じ成立であろう。郡家は中央からの人の宿舎も役割としてあったことも忘れてはならない。

この大領郡司の子孫が中世の地頭三延氏とも考えられる。品治部という主張郡司が京都に出仕し帰って兵衛尉（尉は中の下の位）を名残ったのが、横田兵衛尉維行と考えるのである。

（以上で奥出雲の古代推理を一まず終り、以下本号よりはじまる横田庄五百年史に続く。三延氏は別考で高橋一郎）

別途配布名簿により　お知りあいの同好者にすすめ下さい　会員百名　購読会員百名を念願しています

横田史談会の状況

会員　名簿は別途配布

横田地区　36名
世話人　足立士人　和泉備吉　高橋一郎

鳥上地区　10名
世話人　佐世川徳雄

馬木地区　6名
世話人　杉原清一

八川地区　2名
世話人　斗谷順子

仁多町　1名

合計　56名

購読会員

横田	10	八川	28		
東京	8	鳥取	2		
広島県	5	滋賀	4		
大阪	4	愛媛	1		
石見	6	計	63名		

特別会員　町内外　10名

年間会費　二,000円
半年分完分納
（一）一二月を年度とする）

前納購読会員は増頁の時も平月の定価で

販売店　大同書店　かど屋（組織係より）

横田史談会会計

（S.11.24～S.12.15）（会計係より）

収入	会費	104,600
	雑収入（別途会計で処理している史談まんじゅう、テキスト、映写会等残金）	700
	計	105,300
支出	横田文化誌代	54,910
	講師謝礼（11.1.7.9月分）	38,500
	会場費（ハイツ三田代）	1,225
	事務費（印紙代）	135
	会合連絡費（11.6.12月分ほか）	4,280
	その他（見学謝礼、写真撮影礼、コピー用紙、例会茶菓代）	3,165
	計	102,215
差引残		3,085

（52年度前納分会費収入は別途に）

奥出雲文化協会の活動について

○せまいながらも全れたものの輪を大きくしたい。横田の歴史・伝統・風土の中で良いもの美しいものを生かし、それに心よりわしい新しいものをつけ加えて育ててゆきたい

○国籍不明なものまね、アクセサリーや流行ものは排したい。

○全流のひとときを、その都度燃焼させるものを、つみ上げてゆき、自分の生き方の上に、又なりわいのための仕事の上に生かせるものをめざしたい。

○横田らしい自己教育によって、風土、郷土づくりに加わりたい。

②奥出雲文化シリーズ第一巻「戦国奥出雲の諸将」刊行
発表以来中絶み、望外捷供を埋いて感謝している

③研究シリーズ
「発展する横田の風部」
（統計的考察による）

出版

①「横田文化」
横田史談会編集を増頁へ

催物

京都茶作陶展、野津温泉書画展
米沢天崖書作展に続いて
第四回（四月下旬）より
「ふるさとの絵の展示と新しい視覚による生花展」
ほか「郷土人の造作書、画、工芸展」
「洋画展」ほか

サークル活動

現在ユニークながら活動している数サークルのほか、
「あ道にかける人に学ぶ」集いを（佐藤美術工芸愛育会）
発足させたい　伝統芸能、職人魂の吊場をはかりたい

協会に対しても同愛同楽の方々の御協力をお願いします

源頼朝の腹臣梶原景時は、追討使鎌倉殿の代官として、終始一貫源氏方であった石見の益田氏に下文をよせ、出雲国に打越して岐須木次郎兄弟と横田兵衛尉を討つことを命じた。

戦乱にこれ以上まき込まれることを固く戒めあって、恭順の意を示してはいたのであるが、勢づいた益田氏は大原郡の岐須木氏をほふり、奥出雲に駒を進めてきた。維行の父は維行に命じて、妹尾一族の脱出を計り、横田庄の平安も守りたいと、一族を護衛してかねてから親交のある備後へと向わせたのである。一族の中には女、子供もいたので山道を通っての歩行は苦しかった。持参したわずかの荷物も途中で残して、小八川をぬけ坂根へとたどりついた。その時残された観音像を里人が拾ってまつり、草坂の観音さんと呼んだ。今に伝わるものである。その夜坂根の山で一夜を明した一族は、益田氏迫るの知らせで、あたふたとこをたち中国山脈越えに向った。

この時進言するものがあって、三井野原から直ちに備後へ越さず、木立深い山を尾根伝いに、阿井郷大馬木の里をめざした。これが幸して、益田氏は三井野から油木へと通ずる山道を進んだので、討伐の難をまぬがれることができた。しばらくの日を置いて、一部は南の六の原峠を越えて奥油木へ移った。今日この地に平家の子孫と称する数軒の家があるが、これはその末胤であろうか。大馬木に残ったものも、誇り高くこの地で生きていったと伝えている。この地の妹尾姓をもつものは、この末孫であるともいう。

（横田史談会員　高橋一郎）

ふるさとの歴史⑥⑦

奥出雲の古代を推理する⑫

古代奥出雲の豪族㊦

奥出雲への第二の鉄の道山陽

姓（かばね）で臣（おみ）公（きみ）をもつ豪族の氏名（うじな）はその国の国名をもつものが多い。臣はおそくまで大和に反抗した豪族（吉備臣・出雲臣）に与えられ、公は比較的早く大和に服属したものに与えられた。品治国造は（No.13・18参照）吉備国の西部にあって、吉備本国より少し早く大和に服属して半独立し、国内に大和の屯倉（みやけ）もうけ入れていた。

六世紀になると、製鉄技術が急に進歩したようで、備後北部の三次、備中の北部美作に爆発的に広がった。特に美作へは大和の蘇我氏が管理して帰化人を派遣した、白猪屯倉が設けられた。このころ吉備は大和に服属し、大和の出雲進出に協力していた。

その経路は吉備津彦をまつる神社の分布と古墳の出土品の色彩が重なりあう、多里、比田、三刀屋、加茂そして出雲平野であったであろうとみられる。そして意宇平野の出雲臣族が、出雲平野の豪族を抑えるために協力したというみかたもある。

それより少し前ごろが、横田の横穴墓が山陽色を濃くした時代（No.18参照）で、品治国を根拠地として製鉄技術を伴った指導者がこの地に進出し、名代（大和の直轄地）としての品治部を築きはじめていたと推定することができる。その統率者は品治国造である。前述の吉備津彦をまつる神社があるところ、即ち吉備部の植民が行われたところが、多里から横田へ入らず、比田を経て簸の川を下った事情も理解できるのである。

品治部

七世紀中葉（六四五年）の大化の改新によって、公地公民が宣言され、名代、子代が廃止された。品治部はそのまま土着してこの地の豪族として、ばん居したと推定される。

このころは白鳳時代である。

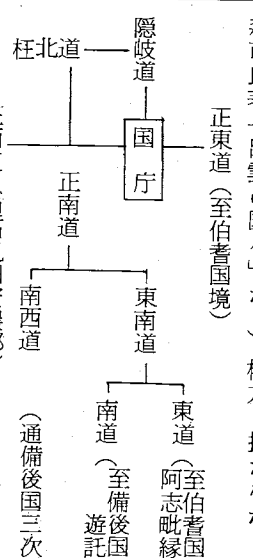
八世紀初頭（七一〇年）大和政権は奈良に都した。奈良時代（天平時代）の始まりである。七三三年出雲風土記が完成したのである。この記の中の仁多郡の郡司として、土着の豪族品治部が登場している。記の中には、鉄を産し雑具をつくるとある。名代部であった品治部が製鉄技術者を率いて、そのまゝ留まったことは、古代の今までの考察から推定は十分に可能である。出雲国内の三十数名の郡司の中で、品治部は「姓」もない唯一人の郡司で、位も最も低く、主張であるから大領・小領の如く権力も持たなかった。

土着の豪族として無視出来なかったものであって、他の郡司とは異質であることは濃厚である。今日鳥上で復元されたたら製鉄も、送風装置があって動力であることを除けば、原理も様式も古代とあまり違いはない。極めて経験的技術である。この地が良質の砂鉄産地で、従って優れた鉄を生み出していたから、それを有する豪族品治部は名代時代から引き続いて、世襲性が強く、土着していたのに違いない。そしてこの地方の名望家であり、伝統的に土地の信望をもっていた。日常生活も支配する豪族であったから、郡司として登用されたのであ

ふるさとを大切にすることは　叫ぶばかりではどうにもならない。

る。

今まで述べたことを裏付けるものとして、出雲風土記にあらわれている交通路を一べつしておくと、（池田満雄・東森市良著「出雲の国々」から）



ー主張で、仁多郡は小郡であったから主政を欠いだ。主政・主張は事務の監督ないし書記役であった。郡全体の総括的責任者である大領・小領の権力も持たなかった。地方の東道、南道は横田町内を通過し、南西道とともに奥出雲から、備後、備中、伯耆に通ずる道である。そしてこの古代から中世末まではこの道を通して、奥出雲は備北、西伯とは同一生活圏であったことは、歴史に明らかである、徳川期の藩封建下でも生活の上では密接につながっていた。そして鉄道の奥出雲開通までは密接であったのである。

郡司・郡家（ぐうけ）の役割

郡司には四等官があった。長官（かみ）ー大領、次官（すけ）ー小領、判官（じょう）ー主政、主典（さかん）ー主政、主典（さかん）

豪族が郡司就任を希望するのは、大領・小領であった。品治部は主張であった。大領・小領はそれぞれ蝮部臣と出雲臣で、出雲国造である出雲臣の一門であった。出雲国内の郡司の殆んどが出雲臣の一門であったから、品治部はこの点からみても異質であったといえるのである。

郡司の仕事は、国司との文書の往復、戸籍、国司の巡行の案内、徴税から警察、裁判までも行う絶対権力を有していたのである。郡司の役所を郡家といった。豪族の首長の私宅がそれにあてられた。仁多郡の郡家は大領の住む高田にあった。郡家には正倉（みやけ）があって貢納米を収めていたし、通勤する郡司の宿舎もあり、公的使臣や国司の国内巡行の時の宿泊所も兼ねたのである。役人は郡司以下雑用者も含めて小郡でも百人を越えた。当時は大家族主義でもあったが、郡家には多数の大領の一族などが住んだ。正倉院文書の研究によれば、筑前の嶋郡大領の場合には、戸主と配偶者（妻・妾ほか）子孫等直系三一人、親戚など寄口二八人、奴婢その他合わせて一二四人であったという。

兵衛

郡司の子弟で頭の良いものは、国学に入って中央の官人に登用される道があったが、これは極めて狭かった。心身ともに強健で弓馬の達者なものは、国司の推せんで上京し、中央の左兵衛府及び右兵衛府の兵衛になることができた。

年令は二一才以上とされていて、宮城の内門の守備と天皇外出の時に部隊を編成して警固する役で、正式な官人というよりは見習いというべきで、わずかの年俸では独身者でも生活が困難で、国許から兵衛資養物という仕送りが毎年行われていた。八年つとめてもようやく官位令の最下位の初位（そい）になるだけであったから、国許へ帰って郡司になるのがせいぜいであった。（郡司品治部は初位であった）兵衛は全体の定員が一、六〇〇人であったから、全国五百数十ケ郡から、郡司の子弟を各郡一名宛上京させたとしてもこれをうめることはできなかった。したがって、中央の中下級官人の子弟と同じで、昇任を考えることはとうていできないことであった。

妥女（うねめ）

郡司の子弟は庶民の子弟に比べると有利であったが、中央官人の子弟に比べると右のように極めて不利であった。しかし妥女には明るい将来があった。妥女は上京し、天皇皇后或は皇后以外の天皇の配偶者（妃・夫人ほか）の身のまわりの世話をすることに配属される雑用者であったが、正式な女官として、男ほど位階にこだわらず、中央有力氏族との差別もなく登用された。

しかもその出身は郡司の子女だけではなかった。

① 中央の有力氏族の女
② 庶民から、自ら進んで出る女
③ 郡領（大領・小領）の姉妹か娘で形容端正なるもの

という範囲が広かった。女には玉の興に乗るという、栄進の道が位階にこだわらずあった。

妥女の数は、兵衛が各郡郡司の子弟一人となっていたが、これを妥女でかえることができて、割合はその国全体で二対一と定めてあった。出雲は九郡からなっていたから、天平のころは六郡から兵衛、三郡から妥女が出ていた。従って全国で百数十人から二百人近くの妥女が出任していたわけである。

従って郡領でない品治部からは妥女が出任していない。兵衛のみであった。大領蝮部臣と小領出雲臣からは兵衛も、また妥女も出任している。高田に住んだ大領蝮部臣の女が妥女として出任し、運に恵まれて昇進したその名残りが、地

（三頁へ続く）

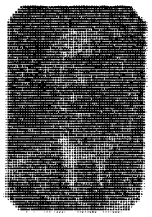
会員配布一部百円／六九ー一八 島根県仁多郡横田町横田 高橋一郎（振替 松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所印刷

横田文化
復刊　第22号
2　月　号
昭和 52. 2. 5
奥出雲文化協会

横田で生れた人々④

妹尾勇吉

―横田で最初の洋行者 西洋料理店の開拓者―



上京まで

横田町の大津屋妹尾嘉右ヱ門の長男として明治三年一月に生まれた。横田村に設けられた郷蔵二棟を改造した小学校に入り三沢寛雄らを師とし、のち志を抱いて松江に出、内村友輔（鱸香・安政四～明治三四）が明治七年に西茶町に開いた、漢字の私塾相長舎に入った。こゝからは北尾次郎・梅謙次郎の学者を出し、二葉亭四迷・若槻礼次郎・岸清一・桑原羊次郎らもこゝで指導をうけた。その後、尾原惣八（清窓・天保一〇～明治二五）が明治一七年に興した雑賀町の共進学舎に移り、その塾長ともなった。この間数年というから、共進学舎が二五年の尾原の死と共に終っているから、明治二〇年前後から松江に出たものと考えられる。

その後横田に帰り、二八年五月より横田小学校教師（雇）となり、翌二九年十一月依願退職し、三〇年に上京し、明治法律学校（現明治大学）・立教学院（現立教大学）の英語科に学び、三六年に卒業した。

青年教師井上栄太郎の影響

妹尾の三年後輩に町内の岡崎喜一郎がいた。一二年横田小学校に入学した岡崎が初級、中級の試験八つに合格し、高級の六級に合格したころ、井上栄太郎が四等訓導として着任した。井上は松江中学校第三期卒業生で、同窓生に西田千太郎がいた。西田は下級中学課程のみを終えて、中学で教鞭をとり、のち東京へ遊学し母校に帰った。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と同僚で交友を深めた人である。西田千太郎日記によると、西田・井上ら一九名は二科（英語就業を重とするもの）の甲組に属し優秀組であった。（生徒一五〇名中一〇〇名が二科に在学）。当時教師一二名中四名が英語教師であったという。西田は入学以来二ケ月毎に行われる試験に常に首席を占めていた。井上は甲組では五～九番の順位にあった。のち井上も西田を介して八雲と知己になったと思われ、西田との交友は極めて深かったことが日記から推察される。

岡崎はこのすぐれた教師井上の個人的指導もうけ、その

地域史・地域文化①

『地方』の語に訣別し 『地域』の語に明日を託そう

明治維新より、上からの「文明開化」は、「中央」「地方」観念を強め、「地方の歴史」を「中央の歴史」の波及と変容によって説く姿勢にした。戦後改革期にも、西欧近代を美化する風潮とあいまって、「おくれた農村」のイメージが「中央」「地方」感覚への反省を困難にしていた。地方住民の主体的な歴史形成過程を明らかにするためには、「地方」の語に訣別せねばならない。

急速な高度経済成長政策によって、国土がしだいに等質化される方向に進んでいる。文化面にもマスメディアはその方向を強いている。その地で働きつづけて来た人々の生活軌跡も破壊されつゝある。地域の古老に伝えられつづけていた民族の心の原郷を、語りつづける人さえなくなっている。たとえ無形文化財や人間国宝を指定しても、そうしたものを受け継ぐ人のない限り、民族の心の歴史は枯渇するばかりである。

この失われていくものの中から、再生しなければならぬものを求めて、そして土地に生きる人々の何らかの役に立つものをつくり出さねばならない。

今日、歴史から学ぶことなく、〃今〃を原点として断絶した時を意識するを〃最善〃と称するものがいる。思い上がりも甚だしい。歴史の語るところである。芸能・神事の中にも文化遺産がある。真実の叫びが凝集している。

どんな地域にでも定住できるようにすることが「人間尊重」の政治である。それは地域の歴史と、文化遺産の中に学びとるものも多いのである。

（T）

テレビの時間帯に大幅の休み時間を置き　番組内容の精選をはかっては……。

学識と人物に傾倒し、二〇年四月松江の私立三州学校に入った。この学校は石原光彰が一九年六月に創立したもので、文科・理科・農科・法科があった。岡崎は二二年より母衣町の進取学館（二一年渡部寛一郎ー桃蹊ー創立のもの）に移り二三年三月まで在学した。この年から進取学館は三州学校などを合併して私立修道館となり、やがて市立工業学校（翌年県立）となった。

岡崎は松江のこれらの学校で学んだが、横田で教えをうけた井上の学識を超えるものではなかったのであきたらず、倉吉農学校に進学した。当時、札幌・駒場などの農学校と同じく農村指導者養成のために設けられた学校である。こゝで岡崎は、津山の豪農出身の太田清三郎を学友とし、新島譲の伝記を読んで感激し、両親に無断で倉吉から、二六年一月同志社に入学した。真宗門徒であった両親は、外教（キリスト教）におもむくことと、無断で転校したことで激怒した。ところが脚気にかゝり已むなく二七年ごろ帰郷し、両親の説得によって家業を継ぐ約束をしたのであるが、二八年一一月二八日（二九日か）向学心や太田との盟約に再び動かされて、無断で京都に出て復学したのである。

当時村の小学校の教師をしていた親友であった妹尾は、一二月二日付の便りを岡崎に送った。それは友を思いまた両親の心中を思う友情にあふれた名文が達筆でしたゝめてある。妹尾が岡崎の両親を説得したくだりは、今日いわれる「友情」などの甘ちょろいものとは程遠い、美しいそして堅いものである。「理想を探ねて出郷した君の行為と言論は私の常に欣慕していたものであり、偉人をして埋れさせるのはしのびない。だが両親の気持ちは尊重せねばならない。和解の糸口は、外教だけは絶対に避けることである。しかし君には志があろう。友垣として漏らしてほしい」旨がのべてある。

あけて二九年二月一二日付の妹尾からの便りには、「遂に御尊父様も親友太田清三郎の厚意と君の志に心もなごみ、学資を送金することゝされた」とある。ついで「私も遠からず東京に出かける考えであるので立寄りたい……」としるされてある。

ところが妹尾が上京するより一足早く、三〇年一月岡崎は上京し早稲田の英文科へ入学した。続いて妹尾も上京したのである。

この間の二人の友情と、相ともに理想に燃えた青年の心意気には眼をみはらせるものがある。三度、教師として校長として、あわせて一四年間横田に勤務した、井上栄太郎の影響は計りしれないものがあった。妹尾・岡崎に続いて、当時の横田の俊才が笈を負うて出郷し修学し、彼地であるいは横田に帰って有為の業に従ったことは特筆すべきことで、稿を新たにして誌したい考えである。

外国遊学

妹尾は三六年学校を卒業するとすぐに上野の精養軒に就職した。才を見込まれた妹尾は間もなく、ホテル経営研究のため米国へ派遣されることになった。その知らせをうけた妹尾の父は、岡崎の父健蔵を病床にたずねその可否を相談した。健蔵は派遣されるのならこれにこしたことはないと賛成したという。後年岡崎は、子に対しては勘当同様な扱いをしながら、人の子に対しては全く見識が曇ったことであったともいったというが、やがて岡崎も自費で、郵政事情視察を名目にして渡米した。

三六年一一月、料理人を同道してアメリカに滞在し研究につとめ、ついでイギリス、フランスにも学んで、四一年三月帰国した。帰ると精養軒の支配人として創業者北村の下で縦横に采配を振ったのである。四五年二月からは築地精養軒、東京駅ステーションホテルの支配人を兼務し、ほかに松島・軽井沢・岐阜などの食堂経営のほか、北は青森から西は下関までの列車食堂の経営など、手広い事業に手をそめた。傍ら美術鑑賞に趣味をもち、数多くの作家と交り、その陰の後援者となったことは美術史にも誌されているところである。

横山大観もその一人で、明治四三年大観四二才の時、妹尾の招待で松江を訪れた。友人山岡米華とともに八月来遊、一〇日余り松江で過ごし一〇数点の作品をものしたという。当時大観は帥岡倉天心とともに美術改革の動きの中に投じ、特に「もうろう体」といわれる新画風で、先覚者の道を歩んでいた。一般には容易に理解されなかったが、妹尾はこれを援助した。

精養軒の経営者北村は老令であった上に、わが子が幼く、妹尾とそしてともに外遊した料理長に後事を託してなくなった。

北村の死後心配は現実となり、手堅い妹尾の経営方針と意見が異る北村社長とはたもとを分つて、料理長とともに独立した。

大正一〇年本郷三丁目にレ

ストラン燕楽軒を創業した。西洋料理専門店の草分けであった。傍ら西洋料理の将来を展望し、料理学校を経営し、洋風パンの製造にも手を染めたのであった。のち千葉県館山に、館山海岸ホテルを設けホテル経営の宿願を達した。

また国会議事堂の食堂経営にもたずさわった。一二年の関東大震災には、そのすべてを失って失意の底にあったが、持ち前の不屈の魂と研究心によって復興をはかることが出来た。一五年一〇月よりは、上野美術館の食堂経営を兼ねたが、その一隅に居宅を設け、書画の大家との交りも深くしていった。

収集したものの中で特筆すべきものは、古今の知名士の直筆手紙の類のおびただしいもので、頼山陽・熊沢蕃山・荻生狙来、明治に入って西郷隆盛・伊藤博文・板垣退助・松方正義などの名元老のものなど、巻物にして三〇〇本余り、一、〇〇〇通を越えるものがあるという。この種の収集では当代随一といわれる。晩年は毎年のように横田に帰り、知人友人を集めて旧懐をあたゝめて楽しんだ。その折横田で紛失せぬ保証があれば、これらの展覧会をやりたい。

優れた人物の筆跡には、その人柄があらわれている。その思想はもとより、人情も若い人の教育には益するところ大であると話していたが、ついに実現するに至らなかった。いつまでも私蔵すべきでなく、公開して役にもたてたいともらしていた。

人を育てるのは人である。単なる知識の切り売りでないことを、しみじみ感ずる。

昭和三六年一一月五日、九二才の大生涯を東京の自宅において安らかに閉じた。

（高橋誌）

顔写真は七〇才のころ。

本人筆跡の俳句（87才作）

「一ト時の昼寝も
老の夏行哉」

平安朝より戦国末までの五百年物語②

ねらわれた鉄資源

八幡宮の勧請

日本国第一の大天狗と後白河法皇をののしった源頼朝も、「今度は天下草創也」との決意と共に、動きゆく時代の新しい体制の門出のためには、やはり法皇に請うて「日本国総追捕使・日本国総地頭」に任ぜられなければならなかった。征夷大将軍となり武家政治の創始者となった。

平家滅亡の文治元年（一一八五）、源頼朝は下文によって、出雲国横田庄が石清水八幡宮領であることを安堵し、地方武士の年貢横領、兵糧米賦課などを禁じた。石清水八幡宮は朝廷の信仰の中心でもあり、抬頭した武家の信仰の中心でもあった。源氏も鎌倉鶴岡に勧請して氏神とした。

横田氏の育てて来た、米と鉄の里は戦乱の傷手も少なく、平和が訪れていたが、幕府の制度の整備と共に、建久七年（一、一九六）庄司小池刑部久朝が、八幡宮の分霊を奉持してこの地に下ってきた。そして八幡宮領横田庄の信仰の中心として、人心を一新し源氏勢力の扶殖にも役立てようとした。中央から荘園へ下ってきた荘官の氏神であり、それをやがて郷土の氏神へとひろめることは、住民を荘園に編成する手段でもあった。

久朝はこの地に下るや、横田氏一門であろう、田村治郎左ヱ門の娘をめとり、庄内の尾園村（現在の八川八幡宮の地）に宮を造営して住まった。毎年八月十五日の八幡宮放生会祭礼には、京都より奉幣使が参向した。頼朝の没した翌年からは、久朝が代参役をつとめることになった。八幡宮が馬場に移ってからは小池氏は下向した奉幣使さながらの華やかな行列を行い、八幡宮前の馬場中央まで神幸した神霊とともに本殿に入り、それから祭典をはじめるという、京都男山八幡宮と同じ放生会祭礼を、子々孫々続けて明治中葉まで至った。

小池氏が下ったころ、横田庄の南中国山脈の南麓の地毘庄には山内首藤氏が、更にその西南には小早川・毛利ほかの諸氏が地頭として居を構えた。

荘園の蚕食

将軍源実朝が亡くなると、尼将軍政子は後鳥羽上皇の皇子を将軍として下向せしめられるよう要請したが、上皇は天皇と将軍が兄弟になることは、国家統一の破れるもととして断固これを拒否した。その後京都から摂津国の二地頭の罷免要求を出したことがあったが、関東の評定はこれを拒否した。これから北条氏主導の鎌倉幕府と京都王朝の対立の溝が深くなって、遂に承久の乱（一、二二一）となった。

その結果、三上皇の配流と、朝廷の大所領群の没収となった。この乱は源平内乱にもおとらぬ軍勢が動いたので、兵糧米徴収が復活し、武士の濫妨があとをたゝなかった。諸国の守護たちの動きもはげしく、その上幕府の指令をまた

少年少女向けのまんが雑誌を読んでみて下さい。これでよいでしょうか？

ずに勝手に地頭をおきはじめ、その配下の武士たちは勝手に地頭と称し、神社仏閣、権門勢家の所領を押領しはじめた。こうした情勢はこの地にもあらわれ、横田庄の北の三処郷の地頭であった三処左ェ門尉長綱は、横田郷における横田氏の弱体化と、荘司小池氏の無力に乗じて、八幡宮に懇請し横田庄代官預所職を得た。この寛喜年間の数年間は全国的に気候が極めて不順で、目もあてられぬ悲惨な状態が全国いたるところにくりひろげられ、飢饉もその極に達したという。

長綱が亡って後家尼があとを知行してからは、これにことよせて八幡宮への未進が続いた。

三処氏はもとの郡家所在の三処郷の豪族であった。

律令時代郡司の娘が妥女として朝廷に上ったが、この地の郡司もそれによって力を得ていたらしいことが、遺跡によって推定できる。

その流れが三処氏と考えられる。

八幡宮の訴えによって幕府の下知状が下ったが、後家尼は応じなかった。請所契約も無視されたので代官を解易して、本所八幡宮より預所職をさしむけた。ところが後家尼は武器をもって預所良仙以下親類所従等の住宅二〇余戸を襲い、資材穀物数千石をとりあげたという。その後二〇数年間の詳細は明らかでないが、三処氏は再び代官職となり、本所との血どろみの争いが続いた。年貢鉄も上納しており、年貢銭納も行われていた。銭納の記録はこの地方では最も古いものに属しているから、その経済力は武士たちの欲望の対象になるには十分であった。やがて横田庄は本所と三処氏の領地折半所有（下地中分）となった。

ところが間もなく、この庄は執権北条時宗の異母兄で、京都六波羅探題（南）であった、北条時輔の支配するところとなった。三処氏は三処郷のわずかな所領をもつ地頭に後退してしまった。

文永一一年の蒙古来襲の翌年、後宇多天皇の祈願文が、岩屋寺院主覚満上人に届けられた。勅使は皇室の菩提所である京都泉涌寺雲龍院の長老であって、役後の安定と再来襲に備えたものであった。その後弘安四年、元の再来襲をみごとに撃破した北条氏の声望はとみに盛上がった。

北朝仙洞御領となる

こうした情勢の下、岩屋寺の中興僧祐円の力もあずかって、横田庄の中心で岩屋寺の山麓の馬場へ八幡宮が移されることになった。願主は最明寺入道時頼の後室で、時輔の母妙音禅尼であった。

小池氏も荘官的職務から全く離れたのであろう。代々京都から入れていた妻も、この地の土豪からにかわり、荘官的名前も土豪的なそれに変っている。そして唯、大催職と称して八幡宮の祭礼における古格だけを維持することになった。

その後妙音禅尼は数回にわたって、北条最明寺院追善のため、岩屋寺に土地を寄進した。禅尼の死後は、横田庄は一期間、鶴岡八幡宮焼失後の仮殿造営料所となり、さらに京都六波羅密寺造営料所となった。そして後醍醐天皇の文保元年（一、三一八）には禁裡御料所となった。このことは、この庄に産する砂鉄からつくられる鉄が、重要な役割を果したことをしめすものである。

天弘元年（一、三三一）南北朝の対立で、神器が北朝光厳天皇へ移ると、横田庄の一部（八川方面）は北朝仙洞御料所に分けられ、代官として院庁の蔵人所に仕えていた非蔵人で源氏系の安部氏が下って来た。その後三処郷は南朝系に、横田庄は北朝系となり、お互いに競いつゝ対立にまきこまれ、高田寺・岩屋寺の争いも生まれてきた。

建武中興がなると後醍醐天皇は、直ちに横田庄を石清水八幡宮へ寄進して旧に復し、武士の歓心を求め、南朝方であった鰐淵寺僧頼源を三処郷地頭に任じてその功を賞した。延元三年中興が破局を迎えると、山名時氏は因幡伯耆を領し、神器は北朝光明天皇に移ると同時に横田庄は、すべてが北朝仙洞御料所に復し、八幡宮領は終りをつげることとなった。

地方の乱れと、代官の横暴もあって、その後この庄に度々院宣が下っている。足利尊氏も西国に敗走し、再び東上するにあたって、岩屋寺に祈願文を届けている。その後山名氏の勢力が、この地にひろがりはじめて行ったのである。

あとがき

「横田庄五百年物語」もあと四回で終り、「横田の風土と歴史」をはじめます。この地の風土に生きた人々が育てた歴史をじっくり書きたいし、そこから私どもの明日への営みの、道しるべも得たいと思います。

o青年教師井上栄太郎と明治初中期の横田青年

o岩屋寺で修業した名僧たち

o製鉄に生きた人々

ほか

ことのほかの寒さと、流感がおそって来ました。くれぐれも御大切に。

会員配布一部百円／六九一　八島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

横田文化
復刊　第23号
3　月　号
昭和52. 3. 5
奥出雲文化協会

入門文化財
小字めぐり②

龍の駒

龍の駒は県道横田多里線を登った両県境の地名である。福頼から合流する道を左手にして更に登ると才の峠に至る。

横田町から周囲の各地に通ずる道では最も昔の面影を残しているところである。この道は古来から雲伯、雲備を結ぶ重要な道であった。幾多の夢を哀しみを運んだことであろう。生山行きのバスと木次線の開通がこの道をさびれさせたが、再び脚光を浴びる時代が訪れようとしている。

こゝに二つの遺跡がある。地図の○印の地点は、大呂一、九九一番地の北村虎吉宅である。標高五四〇米の道路傍に標柱と三体の地蔵がある。

美事な地蔵

中央の像は総長凡二、二米、巾〇、四米のもので、台座の正面に「右意赴者　当山亡者為追善也」と、左右に「享保一七天壬子七月吉日」「施主卜蔵清左ヱ門慈恵」の文字が刻まれている。二四五年の風雪にさらされているのに美事なものである。創建当日の入魂の地蔵の美しさを十分にしのぶことができる。

左右の二体にはそれぞれ、「文政七年甲申四月吉日」「施主　田部清左ヱ門、原田米蔵、北村武義、村下半兵ヱ」とある。一五三年前建立のものである。

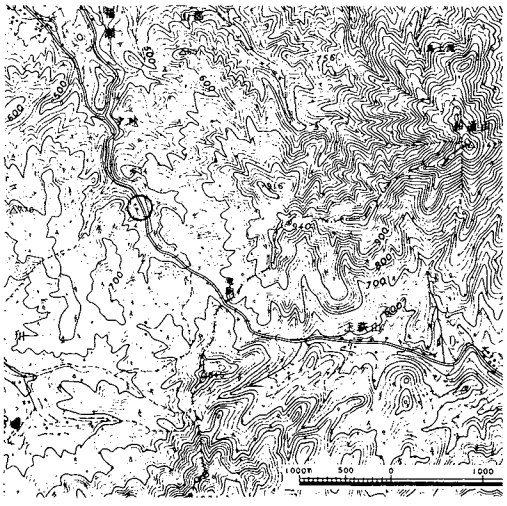
卜蔵清左ヱ門は中丁山根卜蔵の祖で、本卜蔵の甚兵ヱ正房（馬場八幡宮大鳥居寄進者）の四男である。兄に荒島新田開発の功労者孫三郎がある。弟の甚六が卜蔵家を継いだ。

田部ほかの施主は山郡、福頼の者で、いずれもたたら製鉄に関係のあった者と思われる。

享保十七年は数年来の凶作の絶頂の年であった。百姓は生活のあらゆる面における節約や禁止が要求されたが、小百姓の飢えるものは、イノコ堀りに八川竹崎へ出かけ、冬になっても大雪を堀りのけてイノコを求めたという。こうした天災地変にあうと、当時の人々は「天のたゝり、人のたたり」と神仏をまつり、或はそれらを勧請したり、昔の父祖の苦しんだ者をまつって、お互いの招福を願ったものである。

「当山亡者」のことば、施主がいずれもたたら関係者であること、地蔵が極めて立派なものであることは、たたら製鉄の受難者の霊を呼んで慰めるために建立したとも考えられる。この年をさかのぼる約八〇年の昔、慶安三年、山郡村のたたら師次郎兵ヱというものが、鉄を密売して処刑されている。伯耆に通ずる道路にさらされたものであろうか。

こゝにその霊をなぐさめたものかとも、杠日記ほかの記録を読む時に推理してもみるものである。



縄文式土器

遺物は谷間にのぞんだ舌状低台地ないし緩傾斜地の、径20～30米の範囲を中心として分布している。こゝは早く日本石器時代地名表に石器の登載されたところという。説明と写真と図を比べて読んでほしい。写真の出土品は当時鳥上中学校教諭加藤茂男が生徒とともに発見したものなどである。(番号は図、写真と同じいもの)

△中期的な土器

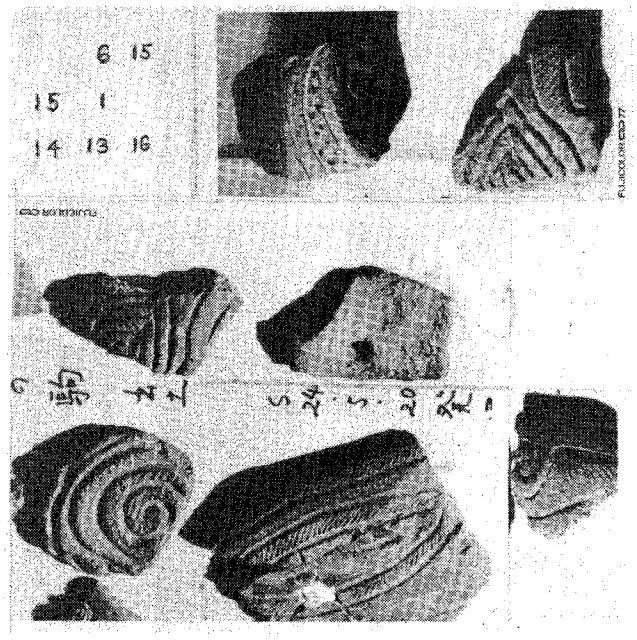
(1) **縄文地土器**＝極めてまばらな縄文が全面に施こされた小形の深鉢形のもの。

(2)(3) **縄文地反転口縁刺突文土器**＝口縁内面に沈線をもつものと、口縁外側に縄文を欠き刺突文のみのもの二つ。

(5) **沈線刺突文土器**＝凡字形の大形の把手に沈線で囲いを描き、また渦巻文を描き、それに円形刺突文列を配したもの。類例がない。

△後期の土器

(8)(9)(10)(11)(12) **沈線文土器**＝器面調整による擦痕をのこすところへ、比較的太い沈線でもって曲線文を描いたもので、山陽の中津式に該当。



(13)(14)(15)(16) **磨消縄文土器**＝二線の沈線でレンズ状を描き、その沈線間に縄文を充したものと、方形および円形渦巻文を沈線で描いたもの。

後期前葉から中期にかけ通有のもの。中津式に該当。磨消縄文とは沈線（くぼんだ線）などで土器の表面を区画し、縄文をつけた区画とへらなどでけずって平滑にした区画と交互に配置して装飾するもの。

(4) **縄文地沈線文土器**＝縄文地に曲線を沈線で描いたもの。

(3) **条痕文土器**＝内外一種の条痕をもつ。このものは縄文式の全時期にみられる。小片のため特徴がつかみにくい。中期前葉以前の土器に伴出していないので中期後半以后のものといえる。

以上土器の様相は、仁多郡内の下鴨倉・平田のものと同様、山陽文化の強い影響をうけている。

「出雲の国」の著者は、これらの地方を含めて奥出雲は中国山地文化圏としている。これらの遺跡の遺物は山陽～瀬戸内海方面との関係が深いことをあらわしているという。

このような山の住人たちは椎・楢（ぶな）などのどんぐりや、獣を求めて一時的にこの地に移りすんで、物資の交換や文化の伝播の役割をはたしつゝ、転々と住居を転じていった。やがて晩期に入ると低地中心の居住圏に限定されてゆき、次の時代、紀元前三世紀ころからの弥生文化の波による生活に移るという。稲作時代へと主体がかわるのである。

船通山の北方の小万才からは更に古い縄文式土器が出土しているが、その小字の項でのべる。縄文土器についての参考書は次による。

宍道正年著「島根県の縄文式土器集成Ⅰ」・山陰文化研究所紀要第一号・池田満雄東森市良著「出雲の国」（学生社刊）

（そのほかの諸資料・写真提供＝史談会員・足立文人）

平安朝より戦国末までの五百年物語③

群雄も荒さなかった仙洞御料所

山名六分一衆

永徳元年（一、三八一）三月一一日、完成をみたばかりの室町の花の御所へ、後円融天皇が行幸し、歓を尽した義満のもてなしによって、一七日まで滞在した。この年六月、義満は二四才で内大臣となった。国内各地の内乱も終息にむかった。それとともに義満は幕府権力の強大さを人々に印象づけるために、諸国遊覧と称する大デモンストレーションを展開していった。

後円融天皇が即位すると直ちに仙洞御料所横田庄は安堵された。山名師義が死んで時義があとをつぐと間もなく、将軍義満は岩屋寺に、その保護のための禁制をしいた。

このころ山名一族は、山陰を中心に丹波・丹後・因幡・伯耆・但馬・出雲・隠岐・美作・備後・和泉・紀伊と一一か国の守護職をもったので、世の人々は「六分一衆」とよんでいた。日本六六か国の六分の一の守護職をもつからであった。義満にとってはこの勢力を削減することによって、最後の安定政権への道を歩み出そうとした。師義から総領職をついだ時義が亡くなると、時義の嫡子時熙があとをついだが、師義の子満幸は、その総領職相続に不満で、舅の和泉守護である氏清とむすんで時熙に対抗しようとした。この対立をみた義満は、これをたくみに利用して将軍へ反逆の刃をむけさせるように策動していった。明徳元年（一、三九〇）時義が生前将軍をないがしろにする振舞が多かったという理由で、氏清、満幸に命じて時義の子時熙、氏幸を討たせた。

その討伐の功を賞し、時熙兄弟の分国但馬を氏清に、伯耆・隠岐を満幸に与えたが、翌年になると義満の態度が変り、満幸が院の（仙洞御所）御領出雲国横田庄を押領したとの理由で、出雲守護職をとりあげ、京都から追放し、時熙兄弟の罪を許した。満幸は氏清に事の次第を報告し「近ごろの京都（義満）のやり方は、ただ事にふれて山名一家を亡ぼす計略である……。」と蜂起を説いた。満幸はたしかに義満の真意を見抜いたというべきであったが、惜しむらくはその時期がおそすぎた。義満の離間工作によって、一家同心の条件は失われた後であり、将軍は実力を加えていた。

丹後から満幸、和泉から氏清、紀伊から義理が、それぞれ分国の兵をひきいて京都に迫った。この時幕府内には和平を唱えるものもあり、義満も勝利の確信はなかったが、「……当家の運と山名の一家の運とを天の照覧に任すべし……」と主張して和平策を退けたという。

満幸の横田庄横領

足利義満の時代の開幕をつげる事件は、康歴元年（一、三九）の政変であったが、この時の功によって、山名氏は出雲・隠岐・備後を加えて一一か国を領することになった。出雲・隠岐は満幸の分国であった。仙洞御領横田庄を横領したのは、代官であった安部氏の記録によれば、永徳二年（一、三八二）のことであって、この年代官を退いた。その翌年岩屋寺に対し、山名総領時義から院宣にまかせてと寺領の安堵状が届いている。その二年後の馬場八幡宮遷宮の標札には時義が、本願として名をつらねているし、更に二年後には岩屋寺に寺領を追加寄進している。その二年後の康応元年七月には、五月になくなった時義の冥福を祈るため、満幸がさらに寺領を寄せている。

山名満幸が出雲を領すると同時に、その一門である山名氏綱が、阿井郷（阿井・馬木を含む）地頭となって大馬木に来住し、出身の摂津国馬来郷の地名をとって「馬来」と称し、慶長年中まで続いた。安部氏が代官を退いたのは、満幸が出雲を領有した康暦元年から三年たった永徳二年（一、三八二）からである。

（この前後の横田庄に関する文書はすべて北朝の年号でしるされている）

安部氏にかわって、満幸の代官となったのは土岐宗正である。宗正は満幸の本貫地丹波の国の石原庄に住む武士であったが、石原氏と称してこの地に下り、下横田の通称三笠山に居城を置いた。この城跡に今日登ってみると、北に横田庄の中心である中村の地や岩屋寺などを一望のうちにおさめることができ、横領した仙洞御領を西の足下に眺めることのできるところである。しかもその望みみる地形が、福知山北方の石原庄によく似た地形であることを、先年その他を訪ねて知った。戦国の武士が望んだとはいえ、遠い避辺の地に移り、戦に明け暮れる生活の中で、出自を誇り、出身地を姓とし、故郷によく似た地形に住んだことは、心の支えでもあったであろう。

明徳の乱

「太平記」の流れをくむといわれる「明徳記」によれば、満幸の横領に対しての院側の届出の都度、義満は数度にわたって教書を下し、その返還をせまった。天正末年まで点在する諸記録によれば、横田庄は比較的豊かで貢納も良く、重要な荘園であったようである。

すでに述べたように鉄を貢納する荘園であったことは、足利氏を意識する山名氏にとっては、

戦力源として重視したのであろう。乱後再び代官に復した安部氏の記録によれば、鉄を商って日本海を航して京都或は北陸へ出かけていたとあるのは、それを裏付けるものである。

満幸は遂に義満の教書にこたえて、上皇の代官を下向して頂ければ返還しようと約束をするに至った。そこで院の別当（院庁の長官）の中納言日野家斉の下司斉藤太郎左ヱ門尉光秋が入部してきた。ところが満幸の下知によって、村主、地下人らがこれを追放した。光秋は九死に一生を得るような有様で京都に帰り、ことの次第を奉上したので、後円融上皇は激怒し、三度目の院宣を下した。一度は厳しく二度目は温やかなはからいある沙汰に対して、この振舞はなんたることぞという激しいものであった。

義満は時至れりとばかりに、急いで守護職の改易を断行したのである。

足利・山名両氏の戦は、明徳二年一二月三〇日の払暁から、京都の北西内野（上京区）を中心に繰ひろげられた。満幸軍は細川・畠山軍と交戦したが、義満が馬廻衆三千騎をひきいて、細川軍の応援にかけつけたことによって大勢は決した。満幸の軍は惨敗した。この戦で手兵を率いて満幸に従っていた三沢六代信濃守為忠が討死した。

晦日、京都桂川のあたりを梅津をめざして足ばやに行く、二百騎の武士の一団の中に満幸の姿があった。満幸のがさじと追い迫まる有力な敵兵の、ために、討死かとみえたところ、部下の松田将監・塩谷五郎がとってかえし、深田の細道で激戦の上、腹かき切っている間に、満幸主従は桂川を渡って丹波をさして落ちていった。われ先にといそぐ落武者の姿は、あわれでもあり見苦しくもみえた。大江山の麓から但馬に入り、こゝでなおもゆるめぬ追撃軍を迎え討とうとしたが、頼みとする国人たちは一人として味方するものもなく、かえって変心して満幸を討たんとしたので、二月に入るころ伯耆へと向った。

京都へ進撃する時は、出雲・隠岐・伯耆・丹波の四か国の兵千二百余騎であったのに、今は従うものわずかに三〇余騎のみであった。

満幸は伯耆に築城し、出雲へは塩谷師高を下向させ、月山富田城に籠城するように命じた。一方の氏満は討死して、山名軍はこゝも敗送してしまった。

春あけて、出雲の守護には京極高詮が任ぜられ、代官として隠岐五郎左ヱ門尉が出雲に下向した。富田城で満幸の指図をうけて、追討軍の来襲をまちうけていた師高は、国人のほとんどが隠岐氏に従い、味方は城中の一族三〇余人だけとなってしまった。やがて父上郷入道は、以前京極氏からうけた恩儀に報いねばと、二七騎をつれて降人となったので、師高は父を送ってのち、二主にまみえずと自害して果てた。

この報を聞いた満幸は二三騎をつれて再び因幡にひきかえしたが、国人のすべてが離反したので二月一一日剃髪墨染の衣の人となり、筑紫の方へと落ちて行った。つき従うものわずか五騎であったという。

その後明徳四年に入っても、山名の残党の擾はたえず、二月には三刀屋城における激戦もあった。この乱に、馬来氏、伯耆の卜蔵氏（のちに子孫が竹崎に移住）はいずれも山名に属して戦い討死した。

論功行賞の結果、山名の分国はほとんど功績のあった武将に配分され、山名氏は凋落した。一方、三千余騎の直轄軍団を擁して有力な守護も睥睨するにいたった義満の姿はあざやかなものであって、やがて北朝権力も圧倒し去り、南朝を名実ともに解体させ、両朝を合体へと進ませることになった。

後円融上皇の崩御によって、横田庄は後小松天皇（北朝系）に伝領され、すべてが禁裏御料所となった。やがて庄内尾園村は備後地毘庄（庄原方面）の地頭山内首藤氏の所領となった。さきの代官石原氏は山名氏の敗色濃くなったころ、庄内の八幡百姓と仙洞百姓によって追われ、郡内西部の地頭三沢氏をたよってのがれた。（のち三沢の代官として再び横田庄へ登場する）安部氏は再び代官に返りさいた。岩屋寺の寺領が安堵され、翌応永元年（一三九四）後小松天皇は後円融上皇追善のため横田庄の半分を朝廷の菩提所泉涌寺（孝明天皇まで二八代の天皇をはじめ皇后皇族の陵墓をもつ）に寄進した。一八川地方であろうーそこで八川に住んでいた安部氏は院の代官として、その中心地に近い稲田へ居を移した。今日遺構の残る土居屋敷は規模が大きい。この郡の西部三沢郷にあって、五代約百年、堂々として地盤づくりにつとめていた地頭に、伊那源氏の流れをくむ三沢氏があったが、横田庄は院の支配力が強く、三沢氏が院宣をうけて横田庄の代官になるにはなお二十数年以上の歳月を要した。

それまでは眼を出雲北部にむけ、鉄を分与することを伴って、勢力を扶殖し出雲制覇を実力で歩んでいた。そして守護京極氏の代官尼子と対立することになったのである。

会員配布一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所印刷

横田文化

復刊　第24号
4　月　号
昭和52. 4　2
奥出雲文化協会

仁多の「花神」　地域史・地域文化②　横田庄五百年物語④

テレビドラマ「花神」の

大村益次郎と馬駈の秀斎 横田の淳斎

千原秀斎

幕末、洋学（蘭学）を修める者は、和魂洋才を根本に心掛けた。大村益次郎も、蘭方医梅田幽斎に入門後まもなく、豊後（大分県）の広瀬淡窓の感宣園塾に入門し（二〇才）、一年半後梅田塾に帰り、二年後の弘化元（一八四四）にはさらに大阪の蘭医緒方洪庵の適塾に入門した。

出雲国仁多郡馬駈村の千原秀斎（秀介）の伜二一才の啓介（のち秀斎）は、三刀屋町横山元湛の弟一八才の恭介とともに、井上良斎の紹介で、弘化三年五月二七日に、広瀬淡窓の感宣園塾に入門した。入門番号は啓介二〇四一番、恭介は二〇四二番であった。

入門総数は五千人という。帰ってから恭介（元洪）の兄禎庵（禎介）の長女を嫁とった。

その六男はのち島根県立松江病院長として、名医として令名をはせた錦織芳である。秀斎と益次郎との出合いは考えられないが、二人とも同じ道をたどったということ、それが幕末の医者のたどる道であり、学者となる道であったという縁をみたのである。

そのころの出雲の医師たち

緒方洪庵（文化七～文久三、一八一〇～一八六三）の適塾に入門した出雲・石見の塾生は一四名であるが、出雲の七人の中には雲南の者はいない。洪庵よりしばらく前に、華岡流外科を開業し、全身麻酔による世界で初めての外科手術をした人に、さきに「華岡青州の妻」の本や映画やテレビで登場した紀州の華岡青州（宝歴一〇～天保六、一七六〇～一八三五）がある。全国より二千人の入門者があったという。出雲からは三二名で、その中に文化五年の横田町の小池文専と天保一一年の竹崎の鈴木景順がいる。帰って藩内で活躍したものは、西山砂保と大森加善であった。

松江藩の幕末における西洋医学の発達にめざましいものがあったのは「やんちゃ殿さん」こと第九代藩主松平斎貴（なりたけ）が、非常に進歩的で西洋好みで、時計・電信器・写真機・医療器具や蘭書などを身辺において積極的であったことが原因である。そのもとは、斎貴が文明開花の門戸長崎に近い佐賀鍋島藩主の娘、充姫をめとっていたからである。このようでありながら明治維新に松江藩が、長州藩その他のように花開くことがなかったのは、親藩であったことであり、松江藩は新政府からにらまれる立場に

地域史・地域文化②

具体的項目の提案から

里づくり、地域づくりの一側面で、横田として忘れ去られていて、最も必要なものを幾つか提案したい。そして号を追って、その思想根拠と具体的計画案をのべ、まず同好者の方々の御賢察をわずらわしたい。

横田のみなおし

ものまねでなく、横田独自で、根本をなすもの。

①奥出雲歴史民俗資料館の建設　「横田文化」No.9に詳説したが、その重点は、日本のそろばんの元祖でしかも今日の基準である「雲州そろばん」、世界に唯一の「古代たゝら製鉄」を中心として（産業考古学の対象としても最も重要視されてきたもの）、過去と現在即ち遺跡・遺物・古文書と、今日の製造工程と、復元する「たゝら」を立体的に結ぶ資料館は、横田町が発案し進める責任のあるもの。（懐古趣味に出発した単なる民具集めの意義は大きく失われた。）

②財団法人奥出雲文化財保存維持団の設立
官公民の団体・個人一体とする。

③奥出雲文化財写真集の発行

④「そろばん」「工芸品」のより美しさを育て、郷土の味の保持、民芸の育成への努力が急がれる。
以上は陰陽連絡網の完成までに、横田が成しとげる必要のあるもの。

⑤小字の歴史を綴る運動　素朴な口伝を綴ることを通して連帯のきずなを。

内容の充実のため

⑥県内の両大学と横田を結ぶ方策。

⑦夏祭りに新しい踊りと、子供の行事を加える案。他

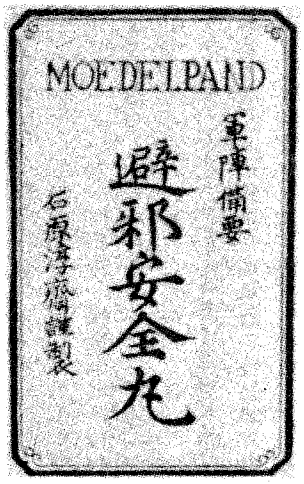
あったからである。

砂保はその後長崎に行き、来朝まもないシーボルトについて二年余り学び、松江藩における外科手術の第一人者となった。大森加善（能義・大塚村）はその子泰輔（四代）を青州の塾に入れた。青州死後はそこの塾頭となるほど腕を磨いて帰り、五代泰輔とともに、大塚に医学塾を開いて、これも外科に腕をふるった。横田の藤原道夫氏の祖父泰造は四代泰輔の塾に入って学び、塾頭として頭角をあらわした人である。

石原淳斎（明治七、五五才没）

医師石原要博氏の曽祖父が淳斎である。安政年間に淳斎の父が医業をはじめたが、淳斎は（文政二生、一八一九）一六才の時備中において儒学を学び、二四才で江戸に出、兄啓斎とともに儒学を学ぶとともに西洋医学を修め、当時江戸における蘭医学の大家宇田川榕庵や坪井信道の塾にも通った。業を終えて帰国し家業をつぎ、雲伯備三国に名声をうたわれた。安政五年コレラ流行の折には、これが防止に尽力し、藩家老から賞詞をもらった。江戸において軍中医法を学んでいたので、文久三年松江藩の医師二人に「陸軍海軍蒸気船中内治外治要用」の医法を伝授したほどであった。当時における軍陣医学の権威者であり、軍陣医療に必要な薬剤を調整し、自宅を調薬所「日新館」と名づけた。

幕末風雲急をつげるころ、師の秘伝としていた、毒煙・粘火術の法の伝授を藩の軍用方から申し入れをうけた。今日の化学兵器にあたるものであったから、藩主の指図がなければできないと申し入れた。



松江藩と長州征伐

文久三年尊皇討幕を旗印とする長州藩に対して、第一次長州征伐がはじまった。翌元治元年（一八六四）横田に農兵操錬場が設けられ、広島屋（現大市西田村）に松江藩士数名の屯所が置かれた。郡内の地主層の中から選抜された若者がこゝにおいて訓練をうけた。士分の取扱いをうけるということは、徳川三百年の夢であり、新しい時代の動きとともに、活気がみなぎった。

慶応二年（一八六五）六月、大村益次郎は石州口の長州藩の参謀として、下積みから漸く舞台への登場をした。この時、長州藩の小数の兵が、幕府方の浜田・福山・紀州などの諸藩兵を打破り、益次郎はその存在を明らかにしめした。はじめての戦斗参加でもあり、はじめての指揮でもあって、ヨーロッパ近代兵学の実証の初舞台であった。兵にはヨーロッパ式の兵服・最新式の銃・数門の大砲という洋式であったのにひきかえ、益次郎は浴衣に袴をはいて馬に跨り、首から筆記用の石盤をさげているという姿であり、馬のうしろには、梯子をかついだ数名の門弟が続いていたという。

くわしくはテレビにゆずることにするが、益次郎は、一生涯洋服がきらいで一度も着なかった。後方の松江・鳥取藩を加えて幕府方は二万、長州藩は七百であったが、新式装備と戦術で成算が胸にあった。

筒に線条のある銃をもつ長州藩の命中率に威力があるとともに、陰蔽物を利用して武士にあるまじき「泥棒撃ち」の訓練された射撃は、幕府側の損害を増すばかりであった。

退却して浜田城に入った藩に対して益次郎は和平を申し込んだ。体のよい降伏要求である。浜田藩は親藩の屈辱の降伏をとらず、城を焼き、とどまるという藩主を無理に船にのせて、海路松江へ去ったので戦は終わった。六月十六日から七月一五日までの戦であった。

この戦に参加するために仁多郡は、農兵のほかに郷夫五二九人を出し、各戸からはわらじ二足と馬用二足ずつを供出した。また石高一〇石につき干草一貫匁に梅干・味噌も送り出した。その上たたら師たちは、手代・山子をつれて征討と警固のために石見におもむいた。

石原淳斎は元治元年一一月、松江藩惣小荷駄を仰せつけられた（兵糧・武具を運ぶ駄馬隊）。長州征伐には旗本として藩公に従い、隊付軍医長として、神門郡平田の陣所までかけた。郡内の農兵もこゝまで出かけて戦が終わり引き揚げたという。

益次郎と淳斎は相まみえることはなかったが、医者＝蘭学者＝洋学者＝兵、という道は同じであった。幸か不幸か淳斎がこゝまでで終わったの↖

平安朝より戦国末までの五百年物語④

覇権への道をゆずった三沢氏

応仁の乱とその前後

将軍義教を赤松満祐が殺すという嘉吉の乱（一四四一）を契期として、各地に土一揆が蜂起して、足利幕府の権威は大きくゆらいだ。

満祐は山名宗全らに攻められて自殺し、明徳の乱後おとろえていた山名氏の地位が再び強まった。将軍義政の失政は幕府の財政を窮乏におとし入れ、民衆の反抗に加え、土一揆が盛んとなった。しかも頻りとよせる天災疫病には幕府も手のほどこしようがなかった。農民の反抗は守護の支配の動揺ともなり、将軍継嗣問題もからんで、細川・山名両派の対立も激化し、応仁の乱（一四六七）となった。

守護大名は京都に集まり、両派に分れて戦ったが、領国内の家臣団の運動も活発となり、次第に守護は帰国し、京都での戦は終わった（一四七七）これを契期に守護大名の多くは没落し、戦国大名（尼子・毛利など）が抬頭し、その動きの中で荘園もほゞ完全に崩壊してゆくことになった。

そのころの出雲

この間の横田庄の領家への貢納の記録は点々と続いて残っている。横田には代官が、馬木には地頭馬来氏が、郡内のそのほかは三沢氏が地盤としていた。八代為在の時代である。そして出雲北部にまで勢力をのばしていて、守護京極持清の代官尼子清定と拮抗していた。そのことは次のことがらから判断することができて、持清とその代官清定にとっては、あなどり難い存在であった。

一七〇年間にも及ぶ、出雲大社と日御碕神社の土地争いのとりしずめを、三沢氏が清定とともに行うよう守護から命ぜられた（一四五六）ことがその一つである。その後、伸びゆく三沢氏の勢を押さえるために清定が、三沢の代官岩坂村の福頼氏を攻め討ったのである。やがて守護京極持清は三沢氏のあなどり難いことを知って、清定に三沢城を攻め落す必要性を書き送るほどになった。そこで清定は三沢氏を制する第一歩として、三沢党の知行を差押さえることを持清に要望して、その五氏（八束野波の多胡・上山佐の山佐など）の出雲各地の所領を一時差押さえた（文明七年）。ところが持清は、これ以上の清定の勢力の拡大は好まず、かえって清定の行動を非難しはじめた。

これは守護の立場からだけでなく、出雲国人土豪も尼子氏に叛旗をひるがえす情勢であるほど、清定には守護代の立場をこえる行動があった。

乱中の文明七年（一四七五）京極氏が近江の六角高頼を討ったことがあるが、為在の兄信濃守為忠が、家臣多数とともに討死をしたというから、三沢勢力も強大であった。（このあと備後にあった三沢の所領はことごとく山内首藤氏のものになった）翌文明八年、三沢氏は能義郡の土一揆を後押しして、富田城を攻めた。

その後の尼子氏は着々と勢をひろげ、出雲半国を手中におさめ、出雲西部への進出を企て、三沢・三刀屋氏を傘下におさめんとした。こゝろよしとしない三沢他の国人土豪は勢力を結集して、尼子氏を富田城より追放してしまった。

戦国大名尼子氏の登場

雌伏二年、文明一八年（一四八六）再び尼子氏は富田城へかえり咲くことになった。若き経久の登場である。やがて中国一一か国の大守の名をほしいまゝにし、永禄九年（一五六六）毛利氏に降って開城するまで続いた。

経久は雲南に地盤をもち、出雲国人中の最右翼であり、経久追討の主力であった三沢氏を討つことに重点を置いた。三沢氏はまんまとその謀事にかゝり、大きい傷手をうけて軍門に下った。そこで、出雲西部の諸将は戦わずして尼子氏に下ってしまい、三沢氏は仁多郡西部に押しこめられてしまった。

こゝまでの三沢氏は尼子氏

↙は松江藩と長州藩との差であった。明治政府になっても松江藩は全く登龍する人材をもたなかった。淳斎は明治二年少年輩に学問教授を命ぜられ、四年には医学大教授生仁多引受を拝命し、五年に松江藩医学校支校が出雲十郡におかれ、仁多郡は善勝寺で、淳斎が世話役であった。郡内の出身者は（　）内年令

馬馳	千原秀斎	(46)
下布施	横山元格	(43)
湯村	勝部行助	(51)
大内原	杠元斎	(28)
三成	佐々木寛蔵	(33)
〃右	藤原元達	(45)
〃右	中村寛十郎	(34)
高尾	藤原元徳	(41)
三沢	長瀬元随	(32)
大馬木	潮崎文逸	(29)
〃右	渡辺秀積	(45)
八川	安井文英	(24)
〃右	坪井柳兄	(40)
横田	小池澄斎	(33)
蔵屋	杠貞策	(57)
大呂	坪倉昌伯	(45)
竹崎	嵐谷謙策	(36)

（参考書）米田正治著の「島根の医学史覚書」と「島根県医家列伝」・広瀬淡窓全集・司馬遼太郎「花神」・綿屋寿雄著「大村益次郎」・仁多郡誌ほか

を打倒して、戦国大名にまで成長する可能性をもっていたのであるが、一敗地にまみれてからは、仏門に逃避したり、小手先の策にのみ走って、大きく成長することには至らなかった。（尼子経久の母は馬木村の出であるといわれるが、馬来氏の系図にはその片鱗もみることがない。能義奥の馬木氏にゆかりのあるものではあるまいか。これについて別の機会に究明したい）

明応元年（一四九二）横田庄に年貢未進の記録がある。三沢氏の家臣石原重国がこの庄に移ってそれを取り締まった。それから一六年ののち、十代遠江守為忠が院宣によって代官となって、横田庄藤ケ瀬に城を築いて移った。

一敗地にまみれた三沢氏の再起には長い年月を要した。一一一年間代官職を持っていた安部氏は、野に下ることになった。三沢城には為幸（為行とも）が留まった。

藤ケ瀬城は現在の横田町の北端にそそりたつ岩山の上にあって、前は斐伊川が流れ、背後は密林地帯といわれた野呂山が続いていた。東は伯耆堺の船通山、南は備後堺を望み、西には三沢城を遠望でき、眼下の横田盆地はすみずみまで見通すことができた。三沢の鴨倉城が時を待つための城であったのに対して、この城は勢力誇示する、新らしい城であった。これからのちは、仙洞御料所・泉涌寺御料所ともに、春秋二回の貢納は尼子、毛利の激戦のあった時以外は欠けることなく続いたようである。

その後の三沢氏

仏門に入った為忠のあとは、為国が総領として藤ケ瀬城をその居城としたが、尼子氏に攻められて陥ち、為国・為元親子は捕えられて富田城下塩谷に幽閉され、五年後に斬られた。このころ城主がこのような仕打ちを受けることは珍らしい。諸将に対する尼子氏のみせしめであろうか。

三沢氏は再び横田庄には代官を置くのみで、三沢を本城とし、奥出雲の武将としての地位に甘んぜざるを得なくなった。それから十年が、尼子氏方の勇将として為幸・為清と二代続いて精彩を放った時代である。天文九年、尼子氏が毛利氏をその居城安芸吉田に攻めた時の為幸の活躍はめざましく、十人の精兵をつれて元就の陣に分って入り、元就を今一太刀まで追いつめて果さず、討死した。

幼少の為清を擁する三沢氏は、天文一〇年雲備一一の諸将とともに大内氏に通じた。そして一二年の富田城攻めには大内方に加わったが、途中で尼子方にねがえり、大内氏は囲をといて退却した。尼子氏は三沢氏の真意を疑ったのであろう。横田庄には総代官森脇家貞以下四人の代官を送り込んで、徹底した支配を確立した。鉄も押さえられたであろう。三沢氏は仁多郡の西部に閉じ込められてはばたきを止められてしまった。尼子の支配はそれから一七年続き、この間に今日の横田の町は急速に成長していった。

永禄二年の石見銀山攻防戦には、三沢氏は尼子方で、毛利を敗走させた。その後反撃の毛利軍の戦は三年にわたって続き、全五年、銀山は毛利氏の手に帰した。間もなく三沢氏は毛利氏に味方し、その力を借りたであろうか。その年の暮れには横田庄にいた尼子方の代官も引き揚げ、郡内から尼子の勢力は一掃され、三沢氏も横田庄の代官に復した。

全九年、尼子氏は富田城を開いて毛利氏の軍門に下った。一二年には、三沢氏は毛利氏へ人質を出すとともに誓書を出して忠誠を約したが、その後たびたび誓書を出させられた。

二二年後の天正一九年、毛利輝元が秀吉から、出雲ほか八カ国をあらためて安堵された時、仁多郡は輝元の直轄地となし、郡内各地に家臣を送りこんできた。鉄の収納は厳重すぎたとみえて、郡内の西辺の阿井村と東辺の大呂村の鉄奉行が、それぞれの地の農民に殺されるという事件が起った。

あとがき

○横田史談会例会

四月三日（日）　史蹟めぐり

広瀬町富田城・出雲札所の清水寺ほか三ケ寺。

五月七日（土）　六月四日（土）

考古学講座・たたら講座

○「雲州そろばんの今昔」（松江文庫7）

として今秋出版。

奥出雲の歴史と風土の中で幾多の職人が育てあげた、手仕事の技術発展史のすべてが解明されます。

雲州そろばんの決定版です。

○馬木城主馬来氏　について、「山陰史談」12・13号に研究が発表されます。続いて、三沢氏の出身の解明と在来の系図の根本的修正についても発表され、こゝにその疑問のほとんどが解明されることになります。

○奥出雲たたら製鉄史第一集

わかり易くのべた小冊子も今秋出版の予定です。

奥出雲の誇りを認識することができると思います。

会員配布一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田庄
復刊 第25号
5 月 号
昭和52. 5. 2
奥出雲文化協会

横田庄五百年物語⑤ 清和源氏について

平安朝より戦国末までの五百年物語⑤

仙洞御料所横田庄の終末

菊亭晴季

天正二年(一五七三)三沢為清は亀嵩に城を築いて移った。その翌年三刀屋氏とともに誓書を毛利氏に送った。上月城攻撃には毛利軍に属して参加したが、翌七年さらに八年と、流言のため為虎は誓書を届けた。八年には秀吉が鳥取城を攻め、毛利氏はこれを救援するために兵を集めた。この時為清為虎親子が、秀吉党の伯耆の南条元続と結んで織田方に通じているとせめられ、父子ともに誓書を出して服属を約し、さらに信ぜられないことを恐れてはじめは出陣を遠慮した。誓書のことは毛利方の軍記である「陰徳太平記」の記述をもとにしたものであるが、後述するように、横田庄として京都との往来も多く、代官としての三沢氏が情報にも明るく、そして誘惑も多かったことによるのであろう。

天正七年の京都の記録に、「横田庄代官菊亭晴季」の名があらわれている。数多い公家の筆頭は五摂家で、摂政関白になる家柄である。次が清華七家で、太政大臣・内大臣になる家柄である。この下におびたゞしい平公家のグループが幾層にもあるから、清華の中の菊亭(今出川ともいう)は権門であった。これより前、仙洞御所は火災によって焼失し、その後新建されているから、そのための貢納が強く要求されたに違いない。

そこで菊亭晴季が代官として両方の采配をふるったものではあるまいか。晴季は当時実力者であり、秀吉と親密で、栄典を希望する秀吉のため、天正一三年三月内大臣をしりぞいて右大臣となり、秀吉を内大臣におした。その年の七月、秀吉は晴季のはからいで豊臣姓をさずかり「任関白」の勅許を得た。

備中高松城

天正一〇年は、備中高松城がこれを攻める織田信長方の総大将秀吉によって水攻めにされた年である。三沢氏はこれに対する毛利方の第一線に陣して参加した。この間の状況は最近の「播磨灘物語」にもくわしい。いまあらためてこゝに記することを省くが、三沢為虎の態度については、今までのところでもわかるように私と作者は多少見方を異にしている。さらに次に述べる二、三の事柄はそれを補強してくれるようである。

高松城の攻防が織田信長の死によって和睦となったあとで、この戦をめぐって織田・毛利両氏の間の仲介役であった安国寺恵瓊が、秀吉方からもたらした一束の書状を毛利方に渡した。それは毛利陣営にあった諸将で秀吉に内通したものの誓紙であった。この中に三沢の老臣三沢雲波入道のものがあったので、為虎は直ちに雲波を斬ったという。しかし私はこれは雲波一人の所存ではなかったであろうと推定する。

今まで度々誓書を出していることからも推定できるが、三沢氏と恵瓊は次のようなことから、相当の面識があったと思われるのである。三沢城下にあった三沢氏の菩提寺妙厳寺(今日は蔭涼寺という)に、恵瓊からこの寺宛の便り二通あり、更に覚離寺にも一通ある。内容は両寺から毛利輝元に裁断を仰いだことに対する返書である。為虎がこの間をとりもっていることは確実であり、機に乗ずるを待っていたことも想像できるのである。

また仙台藩伊達騒動の中心人物亀千代(四代綱村)の母で、三代綱宗の側室である初子の祖父為基は為忠の弟である。仙台の北で前沢の殿様と呼ばれた初子の弟の系図によれば、為基は兄為虎が、毛利に対して人質を出すなどとかく弱腰であることにあきたらず、天正初年に家を出て、近江国にあった三沢氏の所領に移り住んだという。その後数奇な運命をたどり、初子の登場となって三沢氏は家名をあらわすことになった。(この詳細については「樅の木は残った」が放映されたころ、山陰中央新報の紙上に紹介した。

横田庄の終り

天正一一年、毛利氏が配下の諸将に要求した人質はきびしかった。山内首藤氏ははじめこれに応じなかったが、諸将のとりなしで漸く送ったという。

仝一三年、為虎は主城であった亀嵩城の保持を毛利氏に嘆願している。亀嵩城は父為清がさきに横田から三沢城にひきこもってからのち天正五年に移った城である。越えて翌年、毛利の命で為虎は備中国柳国胃城普請の材木引奉行

☆次頁下段へ続く

横田地域史のしるべ①

清和源氏について

院政　庄園　権
現社と修験者　たたら

奥出雲の歴史を理解するには
源氏について知っておくことが必要である。

源氏とは

上古では物部氏、平安（中古）以降では藤原氏と源氏が最も栄えた氏である。殊に源氏は平安朝以後、武家の棟梁として政権を掌握した氏なので、後世、武士の家系は多く源氏を名乗るようになった。

嵯峨天皇（七八六～八四二）には大勢の皇子・皇女があったが、その中の八人を臣籍にうつすことになり、その時、源の姓を賜ったのがはじまりである。

源の姓を選んだのは、大陸文化に理解の深かった天皇が魏の世租が同族河西王の子賀に「卿と朕とは源を同じうす。事に因って姓を分つ。今より源を氏となすべし」と源姓を与えた前例によったものといわれる。源氏はここに端を発したものであるから皇族と同族である、という意味をもつ。これが先例となって、皇子・皇女が臣籍に下る時はこの姓を賜ることが多かった。嵯峨氏のほかに

（後三条までが平安時代）

仁明（833～850）文徳（850～858）
清和（858～876）陽成（876～884）
光孝（884～887）宇多（887～897）
醍醐（897～930）村上（946～967）
花山（984～986）三条（1011～1016）
後三条（1068～1072）後嵯峨（1242～1246）
後深草（1246～1259）亀山（1259～1274）
後二条（1301～1308）正親町（1557～1586）

ふれることにする。

源氏の一族は全国に広がっている。しかし武士の棟梁として最も繁栄したのは清和源氏であり、その中でも源経基を祖とする源氏一族である。各地方に勢威を張った源氏の殆んどは、その末裔であり膨大な数にのぼる。

清和源氏

この最も繁栄したのが、清和天皇の第六皇子貞純親王の長子、源経基を始祖とするもので、後世は清和源氏といえばこの系統だけを指すようになった。

経基は、藤原純友の乱に武功をたて、諸国の国司を歴任して各地に勢力を広めた。経基のあとを受けて源氏の地位を決定的にしたのは、長子満仲である。摂津多田庄に住んだから多田満仲ともいい、この一族を摂津源氏・多田源氏ともいう。満仲には系図のように四人の子がいた。長子頼光は大江山の鬼退治で名高く、三男頼信は鎮守府将軍となり、関白道長に仕えて信任を得ている。そしてその子頼義の子八幡太郎義家が、前九年、後三年の役で東国における源氏の地盤を確固不動のものとした。義家の弟義光は琵琶湖畔の新羅明神で元服の式をあげたので新羅三郎と名乗り、自ら官職を辞して奥州に下っている。鎌倉幕府を開いた源頼朝は満仲の末である。（系図の中の()の数字はその子孫から派生した氏族の数である）

宇多源氏

宇多天皇の六人の皇子の末に賜った源姓の系統をいう。その中で、敦実親王の末から出た源氏が最も栄えた。源成頼は鎮守府将軍となり、のち近江国佐々木庄に住し、佐々木氏を称した。

その他の源氏については省略する。この二つの出雲に関係の深い源氏が各地に移り住んだのであるが、その中で次の三源氏について、

摂津源氏（多田源氏）

清和源氏の嫡流源経基の子満仲、その子頼光を祖とする。

摂津国河辺郡の多田に住んだのでこう呼ぶ。

近江源氏

四頁へ続く

☆前頁より

として出張した。その留守中に毛利方の検使が亀嵩城に入った。留守兵は弱兵のみで抵抗もなくとり壊されたという。

全一七年、三沢氏は安芸に移り、翌年は小田原城攻めに参加したが、三百石を給せられるのみの処遇をうけた。馬来氏はしばらくは馬木村三千五百石を領したから、三沢氏の所領六千六百石（横田庄請之知行は除く）からの転落は極めて冷遇であった。

記録によれば、

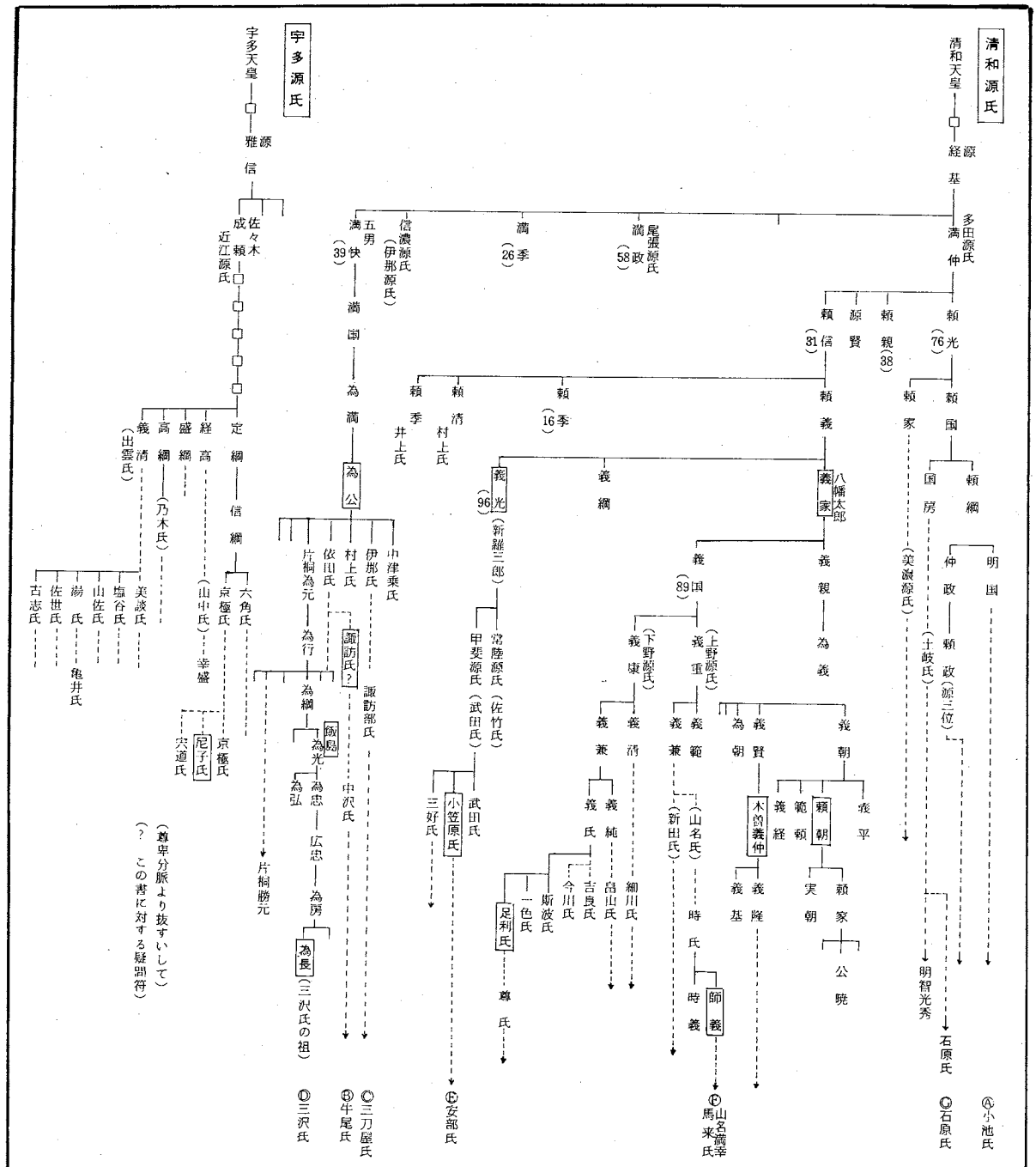
天正一四年「横田庄代官菊亭晴季　納貢可」
天正一八年「横田庄貢租を天皇官女にわけたまう」

とある。

天正一九年の横田庄は毛利の知行の下におかれ、その家臣が入ってきた。そして大催小池氏が毛利氏より、村役人に任ぜられ鉄のきびしい移出を命ぜられた。

こゝに全く五百年間に及ぶ「横田庄」は幕を閉じたのである。

（完）



中・近世の武将の名

幼名・実名・通称・あだながあった。

幼名（稚名・若名・童名）は子の将来の幸運を祈ってつけた。松・竹・梅・鶴・亀を、又動物の名をつけて強くたくましさを願った。しかし公家の上層では下に「君」、下層では「丸」をつけた。さらに家には「〇千代」と一字か二字がきまったりもした。

実名（名乗り・諱しいみなし・本名・真の名）は元服とともにつけられる。北条氏が「時」、足利氏が「氏」、毛利氏が「元」、三沢氏が「為」、をつけるのは祖先の武勇をしのんだからである。これを通字という。家柄、血統の表明ともなった。そして主君の一字を拝領して改名することは臣従をあらわし、これを拒否すれば敵対の意志表明であった。

通称（仮名ーけみょう・俗名）実名の下のものが呼ぶことは不敬であるとして、別の名でよんで礼儀をあらわした。

あだな（異名・醜名ーしこな）もあって、秀吉の「猿」、徳川綱吉の「犬公方」は有名。

（二頁より）

宇多源氏の嫡流雅信の子扶義、その子成頼を祖とする。成頼が近江国佐々木庄に住み、佐々木氏を称した。保元・平治の乱に功をたてた秀義の長子定綱の末より、六角、京極氏が出た。その弟高綱は宇治川の先陣争いで有名であるが、乃木希典はこの末孫である。定綱の末弟義清が出雲の守護となり、その一族が出雲に移り住み、能義、八束、出雲の諸郡に散在した。それが系図にあるように、出雲の国人豪族として成長した。

佐々木氏の嫡流は、近江の北部の京極氏と江南の六角氏に分れたが、のち京極氏が出雲の守護を兼ねると、その一族で近江国犬山郡尼子に住んで尼子氏と称したのが、その代官として広瀬の富田城に入った。それがのち中国最初の覇者となった尼子氏である。

徳川時代になって、松江藩主堀尾氏についで松江城に入ったのが、この京極氏のあとで、その後継者が絶えると松平氏が入って明治維新まで続いた。

信濃源氏（伊那源氏）

清和源氏満快の流れであって、はじめ源氏の祖である経基が信濃守となって以来、その子満快の末為公が再び信濃守となって、その子孫は信濃に栄えた。その中心が伊那谷（天龍川流域）であったので伊那源氏ともいう。その一族は系図に書いてあるほか、合わせて十数氏がある。

出雲における諸源氏

○清和源氏

満仲流　多田源氏
　　上野源氏
　　下野源氏
　　甲斐源氏
満快流　伊那源氏

○宇多源氏

近江源氏

の諸流があって、出雲へ最も早く源平合戦のあと、平氏の勢力を一掃すべく、頼朝によって守護に任命されたのが、近江源氏の佐々木氏である。

義清を初代守護とし、その一族が簸川郡の北部の美談から南へかけて、古志・塩冶に本補地頭などとして移り住み、地名を姓として土着し、国人化していった。それから東へは湯氏ほかがあり、次第に山間部へ子孫が開拓名主として入り、それぞれの地名を名乗って、佐世氏・富田氏・山佐氏となり、亀井氏もあらわれた。一世紀以上を経て、同じ近江源氏佐々木氏から分れた京極氏が守護となると、一族の尼子氏が守護代として富田に入った。やがて宍道氏が分れた。のち山中鹿之助を出した近江源氏佐々木氏の一族も入って来た。

さて、奥出雲の山間部はどうであったか。頼朝の時代の十二世紀末には、石清水八幡宮横田庄には、多田源氏末流のⒶ（以下系図下段に記入）小池氏（現杠氏）が、こゝに関係ある武士として下っている。（のち「大職」職を代々継いで庄園の神事を中心とする支配者であった。）承久の乱（一二二一）後、北条方として信濃守護小笠原氏とともに戦った伊那谷の源氏が行賞の結果出雲の牛尾（海潮）、三刀屋、三沢に新補地頭としてそれぞれⒷ中沢氏、Ⓒ諏訪部氏、Ⓓ飯島氏が下って来た。そしてそれぞれ地名を姓とし、牛尾、三刀屋、三沢と称した。龍西地方即ち天龍川の西岸の山麓の開拓武士が、一族をつれて分流して来たのである。地形的に極めて類似したところであるから、開拓名主として開拓の経験と、用兵の経験をあわせて生かして土着し、中心名主を惣領に仰ぎ、強固な武士団をそれぞれ結成した。近江源氏の一族が琵琶湖周辺の平原部から、出雲の平原部に来住したのと対象をなしたのである。承久の乱による新補地頭は、東国の武士の多くが西国に、そして奥地に任命をうけておもむいた。

十三世紀後半には横田庄は平氏である北条時輔領となったが、やがてもとに復し、一部が仙洞御料所となって、甲斐源氏で信濃守護であった小笠原氏の末孫Ⓖ安部野氏（のち安部氏といった。現土居）がその代官として下った。

十四世紀末、横田庄を押さえ、明徳の乱によって亡んだⒺ山名満幸は上野源氏であり、馬木の馬来氏はその同門であった。山名満幸の代官として八川の三笠山に入ったのは、多田源氏の末流土岐氏の流れで石原氏（丹波の石原庄に住んだのでこう称した）で、山名の被官（家臣）となったものである。

明徳の乱後、足利将軍義満が横田に勢力をひろげたが、これは下野源氏である。これらの源氏は持明院統の天皇、そして上皇（院）にくみし、南北朝時代は北朝方で動いた。奥出雲の国人は清和源氏がしめていたのである。

予告

尼子経久の母は真木氏の女で、馬木の出身であるという説に、この真木氏とは、馬木に二五〇年間領主として住んだ馬来氏とは同じではないではないかという疑問の論文を「山陰史談」第12号（近刊）と第13号（秋刊行）に連載し、続いて第14・15号に、三沢氏は伊那源氏飯島氏の末孫であって、木曽義仲の末孫ではないという論文を、新しい資料によって興味深く掲載することにしています。御購読をお願いします。

（高　橋）

会員配布一部百円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

出雲文化

復刊　第26号
6月号
昭和52. 6. 4
奥出雲文化協会

入門文化財小字めぐり③

横田盆地

——その中心地・中村——

古代の横田盆地は山陽文化圏

次頁の絵と年表をみながら読んでもらいたい。

奈良時代に入るまでの横田盆地は、山陽とのつながりが大きかった。人々が狩猟を中心として渡りあるく時代（縄文）はもとより、稲作をはじめた弥生時代も、出土する文化財は山陽系のものである。

古墳時代に入ると、大和や吉備の勢力が船通山を通ってこの地に入るようになったことは、本誌でもくわしく書いてきた。馬木から仁多町にかけての横穴文化を中心とする人々と、横田盆地の小円墳文化を中心とする人々は、異質の人々であった。斐伊川をさかのぼった出雲の平原部の人々の影響が前者にあり、横田盆地は異質とみるのが妥当のようである。

奈良時代

この時になると、すっかり出雲国の行政組織に組み込まれてしまったことが「出雲風土記」で明らかになる。仁多郡の郡司三人の中で、上役の二人は出雲の平原部から進出して来た豪族であるが、品治部（ほむちべ）は、国内三十数人の郡司のうちでも異質の者である。筆者は山陽系と考えている。（今日の福山地方に品治国があったその流れであろうか）　古くから強固な地盤をこの地に礎いて、小円墳文化を育てていた小部族の長であったであろう。鉄を製する技術をもっていたのである。伊賀多気神社とは製鉄の神とも考えることができるという。この宮はもっと東にあったようである。五反田から代山にかけての地であろうか。

そこにはまた「正倉」（みやけ）もあったと考えられるし、その北側の背後の各「でぞね」には、多数の小円墳がある。そして岩屋寺がある。この地一帯は奈良時代の豪族の居住地であったことを思わせる。大正初年にはこの近くで横穴古墳があらわれ、地位のあった人らしい副葬品が伴出している。このあたりが中村で横田郷の中心地であった。北は郡家のある高田に通じ、更に意宇郡の国庁へつながる。東へゆくと大菅峠を経て伯耆の国に通ずる。そして吉備につながるのである。

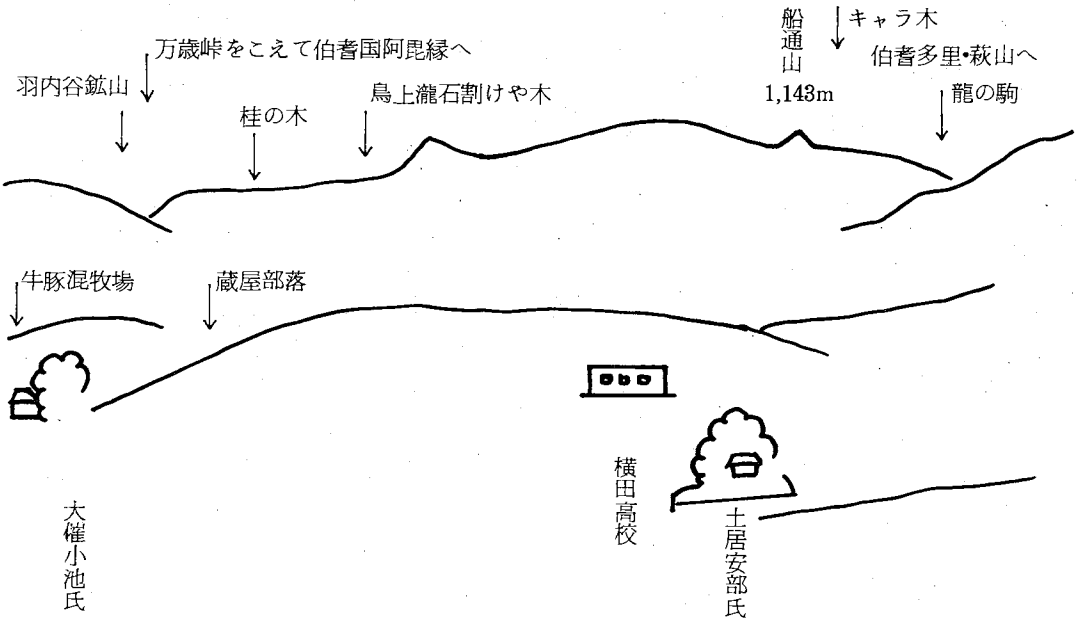
船通山はその通路の展望台であった。

「よき田四反ばかりありて形長し、よりて横田という」と出雲風土記にある。谷川の自然流水を利用する水田として四反の田は、極めて珍らしく広いものであったに違いない。それが今日の五反田の山麓地であったであろう。歩い

子育てごっこ

さる新聞社の週刊誌に「小さい目のフランス日記」という連載ものがある。読みすゝんでいるうちに思い出したのは、一日半ほどパリで案内を頼んだ日本人通訳の男の人から、歩きながら聞いたその人の二人の子どもの、パリの北郊ブローニュの森の近くの学校生活の話である。そっくりな話なので同じ人ではないかと名刺をとり出してみたほどである。そこに古い言葉であるが、師弟の道が確立していることである。

戦後は、教師はすべての面で子どもの友達になり下がってしまった。評論家からも、社会からも、PTAからも教師はたゝかれてしまった。何が残ったであろうか。二昔も前の師弟の道をいうつもりはない。しかし師弟の道とは幻想ではなかった。読んでみると厳として存在している。教師という人ではなく、教師が教えようとしている、教えに対する尊敬である。教育学者の梅根悟が、西ドイツの小学校生活を三年ほど経験して帰った孫娘と対談している記録を読んだ時にも、このことをしみじみと感じた。幼ない目であるが、大切なことはキチンと読みとっている。岩波新書「北京三里屯第三小学校」は、中国における約三年の、日本人の子どもを通してみた「革命の継続」中の学校教育の様子である。やはり師弟の道が確立している。それは教師の側だけでなく、社会にも保護者にもキチンと保持されていることである。三好京三の「子育てごっこ」は、戦後日本農村の遅れを見事にえぐり出してみせた。きだみのるの子どもの教育記録の小説化である。きだみのるは評論家として、現状をえぐってはみせたが、自分の子どもはとうとう育てなかった。建設者ではなかった。単なる批評家という片輪者でしかなかったのである。戦後、こんな批評家が多かった。三好は『子ども吏華』に愛情と師弟の道をどうかみあわせて、根本から育てるかに苦心をした。こういう読み方もあってもよいではないだろうか。



南北朝	室町	戦国	徳川	明治
1300		かんな 鉄穴堀りから 鉄穴流しへ	慶長17～寛永13 1612 1636 禁止	享保年間 150ケ所を30ケ所に
…鶴岡八幡宮 …六波羅密寺	仙洞御所 石清水八幡宮 御所	仙洞御所 御所 泉涌寺	1590 天正18年まで	
山名氏	足利氏 山名氏	三沢氏 尼子氏	毛利氏	
岩屋寺 （古文書）		たたらとたたら師	野だたらから 高殿たたらへ 元禄 天秤ふいご	
1302 飯島氏三沢へ （伊那源氏） 三沢氏祖 1331 仙洞代官安部氏（信濃源氏）	1399 明徳の乱		杠氏 桜井氏 卜蔵氏 絲原氏 寛永12 富田川洪水 広瀬埋没す	

農民の生活

- 鉄穴流し
  - 趾地水田
  - 埋地水田
- 木炭焼き
- 運搬
  - 砂鉄
  - 鉄

稲作の間に殆んどが従う

明治27年

全国の鉄の60％

明治37年

全国の鉄の30％

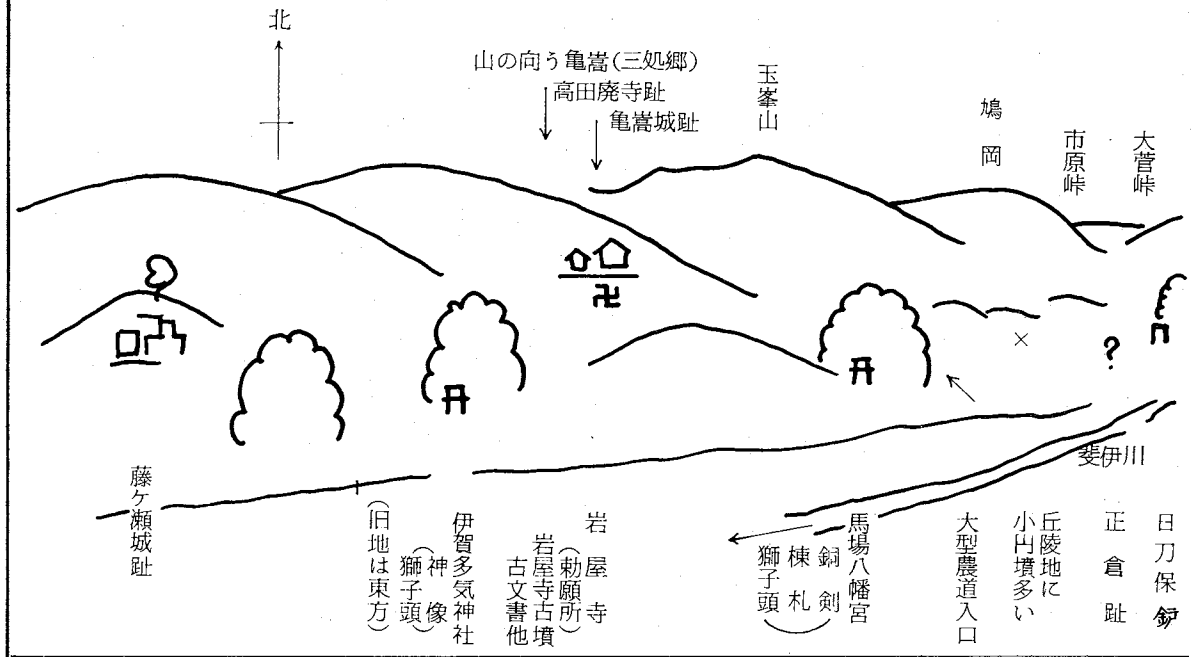
て地形を按じてみて肯定できる。

横田盆地は川の流れるにまかせていた時代である。葦の生えた沼地であったろう。川沿の一部は明治になって漸く水田となった所もあることは、千二百年前のこの地の状況を物語ってくれるに十分である。

平安時代

郡司品治部は次第に私有地を拡大して、豪族として成長して行った。郡司の息子は京都御所の衛兵としての勤務が義務づけられていた。そこで平氏にたより、横田庄のいくつかの名田を、時の権門である石清水八幡宮へ寄進して、自らその庄司（代官）となり、家子郎党を武士化して行ったのである。これが源平合戦において一の谷合戦の平家方の一武将、横田兵衛尉維行である。従って頼朝が勝って将軍となり鎌倉幕府を創設するや、横田庄を八幡宮領として安堵し、武士の横妨を禁止し、さらに石見の益田氏に命じて長駆横田まで進軍させて、横田氏を制圧させたのである。

その結果は明らかでないが、



時代	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉
鉄		0	645	710 川上に鉄雑具をつくる	794	1182	鉄貢納、銭貢納の記録
荘園						石清水八幡宮……源頼朝の安堵…下地中分(1072～1111の間)	別宮(小池氏)
武士					郡司品治部	横田氏(平家方)	三処氏　北条氏
文化財	万歳峠、龍の駒の出土品(山陽系)	八幡宮銅剣(山陽系) 住居趾	小円墳(横田に多い) 横穴墓(八川、馬木に多い)		出雲風土記 伊賀多気神社 岩屋寺	1196 建久7 八川八幡宮	1281 弘安4 馬場八幡宮
事件						源平合戦 一の谷	1222 承久の度 1274 文永8 北条時輔領

筆者は横田氏が恭順の意を表し生残ったものと考えている。八幡宮を横田庄へ勧請することに一翼をになった小池氏が、最初に婚を結んだのは、横田氏系の娘であると推定している。

鎌倉時代

横田庄をねらい、三十年にわたって執拗(しつよう)な進出をして、とうとうその半分をせしめた者に、横田庄の北の三処郷の地頭であった三処氏がある。しかし間もなく中央の権門北条氏の一族である京都六波羅探題南奉行の北条時輔の領地となってしまった。

時輔の父は前執権時頼であり、現執権の時宗は異母弟であった。時輔の母妙音禅尼は、八幡宮を横田郷の中心地中村の馬場へ移転させた本願でもあった。時は弘安四年卯月四月のことであって、蒙古の再来襲に備えて北条氏は西国の要所に一族を配置して態勢を整えつゝあった。間もなく夏、蒙古は博多の浜に大軍で来襲したのである。幸に台風の力もあってこれを壊滅することができたのである。だが北条

氏一族間の争いも絶えなかった。時宗は異母兄の時輔を京都六波羅に部下を差し向けて殺させたのである。今までの歴史ではそれを疑わなかったのであるが、最近鰐淵寺文書の中に、その後時輔が部下と共に出雲国中を徘徊しているから警戒せよとのことを誌したものがあることが発見された。これは歴史を修正する興味深いことに発展するではあるまいか。

鉄を産出する横田庄はその後、年表にあるように領家の変遷が続いたのであるが、奥出雲の中心として歴史をくりひろげていったのである。

戦国時代から

この時代からたたら製鉄技術は飛躍的に発展した。鉄穴流しがはじまり、野だたらが高殿たたらとなって増産へ向かって進んだ。横田の谷はその流される砂によって盆地へと変って行った。殆んどが農民であった住民は、耕作のかたわら、たたら製鉄に従って家を護り村を築いていったのである。明治中葉までは日本の鉄の殆んどをこの地がまかなってきた。しかし近代製鉄に主座をゆずり、遂に大正十二年たたらの灯は消えた。その後日本刀の需要とともに昭和八年、横田鳥上の地で復活したが、敗戦で再び灯を消してしまったのである。今日三度、美術刀剣の唯一の原材料としてたたら製鉄による玉鋼が必要とせられ、古式さながらのたたらが復元されることになり、その技術者の養成も国家的事業としてとりあげられることになったのである。

産業考古学

中世考古学の対象として「たたら製鉄」が

産業考古学の対象として「雲州そろばん」が

わが国の学問が世界に注目を浴びようとしている。奥出雲の庶民が英知を傾けて築きあげた、製鉄技術であり、ろくろ技術である。いずれも手づくりの最高技術である。この重要なことに対し、私どもは「灯台もとくらし」「こう屋の白ばかま」に文字通りなっている。

考古学も歴史学もともに、社会文化の発展を調べるもので、今日の人々のこれからの生活への展望も与えてくれるものである。

考古学は土に埋もれた遺物や遺構、遺跡の研究が対象であるのに対し、歴史学は紙や木や金石文など、物体の上に記された文献を対象とする。ところが文献は古くなると残るものが少ないが、考古資料は語ることは少ないが、どこにでも存在しているのである。中世の文献は少ない。しかも支配者武士階級の側のもののみで、庶民生活の実態がわからない。それは考古学や民俗学の力を借りなければならない。この点残念ながらヨーロッパに数歩遅れているという。この地にはたたら製鉄という、支配者にとっても、庶民にとっても極めて重要であったものの遺跡がねむっている。五百年の荘園の歴史もある。まだまだ調査研究者にとっては処女地である。

たたら技術の科学的究明もまだ一歩も前進していない。

産業考古学とは、初期の産業活動の場所と構造を記録し、保存し、解説することであるという。易しくいえば地場産業が、そこの風土にどうして育まれ成長し発展したかを知り、庶民の英知をさぐり出すことである。

雲州**そろばん**が産業考古学上特筆されるのは、堅い木の玉削りのためにろくろを工夫したことである。奥出雲の人々が声を大にして誇ってよい、わが国技術史上の快挙である。もくそもすべて捨て去ったところに、今日のふるさとの崩壊の原因がある。小字の人々の協同の力、その意志統一の姿を私どもはもう一度見なおさねばならないのである。

横田の中心地で、歴史をまとめて出版しようという人々の動きがはじまっている。八川地区でも鳥上地区でも、さらに馬木地区でもこうした関心がおこっていることは、まことによろこばしい限りである。若い人の参加もふえることを期待している。

その技術によって生まれたそろばんを全国民が、一度は手にしなければ成人できないという現実がある。それによって計算能力が養われ、わが国の経理事務の処理が行われている。地場産業がこのように全国民にかゝわりをもつのは、そろばんをおいてほかにないのである。雑多な民具集めもよろしいが、この地のすばらしい二つの産業の研究に、その用具の収集に、地域あげてのとりくみが責務となって来たのである。

小字の歴史を綴る集い

—これこそふるさとづくりの中心に

郷土の再認識は、出土品や戦争物語にばかりあるのではない。小字の開拓、そして発展のあとをみることが必要である。私どもの祖先はそのことに、連帯のきずなを強くして今日に至ったのである。一面そこに古い封建のきずなを生んだことは事実であるが、戦後、こうした小字のつながりはすべて、古い古いと味噌

会員配布一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化
復刊　第27号
7　月　号
昭和52. 7. 2
奥出雲文化協会

横田のたゝらの歴史（上）

住民のほとんどが製鉄に従事

奥出雲では数年前まで毎年秋の彼岸が過ぎると斐伊川の水が濁りはじめ、厳寒の冬を経て早春まで続くことが繰り返されてきた。

この地の人々は毎年のならわしとして生活に密接に結びつけ、一つの風物詩を生み出していた。この濁りは斐伊川の川上船通山山麓一帯をはじめとする、各地の谷々の奥で、砂鉄採取のための鉄穴（かんな）流しが行われ、これによって流出する砂が川の水に混入するからであった。記録の上では徳川初期の二十年余りと、昭和初頭の数年間をのぞいて、奥出雲の歴史と共に、毎年繰り返されてきたもので、この作業に続くたたら操業によって人々の生活が支えられ歴史がつくり出され、日本の動きにも何ほどかの影響を及ぼしつつ今日に至ったのである。川の水を十分に利用して生活した奥出雲の人々は、鉄穴流しと生活という二つの歯車を巧みにかみあわせ、当然のこととして過ごしてきたのである。

徳川期には鉄の需要の増加と共に技術も進歩し、製鉄業も組織的になって発展していった。それにつれて鉄穴場の数も急激に増加し、享保年間の記録によれば郡内百二十カ所にも及んだ。したがって大量の流砂が下流に及ぼす影響も大きかったから、鉄の需要と治水を考慮して、毎年三十カ所ずつ交互に流すという制限も行われだした。

ここから採取された砂鉄は郡内の三大たたら師をはじめとする幾つかのたたら師の製鉄業を活況にむかわせた。少数の専業技術者以外は、ほとんど農民の兼業によって作業が支えられたから零細な農業収入の上に、この賃金収入を加えることによって、当時の最低の生活を持ちこたえることができた。従って、たたら師はもとより村役人も、百姓も、またわずかの数であった商人たちも、共にこの業を積極的に支えてきたのであった。鉄穴流しの副産物として、流した跡の平地や流砂で埋めたてた谷合いの土地を、新田として育ててもきた。それは相当の面積であった。

たたら操業には砂鉄のほかに、これと同量以上のおびただしい木炭を必要とし、薪炭材を確保することにたたら師は頭を痛めた。一つのたたら炉で年間に使用する木炭の量を生産するには、横田盆地程度の面積の山の、三十年以上を経た樹木によらなければならなかったから、三十年を周期とするたたら師の支配する山は広大なものであった。この木炭製造即ち炭焼きも農民の仕事であり鉄穴流しとともに多人数を必要とした。そしてこれらをたたら場まで馬で運搬すること、さらに製品を安来その他の集散地へ中継運搬するのも農民の仕事であった。あるたたら師の記録によれば、明治二年には八百十人が従事している。明治十七年には役員と技術者が二十三人炭焼き百五十人、鉄穴流し場十三ヵ所に流し人七十八人、下採集人百五十人、それに運搬のための馬九十六頭、人夫四百八十人というその他の詳細な記録があるが、雑用者も入れると千人を超える人となる。

徳川の中期より、全国的な百姓一揆の波が出雲にも波及して各地に頻発したが、奥出雲は比較的穏やかであったのも、こうしたところに原因を考えることができる。さらに短所もあろうが、奥出雲の人人が素朴で忍耐強く、そして温和である性格を育てたのも、こうした風土がしからしめたものであろうと思っている。

松江藩は、毎年たたら師が納める先納銀や冥加銀によって台所を支え、突発する財政危機には、たたら師が献上する寸志銀によってその都度の窮場をしのいだのであった。さらに藩の大阪蔵屋敷を通して、全国の鉄相場にも大きい影響を与えもした。明治時代になると、近代産業の急速な発展に伴う鉄の需要増とともに成長した、投機的小たたら師も生まれ、明治二十七、八年戦役までは、わが国の鉄の需要の約七〇％を奥出雲の個人企業（飯石郡の田部氏も含む）のたたら師たちの生産で満たしていた。十年後の三十七、八年戦役時には、官営の八幡製鉄所によって生産指数は逆転し、奥出雲の生産はそれより下降し続けた。その後第一次世界大戦中、鉄の不足から一時活況を呈したこともあったが、やがて訪れた不況の影響も加わって、たたら製鉄業は近代製鉄業の軍門に下り、大正十二年前後から休業し、ほとんどが廃業した。

（まだ学界では用語の統一がなされていないが、本文では「たたら」は「高殿だたら」即ち「永代炉」をさし、それ以前のものは「野だたら」とした。高殿たたら及び後期の野だたらの炉（ろ）は舟型である。）

国家的事業のたゝら復元

たたら製鉄には、真砂（まさ）砂鉄を原料として鋼を生産する鋼押法あるいは鈩（けら）押法と、赤目（あこめ）砂鉄を原料として主として銑を生産する銑（づく）押法とがある。前者の方法を用いるたたら炉は仁多郡を中心に分布し、後者のそれはそのほかの地方のほとんどで行われていたもので、鋳物鉄がおもに生産された。

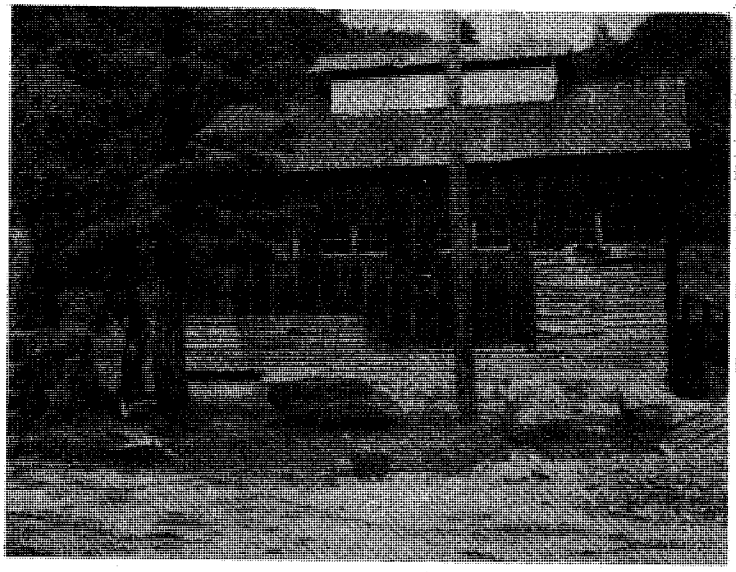
真砂砂鉄から作り出される鋼は、特殊鋼の原料として需要が多く、大正七年からは横田町鳥上において、角炉によって製銑が行われて需要を満たし、戦時中も重要な役割を果たし、そして戦後も絶えることなく続いた。その後技術改良が行われ、昭和二十七年からは砂鉄を団子状（ペレット）にすることによって木炭の消費量を激減し、生産原価を下げるとともに生産量の倍増が実現したが、木炭資源の不足とさらに技術の進歩によって、昭和四十年鳥上の角炉は休止（施設はそのまま保存）安来海岸の工場において同じ砂鉄を原料として新しい技術によって特殊鋼の製造が続けられている。

角炉は休止したが鳥上木炭銑工場では、砂鉄採取も製鉄業に欠かせぬ工業用木炭の生産も休みなく続けて今日に至っている。

この工場には、昭和八年から昭和二十年まで、日本刀の材料としての特殊鋼「玉鋼」の製造のため「靖国鑪」（やすくにたたら）が付設され、大正十二年ころまで操業されていたそのままの、優れたたたら作業を復活し、優れた日本刀に欠かせぬ優秀な鋼の、全国ではたゞ一カ所の製造所として需要に応えていた。この頃から今日まで並河孝義氏が社長として、経営に豊富な経験を生かしてあたっている。

時は移り、河川水質汚濁防止法によって、奥出雲の歴史とともに繰り返されてきた「鉄穴流し」（水洗比重選鉱法）は昭和四十七年限りで廃止され、代わって磁力選鉱法が採用され、船通山の羽内谷（はないだに）鉱山において、同工場の手によって採取が続けられている。この地の俳句の季題ともなっていた「鉄穴流し」と「濁り水」は姿を消してしまった。

このたび、重要美術品、文化財としての日本刀の材料である「玉鋼」の在庫品の不足から、日本美術刀剣保存協会は、鳥上木炭銑工場に保存されていた「靖国鑪」の施設を巨費を投じて装いも新たにし従前と同じたたら操業を開始することになった。これは全くの文化事業であるが文化庁でも世界に誇るたたら技術の保存（技術者を村下＝むらげ＝と呼ぶ）とその技術後継者の育成に力を注ぐ方針を定め明るく輝こうとしている。



「日刀保」鑪として復元する靖国鑪

本文は「奥出雲製鉄千二百年の流れ」として、昨年十二月山陰中央新報に連載したものです。御要望があったり、「たゝら復元」を間近に控えて、各方面から照会がありますので、山陰中央新報社の了解を得て掲載したものです。

中、下と続き、その後で「たたら」について、解説をする予定にしております。

魂こめて「玉鋼」を作った「村下」及び関係技術者が健在である。千二百年の伝統あるたたら作業の灯は、今ここにともされたようである。かつて精

狐にばかされた話

駒原邦一郎著

私の村のはなし（阿井村の巻下）から

一般に狐の性質は陰険でふくしゅう心に強く中々悪がしこいところがあります。この狐が明治時代の中頃まではたくさん阿井村にも住んでいて時々村人を魅したものです。

その頃までは村の山々には木も多く道路に近いところでも両側に木が生い茂っていて昼でも尚暗いというほどのところもあったので、そんなところでは昼でもきれいな女に化けた狐に出合うことがありました。

狐は随分広い地域を歩き廻るもので一晩の内にでも四里も五里もの道は平気で廻っています。冬になって土地一面が雪におおわれて歩いた狐の足跡が雪の上に印された時、その跡をたどって見ると山を越え谷を渡り遠く隣村に至るまで逃げのびていることが判ります。

こうした高あるきをする狐は又臭覚がよくきいて余程遠方での臭いも知っている。そして兎や山鳥などを巧に捕えて餌にしているのです。前にも述べたように仕返しをする性格を持っているのでそれに恐れてか村の猟師達も時に狐を見ても獲物として撃ちとろうとせず大概の場合は見逃してやるということです。当時あったことですが猟師が一疋の狐を撃ちとったところ夫婦ものの狐であったと見えて、その片方が毎夜の如く猟師の自宅近くに出てきて、「あったあ」したことがあったという。猟師でさえこのように狐に遠慮するのですから普通の者は尚更で全々あたらず、さわらずというやり方で寧ろ狐に好意を持って機嫌（きげん）をそこねないようにつとめる人もありました。

上阿井福原の東光出（とうこで）の北側に近い山畑の隅には古くから、横穴があって狐が住んでいて毎年子狐を生んで育てていました。「とうこで」の勘次郎さんが未だ十才にも満たない子供の頃のことですが、勘次郎さんの母親は狐が子を生むと「アコ」見に行くといって小豆飯や「油あげ」をつくって狐の住居を訪れて「狐さんや元気なアコが生れたそうで今日はごちそうを持ってきてあげたからくわっしゃい。」と言って生れた子狐を見に行かれたものです。「それから狐さんや内の子供の勘次郎なんぞばかしたあなんぞしなさんなよ」と狐にたのんで置かれたそうです。こうした例は外にもたくさんにあったものです。

昔は夕食の後のかたづけの際に炊事場の流し台から洗い水の熱いものを流すことは遠慮していたのです。これは時に狐が下水近くにやってきていて食物をあさっていることがあり熱湯を流したため狐に火傷させたことがあった。というこんなとんでもない失敗がないように毎日この仕事にたずさわる嫁御（よめご）さん達の心がまえとして教えていた時代もあったものです。

狐に砂を投げつけられることは、夜道の旅でよくあることで道の片側が山とか台地になってるような場所では狐は後向きになって後脚で砂を掻いて通る人に投げつけるそうです。また昔の人達はよく狐に提灯の火を消されたり持っている魚などとられたものです。急用あって提灯をともして夜道を行く時よく狐にねらわれて提灯の火を消され或は時に提灯の中に木切や杉葉など投げ込まれていることがありました。当時の提灯の蠟燭は和蠟で狐の好物でしたからこれを奪わんとしての仕業であることは言うまでもありません。

町に買物に出かけ魚を求めての夜道や、祝い事や祭りなどの招待先から料理物を「しぼ」（料理物を藁で包んで入れたもの）で持って帰る時など途中狐につきまとわれていつの間にか中味はすっかり狐にとられて我家に帰って来たと言う例は数多くあったものです。狐は魚ほしさに人の背中に飛びついたり或は強くその人を押したりしますが、それに気づかず呑気に歩いて行く人達は正に狐に魅されていると言えましょう。

こうした持物をとられる際には、時として遠方で青い火を焚いて見せたり山火事の場面などを見せつけます。何気なく歩いていると、急に近くの山が火事で炎が燃え盛ります。これは大変とあわてふためいて一生懸命我家に駈って帰り、家内中の者を呼び起して「山火事だ」と大騒ぎをした者があります。本当の火事かと驚いて現場に行って見ると何事もなかったと言う。そして折角大切に持っていた魚はスッカリ狐に取られていたというようなことがよくあったものです。

上阿井町の桜井家第十二代桜井博義さんが嫁御さんを迎えたのは明治年代も末年に近い頃のことです。この嫁御さんは八束郡大野村の奥原家より迎えたので当時としては大変な賑かな興入でありました。何分この頃は交通機関は不備な頃のことでもあり、嫁御さん迎えには多くの人夫を使っ

て嫁入り荷物を肩でかつがせなければならない時でした。大野村から大原郡木次町までは先方が送って来る、それを引継いで阿井村まで運搬するのが町桜井家に雇れた人足共の仕事でした。

嫁御さん迎えに出かける人足達十数人は出発にあたって一杯傾けてほろ酔い気分で夜中に三成町、八代を通って簸の谷峠を越して木次町にいそいだのであります。途中十数人の人足連中は三、四人づつの道づれとなって幾組かに分れて旅をしたのです。

村で山猟師として働いていた、深田周助さん達の組が簸の谷峠を越す時に右向うの山腹の炭焼かまが火事でさかんに炎えさかっているのです。そして火事場には幾人かの人達が消火につとめているのが見える。三人づれの深田周助さん達は暫く立ち止ってこれを眺めた後旅を続けたそうです。

翌朝になって他の組のものに昨晩の炭焼かまの火事の有様を話したところ、他の組のものは全くそんな事は見なかったと言う。そして木次町からの帰途に火事場を見きわめようと、昨晩火事を眺めた現場に立って探したが、山には炭小屋もなく又焼けた跡もなく平素と変らない簸の谷峠附近の山々の姿であったと言うことです。

矢張り昨晩は狐の奴に火事を見せつけられたわけです。

毎年真夏の頃になると阿井川の水も余程減って水温も昇ってきます。その頃になるとよく「夜ぼり」といって松明（たいまつ）を灯して川の浅瀬にねむっている河魚を捕えに出かけます。当時は魚族も多かったので若い衆が二、三人もの連れであされば相当多くの魚を捕えたものです。ところが「夜ぼり」も終って多くの魚を籠に詰めて我家にかえる頃ともなれば川向うに青い狐火が燃えている、怪しいと思いながら急いで家に帰って見るとこれまで苦心して捕えた魚はスッカリ狐に横取りされていたと言う。こんなことは昔は稀なことではなかったものです。

狐に魅されると言うことはばかされる人の心理情態が既にどうかしているだろうと推察されますが、ばかされた人は別としてばかされなかった人でよく化けた狐を見たものです。狐はよく若い美女になって姿を現します。時に老人ともなり相手が子供なら、子供姿ともなるといわれています。福原の渡部善四郎さんのお父さんは夜道の途中米原の岩崎、桜井家の前の柿の木の横で六部が泣いているのに出会ったことがあります。気味悪く思いながら急いで槇原に向って歩いたのですが、槇原の下の一畑薬師如来附近に差しかかった時、先刻柿の木の横で見た六部が又道端に立ち止っているのに出会ったと言う。狐が六部姿に化けたものと思って一目散に逃げ延びたということです。

明治の初め頃のことですが或る大工さんが仕事先から夜ふけて帰宅中山道にさしかかったのです。ふと見ると後から十二、三才の子供をつれた女が追いついています。山道で切角寂しいと思っていた大工さんはよい道連れだと喜こんだのです。

女　「大工さん今晩わ」

大工　「ヤアーたいそう暮れてご苦労さんです、してお前さん達はどこへ行かっしゃあかの」

女　「大工さん今晩は嫁御さんがござっしゃあはづで今から迎えに行くとこです。」

大工　「ハア」

女　「とてもきれいな嫁御さんだそうです。大工さんも見て行かっしゃらんか。」

そう言って子供づれの女はいつまでも大工さんの後からついて来るのでした。

おかしいことだ夜道を子供づれで祝言の迎えに行く女、それにつけても近くに婚礼があることも聞いていない。なんだか薄気味が悪くなった大工さんは一生懸命急ぎ歩き続けて数町の間夢中で行ったものです。そして近くの人家に立寄って寝静まった家人を起して先刻あったことを話して近くに祝言がありますか、と聞き質したところ嫁入祝言はないということでした。

それにしても後ろの峠には悪い狐がいて時々人をばかすということでした。さては矢張り狐であったに相違ない。その夜は弦月は淡く照した月夜で二十六、七才の器量のよい女であったそうです。

こんな時には勇気を出してその女の手首を握ってみるんだそうです。化けた狐なら手首は円く本物なら稍々平たいので判断がつくと言われていますが、ちょっと出来難いことでしょう。

皆さんも

駒原さんは阿井村の方で、先年川崎でなくなられました。

足で歩いて、沢山な昔話歴史物語を集めて本にしておられます。

御年輩の方々も、お忘れにならないうちに、集めてみて下さい。本誌にのせたいと思います。

その時、聞いた人の名前、生年と年を必ず終りに書いて下さい。もし古文書による時は、その題名と所有者も必ず終りに書いて下さい。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

畑田文化

復刊　第28号
8　月　号
昭和52. 8. 6
奥出雲文化協会

横田のたゝらの歴史（中）　たたら製鉄早わかり①　庶民への仏教の普及③　活力は　資料(2)

たゝら遺跡と記録

横田のたゝらの歴史（中）

さてこの復元するたたら炉の始源はいつごろの時代まで遡るのであろうか。

羽内谷鉱山にほど近い船通山ブナ林遊歩道の山麓口の近くに、一つのたたら炉の遺構がある。これは記録にも残っている、たたら師卜蔵氏が経営した「亀石たたら」である。明和年間から二百十数年の間眠っていたのが、林道拡幅によってあらわれてきたもので、当時のたたら炉は完全に、そして付属建物のあった広い敷地もほとんどもとのままに残っている。幸いであろうか国有林の中にある。炉床を含めて遺構の発掘研究調査と保存が待たれる。

仁多郡内のたたら製鉄の最も古い記録としては、町内旧大馬木村の杠氏に残されている「杠日記」一巻である。杠氏は戦国期の天文五年に稼業をはじめている。少しおくれて郡内でたたら稼業をした人々が、実名で十数名も誌されている。その中で生き残ったのが杠氏であり、ややおくれて鳥上・竹崎の卜蔵氏が、徳川期になると桜井、絲原の両氏が登場する。

日本刀を大きく分類して古刀と新刀とし、その時代区分は戦国期末の慶長（関ケ原の役）ごろをもってするとされている。著名な刀匠たちは古刀を再現することを念願として研究作刀を試みているが、どうしてもそれに達することができないともいわれている。

戦国期末には組織された武士団が生まれ、しかも禄を食（は）む専業武士（侍）が出現した新しい時代である。刀の需要が爆発的に増大し、ひいてはその原料である砂鉄採取の方法の変化、さらにたたら作業技術の改善進歩が誘発され、大量生産が可能となり発展したのである。この頃が「野だたら」から「高殿たたら」に移った時代でもあろうと推定されている。そして多量生産化した鋼も良質化したが、他面作刀を容易にしたため、新刀時代を出現したといわれている。

この過渡期のたたら跡はいまだ発見されず、日本製鉄史の暗黒時代となっている。ところが最近、横田町蔵屋で道路工事の際あらわれた「金谷廻たたら跡」は、この道の権威である東京の窪田蔵郎氏によって、現状からみた諸条件ではこの過渡期のものではなかろうかと推定され、現在出土物の分析研究が進められている。この土地に関係する記録をみると、徳川期以前のものであることには間違いがないことは明瞭である。埋まっていたこの炉跡が掘り出される前は、この辺一帯は谷間の畑であった。畑になったのは近年で、そこには明治初年まで昆沙門堂があった。この堂は徳川期初頭にここに移転建立されたもので、村人をはじめこの地方の人々から崇敬され、松江藩主も数代にわたって自ら参拝し、巡見の役人は必ずここに詣でたという記録が残っている。建物の老朽化によって明治初年、仏像は岩屋寺に移され、礎石、石段、石造の手水鉢などは近くの寺や民家に残されている。仏像は藤原期のもので、最初は同じ蔵屋の「仏谷」にあったことなど移転建立時の詳しい由来書もある。

この炉跡もボロボロと崩れ落ちる状態にあって応急の保存対策も要するが、発掘調査と根本的保存工事も急がれる。古刀と新刀との比較研究を補足して、その解明の糸口が出来るかもしれないというこの遺跡は、極めて貴重なものである。

さらに「亀石たたら」のある谷の隣の大きい双子谷の入り口の細谷に「双子谷（ふたごだに）たたら」の遺跡がある。谷川沿いの野だたらに「鉄涌（わ）かず」としてうち捨てられた大きい鉄塊がある。鉄生成の経過が見られる、各種の鉄塊、鉄滓、炉壁、木炭等も伴出していて、他に例のない珍しい貴重なものである。木炭からはカーボンテストによって時代測定も可能であろう。鎌倉期以前のものであろうか。町によって一帯の土地は確保されてはいるが、この調査研究と保存も緊急を要するものである。

この期以前のたたら遺跡は、関係の出土品はあるようであるが、失われてしまって明らかでない。しかし記録の上では、奈良期の「出雲風土記」の仁多郡の条に「鉄」を産出したことが書かれているから、千二百年以前にはすでに操業が行われていたことが明らかである。

山陰中央新報に連載したものを転載する。

たたら製鉄　早わかり①

鋼（はがね）造りになぜまさるか

製鋼法の比較

たたら製鉄
- 砂鉄・木炭 → 和鋼　日本刀材料……鍛（けら）押法（製鋼）
  （明治の半ばからこれを玉鋼と呼ぶ）
- 砂鉄・木炭 → 銑鉄　いもの材料……銑（ずく）押法（製鉄）

たたら製鋼法
- 砂鉄・木炭 → 鍛の中に和鋼　……一段作業（直接法）

近代製鋼法
- 鉄鉱石・石炭コークス → 銑鉄 → 洋鋼　‥二段作業（間接法）

（ヤスギ鋼の製鋼法については別のところで）

たたら製鋼法は近代製鋼法が、巨大な溶鉱炉の高温の中で各種装置によって行われるのと違って、たたみ一枚位の大きさで高さ一米ほどの小型の粘土製（毎回つくりかえる）の平炉で行われる。技術者（村下）の勘による、極めて原始的な方法であるが、科学的に究明し尽されない秘密ももちつゝ、量は別として、追随を許さぬ鋼を造り出している。

近代製鋼法の劣る理由

科学の進歩にもかかわらず劣るのは、次のような壁があるからである。

○砂鉄には不純物が少ない。鋼は鉄と炭素の両原子の化合物である。不純物が入るともろくなる。近代製鋼法では科学の力を駆使してその除去に最大の努力をしているが、限度があって取り除けないものがある。科学をもたなかった古代人は、不純物を取り去る力もなかった。長い間の試行錯誤によって、不純物をとり去るよりずっと確実な、不純物の少ない、砂鉄と木炭によって鉄ができることを発見した。幸に砂鉄も多く木材も多く、長い間自然の風を利用して、野だたらを改良し、遂に風の自給にたどりつき、やがて鉄穴流しの方法を発見し、高殿の中で製錬を行うに至ったのである。今日検討してみると、極めて科学の理にかなっているのである。

一、砂鉄は

㋑　マンガン（灰紅色のもろい元素）が、鉄鉱石に比べて極めて少ない。これの五〇％は還元して銑鉄に入って性質を決定づける。（これが鉄製品の原料の判定の一つの基準にされる理由である）

㋺　銅の含有量が少ない。銅は有害な働きをし、多いと鍛接性能を悪くし、亀裂などがおこり易い。この元素はほとんど還元されて入る。

㋩　燐、硫黄分が少ない。今日の技術でも処理出来ないものの一つが燐で、還元されてすべてが入るので、鉄に有害である。有害な硫黄は今日の技術では除去されてわずかしか入らないが、砂鉄には極く微量しか含まれていない。

㋥　チタンは砂鉄には特に多く含まれているが、これは硫黄・窒素・酸素など有害な元素をスラグにもっていって淬化する性質があり（鉄くそ化）、含まれても化合して無害化する。砂鉄は鉄鉱石に多い有害な㋑㋺㋩㋥が少なく、さらにこれを除去したり無害化する、チタンが砂鉄に含まれ、鉄鉱石にはなかった。しかもチタンは融解度の高いかたい元素である。

㋭　砒素・鉛・錫・アンチモンなどの有害元素は、ごく微量でも銅の数倍の悪影響を与えるものであることが、近年判明したが、砂鉄には皆無である。

二、燃　料

燃料にも不純物が少くなければならない。コークスには硫黄分が多い。優秀なものが出来ない（近年は装置によってこれが除去される）木炭も樹令三十年以上の松・栗・まきが良質で、木頭のある半焼のものを用いた。若木には硫黄分が多い。正徳二年（一七一二）の大馬木のたたら師杠氏は、「若木では鉄涌かず」と記録していましめている。

三、チタン

チタンは砂鉄の特色ある含有物であるが、その含有量によって真砂と赤目に分かれ、製錬法も従って製品も違った。真砂は少なくて低温製錬が可能で、粘り強い玉鋼が出来る。（鍛押法）。チタンの多いのが赤目で、やゝ高温で製錬し、かたい銑鉄がつくられ、いもの鉄には使い易いものであった（銑押法）次の表はチタンの含有率であって、鳥上地方から奥出雲は真砂砂鉄の産地で、鍛押法による玉鋼生産が昔から行われた。そこに古代からのこれをめぐる歴史が鮮かに残されている。地球の成因に裏づけられた特産である。

鳥上地方　2〜4％
岡山広島両県・皆生海岸7％
九州10〜13％　東北10％

庶民への仏教の普及

横田における寺院の成立・変遷と民間信仰③

十王信仰（閻魔王と地獄・極楽）

日本においては新亡の霊をアラミタマといい、たたりの可能性をもつ危険な霊と考え、それがミタマという祖霊に帰一するまで、遺族は厳重なアライミに服する民俗があった。

この民族と結んで中陰行事が普及したという。（仏教の追善供養行事は、インドにおいては中陰即ち四十九日までの七回であった）

また祖霊に帰一したミタマを年二回まつる民俗行事があった。これに仏事が結んだのが盆行事であるという。中陰の七回供養の行事が中国では百ケ日、一周忌、三年忌が加わって十仏事となり、日本に伝えられた。それに「十王経」信奉から「十王信仰」もあわせ入った。

その中核がインド伝来の閻魔王であって、下界に下って死者の生前における行為を記録することによって、その賞罰をつかさどる神となった。死後の世界の支配者、人間の行為の審判官として、中国の道教の迷信と混淆して信仰になったのである。十王信仰は日本では十五世紀のころから仏教諸宗が農村に浸透する過程で、各宗の伝導者たちによって大々的に宣伝され、農民の心理に深くくいこんだ。

死後における私達の幸、不幸は、極善と極悪をのぞいて他はすべて十王の裁断になる。そしてその判定の資料は死後において遺族が行う追善のあり方によるというのであったから、人々は追善に狂奔せざるを得なかった。むしろそのことが勧善懲悪という方法で、社会道徳の確立に大きな役割を果したことになったが、一面庶民を恐怖のどん底にたたきこむものでもあった。

十五世紀は足利幕府の統制力も弱まり、各地に土一揆がおこり、百姓が自ら村を護ろうとしはじめた。後期に入ると遂に応仁の大乱となり、かつてない国内の乱れが続いた。このすきに出雲の守護大名京極氏の代官であった尼子氏が頭をもちあげていった。

このころから、十王堂、閻魔堂、地蔵堂そして、救いの神、病気、火の神、福の神仏として、弥陀堂、観音堂、薬師堂、不動堂、毘沙門堂が、信者の信仰を集めるために建てられたのである。修験者が近畿から地方に向ってひろめていったのである。戦乱の拡大、庶民の難渋とともに、すみずみまで建立された。さらにその追善の風俗をつくりあ

活力を生むのは社会科学か芸術か歴史は

七月号の総合雑誌がほとんど選挙づいている中で、たゞ一つ「現代文化」を特集している「世界」をみつけ、久方振りに買って読んだ。――社会科学が不振で不信なのは、人間を量的な単位で換元できるという安易な考えがあるからである。制度と人間の関係を説明しやすいということに過ぎないのを、過大評価し過ぎていた。人間は自らのうちに未知の部分をどれだけ秘めているかわからない。一人の人間でも新しい因子が導入されれば、その時々で全く別の相貌をあらわす。これに対し芸術は人間のこうした未確定の部分に向かって、われわれの眼を開く役割を果して来た。世界及び人間の未知の部分から、芸術家の直覚を通してわれわれの眼前に現われるものは、ほとんど混沌のエネルギーを蔵しているために、われわれの既成のモデルでは間にあわない。しかしそれはわれわれをとらえるための物差しとして、新しいモデルを提供する。社会科学者の大部分の人は、想像力を単なる安易な空想として片付け、それがモデル形成に果たす役割をほとんど顧みなかった。――人間を表層の現実のみに限定してとらえ、量的な単位に換元した従来の人間理解に対する批判を提示している。

何かひかれて読んでようやくこゝまでまとめてみた。

さて、こうした傾向は私どもの身近にもごろごろしているようだ。政治にも教育にも支配的である。　戦後の混乱解決の惰性だがこうして置けば無難であり、文句を言われても一応筋が通せる。誰でもやれる。しかし袋小路に入っている。

さて、昨今の歴史ブームも、古代史と人物史に相変らず中心がある。人々も右の学者のように考へ、少くとも、肌でそう感ずるから歴史に求めているのではあるまいか。

げるためには、地獄と極楽とくに地獄の恐るべきことを具体的な方法によって宣伝することが必要で、そのため亡者が地獄においてくるしむさまをえがいた地獄絵の製作が流布した。この地方の布教の中心であった岩屋寺にはこれらのすべての堂が建立された。そして至るところに普及したのである。今日現存するもの現存しないが記録に残る（雲陽誌）ものはこうして出現したものである。

	天王	弁財天	不動	十羅刹	釈迦	阿弥陀	薬師	地蔵	毘沙門	十王	観音	庵院	辻堂
温泉						2	3	3	1			10	2
布勢	1							2	1	1	2		27
三沢					1	3	3	6		1	11		6
阿井									1			2	12
三成		1	1		4	1	3		1		3		13
亀嵩	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	4	2	8
鳥上											3		16
横田			1			1	4	2	1	6	7		4
八川						1		2	1		1		11
馬木					4						1		13
計	2	2	3	2	10	9	14	18	7	9	32	24	112

（この表には岩屋寺山内にあるものは加えてない。この数字は一、七〇〇年代はじめのものである。）

普及と仏事の増加

一方仏事も七年、十三年、三十三年忌を加え十三仏事と供養回数が増加し、僧の布教も数が多くなり、御布施も堂宇の建立寄附、寺田畑の寄附も在地武士、上層農民によって行われた。十六世紀になると十七年忌、二十五年忌を加えて十五仏事となった。あたかも室町時代も後半で、各地に争乱がおこり、勝ちのこる戦国大名が各地に割拠する時代であった。絵巻物の普及時代で、地獄、極楽の絵巻物とともに、仏事はひろがって行った。

十六世紀の横田はこのようであった。はじめごろ、山口の大内氏とともに尼子氏は京都にあった。三沢そのほかの出雲の国人地侍も加っていた。

その留守中に三沢惣領の為忠は、院宣をうけて院の御料所横田庄を保護するために、藤ケ瀬に城を築いて移った。京都から引き揚げた尼子経久は、急いで藤ケ瀬を改めたが、おとすことが出来ず、岩屋寺を焼いて退いた。その後再び攻めて為忠の子為国らを富田に捕えてかえり、のち斬った。このころ為忠は出家し草庵を結んでいた（のちの善徳寺）。その後三沢の位牌堂として晋叟寺の草庵が建てられた。このころ岩屋寺は山内の僧や、郡内の僧を集めると少なくとも一五〇人位はまとめることが出来た。あなどり難い兵力でもあった。快円の努力によって十数年の歳月をかけて漸く復興がなった。

このころの記録によると、三沢氏は一族の百姓武士はもとより、安部氏（稲田）河上氏（大呂）などの土着百姓武士も結集している。

戦いの度に犠牲者が出る。当時の戦いは農閑期に行われることが多く、それも収穫後が多かったが、農民の苦しみは加わる一方であった。

やがて尼子、毛利の興亡をかけて、十年余の戦いが続きその主戦場は出雲であった。

（写真は岩屋寺）

資料(2)

弘化二年献立

卜蔵家の弘化二年三月から明治五年五月までの、各種のこんだての記録である。郡役人格となった九日間の披露宴のものは豪華なものである。

郡内七ケ寺の和尚を一泊二日で接待した昼の精進料理。

大皿ーれんこん、大いも、にしきふ、たけのこ、香たけ

あげどうふ、こぼう

汁ーすまし、いとふ、しそ

坪ー水善寺のり

猪口ーくるみあえ

碗ーめろかだけ、根いも、飛竜頭、松たけ、ゆば

茶碗ーすとふしいたけ、くわい

本膳ー吸物、水善寺のり、生しいたけ。

硯蓋ーれんこん、竹のこ、すとふ、山いも、あげどうふ わらび

鉢ーしそ、うど、かんてん 海そうめん、またたび、他

猪口ー生が酢みそ

吸物ーみそ、ずいき

広蓋ー豆腐あげ、うどあえもの、松たけ。

ほかに、大平、井二つ、鉢（切すし）吸物があり、酒は前夜に二斗。

横田史談会

八月のごあんない

六日（土）午后一時半

役場議員控室にて

古文書を読む集い

二十一日（日）午前八時半より十一時半まで

役場第三会議室（元開パイ）

遺跡発掘調査報告会

会員も協力した次の発掘報告を、スライド、写真、図表、プリントによって行い、研究討議、反省をする。

日の出山古墳、上方林古墳、白石廻古墳ほか。

発掘責任者杉原、指導者蓮岡の両氏を中心に。

教育委員会共催で。

二十八日（日）

史蹟めぐりー石見銀山

貸切りバスによって実施します。経費定員一ぱいで一人当二、〇〇〇円一寸の予定です。史談会世話人に予約のこと。

日程等詳細は別に。

会員配布一部百円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化

復刊　第29号
9　月　号
昭和52. 9. 3
奥出雲文化協会

重要視された横田庄

横田のたゝらの歴史③

風土記以前は別として、それ以後のこの地方の製鉄史は、この地方の中から伺い知ることができて、前記の遺跡・遺構をみごとに綴ることができるのである。

先ほど、県民会館で開催された、島根県文化財愛護協会結成十周年記念式典の折、柳川文化庁次長は特別講演の中で「たたら復元が行われる横田町は、古来からの伝統のあるところであるが、刀匠がいたという記録がないのはどうしたことであろうか。小鍛冶場の遺構がまだ出現しないのか、あるいは生産地に対して政策的に作刀を許可しなかったではなかろうか」と述べられた。

筆者は地方史愛好者であって専門家ではないが、以下述べる奥出雲の歴史はこれに対する二つの解答を含んでいるのではなかろうかと愚考するものである。

古代のこの地方には、大和朝廷の直轄地の一つである「子代」の統轄者(伴造)の一人であって、成長して国造となった吉備国の中の吉備品治国造(吉備臣の一族で、今日の備後南部にあたる地域に品治国があり、そこの支配者。のちには大和朝廷にくさびを打ち込まれ、半ば独立してそれに従ったともいう)につながる品治(ほむち)氏が来住し、この地の子代の農民の小統轄者となり、すでに製鉄業の進んでいた故地の技術者も率いてきてその生産にも従い、この地方なりの豪族となって盤踞(ばんきょ)し、やがて郡司に登用されたのではなかろうか。これ以上の考察はここでは省略するが、出雲風土記の仁多郡の郡司の一人である品治部の姿を、こう筆者は描き出したいのである。

出雲国内三十数名の郡司の中で、最も位も低く姓(かばね)ももたない唯一人の郡司であって、他の郡司とは異質なものを感ずるのが二つめの顔であって、次の三つめの顔はこれを決定づけるものではないかと思っている。この特殊な技術をもっていたために、土着性もそして世襲性も極めて強くなっていったのであろうと思われる。この子孫の中に一人の傑出した嫡男があって、郡司の嫡男が義務として課されていた、京都御所の兵衛府出仕中に、諸情勢をみて将門にたより、横田庄を院と平家とにつながる石清水八幡宮に寄進し、その荘官となり、当時の趨勢であった武士の小棟梁化への道をたどり、源平合戦で平家方の郡司層の武将の一人、横田兵衛尉維之となったのではなかろうか。戦いが平家の敗退となると、源頼朝は直ちに横田庄を八幡宮領として安堵し、武士の横暴を停止するとともに、間もなく源氏系の北面の武士であった小池氏を荘官の一人として送りこんだのである。徳川期末まで、その家は仁多郡における責種の一つとしてその格式も次第に先細りながらも維持した。今日同家にはそれらを証する数多くの古文書も保存されている。

鎌倉幕府も北条氏執権時代になると、この地方の他郷の地頭武士がこの庄の蚕食をはかり、二十年に及ぶ争いが繰りひろげられるが、鉄の貢納・銭納の記録がその中に残されている。北条時輔(時宗の異母兄)が六波羅探題になったころから、その領内に組み込まれて北条氏の勢力が浸透し、その実母で時頼の後室で、のち出家した妙音尼が手厚い保護を加えた記録が多い。寺領の寄進などはもとより、荘園の鎮守である八幡宮を、尾園村(現八川)から横田庄の中心地中村の馬場に移して本願となり、その神宮寺として荘園の荘官もかねた岩尾寺の修復についても、祐円法師に妙音尼は協力している。

王朝交代論

十代の崇神天皇がはじめての天皇であろうというのが、今日の歴史学者の定説である。江上波夫の騎馬民族征服説では、崇神天皇が騎馬民族をひきいて朝鮮から九州に上陸し、植民し征服して新王朝を開いたという。天皇の名ミマキイリヒコとは仕那の王という意味という。

水野祐説は応仁天皇は母神功皇后とともに九州から幾内に攻めこみ崇神王朝を倒したという。

この応仁王朝も武烈天皇の時に断絶し、血縁関係のない継体天皇があとをついだことも歴史学者の定説である。今日の皇室はこの末裔である。

古代史は推理小説の対象にもなる。森浩一は大和の二、三の重要な古墳の発掘が、これを解く鍵だと熱心に主張する。

横田のたゝらの歴史③　あめのむらくもの剣は銅剣①　庶民への仏教の普及④

神話と歴史の間①

あめのむらくもの剣は銅剣時代

信仰として構成されている話はそれで許容しても、真実に近い歴史を追求し、民族の始源と伝統は正しく明らかにせねばならない。奥出雲関係の神話を考えてみる。

筆者の古代史・神話の探究の中心は、「日本書紀」「風土記」である。これは多くの研究者の態度である。しかし「日本書紀」にも文飾が多く、天武・持統時代は比較的史実に忠実であるといわれている。

三種の宝器（神器）

三種の宝器のことは書紀の本文には記載されていない。本文のあとに記載されている「一書に曰く」とした多数の参考史料の中の一つにあるのみである。これはどういう意味かというと、書紀編集のために日本の各地から集められた諸部族の記録の中に、この伝承が誌されてあったことをしめすもので、そののちその部族の勢力の抬頭とともに、中心にすえられることになったことをあらわすという。

その部族がどこで成長したかということを書紀では、次のように推定できる。神話天の岩戸の前で、景行天皇を周防国で、仲哀天皇を長門の国でそれぞれ、その地の豪族が榊に三宝を飾って歓迎したとある。天の岩戸を博多附近に比定する説に従うと、三ケ所はいずれも北九州附近ということになる。

次に考古学の成果をかりてみると、朝鮮から渡来した銅剣・鉾・戈・文化の中心は北九州博多附近である。そしてその分布範囲は出雲の国の東端を南北に走る線より以西となる（本誌第二号参照）。そして中国より伝えられた漢鏡の出土の中心もここにある。また三宝が揃って出土する古墳もこの地方にある。

銅剣・鉾・才文化圏の東は、やはり朝鮮から渡来したとみられる銅鐸文化圏で、その中心は近畿地方である。

前者は玄海灘を経て、後者は日本海を経てそれぞれの地方に渡来したとみられている。

時代は一、二世紀であって、三世紀末になると銅鐸文化は全く影をひそめる。しかも銅鐸はそそくさと土中に埋められている。このことは北九州の銅剣文化を持つ部族が東に伸びて、そこに勢力を扶植したことを示すという見方になってくる。このころ鏡が主座をしめ、のちの七世紀の持統（女）天皇ころから玉が加わって三種の宝器となり、皇位継承のしるしとなったと、書紀に誌されるようになる。

剣の盗難事件

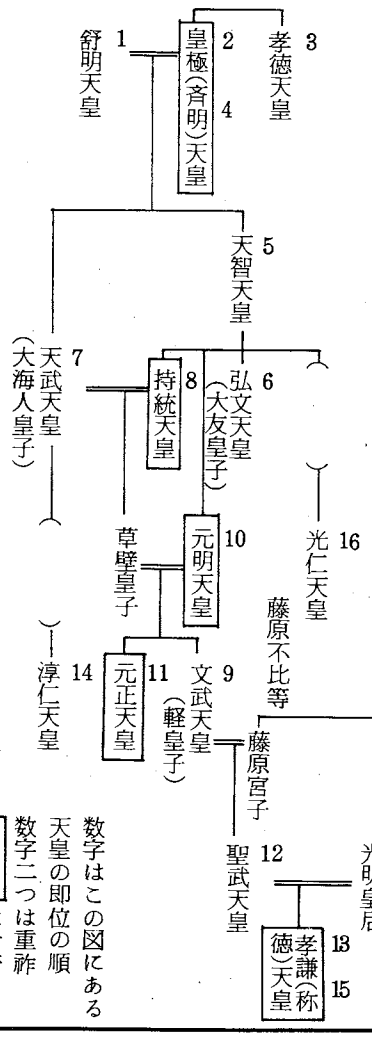
近江朝廷の時代天智天皇七年（六六八）、書紀には次のような事件が誌されている。

「僧道行が剣を盗んで新羅に逃げようとしたところ、途中暴風雨にあって逃げられず、捕まって神剣はとりもどされた」神剣はあめのむらくもの剣である。どこから盗んだかわからないが、事件後は天智天皇のもとに保管されたようである。この事件は何を意味するか明らかでないが、次の系図と書紀から作成した年表をもとに一説を紹介すると、

事件の年は、二十数年間皇太子として藤原（中臣）鎌足の補佐によって次々と改革を進めた中大兄皇子が、近江の志賀都（大津）に遷都し、即位した年のことである。斉明天皇の死と朝鮮における大敗が即位をおくらせていた。中臣（藤原）氏は神祇官であったのに対し、物部氏は武人の氏族であった。鎌足の重用は物部氏のこゝろよしとせざるところ、この対立が剣盗難事件の背景ではないかという。

壬申の乱

中大兄（天智）・大海人（天武）の両兄弟皇子の確執は史上著名であって、皇后（額田女王）をめぐる三角関係、さらに後継者の問題がからんで深刻となっていた。天智天皇が没すると大友皇子が後継者となったが、出家して吉野に住んだ大海人皇子は、民衆の



不満と地方豪族の不満を背景に志賀都に進軍した。大友皇子(弘文)は大敗し自殺した。天武天皇が即位すると、天智天皇が儒教的な合理主義精神によって、非合理な古い日本人の宗教を一掃しようとしたことが、諸豪族・民衆の反感を買ったことを考えて、まず伊勢の大神の社を天皇家の社とすることに決定した。

この社はもとは伊勢地方の神を、この地方の海人部族が祭っていた重要な神社の一つであった。この地方は東が海で太陽神の信仰の盛んな地でもあった。東国経営に力を注ぐ大和朝廷は、その海上交通利用上、この地の神社や太陽神信仰を利用し、六世紀前半ごろからこの神社との関係を密接にしていたのである。天皇家の祖先は天照大神であるが、本来の名はオオヒルメムチで、太陽神に仕える巫女(みこ)であったが、いつのころからか太陽神そのものになっていた。そして七世紀の

661	斉明	7	百済救援のため天皇九州那大津(博多)へ
			斉明天皇没す
663	天智	2	日本軍朝鮮白村江にて唐軍に大敗す
		6	近江の都に遷る
668		7	天智天皇即位、剣盗難事件
669		8	藤原鎌足没す
671		10	天智天皇没す
672	弘文 天武		壬申の乱おこり、大友皇子(弘文)大敗自殺
673	天武	2	大海人皇子(天武)即位
681	天武	10	伊勢の大社、皇室の祖先の神社と正式に認む。 神道を普及する。日本書紀の編集に着手
686		15	剣のたゝり。天皇没す。
690	持統		即印
697	文武		即位(持統天皇譲位)
708	元明		即位
715	元正		即位
720			日本書紀完成(持統天皇まで記述)

半ばころから伊勢大神の社は天照大神をまつるようになっていた。壬申の乱には伊勢の勢力の協力が大きかった。こうして皇室の祖先の神社として正式に決定した。さらに民衆のためには現世主義の神道を普及した。即ち龍田の風の神、広瀬の大忌の神(いずれも奈良盆地に)を毎年のように厚く祭った。政治の改新の方向は天智天皇と同じであったが、それを漸進させ、宗教政策は復古的であった。そして天皇中心の歴史の編集をはじめたのである。

「大君は神にしませば」といわれた現人神天武天皇の時代となったのである。

剣のたゝり

天武天皇十五年(六八六)、天皇が重病の床についた。六月十日占ったところ剣を手許においたたゝりであるとのお告げがあったので、その日すぐに尾張の熱田宮に送った。あめのむらくもの剣はこうして宝剣として尾張におさまることになった。病状は好転せず、不幸は加わる一方、その年の九月九日天皇は没した。

太陽神の象徴である鏡をまつる伊勢神宮の厚遇にひきかえ、手もとに置いた剣のたゝりと考えられた。あめのむらくもの剣は、北九州から東征に従った物部氏の宝剣で、奈良の石上神社の宝剣であったという説、新羅皇子であった天日槍(あめのひぼこ)がたずさえて但馬の日本海側に来たという説もある。

日本武尊の草薙剣の話は、こうしたのち持統天皇の時代に権威づけるために作られた物語りとも考えられている。

銅剣であること

熱田神宮の宮司が、江戸時代にこの宝剣をみた記録によると、菖蒲様の刃先をした長さ二尺七、八寸(約八十四センチ)の両刃長剣で、柄の部分は魚の背骨のようになっているという。即ち弥生時代の有柄細形銅剣ということになる。

朝鮮からはじめは実用剣として伝り、後では祭器・宝剣となったもので、三世紀の弥生後期を終期とする。この時代は、邪馬台国或は邪馬壱国の時代で、漸く日本には完成した鉄製品が入って来はじめた時代である。

神話の物語の生れた時代は邪馬台(壱)国以前、即ち一世紀弥生時代中期のことである。このころから各地で部族が伝承した物語が、七世紀の時代に集められたのである。話の生れた時代の宝剣は、銅剣時代のことである。

岡山県の著名な大古墳「月の輪古墳」は五世紀初頭のものといわれるが、出土する鉄器は、この地方産の鉄鉱石によって作られたものと分析結果から推定されている。砂鉄から作られた鉄が優秀であって刃物には砂鉄から得た鉄が混入されているという。当初は鉄器そのものが、次いで原料鉄が朝鮮より入っていたが、四世紀後半より鉄鉱石で(鉄は砂鉄よりつくり易い)ついで砂鉄で製鉄が行われるようになったことを示すものといわれ、鉄の始期はおそい。

奥出雲

一、二世紀は神話時代である。「出雲風土記」によれば、スサノオの命の活躍舞台は簸川郡の佐田が本拠で、大原郡、そして八束郡熊野地方である。

この弥生時代、その前の縄文時代、四、五、六世紀の古墳時代を通じて、横田地方は、出土品からみれば、山陽系文化圏である。

四世紀には製鉄の技術は斐伊川の下流からも伝わったであろう。しかし今のところ山陽から伝わったとみるのが、鉄の分析からすると強い。

砂鉄は全国各地にある。砂鉄製錬の先進地は、記録の上でも出土品からみても、古代出雲ではなく、吉備、播磨、近江、常陸などで、出雲ははるかに少なく遅れている。

オロチ退治の宝剣物語は、出雲現地の風土記的伝承になく、中央の日本書記にのみあるもので、出雲を舞台に記述されたのは、出雲の砂鉄に結びつけたのではなく、古典神話の体系づけの過程における政治意識の問題と考えねばならないということは、文献学考古学、神話学、製鉄史学の上から同様に言われていることである。

神話

この物語は、ペルセウス・アンドロメダ神話といい、ポンドウスからスキタイそして雲南、ついで中国の北と南から日本に入ったと見られる鉄器文化とともに伝来した神話である。外来の神話が、海神・水神の辺海生活信仰と重なりあい、わが国の農耕社会にうまく適合したのであるという。

奥出雲の鉄の優秀性

奥出雲の誇ることは製鉄の歴史の古さではない。天恵である真砂砂鉄を発見して、それをどのようにして鋼とした かに誇りを持たねばならない。

この始源をつきとめることは、世界の製鉄史上の大きい課題の一つである。その遺跡は残念なことに中世以来の鉄穴流しで、その多くが失われてしまっている。しかしまだ埋蔵されていると信じて疑わない。

農地開発に伴って、貴重な遺跡があらわれることは確実である。

物語を信ずるはよし。しかし郷土の誇りとするには、今後製鉄遺跡（たゝら遺跡）を見つけ出すことである。皆さんの理解と協力を切に望む。

墓と石塔

横田における寺院の成立・変遷と民間信仰 ④

墓

今日の墓は遺体や遺骨を葬った葬地であるとともに、その霊魂をまつる祭地でもあるが、古くは庶民の間では遺体遺骨を尊ぶ考えはなく、わが国の神道の死の忌み、死のけがれを恐れる思想のために、死骸の処置にはこまり、遠くへ葬ったのである。捨てたのである。この習慣が今日の葬儀の習俗の中に強く残って因習となっている。今日両墓制（埋め墓と詣り墓）の残っているのは極めて少ない（荒島地方に若干残っている）。埋葬地は部落の共有地で、埋葬はその地内であればどこえでもかまわない。そして祭地は家の近くにつくられたのである。やがて追善供養の普及から、在地上層武士階級が堂を造って拝むようになると、庶民を埋墓のある山の麓に共同で堂を造るようになった。中には財力あるものは、自らが開墓となり、近くの寺の僧を開山として仏像を安置し、菩提寺とするようになった。やがて旅僧、修業僧がそこに住みつくようにもなり、布教の拠点ともなって行った。室町後期には忌みけがれを考えぬ宗派や寺院が生れ、信者獲得も手伝って、遺骨尊重の仏教思想も普及し、そして葬地と祭地が重なる墓地が寺の周囲に生れるようになったのは、徳川初期の終りごろといわれる。

墓標・石塔

墓標に石を立てるようになったのは平安末期といわれ、はじめは自然石であった。これも中央の上層階級のことである。中世になると支配者層の墓地として、宝篋印塔、五輪塔、僧侶の卵塔が普及しだした。庶民の石塔が一般化したのは近世で、それも徳川初期を相当経てからである。そして百姓町人は台石とも四尺（一・二米）をこえてはならぬとされた。こうしたことを念頭に置いて旧家の墓地を見たり、山野にある五輪塔、宝篋印塔をみることが必要である。

五輪塔は鎌倉時代前期から盛んにつくられたようであるが、地方に流行したのは後期から室町時代にかけてからである。これが墓標であった時には骨壷のあるものがあるという。今日の石碑造立と違い追善の意味が極めて濃いゝという。尼子時代のものには備後帝釈峡あたりの大理石を含む石材の五輪塔がこの地方におおいが、備後地方の討死者の一族が追善のために持ち運んだものといわれている。

宝篋印塔は宝篋印陀羅尼（一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経所説の神呪）を納める塔のことで、のちには供養塔、墓碑塔となったものである。江戸時代は支配者層にひろく用いられた。江戸時代の大名の多くは五輪塔、僧侶は卵塔で、庶民は方形無蓋の石塔で高さの制限があったことは先にのべた。

この地方にも優れた宝篋印塔が多い。五輪塔とともにその分布図を作ると戦国時代の戦いのあとも明らかになると思われる。保存が望まれる。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
横田のたたらの歴史④
たたら製鉄早わかり②
神話と歴史の間②

横田文化

復刊　第30号
10　月　号
昭和52. 10. 1
奥出雲文化協会

京都御所の領地

横田のたたらの歴史④

南北朝時代になると、後醍醐帝によって横田庄は鶴岡八幡宮仮殿造営料所となり、ついで京都六波羅密寺の造営料所に、やがて禁裡造営御料所となり、その後八幡宮領に復したのである。

造営料所となったことは、貢納されたものがその造営のための財源となったとみるよりも、貢納品としての鉄が、造営のための工具鍛造の材料や釘の材料になったと考えるのが至当であると思う。法隆寺などの建築に用いられている釘を分析して、真砂砂鉄で作られていることがわかり、原産地は奥出雲であると推論している学者もある。室町期の十五世紀半ばまではまだ縦引ノコがなく、わが国に多い杉・桧の良材をオノとクサビとノミで打ち割る製材法が用いられ、仕上げはカンナも出現していなかったから、チョウナとヤリガンナでする時代で、大建築における工具の消耗は激しかった。鉄の需要は極めて多量であったに違いない。世界に誇る日本の木造建築を可能ならしめたのは、工人の腕もさることながら、優れた工具があったからであることは技術史上にも明らかである。従って横田庄が鉄を産することによって、中央から重要視されたことはうなずけるところである。

また帝が日本刀の材料である鋼を通してこの地につながっていたとする資料はないであろうか。しかしこの地は院とのつながりが古くから濃く、間もなく八幡宮領の一部が京都仙洞御所（上皇の御所）の御料所に分けられその荘官として下ったのが安部氏である。

院の蔵人所に出仕していた、非蔵人の役の武士であった。記録によれば禁裡の御用を帯びて日本海を北上し、敦賀を経て京都に入ったり、鉄の商売を行っている。この家も徳川期には郡内の貴種として、数代に及び下郡役もつとめた。中世の壮大な土豪屋敷の構えはそのまま残り、貴重な記録も子孫とともにある。屋敷遺構の調査も是非とも実施しておきたいものである。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と暗をてらせる
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざこゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

たたら製鉄早わかり②

たたら床とたたら炉

地下構造

をたたら床（炉床）という

図（「日刀保　鈔」のものではないが、基本的には同じ）のように極めて複雑につくられている。一般の者には全く眼に触れるところでないが、厳重な工事が行われ、高殿建設工事費の半分以上はこゝに費されるといわれ、三ケ月の間、延一、〇〇〇人以上の労働力と、薪材一二〇トン（三万一千貫）、今日の金額にして五〇〇万円に達するという。

床釣り　たたら操業が地下水や湿気にわざわいされず、熱の放散を防いで炉内の温度を保つための、もっとも重要な作業である。したがって、この工事は場所によって差異があるが、だいたい地下水の湧き易いところでは五m、湧き難いところで三m程度の深さに、炉よりひと廻り大きい七m角程度の穴を堀り、この穴の中に、石材、砂利粘土などを埋め込み、良く突き固めて、排水はもちろん、湿気を防ぎ熱の逃げるのを遮断できるような下地を作る。まず堀り下げた穴の中で、水を地下りの方へと落し、石畳の排水溝を設け、両側には周囲六〇cmから一mの栗丸太を根太としたり（図は新式でヒューム管）、上に並べたりして、極力隙間の無いようにして、さらに莚（むしろ）・菰（こも）をしき、その上に粘土を五〇～六〇cm入れて叩き固める。こうして排水溝ができれば、その上に坊主石と呼ばれる三〇～四〇cm径程度の丸石（図は破砕石）を並べ、小石を敷き、さらに押立柱（「日刀保炉」にはない。送風装置の近代化により）一炉の左右にある一にそって節を抜いた竹を立てて湿気抜をする。小石の上には莚を敷き、粘土を三〇cm厚みに入れ、さらに良く固まるように塩（または苦汁）を入れた、元釜土を十五cm厚さに置き堅く叩きしめる。四周は二重の石垣を囲らし

たり、水の出易いところではさらに、栗丸太を矢板状に打ち込んだりする。(底から一・六mまで)。

本釣　その基礎の上にこの工事をする。下小舟、上小舟（図の左右のトンネル型）などが造られ、本床（中央）や左右の小舟につめ込んだ薪材を燃して床焼きをして十分に乾燥させ、ヌタと呼ばれる作業をし、本床をはじめヌタ土も完全に乾燥させて、灰スラシや裏灰・下灰などという充填作業を行う（木炭をつみ薪をもやし、それを叩いてかためる作業を、数回繰りかえす）　そして両小舟の上部一〇cm位の厚さまで水平にし、上部は木炭を木槌でつぶして、締め固めて炉底が完成する。この炉床は機能が続く限りは、このまゝ改造せずに使用する。

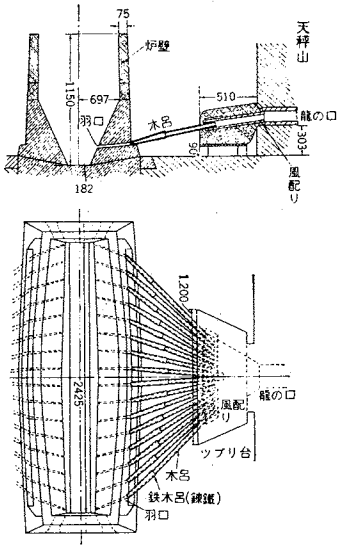
炉（ろ）

こうした基礎の上に炉を築造する。図のように（「日刀保炉」は木口、羽口は左右二十本宛）粘土で固めてつくるが、これは炉壁を構成するとともに、操業中には、その成分の一部が溶媒剤のような働きをして、溶融して柄実（からみ）となるので、その選択は村下（技術者）の秘伝の一つともなっている。とくに部分的に、元釜（図の炉壁の三段に区切られた最下部の、羽口のある部分）と呼ばれる、炉の下の方の部分は、高温にさらされる場所なので、慎重な配慮が必要とされる。

長方形でやゝふくらみのついた箱状であるが、横側に一方の下側に溶銑や溶滓を取り出す七cm程度の湯地という穴を三ケつけ、縦の下側の部分には、両側に木呂の羽口をさしこんでとりつける保土（ほど）穴が一列にならんでいる。

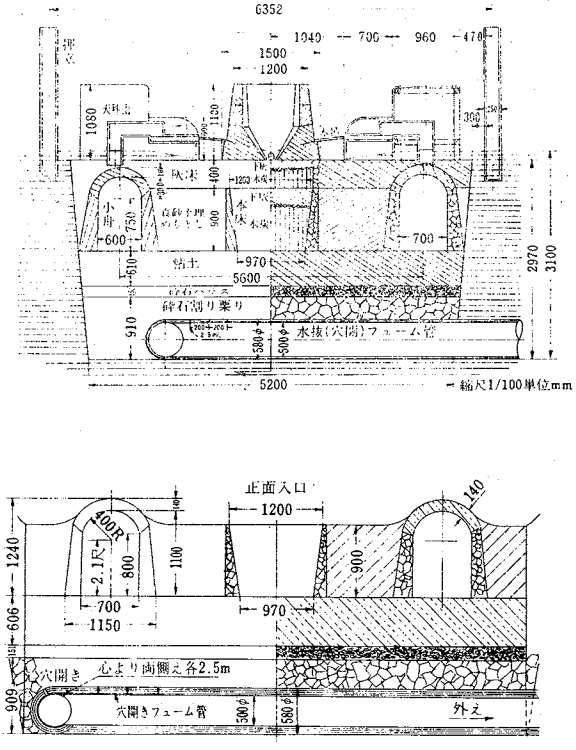
この炉体は製錬一回ごとに破壊されるので、炉底はそのまゝにして、炉体をなんども造りかえて、作業をくりかえし行なうのである。（図は天秤山があって、天秤ふいごがあった昔のものである。「日刀保鈔」では電動力で送風しているから型はちがう）ー。

説明不足であるが別にまとめる考えである。次回は製錬法。



単位　mm
タタラ炉の断面図（上）
平面図（下）
（邑智郡価谷炉）

立川昭二の「鉄」より



単位　縮尺1／100 mm
炉及び炉底構造（上）
炉　床　構　造（下）
（菅谷炉）

日本鉄工協会
「たたら製鉄の復元とその鈔について」より

神話と歴史の間②

神話の読みかた

こゝで神話の読みかたについてふれておくことが必要と思いしるすことにする。神話が文章化された古代社会の時代とそれを推進した人々のことにもふれねばならないであろうが、日本の歴史学の最高水準を集めた、岩波講座「日本の歴史」の中から、古代中央豪族の儀式（のちの和の宮廷儀式）や、日本民俗信仰の立場を中心に神話を考えた岡田精司説、古代史に新しい提案をした山尾幸久説、日本史の主流となっている津田左右吉史学にかわって、中心へとなりつつあるといわれる古田武彦史学、そして東アジアの中の日本論の山田完睦説を交えてのべる。

日本書記・古事記成立の背景

継体王朝（本誌二十九号一頁参照）に入り、次の欽明天皇になるまでの、安閑、宣化の天皇の在位についても疑問もあるがそれはこゝでは触れない。継体王朝の末期、北九州において、大和と同じ政治的総合体であった（多数の部族組織の首長）豪族国造の磐井の乱があった。大和の大王（当時は天皇といわず）の臣下的存在を拒否し、その介入を断とうとし、さらに中国と朝鮮三国の君主への外交権も掌握しようとした磐井に対する大和の勝利となった。それが継体から欽明への政権移動を伴った。この移動が画期的なもので、世襲王権の確立の第一歩となり、近畿以西の日本を統一的領土とする日本国家の形成がはじまった。（近畿以東は未領域）

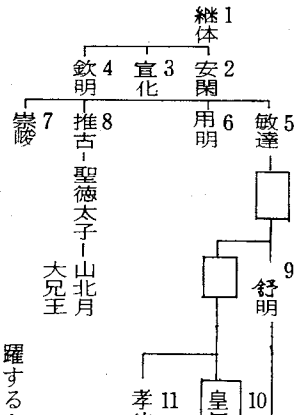
欽明朝四〇年で、実力者による（豪族）王権交代に終止符を打ち、継体王朝の後裔が王権者を出すことになった。それを固めるには次の制度が設けられていった。

①「大兄」（おおえ）の出現

大王位継承権の公的な地位（後の皇太子へ）が生れ、これをめぐる抗争が激化する。

②欽明逝去から「殯」（もがり）の儀式が、それまで行われていた古い民族的葬送の伝統を、百済から学んで制度化して行われはじめた。

③欽明朝に「誄」で誦唱される「日嗣」（ひつぎ＝霊継ぎ即ち皇位継承の正統性を述べる）がはじまった。王統譜の確立（王朝交代せず、欽明の後裔が王統をつぐ）がされた。これらは朝鮮から戦乱をさけて渡来した学者の助言によって内容が充実し朝鮮式王権祭儀が実修された。しかしこれまでの王権継承のための豪族間の争いにかわって、六七三年の壬甲の乱まで欽明系統の宮廷内の肉親間で、血で血を洗う凄惨きわまりない様相の歴史が展開し、これに諸豪族がかかわって、その隆替が繰りひろがる。書紀はつぶさにこの間のことを誌し、万葉集の歌もそれを反影していて興味深い。その一端は前号に書いたが、政治的支配階級が政権抗争による政治体そのものの瓦解をさけるため、いかに自らの機構に拘束する必要があったかを示すものである。詳細は省くがこのことを念頭におかなければ、神話の成立、記紀の成立も理解できないし、記紀中の文飾も神話の解釈もできないので、その骨格を要約する。



神話の考えかた

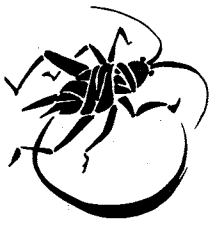
神話が当時の社会でもっていた役割を今まで軽るくみていた（戦前と違った意味で）。それは単なる読み物ではなく、祭儀と結んで神聖視され、呪術的機能を最大にもっていたし、信仰の中に次第に生きていたことを念頭に置かねばならない（すべてではないが以下詳述）。

①宮廷祭儀と密接な関係がある。民俗的年中行事ではなく宮廷の祭に限られる（民間の神楽は後世発達したもの、別に検討したい）。即ちアマテラス中心の物語は伊勢神宮の神事と、スサノオの物語は六月、十二月の宮廷の大拔の行事と、天孫降臨の物語は即位の礼の大嘗祭と密接に関係している。そして伴造（とものみやつこ、継体王朝をとりかこみ臣従した豪族）の祖先神が、これらの物語の中で活躍するようになっている。いゝかえると高天原神話は、宮廷の四時祭と臨時祭のための祭儀神話で、伴造の奉仕の由来をつくり上げたものである。体制堅めを祭儀の折に確証したものである。

出雲神話はこれと違い、民俗一般に共通する物語で、宮廷祭祀とは全く無縁で、宮廷をめぐる中央の伴造とも関係はない。地方的伝承が抽象化されたもので、民間信仰的な神々が多い。

②天皇と伴造の祖先が活躍するのみで、伴造以外の中央の、また地方の豪族は登場しない。天皇の国土支配を正当化し、国土生成から、国ゆずり、天孫降臨

種別	神話が誦唱される時	①6世紀前半 大和王朝（継体）(507～531)	②仝 後半 欽明朝 (532～571)	③7世紀初頭 推古期 (593～627)	④欽明朝 (628～) ⑥天智朝 (66～671) 半世紀間	⑦天武期 (662～684)	⑧持統・文武・元明 元正朝 (680～
高天原（宮廷）神話	宮廷祭儀	（528九州王朝大敗したが、701までその勢力は博多を中心に維持され、中国とも国交を維持していた）					
		成立する→	体系化 まとめる→	改変 国内範囲拡大 対外関係から→	外宮内宮の地位の逆転（伊勢神宮信仰の後退期）→	固定する（伊勢神宮興隆期）→	記紀完成 律令制天皇の全国支配確立
出雲神話	新嘗祭（即位）				⑤孝徳期 (645～650) 大化改新により律令国都制へ移行		
					各地の物語をまとめる→ 出雲中心にして 新嘗祭（即位）に誦唱す	完成する→	高天原神話に一体化さ。
皇別系譜	殯			新興豪族蘇我氏を軸としてまとまりはじまる。殯に誦唱する。	蘇我氏亡ぶ		



という政治神話である。

③舞台として出雲・日向などが出るが、その地方の伝承や信仰とは全く別で、神話構成上の舞台として、地名を借りただけである。出雲は陽に対する陰として、高天原に対するよみ（黄泉）として、荒ぶる神として設定された。

神話の分類

Ⓐ 高天原神話ー高天原神話と、日向神話・イワレヒコ神話（神武）をもつもので、宮廷儀礼の場で誦唱された神話即ち宮廷祭祀（即位新嘗祭主権）神話群である。伴造の奉仕起源という形の伴造神話ともいえる。それが文字に定着する時、時代と場所が決定された。

Ⓑ 出雲神話　先に③でのべたように、素材となったのは各地方の諸神の古詞群によるもの。

Ⓒ 地方神の神名を含みこんだ皇別氏族系譜　伴造以外の中央の臣姓や地方の有力豪族の祖神、守護神は神話の中に入れなかったが宮儀礼の整備によって、奉仕意識昂揚のため、欠史8代（神武より崇神の前まで）の天皇が作られた時に、その天皇の皇子やその子として、それぞれ出自をもとめるように、構成されたものである。

神話の体系化と確立への段階

多くの豪族部族の中から抬頭して宮廷を築いた豪族を中心とする宮廷神話即ち王権神話となったのが、高天原神話群で、これに日向、イワレヒコの神話が加わった。それらは個々別々に宮廷の祭祀を分担し奉仕する伴造毎に、その祭祀を背景として個々に独立した神話であった。そして宮廷の祭儀の度に誦唱されて、王権を誇示するとともに大王（部族）以外の伴造（部族）が、古くからどういう形で奉仕して来たかという話に各々まとまったのは、欽明朝前の六世紀前半である。　それが体系化し統一したのは欽明朝からで政治色濃厚にまとめられた。このようにして応仁王朝を一掃した継体王朝が、宗教的権威による王権確立をめざし、神話による伴造層の結合をはかった。そして祭儀時に、即位儀礼、毎年の元旦神事にそれが象徴的にあらわれた。国造制支配を前提として、天っ神（大王伴造部族の神）、国っ神（地方部族の神）を生み出した。そして中央の部族でも伴造以外の臣姓豪族や地方豪族の祖神、守護神は、廷宮儀礼の整備とともに、Ⓒとしてつくられ、それぞれ支配の系譜上の、信仰上の脈らくが体系化した。

そして推古朝になると、九州薩摩地方の服属や新羅や中国王朝との国交恢復によって、改変され整った。皇別系譜Ⓒも勢力抬頭した蘇我氏を軸に改変された。そして欽明、天智朝の後半世紀の間は、伊勢神宮の信仰の後退期であったが、この時最高守護神（太陽神）であったタカミムスビに仕える、巫女神オオヒルメを同格神アマテラス大神とし、やがて外宮（タカミムスビ）内宮（オオヒルメ）の格式位置の逆転がおこり、内宮が上位となった。この背景には継体王朝に女性祖神の伝統があったことと、推古女帝の在位三十六年の重みが力となったという。

次の天武朝は神宮祭祀が再び盛んになって（前号参照）、神神の追加は不可能となり、固定化してしまった。記紀の完成段階でこれらが成文化し、さらに中国の道教思想の影響によってアメノミナカヌシの追加が行われた。そして地名、神々の順位が定まり、中臣氏（藤原氏の祖）の誇張が加わり、律令天皇制の全国支配が確立し、その上に国生み神話が加えられた。

祭儀において呪的機能をもって支配体制強化に力のあった神話は、律令体制の確立とともに、天皇と諸氏族との関係と全国支配は現実となり、その機能を消滅し、語るものから書きものとして存続することになった。日本書記は「一書」の説を多くのせることによって、各部族のもつ神話をのせ、融和を考えた。

（次回は記紀の「出雲神話」と出雲風土記の「出雲神話」のちがい。）

あとがき

十一月号から装いを新たにする考えです。特集として五十年以来の町内の古墳等の調査結果を写真を交えて掲載し、日刀保鈔の復元を控えて、三昼夜の操業のあらましを。　新見市と横田との深いかかわりを、その地の方に執筆頂く予定もたてています。

会員配布一部百円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第31号
11月号
昭和52.11.5
奥出雲文化協会

神話と歴史の間③ 横田町内古墳など調査の報告 たたら製鉄早わかり③

神話と歴史の間③
記紀と出雲風土記の「出雲神話」の違い

記紀の出雲神話の成立

前号で述べたように、記紀の出雲神話（スサノオの大蛇退治・オオナムチの国譲り）の成立はずっと後である。律令的国郡制に移動すると、改変の政治的意義づけから、国土支配を正当化する、国土生成・国譲り、天孫降臨等の神話が成立した。しかしこれも日本書紀には異伝が幾つもある。しかし共通することは『邪神討伐』のことである。出雲国造はヤマト政権のこの神事の宗教的儀礼の担当者であった。宮廷では『崇り神を遷し却る』即ち『抜え』の行事がしきりと行われている。

荒らぶる神・国つ神（地方の神々）を追放する場所として都から遠い、出雲の西北隅の海辺の大社をえらび、こゝに斎い籠める場所として杵築大社が設けられ、出雲国造の守護神熊野大社が、荒らぶる神の鎮守神とされた。東北は蝦夷、九州南方は隼人、北の方は異国と接する要地としてのぞかれた。

その荒らぶる神の第一号としてスサノオの追放、服従、そして神剣を忠誠のしるしとして自発的に献上させ、根の国の支配者として設定した。

オオナムチ（大国主命）の話は、各地の話をまとめて構成された。日本書紀の本文になく、一書にもわずかにとりあげられていることは、このことをあらわし、出雲を舞台としたのも天武期であるという新らしさをしめす。オオナムチは強制的に国を献上し身をかくすことになる。これは国造の支配権の否定であり、こゝで国譲り神話が必要となり成立して来た。この物語を毎年の祈年祭（二月）において国造に聞かせて、天皇の正統性を神話を通して、誓わせたのである。

律令制以前には、すべての国造には必ず都に上らせ、新嘗祭において、語部（かたりべ）たちに神語りを奏上させるとともに、国造の服属の誓約をさせた。

それが天武朝になると、それらの地方神話の統合をはかり、その象徴として「大国主」物語をつくり、宗教的邪神討伐の神話の「スサノオ」物語りや、政治的「国譲り」神話をつくりだした。

こうした方向に対する抵抗もあった。そのあらわれは、平安中期まで十数回にわたり、国造の代替り毎に、上京し「神賀詞」（かんよごと）を奏上した出雲国造の態度にあるという。こうした国家的大行事を行った国造は、出雲国造のみである。その「神賀詞」の中の出雲神話は服属を誓いながらも、記紀のものとは異質である。

このようにヤマトが出雲を軽視出来なかった理由は今までのべたところで（前号から）あるが、松本清張のヤマトの出雲分断説もそれを補強するものである。即ち出雲族が出雲から中国地方東半部から近畿全体そして東国まで、勢力を扶殖していた。（銅鐸文化圏と重なる）そこへ三世紀後半に鉄製のより有利な武器をもつ強力集団が東上し、ヤマトの中央を突破して勢力をすえた。そこで紀伊南部に熊野大社など、出雲に関係深い神や地名が残ったというのである。古田武彦説も出雲の勢力範囲をこれに近いところに設定している。

記紀にみえるスサノオ

須佐之男命（記）素盞嗚尊（紀）と書かれ、多彩な神である。粗暴であって恭順をしめす。高天原の天つ神で出雲に下ると地上の国つ神となる。暴風雨の神、荒らぶる神かと思うと、地方統一の先頭にたつ英雄神・首長神となる。天つ神、国つ神の混合神でもある。高天原に対する海原、夜の食（おす）国の支配者、天上（高天原）に対する根の国の支配者である。またスサノオはアマテラスの弟ともなり、また夫婦でもある。儒教、陰陽思想が加って、天と地、主と従、長と幼、陽と陰の対者として、両者がえがかれる。

そこには物語の原型としての東アジア、ポリネシヤ各地の、農耕、遊牧、海洋の諸性格も加わっている。

スサノオの大蛇退治の話は、ペルセウス・アンドロメダ神話の流れであり、南方系の流れであり、大陸から朝鮮半島と伝わった流れでもあるという。

出雲と新羅

スサノオの物語りは新羅との往復の話がある。剣の名前は蛇韓鋤の剣とある。延喜式には出雲の神社名に韓国名のついたものが多い。

これらのことは出雲と新羅との交流のあったことをしめし、吉備、筑紫にもそういう証しがあり、いずれも大和に対抗もしたようである。出雲は恐るべき土地ともみえた。

横田町内
古墳などの調査のあらまし
—昭和50・51・52年—

昭和50・6〜昭和52・6の間の調査や発掘の報告会を、町教育委員会と横田史談会の共催で八月二十一日開催した。発掘・調査の担当者であった蓮岡（県文化課）、杉原両氏の概要の報告を聞き、古代の横田地区の認識に新しい資料を加えた。以下はその要点の記録で、両氏の点検を経たが、編集者の責任でまとめたもの。年表も入門者のためにと作成したものである。

①日の出林古墳

場所　横田高校第二運動場内

昭和50・6・23より十四日間

調査者　蓮岡法暲・協力者

杉原清一・小川昭男・永浜順子・佐世川徳雄・足立文人・松浦登・加本楠雄ほか

木棺直葬と見られる円墳。町内ではじめての発掘、古墳後期半ば以降のものか。

出土品　土師器の椀一ケ、坏一ケ（馬木を中心とした地域には山陽方面に多い玄室と羨道の区別のない小形の横穴式石室をもつ円墳が多いのが注意される）

②上方林遺跡

横田町大字下横田字川西

昭和51・11・20より24まで

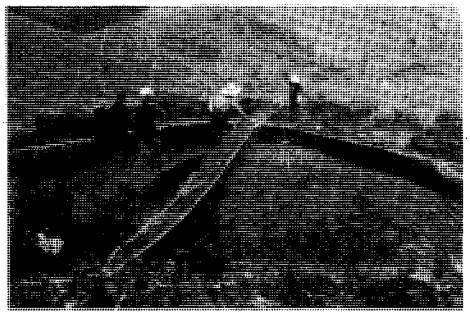
調査発掘者　杉原清一ほか①の参加者その他。

祭祀に関係する遺跡とみられる礫を集めたつくりが二ケ所あった。

出土品

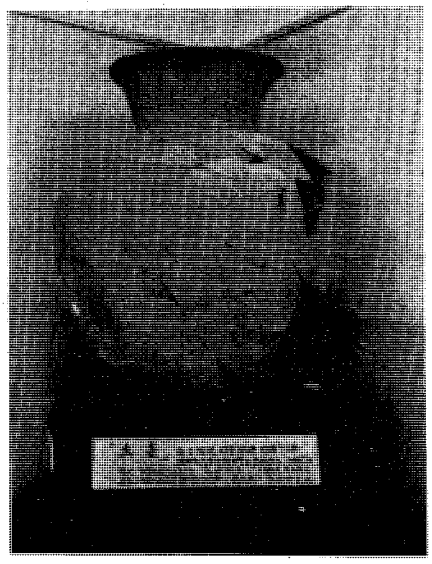
大瓶　須恵器（六〜七世紀頃のものか。高さ96㎝、口径46㎝胴径75㎝

飾り金具　須恵器の破片によって被われてあった。奈良国立文化財研究所で調べてもらったが、銅板の表面に金メッキが施してあり、布切れ・木片も若干ついていた。この飾り金具は、そうざらにあるものではなく、冠の一部である可能性もないことはないという。きめこまかい点刻がしてあって、すかし彫りがある。（附近からこゝを崩した時の土塊とみられるところから、精巧な陶馬が出土した）＝いずれも最初の発見は小学生。

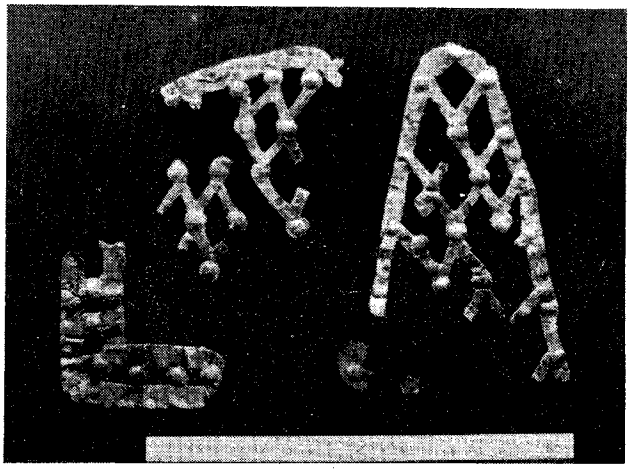


①日の出林古墳の発掘状況

②上方林遺跡出土の陶馬



②上方林遺跡出土の大瓶



②上方林遺跡出土の飾り金具

たたら製鉄早わかり③

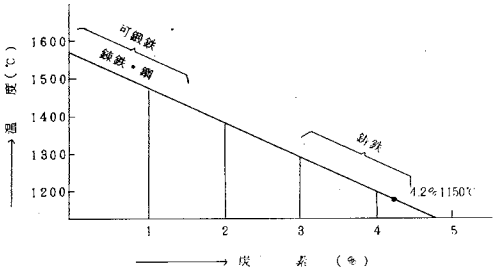
鉄鋼の中の玉鋼製造法

—靖国鑪の鋼押法—

天然の鉄鋼石は常に酸化鉄の形で存在している。これを還元（酸素を奪い去る）して鉄鋼を造るのが製鉄である。たゝら製鉄は、平炉で砂鉄を木炭燃料によって還元し一挙に鋼（けら）と呼ばれる鋼塊を造ってしまう（鋼押法）。その際若干の銑も副製する。

鉄鋼　は一般的に、鉄（元素）に炭素・珪素その他が混ったもので、その中で炭素の含有料がその質を基本的に変えてしまい次のような種類となる。金属は純粋なものほど溶融点は高い。

炭素含有%	種類と性質	溶融点	
3～4	㋑銑鉄（鋳鉄）—可鍛性ない	C 1100～1300	氷のように一気に流動体に
中間にセミスチール（㋑より質粘い）			
1.7～以下	㋺鋼（焼入れ可）	C 1300～1500	半溶融状態を経て流動体に
若干へるまで	可鍛鉄		
さらにへる	㋩錬銑（焼入れ不能）		



鉄の溶融温度と炭素分との関係

初期の炉は　低い温度しか出せなかったので、木炭の中の炭素はほとんど鉄の中へ入りこんでいないから、炉から引き出して鍛錬すると錬鉄（鉄線、釘になる）ができた。

炉とふいごの改善で、更に高温が出るようになると、木炭中の炭素が鉄と反応するようになり、得られる鉄塊の一部には鋼になっているところもある。

破砕選別して鋼（刃物になる）を得ることもでき、炉の羽口（送風孔）附近は特に高温のため炭素の吸収も活発で銑鉄（鋳物になる）となって流れ出てくるようになった。このようになるまでには、長い長い年月、何代に及ぶ、語りつぎ言いつぎによる試行錯誤の積み重ねがあったのである。今日のたたら製鉄はこの過程の完成したもので、砂鉄（真砂）を原料として一挙に鋼と呼ばれる鋼塊を造るたたら製法を、鋼（けら）押法という。

鋼製造における直接法（29号2頁）である。

鋼押法と銑（ずく）押法　たたら製鉄にはもう一つ、赤目砂鉄を原料として銑鉄（鋳鉄）を造る銑押法がある。製品は

鋼押法—鋼と若干の上鋼（玉鋼）と屑がね（鋼屑と鉄屑）

銑押法—大部分が銑鉄で、若干の屑がね（鋼）

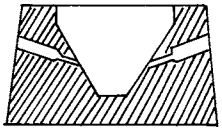
で、それぞれの法による屑がねは、大鍛冶屋（次号で）へ移して、庖丁鉄（錬鉄）に鍛えあげる。また大鍛冶屋では銑鉄（鋳物原料にもし、包丁鉄原料にもする）を移して鍛えて包丁鉄（錬鉄）を造る。

刀匠の中には庖丁鉄から鋼を造るものもあった（間接法による製鋼法である）。

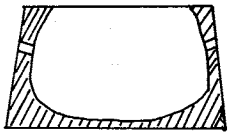
銑押法は四昼夜で終るが、この間の溶銑は抽出の度毎炉前に流して所定の形にする。

鋼押法は底部にたまる溶銑は、ときどき出銑口から土間へ流し出し、三昼夜で終ると中の鋼塊を出す。これはなまこ形海綿状で、鉄と鋼と鉱滓（鉄滓、柄実スラグ）が入りまじっていて、成分は溶鉄とちがい、成分は均等性にかける。

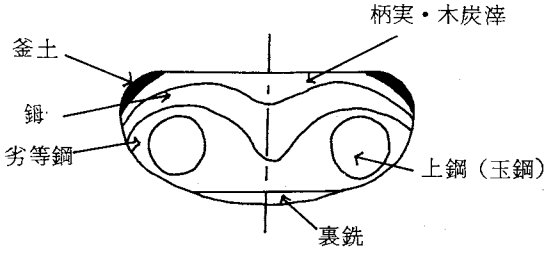
断面は図のようで、この両長辺附近に双眼鏡状に存在する二本の円筒状部分だけは、炭素分もほとんど均等で良質である。この部分が上鋼でいわゆる玉鋼である。この名称は明治以降に砲兵工廠納入品について生れた新造語で、江戸時代は単に鋼と呼んだ。村下（技術者）は鋼押法の場合、この玉鋼の収率を高めることに苦心した。



材料装入前のたたら炉



操業68時間位のたたら炉



鋼塊の断面図

原料の砂鉄

溶解し難い（たゞし還元はし易い　還元とは酸化された物質を元へもどすこと、即ち酸素を失うこと）真砂砂鉄が原料なので、始めは溶け易い砂鉄から順々に装入する。

第一段　こもり（籠り）

籠り砂鉄を用う。溶け難い砂鉄を溶かすための呼び水的役割りをする。これは比較的たやすく溶解する性質のもので、産出量が極めて少なく、これがないとたたら操業が非常にやりにくい。

第二段　こもりつぎ（籠り次ぎ）

前段についで溶け易いもの。

第三段　のぼり（上り）

上り小鉄を装入。これまでは装入物はどんどん下るが、上りになると上ってくる。それはこの段階は鋼種をつくる過程で、それができるからである。

第四段　くだり（下り）

下り小鉄（真砂）を入れる。

鋼種が装入物でふとって行くが、炉のふところが広くなるので装入は下るようにみえる。炉壁の粘土は食われて（溶けて溶媒剤となる）ゆく。

この下り砂鉄が鋼を構成する主体となる砂鉄である。

操業第一段階　こもり（7.5時間）

○早朝から木炭のみを一～一・五時間燃焼する（点火は桧の板と樫の棒の摩擦による火鑽法）

○燃焼が安定すると籠り小鉄を木炭と交互に装入。

砂鉄30Kg＝（30分）＝60Kg＝30分）＝90Kg以後30分毎90Kg

木炭はじめから30分毎100Kg宛

○約四時間程度経過すると砂鉄は湯となり、炉底を少し宛侵食して鉄滓（柄実、スラグ）を生ずる。――炉底側面の三個の湯池（ノロの出し穴）の中央を開いて流し出す。

この段階になると製錬は大分やり易くなる（炉の制御は砂鉄の種類と量で加減し木炭ではない）

○さらに三時間半　砂鉄装入

これらの装入量は村下の勘の計算で、種すき（木製スコップ）・箕等で入れるが、正確である。

○合計

砂鉄　一、三六〇Kg（全量の8％）

木炭　一、六〇〇Kg（全量の11％）

操業第二段階こもりつぎ（7.5時間）

○前段より温度上っているが、還元作用はまだ本格的でない。

○溶け易いこもりつぎ小銑（ない時はこもり小鉄と真砂　あるいは赤目と真砂の混合物）を木炭とともに装入。

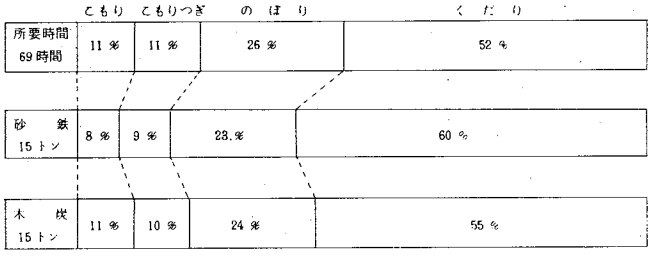
○風圧も序々に上げ、炉内温度は装入作業に敏感に反応する。

○最も高温、変化のない鋼塊構成部（炉底より10～15㎝上部辺）で一、五〇〇度。

○砂鉄を還元するに充分でない。

大部分は鉄滓となり炉底に・たまり、時折湯池中央より抽出。

○終りころは次第に銑鉄も形成



たたら操業の時間および原燃料の配分

○合計

砂鉄　一、三五〇Kg（全量の9％）

木炭　一、五〇〇Kg（全量の10％）

操業第三段階　のぼり（18時間）

○温度も上り炉況も安定、木炭と砂鉄の反応熱が還元に充分な程度に上昇

○そこで溶け難い上り小銑（真砂）を入れはじめる。銑鉄も順調に形成されつづけている。

○炉壁の侵食は激しく、この期に入って六～七時間目には、鉄滓を両側の湯池から排出。

炉底温度は一、五〇〇度を越える。

○木炭は30分に100Kgで、砂鉄は30分に110Kgに増加し、夜を徹して約16～17時間燃焼させ製練し、終りころ銑鉄と鉄滓を湯口から逐次出す。この期だけで銑鉄は七〇〇Kg流出する。

○炉壁は元釜部が築造時の厚さの半分近くなり、羽口の段の付いた部分辺りまで侵食。

○羽口穴が大きくなり風が拡散するので（拡散するので鋼ができてくる）、送風を強くし風量調整）する。炉の中央に鋼の塊が目立って形成されてくる。

○合計

砂鉄　三、三七八Kg（全量23％）

木炭三、六〇〇Kg（全量24％）

操業第四段階　くだり（35～40時間）

上り期の18時間経過から、増大した装入砂鉄を順調に消化し、中心製練になる。燃焼状況最も良く、装入燃料の降下も早いので、30分毎に110Kgの砂鉄を、中途から24分毎に木炭も合せて装入する。送風も一層強化し、風圧も一段高く。

○鋼塊も急速に肥大する。製練時間も最も長く、炉底に鉄滓・銑が急速にできるので、湯池の穴は開け放して自然に排出させる。

○鋼の肥大分に応じて炉壁も12㎝程度まで薄くなり、作業続行困難になる。下り期29～30時間経過ころから砂鉄装入を減少し、最後の一時間は木炭のみの装入燃焼に。釜出しへ。

○合計

砂鉄八、九三三Kg（全量の60％）

木炭八、二〇〇Kg（全量の55％）

以上三昼夜で砂鉄、木炭ともに、それぞれ15トンを装入したことになる。鋼は重さ2.5～3トンである。

（次回は鋼の処理と玉鋼の選別、大鍛冶屋について）

このシリーズは日刀保鑑そのものではなく、一般的なものの記述である。

報告の出土物等の時代推定年表　　○の数字は報告番号

	七五〇〇前後	三五〇〇前後	二五〇〇	三〇〇	BC ←	二〇〇	一〇〇	→ A・D	一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇
土器の変遷	縄文式土器				弥生式土器						土師器			須恵器		
	○山陰へは古墳時代中期おわりころ朝鮮半島より須恵器が入る。 ○山陰の編年（期）としては Ⅰ・Ⅱ（入念美しい）Ⅲ（景多い）Ⅳ（粗雑）とされる。															
古墳	山陰の古墳時代は およそ（4世紀前期）（5世紀中期）（6世紀後期）とされる。															
時代	文化											飛鳥		白鳳	天平	
	都											大和			奈良	
遺跡の推定時代									③					①⑤④②		

③追谷遺跡

横田町大字竹崎字追谷

昭和52・3・24

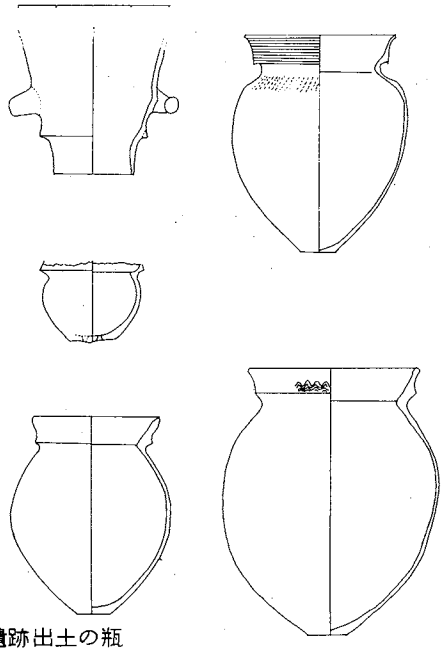
調査者　杉原清一

住居跡である。

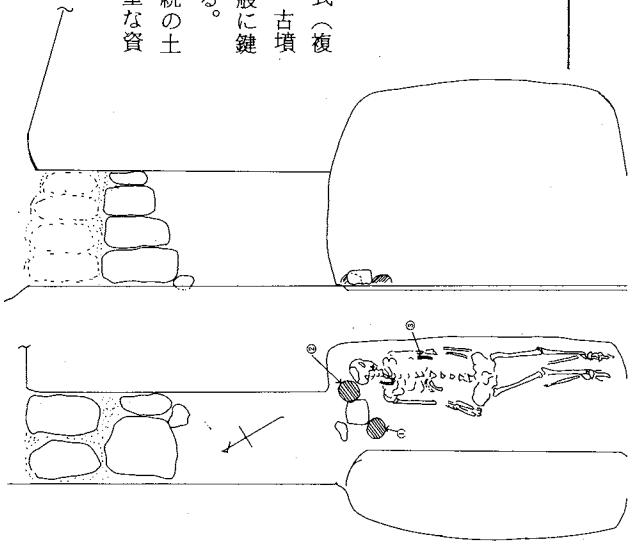
出土品　**土師器**　九個

弥生の末期のもので九重式（複合口縁の初期）の流れで、古墳時代前期の土師器で、一般に鍵屋式と呼ばれるものである。

土師器は弥生式土器の系統の土器で、一括遺物として貴重な資料である。



③追谷遺跡出土の瓶



④大仙子横穴古墳出土状況

④大仙子横穴古墳

横田町大字中村字蔵屋報恩寺向い

昭和51・8・10

調査者　杉原清一

町内で完全人骨（男・165〜167㎝）一体が出たのは、岩屋寺古墳（三体）につぐもの。

須恵器　蓋杯一組（粗末なもの　Ⅰ　須恵器Ⅳ期6世紀〜7世紀）

刀子（10.5㎝）

古墳の後方より発見し閉塞の石組は原形を保ち、前庭が確認された。

⑤白石廻古墳

横田町大字稲原字原口

昭和52・6・1〜6

発掘調査者　杉原清一・永浜順子

松浦登・加本楠雄・小川昭男

佐世川徳雄ほか

石室　奥行約3m　奥壁巾、高さとも約1m、石はすべて割石。

明治初年に発見、当時の出土品等不明であるが、墳丘を囲って石列があり、一部は特に石垣用に築成された円墳で、この類例の調査されたものは少くない。

蓋杯Ⅲ期（六世紀後半）ほかに須恵器片大刀　長さ約30㎝・巾4㎝柄金具付。鉄滓及び鏃（こじり）・鉄片多数。

⑤白石廻古墳の石室

バックナンバー＜奥出雲についての神話発生時代と古代＞　○はバックナンバー

神話	遺跡・遺物	時代史
1〜2世紀 読み方 ㉚	縄文遺物 ⑭	龍の駒縄文遺物 ㉓
1〜2世紀 アメノムラクモノ剣 ㉙	弥生遺物 ⑭	馬場八幡宮銅剣 ②
1〜2世紀 出雲風土記と記紀との出雲	弥生古墳時代の遺跡調査 ㉛	
1〜2世紀 神話の違いそしてスサノオ ㉛	横穴古墳 ⑪	
1〜2世紀 稲田の神社 ㉜	後期古墳 ⑱	
	—須恵器編年—	
		1世紀 吉備の成長と奥 ⑱
		3世紀 出雲 ⑮
		出雲と奥出
		6世紀 横穴墓 —— ⑯⑰
		吉備、横田、大原へ ⑱
		古代豪族 —— ㉑⑲
		7世紀

（これらの文の間で時代の若干合わないのは、学者の説のずれを意味する）

出雲風土記の中のスサノオ

次の四つの行動があるだけである。

○御室山（熊野大社の向うの山）に御室を（村を）つくり宿った。—大原郡御室山の項

○佐世の木の葉をかざして踊った。—大原郡佐世郷の項

○小さい国だが住い国だといって、己が魂を鎮めた。—飯石郡須佐郷の項

○来た土地をみて、わが心安らけくなりたいといったところ。—意宇郡安来郷の項

スサノオの来着地は、ヒノ川上（紀の一書）、ヒノ川上流「鳥髪の地」（記）とある。

風土記の中の斐伊川は斐伊郷（現在の木次町）・ヒノ川中流の赤川合流点のあたりをさす即ち今日の斐伊川の中流の名称で下流は出雲の大川であり、仁多地方は出雲大川の上流となっている。

スサノオは須佐の男で、須佐の地（佐田町須佐）の地主神・支配者・須佐国造家をあらわすと考えられる。そして当時の斐伊川に進出し須賀宮に住み、そしてその背後の山（忌部川・意宇川・赤川の分水嶺）をこえて意宇に進出したと考えられる。出雲最西端の一地域の首長という原像が、スサノオ神へと形象化した。これは既述した古墳の考察（第十八号）とも符合する。

これを歴史的に考えると、それまで沢山、南方から九州を経て来住したもの、朝鮮から次々と来住した部族があった。一世紀ごろ朝鮮の東海岸から新羅人系集団が来り、先住の海人部族をおさえた。二世紀に砂鉄地帯へ韓鍛冶系文化をもった須佐族が来住し成長した。（しかし弥生・古墳時代にも鉄遺跡が少ないから、ほそぼそたるもの）それが今日の斐伊川中流から、須賀を経て意宇郡に入ったと推定が成立する。

門脇禎二説では、朝鮮とつながる出雲（日本海岸一帯）へヤマトから至るのには、①丹波→但馬→海で出雲の中心　②吉備の津山或は新見から備田道で大原・出雲へ（四世紀半ばごろ）③瀬戸内から三次—神門—出雲（六世紀後半〜七世紀初ごろ）があるという。

オロチ退治

出雲風土記には全くない。それから六〇〇年後の十三世紀半ばの簸川出身の名僧夢厳祖応の詩にこの話が一寸顔を出しているが、それは湯村温泉附近のものである。それから二〇〇年後の大永三年（一五二三）に著された「雲州樋上天淵記」には、この話の場所として湯村温泉附近の天が渕、八本杉、皮原、尾崎・草枕という五ケ所の地名（今日も遺跡あり）がある。さらに二〇〇年下った享保二年（一七一七）発行の「雲陽誌」ではさらにふえて一五ケ所となり、川上の仁多町上布施にくわしく出ている。仁多郡内にはこのほかにはない。それから二五〇年経った今日は、上流へと関係地名がふえている。これは古事記が地方に書写されて流れ、神道の興隆とともに、関係地と称するところが創作されたのである。

その時代はまず室町時代、ついで徳川時代であるといわれ、中央文化が地方へ浸透するのと歩調を一にしていることが知れるのである。

余裕がなくなったが、出雲の語部（かたりべ）は四系統あって、これが二流にまとまり、記紀の出雲神話作成の材料となったものといわれる。

（次回は稲田の神社）

奥出雲

昭和十八年さる当地方紙の連載読物に、「奥出雲……」と題したところ、訂正してはと求められたが、そのまま掲載願った。十九年二十年にもさる地方誌に奥出雲の村づくりと教育と題するものを書いたことがある。戦後二十二年横田町（旧）文化祭の耳で聴く総合雑誌「横田文化」第一号で、奥出雲のことばを掲げるとともに、内容にも響きを奏でた。筆者と「奥出雲」とのかかわり合いである。

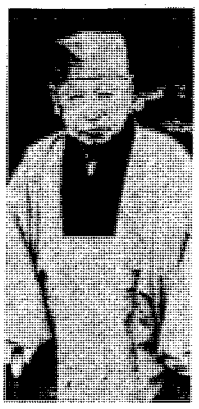
本誌も復刊「横田文化」で出発した。三〜四号では終りたくなかったが、三十号までは続くことは予想しなかった。

書きたいことはまだまだ山ほどあるので、経済的赤字もかえりみず、もうしばらく紙公害を我慢して頂くことにして続けることにした。読んで頂く範囲も、掲載する地域も広くしたいと、「奥出雲」として。紙面をふやしてもう少しやさしく書きたいとも思う。まだ本誌をごぞんじない方におすすめの程を。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第32号
12月号
昭和52.12.3
奥出雲文化協会

横田で生れた人々⑤
小林徳一郎
―実業家・稲田神社創建者―



少年時代

徳一郎の祖父幸四郎は、横田町下横田（当時八川村）字川西の高木屋、小林家の長男に生れたが、弟（二男）伝助に家督を譲って、たたら製鉄業にうち込んだ。広島県比婆郡比和村に山を求めて移り、一人息子清四郎はその村の久光ツルを妻に迎えた。ついで邑智郡高原村に移ったが、このころは清四郎の経営する時代であった。徳一郎はこゝで明治三年に生れた。二つ年上の姉のほか弟と妹とがあった。洋式製鉄法の輸入によって、たたら製鉄は経営が困難となった上に、祖父・母を相次いで失い、父の失意とともに苦難の時代がはじまった。

母がわりに一切をきりもりしている十六才の姉をたすけるため、かっての仕事の関係先であった。村の鍛冶屋有田嘉三郎の奉公人となり、向う槌を振った。この時代の苦労が後年小躯ながら、たくましい体力を持つ基となった。その後将来を期して村の西鎮寺に小僧として入ったが、一家の生計を支えるこゝろ、五ケ月でこゝを去り、十六才の時福岡県田川郡の炭鉱に入るため、一人歩るいて旅に出た。通りすがりの人から聞いた峰地炭鉱の茂田次郎作をたずねて、その下で働くことになった。

こゝでは愛称「小徳」で知られる程仕事に熱心で、こゝで後年成功した人々を多く知った。玄洋社の頭山満、内田良平らを知ったのもこの時代であった。

青年時代

二十八才の時、下関で心をひかれた女性、山口県の元萩藩士の娘木村ミチと結婚したのを機として、正業を進み第二の人生が開けた。そして神崎岩蔵経営の築港会社の門司、小森江築港工事を、坂田団蔵が請負い、その工事の現場監督として出発した。ついで妻の賛同を得て請負師として立つことを決意し、小倉駅前埋立て築港工事を請負った。九州鉄道の海老津駅改築工事、貯水池、陸軍十二師団関係の諸事業を次々と請負い、そのかたわら運送業、荷役、回漕問屋を開業し、青年実業家としての地位を確たるものにしたのは三十六才の時だった。

[illegible]

明治四十年三十八才の時、横田村の稲田の土居、安部家は小林家と縁続きであったが、火災等にあったことから家運がおもわしくなかったので、これを援助した。同家所有の山林のうち十三町歩と、小作米百俵分の水田を買った。

このころから請負工事が急速に増加し、小倉の師範学校、中学校、小学校、水族館、さらに築港、門司小倉間の電車の軌道敷設工事などおびただしいものであった。明治四十四年、事業発展は社会の御恩と、島根県に一万円を寄附し、小林育英資金を設けた。

大正四年には大正天皇御大典記念として、出雲大社の大鳥居と参道の松樹数百本を寄進した。あわせて大社日御碕間の人車道開通のための多額の資金を寄附した。かくれた話としては大社の千家家の窮状を救うために、自分の土地、家屋を売って提供したのもこのころであった。鳥居は高さ二十五米の鉄筋コンクリートのもので、柱の廻りは六・五米、額面六畳敷きの、日本一の大鳥居であった。

稲田神社の造営

大正三年はじめて父祖の郷里である横田に帰省した時、親族と協議し、成功した記念として稲田神社を造営し創建することにした。徳一郎が崇敬している出雲大社の祭神と稲田姫は縁が深いことを思い、独力で実現しようと考えた。

当時は道端の名も知られぬ小さいお粗末な宮であった。

資金としては五分利休公債を売り払い、土居家救済のために買いとった山林十三町歩から用材を切り出してあて、同じく求めた水田を神社の基本財産とすることにした。

造営工事は三期に分け、第一期は昭和六年から八年までで、まず参道の新設工事からはじめ、社地を現在地に定めて、それまでの一・五粁の狭い田圃場を五間巾（十米）に拡げた。ついで本殿向拝、弊殿、社務所、神橋の建設を行った。第二期工事はしばらくたった昭和十三年十一月からはじめ翌年十二月に終った。拝殿向拝、通殿、神饌殿、手水舎、玉垣、石垣、石段、大鳥居などであった。

第三期には透し塀、宝物庫、神職住宅、休憩所を紀元二千六百年記念として計画したが、戦

時中の統制がきびしく実現出来ずにしまった。第二期までの総工費は三十数万円に及ぶ多額のものであった。

今日の金額にして十億を超えるものである。

海外へも進出

一方劇場経営にも手を染めた。大正九年から大正十三年十月までの熊本県八代の干拓は大工事であった。今日と違って全く人力による、有明海の上げ潮をせきとめて、千町歩に及ぶ永久の干湾を造成するというものであった。大難工事となり、全くの赤字続きで、自分の財産はもとより親族名義の財産まで、洗いざらい干拓資金にあてるため、銀行の担保にあてる始末であったが、幸にして成功し、千町歩の今日の美田を作りあげたのである。

この財政的苦境を乗り切るために、朝鮮の金山および炭鉱経営にのり出すことになり、昭和炭鉱株式会社を設立し、他方大分県の立石でも、国徳金山鉱業株式会社を設立した。（昭和二年）これが財政的好転をもたらし、郷里稲田神社造営促進の背景となった。

朝鮮ではこのほか、大陸の風雲急をつげる昭和十三年、鉄道の完備が不可欠と、主要路線の突貫工事が計画され、新設や複線化工事をも請負った。

この間小倉市会議員をつとめること十余年、ことあるごとに、学校、社会施設、神社におびただしい寄附をした。戦前の小倉市公会堂は独力で昭和初年建設し、寄附したものであった。

一方郷里横田村、八川村にも機会あるごとに各種の寄附を続けた。かって「文芸春秋」（雑誌）に敬神家そして寄附の鬼と題して、その生涯と業績を全国に紹介された。

晩　年

小林徳一郎の経営する小林組は、戦争中の仕事は主力が朝鮮にあったので、敗戦は大きい痛手として残った。

養子小林寛蔵は郷里横田へ帰って神社経営にあたり、実子信一郎は安部家を再興して、実業家として成長した。（土居安部家の川西における分家に槙屋安部家があった。それを再興した）今日東京の株式会社国連社の社長である。

昭和三十一年一月三日、小林徳一郎は小倉市において、八十七才の生涯を閉ぢた。

逸　話

稲田神社の社宝、金の御紋章入り銀製花瓶　明治二十八年六月、血気盛り二十六才の徳一郎は、熊本の本妙寺の境内で、広島の肥田利助と決斗をすることになった。幸に和解して血をみずに終ったのは、本妙寺の清正公のご利益と感得し、いつか機会があったらお礼をしたいと考えていた。当時本妙寺には黒門という山門があったが、小さいものであったので、大きいものにして荘厳さを添えたいと思い、大正八年今日の荘麗な仁王門を、当時五万五千円で建立した。その山門にかゝげる額を書くために、当時の憲兵司令官や広島師団長に手づるがあったので相談したところ、久邇宮がよろしかろうということになり、二人に紹介してもらい上京した。宮は「加藤清正とは関係はないが、小林さんのために書こう」と引受けてもらった。さんをつけて呼んで頂いたことに恐縮し、その御礼に参上したところ、金の御紋章入りの銀の花瓶を頂戴した。それがこの神社の社宝に寄附された。

将校とのけんか　明治三十六年の梅雨はことのほか雨が多かった。小倉の川は増水し危険な箇所があちこちに生じた。小林組は万一に備えて水防のため要所要所に出向き、川面に対していた。折りしも日露戦争に出征する将校の送別会が、近くの偕行社で行われ、その流れの将校の一人が通りがかり、一心に川面をみつめる徳一郎の背中をつゝき、無礼をたしなめた。出水の警戒中であったことを説明したがきき入れられず、押問答をしているうちに、五、六人の酔ぱらい将校が集った。一方組の者はトビロやツルハシを持って集り対立する場面となった。これは危険と感じ仕事中であると断って去ろうとすると、近くの将校が徳一郎に平手打ちを加えた。組の者も殺気だった。徳一郎は軍服を着た人間とはけんかはできん、すぐに軍服をぬげそうすれば相手になろうと言うと、将校は「ようし」と雨にぬれた軍服をぬいで地面に投げすてた。そこで「陛下の軍服を地面に投げすてることは何事ぞ」というと、相手にひるみが見えたので、この時と構えた時、顔みしりの十二師団の経理部長の堀大佐がやって来て、その将校をつれ去った。幸にして町は水難をまぬがれた。その後、その将校（参謀）とねんごろになり、小林組は十二師団御用達の請負業者となることができた。

電話がないと不便であろうと堀大佐が、師団経理部にあった電話の十五番を一つゆずられるというほどになり、徳一郎の気性を見込んで、部下に「損のいく仕事と気短な仕事はすべて小林組にさせよ」といわれるほどになった。

（小林徳一郎顕彰会発行、劉寒吉編「聞書・小林徳一郎翁伝」ほかから）

たたら復元

並河孝義鳥上木炭鉄工場長の念願であった「玉鋼」をつくる「たたら」が、日本美術刀剣保存協会の力によって復元した。

この地の人々が長い間かけて育てて来た技術が、関係者の努力によって、日本の文化財として永く保存される基礎が確立した。

歴史が生み出した文化財

横田のたゝらの歴史⑤

南北朝分裂によって再度神器が北朝光明帝にうつり、足利尊氏が幕府をひらくと、後醍醐帝は吉野に移った。従ってこの地への影響力はさらに弱まり、横田庄はすべて仙洞御所の御料所となった。ここは北朝の上皇の御所であったから、横田庄は北朝一色となったのである。足利尊氏の勢力が入り、義満が将軍となって室町時代が訪れると、出雲国以東の守護職を一門でおさえた山名氏が浸透してきた。やがて守護大名の抬頭による波乱の時代を迎えると、山名一門の満幸は横田庄を横領し代官を送りこんだ。その間十年安部氏は代官を退かざるを得なくなった。上皇の再三の命にも応ぜず返還をしなかったので、義満は満幸の守護職の改易を断行した。遂に足利・山名の対立は頂点に達し明徳の乱となった。

乱後南北朝の合体、そして横田庄は禁裡御料所となり、のち京都の御寺泉涌寺（室町期から徳川期末までの朝廷の菩提所）にその半分が寄進された。安部氏が代官に復したが、幕政の乱れとともにこの地方も不安な状態となり、仁多郡西部の地頭であった三沢氏に命が下り、安部氏は代官を退いて土豪となり三沢氏に仕えることになった。このころ三沢氏の鴨倉城下に備前から刀匠が移り住んでいる。

その後、尼子・毛利の争乱の中で時折貢納の途絶えることもあったようであるが、横田庄の貢納はおおむね良好であったと記録に点在し、地方からの特別な課当はうけないことになってもいたようである。

事情が明らかではないが、天正四年から遥任の代官として菊亭晴季が七年余りの間登場する。そのころ秀吉によって内裏の新造が行われ、仙洞御所の修覆も行われている。晴季の中宮こおける権威によって禁裡御料所横田庄への地方武士の押妨を押えて貢納を続けさせようとしたものと思える。晴季は豊臣秀吉と懇ろで内大臣を退いて右大臣となり、そのあとへ秀吉を推挙し、やがて太政大臣にすすめた人物で、五摂家につぐ「清華」七家の家柄で公卿中の実力者であった。詳細はひかえるが、三沢氏と毛利方の怪僧恵瓊とのつながりも深く、恵瓊と秀吉そして晴季との関係を推理するのに資料が多い。毛利麾下の諸将が安芸の城下に集められることになってから、三沢氏が毛利氏から極めて冷たくあしらわれたのはこの間の事情で説明ができる。

貢納の記録は十八年が最後で翌十九年からは秀吉によって出雲国は毛利の一門吉川氏の所領とされた。しかし仁多郡は毛利輝元の領内で、郡内各地にがっちりと家臣が送り込まれた。早速小池氏には村役人として鉄を搬出すべしという厳重な命令を出されている。新しい時代への毛利氏の意気込みは、鉄への需要を増大させたであろう。そして農民への要求も苛酷であったとみえて、遂に百姓たちは郡内西辺の阿井と東辺の大呂で、それぞれ鉄奉行を斬殺するという事件を起こした。徳川期初めの初代松江藩主堀尾氏も、鉄にまつわって配慮を重ねたことも記録に残っている。

真砂砂鉄が豊富にこの地方に産出することは、地球の成因・地殻の変動隆起という遠い遠い地質時代の天恵の配慮によるものであるが、これが横田・奥出雲の歴史を揺り動かす原動力になったことは既に述べたところである。この地の多くの神社仏閣もこの歴史の産物であり、豊富な文化財や旧家、わけてもたたら師の家に保存されている製鉄の記録などもやはり歴史が生んだ文化財である。

「玉鋼」を生産するたたら復元は、当然の地に実現したというべきである。鉄を中心とする各種の文化財が整理され、さらに発掘もされて保護され、そして保存されることを待っている。町内各地にある諸遺跡と、復元するたたら炉などの施設とを結んで、これらの諸文化財の保存施設としての資料館の必要性がとみに加わってきた。この機に世界製鉄史研究の重要な砦がここに実現することは、島根県を含めた広い地域の人々の願望であるとともに、その責務でもあろうと思うものである。

この連載は完了

山陰中央新報社の了解を得て、同誌上に登載したものを転載した。

松江が生んだ

レオナルド・ダ・ビンチ

日本的な民芸工人

金津滋個展

十二月十五日(木)　二日間

十六日(金)

よこたショッピングセンター階上にて

本職は染色家であるが、型染絵、切り絵、やきもの、木彫、一閑張りと多才の持主。

出西窯の助言者、鳥取、出雲の民芸美術館の指導者。

茶、花、料理の古道にも通ずる人。

この人の代表的作品展示

（同時に横田の民芸・工芸の作品も若干展示）

主催　横田民芸文化愛好者有志

尚十五日午前中、横田町商工会主催にて町民会館で金津氏の民芸についての講習会開催

たたら製鉄早わかり④

鉧押法による製品

―玉鋼など―

炉をくずして出された、鉧と呼ばれる大塊は、巾一米、長さ三米、厚み〇・三米程度のもので、この塊は均質のものではない。第31号3頁の断面図のように、上質鋼、劣等鋼、銑そして木炭滓、柄実（鉱滓、スラグ）と裏銑のよりあいである。

これを空冷し（水冷法もある）て鋼小屋へ運ぶ。重さは二・五〜三トンで、原料砂鉄一五トンに対し二〇〜三〇％の分留りである。

小割・選別

これを挙大に割るために、大銅場では重量二トンの鉄製の長い柱、（銅）を動力で巻きあげ鉧の上に落下させて割る。さらに小銅場でさらに小さくし、その上鉄槌で小割して約一キロ程度の塊鋼とする。これを品等毎に分類する。

小割された良質の製品を総称して造鋼という。割合はおよそ次のようである。

合格品
- ㋑玉鋼（和鋼）
- ㋺目白（めじろ）（玉鋼の小塊で良質）
- ㋩砂味（しゃみ）（目白よりさらに小さく質劣る）

二級品
- ㋥造粉（つくりこ）（造り場でる鋼の粉）

右の㋑〜㋥で約一トン

- ㋭歩鉧（ぶ）　玉鋼と鉧銑との中間の炭素量少ないもの
- ㋬鉧細（けらこま）　㋭の小さいもの

右の㋭㋬で約一・五トン

- ㋣鉧銑　鉧の銑鉄部分約〇・五トン

以上の製品が約三トンで、砂鉄十五トン中の他の十二トンは、ノロとして出、スラグ（たたら滓）となる。用途は刃物用鋼が中心で、玉鋼は鶴松竹梅と品種が別れ、あわせて六百キロである。砂鉄十五トンの四％にあたる。

歩鉧以下のものは、昔は後述する本場や左下場に廻して錬鉄（庖丁鉄）製造用になった。

鉧押法による銑

裏　銑ー図のように（氷目銑）
流れ銑ー操業中に炉底の湯口より抽出される銑鉄である（蜂目銑）

（破面目の形状から（　）のように呼ぶ）

これらはいずれも銑鉄であるから鍛造できないので、鋳物や卸し鉄用の材料となる。

鉧押法では製品の五五％が鉧鋼四五％が銑である。

吹子の不十分な時代には砂鉄を容易に溶解できても鉧になり、鋳物に適するような炭素分も高く流動性のよい銑鉄はできなかった。そのためわが国の鉄器は奈良時代以前はほとんど鍛造のものばかりで、弥生期の舶載品と推定されるものや、古墳期以降の特殊な例外は別として、鋳造品はほとんどないのが実情であった。吹子の発達や操作技術の進歩で、温度も上り、銑鉄がつくれるようになっていった。

しかし、しばらくは鋳造技術も知られなかったから、銑鉄は利用できないものとなっていた。銅の溶解温度は一、〇八五度であったが、錫をまぜると青銅は、八〇〇度で鋳物ができたから（鉄は炭素四〜五％のもので、一、一〇〇度）早くから行われたが、鉄の鋳物はしばらくおくれた。

他方技術が進んで、銑の卸し法が発見され、大鍛冶屋の発生をみて、銑から錬鉄（庖丁鉄）がつくられるようになった。

たたら炉（還元炉）でできた銑を、大鍛冶屋炉（製錬炉）に移し、後述するようにして半溶融の可鉄銓に変えてゆくようになった。（間接法のはじまり）

すると赤目砂鉄による銑押法のたたら製鉄が盛んとなり、大鍛冶屋を多数かゝえて、錬鉄を大量に製作した。またそれとともに鋳物師の大量発生へと発達していった。

次回から、玉鋼と近代鋼のちがいと日本刀。大鍛冶屋。銑押法。鋳物製法と奥出雲についてふれることにする。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

訂正

第31号5頁の年表中、須恵期編年Ⅲの「景多い」は「量多い」の誤り。3頁の題の「靖国鑪」の文字は削除する。

横田史談会より

今年の集い　報告

△古文書を読む集い　十回
一、二、三、四、六、七、八、九、十、十一月

△史蹟めぐりの集い
四月　月山富田城、清水寺
八月　石見大森銀山方面

△講　座
五月　横穴墓について
門脇俊彦氏（第四回）
八月　遺跡発掘報告
蓮岡法暲氏（第五回）

△協　力
六月　白石廻古墳発掘

来年度の集い　予定

△古文書を読む集いー毎月一月七日（土）に開催
例月通りに

△史蹟めぐりの集い
広島県三次市、岡山県新見市
松江、玉造方面

△講　座　特別講演会として十一月か十二月に中央講師

△協　力
たたら遺跡発掘調査に

会員配布一部百円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第33号
1月号
昭和53. 1. 6
奥出雲文化協会

たたら製鉄早わかり⑤
大鍛冶屋

銑（づく）の処理

奥出雲のたたらは鋼押法が主で、製品の多くは和鋼であった。

しかし銑も若干でるので、これを別なところにある大鍛冶屋において、錬鉄（庖丁鉄）にし、野鍛冶に売り、そこで刃物、諸金物につくられ、刀工はそれから芯金をつくった。銑から鋳物をつくるのは、布部村宇波がこの地方では盛んであった。

中国山脈の南側では、ほとんど銑押法であったから、その製品の鉄は鋳物師に売られたが、大鍛冶屋によって錬鉄とされた。

したがって奥出雲では、たたら一ケ所に大鍛冶屋が一ケ所が普通であったが、山陽側ではたたら一ケ所に二～三ケ所大鍛冶屋が附設されていた。

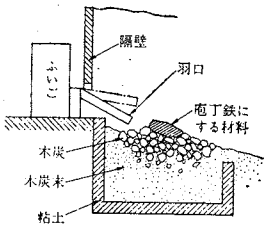
奥出雲のたたらが大正十二年にすべて廃止されると、大鍛冶屋も間もなくなくなった。鳥上の靖国たたらはその後復活したが、大鍛冶屋は復活しなかったので、その技術を知る人はないという。

大鍛冶屋

たたらは乾いた土地を選ぶがこれはむしろ湿ったところを選んだ（大鍛冶屋では酸化炎をこもらせるため、燃えている木炭にしばしば水をかける必要があった）。ここの原料は、屑がね（主として鋼屑即ち鋼の細粒）や銑であった。たたらとは技術内容も職名も全く変っている。大鍛冶屋は軽るくみられているが、技術史上ではたたらに劣らず重要なものであった。親方を大工といって村下とはいわない。普通鍛冶大工二人、吹指二人、手子二人の計六人を必要とした。

大鍛冶屋炉（火窪という）

大鍛冶屋には、本場と左下場とがある。本場では屑がね即ち主に鋼屑を鍛えて庖丁鉄にするところであり、左下場は、和銑をここで第一次脱炭をして、左下鉄を造るところで、この左下鉄を本場に移して庖丁鉄にした。



大鍛冶炉（羽口が実線のとき酸化炎，鎖線のとき還元炎）

その炉は「火窪（ほど）」といって、本場、左下場ともほぼ同型で、右の図のようなもので、巾30cm長さ120cm深さ75cm位のものである。幾分本場の火窪が大きく、羽口の直径も本場4.5cmに左下場4cmで少し大きい。

ふいご筒（羽口）は燃料への吹付角度が調節可能で、これによって木炭の炎を酸化炎、還元炎と自由に使い分けできた。

（還元炎は不完全燃焼のときできるので、ガス中に水素や一酸化炭素が含まれ、鉄中の酸素を奪って水や炭素ガスに変る。酸化炎のガスはすべて水や炭酸ガスに変っているので、温度も高く鉄中の炭素を酸化燃焼させる）

本　場

屑がね（主として鋼屑）を本場の火窪の上で反転させながら酸化炎で加熱し鍛錬して鉄滓をしぼり出し、脱炭して炭素を0.1～0.2％に下げる。こうして出来た錬鉄を「卸し金（おろしがね）」といゝ、この方法を「卸し鉄法（がねほう）」ともいう。この卸し金は、おおよそ巾10cm長さ60～70cm厚さ1cmの型にたたきあげられて短冊形にされて製品となった。野（小）鍛冶が折りとり使用に便利なように、板チョコ状に切込みがつけられていて、その一片が庖丁に似ているために、庖丁鉄という名がついた。

本場の作業＝卸し鉄法

製品名錬鉄＝卸し金＝庖丁鉄

左下場　製品は左下鉄という。

左下場の火窪で燃焼している木炭（小炭＝木のむしやきによる）の上に、銑（和銑）をのせて溶かして、下へと沈ませ――銑鉄10貫（37Kg）に小炭30貫（112Kg）前後の割で使用――酸化炎をあてて鍛錬し脱炭する。炭素は0.4～1.0％までになる。これを左下鉄という。

左下鉄を本場で庖丁鉄に

この左下鉄を本場では、鋼粒とあわせて、火窪の上で絶えず反転させつつ、酸化炎で強熱して、前と同じように半溶の状態にし、より脱炭鍛造し、（炭素を0.1～0.2％に）、不純物（鉄滓＝柄実＝スラグ）をしぼり出す。そして出来たのが錬鉄（卸し金・庖丁鉄）である。

伯耆の都合山鉄山の大鍛冶場では、銑80貫（0.3t）と木炭240貫から、50貫（0.19t）の庖丁鉄を、広島鉄山では一日35貫（0.13t）の錬鉄をつくるのに、銑鉄53貫（0.2t）を原料として、大工一人、左下一人、手子四人、吹指一人、左下吹一人の計八人を使用している（いずれも手作業）

この工程は鉄の貴重な時代には、銑や鋼だけでなく、鉄の小割屑、古釘、割れ鍋なども原料

頌春　伝統をふまえた個性ある地域社会を

として使用されていた。この方法によって造られた鉄は鋼と同様なものが造られたように考えられるが、なんども火の中に入れて脱炭されるので、炭素分が非常に低くなり、きわめて軟質な鋼になっている。水心子の日本刀鍛造法は、この技術を応用したものである。

庖丁鉄

庖丁鉄から鋼を造って用いる刀匠もあったというが、羽口の角度をかえて、還元炎とすることによって鍛造した。（ふいごをとめて還元炎となるが、それでは火がもたない）

庖丁鉄は焼が入らい。野鍛冶はこれを成形してもそのまゝでは刃物にならないから、刃物にするには刃先部分に浸炭するか、あるいは玉鋼製チップを付刃するかして、焼入れする。普通は付刃にする。浸炭では層が薄いので、二〜三回の砥ぎなおしでなくなってしまうからである。

神話と歴史の間④

稲田の神社

神社論争

明治初年　原口天満宮の氏子は、原口村、稲田村（六坂は伊賀多気神社）、蔵屋村であったが、蔵屋村の氏子は由緒不明の社、羽鳥神社（筆者註、雲陽誌の王子権現で、戦国時代尼子氏が横田庄を押さえた時、その家臣羽鳥氏が蔵屋代官として住み、まつったものと推定する）を氏神として分離独立した。その後明治十年になり、稲田村が小社稲田神社をもって氏神として分離独立の希望を申出た。それに対して翌十一年、原口村は県令（県知事）境二郎宛に嘆願書を出してそれを阻止した。その演説書の内容は次のようなものである。

① 氏神にするという稲田神社とは　昔藤原重左衛門（花屋）というものが、家の近くに古塚があって、その崇りに困まったので、「矢入」にある所有地の山林へ移し塚神として祭った。人呼んでこれを「花屋大明神」といゝ、或は「矢入大明神」とも呼んだ。それが近年、稲田神社と呼ばれている。ところが明治初年の神社調査の折には、これは廃止されて届出にものらなかった。ところがその後、願主の依頼で、横田村の神主（伊賀多気神社）恩田豊主が奉祀して、自分の鎮守としていた雑社である。稲田姫の神をまつるとはつくりごとであることは、土民がよく知っている。

② 稲田姫の誕生地はほかにある。この神社の東方四丁のところの字「竹のハナ」にあって、小さい宮があり、産湯の池というものもこゝにある。

ここの由緒は次のように明らかである。そこに弥次右衛門という者が住んでいた。ある夜、日の神の夢告げにより、文政五年（一八二二）午の三月二日にその地を掘ったところ神剱を得た。翌六年八月四日に再びそこを掘ったところ神鏡と玉を得たので、神宝として宮をつくり信仰した。そのことが地頭に聞えその三宝を献上した。のちそれがその地（原口、稲田村）の神主足立和泉へ郡奉行を経て下し渡された。その書類と三宝は現在その子孫である足立貞之進が所持していることも明らかである。（地頭の書類の写しも添付してある）

もう一通の古文書

それは文政七年甲申の二月、神主足立隼人久重が認めたものである。（足立は明治後半、事情により原口を去って他出した）「脚摩乳命（あしまぢち）、手摩乳命（てまぢち）は大曲村の長者原に住んでいて、五反田八反田は神田であった。そこの耕作のためにゆく途中の休憩所が稲田であって、そこで姫が生れたので、稲田姫と名づけた。その時の産湯の池があり、そこの竹でへらを作って、へその緒を切った。船通山には八岐の大蛇が住んでいて、年毎に姫を呑み、八人目が稲田姫となった。悲しむ夫婦の前に素盞嗚命があらわれ、退治する決心をした。姫をめとって姫は上布施村八頭にかくし、大曲村の長者原で酒を造ってまち、十握の剱で大蛇を退治した。素盞嗚命は牛頭天王として大曲村にまつってあり老夫婦は上布施村の八重垣大明神にまつり、稲田姫命は稲田村の池のほとりにまつった。ところが去る文政五年夢知らせで三宝が出たので、そこに私は玉垣、石灯籠などを造って、稲田姫信仰を行った。こゝにその由来を記しておく」

というもので、産湯の池も神社もこのころ創建したものである。

出雲神話の流布によって、出来上ったものである。伝えによると三宝は、足立の子孫が明治中ごろ、売払ったともいう。その地は地形が遺跡らしい様相をもってはいるが、明らかでない。

雲陽誌

前回に記したこの本（一七一七）には、上布施村に大蛇退治のことがのるのみである。また、稲田に「矢入明神、神号いまだ考す、二尺ばかりの祠なり」とあり、大曲に「牛頭天王、素盞嗚尊なり」とあるのみで、稲田神社のことは全くない。

（この連載　完）

奥出雲地域史研究の資料 ①

図書（上）

まず町立図書館収蔵のものを中心に紹介する。

㊀—古代＝平安期まで　㊥—中世＝鎌倉　㊐—近世＝徳川期　㊇—近代＝明治期
はそれぞれの時代を中心とした資料をあらわす　ないものは全時代を通ずるもの

①出雲・隠岐　㊀㊥
1963（昭三六）発行・地方史研究所研究報告集Ⅰ考古班・国分寺址班・美術史班・文献班・宗教民俗班・芸能班・駅鈴・甲冑城郭班による。

②（関西）陰徳太平記上・下二冊　㊥
1665（寛文五）防陽の士香河正矩著
関西諸国（中国、九州）の治乱興亡の争乱状態の戦記もので、後土御門天皇の文明年間から、豊臣秀吉の慶長年間の朝鮮征伐までを、八一巻に分けてしるす。

③雲陽軍実記　一冊　㊥
1580（天正八）　河本隆正著
尼子の家臣河本大八隆正が尼子滅亡後、旧記ならびに自己の経験によって書いたという尼子毛利の戦記六巻で、文明十八年尼子経久が富田城に自立して、山陰に覇をとなえてから勝久が亡ぶまでを収めている。前書②及び④と併せてみるとよい。

④雲陽軍実記考　一冊　㊥
1771（明和八）　春日由雄著
「雲陽軍実記」の記述について論評したもの。（但これは町役場古文書収蔵庫にあり）

⑤島根県史　九巻
1911～1930（明治四〇～昭和五）の二〇年間をかけて、野津左馬之助（天籟）を中心に、島根県が編集したもの。
第一巻　先史時代、神代
第二巻　神代
第三巻　国造政治時代
第四巻　古墳
第五巻　国司政治時代
第六巻　守護地頭時代
第七巻　京護大内時代、尼子毛利時代（上）
第八巻　尼子毛利時代（下）　藩政時代（上）
第九巻　藩政時代（下）　明治維新期
資料としてすぐれたものがある。

⑥出雲私史（和訳）　一巻㊥㊐
桃好裕著の出雲私史（漢文）を和訳したもの。
編年史で出雲の歴史を知ることができる。本文は初代出雲国守護佐々木氏の祖先から年を起し、明治維新の藩主松平定安の藩政奉還までを記述している。

⑦雲陽誌　一巻　㊐
1717（享保三）刊行の松江藩の儒臣黒沢長尚撰のもの、当時の出雲国の地誌で、各郡各町村別に社寺、名所、故城が記されている。

⑧島根県仁多郡誌　一巻
1919（大正八）仁多郡役所発行
上野富太郎編
当時としては豊富な文献に立脚していて、郡誌中の圧巻とされていたが、今日では古代中世の記述には訂正すべきものが多いし、近世についても簡略すぎる。

⑨八川村史　一巻
1959（昭和三四）八川村誌編集委員会
町村合併にあたり、村の歩みを日本史全体との関連の中で記述してある。

⑩島根県横田町誌　一巻
1967（昭和四二）横田町誌編集委員会
町村合併十周年記念事業として発行、資料も豊かで（特に中世史と近世、近代のたたら製鉄史については、はじめて明らかにしたもの）高く評価されている。

⑪島根県文化人名鑑　一巻
1958（昭和三八）　伊藤菊之輔編
仁多郡では、不見明見、雲昭勝平大喜、村上吉五郎、高橋常作、佐々木吉左衛門、佐伯景幽、刀工忠貞及び同派六人・川島忠善を集録してある。

⑫島根県人名辞典　一巻
1970（昭和四五）　伊藤菊之輔編
前書の文化人名鑑に載ったものを補筆して載せたほか、若槻佐一郎、小林徳一郎、絲原武太郎、福田勘兵衛、卜蔵梅之丞、青木実三郎、岡崎喜一郎、赤名汀柳、桜井三郎右衛門を収録してある。

⑬明治百年島根の百傑　一冊
1968（昭和四三）島根県教育委員会
郡内では、村上吉五郎、桜井三郎右衛門、絲原武太郎、雲照、勝平大喜が載っている。
（以上三著の中の雲照は簸川郡の出身の僧であるが、岩屋寺において修業して大成し、度々こゝに入山しているのでとりあげた）

以下の図書は奥出雲を研究するに必要なものとして紹介する。（いずれも図書館収蔵）

⑭物語藩史　第九巻一冊
1976（昭和五一）　新人物往来社
中国地方各藩の歴史を物語風に誌したもの。
松江藩、浜田藩、津和野藩、津山藩、松山藩、岡山藩、福山藩、広島藩、岩国藩、長州藩

⑮島根県議会史　全四巻
1954（昭和三四）　県議会史編集委員会
第一回議会よりの議事録をもとに記述したもので、郡内関係のものも多い。

⑯島根県史年表　一冊
1946（昭和三九）　伊藤菊之輔編

⑰出雲の石造美術
1969（昭和四〇）　伊藤菊之輔著
数基を収録している。

⑱隠岐の石造美術
1973（昭和四四）　伊藤菊之輔著

⑲山陰の陶窯
1973（昭和四四）伊藤菊之輔著
横田の金免焼、原口焼を収む

⑳島根県の歴史
内藤正中著　山川出版社

㉑全国各県の歴史
山川出版社のシリーズが全冊揃えてあって、各県の歴史を比較するに便利である。

㉒観光と旅・郷土資料辞典
島　根　県　（人文社版）

㉓右シリーズの各県分
が揃えてあって、地誌と小史を知るに好都合である。

日本と世界の歴史を知る好著が揃っていて便利である。

㉔日本文化史大系
十三巻・別巻一　小学館版

㉕日本の歴史　二六巻・別巻五
中央公論社版

㉖世界の歴史　一六巻・別巻一
中央公論社版

㉗姓氏家系大辞典　全三巻
太田亮編　角川書店版
姓氏家系を知るに最高の辞典で、著名な人物の略伝も付いている。中世、近世史を研究する好伴侶であり、祖先探究の推理を楽しむのにも楽しい書である。
こうしたことを調べるには県立図書館には
新撰姓氏録、公卿補任
尊卑分脈、本朝皇胤紹運録
藩翰譜、寛政重修諸家譜が揃っている。

㉘新編世界人名辞典　全三巻
東京堂出版版
日本編・西洋編・東洋編

㉙西洋史辞典　全一巻
東京創元社版

㉚考古学辞典　全一巻
東京創元社版

㉛新仏教辞典　全一巻
誠信書房版

㉜神道辞典　全一巻
堀　書房版
日本史辞典、哲学辞典が欠落している。
歴史研究に欠かせないものとして民俗学がある。民俗学の創始者の著作集が揃っていること。日本の古典文学大系が揃っていることも、貴重である。そのほか、百科辞典も研究に欠かせない。（㉝㉞は次回に再紹介）

㉝定本柳田国男集　全三六巻
築摩書房版

㉞日本古典文学全集　全一〇〇巻
岩波書店版

㉟平凡社版世界大百科辞典
全三三巻別巻二

㊱日本文学大辞典　全八巻
新潮社版

㊲日本女性史　全六巻
集英社版
ほかに

㊳出雲の昔話

㊴山陰の武将（正・続）㊥
山陰中央新報社版

㊵山陰歴史散歩
山川出版社版

㊶出　雲　毎日新聞社版
写真集（解説付）

㊷日本の鉄　毎日新聞社版
写真集（解説付）

㊸出雲の国　㊥
池田満雄・東森市良著
学　生　社版
最新の考古学の業績を駆使して書かれた出雲の古代史。

㊹出雲神話　学　生　社版
シンポジウム日本の神話3

㊺出雲文化財散歩　学　生　社版
石塚尊俊・近藤正著

㊻大山と隠岐と出雲
木幡吹月編　学　生　社版

㊼出雲の歴史
速水保孝編著　講談社版
県内の第一線の史家の分担執筆による、古代より現代に至るまでの出雲の歴史の大冊、読み易くしかも水準の高い史書である。（最新刊）

㊽日本生活変遷史　衣食住篇
島根新聞社
全三〇巻

㊾重要文化財
毎日新聞社
わが国の重要文化財をすべてカラー写真によって、解説付で収録してある。

㊿島根の文化財　一、二、三集

(51)島根県文化財調査報告
一、二、三集
いずれも島根県教育委員会

(52)島根県の縄文式土器集成　I
宍道正年著
そのほか

(53)日本刀辞典
得能一男著　工芸出版版

(54)建築大辞典
彰国社版

(55)書道大辞典　上・下巻
角川書店版
このうち奥出雲の地域史に関するものは、「郷土コーナー」に集めて収蔵されていて便利である。
次回は本号に紹介しのこしたものに続いて、地域史研究に欠かせない図書（古書、新刊本）で年を追って購入備付けてほしいものを紹介する。
それに続いて町所蔵の古文書収蔵庫にある古文書で、貴重なものから一つ一つ紹介する。
町誌編集の折、町当局の英断と各位の御協力で、県内市町村ではまれにみる古文書の収集が行われているが、その後なお多数の古文書が、町内の家庭に保存されていることが判明している。
また、文部省内の国文学資料館には、横田の杠家、安部家に関する中世資料六〇冊、東京大学史料編さん所に数十葉、山口県文書館に二十冊も所蔵されていることが判明している。県内でも資料が豊かで、そして古代からの歴史が砂鉄を中心として豊富なことは、類をみないものである。若い研究者の出現をまちのぞむこと切なるものがある。なども研究に便宜を与えてくれる。

会員配布一部百円／六九九一一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第34号
2月号
昭和53. 2. 4
奥出雲文化協会

現存する県下にまれなる
中世の土豪屋敷
―稲田の土居・安部家①―

県史蹟指定が急がれる

松江市南郊の「八雲立つ風土記の丘」の駐車場の奥にある中世豪族の館跡は、近くの大庭町黒田で検出された館跡の土塁と周濠とを、その通りの大きさで復元したものである。

横田稲田の土居安部家の屋敷は、それにくらべてはるかに大きく、家屋は別として屋敷の遺構は当時の姿を残して現存している。土居(土塁)・堀の一部そして、北方の土手につらなる十本の松の巨木の並木、その先端に続く石塔山(墓地)、これらが抱えこむ水田(当時の馬乗馬場)、西方の屋敷入口にある的免(まとめ)など、壮大な遺跡は、代官として下国するとともに、地方開拓につくした土豪の力の象徴である。徳川末期に至るまで、下郡格の家として幾人もの下郡を出し、郡内旧家の中心として、三大たたら師(絲原・桜井・卜蔵)の成長するまでは勿論、その後も郡内に重きをなしていた。あらましは「横田町誌」に記述してあるが、この連載によって詳述する。東京の文部省国文学資料館には五十余冊に及ぶ当家の古文書がある。まだ解明すべきことが多いが、後学の士にまかせて、現段階までのものを紹介する。

現屋敷の構成が開拓の進展と関係があったのであるが、武士(代官)→土豪(代官)→土豪→再び武士と成長し、この間中世のたたら製鉄にもたずさわり、鉄砲出現の時代の尼子の家臣の一人として、自らの防衛上の必要も十分に加味された屋敷である。

「黄金の日々」

一月からテレビションの番組に登場し、話題を提供しているこの物語と、当地が関連があるではないかということを、強く感ずるのは幾つかの史実が存するからである。

筆者の旅の計画の一つであった琵琶湖巡りを昨秋行うことができた。それには幾つもねらいがあった。安土城をめぐる佐々木庄を訪ね、近江源氏(宇多源氏の一つ)の拠点をみ、出雲初代守護として下った佐々木氏の発生地佐々木庄をしらべ、出雲の中世史に新しい視点を加えること。二つめはその一族であって尼子庄に成長し、のち出雲に下って中国十一ケ国の太守となった尼子氏の発生地をみること。

第三には天正初年三沢氏の一族が移り住んだ近江国北部の坂田、犬上両郡の風土を探ること第四には、出雲→日本海→敦賀→山越え→琵琶湖→大津→山越え京都の道筋を眺めること。そして湖の東北岸に近い国友鉄砲鍛冶の遺跡をみることであった。駆けあしではあったが、事前研究の上であったので、どうやら一応の目的は達した。

国友の鉄砲鍛冶

国友(滋賀県長浜市国友町)鍛冶の起りは、天文十八年(一五四九)織田信長が鉄炮師橋本一巴を通じて、六匁玉火縄銃五百挺を発注し、翌年一月納入をうけたという記録がはじめてであるという。

(写真説明四頁に)

それより六年前の天文十二年八月、九州南方の種子島に火縄銃がポルトガル船によって伝来している。しかし今日の研究によれば、鉄砲のはじめはそれより七十余年前の文正元年や、応仁の乱などに鉄炮が用いられたという記録があるから、既に中国系小銅砲が伝っていて、僧兵や土豪や、侍や武将の間に熟知されて、実用性もすでに認められていた。そこへ種子島即ち火縄銃が渡来し国産化し、新旧鉄炮の交替期がはじまり、それが国友鍛冶の起ったころであろうとなっている。

織田信長が五百挺の製作を命じた時には十九軒の鍛冶屋があり、関ケ原の戦(一六〇〇)後家康の統制下になると。四十四軒あってほかに台師、金具師十六軒などが、姉川を渡る街頭筋に軒をつらね、わが国の中心であったという。

国友の鉄

説明にあたられた市の文化財専門委員に、こゝの鉄の原産地はどこであろうかと質問すると、直に「出雲」であると答えられ、姉川の上流に「出雲場」をいうところがあり、小さい平地

のある土地であるが、出雲人の開拓地といわれており、ヤマタノオロチをまつる神社が多いから、製鉄師の来住を示すものであろうといわれているとのことであった。

奈良時代の前に近江国には大津京という都があった。それもこゝに古代製鉄の一つの中心があったからと言われている。中世以降は日本の砂鉄製錬が進歩し、良質の鉄や鋼が、中国地方特に山陰側で産するようになると、各地の需要を満し、奥出雲の生産は増加の一歩をたどることになった。(いずれ製鉄史の連載の折に触れる考えである。)

国友鍛冶の使用する鉄鋼は出雲産であること、仙洞御料所代官として、年貢(鉄)上納のための公用で上洛する安部氏の通路がこの附近であること。公用に秘かに加えて私用の鉄が運ばれていたことも相像に難くない。

中世の安部氏と国友鉄砲鍛冶・織田信長そして鉄を押さえるための中国進出、信長の尼子懐柔、三沢氏の信長との密約など今まで書かれなかったこの地の鉄とのかゝわりを、探究するのも興味の多いことである。

安部氏

十三世紀前半の南北時代、後醍醐天皇の元徳元年(一、三三〇)、石清水八幡宮領横田庄の一部(八川方面)が仙洞御料所(上皇領)となり、その代官として下ったのが、安部野又六泰長であって、大八川代畑に住んだ。

子又兵衛泰宣が代官をつぎ、三代はその子又五郎宣時がついだ。この間永徳(北)二年(一三八一)より、出雲国守護山名満幸の仙洞御料所押領によってしばらく職名だけであったが、明徳の乱後の明徳元年(一、三九〇)より、再び代官職を執行した。その後長い間続いた石清水八幡宮領はすべて仙洞御所領となって終止符を打ったので、(一部は朝廷の菩提所である泉涌寺及び雲竜院にも分けられた)

永享二年(一、四二九)代官屋敷も領内の中心に移すことになり稲田の地を選んだ。時に宣時の子又治郎は十六才であったが、稲田に移りすみ大八川代畑に対し稲田代畑と称した。やがて又治郎は「安部野」を「安部」と改姓し安部宣豊として代官職をつぎ、永正六年(一、五〇九)九十六才の長寿を終えたが、この時代は第三期で家勢としては発展時代であった。

年貢上納のために代官が自ら上洛することもあった。文明年間の京都山科郷ほか備中、備前に所領をもった羽林家のくわしい日記をみるとその状況がわかる。(言国郷記)

宣豊の壮年時代は応仁の乱以前であって、このころ京都で勢をもっていたのは京極氏であった。京極氏は近江北半国、出雲隠岐の守護職をもっていた。これと対立していたのが、近江南半国ほかをもつ六角氏であった。

ともに近江源氏佐々木氏の一門で、京都の京極と六角とに住んでいたからこう呼んだ。応仁の乱には両者の対立は細川、山名の対立にもかかわり、京極は東軍細川方で六角は西軍山名方で戦った。京極氏は仙洞御所近くの京極に住んだし、細川方が仙洞御所に厚意をよせていた。

従って安部氏は仙洞御料所の代官の立場の上に、仙洞御所方の守護としての京極氏の庇護も加えてうけていたのであることは推察できるところである。奥出雲から物資をもって上洛する筋は、日本海を通って敦賀、琵琶湖大津、京都と通ずるものであった。この道は京極氏の本貴地にあたる。

十五世紀半ばの(応仁の乱以前)或る年(代官宣豊の壮年時)

例によって日本海を渡る時、大風に出あい難行をしたことがあった。その折かねてから上洛の度に参拝していた京都伏見の稲荷大明神を念じたところ、この難を無事にすごして公用を完了することができた。

この稲荷大明神は十世紀より朝廷の尊敬が極めて厚くなっていた。もとは農業神であったが産業神としての信仰を広まっていた(近世においては町人の発生とともに商業神として急速に全国各地に勧請された)。公然とではないが、代官も上納公用のかたわら、商も心掛けていたのに違いない。ひそかにその成功をこの宮に祈念していたであろう。その時に安全に公用を果すことが出来たのはこの宮の御加護によるものであり、御霊験のあらたなことも話したことが、上皇の御耳にも入り、その口添えによって分霊を勧請することになった。その宮が今日の稲田代畑の上手にある稲荷神社である。

五代は治良兵衛近豊であって代官職を継ぎ稲田に住んだが、戦国動乱の世の中のため、三沢為忠が上皇の命をうけて、永正六年(一、五〇九)椹田藤ケ瀬城に移って代官職についたので、代官を退いた。享録五年為忠の子為国が尼子氏の攻撃をうけて捕えられ落城すると、二十三年振り再び近豊は代官に復した。そして十二年代官職にあったが、中国に君臨しようと四周に兵を進めている尼子氏にとって、新旧鉄砲の交代期の鉄獲保の上からと、またとかく離反しがちな三沢氏を押さえる上から、横田に家臣を送り込んだのである。時は天文十二年である。

横田庄内へ総代官兼中心地中村の代官として森脇家貞、竹崎には河本、大呂には河制、蔵屋には羽鳥、原口へは本田家吉、下横田には大石(八川はこのころは高野山の山内氏の領地でその代官がいた)を配置した。強力な布石であった。砂鉄採取も鉄穴堀りから鉄穴流しに変りはじめたころである。原口、蔵屋の水田が開拓されたのである。

—次頁四段へ—

岩屋寺物語①

第二次再興に力のあった 傑僧快円（上）

明徳の乱

奥出雲特に横田の歴史を明らかにするのに、忘れてはならないのは明徳の乱である。快円もこの明徳の乱の結果によって、この地にあらわれたのである。

足利三代将軍義満（金閣寺をつくる）の時である。義満は細川頼之の補佐によって、着々と諸将の勢力削減に努力し、足利幕府の基礎の充実に向っていた。

時たま全国の六分の一の領国を一族でもつ山名家で、時氏（このころは横田庄に勢力を及ぼしていたが、横領はしていなかった）の死後、一族内が二派に分れて内紛が起った。義満は山名氏の勢力削除によき機至れりとみて、一方の陸奥守氏清とその婿播摩守満幸をして、対抗する山名宮内少輔時熙、伊豆守氏幸一派を討たしめたのである。

氏清は義満に今後時熙一派がたとえ嘆願に来ることがあっても、将軍家においては之に応じないことを確約させて、軍を但馬に進めて時熙を討ち破ったのである。しかし密かに上洛した時熙一派が、頼之を頼って義満に、氏清、満幸を讒訴（ざんそ）した。これを義満がとりあげようとする風が見えはじめたので、氏清、満幸は将軍家を敵とせざるを得ないことになった。

これより先、横田庄の後円融院御領（仙洞御所領）を押妨し義満の怒りに触れていた満幸は遂に舅（しゅうと）・氏清を和泉国に訪ねて、旗挙げの事を勧めて其の同意を得た。氏清また兄の義理を紀伊に訪ねて同意せしめ、明徳二年（一、三九〇）十二月下旬を期して、三人共に旗を挙げ氏清、満幸は兵を京都に進めたのである。しかし戦はわずかに一日で終り、内野の合戦に山名方はもろくも大敗し、氏清は戦死し、満幸は一度は出雲に逃れたが、応永元年（一、三九四）春誅せられた。義理は一度は逃れ、のち救を乞うたが義満は許さず、義理は再び国を逃れでて淡路島の由良の興国寺に入って出家したが、その後行方知れずとなった。かくて乱は全く平定した。

この十年間、横田庄代官の安部氏は職を退き、庄内の支配は山名満幸の家臣石原氏の手に移った。この戦に三沢三代尾張守為忠は山名方で、西国の兵二千余騎とともに内野で戦い討死した。のち出雲において満幸の残党として戦った、卜蔵三代吉太郎（竹崎卜蔵の祖）。馬木地頭馬木満綱も討死した。山名の代官石原氏は地元百姓に攻められ敗走し、のち三沢の三沢氏の家臣としてかくまわれることになった。安部氏は代官にかえり咲いたのである。

日本の戦記物語としては、保元、平治、平家の三物語に、太平記を加えて代表作とされているが、この明徳の乱を記した「明徳記」はこれらとともに、決して見のがされるべきでないという見方もある。明徳記の文学的意味は、平家物語のもつ語物としての抒情性と、太平記のもつ現実主義的な文学基調との、合流であるともいわれている。この明徳記の中に数々の哀話が

このころの開拓であることは、原口、稲田、蔵屋の地名や水田の品等を検地から推理すると結論づけられる。鉄穴流しのあとが、畑となり、そして池の造成によって水田となっていったのである。そして下流になる横田の盆地が（現在の横田町が沼地に土砂が推積して）出現したのである。（提防工事、建築工事の折の地質調査や現場の土質を検討して分布図をつくるとそれが裏付けられる）そして尼子家臣の駐留時代に横田の町が出現したのである。そしてこの地（当時は下中村という）へ中村（今日の五反田方面）からの移住者を中心に、その方面にあったと推定される伊賀多気神社が現在地に移され、再興され氏神となったのである。棟札の初見は天文二十年再興のものである。

近豊は天文七年死亡し、六代はその子源太左衛門泰豊であった。成長するや器量にすぐれ骨柄たくましく、森脇家貞のすすめによって、尼子の家臣として奉公することになった。時に二十二才（弘治元、五五五）で、稲田一七〇石、乃木村三二〇石、計五〇〇石を知行した。土豪武士として再び登場することになった。その後三沢氏とともに永録六年尼子氏の横田退去を機に毛利方に従うことになり、戦功も重ねた。家臣を養成するために鉄砲を伴う戦いに備えるため、また家勢を誇示するためにも、代畑の地の不適当なるによって現在地、稲田台地の中心に堀をつくり、土居を築いて屋敷を移した。時に源太（通俗名）三十二才永録十年（一、五六七）のことであった。第四期の上昇発展の時代である。最近放映される「黄金の日々」の時代のころである。

やがて天正七年この庄の重要視のあらわれとして、代官は京都の清華（公卿の上級）の一人菊亭晴季が任ぜられ、動乱の中でも厳として横田庄は確保された。

源太左衛門は天正十年、中国征覇をめざす織田氏と、これを許さじとする毛利氏との最初の戦い、備中高松城攻めに、三沢為虎の下で参加した（五十一才）。朝鮮出兵にも加わり、初代藩主堀尾吉晴にも仕えた。その居所がこの土居屋敷である。戦のみでなく、開拓それに伴う用水工事にも並々ならぬ手腕もあらわしている。

（次号へ）

ある。その一つに「山名氏家の家僕家喜九郎景政の妻の剃髪」がある。この家喜九郎の残した子孫が快円である。しばらく明徳記によって、この哀話をひもとくことにする。

家喜九郎の事

十二月二十九日内野の一隅にある八幡宮の前に集った、山名氏家の若党の中で、わけても山口五郎、森下六郎、旗津兵庫、鹿野六郎、小鴨新三郎、家喜九郎の六人は、お互い心に誓いあうことが同じであった。中でも九郎がいうのには、「京に上って久しくなる。御所様の御旗の下にあるべきなのに、主君氏家が敵対されたので、住みなれた京へ今度は攻めのぼることになった。勝っても負けても逆徒の汚名を蒙ることは明らかで、人にまみえる面目がない。このうち一人でも討死にしたら、ほかの五人皆共に枕をならべてあの世に行こう」と。ともに神前の鰐口をならし、神水を呑んで契約した。

二条大宮の二度目の合戦で、五人は各所で討死して、九郎が一人残った。九郎の中間が話すのには、「山口殿の中間（ちゅうげん ー 雑卒）の話では、昨日の契約の如く五人は一ケ所にて討死された」と。これを聞いた九郎は「なんとわが身の不覚さよ」と二条大宮へ馳けいで、「山名中務大輔氏家の兵家喜九郎景政と申すものなり、われと思わん人は組んで勝負しよう」と言って、敵方の赤松勢の真中へかけ入った。九郎の馬は二ケ所斬られその上矢四筋までたてられたので、もろ膝折って倒れそのまま死んだ。九郎も深手浅手五、六ケ所も負ったので、太刀を杖にして「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と念仏申して、大宮のかたへしづしづと歩むところ、山名宮内少輔（時熙のことで敵方）の兵がこれをとり囲んで首をはねた。その左の鬢（びん）に少し切った跡があったので、人々あやしんだところ、最後まで付いていた九郎の中間が「二十九日八幡より九郎殿が女房へ送った手紙の中へ、鬢のかみを一ふさ切って巻きこめて送った」と話した。

この女房はもと姫子で東洞院の思いものであったが、五年前に九郎がなれそめ、乱が起こると九郎の母とともに、四条の道場のあたりに忍び住いをさせていた。

そこへ九郎が手紙を届けた。それを女房があけてみると、中に心にかかる言葉があった。「もし我が今度討死するとも、かるがるしくは我との交りを語りたもうな。さてこそ草のかげでうれしく思う」である。形見の文を九郎の母とともに読みては泣き、泣いては読んだが、「いくら好色の身でも、苔の下までともにと契った仲である。弓矢の道なれば女はともに死ねない。あなたがいかになろうと、もう私は好色の身ではない。さまをかえしほかの袖による心はない。まだこの世にいます間にこの心を伝えたい」とて、自ら髪をおし切り十九才の年のくれ、使の前にて尼となりこき墨衣にかえ、返事はたゞ次の歌一つをのみしるして、切りたる水々しい黒髪を添えて使にことづけた。

一すぢに思いきりつつくろかみの　かかるみだれの世をなげくかな。

この様子を聞いて九郎は「あまりの心の苦しさにあやまりを書いた。思い残すことはない心安く討死すべし」とて、女房の片身と歌を肌に守り入れて、次の日討死したのは哀なる事であった。

この子孫が快円

永正十一年尼子経久が大挙して藤ケ瀬城に三沢為忠を攻めたが陥落できず、これに味方した岩屋寺に火を放って引揚げた。全山焼失し院主岩本坊真海も死去するという不幸が重なった。

その後六年たった十七年山内の来福寺から快円が大林坊院主となった。大林坊院主は全山の院主で、二十一坊をすべる立場であった。快円三十八才であった。「快円日記」によれば、父は家喜藤兵衛、母は佐藤彦右衛門の嫡女で、藤兵衛の祖は明徳の乱の時但馬を本貫とし出雲、隠岐を領する山名満幸の家臣で山名氏家に属して戦い討死した家喜九郎である。乱後その子孫は生国因幡へ帰らず、流浪して山名の一族、出雲の馬木郷の馬来上野守を頼ってこゝに住んだ。のち尼子に属した。藤兵衛は天文九年安芸吉田合戦で討死した。母方の父は湯野（三処郷湯野ー今の亀嵩か）の出身で、楽ス山（欄外註に「大東トカ」とある）で討死している。

快円のくわしい生い立ち、入山の動機等については明らかでないが、東奔西走して岩屋寺の復興に力をつくし、北条氏時代に中興僧として活躍した祐円につぐ傑僧として名を留めている。

多くの文書記録でその業績を明らかにすることができる。二十年に及ぶ努力によって、岩屋寺は盛時の堂宇を復元することができたのである。

「たたら製鉄早わかり⑥」「奥出雲地域史研究資料②」は次号に掲載。

一頁写真は土居・安部家正面で、前の土塁の右端には、側面の土塁の外側に堀が残っている。左端の松に続いて松並木がある。

おしらせ

三沢氏の正しい系図や文書の発見に伴い、根本的訂正を「山陰史談」の十四号から数回連載される予定。

奥出雲文庫1

奥出雲の砂鉄製錬＝歴史編

今秋十一月初旬発行予定

会員配布一部百円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第35号
3月号
昭和53. 3. 4
奥出雲文化協会

安部氏の出自

稲田の土居安部家②

仙洞御所御料所とは

仙洞とは上皇の隠棲の御所で仙院ともいった。九世紀初頭（809）に平城上皇がはじめて、上皇の御所と宮殿とを分けてからはじまった。院政時代に入ると天下の政令が、こゝから出された。場所は一定していなかったらしく、平安末には（後白河上皇院政時代）、権大納言藤原邦綱宅があてられたことがある。御料所（荘園）として後鳥羽上皇時代の承久の乱前に、和泉、紀伊両国から献上されたという記録があるという。現在京都御所の一角にある仙洞御所林泉は寛永五年（1628）後水尾上皇の仙洞御所として建てられた最後の御所跡で、安政の火災以後再建されずじまいだった。

横田庄と仙洞御所

石清水八幡宮領であったが、文永八年ころは、伯耆守護もかねた北条時輔（六波羅南探題）の支配が横田庄に及んでいた。北条氏は朝廷の持明院流の皇統を、どちらかというと支持した。

正和年中（1312～1316）には幕府に縁の深い、鎌倉鶴ケ岡八幡宮、ついで京都六波羅密寺が、それぞれ火災にあったあとの復興造営のための御料所とされた。十四世紀のはじめにかけて三回にわたり、時輔の実母妙音禅尼（時頼の室）は庄内の土地を岩屋寺に寄進した。

文保元年の岩屋寺文書によれば、八幡宮横田庄内の一部であろうか、内裏御料所となっている。花園天皇、後伏見上皇（何れも持明院統）の時代である。翌二年には後醍醐天皇が即位（上皇もかわり、ともに大覚寺統）し、記念に石清水の横田庄内から土地を、岩屋寺へ寄進した。四年后の元亨元年（1321）天皇は院政を廃止して親政を行い、記録所を設け荘園の整理に乗り出した。ところが正中の乱（1324）が起って、天皇の政権も混沌として来た。この不安な時代に持明院統としては横田庄を確保して置きたいと考えたであろう。仙洞御料所代官として、元徳二年（1329）安部野氏（のち安部）を差向けた。岩屋寺は真言密教当山派に属していた。武家派であり持明院統に傾いていた。

横田庄についてはこの後のことを五月号―地域史のしるべ④の横田庄（下）と安部氏③―で、四月号では横田庄（上）で初期の状況をのべることにしている。

安部氏の祖小笠原氏

横田文化25号の地域史のしるべ①清和源氏を参照し

清和源氏で多田源氏の祖満仲の末子頼信（河内源氏の祖）の孫八幡太郎義家の末弟義光の二人の子が、東国遠征の功によって、長子が常陸に住んで（常陸源氏の祖）佐竹といい、次子義清は甲斐に住んで武田といった（甲斐源氏の祖）。その三子遠光は文治元年の功によって信濃守護となり、甲斐加賀美に住んで加賀美と称した。その次子長清が隣接の地小笠原に分れて小笠原と称した。長清は承久の乱に北条方で中山道の大将として武田氏とともに兵を進め軍功をあげて阿波の守護職も得た。この時家臣として参加したのが、飯島氏（三沢氏の祖）、諏訪部氏（三刀屋氏）ほかである。三沢氏は清和源氏満仲の末弟満快の末孫にあたる。（詳細　山陰談14号から連載中）――――

長清の子時長は信濃国伴野を得て住み伴野を称した。その二男長朝は安部野といった。―別な系図では阿刀部ともいう――京に出て院の蔵人所に仕え非蔵人の役になり、その二男朝時も非蔵人となった。その二男が安部野泰長である。これが仙洞御料所横田庄の初代代官で、大八川の代畑に住んだ。横田庄は岩屋寺を荘司とする石清水八幡宮の勢力が、強く温存されていたからである。

安部野が安部となるのは前号記述のように四代宣豊の時で、伏見稲荷に立願したことから、野の字をはずしたのである。

院司、非蔵人とは

蔵人所とは。蔵人は皇室の文書や道具類を納める倉の管理が職務であったが、蔵人所設置によって、機密文書の保管、詔勅の伝宣をはじめ重要な仕事をすることになった。もとは宮中だけであったが、院、東宮、摂関家などにも置かれた。蔵人所には別当と頭と五位蔵人、六位蔵人、非蔵人、雑色、所衆、出納その他の職員がいた。六位蔵人からが公事に奉行した。非蔵人とは蔵人の如くで蔵人にあらざる役という意味で、蔵人所に出入りするが奉行せず、六位蔵人に欠員があればこの中からえらばれた。これも六位の家柄の子弟から選ばれたのである。

院の蔵人所に出仕していた安部野氏が院（仙洞御所）の御料所横田庄の初代の代官に選ばれて赴任したのは、家格と役職の上から、先に横田庄へ下って（一五〇年前）八幡宮荘司として土着している。清和源氏多田源氏末の、かっての院・北面の武士小池（杠）氏に対するのに、適当であったからに違いない。

政治・土地・荘園制度変遷年表

世紀	中央 時代	政治	土地・荘園	時代	事項	奥出雲 事項
6	大和時代 飛鳥	大和朝廷		屯田・田荘制	氏姓制度による政治 （大和朝廷の氏族が最大） 氏族間の争い激し 大王（天皇）中心の国家体制へ	
600		593 聖徳太子	大王（天皇）—伴部・田部・曲部・部民 屯倉 田荘			
7	白鳳	646 大化改新			出雲風土記（724）	郡司（蝮部臣、出雲臣、品治部）
700		律令政治	公地公民 班田収授法 口分田 位田・功田・賜田・職田・寺田・社田	班田制	中央集権国家へ（国司・郡司も） 律令政治の基礎確立	
8	奈良時代		開墾の奨励 開墾地増加		大宝律令ほか 租、庸、調の税制	
800			723 三世一身法 743 墾田永代私有令		都は京都へ	
9	平安時代		荘園 自墾地系荘園	荘園制	荘園整理令　809 平城天皇 はじめて仙洞御所 藤原氏高官独占、荘園所有	
900		摂関政治				
10			寄進地系荘園おもに摂関家へ不輸、不入権を		摂関職独占、政治の私物化	石清水八幡宮荘園をもちはじめる
1,000		藤原氏全盛	名田を名主が耕作			
11			保護 本所・領家 → 開発領主 ← 荘官 → 荘民・名主ほか 寄進　年貢ほか		地方政治の混乱 武士の発生 白河上皇　院政をはじめる（専制政治）	
1089		院政	名主が武装し武士化			
1,100						
12		平氏政権			北面の武士 鳥羽上皇の院政 （保元、平治の乱）平氏の中央進出 後白河法皇の院政　貴族化 源頼朝征夷大将軍　滅亡	石清水八幡宮横田別宮 横田兵ヱ尉維行 頼朝、横田庄安堵　北面の武士　杠氏横田へ
1,200	鎌倉時代	鎌倉幕府	地方の公領荘園を　国ごとに 地頭　守護			
13		後鳥羽上皇 承久の乱 執権政治	荘園の侵蝕 地頭請 地下中分 地頭・地侍を従者に	守護大名領国制	幕府、守護、地頭（封建制へ） 後鳥羽上皇の院政 武家、公家の二重支配 （院の政権回復失敗）	新補地頭（三沢、三刀屋氏） 横田庄下地中分（三処氏と石清水八幡宮） 北条時輔領（横田庄）
1,300		1334 建武新政				
14	室町時代 南北朝時代	南北朝	守護大名領国		後醍醐天皇親政　貴族政治復活 武家政治の再開（足利） 京都と吉野 ← 分裂 ← 対立 南北朝合一	三沢氏三沢へ（もと飯島氏） 仙洞御所に荘園一部ゆずらる（1331） △院司安部氏代官として下る 横田庄すべて仙洞御所へ のち南北朝合体により禁裡御料所へ
1,400		室町幕府				
15	戦国時代	守護大名 応仁の乱 戦国大名	地侍を従者に　守護請 荘園の侵略　半済 郷村（農民の自営へ）	戦国大名領国制	守護大名 ┌ 弱い間幕府を利用 └ 強くなると独立 戦国大名　領地拡大戦（尼子、毛利）	三沢氏漸く横田庄へ入る △安部氏稲田へ（1430） ○杠氏神子別当職 （大権ともいう）
1,500			戦国大名領国 応仁の乱より			
16	織豊時代	織豊政権	大名知行制　検地 土地給与 — 知行地 直轄地	太閤検地	室町幕府滅亡　戦国時代 織田信長 豊臣秀吉	禁裡御所領としておそらく最後（1589）

横田地域史のしるべ②

荘園と院政

石清水八幡宮横田庄と仙洞御料所横田庄

横田の歴史には日本の歴史の縮図を見る思いがする。とくに日本歴史の基礎となる荘園制度については、その初期から崩壊消滅するまでが横田にあらわれている。またもう一つ院政が横田に大きい基盤をもっていたということである。前頁の年表をみながら横田の歴史の流れを知るとともに、日本歴史の基礎知識を得ていただきたい。年表は中学生用の歴史年表（京都大学名誉教授中世史家小葉田淳博士監修の新学社刊）を参考にして作成したものである。文中（数字）は年表中の世紀をあらわすので、その世紀を左右にみながら読んでほしい。

大化の改新までの氏姓制度

⑥ 世紀は大和を中心に諸豪族が私有地をもち、お互激しい氏族の生存競争をしていた。その中で最強の氏族が諸豪族の連合政権としてあった。大和朝廷である。仏教をとり入れてその中心を固めて行ったのが、その朝廷氏族の聖徳太子であった。

やがて出雲風土記が出来た。当時の出雲の姿をそこに見ることができる。仁多郡には三人の豪族出身の郡司がおり、屯倉（みやけ）は大呂、三沢、高田にあって、各豪族はここへ国へ納める年貢米を収蔵した。

大化の改新

⑦ 世紀、大化の改新で私有されていた。土地人民はすべて公地、公民となり、班田収授法によって、条件によって各人に口分田として与えられた。そのほか功労や役職による田や、神社寺院の田が与えられていた。

⑧ 大宝律令が定まって、国の中央地方の組織やきまりが定まったが、貧しくて浪人も増加した。土地の開墾が奨励され開墾地も増してきた。そして既設の池を利用する開墾地は一代限り、池を新設して開墾した土地は、子・孫・曾孫まで所有できる法律（三世一身法）もできた。やがて子々孫々まで私有できる「墾田永代私有令」も定められたので、大化の改新の理想公地公民はくずれはじめた。

⑨ 世紀のはじめ能力のある寺社、貴族、地方官そして有力農民が、神田、寺田、職田などを私有化し、それを中心に開墾して拡げて私有したり、力の弱い農民が放棄した口分田や、既墾地を買いあつめて庄園（自墾田地系荘園）とし、浪人となった農民を労働者として使した——初期荘園制——。荘とはもと貴族の別荘の荘で事務所を意味したが、のちその土地を荘園と称するようになった。（庄園とは初期のもの、荘園とは後期の寄進地系のものをいう）

摂関政治

⑩ 世紀には豪族は、天皇の政治を補佐する摂政関白の職を利用して、権力を仲張しはじめた。藤原氏が高官を独占し、その力を用いて荘園所有を増した。

さらに税金の免除をうけるため国の証明や（官省符荘）、国司の証明（国免荘）を得て調庸の拒否や、不課の承認を国司に迫り、いよいよ貧富の差が大きくなった。そこで延喜の荘園整理令が出されたが（以上平安初期）、効果はあらわれず、ますます藤原氏は摂関職を独占し、政治の私物化へ向って進んだ。そして皇室の田（勅旨田）や寺田、神田は不輸祖（免税地）であったので、その権利も受けるようになった。平安中期になると、地方豪族（開発領主）は中央で権力の強い摂関家藤原氏ほかの権門へ土地を（領主権）寄進し、いくらかの上納をするかわり、国衙（国司のいる国庁）からの年貢の徴収をのがれた上に、領主権を保護してもらうようになった（寄進地系荘園）。これが摂関家と結んだ中央の神社、寺院にも波及しはじめた。そして地方豪族は所有地の不輸権（税を免除される）・不入権（国の役人の立入を拒否する権利——これが警察裁判権までも自分のものとしてゆくようになり、完全な私有地となる）を得るようになった。

寄進をうけた貴族寺社を本所・領家といい、寄進者は開発領主か大名主であったが、荘園をとりしまる荘官として、荘内の荘民を管理し、年貢、公事、夫役も課した。開発領主、大名主の下の荘園内は、各名田（名のついた田）に分れて、各名主が作人、下人を使って耕作した。こうした荘園が急速に増加し、政治を顧みない藤原氏の全盛は地方政治の混乱を急速に増していった。そこで荘園内の各名主は、治安の乱れに対処するため財政的余裕をもって浪人をかかえて武装化し、自らを保護しながら土地の拡張もはじめた。

武士の起りである。

院政のはじまり

⑪ ここで後三条天皇は、記録所を設けて、荘園の整理に手をつけたが藤原氏の圧力で効果があがらなかった。そこで白河天皇は摂関政治の外で、藤原氏の圧力を避けて政治をしようと、一〇六八年位を堀川天皇に譲り、上皇（太上天皇）として専政的政務決裁をはじめた。後三条天皇の遺志をついで、藤原氏の権力を抑圧しようとした。これは摂関政治における藤原氏の専横とその政治の無力にあきたらず新らしい政権をまつ在京受領層や地方の荘園領主の盛上りによる動きでもあった。

受領とは 国毎に置かれた国

司は行政官であり徴税官であった。地方の乱れによって平安時代になると東国地方の国司は任期が満ちても土着し、勢力を拡張し子孫は武士化して武士国の棟梁になった（平将門らがその例で、これらの中には土地を寄進して荘官になったり、国衙の役人や追捕史、押領史という治安警察官になったり、都に出て検排違（警察官）になった。やがてまた源氏もこの道を歩みはじめた）

近畿近国の国司は赴任せず（遥任国司）、国司のうち徴税吏的なものを受領といったが

これになっても赴任せず、在京して代官を目代として遣し、その収入で富裕な生活をし、一方地盤をつくり、国衙領を荘園化して、経済力も政治力も加えていった。

院庁は上皇の御所即ち仙洞御所に置かれ、役人には院別当、執事、年預、判官代、主典代、院蔵人所（蔵人、非蔵人、所衆）北面武士、西面武士のほか一〇の役があった。その中心が別当で、公家、寺、社の荘園を国衙領へと整理してゆく過程で、受領層が、この国衙領を地盤として進出した。別当も当初の五人から二〇人と増し、院政は受領層に握られて行くことになった。

前期院政時代は

⑫ 世紀の白河、鳥羽両院の七一年間で、天皇と院、摂関家（上級公家）と院近臣との対立が深くなっていった。荘園整理に反対する荘園領主の一翼をになう社寺勢力が次第に反対するようになった。そこで院政の政治的権力を効果的ならしめるため北面の武士が院御所の北面の場所に設けられ、諸国の武士が警固にあたり、武士が院方の一機関となり、次第に数がふえ公家政権に勢力をはるようになった。

横田氏　仁多郡司の末孫の豪族と思われる。京都御所の警固に出て兵衛府に仕え、一二世紀初め在庁したこのような官人が荘園の荘官になれぬようになったかわりに、在庁時の職名を世襲して名乗れるようになった。横田兵衛尉維行という。横田氏がその所有地を石清水八幡宮に寄進したのである（11～12世紀）

小池氏（のちの杠氏）は清和源氏の末流で、北面の武士として院庁に仕えていた。（12世紀）

安部氏は院庁の蔵人所の役人非蔵人であった。（14世紀）

源平対立から源氏時代

武士が勢力を伸ばすと源平両氏の勢力争いが起り、保元、平治の乱を経て、平氏が藤原氏にかわって政権を握り、武家政権を樹立した。しかし平氏も貴族化した。院政も後期院政時代に入り（後白河、後鳥羽上皇時代）、後白河法皇の政治力は、源氏の利用となり、平氏は滅亡に追いやられたが、源頼朝は後白河法皇を動かし、征夷大将軍となり鎌倉に幕府を開き、武家政権を確立した。

この時頼朝は源氏の氏神としていた石清水八幡宮の荘園を安堵した。出雲では横田庄をはじめ七ケ所が保護された。そして建久七年小池刑部は御神体を奉じて横田庄に下った。北面の武士として源平合戦にも功績をたてたのであろう。横田氏は、平氏方の一大将として一の谷の合戦に参加した。平氏敗れたのち横田氏は横田において勢力を保持していた。小池氏が横田に来住してめとった妻は、横田氏一門の娘であった。神社はまず八川の現在の八幡宮に置かれた。横田は源氏勢力の下に服した。出雲の守護は近江源氏の佐々木氏であった。

北条氏時代

北条氏が実権を掌握すると、後白河法皇三十四年の院政のあとをついだ後鳥羽上皇の時代へ移った。貴族勢力と連合して院政権を固めた上皇は、武家政権と対立しはじめた。各所に武家公家の二重支配が起り、承久の乱となった。

⑬ 乱後、北条氏は三上皇を遠島に配流し、三〇〇〇余ケ所の領地を没収して、多くの関東武士や中部山岳地の武士に与えて新補地頭とした。その地は近畿、中国に多かった。院政は実質的に力を失い、徳川初期まで続いたが、その後は形式的に断続して置かれ、徳川末期の天保一一年に全く消滅した。

海潮へ中沢氏（のち牛尾氏）三刀屋へ諏訪部氏（三刀屋氏）三沢へ飯島氏（三沢氏）が地頭として入った。　これについては山陰史談14号から連載中ー

承久の乱後しばらくして三処郷地頭（布勢、亀嵩、比田）三処氏が横田庄をおかし、三十年の争いの結果、八幡宮領を半分領有（下地中分）した。まもなく北条時輔が横田庄を支配すると、その母妙音禅尼によって八幡宮は八川から馬場へ移された。

岩屋寺が荘官として力をもち小池氏は神子別当（祭事を司る荘官）へと後退した。

南北朝時代とその後

⑭ 後醍醐天皇から南北朝時代になると横田は持明院統（北朝系）の御料所となり、仙洞御料所と呼ばれた。岩屋寺は北朝系にくみした。元徳二年その代官として安部野氏が下ってきた。

一四世紀末に明徳の乱が起きた。次第に戦乱の時代となり、仁多西部に地頭として地盤を固めた三沢氏に院宜が下り、三沢遠江守為忠は藤ケ瀬に移城した。

三沢氏は地頭請として横田庄内から一定の貢納を御所に対して請負うかたちで、横田庄の代官をかねた。尼子時代、毛利時代となっても、横田庄は禁裡御料所（このころは南北朝合体し持明院統が皇位についたので、天皇の御料所として続いていた）として、地方武士の課当はうけず、量の増減はあったが、朝廷への貢納を続けた。天正一七年三沢氏が安芸へ去った翌年まで貢納したと、京都の記録（御湯殿上日記）にある。天正一九年毛利氏の領地となり（大名地行制が検地によって実施ー近世大名）全く荘園制は終った。

会員配布一部百円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第36号
4月号
昭和53.4.1
奥出雲文化協会

横田町古文書庫収蔵文書解説①

崇りの神さん　馬場の秋山善神

―若月家古代大成記から―

「若月家古代大成」一巻

この巻物一巻は、若月家古代大成記の原本で、下阿井村（仁多町大字下阿井）の旧家若月家所蔵のものである。大成記はこれを借用して筆者して和綴じにしたもので、安政四丁己二月吉日、仝村岩田虎次郎源信任、十五才と署名がしてある。その後この書写本が仝家岩田栄十郎から、某に売られた。それが松江の古本屋にまわり、昭和三十一年横田町内某氏の買求めるところとなったものである。記録した年の判明するものは、二十四話のうち十七話で、古いものは元禄十二年（1,600）が最も多く、最も新らしいものは明和四年（1,767）である。諸記録から、いつのころか、書き写したもののようである。郡内の神社、寺院、郡役人、尼子、三沢両氏に関するものがある。他の古文書とあわせ検討してみると、真実性が高い。この中の話を一つとりあげてその真実性を追求することとする。

武士　秋山光茂討たれること

（写本は片仮名交り階書である。）

『弘治元年に毛利元就、吉川元春、小早川隆景、出雲富田の滝山の城を攻て、能義郡比田と云う所を通り、布部の中山に陣を取り、富田よりは山中鹿之助布部の上り原に山城を構へ出張す。富田中山の坂の曲りに人数を百人宛立て、毛利方より攻め来れば切崩し、両川（筆者註・小早川・吉川のこと）も不得進む富田城強尼子自ら出るに依りて毛利も敗軍、其時毛利の侍に秋山隼人光茂と云し侍　主落後で　彼山に隠身事　静に日跡より出て比田より横田を通り、備後の越原が知行所たる故に、日暮れて八幡の宮山の陰鬱なるを見て、即ち忍入て居す。神主田中和泉次郎兵衛社参して是を見誰人にて坐すかと云う。

我を越原へ送るに於ては当方の事也とて、大判一枚下被る如何様とも仕る可くとて、其の夜は冬の飢を調へて明朝三沢代官七郎兵衛、今の惣持の居住の時に注進する。討手六人を越、馬場の峠に行請討之れ有塚、其霊魂崇りて神主田中和泉一門皆絶えたり、亦村の人にも崇あるにより、小社を作道に有しを、富田屋祖今の秋山社を建立し今の宮六十四年也（筆者註　貞享四年から）或人の日く此の秋山は金谷信濃と云たりし神主秋山と名乗と云う。此の侍の先祖を阿富秋山が川原合戦とて太平記に見し秋山なり、四十余年労都にて主も無成り、身の置く処も無之く侍大内之義隆　毛利を頼み下国　侍大分坐秋山内蔵人光正も是を頼下り　三千石計も知行の様に申伝たり、光正には孫秋山隼人助光茂と毛利記に慥に有』

「米原家古代よりの聴書」

では、秋山隼人とあり、宇波山（布部村の）にかくれたのち逃れて馬場に来たとあり、神主は田中和泉守盛秀とあるほかは、ほとんど「古代大成記」と同じ。

さてこれがこのように書きかえられている。

秋山さんの崇り　裏切した検校職（松陽新報・大正七・六・二一から）

『出雲の尼子氏が中国に覇を唱えていた天正六年中のことである。八幡宮にて惨劇が行われた。安芸の武士秋山大門兵衛光茂という者、尼子氏に動静疑わるゝに及び、眼をさけて弟其及び家臣の難波某外一名、四人の主従密におちて横田村に向う途中、肝心な軍用金を失われていたので、弟某と一人の臣は光茂と別れて再び芸州へ。光茂と臣は馬場八幡に武運長久を祈る。神職は田中和泉守という検校職で一家七人地方の名門。立寄って懇ろに問われるまゝに次第を話す。和泉守同情して時期をまつことをすすめた。光茂は信じ切って田中家にしばらく隠れることゝした。

横田には三沢氏があった。「尼子氏の尋ね人の入るときく、来たら注進せよ。多額の恩賞をとらすが、逃せば処罰」と下知していた。田中和泉守はこれにまよい野心抱いて三沢氏に密告した。すなわち「来る何日の夜能義郡方面にのがし、林ケ峠より鹿谷の山路を経て西比田に向うよう案内する。難波を先発させる油断なく」と。田中は親切らしく「人が知ったようだ。大望ある身早く逃れられよ。宮の後の山路越えて能義郡へ」と。酒をすゝめて別れを惜しむが如く。秋山は田中の計略を知らず親切にほだされ、ついに酔しれて熟睡する。その夜和泉守は秋山主従の刀を庭石にあてて刃をいためて鞘におさめ床の間へ。一方同家の馬を出して藁沓（わらくつ）をかぶせるのに、その間に石屑を入れておいた。

一番鶏が鳴くころ光茂をおこし「明けきらぬうちに」　といい「難波殿は一歩さきに瀬踏みされよ」と案内した。難波は林ケ峠をこえて鹿谷を越えんとしたころ、馬は動かなくなった。不審に思って下りてたしかめると

馬は脚を痛めている。沓の間に石屑がある。さては計略にかかったと知った時、数人の三沢の伏兵が林の間からあらわれた。

刀を抜いたが役に立たず、遂にそこで最後をとげてしまった。

一方光茂はそれとも知らず、あとから出発、和泉守と別れて一町余り、数十人の伏兵にあって討たれる。光茂の死の間際、八幡宮の方をキット見て、「はかられた。たほるとも魂魄は永く田中に祟り、二、三年後には田中家を絶滅させ、家は廃り蓬原にせん」と。

それから三年間に七人の家族は死に絶えた。下伏宮家である木山家から田中和泉守のあとをつぐものが出たが、こゝにも不具者病人が絶えず「秋山さんの祟」と協議の末、社内に秋山善神という神社を建てて、主従をまつった。しかし病人は絶えないので、この社は別の一門内の木山家がまつるようにしたところ、その祟は跡をたった。

神社は天正十三年中のこと、秋山神社とて太刀を作り心願をかけた。現在は木山家が、他の社とともにまつっている。

難波が死んだ処、鹿谷越は松の大木が現在もそびえている。里人呼んで「難波さん」という。

庭石は明治二十四年ころまで、木山建氏宅の庭先にあったが、八幡宮境内に運ばれて置かれ今日なお歯あとがある』

仁多郡史　大正六年刊

出典は不明であるが、次のようにある。『三沢為清が天文年間（弘治の前）、備後高野山城主須藤紀伊守と合戦して、高野山城を攻め落し終に高野山十一ケ村比和五ケ村を攻略せり。此時細木城主萩山庵之助敵する能わず、出雲に遁れ横田に来り馬場にて殺されたりと。

天文と天正と萩山の変名秋山と関係なきや、秋山には難波某の臣も有りしとか、難波様は今の岩屋寺亀嵩越峠に有り』

古い記録から（馬場八幡宮所蔵）

1,764 **宝暦十四年指定帳**

— 芸州武士金谷信濃守通重当所にて秋山と申して討死村人有崇天正十六年宮を建て秋山善神と号し、承応年間（1,650～1,655）まで三町程西の林ケ峠に塚があった。

1,739 **天文四年秋山善神語伝記**

— 金谷通重命を祀る云々

1,728 **享保十三年成申年　神主右衛門定清建之の碑　林ケ峠にある。碑には**

— 天正十壬午年討死同十六戊子年善神与祭

奉寄進秋山善神御廟所

石塔一宇

1,624 **寛永元年極月十四日の棟札**

— 現在の八幡宮境内西側にある秋山神社を、林ケ峠より移して建立した時のもの。

奉新建立秋山殿社

導師岩屋寺快憲法印

神主祝対島守景仍

施主田村源右衛門尉

1,612 **慶長十七壬子年霜月朔日の棟札**

— 林ケ峠に造立された社殿

導師正乗坊権大僧都快憲

神主木山主殿尉景仍

施主千原彦右衛門尉末信

1,588 **天正十六年今月今日の棟札**

— 右の林ケ峠に最初建立されたもの

奉造立一宇

為　霊教化三菩提也

神主　祝

考　証

以上の資料をもとに、他の史料を加えて考証すると次のようになる。（横田町誌—昭和四二年刊—とほとんど同じ）

神主田中次長右衛門盛秀は、弘治二年（1,555・天文二四）ころから天正十四年（1,586）ころまでの人物であり、総持（善徳寺北側の台地）にいた三沢氏の代官七郎兵衛とは、三沢七郎兵衛尉為諏のことで、源太郎ともいい藤ケ瀬城番でもあった。これは永禄六年（1,563）より天正十四年まで横田にいた武士である。元文四年の八幡宮古文書によれば、田中氏一族は七年にして絶えたという。為清は天正年中に活躍している。村人が神社を建て怨霊を鎮めたのは天正十六年、享保十三年建立の碑には、天正十年討死とあるから、筋はあうことになる。しかし合戦については筋があわない。天正十年は豊臣秀吉の備中高松城水攻めの年であり、織田信長が本能寺で誅せられた年である。尼子氏はすでに出雲にはなく、出雲は毛利氏の支配下にあり、三沢氏をはじめ、備後、備中、伯耆の兵はすべて毛利氏に従っていた。ただし、備後の山内首藤氏（庄原）の分家多賀山首藤氏（高野山山城）が消極的態度をもっていたことは、間もなく四国へ所替されたことの原因の一つであったようである。こゝらあたりに理由があって、秋山は備後からこの地へ逃げて来たものではあるまいか。

田中氏二代和泉守盛秀の天正十年、秋山事件があり、盛秀が跡をついで三代次長兵衛信秀が神主となり、天正十四年馬場八幡宮遷宮を奉仕している。（この時為清は隠居して出家し宗程とし当主は子の為虎であり、中村代官は三沢七郎右衛門尉為諏であった）　その後間もなく田中家は断絶したと思われる。

寛永元年秋山神社と現在のところに新建したのは、田村源右衛門正守で、横田町富田屋の人である。富田屋はもと五反田屋といゝ、五反田に住んだ由緒ある土豪であった。

横田地域史のしるべ③

横田庄（上）

— 鎌倉時代末まで —

本紙前号（35）2頁年表参照して

奈良の大仏建立

743（天平15）に墾田永代私有令が出されたことは、一方では私有地の増加によるそこからの年貢を期待したものでもあった。

この経済基盤の上に、その年大仏建立の発願がなされた。貴族豪族はもとより、多くの人々の寄進を勧進するために、一時退けられていた僧行基が登用された。大仏鋳造が難行すると、僧行教の進言によって、宇佐八幡宮が、京都の西南男山に勧請された。即ち石清水八幡宮である。八幡神は製鉄神としての崇敬も集めていたのである。

横田庄

その後一世紀を経ると、土地占有が甚だしくなり、こゝを拠点として武士の登場もみるようになったので、整理、禁止の動きがはじまった。971（天禄2）朝廷は石清水八幡宮への崇敬を極めて篤くし、上皇が行幸せられるほどになった。それから百年、源義家が八幡宮行幸の警備を命ぜられてからは、源氏の勢力が抬頭し石清水八幡宮の荘園も増加しはじめた。1,156〜1,159の保元・平治の乱を経て平氏が抬頭し、全国30ケ国と500余の荘園を一門に集中して貴族化し、六波羅には屋敷170ケ所、1,700戸を構えるほどになった。横田庄のことが史料の上に出現するのは1,156（保元元）で出雲八ケ所の一つとしてである。横田庄は1,072〜1,111の間に出現したと考えている（横田町誌135頁）。八幡宮25代別当光清が、白河上皇の信任を得た上に、鳥羽上皇の女房と姻戚となったこと、八幡信仰が武神として時代とともに盛上ったことによって、寄進地系荘園を集中することになった。郡司末孫横田氏は、この平氏・院・八幡宮の関係で寄進し、自己の地盤を強固にしたものと考えられる。そして平氏に従った。（平氏は山陰地方に勢力を扶殖もしていた）

源平合戦の結果、源氏の時代となり横田氏は、源氏方でその命をうけた、石見の益田氏が横田まで遠征した。横田氏は全く横田に押し込められることによってその地位を確保したようである。その翌年1,185元暦二年安田庄ほかとともに、出雲八所の八幡宮領は、頼朝によって安堵された。そしてその地の武士による年貢徴集や兵浪米賦課によって、神領としての年貢徴集ができないようになることを禁じられた。源氏の氏神となった八幡宮は、いよいよ勢力を拡大することになった。1,196（建久7）には京都の院の北面の武士小池刑部（源氏で源頼朝の一門多田源氏）が、八幡宮の分霊を奉持して横田庄に下った。その最初の地は今日の八川八幡宮のところであった。小池氏（のちの杠氏）は横田庄の荘官であった。

荘官と貢租

荘官とは一般的呼称で、いろいろの段階があった。荘務をとるのは

上司—本所、領家の政所と公文所。

中司—預所といゝ、下司を監督しのち荘園側（本所、領家）にあって領主権を代行し、地頭と対立するようになる。

下司—在方の管理者で、年貢や公事の徴収や、荘内の治安にあたる。当地では検校、惣検校・別当・下司・公文などがあった。

年貢—正税で原則として米であったが、次第に銭納となる。

畠年貢は雑穀、豆類。

公事—右のほかの雑税で、恒常・臨時の二種があり。農・林水・鉱などの産物とか、手工業品を納めた。

夫役—領主直営田の耕作のため領主の警備のための兵士役の徴収。そして年貢運搬であって、これらは領主に対するばかりでなく、荘官にも地頭にも納めねばならなかったし、下級農民は名主や作人にも義務があったから、荘園内農民の逃亡が多かった。

時代がたち鎌倉末期になると貨幣経済の発展、農民層の成長地下人の成長によって、防衛のため、惣村組織が生れ、郷村制の出現へとなった。そして幕府の力が弱まると実権は代官である、地侍や土豪へと移り、本所は代官を通じてだけの年貢となり（横田庄は安部氏のあと三沢氏が代官）、農民は沙汰人名主を中心に自治結合をつよめ、一揆の発生へと向うのであった。

荘園の変化

下地中分——鎌倉時代に荘園の領主権を領家（当地では石清水八幡宮）と地頭（当地では三郷地頭三　氏）が折半して領有し、各自が独立の知行体制をとったことをいう。

承久の変後置かれた新補地頭は、荘園耕地11町歩につき、1町歩の給田支給をうけて、兵粮米などの徴収にあたったが、荘園の経営には参与することを認められなかったが、荘務に口ばしを入れ、領家と紛争を起した。

幕府は裁判では領家に有利であったが、地頭側がそれを履行せず、紛争は繰返えされた。問題は同一の領地の支配権が、二重に存在することであったので、鎌倉中期から主として新補地頭関係の荘園に発生し、末期にはそれが全国的となり、荘園制は変化し、封建領主制へと進むことになった。

地頭請所——地頭が領家から一定の年貢を納めることを請負うことを条件に、一切の土地人民の支配権を委任されることで実質は自己の領有化と同然とな

った。横田庄ははじめは承久の乱後間もなく三処郷地頭三処氏の、ついで次号で詳述するように三沢氏が、地頭請所としたことがある。大方の荘園は応仁の乱後の戦国期に消滅するが、横田庄は禁裡御料所として、その後百余年の間続いた、特異な荘園であった。

承久の乱後の横田庄

横田庄の荘官であった小池氏は、頼朝没後の翌正治二年からは、八幡宮祭礼への勅使参拝の代参を行うことになり、御催（のち大催）として神事にもかかわることになった。このころ土豪横田氏は武士を離れ帰農していたと思われる。

乱後の郡内のほかの地には、馬木郷には多胡氏、阿井郷には法華堂氏、三沢郷には飯島氏（のち三沢と改姓）、三処郷には三処氏が新補地頭として入っていた。

やがて間もなく三処郷地頭三処左衛門尉長綱（出身地、家系は不明、在来は郡司大領の末孫と推定したが、山陰史談14号拙論のように、関東か信濃の武士であろうか）が、横田庄に進出し、しきりと荘官の中司である預所職を懇望した。従って小池氏（八川方面居住か）は押さえられたようである。長綱の生存中（1,222～1,226）は怠りなく年貢を納めて、領所職を全うしていたが、長綱没後は後家尼が預所職を代行し、年貢を未進した。本所側の石清水は、長綱の請文の旨をあげて幕府へ訴えたところ、1,220（寛喜元）七月二日、幕府の下知状が後家尼へ下ったが請文もほごにして一向に応じなかった。そこで本所側は、地頭三処氏との請所契約は和与（和解、示談のこと）によるものである。この状態では契約の趣旨にもとるから、破棄して元の如く預所を当方より下向させたいと、関東（幕府）へ訴えたところ、1,232（貞永元）八月二十九日幕府の裁決が下ったので、横田庄を本所の進上（管理）とするため、三処氏を解易し預所職を京都より下向させた。

ところが翌二年四月十五日「天福」と改元されたが、このころ横田庄には、この預所職をめぐって一大事件が起った。預所職となった公文・良仙法師が、先例によって庄務をとったところ、地頭後家尼が吹毛之料（武器）をもって、良仙以下親類所従等の住宅二〇全戸をすべて襲い、資材雑物数千石の用途米をとりあげたので、良仙は失望して勤めができず、神事も行われない。神仏のおとがめがあると訴えた事件である。

三処左衛門尉
長綱 ┬ 景長
後家尼 ┬ 七郎左衛門尉実綱 ── 実直

その年の暮十二月一日幕府はなおも預所職を懇望する後家尼が、御年貢鉄、公事断銭（段銭で即位・内裏修理・将軍宣下・道路修復などの費用のため、臨時に田地の段別に応じて課したもの。段米1反米1というものもある。この時は春季五十貫文、秋季五十貫文とある）、年貢銭を未進しない旨、かたく申入れたので、長綱の請文にまかせて本所も応じたので許可した。それから文永二年（1,265）までの三五年間のことは明らかでないが、文永八年の千家文書によれば三処郷の地頭は長綱の後家尼がもっている。（横田庄は北条時輔所領となっている）この間の横田庄は、はじめは地頭代官預所職は景長であったが、相変らず未進分も納めず、さらに滞納も続け請求にも応じなかったので、本所は解易して弟実綱を代りとした。しかし何の変りもなかったので、文永七年七月よりは実直が代官となった。

本所と現地代官との紛争がずっと続いたようである。

そして文永八年、文永二～六の間の年貢銭、公事断銭の未進分が多額になったので、七年本所は幕府に上申した。そこで翌八年正月幕府は六波羅に対して（文永元より北条時輔が南探題）調査を命じ、三月には六波羅から弁済を実直に通達した。ところが実直は、去（七）年四月から当地頭は当庄を知行したので、秋の公事断銭五〇貫文は運上し、今年の御年貢鉄や春分公事断銭五〇貫文は三月運上したから未進はないはずと答えている。荘園の雑掌は「去年四月以前も知行していたのは間違いない。私も宮清も去年四月ころともにこの役についた。長綱、景長時代のことを知らぬはずはない。記録にも明らかである。しかしこのまゝでは将来とも問題は起し、雑掌所司の往復のわずらわしさを考えると、一歩譲って、この際地頭との中分に応じて問題を解決したいと思うので大波羅殿に仲介を願いたい」としている。以上は文永八年十月廿五日付の本所から、越後守北条実時への文書にみられる経過である。この庄の下地中分は安田庄が江戸氏によって行われたのより約三十年おくれている。

北条氏領となる

文永八年十一月の千家文書によると、三処氏は三処郷九町余と大原郡佐世白上八幡宮三〇町が所領で、横田庄は北条時輔（六波羅南奉行、時頼の子、時宗の異母兄、伯耆守護）とあるから、横田庄は出雲国内のほかの八幡宮領と同じく、北条時輔領となって、三処氏の勢力が後退したことを示している。時輔は翌九年一門内の争いから殺されたといわれるが、実母妙音禅尼（時頼の後室）の力はその後長く横田庄には持続したようである。岩屋寺がその荘司をかねていたから、弘安四年八幡宮はその山麓の馬場（横田庄の中心中村）へ八川から移された。本願は比丘尼妙音、岩屋寺は祐円であった。小池氏は神霊を馬場に移したのである。妙音禅尼の寄進は正和二年（1,313）まで数回続いたから、北条氏領として続いたのであろう。いずれも祐円の声望に応えたとある。文保二年（1,318）後醍醐天皇が即位すると、間もなく横田庄は石清水八幡領として安堵された。

印刷費一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
第37号
5月号
昭和53. 5. 6
奥出雲文化協会

庶民の哀歓が育てた伝説①
高尾の傾城岩

この地方の民話「日本一のへこきじい（爺）」は、庶民の封建領主へのひそかな抵抗心が生んだものである。高尾の傾城岩、大内原の和泉式部と娘の墓、馬場八幡宮と最明寺入道時頼、岩屋寺と行基、これらの伝説に類するものは、全国各地に分布している。一口に言えば、庶民の哀歓が生んで育てた話にすぎない。しかしそこにはその時代の庶民の生活感情うかがえるので、それなりの意義がくみとれる。一つ一つを探ってみることにする。（傾城とは遊女のこと）

①話ー昭和五年の三成村誌では

傾城岩――伊賀平山麓の畦圃の間にあり、寛永年中江戸吉原にて名高かりし高尾は実に当地の出身なりしと伝ふ。年明きて帰り此所に没し、其霊魂此岩に宿りしが故に此名ありという。試に男子之を押さば静かに動きて遠き昔を偲ばしむと。

②話ー昭和十一年八川村郷土調査

傾城岩――大谷大慶寺を南に離る三町ばかりの畑に傾城岩とて、直径五、六尺の球状なる花崗岩あり。口碑によれば、昔江戸花魁の初代高尾は三成村大字高尾より出でたる者なるが、大谷に若者あり江戸に出で花魁高尾の道中を見ほれ、買わんの心切なれども多額の金を要すべければ、止むなく帰り来り爾来寝食を忘れて勤倹遂に高尾を買い得るの貯蓄をなし、再び江戸に出でその希望を達したるに、高尾もその熱心に感じ遂に夫婦の約束をなし、年あきの後は必ず大谷にたずね来るべければ、帰へりて待たれよとの事に力を得て帰り、高尾の年あきを待てり。

数年の後高尾果して尋ね来れるに若者不在なりければ、その母高尾の艶麗眼を驚かすばかりなるに対し、自家のあまりに見る影もなき茅屋なるを恥ぢ、若者は已に死せりと偽り告げしに、高尾は悲歎の極りその若者の墓地なりと告げられし傍に自害して果てたると。土地のものその誠に感じ懇に葬り、特に此の大なる自然石を墓標とせり。今日に至るもこの石は女子の力にては、いかにするも動かざるも、男子なれば僅に一指にて押すも必ず感じ動くと伝えるは、男女の望の叶へたるとて香花をたむくる者さえあり。

③話ー昭和三十年ころの聞き書(抄)

傾城岩は上高尾の伊賀平山の北東の麓と、八川村大谷にある。

吉原のおいらん高尾太夫は万治年間（1.658～1.661）の女であった。高尾太夫は仁多郡の大工の娘で、父が譜請の折大怪我をし、治療費にこまり、売られて松江に出た。藩主の参勤交代に附添う侍について江戸に出、吉原の散茶となりやがて太夫となった。このころ神田鍛冶町に、古いのれんの紺屋久兵ヱの弟子久七は、おいらん道中のあることを知り、兄弟子の新助らと、吉原の大門口でそれを見た。（おいらん道中とは、揚屋の呼び出しによって、おいらんが付添いの女ーかむろーをつれて出かけることをいう）　すっかりまいった久七は、三年働いて五両ほど貯え、医師の道庵の知恵をかりて、材木屋の若旦那というふれこみで、吉原の揚屋、井筒屋であった。情は深まって再会を約したが、三年先という話に高尾は不思議に思い、たずねるうちに、久七はとうとうすべてを打明けた。その純情にほだされた高尾は、来年三月は年が明く、その時は世話女房として必ずたずねましょうと…　翌年三月はれて自由の身となりつれそった。

そして三十年の月日がまたたく間に流れた。子供はなく久七は病死、高尾の心はひたすら、ふるさと高尾へ。数年の旅路でふるさとへ。毎日大岩の下で、はるか江戸を眺めて、久七をしのぶのがならわしとなった。傾城岩とは高尾が傾城屋（女郎屋）につとめていたからであり、男がさわれば震い動くともいわれる。それはあの豊麗な高尾太夫にふれる思いが、男を震えさすのであろう。高尾は久七を忘れ難く、木像をつくって朝夕これをまつり、ありし日を偲んだという。（駒原邦一郎採話）

④話ー昭和四十九年ころの某新聞から（抄）

徳川三代将軍家光のころ、大谷に屋号下持田という農家があった。長男久七は麻糸で織った着物を江戸へ行商、ある年吉原の三浦屋へ上って、当時随一のおいらん高尾（仁多郡高尾の出身）を買い、故郷の話をしながら感激の一夜をあかし、年季を終ったら夫婦にと約束をし、そのしるしに久七は持参していた木彫りの仏像をわたした。それから数年たったある日、大谷村の久七の家にみすぼらしい格好の女が一人。よくみれば色香あふれる美女。驚いた父久兵ヱがたずねると、「高尾と申すもの、久七さんと夫婦をちぎったもの」と木像をみせた。あいにく久七は留守、久兵ヱはてっきり息子を欺く悪い女と判断して、「久七は病気で死んだ」と告げた。落たんした高尾は久七の墓の案

内を求めた。父は他人の墓をそれと教えた。やがて白むくに着かえた高尾は刀で自害してその場に果てた。久七はどうしたか不明であるが、村人は大変に同情し大きい塚石を置いた。男なら小指でも動く。

高尾は初代であるといい、「出雲路の珍談奇談」(石村春荘)によれば、不昧公の時代、御殿女中が書きのこしたとみられる写本に、「にたのこおりみなりに、みめうるはしく心ばえ……故ありて江戸新吉原にて高尾という……下人なにがしのまことをしたいて二世をちぎりしという。」と

久七は顔市であるとか、高尾は本名はおよしとか。近くの家(久七の子孫とか)には、約二〇㎝のその木像があるという。

⑤話ー日本伝説集から

仁多郡大谷に傾城岩という小牛くらいの大きさの岩がある。傾城とは紺屋高尾のことで、ここは高尾が生まれたところ、その精か凝ってこの岩となった。傾城の精なので、女が動かしては動かないが、男が動かせばらくに動くという。

いやはや傾城岩についてのこの地の伝説も語る人で様々。

さて今月号は遊女の話で埋ってしまうようであるが、「南蛮鉄のような男でも、女にかけたら青菜に塩だよ」で、堅い鉄の話を少しにして、庶民の古今をとわぬ哀歓をひもとくことにする。

元吉原、新吉原、遊女屋(傾城屋)、揚屋、茶屋

「吉原大全」をはじめ文献にはこと欠かぬほど、詳細なものが多い。それによって、昔も今もこの道は。

江戸の(元)吉原は元和四年1.618庄司甚右ヱ門の願いで開かれたが、39年にして明暦の大火1.657で焼失し、(新)吉原に移った。遊女の最高級が太夫で、ついで格子、端と三階級があった。太夫は江戸城へも給仕に出るほどで、金で売春をするという女ではなく、良家の妻女をしのぐ教養と品格が要求された。(今日の京都の名妓と同じく)客は武士であったが、元禄ごろからは町の豪商が、大名、旗本にかわって豪遊、大尽客となった。そして太夫、格子、散茶、梅茶、局の五階級と繁昌した。太夫も寛永元年には70余人、享保ごろは2〜3人、宝暦二年1.752には1人となり、遂になくなった。その後はおいらん(花魁)などの三階級となった。それぞれ付添人をもち、遊女屋から揚屋(のちには茶屋という)へ出かけた。この出かけることを道中といい庶民にとっては道中をかいまみることが楽しみの一つで、名所となっていた。

宝暦までは揚屋といい、三浦屋などがあり、それ以後は(大)

挿入 前号一頁四段「秋山さんの祟」の前へー脱落のため

雲陽誌(享保二年)から

芸州の武夫秋山某の一男を刺殺して来る。陰蔚なる八幡宮の宮中に寄生。県主三沢氏探出て害す。祟あって村人災おほし。故に祠を建祭敬す。本社一間ばかり、天正年中堀尾再建の棟札あり、古老伝に日、備後国山内の武士右近太夫の息子金谷信濃守なり。後秋山と改号するか。

たたら製鉄早わかり⑤

近代製鉄法(上)

近代製鉄法では、鋼は科学の粋を集めた二段作業(間接法)でつくり出される。玉鋼は古来伝統のたたら作業(一段作業、直接法)によって、勘の作業によってつくり出される。洋鋼(鉄鉱石原料)の特殊鋼はもとより和鋼(砂鉄原料)の特殊鋼が、なぜ日本刀の材料として玉鋼と太刀打ちができないか、まだ科学的に究明できていない。製鉄技術の上の大きい課題である。

ここで近代製鉄法をしばらく考えることにする。

鉄の性質

鉄	化学記号	Fe
	原子番号	26
	原子量	55.85
	比重	7.87

純粋な鉄は製造が困難で、軟かすぎて実用にもならない。

普通鉄には (原子番号)

炭素	C	6	(非金属原子)
珪素	Si	14	(〃)
マンガン	Mn	25	(金属原子)

が混入している

o その量によって、鉄の質が変化

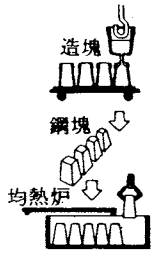
o 特に重要なのは

炭素 C

で、含有量が多くなると、堅くなるがもろくなる。

普通 含有量 1.7%以上 銑鉄

1.7〜0.03% 鋼



近代製鋼法は左の図と下の説明がその概略で、次回において、その化学変化を追うてゆくことにする。

茶屋といい、井筒屋など七軒があった。そして太夫の伝統はすっかりなくなり、性欲対象の湯女系の遊女となり大衆化した。その上級がおいらんで、花々しさはあったが、品格においては太夫に遠く及ばず、単なる遊女であったという。

ここで太夫と一夜を明すには一両一分（約三万円）。ほかにいろんな係に祝儀が必要で、一夜で十両、二十両が必要であった。太夫を指名して一夜をともにするまでには、度重なる揚屋入りによって、遊客としての実力を？つけることによって、それが可能であったという。大金を積んで直ちに指名、一夜ということは不可能であった。一夜のために身代をつぶすといわれたのはこのことによる。紺屋の丁稚や、山奥の麻布行商人ではとうてい実現しないことであった。

高尾太夫

さて「燕石十種」の「高尾考」を中心として。高尾は吉原の名妓で、京町一丁目三浦四郎左ェ門抱えの遊女（傾城ーけいせいー中国の語で、美人が色香で城や国を傾け滅ぼすという意）で、寛永1.623から寛保1.744まで十一代が襲名して続いたという。

初代ー子持高尾といい、娘をもった。寛永ころの名妓。

二代ー萬治高尾、仙台高尾、石井高尾ともいう。容姿絶妙・和歌をよくし、手蹟は[redacted]・佐理（奈良時代の書家）に劣らず、萬治二年1.659十九才で病死、世に仙台藩主伊達綱宗や彦根藩士石井吉兵ェと深くなじんだというのは、つくられた妄談である。

五代ー西条高尾という。京都島原の名妓春野との盃のやりとりで名高い。

六代ー紺屋高尾、駄染高尾という。元禄、宝永のころに全盛期をむかえ、神田お玉が池の紺屋九郎兵ェの妻となった。駄染の名は木綿の染物をする店を、縮緬きぬを染める上紺屋と区別して駄染屋といったことから、九郎兵ェが高尾に家財産をそそぎ果したため、高尾がさる屋敷の門番にたのんで、采女が原に料理茶屋を出し繁昌をみせたが、のちには本所三つ目に夫婦おちぶれていたという。

十代ー榊原高尾、越後高尾といい、寛保元年1.741姫路藩主榊原政岑に落籍された。

のち幕府に聞え、仝年政岑は隠居、越後の高田に国替された。政岑の死後仏門に入り寛政六年1.794七一才で死んだ。最後の高尾太夫。この話が仙台藩主の遊興にすりかえられて劇化された。

著名なものを抜書きしたのであるが、奥出雲の高尾くんだりまで落ちのびたものはいないようである。遊女の年季は二十七才までで、ここで自由の身になれた。高尾太夫はすべて幼時のころより遊女屋に養はれ、鍛えられ磨きあげられて名をなしている。

奥出雲の高尾から出たとしても、どれ一つとっても話があてはまらず疑問だらけである。

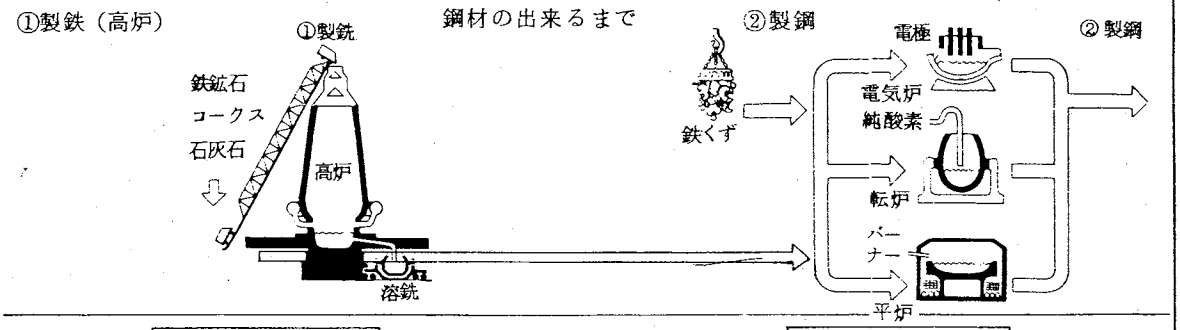
物語・芝居

歌舞伎舞踊の一つに「高尾懺悔」があり、長唄、清元、常盤津にもうたわれる。近松門左ェ門の作品にもある。芝居「紺屋高尾」の主人公は久兵ェである。

紀の国屋文左ェ門（紀文）、江戸深川の材木商奈良屋四代茂左ェ門（奈良茂）の傾城屋遊びも庶民のあこがれであった。こ

五月の古文書を読む集いは、農繁のため休み、六月三日から毎月開催（横田史談会）

鋼材の出来るまで



① 高　　炉（第1段作業）

o原料
①鉄鉱石　3種類（赤・磁・褐鉄鉱）
普通鉄分60％（鉄と酸素の化合物と不純物）
②コークス　（堅くて不純物少なく粒度が整ったもの）
還元剤ー鉱石を溶かし鉄分をぬく
熱　源にもなる　（還元とは酸素をぬくこと）
③石灰岩　鉱石中の岩石やコークスの灰分と結合して滓をつくる
④マンガン鉱石　銑鉄の品質を良くする
溶銑や鉱滓の流動性高める
o製品は銑鉄　堅くてもろい—鋳型にて鋳物に圧し曲げたり伸ばしたりの加工に不適

② 製　鋼　炉（第2段作業）

o炉には三種
日本では　電気料（17.6％）-特殊鋼を—
転炉（80.0％）　平炉（2.4％）
ここで炭素含有量へらす
他の不純物をのぞく
o原料　銑　鉄・くず鉄
o製品
鋼　炭素がへり鍛造・圧延やりやすい
特殊鋼（合金鋼）　元素（ニッケル・クローム・モリブデンコバルトなど）加へ特殊な性質を加へる。さびにくいステンレスなど

うしたものは江戸で栄え、文化文政年間ごろから、遊芸人によって、人形芝居、旅廻りの芝居、さいもん語りとして地方に流れ出した。版木による刷絵も伝り出した。

高尾の話に類するものは但馬にも紀伊にも、そのほか信濃などにあるという。高尾の傾城岩もその一つであろう。この地方の高尾についてのさきの五つの話の中には、地方へ流れた物語や芝居に出てくる筋の断片が、時代もあとさきになって、つぎはぎされていることは、それを裏書きしている。貧しい生活の中で庶民の哀歓にふれるこの物語が、高尾の地名に因んで育って語りつがれたであろうか。次回「和泉式部」でのべるように、美しいがおちぶれた流れ女が、江戸の高尾と称して庶民の心にふれて恵をうけ、哀れな最後をひきとったのが、親切な村人の供養の話として残ったのか。

江戸時代末、古事記の「おろち退治」の話がこの地方にようやく流れて、附会されはじめた（本誌33号）と同じたぐいか。

また「お伊勢まいり」は庶民の一生の願望であった。そして町の一角の古市での遊びもその楽しみの一つであった。親はどの妓楼でなんという女郎に男にしてもらったから、お前もそこにいって男になってこいと息子を送り出したという。四国の「こんぴらさんまいり」も、「関まいり」も、庶民の「傾城高尾遊び」のささやかな舞台だった。

この地の旧家に「参宮日記」がある。出入の若者二人を従者としてのもので、若者ははじめてのそして最後の一夜を胸に抱いて帰ったであろう。今日の紙や電波の洪水で眼に入るものは、種切れをあくどく表現することによって人を継ぎとめる、たい廃的男女の味気ない物語とは違って、往時の素朴で健康的で大らかであったこの生活をよみとることができる。

出雲横田駅前の観光用を看板にある「高尾の傾城岩」は、「粋な心意気」とみればおもしろみもあるが、いやさて。[redacted]

前号の訂正

3②上は頁（）は段・は訂正 2⑤盛秀の 3③八ケ所 ④のため。⑤処郷地頭三処氏） 4②預所職・1229 ③おとがめ ③七年四月 ④起こり・六波羅 ⑤三町歩 八幡宮領

奥出雲地域史研究の資料②

町立図書館の図書（中）

岩波書店版
日本古典文学全集一〇〇巻

雲風土記参究」「風土記時代の出雲」の二著は、研究書の名著で必読すべきものである。

○日本書記（上巻・下巻）

日本の歴史の基本書である。出雲を知るにも必要である。今日の研究では神話時代はもとより古代史も、すべてが真実ではない。研究書をひもとくことによって進めるべき。

○祝詞・古事記

古事記もひもとく必要がある。筆者は日本書記をもとに、宮廷音楽の歌詞を加えて、平安朝初期に出来たのが古事記であるという説に従って、読むことにしている。

次の四書は直接この地域には関係はないが、地域史を明らかにするのに読む必要がある。

○神皇正統記

南北朝時代を知る一つの視角を与えてくれる。

○保元物語・平治物語

保元の乱、平治の乱の物語で源平の興亡を知る上に。

○平家物語（上巻、下巻）

右に同じく

○太平記

後醍醐天皇の即位（文保三 1.318）から、正中の変、元弘の乱、建武中興のしばらくあとまでの歴史で、この地に間接的に影響をもつもの。

以下は蔵書としてないが、この地に関係あるものとして読むべきもの。

◎源平盛衰記ー横田兵ヱ尉維之のことがある。

◎増鏡ー後醍醐天皇の隠岐配流のことがある。

◎明徳記ー明徳の乱の物語。この乱は仙洞御料所横田庄のことが発端となっている。必読のもの。

◎吾妻鏡ー鎌倉幕府の事蹟が編年代で誌されている。和文になおしたものがあらわれ読み易くなった。（原書は漢文）

◎承久記・承久兵乱記ー三沢氏の祖飯島氏のことがある。

◎応仁記ー応仁の乱の物語で、三沢氏の記録もある。

◎大閤記ー秀吉を中心に織田信長時代から秀吉死亡まで。毛利、尼子とともに三沢氏の活躍も記されている。

印刷実費一部百円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字・糸原風亭書

第38号
6月号
昭和53. 6. 3
奥出雲文化協会

横田地域史のしるべ④
北朝（持明院統）と南朝（大覚寺統）

「横田地域史のしるべ」は横田庄の十四世紀初頭から十六世紀末までを、二回にわたって記述することにしているが、どうしても北朝・南朝の問題にふれておく必要があるので、ここで紹介することにした。このころの横田庄についての記録をみると、この地に残っているものでも、中央に残っているものでも、そのうち南朝に関係するものは後醍醐天皇の綸旨二通ぐらいで、あとはすべて北朝側のものである。また活躍する武士も北朝系である。ところが北方の三処郷は大覚寺統南朝側であったので、岩屋寺とその地の高田寺の対立もあった。三処郷が南朝側である理由は明らかでないが、地頭であった三処氏が、横田庄を蚕食した時、幕府即ち北条氏からよくあしらわれなかったこと、漸く下地中分になって横田庄の半分を手に入れたと思うと一ケ月もたたないうちに、北条時輔領となったことなどが考えられる。それに三処氏は承久の乱後に三処郷に北条氏（幕府側）から新補せられた地頭ではなく、それ以前からの地頭であって、北条氏との縁はうすかったとも推定できるのである。

持明院統と大覚寺統

持明院統とは後深草天皇の子孫の系統で、後深草天皇が譲位後持明院を仙洞（上皇）御所とし、皇太子伏見上皇以後代々ここに在ったことによる。大覚寺統とは亀山天皇を祖とする皇統で、後宇多天皇が譲位後大覚寺を仙洞御所としたことによる。

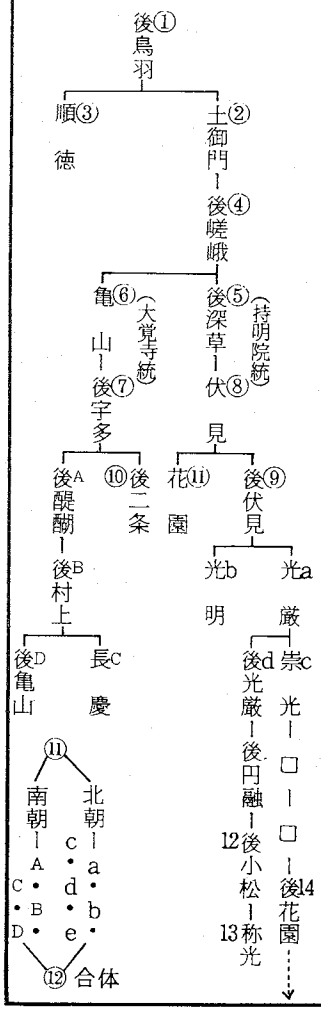
承久の乱後、幕府は京都方の勢力を押さえるために、後鳥羽上皇をはじめ三上皇を遠島に配流し、皇位継承にも干渉をした。

後嵯峨上皇の死後兄の後深草上皇を抑え、弟の亀山上皇の院政を定め、後深草の皇子（伏見天皇）を後宇多天皇（亀山の皇子）の皇太子として融和もはかったが、両統の間に皇室領相続、近臣の派閥争いも生んで対立が生じた。後伏見・後二条天皇後交互即位の案を出し、1,317（文保元）に和談で定めることにまで妥協することができた。しかし大覚寺統の後醍醐天皇は幕府の干渉を憤り討幕運動を起した。

このころ北条氏が執権として実権を握っていた幕府も、幕府御家人層が分解して弱体化しはじめていた。そして武士のなかで北条氏に不満をいだく地方豪族や非御家人らが反幕府の勢力をつくりはじめた。幕府とは疎遠で、王朝政治の再現を理想とする後醍醐天皇やその側近の人々がこれと結んだが、正中の変で失敗した。その後土豪楠正成や近畿の社寺の協力で計画がたてられたが、これも事前に発覚して天皇は隠岐に移された（元弘の変）。北条氏はこの時持明院統から光厳天皇を擁立してこれに対抗した。足利尊氏らの挙兵で北条氏は滅び建武中興となったが、新政府の失政多く尊氏の叛となった。光厳院の院宣を得て九州に地盤を固めた尊氏は東上し、湊川に正成を倒し上洛した。そして光厳院の弟光明天皇を擁立して天皇とした。

後醍醐天皇はのがれて吉野に移り、別の朝廷をひらいた。こゝに南朝と北朝が生れ、尊氏は北朝のもとに幕府をひらき、半世紀にわたって南朝の公家勢力に対立した。この南北朝の内乱は、鎌倉的な幕府制を維持し地方豪族（守護勢力）を基盤とする封建的権力を確立しようとする勢力と（足利尊氏側の武家勢力）古代国家機構を再編し天皇を中心に貴族社寺から成る統一政権を樹立しようとする勢力の対立である。そしてこれが畿内だけでなく、全国各地に対立そして内乱となって波及していったのは、一層自由で解放的な統一政権を求める小地主・小農民を中心とする勢力が強く成長していたことによるものである。

これらは郷村をよりどころとして蜂起し、農村を戦禍からも守



るためにも戦った。したがってこの流れは、南北朝合体後すなわち室町幕府成立後も次第に成長していき、室町幕府の崩壊から、戦国時代へと移ってゆくのである。この情勢は、横田庄の記録の中に明瞭に残っている。

以上が対立のあらすじであるが、いま少し「増鏡」を中心として、対立の背景をさぐり、当地の少ない史料の読み解きの参考にしたい。（くわしくは村松剛著「後醍醐天皇」を）

後醍醐天皇

後醍醐天皇の生母は忠子という。父は五辻（いつつじ）藤原忠継である。五辻家は五摂家（近衛など五公卿家で、摂政・関白・太政大臣になる家柄）につぐ七清華家（内大臣・左右大臣になる七公卿家）の一つである花山院から分れたものであるが、当主が晩年にかろうじて公卿の最下級になりまもなく退官という低い家柄であった。従って忠継は生存中は何の働きもなかったが、娘・孫娘の二人は死後天皇に仕え、孫娘経子は伏見天皇の御子後伏見天皇を生んだ。娘の忠子は後宇多上皇の眼にとまり入内して四人の皇子皇女を生んだ。その後、後宇多上皇のもとを去ってその父亀山法皇のもとへ行き寵愛をうけた。当時上流社会は自由な空気があふれてはいたが、上皇の側室が皇子皇女をつれて舅（しゅうと）の側室になったのであるから、後宇多院は当然ながら激怒された。これが南北朝の争乱の重要な起爆力となったのである。忠子の生んだ長子がのちの後醍醐天皇である。

後醍醐帝は正応元年（1,288）に生れた。母忠子は数え二十一才であった。その前年父後宇多天皇が退位して皇太子が践祚している。伏見天皇である。伏見天皇は後深草院の皇子で当時は天皇の父である上皇が院政を行なうのがふつうであるから、後深草上皇が事実上の君主となった。即ち持明院統である。正応二年には伏見天皇の皇子の立太子の儀があったから、次の院政は伏見帝にゆくことが明らかになった。持明院統の勢力が強くなった。こゝで大覚寺統である亀山上皇は皇位の流れが離れたことに絶望し、剃髪し出家した。ところがその翌年武士が伏見天皇の寝所に斬込むという椿事が勃発したが、天皇は女装してのがれ、三人の武士はその場で自害して果てた。その背後には亀山法皇の画策があったという風評がたち、法皇と後宇多上皇は幕府に誓紙を届けて一応の結着をみるということになった。後醍醐天皇はこういう大覚寺統の危機のさ中に生れ、母親の身分の低さから第一皇子（異母兄）は二才で親王になっているのに、十一才になっても親王になれなかった。（こういう皇子は極めて多い）一方忠子の姪の経子の生んだのちの後伏見帝は、皇后に子がなかったのでその猶子ということにして立太子した。叔母の忠子は自分の皇子の親王宣下もない。一族に有力者もない。姪経子を通じて頼むには自尊心が許さない。しかも姪は持明院統であり、忠子は大覚寺統である。この不満はのちの後醍醐帝の幼少時に、深くしみこんだといわれる。鎌倉幕府と持明院統との間に介在する西園寺家の画策がものを言っていたのであって、鎌倉幕府の圧力を後醍醐帝は幼少時から知らされたという。忠子の夫である後宇多院が、異例の意志を西園寺家に強行して転換をはからない限り何ともすることもできなかった。残された大覚寺統の最有力者は亀山院のみであった。経緯は省略するが、忠子は亀山院へ走ったのである。

夫後宇多院はこのことにより最後まで御子後醍醐天皇を快く思われなかったという。そこで後宇多院は後醍醐皇胤は、天皇を継がせることがないよう、文書をのこされるほどであった。

このように朝廷内が分裂し、従って武家が分裂しさらに宗教勢力も分裂して行ったのである。

ところが後伏見天皇は治世わずか三年で退位、皇位は後醍醐の異母兄後二条に移り、御父後宇多上皇の院政となり、大覚寺統の大御所亀山法皇の権限が強大化する転換をみせたので、ようやく後醍醐は十五才で親王となった。異例の遅いものであった。

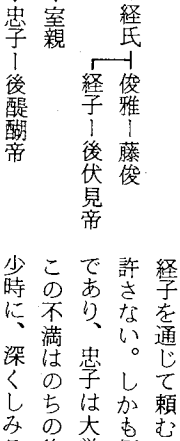
こうなると持明院統はばん回のため、幕府への働きを執拗にくり返したので、閉口した幕府は、双方から皇太子を交互に立てる方針を奏上した（文保元年の和談）。しかし争いはつきず後醍醐の立太子にあたって、先のようなその皇胤が天皇につくことをこばむという条件をつけて同意するというようなことも起った。

正中の変

後醍醐天皇は即位しても後宇多院の院政が続く限りは、政治の実権はとれない。しかも皇太子は出せないから、上皇としての院政もとることはできないということになる。

そこで後宇多院政下でも、公卿殿上人ーつまり官僚ーの任免については天皇の発言力が強かったので、文保二年即位後からは、四十六人の公卿の半数に近い公卿の交代をはかった。持明院統の公卿の辞任である。

しかし皇太子は後二条天皇を押す幕府への働きが強かったので、大覚寺統内が二つに分れることになった。こゝで後醍醐天皇の側近はまず幕府の出先である六波羅襲撃の計画を立てた。天皇の幕府不信のあらわれであるとともに、天皇親政への願望をも



つ人々の画策であったが、これは失敗に終った。

山伏（修験者）集団

修験道には二つの派がある。当山派と本山派である。儀式の仕方に多少の差があるという。当山とは大峯山を意味し、醍醐寺の三宝院が当山派の中心になっている。本山とは熊野のことで寺院は聖護院が拠点である。これは天台宗派に属し、醍醐寺は真言宗派である。東国は京都比叡山によって、本山派（熊野）の影響を強く受け、西国は圧倒的に当山派（大峯）であった。

山伏は行者で関所の出入は自由である。山伏はそれ自体が武装集団即ち僧兵となる。本山と地方の勢力との秘密裡の通信もうまくゆく。後醍醐天皇とその近臣たちは、はじめて山伏たちを政治目的のために大規模に活用することを考えた。鎌倉幕府に軍事的に対抗するためには、幕府に不平をもつ武士たちと、あとは宮廷につながりの強い寺社勢力が頼みの綱であった。宮廷と寺社勢力とのつながりは荘園によって強いものがあった。

（この詳説は別の機会にゆずる）

以上のことを念頭におくと、文永ー弘安の役の折にこの地方に届けられた、上皇・天皇の願文のねらいがわかってくる。また後醍醐天皇が即位の年、高田寺へ天皇寄進をしたのも、本山派の山伏への期待もあった。三処郷（高田寺のある）は大覚寺統の領地であった。岩屋寺は真言宗であり当山派であった。山伏も当山派と本山派がそれぞれ武家勢力と公家勢力に分れていた。やがて当山派が北朝側に、本山派が南朝側へと流れてゆく。建武中興後、高田寺やその近くの大領神社には天皇の寄進があり、岩屋寺にはない。三処郷は後醍醐天皇に忠勤をした篠川郡の鰐渕寺の僧頼源の所領にまかせられるというほどであった。

こうして岩屋寺をはじめ横田庄は、当山派・武家派・北朝派の色彩を強くして行ったのである。そして岩屋寺対高田寺の争いにも発展して行くのである。これは次回において。

たたら製鉄早わかり

近代製鉄法（中）

銑鉄の製造（第1段作業）——前37号の図参照——

高　炉（溶鉱炉）……巨大な設備（外側ー厚い鉄皮・内側ー耐火煉瓦）

① 炉　頂 から原料を投入

② 炉の下部 の30数個の 羽　口 から 熱　風 吹きこむ

- ○温　度　羽口附近で2,000度
- ○熱　源　高炉頂から排出する高炉ガス
  これを熱風炉2基で交互に操業して送る
  最近は高圧操業で一重油・天然ガス吹込みで

③ 炉内の化学変化

鉄鉱石は不完全燃焼したコークス ——から発生した {炭酸ガス / 一酸化炭素} で　間接還元（酸素とる）
　　の中の　炭　素　で　直接還元（　〃　）

④ 状　況
- 鉄滓は　比重軽く　浮かぶ
- 溶融状の銑鉄は　湯留り（高炉の炉底部）に落ち集まる

⑤ とり出し
- 3～4時間毎に　鉄　滓　出滓口から出す
- 次に　銑　鉄　出銑口から出し　取鍋（とりべ）に

⑥ 銑鉄は
- 一部は　鋳銑機にかけ　鋳物の原料へ
- 大部分は　製鋼工場へ　鋼をつくる

◎ 銑鉄1トンをつくるに要するコークスの量を　コークス比と呼ぶ　比の低いほど成績がよい　外　国　700～600㎏
日　本　451㎏　（昭和46年）
日本は世界一，
日本最大の高炉は　日産能力10,000トンで　世界一を誇る

◎ こゝまでと砂鉄製錬（①②③）による　銑　鉄 づくりは似る
（第1段作業）　（第1段作業）

以下第2段作業（次回にくわしく）

① たたらの銑押法　赤目砂鉄と木炭 ——→（溶融・還元）——→ 鉄　滓 / 銑　鉄
4昼夜で
→鋳物工場へ
→大鍛冶屋で包丁鉄に（普通鉄）

② 鳥上木炭銑工場　真砂砂鉄と木炭 ——→（溶融・還元）——→ 鉄　滓 / 銑　鉄（木炭銑）
→電気炉で 鋼 に

③ 安　来　工　場　真砂砂鉄を化学操作→（溶融・還元）——→ 鉄　滓 / 銑　鉄（海綿鉄）

◎ 日刀保鈩（靖国鈩・鋼押法）は別
真砂砂鉄と木炭 ——→（半溶融・還元）——→ 鋼　塊 { 玉鋼 / 銑 / 鉄　滓 }
炉内温度1,200度程度で3昼夜
→銑は昔は大鍛冶屋で包丁鉄に

横田町古文書庫収蔵文書解説②

岩屋寺

大分類(16) 社寺の部

⑨ 島根県仁多郡横田村岩屋寺蔵文書

中世文書を中心とする岩屋寺の根本史料である。

⑩ 岩屋寺古文書（快円日記）

大永・天文年間は、源平合戦終末期、十三世紀の三処氏の横田庄押領、十四世紀末の明徳の乱とともに、横田の歴史にとっては四大激動の時代である。この時代は尼子氏が三沢氏を押さえるために、藤ケ瀬城を二度にわたって攻撃した。その余波をうけて岩屋寺は焼失したのである。傑僧快円は殆んど生涯を通じて復興に力を尽した。その記録、工事経過を誌したものである。

ただし記録集であって、整理して読む必要がある。当時の社会情勢も記してあって興味深い。

㊸ 岩屋寺略由来記

㊹ 岩屋寺由来記

由来とともに仏像等の寄進者等も記してある。

㊺ 大永年中古記録

快円日記に書き残ったものを集めたものである。

㊻ 岩屋寺蔵文書

⑨の文書とともに、中世文書を中心とする根本史料である。

㊼ 諸社棟札写控　岩屋寺

㊽ 従金蔵山諸社棟札写控

郡内の関係神社の遷宮において、導師としての参列の記録を含む棟札写であって、当時の岩屋寺の寺勢を知ることができるとともに、棟札によって、当時の村役人等の状況を知ることができる。

㊾ 八幡宮祭礼社参事神式録有之年中雑記録　岩屋寺

祭礼における岩屋寺、八幡宮、大催杠氏とのかゝわり合いがわかる。

この問題については、馬場八幡宮、杠(表)、絲原の諸文書の中に多数あるので「仁多郡誌」の記述を頭の中に入れておいて渉猟すると興味が深い。

㊿ 大呂鬼神遷宮式記録此中ニアリ年中行事記　殿様御参詣沙汰有之処御延引　岩屋寺

(51) 年中行事記　岩屋寺

(52) 過去帳　岩屋寺

行事ならびに、歴代住職等の大方の記録がある。

以上が岩屋寺のものであるが、

① 横田八幡宮棟札写

ほか郡内各神社の棟札写も貴重な史料である。

その他

大分類1. 杠(表)の記録

大分類8. 絲原の

(114) 古代よりの聴書（上）

(115) 古代よりの聴書（下）

の中にも貴重な記録が含まれる。

大分類3. 杠(山本)の

② 杠日記　の中にもある。

以上のものの中の重要なものは

島根県横田町誌

仁多郡誌

島根県史　（以上蔵書）

新編島根県史

に収録されている。

そのほか、

石清水八幡宮古文書（町誌にすべて転載してある）

京都泉涌寺・雲龍院・六波羅密寺等の文書の中にもある。

このほか徳川末期から明治期の文書が未整理のまゝになっているのは惜しい。貴重なものがある。

本誌のこれまでの記述に以上の中のものは大いに生かされている。原典にあたって、じっくり研究をされることをおすゝめする。

さきにあげて、当横田の四つの激動期を中心とする歴史は、まだまだ掘り下げる必要がある。

そのためにはその時代の当地以外の地方の史料はもとより、中央の戦記、日記の渉猟が必要である。若い好学の士に期待したい。

歴史とともに育った伝統行事

復活の糸口はないものか㊤

のぼりはりあい

今から四二〇年前の天文年間横田の町が生まれて間もなく、藤ケ瀬城下の六日市・大市（当時六日市が中心で戸数同じ）が、住民の尚武の慣習として生み、育てたものがこれである。武士階級の主導による新興の町として盛り上がりもあった。

数日前から両町は、それぞれ他部落へ若者が麦わら集めに出かけた。味噌醤油の自給自足時代であるから、原料の麦はあちこちで作られていた。前日からは婿も嫁も両町の実家へ帰って協力。その集めた量は秘中の秘。当日は作戦上手に、長時間たき続けた者が勝ちであった。お互いに川を渡っての偵察、ぬきとり、遂には石合戦に発展する勇ましいもので、とらえた覆面の男をよく見れば我が家の婿という話もあった。明治中期に広瀬町から、この行事買いたいと交渉があったが、誇りは捨てられんと拒絶したという。大正になると両町の東の土手には家が建ち並び、遂に中止したという。

その後は子供の「兵隊ごっこ」として長らく残っていた。今日らしく両岸の広い土手から、広い川に向っての花火競演大会などは如何なものであろうか。山上さんの夕、子供行事として楽しさと色どりを添えては。

印刷実費一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字・糸原風亭書

第39号
7月号
昭和53. 6. 1
奥出雲文化協会

庶民の哀歓が育てた伝説②

和泉式部

なぜ高尾は美化されるか

前回の高尾の話をもう少し。仙台高尾と紺屋高尾、前者のお相手は遊惰な大大名、後者のお相手は実直な市井（しせい）の職人。そしてあまりにも悲惨な話と、夢のような幸福な結末。極端であるが共通点もある。どちらも高尾が男の金や地位や肩書きには目もくれなかった。一人の女の生き方をつらぬいたという点である。どちらも架空なはかないつくりばなしであったということも、また共通である。これはこの地の高尾の話にも共通である。しかしほんとうに、なけなしの金をはたいて一夜の歓を求めにくる客たちの身になって、いぢらしいほどの心意気をつくしたのは、大夫ではなく、肩書きも称号ももたない下級女郎たちだった。遊里の女の存在価値はその心意気にあって、こうしたものは近代までも続いていたという。

大夫職も全盛だったのは、徳川幕府が大名の江戸詰を強制しそしてその余韻のある時代、寛永～享保時代であって、七十五人もいたが、宝暦になるとたった一人になる。格式ばったものが、人々の心からはなれるほど、時代は進んだのである。この位で高尾は。

仁多町大内原にある墓

亀嵩駅の西方三〇〇mの山の手に墓地があって、文化十一年とある。和泉式部の碑があり、並んでその子小式部内侍の墓という、長丸い小さい碑がある。話によると近くに戦前は小さいほこらがあって、和とぢの短歌をしるしたものが、おさめてあったが今は行方知れずという。

和泉式部の墓は各地にある

京都府相楽郡木津町の春日神社に墓があり、そこには「式部堂」があり、誕生地とする説は有力である。鳥取市湖山町の「和泉式部の胞衣塚ーえなつかー」（胎児を包んだ膜と胎盤）は式部生誕の地を強調するためのものであるという。しかしこれを傍証するものは一つもない夢のような話である。尾道の向いの向島の向東町の西金寺の裏山に墓があり、丹後の宮津市山中には和泉式部の屋敷跡と伝えられるところに墓石がある。式部の夫藤原保昌が丹波守となって下ったことに関係がありそうという。今日安産の神さんとして親しまれている。話では道端でにわかに産気づいて苦しむ女を、通りかかった式部が助けて、ことなきを得た。それで式部は村人たちには産婦の守護神として記憶されているという。

このような話や墓所は北は北海道から南九州の南端まで、二十数ケ所にもわたってあるという。

和泉式部の略伝

父雅致は長徳二年（九九六）に大皇太后宮職官吏であって、一かどの学者で歌の道にも通じていた。母保衡女は昌子内親王の御乳人であった。妹があって少女時代はやゝ上の経済状態の家庭ですごし、女としての学問も十分にうけ、歌道には天賦の才をもっていたという。生れたのは天元元年（九七八）といわれている。宮仕えし十八才のころ橘道貞と結婚し、一子小式部内侍を生んだのは二十三才ころであったという。道貞は任国との往来がはげしく、京都に住むことがすくなく、不在中の誘惑も多かったという。

年下の為尊親王とむすばれ、その死後その弟敦道親王と結ばれたがまた先だたれた。「和泉式部日記」はその愛情の記録という。そこにのる一二〇余首の歌は哀傷の挽歌である。やがて藤原道長の家司藤原保昌と結ばれ、任地の丹後国へおもむいた。次には大和国へもおもむき、摂津国にも移った。このころ（万寿二年）娘の小式部内侍は二人目の子を出生してなくなった。道長は和泉式部を「うかれ女」と評した。色好みの世界に素直にこだわりなくおもむく女であったらしい。多くの男に愛され、男のあこがれであった。

こうしたことが、女たちが時代を下って遊び女として諸国を流浪しはじめると、その口から歌とともに伝えられたともいわれる。長元九年摂津国で保昌がなくなり、このころ式部はあとを追うようになくなった。

歴史と文学と民俗の中の式部

和泉式部はこの中でみえかくれしている人物である。実在したことは歴史的事実で、生存中からそれに続く時代に編集された勅撰和歌集、拾遺和歌集と後拾遺和歌集に作品があり「和泉式部日記」があり、同時代の「紫式部日記」にも和泉式部のことがある。ただ生没の年があいまいであることも事実である。

ところが民俗的和泉式部像となると、極めて豊富になり、それも娼婦型の女性として登場する。柳田国男が集めた話も全国各地にあることをしめしている。

なぜこうなったであろうか。その説を紹介する。

かさやみ式部

瘡（かさ）を病んで零落し、九州の各地を漂泊したという式部がある。かさやみ式部という。このかさやみ式部の話を運びあるいたのは、下級宗教者とくに歌比丘尼（うたびくに）たちであることは定説である。彼女たちは自分が和泉式部のなれの果てであるという形で、民衆に語りかけてあるいた。こうした伝説話は種々あるが、民衆もそういう語り口を歓迎したのである。

古くはライ、重い皮膚病者たちの多かった時代の民衆にとって、かさやみ式部は守り神であり救済者だったが、話を運ぶ来訪者としても、旅の聖（ひじり）既述）たちは、民衆から喜び迎えられ、今日までその伝統が語り継がれて来たということは、いつの時代にも社会の底辺に追いこまれて、貧しく見捨てられてきた民衆の負う「かさぶた」をやわらげた者は、かさぶたの式部たちだったからであろう。

日本のいくつかの貴種流離物語と民衆との結びつきは、かつては貴族社会や支配層の偶像であり専有物だった武士や歌人で民衆は自己解放のための自在な手がかりにしたのである。それは生活にあえぎつつたたかう者である民衆の活力に満ちた創見でもあったといえよう。

かさやみ式部信仰も、ほかの民間土俗信仰と同じように現世教で、現世での利益と、反利益である現世での罰を逸れる願いの対象であって、後代の寺伝仏教のように、未来とか来世とかをほとんどいわない。民衆はどんな絶望的な現実に立たされても、決して絶望しきらずに生続ける生命である。そうでなかったら、現不尽と非道の横行した歴史の中で、人類はとうに亡びつくしていたのに違いない。現世利益に徹する者である民衆は同時に永生の命を失わずくりかえし再生を持続するものである。ことさら来世などを願う必要はない。

式部伝説はこのようにしてつくられていった。和泉式部のなれの果てとなって、多くの旅の歌比丘尼の殁したところが墓となり、庶民の病の守護神ともなりまつられたのである。また幸か不幸かみごもった歌比丘尼の子は、また小式部と称せられたのであろう。

小野小町

平安朝の女流作家は例外なくかしこい女である。心がやさしいと思ったら美人と思いこんだものでもある。

小野小町は九世紀の六歌仙の中の唯一の女性である。生死ともに不明で、知恩院の傘のことはよく知られている。四人の男性歌人と歌の贈答があるから、実在はしていたものである。絶世の美人であった。

小野族は全国をしきりに移住してあるいた家筋で、神官を名のる人が多く、また文才に長じた女性も出ている。小町にも全国にわたって数えきれないほどの生地や墓地がある。唯ひとりの女性ではないという説も古くからあった。小野族の人々が、移住した先々で伝説化したのである。小町の「マチ」は神に仕える「巫女ーみこー」の意味があり、もとは宗教家であったが、遊芸の徒として全国を歩いたため、小野伝説は全国にひろまったともいう。そうして各地方の美貌の巫女たちに与えられた名称となり、町の美しい娘にも小町がつけられた。

このようにして全国に伝わった話は数が多い。

森山庫市さん

森山庫市さんがなくなられた。前の日の夕方庭に出て気分が悪くなり、そのまゝ床にふし翌朝息をひきとられた。一週間ほど前に話が聞きたくて立ち寄ると、田圃の休耕地の畑で草とりをしておられた。丁度よいと田のけたに腰を下して、しばらく話こんだ。まだまだ記憶はたしかであった。

横田史談会員の中では最高年令で、しかも若い時から一貫して郷土の探究者であって、このことでも最年長者であった。

八十四才の今日までこのことにいつも心を掛けてこられた。郷土史家ということばより、私は民俗体験者ということばが適切であると思っている。変った呼称である。民俗学者が大切にし貴重な人とする意味である。郷土の古代のことも、中世のことも、また近世近代のことも、すべてこの眼でみ足でたしかめ、はだで触れまた感じなければならないとし、それをそのまゝ自分のものとしておられた。自分の勝手な判断や憶測はつとめて排するという態度である。今日はとくに自分の考えを入れて面白くしかも大げさに話したがる時代に、潔癖なまでにそれをさけられた貴重な人であった。

記憶だけでなく、それを文章にすることがうまく、誇張なく忠実に表現されていた。いろいろな記録を頂いて大変に参考になり、安心して利用させていただけたのである。

主観を排する態度であったから、戦時中の皇国史観から戦後史観にかわっても、一八〇度の転換におどろくことはなかったようである。真実の事実がかわるものでなかったからである。

こういう態度の上で本を買求めておられた。実際の記録か、それをどうみるかという本に重点があったし、相当程度の高いものを求めて、自分の民俗体験を確実にしておられたのは、ずっと前から敬意を表していた。

こゝ十数年来は民具のしゅう集に小使を投じたりして走り廻り、数百点もの民具を集めて町へ寄附されていた。専門家からみれば片寄りもあったであろうし、落ちているものもあったで

あろうが、それはやむを得なかった。手あかのついた私ども祖先の使った生活用品や生産用具を失っては、私どもはどうして今日あるかということがわからなくなってしまうという考えが基本にあった。素朴な表現であるが、これは歴史の根本にふれるものであり、人間の存在の考え方の基本の問題をふくんでいる。頭で考えたことでなく、自らの体験がそういわせたのである。

このようなことを葬儀の時に会を代表して焼香して霊前で語りかけさせていただいた。

こういう常民が次第にへってゆく、貴重な常民の一人を失った。

民俗学について

この機会に民俗学というものについて、ふれておきたいと思う。今日の私どもの生活や、くらしの文化に対する、反省の材料、積極的には指針を与えてもくれるものであるから、

昭和五十年は民俗学の祖 柳田国男の生誕百年にあたり、国際的シンポジウムがわが国ではもとより海外においても行われ、急に柳田氏の業績がその民俗学が大きく注目を集めた。

日本人の自己認識の学といわれる柳田学は、単に民俗学にとどまらず、史学、文化人類学、国語学、国文学、言語学など周辺の人文科学にまたがる広がりをもつだけに、いやが上にも関心をよんだ。

しかも重要なことは、柳田学は戦前の学者的な歴史に一つのあいくちをつきつけたものであった。民衆を落してどうして歴史といえるかということである。

そして六十年安保後、それまで信じていた戦後民主主義の理想がざ折し、認識の誤算に気づいた指導的な理論家、思想家の間で、柳田学がかへりみられた。

さらに六八、九年の大学改革論争のあとで、学生たちは異議申し立てはしたが、答えを引き出すことはできなかった。どこが足りなかったかという反省が、土着の思想である柳田学へむかわせたということもあるといわれる。このことは西欧において

たたら製鉄早わかり
近代製鉄法（下）

鋼の製造（第2段作業）

—— 第37・38号参照 ——

第一段作業でできた
銑　鉄
くず鉄

→ 炉（転炉，電気炉，平炉の3種）

溶かして
酸化燃焼 → 変化
- 炭素C　量へらす
- 不純物　除　去（珪素，マンガン　燐，硫　黄）

→ 鋼

用途により
圧延・鍛造
をする

炉 1 種　転炉（LD転炉）
— 高純度超高圧の酸素の吹上げにより酸化燃焼
（不純物少なく良鋼，精錬30分間の高能率
設備費比較的安い　わが国の施設の80％　48年度）

炉 2 種　電気炉
— 電流で溶解し、酸素を用い酸化燃焼
（特殊鋼製造によい　わが国施設の17.6％　〃　）

炉 3 種　平　炉
重油などで加熱溶解し、石灰石，蛍石を添加
（諸外国に多く　わが国　2.4％　）

日刀係たたらは1段作業（3昼夜の炉作業）で 玉鋼 ができる
しかし半溶融状態の未熟品のため
鍛え鍛えて（脱炭し）はじめて日本刀に（科学的究明はまだ）

も気付かれているという。最近では明治以降の「脱亜入欧」の日本の近代化は、日本の農村の解体を強力に押し進めたという反省とともに、そのために用いた立派なものと思っていた西欧の理念や理論は、実は今日すでに破産してしまっていたということも反省され、そこで荒廃した現代社会において、もう一度村の民俗、稲作を根幹とする社会の再認識に解決の道があるではなかろうかという模索が、しきりと進められているという。

さる出版社が、江戸時代の農業技術ー水利、栽培、病虫害ーや農具、天候に関する記録を意欲的に発行しているが、第一線の農村実際家の間で、しきりに求められ読まれているということは、こうしたことを肌で感じ求めていることのあらわれであろう。

しかし民俗学にも問題はあるようだ。宮本常一（最近この系統をひく研究者がしきりと横田を訪れて調査し、この地を舞台に農村の人々を培った心を掘り起そうとしている。）は農業をしらべる時、柳田は農業の全体をやらずに、農業に関する語い（ことば）だけを調べ、語い集を作るにとどまって、語いにあらわれない地域の人間の暮らしや歴史を相手にしなかったといっている。

また有賀喜左ェ門は、自分たちは一カ所に長年とり組んで、その地域全体を社会学的にとらえようとしたが、柳田学派はそうしない。数少ない訪問と短い滞在で民俗誌を作っているので、地域の移りゆく姿がつかまえられない。地域の全体性とその変容までとらえなければだめだと言っている。

渋沢敬三は文献や民具を使って、心からだけでなく、モノからも心を攻めることも、せまることもできるとしている。

かっては民俗学は明治二十年までに若い時をすごした人でないと、保存にまちがいがあるとされていた。そのころまではまだ江戸時代生れの人がほとんどであり、その時代の生活が残っていたからである。

明治二十年の町村合併、日清戦争後の産業の発達は、古い生活を習慣をくずしはじめた。しかし伝承をつたえる家や社会は依然として健在であった

ところが敗戦後には家の観念と制度が変革されてきた上に、第二次産業革命ともいえる、三十年代以来の高度成長産業経済の進展は、ついに伝承母体ともいうづき社会を変えはじめ、まだもちこされていた残存文化はあっけなく消えることになった。さらに家業と仕事場の分離、サラリーマンの増大、そして子どもの手伝いの消滅は、家族間、世代間、地域共同社会の間の会話もとぎれさすことになり、加えてマスコミの発達による情報のはん乱は、「うらんかな」と興味本位で、常民の伝統を後世に伝えてゆくことを不能にしてしまった。もっとも不適格な社会性格になった。

古老を相手として常民の生活慣行や心意伝承を調査する民俗学の基本がくずれようとしている。このことは民俗学に、これからの人間の生き方のよりどころ、指針を与えてくれることを期待する方向とは、逆なことになったことをあらわしている。複雑な世の中になったものだが、求めるものは求めねばならない。

私どもが見失ってしまった、日本の心をみつけ出さねばならない。私どもはまず私どものまわり、足もとにあるものからみつけ出さねばならない。それは私どもにできるし、私どもにしかできないことであるし、大切な仕事である。民具、民話、遺跡、遺物、出土品、文書の中に、私どもの地域の歴史の一こま一こまがかくされている。それを集めることによって、地域のこころ日本のこころがよみがえってくる。地域づくりの糧となる。

今日ではとるに足らぬようなものと思うことの中に、かっては最大の意義と誇りもみいだしていたものがある。その生き方が大切である。

この地方の最大紙のこうしたことへの紙面を拡大されているのはこうした動きえの同調である。「梅干と日本人」「こめと日本人」「稲作文化と日本人」と相ついで、民俗学と歴史学にもとづく書物があらわれている。時代おくれとほったらかしたものに、貴重なものがあったことを知らせてくれる本である。

歴史とともに育った伝統行事
復活の糸口はないものか㊥

原口の笠踊り

徳川初期の記録に、すでに近隣に聞えた踊りとしてのっている。原口地区は今日と同じく水不足に、往時も悩まされていた。

用水池の増加とともに水田がふえたところで、町内でも池の多いこと、また畑の水田化の最も遅れた地域でもある。そこで雨乞いのために、この踊りが里人によって執念深く護持され踊りつづけられた。伝統的踊りとして是非復活を望みたい。

安部宏 作陶展（第三回）

七月一、二、三日　三日間
よこたショッピングセンター
階上催場

研究作品「白磁、青磁」や、民芸調のもの、日用品まで多彩を展示。今回は特に県内同志の青年陶芸家の作品の友情出品も。

主催　横田くらしの文化愛好会

横田史談会篇「あるく・みる・横田」

自然、歴史、文化財、くらしの文化を、地図、写真、年表を交えて紹介（五十数頁）

七月十五日から実費にてお分けします。定価は部数により決定

一五〇～一八〇円位

配布は奥出雲文化協会にて。町内各所にて。

印刷実費一部百円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第40号
8月号
昭和53.8.3
奥出雲文化協会

横田の六部さんと

経筒・経塚

六部（ろくぶ）と行者（ぎょじや）

六部はくわしくは六十六部といい日本六十六カ国を巡歴し、国ごとの神仏の霊場に、法華経を一部ずつ奉納しつつ修業する回国行者をいう。その発生の契機には巡礼と同様のものがある（後述）。たゞこの六部に対しては、客人神信仰にねざす御摂待の観念（札打ちにおけるおせったいのようなこと）はあまり強くよせられない。巡礼が民衆の側からの必然的要求によったものであるのに対し、六部が行者自信がはじめたものであるからであろうといわれる。

行者とは——宗教上の修業者で知識で理解するより実践を重視する考えから生れたもの。

○修験道では、大峯行者、熊野行者といわれ、山岳で特定の練行をうけたもので、始祖は役小角（えんのおづぬ）で役の行者といわれた。

○伊勢講や熊野講など民間信仰で、代参を送る場合、一定期間小屋にこもって修業するものも行者という。

○生きながら墓に入り、念仏しながらの死の念仏行者などがあった。

はじまった時期は巡礼が早く、やゝおくれて鎌倉時代後期といわれている。江戸時代にはすこぶるさかんで、六十六カ所の霊場や巡拝の巡路もこの時代に固定したという。

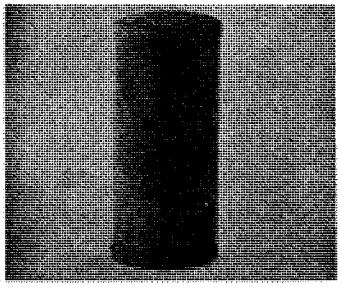
六部の本質は人の没後の冥福を祈り、菩提を弔うところにあったが、近世には物見遊山のようになり、売僧、贋僧の物貰いに堕したものもふえた。農村などに、この地方にも五〇年も前ころは多かったが、白衣にいわゆる六部笠をいたゞき、仏翁（ぶつがん——仏像を入れたずし（箱））を負うて、鐘、太鼓を鳴らしてはいって来た六部の姿は、むしろ薄気味悪い感じもあった。「子とーぞ」とか「きもとりしんがん」だといわれ、幼い子のやんちゃのおどしにつかわれたので、そういう印象になった。

巡礼（遍路）

定まった順路で聖蹟に参拝すること（日本だけでなく、印度でも、キリスト教・マホメット教の国でもある）その人々のことをいうが、四国では遍路という。中世後期から近世に入って一段と盛んになった。

そのはじめは平安中期ころといわれる。寺門派の行尊が一五〇日をもって、三十三カ所観音めぐりをしたのをはじまりとするのが、正しいようである。

法華経の観音品にもとづいて三十三カ所の霊ある観音を選んで巡拝し、観音にすがっておのれの苦しみ悩みの救済を願ったもので、修験道の行と根本は同じであり、難行苦行を要求したから、乞食をしてまわることもそのため必須のこととされていた。それに庶民の間にあった、よそから訪れてくる客人神をあつく迎えて接待する原始信仰が結びついて、巡礼への庶民の摂待、寄捨の奉仕になり、そして観音信仰の大衆化普及化と、つつましやかな老幼男女（行者はかつては健康な男性であったが）が、おのおのの負い目を負って、順礼していく姿に対する同情心が、巡礼（室町時代末までは順礼とかく）の美風を育ててもいったのである。近世になり旅行の道が発達すると、普及とともに遊楽観光旅行と化するものもあらわれはじめた。



銅板製経筒（京ケ崎経塚出土）

経塚

経典を書写して供養し、これを経筒に入れ地下に埋納して塚を築いたもので、平安時代の中ごろよりおこなわれた。その考えの背景には経文の書写功徳以外に末法思想があった。すなわち釈迦入滅後、五十六億七千万年までは次第にこの世は乱れるが、のち弥勒（みろく）菩薩があらわれて救済される。

その時まで経文を伝えようというのである。その後極楽往生の結縁を願い、また現世利益を願うほかに、追善供養のためにも経塚がつくられるようになり六部にたのんで、本願の代参をしてもらうようにもなっていった。従って経塚には代参のものが多く納められるようになった。このことは江戸時代まで続いた。

起源は藤原道長が奉納した一〇〇七年のものが最も古いといわれている。中国にはなくわが国独自のものである。経塚には、単一経塚、複合経塚、経塚群などいろいろある。

経筒

経文を納める容器で、金銅製銀製、鉄製、陶製、石製があり銅、鉄製のものは、鋳製と板製

がある。銅鋳製のものが一番経文の保存がよいという。室町時代には銅板製経筒が全盛となる。大きさは平安末には七、八寸のものであるが次第に小さくなって、室町時代には三、四寸となり、経筒の外面には銘文を刻したものが往々あるという。

経典は法華経が圧倒的に多く墨書がふつうで、血書などもあるという。塚の上に五輪塔や宝筐印塔を立てるものもあった。

さらにいろいろの器物を合せ埋めるものもある。銭貨、仏具、装身具などで、日本工芸史上みのがせないものもあるといわれる。現在判明した経塚は五〇〇カ所をこえ、青森から鹿児島に至るまで分布し、とくに九州北部、近畿関東が密である。

ほかに特殊なものとして、瓦経、滑石経、一字一石経、貝殻経、柿（こけら一木片）経などいろいろなものもある。

京ケ崎経塚群

町内竹崎の中籾にあるもので、横田盆地の東端に近い標高四〇〇米あまりのところにある。経塚は水田にむかって突出した。巾一〇m、長さ三〇m余りの小丘上に計五基が群集している。いずれも経二〜五m、高さ〇・五〜一mの円形の盛土をもち、表面には礫が一面にしいてある。銅板製経筒は三号経塚、四号経塚の中間に露出していたものである。県下では数少ない経塚群の好例として注目される。（この項は風土記の丘発行「山陰の仏教考古」から）

経筒の銘には

九劫日向国　敬
十羅刹女
奉納大乗経王一国六十六部空妙
三十番神
天文四年今月日　白
（一五三五年）

六十六部四国聖が日本全国を訪れたのは室町時代が最盛期で、民間信仰と結んで盛んになった。そしてより簡単な奉納だけですます新しいものが工夫され、代参や小型化がおこった。この地のこものはそうした類であろうといわれている。天文四年はこの地では三沢氏が尼子経久に押さえられはじめたころで、馬木の杠氏がたたらを吹きはじめたころである。国内は各地の大名が幕府の失政に乗じて、それぞれ近国を侵略している時代である。

県内では太田市の南八幡宮に経筒六〇口ほかが多数出ている。こゝのは永正一七年（一、五二〇）のものである。

横田の六部さんの記録

町内福頼の大廻家の墓所に写真の墓石がある。

全国社寺奉仕執大僧位
寛政四子年五月十二日亡
（一、七九二）

この人は六部として全国を回国した人といわれている。その時もちあるいた鐘が一つ遺品として残っている。俗にいう伏せ鐘で、銘に

（一、七一三）
正徳三発己年八月吉日
長谷川彦左衛門
室町住出羽大掾宗味作

安永五申天任教求之
（一、七七六）

この人は鐘つきの名手として、全国に名を売った人でもあったといわれる。丹波国の養沢寺にいき、いきなり鐘をついた時、そこの住職がその音律の美しさに、「あれは出雲の念蓮部であろう」といったという、言い伝えが残っている。度々諸国を廻った人であることをあらわしてもいる。

このころはすでに経筒を経塚に納めるという風はすたれて、巡拝読経が中心の行となった時代である。

（この項についての調査は、会員鉄池正治、写真は会員佐世川徳雄の皆さんの労をわずらわした。）

西ドイツのボン大学で

この小誌がボン大学で、講義や研究の資料として、役に立っているという便りを、パワー先生からいただいた。度々この地を訪れた方で、日本の農村や製鉄史のことにくわしい先生、出雲の方言も話せる先生。お若く美しい奥さんは現在「海外日本語講師研修会」出席のため日本に滞在中です。

横田地域史のしるべ⑤
横田庄（中の上）
明徳の乱前夜まで（一四世紀）

北条氏領有時代

文永八年北条時輔領となるとその実母尼妙音を通じて北条氏の勢力が浸透した。八幡宮が馬場に移され、神宮寺として岩屋寺の寺勢も上る。公郷の中で西園寺は関東中次役として幕府との交渉にあたり、持明院統（のちの北朝）と北条氏との結びつきを深めもした。尼妙音の岩屋寺への寄進が続いた。上皇、天皇とも持明院統であった。今日岩屋寺、横田八幡宮の宝物で尼妙音寄進のものは、このころのものであろう。やがて横田庄は北条氏とも縁の深い鶴が岡八幡宮仮殿造営料所（正和四年焼失五年遷宮）、ついで京都六波羅密寺造営料所（文保三年焼失）に寄進された。横田庄の鉄による、工具と金具の作製を必要としたからである。

文保元年の岩屋寺文書によれば内裏料とある。全二年後醍醐天皇が即位すると、石清水八幡宮横田庄の八川の一部が、岩屋寺院主祐円の声望にもこたえて一町五反寄進された。南朝のまきかえしであろうか。

元享元年天皇は親政をめざして後宇多上皇を法皇として院政を廃し、武士勢力の地盤となる荘園を整理するために記録所を設けて、討幕の計画もねったが計画が露見し失敗してしまった（38号参照正中の変という。）

元徳二年、こうした中央情勢の動揺が地方荘園に波及することを恐れた持明院統では、院の非蔵人役人であった安部野氏（のちの安部氏）を代官として横田へさしむけた。（35号参照）

元弘元年、元弘の変がおこると天皇は笠置へのがれた。光厳天皇（持）に神器が移り、後伏見上皇の院政がはじまった。これがのちの北朝へとつながった。翌二年後醍醐天皇は隠岐へ移された。

翌三年（北、延慶二）伯耆の名和長年の協力によって京都へ還幸、光厳天皇（持）は上皇に後伏見上皇（持）は法皇となり、院政は廃された。祐円の精誠を期待し後醍醐天皇の綸旨が岩屋寺にも届いた。

建部中興から

元弘四年から親政が軌道にのり建武元年と改元された。天皇は横田庄ー内裏御料所ーをふたたび石清水八幡宮へ寄進するとともに寺領を安堵し、岩屋寺院主祐円の歎願にもこたえた。ところがその年まもなく再び内裏御料所となり寺領も安堵されている（岩屋寺文書）。これはどう解釈すればよいか。この地が持明院統の御料所であったため、武家を背景とする岩屋寺が後醍醐天皇（大）方に好意をよせず、（真言密教系の当山派に属し、武家派、北朝派にも属していた）足利尊氏の勢の良いのに従い、持明院統に加担したものと思われる。

尊氏は湊川の戦で勝ち光厳上皇（持）を奉じて入京し、光明天皇（持）をたて神器をひきついだ。この時の出雲守護塩冶氏もまた近くの三刀屋氏も尊氏方に味方した。このころの三沢郷地頭三沢氏は二代為常のころで一族が郷内各所に住んで地盤づくりに力を入れていて、統一してことにあたる状況ではなかった。馬木郷は湊川の戦に足利方で戦功のあった備中の信原氏に、地頭職が与えられていた。

三処郷の地頭は明らかでないが、高田寺根源録によれば、聖乗は船上山に召されて後醍醐天皇の綸旨をうけ、大領神社の神主右門は名和長年から郷中の刀剣集めを命ぜられ、のち大塔宮の熊野落ちにも従ったという。中興にあたりそれぞれ寺領社領の寄進をうけた。三処氏につい

㊀は大覚寺統　㊁は持明院統

1271	文永 8	横田庄北条時輔領に
1281	弘安 4	八幡宮馬場へ
87	10	岩屋寺へ後宇多天皇綸旨
1309	延慶 2	岩屋寺へ寺領寄進（尼妙音）上皇伏見(持)天皇花園(持)僧弘円
1313	正和 2	岩屋寺へ寺領寄近3回（尼妙音）尼妙音12月没
	正和年中	横田庄鶴岡八幡宮領へ
	〃	六波羅密寺領へ
1317	文保 元	横田庄内裏御料所へ
1318	文保 2	後醍醐(大)即位後宇多(大)上皇に
	〃	岩屋寺へ寺領寄進
1321	元享 元	〃 親政　後宇多法皇に院政廃止上皇空位　記録所設く
1322	〃 2	岩屋寺が高田寺を襲う。
1324	正中 2	正中の変　後宇多没
1330	元徳 2	安部氏代官として下る。
1331	元弘 元	元弘の変　後醍醐笠置へ　後伏見(持)
	(元徳2)	院政、神器光厳天皇(持)へ良円代官
1332	2	後醍醐隠岐へ
1333	元弘 3	鎌倉幕府亡ぶ　光厳天皇廃し
	(正慶2)	論功行賞
1335	建武 2	横田庄 内裏領→石清水領へ
	(正慶4)	
1336	延元 元	湊川の戦　楠正成没
	(北建武3)	尊氏入京光厳上皇奉じて、光明天皇(持)即位、神器も移る。天皇吉野へ南北朝に分裂、長年没
1338	〃 〃 3	尊氏将軍に
	(歴応元)	
1339	〃 〃 4	後醍醐没
	(〃 2)	

（年号（　）内は北朝のもの）

ては文永八年以降の文書には全く姿をあらわさない。中興の論功行賞により鰐渕寺僧頼源は、三処郷地頭職を与えられ、興国元年（一三四〇）、正平六年（一三五一）、全十二年と安堵されている。なお根元録によれば、元中五年（一三八六）高田寺は岩屋寺衆徒の来襲をうけ火災のため焼失し、以来岩屋寺の支配下におかれたという。

山名一族の進出時代

康永元年の岩屋寺文書によれば、横田庄は尊氏方で、因幡、伯耆の守護山名時氏（民部少輔）の手中にあった。名和長年の没後からこの地に勢力を伸ばしていた。（このころの当地方に残る古文書は、すべて北朝の年号がしるされている。）

この時、時氏の代官として庄務をとっていたのは、良円であってしばらく前から職にあった。

良円は足利の勢をたのみ、混乱に乗じて押妨していたので、岩屋寺は、山名時代に上申をくりかえしたが聞き入れられなかった。そこで寺領の収入もないので寺は滅亡するほかなく、寺僧たちは嘆いて、勤めも怠りがちである。内裏御料所であるから院宣によって良円の押妨を停止して頂きたいと上申した。

建武二年以来横田庄は石清水八幡宮との関係も全く失われていたとみえるのである。

三処郷には南朝の期待が厚かったとみえて、後村上天皇の綸旨、楠正儀の禁制が、高田寺、大領神社にそれぞれ届けられている。当地にも南北朝の対立は流れていた。

伯耆に勢力を伸ばしていた山名氏は、足利尊氏のもとで、備中、出雲の各地の濫妨を押さえて勢力を拡大し、その隣接地である横田庄にも進出し、時氏についで師義も、年表記載のように地盤をつくっていた。

混乱の二十年は不明の時代

南朝後村上天皇の　正平年間（一三四六～一三六九）

北朝後光厳天皇の　貞和、観応、文和、延文、康安、貞治、応安　（1346～1374）

の約二十年間は、北は関東から南は筑後まで、諸将は南北両朝に分れて、各地に血どろみの争いをくりひろげた。延文三年（一三五八）尊氏が没し将軍は義詮となった。この間のこの庄のことは明らかにすることができないが、応安五年の北朝天皇の安堵状と、永和三年の岩屋寺への義満の禁制から、この庄をめぐって混乱のあったことを僅かにうかがい知ることができるのみである。

驚天動地の明徳の乱のぼつ発

山名氏の勢力が増大してゆくと、遂に満幸は横田庄を横領するに至った。永徳二年安部氏は遂に代官を退いた。満幸は代官として石原氏を送り込み、下横田の三笠山におらせた。一方馬木郷へは、山名一族である摂津国の馬来郷の武士馬来氏が領主として移住して来た。

こうして、当地にとってはまさに驚天動地の明徳の乱の前夜へと進んだ。将軍足利義満と、六分一殿といわれ全国の六分一を一族で領有する山名一族との、対立へと発展したのである。

蔵屋の毘沙門堂跡の発掘調査

八月十七日から八月一ぱいかけて、ここの「たたら遺跡」が国の補助もうけて発掘されます。

中世の遺跡とみられていますが、それが確認できれば、全国ではじめての中世たたら遺跡ということになり、この方面の研究に寄与することが大きいと思いますし、奥出雲に今日のたたらが成立したことを究明する重要な手がかりにもなるものと思われます。

史談会の会員の方や興味をおもちの方は、一日でも半日でも発掘に御協力頂けば幸です。終りごろには公開説明会もあります。

この秋は全国から奥出雲へ

昨秋から脚光をあびている、「たたら復元」を契機として、関係のある会合が開かれるそうで研究者、技術者、学者のこの方面での第一級の方々が来町されることになります。何とかしてこの機会に、おみやげを私どもにも残していただくよう、計画も考えたいものです。

町立図書館に歴史関係の本が沢山県立図書館から貸出されています。御利用のほどを。

「あるくみる横田」は好評いただきました。秋には「たたら製鉄」に関するものを予定しております。

1342	興国 3（康安元）	横田庄山名氏の手に院宣（良円横妨停止の）
1343	〃 4（康安2）	祐円死す
1347	（北貞和3）	光厳院　良円横妨停止の雑訴沙汰書 3通
1349	（〃 5）	仝　上　2通
1350	（北観応2）	光厳院の院宣下る 足利尊氏の願文（岩屋寺に2通）
1353	（〃 3）	山名師義の禁制（岩屋寺へ）
1361	康安元	時義、師義、出・伯・因の兵をひきい、美作を討つ
1372	（北応安5）	後円融天皇(北)即位の翌年仙洞御料所安堵
1376	（永和2）	師義死し時義つぐ
77	（〃 3）	岩屋寺へ禁制（足利義満　）
1381	（永徳元）	安部氏代官をしりぞく
83	（〃 3）	時義、岩屋寺へ安堵状
	（至徳2）	〃　馬場八幡宮本願
	（〃 4）	〃　岩屋寺へ寄進
89	（康応元）	満幸　〃

印刷実費一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第41号
9月号
昭和53. 9. 2
奥出雲文化協会

放生会　毘沙門堂　庶民の哀歓が育てた伝説③

横田八幡宮
放生会

放生会（ほうじようえ）とは

もとは仏教思想からでたものである。捕獲された魚、鳥類を買い集めてこれを、放ちやる法会（ほうえ）のことで、殺生と相対するもので、殺生を禁ずるのが消極的な止善とされるに対し、放生は積極的な作善とされた。

石清水八幡宮の放生会

放生会のはじめは、京都男山・石清水八幡宮で行われた。清和天皇（皇子の一人が源氏の祖）の貞観五年（八六三）以来斎行されてきた祭で九月十五日（もとは旧八月十五日）の大祭である。古くは石清水放生会と呼び、神霊が男山の山裾を流れる放生川のほとりに臨まれた上で行われる。生きとし生けるものの生命の安泰と幸福を念願し、魚鳥草木の霊を慰め、国の安寧と繁栄を祈願するまつりとして天皇自らが行幸して行われた。

盛衰があったが今日なお勅使が参向する。九月十五日の午前二時、神体を三台の御輿に移し神馬を従えて午前三時山麓の頓宮に至る（本殿と頓宮の間は現在ケーブルカーが通っている地形である）。こゝで先着の勅使が迎え祭文を奏上する。午后五時神饌を供してのち、神体を山上の本殿へ安置する。一方放生池で生類愛隣の祭儀が行われる。

横田八幡宮明治十二年の放生会

（明治十二年に八幡宮より県へ報告した文書による）

御供神楽

御供米として横田八カ村庄屋から、御蔵（藩の米蔵）より正米三石二斗宛を受取り、祭式前に社人即ち東祝、西祝（祝ーはふり）を始め土器師及び一ノ神子より八ノ神子まで饗取等が各々沐浴して身を清め、社殿に打ち揃って各拝礼し、のち右御供米をもって御供殿において、まず東祝御飯をひき、土器師が膳部を調べ、次に八幡三神へ西祝及び神子一同がこれを供え、ついで惣検校が詞を奏上する。終ると饗取が楽を奏し、一同礼拝して終る。

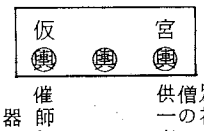
神幸神事

惣検校（木山）・供僧別当（岩屋寺）・大催（杠）をはじめ社人一同、一七（一週間）前より沐浴し当日社参する。建久七年より三年間は源頼朝将軍より年年奉幣使を下向させていたが、その後は横田村大催が奉幣使を嘱託されて今日に至った。祭礼日の午后になると大催は十人の警護の者を召連れて社参して来た。この三者が集まらぬと祭典がはじめられなかった。

神幸神事はまず、輿舁ぎ十二人が輿殿に到り、神輿三体を本社正面に舁据え、次に神子一同本殿を拝礼、次に供僧別当そして惣検校拝礼して国家安全を祈り、そのあと大催が奉幣して拝礼、惣検校再び神殿を拝礼し、八幡三神の分霊を神輿に移す。この時一方では内鳥居より大鳥居の間に設けられた仮宮（古来より一間半に三間の宮）迄の間を、二頭の馬に各々白木綿一匹づつをもって、馬の腹を巻き上げ、仲間（ちゅうげん）等八人が附添い（青竹八本に八色の簸一流宛をつけたものを仲間が一本宛たずさえて）馬を引いて往復すること一回を終えておく（距離十六丁）。

そしてこの馬に続いて先払い・神輿三体（応仁天皇、仲哀天皇・神功皇后）ー一体毎に警護二人宛が附添い警戒ー、惣検校・供僧別当と続き、そのあとへ警護三人を従えた大催、社人一同と続いて供奉し、神幸がはじまる。仮殿に到ると神輿をこゝに安置し、別図のように着座する。

やがて奏楽、ついで惣検校が神前に進んで拝礼、次に東祝・西祝より祭員一同に神酒を供し終ると奏楽。この間警護の者は式場を警戒。終って神幸に移り本殿に復帰する。



惣検校
当子祝子子子当
別神
僧の
供一東神神神別
催師祝楽楽楽取
器
大土西神神神饗

直会

十六日は、神事角力を行う。雲伯両国の力士を集めて国別に東西を分ち執行し、盛大である。

報告書の要点は以上のようであって、前述の石清水八幡宮の放生会儀式によく似ている。勅使にあたるのが大催であり、仮殿の祭典も同様であった。

たゞ違ったところは、石清水の放生の儀式にあたるものが、この八幡宮においては次のような形式で行われていた。

御輿渡御の前に、杠、木山、岩屋寺よりそれぞれ警固の者十二人を出し、計三十六人が二疋の馬に附添う。馬には「コゴミ綱」といって、木綿の綱の先に藁しぶ二本をつけ、馬の轡（くつわ）より腹の下に廻して警固

の一人が持ちひかえる。上の鳥居のところへ、村人が祈願のために奉納した多くの幟（のぼり）——杠家の前から八幡宮の大鳥居までの道路両側にたてておき、大催の行列が通過後こゝへ集める——がたてかけられているのを、一度に倒すとその音に驚いて、馬はコゴミ綱を切って大鳥居の方に向って走り去る。そこまでは両側に商人や参拝者が多いので、警護の者は長い麻布綱をつけて走る馬とともに走り、引止めようと努力することになっていた。それからは綱をはなすので馬は走り去り、村の方へ向う。馬がとどまった村はその年は縁起がよいとされ人々は祝った。時にはそのまま飼主の家に帰ることもあった。（馬の飼主は馬を出した上に各米二斗を出した。これは神に奉げたという意味からであった）。

古来よりこの神事は、雨三滴あれば中止されたという。明治初年には行われていた。この神事の記録で最も古いものは天文九年（一、五四〇）のもので、三沢氏が馬の使用について、大催宛に出した許可状である。

大催家（杠・もと小池）における放生会の勤め

前述の神幸神事にまつわるほかに、次のようなことが行われていた。多額の出費を要し、時代の推移、経済事情の変化で苦慮し、嘆願して松江藩から特別な取計いを度々うけた。それほど古来から大催はこの庄内においても、八幡宮神事においても格式をもっていた。鎌倉時代における実力をうかがうことができるが、詳細はわからない。

嘉永二年（一、八四九）の杠文書の社用干代之宝鑑、神勤録によると次のようである。なお松江藩の処遇とか、総検校との対立などについては、別の機会にふれることにする。

八月十四日　社前の馬場の原に桟敷かけをし、幡（はた）竿を出し、そのほか残りなく手配する。とうごの馬（渡御の馬のことか）のことは林右衛門（くわしいことは不明）へ前広に申付けおく。

八月十五日

1.朝祈願の幟立人の一人一人に、丸盆三つ椀を出す。即ち飯椀にとりつけ餅（ぼたもち）、中椀に茶漬引替めし茶汁、汁椀には酒を入れて出す。

神事があれば、だんだら筋の警固に、馬場桟敷にて酒をのませる。二升入りの竹筒に入れて出し切り。

2.銀札一匁　表宗右衛門と相認め、天保十五年よりは二匁宛往来方名代を以て勤め来る。

3.馬場にて警固相勤める鉢屋へあんもち三つ・ひら餅二つ宛配る。天保十四年よりは握飯五つ宛きなこをつけて配る。

4.朝、政五郎、林右衛門が来た時は、重箱に餅を入れて出し酒をのますこと。

5.茂蔵は十四日朝より十六日まで三日間、一日二百文宛

6.馬場へ餅六升分、神事があるときはさらに三升餅を。

7.朝六升餅入用、さらに馬場に六升餅入用。

8.小豆三升・酒・幟立に入用

八月十六日

1.角力あれば、にぎりめしにきなこをつけて、桟敷に持出し（但し三升五合飯）

2.角力あれば、きなこむすび五つづつ鉢屋に配る。その上酒一升をやる。

3.角力中へは酒を二升やる（安政までは一升）

そのほか　これらの準備のため青大豆・米などが必要

大催家用の桟敷懸仮屋について、手間は村方の奉仕であるが、相当の負担をする（縄・麻柄・ほかに米八升）

安政十一年の記録から

①幟（当日村人寄進のもの）は大催家から八幡宮への道筋へ立て、大催が参拝のためここを通り終ると、寄進者はこれを下の鳥居へたてかける。

②御幸の時、大催桟敷では、輿かき、とうごの馬ひき、幟さし三十四人、警護八人、計四十二人を樋口の村人が、古来より大催の指図でつとめる。とうごの馬が大催家にない時は、村々が順番に出す。

③八幡宮玉垣より下の馬場用の神事式はすべて大催にて経費支出する。そこで馬場内への商人のかり屋賃[illegible]て大催家が集金する。

④大催・総検校・供僧別当が三者そろわぬと神事は開始されない。

⑤大催家から馬場までの道掃除は、馬場村、樋之口村で行う。村々とは、馬場、樋之口、五反田、蔵屋、大呂、竹崎、稲田、原口、横田村町、下横田、八川である。

いつごろまで続いたか

行列は明治中期までで、そのころの大催は羽織袴に白足袋に下駄という姿であったという。遷宮の時の本願は文久元年（一、八六一）までは大催であった。また岩屋寺の修覆や伊賀多気神社の遷宮などにも大催はつねに名を連ねていた。

明治二十年の記録によると放生会に集まった商人などは二百余人に及び、郡内全町村、能義・大原・飯石の大方の村々から今市・差海・松江・揖屋・安来・米子・淀江ほか伯耆の村々、岡山市・美作・兵庫、備後は高野山・東城・庄原、さらに広島そして山口は下関まで。四国の阿波・讃岐の金比羅町などは芸人らしく、操り人形浄瑠璃などであろうか。宇波は鋳物、揖屋は魚・かまぼこ、差海は干魚、米子あたりは厚化粧の女づれか、兵庫は軽わざや奇人の見せ物か。こうした賑いは昭和五・六年ころまでは続いていた。そして五銭も小使いがあれば、小使いとして相当の値打ちがあり、大いに楽しめたものである。

毘沙門堂

蔵屋毘沙門堂にまつわる古伝

天平の昔、僧行基が岩屋寺を創設するにあたり、その鎮護として、自ら彫刻した毘沙門天像を蔵屋に安置したという。その像は一本の大木を三段に切って一番元の部分で彫刻したのがこれで、他の二体は倉吉と京都鞍馬山に鎮座するもので、これらを日本三体の毘沙門天という。また三沢遠江守為忠が上皇の命をうけて、仙洞御料所横田庄の治安維持と年貢徴集をはじめるにあたり、この毘沙門堂に詣うで、一七日間斉戒厳修し（堂は仏谷にある時代）、大いに霊験を感じ藤ケ瀬城を築いて移住したという。

この像は昭和初年の調査によれば平安末期のものと推定されているから、はじめの話はつくり話ということになり、あとの話はありうることである話でもある。毘沙門天はインドから伝えられた鬼門を抑える神であって、のちは武士の守護神として崇敬されてきた。同時代の記録によれば徳川時代、松江藩主をはじめこの地を訪れる家老やそのほかの侍たちも、必ずここに参詣しているから、著名なものであったことがうかがえる。

毘沙門天像

本像は木彫彩色の高さ一丈一寸（身長六尺七寸）のもの、脇立は吉祥天女・善尼童子（ともに四尺五寸）である。（本誌3号に写真掲載）

仏谷から叶（かなえ）廻へ

毘沙門堂跡の南むかいを仏谷という。谷の入口の地名を藤平寺という。藤平寺に堂があり毘沙門天像が安置されてゝた（地名の藤平寺に寺があったとはいえない。寺領を藤平寺と後世呼んだともいえる。近くに寺跡といわれるところもあるという）。

そして近くの常福寺の住職がこれをまつっていた（常福寺という地名は現在毘沙門堂跡地と呼ぶところの東方にある。近くに岩屋寺田と呼ぶところもあるから、こゝに寺があったとはいえないし、寺領だったとも考えられる）。その後住職が東の船通山の東山麓、伯耆国多里村へ転住したため廃寺となり、毘沙門堂は部落の人々の維持によっていたが、堂の破損がひどく部落民が協議した。（常福寺は多里に現存。仏谷の一角に荒神風呂ー森ーがある。この荒神風呂は、これらの寺に関係ある土豪が住んで栄えていたが、いつのころか没落して絶え、その屋敷神が同族神かが荒神としてまつられたものであろう）。庄屋杠助三郎、組頭安部七郎左衛門等が発起者となり、堂の再建を計画し、下郡安部七郎右衛門（稲田代畑）の協力を得て、仁多郡の各村から奉加米を集めた。その十二俵三升を郡奉行代官等の裏判を得て、郡内村々へ貸付け利殖をはかり、十八年を経て元利合米約四百俵を得た（当時の記録古文書あり）。像は京都へ送り仏師によって修理され彩色が施され、堂宇を現跡地に新らしく建立した。三間四面のもので、石燈籠、手水鉢等も備ったもので、石段は（現在南枝寺の石段となっている。土台石も境内、そのほかにある）。現在の道路に面した側にあった。そして当時原口村の普門庵に居住していた教宝院茅原快春を、岩屋寺の了解を得、京都醍醐寺三宝院（修験道当山派の本山）の許可をうけて、毘沙門堂の奉仕者とした。（住居は現毘沙門堂の西北方ー現在地へは七十年前に移転）

岩屋寺は中世にもこの地方の修験者の中心として栄えていた。そして郷内各村に権現社や寺庵があって、修験者も多く、これらの活動は民衆の教化や生活に大きい影響を与えていた（既刊の本誌に記述あり）。しかし毛利氏がこの地を支配しはじめた天正末年からは、岩屋寺は冷遇をうけ、寺僧も四散したという。しかし毘沙門堂は寺領も多く、茅原氏（大和出身という）がすぐれた修験道を修めた人で、加持祈祷だけでなく（旧住居の一角に祈祷所もあった）、医療や生活相談にもあたり、地域の指導者として声望も集めていた。

祭日は二月（旧）初寅の日と九月三日の二日で、寅の刻（暁・七ツ半・午前四時）に参集盛大に行われたという。地方民にとっては五穀豊穣、授福の神として崇敬されたという。

明治三年の祈願文などがあるから、このころまで盛んであったようであるが、明治五年の社寺取調法の施行に際し、堂宇は廃せられ、像は関係深い岩屋寺へ移された。また修験者の活動に対しては、明治政府はその組織の解体を指示するなどして、弱体化はもとより圧迫を加えたので、衰退へと向った。

（八月下旬、毘沙門堂跡地の地下に、たたら遺跡のあることがわかり発掘調査が進められたが、毘沙門堂の礎石十四箇の跡も歴然と発見することができた。これとたたら遺跡については、発表の時期が来れば、誌上にて要点をお知らせしたい）。

庶民の哀歓が育てた伝説 ③

最明寺入道時頼の廻国と横田

北条時宗には三才年上の庶腹の兄時輔がある。時輔は文永元年十六才で京都六波羅南探題になった。

北は曽祖父泰時の弟重時の三男時茂であった。文永三年将軍

宗尊親王の親近のもので、時宗謀殺の陰謀があった。事前にもれ親王は京都に追われ、その王子惟康王（三才）が将軍にすえられた。この時京都の朝廷との交渉役は時輔であった。文永五年には蒙古・高麗からの使節との交渉もはじまった。朝廷との交渉は、時茂・時輔の職務となり、その重要性が増した。

こうして得宗（北条一円の中の嫡統）時宗の専制体制が強化されていく中で、勢は庶兄時輔誅殺へと発展していった。

時輔は時頼の長子として生れながら、正室の子でなかったため、つねに時宗の風下にたっていた。しかし六波羅南探題として上洛していることからみてもわかるように、幕府ではかなり重要な地位にあり、対蒙古問題についても幕府の強硬態度を朝廷側へ納得させる交渉でも、実際に大きな役割を果している。

しかし弟の時宗が若くして連署から執権へと進んだことには、若干の嫉視と不満があったのであろう。またそれに加えて外交問題をめぐっての頻繁な対朝廷交渉の間に、京都の公家階級の動向に影響され、政策の上で時宗の行き方に批判的となったものとも思われる。

文永八年の出雲大社文書によれば時輔は横田庄五五町歩のほか、能義大原、八束、出雲内の六庄あわせて二五八町歩余の所領を出雲で所有している。ほとんどが石清水八幡宮領であったところである。

時輔離反を感じた時宗は、文永九年二月十五日時輔の与党と見られた名越教時（朝時の子）・仙波盛貞を襲撃して誅殺し、京都の時輔に対しては、北探題の北条義宗（時茂の兄長時の子）に命じてこれを討滅させた。時に時輔二五才、こうして事件は結着した。時宗は自分の異母兄を討つことによって、得宗権力の確立に成功したのである。そして連署ほかの人的配置を若がえらせ、清新な組合せをした直後に、蒙古の第一回の来襲である文永の役が起った（文永一一年一〇月）。どうにか切りぬけることができた北条政権は、再来襲に備えての諸政策、諸準備に多忙を極めた。しばらくして誅殺事件後の南探題の欠員の補充をし京都公家との接触を深めた。即ち翌建治元年（一、二七五）十二月、北条時国が南探題となった。この年の二月、後宇多天皇は蒙古の来襲に備え、岩屋寺の覚満上人へ綸旨を届けた。その後覚満にかわりを祐円が院主となった。時輔の死後も実母尼妙音は、時輔の所領であった横田庄を保持していてかかわり合いも深く、岩屋寺へも心をよせていた。そのあらわれとして中国の唐時代の楊貴妃が織ったといわれていた「楊柳観音図」の掛軸を寄進している。こうした有利な情勢を利用して、八幡宮を八川から横田へ移すのに祐円は画策した。そして弘安四年（一、二八一）四月十五日、馬場での遷宮を終えた。岩屋寺は幕府の氏神である八幡宮につらなる横田八幡宮の神宮寺として、力を得ようとしたのである。そして間もなく七月蒙古が再来襲したが、大敗を喫して引きあげた。

時頼の廻国そして時輔

北条時頼が諸国廻国の折、馬場が適地であるとしてこゝえ八幡宮を移したと古伝があるが、これはこのような情況の中で作られたつくり話である。現在の八幡宮の山で、当時馬のくつわの音がした。うかがいをたてると神託があり、馬場の地へ神社を移したがよかろうといわれたという古伝もある。この山を当時から今日まで聞語山という。それまではこの地方の氏神としては、横田神社があり、横田郷の一の宮でもあった。それが横田八幡宮にかわり、横田神社は末社として名を留めるだけになっている。

「保暦間記」という南北朝史によると、時輔は誅殺をまぬがれて、吉野にのがれた。弘安七年四月時宗が三四才で没すると、吉野を出た時輔は各地に出没するようになったという。尼妙音によってかゝわりを温存していた横田庄に立寄ったこともあり得ると思われる。それを感じさせる文書が鰐淵寺にある。弘安七年九月に出雲守護佐々木頼泰が、鰐淵寺南北衆徒に出した施行状である。即ち時輔親子の徘徊（はいかい）をとりしまれというものである。時輔は出雲地方において生きのびていたのであろうか。妙音尼の岩屋寺への寄進は二七年後の正和二年まで続いている。尼はその年の暮なくなった。

時頼の廻国伝説

北条時頼は五代目執権として一三年間その地位にあり、康元元年（一、二五六）に三〇才で出家して執権をゆずり、弘長三年（一、三六三）に三七才で死んでいる。この時、子時輔は一五才で（翌文永元年に六波羅探題になる）時宗は一二才であった。したがって、馬場八幡宮建立の弘安四年（一、二八一）より一八年前に死亡しているから、当地への廻国は当然ないことになる。

時頼は出家して最明寺入道と名のっても、死ぬまでの七年間は然たる勢力をもち、寺院の造営や武芸の奨励・和歌・管絃の習熟に力をつくした。

廻国の物語りは、「増鏡」には摂津、「太平記」にも摂津、謡曲「鉢の木」には上野、「藤栄」には摂津のそれぞれの国めぐりがのっている。「北条九代記」には廻国六十余とある。しかし正史といわれる「吾妻鏡」には書かれていない。二、三の地方についてはあったであろうが、「増鏡」「太平記」「北条九代記」などは、北条氏の執権政治謳歌のために書いたものであろうとされている。北条氏得宗専制政治の一つとして、廻国使という密偵組織があって、それが虚伝されて、時頼の廻国物語りにつくりかえられたと考えられている。人物が時頼に集中したのは、その支持者が地方の名もない弱小の地頭、御家人層であり、御家人保護政策をうち出した時頼が人気を高めていたことと重なったためともいわれる。

また得宗領に廻国伝説が多いという研究がある。東国は勿論西国にも、時頼が得宗領の拡大をはかった時代に多いという。

するとこの横田地方は、文永八年（一、二七〇）から北条氏領となり一四世紀はじめの一、三一三年まで続いている。この期間は時頼の死後の時代であるが、こうした物語りを生む土壌があったのは間違いない。

為政者が民政視察のため、しのんで地方をめぐり歩くことは、中国の故事があり、日本でもその影響をうけて美しく歌われている。水戸黄門漫遊記で有名な徳川光圀の廻国伝説も、殆んど虚構（つくり話）であると同じく、地方の名もない弱小な地頭、御家人層が支持したのが時頼廻国伝説である。この時代はまだ庶民の力が認められず、雑兵としてとりあつかわれたが、黄門さんの時代は庶民の力を無視出来ない時代となっていた。

黄門さんは庶民の味方として、多くの物語を生んでいったのである。

お願い

会員の皆さんの投稿をお願いします。二、三いたゞいています。写真と資料だけでも結構です。

係の方で編集してのせることに致します。

印刷実費一部百円／六九九一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第42号
10月号
昭和52.10.7
奥出雲文化協会

毛利藩鉄奉行斬殺事件

―下阿井村と大呂村における―

小林房吉

若月家古代大成記から

大成記（本誌36号参照）の中に次のような話がある。

永禄年中（1558～1570）毛利元就の代に、下阿井村の今の郡屋敷に、元就よりさしむけられた鉄奉行野津某という侍が居住していた。この侍は広島から遠いことをよいことにして、我侭をし私腹をこやしたので百姓たちは難儀をした。文禄年中（1591～1596）に至って下阿井の長谷河一族は、この苦しさに堪えかね、寄合って野津を殺す計画をし、岸本の家にてその決意を固めて決行した。その後慶長元年（1596）雲隠両国の国守として堀尾帯刀が入国した。

まもなくこの事件が調べられ長谷河、岸本ら十三人は磔（はりつけ）の刑に処せられた。

また慶長元年に大呂村堀之内七郎右衛門の上の道の曲たる上の屋敷に村上という鉄方奉行がいたが、福頼村の蓑子（みのこ）という百姓頭と竹崎、大呂の若者が寄合って村上を殺した。これも同様に磔に上った。

駒原邦一郎著「私の村のはなし　阿井村の巻　中」から

永禄九年尼子氏が富田城を明けわたし毛利氏の軍門に下ると毛利氏は富田城には城代天野隆重をおいたのをはじめとして各地に家臣を配置した。上阿井の川東の唐墨城には備後国甲奴郡護国山の城主長火蔵左衛門の嫡子伊達因幡守信重を、亀嵩の城へは十二か村の支配として冷泉民部大夫元光を、横田へは杉原少右衛門広高を、下横田へは祖食（式）勘助宗安を。馬木村は馬来氏が続いてあづかった。

広島に新しい城を構え、近世大名として成長しようとする毛利氏にとって、奥出雲の鉄は貴重な原料であり資産であった。そのために鉄奉行を置いた。文禄十一年から下阿井村に野津源左衛門が当時の郡屋敷（下阿井藤原運市氏宅附近か）に住んだ。生来の性格の上に職権をかさに着て、無理難題をふきかけ、我侭なふるまいが多かった。だが百姓たちは「泣く子と地頭には勝てぬ」と泣き寝入りするしかなかった。この時、長谷川一門がひそかに寄りあって野津斬殺の計画をたてた。そして岸本平兵衛宅にて食事をし気勢をあげ野津を血祭りにあげてしまったそれは文禄二年（1592）のことであった。

その後長谷川一門は一人をのこして、長谷川六兵衛ら十一人と岸本平兵衛の計十二人が捕えられ磔の極刑に処せられた。

村人たちはこの処刑された人達のために、ひそかに堂をたて像をまつって冥福を祈った。その堂が上阿井川西の大上部落の天神社の前の「大上のまわり堂」である。中には願主長谷川助左衛門とした長谷川一門十一人の像がある。石造の長谷川六兵衛菩薩一体と木像の十体である。

（ほかに後世の犠牲者の木像も合祀してある。話は略す）

大呂村における斬殺事件

阿井村の事件の影響もうけたであろう。大呂村においても鉄奉行斬殺事件がおこった。大呂村の堀之内七良左衛門宅の上の曲り道の上に（昭和初年まで鳥上小学校のあったところ附近）奉行村上庄兵衛は住んでいた。阿井事件の文禄二年より四年のちの慶長元年（1596）のことである。福頼村の頭百姓蓑子柳右衛門と大呂、竹崎の若者百姓八人であった。

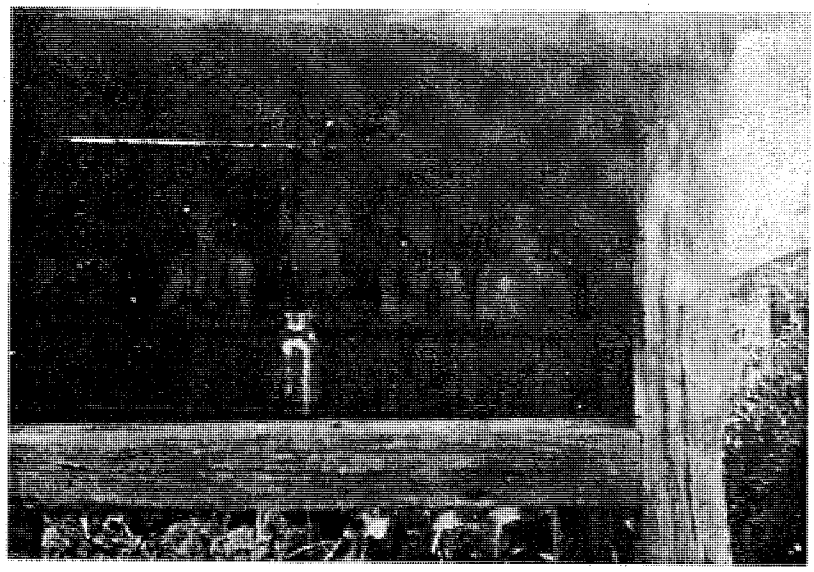
目的は達せられたが、首謀者をはじめ参加した人々は、ことごとく磔の刑に上った。

（註―編集者―駒原氏は若月家古代大成記に従って、東西の両事件を探究されている。そして慶長五年堀尾氏入国後に両事件の取調べがあって、富田城内で磔になったと結論されている。この文の筆者小林氏もこの説をとっておられる。しかしこれほどの事件を各地に家臣を配置していた毛利氏がみのがすわけはなく、発生後間もなく捕われ処刑されたとみるのが正しいと思う。そのことは「杠日記」「絲原家、古代よりの聴書」「鉄山根元録」などの正確な記述がこれを裏付けてくれるのである。それらには堀尾氏が富田城入国後、国内の頭百姓を人質として富田城に集めたとある。これは毛利氏にかわって入国した新しい国守（大名）への忠誠を百姓たちに誓わせる手段としたものである。このことはこの時だけのことでなく、どこの国においてもよく用いられる方法であったことであるからである。

勿論両事件のようなことは仁多郡内だけではなかったと思われる。新しい国守堀尾氏が、農民の反抗を押えるためにとったことと解すべきと思う。堀尾氏の出雲の富田城入国は慶長五年が正しい。）

大呂村でも処刑者は手厚くまつられていた

駒原氏のまわり堂についての研究を読んで、筆者は大呂村の処刑者のその後を探究し、大呂の代山の下道別にある十王堂がそれであることをつきとめることができた。この堂内には写真の如く九体の仏像がある。中央の木彫の立像は蓑子柳右衛門でほかの同型同材の座像は八人の若者の像である。その罪の軽減を十王に祈ろうとした農民の素直な気持をあらわしたものである。罪人とはいえ、村人のために立ちあがって汚名をきせられたものである。村人の抵抗の心も十分にこの堂の建立にこめられていたに違いない。



この堂より約百米ばかり離れたところに、五輪の塔（写真下）がある。鉄奉行村上庄兵衛のために建てられたものであろうか。祟りの多い仏として、昔からまつられてきている。

また奉行を斬殺し焼き殺した場所と思わせるところが、近くの代山奥の山の麓に「人焼原」三三五番地として残っている。

人の真心というものは、いつまでも人々の心に訴えるものをもっていることを、歴史は如実に語ってくれるのである。

（筆者は横田史談会員）

十王信仰について

十王をこの地方では、じゅうわさんと呼んでいる。

十五世紀から農民の心理に深く食いこんだ信仰で、人が死んで冥土へゆくとき、その道に坐していて、在世における罪業の軽重をかんがえ、未来の生処を定めるものを十王という。本地は如来であるが、普通は如来の柔和忍辱の形をかくして、極悪忿怒の姿をしている。つまり死後における人間の幸、不幸を極善、極悪のものをのぞいて、そのほかはすべて十王の裁断によってふりわけられると教えたのである。そして死後のこされたものの追善供養の如何によって死んだ人は救われる。罪が軽くなるとされたから、遺族は死者の追善供養に狂奔せざるを得なかったので、この信仰は農民の間に急速にひろがった。このことが勧善懲悪という方法で、社会道徳の確立に大きい役割を果したのである。

ところがこれが寺における法要回数の増加へと向ったので、経済的安定をもたらしたのであるが、仏教が葬式、法事へと専念し、説教を忘れることへとなっていったのである。庶民は恐怖のどん底にたたきこまれ、ひたすら信仰より追善によって救われようとしたのである。

十王信仰は中国で成立し日本に入ったもので、その中核となったのは、インド伝来の閻魔王であった。これはインドの古い神でもとは天上界にあったが、のち死者の生前の行為を記録することによって、賞罰をつかさどる神となった。それが中国に入り仏教と合体した。閻魔大王が舌を抜く話は、庶民への教えをわかり易くする方法として語られ、生活思想の中に強い影響を与えた。「十王」の「十」は数字をしめす意味はないことはもとよりである。

横田地域史のしるべ⑥

横田庄（中の下）

—明徳の乱後の十五世紀—

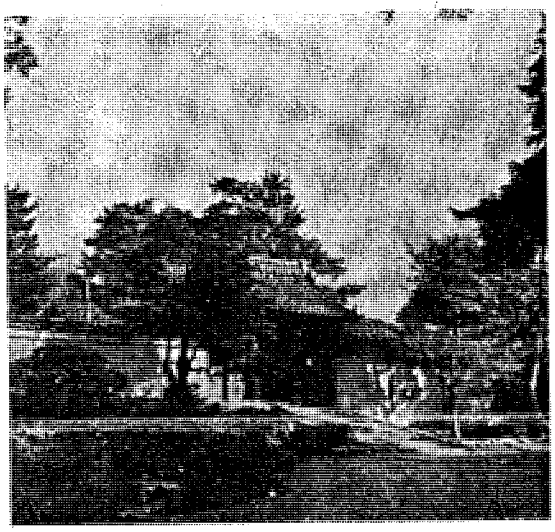
明徳の乱

このことについては、たびたび記述して（本誌23・34号ほか）いるのでそれにゆずる。

この乱より前の永徳二年（1382）後円融天皇（北）は後小松天皇（北）に譲位し、上皇となった。康応元年（1380）十月に上皇は仙洞御料所である横田庄の半分を京都泉涌寺内の雲竜院へ寄進した。年貢の高は明らかではないが少なくとも数百貫文と思われ、これ以後の雲竜院の基本寺領の一つとなり、代々の天皇や将軍もその保護につとめたという。（雲竜院史による）

南北朝合体

明徳の乱が終ると横田庄の代官は再び安部氏三代宣時が復した。山名氏側の代官石原氏は敗走し西の三沢氏の家臣となった。明徳三年出雲の守護は山名氏にかわって京極氏がなり、その代官尼子氏が富田城に入った。そして北朝・持明院統にとっては長年の懸案であった南北朝の講和が実現し、半世紀にわたる南北朝の対立動乱がようやく終結した。後円融上皇が雲龍院に横田庄を寄進して祈念をこめられた四海平和が、形の上でも訪れたのである。後光厳・後円融・後小松三代にわたって、北朝の天皇に伝わらなかった三種の神器が、南朝の後亀山天皇から北朝後小松天皇に伝えられ、後小松天皇は合体後の天皇としても引続いて在位した。その翌年である明徳四年四月、後円融上皇はなくなった。葬礼は泉涌寺において行われた。



雲竜院

泉涌寺の南の高所にある別院雲龍院は後光厳院の思召しによって竹厳聖皐の開いた寺で、皇子後円融院はここに如法写経の儀を興そうと寺領を寄せられた。

また後小松、称光両天皇もこの寺を崇敬せられ、四天皇の崩御の後は、深草北陵とは別にこの寺の後山に御分骨所を営み、雲龍院霊明殿には北朝歴代の御尊牌が奉安されている。本院の本尊は薬師三尊（薬師日光月光）で極めて写実的な鎌倉時代の作、また「走り大黒天」は有名である。

後小松天皇と横田庄

その翌応永元年（1394）十一月後小松天皇は綸旨をもって、後円融上皇追善のため、出雲国横田庄の半分の、雲龍院へ寄進のことを確認した。その後応永九年（1402）特軍足利義満は、この後小松天皇の勅裁に相違があって

はならないとの教書を下し、管領畠山基国から出雲国の守護へ施行されている。こうした幕府の保護なしには、荘園からの収納は困難になりつつあったとみえるのである。当時のこの庄の様相をこゝから垣間みることができる。幕府は雲龍院領の経営維持に援助を惜しまなかったのである。

これより前の応永三年から雲龍院は本山泉涌寺の支配下を離れて別院としての資格を得ていた。雲龍院領以外の横田庄の半分は後小松天皇の所領として維持されていた。応永十九年(1412)八月、天皇は位を称光天皇に譲ったが、その後も続いて横田庄は所領としていた。当時、皇統と荘園管理をめぐって、持明院統内部で後光厳天皇流と崇光天皇流の暗斗(本誌38号系図参照)が続いていた。その上さらに大覚寺統との対立も加わって混乱し、幕府権力も強い干渉を加えていた。したがって譲位後も後小松上皇の執政はもとのごとくであったので、称光天皇との間もしっくりとはゆかなかった。そのうち正長元年(1428)病気勝ちの称光天皇がなくなった。子がなかったので、対立する皇統ではあったが、崇光天皇流の親王(のちの後花園天皇)を後小松上皇の猶子とし、そして天皇として即位せしめたのである。従って後光厳天皇流の皇統はここで断えてしまったのである。

永享二年(1430)代官安部氏は八川より稲田代畑に居を移した。仙洞御料所横田庄(実際は禁裡御料所と呼ぶべきであるが、多くの文書はこう呼びならしている)の中心に進出した。(八川方面が横田庄の半分といわれる雲龍院領であったようである。いずれ後考をまつ)

後小松上皇は朝廷内の対立や皇統の断絶、加えて政治の面倒さを超越すべく、かねてから決意を秘めておられた出家にふみきられ、仙洞御所(上皇の御所)で仏事に励まれていたが、永享五年(1433)十月ついになくなられた。御年五十七才であった。

後小松天皇の父貞成親王の日記である「看聞御記」には、横田庄(半分)は後小松天皇の譲状によって、大性院比丘尼御所へ譲られていたが(皇位問題がからんでもいたであろうか)、将軍義教はその通り実行せず、後花園天皇へ進めたとある。それは十二月十二日のことで、一方その日には後小松天皇追善料として、横田庄から雲龍院への寄進が行われている。横田庄の一部を雲龍院へ寄進することは先例に準じたものであったようである。そして仝月二十五日、将軍義教の命により、さらに雲龍院横田庄が二〇〇貫文加増寄進されたのである。義教はこうした寄進をすすめることを、禁裡御料所に対しても行える立場を保持していたものとみえるのである。強力な幕府の権力が宮廷内に入っていたのである。

横田庄へ三沢氏の進出

永享十一年(1439)馬場八幡宮の遷宮の本願は、三沢七代信濃守為忠である。横田庄に進出したことをあらわす。岩屋寺文書によれば、三沢氏が岩屋寺に届けた祈願文の中で、院宣をうけて横田庄へ云々とあるから、応永の乱以後の地方諸国の乱れ、即ち応仁の乱前夜の地方の乱れがこの地方にも及んでいて、三沢氏が治安確保のために進出したとみることができるのである。しかしまだ代官は安部氏であったから三沢氏はまだ武力でにらみをきかす役であったと思われる。

それから五年後の文安元年(1449)岩屋寺文書によれば、三沢氏は綸旨、院宣にもとづき、将軍足利尊氏の御判によって、内裏段銭の事をつかさどっているのである。

これからあと五〇年間の横田庄のことは明らかでない。「藤涼軒日記」「看聞御記」「御湯殿上日記」「実隆公記」などに雲龍院のことはしばしばあらわれるが、横田庄とのつながりはない。

たゞ横田庄内の左の二件のみは記録にある。即ち文明八年(1426)の馬場八幡宮遷宮の本願は三沢十代遠江守為忠であることと、小池氏の八幡宮大催職に安堵状を出していることで、三沢氏の庄内への力は次第に重きをなしたものといえる。しかし代官職は安部氏が維持していた。

応仁二年(1468)応仁の乱のさ中に、兵火をうけて泉涌寺は炎上した。雲龍院も罹災したといわれている。

文安元年の庄園の記録から約五〇年たった明応二年(1493)になって再び記録があらわれて来る。泉涌寺文書によれば、年貢未進について、九月二日、幕府は朝廷の命を奉じて、長日丸以下横田庄の名主沙汰人中へ下知している。(安部氏は四代宣豊、大催杠氏は二代久崇であるが、長日丸との関係は不明である)

尼子経久はこれより六年前の文明一八年(1486)富田城へ入って戦国大名として出雲掌握へ意欲をもやした。長享二年(1488)三沢氏はまずその第一矢をうけて軍門に下った。

明応元年(1492)ころは三沢氏は石原重国(明徳の乱の石原氏の子孫)を代官として横田に送りこんだ。

やがて永正六年(1509)遠江守為忠は、藤ケ瀬に移って自ら禁裡御料所代官(地頭請所)としてこの地を支配することになった。安部氏は一一一年間続いた仙洞御料所代官の職を退き、土豪となることになった。(京都泉涌寺と雲龍院については、本号では絵図と写真をのせ、次号で詳細に紹介する。)

印刷実費一部百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

義民伝六の碑建立　みてら泉涌寺　横田地域史のしるべ⑥　「疋」の今昔　民間信仰メモ①

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 43 号
11 月 号
昭和 53. 11. 4
奥出雲文化協会

「義民伝六」の碑建立

荒木宗重

感動は感動を呼ぶ

天野雉彦（あまのまじひこ）（明治一二年1879～1944）は津和野町に生れ、本名を隆亮といった。島根師範学校を卒業後上京し、巌谷小波、久留島武彦らと日本趣味講演会を組織し、口演、童話劇の振興につとめて新分野を開拓した。文部省、内務省の嘱託として全国を巡回し、島根県内も数十回来演し、新しい題材と独自な話術によって、「雉彦さん」と愛称されて県民に親しまれた。

仁多郡内の横田町ほか各村々へも度々訪れた。当時の八川小学校長松浦準蔵（のちの横田町長）、横田小学校長三谷清一らは、師範時代の同窓生であったので、とくにしげく訪れ、青少年に多くの感動を与えた。

大正初年には欧米各国を旅行し研究につとめ、児童文学史上に大きな足跡をのこした。第二次大戦中は東京青山南町に住み、町内会長に選ばれ、昭和十九年九月の大爆撃に際して、部落民全部を指導して安全地帯に避難させたが、自分のみは無惨な焼死をした。徳川夢声は雉彦の縁者である。

大正十三年、天野雉彦は鳥上小学校を訪れて、青少年を対象に、「義民と義農」という話をした。話術の巧みさによるはもとよりであったが、よくしらべられた四国農民の話は、聴衆の胸を打った。私ども青年団員の多数も深くその話を胸にきざみこみ、同じ農民として共感をも深くした。たまたまそのころ出版された「仁多郡誌」を入手して読んでいた私は、その中にある文化年間（1815ごろ）の百姓一揆の話を団員諸君にし、義民の一人に、鳥上村大呂の伝六のあることを強調したところ、団員一同がそのような立派な義民があるなら、何とかして団員の力で顕彰しようではないかと話合い、石碑を建立することが青年団としてふさわしいということに決定した。当時青年団長であった私は、その前年に船通山の頂上に剣の碑建立に協力し、建立許可等の手続きも知っていたので、早速その申請の手続をとった。一方建立のための資金集めを考えた。そのころ松江孤児院という社会福祉施設（私立）があったが、その経営資金をあつめるために、各町村巡回の活動写真の映写会があり、それに協力して、収益の一部分を世話賃としてもらうことができたので、それをあてることにした。

幸に団員の中に石工の田辺柳右衛門がおり、人夫は団員が総出でこれにあたることになった。（団員は男子のみ）。石材をさがしたところ、斐伊川の流れの中に手ごろなものをみつけ、そば降る雪の中、水中から団員の手によって引きあげ、現在地に建立することにし、田辺に細工を一任した。

除幕式延期

あけて大正十四年、工事は進み、三月末には除幕式を行う段取りになった。団員は喜んでその式の準備をはじめていたさなか、三成警察署長より、「建碑については異議はないが、除幕式は待て」という達示が届いた。驚いた私は横田郵便局まであるいて出て、（電話はこゝにしかなかった）仁多郡長（三成町の）田中義一氏に電話をした。郡長は事情はわからないが、明朝警察署長にたずねてみるとの返事で、まっていると翌朝返事があった。当時全国的に農村へは不況の波が押しよせ、小作争議が各地にぼっ発していたので、この度の挙式がこうした騒動をせん動する恐れがあるという、内務省の判断があったということがわかった。そこで式をひとまず延期し、陳情を重ね、心配

されるような動機は設立者の間にも全くなく、またこの地方にもそういう空気も一切ないということを申上げた。県の連合青年団からも内務省へ、義民佐倉宗五郎は霊廟まで建立されている、是非この石碑の建立だけは許可願いたいと陳情した。

佐倉宗五郎

下総佐倉藩（千葉県）の義民で、本名木内宗吾、印旛沼会津村の名主（庄屋）であった。寛永十九年（1642）藩主堀田正盛が、新らしく移封されてから、新政をしいたがそれが暴政であったので、農民たちは競い起って藩に強訴しようとした。その地の支配代官は、総代名主宗吾等六人を召喚して聴問したがらちがあかなかったので、宗吾は意を決してひそかに江戸に出、藩主正盛に書を奉って、百姓の困窮の状を訴えた。正盛は願を聞いて改めたが、宗吾の直訴の罪を数えて死罪に処した。時に正保二年（1645）後人その義烈を称し、堂を建てて霊を慰めた。幕末になると舞台劇にも演ぜられ、広くその義烈がたたえられた。

その結果、仁多郡長、警察署長は、ともに青年団の建立の動機は真心のあらわれであり、かかる心配のおこることはないものと認めるとともに、起らぬように私共の責任で努力すると、一札を入れられたので、許可が下りた。

私はこの機会に青年団長を辞すとともに団員をしりぞき、自由な立場で、四月末落成式を挙行したのであった。

当時の大阪朝日新聞は、百余名の団員の義挙をくわしく報道した。この時田中郡長は、仁多郡青年団長も兼ねていたことが私どもへの理解の大きい力でもあった。

（横田史談会員　写真は同じく会員　佐世川徳雄）

稿をあらためて　義民伝六の義挙については詳述することにする。

（写真の石碑の文字は郡長田中義一筆）

みてら・泉涌寺

京都駅から七条通りを東へ東大路を南へ下り、泉涌寺道停留所を東へゆくと三百米で総門（前号絵図参照）につく。こゝからが真言宗泉涌寺派の本山、泉涌寺である。京都は東山三十六峰の一つ、月輪山のふもとにある。ゆるやかに登る長い参道は参詣者の心を鎮める。落着いた塔頭（たっちゅう—古墓）寺院のたたずまいを左右に見ながら進むほどに、あたりの木々の茂みが、こまやかに深まってゆく。玉砂利が掃き清められた広い参道は孝明天皇、英照皇太后の御陵と泉涌寺御殿への道である。この参道を左にみて右に登ると泉涌寺大門に至る。高い台地で正面に市内を一望することができる。またここからはるか坂下に、仏殿、舎利殿、霊明殿などこの寺の中心建造物が望まれる。

「みてら」（御寺）とは

この洛東の名刹大本山泉涌寺の通称であって、歴代の天皇が先帝陛下の菩提を弔らわれたので、歴代天皇が「みてら」とよばれたのにはじまるという。

弘法大師が天長年間（824～834）にこの地に草庵を結び、法輪寺と名づけたが、のち仙遊寺と改称された。鎌倉時代の順徳帝の建保六年（1218）月輪（がちりん）大師が、宋の様式に則って大伽藍を建立した。その時境内から浄泉が涌き出たので、今の寺名に改称した。同寺が開山としている月輪大師は宋に遊学し、帰国後は戒律の復興に力を致し、わが国仏教界では、北京律の祖と仰がれている。後鳥羽、順徳、後高倉の三上皇は大師について受戒し、以来同寺に対する皇室の信任も厚く、とくに四条天皇は大師の転生（うまれかわり）と称され、崩御にあたり山陵もこの寺に造営された。それより歴代の山陵は後記のごとく、多く当山に設けられ、皇室の香華院（菩提寺）として七百年間、特別な崇敬と殊遇をうけて来た。

震明殿には天智天皇以来、明治、大正の両天皇、昭憲、貞明の両皇后に至るまでの歴代の天皇、皇后、親王の御位牌がまってある。（天皇の敬称を略す）

陵墓　四条

同座陵

（一つ陵にあわせまつる）

後深草、伏見、後伏見、（以下四柱北朝）後光厳、後円融、後小松、称光

以上いづれも火葬による後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成

以上はいずれも火葬による灰塚として、同じ陵内に、これは戦国争乱時代による、皇室衰微のためである。

月輪陵

後水尾、明正、後光明、後西、霊元、東山、中御門、桜町、桃園、後桜町、後桃園までの十一柱と皇族八柱

後月輪陵

光格、仁孝二柱のほか三柱

泉山陵

孝明、後堀河ほか

の陵墓が泉涌寺のまわりにある。いずれも幕府の眼をはばかり恐れて、極めて質素な同座陵である。

（3頁最下段へ続く）

横田地域史のしるべ ⑥

横田庄（下）

貢納の記録

「御湯殿上の日記」によれば禁裡御料所として

大永元（1526）七、十一月貢納
享禄元（1528）三、十月貢納
仝　二　十二月貢納

とある。このころは尼子と大内両氏の戦いに続いて、尼子、毛利両氏の戦いが続いている時代である。

「実隆公記」によれば

享禄元には一万三〇〇〇疋を上まわる額であり、その後も経続して万疋を輸したから、他庄に比して成績は良好であった。

享禄四年（1531）尼子経久の攻撃によって藤ケ瀬城はおち、為国は捕えられて富田へ幽閉され、のち殺された。三沢城主三沢為幸は石原義扶を代官として横田へ派遣し、安部氏を再び代官とし、ともに庄務を分担させた。

天文三（1535）三月
仝　六　四月
仝　八　十二月

に貢納の記録がある。記録のおちであるのか、滞納があったのか明らかでないが、次のような記録もあることから、滞納が相当あったものと思われる。戦乱にことよせた滞納や、滞納せざるを得なかった庄内の情勢もあったと推定される。

天文八年閏六月五日に（雲竜院文書）、横田庄に関して守護尼子伊予守宛に綸旨が下されている。すなわち、「横田庄のうち雲竜院領は、数年年貢を寺納していないとのこと、そのために、長日御祈祷、先院後柏原院の作善もまったく退転し、黒戸の御殿も大破に及んでしまう。早く厳密にとりたてるように」という内容である。雲竜院の基本領であった横田庄がこのようであったから、院の経営の困難は想像以上であった。御所に対しては貢納は続いていたが、雲竜院には数年なかったとみえるのである。

天文十二（1543）一回
仝　十六　二回
仝　十九　一回

とあいついで女房奉書が出され使が上洛し、千疋、二千疋と費用をとどけることがあり、おくれながらわずかに先院供養の仏事を続けることができたという。

しかしこのころ本来、雲竜院へ奉納すべき年貢銭は、五万疋（五百貫文）であったから、極めて少ない金額であった。

尼子氏の横田庄支配時代

天文十二年三沢氏は雲南・備後の諸将十三人と共に、ふたたび尼子氏に服することを約したが、警戒した尼子氏は横田に直属の将森脇家貞をはじめとする代官を各村に常駐させ、すべてを支配したので、三沢の代官は三沢に退き、安部氏も帰農した。

天文十六年の泉涌寺文書には「八月二十一日いづものくによこたの御れう所」の文字のあるものがあるが、内容は明らかでない。

天文　十七（1548）二・八月納租
仝　十八　九月　泉涌寺
・禁裡御料所横田荘貢納
仝　十九　一回　納租
仝　二十二　一回　納租
弘治二（1556）二回　納租
仝　三　一回　納租

とある。

永禄元（1558）四月には禁裡・御料所干酌郷、横田荘は、御代替の御礼物を献ずとある。

仝二年には三沢氏は毛利氏の配下となり、仝三年暮より、横田庄から尼子勢力は一掃された。

三沢氏は毛利氏に対して度々誓書をおくって忠誠を約し、各地に転戦した。

永禄八年　には「よこたへの父りんしにわたへいたさるゝ」

とあるから、尼子、毛利の争乱にあけくれて滞納のことがあったであろう。

永禄九　七月　貢納

天正年間の記録

天正二年（1574）の朝敵赦免の綸旨には、禁裡御料所とある。

天正五年には日御碕神社の仮遷宮が行われたので、この費用を毛利配下の諸将に棟別課当をした。その時馬来孝綱（馬木城主）三沢為虎（亀嵩城主）もその中にあって、念書を差出しているが、為虎は仁多郡に於てはかかる役務は受けざる例なるも、毛利家の命なれば受諾するが、ひとり横田庄は禁中御領にて、上

文化財

当寺の建造物は応仁の乱でほとんど焼失し、現存はそれ以後のもので、仏殿は徳川四代家綱将軍の再建で、本尊は運慶作の釈伽三尊である。壁画は狩野探幽作のもの。楊貴妃観音堂には、玄宗皇帝が最愛の彼女の冥福を祈るため、その姿と聖観音にかたどって、等身の座像に彫ったもので、建長七年（1255）に日本に渡って来たもので、美しい傾国の美女の面影を感じさせる。

また赤穂浪士の大石良雄が山科閑居時代に建立した茶席含翠軒、那須与一が奉持した仏像など貴重なものが多い。また境内の今熊野観音寺は、西国第十五番の札所である。

雲竜院

この山内にある別院であって北朝の天皇の菩提所である。北朝方の仙洞御所（上皇御所）御料所であった横田庄の一部が雲竜院へ寄進されたのは、こういう理由によるものである。

（横田庄は南北朝統一後は、禁裡御料所即ち皇室の御料所となった　別項　横田庄（下）参照のこと）

使住居の事故、こゝだけは免除されたいと申出ている。上使とは誰をさすか不明である。

天正七年になると、七月十一日、菊亭晴季を禁裡御料所横田荘代官に任じ、納貢を催促させとある。その後の状況は明らかではないが、十年後の

天正十四（1586）六月十七日には「横田荘代官菊亭晴季、納貢可」とある。

— 菊亭晴季については本誌№25に詳細に記述してある。

当時公卿内の実力者であったから、その実力と名声によって、横田庄に期待をかけたものと思われる。そこを参照のこと。

そして最後の記録は、三沢氏一門が馬来氏とともに安芸に引き移った天正十七年の翌年天正十八年一月十七日

「御領横田荘の貢納を、天皇官女に分け給う」

である。貢納品は何であるか明らかでないが、他の庄の記録などでは、粟とか、地酒とか、地方の時節の珍物も上納されている。

その翌十九年七月三日には、毛利氏から横田村六ケ村支配役大催二郎右衛門（樋口・表）に鉄を、広島に送ることを命ずる文書が出されている。やがて郡内各地に毛利の部将が配置されたから、禁裡御料所は新らしい時代の到来とともに終りをつげたのである。これから前№42の鉄奉行時代に入るのである。

古代に成立したこの横田の荘園は、全国各地の荘園とともに同じ運命をたどったのであるが変遷を続けながらも、これ程長く続き、記録がとびとびであるが長くのこり、荘園の様子のわかるのは、出雲国内でも珍らしいものである。

「疋」（ひき）の今昔

疋＝四　で、鳥目（銭の異称古銭のことで、中に穴があって鳥の目に似るからこうよんだ）の単位である。

起りは犬追物（いぬおうもの）からで、一匹の犬を一〇文として勝負を競った。一匹を一疋とあやまり、一〇文を一疋と呼ぶようになった。

一〇〇文＝一〇疋

一貫文（一、〇〇〇文）＝一〇〇疋＝旧銀貨一文

で

のち一疋＝二五文となったこともある。

時には　一貫＝　一、〇〇〇疋

五貫＝　五、〇〇〇疋

一五貫＝一五、〇〇〇疋

とするものもある。

昭和十年ころ

一〇〇疋　＝当時の銭二十五銭に相当した。そのころ

布帛（ふはく＝ぬのときぬ）二反を一疋ともいった。即ち鯨尺の五丈六尺である。特に輸出用のものは一疋を十二丈としていた。

犬追物とは中世の武士の間で盛んに行われ、応仁の乱以後絶え、島津家にのみながくのこった騎射の練習競技であった。円形の馬場（直径五八・二米＝二一尋）の中央に放った犬を、周囲から馬乗で、ひきめ矢（やじりのない桐の木のついたもの）で射合ったもの。

民間信仰メモ①

淡島（あわしま）さん

十月十三日は三成の淡島さんの祭りである。昔は郡の運動会の日になっていて、大変に盛んであった。

淡島は、イザナギ、イザナミの両神の間に出来た、二番目の神だといわれるが、こちつけであろう。本社は紀伊国の紀伊水道に面した、加太神社だといわれる。元禄のころ、アワシマといわれる乞食のような宗教家が布教した俗信で、婦人のヒステリーや下の病に効験があるといわれ、腰巻きや、その他女の肌につけるものを奉納すると霊験があるといわれる。浅草観音境内の淡島堂には、女の参詣者が絶えない。これらも人に知られたくない病気や悩みをもっているのである。

教理も由来もさだかでない信仰が、説明する人もないままで、生命を保ち続けているところが、日本人の民間信仰の特色といえるかもしれない。神道か仏教か何宗かも意味ないものである。

金田比羅（こんぴら）さん

こんぴらは梵語クンビーラの音訳で、鰐魚のことで、ガンジス川（インド）にすむわにの神格化で、武装した姿でかかれ、クビラ大将ともいう。海神竜王ともされ、祈雨や海難の祈願を受け、仏法を守護する古代インドの神である。従って漁民、船乗等の間の信仰が著しいが、この神への参詣を目的として結ばれた金毘羅講は四国を中心として広く分布し、必ずしも水難の神とのみなっていない。

讃岐のこんぴらさんは、松尾寺という真言宗の寺で、海上安全の神として尊崇されていたが、明治維新の際に祭神は大己貴命（おゝなむちのみこと＝大国主命）と崇徳天皇ということにされ、神社となり、金刀比羅宮と改名した。金毘羅が大己貴命だというのは、平田篤胤（幕末の国学者）の思いつきで、古記録には全くないことである。

日本の信仰では、神は時代とともに　変り　御利益も変ることをあらわしている。

印刷実費一部百円／六九九一八　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替　松江六〇一番／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田の角力取　たたら炉の変遷　たたら遺跡一覧表　地域文化を育てよう

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第44号
12月号
昭和53. 12. 2
奥出雲文化協会

横田の角力取（上）

宮川林右衛門

宮川林右衛門

横田町大字横田の北方、藤ケ瀬城趾のある山麓の町並みを六日市という。その家並みの東はずれのしっかりした岩盤の上に写真のような石碑がある。

数年前、台石の倒壊をおそれて補強された時に、すっかりセメントにぬりこめられて、わからなくなったが、そこに

明治廿年
亥九月設
立
自安政年
中至明治
立初掌本
町市押職

と刻んであった。

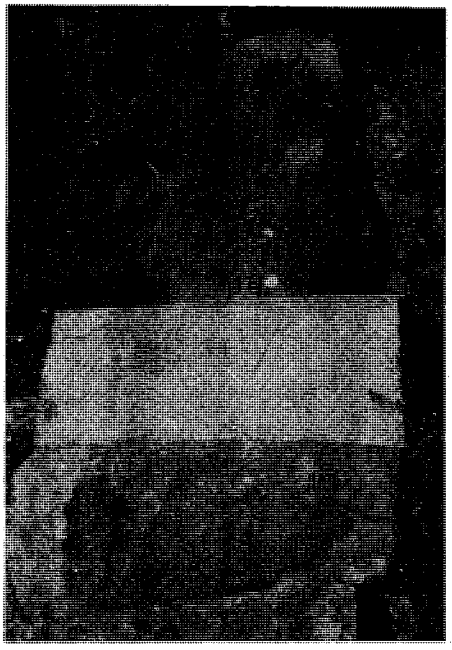
力士頭取であったが、町（大市・六日市）のために貢献したことが誌されている。

宮川はしこ名で本姓は山本である。明治廿八年七月十二日歿し、戒名には「守林道護」の文字がある。天保初年の生れであるから七十才近くであったであろう。

明治二十年に宮川は盛大な引退角力をしたとの記録があるから、その時にこの碑を建立してその功労をねぎらったものとみえる。力持ちであった逸話も残っている。腹の上に米六俵をのせて相当の時間平然としていたとか、隠岐産の欅（けやき）の木で造った臼を腹の上にのせ、（碑の東方三百米の山麓香月堂前で）数人で餅をつかせたとかというものである。一面才覚にすぐれ、当時としてはまれにみる才人で、文字を書ける数少い人の一人であって、町の要職にもあづかったという。安政年間から明治初年（二十代～三十代）にかけて、大市・六日市の市押職をつとめたという。この職務内容は明らかでないが、次のようなものと考えられる。

横田の牛馬市

当町の牛馬市は歴史が古く、中世三沢氏が藤が瀬城に居城を移してから始めたものといわれ、一ころは中国三大市場（伯耆大山と石見出羽）の一つといわれるほどに栄えたという。



明治十年代に入って、これまで全く町の自治組織によって運営されていたのが、行政の指導が強くなったという。牛馬市は牛馬の取引のみでなく、諸生活必需品の商人も町に一ケ月余も露店をつらね、近郷の人々を集めた。当時はといっても昭和十年ころまでは、この地方の農家が現金収入を得るのは、米の収穫時期の十一月下旬以降であった。そして牛馬の売買の収入もあったから、田舎の販売力は唯一最高の時であった。その上これをあてこんで遊芸人も入って遊興飲食の楽しみを田舎の人に教えもしもうけもした。大正年間筆者の幼いころ、流行唄はこうした機会に、口から伝わるのが唯一の道であった。こうしてこの地方にまわりの地方よりも早くハイカラな唄もはやり、ハイカラな品物流れこんで来た。おれわ河原の枯すすき　の船頭唄も、これを歌うと駐在所のだんさん（巡査）にしかられるぞと言いきかせられながら、こっそり若い旅館（料亭もかねていた）のお嬢の口を通してならった。厚化粧の白さと、金歯の入っ歯のある口もとは今も鮮かに憶えている。その人も白髪になってあの世に去られた。

こうして店は年末売出しもかねて十二月下旬に終り散っていった。こうしているうちにこの地に土着した人も多い。部屋が多くて余裕のあるうちは、商人や中国地方各地から来る博労の民宿もして、一年間の小使いや或は半年の生活費もかせいだ。

文化文政ころから全国的に博徒が横行したが、この地にもこうした機会を期にして多かった。

遊び女の往来も多く、ほほえましい話や、財産をはたいた話も伝えられている。

宮川はこうした時代にその体力と才覚で、町の自治組織の市場関係の要職について、取締とともに事務の処理にもあたったのであろうか。

たたら炉の変遷

横田の遺跡と今日の炉から導いた試論

鉄の記念日のある十二月は、伝統あるたたら研究会の第二十回の全国研究総会が、横田町で開催される。「日刀保たたら」も第二年目を迎えた。

たたら吹きの伝統が今日この地に続いているということは、真砂砂鉄の唯一の産地という天恵の賜であるとともに、父祖の努力の賜であるという誇りも、この地の人々は持ちはじめた。一方わが国はもとより、諸外国の鉄に関心をもたれる方々の目が、横田に向けられているということは、この地の人々に責任感、義務感を抱かせる。それは近世、中世、古代へとさかのぼって、その発展のあとをしめすたたら遺跡を是非ともみつけ出して、その保存を計らねばならないということである。

だがそれは極めて困難なことである。中世半ば以降、この地で開発された「鉄穴流し」の工法によって、その遺跡のあったとみられる盆地周辺の丘陵地の多くが流し去られてしまっていることである。跡地がまた流砂で出現した土地が、すべて美田となって、四百年間この地の人々の生活を支える唯一の基盤となり、それが今日の横田の水準高い文化を築いたのではあるが。

しかし幸にもまだ残された遺跡があって、関心の深まったこの地の人々によって発見が続き、町当局の理解によって、発掘とその保存への策が講ぜられつゝあることは、よろこばしい限りである。一層の発見への努力の巾広くなることを期待するものである。

たたらを分けて、「野だたら」と「たたら（高殿たたら＝永代鈩）」とされているが、上屋がつくられているかないかの外観上に重点を置いた分け方であって発達を調べるのには適切でなく、むしろ研究を阻害している感がする。筆者はたたらを吹くための風力をどのようにして得たかを中心にして分類した方が、今後研究の深まりのために是非共必要と思う。それを明確に立論する専門家では勿論ないが、何とかそういう方向の試論をのべて、糸口にしたい。幸にして時代の異なる遺跡をもつこの地の、一人の物好き者の一愚論として一読していただきたい。唯単に野だたらか、たたらかと簡単に分けることに、ことをあいまいにしている原因があると思う。詳しくは、「奥出雲たたら製鉄覚書（上）」に抽象的に書いたが、こゝでは遺跡の見取図（ほぼ同一の縮尺で）をもとに、具体的に説明に入るが、その前に「吹子の発達」と「金屋子信仰」についてふれておく。

吹子発達

送風装置は吹子（ふいご）を中心としなければならない。たたらでは、皮袋を手で押すものから、それを改造して足で踏むものに発展したと文献は教えてくれる。他方鍛冶屋では吹差即ち横差吹子が比較的早くから用いられていた。

武井博明の説によれば、（島根県横田町誌、近世製鉄史論）、「鉄山秘書」から次のように変遷が考えられるという。

備中・伯耆（筆者は東伯に限定）

踏み吹子 ——→ 天秤吹子

出雲・石見（筆者は西伯を加える）

踏み吹子→吹差吹子→天秤吹子

（西伯は横田町と山を一つ隔てた隣で、同一砂鉄鉱脈の中にありいろいろな面で一体性が濃い）

あとの西部地方で送風が吹差吹子になったのは、天文五年（1.536）をいくらか遡った時代であろうと考えられる。「杠日記」からの推定である。そしていわゆる野だたらが終りをつげるのがこのころと、この地方では俗に言っている。

吹差吹子になって、制御できる送風が行われるようになり、一定の温度の調整ができるようになって、鋼造りが容易になったのではないか考えられる。この西部地方は真砂砂鉄の産地であるから、良鋼の生産ができたと思われる（いわゆる鍛押法となる）。一方吹差吹子はより高温も得られるから、赤目砂鉄地帯では銑造りが極めて容易となり、錬鉄（庖丁鉄）造りも進歩して、鉄の需要の増大した戦国時代の波に乗った。それは一方砂鉄の増量を要求したから、鉄穴流しの工法の開発を促した。この地の古い検地帳は中世におけるこの地の開田が実にすさまじいものであったことを裏付けている。今日の土地はこの時代にひらけ、地名も、古い家の屋号も砂鉄、たゝらに関するものが実に多い。

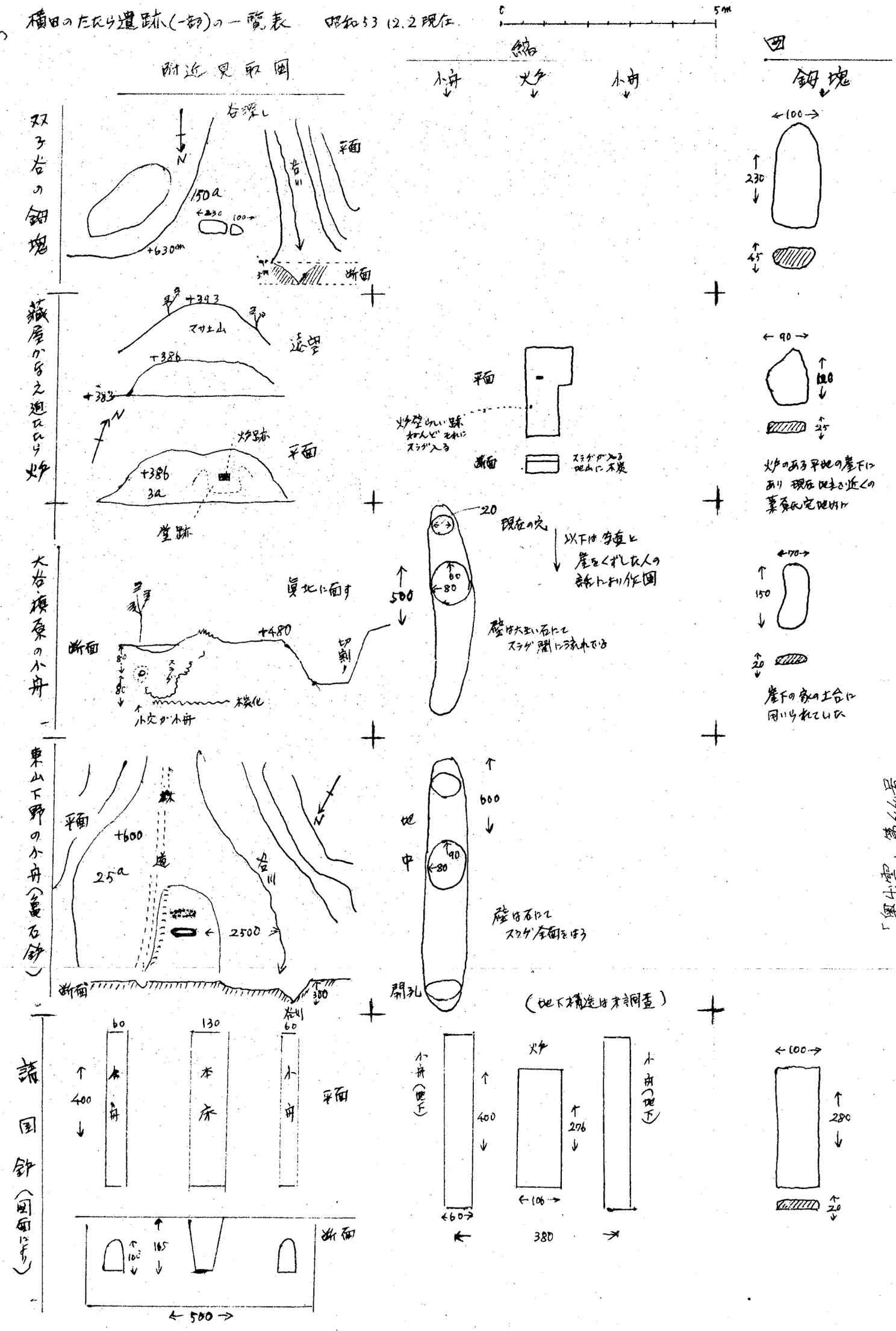
吹差吹子（二梃、四梃、六梃と用いられる）になって、操業がやゝ容易になると、各地で春とか秋にやゝ長期にわたって行われるようになる。雨露を防ぐ程度の屋根も設けられたと思われる。砂鉄はどこでも出なかったから（木炭はどこでもつくれる）それにつれて操業場所は移動した。規模も小さかったから移動も容易だった。（②蔵屋のたたら遺跡、①の双子谷遺跡は露天の時代のものと考えられる）。そして高地の乾燥地（南向きが多い）が選ばれた。

この時代は天秤吹子の出現ころまで相当永く続いた。

天秤吹子が開発されると炉の移動が困難になり、やゝ広い場

全タタラ「雲伯」

横田のたたら遺跡(一部)の一覧表　昭和53 12.2 現在



所のやゝ便利な処に炉が定められた。数年も続いてそこで操業される。そしてこんどは砂鉄よりも、木炭が先にその周囲から得がたくなって、たたらを新しいところへ移動する。そこで「鈩を打替える」という言葉が使われるようになる。打替えに相当手間を要したようである。そして二十余年たって木が成長すると再び元の場所にて操業する。それは「鈩を吹く」と簡単に書かれている。

そして春にも秋にも操業し、相当長期間三ケ月位も連続操業をするようになる。やがてこのように成長した鉄師は大鍛冶屋も傘下に入れて一貫作業をはじめる。こうした時代の炉が③の槙原たたら遺跡であろう。

（天秤吹子は元禄四年から、大鍛冶屋と兼業は宝永元1704年1691が初見）

こうして企業経営的色彩の鉄師が点々と成長すると、松江藩はこれらを通して鉄を支配しはじめ（仁多郡がそれら鉄師の八割を占める）。こうして冬季も操業を考えるようになる。そうした企業化傾向は、砂鉄、木炭の生産から運送までの組織化を考える。高地から平地の交通の便利なところを操業場所と考えるようになる。平地だと大鍛冶屋は水が便利でよろこぶが、たたら炉は水を嫌うから地下構造が大きい問題となってくる。冬季操業のためには、砂鉄、木炭を炉の附近に集めねばならない。雪の深い季節の長いこの地では、外壁も造り丈夫にしなければならない。高殿が出現する。技術者の住居も考えねばならない。移動はいよいよ困難となる。

④亀石たたらの時代へと移る。

金屋子神社

慶長十七（1612）から二十四年間、奥出雲は鉄穴流しを禁止された。農民は生活に窮した。たたら技術者は禁止されていない奥能義に移動し、そこが栄えた。その結果災害が起って危機を迎え、奥出雲の解禁とともに再び帰山するものが続いて、奥能義の衰退が訪れる。（くわしくは別書覚書上に）それが技術者の各地への移動をひき記した。金屋子神を奉祀して、技術者（村下たち）が経験と勘で養った技術を神託として伝えあるいたのである。比田の金屋子神社の隆盛はこうして起ったと筆者は考えている。進んだ鈿押法をやる技術をもった人々は、真砂地帯はもとより、赤目地帯でも救世主として迎えられたのであろう。当時重労働者下積みの人と見られていた人々は、金屋子神に祈ることによって、技術者としての生活が保障された。中国地方のたたら製鉄の発達と金屋子神社の勧請分布はこのようにして考えると符号して興味深い。これについては別に明らかにしたい。

遺跡の炉の編年

①双子谷の鈩塊（横田町指定文化財、附近270 a とともに）

古から発見されていた。いわゆる野だたら時代のものか。凹地でつくり出されたような鈩塊の形状をしているし、鈩塊の周辺には炉壁というより木炭とノロが粘土質の上に入り込んだ状態であり、それも薄い。鈩塊の厚さも異常なまで厚い部分があるのは、どういう生成であったであろうか。

②蔵屋かなえ廻たたら跡（町教委により国と県の補助にて今年八月発掘）

結果を検討中、図のように炉も小さい。小舟もなく、炉床も特別につくったとはみえない。吹差吹子であろう羽口のついた炉壁多数出土、羽口の間隔からすると片側一二ケ位とも考えられる。吹差吹子四挺建か。近世初頭から相当中世へ遡った時代のものか。

（これは作業した筆者の一観察で公式のものではない）

この遺跡は複合していて建築物の礎石趾やその附属物の破片があらわれた。こゝに正徳二年（1711）以降に毘沙門堂が建てられ、明治35年まであった記録や、仏像や礎石など実物が残っている。方三間と記録のあるそのまゝの礎石趾もあらわれた。この地方では炉跡には、平地であること乾燥地であること、縁起が良いことで、住居を好んで建築する習慣がある。

③大谷・槙原の小舟遺跡（五十三年五月、渡部高義宅の宅地拡張にあたり崖の断面に露出）

初代が本家より分家したのは1770年前後と推定される。天秤吹子を用いたものと推定できる。周囲が低い丘にあって地下水の心配がないから、専らまわりの乾燥に気をくばり、長い小舟でそれをすることが行われるようになった時代のものと思われる。従って炉床の構造は極めて簡単である。周囲の30 a は平地で、天秤吹子を備え大鍛冶屋もあせわもったたたらで、一六九〇年代（元禄期）のものであろうか。

④の亀石たたらとの規模は同じだが、まだ平地に下らない地下構造の簡単なより古い時代のものである。近くの鉄師高口・糸原の経営したものか。

④東山下野たたら遺跡（町指定文化財、昭和三十九年農道拡巾の時発見）

これは卜蔵氏の経営記録にある亀石鈩で、明和元年より五年（1764～1768）まで操業したものである。

企業化へ一歩を進めた鉄師が、砂鉄山、炭山に近い谷の入口の平地に築いたもので、従って③の炉より地下構造が進んだものと推定される。

このころから雨川の絲原氏もこれと同じ様な場所で経営をはじめ長期に及んでいるから、このころから近世のたたら構造は完成されていったものと考えられる。

これが靖国鈩へと続くのである。このころからは、「鉄涌かず」の記録即ち失敗の記事はほとんどみあたらなくなる。③の槙原の遺跡はこれに至るまでの過渡期のものであるとみてよいであろう。

○「たたら製鉄早わかり」は終りとし　次号より「絹の道・鉄の道」をしばらくの間連載

○訂正—前43号「義民伝六の碑」の文中

田中義一は田中為一

地域文化を育てよう

その模索と基盤づくりの一つの足跡

戦後なんとか食えた田舎ではこの際、都会に対する優越感ももち、自由な楽しみを得たいと、盛り上る欲望をもった。しかし方向を誤った。都会への優越感を満たすために、都会の文化人が食うために持ちあるいた都会文化や、外国文化にとびついてしまった。気がついた時には田舎の生活が崩壊へと進みはじめていた。田舎の生活に基盤をもった地域文化を育て、そこに田舎の連帯感を育てねばならないことに漸く気づいた。その一つの歩みをこゝに振返って、若い人々へのバトン渡しの準備に。

奥出雲（横田文化改題） 毎日発行して44号、横田の歴史を中心に地域文化と人物を載せて来た。会員八〇名、会友七〇名の中で、幾人かの方の原稿も頂いた。奥出雲は陰陽の接点、備後の方の投稿も掲載できた。この拙いものが何とか二粒の麦に終らぬことを願い今しばらく続けたい。

（六号以降は若干在庫あり）

横田史談会

古文書を読む集い 中世、近世、現代と町の図書館には古文書が整理されて保管されている。たたら製鉄に関しても貴重なものが豊富である。毎日第一土曜日の午后、県立図書館の協力も得て続けている。参加者が一人一人読んで研究している集いは、県内で珍らしい、30回に達し熱心である。

史蹟めぐり 町内はもとより県内、山を越えて広島県の三次、庄原、高野にも古代から今日までの歴史、遺跡、文化財と訪ね、彼我の交流も検討する。既に12回。

研究入門講座 7回

考古学（日本考古学会員の池田満雄、門脇俊彦・邁岡法）、たたら研究（窪田蔵郎・並河孝義、和鋼風土記と靖国鈩の二つの記録映画の研究）ほか

陰陽地方史研究連絡協議会

広島県・鳥取県との合同で開催、その後岡山県との交流も深まる

展示会と写真集 町内の出土品を展示して関心を高め、それを求めに応じてアルバムに貼って配布

発掘調査協力 4回

町教委の調査に協力 円墳・横穴、たたら遺跡等、実地による研究深化

議習会・大会への参加

松江で開催される講習会とか地方史研究協議会、日本考古学会のそれぞれの全国大会、町内の他団体主催（仏像に関するものなど）のものに積極的に

写真展協力 2回

横田フォトクラブに協力し、横田自然、産業、文化、文化財、生活と写した「横田の顔」写真展を、松江県民会館において、好評と反響を呼ぶ。

「わが町と寺と在家と野の仏」の写真展を今秋開催、地域のみなおし、心のふるさとの再認識をする。フォトクラブ会員の腕の良さが好評の原因であった。（以上50年以降の記録）

横田くらしの文化愛好会（仮）

自分自らが古くから地域に密着し、地域色のある文化活動にたずさわっている者、一〇名が、毎月一ぱいのそばを食べながら、語り合っている（そばで語る会）。

そこでは自らの活動をふりかえり、この地の文化活動をながめ、その将来の展望も語る。また、生活を、食生活を、人物論も、芸術論も作品論をふまえてさらに宗教についても語りあう。政治をぬきにして。毎回必ず料理研究家の手作りで出される一品料理は、季節感をもって楽しみの一つでもある。

そこから芽生えた催しを、標記のような主催者名で、横田ショッピングセンターの催場で行い。発掘したり、育てるための後援をしたり、眼と心を育てるための学んだりの機会として、各方面の経済的協力で公開する。

○郷土出身の陶芸作家・安部宏君の作品展 3回

○日本的な松江の民芸作家、金津滋氏の作品展と講演会（町商工会主催）。これにあわせて町内の埋もれた民芸品を作っている人々の作品展

○郷土料理・山菜料理の試食会も数回開く。

○日展、二科会作家である 松江の野津渋生・米沢天涯両氏の書画展示会など

実費頒布の印刷物

○横田史談会編

「あるくみる横田」B6判五〇頁 ―自然、歴史、文化財、くらしの文化― 残部僅少

限定印刷

○横田史談会編 十二月二日頒布はじめ

「奥出雲のたたら製鉄覚書上」写真五〇枚（カラー含む）ほか図多数 B6判一一〇頁 限定印刷三〇〇部 実費一、000円

この度は仁多郡のたたらについてはじめて歴史と技術がまとめられたもの、日本のたたら製鉄の中心地のおおよそがはじめて明らかになる。鳥上木炭工場の好意ある協力ではじめて公開される。写真資料など貴重なものが収録されている。

出版物

○松江文庫5

「雲州そろばんの今昔」B6判 二八〇頁 ―歴史とその技術― 価一三〇〇円 好評再版 松江 報光社刊

印刷実費一部百円／六九九―一八 島根県仁多郡横田町横田 高橋一郎（振替 松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 45 号
1 月 号
昭和54. 1. 6
奥出雲文化協会

絹の道・鉄の道　横田の角力取（下）　地域文化の基盤は

夢の舞台をひろげよう
絹の道（シルク・ロード）・鉄の道（アイアン・ロード）(1)
—三〇万年前の正月から—

韓国で出土したハンドアックス

—「絹の道・鉄の道」をたどるためには遠い彼方に思いをめぐらしてその道は長いのである。—

こう書き出しでこの文を書き終っていたところ、朝日新聞で韓国首都ソウルの北方金谷理（チョンゴンリ）から三〇万年前の石器が出土したという記事を知ったとたん、是非このことも書かねば、この絹の道・鉄の道ははじめられないと思い、科学朝日新年号によって、前置としてその抜き書きをのせることにした（地図・年表各一はそこから転載）。三〇万年前の元旦の太陽はどんな輝きであったであろうかなどと思いめぐらして。

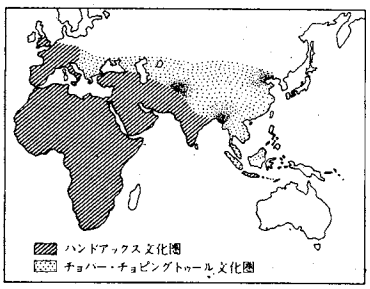
図のCは、ついこの間、岡山県で発見された石斧で、一七、〇〇〇年前のもので、この種のものは今までは、関東、北海道北陸地方のみに出土していたので、これを用いた人々は、シベリヤ北方から、マンモス（巨象）を追って宗谷海峡を通ってやってきたものであろうとされていた。ところが南の岡山県で発見されたということは、新しい問題を提供することになったという。図Bは金谷理から発見されたハンドアックス（握りづち）である。図のように両面とも丹念に加工し、先端をとがらせた大型な石器で、礫を皮をはぐように外側から剥片をはがしてつくられたもので、加工方法といゝ形といゝ、図Cのチョパーやチョピングトゥール（礫器と総称する）とは異質の文化で、それよりは高度の文化といわれる。

図Cの石器は河原に転がる礫でつくられていて、礫の片面だけを荒く打ちかいて刃をつけたり、両面からかいてつくってあるだけである。この分布は地図に示す地方で、インド以東である。そこにはハンドアックスは発見されていなかったのに、今度韓国で発見されたのであるから、驚異的といわれて、人類の歴史の考え方が大きく変ろうというものであるという。

次頁の年表にある、ヨーロッパ・アフリカの前・中アシュール文化に属するハンドアックス文化（握りづち文化）が、中国をとびこえて韓国に伝っていたのである。同じ時代の中国には、北京原人が住んでいて、はるかに遅れたチョパー・チョピングトゥール文化（礫石文化）をもっていたのである。

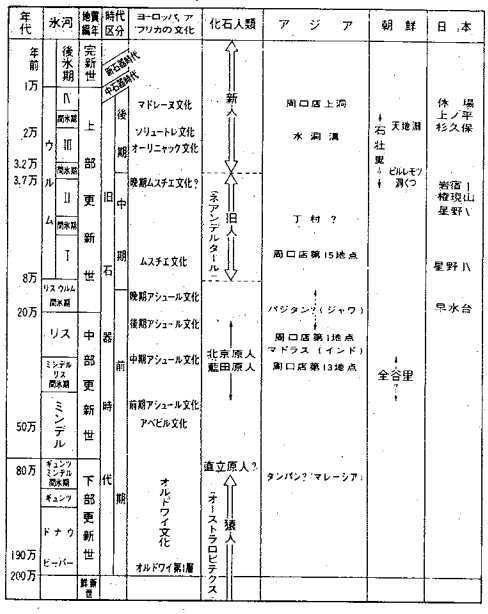
この二つの文化の間には次のような長い隔りがある。チョパー・チョピングトゥール文化は三〇〇万～二〇〇万年ほど前の原人のひとつ前の猿人段階（つまり人類の最古の仲間）のもので、それが一〇〇万～二〇〇万年間ほど続いた。そして今から八〇万年前になって、ハンドアックス文化が出現したのである。最初はやゝ粗雑なものであったが、次第に本格的になり、アベビル文化、アシュール文化へと発展した。そしてアフリカから外へと拡がったといわれている。

その高度の文化がはるか離れた韓国にどのようにして伝ったかが、今後の研究課題であるという。中央アジアから黄河流域を通って入ってきたのか、あるいはインドシナから、今は海中に没して大陸棚となっている地帯がかつて陸地であったところを、通ってきたかであろうと考えられるという。人類の交流は遠くそして広域にわたるが、今日では考えられないほどの、長い長い時間というより、長い年代をもって行われたのである。



チャンバラ

さて話をぐっと時代の新らしい徳川時代の、正月のお楽しみ番組の時代劇に移そう。ほろ酔い気嫌でチャンバラに。チャンバラ場面というものは、ほとんどが虚構で、これがかつての時代に武士の間で行われていたものであると思いこむのは、大間



違いであることを言いたいのである。私どもはほんとうの歴史認識をもって、歴史を学ばねばならないのである。

「刀は武士の表道具」といわれる。しかし実体はどうであったであろうか。幕末に輩出した剣術の大家の素性をあらってみると、

千葉周作　馬医者の家系
土方歳三　農業
男谷精一郎　検校のせがれ
岡田十松　農業
浅利又七郎　農業

即ちこれら有名剣豪は士分の出ではない。三百年来腰に刀をさしていた階級から出ていない。刀は武士の飾りものであった。

三代将軍家光の時代のあの有名な寛永の御前試合以後は、各大名家には「武術師範」というものはなかったという。

忠臣蔵の浅野内匠頭の三万五千石の家臣団にも、全く見あたらない。高田馬場十八人斬りの堀部安兵衛の腕も想像がつく話である。

幕末は物争な世の中になったので、各大名は流行のように、塾を置いて武道鍛錬をはじめたのである。だから一般大衆に剣道を普及させるなどとは、みじんも考えていなかった。「入門しとうござる」などと一般の青

横田の角力取（下）

となせ川藤三郎

宮川の家の屋号は稲森（いなもり）屋といい現山本侶章の曽祖父にあたる。

この宮川の力士としての先輩が、近隣のとなせ川こと白根藤三郎（大黒屋）である。

となせ川は、出雲出身でわが国歴代の中でも名横綱とうたわれた、陣幕久五郎の胸を借りて、角力の技を磨いたという。そして当時の出雲国の力士番付では、大関にとなせ川小結に宮川が名を連ね、黄金時代を築いたといわれている。現大黒屋白根義治の曽祖父にあたる。

明治二十七年八五才で大往生した。戒名に「力翁軒虎獄龍渕」の文字が入っているほど豪快な男で常に周囲に力の美しさ、たくましさを見せてくれる男であったという。文化七年父三十五才の時の子であった。身長五尺一寸五分の小柄であったが、体重四十五貫（一八〇キロ）の巨塊の如き体格で、はく下駄は特製で片方だけで二貫（八キロ）もあったという。力の持主としての語り草にこんなのがある。

当時鉄師が生産する鋼や鉄や庖丁鉄を運ぶのは、馬であった。馬を所有する人はこの仕事に従った。駄賃馬挽（ひ）きといった。これで財をなして中堅地主になった人は数多い。となせ川は馬一頭に鉄を積んだ上に（一駄三十貫）さらに一駄を自分の背に負って、二駄分の賃をうけていたという。その上に片足で一三貫（五二キロ）両足で二六貫を引づってあるくこともあったという。

盤石　勝太郎

藤三郎の下の娘をリンといった。父に似て女丈夫であった。晩年になって荒馬を乗りまわして、細い山道を伯耆の国の法勝寺との間を往復したという。現新出谷理髪店の場所へ分家して夷（えびす）屋という料理屋を営んでいた。男まさりであったから人気があり、牛馬市にはこの道の粋人が集り、法勝寺方面から遊芸者もまねいて繁昌したという。その子に為右衛門があった。のち隣家の大原屋永井武右衛門（現足達商店の北半分）に出入して勝太郎と改名した。戒名に「磐石軒大勇壮徹」とあるごとく祖父となせ川に似て、角力を得意とし、磐石と名乗った。

明治二十年小学校の新築落成の祝には、化粧まわしも凛凛しく、村民にくばる餅を一人でつきこなし、生徒八〇名を相手に綱引きをして勝ったともいうことを当時の生徒から聞くことができた。

毎年訪れる牛馬市には、宮川の手伝いをして、その取締りにも協力したであろう。永井武右衛門もやはり関係があった。永井はかつては松江藩士で大原郡の藩営の人参方の役人であった。明治になると捕捧（今日の巡査）として横田に来住し、大いに羽振りが

「4P下段へ続く」

年ができるわけはなかった。

たゞ物争な時代をとりしまるための捕物側の訓練機関は開設された。武道とは当時は権力に反抗するものとされたから、武士階級には伝えられず、実はそれを封鎖する側の捕物側に伝承されていたのである。

「各地に道場があって、侍はもとより町人でさえ、腰に刀をおびて、みな剣の稽古をしていた。」「道場の門弟が跡目を望んだり、道場主の娘をねらって争そう」とか、「殿様の前で刀と刀の御前試合があった」などは全く荒唐無稽なつくり話である。もしこのようなことが事実であったとしたら、棒と十手の捕物陣では、決して世の中のとり締りはできることではなかったということを考えねばならぬ。

幕末の天保から慶応にかけて黒船来冠などで、護身用の目的に武道が流行した。ところが侍がなまくらであったので、他の階級の腕の強いものが、師範になれたのである。

捕物陣の連中が、樫の六尺棒と十手を持っていたのは事実であったが、これと日本刀が激突したらどうであろうか。樫の棒がいくら堅くても、スッパリ斬られてしまうことは子どもでもわかる。十手も鉄製であるが重量は二キロである。六キロを遥るかにこえる日本刀が、大上段にふりかぶられて下され、その衝撃が十手にかかったら、十手は全く相手にならないことも明らかである。刀の敵ではないことも、力学的にも明らかである。被害は甚大である。たとえ十手の下の方の出っ張りに、刀を入れてねじったとしても、まずこの三センチの隙間に刀を入れることは、パチンコの玉をチューリップに入れることよりまだむつかしい。そして入ってもねじることなど力学的にも不可能である。それ以前に十手をもつものは大怪我をしてしまうのである。まだ六尺の樫棒がましである。幸なことにチャンバラでは派手に刀を抜いて切りかかるが実は当時、刀を抜いたものはいなかったのである。

鞘のまゝでふりまわすのであったから、樫の棒が完全にまさって捕物側は、このあばれん暴を鎮圧できたのである。さて十手は何の役をしたものであろうか。

「鯉口三寸抜いたら、お家は断絶、その身は切腹」というのは、浅野内匠頭の江戸城内殿中刃傷に対するだけの掟ではなかった。帯刀するものすべてが、いつでもどこでもその掟に従わねばならなかったのである。

従って取締陣は棒だけで十分であったが、天保期から幕末にかけて、治安が悪化して、この掟が無視されて、気儘に抜刀する輩があらわれて来た。それにつれて鞘ごと刀を振りまわすものも侍の中に数をましはじめたので、この者達をそのまま召捕っても証拠がなければ、労して功がない。今日で言う起訴事実をつくらねば駄目である。そこで考案されたのが十手である。これによって抜刀術を修業した。

すなわち相手の刀を抜く術のことである。十手の下の方の出っ張りは、あの間に刀を挟むのではなく、相手の鞘をこれにひっかけて、無理に鯉口を切らせ刀身を露出させて罪にする為のものであった。さす又にせよ、からみ棒にせよ、「抜刀させて罪にする」ためのものであったのである。

漢方医の外科手術の中には、明治になるまで、斬傷の手当についてのことは全くなかったという。必要がなかったからで、チャンバラなどということは考えられもしなかったということである。人に危害を加えるというテレビ番組は楽しみよりも、今日では人命尊重をまひさせる方向に進みつつあるという。

ヤマタノオロチ

これを退治するお話は、民族伝承の物語りとして、すぐれたものであることまで云々するつい。農村を考える頭に、土地としか映っていないのである。それに農村地域の人びとが流され一方である。

暮らしのための労働を続けた人々によって、雲州そろばんはつくり出された。同じようにして、たたら製鉄は続けられた。いずれも珠玉のような製品を生み、ここのみの産地をつくり、貴重品となった。

出雲三十三ケ所の札所の観音像と、横田三十三ケ所の札所の観音さんとは、明らかに相違している。この地の特色がありありとあらわれている。

つくり出さねばならない。まねものではいけない。

忘れてはならないものが、学校や社会の教育の中からぬけている。地域文化にも。

地域文化の基盤は

中央より先に地方があり
科学技術より先に労働があり
産業経済より先に暮しがあり
政治より先に人間がある。

この言葉を何かの選集の編集方針の中に拾った。

今日は全くこの言葉の裏返しの時代である。地方の地域社会を、票田とのみみるから慈善事業の対象にしかみない。人数は少なくても、この国の重要な基盤であることを忘れている。都会の文化人は、その文化の押売りできる市場としかみていない。農村を儲けの対象にしかみないものが多

もりはないが、これを誤まり伝承しないことだけは明らかにしたい。これを下手に扱うと、真実の歴史追求がおろそかにされるからである。

この物語は幼ない子どもに語り聞かせ、語りつがせる民族伝承の一級群のものである。親がいく度もいろんな機会に聞かせてやって、幼ない子どもの情操を培てる大切なものである。今日では大方の大人がそうした情操教育を家庭内で必ず行わねばならないものであることを忘れて——昔はそんな理屈はぬきにして、親子の間に自然にしかも必ずといってよいほど、行われていたのである——しまっている。俗悪絵本や、テレビに一切おまかせ、それらは、ほとんどがもうけのためのあきないのための、甘味のききすぎたものである。そしてそこには暖かい親の心は一つも介在していないのである。

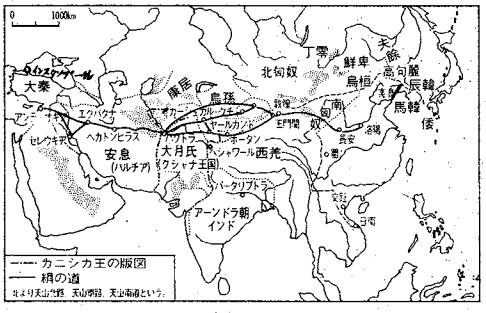
それであるのに大人は観光となると、これももうけであるがこれらの民族伝承をいやが上にも誇大視して、押したてているのである。まあ一歩下ってそれはよしとしても、真実の歴史追求に背を向けることになる懸念もなきにしもあらずである。

酒の酔いが少し回ったようであるが、この位にして終り、標題の『絹の道、鉄の道』に入りたい。（オロチ退治の解釈は本誌29、30、31号に詳説したのでそれにゆずる）

鉄の道

私どもは、この地における鉄の渕源について、大きい夢を抱いて探究を続けなければならない。「日刀保たたら」「天のむらくもの剣」を、ただ有難がっていると、大切なことを忘れてしまう。眠っている遺跡を機会あるごとに発見する努力を怠ってはならないのである。ほったらかしておくと遺跡は時代とともに失われていくものである。

かつて砂鉄研究の、日本刀研究の権威者であった俵国一先生を出した島根県であるが、また今日、日立金属安来工場をもつ島根県であるが、鉄の研究はこの方面の鉄の研究は、中国五県の中で後進県である—島根大学に工学部がないことも原因の一つ。



絹の道（シルクロード）

広辞苑をひいてみると、「中央アジアを横断する東西交通路に対して与えられた雅称。古代中国の特産品であった絹が、この道を通り、ビザンチウムを経て、ヨーロッパ・北アフリカへもたらされたのでいう。」とある。ビザンチウムは東ローマ帝国の首都で、コンスタンチヌス大帝が（306～337）ローマから都をうつしたのでコンスタンチノープルとも称した。今のインスタンプールである。

昨今はシルクロードに関する本が、この田舎の書店でも目立つほど多く並べてある。かつては大冒険とされていたこの道を、便利になったこともあるが、多くの一般観光客も旅するという。

筆者は書斉の中でこういう風潮に同調してみた。こうした背景はどこに由来するであろうか。

第一は日本文化の源流を探究したいということであるという。筆者も次のようにしてこの流れの中に入った。天平・奈良時代文化の精華を集めた正倉院の宝物展が連年開催されている。まだまだ公開されないものが多いという。そのうち筆者は四回ほど見学したのであるが、その度に、古代オリエントの影響がその宝物の中に多いことを知る。「樹下美人図」の源流はペルシャを経て入っているという。エジプトやギリシャの影響をうけた工芸のガラス器、音楽の楽器、建築における中ふくらみの柱といろいろなところにあらわれている。いずれもシルクロードを古代オリエントから逆に入って日本に達したものである。

奈良時代にはペルシャ人の李密が景教の宣教医として、この道を通ってわが国に来たと記録にあるという。

今春、奈良であった「日本仏教美術源流展」をみても、ついこの間松江であった「中国陶磁の流れ展」をみても、かつてみた「中国古代青銅器展」「韓国五千年展」を通してみても、この道がいかに大きい文化の流入路であったかを知ることができたのであった。

その他の背景としては、画一化された情報管理社会を脱出して、太古の自然に入って人間性回復とか、未知なものを探究して、そこに展開される歴史のロマンへの没入にもあるという。さらに日本の歴史を世界的視野の中でみようとするあらわれでもあるという。

さらに筆者は この道の中にも「鉄の道」があったとして、探究を進めてみたいからである。

良かったが、退職してこの地に永住していた。

明治三十年十一月八日の夜、入り込んでいた博徒親分秋元とその子分二人に追われ、永井宅からわが家に逃げ帰るところを手斧で打たれてなくなった。今日の新出谷と足達との間の小路をかけこみ、裏の池からうしろへ逃げようとしたという。

当時としては田舎における大事件であり、人々の同情を集めてほうむられた。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 46 号
2 月 号
昭和54. 2. 3
奥出雲文化協会

大馬木の山本・杠家(1)　絹の道、鉄の道(2)

板東武士・平家の流れ(1)

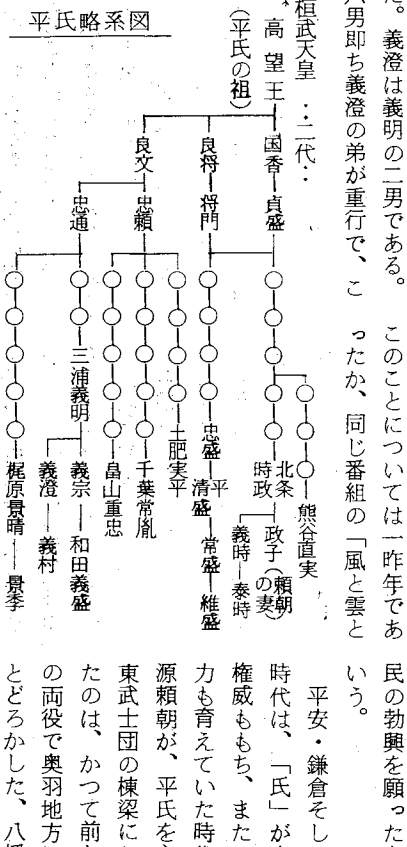
―大馬木の山本・杠家―

草燃ゆる

NHKテレビの日曜夜の新番組「草燃ゆる」の第二回（一月十四日）の「恋文」の一場面で、三浦家の嫡子義澄とその父義明が話合うところがあった。白髪の多くなった義明の老いてなお精悍な姿がわずかの間見えていた。義澄は義明の二男である。六男即ち義澄の弟が重行で、これが杠家の祖とその系図にしされている。

京都で志を得られない天皇の皇子たちは、姓を賜って（源・とか平とかそのほか）、地方に国司として下り、永住して土豪化し、武士化していった。国香も良将も良文も関東で育った。このことについては一昨年であったか、同じ番組の「風と雲と虹」で、平将門を主役として、放映されたので、この間のことは熟知の通りである。

平氏略系図



「氏より育ち」は戦国時代から

いろはカルタに読まれているこの言葉は、徳川時代になってから、庶民の間で、戦国時代が実力の時代となり、氏より育ちが支配的であったことを追想し、身分に安住して惰眼をむさぼっている侍を皮肉るとともに、庶民の勃興を願ったものであるという。

平安・鎌倉そして室町初期の時代は、「氏」が家系が絶対的権威ももち、またそれだけの実力も育えていた時代であった。源頼朝が、平氏を主流とする板東武士団の棟梁にかつぎ出されたのは、かつて前九年と後三年の両役で奥羽地方にその威勢をとどろかした、八幡太郎義家の家系であり、清和源氏の嫡男であったからである。源頼朝と相対した平清盛一門は、もとをただせば、頼朝をかつぎ出した板東武士団の主流であった平氏と同族であった。この一門は伊勢国を得て移り住み、保元、平治の乱に参加して勝残った。後白河院の寵遇を得て、一門の多くが殿上人として位をきわめ、武を忘れて奢りにふけり、軟弱化していった。

頼朝の家系は清和源氏の主流で、摂津国多田荘を本貫地として、こゝから抬頭し（本誌25号参照）保元、平治の乱に参加して敗れた。頼朝は伊豆へ。その弟たちほかは各地にかくれ住んだのである。

武士の政権

頼朝が旗挙げをした時の武士団はほとんどが平氏系であった。従って初期の源平合戦は、兵力からみれば平平合戦の色あいが濃いい。弟範頼・義経ほか一門が各地から参集し、関東周辺から中部以西に散在した清和源氏の各流の武士が、さらに近畿の宇多源氏も加った。壇の浦の戦を最後として、鎌倉に頼朝を征夷大将軍とする幕府が創設され武士政権の時代が開かれたのである。

やがて各国各地に守護、地頭が置かれると、東国武士が源氏の武士が各地に住みついた。承久の乱後は西国各地におびただしい東国武士が地頭として新補されて下った。

横田庄内の諸氏

右の表にみるごとく、この地にも、平氏の時代から源氏の時代への流れが明瞭である。横田庄が鉄の産地でもあったことが、

	古代	鎌倉	室町	戦国	徳川	現代
横田氏	一時平氏に属す	――	――	――	――	○
小池氏	出雲風土記郡司末流か	▼1190 建武千	――	――	――	○
三沢氏	八幡宮荘園荘官	――	▼1302 乾元元	――	▲1590 天正18（長府藩家老）	○
安部氏	（清和源氏多田系）徳川初期より杠と改姓	――	――	▼1330 元徳元	――	○
馬来氏	（清和源氏伊那系）	――	――	――	▲1590 天正18（萩藩士）	○
杠氏	（仝　甲斐系）（仝　上野系）（桓武平氏）	――	――	▼1480 永徳2ころ	――	○
		――	――	――	▼1472 文明4	○

三沢郷地頭
仙洞御料所代官
馬木郷地頭
落城により馬木に入る

（▼当地来住はじめ　▲当地居住終り　――来住期間　○直系末孫当地にあり）

この流れを深く濃くした原因であることはいうまでもない。

入りこんできたこれらの諸氏は、中央・地方の勢力にゆり動かされながら、この地の庶民生活を護り、産業を育て文化をうみ出していった。いくつかの神社、仏閣や文化財もその名ごりである。徳川時代半ば以降は、成長した鉄師たちが、これらの諸氏に加わって、地域の発展に尽したのである。

郡内の杠姓のほとんどは、樋口・杠氏（もと小池氏）の分家であるし、他の諸家はこの杠氏の本分家と、かつては婚を通ずることで家格保持の大きな柱としていた。杠氏についで安部氏がそれに次ぐ家系として尊ばれた。やがて興隆した諸鉄師の家系が貴種に数えられるようになり、また衰退も起った。家系にこだわる考えは毛頭ないが、これらの家が、家系、家格にふさわしい襟持をもち、実力も貯えて地域のために指導者として、努力をしたことは見落してはならないことである。家格を維持しようとし、「くさっても鯛」と、襟持をもちつづけたことは「背に腹はかえられぬ」と背信行為の多い今日良い意味で考えなおさねばならないことである。

山本・杠氏以外については、次のよう記述しているので、それぞれ参照して頂きたい。

横田氏　横田町誌。本誌。「あるくみる横田」。「奥出雲のたたら製鉄覚書」に。

小池氏（樋口・杠氏）　横田町誌に。いずれ本誌であらためて考証詳述予定。（小池氏は徳川初期に山本・杠氏より婿養子を迎えるため「杠」と改姓した）

三沢氏　横田町誌。横田町広報。本誌に

しかし疑問点が多かったが、山陰史談第14号から、新資料によって改訂して連載中。

安部氏　横田町誌。本誌第34・35号に記述。近く続篇連載予定。

馬来氏　横田町誌。その後これを修正し、山陰史談第12・13号に決定版をのせた。

山本・杠氏

杠氏は初代重行より代々一五代・二八六年間備中国哲多郡新見庄の杠城々主をつとめ、文明四年落城して一族四散し、その一子が馬木郷にのがれ、馬来氏の客分となり、遂に土着したと系図にしるされている。

①重行は三浦義明の六男である。三浦氏は前掲系図の如く、北条氏・平氏・土肥氏・千葉氏畠山氏・和田氏・梶原氏とともに桓武平氏の家系をもつ同門で、板東武士団の有力者であった。（これらの諸氏がすべて源氏の嫡流頼朝に従った）

三浦義明は相模国三浦郡の衣笠城に住んだ。治承四年頼朝挙兵に際し、子の義澄（①重行の兄）を遣したが、石橋山の敗戦で帰郷の途中、畠山重忠を破ったために、重忠らは居城衣笠城を包囲した。義明は城のささえ難きを知り、義澄ら一族を頼朝のもとに脱出させ、自ら城に留まり善戦したが、ついに陥落して壮烈な最期をとげた。その子義澄は壇の浦合戦に義経軍の先鋒で大功をたて、のち幕府の重臣となった。その子義村は承久の乱に宇治川の渡河戦で戦功をたて、その後幕府の枢機に参画し、権勢は北条氏と並び称せられた。

三浦氏と同門の土肥実平は相模国足柄郡土肥郷に住したが、頼朝石橋山の敗戦後、しばらくしてそのあとを追い側近として

杠氏系図

大馬木・山本杠氏

①重行―②行実―③賢実―④実澄―⑤実泰―⑥実村―⑦実則

⑧実宗―⑨則行―⑩義実―⑪実久―⑫友久―⑬胤久―⑭光久―⑮惟久―⑯勝久―⑰高久―⑱辰久―⑲忠久―⑳守久―㉑久貞

杠城主討死 文明4（1472）

杠城主に復す 天正18（1590）

62年 上野維行―行経―

38年 植崎時信―時忠―

6年 三村元範―

10年 今田経高―

①常久―②侶久―③則久―④重久―⑤保久―女

通久

源八郎 分家八槇 甚七 ―景久―女

日恩上人

⑥国久 常武 重直 宗久

⑦久植（養子） 長男

⑧久正―⑨久記 二男

⑩久次 二男

甚七 長男

再起を計った。のち義経軍に属して一の谷・屋島の両戦に軍功をたて、平氏滅亡後、梶原景時とともに、播磨・美作・備前・備後など五ケ国の総追捕使に任ぜられた。元暦元年（1184）頼朝の命によって備中国の国務を預かった。そして幕政にも参画した。

このように良文流同門の諸氏が創設された幕府の中枢で重きをなしていたから、義澄の弟①重行が、それにあやかって処遇を受けたことは、軍功を別としても十分に考えられることである。こうした縁で備中国に下り杠城に居住することになったと思われる。守護土肥氏の現地責任者の一人であったであろうか。

系図によれば、この地に下る前に摂津国杠峯に住んだので、これに因んで杠氏と称し、杠城と呼んだともいう。

しかし「備中国新見荘史料」によれば、文永八年（1271）から新見庄地頭新見氏のことがあらわれる（荘内の東半分が地頭領で西半分は京都東寺領で、杠城は地頭領内にあった）。この地頭のことは、その後史料の中に散見しているが、杠城に住んだであろうとされているのみで、それ以上の素性は明らかでない。新見庄の歴史と杠氏系図とのかかわりあいも、今のところ関連性を確認することができない。新見の郷土研究家浅原公章に解明を依頼しているので、しばらくそれをまつことにする。しかし文明四年からの⑮惟久の系図はくわしくなるとともに、その地の史料からそれを傍証することもできるので、そこからの記述を進めることにする。

「杠城跡と文覚寺」

惟久

文明四年（1492）杠城は、大松山城（備中高松城）城主、上野備中守広長の大軍に攻められた。惟久父子はよく防戦し、広長は攻めあぐんだが、味方の中から敵に内通するものがあり、遂に落城し惟久をはじめ多数が討死した。嫡子常久（荒太郎）は数ケ所に深手を負ったが、家臣によって虎口を脱し、命を保ったが不具の身となり雲州へ逃がれた。時に十九才備中国に縁のある馬木郷に入り、馬木城主馬来氏に頼った。

二男勝久は父惟久の遺言にしたがい、家人高木源八郎にともなわれて落ちのび、将軍義政をたより、奉公の道をひらかれた。時に十三才であった。

その後の杠城

上野広長は杠城にはじめは城番を置いたが、のち三男維行を遣し、その居城とさせ、備中国に勢を伸ばすことになった。それから六十二年上野氏は二代在城したが、天文二年（1533）猿掛城主荘太郎為資に敗れて亡んだ。大松山城・小松山城をあわせ、これより荘氏は備中国に勢を振った。杠城には楢崎久之丞時信が入り、二代三八年在城した。

元亀元年（1570）尼子勝久がこ攻めると、成羽城主三村元親はこれに加勢したが、毛利氏と結んで、松山城の荘氏と杠城の楢崎氏を亡ぼした。元親は松山城をあわせ、杠城へは三村元範を遣した。在城六年、天正二年（1574）備中国の南部に抬頭してきた宇喜多氏が、毛利氏と結ぶと三村氏は毛利氏とたもとを分った。その結果毛利氏に攻められて三村氏はすべてを失った。杠城へは天正三年、今田上野介経高が入り、天正十八年まで在城した。

杠氏ふたたび杠城に復す

将軍家に仕えた勝久の曽孫⑲忠久は秀吉に仕えていた。天正十五年秀吉島津氏征伐のため九州へ出陣した。この時忠久は嫡子守久とともに従って武功をあげ、肥後国赤丸城に入り肥後守と称した。全十八年小田原城攻めに出陣後、秀吉に乞うて杠城に帰城することがかなった。

一一九年振りのことである。子守久は朝鮮の役に功をたてた。

慶長五年の関が原合戦には秀頼の命により石田三成に従い、嫡子久貞とともに奮戦したが討死した。合戦後関東方（徳川家康）の吟味によって召捕えられ、没収の処分をうけた。守久が三男で十五才の国久は母の落とともに杠城を脱し、家人足立太郎とともに、縁のある大馬木の杠太郎左衛門をたよって落ちてきた。こうして杠城に復した杠氏も父子十一年在城で終った。それからのちはこの城も住む人なく今日に至っている。

国久は大馬木杠氏五代保久の娘の婿養子となった。慶長十九年の大阪冬の陣に参加して功績をたてたと系図に書かれているが、具体的なことはわからない。のち百姓となり、鉄師として成長してゆくことになる。

前45号訂正

1Pの3段の「図C」（二ケ所とも）を「図A」に

夢の舞台をひろげよう

絹の道（シルク・ロード）・鉄の道（アイアン・ロード）(2)

狭義のシルクロード

前45号の4頁の地図をみると中央で三つに分れた道がある。これが普通いうシルクロードである。一八七七年ドイツの地理学者リヒトホーフェンが中央アジアの地理を研究して最初に指摘した。中央アジアを東西に横断する道路である。この道を通って中国の絹が西方に運ばれたので「絹の道」とよんだ。この道は砂漠地帯の中に点在する、オアシス（泉と緑地のあるところ）をつなぎながら、らくだの背にゆられて通ずる道であった。のちオアシス路とも西域路とも呼ぶようになった。

それはその後東西の交渉史の研究の進歩によって、こうした交通路はこの中央アジアを貫く道だけでなく、ほかにも道が二つあることがわかったからである。ほかの二つとは、ステップ路と南海路である。そこでこの三つの道を、（有史以前からアジアとヨーロッパを連絡していた東西交通路を）総称してシルクロードと（広義の）呼ぶようになったのである。

ステップ路――とは地図にある北匈奴（きょうど）あたりの、ステップ（草原地帯）を東西に通ずる道である。（その北方は広大な樹海地帯となる。）この地帯は太古から遊牧民いわゆる蒙古族（モンゴール族）スキタイ・匈奴・ウイグルの活躍舞台であった。

南海路――とは、紅海・インド・マレー半島から南中国に通ずる海上の道である。紀元前五一〇年ころからの記録があるが、実はもっと早くから開けていたのである。この道は中世以降は活発に用いられ、近世以降は世界の東西交易の主流を独占する重要なルートとなった。

これらの広義のシルクロードがいつから開通したかは、永遠に解きえぬ謎といわれている。洪積世から沖積世に変った、今から約一万年前、地球上の人類はしばしば大移動を行った。大陸をつらぬく道はそのころからできあがったのにちがいないという。ハンドアクス文化はそれよりもまだ古いであろうといわれている。

定説では狭義のシルクロードは、考古学的には彩色土器（彩陶、西アジアで前六〇〇〇年紀以降、東アジアで前四〇〇〇年紀）が、東西文化交流の最古の痕跡であるという。おそらく西アジア文化の広まりとともに、中央アジアを経て中国まで東漸したものといわれている。

記録の上では前六世紀にはヨーロッパからインドまで立派な交通路があった。紀元前三三〇年、アレキサンダー大王はペルシャから中央アジアのフェルガーナまで進出した。

漢の張騫（ちょうけん）は長安を発して、フェルガーナまで達した。こゝではじめて中国と西方の国々が一つに連らなった。そしてこの漢の時代に中国で織られた高価な絹は、長安の都からくだにつまれ隊商によってパミールの天険をこえてペルシャへぬけ、地中海を通ってローマ帝国の町々で、貴人たちに売られたのである。長安からローマまでの距離は直線にして九〇〇〇キロ、実際は一二〇〇〇キロで、青森から博多までの一九〇〇キロを三往復してもまだ足りない。その途中はものすごい砂漠である。その途中所々にオアシスがあって、水と食料を供給してくれた。中央アジアの歴史と文化の動脈であった。運んだのは隊商であり、これがアジア、ヨーロッパの両文化の架橋役をした。幾多の王朝がそれらの各地で興亡を繰り返した。今日その王城や神殿の廃墟を残していて、その歴史を物語ってくれる。

さらに考えてみるとシルクロードは世界の文化の母胎であったといえる。その末端には、西からエジプト文明、メソポタミヤ文明（イラク）、インダス文明（インド）、中国文明などの古代文明のすべてが開花して、その後から今日までの世界文明の母胎となっている。

宗教ではやはりシルクロードの末端でキリスト教、イスラム教、仏教などが発生し、各地の人類文化に大きな影響を与えている。

インドから中国に仏教がもたらされたのは、紀元前後といわれているが、五世紀になると幾多の僧がインドへの旅に出た。その中でもっとも有名なのが、玄奘（げんじょう）三蔵であった。長い行程、長い期間そしてその困難さはどれ一つとっても、彼のあとにはないという旅行であった。孫悟空のでる西遊記の主人公である。この旅行にやや肩をならべるのが、ずっとあとの十三世紀イタリヤのマルコ・ポーロである。三蔵法師の「大唐西域記」、ポーロの「東方見聞録」は貴重な記録であった。それからこの道を多くの旅人が往還している。商人、工匠、兵士、宗教家、難民、遊牧民など、これらの人々には、それぞれ多様なドラマがあり、われわれに無限の興味をもたせるのである。求道の道であり、伝道の道でもあったが、生活の道であり、生活文化の伝播する道として重要であった。

「春の史蹟めぐり」は四月八日（日）を予定日としています。

会員配布一部百円／六九九―一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第47号
3月号
昭和54.3.3
奥出雲文化協会

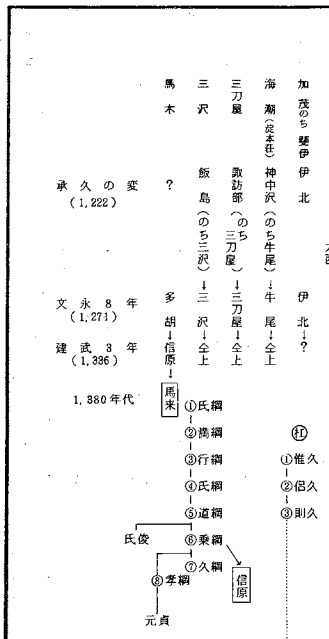
大馬木の山本・杠家②　稲田の土居・安部家③　岩屋寺物語②

日蓮宗一色の馬木郷

—大馬木の山本・杠家②—

馬木郷の領主の変遷

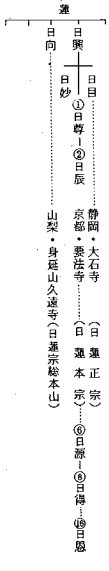
承久の変（1,221）のあと出雲に新補された多くの地頭のうち、奥出雲のおもなものは左の表の通りである。馬木郷は明らかでないが、文永八年になると多胡氏の名がみえる。この時八束郡出雲郷と簸川郡平田郷の地頭がともに多胡氏であるから同族と考えられる。吾妻鏡・承久記等にみえる多胡氏と同名であることから、承久の乱後の行賞でこの地に新補された、相模出身の武士と思われる。当時の情勢から判断すると多胡氏は馬木郷には在地せず、出雲郷等の多胡氏の一族に代理権を依託していたと考える。それは間もなく信原氏が足利氏からこの地の地頭職を宛行われていること、また信原氏もこの地に来住していないことが、文書から推察もできるからである。（詳細は横田町誌221頁）。



その後出雲守護山名満幸が仙洞御料所横田庄を横領する前（1,380代）に、その一門である山名氏綱が馬木郷を受領し、それまで住んでいた馬来郷を姓として、この地に来住した。そして八代孝綱まで領主を継承していた（詳細は山陰史談12・13号に）。孝綱は病気のためこの地に残りその子元貞が外祖父である氏俊とともに、萩に移り毛利藩士となった。この馬木郷は文禄五年（1,595）ほとんど、先の信原氏の子孫に分け与えられた。孝綱は慶応一八年（1,613）にこの地でなくなった。

安養寺（日蓮宗）の創建

安養寺の開山は日尊上人である。日尊は文永二年（1,265）奥州で生れ一九才の時、日目上人にであい日蓮宗に帰依し、翌弘安七年（永仁三年・三一才ともいう）身延山に入って、日目の師日興上人（日蓮宗の開祖日蓮上人の高弟）の教えをうけた。修業中師の勘気にふれて追放され諸国修業の旅に出、応長元年に許されるまでの十数年間主として西国を行脚し、各地に寺を建立し、三六ケ寺を数えたという。備後からこの地に越えて建立した、西国で最初の寺が安養寺であるという（1,295ころ）。



その後日尊は正和六年（1,317）京都六条通油小路に要法寺を創建し、こゝの開山となり布教にあたった。のち転々と寺地が変ったが宝永五年（1,708）の炎上の災難後、現在地である京都上京区孫橋通新高倉法皇寺町に再建されて今日に至っている。日蓮宗本門宗の大本山で末寺が全国各地に九〇ケ寺ある。

馬木法華

馬来氏初代の氏綱がこの地に来住したのは、日尊が布教してから約百年たった1,380年代である。安養寺の三代住職は本山要法寺の第六世貫主となり、日源上人といった。ついで八代貫主日得上人もこゝからでているから、日蓮宗の法塔としては赫々たるものがあった。馬木行綱はこの信仰の伝統と風土の中に来住し住職の学徳に帰依し、日蓮宗に帰依した。やがて郷内の寺院の四ケ仏を焼捨てさせ、すべてを日蓮宗に改宗させ、郷中の人々すべてがこれに帰依した。領主改宗による郷民折伏の典型的な土地となった。

氏綱は間もなく明徳の乱において山名方として合戦に加わり、明徳二年（1,394）富田城下吉田村で討死した。

さらに下って元和元年（1,614）この地からは本山一六世貫主日恩上人を出しているから、宗教的風土はまことに充実し豊かなものがあったのである。それからのちもこの伝統はうけつがれて今日もなお馬木の独得な風土の中に脈うっていると思われるのである。

杠氏初代常久　杠荒太郎

前号にのべた如く、常久がこの地に落ちのびて土着し初代となった。この当時の馬木郷領主馬来氏の前の地頭職は、備中国杠城の南西地域の地頭であった三村氏の一族信原氏であった。備中北部とこの地とは隣接地域でもあり、こうした縁も深かったとみることができる。

常久はこの時馬来氏三代上野介行綱をたより、その家臣馬来蔵之助が聟となり、向原（今の古殿）に住み、軍学兵道に志して、大永二年六九才でなくなった。法名を義全といった。

二代杠三郎兵衛侶久

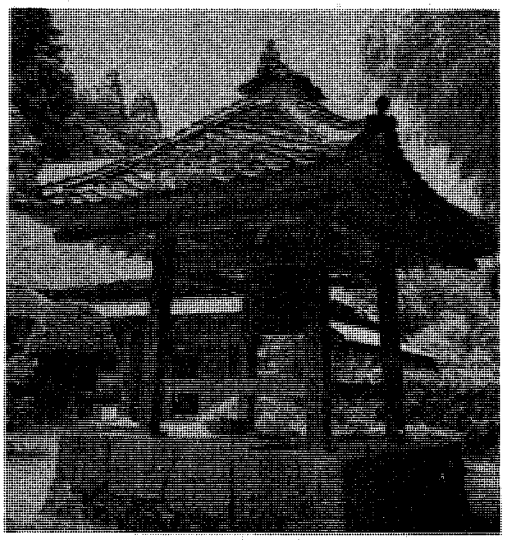
生得無筆で体弱く、武道を好まず百姓となった。弟干之助通久は武芸に通じ、尼子経久に仕えて、永正一三年大原郡阿与（阿用）城の攻撃に参加して討死した。この戦は尼子経久が城主桜井宗的入道を攻め、嫡男政久を討死させた戦でもあった。

阿用城は磨石山城と呼ばれ、出雲三十三番札所「阿用蓮華寺」に隣接している。宗的は公然と経久に反抗した。　このころ三沢一三代為清は、仙洞御料所横田庄を地頭請所として支配を命ぜられて、藤ケ瀬に城を築き、永正六年に移っていた。

経久は阿用城攻撃に政久を派遣した。守りは固く容易に陥ちなかった。そこで兵糧の途を絶って無気味な対峙の時を過した。

政久はつれづれなるまゝに、夜になると櫓の上にのぼって笛を吹いた。夜毎に響く美しい調べは山谷に流れ、軍陣の慰めともなった。

七月六日の夜、宗的はひそかに城を出て櫓の下あたりにしのびより、大雁股をつがえた三人張りの弓を、ヒョーと放った。一瞬あたりは笛の音も絶えて静寂が訪れた。矢は政久の喉元を見事に貫いたのである。二六才の若武者は一矢で命を落した。



六一才の経久の胸中は如何ばかりであったろうか。年来の野望である近接諸国の征服のための出鼻もくじかれたのである。

あくる七月七日、七千の兵を率いた経久は、「たとへ猫の子一匹たりとも皆殺しにせよ」と復讐の形相もものすごく、阿用城に猛攻撃を加えた。宗的らは死力を尽して応戦したが、ことごとく討死した。

政久の子晴久はこの時四才であった。この晴久が経久の跡をつがねばならなくなった。これからのち、経久は中国各地に転戦し、中国地方のほとんどを支配下に入れたのであるが、政久の死は尼子一族の団結にとっては、大きな痛手となって、のちにあらわれてくるのである。

（三頁下より続く）

の下郡をつとめた。次男七兵衛は代畑を相続した。医師であり学者であり、四十二才で法躰し宗悦と号した。系図、記録などを整理して残している。

⑩藤兵衛（泰政）も下郡をつとめる。その子⑪仁左衛門は与頭をつとめた。同じく子五郎七郎左衛門は代畑宗悦の養子となったが、これも下郡をつとめた。娘は大馬木山本、杠又右衛門の妻となったが、又右衛門も与頭ついで下郡役をつとめた。⑫伝四郎（政調）⑬治良兵衛もともに下郡をつとめた。治良兵衛は石塔山の改修を行った。

⑭仁左衛門は与頭、その弟で⑮清左衛門は与頭ついで下郡をつとめ、⑯伝四郎（政守）は下郡⑰伝四郎（政意）は与頭をつとめた。徳川時代を通じてこれほど多く郡役人を出した家はここだけで、その多くが下郡をつとめたのも安部家だけである。従って前述のほか、馬木山根・鉄穴内、土居屋、上土居、奥土居槙屋等分家が各地にあり、各村の下郡格の家との縁組も多かったのは、その家勢のほどをしのばせるものである。

附　郡役人

郡奉行（能義・仁多・大原・出雲四郡兼務）の下に代官がおり、さらに地方役人がいた。

この下に下郡、与頭の郡役人がおり、村々に庄屋がおかれていた。郡役人は官選で、与頭以下は下郡の推挙によって藩が決定し、郡奉行・代官の名で辞令書が渡された。人物、家格、持高、年令を考慮して任命した。奉職年限はなく、長いものでは幕末の三沢村の長瀬健四郎の下郡のみで二十七年間というものもあった。これらには一定の給禄の外、免祖の役屋敷を給された。村役人は自宅で執務したが郡役人は郡家（文明四年より横田から三成に移る）に出勤した。貢租、上納物に関すること、治安から普請、貸借、売買など多方面の仕事があった。これらの記録は御用留として、ほとんどが残っており、町図書館に整理し保管されている。

（終）

源太左衛門から幕末まで

―稲田の土居・安部家③―

尼子氏の再起ならず

永禄二年三沢為清は毛利氏の配下となり、郡内から尼子氏の勢力は一掃された。五年十二月毛利元就は大挙して出雲に侵入した。これから松江北の白鹿城の攻略にはじまって、富田城の包囲攻撃は各地にくりひろげられ、遂に永禄九年（1,566）十一月二十一日、尼子義久・秀久・倫久の三兄弟（晴久の子）は毛利氏に対し、逆心をもたない旨の誓詞を出して、二十八日富田城を明けわたした。そして兄弟は捕われの身となって安芸へ去っていった。これから三年余、山中鹿介の足どりは明らかではないが、尼子の遺子・新宮党の尼子誠久の子勝久を擁して、永禄十二年六月、隠岐から島根半島千酌湾に上陸し忠山城に拠った。ついで真山城をおとし、末次城に進出し富田城奪回のため、その周縁部も傘下におさめ、毛利方の家臣天野隆重の籠る富田城を完全に孤立化することに成功した。明らかに秋になれば尼子の出雲奪還は成功するかに見えた。こうした情勢をみた三沢・三刀屋の両氏も尼子への復帰を申し出た。しかし尼子旧臣の武将たちがこぞって反対したので実現しなかった。

富田城の天野隆重も、小勢ながらよく守った。そのうち隠岐為清が尼子方へねがえったので、富田城は時をかせぐことができた。こうした風雲急をつげる出雲の情勢は毛利陣営に伝えられ、その年の暮軍議の結果出雲遠征が定まった。

あけて元亀元年正月六日、輝元を総大将として一万六千の大軍は赤名に到着し、三刀屋の多久和城をほふって、主力は三沢を経て西比田へと進んだ。これまでに富田城を落とすことのできなかった尼子勢は、これを城の南布部村の中山で迎えうつこととなった。

殷々たる銃声と怒号はあたりにこだまし、真っ白い雪は忽ち鮮血にそまった。多勢の毛利軍は、その一隊を尼子軍の背後にまわらせて攻撃をさせたので総崩れとなり、遂に尼子氏の出雲奪回の夢は消え去ることになった。尼子勢は松江・末次城に残兵を漸く集結することができるありさまであった。

（写真は源太左衛門が三沢為虎より拝領した。赤糸縅乗馬用具足一式である。ほかに鞍・あぶみ等もある。）

源太左衛門

この時源太左衛門は三沢氏に従って布部の中山合戦に加わり、さらに山中鹿介を追って、深く佐田の宮まで攻めた。大呂の河上宗治右衛門（堀之内次良兵衛の母方の祖。慶安二年の大呂八王子神社の棟札に、堀内市郎左衛門の名がみえる。その祖か）とともに進んだが、宗治右衛門は佐田で鉄砲にあたり討死した。天正十年三沢為虎に従い毛利方で高松城水攻めに参加し、朝鮮出兵にも加わった。若いころから合戦に参加すると二十七度の武者振りは見事であったという。天正一七年三沢為虎は国内の諸将と同じく安芸国へ移った。慶長元年源太左衛門は農民となった。

慶長六年、松江藩主堀尾吉晴は国巡りにあたっては、八川から横田に入り、安部家にて一泊した。この時源太左衛門六十六才であった。芦毛の馬を引出して供覧したところ賞せられ、飼料の大豆二十俵を下賜された。子がなく代畑を継いだ弟次良右衛門の子治良兵衛を子としていたが、これをつれて吉晴公を高鰐山藤ケ瀬の古城に案内し、ありし日の三沢為忠のことども、つぶさに説明したという。この巡国の折、坂根にて村下吉兵衛炭坂新左衛門が、たたらを吹いていたので、吉晴公は殊勝なことと銭二十貫文宛を二人に与えたという。善左衛門の先祖である。

慶長九年一月源太左衛門は六十九才をもって生涯を終えた。この年富田城も松江の亀田山に移って新しい徳川時代の幕をあけたのであるが、それをまたず去ったのである。

七代から幕末まで

⑦治良兵衛（政泰）の嫡子徳兵衛は横田町下富田屋にて酒造業を営む。次男が相続して⑧庄兵衛（近泰）、その嫡男が⑨仁左衛門（泰久）で大庄屋のち改

岩屋寺物語②

第二次再興に力のあった 傑僧快円（中）

—再建の記録—

快円が大永八年（享禄元1,528）に誌したとある「快円日記」および「大永年中古記録」その他によって、快円が院主となってからの足跡・業績を列挙する。

1,514 永正十一年十月十四日

尼子経久、藤ケ瀬城を攻めたが落ちず、岩屋寺に火を放って引揚げる。全山全焼し院主真海も死去す。

1,520 永正十七年十月十四日

三沢為忠は子為国をつれて登山し、寺領を安堵する。仝月二十六日、来福寺快円（本山高野山において三年修業して帰る）が院主となり再建が軌道にのる。二玉堂の柱を二本立てる。この年の暮、為忠死す。

1,521 永正十八年五月三日

鎮守堂に安置するため、永観法師によって蔵王権現の尊像の彫刻がはじまる。仏師永観法師は越前国の人で34才、この地に遁世中のもので、教蔵坊を宿坊して滞在中、為国の所持した古木を材料として用う。一方鎮守堂の柱立がはじまり、鐘撞堂もはじまる。ともに本願奉行は当山妙乗坊珍海と、岩本坊窓円の二人であった。大工は三沢の高橋、同番匠衆八人と横田の大工井本与五郎秀続であった。

六月二十三日、鎮守堂西脇の立石に六字の彫刻が永観法師によってはじまる。寄進の旦那は為忠の息・僧宗綱（母は馬来殿の娘）であった。

七月十八日、閼伽井より東の嶺伏せたる岩に梵字が、越後国の客僧三位房（大林坊快円と同宿）によって彫りはじめられる。この日、根本堂の材木をきりはじめた。大呂村の堀の内の上の妙厳寺の上向、鬼神のケヤキ木で、三沢為国兄弟ら自ら指揮し、奉行は黒田藤兵衛、多根八良右衛門と大催次良右衛門（註—樋口の表小池氏のちの杠氏）で、切夫は六ケ村より多数出た。切りはじめは快円と永観がした。翌十九日、やはり六ケ村より人夫多数が出て、大木二本を大河（註—斐伊川）に流して下り、八幡宮の馬場まで引いた。木の長さは三丈、直径二尺の巨木であった。

八月二十六日、岩屋寺の中興開山佑円法師大和尚の位牌を快円が本願となって、新らたにつくった。作者は三位房であった。

1,522 大永二年一月二十五日

（この年諏訪神社、藤ケ瀬城内に勧請され、木山氏がこゝの神主となる。）権俗名よりの寄進が復活し、公方の三沢為忠ほかへの御礼のため、快円ほか二人が四月十二日参上した。二月九日より仝月二十日まで、出雲国杵築大明神において、尼子経久が本願で万部の法花経奉納があり参加者千百人、廿一日結願し退散する。鰐渕寺、岩屋寺、清水寺、奥法寺が座頭で、御教導師は鰐渕寺についで岩屋寺がつとめた。岩屋寺より参加したのは、快円ほか十二人で、高田寺からは三人であった。

潤三月から横田の地頭三沢次良左衛門殿の御領分、三所の社やしろ山にて、ぬきけた他材木をとった。奉行は妙乗坊珍海、杉本坊宥慶、小林隼人（これは上使なり）で、惣下知は大林坊快円であった。

神社（註—馬場八幡宮）の前の西十王堂の前に、刻屋を造った。十五坊より各々三ケ日宛奉仕した。大工は横田の井本与五郎であったが、幼少であったので、その間三沢の大工高橋が釿（きり）始（はじ）め、こゝで柱を削った。こうりやの角木は八幡宮の上の山で取った。人夫は六ケ村より出て車を以って山上へ引上げた。

八月六日と十八日に、これらを削ってつくった柱三十本を山上へ荷負い上げた。

十二月一日までに本堂の組方をした。

この間、十一月二十一日から二十八日まで、尼子経久殿が石州ミスミの御陣に出張せられていたので、その戦勝と祈願するため、富田城内にて護摩をたいて祈祷した。

この時大内殿御馬廻衆、卜井田殿衆、大スミ殿衆に対して、出雲国衆は一人ものこらず尼子方で出陣していた。

本号の写真は横田フォトクラブより提供

本誌は満四才となり、50号を数えますので、5・6月号は合併号とし、第50号特集とし5月5日にお届けします。

訂正

46号で

△板東 → 坂東

坂東とは、足柄峠、碓氷峠以東の諸国の称。時には東国、関東をいう。坂東武士・坂東武者とは、坂東育ちの武士のことをいゝ、古くから勇猛をもって知られる。

△平氏略系図中

貞盛 → 貞盛
将門 → 将門

梶原景晴 → 景時

歴史から学ぶ 三成と横田

—歴史的風土論—

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第48号
4月号
昭和54.4.7
奥出雲文化協会

雲照律師　岩屋寺物語③　民間信仰メモ②

岩屋寺で育った人

雲照律師

明治の日本仏教革新唱導僧

幕末の岩屋寺住職たち

江戸時代末から明治にかけて岩屋寺は、幾多の名僧、高僧を輩出した。

42代海雲、45代寛海（松江千手院19世に転住）、48代慈雲（同じく21世に）、51代宣明、53代徹明（同じく25世に）の各上人・律師とそして雲照である。宣明は雲照の実兄であり、徹明は雲照の甥であった。もう一人の甥に神奈川三會寺の興然がいる。明治二十年に印度にわたり西蔵を探検した真言宗の僧侶である。さらに徹明の従弟にあたり能筆家であった、大原郡海潮の普賢院の住職善義もいて、一門からこのように揃いも揃って名僧智識を出した家も出雲では珍らしい。

48代慈雲は42代海雲の弟子で天保六1,835より同十二年まで岩屋寺住職を勤め千手院に移った。51代宣明は海潮の普賢院より弘化元1,844三十五才で岩屋寺に転住し、明治二1,869、五十九才そこで死去したが、その間高野山に登山して修業し、実弟雲照の仏道修業にも大きい影響を及ぼした。

そのあと52代智英が二年在職して死亡すると、53代徹明が二十八才の若さで住職となり、三年のち千手院に移ったが三十八才でなくなった。岩屋寺の過去帳では、事蹟は明らかではないが、明治の中興僧と記録されている。

雲照の生いたち

雲照は文政十年（1,827）出雲国神門郡東園村の渡部忠左衛門の四男に生まれた。五才の時鰐渕寺に参詣し、止道比丘の筆になる「稲穂と宝珠を盆に盛った絵に法華の精要が両三句したためたもの」を見、たまたま帰省した兄宣明（弁瑞坊）の崇高な威容をもつ出家姿に敬慕の念を深め父の許しを得て出家した。

十才の時、岩屋寺住職慈雲は安屋の安助という使者をつかわして、是非共弟子に貰らいうけたと懇請したので、父とともに慈雲をたずね、弟子となることを承諾し剃染した。十五才慈雲の千手院転住とともにそこに移った。その夏、光禅が慈雲の後任として岩屋寺に移ったので、雲照も従ったがのち千手院に帰った。その後、沙弥十戒法を一読して始めて戒法の有難きことを知り、松江の二儒者について詩経、書経、左伝、荀子や論語易経を学び、のち南山（北の比叡山に対する高野山）に遊学した。のち能義郡大塚村観音寺（現福舎寺）の住職となった。十九才、霊感に打たれ仏前に祈誓をこめて終生女人と同席せずと誓いをたて、初志を貫いた。その後二年間岩屋寺において宣明より、二宝院流の伝授などをうけ、さらにここへ高野山より実質大阿闍梨を招いて、結縁灌頂を行じ修め、再び海潮の普賢院に転住した。

岩屋寺の求聞寺堂

翌年（23才）再び高野山に登山し、各種の研鑽や修業を行い下山して各地を巡歴して修業を深め、嘉永六年（26才）岩屋寺本堂奥の伊勢谷奥、大山社西南の丘に求聞寺堂を建て、同法を修業し、かたわら「即身成仏義」（弘仁末年823～天長初年824の空海の著作で、空海密教の中核はひとえに即身成仏の実現にあることを、原理、理論・実践の三面からその可能性を説き尽したもので、真言宗名著数冊の一つである）を講義した。

のち高野山をはじめ各地に、師を求めて聴講、或は求聞持法の修業などを重ねて巡歴した。

安政六年（33才）、再び岩屋寺に於て、求聞持法を修業し結願ののち、屋後不断光明真言堂の跡を開拓して求聞持堂を建築し、又岩屋寺の寺法を改正し律院した。古老が話していた。「大翁様（雲照の幼名）は無言の行をされた」というのはこのことを言ったものである。翌年高野山に登山奥の院で求聞持法を修業し、各地を巡りながら、度々高野山に登山しては、求聞持法を修業した。まことに席あたる間もない各種修業の連続する時代であった。

慶応四年（1,866）40才）高野山に登山したところ、山内のあまりの堕落に奮慨して下山した。これから雲照は長年の修業にもとづいて仏教の改新そして、国民教育の刷新へと活動をひろげることになった。

各地での修業と巡教

大和国の吉祥院毘沙門堂において三千ケ座の護摩供を修し、また村民の希望によって請雨の法を修し、願成就の礼として、放生池を造り、本道を改修し、弘法大師（空海）の再来か、行基菩薩の再来かとしたわれた。

明治六年（42才）になると、維新の一大転期が訪れ、各地の衆徒が雲照律師を招いたので、それにこたえて東に西に巡教した。一方単身太政官に出頭して

革新の思いをのぶるほか、各界の指導者に対面した。さらに高野山沙門雲照として、数千言の上奏文を届けた。その後も各地を歴訪して、仏典の講義や修業をした。明治十二年(53才)高野山に登山すると大学頭に推された。この前後から著作にも筆を進め、次々と出版されていった。

大蔵経の和訳もはじめた。ほかに和訳されたものは百余種あるという。

その後東京に居を定め、十善会を組織し、久邇宮殿下を上首とし、学習院院長三浦観樹将軍を評議員長として布教活動を強めた。一方戒律学校をおこして僧侶の養成をはかり、のち目白僧園と改称した。

新しい仏教へ

このころになると、海外各地の外人仏教研究者が続々と雲照をたずねて教えをうけた。各種の法話会も各地に結成されて、それに出向く一方著作活動もいよいよ旺盛となっていった。

日清戦役平定の祈祷を開始したのをはじめ、鎮護国家の道場の建立も計画して巡教を続けた。神儒仏三道一貫の徳教教育主義の鼓吹をはじめ、それを出版して各方面に配布した。

大僧正に補せられ、皇族が任ぜられる伝統になっていた、仁和寺門跡に、民間からはじめて任ぜられた。僧侶としては明治時代の最高峯を歩むことになった。「仏教大意」ほかを両陛下に奉献した。

教育勅語が発布せられると、その「義解」や、「国民教育の方針」を発刊して、各界各方面に贈った。海外からの来訪者も相つぎ、薫化をうくるもの受戒をうけるものも相ついだ。

明治三十九年八十才の高令であったが、満韓戦場彼我戦死者回向のため東京を出発し、百二十四日間彼の地に滞在した。その間朝鮮仏教の改革案をまとめて朝鮮王に奉呈した。

帰っても席をあたためる暇もなく関東各地を巡教し、明治四十年(81才)には、出雲、四国中国の巡教に出た。この時岩屋寺に登山した。

(下の写真はこの時のもので、最前列中央が雲照律師、撮影は横田町、姿見楼野尻。妹尾嘉彦所蔵)

翌年は、東北・北海道・樺太の巡教の途に出た。このころ徳教学校建設も計画したり、宮内大臣へは国民教育に対する意見書を提出するなど、明治四十二年四月十五日、八十三才で急逝するまで、新らしい仏教と日本教育樹立へと尽粋した。

岩屋寺外護の安心

最後の横田訪門後、石見から横田町大津屋先々代妹尾柳太郎の父嘉右衛門(檀頭であり親交者)宛に送られた一通の手紙がある。文中には「岩屋寺は拙僧にとっても極めて大切な寺であるが、横田の地にとっても祖先以来の重要な寺である。幸にして貴家と卜蔵家が尽力されていて寺勢については安心している。

子孫長久のため、子々孫々に至るまでこの志を伝えて外護が完璧であるように」と達筆でしたためられている。この地方には雄渾な雲照の書があちこちに所蔵されている。

追懐

妹尾柳太郎が雲照律師の葬儀に列席し、その模様を記録された中から若干を転記すると、

東京帝国大学総長——私は雲照和上様を御釈迦様や弘法大師と同格に思って帰依していた。

林董伯爵——和上は明治年間における無二の大徳であり、高僧であった。

東京帝国大学名誉教授丹波博士私は色々な問題で頭が混乱してくると、和上のもとにかけつけて面会すると、直ちに勇気を増し新鮮な心になった。別断幽玄な真理を聞くのではない。挨拶しただけで言わずして人を感服せしめる菩提心があった。

鬼将軍といわれた三浦学習院院長が、律師の墓前で声を放って慟哭せられたのを見て、律師の徳の高大であったことを、しみじみと感じた。

本文は主として、大正二年徳

岩屋寺物語③

第二次再興に力のあった 傑僧快円③

—再建の記録から②—

1,524 大永四年九月

大林坊再建なる　快円42才

仝　年十一月一日

本堂の組立がはじまった。

番匠（大工）は備中の住人

神ノ衛門尉であった。

粂三十俵、鳥目二十貫文

そのほか作業中種々の給与や軒瑞（けんずい）として酒を度々給す

当地三沢名代三良左衛門為幸

ほか三沢御家来より

鳥目十五貫文

1,525 大永五年五月

富田の市で快円は仏具などを買求めて帰った。

溝尻清兵衛

釘がね（鉄）二駄・塩三俵

ほか（この代十貫文相当）

そして

奉行は妙乗坊・妙音院の二人

納所奉行は山本坊・賢光坊のほか宮仕弥二郎

鍛冶奉行は教蔵坊・正乗坊

小奉行は、大宝坊、宝泉坊、池本坊、養門坊、岩本坊、杉本坊（坊名はすべて当山内）

本堂の上葺は大永七年霜月（十一月）二日からはじまった。本願は当庄請地頭三沢信濃守為国とその息子次良法士丸、それに院主快円、杵築の道清であった。これよりさき為国は尼子経久に従って備後国和智の陣中に出かけて留守中であったので、勧進のため快円は道清とともに、十一月十日に岩屋寺をたって和智を訪れ、十九日に帰山した。その結果

尼子伊予守経久　鳥目十貫文

亀井能登守秀綱　仝　右

三沢信濃守為国

番匠の頭領は若狭ノ与三郎　脇

大工は京新四郎、そのほか杵築・御崎（日御碕）・多久和・大東・三沢・当庄内の番匠で、あわせて四十二人

大鋸引は杵築より八人　馬庭の二人、あわせて十人でこれは

杣（そま）（材木とりの山からとった材木即ち樵（きこり）がとった木を杣木という。これを斧で打割り荒加工し、粗い角材をつくる工匠のこと）もつとめた。

大鋸とは大牙（おが）ともいう。二人挽きの縦引鋸で、場合によってはさらに二人が綱をつけて四人で挽く。この鋸は中国から室町時代の初期から中期（14世紀末から15世紀前半）に日本に入って、16世紀はじめから地方に普及した。従ってこの地方には早く入ったもので技術者はよそから雇入れている。それまでは横挽鋸のみで、縦に割るにはノミで穴を一列にあけ、それをクサビ或はクサビ型ノミで割って角材や厚い板をつくった。わが国は材料が豊かであったのでそれに甘えて縦挽鋸の発達がおくれていた。室町時代からは建築が盛んになり — 寺社や武家の館が — 材料が乏しくなり、木目の通った杉、桧に代って、堅くて木目の乱れたケヤキなどを用い、板も薄くしたので、縦挽鋸が急速にひろまった。

大鋸百十一人役（相棒役のぞく）

杣百五十人役は、今度の本堂の桁より上の上葺の時に要したもので、本立の時のこれらの人数は別である。（これらの作事のあとの加工が番匠＝大工の仕事となる）

鍛冶は二張場で、吉川とテテイ（鉄蹄か）鍛冶の子源二郎であった。

大鋸＝縦挽鋸のない時は、オノ、ノミやクサビで木を裂き割って柱や板をつくったから面は粗く、チョウナ（釿）で平にし、波頭をヤリガンナで削りおとした。大鋸で引いたあとは面が平かでヤリガンナはかからない。またチョウナのあとは波頭があって、台ガンナはかからなかったから、大鋸が出ると台ガンナが対応して出はじめたのであるが、この当時はまだ台ガンナも少なかったであろう。また大鋸引の技術者は地元にはいなかった。

鍛冶が専門にいるのは、やはりチョウナ、ヤリガンナの主力時代でその消耗がはげしかったからでもある。

大工＝番匠の仕事はじめは、「釿始め」という。遷宮の棟

教会刊行の草繋全宣著「釈雲照」（全三巻）によった。

最近この書が多くの要望によって復刊された。明治宗教界興隆に貢献し、絶大な感銘を与え、いまなお光明を放つ雲照仏教が、沈滞する仏教界への警鐘として鳴り響くから、よまれていると言えよう。

昨今の岩屋寺の荒廃をみて、雲照律師は天上界から如何ように、この地の子孫たちをみておられるであろうか。

民間信仰メモ②

稲荷（大助明神）さん

おこり

祠（ほこら）の多いことでは日本一であろうといわれている。

この信仰にもいろいろの説が混在している。その本源は京都伏見の稲荷山（東山三十六峯の最高峯）の稲荷大社で、「山城風土記逸文」の伊奈利社の条に朝鮮半島からの新羅系の渡来人（帰化人）秦氏の祖先が、餅をもって的としたところ、白い鳥

（4P3段へ）

札にはこの語が用いられている。

榑引きは杵築から四人

榑 ― 小さい角材や造作材のこと、また榑＝榑板で縁側の長さに平行してはる長い縁板のことで、石見榑は著名。これを張る技術も特殊なものであった。

僧坊からの出夫

十五坊から一人宛でて、木こり、鍛冶用の小炭焼き、鍛冶のつちうち手伝い、番匠の送り迎えをした。さらに一人宛でて、臼引き、米搗きや掃除などをつとめた。このように十五坊より二人宛出夫したのは、十一月二日より十二月十三日まで四十二日間に、番匠延一、四五三人役の出入りがあったためである。さらに必要ある時は十五坊に番匠の大鋸引や鍛冶の諸作事の手伝役が多数割当られた。

一般からの出夫

竹釘つくりのためには、六ケ村の寺庵並びに被官衆から必要なだけの人が出て削った。

本堂の地形を引く（地ならし）人夫は、庄内　六ケ村より三ケ村宛三日間出夫した。その数は極めて多く、総指揮奉行は三沢三郎左衛門尉為幸と舍弟帯刀がした。

このようにして本堂本立より仮葺き、本上葺きまでにはおびたゞしい人が動員された。（幾千万と誌してある）

材木について

前回にものべてあるし、そのほかいろいろ調達されているが二つだけ誌すと。

垂木（たるき）　三年前に社山で伐出し大鋸引きでひき、削っておいたものを五八〇本使用している。

榑　　は杵築から買求めた。

このことは当時すでに材木商の座が存在していたことを示すものである。

工事の終了

幸に本堂最後の工事である本上葺も天候に恵まれて（旧歴の十一月、十二月）、進捗し、十二月十三日に完成し、番匠たちは十四日からそれぞれ各地に帰ったという。十三日から雪が降りはじめ、その冬は殊のほかの大雪となったと誌してある。

杵築から来ていた道清への礼は（どういう人物は明らかでない）、信濃守為国か因幡守が遣されて、三貫文が届けられた。

その上岩屋寺一山よりは同じく三貫文を妙音院が持参して、十二月二十四日出発して杵築で道清に渡し、廿八日に帰山した。

（興味の乏しいと思われる記事であったが、技術者群、工具のこと、鍛冶のこと、人夫動員のことなど、当時の事情を知ることが出来るので掲載した。）

（2P5段より）になって山の峯へととびたった。その子孫がそのあやまちをくいて、そこの木を根のついたままぬいて帰り家でまつった云々とあるのが由縁であるという。

稲荷大社の稲荷山には、二つの登り口があり、神像に稲を荷なう姿をした翁（おきな）と、命婦（めようぶ）（みこ的存在）の像との二神がある。

神仏習合

稲荷山の稲荷信仰がやがて平安遷都の後、秦氏の財力と政治力とによって次第に隆盛となり、併せて京都東寺（教王護国寺）を賜った弘法大師と手を握り、東寺建造の木材を稲荷山から供出、為に稲荷神は東寺の鎮守と仰がれた。真言密教を奉ずる東寺側は吒枳尼天（だきにてん）（荼吉尼天・吒吉尼天とも、ダキニはインドの原名で、狐に乗り人間の心臓をとって食う悪神）に習合し、真言宗の布教とともに急速に全国に流行した。ところが神道では、稲荷はウカミタマノカミ（食稲魂神）などという農業神とされている。

キ　ツ　ネ

真言密教では吒吉尼天をこのように説いているが、一方では稲荷の神の使いはキツネともされてもいる。平安時代に陰陽師（おんようじ）呪術者などがキツネを媒介として種々術を行って活躍したことが、「今昔物語」（18世の著作）に出ているが、冬から春にかけてのキツネの習性と、農民とキツネの交渉に春には山を下りて田の神となり、秋には山へ帰り山の神となる古代信仰の山の神が結びついて、稲荷＝吒吉尼＝キツネの習合が成立したものとも考えられる。

京都の伏見稲荷は明治時代に官幣大社に指定されて、仏教的な吒枳尼の法を扱う祈祷師などは追い出されたが、今でも稲荷社の隣接地に看板を掲げ、滝に打たれたり護摩を焚いたりして超能力を売り物にする祈祷師が少なくない。庶民信仰は怪奇である。神社が裏街道、祈祷は裏街道。

三河国豊川市豊川町の豊川稲荷は曹洞宗妙厳寺にある。全国的に信仰を集めているが本尊は観音であり、吒枳尼天堂は境内社であるが、商売や芸能に功徳ありとされている。

この地方では津和野の太鼓谷稲荷と岡山県高松最上稲荷。

稲荷の神の使のキツネが口にくわえたり、尾にまいている宝珠は、火焔の玉で、稲荷の鳥居は赤くぬられている。これも火焔を表現しているもの。これからおして稲荷神は、カマドの神にも通じるものとしての信仰も生まれている。

庶民信仰は、庶民の生活思想の移り変りもしめしていて、おもしろいものである。

会員配布一部百円／六九九－一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
記念第49/50号合併
5・6月号
昭和54.5.5
奥出雲文化協会

歴史的風土論（1）　奥出雲五〇号の総目録

歴史から学ぶ

三成と横田

歴史的風土論（1）

一、町のはじまりと

徳川前中期

三成町

松江藩では仁多・飯石・大原の三郡の収納米を駄馬によって送らせていたが、不便であったので、これを川舟に代えて労を省こうとし斐伊川の沿岸数ケ所に集荷転送吏を置いた。これを川方府（略して川方）といった。

1,664年（寛文4）に仁多郡の三成・北原、飯石郡の熊谷、出雲郡の出西・庄原に運租府を置き舟運によって貢租を庄原に運ばせた。この時の出雲・仁多・能義の郡奉行は龍野九郎右衛門であった。杠日記によると1,659年（万治3）秋、奥田源右衛門に代って任ぜられている。「性強暴にして不仁也、故不勘定の百姓籠舎或は殺されるもの多し、大過は格別、小過も許さず政治悪し」と誌してある。以下このような記事が日記に多い。十五年間郡奉行をつとめた。しかし他方龍野は土木事業には各地で業績をあげているようである。

川譜請がはじまったのは寛文5年からで、堀子は備中から呼んだ喜兵衛で、船頭は同じく藤井三右衛門というものであった。

この川方府の人夫としては、下阿井村の山根より半数の十軒余りの者を強制的に三成に移住させ、今の三成大橋の両岸に住まわせた。三成町のはじまりである。

船頭は北原までの間を分担したようである。船はそのまま最終地までは行けなかった。出西の岩樋からは、斐伊川本流からの分流へと入り（これから下が高瀬川）、狭小な用水路であったので、一旦荷を下して別の船に積替えをして下った。こうした不便をおさえて二十二年間も続いたが、貞享二年川方を廃止し、龍野が藩より命をうけて、岩樋（水成岩で高さ一丈、巾八尺、長さ十七間）を開いて大岩樋をつくり、斐伊川の水を落して、そのまま船が通ずるようにし、高瀬川の川幅も広くした。

三年後の元禄三年（1,690）運租府を復活し再開通させた。延宝五年（1,677）大馬木の山本・杠家は三成町に分家して酒造業をはじめているから、単なる川人夫の町ではなくなりはじめたようである。その後三十三年間舟運は続いたが、享保六、七年の洪水で舟行不能ケ所が出来、全八年（1,723）九月に廃止となった。全十四年の記録では三成町には22軒の屋敷があった。五十余年で漸く成長した三成町も機能を失って、停滞することになった。

上納米や鉄などの輸送路は、横田方面は、反谷峠・郡村・上三所・佐白を経て大東へ（のち木次へ）・三成・阿井方面は三沢町、上鴨倉・北原・槻屋・木次の新市へと再び駄馬一色になった。

早く開けた三成町周辺

仙洞御料所横田庄横領に端を発した明徳の乱（1,391）の時の山名満幸の代官は石原氏で、八川三笠山城に拠ったが、敗れて三沢の三沢氏を頼って逃げ、その客臣となったが、一五世紀の初め城山を中心として北は上三所、南は三所をまかせられて石原の地に住んだので、地名を石原と呼ぶようになった。そして善勝寺や武神としての八幡宮が建立された。これらの寺社はともに、寛文五年三成の町の基礎が固まると、現在地に移転されたという。

それまでの村は、上三成村（美女原方面）・下三所村、石原村があった。いずれも谷合に点在するわずかの水田がその生活基盤であったから、それより広い水田を有していた、郡村・上三所・佐白・三沢・上阿井・下阿井・高尾の諸村に勢力ある土豪が存在していた。そして中心は、東方で亀嵩、西方で三沢であった。いずれも三沢氏が居城とした土地であり、早くから町も形成されていた。そこへ交通の要地として上からの意志で三成町の町作りが行われたという状況であった。

横田町

郡内における古代の中心地は三処郷の郡村と、三沢郷の四日市、横田郷の中村方面であった。のち横田郷が石清水八幡宮横田庄となり、製鉄が盛んとなり、北条氏の支配が強くなると、中村を中心に岩屋寺、八幡宮が勢を競った。やがて仙洞御料所となると、京都からの代官も下って来るし、豊かな庄園へと成長して天正十九年（1,540）まで続いた。

応仁の乱のころ、三沢氏が横田庄請の地頭とし治安維持にのり出し、藤ケ瀬城を築いて永正六年（1,509）この地に移ると、下中村（今の角から町）がひらけ始めた。尼子氏が横田庄内に代官を置いた天文十二年（1,543）ごろから町作りが始まり、天文二十年伊賀多気神社が、その氏神として再興された。

この年から五十年たった慶長

五年（1,601）松江藩主堀尾氏が廻国の途次、横田町の五反田屋に泊ったという。今日の富田屋である。当時の中心地中村の五反田に住んだ田村氏は尼子氏の町作りに協力し、六日市の北側の山麓に移住したのであった。慶長十年には同じく中村の実力者であった杠氏が六日市に分家しているから、相当数の家があったものと見える。そして急速に成長して大市へと町並が拡がって行った。

詳述はさけるが、寛喜元年（1,229）の鎌倉時代はじめには、中村には市場の存在が確認できるから、横田の町作り後は、急速に成長して行ったものと考えてよい。農業生産も広い横田盆地の周辺が豊かであった。南の備後の地昆庄（庄原市）とは鉄の移出を通じて早くから通じていた。また三沢氏が良馬の確保のために牛馬の購入市を開いた。それは戦後しばらくまで延々と伝統をつぎ、著名な市場となっていた。

横田町の成長

寛永十一（1,634）仁多郡の代官芦田瀬兵衛は横田に駐在した。十八年には郡牢も置かれた。慶安元（1,640）の検地帳によれば、横田町には御役目屋敷53.5軒、御役御免屋敷19軒がある。（横田村は別）

寛文10（1,670）の地銭帳によれば大市42.5軒、六日市16軒、ほかに御役御免屋敷16軒がある。この年他に郡内の町には、阿井・三沢・亀嵩があった。

延宝4（1,676）藩主綱近（18才）が廻国して、横田町の郡家に泊った。

正徳3（1,713）大市、六日市に商業神の夷堂が記録にのっている。商業の成長をしめす。

享保2（1,717）の記録には、横田町（大市場と六日市場）と三沢町にはともに牛馬市がたち、年末にはこれに亀嵩町を加えた三町で市がたった。仁多郡西部の中心は三沢町であった。

寛保元（1,741）御役目屋敷65軒にふえている。この年の記録によれば郡内五町（三沢・阿井亀嵩・三成・横田）で141軒あったから、横田以外の四町で76軒、平均20軒あったことになる。

天保8（1,837）には横田村と町の六日市をのぞいて、大市のみで56軒であるから、当時としは成長率の高い町であった。（詳細は横田町誌283頁を）

享保11（1,730）札銀通用により郡内に札座が置かれたのは、横田で富田屋、三沢町で塗屋、亀嵩町で伊豆屋、上阿井町で可部屋であった。

このようにして郡内の町は、基本に生産力の豊かさによってその上に三沢氏の居城であった条件が加わって、町が発生して行っていたのである。

三成町と横田町

両町の成立と発展には大きい違いがある。三成町は舟運の起点として、五十年余り続いたが生産性の低さも手伝って、成長は伸び悩んでいた。

享保年間より松江藩は鉄方御法式によって、郡内五鉄師を中心として取締りを強化した。郡役人（下郡、与頭）も宗門改めが強化されると次第に事務量も増加して来た。横田の郡家は地理的に偏在するので、不便を感ずるようになった。天明四年（1,784）湯の迥絲原氏がその居宅を大馬木から現在の雨川に移したころ当時の下郡であった、稲田村の土居・安部次郎兵衛の断で、仁多郡の地理的中心の三成町へ郡家を移したのである。こうして三成町は上から作られた町として、再び成長への鞭があてられたのである。

当時の御役目屋敷は、横田町（大市、六日市のみで横田村のぞく）で65軒、三成町は20軒ほどであった。

横田は商業の町として、馬木・八川・鳥上・比田を後背地とした。西部では上下阿井・高尾・温泉・佐白・馬馳等を控える三沢町が中心地であった。三成町は純然たる政治的な中心地であった。

それから五十年余たった天保九年（1,838）、横田町にあった郡牢が、三成町の矢谷の字堀越へ移された。

二、幕末からあと

（上）政治と道路から

三沢から三成へ

土木工事が進んでいなかったから、今日のように道は川沿いにはつくれず、尾根づたいに道が通じていたから、明治の初年になっても、三沢は交通の要衝にあったから、西部の商業の中心であった。

明治六年になると地租改正のための調査のため、各町村の頭分が連絡協議のため三成にしきりと集まった。そこで三成に旅館ができ、飲食の便も生じ、さらに酌婦や団子が入って来た。調査は八年に終り九年から徴税がはじまったが、政治の中心としての性格が濃厚になって来た。

年末のぶり市などは依然として三沢が盛況であったので、三成の商人は堅田分れに出むき、上阿井、下阿井、高尾、大谷方面の人々を足止めし、酒をのませ馳走を供して、三成町へ買物に出ることをすすめたので、三年目ころからは流れが直接三成町へ向い、数年後には三成町が三沢町をしのぐ商況になった。それでも三沢は温泉、布勢方面の購売力は残していたという。

郡役所

政治の中心として作られて来た三成の町に、明治十二年郡役所がおかれると、商業の中心も三成に移って行った。二十二年大原、仁多両郡が一人の郡長の下に置かれ、郡役所が大東に移

った。その後二十九年仁多郡に単独の郡役所が三成に置かれるようになると、三成町は活況を呈しはじめた。(大正十五年廃止まで)。清水万次郎が印刷所をはじめた。(しばらくのち木次に印刷所が設立されると、そこの指導にもあたった)

三十年に三成警察署が置かれ三十三年に桜井製絲工場が創設され(昭和二十年の三成町大火まで)、仁多郡の中心的役割を次第にもちはじめた。こうした官公庁、工場を得意とする商家もあらわれはじめた。四十四年鳥上出身の藤原氏が三成で写真館を開業したのも、こうした状況の中であった。印刷も写真もどちらかというと一般向きのものではなかった。横田町は規模の大きい牛馬市およびこれに附設される商業活動によって、一般の消費生活に大きい影響を与えるとともに、商家をふやして行った。

道路整備と町の変遷

明治前期までの仁多郡の交通の要衝は、東では横田町、西では三沢町と佐白であった。佐白は久能道を経て大東への中継地として栄えた。横田町、亀嵩町もここに通じていた。従って明治初年の一中心地であった。三沢町は阿井ー高尾ー堅田ー三沢町、こゝで三成からの道と合して、上鴨倉の尾根を通って北原へ通じていた。北原も中継地として栄え、ここから槻屋ー日登ー木次町新市へと通じていた。

従って仁多郡の政治上の中心は三成町であったが、商業上はしばらくこれらの地に力があったのは、この交通路上の便からであった。

明治十四年ころから、三成ー八川ー横田道が、また三成ー八代ー久野道が改修されて、大八車が通るようになると、次第に三成を通過せざるを得なくなった。

明治二十三年、籔の谷道が改修されると、再び佐白、八代が浮かび上って来たが、温泉ー三成道が斐伊川沿いにできると便利になり、三沢町を経由する車が減って来た。

明治二十九年郡役所が三成にできると、三成中心が深まって来た。その後、阿井ー河内ー下鴨倉ー平田ー湯村ー日登道の阿井川沿い斐伊川沿いの道ができると、難工事であったが、極めて便利になり、三沢町は全く経由されなくなり、北原もその中継地の性格を平田にゆずるという変化を生じた。仁多郡西部の中心は道路網の上でも三成町に移った。

三十七年、三成ー亀嵩道、その途中から斐伊川沿いに横田道ができると、亀嵩、横田は、三成経由へと交通路が変って来た。

三成町から八代・佐白ー大東或は木次へと通じ、一方、三成町ー平田ー日登ー木次へと通じさらに大馬木道ができると三成町は完全に郡内の交通路の中心となった。

それからのち熱心に道路の拡幅も続けられて、大正八年には三葉自動車が、三成ー横田間を往復しはじめた。全十一年には阿井ー三成ー大東線の客車便が運転し。ついで横田ー三成ー大東線が開通すると、いよいよ三成が中心地となった。その後郡役所が廃止されたが、三成町は交通至便のため、教育、体育、行政上の会合はこゝで開かれることが多かったので、これらに支えられて、三成町は町勢を維持していった。

このころ貨物自動車が入るようになり、三成町がもっていた貨物輸送の中継地的性格が次第にうすれていった。

昭和七年に木次線が三成まで開通すると、一時貨客の乗降が多くなったが、仝九年に八川まで、仝十二年に全通すると、三成町はふたたび通過地的性格にかえった。後述するように郡内の経済力は東部に重みがあったから、米、木炭、木材等の重要物資は、三成町と横田町で二分するようになり、算盤の販売の活況と、消費水準の高さに支えられた小荷物取扱は、横田駅が急増し、戦後しばらくして木次線の最上位になり、今日に至っている。

三、幕末からあと
（下）教育と経済から

寺小屋

幕末における寺小屋の発生は横田町が最も早い。明治五年の「雲藩転制」から寺小屋数をみると

横田	10	成嵩
上鳥	8	勢井
川八	4	沢
木馬	4	三
計	26	亀
	(19)	布
	4	阿
	2	三
	5	計
	3	
	2	
	16	
	(7)	

である。（　）内はそのうち、算盤を教授する寺小屋である。これはやはり、商家の多いことと関係がある。

経済基盤

次頁の表の上半分は、明治三十七年版の仁多郡役所発行の「仁多郡治一般」の中からの統計数字である。詳説はひかえ、読者の方に比較してみて頂くことにするが、三成町と横田町の経済基盤に大きい差があることは容易に気づくことができる。当時の農村収入の主柱は米であるが、横田、馬木、亀嵩、阿井が多い。

国税の直接税（地租、所得税・営業税）で、鳥上、八川、阿井が多いのは、製鉄業による営業税が多いからである。

国税の関接税（酒、醤油、売薬関係）をみると、横田の生産がとびぬけて多いことがわかる。こうした横田の経済状況から、横田の岡崎氏が主導して、最高の持株を持って八雲銀行を、横田に創立した状況もわかる（頭取は絲原武太郎氏）―明治33年に。

昭和十年の統計に眼を移してみると、米の生産と販売高の差の上に、横田には、米の産額を上廻る、算盤販売高がある。この状況は、今日でも同じ比率であって、その他の工業やその他の農業生産でも三成町にはるかにまさっている。

交通の要地としての三成も、交通網の変化が到来すると、生産基盤の弱さによって、町の盛衰に大きい影響が出ることは明らかである。

これは次の教育における調査でも明らかにあらわれてくる。

三成の町は開町の時からつくられた町であり、交通の要地から次第に郡内の中心として、つくられて行った町である。生産性の向上による町民が作りあげた町でなく、上から与えられた条件によりかかって成長した町である。

交通網の発達そして変化、政治の在り方の変化とともに、三成の立場は弱いものになってしまった。仁多町役場のある町というに止まってしまっている。

それが、自力で作らなかったという性格が、さらに教育への意欲も弱かったために、活力を養うこともなかったために、いよいよ横田との違いをあらわしていったのである。

教育学歴調査表から

最近県内の高等学校などが、六十周年、七十周年の記念事業の一つとして卒業生名簿を作成されているので、それらによって数をまとめてみた。本籍地によったが、死亡者で不明のものもあったから、ある数字で、1～5位は増加するという誤りはあるが、傾向としては明らかに特色を知ることができる。

いづれも旧学校制度時代に限った。その時代の人が今日の町村を育て、さらに活躍しているからである。

こまかい検討は読者の方にまかせし、表の下段にある、明治三十八年の地価統計表の原本にある氏名と、卒業生名簿の氏名を対照して検討してみた一端をのべると

上農層の進学学校は

馬木――松江農林

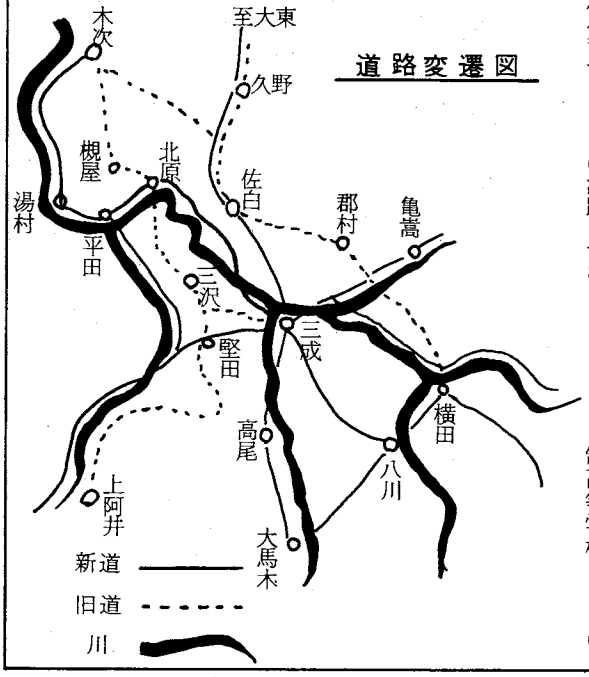
亀嵩――松江農林・島根師範

阿井――松江農林

布勢――三刀屋中学・松江農林

が多い。

横田――松江中学、そして旧制高等学校、さらに



	横田	鳥上	八川	馬木	亀嵩	三成	布勢	三沢	阿井	温泉	比田	他の県内	県外
①明治37年人口㋑	2,887	1,907	2,437	2,740	2,345	2,345	2,451	1,600	2,938				
田積㋺	103,481	67,298	81,329	90,152	90,964	60,661	77,107	45,653	73,042				
米収量石㋩	6,308	3,249	3,991	6,823	5,525	3,947	3,921	3,055	3,831				
小包引受㋥	1,774	横田に含まれる		355	71	660	229	三成に	279				
配達	1,724			411	35	1,081	487		718				
教育費1人当㋭	5円40円	5.77	7.00	5.00	5.90	3.40	5.60	6.50	7.8				
国税(直接)㋬	5,858円	3,500	5,396	4,501	4,811	3,554	4,572	2,908	5,855				
仝(間接)㋻	13,903	1,654	1,907	1,559	3,452	154	504	1,332	2,946				
衆議院選挙権者㋼	78	47	62	61	70	35	60	39	51	(国税10円以上納税者)			
昭和10年米収量㋽	7,168石		5,975		5,368	4,166							
	(160,000円)		(133,300)			(112,482)							
仝販売量㋾	2,437石		1,980			355							
	(65,800円)		(53,460)			(9,585)							
そろばん販売㋿	23万円				83,000								
②学歴傾向調査													
Ⓐ旧制松江中学	41	5	13	5	9	5	8	3	11				
Ⓑ仝三刀屋中学	18	5	7	3	13	16	14	2	4				
Ⓒ仝 大社中学	5	3		2	1	3		3	1				
Ⓓ旧制高等学校から京都、東京帝国大学	8	1		1	1	1	1			( ) 内は旧高校まで			
	(1)						(1)						
Ⓔ旧制のその他の国立、私立大学、専門学校	41	3	8	4	6	3	9	3	7				
(D、Eで在郷者数)	16	1	2	2	2	2	2	2	3				
Ⓕ旧制松江農林	24	17	14	25	23	17	16	3	24	4 横田農と重複あり			
Ⓖ 仝 益田農林	10	2	2	1	4	1	1		1				
Ⓗ 仝 島根工業	11	3	2	3	2	6	1		3	2			
Ⓚ 仝 島根商業	6	1	5		2	3	2		2				
Ⓛ 仝 島根師範	16	5	8	3	16	10	10	7	5				
Ⓜ旧制横田農から横田農林	283	110	123	92	87	64	81	32	49	15	41	103	66
					(高田、郡 35 47)	(高尾 35 26)							
横田高校30年まで	141					52							
③明治38年の地価 (明治年間から大正末年まで変化少なし)											計		
4万以上			1						1		2		
1万以上							1				1		
7千以上	1						1	1			3		
5 〃	2		1	1	2				2	1	9		
3 〃			1			1	2	1	2		7		
2 〃	5		2		4	1	1		3		16		
1 〃	13 (31)	7	9 (14)	8 (9)	17 (23)	7 (9)	9 (14)	4 (6)	10 (18)	9 (10)	93 (131)	( )内小計	
900以上	1	1	1	8	2		3	2	4	1	23		
700 〃	10	10	8	14	7	5	8	4	4	5	73		
500 〃	20	16	18	17	31	15	18	17	14	14	164		
300 〃	31	24	22	31	30	17	31	16	27	8	224		
計	83	59	63	78	93	46	73	45	67	38	615		

東京、京都の両帝国大学が多い。またその他の公私立大学、専門学校も多い。

上農層の下位や中農層に松江農林が多い。

横田以外の町村の大学進学は地価五千円以上や医家の子弟、一部の寺院の子弟である。横田では地価番付に入らない、サラリーマンとか商家の子弟も、多く大学、専門学校へ進んでいる。横田の幕末以来の風土と、明治初年のすぐれた教育者の識見もあづかって力があったようである。

さらに横田のもう一つの特色は、医家の子弟は別として、大学卒業後、郷土で働いてまた居住して生涯を終えた人、現在活躍している人の多いことである。

さらに横田には農学校が置かれたことにもよるが、他の旧町村と違って、中小農層からも多数ここに入学して、それらの殆んどが農業を中心に地元で働いていることも見落してはならない。

四、横田に醸成されたもの

経済活動

明治十四年十一月二十日の松江新聞187号をみると、横田の牛馬市の盛況を報じている。三日間で500頭の牛馬取引され、その額一、〇六五円四三銭で、近年にない活況であった。夜は絃歌のさんざめきも賑やかである。旧藩時代よりこの地の人々は、牛馬市の商況によって、翌年の運勢を占ったというほど、重要な市であったとしるしてある。

中国地方の各地から、仲買人が泊りこみでやって来る。その宿をする民家は、翌年の生活費の半分以上はもうけることが出きたと伝えられている。

明治中期からは、算盤製造が地盤産業として定着しはじめていった。その問屋兼仲買人は、全国各地をあるいて、商売のかたわら、新しい文物への理解を高めていった。

またキリスト教がこの地に入り、宗教活動のほかに、教育文化の活動が、極めて高度にはじめられたことも大きい影響を与えている。庭球という新らしいスポーツも早く入って定着したのもこうした状況下ではじめてできたものである。

教育文化活動

岩屋寺の教化活動、馬場八幡宮祭礼ほかが、農村慰安に果たした役割もまた意義がある。

横田農学校が、今日の学校の在りようと違って、新らしい農業をもって、地域を開拓しようというパイオニア精神に満ちあふれていたことも忘れてはならない。新しい野菜、花卉、小家畜の導入は眼をみはるものがあり、それが地域に定着したこと、また農産加工も地域に拡がりはじめたことも、当時の島根県農会報が報じている。

また農学校よりしばらく早く創設された裁縫女学校が、女子教育の重要性を認めさせたこと、ミシン利用による裁縫講習や、西洋料理講習にも力を注がれたこと、製作品のバザーを開かれて地域に浸透したことも過少評価してはならない。

こうして横田が周辺地よりは幾分豊かであったことの上に、教育や、先進的識見者の指導が加わって時代を経たために、地域が、周辺地よりは自由な雰囲気に恵まれ、開明的な行動力や生活へと進んだのである。

いま

三成は役所によりかかり、役所主導型に向ったためと、従って自力で自らを鍛える機会を失ったことが、活力を失うことに、自立性を弱めることにつながったと思われる。

しかし伝統を根強く保持しているところ、軽佻浮薄な傾向の少ないことは、教育による将来性に大きい期待のもてるところで、そこに力強さを感ずるものである。

交通網はさらに変化してゆく。やがて横田は松江に直接通じ、314号線で中国縦貫道へ、また新見方面からもそれへ通ずるように成ると、郡の中心地へと移行して来る。農地の開発とその効果的経営は、さらに発展の基盤を確立するであろう。

考えねばならぬこと

さて、しかし、方向性が都市の表層面や、一面の模倣にかたむき、地域伝統が崩壊方向であるとの意見が外来者の中から洩れて来る。個性ある横田はどこにあるか、ミニ都市化して、文化面でも、さらに内面的住民志向も動揺しているという。矯めるべきものがあるようだ。さらに極めて抽象的表現であるが、横田のまちの人々の考え方、学びとり方が、日本の都会社会が生み出したものの持込みに走り、土着の創造性が失われ、さらに規格化した人間を生み出す方向に踏み出してはいないか。そういう風土や人々ではなかったが。

あらためて統計を読み、意識を検討して、現状を考えてみたい。

感謝・御礼

昔から今日までの郷土の姿を暇に書き残して置き、乗り越える人が出るまで役に立てばと、30号までを念願して50号になってしまった。

書くことはいくらでもあるが、書いて発行するまでに消費する時間は、多くなる一方で負担を感じもする。そろそろ一区切りをと思うが名案がない。知恵を拝借したい。

50号を記念して増頁をしたが、合併号で名目だけ。何とか総目録2頁分でもひねり出したいと思ったが、バックナンバーをまとめて買って頂くと赤字が解消するという台所状態では無理。

幸に皆様の心棒強い御協力で続けられて有難い極み。厚く御礼申し上げる。

50号記念 奥出雲（30号まで横田文化）総目録

普通号は4頁，(8．9．19．21．31)号は6頁，(15．17．44．50)号は8頁，右の数字は号数　完は連載の完結

1. 神話と歴史の間　号

①あめのむらくもの剣は銅剣時代　29
②神話の読み方　30
③記紀と出雲風土記の神話の違い　31
④稲田の神社　（完）　33

2. 遺跡・文化財

藤ケ瀬城趾　1
馬場八幡宮の銅剣　2
金厳山岩屋寺　3
横田における古代遺跡　4
まぼろしの高田廃寺　5
馬木の古城趾覚書き　6
小森の神楽について　7
横田の番所　10
横田の横穴古墳　10
　一附　石剣の発見
横田町の古墳調査報告　31
　－50,51,52年度分
横田のたたら遺跡一らん表　44

3. 奥出雲の古代を推理する

①鉄　9
②中国地方　10
③出雲族のひろがり　11
④大和の成立　12
⑤吉備と奥出雲　13
⑥縄文、弥生時代　14
⑦3～6世紀　15
⑧横穴墓の出現（上）　16
⑨　〃　（下）　17
⑩奥出雲と備後との交渉　18
⑪古代の出雲豪族（上）　19
⑫　〃　（下）　（完）　21

4. ふるさとの歴史

横田町広報連載(50回)の続編

⑭三沢一族　1
⑮　仝　2
⑯　仝　3
⑰　仝　4
⑱　仝　5
⑲　仝　6
⑳　仝　一附　伽羅仙台萩　7
㉑　仝　8

5. 横田庄五百年史

①中世の夜明け　21
②ねらわれた鉄資源　22
③仙洞御料所　23
④覇権への道をゆずった三沢氏　24
⑤仙洞御料所の終末（完）　25

6. 入門文化財小字めぐり

①野の仏と郷土の歴史　14
②龍の駒　23
③横田盆地　26

7. あれこれ (1)

船通山と竹崎　13
「せんちぢやま」は船通路山である　19
奥出雲の花神－馬馳の秀斉、横田の淳斉　24
横田八幡宮の放生会　41
毘沙門堂

8. 岩屋寺物語

①中興僧快円　上　34
②　仝　中　37
③　仝　3　48

9. 旧家の歴史

①稲田の土居・安部家　34
②　仝　35
③　仝　（完）　37
①大馬木の山本・杠家　46
②　仝　47

10. 寺院の成立・変遷と民間信仰

①特　色　15
②盆踊りと山伏　16
③庶民への仏教の普及　28
④墓と石塔　29
⑤横田の六部さんと経筒・経塚　40

11. 民間信仰メモ

①淡島・金毘羅　43
②稲荷さん　48

12. 庶民の哀歓が育てた伝説

①高尾の傾城岩　37

②和泉式部 39
③最明寺入道時頼の廻国 41

13. あれこれ (2)

殿さん蔵 18
(特)奥備後の雲州街道 20
狐にばかされた話 27
毛利藩鉄奉行斬殺事件 42
義民伝六の碑の建立 43
横田の角力とり (上) 44
仝 (下) 45

14. 横田のたたらの歴史

①たたらと住民（附たたら復元） 27
②たたら遺跡と記録 28
③重要視された横田庄 29
④京都御所の領地 (完) 30

15. たたら製鉄早わかり

①鋼 28
②たたら床とたたら炉 30
③鉄鋼の中の玉鋼製造 31
④歴史が生み出した文化財 32
⑤大鍛冶屋 33
⑥近代製鉄法（上） 37
⑦ 仝 (中) 38
⑧ 仝 (下) 39

16. 絹の道・鉄の道

① 45
② 46

17. 横田地域史のしるべ

①清和源について 25
②荘園と院政 35
③横田庄（上） ー鎌倉時代末まで 36
④持明院統と大覚寺統 38
⑤横田庄（中の上）ー１４世紀 40
⑥ 仝 (中の下) 42
⑦ 仝 (下) 43
みてら泉涌寺 43

18. 年表・地図

弥生時代文化年表 2
岩屋寺並宝物年表 2
横田庄と三沢氏一族をめぐる年表 8
横田の民俗資料年表と分布図 9
備後北部と奥出雲文渉史 17
政治・土地・庄園制度発達史 35

19. 奥出雲地域史研究資料

図 書 (上) 32
仝 (中) 37

20. 横田町古文書庫収蔵文書解説

①馬場の秋山善神
ー若月家古代大成記 36
②岩 屋 寺 38

21. わらべ歌 (楽譜付)

①手遊び歌 1
②お手玉取 4
③手まり歌 10

22. 資 料

観音堂（馬木）14 疋の今昔 43

23. 古文書コーナー

① 18

24. コミュニティー

① 3号 ② 4号 ③ 5号
④ 7号 ⑤ 8号

25. 横田で生れた人

①勝 平 大 喜 12
②角村の三名工 15
③青 木 実 三 郎 17
④妹 尾 勇 吉 22
⑤小 林 徳 一 郎 32
⑥雲 照 律 師 48

26. 戦後横田文化小史

①書店と本 1
②歌 舞 伎 2
③音 楽 3
④合 唱 5
⑤映 画（上） 10
⑥ 仝 (中) 12
⑦ 仝 (下) 14
⑧読 書 会（上） 16
⑨ 仝 (下) 18

27. グループ・個人

横田民謡友の会 7
太田亀甲さん 16
森山庫一さん 30

28. 随筆・論稿

民芸と焼物つくり（安部宏） 7
(特)奥出雲歴史民俗資料館建設を 8
近代詩文書と私（米沢天崖） 14
民俗学について 39
地域文化を育てよう 44
ー横田での一つの足跡
(特)歴史風土論 三成と横田 49・50

（その他の小論稿は省略）

(特)は、その号全頁にわたるもの

五・六月合併号につき会員配布本号のみ一部二百円／六九九ー一六 島根県仁多郡横田町横田 高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第51号
7月号
昭和54. 7. 7
奥出雲文化協会

三沢氏の祖先は木曽義仲ではない（1）

大馬木・山本家③

藤ケ瀬城主三沢氏の祖先は木曽義仲ではない（1）

祖先発見の道

三沢氏については今まで、はっきりしないところも多く、しらべてみればみるほど、今まで系図とされていたものが、古文書や棟札その他の記録とあわなくなって来た。そこで在来の系図はそのまゝにして、諸記録をもとに新しい系図を構成してみた。ところがその後発見する諸史料は、その中ですべて息を吹きかえすことがわかった。

その後岩手県前沢の三沢氏の系図（伊達藩主の奥方となった三沢初子の家）や、鳥取市の三沢氏、九州久留米の三沢氏のものをみるにつれ、構成した系図が基本的に正しいことがわかり、祖先は木曽義仲ではなく、信濃国でも木曽谷の東、天龍川の流域の伊那谷の飯島氏であることが判明した。

そして伊那地方、近江の北西の朽木、北東の長浜、その東の大垣、南の伊勢の津の諸地方の三沢氏の縁者をしらべるとさらにそれが確実になった。山口県文書館を訪れて三沢氏文書を、東大資料編さん所の写影本、その実物（毛利藩支藩である長府藩の家老職三沢家所蔵）を知るに及んで、すべてが解決した。そこで「仁多郡誌、島根県史、新修島根県史の訂正 ― 奥出雲の新浦地頭三沢氏（上）」として「山陰史談14号」に考証をのせた。

三沢氏は木曽義仲と同じく清和源氏ではあるが多田流（満仲流）ではなく、その末弟の満快流の源氏即ち信濃源氏の伊那源氏であることが明らかになった。詳細はそれにゆずり要点を、ここでは書くことにする。そして従来なぜ三沢氏の祖は、木曽義仲となったかについても考証したが（「山陰史談」近刊号に）それも要点を紹介する。

出雲の新補地頭

承久の変（13世紀初頭）は後鳥羽院が隠岐の島に遠流になったことで終り、北条氏が京方（院方）の武士の所領三千余ケ所を没収して、そこへ東国武士を中心とする御家人を補任もしくは新補することで完成した。

その時の出雲の地頭をみると近江源氏（宇多源氏で近江居住者、出雲守護佐々木氏流）と清和源氏流の伊那源氏に属するものが多い（源氏については、本誌25号参照）。近江源氏流は守護であったので、その一族は出雲の平野部に補佐・新補され、伊那源氏は山間部即ち奥出雲に新補された。琵琶湖の東辺の平野部に成長したのが近江源氏であり、南信濃の天龍川沿いの山地に土着したのが伊那源氏である。この両流の源氏が、それぞれの出身地に似た出雲の両地域に土着して、国侍となっていった。このことは出雲の中世史を探究する上に、筆者は見落してはならない重要な点であると考えている。この観点で三沢氏を堀起し、尼子氏の抬頭、尼子、毛利両氏の対立、尼子氏の滅亡の歴史を綴りたいと思う。三沢氏はこの地を去ってから、長府藩の家老として明治維新を迎えた。

奥出雲の新補地頭

大原郡

○福田庄・猪野庄・飯野庄・日伊庄―上総の伊北又太郎時胤

○淀本庄―伊那の中沢太郎真氏（のちの牛尾氏）

○香折新宮庄―出身不明の経泰（のち三沢氏の一族が継ぐ）

仁多郡

○三沢郷　伊那の飯島太郎（のちの三沢氏）

飯石郡

○三刀屋郷―伊那の諏訪部助長（のちの三刀屋氏）

ほかに大原郡には、土屋（相模）や神保・中郡氏、伊那の飯沼氏がいた。

このうち牛尾・飯島・諏訪部の諸氏が強力な地盤をつくり、戦国末まで生きのこり、尼子氏とも対立するほど、あなどり難い勢力を維持した。京極氏の代官として徴税官として、出雲に居を構えた尼子氏は、これらの諸氏の懐柔には心をくばった。毛利氏もこれらとは結ぼうと努力を重ねたのである。

尼子氏に対する新しい見方

尼子といえば「尼子経久の中国十一ケ国の大守」という尊称（実際は五ケ国程度）がすぐ浮ぶように、無条件な戦国勇将観がある。また山中鹿之助幸盛の「七難八苦」という武者精神の鼓吹もある。しかしこれのみで中世の出雲をときあかして釈然とする史観には、大きな偽りのあることを指摘し、今後それを明らかにして、出雲中世史を豊かにしたいと念願している。

三沢氏と尼子氏の大きな違い

三沢氏は十三世紀末、飯島氏として所領のあった三沢郷に入り、武士兼開拓者（当時の武士はこれがあたりまえ）として、

農業経営にも従ったのである。その片鱗を三沢氏の直系の系図（西宮市在住）の中にみることができる。その開拓のあり方は長野県の伊那谷の南端坂部（さかんべ）での熊谷家の四五〇年にわたる開拓の歴史の記録が、ときあかしてくれる。この家は一の谷の合戦の熊谷次郎真実の子孫で、安芸国に移って地頭であった一族の末流が、その地に来着したものである。

中沢、諏訪部、飯島の諸氏の伊那源氏の生活の舞台は、天龍川中流の峡谷地帯であった。川は屈曲蛇行し、それに沿った河岸段丘が発達し、その間に谷盆地が点在している。そこの集落や耕地は500～700米の高地にあるが、100～300米の谷合に耕地や集落のある奥出雲とは同じような気候である。むしろ冬季は雪が少なく好日が多い。稲作の気候条件としても、従って生産性の上でも、相似た土地柄である。

伊那源氏がこの地方に来住し土着性が強く、次第に開拓して強固な地盤を築いたことは、まことにもっともなことであった。出雲の北部の平地に、近江の平原部から移った近江源氏が土着に成功したのも同じ理由によるのである。

このことは「山陰史談」に一応明らかにして置いたが、今後現地に即して究明したことを発表したい考えである。

伊那谷の地質も各種の花崗岩が多い。砂鉄の利用についての知識と経験をもっていたに違いない。中世初期の武士にとっては、武器以上に農具を必要としたのである。

これらの土着武士にとって、何にもかえ難いのは、土地であり、労苦をともにする百姓達であった。この土地と百姓を護ることが、生かすことが、家名を存続することであった。これが坂東武士の経験から得た政治原理であった。武士が忠義一途になるのは、扶持米という給料をもらって職業化した徳川時代の侍時代になってからで、それを育てたのは儒教、儒学であった。中世の諸将は所領を維持するためには、策をろうし、また妥協し、昨日の敵は今日の友と、去就の判断を土地と百姓において処したのである。

近江源氏佐々木氏（佐々木庄に住んだから）はのち、京極氏（近江北半国が領国）と六角氏（近江南半国）ともに京都に住んだ地名を姓とする　とに分れた。尼子氏は京極氏の流れで尼子に住んだからこう名乗り、出雲守護・京極氏の代官として広瀬の地に来住した。それも十五世紀半ばのことである。三沢氏はすでにこの時代には、領国をかため出雲国の平原部にまで（鉄と米を主力として）大きい影響力をもっていた。

尼子氏は役人として、領内の地侍を押え、納税の上まえをはねることによって、自力を養っていった。従って百姓たちを大切にする地侍たちにとっては、「守護の代官とは何するものぞ」という感が深かった。そこで常に力の均衡を保ちつつ、地侍は連繋し妥協もはかっていたのである。

尼子氏は戦術にたけていたようである。そして広瀬富田城周辺の地侍を守護の権威を背に、直臣としていた。しかし奥出雲の諸将とちがって、弱小地侍で強固な地盤もなかった。尼子氏は戦国諸将と同じく、中央の組織、権威の崩壊に乗じて、周囲を侵蝕することによって範図を拡げていった。そしてさらに東に西に転戦し、その地を直臣に宛行ったが、それは強固な領国ではなかったから、たとえそれは広くても、常に不安定な地盤をもつに過ぎなかった。奥出雲の三氏は、この間に処して服し時には離れて領国の保持と拡張につとめた。

尼子氏にひきかえ、安芸の毛利氏は、強大な地侍をたくみに縁組によって懐柔し、強国な結びつきによって直臣としていったから、その勢力は強固なものであった。今までは石見銀山の攻防による勝敗すなわち、それを領有するか否かが、尼子、毛利両氏の勢力の交替の鍵とする見方が強かったが、鍵はこれのみでなく、地侍との連繋がいかに重要であったかを基本に置かねばならないことが明らかになった。

尼子氏は戦術にたけていた。こゝに尼子氏の行く末えはすでに定まっていた。山中鹿之介幸盛も戦術家であって領国経営者ではなかった。「七難八苦」の生涯を終えたが、私の観点からすれば、ピエロ（道化師）的性格の武士であったとしか考えられない。

次号(2)三沢氏の祖飯島氏について

九月号(3)木曽義仲を三沢氏の祖としたのは。

歴史の中から浮び上る
青年像あれこれ

現代の青年は、それなりに努力して新しい時代をつくると信ずるものであるが、歴史の流れの中に、その時代時代の青年像を読みとっている時、今日のこの在り方が、すべて是認してよいであろうかと考えられてくる。

現代の青年層の特色を一口にいえば、性格的に単一で、情報が乏しく、自分たちそれぞれの創意の営みが少なく、刺戟を他に求め、非（反ではない）社会的であるくせに、流行におくれることに大きな不安を感じていることにある。

その原因はいろいろあるが、まず核家族化し、家族数が少なく、その構成にも変化がなくな

（四頁へ）

出雲で最も古い たたら師

—大馬木の山本・杠家③—

三代杠太郎左衛門則久

父侶久は天文二年、五十九才で死去した。法名は一空。

則久は父の後を継ぎ百姓を業としたが、天文五年(1,536)大馬木村の大峠において、はじめて鈩を吹いた。奥出雲において鈩稼業をして、家名の明らかなものとしては最も古いものである。(飯石郡の綿屋の記録の中に文永年間のことがあるが、これは別な家である。このことは稿を改めて述べる予定)

鉄山根元(大呂・楠家所蔵、これを写したものが鉄山旧記で絲原家所蔵)によれば、則久のほか杠市兵衛、足立四郎左衛門も鈩を吹始めたとある。経営は別であったか、共同であった明らかでない。この記録の前に「往昔は鈩小前の仕形にて、所々数ケ所仕候と相見え、壱ケ所山之内にても古き鈩床、幾ケ所もこれあり、郡中鉄師数多くござ候」とある。小規模な鈩であったようである。天文五年のこの時は鈩師と書かれているから、やゝ規模が大きくなって、高殿のあるものに変ったのではあるまいか。この記録は貴重であって、こゝに今日の鈩の始源があるようで、別の機会にそれについてまとめたい。

天文七年、今の山本の地を求めて向原から移転した。仝十三年庵室を建立し(今の八槙寺の地か)、旅僧を留め置いて日蓮宗によって法華経を信仰した。或る夜の夢の中で、法華経一部八巻を拾ったので、この庵室を「八巻庵」と称して信仰にはげんだ。永禄六年(1,563)二男甚七を分家させ、屋号を「八巻」とした。(のち八槙に)。

これから杠家は両家となりともに栄えた。則久の妻は加藤清兵衛(三沢の土豪か)の娘であった。こののち尼子氏は富田城を毛利に明け渡した。鹿之介が再起を企てたが、布部山合戦で大敗を喫した。文亀二年(1,571)則久は六十三才でなくなった。

四代杠源治兵衛重久

家業を継ぎ、百姓と鉄山をした。

このころから毛利氏が守護大名から成長してゆく時代である。弟甚七が分家した。重久は大馬木村小峠で鈩を吹いた。山は両家が寄せ合って鉄山のために用いたので、今日なお両家谷といっている。また兄弟心を合わせて、父の建立した庵室を寺としたが、戦国乱世のため容易ではなかった。

天正二年(1,574)三沢為清は亀一女は江角五良右衛門の妻となった。江角氏は馬来氏在住のころの家臣であったが、馬来氏が萩へ移ってからのちは、土豪としてこの地に住んだようである。

天正十三年、八巻庵の寺領を整え、京都の本山へ願い出、寺僧を迎えた。この時本山からは八槙寺と改号された。

仝十七年、三沢氏や馬来氏(42才)。

仝七年には馬来氏が小馬木に築城をはじめ、翌八年に道綱が移る。仝十年は本能寺の変。

嵩に築城。仝五年移城する

道綱やその子乗綱は病のため小馬来城に残り、孫の宗四郎が外祖父とともに)は毛利氏の配下となり安芸に移る。亀嵩城へは毛利の家臣冷泉民部が入り、横田へは松原氏、八川へは祖式氏が、そのほか阿井へもそれぞれ家臣が入った。新しい時代への転換期となった。

文禄元年(1,595)の朝鮮遠征に、稲田土居、安部源太左衛門が参加した。亀嵩の冷泉氏は十二月討死した。覚融寺の西の台地の石垣遺構は冷泉氏の居宅跡である。墓も附近にある。

慶長元年(1,506)八川八幡宮の遷宮があり、石見銀山の一角で銀山を堀あてた大八川の佐伯氏が、帰って本願となり建立し、また石見に帰ったという。

仝四年、四代重久は家督を長男太郎左衛門に譲った。

仝五年、関ケ原合戦。仝六年松江藩主堀尾信濃守が国内を巡回し、八川坂根で鈩製鉄に従っていた村下をみ、これを賞した。

横田の五反田屋(現富田屋)に泊り、安部源太左衛門親子の案内で藤ケ瀬城にのぼり、ありし日の三沢為虎のことどもを聞いたという。

全六年　重久は六十六才で死去。法名道輝、妻は樋口村小池七右衛門（表）の娘であった。

日恩上人——杠源八郎

甚七の弟即ち三代則久の三男源八郎は、こうした山本家の日蓮宗への篤信の家風の下で育ったので、幼少の頃から出家の志固く、安養寺に入った。のち各地で修業し、生来の博学多才にますます磨きが加わり、元和元年（1,614）六十一才の時、遂に本山、京都要法寺の第十六世貫主となった。日恩上人である。

五代杠太郎左衛門保久

父重久のあとをつぎ（慶長四）百姓と鉄山を業とした。子は女子二人であった。長女に養子を迎えた。これが杠幸右衛門国久である。国久は杠小四良といい（本誌26号3頁参照）、備中国杠城主、杠左兵衛尉守久の五男であった。慶長五年杠城が落城した折、母とともに一族である杠氏をたよって落ちのび、こゝで成長していた。

慶長九年、堀尾氏は松江城に移った。全十二年、鉄穴流しによって宍道湖が埋るので、それ停止してはという議が藩主から出され、全十七年遂に停止された。そこで鈩吹き（操業）は中止したが、大鍛冶屋は存続ししばらく続いた。従って百姓に精を出すことになった。

宝永四年六十六才で死去。法名宗善。妻は伯父甚七の娘であった。

慶長十八年、仁多、飯石の鉄師百姓が鉄穴流し再開を嘆願したが許されず、さらに十九年にも嘆願したが許容されなかった。翌元和元年（1,615）の暮の冬は大寒で、宍道湖の氷厚さ一尺余になったという。全二年将軍家康死去。この年も仁多飯石両郡よりまた願出たが許容されなかった。全四年ころよりは田無の百姓は鉄穴流しもできず、山畑を開墾して渡世しはじめた。

六代太郎左衛門国久

養子。慶長十九年まだ小四郎と称した時、大阪冬の陣に参加し軍功があり、題目刀拝領した。幸右衛門と名も改める。

元和四年から本家山本の当主は小馬木村にて百姓に従い、本家山本の家には分家八槙の三代与右衛門景久が居住した。全五年、五代太郎左衛門の末弟又右衛門を、樋口村の表・小池氏（親戚）が養子に所望して来た。当主甚十郎豊成の嫡子は幼少であったので、又右衛門を甚十郎の弟七右衛門の子としてのち、長女の聟養子に迎え仲継ぎにしようという考えであった。ところが隠居していた四代治兵衛が他宗（表は岩屋寺で真言宗）、他門（小池姓）の故、許さなかった。翌六年、二条件を受け入れることで再度申入れたので、七年養子縁組が成立した。これより樋口・表の小池家は杠と称し、居宅内に建立していた南枝庵を日蓮宗に改宗し、帰依することにした。

寛永七年（1,630）、太郎左衛門国久は長子久植（治兵衛、太良左衛門といい法名法泉）を本家に住んでいた分家八槙の三代杠与右衛門景久の娘の聟養子として出した。そしてその弟で次男の市兵衛を山本家（当時小馬木村に居住）の後継者と定めた。

全九年藩主堀尾氏の家老前田丹波が、古市の田地を開き、八川に井関をつくった。これが今日の丹波関の起りである。この年因幡藩の家中渡辺数馬は親のかたき河井又五郎を伊賀国上野にてついて討ち果した（伊賀越の仇討ち）。この時数馬を助けて荒木又右衛門保知が三十六人斬ったと高名を流したが、実際は二人であるというが、この奥出雲にも評判は流れたとみえて「杠日記」にもしるされている。

全十年藩主堀尾家は嗣子なく断絶。翌年京極若狭守が入部した。二十余年中絶した鉄穴流しを復活すべく、仁多、飯石の百姓困窮の果てと願い出でたが許容されなかった。この年家光入洛参内し、征夷大将軍となる。横田町大市に大火あり。全十二年鉄火流しの嘆願を重ねるが聞届けられず。国久夫婦は隠居。

七代杠市兵衛久正

源左衛門ともいう。寛永十三年、鉄山（たたら・鍛冶）、鉄穴流し遂に許される。

全十四年より、八槙の四代治兵衛（国久の長男）は小峠山にて、山本の七代市兵衛久正は五ノ塚山にてそれぞれ鈩を吹く。十月には島原にて切支丹蜂起、乱おこる。山本、八槙の両家はともに鈩、鍛冶を営み繁昌し、全盛時代へと進む。

京極氏も断絶、全十五年松平直政藩主として松江城に入る。全十六年には郡内の鉄師によって十三ケ所で鈩が吹立てられた。

大馬木村では、杠両家と小馬木村の六兵衛で、六兵衛は矢入鈩を吹いた。

全十八年、岩屋寺の本堂の上葺が行われ、横田町に始めて籠が（郡牢）設けられる。天保九年（1,838）三成に移されるまであった。この代に田地を買求め、鉄穴もふやすなど盛んであった。

市兵衛は元禄十年八十才で死去した。

（二頁より）

った。これが情報を少なくする。そして父親が仕事を通して交ることはもとより、ふれあいがへり、子どもは母親まかせ。しかも母親は自分にひきつけて子どもを教育するより、子どもにあわせて、子どもを教育している。つまり子どもをひがませないように、子どもの世界の流行にあわせて、子どもの欲求をかなえることにはげんでいる。幼児の時代から流行を追う。その流行の演出は、たくみに企業によって行われている。（未完）

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 52 号
8 月 号
昭和54. 8. 4
奥出雲文化協会

三沢氏の祖は 飯島氏

——木曽義仲ではない②

信濃源氏＝伊那源氏

（本誌25号参照のこと、本論については山陰史談を）

源氏といえば普通清和源氏をいう。木曽義仲は清和源氏の祖経基王の長男満仲が摂津の多田に住した多田流の子孫である。源頼朝とは従兄弟であり、この流れには、中世この地に勢力を扶殖した山名氏、新田義貞を出した新田氏、畠山氏、吉良氏、今川氏、足利尊氏を出した足利氏、武田信玄を出した武田氏と諸名家が多い。経基王の六男満快は南信濃に移りすみ、信濃源氏の祖となり、その流れが伊那源氏となり、その中から飯島氏があらわれた。

中世の信濃は内陸高原の複雑さによって、山地を舞台としてその地盤を固める豪族が各地にあって分立し、統一する勢力も生まれず、地侍の小ぜりあいを呈する程度であったという。

それらの小豪族は平安末期から鎌倉初期にかけて、関東の平原に志を得られずして、信濃の奥地へ入ってきた清和源氏の諸流で、複雑な地形の各地に住んで開発に従い、その地名を名乗ったのである。

北信濃 には次の諸氏

経基王長子の
満仲 ┬ 頼清…村上氏
　　└ 頼季…井上・高梨氏

南信濃 には経基王の末子満快流の南信濃の伊那谷に住んだ伊那源氏の諸氏

①満快—②満国—③為満—④為公 ┬ ㋑中津乗太郎（惣領）
　　├ ㋺伊那太郎…伊那・林・野辺・泉・諏訪部・室賀・芳美・松本など十三氏
　　├ ㋩村上氏…村上・二柳・夏目など諸氏
　　├ ㋥依田氏…諏訪・飯沼などの諸氏
　　├ ㋭片切源八…片切・泉・大島・名子・前沢・那須・飯島・岩間など
　　└ ㋬堤、駒返氏に

これらの諸氏は源平争乱の時代には、その時の勢のあるどちらかに組して動き、争乱の末には木曽義仲とともにも動いたから、不利な立場に落ちたが、やがて鎌倉幕府創設とともに、次第に源氏の御家人となった。以上の諸氏とは別な家系であった、諏訪神氏も源氏になびき、武神諏訪神社の信仰を通じて一層の親密さを加えた。大原郡海潮村即ち牛尾荘に地頭として下った中沢氏は、諏訪神氏が中沢郷に入ったもので、出雲に来ても諏訪中沢とか、神中沢と称していた。のち主流は地名をとって、牛尾氏と名乗った。

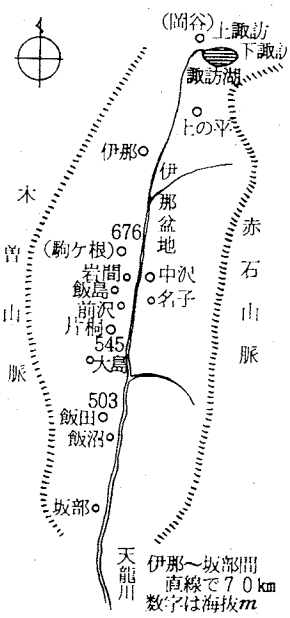
信濃の守護には（25号参照）新羅三郎義光—八幡太郎義家の弟——の次子義清（武田氏の祖）の子遠光がなっていた。遠光は小笠原に住んで小笠原氏と称していた。（この末孫が京都に出て仙洞御所に仕えた。それが横田庄代官として下って、安部氏となった）

北条氏の執権時代も北条氏と信濃は関係が深く、承久の乱にも中仙道方面の兵の大将として、信濃国守護長清（小笠原遠光の子）と、甲斐国守護武田信光（義清の孫で長清と従兄弟）が加ったから、乱後は南北信濃の諸氏の異動は少なかった。従って行賞によってこれらの地頭が得た所領や地頭職は、信濃以外の地の新補地が少なからずあった。

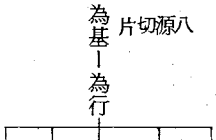
伊那源氏

伊那源氏が栄えたのは、満快の曽孫為公が、信濃守に任ぜられ、北伊那の天龍川の東岸、「上の平」に居館を構えてからであった。為公は勇将をもって四周に鳴り、「伊那の真人」の尊称を得るほど勢力を扶殖し、その子は南方を中心とする伊那谷（特に天龍川西岸）の各地に移りすみ、さらに子孫が各地にひろがって、地名をもって各氏を称した。

片切氏はのち片桐となり、その末孫から、賤ケ嶽の七本槍の片桐勝元を出している。片切氏は片切郷の本郷中村に入り、伊那の中部を握り、各地に栄えた。



飯島に土着したのが片切為綱で



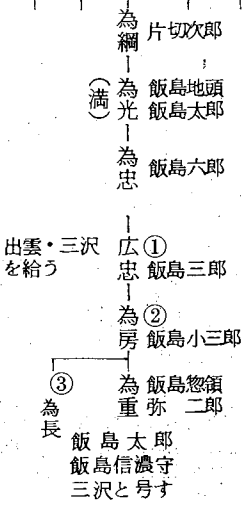
その子為光（満）から「飯島」を姓とした。

諏訪部氏（諏訪湖附近の部即ち谷の入口に住んで諏訪部を称す）は飯島氏と同じく伊那源氏である。地図にみるように、諏訪神氏の一族（諏訪神社の社家の一族）が中沢に住んで中沢氏といったが、のち伊那源氏と婚を結んで、伊那源氏の同族のようになった。

飯島氏が三沢郷に入って三沢氏、諏訪部氏が三刀屋郷に入って三刀屋氏、中沢氏が牛尾荘に入って牛尾氏となった。同門の飯沼氏は加茂郷に入り、のち立原氏を称し、尼子方の将となった。以上の諸氏が奥出雲に入ったのは承久の変の論功行賞によるものである。

承久の変

吾妻鏡、承久記、承久兵乱記によれば、京都に攻め上った幕府方は、



（為長は当地の在来の三沢偽系図では為仲とし初代とする）

東海道—北条時房・北条泰時
北条時氏・足利義氏・三浦義村・千葉胤綱らを大将とする
武蔵・相模・上総・下総・上野・下野・駿河の十万余騎。
東仙道—武田信光・小笠原長清らを大将とする。甲斐・信濃・関東の一部の五万余騎。
北陸道—北条朝時らを大将とする関東北部・北陸部の四万余騎。

であった。飯島氏は東仙道軍の小笠原氏の下で飯島太郎が一族一門とともに参加している。その孫が飯島三郎広忠である。

承久三年（1,220）山城国の宇治川渡河戦の成功がそれに続く雪崩の如き関東の大軍の京都侵入となり、京都方の大敗となって承久の変は終った。しかし渡河作戦ははじめは容易ではなかった。

多くの溺死者、討死者が出て攻めあぐんだが、若手武者の決死の働きによって遂に成功した。

この時の大将は北条武蔵守泰時と三浦駿河守義村であった。三浦義村の嫡男で十八才の三浦駿河次郎泰村は初陣であったが、父の期待を一身に集め、九十五騎の兵——多くが若武者——とともに渡河に成功したのである。この時飯島太郎の孫広忠が加っていたのである。広忠も年は泰村と同じ位であった。祖父飯島太郎は既に老いてはいたが飯島氏の惣領として、一族同門の片切三郎、片切六弥太、岩間二郎父子、岩間七郎らとともに参加していた。広忠の父為忠のことはいずれの書にも、三沢氏の記録にもしるされていないが、何かの理由があって、祖父が年若い広忠を後見して参加したものと思える。

飯島氏三沢郷を給せらる

変後の行賞は、広忠の功績を含めて、その後見人であり飯島氏の惣領である飯島太郎への、出雲国三沢郷の地頭職への補任となったのである。それより五十年を経た文永八年（1,270）の出雲大社の記録によれば、三沢郷地頭飯島太郎の所領は、田積四町とある。

この程度の所領では受領後直ちに任地に赴くわけにもゆかず本貫地伊那の飯島にあって、所領を確保していたものであろう。やがて文永の役から弘安の役（元の来襲）にかけて、西国警備の充実のため、関東の武士が、西国の領地へ移ることを強制された。そして下ったのが、備後の山内氏、安芸の毛利氏、小早川氏をはじめ多くの諸氏である。出雲でもその数は多かった。近畿地方に所領を得ていた武士もその地に下っても領内の名主層の台頭によって、農業経営はもとより、領国経営も困難を感ずることが多かったので、その地を捨てて、中国地方に下り腰をすえて領国経営に従った。諏訪部氏も中沢氏も地頭職を得て相当の年数を経てこの地に下って来ている。

広忠の孫の為長が、この地に下ったのは、右の諸氏と同じ十二世紀末のことである。しかし飯島氏の惣領は飯島に残って領内を治め、その地の神社、仏閣に名を留めている。

為長より二七〇余年たった、天正六年（1,578）沙弥宗程（三沢下野守為清）が岩屋寺に届けた願文に、乾元元年（1,302）定意（為長の法名）が三沢に下向し、自分は十三代であると記しある。

これは為長を初代としているのではなく、忠広を初代とし三代が為長で三沢に下ったとしてはじめて正しい系図となるのである。正しい三沢氏の系図や家譜、軍功覚書と一致し、当地の諸記録とも符合するのである。

そこで従来、当地に流布していた三沢氏の系図（祖は木曽義仲とするもの）は後世の作であることが明らかになった。次号では、その系図はどうして生れたものか、それらの系図の考証によって明らかになったことを述べることにする。

正しい系図によって、三沢氏の歴史を書きかえる必要が生じて来た。一応はまとまっているが、前号でのべたように、出雲の中世史の一部書き変えを含むので、慎重を期し、さらに研究を深めて発表する考えである。

荒木宗重さん

といえば、神話に登場する「簸の川上」旧鳥上村の案内役として、戦前から各地の来訪者に親しまれた人である。

去る六月二十日午后、しばらくの療養生活の半ば容態が変り急逝された。明治三十三年生れだから満七十九才であった。若い時から元気で仕事一途に働いた人だったが、年令には勝てなかった。

本業は百姓であったが、創意工夫に富んだ人で、若い時は算盤製造の機械化のれい明期であったが、その操作修理に腕を振っておられる。（「雲州そろばんの今昔」にくわしく掲載）

また建築についても研究されていて昨年の菩提寺善徳寺の本堂の大改造には、企画から完成まで大いに才能を発揮された。屋号も上村下屋といい、たたらに関しても経験もあり豊富な知識ももっておられた。若い時からの旺盛な知識欲と健康に珍まれた行動力は、生涯を通じて「郷土」に注がれ、文字通り生涯教育の先達であった。

郷土の歴史に力を入れはじめられたのは、青年団長時代（大正十四年・廿四才）に義民伝六の碑の建立に努力をされてからであるという（詳細は本誌43号を）。この碑は永久に荒木さんの功績を後世に伝える記念碑ともなった。

時代は皇国史観に突入したときであったが、「あめのむらくもの創」出顕の地であり、日本精神、日本刀、靖国鈩、むらくも鈩と材料にことかつなかったので、古代史へ傾倒された。そして幾多の外来の研究者の案内によって、聞き学問も深められた。

戦後、皇国史観の崩壊とともに荒木さんは主柱を失われたが、持前の探究心から、中世史に向われ、近隣の城趾の探訪調査にはじまり、同好の森山庫市、小林房吉、佐世川徳雄ほかとともに、神社、仏閣或は旧家の古文書の調査にも進まれた。郷土を忘れる風潮に歯留めをかけられる意気込みはすさまじいものもあった。他方幾多の貴重な考古学上の出土品も発見されている。

かって荒木さんに実地に見聞されたことを、是非共書きとめられるようにとすすめていたが、幸に横田町誌編集の折に協力委員として記録して頂いたものは貴重な遺産となった。また竹崎の観音寺に関する考証記録、万歳の開拓者伊藤忠蔵の記録などはまとまった記録である。

昨年なくなられた森山庫市さんが、民俗体現者的個性の人であったのに対し、郷土史体現者的な人であった。

最後に荒木さんとともに忘れてはならないものは、毎年秋十一月下旬に、名古屋の熱田神宮へ奉納する献穀行事のことである。神話に因んで、熱田神宮の祭神とされている「あめのむらくもの剣」出顕の地として、新穀を献上しているのは、昭和十三年からで、その発企推進者として荒木さんは有力な一人であった。そして先年船通山の剣の碑が落雷によってこわれた時、その復元にも努力された一人であった。

人間と環境

教育と郷土

環境はよくなったのか

「かんきょう」（編集協力環境庁）の78年5月号の中に、慶応大学教授高橋潤二郎氏の「風景の変遷」という論文が載っていて、その中で菊池不二夫氏の日本地理学会の大会報告「埼玉県上富の農家住居とその変貌」の紹介がなされ、そのあとに柳田国男の名著「明治大正史」の一文がのっている。

「魚と虫とはまだ友だちだが、鳥獣は追々に少年の興味の領分から逸脱しようとして居る。天然記念物の保存法が、辛じて其根絶を防止する以前から、彼等はもうとつくに、我々の『風景』の中には居ないのである。」

これが書かれた昭和初期と今日とは半世紀のへだたりがある。

鳥獣だけではない。魚と虫も、もう子どもの生活から離れてしまい。昆虫は宿題のための対象となり、魚は金を支払っての釣りの対象としかならないようになってしまっている。しかも家の前まで道路は舗装され、ブロック塀に、コンクリートの庭では、庭先の草花までが失われてしまっている。台所や居間に置かれた家具、道具までが、消えうせている。これは生活の合理化、環境の近代化のあらわれであると言い切ってしまってよいのであろうか。心はどうなるだろうか。

東京の中野中高校生の指摘から

一昨年の夏、東京都中野区にある私立中野中学高等学校（明治大学附属）の地理研究クラブの生徒約四十名が、三泊四日の研究地として横田を選んでやって来た。この地の歴史と、そろばん、たたらを調査し—調査態度も、生活態度もよく訓練されていた——すばらしいまとめをして帰った。あとで研究物をもらったが、その中に奥出雲であるから、うんと田舎と思って来たのにあまり開けていて驚いた。昔の良さが失われている。かえって東京近郊に名残りが多く、その上それらが積極的に生活の中に生きているという意味のことがあった。

本誌50号の「三成と横田」の最後で指摘した問題につながることである。横田のこの傾向この現状は、このままでよいであろうか。郷土感の喪失、そして

連帯意識の喪失へとつながるのではあるまいか。心配なところである。ところが今年の町の夷（えびす）祭を催すについての指導者の一部の発言の中に、この心配は現実となっていることを知り、私はがく然とした。若い層ではない。活躍している老年層である。作り出すことに協力することで、地域の連帯感は深まるということを忘れ、消費本位の祭りを演出することに眼がむくことは、個々の楽しみにのみ没入し、地域民の連帯を崩すことになるのである。

「三成と横田」の続編②③でこの問題を深めたいと思っていたが、もう少し調査の上でとしていたが、それをまたず、こう書かざるを得ない気持になった。

こうした傾向に対し、別な形で歯留めをかけたい計画を実現したいと思っている。小さいことでも、すべての人に、「あっ」と思い出してもらいたいものであると思うからである。

菊池不二夫氏と川村高等学校生の研究から

中野学園も私立であるが、これから述べる研究もやはり私立の東京都目白の川村学園の高等学校のものである。

「奈良井への旅」という130頁に及ぶ、「住居を主とした観察学習記録」がそれである。毎年一年生が二泊三日間の観察旅行をし、三年間のリレー研究をまとめたものである。写真とスケッチを交えたみごとなものである。地域の特色そして中での生業と家屋形態の関連した把握、その分類、そして人々の生活が綴られている。その観察眼には古いものへの懐しみだけでなく、自然、風土、生業と人の生活への温いものが感ぜられる。女生徒の研究であるからだけではない。経済的な視点からも十分に観察してある。地域に立脚した現状が見事に記録してある。

指導者の菊池先生は、かって戦後、横田小学校に勤めていて上京し、川村学園につとめて、現在は高等学校の主事である。

この記録は、東京新宿→甲州街道→立川→八王子→高尾→甲府→諏訪市→塩尻市→木曽川沿いに南下して奈良井町に至るまでの長い沿道の観察によるものである。勿論事前指導、事後の研究の指導による成果にもよるのであるが、みごとなものである。

東京のどまん中に住んでいて田園風景がめずらしいからだと片付けられない、しっかりした都市文明、文化への批判がにじみ出ているから、貴重である。

ゆとりある教育とは

このことばが、しきりと言われているが、話を聞いても、はやわかりがしない。ゆとりとは何事ぞといわざるを得ないようである。

右の二つの例はいずれも私立学校である。もっと私立学校の色彩の特色の濃い、文化学院・自由学園・和光学園・成城学園玉川学園などの教育記録をしきりと読んでいるこのころであるが、そこには豊かなゆとりのある教育が創立以来続けられている。受験という難関が教育活動に影響を与えることが少ないということもあるが、やはり私立の建学の伝統があるのである。

常に動く人的組織からなる公立学校の良さより、よくない面が今日、如実にあらわれていないか。根づく効果より、固定化を嫌悪するという機会均等という旗印が巾をきかせすぎてはいないだろうか。職人根性の喪失も大きい。科学的という言葉でこの良さを打消してもいる。

これらの学園からは、えらいといわれる政治家は生れていない。しかし立派な実務を動かしている法律研究者、人々に心の糧を与えている文学者、芸術家は極めて多い。またよりよい庶民生活を創造したり、実践する人々もここから多く輩出している。奉仕の精神の強く生きている人もまた多い。

ペンが歴史を離れたところえ走ってしまった。しかしすべてが、何かに——世俗な——つかれて、遅れまいとしている世相は、はてさてどうしたものか。もっとじっくりと失ってはならない、永遠なものを、純粋なものを見失わぬようにしたいと思うこと切であるが、さてどうしたらよいのか。

横田史談会から

7・28(土)　考古学入門講座

東森市良先生の「出雲・吉備の接点としての奥出雲」の話は、考古学をより私どもの身近に置いてくれた。関心はより深まった。本誌にもこうした読物を掲載願いたいと考えている。

7・29(日)　前日に続いて12名が、吉備と出雲を結ぶ道の一つ、多里・横田間24キロ（六里）の道をあるく**史蹟めぐり**をした。多里の坪倉、武内の両氏が山根氏の配慮で後日、資料も提供頂いて、熱心に案内説明して下さった。常福寺住職佐藤氏にも、十分に便宜を与えて頂いた。あちこちで横田は多里の隣村であることを確認し、楽しい一日であった。帰りは、谷の清水にものどをうるほし、沿道の伝承も語りあって疲れを感じなかった。龍の駒の北村氏宅で出された渋茶はことのほかうまく、拝見した縄文土器も美しい模様がえがかれたものであった。

8・4(土)
9・1(土)　古文書を読む集い

8・26(日)　史蹟めぐり　津山市との交渉も成立した。くわしくは案内状で。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 53 号
9 月 号
昭和 54. 9. 1
奥出雲文化協会

三沢氏の祖先は
在来の偽系図の作者は
木曽義仲ではない（下）

毛利氏に従ってから

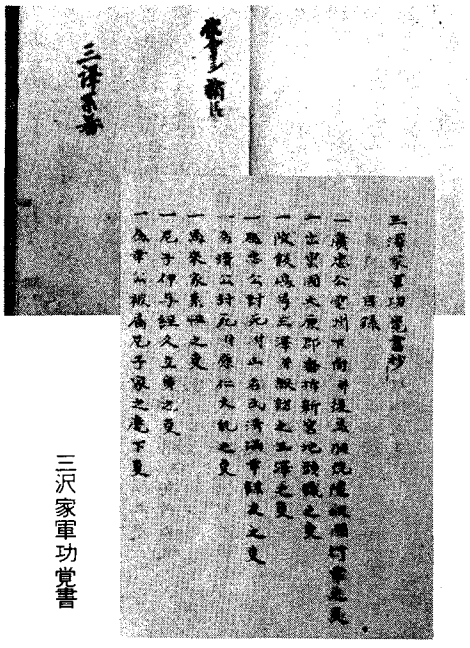
1589（天正17）年、三沢氏は郡内の馬来氏、出雲国内の三刀屋・佐世・宍道氏などとともに安芸国へ移った。今までこの地の伝えでは、その後三沢為虎は行方知れずとか、三百石を給せられる冷遇をうけたとされていた。

研究によれば、尼子氏の家臣団編成のまずさに比べて、毛利氏ではその編成と強化は着々と進展し、譜代および外様の家臣団は強固に組織され、国衆（三沢氏など各地地侍）の統制に苦慮する状態であった。それも1600年の関ケ原合戦後、防長二国に移封されてからは、解決されていった。毛利藩にある「八箇国御時代分限帳」によって編成をみると、2115人の家臣の中で一万石以上を知行する者が12人いる。小早川隆景を筆頭に吉川広家などで、12位に三沢摂津守為虎があるから、極めて厚遇されている。重臣級である。

三沢氏	長門	一〇、〇〇〇石	
三刀屋氏	長門	一、八〇〇	
佐世氏	周防	一、三九二	
宍道氏	長門	六、一七五	
尼子義久	石見	一、一三〇	
備后宮氏	石見	一、〇三二	
仝 山内氏	備後	六、七四七	

三沢氏は出雲地方に隠然たる勢力をもっていたために充分に掌握できず、厚遇されたと考察されている。そして本領地（仁多郡地方）を収公されて長門国厚狭郡に強制移動させられ、その在地性を否定され権力を加えられたのである。その後、毛利秀元が分家して支藩長府藩主となったとき、三沢氏はその二番家老として随従した。藩主の屋敷の前に大きい居宅を構え、明治維新までその職をついだ。

正しい系図の発見



三沢家軍功覚書

この家老三沢家が当地に在住した三沢氏の直系で、当家に「系図」「家譜」「軍功覚書」（写真）など多数の古文書があって、くわしいことがわかる。

この家から分れて近江に移った三沢氏から、さらに次の三家が分れている。

仙台藩　岩手県前沢町三沢氏
鳥取藩　鳥取市　三沢氏
久留米藩　福岡市　三沢氏

これらの諸家にも系図があるが、ほとんど同じものである。さらに、馬木領主であった馬来氏の末孫の諸氏（門司・名古屋・函館）の系図に書かれている三沢氏もほぼ同様のものである。

もうこゝまで書くと在来この地に流布して三沢氏系図とされていたものは、偽系図であることが明らかであるが、推理めいた面白さもあるので、偽系図がつくられたことを考証してみたい。

在来の系図即偽系図一らん表

旧島根県史・仁多郡誌・新修島根県史に掲載のものは、次のもののどれかである。横田町誌にのせたものは筆者が若干考証修正したものである。

A群
イ 三沢代々系図（大馬木　安部氏蔵）
ロ 三沢系譜（三成　石原氏蔵）
ハ 三沢氏系譜
ニ 三沢代々系図
ホ 三沢氏系図　（樋口杠氏蔵）

B群
ヘ 三沢氏系図（下阿井長谷川改安部氏蔵）
ト 三沢氏系図（横田　普賢寺蔵）
チ 三沢殿由来記（温泉稲村氏蔵）
リ 出雲仁多郡三沢殿系図写し（三沢　白根氏蔵）

C群
ヌ 三沢氏系図（雨川　糸原氏蔵　古代よりの聴書に）

D群
ル 三沢家系図　吉田家系譜の中のもの（広瀬　山中氏蔵）

E群
ヲ 三沢系図（布部　家島氏蔵）
ワ 三沢氏位牌（右の家島氏より明和三年（1766）普賢寺へ寄進のもの）

F群
カ 三沢家系譜（大谷　糸原氏蔵）
ヨ 三沢氏系図（善徳寺蔵　文久二年作製）
三沢分限帳（樋口　杠氏蔵）

これの写しが、仁多郡誌・善徳寺・三成・石原氏・三沢村誌にある。

（以下原本とは、あとの考証で明らかにする以上あげた諸系図の元になった系図を指す）

A群・B群はともに原本は同じであるが、A群はその順に、B群はその順に写本系列として流布したもの。

C群は、A群の原本に、岩屋寺の古文書・馬来氏の古文書などを加えて書いたもの。

D群は同類である。それぞれ原本より写したもののようであるが、誤写が多い。

E群は、諸書を参考にして書き加えが多い。

ほかに、系統の明らかでないG群がある。

ヲ総光寺文書の三沢氏系図は戒名のみであるが、正系図に近いものが多い。

レ晋叟寺の古文書に「一説」とある三沢系図には、「タ」と同じく、正系図と同じものが若干含まれている。

以上掲げた系図は、全く同じいものはない。人名や戒名に少しずつずれがあったり、欠落・重複・逆転があり、また別な人が挿入されたりしている。写し誤りもある。後世の伝承が挿入されたものもある。他家の系図を容易に写すことができなかった時代の様子がよくあらわれている。

A群とB群において、それぞれの転写の系列を考察し、ついでC群について考察する。

A群考察

原本を写したのが(イ)大馬木安部氏蔵のものである。元禄13年（1700）に写したもので、最後に岩屋寺文書「宗程願文」が誌してある。これをもとに、(ハ)樋口・杠氏蔵のものが写されている。(ロ)三成・石原氏蔵のものは、これを、ずっと後世の元治元年（1864）に写したものである。

大馬木の山根・安部氏は、元禄時代に稲田の土豪・土居安部氏より分家した家である。日蓮宗一色の大馬木・小馬木の大馬木へ（しかもそこは大馬木一の土豪であった山本・杠氏の地盤であった）進出して、大馬木反保の大馬木川流域の耕地造成にあたった。さらに小馬木八幡宮が小馬木・大馬木の氏神であったところへ、原口天満宮（稲田・原口・蔵屋の氏神）の分霊を独力で勧請し、また本家土居・安部氏の寺である横田の浄土宗安楽寺の支院も、日連宗一色のところへ設けた実力者であった。

樋口の表・杠氏は、大馬木の山本・杠氏との縁組によって小池姓から改姓した（51号参照）、郡内最古の土豪であった。

（表・杠氏は源頼朝時代に横田庄荘官として、土居・安部氏は13世紀半ば仙洞御料所横田庄代官として当地に下ったもの）

三成の上神畑・石原氏は、三成町の石原氏の分家である。その本家は雨川の鍛冶屋石原氏で、その祖は明徳の乱の10年前に、横田庄を横領した出雲守護山名満幸の代官として、庄内八川に下った武士で、その後雨川に帰農した土豪であった。両杠氏・安部氏とも縁組をしている。

B群考察

(ヘ)下阿井・長谷川氏蔵（のち安部と改姓）は、下阿井の土豪であったが稲田の土居・安部氏より養子を入れて安部と改姓。この時原本（貞享四1687に書いた）を写して持参した。写したのは元禄元年（1688）である。この時系図の最後へ「十阿弥十勇士」のことを書きそえている。

(ト)晋叟寺所蔵は、原本を享保四年（1719）に写したもの。

(チ)稲村氏蔵は宝暦14年（1764）に、(リ)白根氏蔵は文化元年（1804）に、それぞれ(ヘ)より写したものである。稲村・白根両氏はともに、安部氏一門との縁組がそのころ行われている。

C群考察

(ヌ)絲原氏蔵のものは、元禄初年以後に原本から写したものであるが、元禄13年以降と思われる。これは「絲原家古代よりの聴書」の中にある。この中には貞享四年に書いた「岩屋寺」や、「馬来氏」に関するものも写しとってある。絲原氏は徳川初期末より台頭した鉄師豪族であり、下郡を勤め、その後も下郡格として重きをなしたから、自家記録のほかに、郡内の各土豪や、神社・寺院の記録などのめぼしいものを写しとっている。聴書は上巻・下巻とにまとめてある。

原本の推定

A群・B群の系図はいずれも原本は同じで、A群は大馬木の山根・安部氏が、稲田の土居・安部氏より分家する時に写して持参したものから、B群は下阿井の長谷川氏へ、土居・安部氏から養子に入る時に写して持参したものから転写されている。いずれも時は元禄初年である。

その原本は貞享四年に書かれたことは明らかである。

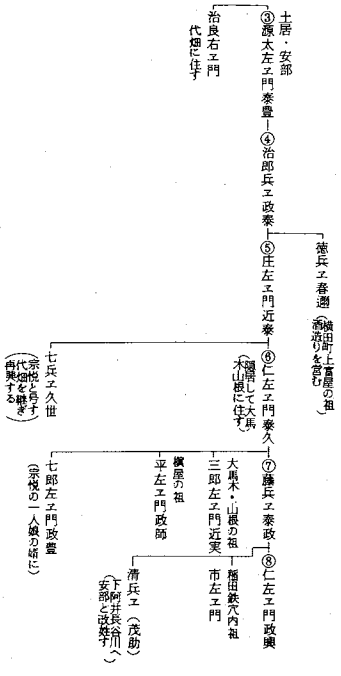
また「聴書」の中の、岩屋寺や馬来氏についてのことも、貞享四年に書かれたものの写しであることが明らかである。

土居・安部氏は三沢氏の後期にはその家臣となり、高松城の水攻め、毛利氏の尼子追討の戦（布部山方面）にも従っており、のち朝鮮出兵にも加っている。もとは仙洞御料所代官であって、京都の院の非蔵人であった。

その後戦乱の余波をうける横田庄の治安を維持するため、三沢氏が地頭請所としてその任にあたり、徴税にもあたり、安部氏は帰農したが、のちふたたび武士として尼子氏に仕官し、ついで三沢氏に属した。

学者で医師・宗悦の存在

宗悦は七兵ヱといい、久世と称す。



土居安部氏系図（抄）

寛永二 1625　五代近泰の子として生れる。のち安部氏の元屋敷に代畑家を再興する。郡役人をつとめ、医道の名人でもあった。

寛文二 1666 (42才)　法躰（出家）して宗悦と号す。

元和三 1683 (59才)　古記録を整理し家譜をまとめる。

貞享元 1684 (60才)　の時の記録あり。

元禄元 1688 (64才)　の時の記録あり。

仝一五 1702 (70才)　長州萩藩士でかつての馬木領主馬来氏の末孫が、四月七日この地を訪ねる。宗悦はこれを案内し、つぶさに馬来氏のことを話し、くわしい書附も渡す。

正徳三 1713 (88才)　死亡。

宗悦は、出家してからは学問に専念した。このことは安部氏の家譜に誌されているが、「杠日記」「絲原家古代よりの聴書」にも、それをうかがわせる記述がある。

安部家々譜は宗悦の時代までを書いており、そのためにはその家格から容易に岩屋寺・総光寺等の記録もみることができたと思われる。これらをもとに家譜のほか諸記録を一応まとめ得たのが、貞享四年であるとみてよいと思う。六十三才の時である。

その時、A群・B群の系図の原本となった、三沢氏系図を書いたと推定するのである。

戦国時代の余韻の残っている時代であり、庶民の中にもまだ三沢氏を追慕する情も濃厚であり、それらも加えて、岩屋寺・総光寺の記録を手がかりに三沢氏の系図を編んだであろうと思われる。原本の末尾に「宗程願文」が記してあるのは、学者としての宗悦が、三沢氏の出身地・世代数の根拠とした資料としたからであろうと思われる。

その祖については、安部氏の祖が信濃源氏小笠原氏であること、樋口の表・杠氏が多田源氏の末流であることから、信濃に住んだ源氏で、多田源氏の流れそして源頼朝の従弟・木曽義仲に求めたのであろう。初代については岩屋寺文書の「定意」と総光寺文書　為長（定意）からこれをもってあて、為仲として義仲の子としたのであろう。そこで義仲と為仲の間に百年余の時代差が生ずることになった。当時としては、これ以上を望むことは無理であった。

岩屋寺文書の為清十三代から逆算して各世代の人物を古記録や棟札等からひろいあげたであろう。そこで、各村の代官となっていた三沢氏の庶子や庶家の人物が入りこむことになった。そのためか七代までは、書き写される度にいろいろに書き変えられている。（この間は系図といっても名前と戒名のみ）

藤ケ瀬城主となった八代遠江守為忠からは、横田中心の記述で、事蹟も書かれている。岩屋寺の古記録や、この地の伝承が豊富であったからである。

こうして宗悦は、安部家にとってもゆかり深い三沢氏の、三百余年の功績を綴ることが出来て満足したであろう。こうして原本が生れたのである。これが先にのべた如く、門外不出とされていたが秘かに書きうつされて、土居・安部氏の縁者の家に持出され、下って後世さらに縁者の家に写し移っていったものであると推定できるのである。

原本は安部家々譜などとともに、明治二十八年の失火による当家の焼失によって失われてしまった。今日の家譜は、幸に分家の代畑や上土居に写されたものがあったので、それを写したものである。

今までの三沢氏の系図は二九〇年の間この地で伝えられて生きて来たが、今日その使命は終った。

発見された正しい系図によって、この地の諸記録は生きをふきかえして来た。さらに地方の関係諸氏の記録や、中央諸家の記録の中にも、三沢氏に関するものが、ボツボツ発見されている。

この稿の（上）にのべたように、三沢氏の出雲における歴史をこの上に立って見なおして完成したいと念願している。

岩屋寺物語④

第二次再興に力のあった 傑僧快円④

—再建の記録から③—

1528 大永八年・九・二六
快円「大永の古記録」を誌す。

1531 享録四年　正・一七
鎮守権現の鳥居を新建立するとともに、来福寺の弁才天の鳥居も新建立した。

七月四日になると尼子伊予守経久は藤ケ瀬城を攻略するため来襲し、陣場を角村に置いた。（今日、陣場の地名がある。これを「ぎば」と呼んでいる）

岩屋寺も籠城したが、暴風雨をついての裏山からの夜襲によって城がおち、三沢為国と弟帯刀（為隆）、為国の子次郎法子丸は捕えられて富田に送られ、塩谷に幽閉され、天文五年に斬られた。

しばらく城は無住となり、三沢氏の代官・石原伊賀守義扶らが横田へ入って来た。

1535 天文四年
備後古屋原の陣へ、三沢為幸は尼子氏に属して出張った。こうして、この地の情勢が変るとともに落着いたので、快円は岩屋寺の再建に意欲的に動いた。

二王堂勧進に応じたのは、

上江兵庫助	13貫文
尼子民部少輔詮久	10貫文
立原備中守	500文
仝　息宗次郎	仝
中井助右ヱ門	仝
少輔の御局	仝
馬来出羽守	2貫文
仝　息宗三郎	
亀井宗四郎	米10俵
疋田左ヱ門丞	300文

六月に、久比須与一兵ヱが材木を伐り出し、作事奉行として教蔵坊秀続と院主快円があたり、天文五年に完成した。

溝尻清兵ヱの　10貫文の寄進によって、本堂の仏壇が完成した。材は三所の居去大明神（現居去神社）の森からとりよせた。奉行は二王堂と同じ二僧であった。

他方六月、十王堂が鎮守拝殿に建立された。これには明円という66才になる盲僧があたり、大菅から木をとりよせた。この時の人夫は、成田和泉守と石原伊賀守から出された。

七月十日には、高田寺に清尊が入院した。備中のなかつゐさい田の人で、快円が三沢為幸と話し合って入れたもので、これより、岩屋寺が高田寺もその支配に置くようになった。

天文五年
二王堂が完成したが、為国・法子丸ば斬られた。

1538 天文七年
大師堂が建立された。材木は上湯野・中湯野の山からとりよせられ、奉行は教蔵坊秀続であった。（この時岩本坊には快春がいたが、これは当庄の松崎の子であった）

この大師堂に安置された弘法大師僧は、高野山の大塔阿本上人の作で、寄進は石原伊賀守義扶とその女（50才）で、息源三郎の成長の願いをこめたものであった。それより今日まで、岩屋寺の弘法さんは、子授りの信仰の対象として、近国の春の大祭として続いた。

史談会史蹟めぐり（15回）

美作の津山

人間と環境Ⅱ

8月26日（夏には珍らしい涼しさ）、マイクロバス片道三時間で滞在五時間の充実した見学ができた。

根雨からの出雲街道は中世もであったが、特に近世・近代は陰陽の重要連絡路。今また181号線として落合で中国縦貫道につながって、京阪神への重要道路。

難所四十曲峠は今はトンネルで十分たらず。この道は松江藩主の参勤交代の道。また庶民の上方への道、奥出雲にとってもゆかり深い道であった。新庄町の昔の面影残す町並の中ほどに「出雲藩侯本陣跡」がある。この地方に残る無形文化財「出雲踊」は出雲から伝えられたものという。沿道には出雲に因んだ昔の名残りが多いし、今日的な設備にも同じ名前のものが多い。

院の庄の作楽神社は、中世の土豪屋敷の広大な跡に建てられている。この門前近くに、ひょろ長い相対いする大松が二本ある。わが国の歌舞伎の租といわれる「出雲阿国」を恋するこの地の武士二人が相争い、両成敗となった。あとへ植えられた松の木は今なお競って成長しているという。この阿国のように出雲の美しいみこが、出雲街道に沿って数多く住みついたのが、美作美女のもとであるという。

津山藩主松平氏は、松江藩主松平直政の長兄の曽孫であった。

両藩の関係は殊のほか深かった。そうして文化の交流が。

徳川初期から津山藩御用商人森本家は現代にまで形を変えて津山に影響を与えている。森本家の姿は、博物館に納められた家具・古文書に十分にあらわれている。一家のすべてが陳列されているのも珍らしい。この森本家はキリスト教に入信し、その財力で図書館や私立学校（今日の図書館高校）を創設し、最近博物館も設立して津山の文化に貢献している。これと、幕末の蘭学者箕作旧宅や洋学資料館にみる開明的伝統が、津山に多くの学校を育てた。私学の作陽高校・仝音大・美作女子大・仝短大・仝高校のほか、県立高校（普・商・工）、国立工高専など多い。

津山のキリスト教は、横田にキリスト教が布教されて、定着する上に大きい役割を果たした人の入信の動機づけをしているのである。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

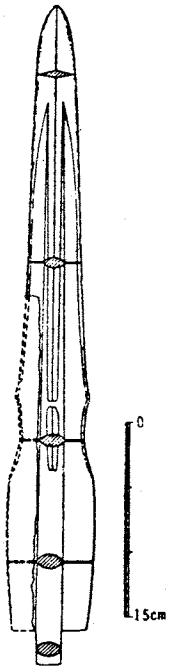
横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第54号
10月号
昭和54.10.6
奥出雲文化協会

出雲と吉備
―その接点としての奥出雲―

東森市良

横田八幡宮に伝世されているものに、一本の銅剣がある。これは、社伝によると中世、境内地から掘り出され奉納されたものであるという。記録が定かでないのでいまさら確めようもないが、おそらく横田盆地内のいずれかから出土したものが伝世されて、今日に至ったものと思われる。この銅剣は刃の部分が片側を半分以上失っており、細かい刃こぼれもみられるが、茎から切先まで保存が良く、黒味がかった濃緑色を呈し、光沢があって銅の質の良さをしめしている。全長五〇・九センチあり、身が長く刃が両側とも扁平で一センチあまりの板状をなしている。

この種の銅剣は中広形と呼ばれ、その分布の中心は中四国地方とくに東部瀬戸内地方にある。



横田八幡宮所蔵の銅剣

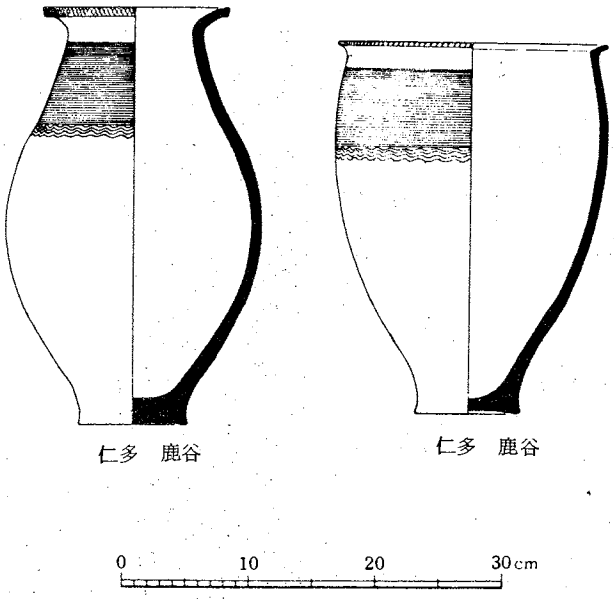
中でも兵庫県田能遺跡ではこの銅剣の鋳型が発見されており分布との関係で注目される。銅剣は形の上からいうと細形、中細形、中広形と移っていくが、中広形の銅剣は弥生時代中期も後半に作られたものとされている。

出雲でのこのような弥生時代の青銅祭器の分布をみると、八束郡鹿島町志谷奥遺跡で、昭和四八年一〇月に銅鐸二口と銅剣六本が偶然の機会に発見された。これは土地の所有者の安達茂幸氏が自宅から山頂に近い豚舎への道を開いた折巨石が出たが、その下に植えられていた柿の木の施肥のため山はだを二～三〇センチ掘ったところ、次々に出て来たものということである。銅鐸は大小二個あり大きな方は外縁付鈕Ⅰ式四区袈裟襷文と呼ばれるもので大きさは三二・三センチある。小さな方は大きさが二二センチあまりあったものと思われるが、やはり袈裟襷文で釣り手に当る鈕は大きい方より新らしい扁平鈕式に入る。袈裟襷というのは僧侶のつける袈裟に似た文様を縦横に入れるもので、四区というのはこの帯によって銅鐸の身が四つに区画されているものをいう。銅剣六本はいずれも横田八幡宮のものと同じ中広形に属し、大きさは五四～四九・三センチあるが、質は余り良くなく、とうてい実用に供されたものとは思われない。この他には松江市平浜八幡宮に所蔵されている銅剣があるが、これは以上の例より古い細形に属し、おそらく北九州を通じての輸入品であったと思われる。この銅剣は現在の長さが二六・五センチあるが、復元すれば二七センチぐらいになる。全体にするどく、十分実用にたえ得るものである。これとは別に青銅祭器では、出雲大社の東方二〇〇メートルばかりのところにある命主神社で江戸時代（寛文五年＝一六六五年）に大量の石を切り出した際に四回にわたって出土したものがあり、そのうちの銅戈一本とひすいの勾玉が国の重要文化財として保存されている。この銅戈は出来上りが良く完全な形で保存されているが全長三一・二センチあり、よくとぎあげられている。これも鋳型の見つかっている北九州で見られるものと共通しているが埋納の仕方が異っており、九州では多く埋葬にともなう副葬品として見つかっているが、この場合は、巨石の下に祭祀品として埋納されている点で九州的なあり方と異っている。この他に畿内に分布の中心を持つ銅鐸は志谷奥以外に木幡家銅鐸、伝熊野、伝木次鐸がある。中でも注目されるのが木幡家銅鐸で、原始絵画を有するものとして珍らしく鈕は失われているが総高二六・五センチあり、外縁は鈕Ⅰ式で古いタイプに属する。この種の銅鐸は全国で四例しかなくそれがいずれも中国地方出土である点で興味をひかれる。

このように出雲においては西からの青銅祭器と東―それは主として山ごえルートによると思われる―からの青銅祭器が存在し、志谷奥のように多数埋納の例もみられる。そして隠岐、海士町竹田例も加えて瀬戸内から入った青銅武器形祭器はすべて中広形銅剣であることも注目されるのである。

次に奥出雲で注目されるものに仁多町亀嵩鹿谷出土という弥生式土器の壷と甕のセットがある。これは現在東京国立博物館

に所蔵されているが、さきの横田八幡宮の銅剣と異なって弥生時代中期もごく初頭の土器である。この土器が注目されるのはセットとして完形をたもっているということだけでなく、文様のつけ方が、前期後半のヘラ描き沈線が多条化して櫛描きに変った時期の土器であるということである。前期の土器はヘラ描きによってかざるが、広島県中山貝塚の場合はきわめて多条の沈線をめぐらすようになり、これと櫛による施文が混在し、中期の前半、中葉、後半を通じて多分に櫛描文でかざられた土器が出現する。亀嵩鹿谷の土器はこの期の産であると同時にこの櫛描手法が瀬戸内を通じて入って来たことと関連して山ごえルートの問題がまたここでも出て来るのである。

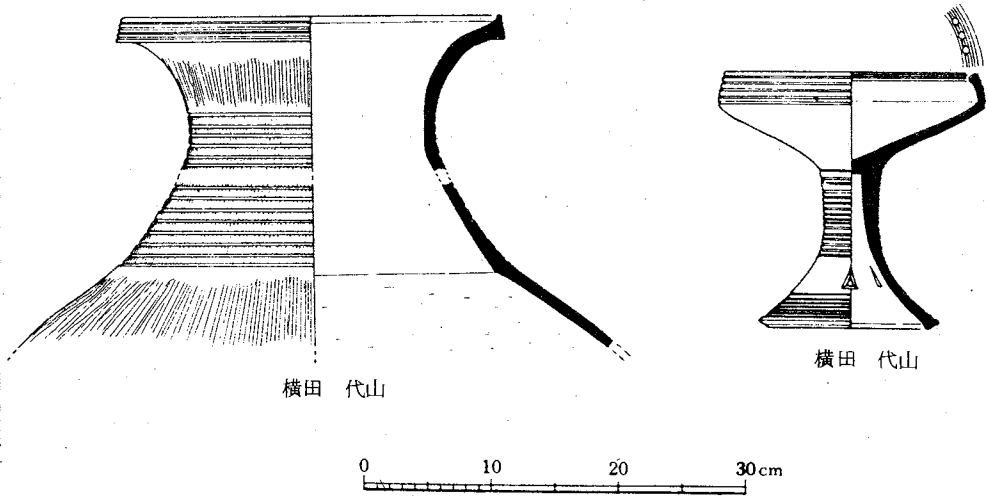


期には櫛描きのみとなる。中期は櫛描き文でにぎやかに飾られる時期である。これは瀬戸内で盛行し、東、中、西部を通じて弥生式土器の中では最も派手な土器の出現する時期である。山陰もその例外ではなく弥生時代中

そして出雲海岸部での展開もまたこの時期において始まり、八束郡東出雲町磯近や、松江市平角町天平でも良好な資料が得られており、さらに遠く隠岐にもこれが及び西郷町月無にもこの時期の土器の良品がみられる。この時期の土器は前期のものと異なり全体に胴長で壷においては口縁が余り発達しない傾向がある。それが各遺跡において共通している点であるが、鹿谷の場合それほど大きな低地の無いことでも注目されるのである。

ところで横田町の代山遺跡出土の土器というものがこれも早くから完形品として注目されて来た。この土器は中期末のものと考えられるが、壷の口縁から肩部までのものと、良好な高杯のセットである。このような土器は山陽ではあまり見られず、むしろ凹線文を用いた手法やその器形は出雲や石見の海岸部に類品が多い。出雲的な土器といっても良いものなのである。その例品は松江市石台の完形品をはじめとして、出雲市知井宮多聞院、同矢野、邇摩郡仁万町坂灘などにみることが出来る。同じ器種とはいえないが、横田高校グランドの土器の一部にもこの時期の土器をみることが出来る。そのような点でこの時期になると出雲海岸部との交渉が多様化した点が着目されるのである。

さて時期は更に降って古墳時代初頭になると本年杉原清一氏によって調査された日焼田遺跡



がある。これは集落跡のうちかろうじて残された二棟の竪穴住居から床面に接して多量の一括遺物が検出されて注意された。このうち一号住居跡は半分ばかりしか調査されなかったが、土器が集中的に出土した個所があって、それは西側壁にそったテラス状の構造の上に位置している。これらの土器は壷、甕、器台のセットから成り、中でも甕は数十個体が検出されている。これらの土器に共通して云えることは、住居跡の土器としては松江市平所第一号住居跡のものに近く、いわゆる鍵尾Ⅰ＝的場式土器であるということであろう。

従来は墳墓のみで確認されていた土器が、このように住居跡でしかもまとまって検出されたところに意義があろう。また第2号住居跡は完形を保つ隅丸方形の住居跡であったが、この住居で面白いのは一度火災にあったのち、しばらくして同じ床面に貼り床をして、再度住居として使用していることである。それは第一次の床面から多量の炭化した木材片が検出され、そしてその上に粘土をしきつめて第二次床面があったことからわかる。土器の量は余り多くなかったが、二対四つの把手をつけたこしきが口縁部を下にして二次床面にうめ込まれ胴部からカットして器台様の用途に使用されていたことが特に注意される。このこしきは、本来は「ごはんむし」として使用されるものであるが、それが器台として用いられているのである。そして、それも破損したものが転用されたわけでなく、その破片が周囲から出土して完全に復元出来たことも興味をそそるところである。この手のこしきは追谷遺跡からも検出されており、海岸部では米子市福市、青木両遺跡にもあって特に青木遺跡出土のものによく似ている。時期はやはり鍵尾Ⅰ～Ⅱ式期に当ると考えてよかろう。この遺跡の時期になると山陽からの山ごえルート色よりも、もっぱら出雲海岸部との交渉が問題となるようになる。

そこで改めて古墳時代への移行という点から遺物と遺跡を考えてみると弥生時代中期には、いわゆる山陽との交渉を物語る遺物群が多かったが後期に入ると少なくなり、古墳時代初頭においてはその色彩をとどめるものが殆んどといってない。そして山間部の中でも飯石郡三刀屋町松本一号墳や大原郡加茂町神原神社古墳のような古式古墳が出現する中で、横田盆地内にはそのような古墳はみられず、またこの前後弥生後期以降出雲海岸部では吉備の上東式タイプの土器ー器台を中心としてーがあるのに、ここでは全く見られないことも問題の一つであろう。

そこで結論を急ぐと出雲と吉備を結ぶ接点としての奥出雲が弥生中期には点々とその影をとどめているのに対して、後期以降はたゞ単に通路としてだけの役割しか持たなかったのかということが問題となろう。

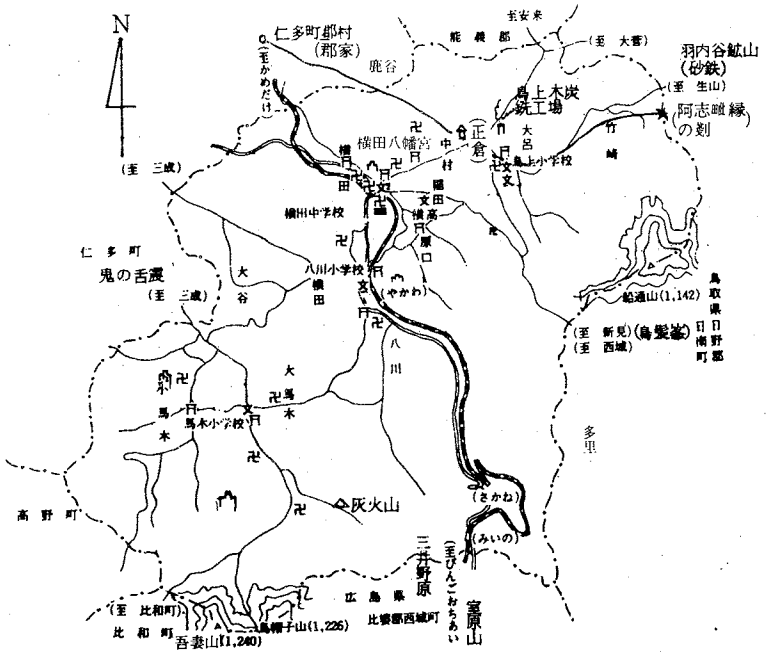
先日地元の同好の方々と鳥取県の日南町多里からの道を歩いたが、これは一つの山ごえルートであるとの確信をいだくにいたった。とすればルートは分化するとしても斐伊川を降り、また広瀬町へぬけて出雲中央部へ出る道はやはりここ横田をぬきにしては考えられないのである。さきほどの時期による遺跡の存在の有無はそれぞれの時期の社会的背景によるものとしてとらえるべきであろうか。今後の検討課題の一つであろう。

筆者　県立横田高等学校教諭
日本考古学協会員
学生社刊「出雲の国」
著者

この文は七月二十九日横田史談会主催の考古学講座の内容の主要部分をまとめて頂いたものである。

「鍵尾式」などの用語の解説など今後いろいろと執筆を願うつもりである。

横田町全図 —附 出雲風土記の地名—



(遊記の剣)

「ミニミニミニ東京」指向から
地域の伝統を育てる方向へ

地域研究集談会

備北大会から

人間と環境 Ⅲ

宮沢広島県知事は

「画一と集中」の時代から、「多様と分散」の行動と思考の転換によって、個性ある地域社会を地域住民の自己主張と創造によって築く時代へ入っている。

私はすでに備北地域（三次・庄原両市他十三町村）に、そうした移譲を議会の承認を経て実行しつゝあると、討論会の冒頭にくわしくのべた。

生末津山市長は

津山市は歴史と風土に生きた人々が、つくりあげた特色ある街である。それをさらに充実するためには、より津山市独得の文化性を高める方向を基としていると。

樺山東京大学助教授は

西欧の歴史と風土に育った宗教、文化、生活をすべてよしとして、そのままとり入れすぎたところに、日本の今日の問題の原因がある。国内的には地方が中央（主に東京）の、受け皿化してしまったところに、地方・地域のひずみが生じた。地域がその地から再生をはからねばと。

平川三次市長は

備北地方は動き出した。この大会を契期に前進をはからねばと。そして

地域づくりに邁進した一青年の

発表を糸口として、各地の実践がのべられ、地域再生への討議が行われた。

封建時代から農業・農村・農民は国力の源泉であったが、つねに手段にのみ利用され、今日はその力が枯渇に向っている。減反によって日本の工業は生きのこった。山資源もそして水資源も暗い見通しである。すべて都市にすいあげられているという発言もあった。連帯意識はうすれ、農村はバラバラにもなってしまい、覆水盆にかえらぬようにもなっている。新しく伝統を復活し創造せねばならない。それを実現している、全国的に著名な一木村営農集団をたずねた。また兼業による農工両全の三良坂町へも。こゝでは計画は実現し、出稼ぎがへり豊かになったが、医療費はうなぎのぼりに多くなり、子どもの非行も急増した。豊かさとは何であったか、暮らしの中身の見直しをせまられ、農外収入が低下しても、家庭の地域の再建を考えねばならぬところへ来ていると町長はのべていた。

高令者生産活動センターのある

高宮村や作木村、羽須美村の青年の地域づくりも稔りつゝあった。この地域の振興の基本である地域社会の教育の創造のため歴史と現状の中に模索がはじまり、学芸産業大学設立（ミニ東大、広大でない）についての討議も行われた。

参加者は沖縄から青森まで各地の行政、農協、商工会、青年組織の指導者、実践家。朝日をはじめとする各新聞社、神戸、山陽新聞、特に中国新聞、中国放送は多くの記者を送って取材にあたっていた。農・経・商工の雑誌社、工場経営者、勿論諸学者と多彩であった。島根も県や大学の人、実践家も加わっていて、討議や懇談を通じて感じたことは、地域の自発への期待を抱いている人々ばかりであるのに驚いた。

大会は、東京、京都、熊本、青森、松本に続いてのもの。

「地域の住民の自発性と実行力によって、地域の自然と歴史の個性を生かしきる産業と文化を、内発的につくり上げていくための再認識を集って語る運動である」（玉野井東大名誉教授）

「地域づくりを自発性に求め、そのもととして風土を育てた歴史にも注目する。生活と文化を大切にする」（河野京都大学教授）

「ミニミニ東京」。そして何でもやって、「何でも中途半端」な生活や文化活動方向は、孤独をまぎらわすもの、欲望と衝動的なカッコヨサを求める姿でしかない。遠い見通しで、じっくりと地道に進み、「地方復権を」と、するどい発言もあった。

考えさせられる会合や見学であった。こういう場合には郷土の地域の歴史に関心をもつものは、その立場で地域の生産や生活・文化の歴史を掘り下げて参考に供する必要があることを痛感した。今のうちに体験話の聞き書をしておくことも大切であることも知らされた。

私どもの力でできることは、有志の方の力を得て実現したいと思うが、次のものは多くの方の力でなんとか実現してほしいと声を大きくしたい。

- ○郷土を育てた人々を、まず本町を愛護する有志の人によって、再認識したい。
- ○作陶家の後援も微力ながら続けたが、作刀家にも声援をおくりたい。
- ○横田の自然を再認識して、愛護することを。

地質、鉱物、動物（特に昆虫、魚類）植物（草木、こけを中心に）の種類と分布、その生態や変化など、今のうちにまとめておかないとわからなくなる。愛情をもった記述による若い人向きの本を。

- ○この地域を生かした、歌と踊りの再生創作。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第55号
11月文化活動特集号
昭和54. 11. 3
奥出雲文化協会

現在への五〇年史Ⅰ　横田の音楽　偉大なるかな比婆科学

現在への五〇年史Ⅰ

横田の音楽

Ⅰ歴史的風土論②Ⅰ

前向きに仕事をし、新らしいものをつくり出していると思っていても、ふりかえってみると、やはりこれまでの実績の上に積上げているにすぎないものである。しばらく幾つかの文化活動の五〇年をかえりみ、現在を考え将来の課題をみつけ出したいと思う。そこに一つの地域づくりの大切なものがある。

この度は「音楽」、次には「華道」をとりあげたい。そして「歴史的風土論①」で明らかにした。幕末から昭和初期までの横田における教育尊重の風土を育成した「教育者群像」をえがき出すことにしたい。本号では南の山の向う備後の「比婆科学」を紹介し、これを範として、横田に健在である植物学者を中心に、今のうちに芽生えをつくり出す糸口としたい。先進地に学びたい。

「島根県横田町誌」は「郷土横田」再認識の貴重な一里塚であった。これを書棚に置くだけでなく、町づくりの核としなければならない。横田町農協史も発刊が近いと聞く、「雲州算盤史」「たたら史」とともに、横田には一応揃ったことになる。

この一編は偶然のことから県外のさる地方紙の編集者の求めにより書き送ったものの中から、理屈めいた部分をのぞいたものである。

揺籃期（ようらん）　昭和初期～敗戦まで

当時はどこも同じで、小学校の唱歌の時間は聴唱法（きき憶えて歌う）で面白くないもので声のよい二～三人が楽しむ位であった。ところが横田小学校へ三谷清一という校長が女子師範の附属小学校から来任すると様子が変った。まづ学校行事（四大節の儀式以外）にことあるごとに歌がとり入れられ、音楽会も開かれるようになった。

しかしその努力にも拘らず、

詩一編　宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々（りょう）と暗（やみ）をてらせる
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭（あ）かぬ渠（かれ）ゆえ
いざここに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

教会の音楽には二十年の遅れもあり数歩もゆずっていた。明治の末葉この地に根を固めたキリスト教会では賛美歌が歌われ、そこの幼稚園では当時の新しい幼児の歌が歌われ、さらにそこの裁縫女学校では、やがて混声合唱を試みられるという状況で、山間部はもとより、県内でも珍らしい、地域の音楽風土が育ちはじめ次第に盛上っていた。

昭和十四年横田大市本町の大火でその拠点が失われ、さらに第二次世界大戦の戦局が厳しくなると、外国音楽はもとより、旋律までも敵性音楽として禁止されるに至り、その芽は踏まれ敗戦へと進んだ。だがこの時代この教会等をめぐる音楽的風土で育ったものが、戦後しばらくの間地域音楽の世話や指導の中心となり、芽をふきかえすことになったのである。

開花期　昭和20～33

虚脱状態を脱するためには

敗戦後の虚脱から脱するには、やはり過去の貴重な体験が役立った。かつて教会で育った者が集まって語りあった。そして生れたのが、なぐさめと心の結びつきの歌と、新しい時代を模索するための読書の活動であった。

組合立青年学校が敗戦直後、通年制を主軸として、新らしい農村建設の実践者としての青年を育てようと新発足した。これが、横田の青年団活動の舞台となり、校舎（現大劇プラザ）使用は日曜日と夜は、いつも飽和状態であった。青年学校の教師はその仲間となり、先頭にもなった。高学歴のこの町には復員者の高学歴者が渦をまき、どう生きるかを求めて演劇活動へと燃え上った。合唱活動へ、読書活動へ、演劇創作、新らしい歌の創作へと拡がった。その一つ

文化祭のうた

一、雲百く　山辺はもみじ
稲の穂の　みのり豊かに
さんらんと　日はかがやきて
今日の日ぞ　文化のうたげ

（演劇活動については「島根の演劇」参照）青年団の合唱は男子ではじまり、ついで小学校を会場に一般の混声合唱団も生れ百名に近い人が、酔ったように歌った。そして、教会、学校も加って合同の音楽会が開かれた。県下の地域文化活動の先駆地となり、県の講師派遣で第一回の文化祭がはじまった。踊りや各種文芸活動も戦前の地下茎から芽をふきはじめた。各種討論も花咲りとなった。

音楽活動の発展

数多いグループが横田音楽協会に合同し、音楽会には島根大学（最初は島根師範時代）を毎年招くことになり、現教授の長岡、森山先生には年に二回も来町を願ったこともある。その後竹内夫妻教授を迎えてからは、さらに親密度を加え、年三回の音楽会の開催ともなった。

一方昭和二十二年から新学制となり、横田中学校がNHKの唱歌コンクールに出場するようになり、二十三年度卒業生は、予餞会に「流浪の民」（シューマン作曲）の混声三部合唱にいどむほどであった。ピアノがないので無伴奏。聞けたものではなかったであろうが。その時の体験は高校へと引続き、そこでまた一つの渦をまき起した。この渦の中から幾多の音楽教師が生れ、今日の社会音楽、学校音楽の中心人物となっている。

レコード・コンサート

ピアノ購入資金の一助にと愛唱歌集の出版にも手をそめた。手廻しの蓄音機でレコード、コンサートも始まった。やがて尾方君（横田電器店主）が郡内でははじめてアンプ（拡声装置）の組立に成功して提供し、毎月の来聴者もふえ、百人を超す人々が集って楽しんだ。百回を超えるころ、ラジオ、電蓄の普及によって一応の幕を下した。

文化祭のうた

二、風と陽と　日々をはげみて
まことなる　いのりをささげ
黒土を　われらはふみて
あらたなる　たねをぞまかん

郡内各町村への波及

こうした動きは阿井村に飛火して渦巻きが起った。

憲法発布を記念して、郡内の小、青年学校が集って第一回の音楽会を開催した。東西両会場へ全校が参加して、しかも午前午后同じプログラムで発表を行った。郡音楽教育研究会は、各種研究会で最も早く結成され、島大の先生を中心に講師を招いて、技術や理論の勉強も行った。毎月集ったのであるから、熱心でもあったが、また行事の少ない時代でもあった。子供の情操教育の助けにと、昌子無踊団を招いたり、音楽映画の郡内各学校巡回も世話をし、その利益の一部は郡教育研究会へ寄附するほどであった。こうした気運が各町村にピアノ購入へと踏切らせることになり、それをめぐっての、逸話も多い。こうして十年の開花期を終ることになる。

文化祭のうた

三、光あふる　歴史のまひる
まなざしを　青空になげ
たましいは　いよよひろかに
うたはなん　文化のうたを

横田高等学校

創立と同時に横田中学校から入った生徒が、音楽活動でも中心となった。今はアメリカに住む横山救君が、是非共吹奏楽器を購入したいというので、横田大劇に協力をたのみ、音楽協会が前売券販売をし、その利益のほとんどを寄附して、一つ一つ購入した。映画は洋画が主体で、世界初のカラー映画「石の花」（ソ連）「赤い靴」（英）にはじまって、「シベリヤ物語」「心の旅路」「オルフェ」「情婦マノン」「自転車泥棒」「仔鹿物語」「靴みがき」「イワン電帝」等々　あげればきりがない。

そして五月一日の創立記念運動会に作曲された歌を吹奏して入場し、伴奏で合唱した時は鬼の首でもとったような喜びだった。そのころ第一回の県下高等学校の音楽会が松江で開催され、三十数名の混声合唱が出場した。横田中学で眼を開いた諸君が中心で、ヘンデルの曲、メンデルスゾーンの「うぐいす」、ディーゼルマンの「村の婚礼」をいずれも四部で発表した。唯一つの混声四部合唱（無伴奏）として、万電の拍手を浴びるほど好評であった。その時聴衆の中にいた横田の人々は「とてもきけたものではないであろう」と廊下に出ようと思ったが、恥を覚悟で聞いたら、すばらしくてとたんに胸をはったという逸話ものこした。校内音楽会も開催。

次の年には十人ほどの吹奏楽器合奏も番外として出場した。管弦楽を指向する合奏をめざす松江と浜田高校の中にあって、唯一つの吹奏楽であった。

このころの生徒が島根大学に入学し、三十三年ころから郡内に帰りはじめた。そして第三期の時代に入るのである。大学に進まず地元に残った諸君が合唱団を組織して、第一回の県青年大会に出場し優秀賞をうけたのである。

三十一年横田中学校に小編成の吹奏楽団が一篤志家の寄附で出現した。文化祭の行進曲をまがりなりにもこなし、音楽会にも出場した。来演していた島大オーケストラのさる学生が、これはものになると言ってくれたという生徒は、今中年になって三人の子供の親である。職場でやはり楽器をならしているという。県下の中学校でも珍らしい時代であった。

二十年代の終りの年の冬の或る日、附属小学校の火の気のない音楽室で、竹内教授を囲んで数人が、県音楽教育団体の結成について話合った。やがて現在地に大学が移ると小中高を含めた、島根県音楽教育連盟が結成され、数年後の三十五年から、音楽教育研究大会が開催されることになった。

隆盛期

昭和34から十年間

横田小学校の本格的器楽合奏

でこの期ははじまった。横中の吹奏楽器の火はまた阿井村へ飛火した。ピアノ購入ブームが静まったと思うと、小学校の楽器購入の気運と、小中学校の唱歌

（4頁へ）

偉大なるかな 比婆科学

奥備後の戦後史に輝く

国破れと山河のみ

昭和二十二年八月であるからまだ終戦後の混乱期であり、学校では教師も揃わず第一教科書も新聞紙をたたんだような粗末なもので、実験教具など満足に手に入れることも出来ない時であった。

備後庄原にあった旧制格致中学校の理科教室で少年達が科学班を結成した。国は破れても山河は残った、だからこの郷土の山河に学ぼう、そして吾々だけでなく心ある郷土の大人の協力を得ようと話し合ったのである。これが三十余年の歴史と伝統をもち数々の業績を積み重ねている「比婆科学」の発足であった。その後この会は学校を離れて広く小中学校の教師や巷の同好者の手に移ったが、当初の少年達の申合わせたことは何等変ることなく今日に続けられ、また教師と共に高校生の会員も幾人かあり、更に大学にも続き初期の姿を伝えている。

会誌「比婆科学」

少年達が名づけた会の名前は比婆科学教育振興会であるが、省略して「比婆科学」と呼び、また会誌の名も同じ「比婆科学」である。季刊として本年一一一号を重ねている、創刊号は半紙一枚に生徒の手によるガリ版刷りで、今日僅かに一部のみが残っているが、当時は紙質も悪く判読も困難である、しかし現在の「比婆科学」にとっては貴重な歴史を物語る唯一の記念である。

もともと奥備後比婆郡は広島県の最僻地であり、文化水準も低位にあり、また交通不便な広域の山地を擁するため、当時は殊の外研究集会等をもつことは困難を極めたわけで、それなるが故に会誌が必要であったし、文化的に低位であるが故に相互の共同研修の必要があったわけである。恵まれない環境条件の中に必要の熱意が醸成され実ったものと言えよう。

会員群像

発会当時の少年達は今日四十歳を越えた。大学に進まない人は土地に残り「比婆科学」を我が家のような愛着をもって育てている人達である。また大学に進んだ人は一人残らず研究者の道を選び夫々の分野で学会の中幹として活躍しており、よく郷土の後輩の指導に当っている。特に地質鉱物学では学位を有する者は五名に及び、同年輩同学の専門家が数多く同地域に輩出したことが学会の話題になったことがあるという。大学人では鳥取大赤木、広島大沖村両教授がそれである。その外異色は陸貝（かたつむり）の市岡氏で、高校時代早くも一家を成した人であるが、今日東京女子医大教授の職にある。

そして森林昆虫の中村氏は大学に進まず小学校の代用教師から出発して今日「比婆科学」の重鎮として重きをなし、来春は熊本大学に学位請求論文を提出する予定である。また小型哺乳動物の湯川氏は定時制分校のみの学歴で町職員となり、数年前は京都大学動物学会から特別学会発表を要請された経歴をもつ。

また八十余歳の最年長会員の植物の秋山氏は今も山野に足を運び壮者を凌ぐ活躍をなしている。

焦土に生れる不死鳥

「比婆科学」発足の日、外部から参加した人の中で、当時庄原にあった県出先機関の事務官を勤めていた広瀬氏は三十歳余の若い日であったが、教師ではないに拘らず暇をつくっては生徒達と行動を共にし、特に指導教官が学校を去るに至って後事を託され、又自らも地域の小学校教師に転出して、若い人々の育成に精力的な活動をなしている。特に比婆郡内三ツの高校を「比婆科学」に統合して理想的な地域の研究連帯を組織したことは特筆すべきであるが、その後高校では進学競争が日に増して激化し、教師も生徒も教科外活動に目を向ける余裕などなくなり、今日に至ってはもはや昔の夢にすぎない。前記名前を挙げた人々は受験勉強に悩まされることなくおゝらかに学窓に育った人々である。

「比婆科学」は現在二ケ月に一度定期の集会をもって「比婆科学談話会」と名づけているが、当初は年一回の研究発表会をもっていた、その第一回の開会の挨拶に当り、前記会長広瀬繁登氏は次の言葉を述べている。

アメリカのウイスコンシンもドイツのマルクブランデンブルグも夫々の国では最も僻地であり恵まれない州であるが自然科研究では自国のみならず世界の注目を受けている。恵まれた自然があるからである。

ウイスコンシンもマルクブランデンブルグへの道は余りにも遠い、しかし夢ではない。

その後集会に於ては誰が挨拶をしても右の言葉を述べることが誰言うとなく慣例になり、今日も「比婆科学」の道標であり聖文字として語り継がれている。また、その発足の昭和二十二年に時を同じくして十二歳の少女美空ひばりがデビューしたのであるが、いうならば美空ひばりは「比婆科学」のよきライバルでもあったとか。

不死鳥（フェニックス）は焦土の中に生れるというが、泡沫のように短い歌手の世界で異色の生命を続ける美空ひばりの謎に思い当るし「比婆科学」の来し方も相通ずるものがあるのではあるまいか。貧しさと飢えの中に強靱な生命が育成されたことを広瀬氏は三十年を回顧して熱っぽく語るのであった。

コンクール参加気運が高まって、郡内の小中学校長は、またそのために、四苦八苦する立場に置かれた。こうした時、開花期に育った青年教師が帰って来はじめたからさらに燃え上り、横田高校に音楽専任教師が入って来ると、郡内の音楽教育は隆盛期に入った。生徒数の激増と教師増はそれを支えた。

音楽協会の合唱部も再発足し、山本教授による島根大学オーケストラも毎年迎えて音楽会を開催したが、ステレオの普及、FM、テレビの普及は、音楽、映画の鑑賞会参加人口を減少させ、消費傾向の浸透は、自らつくり出す意欲の喪失へと向った。

小学校の器楽合奏は、阿井、三成、布勢、鳥上、八川、亀嵩へとひろがり、唱歌コンクール参加校も、三成、横田中学から小学校へと波及しはじめた。そして大原で地区予選がはじまった。横田小学校では高橋（故錦織）ほかの教師の熱意で、コンクール父兄会も結成されて参加を続けた。これが郡内の合唱指導の飛躍的進展への楔期となった。吹奏楽も、横田高校、横田中、阿井中、亀嵩中と数をふやし、三成、布勢の中学校にも編成を促した。

こうした気運は家庭のピアノの普及を促し、横田地区の普及率は、木次線沿線では異常なほどの数となった。これは指導者である学校教師の充実と裏腹の関係にあったことはいうまでもない。

島根音楽教育研究・横田大会

こうした状況をよくしっている中島県音楽教育連盟会長は、記念すべき第十回大会を横田で開くべく決心をした。横田を含めて郡としては最も条件の良いときであった。県音連の事務局員二十余名の中の大多数は、最高七回をはじめとして、学生時代に横田に来た者で、横田開催の支持者でもあった。あたかもこの時連年教科別大会開催禁止の断が下されたが、音楽横田開催は唯一つの例外として連年開催が認められて、四十三年十月開催が決定した。中島会長の努力と、馬場教育長の断によったものであった。横田にゆかり深い服部正先生を迎え、郡内の総力を挙げての一大傑作大会となった。当時の堀江横田町長の蔭の力も大きく、郡内各方面の協力の賜でもあった。大会までと引きとめた一、二の音楽教師も転出した。間もなく生徒数児童数の減少、中学校の統合は、この郡音楽教育を支えた基盤に大きい変動をもたらすことになった。

期待期

昭和45年から

生徒数減少の悩み

両町中学校の吹奏楽は統合によって飛躍的に充実し、その基搬の上に立つ横田高校とともに連年吹奏楽コンクールの県大会で優秀賞を得ているが、小学校は器楽教育の普及にもかかわらず、小規模化に伴ない、中学校ほどの飛躍に乏しい。合唱においては沈静状態である。生徒数減少は教員数の縮少にもつながっている。

横田の青年団の合唱部は、県大会で優勝し、全国大会出場を近年毎年続けている。この青年団運動の成功の蔭には、隆盛期に若い音楽教師達によって、小中高を通じて鍛えられた経験をもつ青年団員があるからである。若い時に一度ぶっつけた情熱はことある時に頭をもちあげてくるものである。技術ではない。教師と子供、青年の真剣なふれあいである。しかしそうした経験をもつ若い人のなくなる時期もそう遠くではない。

音楽協会の合唱部の部員のほとんどが、開花期の合唱経験者と、隆盛期の経験者でしめている。地域の音楽的風土の維持には新らしい配慮を行わねばならない時に来ている。

学校教育の影響は大きい。音楽でかくの如くである。他の部門においても当然考えねばならない。テレビ、FMの普及は耳の肥えた国民が充満して来る。新らしい手作りの必要性を痛感する。「ミニミニミニ東京」指向を転換するには、この底力を貯える方途を考えねばならない。

一つの新しい風土づくりは

幸なことに吹奏楽はいよいよ盛んである。木管楽器を中心とした合奏団の編成は可能ではあるまいか。長い間志ある者たちの念願でもある。是非実現へと向わせたい。

今春は島大の弦楽合奏団を招いて音楽会を開いた。今秋はさらに木管合奏を加えて、十数人を招くことができた。

地域文化の育成は、地方大学と密接に結ぶことによって可能である。継続的な協力である。そのことはこの小史が十分ではないが明らかにしたと思うものである。

横田に育った五十年の地域音楽の風土は、今後、新しい時代を築くのに無力であるとは思わない。

横田で育った若い愛好者、世話人、指導者に期待したい。

「比婆科学」もうひとこと

「すばらしいこと」としか言いようがない。

「広島県民の森」がこの地に設けられ、みごとに管理されているのも、「比和の自然」という週刊誌型の総アート紙600頁に及ぶ大冊が刊行され、学術的にも完璧といわれ、比和町の自然愛護にあふれているのも「県民の森」「西城の自然」（ともに200頁）が親しみ易く愛情に満ちているのも、三次の雄大な「風土記の丘」をめぐる施設ができたのも、この基盤があったからである。

ひたむきな、地道な、たゆまぬ努力の賜である。

（訂正） 前54号2頁3段4行「平角町天平」は「手角町夫手」に

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田文化改題
奥出雲
題字・糸原風亭書
第 56 号
12 月号
昭和54. 12. 1
奥出雲文化協会

奥出雲の古代
―横田町日焼田遺跡の場合―

東森市良

はじめに

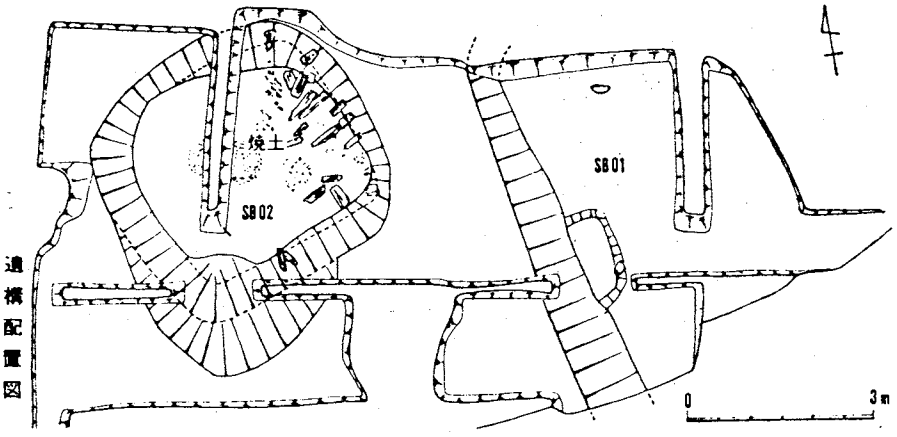
古代の奥出雲はどのような状態であったのであろうか。これについては調査されたものが少ないのであまり明らかであるとは云えないが、本年五月に杉原清一氏の手によって横田町日焼田遺跡の一部が調査されたのでそれを紹介しつつ古代人の生活の一端にふれてみたい。

この遺跡は昭和五十四年春以来の慶南産業KKの土砂採取中に杉原氏の踏査の結果明らかとなった。はじめは木棺を直接に地面に埋めた土坑墓とみられたが、調査の結果かなりの数の竪穴住居跡が存在することがわかった。たゞ残念なことに調査前に多くの住居跡が破壊されており、現在横田中学校に通ずる道路の崖面にも住居の断面が出ているので、かつてこの道路をつけた時にもいくつかの住居が破壊されたものと思われる。

調査は昭和五十四年五月十六日から二十二日までの七日間であったが、その間に二つの住居跡を検出し、遺構、遺物ともに注目すべき成果を得た。また調査にあたっては杉原氏の他に永浜順子、佐世川徳雄、小川敏子氏が参加し、その間東森が遺構の検出、遺物の整理に協力した。

遺跡の位置と環境

日焼田遺跡の存在する横田盆地は斐伊川の源に近く、盆地をかこむようにして横田高校グランド遺跡のほかに南枝寺山遺跡山伏迫遺跡、大殿遺跡、岩屋寺遺跡、鐘免大池遺跡など弥生時中期以降古式土師器（古墳時代初頭）の土器が散布する遺跡群が分布しており、多くは未調査であるが、この盆地を囲む丘陵が弥生時代中期（約一八〇〇年前）以降特に古墳時代に入って生活の適地として居住の場所になっていたことがわかる。そしてこれ等の集落の後背地やすき間には古墳が築かれており大田山古墳群、岩屋寺山古墳群、小池古墳群、勝田宅裏古墳、手場古墳、愛宕下古墳、岩屋寺山横穴、藤ケ瀬横穴などがある。



遺構配置図

このような遺跡群は主として盆地の東および北部に位置しているが、この日焼田遺跡は西部の下横田川の低地と盆地を区切る無量山（標高四〇一メートル）の山塊の東斜面に位置する数少い集落である。

遺跡は横田の町並みを見おろす山塊の北東に突出した先端部に位置し、標高は三七二・五メートルで、下の水田面からは約三〇メートルの高さになる。

住居の概要

発掘は破壊されていなかった丘陵頂部附近を起点に南北に二五メートル、それと直交して東西に二〇メートルの試掘の為の溝を掘って観察をした結果、東の部分において落ち込みと土器が密集している部分が検出されたので、この部分を六×十二メートルに拡大して発掘をした。その結果二棟の住居跡が確認され、それを東から一号住居跡、中央のものを二号住居跡と呼ぶこととなった。

（一号住居跡）この住居跡は丘陵の屋根に近く東側斜面に移る位置にあり、東側は土砂が流れ出してくずれ、南側は町道建設の際に切り除かれ、北側は採土工事にともなう攪乱土の盛土で調査が出来なかった。従って西側のみの調査で終ったので床面全体のプランは不明であるが西壁からすると一辺五・五メートル以上の方形の平面を持つ住居跡であったと思われる。

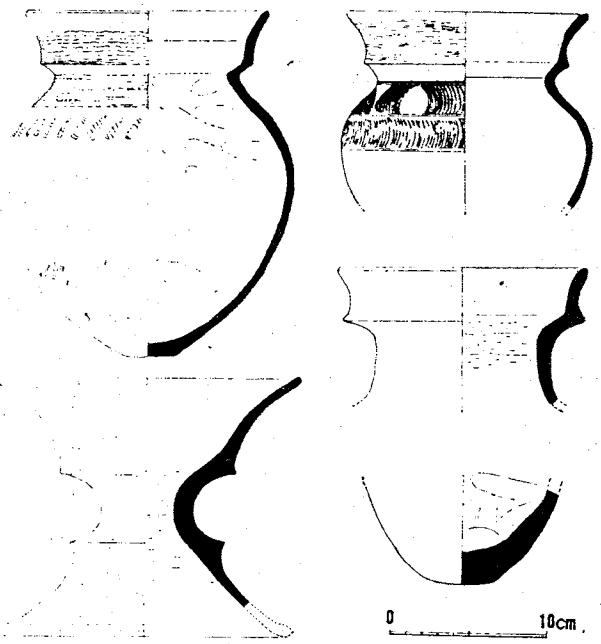
もともとの床面の土は黄褐色の粘土で、これを約四〇度の傾斜で掘り込み、床面のうち約二メートルは山を削って作り、そ

の前方東側は当時の表土をそのまま削り、さらに削り取った土を薄くひろげてたたきしめて床を作っている。床面の構造は西壁にそって一五〇×七〇センチ厚さ一〇～一二センチのテラス状の床をつくり前端の両隅に川石を一個づつ置いて土止めしてあり、この部分から厚さ一五センチにわたる土器の集積がみられた。これらの土器はすべて古式の土師器で、壷一、器台二のほか甕三五個体分以上のものが検出された。また西壁から約一メートルの床面に密着して完形の砥石が検出された。

（二号住居跡）一号住居跡から一・六メートルの土手をへだてて丘陵尾根筋に作られている。規模は東西四・六メートル、南北四・八メートルの隅のとれた方形で火災で焼失した一次床面とその上に土盛りを行った二次床面とが確認された。

(1) 二次床面は面積三・四×三メートルで東西に少し長目の隅丸方形をしており、地山の土と同じ粘土を用いて固められており、中央からやゝ西寄りに長円形の火熱を受けた部分があり炉の跡と考えられる。この部分の北辺で地山に接して折れた砥石が床面に密着して出土した。東北隅には壁の斜面にわずかな張り出しがみられ、その中央にこしき（ご飯むし）を真中から切断して伏せ周りを粘土でかためたものがあった。こしきの口は一次床面でとまっていた。この土器の他の破片は周囲に散在しており、調査後完型に復元出来た。こしきは本来は蒸すことを目的とする容器であるから、このような状態で出土したことは本来の用途と異った、たとえば器をのせる台のような用途に使われたものと思われる。

(2) 一次床面は上記二次床面の下十六センチに埋没して存在した。この床面では一たいに炭の粉が認められ、特に東壁の下から床へかけては、中央部に向って放射状に木炭が分布し、あたかも焼けた木材がそのまま埋没したかのような状況であった。特に東壁には直径一二～一五センチの栗材が一・二メートル間隔で三本直立していたが、その根は床に整然と密着していて、柱を埋めたと思われる掘り込みは認められなかった。床は一号住居跡及び二次床面と同じ地山の粘土を掘り込んで作っており高さは南側が一番高くて一メートルをはかる。



出土土器実測図（1号住居跡出土）

出土の遺物

土器　出土した土器は一号、二号住居跡ともいずれも古式土師器であり、甕形土器を主体としている。この他に一号住居跡では非器台、壷形土器があり、二号住居跡では出土量は少なかったが大形のこしきのほかに壷形土器が認められた。

甕形土器は口径が一二センチから二三センチまで多様であるが一五センチ前後の中形が半数以上で最も多い。文様は貝がらか櫛を用いたものがほとんどで、口縁には浅い平行沈線か波状文頸から肩にかけては押しつけ文ノの字文、平行沈線文、波状文がある。このように甕形土器のほとんどに文様が施されていることが一つの特徴である。そしてほとんどにすゝが附着していることも甕形土器が煮沸に用いられたことを明らかにものがたっている。これらの土器の底部は小形の平底である。

壷形土器は一号、二号住居跡とも一個体づつ出土しているが土器の質は荒く肉厚でもろい。形は口縁が立ち上ったのちしぼむ複合口縁状をなし、やゝ長い頸をもち胴の張るタイプのものである。文様は一個体のみ口縁と頸に櫛描沈線をめぐらしている。

器台は一号住居跡より二個体出土し一個体はほぼ完全に復することが出来た。いずれも土質は良く、口径が脚径よりも大きく筒部のしまった良品で、そのうちの一個体は上台と脚台に浅い櫛描文を数多くめぐらしている。

こしきは二号住居跡から出土したものであるが、復元の結果は厚さは薄手で腹部がしまり上部でやや開き口縁に向って直線的にのび端は開き気味となる。下部にくびれを有し、この下に一対の把手があり、さらに上方肩に当る部分に縦の一対の把手がある。

砥石　一号住居跡で完形品一個二号住居跡で欠損したもの一個が出土した。いずれも白色粘板

岩質のもので、今日使用されている砥石と同質である。どちらも角柱状で一号住居跡のものは五・九×九・五×三・六センチで四面ともによく使用されており、やゝ中くぼみとなっている。二号住居跡のものはよく使いこまれており、中央に向って細くくびれている。これらの使用法であるが、完形品の方は台又は地表面に置いて使用し、切損した方は手にもって刃に当てる使用方法をとったと考えられる。

生活のあとをたどって

横田町の中心部を眼下におさめる中山丘陵の先端近くにこのような住居跡群によって構成される集落が存在したことは、当時の横田を考える上で重要である。何故人々は風当りの強い丘陵上を選んだのであろうか。盆地をとりまくように存在する遺跡群はすべて低位丘陵上にある。これは当時まだ低湿地を生活立地とするだけの技術がなかったというよりも低地は水田として確保しておかねばならなかったことによるのであろう。横田にかぎらず、米子市の青木、福市といった大遺跡や鹿足郡六日市町前立山遺跡の場合でも例外なく低丘陵を立地としている。

人々は寒風酷暑にたえつつ丘陵上で生活をし、河で魚を、山林でどんぐりなどの植物源、猪、兎などの動物をとって農業生産物でおぎない切れない食料源を確保していたであろう。勿論生産は農業を基本とするものであったことに間違いない。二号住居跡出土の大形のこしきは米が主食であったことをものがたっている。これは米子市青木、福市遺跡や松江市平所遺跡から類品が出土しており、珍らしい例でこれまで報告されたことを聞かないが、杉原清一氏によって大正期まで使用されたというこしきが報告されている。これは二升炊きだということであるが、基本的には焼き方が異るものの形と機能は全く一緒である。時代は移り変っても器の形や機能には長い伝統があることを知るのである。

また砥石の存在は鉄製の道具が普遍的であったことを物語っている。鉄はくされやすいが、それを研いだ材料が残ってその使用のあとをとどめているのである。

時には火災で家屋が焼失する

たたら師として成長

—大馬木の山本・杠家④—

七代杠市兵衛久正（つづき）

源左衛門ともいう。1618（元和4）～1697（元禄10）

寛永13（1636）鉄穴流し許可

仝 14 六代太郎左衛門の長男治兵衛久植（のち八槙家千代）は小峠鈩を吹く。

二男市兵衛久正は五の籏鈩を吹く。

仝 17 太郎左衛門隠居し二男市兵衛山本家を継ぐ。この年岩屋寺の本堂上葺完成。山郡村にて次良兵衛というたたら師、鉄を抜出したこと発覚し打首となる。

明暦元（1655）八槙家五代治兵衛は大馬木村小頭役となる。稲田村は安部仁左衛門、樋口村小池又右衛門（以上いずれも親戚）、横田町は芦田瀬兵衛であった。間もなくこれらのまとめ役として組頭役が設けられ、小池又右衛門がかねる。

仝 2 秋より市兵衛、五の籏を引立てる。

萬治2（1658）市兵衛は甚七（叔父八槙家四代治兵衛の長男）と鈩のより合い吹きをする。

寛文2（1662）太郎左衛門（六代）91才で死す。

仝 4 三成の川方、再開

仝 8 岩屋寺大林坊建つ。「富田」を「広瀬」と改名する。

仝 9 横田町大市焼ける。治兵衛（八槙）の経営する小峠鈩よくわく。

仝 11 治兵衛は小峠鈩吹立てる。

仝 12 市兵衛は五の籏鈩を打ち吹立てる。よく涌く。

延宝2（1674）五の籏鈩止まる。小峠鈩も利運なし。

分家八槙四代治兵衛久植

延宝4 治兵衛は太郎左衛門と改号し、八槙寺下の畑に家を構え隠居する。当時国中にも聞えるほど、盛んで富家であった。

仝 5 二男与三郎は治兵衛（久次）と改号した。時に27才父に似て信心深く実直であった。妻は伯父市兵衛久正の娘。

長男甚七は発明であり、奔放な性格であったので、鉄山事業は成功し、財をなして三成町に居住した。仝7年には酒屋の許可をうけ造酒もはじめた。

天和2（1682）久植、久正の弟杠甚三郎が矢入鈩を吹立てた。甚七は大原郡の牛尾そ

式＝鍵尾Ⅰ式土器に類似しており海岸部との交渉がこの時期盛んであったことを物語っている。土器はこの時期のセットとしては極めて好例といえるものである。

古墳時代の横田の人々は山陽よりも出雲の人々との深い交渉を持っていたのである。

（筆者 県立横田高校教諭）

のほかで鈩を吹いて成功した。

貞享元（1,684）山本家七代久正の長男忠三郎（元禄8（1,695）にあとを継いで八代市良左衛門久記という）の鈩は赤字となる。甚七の大原の鈩は涌かず、損失のため止める。翌年忠三郎は矢入鈩を小馬木の野津三郎兵衛に売った。

この年まで三成まで通っていた川方の舟も、川の事情悪るくなり中止となる。大原で失敗した甚七は、その機を生かして新田を開発し、百俵余の収穫を得るほど成功する。八槙五代治兵衛久次は鈩を盛んにする。

貞享3　山本⑦市兵衛とその子忠三郎の所有する、五の籏・矢入鉄穴、湯舟谷鈩山を治兵衛が買受ける。この年岩屋寺本尊の開帳がある。

仝　4　この年から鉄方、造酒ともに免許制となり、鉄は御買鉄制ともなる。

備後の清水七郎左衛門が坂根鉄山を買い求める。記録の上では、他国のものの進出ははじめてである。

馬場八幡宮の大鳥居（現存）をト蔵甚兵衛が寄進する。

元禄元（1,688）横田三十三番札所の観音御詠歌ができる（五反田村六兵衛によって）

仝　2　仁多郡内で五ケ所が造酒の御免をうける。三成町杠甚七のほかは、大馬木村湯の迫、横田町富田屋、亀嵩町伊豆屋、上阿井町可部屋であった。

仝　3　三成の川方再興される。

仝　4　鈩天秤吹初まる

今までは吹差吹子を幾つか備えての送風であったが、天秤吹子となり、交互に足で踏むことにより、労力も減少し、風力も強くなり一定となったので、鉄がよく涌くようになってくる。

八代市郎左衛門久記

元禄8（1,695）八代を継ぎ忠三郎を市郎左衛門と改号する。

八槙四代治兵衛久植（太郎左衛門、法泉）88才で死す。

分家八槙五代治兵衛久次

元禄9　四代治兵衛の二男与三郎（兄は甚七）は治兵衛久次と改号し五代となる。

極めて盛んで家を普請する

仝　10　五の　鈩をやめて、湯舟谷鉄へ打替える。矢入大岩谷鉄穴、山本八代市郎兵衛より買受ける。

山本七代市兵衛久正80才で死す。法名日行。

仝　11　市郎右衛門久記より治兵衛久次は、山を買う。さらに三成町甚七（実兄）より酒場、酒道具を買う。

仝　12　山本家八代市郎右衛門久記、菩提寺、八槙寺へ畑を寄進、八槙五代治兵衛久次も。

仝　13　岩屋寺本尊開帳

仝　14　甚七失敗し、治兵衛保証人のため借財を引きうけてすます。

この年の暮、赤穂四十七士の討入りあり。

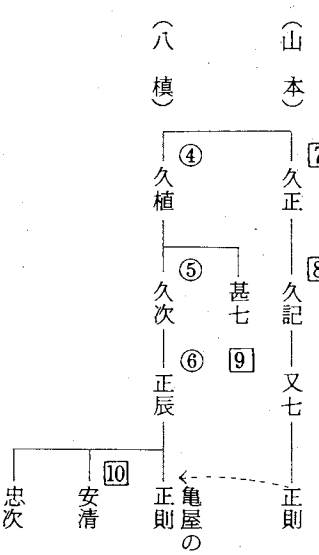
分家八槙家六代又右衛門正辰

元禄15　五代治兵衛久次死すその二男千之介、7才であとを継ぐ。（のち小次良、さらに小三郎。又右衛門）

幼少のため姉の婿が後見して鉄穴をし鈩を吹く。

この年、馬木領主であった馬来氏の末孫で萩藩士が祖先の墓まいりに訪れ滞在す

仝　16　四十七士切腹する。



宝永2　小次良（のち又右衛門）正辰、山本八代久記の子又七より湯母谷の新鉄穴を買う。大馬木村小峠山伐り尽し、小馬木村矢入鈩に打替え打立てる。よく涌く。長野尾鍛冶屋を経営する。

たたら師が鍛冶屋をあわせ経営するのは諸記録の上で初見である。

比田の金屋子神社遷宮ありこの年より鉄穴先納を止め元の如く、御札座支配となる。

仝　3　矢入鈩よく涌く。年賦上納滞りなし。千之介幼少のため御足軽岸田仁左衛門に矢入鈩吹仕舞まで滞留を願う。

仝　4　小三郎（小次郎改め）正辰は、本家山本の市郎左衛門久記、その子又七の田畑をすべて買う。これより二人は八槙家に移って生活することになる。

御札座による御買鉄はやめになり、私売鉄となる。

十月四日大地震あり、簸川の武志土手二百間は沈んで平地となる。

仝　6　矢入鉄吹きやむ。

八槙家は山本家へ移りすむ

八槙家六代は本家山本家の九代となる。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　高橋一郎（振替松江六〇一番）／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字・糸原風亭書
第57号
1月号
昭和55. 1. 5
編集
奥出雲編集集団

出雲国風土記の神話

―奥出雲の原像を求めて―

新らしい年を迎えると将来への希望に胸をふくらませるとともに、遠い大昔のことにも思いが向うものである。

冒頭の詞章は「出雲国風土記」の中にある、出雲国創世神話の中に出て来る「国引き」のうたである。一、三〇〇年もまえの時代の人のこの歌は、再来年の「くにびき国体」の名称としてよみがえったのである。

私はこの詞章を構成した詩情を育てたのは、ほかならぬ横田盆地の東に聳える船通山であると、一昨年提唱した。四回にわたって引きよせた地塊の最初は日御碕で、その綱をつなぎとめたのが三瓶山であった。引いた綱は薦の長浜となった。最後に引いたのが美保の国で、引き綱は夜見が浜となり、つなぎとめたのは大山であるというのである。

船通山へ登ってみると、この景観は一望のうちにおさめることができる。南の方には遥るかの吉備高原も見とおすことができる。

この頂上から東に越の国を思い、西の彼方に新羅の国を望んだのは、極めて素直な認識であったのである。その後「今日の考古学や古代史学の上から、この解釈を確かに」と言われる方もあるが。昨夏の山陰中央新報の中国山地カメラ縦走記の中で、船通山でそう感じたとして「神々のテラス」という適切な言葉を生んでもらった。

素人の私の発言には説得力が乏しいが、頂上に登る度に、古代史の諸書に深入りするほどに、その感を深くする。また出雲の古代史研究の学者の諸書を読み、とくに古代吉備（岡山県と備後を含む）と出雲とのかゝわりを中心とするところに至ると、まますますその感を深くする。

中にはここを重要な通路であったとする学者もある。このことは度々力説したことでもあるので、少し立場を変えて、こうした立場をとって学界の主流に位置しておられる学者の説を紹介しながらのべてみたい。これらの学者は必ず出雲のことを考えるのに「出雲国風土記」を中心に基底に置いておられるのである。

素人の私も「奥出雲をさぐる」（昭和40年刊）ついで「島根県横田町誌」以来、一貫してこの立場をとって来た。地方ではまだ珍らしかったが、それは、この奥出雲に住んでいるものがいつも肌で感ずるところの風土感覚がそうさせたものであった。

今日、中央史があって、それから派生したのが地方史であるという立場も後退し、地方の歴史はその地域の風土が生み育てたものである。その資料をもとに中央史とのつながりを考えるという方向も強くなった。それは昔流のお国自慢とは違い、地域の歴史を正す方向であるのである。

「舞う」　杠　義盛

童女の胸のように
幅のひろい
大きな鉏をとって
大きな魚の鰓を
切りはなすように
その土地をたち切って
三つよりなった強い綱を
かけ
霜枯れした黒葛をたぐり
よせ
河船をひくように
もそろもそろと
ひきづりよせながら
「国来　国来」と
ひきよせて
つなぎあわせた土地は

出雲神話と出雲系神話

「日本書紀」(七二〇年完成)「古事記」に書かれている神話の三分の一は、出雲を舞台とした神話である。今日では厳密に言うとこれらを「出雲神話」と呼ばず、「出雲国風土記」(七三三年撰上)に書かれている出雲の地の神話を「出雲神話」と呼び、紀記の中にある出雲を舞台にした神話は、大和で取捨選択加上されたものが多く、「出雲系神話」と呼ぶ学者が多い。

出雲の南隣の吉備国は、古墳時代以前から、出土品・遺跡などからみても、出雲より文化の程度が高く、その影響も出雲に多く与えているのにかゝわらず、神話の中にはほとんどあらわれない。その反面、歴史時代になると吉備と大和との関係は、出雲と大和との関係より格段と記述の量が多くなる。意図的に編集されたため紀記の神話は、大和と出雲をことさらに大きくとりあげてあるのである。(その理由については、くわしくは上田正昭、水野裕、鳥越憲三郎、大林太良、門脇禎二ほかの諸説を参照されたい。)

出雲神話—出雲国風土記の神話

出雲の創世紀の神話は八束水臣津野命(やつかみずおみづのみこと)の国引きと、大穴持命(おおなもち)の国造りと、国巡りする須佐之男命の物語りが主なるものである。

①国引きの神—八束水臣津野命

「くにこ、くにこ」と足らぬところをつなぎあわされた神である。加藤義成氏は洪水の神霊であると解釈している。斐伊川、神戸川、日野川の洪水の沖積した土地によって、島根半島(はじめは島)がつなぎとめられた。

自然の摂理その徳を讃えることにほかならぬというのである。自然・天然現象に即して生活した古代人と、現代人との洪水に対する考え方の相違は、自然観はもとより世界観にも大きな相違があった。洪水による国土開発への感謝のあらわれであるという。

②国巡りの神—須佐之男命

須佐之男命の国巡りは、大原郡を中心として、仁多・楯縫・出雲の各郡以外に伝えられている。大原・飯石・意宇では自らが、島根半島では男の子神が、神門郡では姫神が(あわせて七神)国巡りをし、それぞれの言動が地名の由来となっている。

これは古代人が自らの郷土を祖神が祝福讃美した国土として、愛し育てようとする心情を反映したものといわれている。

③天の下造らしし大神—大穴持命

出雲国風土記ではこの神と前記二神との親子関係などについては一切明らかにしていない。天の下造らしし—出雲開発という内容も極めて多いが、主なものをあげると、・農業耕作をした神 ・国巡りをした神 ・国土を讃美した神 ・狩猟をした神 ・荒ぶる神を追い払った神 ・各地の比売(ひめ)(娘)の下に妻問い(通婚)した神 ・子をかわいがった神 ・御財(みたから)を積み置いた神 などとなって、豊かな国造りの神となっている。

この大穴持命を紀記では、大己貴(おおなむち)あるいは大国主命などと多くの別名でも呼んでいるが、「出雲国風土記」では大穴持命一本であって、土地の神としてあがめている。豊富な伝承をもっていることは、唯一人の神でなく、功績のあった多くの神を総称してこう呼んだとする説が多い。

時事近詠　常盤　はるまさ

ひしがれて怒りを忘れし百姓ら減反割当もあきらめに似て

兼業の若きら歌ふ働く者のしあわせいつの日に恃むべし

冬日断章　安部夕波

雪となる夕べの街になわのれんくぐりて酌みし酒は身にしむ(北国の旅にて)

いま一度甦り来て亡き妻よ信濃の旅をともに行かなむ

師走近詠

台風の豪雨畦越す水の中稲架にのぼりて風窓をあける　伊藤萩雨

山に住む女の生活種々の漬物終へてしまい湯に浸る　永井弥生

冬陽射す庭にひろげし黒豆の莢のはじけぬ軽き音たて　野村節子

来店の客に接する日々なれば定休の朝寝のびのびとして　目黒成生

秋深くシャクナゲの花芽しらべゐる夫の面輪に夕陽あかるし　畑八重子

大鍋をかまどに掛けて煮物する古きよき日をなつかしみつゝ　景山悦子

紅もえて葉がくれに匂ふ山茶花よわがいとしみの心とぢけり　真綿博子

素枯れたる宵待草の一つ咲く斐伊の川土手吾は往きゆく　渡辺観翠

このように出雲の創世紀神話は、国引きの神八束水臣津野命と、国巡りの神須佐之男命を先立ちとし、国造り国土開拓の神大穴持命を中心として語られているのである。

そのほかの神話では、当時の民俗や一般信仰を想望できるものが多い。そのあらましと、仁多郡のもののすべてをのべると、

（須佐之男命は語源から考えても半島渡来族説が強い）

民俗伝承

①加賀神崎伝承—今日の加賀の潜戸にまつわるものである。こゝは佐太大神の生れた処であるが、この神が生れようとするとき弓矢がなくなった。祈願すると黄金の弓矢が流れて来たので、その黄金の弓に黄金の矢をつがえて、岩穴を貫通したところ、あかあかと光り輝いたという。奥に母神枳佐加比売命を祭る。今の人はこの岩穴を通る時必ず大声をあげながら通る。そうでないと、神があらわれて疾風が起り、通行の船がひっくりかえるという。

②三沢郷の伝承

大穴持命の御子阿遅須伎高日子命は、ひげが長く延びる年令になっても夜昼泣きつづけ、言葉も通じなかった。船にのせてあやしたがやまなかった。そこで親神は「なぜ泣くか教えてほしい」と夢に祈願した。その夜御子の言葉が通じた夢をみ、さめると子神に言葉をかけたところ、初めて「御津」といった。親神はよろこんで、「どこか」と聞くと、子神は立って石の多い川を渡り、坂を上ったところで止まって「ここ」といった。そこのこんこんと湧き出ている泉の水で身体をすゝぐと、すっかり健康な身になった。今でも出雲国造が新任の際、天皇に神賀詞を奏上するため上京するときは、この泉の水を汲み出してみそぎ初めの水とするのである。

このいわれによって、今も姙婦はこの村の稲を食わない。もし食えば生れる子は必ずものが言えない。この伝で郷名を「三津」という。のち神亀三年（七二六）三沢とあらためた。（この池は今の仁多町大字三沢字光田にある）

御津は泉の意味で、泉の神をミツハの神といったから、三沢はミツハの音を伝えているのであろうという。

③毘売崎伝承——これは安来市のいわゆる月輪神事の由来である。この郷の人の娘がこの崎をあるいていたところ、ワニの来襲をうけてかみつかれて死んだ。数日の間父は嘆き悲しんだのち、神に次のように祈った。

「出雲の三百九十九社の神、海のほかの多くのワニは何れかへと去った。父がこのワニを切りさくと、娘の脛一つが出てきた。

④目一つの鬼——大原郡阿用の条にあるもので、この郷のある男が山田を耕作していた。目一つのある鬼が来て、その若い男に食いついた。若者の父母は竹やぶの中に逃げかくれた。その時竹がさわさわと揺れた。若者はそれによって父母が鬼に発見されるのを案じて、「あよあよ」（動く意の古語）と叫んで注意した。よって阿用という。

㊟ あとでのべる鬼の舌震伝承のワニの話とともに毘売崎のワニの語のもとは、中国南方の小数民族の神話の中にあるという。ワニは渡来した異民族という説もある。（伊藤清司ほか）

目一つの鬼の話は、天目一箇神の話と同類で、全国各地にあり、中国大陸にも欧州にもある。製銅製鉄にまつわる話に基づく製錬業者をいゝ、のちそれが神としてまつられるようになったものであると、最近の谷川健一著「青銅の神の足跡」は、極めて説得力をもって解釈している。

また三沢郷の話に出るアジスキタカヒコ●は、鉄器・鍛冶の神で、銅や鉄の採鉱冶金者が信仰したもので、伊福部・品治部などの諸関係氏がもちあるいた話であるという。伊福部は斐伊川の中流以下に、品治部は下流と上流の仁多郡に移住してきて、仁多郡では郡司主張となったほど土豪化したから、三沢の風土に定着して伝承されたと考えられる。全国各地に伝わる話で、必ず附近には製銅に関する遺跡を伴っているということはこれを裏付けているという。金属製錬による鉱毒が人を唖にすることから、アジスキタカヒコ●は人を唖にする神、そして唖の神となったのであろうという。

また垂仁天皇の唖の皇子ホムツワケが出雲の神のたたりであると、出雲に祈るために

近詠　冬枯れ

岡田　蹊花

確と芽を梢にそなえ木々眠る
ちんまりと低き家並山眠る
数点の鷺の飛翔が景緊する
枯れつくし鷺鳥のみ著き大広野
濃く際立つ鎮守の杜や山眠る
枯るる中鎮守の宮居威容保つ
枯れ小菊庶民めきたる低き塀
凩の闇に手を振り別れけり

来た時白鳥を見て口が聞けるようになった。これと品治部は関係があり、金屋子神社の由緒に白鷺が出てくるのも、製銅製鉄の製錬業との古くからのかゝわりをしめすものという。

「出雲国風土記」の中の飯石、仁多両郡に砂鉄からつくった鉄で農具などをつくったとあることは貴重な記録であり、右にのべたこととのかゝわりを確かにすることができるが、これをもって直ちに出雲は日本の製鉄の発祥の地ということは誤りである。「常陸国風土記」にも砂鉄製錬のことがあるし、「播磨国風土記」の中には天日槍（あめのひぼこ）（製鉄族）と、砂鉄をめぐって先住族との苛烈な争いのことが載っている。その地は、金屋子神が能義郡比田の里に飛来する前に住んだという宍禾郡岩鍋のあたりでもある。

地名伝承

として関係のあるものをあげると

○神々が命名したもの

飯石郡須佐郷は須佐之男命が好い住い処である。私の名をつけようというので須佐と。

○神々の行為によるもの

仁多郡の布勢郷は大穴持命が宿（ふせ）られたので布世といゝ、神亀三年に布勢とした。

○神々の言葉で

安来郷は須佐之男命がこゝで「心が安らかになった」といったので安来。

仁多郡は大穴持命が「ほどよい土地で木の成長もよい、にたしい（豊潤な）よい土地だ」といったことによる。

全郡三処郷は、大穴持命がよい田だから私の御領（みところ）にしようといって三処となった。

全郡三沢郷は前述。

○鎮座する神の名によって

仁多郡玉峯山は頂上に玉上（たまのへ）神をまつっているので。

○伝説によるもの

仁多郡の恋山（したふる）（鬼の舌振山）は、ワニが阿伊川（今の馬木川）に住む玉日女命をしたって川を上ってきた。玉日女命が岩をもって川をふさがれたので、逢えず恋い慕ったので恋山という。「したふる」は恋するの古語。これが「鬼の舌振」となった。

○地理によるもの

仁多郡横田郷は郷の中に田が四反ばかりあって、形がやや長い。そこで横田という。

別のところで出雲大川の川上（斐伊川は中流名）は横田村に発するとあるから、風土記の記述のあり方からすると、横田郷内の横田村は鳥上地区内のようにもうけとれる。

以上が「出雲国風土記」の中にある出雲国創世神話の中心になる三つの神話と、郡内に関係のある地名伝承である。

こゝから出雲国の古代の歴史と生活を関連諸学（特に考古学・神話学・民俗学）の力や、周辺諸国の古代の歴史との関連でえがき出してゆかねばならないことになる。

（筆者　横田史談会・高橋一郎）

新しい年の始めの あとがき

奥出雲も57号を数えることになった。会員の皆様が心棒してお求め頂いたことゝ、篤志家の支えによって続いてきたことを感謝するものである。今年はもう少し会員や読者をふやし、経費的に完全独立をはからねば廃刊を考えねばならないので、内容の多様化をはかるとともに、二頁増へと進め、編集もそれに応じた方法を考えたいと、町内有志趣味集団（グループ）に話したところ、分担参加を快よく引受けて頂くとともに読者も若干増やして頂くことができたので、その方向へと本号から踏み出した。何分にも頁数の少ないものなので集団別の参加者数の割合に応じて掲載字数を割当てることにしたい。いずれ各集団の交代編集によって内容の多様化と、発行の永続化へと脱皮し発展したいと念願するものである。各集団毎の或は個人での御意見を承りたい。

参加頂いた横田フォトクラブの代表である杠義盛さんの作品を載せたが、杠さんは昨年は二科会（東郷青児創設）の写真展で入選を果された。短歌会の代表の安部夕波さんは戦前から横田の短歌会で育って来られた方である。渡辺観翠さんは昨年は歌集「黎明」を自費出版して好評を得られた。岡田蹊花さんは今月はとりあえず個人の立場で近詠をよせて頂いた。

増頁が可能になれば、角度の変った郷土の記録を連載する準備を、二〜三の集団の協力で進めている。なかには随筆をのせてはという声もある。

（今月号編集者　横田史談会・高橋）

横田史談会では毎月の定例の

△古文書を読む集いのあとで、会員や会員外の調査や探訪の報告や研究の発表会を続けてゆくことにした。三時半から一時間程度、御参加の程を。

△六月には一泊で京都の史蹟めぐりが話題にのっている。横田庄に縁の深い、普通の観光コースにない寺社見学で。

△また秋にかけて、考古学・古代史・中世史の調査研究や会合がこの地で開かれるようである。学習の好機である。

△伯耆・備中・備後の地方史研究者が再び横田に集まって、お互いの交流の歴史を中心に発表し語ろうとの機運が盛り上ってきている。

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字・糸原風亭書

第 58 号
昭和55. 2. 2
編 集
奥出雲編集集団

仁多郡農談会①　俳句・短歌　傑僧快円⑤

明治維新後の仁多郡の立直しの農村構造改善を推進した

仁多郡農談会
―その成立の要因①

明治維新と農村・農業

一八六八年の明治維新は、日本の社会を日本の歴史上ではもとより、世界史の上でも稀にみるいきおいで、近代化へと改革していった。伝統的武家社会成立の即ち封建社会の基盤は、農村そして農民にあったが、近代化に伴って、農業は工業に、農村は都市へと中心が移っていった。

明治三年には農民も苗字を名のることができるようになり、検地帳（かつての土地台帳）には土地の面積を書いたあとに、一部の耕作農民の名が書き加えられて、その存在が明らかになるに過ぎなかった農民は、戸籍法が作成され、すべての老若男女が、人間としての地位を与えられた。そして現物納入の租税は金納となり、農地における作付作物の制限もなくなり、何でも自由につくれるようになった。

そして続いて江戸時代を通じて禁示されていた土地売買が、商品として自由にできるようになった。こうして矢つぎ早の大改革が遂行され、六年には地租改正の大事業がはじめられ、地価が定められ、金納地租が課税されることになり、政府の財政歳入の95%までを、これによってまかなうことになった。この地租は耕作者でなく、土地所有者にかけられたから、政府は土地所有者即ち地主層を育成し、その利益を守る方向へ重点を置く方策をとった。しかし小作人は相変らず地主に現物米で小作料をおさめたが、地主の地租は金納であった。米の値段は上るが地租は変らない。そこで年がたつとともに自作農は、小作農へ転落するものと、農地を買求めて地主となるものに分れて、減少していった。明治三十年代には、県内の土地の半分以上が小作地となった。

封建時代は家柄が人間の値うちをきめたが、これからは土地の持高がきめることになり、農業生産からはなれた地主は、政治の道へ進み、地方の指導者へと成長していった。この型にも種々あって、奥出雲の大地主層はかつての鉄師階層であったので、県内他地方の指導者層とは異った方向を歩みはじめた。そのことを明らかにするためには、まず内的要因として、たたら製鉄業の不振と、次に外的要因として、明治政府の西洋直輸入農法の奨励のあとをふりかえり、仁多郡の特色ある指導者の先導による、農村構造改善の過程をみることにする。その中核になったのは絲原権造（雨川絲原家十一代・現当主は十四代）によって主唱された仁多郡農談会であった。

雪の朝　西沢由英（横田フォトクラブ会員）

藩政時代の製鉄業と農民

藩政時代の出雲の代表的物産は、鉄と木綿であった。鉄については詳細な記録があるが、木綿については、各地の家内工業生産が中心であったこともあって、いまだ綿作・機織（はたおり）さらに販売についての詳細が明らかにされていない。生活必需品であって、関係商品の量などからおしてみると、生産と流通上において大きな役割をしめていたことはたしかである。綿作は米作と違って、労働量も肥料の投入も、その三倍以上は必要であったと記録されているが、利潤が何作にも比して厚かったといわれ、出雲平野の地主層には木綿問屋商人をかねる者が多かった。

奥出雲即ち山間部では、たたら製鉄業者が、特有な大地主となっていったのであるが、それは製鉄業が完全に松江藩の統制下におかれ、藩の大きな財源として、それらの貢納が役立っていたからである。変遷を経て流通面の統制は、御買鉄制度（享

保十一年（1726）によってはじまり、やがて生産面も支配する鉄方御法式がしかれて、藩内のたたらは一〇ケ所に、それに関連する大鍛冶屋の数、鉄穴流し場所数も制限され、鉄師は八人に限られた。鈩・大鍛冶屋一ケ所にそれぞれ銀納入制も定められたが、製鉄用薪炭林である鉄山は、鈩一ケ所に二七〇〇町歩、大鍛冶屋に六〇〇町歩が付与されて、その製鉄業維持経営のために種々の援助措置がとられた。

雪深い奥出雲は米の生産力も低く、農業収入も少なかったから、農民のほとんどは製鉄業に何らかのかたちで、どれかの鉄師の支配下に属し、或は関連をもって収入を得て、生計を維持していたのである。従って平野部におけるような地主と百姓との対立は少なく、農業不作による収入減を補うためには、鉄師・農民ともにたたらの増設を嘆願して切抜けを考えたりして、仁多郡の農民は、なんとか平和な生活が保障されていたのである。

このようにして各自の生活を支えるとともに、松江藩の財政を支えたばかりでなく、中国地方の出雲・伯耆・石見・備後・安芸の鉄師のつくり出す鉄は、当時のわが国の鉄需要の大半をまかなっていた。その中でも奥出雲はその半ば以上をしめていた。

明治の製鉄業の衰退

明治維新そして廃藩置県で、松江藩がなくなったことによって、百余年間続いた鉄師への特権賦与と保護助成が打切られた。

それに加えて明治六年七月の太政官布告で日本抗法が施行され、砂鉄採取は新たに課税の対象とされ税金がとられ、さらに悪条件が加わった。工部省の指示で六年前半期には鉱山物の販売が中止されてしまい、製造したものが商品化できないのに、税金は払わねばならないというのであったから、鉄山経営者は最大の危機を迎えることになった。しかも製鉄業には多数の人々が関係していたから、奥出雲の村々にとっては影響は深刻であった。雨川の絲原家の例をとりあげてみると、明治八年で、鈩・大鍛冶屋山内で三八〇人、砂鉄元方で五〇人合計四三〇人の常雇者がいた。それに季節的ではあるが、木炭製造者や、木炭・砂鉄・製品を運搬する農家の副業駄賃馬挽きの数を加えると、千人を越える人々の生活をどうするかという、経営者個人の問題よりも広範囲な地域全体ったので、その養米確保を藩政時代に準じて、仁多郡産米のうちから優先的に配慮してほしいと県庁へ要請を出したが、「聞き届け難し」と却されてしまった。

それでも七年までは、鉄・鋼の価格は毎年上昇していたが、八年からは大巾な下落となり、十年がドン底となった。当時の記録には本郡の経済を渋滞せしめたとある。

（筆者　横田史談会・高橋一郎）

—次回は続明治の製鉄業の衰退—

明治38・8・6　山陰新聞から

「去月三十日仁多郡の有志者は鳥上村なる船通山に登山の壮遊を試みたり：竹崎尋常小学校に集合せるもの四十余名三成村最も多し：路頗る険しく加ふるに荊棘の繁茂せるあり衆之を別けて上り屢々相失わんとし互に呼応して漸く鳥上滝に至り千古滴るることなき清冽：更に勇を鼓して絶嶺に上る眼界遠く濶けて西北遥に杵築湾を望み東北に中海夜見浜を隔てて日本海：大山の峻嶺：衆皆快哉を叫ぶ：名望家卜蔵氏の優待をうけて一同喫飯：豪語し吟嘯：郡にてはこれを初回として毎年夏期この壮遊を継続実行し大山登山会と東西相呼応せんとするにありと。」

❀ しばぐり抄 ❀

枢（ひつぎ）おく吹雪読経に合掌す　浅野　としお
猿の腰掛冬日うららに猿の留守　糸原　古志
運ぶ手の似し父（おや）と子の雑煮箸　植田　美代子
独り住い託（かこ）つ生活（たつき）の明（あかる）き指　岡田　渓花
黒々と雪を汚して葱を掘る　岡田　麗水
虎落笛（もがりぶえ）街のわだちも定まらず　小川　あきお
牛売られ手持無沙汰に秋祭　恩田　魚跡
小さき手の銀盆すべる雪兎　加納　信子
箒目の庭を寝返る枯れひと葉　高木　白虹
元旦に垂れ込めし嶺記紀の雲　田邊　竹野
明暗を賭けて入院寒椿　中田　巣鶴
我が齢（よわい）数え呆（ほう）けて春迎う　中澤　斐水
孫くれし賀状へ漢字の増えにけり　新出谷　一華
去年今年（こぞことし）どこ吹く風の眠り猫　錦織　富江
雨降るや遠嶺は空のものとなす　藤原　樵夫
孫帰り部屋整のうて読初（よみはじめ）　渡部　夕峰
送る荷に差込む老のお年玉　杠　幸静

岩屋寺物語⑤

第二次再興に力のあった 傑僧快円⑤

—再建の記録から④—

そこで竹崎村の鉄師卜蔵甚兵衛は、切抜け策として、当面何百人もかゝえている使用人の米穀の確保が何よりの関心事であの問題が発生して来たのである。

「傑僧快円」―再建の記録からは、岩屋寺所蔵の「快円日記」（金厳山再中興快円日記）を軸にして、快円の「大永の古記録」その他、さらに三沢氏の家譜・樋口表・杠家の記録・絲原家の「古代よりの聴書」を加えて考証したものである。

「快円日記」は岩屋寺四十九世法印光禅上人が天保十三年（1842）九月三十日、虫くいにより散逸しかけていたものを整備し、さらに念のため写本を作成して残している。日記とあるが、メモであって、年月の順序にはよっていない。

1539 天文八年五月より

四天王像があらたに彫刻された。以前にもあったが、廿六年前の永正十一年、尼子氏が三沢氏の居城藤ケ瀬城を攻めあぐんで引揚げるとき、この寺に放たれた火によって焼失していたものである。新作の仏師は京都七条の法眼康秀であった。

法眼康秀は出雲守護であった尼子経久が、富田（のちの広瀬）に招いて丁目幡フセノ山林寺の仁王像を造らせたものであった。この機会にと当寺に招いた。塩冶上郷兵庫助泰敏（塩冶讃州の甥・三沢氏の縁者）が檀那として五百貫文の費用を寄進した。泰敏が檀那になったのは、子・才徳丸が院主快円の坊に入院したからであった。

仏師が当寺へ来るについては、十五坊より一日三人宛が馬で奉仕した。

このとき本堂後戸の文珠菩薩（開山行基菩薩の作という）を三沢七郎兵衛が、その女房（56才）のために二貫文を寄進して再彫刻させた。像の高さは二尺、台座二尺のもので、すべてで五貫文かかったが、あとは快円が寄進した。

その他護摩堂の正観音像も再造、仁王像の修覆、さらに本堂の十一面観音の頂上の仏体五面が破損していたのでこれも修覆した。また常泉坊の千手観音も修造した。そしてこの仏師は七月廿九日、富田へ帰っていった。（写真は本尊十一面観音、昭和四十五年四月二十二日、本堂屋根修覆記念法要にあたり開張された時に写したもの）

1540 天文九年十月十一日は

三沢為幸（三沢十三代為清の父）が、尼子経久に従って、安芸吉田の毛利元就の本城を攻撃した時、奮戦し、一太刀で元就に斬りかゝらんとしたところ、毛利方の井上某に矢を射込まれ

お題『桜』にちなみて

五十年前記念植樹せし桜の木鎮守の森にいまを咲きつる　伊藤萩雨

頂きに桜の樹皮を用いたる笠をかぶらずなりて久しも

迎春

一とせの思ひほのぼのあたためつ晦日（みそか）の湯ぶねに軽石使ふ　永井弥生

暖冬に小いでの芹の丈のびて今朝七草（ななくさ）の膳をいろどる

近詠

とりどりの色のタイヤの跳躍台幼らはたくみにとび越えゆけり　渡辺観翠

幼らの風邪に伏せりし家ぬちのひそけき夕べ山鳴りきこゆ　野村節子

白無垢（むく）に姿しまりて嫁ぎし娘は早みごもりて初春迎ふ　畑八重子

雪降れば吾が小庭木のあかき実に小鳥は群れて来りては去る　目黒成生

メタル掛け引き廻される愛牛よ高鳴る胸に競り値見あげる　景山悦子

青柳の銀の涙を忘れまじ岸辺に立ちて模索の日々よ　真綿博子

時事近詠（其の二）

米余る記事憎みつゝ百姓ら加工食品に蝕（むし）ばまれいて　常盤はるまさ

強きもの富めるものにと百姓らの見する卑屈さにファッシズム思ふ

残照の中で

妻逝きて二とせ暮れし追憶のまだ生々し除夜の鐘聴く　安部夕波

夕映えの丘は黄に染みひとすじの白き農道翳（かげ）りゆくなり

討死した日である。この時嫡子才童子丸（のちの為清）は四才であった。この戦で落合彦六・中林孫左ヱ門・柏阿弥などの家臣を失った。

あけて十年一月はこの攻撃戦で三沢氏はさらに家臣・布広四良左ヱ門・落合平左ヱ門・久比須兵ヱそのほかを失った。尼子方は合戦の各所で利なく損失多いのみで、遂に雪中の苦労多き退却をし、富田に引揚げた。尼子毛利対立の時代の転機にこの戦がなったのである。

1541 天文十年三月廿一日より

金剛院快義が世話人となって本堂の仏壇厨子がつくられた。大工番匠は京の神左衛門と全助兵ヱで、当庄の大工井本六良左ヱ門が手伝った。杣取り即ち木材は三処の井（居）去の宮にあった欅の木をとりよせた。亀井太郎左ヱ門安綱がこれは寄進した。勧進元は溝尻清兵ヱで寄進は、米三十俵は三沢三良左ヱ門為幸名儀、五俵三沢七郎兵ヱ、上郷兵庫助は十三貫文、溝尻は追加十貫を加えて二十貫文、亀井太郎左ヱ門安綱は十俵であった。願主は七郎兵ヱ（五十八才）であった。ほかに石原伊賀守義扶ほかの名もあり、安部次郎兵ヱ（源太左ヱ門の父）も加っていた。

このころ美作の篠尾城主中村氏、築田城の三浦氏、アサ井ノエキ氏らは、尼子経久の攻撃をうけて討たれた。従ったものは亀井・河本の諸氏で経久とともに高名をあげた。

1543 天文十二年八月

快円六十一才であったが、二所明神を当寺山内に勧請した。三沢為幸の討死後は一族は、才童子丸（遠江守為忠の甥・為幸の子）を地頭として協力していた。

天文十一年正月、大内義隆は毛利元就以下五万の兵を率いて山口を発した。十月三沢・三刀屋両氏は、石見・備後（多賀山・山内両氏）出雲の諸将十三人とともに尼子配下から大内氏に服属を願いでてこれに合流し、十二年二月富田城を囲んだ。これに対し尼子方は大内方の糧道襲撃作戦を展開し成功をおさめたので大内軍は困窮した。これをみたさきの十三将はそろって再び尼子方に帰投したので、大内軍は山口へ引揚げ、尼子氏は勢をもり返し、石見・備後も手中に収め、大森銀山もとりかえした。

こゝに於て十三将の筆頭格となって去就定まらぬ三沢氏に圧力を加えるため、この年尼子氏は横田庄をその支配下におくことにし、竹崎村には河本、大呂村には河制、中村には森脇山城守家貞、下横田村には大石（尾園村は備後多賀山氏の所領のためその代官が駐在）、蔵屋村には羽鳥、原口村には本田家吉をそれぞれ代官としがんじからめの体制にし、森脇がそれらの総代官であった。そして佐白も森脇の支配下に置いて三沢氏のしゅん動を押さえさせた。時に尼子方は民部少輔晴久・三沢方は七才の才童子丸であった。こうして尼子氏は備後・安芸・美作を制圧し八ケ国の守護となった。

そして永禄五年（1562）の夏まで約廿年間、尼子氏の支配は続いた。この間に、角・六日市・大市の町が出現したのである。この間の禁中への上納の記録は極めて少ない。大内氏にかわって西国に勢力を張り、尼子攻撃をはじめた毛利氏に三沢氏が内通したのが、永禄五年六月であった。退潮にあった尼子方にかわって、横田庄はふたたび三沢氏の支配となり、禁中への貢納も数が増したことが記録の上にあらわれてくる。

1544 天文十三年十月

には備後の多賀山・久代両氏が人質を尼子方に送って服属を誓った。

快円の記録によれば、この年の春は食糧不足と寒さのため、餓死者数知れずとあり、米の値段も暴騰し一升が百文、やがて二百五十文となった。大豆・麦は二升が百文になった。聖徳太子伝によれば、甲辰の年は天下大兵乱飢饉があると誌されているが、今年は甲辰の年であって心配であるとしていたが、七月二十一日の当地の市では、米は百文で三升五合にまで値下りし、八朔市（八月一日）には六升も買えるようになった。秋は出来がよく吉祥のしるしであると書いている。

「快円日記」「大永の古記録」の快円の記録はこれで終っている。復興は八分通りが二十年の努力によって出来た。次回には快円の別の記録によって盛時の岩屋寺山内の諸寺・諸社の状況を一覧表とし、その復興状況を明らかにして「快円」の項を終りたい。

「快円日記」には快円に続いて院主になった快義の記録が、一項書き加えられている。即ち

1552 天文二十一年七月

一ケ月を要して本堂の上葺をした。先年は六ケ村の寺庵が協力して竹釘を削ったが、今度は十五坊が削って、三斗入り三俵を用いた。この時の院主は快義であった。

快円の没年

快円の死亡の年は明らかでないが、記録から類推すると、絲原家文書「古代よりの聴書」には天文十六年快円存命（六十五才となる）とあり、十八年には院主快義で金剛坊から大林坊に入るとある。この間に快円は没したと思われる。

（筆者　横田史談会・高橋）

会員配布一部百円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字・糸原風亭書
第59号
3月号
昭和55. 3. 1
編集
奥出雲編集集団

明治維新後の仁多郡の立て直しの農村構造改善を推進した

仁多郡農談会（2）

―その成立の要因①続き

続・鉄業の不振

寛政十年（1,798）以来鉄山維持のために、「一銅か所凡そ米三千俵、凡そ金三千円無利子にして年々御貸下せられ、返却方は翌年四月より九月まで月割又は年賦をもって還納し、其他時々救助をもって維持し」というのが、出雲の鉄師がうけていた保護と助成であった。金融機関のない時代は藩にたよるほかはなかった。当時既に県制がしかれていたとはいえ、それに応ずる体制が整っていなかったので已むを得なかった。

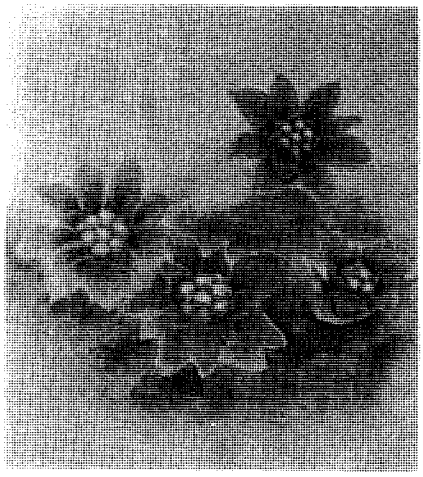
危機打開策

明治政府は都市では資本経済社会へ向っての充実をめざして、種々の施策を行っていた。そのための鉄鋼については中国山地が生産する和鉄は使用せず、輸入する洋鉄を使用していた。

そこで和鉄生産振興には、まず販売市場を拡大しなければならない。八年の鉄鋼価格下落のなかで、出雲の鉄師業者たちは協議し、島根県に対して品質の優秀性を再認識させるとともに販売斡旋の労をとることを要望した。

ついで松江に十人の鉄山経営者が集まり、鉄道に和鉄の利用を願うことなどを嘆願し、品質の改良についても話合った。

九年に入ると半値に下った鉄価暴落に対処するため、県の助成を願出るとともに、業者自身も鉄師締合をつくって、自主規制にものり出していくことになった。その時の鉄師名をあげると、田部長右衛門・絲原権造・桜井三郎右衛門・桜井洪造（奥田儀）・家島隆（布部）・永田四郎七郎（下来島）・卜蔵甚兵衛（竹崎）・石原市左衛門（下久野）梅木菊太郎（亀嵩）・中沢義三郎（高尾）・須藤源九郎（上山佐）・青戸清四郎（西比田）秦瀬兵衛（広瀬）・丸山官兵衛（横田中村）であった。



早春　藤原克己（水煌会会員）

とそれにつづくインフレーションで、やゝ価格ももちなおし、十三年ころまでは漸騰をつづけたが、十四年からは再び下落し十年代後半にはさらに深刻な経営危機におちいった。

これまでは経営者の鉄師だけで何とかしようと対策をねっていたが、こうなると危機は経営者の内部の問題にとどまらず、地域社会の問題となり、明らかな危機の深化と拡がりをみせてきたのである。十七年二月、郡内有志の荒木暁一郎（八川）、岡崎健蔵（横田）・川角松蔵（湯村）馬庭又右衛門（佐白）が代表となって、銅製鉄の不振が仁多郡全地域に重大な影響を及ぼすことの九項目をあげて、広島県の如く県の助成実施を、島根県に要望した。その要点は、

①樹木を伐採しないと繁茂して猛獣横行し、田園を荒蕪し、人畜に害を及ぼす。

②十月より三月までは降雪のため人馬の通行もできない。この間に砂鉄を採集し、そのあと地を開墾して良田を作って一挙両得をしていたが、これがないと半年間の業務を失することになる。

③本郡収穫米のうち、およそ六千石は年々鉄業者の購入するところで、それによって租税の義務を果している。これがないと農民はともに生活に苦しみ転落するに至る。

④数百年来鉄業に従事する良民数千人、今この業が廃せられると、浮浪の民郡中に充満し、盗児凶僕に変じて、弱肉強食の修羅場を現出する。

⑤薪・炭・鉄鉱運搬のために飼う牛馬数千頭（馬の割合大）があるが、鉄業が廃止せられれば、幾十町歩の耕地の肥料をどうして求めるか、田地変じて荒野となる。

⑥森林を伐採すると樹木繁茂し

鉄山経営と地域社会

ところが明治十年の西南戦役

水源の温和を計ることができるが、そうでないと冷水混々水田に灌漑すれば収穫は減少すること明らかである。

⑦森林を伐取して薪炭として、賃金を得ているが、鈩鍛冶屋の業がないと、貴重な土地も塵芥と同じである。

⑧鉄鉱を販売して他県他郡に商売するもの数知れず、鉄山休業すればこれらは口を糊することができず、坐して餓死をまつのみである。

⑨本郡の鉄業者は鉄鋼輸出によって、年々凡そ拾万円を降らない収入を得ている。それによって郡中の米麦及び薪炭その他の購入の支払が行われ、その労賃による収入によって郡民は生活をしている。業を廃する時は何によって、この収入を得ることができようか。仁多郡民二万六百有余人の衰退にかかわっている。今や聖天子の世、皇沢四周に溢るる時、然るにこのような窮民のあるのは、一大欠点というべきである。之を救わざればともに枕して黄泉に至る・云々であった。

ところが県からは何の措置もとられなかった。そこで鉄山経営者である絲原権造は、十一月県令（今の県知事）に嘆願書を出して

「私儀祖先より数百年鉄山経営に従い、毎年常雇五百二人農事に余力ある者千二百七人をその附属業務にかゝえて、ともに生活を支えてきました。近年、物価下落特に鉄鋼の不景気は休業に追いこまれ、各鉄師とも常雇のものはもとより、その他すべての郡民が稼ぎを失い……云々」

と窮状を訴えた。

続いて絲原権造は十八年一月三日付で、郡内各町村戸長（村長にあたる）に対して、鉄業の復旧維持についての方策を諮問した。即ち地域社会の盛衰に密接な関係をもつ製鉄業者の危機である以上、町村としても何等かの対策を講じてほしいと要望した。

これに対し下横田村大呂村八川村戸長武藤六郎兵衛は、「村会議員にはかり、もっとも至極であり休業は村費の未収はもとより、人民の活路を失うので、熟慮の結果、三村の貢納予備公債証書額面二千二十五円を抵当として、鉄山資金を拝借することに決した」と返答した。そして郡内各戸長連署して

①鈩は郡内二十七か所維持するが、設置場所は、宇根、槙原、八代谷、野土、雨川、鹿谷、卜蔵の七か所とし、あらゆる協力によって維持する。

②鈩経営維持の間は、仁多郡積立の貢納予備蓄積公債証書を抵当として、官より資本金を借入する手続きをする。

③鈩・鍛冶屋営業者へは郡中より、養米凡そ七千俵を年々与える。（方法等略す）

を評決した。（十八年一月四日）

こうした動きは古くから

特に中世半ば以降から、奥出雲が技術革新によって日本の製鉄の中心となってからは、農民は、製鉄業に何らかの関連をして収入を得て、その生活を維持して来たから、製鉄業者＝大地主層と、その他の地主層、農民は、出雲国内の他地方とは異なって、利害が同じ方向にあったから、鉄業不振の時はもとより凶作の時などにも、郡内が一体となって、打開のため、松江藩に嘆願をして来ている。時には

刻かけて煮る黒豆の甘き香の漂ふ厨辺淡き雪降る　野村節子

白銀のきらめく径に佇ち望む雪の吾妻嶺青空を裁つ　伊藤萩雨

床の間の千羽の鶴を寿ぎて屠蘇を祝へり家族七人　畑八重子

植樹祭に植えられし松青々といたく伸びゐつ三瓶北の原　渡辺観翠

掛け水のひかりて落つる音の中孫と唄ひて高菜を洗ふ　景山悦子

吾が宿は断崖にありあおあおと真下に水は淀みて流る　目黒成生

墨空に雪の山脈浮きいでて鴉の群の冷々わたる　真綿博子

雪深き軒の沈丁ほの紅くもうすぐ春と姑に指さす　永井弥生

殺戮のあとに印籠見する劇職場の昼の話題となりて

それだけのことと思いてにちにちのテレビドラマにひかれていたり　常盤はるまさ

雪の日を温くゝ孫らと過さむといく日もかゝりて炭を焼きたり　伊藤萩雨

雪解けの信濃の春を想ふ夜は千曲のせゝらぎ険に浮ぶ　安部夕波

島根大学教育学部附属小学校教諭

安部隆君・かづ子さんの結婚を祝して

八年の歳月越えて結ばれし愛の二人よ永久に幸あれ　安部夕波

（簸の上短歌会同人）

鉄師が自らの身命をかけてその交渉にあたっている。たとえば絲原家六代勘右衛門は、下郡役もつとめていた享保十八年、出雲国の大凶作の十月松江藩に出府し、郡民一致の嘆願を身をもって訴え、遂に仁多郡への特別の取計いを得ることに成功したのであるが、救米の郡内への配当を終るや、過労のため四十一才にて死去したのである。

「雲国民乱治政記」にあるように、郡役人の経験を自らの資産増殖に生かして、農民の立場をかえりみなかったために、農民の集団行動によって、焼打ちをかけられるようなことは、この郡内においてはなかったのである。それは製鉄業者と郡民のありかたが、それを裏書きしていることは今までの記述で明らかである。

こうした郡内の伝統が、明治になっても、装いを新らたにして動き出したのである。

軍需生産への活路

こうした情勢に県もようやく動き出し、政府工務省に相談して危機打開策がとられることになった。十六年には工務省、ついで海軍省からも技師が派遣されて、実地調査が行われた。そして十七年海軍省兵器局が、「銃器類製造用試みとして買上」が行われた。

時あたかも、十五、十七年再度の朝鮮事変、十六年から十八年に至る仏清戦争、十八年の朝鮮巨文島事件は朝鮮の風雲の急をつげ、十六年には徴兵令を改正して、国民皆兵制を布くとともに、海軍建設五ケ年計画など、急速な軍備拡張を緊急課題とするに至ったのである。

それにもかゝわらず、唯一の官営製鉄所である釜石鉱山（岩手県）は操業失敗で中止となり、政府、軍が必要とする原料鉄は、中国山地の民営製鉄業に期待しなければならなくなった。明治二十三年全国で生産された銑鉄二一、二三五トンのうち一三、五九二トン即ち六四％が中国山地で生産していたことをみると、この地方への期待が大きかったことを知るのである。

十七年二月、まず試験的に鋼地と煉鉄（大鍛冶屋で銑鉄から鍛造したもの）を各一万斤（約六トン）づつ海軍省が買上げて以来、絲原権造は新しい技術を習得させるために、技術者を兵器局製鋼所へ派遣するなどして、品質改善にも努力し、海軍省への納品をつづけ、もっぱら軍の原料鉄を生産することに活路を見出した。しかし二十一年のように、「鍛錬方粗悪」という理由によって、納入しても不合格になることもあって、順調ばかりにはいかないし、長い間勘と経験に頼って操業して来ている鈩製鋼製鉄の技術上の改善も、一挙に改良することは容易なことではなかった。そのためには根本的革新が必要であった。そして明治十八年には出雲国内の同業者は、新らしく『出雲国鉄業組合』を設立し、新しく開かれた軍需への対応を考えることになった。

鈩兼鍛冶屋業者六人、鈩専業者八人、鍛冶屋業者三十四人、そして鈩を中心とする山内でも、県の通達をうけて、近代社会に応じた秩序や、山内と村方との関係の取りきめも行われはじめたのである。

製鉄業の衰退

二十年代に入ると新しく建設された八幡製鉄所の操業開始と輸入の増加する洋鉄によって、十年代に切抜けて来た奥出雲の製鉄業は経営努力によっても、その圧迫をはねかえすこともできず、衰微の一途へとたどらざるを得なかった。

それでも十年ごとに勃発した日清、日露、第一次世界の三つの戦争ごとに迎えた軍備拡充の景気に支えられて、何とか操業を維持して大正中期まで続くことになるのであった。

その間技術面、経営面に改善の努力が重ねられた。元禄年間以来の天秤鞴（たたら）による人力送風も、三十四年には水車利用の鞴送風に進歩した。経営上においては営業勘定書の作成が行われて、各製造場の各期における収支勘定を明らかにして、現況を正確に認知することになった。いわゆる「ドンブリ」勘定を排して、

二月柴栗句会発句抄

二月十七日

拡幅道冬菜の畑削らるる　加納信子
落虎笛遠くに吠えて風邪に伏す　新出谷一華
客ありて女将いきづく冬の宿　渡部夕峰
吹雪中長距離電話しかと着く　糸原古志
焼却炉あかあか燃えて日脚伸ぶ　杠幸静
寒月や夜半の析（たく）の音冴えて　岡田麗水
藁砧（わらぎぬた）むかしの音に籠（こも）るなり　藤原樵夫
初孫の泣き声聞かす初電話　門脇花子
鬼となり追わるる保母の紅映ゆる　浅野としお
廃屋の駅の官舎の深雪かな　錦織富江
寒灯す酒場の隅に独り愚痴　高木白虹
寒廊下足萎えし夫妻の添う　小川あきお
突風に中洲の雪は川に舞う　中田巣鶴
日々雪よ牛貌を出す福は内　恩田魚跡
久々の日指しに向い鉢移つす　田辺竹野
酪農語る青年所（ゆえ）の指太し　岡田蹊花
冬木立いと刻輝れば息吹くかに　中沢斐水

各責任部門における収支を明らかにして、合理化への歩みを進めた。諸原料の消費の無駄を省くこと、労働能率の向上、運搬費の低減等に工夫を加えた。また養米の不足分買付についても、米価騰貴にあたっては、国内米をラングーン米にふりかえるなどの努力が払われている。

当時の経営者の覚悟をあらわしている文書の要旨を記してみると、

「いやしくも本営業は国家的事業である。大改革は一朝一夕の間にはできないが、条約改正（安政の仮条約がようやく改正され、欧米諸国と対等の通商並外交が行われるようになった）の結果として外国人が内地に雑居し、製鉄業においても将来大いに我々と競争しようとしている。もし不幸にしてこの国の製鉄業が、資本、器械両文明の進歩した外国の手に移ることになれば実に国家の不利益はもとより、個人においても永く後年に遺憾を残すことになる。本業の革命のためには同業者一致して深く考慮せねばならない最大の問題である」

とある。

明治三十七、八年戦没即ち日露戦争の時は再び好況をうけたのであるが、戦後の三十九年には価格が半減するという暴落となり、加えて諸物価騰貴のため、原料鉄、運搬費等もまだ値上りし、「錬鉄としては収支つぐなわない」ことになり、錬鉄を製造する鍛冶場に大影響を及ぼし、その維持が困難になったので、（鍛冶場は鈩で製産された銑鉄を脱炭して錬鉄とするところ）鍛冶場の数を減少してそれに対応したが、四十年になると、鈩数も縮少し、田部、桜井、絲原ト蔵ともにそれぞれ菅谷鈩・野土鈩・鉄穴鈩（雨川）・原鈩を一か所宛とそれに附設する鍛冶屋の操業にしぼって、損失防止に専念することになった。勿論生産額も微々たるものになった。

ところが第一次世界大戦がはじまって、再び活況を呈し、大正五年からは急速に生産がのびた。最盛期は大正五～七年であって、大戦が終結するとともに需要がへり、各鈩とも廃業することになった。

最盛期には絲原氏は大馬木に福禄寿製銑工場を、桜井氏は槙原にそれぞれ十米余の高さの角炉をもつ工場を建設し、木炭銑の製造を開始した。そしてさらにともに電気炉設備を計画し、鍛冶屋に変って鉄鋼生産を開始しようとした。その開始をまつまでに、本業の鈩が廃業に追いこまれたため、成功をみずしてともに廃業したことは、惜しいことであった。

近代製鉄業者の木炭銑製造

大正七年、株式会社安来製鋼所は、鳥上と岡山県の奥津（温泉の近く）に木炭銑工場を建設し、その製品を安来工場において特殊鋼に精錬することをはじめたのである。近代的技術と資本主義経営による成功であった。

さきに明治三十年代に奥出雲の製鉄業者たちが、「外国人の手によって製鉄業が握られる。今こそ我等業界は事業の大改革をして国益を計らねば・・・・」と覚悟したことを述べたが、遂に奥出雲の製鉄業者は長い長い鈩製鉄の火を消してしまったのである。

それは幸にも外国人ではなく、日本人によってではあったが、その技術と経営は外国から学んだものであった。

輸入していた洋鉄も、幸にも国内資本ではあったが、外国からの原料と技術によって、国内生産することになった。（今日世界上位の製鉄国に成長）。角炉で砂鉄と木炭から製する木炭銑製造も、外国技術の長所をとり入れたものであった。

しかしながら

本論から少しそれた感はあるが、

本誌に度々詳説したように、伝統的美術品である日本刀の材料としては、洋鋼はもとより、木炭と砂鉄から生産する木炭銑から精錬される科学の粋を誇る特殊鋼も適当ではなく、伝統のたたら製造による和鋼（玉鋼）が再認識され、鈩の火が消えてから十数年たった昭和十年前後奥出雲の各地で、靖国鈩、叢雲鈩その他が相次いで復活した。

中世以来、奥出雲の全住民が育てた「たたら操業」がよみがえったのである。それも敗戦とともに全く廃止されてしまったのであるが、それから三十二年振り、再び日本美術刀剣の重要な原料として、国の文化財として復元したのである。

奥出雲が中世半ば以来鍛えあげた伝統技術がこゝに凝集しているのである。

（筆者　横田史談会　高橋）

あとがき

○写真（1頁）は
第2回水煌会色紙展
（2月24・25日　よこたショッピングセンター）
の作品から撮影　横田フォトクラブ　**荒金俊夫**

水煌会代表は岡田麗水
○簸の上短歌会代表は安部夕波
横田柴栗句会代表は岡田蹊花
横田フォトクラブ代表は杠　義盛
の諸氏で毎月定例会を開いて同行砌磋と懇親を続けておられます。

○町内の文化関係（詩歌・教育）の「**石碑めぐり**」を写真と解説で載せたいと思います。御協力をお願いします。

○毎月必ず第一土曜日に本誌を発行します。月初めのこともありますので、原稿は二十日に近い日にお願いします。印刷所の多忙の二、三、十二の月は少し早めにお願いします。

（今月編集担当　横田史談会）

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 60 号
4 月 号
昭和55. 4. 5
奥出雲編集集団

仁多郡農談会③　俳句　短歌　鉄にまつわる話(1)

明治維新後の仁多郡の立て直しの農村構造改善を推進した

仁多郡農談会(3)

—その成立の要因②—

農業近代化は西洋直輸入農法

明治農業は直輸入農法で、近代化のスタートをきった。維新以後における西洋文化の輸入は、各部門ともにめざましかったが、農学や農業技術の領域でも、西欧先進国の新知識が積極的に導入された。そして従来の伝統的な主穀生産中心を改めて、販売あての海外輸出をめざした、商業的農業へと転換してゆくのであった。そして水田をなくして桑畑にかえてしまい、養蚕業を盛んにとか、畜産振興でもっと肉を食べる必要があるとか、アメリカ農業のように日本農業も大農経営方式に変えねばならないという説が盛んとなった。

種子も農機具もつぎつぎに直輸入された。男爵イモと呼ばれるジャガイモは、日本の気候風土に定着普及したが、大部分は不成功に終った。

島根県では

明治七年に出された島根県の告諭では、「吸利の実」を目標とする農業をめざし、国富増強を目的に輸出振興と関連する、蚕糸と製茶そして立地条件に見合った作物と、経済性に富み時勢に応じた作物を選ぶよう強調している。

この輸入種苗が適地適産となるためには、県の試験研究機関の設立と活躍が必要となってくる。明治八年県庁内に、樹芸試験場が設けられ、桑・茶・果樹・蔬菜の試験栽培と（アメリカ産のネギ・アスパラガス等々）種苗の配布、新農具（プラウや持抱犁など）の用法試験を行った。のち乃木福富に移された。

このほか県が勧業施策として行ったのは、農事試験係、農事通信制度、各種伝習教師招待、各種共進会展覧会への補助助成、勧業諮問会制度などであった。

いずれも、新しい農業の普及と奨励をすゝめる目的としてつくられたもので、十一年に新設の農事試験係、十六年の勧業諮問会などには、県下の豪農のなかから農事改良に熱心なものを選んで任命し、それぞれ自分の所有地で、それぞれの地域にふさわしい作物の試作をさせ、その結果を報告させたり、技術交流させたりしたもので、その地方の大地主であり名望家といわれた、豪農層の活用に特徴をみることができる。

春の雪と笑顔　若月康男（横田フォトクラブ）

農事試験係制度と絲原権造

島根県は明治十一年に農事試験係の制度を設けた。これは「人民ノ請願ニ依リ設クルモノナレバ給料等一切支給セザルモノ」で試験係は、「耕地凡反別五町歩以上ヲ有シ……植物試験ノ為耕地壱弐反歩位ノ試験場を設ケ、其試験費等ヲ厭ハス内外穀菜及果樹等ヲ試植シ、其地ニ適地ハ勿論将来民益トナルヘキカ否カ精密試験ヲ遂ケ）ることで、その得失をはじめ培養の方法生育景況等を、親戚知己その他有志に知らせ、漸次農産の道を開運せしめることを目的とするものであった。

前号までに述べたように、鉄業不振、経営危機にたたされていたたら経営者であると同時に、多数の小作人をかかえた大地主でもある絲原権造は、農業生産への積極的な意図をもち意欲をしめした。そして県内で最も早く、五月一日付で農事試験係に任命された。ついで田部長右ヱ門（吉田村）、山本秀太郎（知井宮）、福庭三郎右ヱ門（湯町）ら四名が任ぜられた。

明治十六年八月の絲原権造の「植物試験場創設以来景況略記」によれば、大谷村に六畝二四歩、三成に二反二畝五歩の土地をさいて、二五〇種に及ぶ品種の試作を行った。なかでも本郡の在

来の分に優り、能く地味に適し収穫多量を得て最も衆人の望を嘱せしものは、「英国大小麦、米国莨(たばこ)、近江国縮緬南瓜、東京秋田大葱、阿波国小千本藍、薩州桜島大根、秋田大蕗」などであった。そこで郡内の各村の希望者にその種子を配布した。とくに力を入れて研究したのは水稲・大麻・桑苗であった。

稲の品種改良

明治十三年国内の品種数十種を、大谷・三成・横田・下横田・中村・大馬木・馬馳・三所・佐白の九ケ村で試作させ、反収三石以上の収穫があった良種をえらんだ。それは横田の茶早稲（幕末に六坂の福田勘兵ヱ発見育種のもの）、因幡の明神早稲、栃木の冷水早稲、岡山の清水糯早稲、栃木の高根沢中稲などが選ばれたもので、配布した人々は、明治12年96人、13年137人、14年108人、15年144人、16年8月までで114人であった。

大麻の改良

大麻は仁多をはじめ飯石、邑智の各郡の山間部の特産で、備後に移出され畳表製造に使われていた。仁多郡では大麻は扱苧・荒苧を製する習慣であったが、明治十三年六月からは、栃木県下野国安生幸七を教師として自費で招いて、白苧をつくる技術を学ばせた。伝習生は三十余に及び、以来年々この製造が盛んとなり、郡内の利益をもたらすことになった。

一方その年の八月には三成植物園内へ農産物陳列を新設し、こゝで試作した内外の種子類及び農産物品等を陳列して公開した。

養蚕業の振興

養蚕業の進展のためには、県は松江に十一年、蚕業伝習所を設け、先進地の滋賀県から教師を招き、一方数ケ所に桑園を設けて桑苗木を育成して配布するなどをはじめた。それに応じて絲原権造は、明治十五年一月には横田町大市の宅地建物を購入し、宅地内の畑五畝九歩を、桑苗試験場とし、その年二千七百本を得て配布した。そしてこの建物がのち農談会創設の拠点となることになった。

こゝで仁多郡の養蚕業についてふれておくと、郡内では幕末ごろからはじめられた。松江藩の物産方が、郡内に養蚕取引人五人と頭取一人をおき、兵庫県但馬地方から蚕種を求めて但馬の飼育法を広めていた。当時はまだ専門の桑園もなく、野生の山桑を使っていたが、物産方では、桑葉の良否とその需要が発展にかゝわるとして、優良桑葉を無料で配布して奨励した。

廃藩置県後はこうした助成もなくなり、折角芽生えた養蚕業も不振となったが、県の勧奨で再び盛んになっていった。

養蚕農家数は、明治十五年仁多郡は県下最高で、ついで意宇郡（今日の八束郡南部）、隠岐一部が続いていたが、飼育法は極めて幼稚であった。郡内の桑苗改良によって一段と気運が盛り上がったため、県では十九年から巡回教師を派遣してきたり、二十年には四名の養蚕家を郡費で長野県に送り、栽桑養蚕の法を伝習させた。

製糸も幼稚な手引であったが、十七年から座繰にかわり、十九年にはケンネル式が導入され、二十二年には横田に私立製絲伝習所が、絲原武太郎（権造の子）の尽力によって設立され、製糸技術の発展に貢献した。横田の私立製絲伝習所は、養蚕伝習所と一緒に設立されたものである。

養蚕伝習所の設立は前年に仁多郡郡長門野長道より、「民業ハ可成的民業ニ委ネ、干渉ノ省カルヘキハ之ヲ省クヲ依テ郡是トスル今日ニ付」と仁多郡を二分にして、絲原と桜井の両人が私費を以って設立し蚕業普及のために尽してほしい。多少の損失があっても郡のために永生の幸をもたらす基礎をつくる美挙と思うという、強い要請があったものである。そして長野県へ行った伝習生が、その教師となって伝習普及にあたった。

このように、絲原の私立試験場は明治十九年、郡立種苗場が三成に開設されることになった時、郡立に切りかえられるまで継続され、明治十年代における、仁多郡農業近代化に大きな役割を果たしたのである。

三月柴栗句会発句抄

残り鴨愛しきまでに白き胸　糸原古志
古時計刻む夜更けの春を編む　錦織富江
水仙置き机辺に春をよびよせる　岡田蹊花
雪跳て町道を行き浮かれ牛　恩田魚跡
風邪閉鎖校舎森閑として時計打つ　浅野としお
片手にて喪服さばきぬ雪解道　加納信子
芹未だ摘むには早くせせらげる　中澤斐水
飾られし雛より春の息吹初む　新出谷一華
園児らに草萌ゆ川辺の道ありぬ　杠幸静
厨にも鼻歌の漏れ水温(ぬる)む　中田巣鶴
やなの鯉泳き顔(がお)見せ春めきぬ　田辺竹野
飲み過ぎの寝覚めの悔や寒戻り　高木白虹
老父寿う平凡の一族春の宴　小川あきお
声掛けば寒鯉鈍(にぶ)く尾を変えぬ　植田美代子
主(あるじ)なき盆梅しかと花をつけ　渡部夕峰
凍て厨夜も流せる水の音　藤原樵夫

他方牛馬改良のためには、農商務省から、デボン種牛の貸与をうけ、広島鎮台が使っていた種馬の払下げを受けるなどして、牧牛場を開設し、後年の八川に設置された島根種馬所の基礎をつくった。

上からの近代化と農民

明治のはじめは政府も県庁も近代化の指導に熱心であった。熱心のあまり上からの押しつけも行われたようであり、農民は愚かなものともきめかかっていた。そうなると逆に農民は反感をもち不信をあらわした。今日とは違い、当時の農民は国や県の補助金をもらってなどということは、ユメにも思っていない。むしろ経済活動に政治が介入するのは反対で、自由にまかせてほしい、試験研究も身銭をきってやるところに意義があると考えていた。従って県会の勧業費審議でも勧業予算の削減を、「勧業は地方政府の干渉をまたざるところで、有志有力者が自ら資産をなげうって、其の責に当るべきもの」とあえて強行するという状態であった。こうした背景があったから、先の仁多郡長の養蚕伝習所設立の要請書の文面のような言葉が書かれたのである。

新しい直輸入農法が、みるべき成果をあげることがなかったことから、日本の在来の伝統農法への見直しがはじまった。明治十年代の後半の不況の中ではじまった、在来農法再評価の運動は「老農」「篤農」と呼ばれた人たちによって起り、経験を通しての農法が大きい説得力をもって弘められた。出雲地方にも北九州の林達里、関東の船津伝次平らがやってきた。米づくりを中心に農民に語りかけ、西洋直輸入農法のゆきづまりの方向転換を指導した。

そして仁多郡農談会への結成へと向うのである。やがて新しい作物導入や試作よりも、むしろ水稲作の改良に重点をおく方向へ試験研究も進み、島根の米づくりは、この時から本格的なものになったのである。今日徳川時代の農業技術のみなおしのため——農作物と土地、作物と有機質肥料——これらに関する古書が続々復刊されて、かくれたベストセラーになっているのは、往時と同じような反省のあらわれであろう。（未完）

当時の印鑑

短歌

再会　常盤はるまさ

肩も触るる近きに坐り汝はただ三十余年の刻の間を言う

老いづきて醜きわれに汝恋うる潮充ち来るみずみずしくて

永井弥生

戦ひを知らぬ若者の生きざまに我ひたむきに生きし日を恋ふ

真綿博子

ことことと雪の足音早まりて名のみの春にまたも降り積む

野村節子

庭に放つ鶏春の陽を浴びてつつじの陰に卵産みおり

渡辺観翠

野火燃ゆる工事現場を見つつゆく風冷ゆるなか黄昏（たそがれ）るる野辺

目黒成生

雪の日は日々続きおり学童ら今朝も声なく列なしてゆく

畑八重子

早春の陽ざしを求め鉢はこぶ夫の背にかるく風は薫れり

景山悦子

涙ぐみ病室に入り来し娘等に痛さを耐えて笑みかけんとす

（交通事故にて入院す）

春愁　安部夕波

かなしみを秘めて孤独の三年間妻の写真にぐちこぼしつゝ

から松の情緒ゆたかな詩を詠みし白秋しのぶ軽井沢の径

（信濃路の旅にて）

鉄にまつわる話（一）

やまたのおろちはどこにでも

（八俣遠呂智）

冶金のはじまり

人類がはじめて知った金属は、自然に産する金＝自然金だったようである。しかしこれはあまりにもやわらかくて、道具に使うことはできなかった。道具として使えるような金属の存在はどうして知ったであろうか。遺跡の教えるところでは、はじめから鉄を知っていたのではなかったことは確かである。

動物と違い、火を使うことを知っていた人類は、なにかの拍子にある種の石＝実は鉱石を、火中に投ずると、きれいな色を出したり、異臭を放ったりすることに気がついたに違いない。積極的にこれを利用して、呪術を行う者もあらわれた。火の消えたあとには、わりあいに低い温度で熔ける金属、たとえば不純物をたくさんに含んでいる銅が固定化して残り、その石と異なる固いものも、叩けば変形することが知られたのであろう。なかには自然銅の塊として銅が発見されたという場合もあった。

こうして特別な鉱石を使えば、耕作用具や、刃物、道具・武器などに便利な金属として、青銅ができることを知り、積極的に銅とスズを熔け合わせて、青銅器を作ることを覚え、あれこれ繰り返しながら、いろんな作業を行う間に、火を使う方法、風を送る方法、鉱石を熔かしたときに入れるものの工夫などにも熟達して、次第に鉄鉱石を熔かす技術を身につけていった。

鉄の融点（一、三三五度）は銅に比べれば三〇〇度近くも高いので、鉄の冶金に至るまでには、いろいろの工夫と時の経過が必要であった。工夫は勿論失敗の連続のあとに成功となったのであって、これらのことは知る由もないが、民話などのなかにいろいろな形で残されている。いまそれをひろいあげてみると、

やまたのおろち

鉄にまつわる、おろちの話は大変に多い。最も有名なものは船通山を舞台とするものであるが、これと同じ話は広島県安芸国可愛の川上にあったと、日本書記にはかいている。そしてどこにあったと地名は明らかではないが、船通山の話のあとに少しずつ違った似た話がいくつか書いてある。本誌一月号に書いたように、出雲神話即ち出雲特有の神話でなく、紀記の成立の事情から、あちこちにあった同類の神話を出雲を舞台にまとめられた神話即ち出雲的神話であるからである。書記は良心的編集が行われている。鉄に関することは書記のあちこちに時代を下って書かれているが、それらは各地で鉄がつくられ、その製鉄族がこの民話をもちあるいていることを裏書きしているのである。（本誌29・30・31・33号も参照を）

船通山のおろち退治と同じ時代に、石川県羽咋郡の邑知潟の大蛇が大己貴命（古事記では大国主命にあたる）によって、退治されたという話がある。岡山県の村の長者が金屋を使って大蛇退治をした話、関ケ原の古戦場の近くにある伊吹山にもある。

また坂上田村麻呂といえば、蝦夷征伐の将軍であるが、この勇猛な将軍が退治した巌手山の悪路王の話も、謡曲「田村」の中にあって語りつがれている著名なものである。

一ツ目小僧

と言えば可愛いい妖怪といったイメージで、お化けのQ太郎に似たものを想像するが、これも全国的に大変多く、柳田国男の民俗学には沢山に集められている。これも最近の研究では、製鉄業と密接な関係があることを明らかにしている。（本誌一月号に少しふれておいた）これは大昔の製鉄の神が落ちぶれた姿になったものの話で、その後神道が成立すると神となり、天目一箇神といわれ、各地にまつられ、附近には製錬（製銅・製鉄）遺跡が必ずあるとされている。

その一つを紹介すると、熊野の山中に「一ツ踏鞴」という名の一ツ目小僧がいた。十津川の上流にある雲取山で旅人を襲う強盗になっていた。ある時妙法寺の大釣鐘を奪い、大変重いので那智深山のわが家へ引きずって帰ろうとしたところ、色川の里の郷士・狩場刑部左ヱ門という弓の上手な者が追いかけて来た。弓を射かけられて、命があぶないと、一ツ踏鞴はこの釣鐘の中に身を隠した。さすがの強弓の士も、放つ矢はいずれも音をたててはねかえるだけであった。そこで刑部左ヱ門は「しまった。矢がなくなった。残念無念」と叫んだ。はかられたとは知らない一ツ踏鞴は「さあ今度はこちらの番だぞ」と釣鐘から出た。そこへ待っていたとばかりに、刑部左ヱ門は矢を放し、見事に退治してしまった。こゝまで引きずって来たあとが、今でも残っているという。

一ツ目の踏鞴とはつまり「製鉄炉」のことである。こうした話は中国の「大唐西域記」からギリシャ神話、聖書にまで及んでいる。

（おろち退治の話以下は鉄の考古学の権威者窪田蔵郎氏の本を参考にさせて頂いた。次号では、氏の「わかり易い鉄滓＝かなくその見方」を特集致します。

この続きは、青銅・黄銅・鉄への移り変りとして六月号に）

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字・糸原風亭書
第 61 号
5 月 号
昭和55. 5. 3
奥出雲編集集団

やさしい鉄滓の見方

窪田蔵郎

近年各地の発掘報告書で鉄滓の出土が報じられ、また発掘調査はされていないまでも、鉄滓らしいものが出土するという話をしばしば聞くことがある。そうした場合に、一寸とした知識があればいろいろな事が判るのであるが、大部分の場合は大量に出土したとか、整理箱何杯分で片付けられているのが実情であり、反対に最近では何千何百何十何個採集されたなどと書いているものもある。そこで本稿では、鉄滓を採集したらどうしたら良いかといった点について、難解なことは一切抜きにして即物的に記してみたいと思う。

まず鉄滓を採集して大切なことは、量の点もあるが質の点に重点を置いて見なければならないということである。この点を注意しないと、その遺跡が何の遺跡なのかということが判らなくなってしまうのである。勿論、考古学的な発掘成果と充分な照合をしなければならないことは言うまでもない。

土の中から出た、鉄のような溶岩のようなそんな固りを見付けたとき、まず何だろうかという疑問をもつのは当然であるが、その粗朴な疑問がこのテーマの出発点になるのである。

鉱物を製錬すれば、鉄に限らず何を製錬しても滓が発生する。鉱石の成分・炉壁の成分・混合物の成分などが溶融して出てくるわけであるが、対象金属の酸化物もかなり混在している。そうしたものが発見されるわけであるが、中には非常に紛らわしい物も少なくない。これらを判り易く表示すれば次のようになるであろう。

- ○鉱　滓
  - 非鉄金属滓（銀・銅滓など）
    （注）これらにも製錬と加工の場合があろう。
  - 鉄　滓
    - 製錬滓
      - 野タタラ滓
      - タタラ滓
    - 鍛冶滓
      - 大鍛冶滓
      - 小鍛冶滓
    - 鋳物滓

○類似発生物（須恵竈溶融滓など）

表示すれば単純であるが、多種多様、複雑怪奇ともいえるほどいろいろな物がある。

◈類似発生物◈

例えば須恵竈や炭焼竈でも、これらの遺構の炉壁を見ると鉄滓と非常に良く似たものが付着していることがある。竈の床に埋め込まれたような状態で見受けられることもある。はっきりした場所なら間違う気使いは無いが、その塊が移動して他の場所で採集されたら、それこそ全く判らないことになってしまう。このような場合でも粘土に鉄分が多く含まれていたりすれば、分析しても鉄滓に壁の部分がからんだものを採集してしまったのかと誤ってしまう。砂鉄が混入した粘土なら顕微鏡で見ても立派に半還元のマグネタイトが見える。こうしたケースになると余程注意しなければ、かなり習熟した人でも間違えてしまうことがある。

◈非鉄金属滓◈

銀や銅鉱石を製錬した場合にも鉄滓と非常に良く似た滓を発生している。銀の場合は大森銀山の坑道入口に数平方メートルに散布しているので御覧になられた方もあろう。また銅の場合は筆者は島根県のものを見学していないが、岡山県の吉岡銅山（吹屋銅山）、岐阜県の赤坂宝生山などにも大量にある。これらは外貌がやゝ青味を帯びているが、ほぼ飴状鉄滓に近似しており、分析してみると目的鉱物を抽出してしまった後では鉄分が多量に含まれた滓を発生していることが判る。誰しも鉄滓ではないかと思うほどである。事実従来の報告例で、銅滓と製錬滓や鍛冶滓を間違えて報告しているものも無くはないはずである。顕微鏡組織は従来の私の経験では、反射光で見ると鉄の製錬滓の場合のファイアライトや共晶質の混成組織と一見似ているが、色調が灰がかり明瞭さを若干欠いている。

◈製　錬　滓◈

弥生時代以来約二千年の永い歴史の中では、鉄の製錬技術も大きく変ってきている。タタラ吹きという言葉は記紀を西歴七〇〇年代のものとしても既にその記載があり、島根県の方々が砂鉄製錬の源流と考えているタ

タラ吹きも、この地方がわが国で最も良質な製鉄資源に恵まれていて、経験の蓄積によって最新鋭の技術を開発したことは確かであるが、同じタタラでも出雲風土記に記載のタタラと、金屋子神社の絵巻や三保関神社の絵馬のタタラ、さらに吉田村の菅谷タタラでは全く技術水準の異なるものであって、嘗て言われていたように一貫して同一技法で操業されていたものではない。そのうえ鉄山毎に資本力や技術力がかなり違っていたはずであり、江戸後期辺りになっては生産性向上のためにいろいろな手法が開発されている。従って出雲地方の製錬滓でも実際は多種多様である。まして他地域のものには、砂鉄でなく鉄鉱石製錬の場合もあってより複雑である。

原始的な製錬滓には自然条件による質の違いはあるが、人工的なもの（鉄源装入や送風コントロールなど）は少ない。出雲地方のものを中心に述べれば、野タタラと呼ばれていた小型炉で還元鉄を生産するような場合は、分離の技術がひどく悪いので分析して見ると鉄分が多く、また鳥髪山周辺の特徴である真砂のような良質の鉄源を使った場合は、極めてチタンの少ない、勿論銅・燐・硫黄などの有害成分も僅かな製錬滓が発生している。これらを顕微鏡で見ると大抵の場合は、黒い（濃灰色）の共晶質、黄色（灰色）のファイアライト、それに白い（明灰色）で雪花状あるいは樹枝状のマグネタイトを呈しており、しかもその結晶はわりと大きい。チタンが少ないのでプシュードブローカイト・別名偽板チタン石と呼ばれる針状結晶もほとんど見られない。

弥生期など極く古い時代と推定されている鉄滓には往々にして、分析データでは製錬滓の特質を備えているが、鉱物組成はウスタイトを示しているものがある。外国の鉄滓にもこれが多いが、この点については更に今後データを豊富にして解明して行きたいと思っている。

高殿による江戸時代のタタラでの製錬滓は前述の古い製錬滓とは異なり、鉄滓の性質に自然条件よりも人為的条件の方が強く現れてくる。この年代になればタタラ吹きの技術は完成期に入るわけであるから、設備技術の進歩とその操業条件もほぼ均一化してきている。従って発生する製錬滓も完全とは言えないまでも一定の傾向をもったものとなる。しかし、それでも原料入手の地理的条件をはじめ、操業過程での装入砂鉄（こもり砂鉄、真砂、赤目、廃砂混入など）同様に燃焼管理上の風圧・風量のコントロールなどもあって画一的なものではない。もっとも最近では実験操業の成果によって、この操業過程であるこもり、上り、下り、それに流出滓と炉内残留滓などの発生製錬滓の特徴はほぼ把握されているようであるが、しかし出土鉄滓にあてはめて推理することは並大抵のことではない。

筆者の扱った例では、これらの製錬滓の分析値は表示した通りである。技術の進歩によって鉄分の抽出がやゝ良くなってきていると言いたいが、実際は往古と大差なく、上りや下りにその傾向が認められる。顕微鏡組織では徐冷と急冷の関係もあろうが、マグネタイトの結晶に微細なものを見ることが多い。ファイアライトは出る場合と出ない場合がある。

◈鍛　冶　滓◈

鍛冶滓には荒鍛えをしたときに発生する大鍛冶滓と、器物に成形鍛造する過程で発生する小鍛冶滓とがある。

大鍛冶屋と特別に呼称して生産工程の一部分を担当していたのは、雲伯地方の大量生産組織に基づくもので、地方では安価な鋼を購入したり屑銑を購入して、鍛冶屋が自分で適当に処理していたところが多かったであろう。このようなわけで、雲伯地方では大鍛冶と小鍛冶の滓はそれぞれ単独に存在しているが、地方では混合した状態で出土することが少なくない。

大鍛冶滓は主として庖丁鉄を造ったときの発生物であるが、チタン分の低い鉄滓であり、鍛造工程で酸化防止のために藁灰や粘土水を使用するが、これらの影響は鉄分の高いのに相殺されて、それと判る顕著な分析値を示していない。鉱物組成は蚕の繭をまき散らしたような美麗なウスタイトである。またそれらが方向性をもって樹枝状に配列されたような形状を示すときもある。小鍛冶の場合も全く同様である。これらの形状について言えば大鍛冶は不規則な塊状であるのを原則とするが、地方のものには椀形のやゝ大ぶりのものがある。小鍛冶の場合は大体手掌状である。これはその発生が鍛冶火床の素灰の上に流下残留して形成されることからくるものと考えられる。

◈鋳　物　滓◈

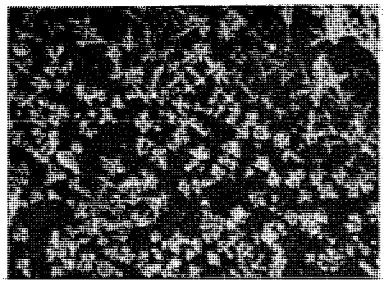
鋳物滓は原則として銑鉄を再溶解する作業で発生するものである。しかし古くは還元鉄に加炭しつゝ溶融させて湯を造ったこともあったのではなかろうか。もちろん溶湯を造るためには、るつぼかこしき炉が必要であったであろうが、まだ適確なものを筆者は見ていない。従ってこの作業で発生する鋳物滓は、炭素の高い鉄が高温で溶融して滓が上面に浮き出たものであるため、含有成分には酸化鉄系のものが少なく、鉱物組成も共晶質で部分によってはフェアライトが折出しているような状態のものが多い。

×　×　×

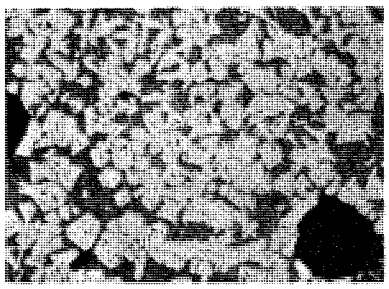
以上鉄滓について極く簡単に述べたが、これでも判る通り鉄滓を調べることによってどうい

	遺跡名	T. Fe	FeO	Fe_2O_3	M.Fe	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	MnO	TiO_2	Cu	P	S
野タタラ滓	福島県山居	24. 76	14. 57	17. 43	1. 25	25. 08	6. 64	2. 00	4. 24	0. 98	27. 27	0. 002	0. 030	0. 033
	長野県坂城	44. 77	50. 06	11. 04	1. 14	10. 68	4. 73	4. 00	3. 31	0. 57	13. 09	0. 003	0. 480	0. 038
	新潟県真木山	40. 57	29. 48	23. 34	1. 34	16. 06	5. 54	1. 18	2. 88	0. 74	16. 10	0. 001	0. 085	0. 039
	滋賀県北牧野	42. 54	51. 33	3. 46	0. 22	29. 72	5. 84	4. 72	2. 00	0. 30	0. 40	0. 040	0. 136	0. 029
	島根県金屋迫	49. 17	56. 30	5. 62	1. 48	21. 00	6. 07	2. 50	0. 86	0. 45	1. 88	0. 001	0. 036	0. 053
永代タタラ滓	広島県六ノ原	45. 94	44. 83	15. 86	tr	21. 10	5. 41	2. 07	0. 96	0. 64	3. 087	0. 007	0. 115	0. 016
	鳥取県床無	47. 75	49. 00	12. 65	0. 79	20. 54	5. 67	1. 96	0. 66	0. 96	3. 60	0. 004	0. 069	0. 033
	〃 久住	40. 14	45. 12	6. 82	0. 34	22. 68	4. 84	2. 51	0. 87	2. 00	11. 57	0. 008	0. 107	0. 034
	〃 上種	43. 90	52. 59	4. 31	—	15. 60	5. 26	0. 91	2. 13	0. 56	14. 95	CuO 0. 01	0. 005	0. 016
	島根県菅谷	34. 07	36. 86	7. 07	0. 47	27. 66	6. 08	2. 29	1. 28	—	11. 43	0. 002	0. 125	0. 032
	富山県滑川	35. 27 27. 41	35. 63 21. 65	9. 62 13. 93	0. 84 0. 84	28. 12 40. 34	7. 96 7. 28	3. 07 2. 99	1. 23 0. 41	0. 63 0. 61	11. 38 9. 78	0. 002 0. 002	0. 342 0. 258	0. 020 0. 017
鍛冶滓	奈良県豊田	55. 87	48. 72	22. 36	2. 36	15. 60	3. 55	1. 12	0. 34	0. 06	0. 15	0. 068	0. 010	0. 013
	千葉県萩ノ原	60. 50	54. 00	15. 30	7. 81	10. 00	2. 47	2. 62	1. 19	0. 087	1. 10	0. 010	0. 073	0. 035
	宮城県多賀城	50. 87	58. 71	8. 47	0. 68	23. 93	3. 85	1. 05	0. 42	0. 10	0. 16	0. 008	0. 120	0. 036
銅滓		30. 30	31. 18	6. 28	1. 67	35. 70	12. 44	3. 79	1. 70	0. 37	0. 65	0. 35	0. 074	0. 868

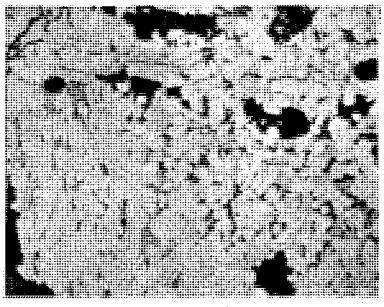
注1）鳥取県東伯郡上種製錬滓は金築稔氏のデータによる。　注2）千葉県市原市萩ノ原鍛冶滓は東北大学金研データによる。



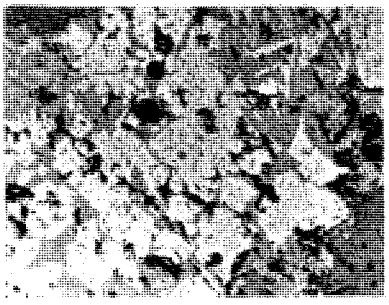
島根県
吉田村菅谷
反射光×100
永代タタラ製錬滓



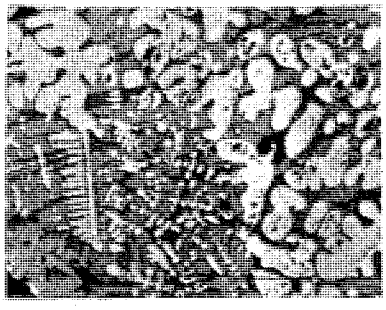
熊本県
玉名市蛇ケ谷
反射光×100
野タタラ製錬滓



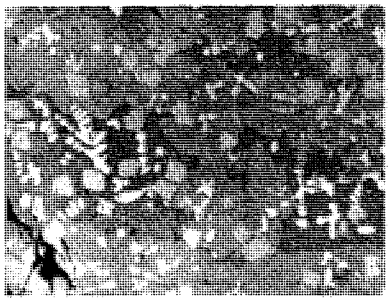
島根県
横田町大呂靖国
反射光×100
左下・大鍛冶滓



長野県
坂城町開畝
反射光×100
野タタラ製錬滓



福島県
梁川城内
反射光×100
小鍛冶滓



島根県
横田町金屋迫
反射光×100
野タタラ製錬滓

う生産過程で発生したもので、どの程度の技術かということは知ることが出来る。しかし、はっきりした遺跡の場合は問題が少ないが、貝塚のような場所や鉄滓捨場で永年廃棄され層状になっているところなどは、発掘成果のほか付近の伝承なども加えて慎重に調べる必要がある。また、よく二～三個の鉄滓を持ち込んできて、考古学的な話も現場の写真も無しで、これが何時代のものかと問われるようなことも少なくないが、そのためには考古学の成果や^{14}C等のデータ等を総合して慎重に決めるべきで、軽々に結論を出すべき性質のものではない。

俳句

春浅し契りの指輪添えて逝く　加納信子
夫逝きて五十路の重み落椿　田辺竹野
帰鴉一羽遅日の暮色ひきゆけり　杠幸静
癒へ切らぬ病を憩いて窓の春　岡田麗水
頬漏らす雨の温もり種おろす　浅野としお
惜別の詩をつぶやく東風の浜　渡部夕峰
楓の芽宿る雨滴も染るかに　中澤斐水
堤防の陽炎川辺の石に消ゆ　中田巣鶴
野に憩ふ下より朋ゆるものの冷え　藤原樵夫
主なき山寺ひっそり花の雨　錦織富江
住み古りて住み飽かぬ里梅咲けり　岡田蹊花
辛夷咲く峡より望む雪遠嶺　糸原古志
寺々のみ仏花に酔い給う　高木白虹
軒裏の蜘蛛下り来て日脚のぶ　新出谷一華
鶯の惜しむ鳴く音は棚田奥　恩田魚跡
春疾風雛の宴の玻璃を打つ　小川あきお

春のうた

徒らに煙草くゆらし虚構の歌つゞりおりたり小暗き部屋に　常盤はるまさ
つま弾けば空しき低音身をゆする主なき部屋の白いギター　真綿ひろ子
ほのぼのと花あかりして梅林は白とピンクの花盛りなる　野村節子
同窓の友に送られ柩ゆく桜おそ咲く卯月なかばに　渡辺観翠
久びさに孫等と浸る谷間のいで湯の温もり春酣に　畑八重子
春闌けて陽射し明るく強まれば池の緋鯉は生々として　目黒成生
不注意を責めもせずして青年は花置きて今日も病室を去る　景山悦子
梅林の満開の花賞でにつつ温き日和を馬鈴薯植うる　野村節子
早春の陽をまぶしみつ長柄鋸存分伸ばして桧枝切るなり　伊藤萩雨

花と地蔵

日参の地蔵へ急ぐ坂の道色むらさきに犬ふぐり満つ　永井弥生
地蔵尊の花立のあしび白々と日暮の山門に冷えし雨ふる　安部夕波

孤独の中で

対話なきひとりの夜がわびしくて息の住む家に長き電話す
ひとりゆくわが旅今日も暮れゆけば若狭の海の漁り火わびし

たたらの里

各方面からいろいろな視点で当地に眼がそそがれています。東北大学の金属博物館（昭和五十年開設）、安来の和鋼記念館（昭和十八年開設）はそれぞれ特色がありますが、標本資料館の傾向です。今秋開館予定の「絲原記念館」は、地域の中に育ち地域も育てた歴史の重みを、ひしひしと感じさせるもので、現地の歴史が息吹いている総合的たたら資料館としては、全国唯一のものになりそうです。

あとがき

○今月は鉄滓の分析研究の上でも、全国最高水準を歩んでおられる、窪田蔵郎氏のやさしい解説を御厚意で寄稿頂きました。たたらの里の皆さんの深い理解を期待されるからです。自宅の研究室には全国各地の鉄滓標本と分析資料がギッシリあって、斯界随一という評判です。先年当地の史談会で講演もして頂いています。

○十一月の陰陽地域史研究者協議会の開催の準備中。

窪田蔵郎　日本鉄鋼連盟資料室長（東京）　明治大学卒業。鉄の研究に従い、「鉄の生活史」（角川書店）「鉄の考古学」（雄山閣）の名著のほか多数の論文で、学問的・啓蒙的両分野で活躍。当地方の鉄滓の研究も巾広く深い。

会員配布一部百円／六九九－一六　島根県仁多郡横田町横田　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 62 号
6 月 号
昭和55、6、7
奥出雲編集集団

明治維新後の仁多郡の立て直しの農村構造改善を推進した

仁多郡農談会(4)

—設立と活動—

設立まで

絲原権造はみずからの新知識と新技術の普及と、農民どうしでの経験を交流し合うことを目的として、仁多郡農談会、穀物集談会、農産品評会を新しくつくった。また農談会を母体にして、稲穂共進会や勧業会も開かれた。農談会ははじめは公の機関として設立しようとしたものであった。

明治十四年十一月十七日、横田町安楽寺に於て開催された会合の「農談会議決書」によれば、

第一条　農談会ハ本年第二十九号公布ノ規則ニ随ヒ聯合町村会ノ認可ヲ経テ公会設立ノ事

第二条　第一条ノ公会万一聯合町村会ニ於テ不決スル時ハ本日出席員ヲ以直チニ私会開設候事

右ノ通リ決定候上ハ向後異存無之モノナリ

横田町村　石原甚三郎
田村権次郎
岡崎　健蔵
安部米三郎
金森倉太郎
堀江伊之助
森山浅太郎
安部伝四郎
真田栄四郎
加納　猪熊
石原清四郎
武繁作太郎

大呂村　中村
稲原村
八川村
石原村
下横田村
外ニ出席戸長
横田村町戸長
中沢治兵ヱ
中村戸長代用係
若月忠四郎
大呂村戸長
森山儀右ヱ門
稲原村戸長
糸原猪太郎
八川村戸長
山本喜作
下横田村戸長
武藤六良兵ヱ
大谷村戸長代用係
渡部徳兵ヱ
外ニ竹崎村不参

右集会之節仮議決

第三条　議員ハ一村ヨリ三名宛尤横田町村ハ四名都合廿五名トシ選挙法ハ其町村限リ選挙スルモノトス

第四条　議員ハ当分無給トス

第五条　会場費ハ聯合町村ノ地価割トス

第六条　会期ハ隔月十五日開会スルモノトス

但議員ノ内三分ノ一以上ノ申立ニヨリ臨時開会シ或ハ会期ヲ伸縮スル事アル可シ

ところが全年仝月廿八日の横田町村外七ケ村聯合会に於ける決議書によれば、

下横田村　安部太四郎
植田　文平
大谷村　大島　元慶
外ニ竹崎村下参
特別頭分　絲原　権造
荒木暁一郎

第一条（前決議書の三条と同じ）

第二条　議員ハ当分無給トス

但若シ議員宿泊スル時ハ一泊ニ付弐拾五銭ヲ旅費トシテ給スヘシ

第三条　（前の五条に同じ）

第四条　（前の六条に同じ）

右協議決定則記名捺印致置者也

明治十四年十一月廿八日

横田町村聯合会議員兼議長
田村権次郎

中村仝　若槻忠四郎
大呂村仝　安部卯三郎
竹崎村仝　卜蔵甚兵ヱ
稲原村仝　杠　忠兵ヱ
下横田村仝　宮田忠五郎
八川村仝　植田　文平
大谷村仝　武繁作太郎
絲原権造(代)
勝田清兵ヱ

とあって、公会として設立される予定であったが、その後事情により私会として設立された。

仁多郡農談会設立

明治十五年七月、横田に設立され、会長は絲原権造で、会場は横田町の絲原の持家が充てられた。(現西田村の家　広島屋跡)

農談会設立の目的は、

社頭の朝　田中満穂（横田フォトクラブ）

会則第三則

本会ハ郡内有志者相会シ農事ノ慣習又ハ得失利害等互ニ意見ヲ吐露シ見聞ヲ広メ智識ヲ換ヒ漸次農事ノ振作ヲ図ルモノトス

であり、会員は常置と通常の別があり、会員の互選で三十名の常置会員を置き、この会員は入会に五十銭づゝ出金をして、毎会三銭づゝ出金し、通常会員は定員なく、来会するものを会員とし、毎会三銭づゝ出金した。集会は隔月十五日に開いた。十七年十二月は十五回目を開くほど盛上り、会合には県庁官員の出席を願うことを申請するほどになった。人数は郡内から四十名ほどの農民が集まり、研究しあった。そこで問題となり、話題としてとりあげられたものは、

米麦種子精撰及改良貯蔵方法

米麦ノ二品ハ本邦固有ノ常食物ニシテ民命ヲ繫クノ最重要品タリ　故ニ之カ撰種改良ヲ力ムル寔ニ今日緊要ノ事ナリトス　其撰種改良ノ方法及貯蔵中種子ノ生気ヲ助ケ或ハ虫害腐敗ヲ防ク等ノ方法如何ヲ云フ

米麦害虫駆除並予防方法

田圃虫害ノ怖ルヘキハ洽ク人ノ知ル所ナリ　今穀菜中最貴重ナル米麦ニ品ヲ害スル虫類ヲ駆除シ及之ヲ未発ニ防ク方法如何ヲ出フ

肥料ノ補充及製造改良方法

肥料ハ農家ノ資本ニシテ最モ貴重スヘキノ一物タリ　而シテ仁多郡ノ如キハ山野ノ荒蕪ニ属スルモノ多ク随テ其原質ニ供スル肥秣ノ如キモノ亦多カラン　故ニ之ヲ利用シテ肥料ニ補充シ及堆糞陳尿ノ如キ肥料製造ハ法ヲ改良シ其貴重ナル養分ヲ散失セシメサル等ノ方法如何ヲ出フ

牛馬改良並蕃息方法

維新以来牛馬ノ需用年一年ヨリ増加シ　而シテ其減耗ノ数月一月ヨリ多シ是之カ改良蕃息ヲ謀ル寔ニ今日緊要急務ト云ヘシ其改良蕃息ノ方法如何ヲ云フ

大麻撰種及製苧改良法

大麻ハ仁多郡著名ノ物産ナルヲ以テ之カ種子ヲ精選シ及製造方ヲ改良スルハ該郡緊要ノ事ナリトス　其ノ撰種並改製セシムルノ方法如何ヲ云フ

などがあり、このほかに「耕耘及作順ノ得失、農具ノ便否得失、農業上将来改良ヲ要スベキ意見」などもあげられていた。

郡長への建白

農業生産の各部門にわたって、以上のような活路を積み上げてきた絲原権造は、十七年二月「殖産有志者ノ気勢ヲ培養スル方法」と題する「第一、土地抵当銀行ヲ開設シ以テ固有ノ資本ト資力トヲ保持スルコト　第二、倉庫会社ヲ設置シ以テ産物ノ販路ヲ開キ、併テ価格ヲ均一ニスル事　第三、道路ヲ改修シ以テ産物ノ運搬ヲ便易ニスル事　第四、農業専門学校ヲ設立シ、実業者ノ子弟ヲシテ農業ノ深理ヲ探究シ知識ヲ開発セシムル事」即ち資本・農産物価格・輸送・教育の四項目について堂々たる提案を郡長に建白したのである。これは農業生産力の培養、そしてそのより一層の発展のためには、必然的に導き出されてくる四項目であったが、権造はその実現に向っても力強い努力を続けた。

そしてその志は、その子十二代武太郎、ついで十三代武太郎

短歌

晩春の歌

桐の樹にうすむらさきの花咲けり文学論ぜし友は今亡し　渡辺観翠

この春のあるを信じて寒に耐へ花と咲きたし蝶と舞ひたし　真綿博子

手をつなぎおぼろ月夜を唄ひつつ帰へりし野の径孫を想ひぬ　野村節子

雨あとを芍(たら)の芽のふく山の路孫と歩めば小鳥囀る　畑八重子

飼ひ主の目きらめきぬ共進会の出場序列決まるひと時　景山悦子

若き頃若さを友と語らひし老ひたる今は老ひを語らふ　目黒成生

童心　永井弥生

こむらさきのすみれも盛られままごとの客となりたり小さく座りて

あけくれ　常盤はるまさ

前もってその意告げよと局長の伺うごとき眼差(まなざ)しを見つ

みづからのことかねてより決(き)めいるも高令退職の説明はきく

春の光　伊藤萩雨

白樺の花房ゆれる朝の庭黄色い帽子の子等登園す

羚羊の足思はする若き人の赤きスカート春陽に映ゆ

信濃路にて　安部夕波

山脈はすでに暮れたりあんず咲く阿茂里(あもり)の郷(さと)は夕月淡し

金色のごとく萌へたつから松の林明るし軽井沢の径

へと引継がれた。横田に設立された八雲銀行、東京に設けられた倉庫、やがて簸上鉄道の布設はそのあらわれである。そしてやゝ遅れて、最後にかかげた教育施設として、郡立横田農学校の創立が実現した。(のち県立移管)これらは絲原権造の先導によるものであったが、これらをよく理解して一般への啓蒙の役も果し、積極的に協力を惜しまない、仁多郡農談会に結集する常置会員のあったことを忘れてはならない。会員の中にも幾人かの学識・識見豊かで、実力や実行力のある人もいたのである。

従ってさきの事業は絲原をはじめこれらの人々を中心とする郡内有志の出資によって、すべて実施されているのである。時代が今日と異るとはいえ、仁多郡の今日を築いた功績とともに、かみしめるべき多くの教訓も残しているのである。

稲穂共進会

明治十七年十月三十日より十一月一日まで三日間、権造らの発企によって、三成村旧郡家に於て開催した。権造が横田町での農談会において、農事奨励のためにと年々開催を提案し、会員の満場湧くが如き賛成によって衆心一致決定した。催主は絲原権造と川角松蔵(三成町村三村戸長)で、取締役桜井三郎右ヱ門(病気のため催主に推せんされたが辞退)、幹事長岡崎健蔵ほか幹事七名、その他で実施した。今日でいう優良産米の奨励のさきがけとなった。

勧業会

農談会の発展として旧郡家にて勧業会を開催し、次の点を協議した。

1. 共進会開設の得失及びその種類
2. 畜産改良繁殖方法
3. 製米製俵改良実施手続
4. 桑樹蓄殖蚕業振起実施手続
5. 稲種水選法普及手続
6. 挿秋の期節を延ばして肥料を施す得失

の六問題を討議した。そして牛馬・算盤の共進会を横田町にて稲穂・大小豆共進会と三成村にて開設し、同業の進歩競争を計ることとした。また桑樹を培養して郡中へ配布し、また養蚕、製糸に必要な器械等も購入し、次の年からは松江より教師を招いて郡中の婦女子に伝習せしめた。この郡内の気運は、産馬の改良、八川牛竹崎牛の改良へと発展した(既述)。

さらに十九年八月六日に、木次で開かれた船津伝次平の講演会には、会員がわらじばきで参加した。二十年六月二十六日には北九州の林遠星を農談会主催で三成へ招いて、盛大な稲作改良講演会を開くという盛上りとなった。

(横田史談会・高橋一郎)

意味のある民具と民俗資料

——懐古趣味は過去のもの——

深まる民俗学

谷川健一の「青銅の神の足跡」と、「鍛冶屋の母」は、古代における金属文化に着目したというばかりでなく、柳田国男の民俗学に対して、内側の人としての批判と、新たな方向性を打出したものである。そして「日本書記」「古事記」のワクを突きぬけて、その向う側へ出て行ったというもので、古代史の定説に対して根本的な疑問を出して同じように突き抜けた古田武彦の「邪馬台国はなかった」以下数冊の労作とともに、古代史に新しい視点を加えている。

他方、民俗学の中で有形資料として民具収集が盛んとなったが(無形資料としては民話・伝説・行事・儀式・民謡等)ふるさとブーム、懐古趣味の増大と集についても、同じく柳田国男で各地に拡がった。この民具収系譜の中から、民具の歴史性、即ち生産と生活とのかゝわり合いでの密着した発達史が、民具学として提唱され出した。懐古でなく、遺産の中から民衆の知恵を引き出して、明日へ生かそうという試みがなされはじめている。

一方、産業考古学を提唱している人々は、風土と産業との中から生れた技術を、道具、機械、

しばぐり句会五月抄

春蘭のよごれ葉山中暦なし　糸原古志
新入の子は大げさにおじぎする　浅野としお
春装のマネキン笑みて店開く　植田美代子
綾織りて新樹の峰々濃く淡く　岡田蹊花
一門の墓碑を囲んで木芽萌ゆ　岡田麗水
松の芯風に抗らう山の昼　小川あきお
鶯のそれっきり暮れむ道ありき　恩田魚跡
柔らかいぜんまいの絡らみ母子に似　門脇花子
五月雨や晴れて久しき忘れ傘　加納信子
春陰や浄土へひとすじ引く煙　高木白虹
ふと覚めて寝乍らに聞く遠河鹿　中澤斐水
護摩壇へ新緑の道森閑と(峰寺にて)　中田巣鶴
新緑の古城へ続く径けわし　新出谷一華
時雨して花の命の吹きだまり　錦織富江
つばくろの同居となれり牛小屋も　藤原樵夫
春塵の眼鏡をふきつ句誌ひらく　杠幸静
初蝶や何かいい寄りいづくとも　渡部夕峰

施設の中から追求しようとしている。いずれも「学」と呼ばれるので固苦しく感ずるが、すべて庶民が創りだし、改良してきたものである。それを「すじみち」をたてゝ提起することである。幾代にわたる進歩のあとを逆にさかのぼることである。しかも故老はそれらのものの発達にたずさわっているから少なくとも徳川期を相当さかのぼる時代まで引出すことができる。それはあとでのべる記念館の諸資料の調査の経験からも言えるのである。一歩ふみこめば、時間と金の浪費を防ぐことができる。

絲原記念館の所蔵資料から

この記念館の資料には四つの分野がある。その一つが「有形民俗資料」であとは「たたら関係」「古文書」と「美術工芸」である。有形民俗資料とはいわゆる民具である。民具は庶民が、またその中の職人が、生活の必要性からつくり出したものである。こゝの特色は、鉄師、鉄山経営者として、また土豪として成長してきた家の歴史的風格が要求する民具となっていることで、べつに言えば、殿さまと庶民との中間の階級の生活用具である。形能的・機能的には庶民のものと同じであるが、庶民のものの素朴さに対して、こちらは民芸的・工芸的なものとなっている。それが長い間相伝され使用されて、十分の手入れの上にそのまゝ保存されている。あちこちの家のよせ集めでないから、いろいろな研究の対象となりうる。当時の経済の交流のあり方、民具製作技術の流れを、また時代の異なるものもあるからその発達もみることができ、それぞれの時代の家庭行事や社会行事を、そのまゝ再現することもできるのである。細かくみると、織物・染物・模様などを比較できるほど数も揃っている。

新聞報道では民具千数百点とあったが、これは千数百種目で、点数では五千点を超える。

こゝの分類された目録をモデルとして庶民の民具を収集して、両者の比較をすると（勿論数多くの家から集まったものではあるが）また研究材料として意義があり、保存価値がある。雑然とした道具収集は、集めただけに終ってしまう。「昔は」に終らせずに、明日へ生かすことのできる収集が必要である。記念館の民具はいわゆる収集品ではなく、歴史とともに蓄えられ、よく保存された貴重な資料である。

こんなものかと思う民具も、昔の人々の生活するための工夫が作り出し、また改良してきたものである。細かく見て、そこから自然の理法にかなった昔の人の知恵も導き出さねばならない。それが可能な計画的収集をせねばならない。そういう研究が素人にもわかり易くまとめられてきている。そういう学位論文も出版され、学位論文も庶民のものへと還元されているものも数多くなって来ている。

私共はとかくコマーシャルに流されて、求めなければならないものを見失ったり、誤った方向へ進んでいることが多くなっている。

船通山をさぐる会

去る五月二十五日(日)に、横田在住の植物学者・丸山巌先生に案内して頂いて、一日船通山の斐の上荘附近の植物について話を聞く会がもたれた。集まったのは、横田山の会、横田フォトクラブ、横田史談会、横田くらしの文化愛好会、植物愛好者の有志十余名であった。

昨年からの予定が延び延びになっていて、漸く第一回が開かれたのであるが、丸山先生の研究に差支えない限り、毎月第四日曜日船通山を計画的にあるいてさぐることになった。参加はどなたでも自由で、その都度の話し合いに従って集まって頂くことになっている。

先生の話は録音もしてあり、写真もとってあるので、これを復元すれば、何か記念になるものが生れそうで楽しみにしている。植物にまつわる方言、民話、料理のしかた、いろいろ今集めないと失われてゆくものも多い。また協力によっては、地質、地形、地理、歴史、動物なども入れることもできるであろうと楽しみはさらに増してくる。

今聞いておかないと、そして残しておかないと、恐らく二度とこうしたぜいたくな機会は訪れないだろうと誰もが思った。

六月は、弁当持参、若干の費用をもって横田ショッピング前に集合下さい。

六月二十二日（日）
午前八時半出発

但丸山先生の都合によっては中止する場合があります。前晩に有線放送でお知らせ致します。

なお、植物図鑑とか写真集とメモを持参下さい。採集した植物につける小さい札、袋も必要な人は。

やがて、彩紫園（丸山先生宅のまわりの貴重な植物園）の月例行事として、丸山先生を中心として成長させてゆくことに話が進んでいます。いろいろの計画も生れるでしょう。

史蹟めぐり

（第十七回）
—5月27・28日—

六日会という親睦団体と共催で横田史談会は、京都一泊バス旅行を致しました。五月晴れの新緑の京都の風物を満喫しました。特に横田にゆかり深い石清水八幡宮、泉涌寺、雲龍院、六波羅密寺はいずれも特別参拝、参詣をし、詳しく説明を聞きました。八百年の昔にもかえった気がしました。

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 63 号
7 月 号
昭和55. 7. 5
奥出雲編集集団

入門文化財小字めぐり④

稲田

——奥出雲34・35・36・40・47号を参照して

横田庄の中心は八川方面

横田郷（竹崎・大呂・中村・横田・原口・下横田・八川）の一部が、12世紀初頭に石清水八幡宮の荘園となった。或る地域がごそっとという状態ではなく、この地の開拓土豪（横田氏か）がいくつかの（みょう＝名田＝開拓した土地にその人の名をつけたからこう呼ぶ。八川に権俗名がある）を寄進した。それは八川方面に多かったと推定している。従ってこゝに八幡宮が勧請され、荘園の信仰の中心としてさらに支配の拠点となった。それが現在の八川八幡宮の地（のち馬場に移され、元宮八幡宮として再建）であったと思われる。そこで小池氏（樋口の表・現在の杠氏）は初めはこの附近に来住したものであろう。

やがて弘安四年、八幡宮が馬場に移されると、小池氏は現在地に移った。文永十一年頃この地は北条時輔の領地となり、時輔の母妙音尼が岩屋寺を崇敬した縁から、岩屋寺が八幡宮をこの地に移すことに力を入れた。神宮寺として、八幡宮の荘園の支配もねらったものと考えられる。14世紀に入ると横田庄は北朝系の仙洞御所の領地となった。

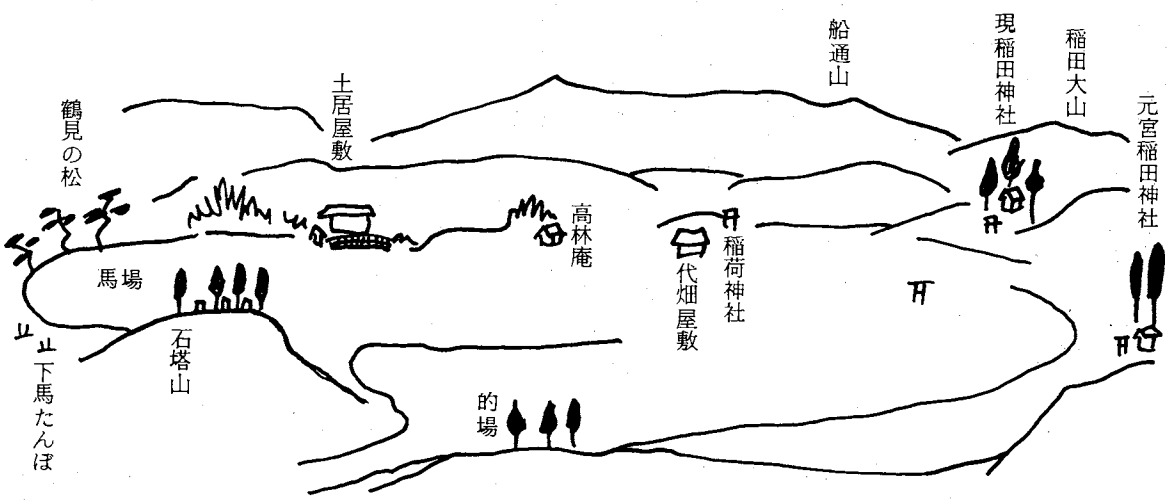
そこで元徳二年（1,330）動揺する中央情勢が地方に波及するのを恐れた院では、院の役人であった安部氏（現稲田の土居）を代官としてこの地に送りこんだ。荘園の中心が八川方面にあったから、安部氏もその地に住んだ。14世紀末の明徳の乱は、横田庄（仙洞御所領）を横領した出雲守護山名満幸の行動に端を発しているが、その代官は下横田に住んだ。（横田の斐伊川両岸の平地は当時は開発されない河原・沼地であった）

新しい支配層横田に移る

この乱で安部氏は10年間代官職を退いたがのち復帰した。このころその一部が京都泉涌寺内の雲龍院に寄進された。安部氏は次第に実力を貯えるとともに各地で開拓を進めて行った。15世紀に入ると永享二年（一、四三〇）開拓のすんだ稲田の地に移った。三代宣時の子又次郎の時で、それまでは大八川代畑に住んでいたので、新しい屋号を稲田代畑と称した。製鉄にも従い、京都への貢納の傍ら、鉄商売にも従った。海上輸送の折に大風にあい、必死に祈った京都伏見稲守を勧請して自宅裏山に祀ったのが現在の稲荷神社である。このころ現横田町が次第に埋りはじめていた。一方、今までの横田郷の支配者の衰退ももたらしていた。

16世紀に入ると三沢氏が院宣をうけて横田の保護のため、藤

稲田（船通山のある方が東方）



ケ瀬城に移ったので、安部氏は代官を退いた。やがて尼子氏が横田郷へ勢力を扶殖した。八川方面にこのころ高野山の山内氏の領地が出現しているが理由は明らかでない。尼子氏の代官によって横田の町作りが始められた。

安部六代源太左ヱ門が現在地に土居(堀と土壁をもつ)をかまえて、代畑から移ったのは16世紀中葉の永禄十年(1,567)である。今日の横田盆地をやくする場所であって、広大な屋敷の周りには馬乗馬場、下人所従の屋敷を配し、この谷の入口はせまく川を流して要害にも心を配った。

やがて源太左ヱ門は、下場たんぼの開発に乗りだした。県道多里線から横田高校に入る本道、近道一帯の元丘陵地を削って、西方を埋めて新田を拓いた。そして蔵屋からの水を引いて水利を便にするため、源太いでを設けたのである。安部氏の実力は急上昇していった。三沢氏の助言で尼子氏についで毛利氏に仕官し、高松城の水攻めにも、朝鮮出兵にも参加した。

近くに高林庵がある。安部氏が力を入れたこの附近の住人の菩提を弔うための、詣り墓の発展した共同遺牌堂であった。

安部氏の菩提寺は安楽寺(浄土宗)である。この寺は三沢為忠が藤ケ瀬城を築いた時に、家臣春田氏と土豪であった安部氏に命じて再興した寺である。ずっとのち尼子氏によって横田の町づくりがはじまると、五反田屋(富田屋)、沢屋とともに安部氏は、この寺の維持者として力を尽して今日に至っている。為忠はのち京都に出て浄土真宗に帰依し、帰って横田町の善徳寺の開祖となった。

稲田神社は幕末から

安部氏は徳川時代には、郡内では一門から最も多く下郡役人を出すほど勢力を維持した。藩主の度々の来訪があり、御成門、鶴見の松などはそのゆかりのものである。横田の田圃にはどじょうが多くて鶴の飛来が多く、鶴の名所として藩主をはじめ見物に来るものが多かったという。

現在の稲田神社は昭和に入ってから小林徳一郎氏が創建したものである。(奥出雲23号参照)稲田で最も古い宮は矢入大明神(花屋大明神)で個人もちの社であった(奥出雲33号参照)。現稲田神社の元宮は現在、初湯の池と称するもののある小さいほこらのあるところである。これは幕末の文政年間に原口の神主足立久重が、さる村人の夢じらせによって語りはじめられたことをもとにして、創建した宮であって、稲田姫神社と称したもので、それから百六十年余りの歴史のある宮にすぎなかった。

徳川中期以来は、日本の製鉄の中心が奥出雲に移ったのであるが、鉄師の成長がはじまり、在来の土豪はそれらの経済的成長にともなって、政治的支配力もそれにゆずることになっていったのである。

岩屋寺物語⑥
第二次再興に力のあった
傑僧快円⑥
——再建の記録から⑤

岩屋寺の堂宇

岩屋寺の盛時にはどの程度の堂宇があったであろうか。正確な記録はないが、快円の記録(記述したもの)の中から拾いあげたのが次の表である。北方の三処郷の高田寺には三重塔があったとも伝える記録があるから、創建されたころには塔もあったであろうが、記録では推定することができない。13世紀の終りごろ、北条妙音尼の存命中、岩屋寺の僧祐円の声望は高く、尼からの寺領、寺宝の寄進が続いて、復興したという記録がある。13世紀は北方の三処郷の地頭であった三処氏の乱暴が続いたりして、岩屋寺は度々災厄を受けたようである。しかしそれ以前のことは全くわからない。第一次復興に力のあったのは祐円で、別表の如く永正十一年尼子氏の来襲による兵火により焼失するまでは、数多くの堂宇が櫛比しているまでになっていたとみることができる。

その特色

別表中の①は真言密教であった岩屋寺本来の建立物である。別表②は、真言密教が修験道と密着することによって建立されたものである。三朝・大山・鰐渕寺とならんで、修験者の道場として栄えたことをしめしている。今日残る天狗岩等はその修業場であった。

奥出雲15号で書いたように、横田町には権現社が多く、出雲国でも最も多い地方になっているのはその盛時をしのばせる。これが僧兵の数に移っていたのである。

天文8年から8年後快円が没するまでに復興した状況を示すのが表の中央の印であるが、①の復興が早かったのにひきかえ、この②の修験道場の復興は全く行われていない。諸坊は21坊あったが、そこに住む修験者の信仰の拠点は復活していないのである。遠慮したのか、或は尼子氏によっておさえられたかである。

③は神仏習合のあらわれである。復興も少ないのは時代の流れであろう。

④は庶民信仰の花形であった観音・地蔵・十王等の堂であって復興も早かったのである。

⑤の坊の復興は僧侶・修験者

しばぐり句会六月抄

老いたれど今日人並に衣替え　田辺竹野
山ひだのいつか青葉のこき見えて　門脇花子
花嫁の笑みに触れたり五月風　加納信子
青葉蔭碑文字をたどる古寺の庭　錦織富江
本を閉ず夜半に青梅の落つる韻　高木白虹
メモを置き留守の家辞す桐の花　杠幸静
風そよとしずこころなく竹落葉　岡田蹊花
蚯蚓にも尾かしらのあり草むしる　藤原樵夫
農ひと日湯水ゆたかに行水す　恩田魚跡
城山を丸く囲いて青葉萌ゆ　中田巣鶴
早乙女の足引き抜きて田を上る　岡田麗水
古寺庭園巡りて悔なし若葉風　新出谷一華
峡けわし土地を守りて棚田植ゆ　渡部夕峰
蝸牛葉の端までは極めざる　中澤斐水
夏風邪を費へど大愚たり得ざり　糸原古志
何しても心なごまず梅雨の入り　浅野としお
覚めし窓緑の深し湯宿朝　小川あきお

短歌

初夏の歌

庭池にそゝぐ水音高けれど聞きなれしいま日夜楽しむ　目黒成生

梅雨雫またひとつ上にしみて逝きし友の墓前に涙新たなり　真綿博子

"しまね歌壇"と永の別れを決めし朝新聞みれば吾の歌あり　渡辺観翠

木蓮の白き花びら地に敷きてそば降る雨に名残り惜しみぬ　畑八重子

谷あいを縫ひて辿りし湯の宿に雨のひと日を友とやすらぐ　景山悦子

新緑の谷川にて

連休にて帰郷せし息子と新緑の峡ふかくは入るイワナ釣らむと　伊藤萩雨

青葉の頃

茸植ふる山辺に嫁の運び来る憩のお茶を木蔭に集ふ　常盤はるまさ

一月六日八才になりし吾児はひとり雑誌の付録組立てをり　永井弥生

麦秋

幾重にも妖しきまでの色重ね麦の穂熟るる今日の夕映へ　安部夕波

いらだち

まとまらぬ話につよきいらだちを深めて日暮れの部屋をいでゆく

岩屋寺の堂宇の変遷

堂宇名	永正11 (1,514) ×焼失 ○焼失セズ	天文8 (1,533) ×復興セズ ○存続・復興	天正5 (1,577) ○存続 (当時の記録にあるもののみ)
①本堂	×	○	○
十一面観音	○	○	
厨子仏壇	×	○	
文殊菩薩	ナシ	○	
護摩堂	×	ナシ	
本尊正観音像	○	○	
愛染堂	×	ナシ	
愛染妙王	○	○	
四天王	ナシ	○	
二王堂	×	○	○
二王之像	×	○	
鐘撞堂	×	○	○
②惣鎮守堂	×	ナシ	○
蔵王権現	?	?	
岩屋の秘仏・御鏡	×	ナシ	
大聖不動明王	×	ナシ	
御修法堂の鎮守である			
白山権現	×	ナシ	
本地十一面観音	×	ナシ	
熊野蔵王権現	×	ナシ	○
(養門坊という熊野三山の先達山伏也)			
③弘法大師堂	?	○	○
門伽井	×	ナシ	○
八大荒神	○	○	
天照太神之宮	×	ナシ	○
御神体・鏡	×	ナシ	
天神宮	×	ナシ	
神体	×	ナシ	
④虚空蔵堂	×	未完成	
妙音院観音堂	?	○	
本尊十一面	?	○	
二天	?	○	
東嶺堂	×	ナシ	
本尊十一面観音	○	○	
六地蔵	○	○	
十王堂	○	○	
本尊	×	ナシ	
十三仏	○	○	
⑤極楽堂			○
風呂場			○
坊	×	○	○
	数不明	21坊	21坊

の生活の場として一日も欠けないから、また生活の場の性格が強いから早かったと思われる。それに小さい粗末なものでもよかったからでもある。

天正5年の欄の印は冬季の雪掻きを各坊に割当てたことの記録によったもので、雪掻きの必要な建物であったということ、建物の大きさを推定できるものとしてのせておいた。

快円の努力はこれまで書いて来たが、乱世に於ける再建復興の苦心は大変なものであったと推察できるのである。

以上で快円の巻を終る。

（横田史談会　高橋一郎）

七月の予定

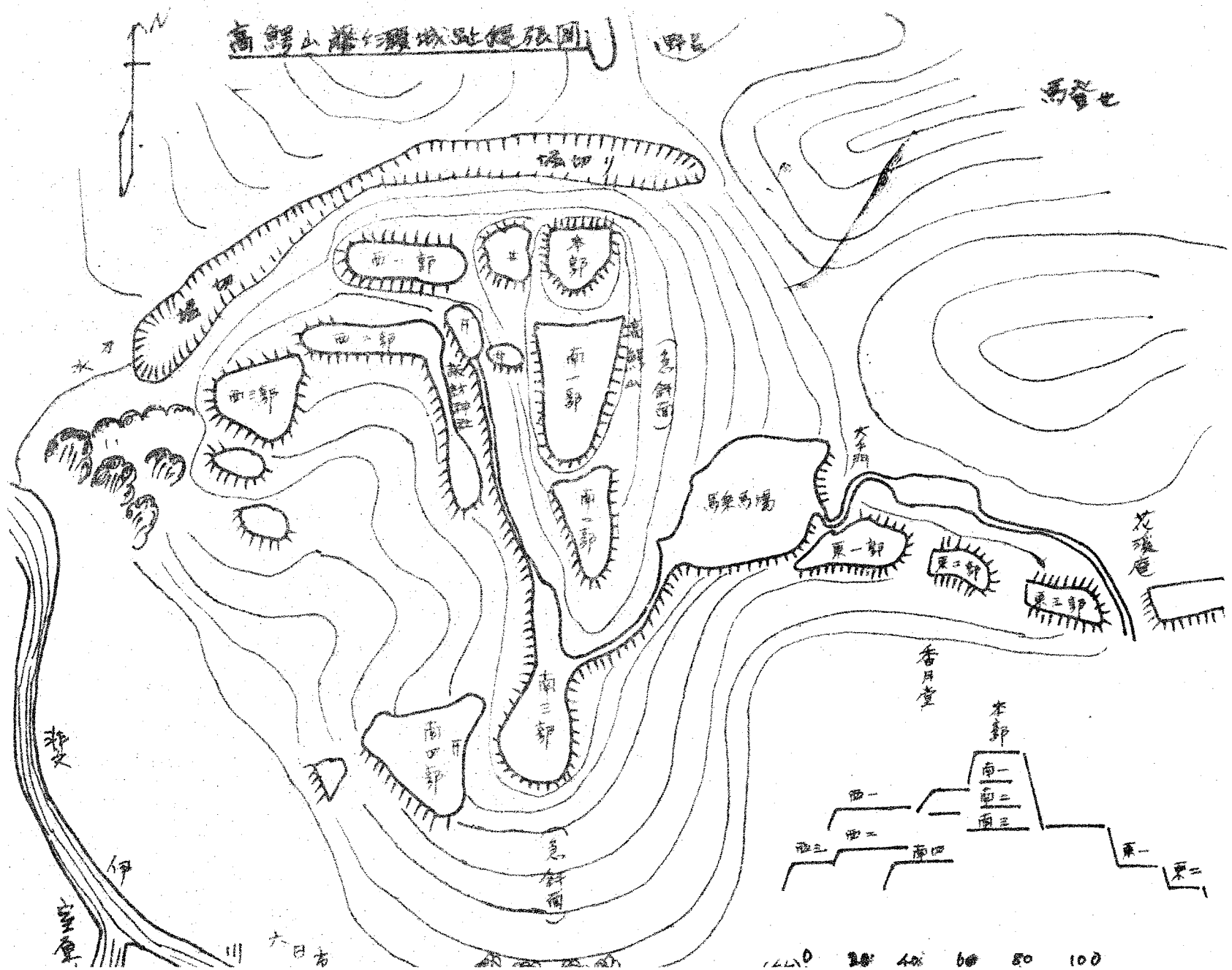
12日(土)後一時半
○古文書を読む集い　のち
○郷土史講座「荘園について」
横田の歴史を理解するのに基礎となる事柄となるので話し合いたい

27日(日)八時半　横田ショッピング前から
○船通山をさぐる会（第三回）
弁当そのほかを持参して、夏山の植物をみる

おわび

御協力頂いて部数をふやし赤字脱出をはかりましたが、値上りのため苦しく、今月は四頁は予者き手刷りとして若干会計を楽にさせて頂きました。御了察の程を。

会員配布一部百円／六ヘ八／一八　島根県二多郡黄田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所


高鷲山城址概況図
N
野
馬場
本郭
南一郭
南二郭
南三郭
南四郭
西一郭
西二郭
西三郭
東一郭
東二郭
東三郭
馬場
大手門
花護屋
香月堂
急斜面
水
伊
室原
大日方
川
0
20
40
60
80
100

奥出雲

題字　糸原風亭書

第64号
8月号
昭和55.8.2
奥出雲編集集団

奥出雲における
歌道の濫觴（覚書①）

濫觴（らんしょうとは、中国の古文にあることばで、揚子江も水源にさかのぼれば、觴（さかずき）を盗（うかべるほどに微であるという意で、物事の起源・おこりのこと。

万葉時代の出雲・石見

山陰中央新報の木曜日連載の「深海松のうた」（小説柿本人麻呂）は矢富氏二代にわたる、石見における柿本人麻呂についての決定版をめざしておられるものと興味を深めている。

万葉歌人柿本人麻呂の石見の足跡については斉藤茂吉説が大きい比重をもっていたが、それに対し石見の地から考証修正を迫ったのが父矢富氏であった。さらにこれに別な立場から補強もしたのが、梅原猛の「水底の歌」（柿本人磨論）上下二巻である。

鴨山磐根しまける吾をかも知らにと妹が待ちつあらむ

（鴨山の岩を枕にして横たわっているわたしを知らないで、妻はわたしの帰りを待っていることであろうなあ）

という辞世の歌の鴨山の比定で意見がわかれる。茂吉は邑智郡湯抱温泉の鴨山としたが、この二人は益田市の沖の鴨島（地震沈没）であるとし、梅原はさらに刑死したとしている。

人麻呂の時代は万葉の歌の最盛期にあたる。この地での人麻呂の幾つかの歌のほとんどが妻を恋うる歌で、舞台は石見である。ほかに石見の歌が一首生石村真人によって歌われている。

出雲の歌は、七二〇年ごろ出雲国司に任ぜられた、出雲守門部王のもの数首がある。当時国庁は、現在の八雲立つ風土記の丘の東方六所神社の北方にあった。意宇川（出雲郷川）のほとりである。

おうの海の河原の千鳥汝が鳴けば　吾が佐保河の思ほゆらくに

（私の故郷の京――奈良――の佐保河を思い出すの意）

がある。今も佐保川の川辺に立つと、意宇川のほとりに似た感じを抱くことができる。今日では半日の行程である奈良と出雲も、当時ははるかなる西辺と感ずる土地であった。ほかに奈良から役人として下って来た、出雲掾安宿奈杙麿の歌のほか、出雲国守山背王、大伴家持、作者不明のものがある。

以上あげた人たちが、この万葉の歌心を、出雲・石見の地の人々にいかほど影響を与えたものか、知るよしもない。

鎌倉時代初期の出雲

そして時代は約五百年ほど下る。文治六年（1190）、歌人上皇であった後鳥羽院に召されて、「新古今集」の撰者の一人に加えられた寂蓮法師が、山陰行脚の折、出雲大社で歌った歌一首がある。平安末期から鎌倉時代初期の歌壇の第一人者の地位にあったのは、藤原俊成とその子定家と西行法師である。（最近京都冷泉家の古文書の中から、この三人の「小色紙三筆一幅」が発見されている）寂蓮は俗名を定長といい、俊成の甥・定家の従弟であるが、俊成の養子として仕官したが、のち出家し諸国行脚に出たものである。歌人として歌集を残し、「千載集」にも歌がのせられている。この寂蓮の影響についても、記録がなくて知るよしもない。

戦国時代末期の出雲・石見

そして出雲・石見の歌道史にあらわれてくるのは、それから約五百年後の室町末期の武将で歌人の細川幽斎（天文三1534～慶長一五1610）である。幽斎は連歌、茶道、相剣、有識の道にも造詣が深かった。出家して玄旨法印ともいった。「古今伝授」という「古今集」の秘伝を三条西実枝から受けた。丹後の居城、田辺城を石田三成に包囲されたことがあったが、「古今伝授」が断絶することを憂えた、後陽成天皇の勅命によって、その包囲を解かせられたことは有名である。あとでふれるが、「古今伝授」とは藤原定家――「新古今集」の撰者で、当時の歌壇の第一人者――の直系を伝承したという、二条派歌道の秘伝である。定家には孫が三人いて、二条家、京極家、冷泉家と分立し、それぞれの流派をたてて競った。

幽斎は天正一五年（54才）豊臣秀吉の九州・島津氏討伐に従軍した際、嗣子忠興（夫人はガラシャ、のち宮本武蔵をひ護する）を秀吉に随わせて、自分は数人の従者を伴って見物旅行として、田辺城（舞鶴市内）を出発し、日本海岸を船で西下し、詠歌・作句しながら福岡につき、帰途は瀬戸内海を船旅で探勝しながら難波についた。その旅行歌日記が「九州道の記」である。美保関の歌にはじまり出雲・石見各地の歌が多い。島根歌道史の上では、この幽斎が出雲に二条派の歌を伝えたということになっている。

摂政太政大臣
藤原道長―□―□―俊成―定家―為家―為氏―為世―為冬―為重（二条家祖）
養子 寂蓮
為教―為兼（京極家祖）
為相―為秀―為尹……現存（冷泉家祖）

定家のあと三家分立

平安時代の末葉、藤原俊成が創始した新鮮な幽玄体の歌風は、その子たちや後鳥羽上皇らによって一段と深められ、それらの歌作は「新古今集」に集載せられ、日本和歌史の上に不滅の光を放った。

その後為家（1,197～1,275）になるとその基礎は益々固く、歌道の本宗をもって任じたが、その息子たちに至って三家に分裂し、和歌の家柄が三派に分れて互いに対立反目し、二条家は京極・冷泉両家と対抗して事毎に確執を続けた。折から、ともに公卿として皇統迭立の政治問題に結びついて、二条家が大覚寺派（南朝派）の保護をうけたのに対し、京極家は持明院派（北朝派）に頼り、歌風・歌学・歌式等のすべてに、保守・進取と互に反対の立場を表しあった。為世をはじめ二条家の立場は、父祖以来の庭訓を金科玉条として、為家の隠健正雅の歌風を宗として保守一点張りで、平板な歌調を重んじ、京極・冷泉両家の進取的態度を宗意に背くものとした。これはのちのちまで二条家歌学を貫く精神となった。室町時代為重が大覚寺派に属して、自ら争乱にまきこまれて横死し絶家となったが、その学風は二条良基や頓阿の支持によってまもり育てられて続き、江戸の末まで貴族朝廷の歌道の主流となった。そして二条家の教典とする「古今伝授」は歌壇で重んぜられた。

京極家は二代為兼が政治に深入りして血統も断絶した。冷泉家は京極家とともに歌論・歌風は自由進歩的立場をとって、二条家と対立したが、京極家断絶後も対立を続け、後世二条家歌学全盛の世にも、反二条派の中心勢力であった。

為家は末子の為相を溺愛し、そして荘園や定家の日記「明月記」の自筆本等の多くはこれにゆずったので、これが冷泉家に伝えられ、最近の新聞紙上を賑わしている。

「明月記」は藤原定家（1,162～1,241）の日記で、平家滅亡から源氏の登場、承久の変後に至るまでの、公幕間の事情のわかる公的生活の記録を中心に、私生活を記し、和歌も多くのっている。和歌が武家の間に流布するいわれもうかがうことができる。百数十巻あったが、現在残っているものは、治承四年（1,180）から嘉禎元年（1,235）までで、そのほとんどの自筆本は冷泉家にあり、56巻――建久三（1,192）～天福二（1,233）――あるという。

春暖　加藤博昭（水煌会会員）

二条流

二条流は武門にもひろがり、先の細川幽斎がその頂点であった。江戸時代幕末でその系譜の中で著名な人は、武者小路公望・後水尾院・沢庵・北村季吟・香川量樹などの多数である。特に二条派の中でもその主流をなしたのは、幽斎の第一弟子である公卿の烏丸光広（からすまみつひで）とその子孫たちで、光雄・光栄などは傑出した人であった。光広（1,579～1,638）は幽斎が田辺城に囲まれた時、勅使の通勝・実条・光広の三人に、自分が戦死したら開けといって「古今伝授」の秘筐を授けた。

戦いがすんでその約束を守ったのは光広一人で、幽斎はそれに感じて「古今伝授」の外に筆外の秘訣を授けたという。

曽孫光雄と光雄の孫光栄は、近世歌論の上でも注目すべき歌論を残している。特に光栄は秀れた。光栄は心とか「まこと」というものを中心として考え、花としての詞を付け、詞よりは実の世界を重んじた。歌を詠ずるときは心の真実を重視し、歌の生命はこの「心の実」にあるとした。これは万葉的な「まこと」の世界に通ずるものである。心に誠があれば、その心の誠が外に現われて自然と歌をなすものであるといっている。

光栄は元禄二年（1,689）～寛延元年（1,748）の人で、歌論にも作歌にも当時最もすぐれた人で、歌の添削にかけても当代随一の評があった。その著「諷詠覚悟抄」は一名「和歌教訓十五条」といゝ、当流における歌学の綱領をまとめたものである。そのほか歌学論集、歌集の多数がある。

光栄の影響は直接にも間接にも、この奥出雲横田地方のこの道に、強い影響を及ぼしていたことを、最近明らかにすることができた。この覚書はその概要をしるすためのものである。

光栄の略歴をのせておく。

元禄2　出生
享保4（31）従四位上参議
〃 6（33）従三　権中納言

（次頁最下段へ続く）

（右の写真は横田フォトクラブ　荒金俊夫撮影）

身近かなところで、産業文化史・産業考古学に挑戦してみませんか

除草具から除草機へ

＝E・パワー氏の三回目の来町にあたって＝

重労働からの解放

近年の産業技術の発達は実に目覚ましいといわれる。この農村の農業技術は特に後進性の著しいものであったが、「日進月歩」を地でゆく如く進歩して来た。圃場整備とともに普及はめざましいものであろう。挿秧・収穫期は別として、農作物生育の大きい障害は、病害虫と雑草であった。そのためには多大の労力を投下する重労働にたよっていたが、薬剤の出現によって、公害やその他の害も生ずるとはいえ、大きく解放された。

古来から「除草作業」は中耕と除草をあわせて、重要な作業であり、かつまた重労働であった。これが機械化されさらに化学的除草剤の出現によって、革命的変革となった。それもこゝ二十年来のことである。

産業考古学とは

「残したいのは使わなくなった古い道具や設備だけでなく、それらに見られるさりげない工夫・改良・進歩の奥にひそむ先人の汗・苦労・心」(黒岩俊郎・玉置正美著「産業考古学入門」)を調べ、記録し、生かそうとするものである。

鎌一つをとってみても、地勢・土質・気候・草木・作物の違い、さらに積雪量、草木・作物の成長の違いによって、その形状はもとより、地金と鋼のあわせ方、鍛え方も違ってくる。備中より伝った一の鎌は、どうしてもたらされたか、それがこの地の風土に適合するために、どのように工夫改良されたか、それが大原郡ではどのように変っていったかという、歴史が刻みこまれている。いろんな古いものの集めのみでなく、それを探究し十分明らかにできる聞きこみのできる生存者が残っている。全く記録もない縄文・弥生・古墳時代のように、でたとこ勝負で発掘して検討する必要はない。この考古学的研究方法と同じことを、産業用具、設備・生活用具の調査に用いるのは愚である。私どもの生活に生産に、直結しているものである。しかも、風土(地勢・気候・土質)は昔と変らない。作物も凡んど改良されているが変らない。栽培・収穫も変らぬとすると、その用具の変化の追求は至難ではない。用具道具の変化のあとには極めて学ぶべきものが多く、今後の指針となるものが多い。最近では今日再び改良して生かすべき貴重なものがあることも知られている。並べてみてふりかえり、父祖の心に通じて心あたたまるだけでなく、私どもの英知への寄与もなければならない。

丁度これにピタリの例ではないが、三度来町される西ドイツのE・パワー氏に関係のあるものをとりあげ概略をのべ、みなさんの関心を喚起したい。

除草具

一七世紀半ば以後、中国から輸入された農書「三才図会」(1,607)「農政全書」(1,639)の普及から、わが国では「農業全書」(1,696)や「和漢三才図会」(1,712)が出版された。「三才図会」には水田の除草のために指先にはめる爪「耘爪」があるが、「和漢三才図会」には、すでに鉄爪ー小さい熊手がえがかれている。

このことについて、E・パワー氏は、除草ははじめは素手で、ついで日本でも指先に鉄の爪をはめてやり、一八世紀初めには——「和漢三才図会」が出された時代——すでにそれより進んだ熊手が考案されて使われていたと研究の結果を発表している。この耘爪や熊手は主に関西以南に多く使用されたという。やはり水田の土が固く、草取りのとき指が痛いという状況があったようであり、一方中部・東北は湿田・深田が多かったということによるものとみられる。土地改良の進展で西日本にもそういう状況が出て来たが、やがて正条植が工夫されて普及しはじめると、明治に入って除草具から除草機へと転換してゆくことになった。

除草機へ

その最初のものは、がん爪(熊手の小さい型のもの)を改良した、「はったんどり」(八反取)又は「かめのこ」という。平板に熊手の先をつけたものに柄をつけて、押し引きするものである。正条植の水田ではじめて役立つ。

それがしばらくして平板式からそこの回転式へと飛躍するのである。パワー氏の調査によれば、明治一〇年(1877)の内国勧業博出品解説の中に、この種のものが二種あるという。和歌山県の西村忠八の「鮠泥器(いなまがえし)」(稲間返)と、鳥取県の吉田清音の「田車」である。ほかに大阪にもあったから、関西ー中国地方に次々と生れている。

やがて鳥取県倉吉市の中井太一によって、「太一車」(田打車)が発明創始され、明治22年に特

享保9(36)正三　権大納言
〃　13(40)従二　〃
〃　16(43)〃　散位前権大納言
〃　19(46)正二　〃　〃
延享4(59)〃　〃
寛延元(60)〃(最上席)　内大臣

三日間で辞任、その五日後に死去

(散位ーさんい・さんに　位だけあって官職のないもの)

(横田史談会　高橋一郎)

情動的大衆文化の颱風の中で折れないように

九月六日(土)の古文書を読む集いのあと第14回郷土史講座—源頼朝と横田・仁多郡

しばぐり句会七月抄

戻り来てまた踊り出す梅雨の蝶　中田巣鶴
白蝶や柩に舞いて梅雨空へ　渡部夕峰
蜷の曳く二本の道の寄り離れ　糸原古志
点滴の確かさ夏に病む吾に　浅野としお
紺褪せし麻座布団に友招じ　田辺竹野
月走る梅雨雲千切る風のなか　杠幸静
梅雨明けて風が乗せ来る祭り笛　新出谷一華
浴客の曳く下駄軽く夕河鹿　岡田蹊花
（湯原温泉にて）
ためらいを打ち消さんごと芥子燃ゆる　植田美代子
温泉の街に五月雨時の母子そば　恩田魚跡
老鶯のひとり鳴いては独り和し　高木白虹
夏蝶にこころ託せり草の上　藤原樵夫
来ぬ客のひとりを待つや遠花火　小川あきお
箒目に青柿落ちて転ぶ韻　中澤斐水
それぞれの丈見合せて宿浴衣　加納信子
親しさを端居の縁に誘いぬ　岡田麗水
日傘さし独りの影を踏みしめて　錦織富江

短歌

七月の歌

若者たちの頭打練習のドウの音梅雨の夜の屋体の窓をふるはす　伊藤萩雨
山畑の柿の大樹の下蔭に雨を宿れば白き花散る　野村節子
さえざえと緑うつれる古池に睡蓮の花さゆらぎており　目黒成生
咲きほこる泰山木の白き花ものうき雨に清しく匂ふ　畑八重子
亡き姑が早乙女うつぎ咲き初めば田植も盛りと言ひしを思ふ　景山悦子
木洩れ陽の淡く煤ふ山峡の坂に到れば雉鳩は翔ぶ　渡部観翠
血は愛か血縁担ふ吾が人生嫁して二十五年いまだ問ひおり　真綿博子
放牧の牛も四五頭草食みて山のうつぎは今盛りなり　永井弥生

追憶の基地にて　常盤はるまさ

黍の葉のゆれる丘越えわがバスはたたかひを遠く語りつがしむ
ブーゲンビリヤ咲きつづく基地の町に来て戦ひし日の遥るかなりしを

旅愁　安部夕波

ひとりゆくわが旅今日も暮れゆけば若狭の海の漁り火わびし

許を得た。これまでの発明考案の長短を取捨し集大成したものである。これをもって関東から九州まで、正条植の指導と除草機の普及につとめたという。

除草機の効果は大きかった。やがて「中耕除草機」へ改良され、一条押しから二条押しまで生まれた。牛馬に引かせる畜力除草機は、大正一一年岡山県ではじめられたが、牛馬の歩く場所を必要としたから、収穫量の減少と引きかえねばならぬから、普及はかんばしくなかった。

一方では「株間除草機」があらわれた(昭和三〇)。しかしこれも効果が少なく、一部に普及しただけであって、やがてDCPや2・4D除草剤におされていったという。

効果

水田一反歩当りの除草について、「手取り」が大体八時間に対して、「手押除草機」(二輪)で二時間、「畜力除草機」で四〇分。しかし実際には除草は収穫まで三〜四回(精農は五回位)で、その中に「手取り」が一〜二回入るから、二〜三倍の能率という統計もある。(昭一六「新潟県農会調査」)

正条植は明治以前に普及し、はじめは綱であった。「田植車」は明治一〇年前後に考案され、そして除草機が一般に普及するのは、明治末年から大正に入ったはじめごろからである。指導による「正条植」も普及は遅々たるものであったが、田車の使用によって急速に普及していったという。

当初、一台一円五十銭位もする除草機代も、普通農家にとっては手の届かぬ金額であった。が、その能率の良さと、正条植の普及とがからみあって普及したのである。

極めて簡単な紹介であるが、生産基盤と器具、その進歩を考察することによって、器具・道具集めの意義を高めて来るし、将来への知恵を深めてくれるものである。筆者個人のことを申し上げて恐縮であるが、たたら製鉄の道具・設備そして技術の探究から、今日解決されていない問題へ一歩踏みこみかけているし、そろばんの同様な研究を通して、今日の技術上の欠点についても幾つかの指摘できる点を見出している。

ごあんない

○E(エリック)・パワー氏、三度目の来町

今度は「この地方の明治・大正時代の地方産業の発展とたたら製鉄業」の研究のための、古文書読みが目的です。前ウイーン大学、現西ドイツのボン大学の助教授です。安心して聞ける日本語が話せるので、日独墺三国の農村事情の比較を中心に、講演会開催を予定しています。

○船通山をさぐる会(植物探究)も第四回、参加者もふえています。例の如く次の日に。八月は休み九月二十八日(日)

○第二回陰陽地方史研究者協議会開催について、予告案内書を出しました。日刀保たゝらの都合で、十一月下旬以降の土曜日か日曜日となります。ほかに絲原記念館も協力頂きます。

○安部宏作陶展

秋には郷里での第五回展を予定しています。最近の進境はすばらしいものです。(横田くらしの文化愛好会主催)

○秋の史蹟めぐり(第15回)

秋の好日を期していますが、吉備路への希望もあります。

会員配布一部百円／六九九ノ一八　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第65号
9月号
昭和55.9.6
奥出雲編集集団

高殿以前の原始的な製鉄法（上）

窪田蔵郎

◆まえがき

雲伯地方の方々は永代たたらについては、その発祥地であるだけにどなたも見聞される機会が多く、炉の形や原燃料製品など詳しく御承知のことと思う。しかしこの巨大な高殿に機能的な天秤吹子を備え、量産を志向した大形炉をしつられた、永代たたらと呼ぶ設備は江戸中期に完成したもので、日本の製鉄技術の歴史からみたら近代鉄鋼業が成立する直前の時期に過ぎず、二〇〇〇年に及ぶ歴史の中の極く新しい位置を占めているものである。この辺のことを、熱知している人は案外に少ないようである。

よく日本刀の関係者が、姿、沸え、匂い、などから古刀、新刀、新々刀と分類され、その美術的価値の基盤として鉄質の問題にふれられることがあるが、それはその時代時代に派生した鍛刀技術のほかに、大きな要素として材料の鉄の製造法に大きな変化があったことを物語っているものである。そこで今回は永代たたらが出現する前の原始的な製鉄法について簡単に述べてみる。

◆冶金術の発見からの当然の帰結

焚火とか山火事によって鉄鉱石や砂鉄が還元され、偶然その塊りを鍛造したことによって、鉄器を造り出す術を人間が知ったとするならば、（このような尤もらしい話が冶金技術の起源として通用しているが銅鉱石で実験してそれは不可能だと否定している人もある）一番最初の製鉄技法は山腹の乾燥した風通しの良い土地で、鉄源の上に大量の薪を積みあげて点火し、長時間燃やし続けて粗雑な還元鉄の塊りを造る方法以外には考えられない。これを火窪で再度加熱しつゝ鍛造すれば小さな鉄器は造れるわけである。応和の頃（九六一〜）に大江維時の著した『対馬図貢銀記』によれば、「置二之於高地山四面受レ風之処一以二松樹一焼レ之数十日」とある。このような方式でも土地によっては風の条件がよければ、火が火を呼んで結構自然通風でも還元位はできるはずである。

もっともこのような方法では、理論的に考えれば低炭素の非常に軟質な鉄が出来てしまうわけであるが、再処理段階の火窪の中で加熱中に、炉中の雰囲気によって侵炭したり脱炭したり、また接触した木炭が物理的に作用することもあって若干硬度が加わる可能性もあり、さらに仕上げ過程で冷間の鍛造をすれば道具としての用途には充分間に合ったものとなったであろう。勿論生産歩留りなどは全く考慮外のことである。

このような方法の実際例として、筆者が何度も引きあいに出しているので御承知の方もあると思うが、京城の総督府に勤務していた加藤灌覚氏の実見談を広島高師の教授をしておられた和田重之氏が記録したものがある。これによると一九〇九年五月七日に朝鮮咸鏡北道富寧の南東にある沙河洞の村民が、輸城川の河原で極めて原始的な製鉄を行なっているのを目撃したというもので、その方法は河原に砂鉄を六〇センチほど積みあげ、その上に大量の薪を乗せて火をつけ夜通し燃やし続け、翌朝になって鉄塊を拾い集めていたとのことである。説明が不充分なため技術的にこの記述が正しいとは言い切れないが、おそらく砂鉄と薪を何層かの積層状にし、しかも量的には砂鉄の方がずっと少なかったであろう。

以上のような程度のことで鉄が出来るかどうかは議論の別れるところで、（推積製炭法による木炭を造っていたのを見間違えたのではないかと極論する人もある）実際には海綿鉄というよりも極度に鉄源を焙焼をした程度のものであろうが、再度火床の中で灼熱溶融させて鍛造するという方式を採るならば、これでも鉄の半成素材はできていたといえるであろう。

◆白石市深谷高野東の柴焼炉

前述のような極く原始的な技法を一歩進めたものが、乾燥地を選んで簡単に地面に凹みだけを付けた施設である。まだ炉と言っては言い過ぎの感のする粗朴なものである。西欧の製鉄遺跡ではボール炉と呼ばれていて、製鉄遺構の中では最も原始的で単純な形式のものとされている。わが国の場合は炉形はもっと原始的で若干異なっているが、そのような萌芽期に相当する遺構で代表的なものは、宮城県白石市福岡深谷に散在した製鉄遺跡である。地元の故佐藤庄吉氏が長年に亘り独力で調査していたものである。同氏の『調査総括報告書』（昭和三二年）の高野鍛

冶遺跡と標記された部分には次のような記載がある。「此の焼窯跡の形態には六種あり、其の内最大なものは長さ十二尺五寸幅八尺五寸の方形で深一尺その中程に径一尺の穴あり、此の穴に向って周囲より幾条もの溝あり菊花の如く、この溝は焚火の風通りや鎔鉱の流集を図りたるものと察しられます。次に長さ八尺五寸、幅四尺五寸のものもあり、亦長さ五尺、幅五尺の正方形何れも深一尺のものの外に径七尺円形等あり、何れも幾条もの溝を以て風通鎔鉱流集出を計画されております。其の他に径三尺の円形のものもあり、之れは鎔鉱最後の仕上をしたる野地火床と察せられます……」と記し、同遺跡の伴出物である石床、石鎚、縄文中期型土器片より総合判断して、縄文期の製鉄遺跡であることを考古学関係者に報告している。また同報告書は氏が見たまゝの炉形をそのまま名称として付し、柴焼炉とか石囲薪焼地火床とか土囲炭火床、さらに砂鉄荒焼炉の如く、内外先学の研究分類を無視して印象第一に名付けている。アマチュア研究者の面目を示す発想である。

前述高野東で発掘された遺構は図のようなものである。その後に故和島誠一氏が昭和四二年に発掘して、道内原遺跡より発見した墨書のある土師器等を理由に、これらが平安期に下るものではないかなど、年代等について問題の提起がされていた。著者は昭和四九年にこの地を見ているが、編年については先人の残した土器片を湿気や放熱の防止を考えて好個の築炉材として利用することもあり得るし、時代の異なる遺跡が複合しているという場合もあり得るので、通説による縄文末期という絶対年代の推定は無理があるのではないかと考えている。しかし年代の点は別として、他に例の無い遺構であるが、このような極く簡単な技法で少量の鉄器を生産していたことは事実であろう。もっとも本遺跡は高野、荒神、道内原、下館、荒井など多数地点が調査されていて、発見された鉄滓を伴なう遺構は、方、円の形状の違い、大小の較差など複雑多岐な姿態を呈しており、炉遺構毎に製錬か加工かの別を区分しなければならないが、従来各遺構の役割別がはっきりせず、三渡俊一郎氏が『考古学ジャーナル』昭和四一年八月号で火床の機能として発掘火床をタイプ別に分け、これを注解している程度であった。

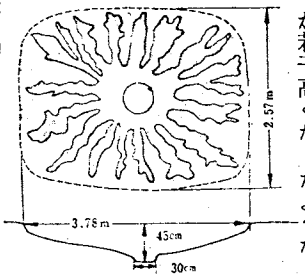
著者が調査に趣いたとき同家で頂いた荒井、高野中、道内原の鉄滓（その地点の中のいずれの遺構で採集されたものかは不明）の鉱物組成より判断したところでは、荒井は砂鉄製錬によるものであり、高野中、道内原は再製錬あるいは鍛冶滓に近い性質のものであった。高野中については化学分析も実施したがその数値も鍛冶遺跡であることを示していた。

報告されているような平底開放形の炉形のものでは、何等かの技法で還元鉄は得られたとしても、よほどの技術が無い限りとても溶融状態まで持ち込んで、金属鉄と鉄滓を造り分けることは不可能であり、従って銑鉄などは出来るはずのものではない。新沼鉄夫氏が釜石市で餅鉄の小粒を原料とした初期の実験でも、結果はほぼ同様なものとなっている。こうした水準の製鉄法であったことを、発掘された太径粘土羽口や多様な性質の鉄滓は端的に物語っている。しかし細かくその地点のどの遺構がそのいずれに該当するかは、発掘に立会い採集鉄滓を多数調査して、詳細はデータを作成するといった手順をふまない限り不可能である。

◆半長靴のような製鉄炉

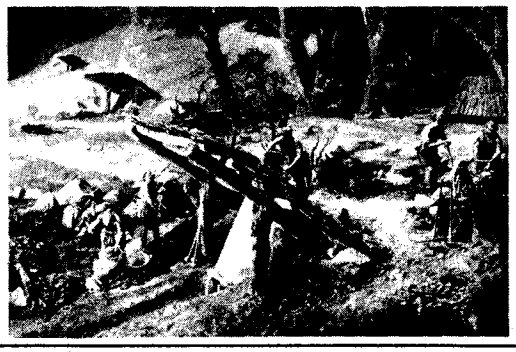
粗朴な冶金の技術を知れば、当然それを改善してより多くの金属を得ようとすることになる。強く燃焼した時に限って若干多くの金属が採れるのを知れば、誰しも送風を強め燃焼を助ける努力をすることになる。とすればその方法は、第一に風通しの良い地形を選ぶことが企てられ、その次には石で囲ったりしているうちに、一定の炉形を持たせると空気の吸込み現象を起して効果的なことを発見する。さらに人工的に風を造ることに考えつき、息で風を強めることから火吹竹ようのものができ、さらに身近かな材料を工夫して原始的な吹子を創造する。このような冶金技術の進み方は、洋の東西を問わず大同小異なものとなるが、これは文明初期における人間の発想に大差の無いことを示すものであろう。

山腹の斜面を整地しあるいは掘込んで、そこに石または粘土で炉体を造った、ポット炉の丈が若干高くなったような、ある



白石市深谷高野東砂鉄柴焼炉
第1号見取図

第1図　深谷・高野の砂鉄柴焼炉と称された見取図



第4図　ドイツ・ジーゲルランドの製鉄炉のパノラマ
（ミュンヘン市ドイツ博物館）

いはジュラ炉の初期頃のタイプとも考えられる。長靴形をした製鉄炉も世界的に普及しているものである。（楕円形の風呂桶形と考え易いが、それでは築炉の目的とする燃焼効率は半減してしまう。）早期ローマ時代以来中央～西ヨーロッパ、さらにウクライナ辺においても知られていた炉形式で、Rodomir Pleiner の報告では一二〇〇℃から一三〇〇℃で操業され、海綿鉄および ルッペが半溶融の状態で、一回に一～三キロ程度採集されていたものと推定されている。ミュンヘンのドイツ博物館にはジーゲルランドにおける古代製鉄の状況を発掘現場から復元してパノラマとして展示してあるが、これもほゞ同様な仕様である。ソ連のイ・ペキシンはその著『鉄の誕生』でこのような製鉄法をヴァルカ（煮たき）と呼んでいるが、海綿鉄が主だが一部の場所では吸炭して銑鉄に近いものも出来る、この種の原始的製鉄炉を言い得て妙な表現である。

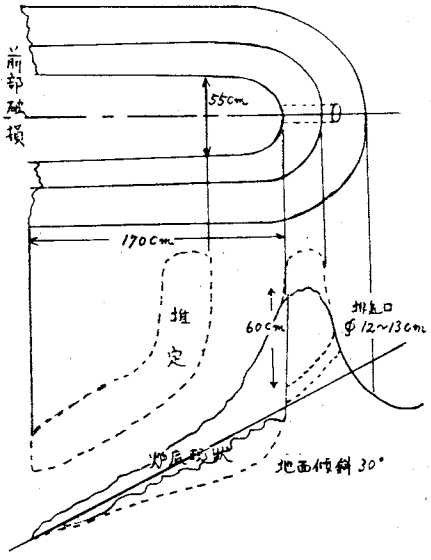
わが国の場合、古墳期乃至はそれ以前のものではこのタイプに該当する遺跡が発見されていないが、奈良期から鎌倉期頃にかけては随分各地で発掘例が報告されている。わが国の古文献で多少とも製鉄技術についてふれている箇所は『日本書紀』の天智天皇九年（六七〇）の水碓を造りて鉄を冶したとある部分であるが、近年滋賀県高島郡北牧野や草津市小野山で発掘された遺跡が、鉄鉱石製練である点で『続日本紀』の大宝三年（七〇三）四品志紀親王に、天平宝字六年（七六二）恵美押勝（藤原仲麿呂）に鉄穴を賜わった記載とも合致し、ほゞこの辺りの施設に対応する。両遺構は炉体の破損が甚だしく炉底のみに近い状態であるが、現場や発掘図面からみてこのような形式のものと考えられる。

この種の炉で砂鉄製練をした遺構としては破損の比較的少ないものは、昭和五三年に埼玉県大里郡花園村で発掘された台耕地遺跡の三基、昭和三七年に熊本県玉名市三ツ川字西原で発掘された六反製鉄遺跡の二基などであるが、その他にも青森県中津軽郡岩木町の大館森、群馬県太田市菅ノ沢、同藤岡市鉚沢、同渋川市金井原、それに新潟県北蒲原郡豊浦町真木山の各製鉄遺跡など、炉腹部以下の部分が半壊状態で残留しているものもある。完全に破壊され炉底のみの残存状態で発掘され、諸条件からそれと推定されるものはかなり多く、それらのおもなものを羅列すると次のようである。

青森県中津軽郡岩木町大館森製鉄遺跡
〃　岩木町大平野製鉄遺跡
福島県伊達郡国見町高域字山居製鉄遺跡
茨城県結城郡八千代町尾崎前山製鉄遺跡
群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺跡
〃　藤岡市鉚沢製鉄遺跡
〃　渋川市金井原製鉄遺跡
埼玉県北足立郡伊奈町大字小室字大山製鉄遺跡
〃　大里郡花園村台耕地製鉄遺跡
神奈川県南足柄市大杉平製鉄遺跡
新潟県北蒲原郡豊浦町真木山製鉄遺跡
長野県埴科郡坂城町開畝製鉄遺跡
滋賀県高島郡マキノ町北牧野製鉄遺跡
岡山県英田郡英田町福本たたら遺跡
熊本県玉名市春日六反光園内製鉄遺跡

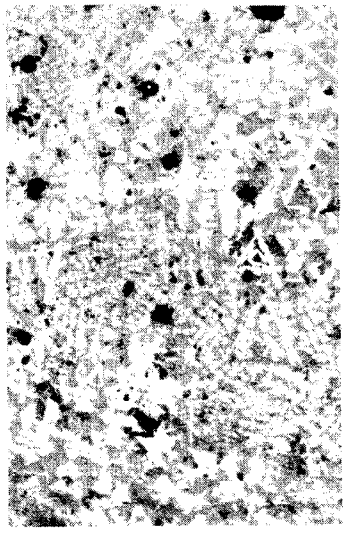
これらの遺跡について共通な点は、いずれも山裾の緩傾斜面で土質は岩盤とは限らないが、概して湿気の少ない乾燥地で、背後に燃料用の森林を控えた立地になっていることである。鉄源の採取地からは若干離れているが、これは砂鉄の場合運び易いという運搬面の問題もあるが、川砂鉄を使用していたものが大部分なので、湿気を防ぐ慎重な配慮があったのであろう。

また炉体はケースバイケース



第5図　玉名市六段製鉄遺跡の見取図

第3図
玉名市六反製鉄遺跡



第2図　深谷・荒井製鉄遺跡
鉄滓の顕微鏡写真

短歌「八月の歌」

蛍とぶ光は空に明滅す魂かと想ふ奥津城の辺に　渡辺観翠

日曜日に帰り来る孫待ち侘びて汚し行く靴小川に洗ふ　野村節子

指導者の眼にちらと涙見ぬチャンピオン牛に拍手あがれば　景山悦子

朝露を踏みて日課の畑廻り松の芽のびて梅雨の長かり　畑八重子

山脈は眼路はるけくすがすがし船通山のみち登りつゝ　目黒成生

憂きことも日々の暮しと慈めて身は白鳥のごとくに舞へと　真綿博子

とろとろと青梅煮つゝ他愛なき姑の話のよき伽となる　永井弥生

同胞を庇い遁れし沖縄の醜の怒りかブーゲンビリヤは　常盤はるまさ

光なき夏は終らむ立秋の夕べに聞くは農家の嘆きか　安部夕波

黍しげる島根の塔の丘に来てゆえ知らに頬を濡らすにまかす　常盤はるまさ

（沖縄にて）

巡視する夜半の校舎に間近なるスナックの灯は煌々として　伊藤萩雨

憎しみを抱きて夕べ去りゆかむ君との愛の崩れゆくとき　安部夕波

しばぐり八月句会抄

花火果て川面へ元の闇戻す　新出谷一華

つけて消す煙草の自戒合歓の夕　杠幸静

こだわりを解こともなく麦の秋　柏木侑

へちま垂れ閑日月は誰のもの　糸原古志

腕に自信残れど草刈る息の切れ　岡田蹊花

通院にたどる片陰路地を行く　岡田麗水

扇風機出番なきまま秋の風　高木白虹

不意の客数に切り分け冷奴　加能信子

ぞうり編む脚の痛さやもどり梅雨　渡部夕峰

浴衣柄センスほめ合う嫁姑　中田巣鶴

山の湯に安らぐ刻やねむの花　錦織富江

暫くは冷夏が話題木魚かな　中澤斐水

鳥髪山結界つくる霧冠むり　恩田魚跡

冷夏続く田守りに励む農の性　浅野としお

校庭に紅き提灯盆踊　小川あきお

でその寸法形状にかなりの違いがあるが、一〇メートル前後の間隔で復数基が並んでいることが多く、炉体の半分程度を掘込みにして造っているか、あるいは斜面を若干整地した程度で築造している。炉底面は直径五〇～八〇センチ程度に大きく隅丸を取った角形かハート形に灼熱を受けており、それより若干弱い熱影響で傾斜面の下方向へと燃焼口や鉄滓の流出部分が焼け固まって連らなり、五〇～八〇センチ×一・五～二メートルのほぼ楕円形を呈している。もっともこの炉底の形状は製練作業のときに生ずる侵食によって、築造当時とはかなり変っていて拡大されているものと思われる。この炉底には表面に炉材の粘土が塗られただけで後からの影響はあるか何等特別の施工はされていない。炉高については、炉頂まで完全に残っているものは例が無いので正確は期せないが発掘例では七〇～一二〇センチ程度の上すぼまりである。炉体下方の背部に一〇～一三センチ程度ガス抜き孔が斜め上へと炉体を従通している点も共通している。筆者の知る限りでは大きなものは玉名六反遺跡や藤岡鉄沢遺跡であり、佐渡の穴釜群については仕様が大き過ぎるし二～三問題点もあるので今後の調査結果にまちたい。最も小さなものは大館森の三号炉で炉高は僅か三〇センチという報告であった。

粘土製の羽口が出土する場合としない場合があるが、大部分の遺跡からは直径一〇～一二センチ、孔径三センチ前後のものを伴なっているので、大部分の場所で何等かの吹子設備が用いられていたことを想像できるが皮吹子か横差吹子かは定かでない。ドイツのジーゲルランドでは自然通風と推定されている。

（つづく）

◇あとがき◇

窪田蔵郎先生の玉稿　を頂きました。紙面の都合により後半は次号にゆずりました。続いて、「炉の羽口」についての原稿もと申越して頂いています。この方面についてもこの地方が全く処女地であるので、同好者の皆さんの努力で発見発掘のなされることを期待しての、先生の寄稿であります。熟読下さい。

次号から

横田の植物誌　正確な記録をめざして連載がはじまり、随筆　横田の自然　もやがて登場します。

「奥出雲の歌道史」に続いて「奥出雲の俳諧史」も予定に

陰陽地方史研究者協議会の準備も進んで、八月末までに参加者は　広島県（23名）・岡山県（3名）で、発表者は7～8名の予定で盛会が予想されます。日取は十一月二十三日（日）が有力です。

横田の中世に注目

島大文理学部の井上寛先生と学生諸君によって、「横田町誌」の中世史の記述をのりこえる研究が発足しました。成果に期待しましょう。

第三回出雲国風土記研究会　が十一月九日（日）に、横田町で開かれることに決定。

秋の史蹟めぐり　は十月の秋日和に、米子、西伯、安来方面を予定しています。いずれ御案内致します。

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第66号
10月号
昭和55.10.4
奥出雲編集集団

高殿以前の原始的な製鉄法（下）

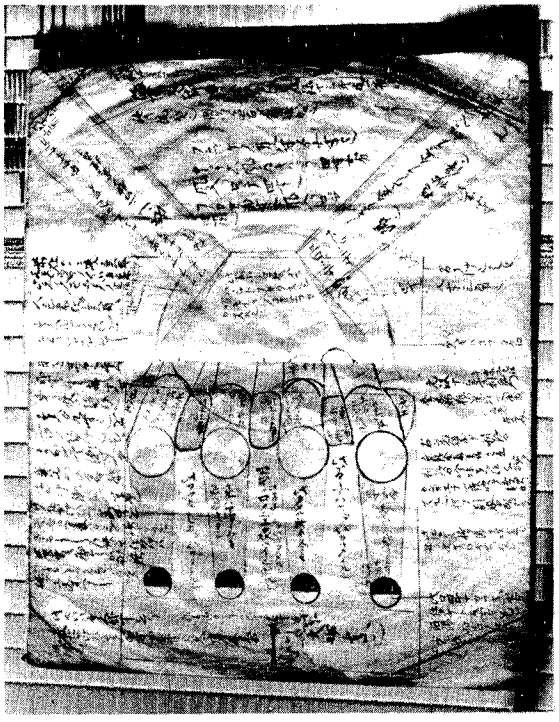
窪田蔵郎

◇大籠に伝わる秘伝書の炉形

半長靴のような形状をした如何にも原始的な炉からは、どう考えても江戸時代の永代たたらには技術が繋がらない。永代たたらのルーツは別のものと考えられる。それに脈絡があると想像されるのが、東北地方・岩手県の東磐井郡付近で古くから操業されてきた炯屋製錬の技法である。永禄年間（一五五九～）に吉備の中山有木の別所から千松大八郎小八郎という、切支丹の製鉄技術者兄弟を呼びよせて創業されたと伝えられており、また元和六年（一六二〇）にローマ使節として支倉常長に従って佐藤十郎左衛門が渡欧し、彼地の製鉄技法をもたらしたという伝承も有名である。早くから水車送風も行なわれており、また前述の南蛮荒吹と称するローマ伝来の秘法もあったといわれている。これは溶媒剤の添加とも燃料樹種の選択法とも推測されている。

その詳細は藤沢町大籠左利沢の千葉哲夫氏所蔵の『製鉄法秘書』に記載されているが、出雲流、備前流、近江流などがあり、いずれにしても炉体の周辺に踏吹子や横差吹子をしつらえ吹くものであって、炉容の大型化に対応して吹子の種類や設置台数に細かな配慮が加えられている。

このような形式の炉遺構は当然岩手県下で同地域を中心に発見されるのではないかと思われるが、予想される地域がほとんど未調査のため他の地域の発見例に求めると、その一つに昭和四七年に福岡県の北九州市八幡区で発見された、水犬丸西町に所在の丸ケ谷遺跡がある。遺構は比較的小形で仕様は鉄亜鈴形の両側に横差吹子を一台ずつ設置したような形が歴然と残っており、この湯溜り部や排滓池などに残存していた鉄滓は流動性のある飴状の製錬滓が多かった。



第6図　岩手県藤沢町大滝の千葉家文書

遺跡が大きく崩れていて科学的な調査をしない場合ならば、鍛冶場跡と紛らわしいような規模のものである。この方式の炉は前記秘書では出雲流二神陽合吹と言われているものと非常に近似している。秘書の注書きでは技法の詳細は不明であるが、小規模の山子吹という方法で製鉄をしていたことが同秘書に記載されている。

仙台藩には径二間、高さ七尺ほどの円筒形の製錬炉があったようである。野崎洋氏の調査では鋳物師のコシキ炉のような形の大形のものが想像されている。佐藤信渕もその著『山相秘録』に直径一メートル、高さ二メートルの円炉のことを書いており、幕末の佐賀藩反射炉の絵にも大形の銑鉄を事前処理する円塔形の炉が画かれているところを見ると、こうした方式のものも別途に行なわれていたものであろう。

さらに岩手県工業試験所の吉川保正氏の『九戸郡軽米町銅屋調査復命書』（この銅屋は恐らく炯屋の間違いであろう）の砂鉄溶解法の記述では、年代は新しいものであるが、土面を二間

雲伯地方において、室町期末より桃山期頃にかけての、永禄・天正の頃に始められたとされ、大籠地方には江戸末期に知れたようである。

また『松坂家勤功書上』によれば同地方の山根通の百姓達が

奥出雲における
歌道の濫觴（覚書2）

十六夜（いざよひ）日記

肌寒さを憶えるようになると急に夜を長く感ずるようになった。買い求めたまゝうず高く積みあげた書籍雑誌の中から、藤原定家の「明月記」を中心とするおびただしい古文書が、公開へと調書がすゝめられていることの報告物のなかで、十六夜日記の文字が眼に入ったので、書棚の角からほこりを払って、四十五年振りにもなろうか、とり出してみた。はじめて講義をうけた時は、第二段にあたる「逢坂の関」旅行記の部分だけであった。当時の鉛筆での書き込みが残っているので、読んでいくうちに遠い昔のことを思い出し、長い夜をさまよった。その教師の本名は忘れたが、奉った「庄兵衛」というあだ名はよく憶えている。はじめて講義をうけたのが森鴎外の「高瀬舟」で、物語の主人公が庄兵衛であった。講義はうまかったが、小柄な人で、文中の庄兵衛を思わせる人であったので、すぐに進呈されたものであった。

藤原定家の子為家が、父から伝領した播磨の細川荘は、家計を支える最も重要な荘園であった。六十二才の時長男為氏（のちの二条家の祖）に譲ったが、その後阿仏尼との関係が生じて為相（のち冷泉家の祖）らをもうけた。年老いてもうけた子の行末を案ずる為家は、細川荘を譲状をもってこれを為相に譲ることを定めた（当時はこれが相続の根本法であった）。為家の没後五十四才の為氏は、十三才の異母弟為相にそれを渡さなかったので相続の争いが起った。阿仏尼は歌道にも秀れていたし、是非共歌道の名門の正統を為相につがせるために、鎌倉幕府に訴訟すべく愛児を京に留め、東海道を鎌倉に向って下ったのである。この旅日記にあわせて訴えを綴ったのがこの日記である。

時あたかも元冠の難局に直面していたので、幕府の決断がおくれ、為氏、阿仏尼の死後当時の相続法上正当とされ、譲状が有効となり阿仏尼・為相側の勝となった。そして一部は二条家・京極家にも伝えられたが、多くの文書は荘園とともに冷泉家に伝った。十六夜日記にあらわれる執念が、今日まで続いたのではとの思いにもかられた。

二条家はその後家系が絶えたが、その流派を継ぐ人々によって、近世末まで守り伝えられ、正統派としての主流を維持した。

十六夜日記の文学性を訴えの激しさをもって、功利的と否定する人もあるが、歌に文にすぐれた女性の心があふれているのは魅力あるものである。

日記に出る最初の歌

とどめおく古き枕のちりをだにわが立ち去らばかはらはむ

旅立ちにあたり寝室の枕を見て亡夫との愛情こまやかであった生活を思い出した歌

明月庵然住斉白翁釣月上座

出雲における歌道は二条流によって開花した。それを語るにはこの釣月法師を語らねばならない。

江戸の人で幼少より和歌を好み、成人するに及び歌道は京師に学ばねば道をきわめることはできないと知って、三十二才の時家を出て、墨染の姿で逍遥し清水谷亜相実業卿の門下に列して学んだが、師の死にあい空しく江戸に帰った。このころ元禄の初年（元年が一、六八八）、出雲国を経て温泉津・高津辺をすぎて筑紫に行脚したことがあった。そののち同じく歌人で江戸に滞留していた、武者小路正二位実陰卿にまみえて門弟となり数年間修業した。そのうち歌道の根本の地は「八雲たつ出雲八重垣」のある出雲であると、出雲に入ることを決意し、宝永の末ごろ（五十三才位か）来国し歌道をひろめた。さらに奥儀を極めるため京都に行き、中院内府通茂公に師事し遂に志をとげて出雲に帰った。

享保八年（一、七二三）出雲の杵築（今の大社町）に庵を結んだ。当時杵築は出雲における歌道の一中心地であって、そこの北島孝和が招いたともいわれている。釣月はすでに老令であったが、孝和とともに高角山の柿本社に参拝し、二巻の歌集を奉納した。

（一頁より続く）

（三・六 m）四方に深さ二尺（六〇 cm）位の穴を掘り、炭と砂鉄を交互に地表より四尺（一・二 m）位高くなるまで積み上げ、吹子二〇挺位で昼夜の別なく吹き続けて、銑鉄を造るような方法もあったといわれている（近代鉄産業の成立所収）。この方法などは技術としては単純な技法であり、非常に古い年代ものと推定される可能性があるか、新技術を知る機会に恵まれず、資本的にも小規模な鉄山で、昔ながらの伝承で操業をしていたものであろう。

次回は「発掘された羽口」

安部宏作陶展

白磁の作品で日本民芸展賞をうけた安部君は、山陰はもとより県外各地の展示に好評を博し当地開催はのびのびになっていましたが、次の日程で開催が決りました。

12月19(金)20(土)21(日)三日間

於 横田ショッピングセンター階上

享保十年松江に移り住み、十一年四月には宍道町木幡氏の山荘を訪れ、「独楽窩記」を作った。このころ釣月は、米子の竹内時安とともに上京し、入江相尚朝臣（御歌所長の祖）の門下であった、佐太神社神主勝部芳房（寛文12～享保12）に、二条流の奥儀を伝授している。門人として傑出したのは

小豆沢常悦　平井寛敬
大野是唯　清水古博
吉田芳章

で、釣月の跡をついだのは、小豆沢常悦、ついで大野是唯、そして清水古博であった。

また杵築の千家・北島両家へも伝り、しばらくこゝも二条派の流れを保ったという。釣月が松江の土となったのは、享保十四（一、七二九）七十七才の時と伝えられ、墓は松江の西方の一法眼寺にあるという。

小豆沢百忍庵常悦

は仁多郡には直接影響を与えた歌人である。

松江の商人で和歌を好み、二十才のころ釣月に従って、歌道を極めたという。常悦は宝暦十一年（一、七七一）に釣月三十三回忌の法要を営み

ことの葉の露もへたてぬまことをや　はちすのうえにおもひ出らむ

の歌を奉げている。

家は末次町にあり、豪商小豆沢家二代目（祖は宍道小豆沢家）で、浅右衛門勝興といった。幼名は金松、妻は喜久子であった。

釣月に随ったのは十年余、歌道の極位を授かり、歌書物語等も広く学び、五十才で隠居し剃髪して常悦と号した。京に上って武者小路実岳に師事し、まもなく上席に進んで師より「百忍庵」の号をさづかり、六年を経て松江に帰り多くの人を教え、添削にもすぐれた才能をしめした。

文化文政年間大いに民間に広まった二条流歌道は、釣月つづいて常悦の力であるという。安永五年（一、七七六）七十一才で死した。法名は祥翁常悦上座という。

このようにして末次かいわいは、市内の裕福な町人の文学、歌道の修練が盛んとなり、庶民にも及んだ。常悦の子勝延も文学に造詣深く、天明寛政のころとなるとますます盛んとなった。

二条流歌道と絲原氏

万葉集、古今集をはじめ数多くの歌集の写本とともに、釣月の歌集、常悦の歌集が絲原家に所蔵されている。当主が常悦を師とした歌文、常悦の弟子で横田町安楽第二十七世の住職であって、歌友でもあった悦阿との交遊の歌文、横田の医者で歌人蔵屋の杠元珉（樋口表杠氏の分家和田）との歌便りがある。また釣月の弟子吉田芳章との交遊もあっている。芳章は能義郡切川の人で通称を亘といった。仁多郡三成村の生れで渡辺といった。俗称園生といゝ、吉田氏の養子となり、中年のころより京都に上り、二条家の門人となっ

（四頁へ）

釣月歌抄

長提薫風

夏ころもつゝみの上にゆくことも　忘るゝ松のすゝみかな

此寺に今やとかへる墨そめの　夕べをたとる鐘のおとかな

前の歌は松江市外中原町の堂形の松並木を歌ったもの、後の歌は近くの天倫寺に今もある大陸渡来の鐘の音を

八重垣神社奉納歌

卯花もさけや言の葉月雪に　みあとたれます神の八重垣

大社八景のうち

春はまつ霞のみほにうかひ出る　みとりの亀の山そ長閑き

うくひすのあやなす声にひかれきぬ　出雲の森の花の木のもと

いねかての日にうかれて山もとの　はるけき里の秋をとはは

秋の葉をさそひ尽してみさき山　こがらし高くのこる松がえ

横田銘草木集（1）

ホソバウリハダカエデ（細葉瓜膚木）

Acer rufinerve Sieb. et Zucc. form. angustifolium Kitam.

in Acta phytotaytotaxomica et Geobatanica (XXIV 23　1972)

日本に広く分布するウリハダカエデの葉の細長い品種。この品は現在世界では日本で2本のみしられ、船通山のものをタイプとして、この名ができた。即ち船通山のものはこの植物のタイプツリーとして、学術上極めて貴重である。他に1本親三瓶北斜面にある。紅葉が美しく樹肌は瓜の肌に似た模様である。

（丸山　巌）

（写真は次号に掲載。横文字初めの2行は学名。次の2行は「1,972年植物分類地理学界25巻23号」に記載され有効となった意である）

「奥出雲」詠草

ユーターンの若きらも入りて踊る輪のひろごりゆきつつ盆の夜は更く　野村節子

雨のなか草刈る女の憩いゐる腰の利鎌がおりおり光る　渡辺観翠

連休も事務に追はるる吾が嫁にねぎらひ言ひて飯を炊くなり　畑八重子

この宿に琴の爪びきなつかしく六段の曲静かに聞き入る　目黒成生

牛の背のつばめの糞を除きつつひなの返るを楽しみて待つ　景山悦子

ぬくもりをまさぐりて尚名を呼びぬ愛犬(黒)よ十七年の歳月は何ぞ　真綿博子

朝まだき御詠歌あぐる八朔に白き芙蓉の咲きそめにけり　永井弥生

姿変ゆるわれのいのちと信じつつ雨の檜山に今日も枝打つ　伊藤萩雨

灼熱の野を彷徨いて辿り来し摩文仁の丘ゆ海は眩しえ　常盤はるまさ

(沖縄にて)

北国の旅の夕べに潮騒を聴きつゝ眠れば故郷の夢みる　安部夕波

しばぐり九月句会抄

法師蟬夕さびしき身のほとり　卜蔵一美

浴衣着て正座の客となりて酌む　浅野としお

もず高音ゆらゆら梢ゆるがして　糸原古志

花替へて佇つ墓すでに秋の風　杠幸静

萩の紅露をこぼしぬ秋海栄　植田美代子

鶏頭燃ゆ番いの白鶏餌をあさる　岡田蹊花

火蛾乱舞一夜に命尽さむや　岡田麗水

甲虫甲を堅く角を上ぐ　小川あきお

陽を欲し空を仰げりきびの穂　渡部夕峰

蔓珠沙華狐の通るこみち脇　恩田魚跡

ふくろうよ息子はあした旅に発つ　柏木侑

秋の関二代目つぐや松の彩　門脇花子

病む父に涼風入るる院の窓　加納信子

南紀行

青みかん紀文を語るバスガイド　高木白虹

長梅雨の晴ればすでに初秋風　田辺竹野

呆けても呆けても好き茗荷の子　中澤斐水

盆踊り再会の群あちこちに　中田巣鶴

灯消し寝所へ秋の月澄めり　新出谷一華

長雨に垂れて垣根の萩こぼる　錦織富江

て歌道の先達といわれた。門人の飯生の社家神白朝興が特に勝れ、芳章死後の宗匠となった。当時の藩主は不昧であった。

このように釣月、常悦、芳章悦阿と交り、京都二条流の宗匠烏丸光栄を師とした絲原家の当主は、七代吉三郎（享保二年一、七一七～明和元年一、七六四）で、楽山軒好親と号した。歌集にも名をつらね作品も残している。

（次回は歌人好親について）

〈ひとこと〉

事件の積み重ねだけが歴史ではない。いま絲原記念館の美術展示を通して、歴史を学ぶことができる。

京都二条城のふすま絵などは当時の武将の豪壮な好みにあわせた、土佐派、狩野派の作品である。

これに対し武家社会以外の階層の好みにあった絵を始めた、円山応挙とその流派の絵が十点ほど、またそのころ中国の山水画に学んだ文人画（南画）が、池大雅から直入まで数点展示してある。絵を通して時代の移りかわり、民衆の抬頭とその好みの歴史を知ることができて面白い。

第2回陰陽地方史研究協議会

日程は　十一月二十四日(祭)で連休第二日でありますが、「日刀保たたら」の操業が今年は休日に行われるのはこの日のみのため決定しました。

会場は　横田町産業祭のため、役場会議室を借用する予定

発表予定の題名（現在十名）

三次市　一名

○三次地方の中世について

庄原市　二名

○江ノ川上流の舟神

——鉄舟運に関連して——

○題未定

広島県高野町　一名

○高野山の田植早乙女「ハマりさん」

鉄山業民俗に関連して

岡山市　二名

○岡山県北・奥土用たたら遺跡、神庭谷たたら遺跡の発掘調査報告(スライドにより)

○キナザコ製鉄跡から、岡山県を中心とする古代製鉄址の系譜をさぐる。

新見市　一名

○新見庄を中心とした古代中世史と奥出雲

鳥取県日南町　一名

○題未定

地元　二名

○最近発掘の奥出雲古代遺跡

（スライドにて）

○奥出雲の新補地頭三沢氏の正しい系図と備北、西伯との関係

参加者予定　広島県30名　岡山県6名　鳥取県10名　島根県　40名以上

盛会が予想されます。

第3回出雲国風土記研究会は

予定通り十一月九日(日)に、最近発掘された仁多郡ではじめての、三沢の前方後方墳の調査報告（岡山県から来町して）と丸山巌先生の出雲風土記の中の植物について、及び文献研究報告その他

E・パワー氏は来町されましたが、来春長期留学が急に決定したため、その折にスライド等持参願い、ゆっくり話しを聞くことに変更しました。

18回秋の史蹟めぐり

十月二十六日(日)に法勝寺、米子市をたずね、青木遺跡や同資料館をゆっくり見学する予定。講師は大村俊夫先生。

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第67号
11月号
昭和55.10.26
奥出雲編集集団

奥出雲における歌道の濫觴（覚書3）

—楽山軒好親—

砂鉄製錬業の安定時代

雲陽大数録の寛文十二年の項をみると、松江藩の財政は歳入に対して一割以上の不足をきたす歳出をしている。これを補うためには鉄方買上制による、鉄専売制による利益をもってしていた。その後御札座御売鉄制となりさらにいろいろの変遷があって、享保十一年（一、七二六）からは鉄方法式となり、仁多郡三十八か村の「鉄山」、腰林、鉄穴の利用は、鉄師　飯石郡の田部、仁多郡の桜井、糸原、卜蔵杠、山根の六人に限定された。これらが大鉄師成立へのもととなった。糸原氏は五代徳右衛門の時代である。このころの郡内の五氏の経営規模は、ほとんど同じであった。六代勘右衛門は養父徳右衛門を補佐して努力し七代吉三郎に至って経営も順調となり、次第にその手腕の上に立地条件の良さも加わって、桜井、卜蔵両氏とともに三鉄師へと成長していった。ところが勘右衛門の時代の奥出雲の農業は、天候の異変によって凶作続きであった。即ち享保十五年は害虫同十六年は続いて害虫に見舞われ、翌十七年は天候不順による極度の凶作の上に害虫発生と、十月中旬からの降雪によってさんざんとなり、同十八年は春の積雪多く、全く悲惨な状態となった。この時下郡役人であった吉五郎は、松江藩へ愁訴のため出府し、遂に一か年五千俵宛五か年の救米をうけることに成功し安堵したが、それもつかのま過労のために四十一才の若さで急死した。そこで養父徳右衛門がしばらく家業をとりしきり、五年後の元文三年（一、七三八）、意宇郡（今の八束郡）湯町村面白の素封家福庭六郎右衛門の三男吉三郎二十二才を養子に迎え七代として糸原家を相続させた。その五年後七十五才で徳右衛門はなくなった。

吉三郎も経営の手腕にすぐれ、製鉄業を拡張するとともに新田の開発にも力を尽し、下郡、鉄師頭取もつとめ、松江藩が小田切備中を登用してはじめた義田制にも積極的に協力した。一方家訓は質素倹約を第一として、財政基盤の確立に意を注いだ。

他方鉄商売の視察をかねて、大阪方面へ再度旅をして見聞を広めるとともに、伊勢参宮を行ったり、各地の歌人俳人とも交った。特に和歌においては、楽山軒好親と号して、この道を深めた。明和元年（一、七六四）四十八才でなくなったが、短い生涯のうちに多彩な活躍をして、家の内外に大きな足跡を残した。子は七男六女に恵まれ、四郎左衛門が八代を継いだ。その弟に為次郎がいたが、遅日庵徐行といって、仁多郡の俳諧の草分けとなった。

好親（吉三郎）の和歌への道

出雲に二条流の歌道をひろめたのは釣月である。釣月が三度出雲を訪れて定住を考えたのは享保七年であり、のち松江に移ってなくなったのが享保十四年である。これは吉三郎が六才から十三才の間のことになる。釣月の歌集に「玉造温泉十二景」があるから、玉造を訪れているが、そこからは素封家福庭家を訪れたことはうかがえない。好親が二条流の歌道に傾倒したのは、釣月の弟子小豆沢常悦からの影響と指導であると一応考えておくことにする。今後福庭家と釣月との関係が明らかになれば、豪商と素封家の交渉から歌道のつながりが考えられるし、釣月と吉三郎の父との交りが浮んで来るのではあるまいか。父からの影響で吉三郎が釣月を知り、そして常悦の指導によって釣月の歌を深く手本としたものであろうということにしておくことにする。絲原家には釣月やそれにまつわる歌集などが多いが書簡類はない（釣月生存中はまだ吉三郎は福庭家の人でもある）。吉三郎と常悦との交遊はげしく、歌を中心とした書簡や歌集が多い。常悦は吉三郎より十一才年上であり、この世を去ったのも十二年おそく七十一才であった。

次の歌集（写本）は二条流の歌道を修めたことをしめすものである。

○観応四年（1,353）
「摂政殿御和歌百首」
（頓阿・慶運・兼好ほか）

○「兼好法師歌集」
（寛永三年1,626の写本を寛文四年1,664に写す）

○「萩のしおり」（詞林総目）
（二条流の歌会などのしおり）

○元禄十五年（1,702）
「一帝三臣御百首題和歌」
（仙洞と中院前内府通茂、清水谷前大納言実業、武者小路参議中将実陰のもので、三臣はいずれも釣月の歌の師である）

○享保七年八月
「雲陽意宇郡忌部玉造温泉十二景」（釣月の自筆歌集か）
（この序には…享保七年京

発掘された羽口(上)

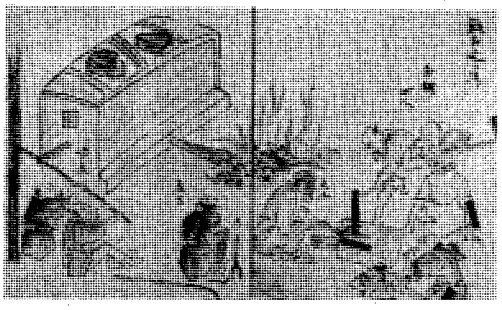
窪田蔵郎

機能と材質　羽口とは吹子から炉の中に風を送り込むために設けられる風道の先端部分に付けられた名称であり、吹子の風配りに取付けた木台の先端に装着し、炉壁をほとんどの場合は貫通して燃焼部分に直接接触するものである。よく考古学の発掘図面などでは、火床の中や近傍に羽口と書かず吹子口と書いてある場合もある。但、吹子(ふいご)と書いてある例を見かけたが、これは木製・皮製の吹子が出土するはずもなく、標記の場合の誤りである。四〜五十年前の報告書には、当時はまだ金属生産関係の考古学など余り進んでいなかったので、筒状土製品とか土管などといった表現になっているものもあった。

材質は粘土を焼成して製作したものが大部分であるが、まれに石製や鉄製のものも発見されることがある。鉄製のものはかねきろと称して永代たたらのものである。但し南部方面では後世のたたらでも藤沢町のドウメキ沢などの例に見る如く、粘土羽口を使用している。出土状況は未使用で発見されることはまずなく、大抵の場合は灼熱を受けて甚だしく消耗しており、あるいは折損していて、断面形状は判るが長さや先端・末端のいずれかは定かでない場合が普通である。

全国各地で出土しており、鉄源の製錬用のほか鍛冶用にも鋳物用にも広く使用され、青銅関連の遺跡での出土も少なくない。各地の鋳銭司跡や梵鐘を鋳造した遺構などからも多数出土している。これらの点については共伴する鉱滓や羽口先端に付着した溶滓の化学分析、さらには鉱物組成などで使用目的を知ることができる。

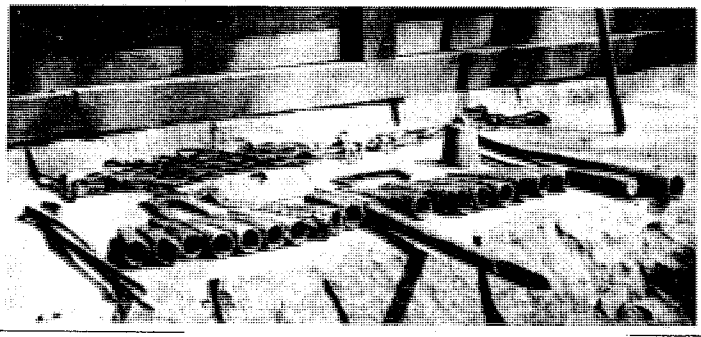
このような状況であるから用途別の違いとともに、形式の地域差ということも充分考慮しなければならない。また土器類と異なり焼成状態など一見して時代判定の基準とはなり難く、いずれもほぼ同様な姿態をしているので、基本的な機能の調査とともに、当該遺跡のマクロ的観察に基づいた総合判断をすることが大切である。



第1図　大鍛冶の作業「鉄山記」所載（吹子の部分中心）

形状と分布　鉄製の羽口は前述した通り、近世のものでしかも中国地方の永代たたらに限定されたものであるため、一定形状で揃った截頭円錐形のものである。石製のものは主として都城市、日向市、延岡市、大分市など九州地方のそれも東側の製鉄遺跡で発見されており、他ではほとんど聞くところがない。材質と加工性の関係で肉厚大径のものに限られるので、形状も長さなどは自から制限されてくる。従って本項で対象となるのは主として粘土製のものである。

この粘土製羽口の出土地は前述した通り全国各地である。考古学の報告書等によって地域別の出土状況を大雑把に把握すると、九州が最も多く、東北、中部、関東といった順になるが、これは製鉄遺跡の調査に注目す



第2図　山根たたら遺存鉄木呂羽口（江戸末期）

（前頁下段より）

より来り、八月末つかた玉造の山里にゆあみにまかりしに、友する人もなく……

とある。前号では在来の説によって享保八年出雲に来住としたが、訂正することとした。これが自筆稿とすれば、釣月と福庭家のかゝわりが、玉造訪問を機に生じたものであろうか。これは釣月の作品集としては、初見のものである。歌とそれにまつわる里人の伝えを註として書き綴ってある）

○享保八年

「石見柿本社奉納歌、播摩柿本社奉納歌」

（いづれも当時の二条流の若き指導者三十五才の烏丸従二位中納言光栄の歌をはじめとするもの）

「藤川百首和歌」はこの続きにある。

（冷泉前大納言為久郷他の歌集――為久は冷泉家中興者）

○享保十三年八月の釣月の「大社八景和歌」は吉三郎が糸原家に入った翌年の写本である。

○仝　年秋の

る研究者の多少、調査の進行状況などによって多分に左右されており、今後その分布量は変ってくるものと思われる。しかし、九州、東北の発見例が多いのは古代から長い年月製鉄を実施してきたことを裏書きするものであろう。

これら出土羽口の大部分のものの形状は、直径一〇～一二センチ、孔径二～三センチの大径で、肌は淡赤褐色を呈したものと、直径四～五センチ、孔径三～四センチの細形肉薄の表面が黒灰色を呈したものであり、後者はほとんど近世の鍛冶遺構を伴なうものである。端末は円筒状で心持ち孔が大きくなっている場合と、内側外側ともにラッパ状に拡がっている場合がある。これは海外の例では一組の羽口に二本の風導管を装着して用いている場合が多いが、わが国の場合はむしろ溶損、折損などに備えて羽口交換を簡便に行なえるよう配慮したところからできた形式のようである。鍛冶羽口の場合は対象加工物によって、鋸はどの羽口、のみはどの羽口といったように羽口を交換していたので、当然この形式の方が一定量産システムでなければ便利である。

羽口の長さはいずれも折損していて不明であるが、後述する七りん館の大径鍛冶羽口で四三センチであり、若者が見た一番長いものは青森県大野野製鉄遺跡の四八センチであるから、通常はこの辺りが限界なのであろう。南九州では島袋盛範氏の『藩製時代における製鉄業』の記述などでは、寸法は不明であるが文章から推してもっと長いもののようである。また大径のものでは長谷川熊彦氏は大分県杵築市狐平で外径十六センチ、孔径十一センチのものを発見し、自然通風の風導管と推定されている。ところが近年、埼玉県伊那町の大山製鉄遺跡より纏って大形の羽口が出土した。いずれも大径のもので外径十四～十八センチ程度もあり、孔径も十センチを超えるものが多く、最大のものは十三センチというものすらある。加えて用途不明の鋳形片と推定されるものが数片出土している点よりして、これらの羽口は大形吹子を使用し、多量の風を炉内に送り込み、溶融砂鉄に吸炭させて銑鉄を生産したものか、あるいは銑鉄を溶解するために用いられたものであろうと想像される。同遺跡出土の鉄滓や鉄塊の組織から推理すると前者といえるであろう。

変つた形状の羽口　粘土製羽口は通常前述したような円筒状である。しかし出土例が増えてくるに従い、意匠的にか機能上の必要か工夫がこらされて、若干形状の異なった羽口も現われてくる。なお、原料は通常の赤粘土を用いており、大径羽口の一部には故意か偶然か長石、石英等の細砂が少量混入されているものがある。炉壁などのような繊維質は混和されていない。これらは製錬用にあてられたものもあるが、大部分は鍛冶用の羽口である。

眼鏡形羽口＝新潟県の新発田市中尾で発見されている。外径七～八センチの羽口二本が8字状を呈しているが、製作中に融着したとは考えられず、何等かの使用目的をもっていたものであろう。孔径も三センチで先端が荒々しく灼熱を受けている。

図 Makoforo 族の鉄加工の作業図

第3図　（ベック鉄の歴史より）

第4図　神奈川県酒勾鍛冶大形羽口（江戸末期）

第6図

埼玉県大山製鉄遺跡
350号出土羽口（平安期）

第5図　神奈川県酒勾鍛冶小形羽口（江戸末期）

（前頁下段より）

「大社八景」

（これは権大納言一九年から十六年まで在位一烏丸光栄・武者小路実陰・冷泉為久ほかの歌）

などがあって、こゝまでは、吉三郎が常悦の指導によって、まだ福庭家の人であった時に書き写したものであろう。釣月の「大社八景和歌」以下はそれまでに続いて写したもので、養家に入っての写本となったであろう。

しばぐり句会抄

七変化色香失せても己が坐を　岡田麗水
秋深し花盗人の貌と合い　加納信子
凶作の稲架の片喰虫老いぬ　糸原古志
暁闇の障子明りや秋の声　中澤斐水
叢のこほろぎが引く曳きずる（病床）　恩田魚跡
秋の水通し旧家の反木橋　杠幸静
留守番の独り夕蝕の秋刀魚焼く　新出谷一華
明日知らぬ蜂虻石蕗の花に群る　岡田蹊花
吾が影に歩む重さの萩の坂　錦織富江
訪ね来し旧友の微笑み秋うらら　渡部夕峰
小さい秋車窓に入れて旅をつぐ　柏木侑
ヘリコプター音なき方は秋の蕎　藤原樵夫
食べ残す小皿の梨切れ病む小部屋　高木白虹
紫蘇むしるはゝの背まろくまたまろく　植田美代子
身がまえて牡牛が秋の角を研ぐ　浅野としお
寺の鐘秋風静かに暮れいそぐ　門脇花子
峡湯宿幽かに秋雨のゆく音す　小川あきお

十月の歌

不安なりし昨夜の宿直（とのい）思いつつ今宵わが家の風呂にくつろぐ　伊藤萩雨
大きなる憂ひの一つ晴れざりし一日は暮れぬ強き雨降る　野村節子
彼岸花山際の墓地にむれ咲きて真紅の花に蝶の舞ひゆく　畑八重子
みちのくの旅に尋ねし中尊寺金色堂をまぶしみ仰ぐ　景山悦子
黄昏れし峠の径の篁ほぼの昏らくして小鳥啼くなり　渡辺観翠
またしばし離れ住む息（こ）が発ちし夜列車のひゞき消ゆるまで行つ　真綿博子
閉店となりて店内静かなり疲れいでしも心安らぐ　目黒成生
豊穣の秋とは云へど実りなく柿の木坂は水引の花　岡田時子
みのらざる峡の田畦に彼岸花もえつつ今日も雨の降りつぐ　永井弥生
基地に沿いてしばらく続く街を行き沖縄は日本に還りしものか（沖縄にて）　常盤はるまさ
降り止まぬ雨の夕べの窓閉ざしわれは折りのひとときに座す　安部夕波

前号の記載改訂（学名について）

Acer rufinerve Sieb. et Zucc. f. **angustifolium** Kitamura f. nov.

Folia angustiora, obovata triloba vel oblonga, 11–18 cm. longa, 5.5–11.5 cm. lata, irregulariter duplicato-serrata, petiolis 5 cm longis.

Distr. Honshu, Prov. Izumo: Torikami, Mt. Shentsuzan (Aug. 30, 1949 I. Maruyama)—Typus, in Herb. Univ. Kyoto., Mt. Sambei (Nov. 18, 1970 I. Maruyama).

ホソバウリハダカエデ　ウリハダカエデの葉の細い品種で，丸山巌氏が出雲で採集した。

横田銘草木集（2）

サクラソウ（桜草）　横田町三井野原の湿地産

日本特産の美しい花サクラソウの自生地は漸次少くなって、県下では三井野原に残存するばかりである。花色や花形には変異があり、古くから栽培もされ多くの変り物ができ、その愛好家はとても多い。外産種も多く作られるので、これと区別して〝日本桜草〟の名が横行するが、この名は無知な贅言である。

(1)の船通山のホソバウリハダカエデ
（手前の三つに分れた樹木）

全上の樹皮

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 68 号
12 月 号
昭和55. 12. 6
奥出雲編集集団

発掘された羽口（下）　暮地遺跡　三沢氏をめぐる系図　短歌・俳句　横田銘草木集③

発掘された羽口 ㊦

窪田蔵郎

角形羽口＝角形羽口には四角形、六角形、八角形などがあるが、孔はいずれも円形である。四角形のものは千葉県の菅生遺跡付近で表面採集されたものについて次項で述べるが、六角形のものでは愛知県の一宮市苅安賀地蔵前で外径六センチ、孔径二センチ強のものが出土している。また青森市六枚橋奥の尻八遺跡より出土の破片は、推定すると外径五～四センチ、孔径一・二センチのやゝ小形の六角のものである。八角形のものについては兵庫県千種町針金屋敷出土の外径二八～二一・五センチという大形の珍らしいものが報告されている。

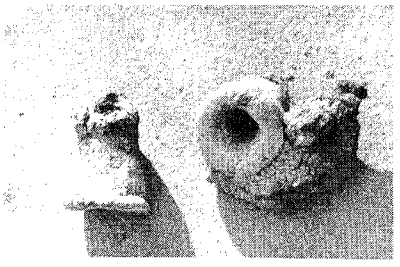
ラッパ状羽口＝福島県伊達郡国見町の山居製鉄遺跡は、北から南に張り出した低い丘陵の斜面に築造されたもので、炉底のみで上部構造が破損している製鉄遺跡であるが、ここから出土した羽口は比較的小形のラッパ状を呈している。拡管された部分の外径は約七センチ、孔径は四・五センチであり、先端部の外径は五センチ、孔径は二・五センチである。後述七りん館のものも外径は拡管されていないが、孔は大きくなっており、機能的にはほゞ同様なものである。このような仕様ではとても外国の例のように木呂二本を装着というわけにはいかないであろう。なお、ラッパ状でも外側のみで孔の形状ではほとんど変化がない場合もある。群馬県渋川市金井原製鉄遺跡などはその良い例である。

次に二～三の出土例をあげ、羽口の仕様や用途を説明しよう。

豊浦町本田山瀧沢の大形羽口　新潟県同町の真木山製鉄遺跡に隣接するこの本田山遺跡で採集された吹子羽口は、縦に二分一弱に割れているので寸法が定かでないが、孔径は熱影響のない側で五・五センチあり、先端部は孔の径が幾分広がっていてこの部分は既に溶損し、スラグが粘着しているので内側のみでなく、外側も共に広がっていたものかどうかその点は不明であるが、とにかく六・八センチになっている。肉厚は平均三・五センチあり、従って直径は一二・五～一三・五センチ程度のものと推測される。孔は真円でなくやゝ扁平である。

それにしてもこの吹子羽口は稀に見る孔径の大きなものであり、しかも通常先端部が狭まっているのに七～八ミリでも大きくなっているのは、製作時に芯の棒を引抜くときにズレて偶然広がったものか、あるいは意識して製作していたとすれば、どのような作用を期待していたものであろうか。色調は内側は白褐色、外側の熱影響を受けていない部分は黄色を呈している。

菅生遺跡隣接地表採の方形羽口　粘土製羽口には円筒状のものが原則であるが、稀に六角とか八角で円孔を有しているものもある。



第７図　福島県山居製鉄遺跡出土羽口（平安期）

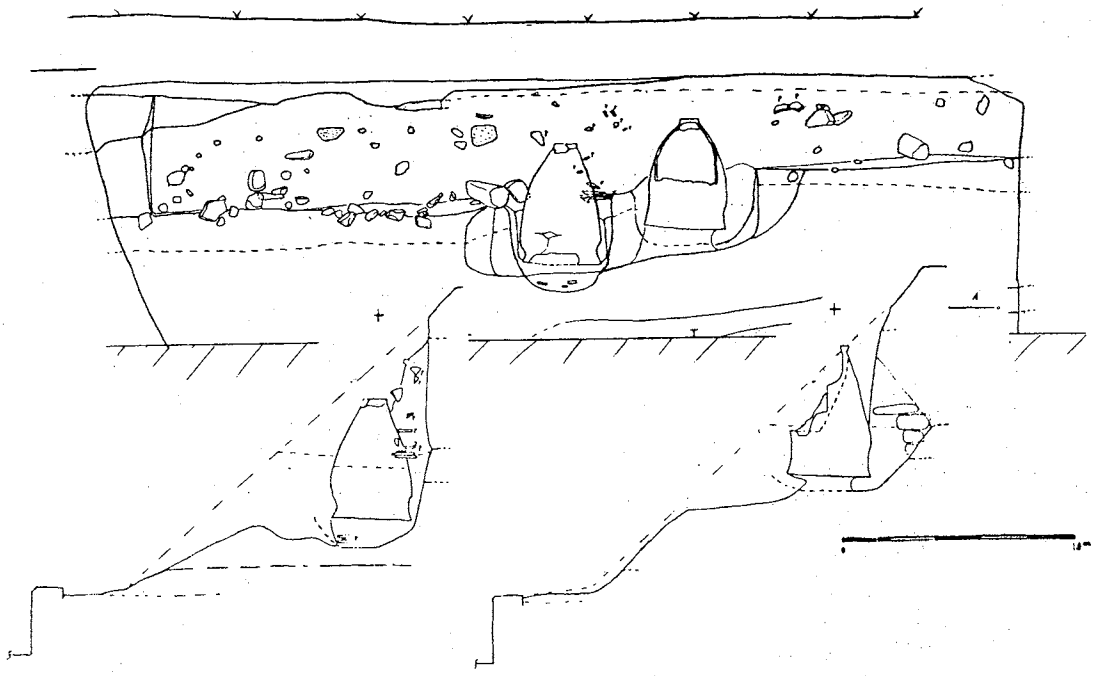
しかし千葉県木更津市菅生遺跡に隣接する同市大寺地先で採集された羽口破片は方形円孔であり、他に例を見ないものである。発掘担当の三森俊彦氏も出土状態について、純粋な包含層ではなく縄文式土器から明治期の陶磁器と共伴するもので、出土層もはん濫源堆積土であるとされているから、年代を推定しにくいものでかなり後世のものであろう。

破片は九個のうち一個が円筒状で他は総べて方形円孔のものである。焼成は外周は江戸末期などの関東地方などで良く見られる鍛冶羽口のように黄色を呈しており、内側は黄褐色で熱影響を受けた部分は赤変している。先端部の羽口汚れの現象は余りひどくはない。№9の円筒状のものは外径が判らないが、孔径から考えると鍛冶用としてはやや大き過ぎる感がある。

七りん館の鍛冶羽口　滋賀県長浜市鍛冶町にある七りん館所蔵の鍛冶羽口は、図の通り先端が一〇・七センチと肥大し、端末部に行くに従って八・三センチと若干細くなっている。孔径はこれと反して先端部の方が細く三センチ、端末部は羽口交換か取付の関係に便なよう五センチと、端末から七～八センチまでの部分で急に漏斗状に拡大されている。昭和初期頃には使用されていたものであるが、どの程度に使用されたものか不明である。使用されて折損したものでみると、灼熱は受けているのに比し先端に汚れが少なく、極

島根県仁多郡仁多町 暮 地 遺 跡

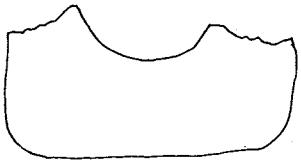
（縄文後期末ー倒立甕棺）調査日　昭和55年6月1日　　調査者　杉原清一



く僅かな鉄滓の融着を見るのみである。この羽口は末細りの形状を別としても、他地域で使用されていた鍛冶羽口よりも太く、鍛え鍛冶やいわゆる野鍛と目されている遺跡から出土しているものに形状が近い点が特徴である。主体部の色調は明白褐色である。

（日本鉄鋼連盟資料室長）

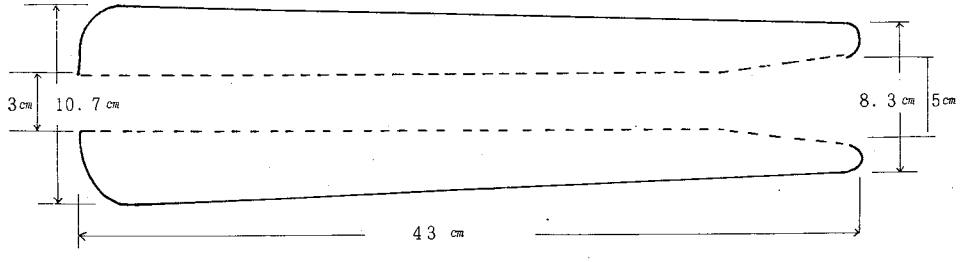
No. 1　破片



第８図　千葉県菅生遺跡近傍表面採集方形羽口
（断面見取図の１例）

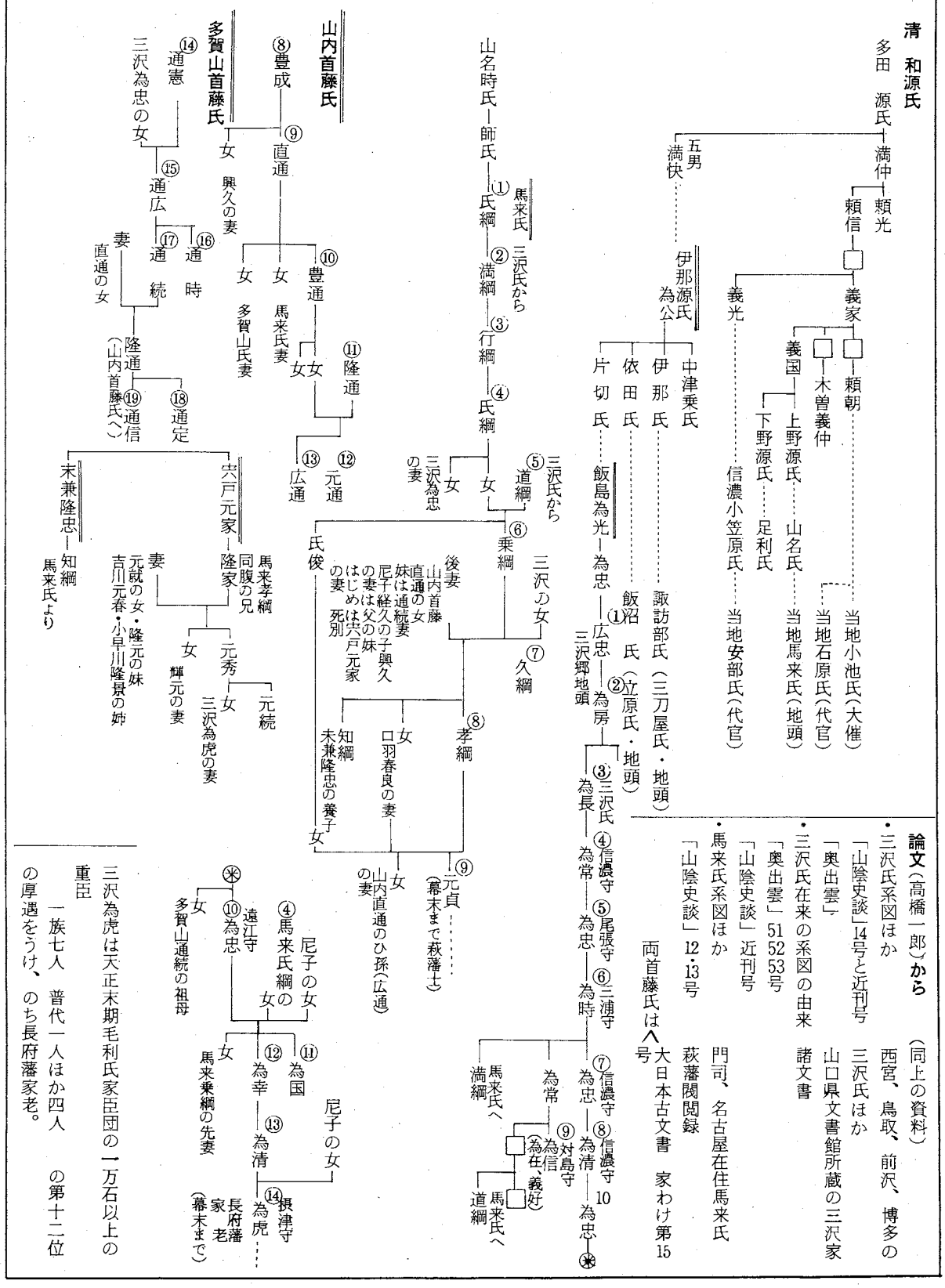
No.	外　形	孔　形	法　量
1	方　形	円　形	外辺5.9 cm　孔径3.0 cm
2	〃	〃	外辺5.8 cm　孔径3.4 cm
3	〃	〃	外辺5.8 cm　孔径4.0 cm
4	〃	〃	?
5	〃	〃	?
6	〃	〃	?
7	〃	〃	?
8	〃（?）	〃	?
9	円　形	〃	孔径5.8 cm

第９図　滋賀県長浜市７りん館復元羽口見取図



日本語を愛語しよう。

新補地頭三沢氏をめぐる系図（高橋一郎作成）



論文（高橋一郎）**から**

- 三沢氏系図ほか
- 「山陰史談」14号と近刊号
- 「奥出雲」
- 三沢氏在来の系図の由来
- 「奥出雲」51 52 53号
- 「山陰史談」近刊号
- 馬来氏系図ほか
- 「山陰史談」12・13号

（同上の資料）
西宮、鳥取、前沢、博多の三沢氏ほか
山口県文書館所蔵の三沢家諸文書
門司、名古屋在住馬来氏
萩藩閥閲録
大日本古文書　家わけ第15
両首藤氏は〈号

三沢為虎は天正末期毛利氏家臣団の一万石以上の重臣
一族七人　普代一人ほか四人　の第十二位の厚遇をうけ、のち長府藩家老。

晩秋の歌

巡視する校舎廊下の暗闇に仕切りの鉄扉思ひ切り引く　伊藤萩雨

とっぷりと日は昏れにけり草背負ひ通ひ馴れたる野道急ぎぬ　野村節子

奥山を私鉄の走る古き駅老駅長は一人佇む　目黒成生

初冬の八つ手の影さす明り窓に蔦からまりてすでに三年　畑八重子

寝覚めたる二人の孫は庭先にわれを求めて声限り泣く　景山悦子

土曜の午后学習塾の玄関の明るさに児らのブーツは整然とあり　渡辺観翠

夕映への小径明るく草もみじ鎌手休めば風は冷たし　岡田時子

右萎えて九年の父が陽だまりに『戦友』うたふまろき背かなし　真綿博子

流れゆく川面の霧のやさしくて姑思ひつつ橋に佇ちおり　永井弥生

河上肇の著書ゆくりなく見出だして復員せし頃のまた甦る　常盤はるまさ

愛憎の心の傷は消ゆるなく夕べ寒々時雨ふり過ぐ　安部夕波

しばぐり句会十一月抄

落葉舞うそれぞれ高さ得しごとく　浅野としお

古稀過ぎし哀歓しみじみ烏瓜　岡田蹊花

街寝る朝大空を鳥渡る　岡田麗水

秋霖や老婆の葬列続き居る　恩田魚跡

水霜や手をポケットに通勤す　小川あきお

傘しずく喪服に落す秋時雨　加納信子

ぼたん掘る丘に遠嶺の暉が余る　柏木侑

香をたきゆく秋惜しむ別離の辞　高木白虹

墨の香の残る我が祖の古書曝す　田辺竹野

病棟に悲喜ただよいて秋の風　中田巣鶴

蜆舟さしつされつ棹で往く　中澤斐水

丹精の菊枯れ主の今は亡し　新出谷一華

夕陽背にはじく莚の豆おとし　錦織富江

稲架竿を解きて落せば土こだま　藤原樵夫

忘れある玩具に遊ぶ秋の蝶　渡部夕峰

横田銘草木集（3）

ゴヨウオニグルミ（五葉鬼胡桃）　丸山　巌

Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana Maxim) Kitam. form mirabunda (Koidz.) Maruyama

多数の小葉からなる奇数羽状複葉のオニグルミが3－5小葉に変化した突然変異体で、頂小葉だけが著しく大きい。はじめ松江城山のオニグルミ林内に生じてこれに命名されたが、この原木もその実生子株も枯死した。現在生存するのは原木の孫木で、松江に1本、横田町中　蔵屋の彩紫花園（丸山絢子　命名）に10余本があるばかり。植物形態学上誠に珍奇貴重なものである。

前号②に筆者名（丸山　巌）がおちておりました。又前々号①の（細葉瓜崩樹）が一部訂正したのみでありました。おことわりいたします。

ゴヨウオニグルミ

今年度の横田史談会

○古文書を読む集い

（毎月第一土曜日）

現在のテキストは「雲陽秘事記」（松江藩秘史）――毎回出席者が輪読して研究する。別途にあとから参加した人のため復習会をする方々もある。

常連十七名、創設以来51回

○郷土史講座　創設以来15回

考古学上の発掘報告、たたら製鉄技術等に続いて、最近は横田庄出現以来の源氏、北条氏との関係史で十三世紀末まで。

○史蹟巡り　創設以来18回

一月　日刀保たたら操業見学

五月　一泊二日　京都見学

横田庄に関係ある、石清水八幡宮、泉涌寺、雲龍院、六波羅密寺ほか。

十月　米子市福市遺跡資料館

青木遺跡ほか。

○世話人会　三回

○参加協力

11・9　第四回出雲国風土記研究会（当地にて）

12・24　第二回陰陽郷土史愛好者懇談会（当地にて）

12・19　安部宏作陶展（当地にて）

20 21

○船通山をしらべる会

植物学者丸山巌先生（当地在住）を中心として、五月より毎月第四日曜日、船通山の植物中心に学習と記録と写真撮影。横田山の会・横田フォトクラブ・横田くらしの文化愛好会とともに。

○出雲部での　中世史・考古学研究会等に積極参加。

○発　行

「奥出雲」、56号～68号（月刊）

「あるくみる横田」（改訂版）

○絲原記念館の創設は急速に一般の人々の歴史、文化への意欲をかきたて、いろいろの計画が芽生えてきた。

（横田史談会創設は50年秋）

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

第二回陰陽郷土史愛好者懇談会報告特集号　付　奥出雲研究の手引き

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 69 号
1 月 号
昭和56. 1. 3
奥出雲編集集団

高野山の田植早乙女
『ハマリさん』（上）
―鉄山業民俗に関連して―

岡村達男
（広島県比婆郡高野町）

山陰と山陽の分水嶺である中国山脈の真中で古来から鉄山業の砂鉄採集たたらによって繁栄し生活をしていた私の郷土、広島県高野山には、鉄山業民俗に関連した種々の信仰・習慣・文化的な多くのものが伝承されている。

山越しや出雲

私の四代前の曽祖父は横田町の北方広瀬町の東比田から青年時代にたたら鍛冶に働きに来ていた蒲生伝三郎で、縁あって我が家の養子になり、祖母は横田町小馬木の荒木家から嫁に来ている。このように私の高野町は七割以上の家々が島根県の人達と血縁関係で結ばれている。

高野町から島根県に通ずる道は沢山あり、出雲風土記に記録されたものから現在も尚新設改修中の道まであり、其の道を長い年月の間に幾人の人達が何の為に、又、種々の物資が何の目的によって交通し交易されたか知らないが此の中の主要道路が舗装された数年前迄は、道路にはバラス代用に黒く光る鉄屎（かなくそ）というたたら製鉄の時に出来る鉄滓が使用されていた。

たたら仕事は農家のささえ

金屎は高野町の随所にあり特にたたら鍛冶の跡には良質の物が多量に堆積していて、数ケ所にある金屋子神社や鉄滓の山を見ても昔から明治時代までの長期間にわたり鉄山たたら事業が繁栄した事実を物語っている。

たたらには種々の仕事があったと聞いているが、専従している技術的専門職の人達は山内（さんない）に住み、其の他の仕事例えば日傭家は冬の雪の下の夕食はお粥で朝食は何か雑穀類や木の芽など乾燥した物を入れて飯の量を多くして空腹感を満たしていたという。が然し、鉄穴場（かんなば）に行って仕事をすれば米の飯を腹一杯食われると言って喜んで行った。現在の農村出稼と何か一脈通ずの鉄穴（かんな）流し・炭焼き・銑（づく）や小鉄（こがね）などを運搬する馬追いや、だつ編みなどは地下（じげ）の百姓の人達が働いていた。

横田水煌会
県展審査員　岡田麗水

祖父達古老連中から聞いた話によれば、百姓の冬儲仕事は馬追いか、たたらの鉄穴流（かんなな）しに行く事であったという。其の頃農流しは雪の中での冬仕事だから、ときには土砂山崩れの下敷きとなり犠牲者も出ている。お寺の過去帖にはそうした記録もある。

春の雪解け・梅雨・秋の台風時には大洪水となり、川床の堆積土は氾濫して田畑家屋が流失し農家は大被害を蒙った。其の為にたたらの鉄穴流しを大変怨（うら）んだ。その事が百姓と鉄山師、山内（さんない）の衆と地下の者との仲を悪くし対立したという。

この様な事が永い間毎年続くと此の鉄穴流しのマサ土を利用する事を考え付いた人がいた。それは水田の造成で、即ち流し込み新田をして一窪面積の広い田を造る方法と、又、客土による土壌改良の方法であった。流し込み新田は川岸に石垣を積み栗丸太などを打ち込んで並べそれを枝で組み編んで中に古薦（こも）など入れてマサ土の泥土を流し込んで内部に堆積させて田を造る方法、自然に田が出来、川床に土砂が堆積するのを防止した。

客土により土壌改良する方法は既成の水田にマサ土のアカゴメ土を流し込む簡単な方法だ。高野山地方は土質が大山火山灰のクロフクと言っている酸性土

壌だから、稲はゴマ葉枯病や稲熱病にかかり易い。これをアカゴメ土を流し込んで鉄分の補給をすれば病気を防ぐ事が出来て品質の良い味の美味い米が多収となる。当時は今日のような化学的知識は全くなかったが、自然に耐病、増収、美味となる事を見て覚え、鉄穴流しを利用して新田とし大窪を造り、病気の被害防止をして、毎年の洪水被害を少なくし然も大窪により田仕事の省力化が出来るなど一挙両得、一石二鳥にも三鳥にもなる利用方法を実行した。

その証拠に今も残っている当時のたたらの親方衆の所有田は流し込み田で大窪であり、土質はアカゴメの良質な水田となっているし、それを見習って造った田も客土した田も良い稲が出来て上田といわれている。又、流し込みでマサ土を川床に堆積せぬ様にした石積み護岸も水除や枠を作った改修工事の址が残っていたが現在はほとんど見る事が出来なくなってしまった。

はまりさん

冬期は農家の人達が鉄穴に働きに行ったが、雪が消えて春ともなり忙しい田植の頃になれば、たたらで働く人達の奥さん娘さん連中を農家が早乙女さんに頼んだ。

この早乙女さんを『はまりさん』と言った。はまりさんと言うのは田植の時に泥田に嵌って働く早乙女だからそう云うのではなくて、田植の間は頼んだ農家の家族同様に朝起きると夜寝る迄、食事も何も共に一緒に、田植仕事に一筋に嵌り込んで働くので、はまりと云うのだと祖父達古老連中から聞いた。

はまりさんは日傭の田植早乙女よりも賃金が高く、一日四食即ち朝食・中食・箸間・夕飯付きで糯米三升、日傭早乙女は二升五合であった。これが当時の一般田植の早乙女賃であったが、村内の田植組合によって多少の差があった。

中国山地でも私の故郷高野山は平坦な高原地帯なので、水田一窪の面積も当時でも大窪は四反歩位あり一反歩位の田が多く田の形も揃っていたし、棚田状のものはなかった。一農家の経営面積は普通一カ名百姓と言われるのは一町歩以上、一町五反歩位は耕作していた。そして田は形よく大きくて作業に便利であるから共同田植が普及発達する条件がそろっていたとも考えられる。

共同田植は田植組合毎に行なわれ、一組合の基準は特別になかったが古くからの交際互助組織と地形と戸数、経営面積などを考慮したり、田植期間が余り長期にならぬ廿日間程度で終るようにとも考えられていた。

そうした条件を満たす為に、農家戸数の割に耕作面積が広いと田植日数が長期にわたるから必然的に作業人員即ち早乙女のはまりさんを傭わねば田植最適期に田植が済まず結果として収量に関係するから、そうした関係で早乙女は近くのたたらの婦人連中に来て貰うという事になったと思われる。

傭うはまりさんの人数が多くなれば、作業能率の増進という点が大きなポイントになったが幸いにも、水田は大窪が多く其の為に田植も捗ったので、それを見て農家は皆が田は大窪で田仕事に便利な長方形にしようと考え、冬期の鉄穴流しのマサ土アカゴメを流し込みにして新田を広く大きく形よくしたと言う事である。

こうした事から、たたらと農家の対立をやわらげ親しく結ばれるようになったというが、それに至るまでには長い歳月を経たのである。

（これは十一月廿四日に発表された原稿をもとにしたものである。次号完結予定）

師走の歌

真夜醒めて厠に立つとまさぐりて床のかたへの眼鏡をさがす　常盤　はるまさ

子を持たぬ姑はさびしくかなしかり終の日まで厠に立てり　永井　弥生

み寺辺の椿の枝に絡みゐるつるうめもどきの紅き実揺れる　渡辺　観翠

久々の小春日和も山畑の霜はとけざり鍬打つかたく　畑　八重子

冷害を憂ひ語れど食ふに足る米に感謝し屑米計る　景山　悦子

短歌よみて筆手にすれば昂ぶれる心はいつか和みておれり　目黒　成生

息(こ)の発ちて三月(みつき)の朝にふと気づく子離れし難き吾の醜態　真綿　博子

木枯の落葉を散らす黄昏を夫待つ夕餉の熱き汁炊く　野村　節子

『小原庄助さん』よと笑ひながらに戦友と酒酌み交す湯の宿の朝　伊藤　萩雨

わが迷ひ断ち切る夕べ新約のヨハネ十二章読みて想へり　安部　夕波

冷々と枯野の径は夕映へて今年は逢へぬと言ひて別れぬ　安部　夕波

しばぐり十二月抄

囓みついて断岸登る冬怒濤　岡田　蹊花

渡り鳥文字につまづく日もありて　糸原　古志

何時しかに二児の母らし賀状書く　中澤　斐水

裸木の裸さらして日のおもて　藤原　樵夫

小豆撰る妻の背丸く古にけり　岡田　麗水

背の入りし妻に師走を托すわれ　中田　巣鶴

切干も我が家の行事とまた刻む　田辺　竹野

年の瀬や縁なき広告紙積重ね　高木　白虹

片時雨峡に半端な虹を置く　浅野　としお

廃屋や庭に一際花八手　渡部　夕峰

柿落ちて柿の木尖り冬の彩　新出谷　一華

南瓜つり小窓鎖して冬至待つ　門脇　花子

木枯らしの径に影なき風のすじ　錦織　富江

ボーナスに縁なき日々や菊燃やす　植田　美代子

菓づとに見えかくれして寒牡丹　加納　信子

冬公園トーテンポールの悲しき眼　小川　あきお

第2回

陰陽郷土史愛好者懇談会出席者名簿

運営不馴れのため御氏名や御住所に落ちや誤まりがありますがお許し下さい。順序もいろいろであります。これを機会に各地の方言・民話・民謡・歴史の資料交換・調査に御利用下さい。

（若干申込まれて参加のない方が含まれていますが、交流を盛んにするためのせました。）

委文化課

県名	氏名	住所	所属	県名	氏名	住所	所属
広島	石井出 かず子	広島市西区横川町一丁目4の28		岡山	柳瀬 昭彦	岡山市	岡山県教委文化課
	中林 芳昭	三次市三次町1,236	市教育委員会		光永 直一	岡山市字南町2－9－30	仝
	三浦 亮	三次市十日市町2,431の4	三次市文化財協会		伊藤 晃	岡山市楢津460	仝
	多和 弘明	三次市	仝		平井 勝	岡山市	仝
	古本 徳治	三次市	仝		畔高 義正	真庭郡新庄村	村教育委員会
	猪 元治	三次市十日市町	仝		ほか24名（氏名省略、村文化財協会員）		
	半丸 嘉一	三次市	仝	鳥取	篠田 光明	日野郡溝口町溝口	伯耆文化研究会
	市岡 軍二	三次市十日市町	仝		上田 重行	日野郡日南町印賀	
	親租 隆太郎	双三郡三良坂町三良坂			山形 正春	日野郡日南町福万来	日南町史談会
	藤村 耕市	双三郡吉舎町吉舎			安達 三二	日野郡日南町上石見	仝
	橋本 為之	高田郡高宮町	川根小学校		坪倉 久喜	日野郡日南町湯原	仝
	落合	双三郡作木町			武田 寛	日野郡日南町多里	仝
	久保田 一爾	庄原市峰田町	庄原市社会科同好会		山根 林	日野郡日南町萩山	仝
	本田 寛良	庄原市	仝		高橋 靖夫	米子市旗ケ崎386－6	
	野林 弘美	庄原市	仝	島根	伊藤 蓮三	松江市東津田町2,168－406	風土記の丘友の会
	上田 輝馬	庄原市	仝		林 敬三	松江市北田町22－3	仝
	大掛 芳寛	庄原市	仝		黒谷 達典	松江市	県立八雲立つ風土記の丘資料館
	広瀬 繁登	庄原市掛田町	庄原市文化財研究会		近藤 加代子	松江市内中原町	仝
	三玉 浩正	庄原市本町	仝		久保田 順子	松江市内中原町	
	藤井 美典	庄原市本町	仝		本間 順郎	松江市苧町	
	武田 祐三	庄原市高町	仝		本間 恵美子	松江市苧町	県立八雲立つ風土記の丘資料館
	津田 宝一	庄原市	仝		松浦 富二	松江市朝酌町1,112	風土記の丘友の会
	新山 勝勇	比婆郡西城町	西城町郷土研究会		錦織 俊郎	松江市上乃木町454－9	
	堤 富士雄	比婆郡西城町	仝		奥井 義和	松江市	
	黒田 正	比婆郡西城町	仝		角田 安晨	松江市東朝日町170	芸備地方史研究会
	江木 譲爾	比婆郡西城町	仝		大島 時一	松江市	
	守長 覚	比婆郡西城町	仝		大島 あつ子	松江市上乃木町2,412－1	
	山本 英明	比婆郡西城町	仝		内田 文恵	松江市外中原町	県立図書館郷土資料係
	栗本 敦次	比婆郡高野町新市1,456の1			勝部 昭	松江市殿町	県教委文化課
	岡村 達男	比婆郡高野町			石富 歩	松江市殿町	県立博物館
	坂口 孝三	比婆郡高野町			福井 美知子	松江町殿町	県立松江農林高等学校
	松崎 守登	比婆郡東城町東城	町教育委員会		住田 勇	安来市安来町881	和鋼記念館
	高柴 順紀	比婆郡東城町			福山 宗市	能義郡広瀬町	
	白根 英之	比婆郡比和町	比和町郷土史研究会		井上 明	能義郡広瀬町	
岡山	難波 宗明	阿哲郡哲西町矢田			加藤 光雄	大原郡大東町下佐世181の6	
	小早川 正信	阿哲郡神郷町神代			白根 剛志	大原郡大東町大東	大東の昔を語る会
	山口 良男	阿哲郡神郷町			和田 重幸	大原郡木次町	
	赤木 武雄	阿哲郡神郷町			浅沼 博	大原郡木次町	山陰民俗学会
	名越 正明	阿哲郡哲多町田渕1,112			浅沼 政誌	大原郡木次町	
	三宅 隆通	川上郡川上町領家			重富 福太郎	飯石郡三刀屋町	
	浅原 公章	新見市菅生8,994			後藤 正美	仁多郡仁多町上阿井	
	長谷川 明	新見市新見1,367			宇田川 実	仁多郡仁多町佐白	

「奥出雲」についての研究者御芳名

－参考「島根県立図書館編・島根県郷土研究者名鑑 －

（出席者及び横田史談会員で上記名鑑記載の方はのぞく）

◎県内

		（分野）
池田満雄	松江市上乃木町2295	考古学
石倉要一	仁多郡横田町横田386	地誌
石塚尊俊	出雲市大津町440	民俗学
石橋俊雄	大原郡木次町木次22－1	方言
伊藤菊之輔	（故人）	各種著書多数
井上寛司	松江市西持田町6	中世史
勝部正郊	松江市西津田町1,415	民俗学(民具学)
加藤義成	大原郡加茂町南加茂241	出雲国風土記研究
門脇俊彦	松江市西持田町1.451－14	考古学
北川泉	松江市雑賀町1273	林業史
近藤正	（故人）	考古学
酒井董美	松江市馬潟町366－38	民俗学（口承文芸）
妹尾豊三郎	能義郡広瀬町広瀬753	尼子史
田中瑩一	松江市浜乃木町1,231－8	民話
藤間亨	簸川郡大社町杵築南1,048	美術工芸史
内藤正中	松江市古志原町943	近世近代経済史
中尾鉱	松江市幸町1,571	林野経済史
蓮岡法暲	大原郡大東町岡村33	考古学
速水保孝	松江市内中原町244	歴史・民俗部門
長谷川徳四郎	益田市昭和町8－13	中世史
東森市良	米子市旗ケ崎917－5	考古学
広戸惇	出雲市今市町元宮町10の7	方言学
藤岡大拙	簸川郡斐川町中州445	中世史
藤沢秀晴	出雲市東林木町491	近世史
松原高広	松江市西川津町787－42　嵩見団地	たたら経済史
松本興	安来市安来町852	郷土史
丸山厳	仁多郡横田町中村1,011－1	植物学
美多実	簸川郡斐川町三分市	古代史
柳浦文夫	松江市春日町104	林業行政史
山本清	松江市西川津津嘉田690－39	考古学

◎県外

窪田蔵郎	小田原市城山2－24－27	たたら製鉄の考古学
武井博明	（故人）	たたら経済史
中浜久喜	兵庫県相生市相生1－3－10	考古学
向井義郎	広島市大手町4－3－12	たたら経済史
山本真之助	東京都世田谷区桜上水3－7－6	たたら製鉄

◎外国

エリック・パワー	西ドイツ・ボン大学教授	たたら経済史

（分野は御本人の広い専門分野のうち奥出雲にかゝわる部門のみを記したことをお断りしておきます。）

前3頁「出席者」続き

島根	杠政義	仁多郡仁多町亀嵩 亀嵩郷土史同好会	杠富雄	仝　左
	長瀬明	仝　上	田部義富	仝　左
	勝部勉	仝　上	藤原博	仝　左
	藤原章	仝　上	安部忠雄	仝　左
	白根久一郎	仁多郡横田町中村184		

（地元横田史談会員の出席者は下の会員名簿をもってかえます）

大字名	氏名	○	大字名	氏名	
鳥上	佐世川徳雄	○	横田	小田川和衛	
	小林房吉			井上昌一	
	吉岡正雄			藤井重之	
	森山信一			松浦新吉	
	鉄池正治	○		伊張田嘉照	
	田辺竹野			立脇隆一	○
	並河孝義	（鳥上木炭銑工場長）		藤原道夫	
	高橋真市			山田利雄	
	加納政太郎			立花利明	
	安部重治			糸原博厚	
	木山直吉			渡辺正義	
	ほかに誌友8			田村幸	
八川	永浜順子	○		梅木清	
	遠藤允子			稲岡豊	
	田部琴女			飯田好三	
	ほかに誌友26			原田信義	
馬木	杉原清一	○（考古学）		荒金信義	
	内田寛一			矢島岩雄	
	松原幸吉			平井周蔵	
	石金章徳			高橋一郎	○
	野原繁敏			日野高利	
	ほかに誌友1			岩佐捷治	
横田	和泉儀吉	○		渡辺勲男	
	二沢光三郎			藤原隆久	
	岩佐理隆			佐藤正栄	
	田村正修			福田福盛	
	恩田繁寿			藤原源右衛門	
	渡辺新蔵			糸原絹子	
	岩佐春夫			赤水照子	
	目黒亀雄	○		金谷良都	
	木山久利			枝木静恵	
	渡部恒義			小川昭夫	
	安部惣市			（財）絲原記念館	
	佐伯彦市			ほか誌友25	
	吉川郭義		仁多町	杠誉富	
	二岡勇次			梶谷宣子	
	植田艶子	○	別途誌友		
	石山義昭		町内趣味集団3	25人	県内　7人
	太田甲之助		横田の高校・中学	17人	県外　14人
	尾方弘巳		その他	12人	国外　1人
	中津恵吉				

（順不同　誌友とは「奥出雲」定期購読者　○印　世話人　55.11.24現在）

奥出雲に関する
書籍・雑誌・論文・古文書等目録（No.1）

目　録（書籍ならびに文書所蔵場所）

	－編者・著者－	－書　　名－
1	島根大学附属図書館蔵	郷土資料目録（昭53）（島根大学）
2	島根広報文書課編	郷土資料目録（昭29）（県立図書館）
3	伊藤菊之輔編	島根県関係図書解説（昭40）
	（県立、市立一出雲・浜田・益田・津和野郷土館、島根大学、県立隠岐高校、和鋼記念館）	
4	島根県立図書館編	島根県公共図書館郷土資料総合目録（県立図書館）
5	〃	島根県立図書館蔵書目録（昭47）（〃）
6	島根県教育委員会	島根県古文書等所在確認調査報告書（昭53）（各地）
7	実物	検地帳（江戸時代）（広島大学図書館）
8	雄山閣刊「山陰一地域の歴史的性格」（昭54）の付録に	
		島根県立図書館所蔵郷土史科目録
9	広島修道大学所蔵	武井文庫目録（昭49）（広島修道大学図書館）
10	横田町誌編集委員会編	横田町役場所蔵文書目録（昭43）（町立図書館）
	－古文書・行政文書－	
11	絲原記念館編	絲原家所蔵文書目録（昭51）（絲原記念館）

神　話

12	水野　裕（八雲書房）	出雲神話（昭41）
13	鳥越憲三郎（角川文庫）	出雲神話の成立（昭41）

考古学

14	山本　清	山陰古墳文化の研究（昭46）
15	近藤　正	山陰古代文化の研究（昭53）
16	池田満雄・東森市良	古代の国々－出雲の国（昭48）
17	ふるさと文庫	さんいん古代史の周辺　上・中・下（昭50）

古代史

18	門脇禎一（NHK出版）	出雲の古代史（昭51）
19	谷川健一（巌英社）	青銅の神々の足跡（昭55）
20	加藤義成	風土記時代の出雲（昭30）
21	〃	出雲風土記参究（昭43）
22	牧野出版社刊	大山・隠岐・出雲への招待（昭43）

中世史

23	平凡社刊	出雲、隠岐（昭35）
24	米原正義	風雲の月山城（昭42）
25	山陰中央新聞社	山陰の武将　正・続（昭50）
26	香川正矩	陰徳太平記（複刻各種あり）
27	河本正隆	雲陽軍実記（〃　〃）
28	桃　好裕	出雲私史（〃　〃）
29	島根県広瀬町	島根県広瀬町誌上（昭45）
30	能義郡比田村	比田村誌（昭25）
31	内藤正中（山川出版）	島根県の歴史（昭44）
32	松本　興	尼子時代史探訪1～4（昭40～55）

古代・中世・近世・近代

33	伊藤菊之輔	島根県史年表（昭55）
34	島根県	島根県史（1～8）（複刻昭55）
35	〃	新修島根県史（1～11）
36	長瀬定市	斐伊川史（昭25）
37	伊藤菊之輔	島根県人名事典（複刻昭55）
38	（享保年間の出雲地歴誌）	雲陽誌（複刻昭46）
39	島根県横田町	島根県横田町誌（昭43）
40	仁多郡役所	島根県仁多郡誌（複刻昭40）
41	島根県亀嵩村	亀嵩村誌（昭42）
42	〃　八川村	八川村誌（昭34）
43	島根県	明治百年島根の百傑（昭43）
44	松江文庫1	島根の近代農業史
55	〃	島根県農会の郷土誌 I

現　代

56		島根県神社概説（昭17）
57	山陰文化シリーズ	奥出雲の地の塩（昭48）
58	横田農協	横田町農業協同組合誌（昭54）
59	島根県横田町	三井野開拓史（昭55）

たたら・そろばん

60	島根県教育委員会	菅谷鈩（昭43）
61	窪田蔵郎	鉄の考古学（昭48）
62	角川書店	和鋼風土記（昭50）
63	武井博明（三一書房）	近世製鉄史論（昭47）
64	たたら研究会編	日本製鉄史論（昭45）
65	横田史談会	奥出雲たたら製鉄覚書（昭53）
66	〃	あるく・みる横田（自然、歴史、文化財、くらしの文化）（昭53）
67	新人物往来社	日本の郷土産業5（中国・四国編）
68	高橋一郎（松江文庫）	雲州算盤の今昔　－歴史と技術－

民　話

65	酒井董美他編（桜楓社）	鼻きき甚兵衛（昭40）
66	田中瑩一編（岩崎美術社）	奥出雲昔話集（昭55）
67	石塚尊俊編（第一法規）	出雲隠岐の伝説（昭52）
68	島根県教育委員会編	島根県下30地区の民俗調査報告書（昭38）

映画・事典

69	角川書店	日本地名大辞典（島根県）（昭54）
67	新人物往来社	日本城郭大系（島根・鳥取）（昭55）
68	日本美術刀剣保存協会	日刀保たたらシリーズ1　たたら－よみがえる玉鋼（昭54）
69	〃	日刀保たたらシリーズ2　かねつくり－よみがえる玉鋼（昭55）

雑　誌　（年間2～4回刊行）

山陰史談（13、14、15号等に三沢氏・馬来氏）、たたら研究、

山陰の民俗、県立博物館だより、季刊文化財、八雲立つ風土記の丘。

島根県文化財一覧表など。

（お断り　紙1として1頁におさまる程度に主なものを）

50号記念 奥出雲（30号まで横田文化）総目録

普通号は4頁，（8．9．19．21．31）号は6頁，（16．17．44．50）号は8頁．右の数字は号数　完は連載の完結

1. 神話と歴史の間 号
- ①あめのむらくもの剣は銅剣時代 29
- ②神話の読み方 30
- ③記紀と出雲風土記の神話の違い 31
- ④稲田の神社（完） 33

2. 遺跡・文化財
- 藤ケ瀬城趾 1
- 馬場八幡宮の銅剣 2
- 金厳山岩屋寺 3
- 横田における古代遺跡 4
- まぼろしの高田廃寺 5
- 馬木の古城趾覚書き 6
- 小森の神楽について 7
- 横田の番所 10
- 横田の横穴古墳 10
  - —附　石剣の発見
- 横田町の古墳調査報告 31
  - — 50,51 52年度分
- 横田のたたら遺跡一覧表 44

3. 奥出雲の古代を推理する
- ①鉄 9
- ②中国地方 10
- ③出雲族のひろがり 11
- ④大和の成立 12
- ⑤吉備と奥出雲 13
- ⑥縄文・弥生時代 14
- ⑦3～6世紀 15
- ⑧横穴墓の出現（上） 16
- ⑨　〃　（下） 17
- ⑩奥出雲と備後との交渉 18
- ⑪古代の出雲豪族（上） 19
- ⑫　〃　（下）（完） 21

4. ふるさとの歴史
横田町広報連載（50回）の続編
- ⑭三沢一族 1
- ⑮　仝 2
- ⑯　仝 3
- ⑰　仝 4
- ⑱　仝 5
- ⑲　仝 6
- ⑳　仝　—附　伽羅仙台萩 7
- ㉑　仝 8

5. 横田庄五百年史
- ①中世の夜明け 21
- ②ねらわれた鉄資源 22
- ③仙洞御料所 23
- ④覇権への道をゆずった三沢氏 24
- ⑤仙洞御料所の終末（完） 25

6. 入門文化財小字めぐり
- ①野の仏と郷土の歴史 14
- ②龍の駒 23
- ③横田盆地 26

7. あれこれ（1）
- 船通山と竹崎 13
- 「せんちぢやま」は船通山である 19
- 奥出雲の花神—馬馳の秀斉、横田の淳斉 24
- 横田八幡宮の放生会 41
- 毘沙門堂 41

8. 岩屋寺物語
- ①中興僧快円　上 34
- ②　仝　中 37
- ③　仝　3 48

9. 旧家の歴史
- ①稲田の土居・安部家 34
- ②　仝 35
- ③　仝　（完） 47
- ④大馬木の山本・杠家 46
- ⑤　仝 47

10. 寺院の成立・変遷と民間信仰
- ①特　色 15
- ②盆　りと山伏 16
- ③庶民への仏教の普及 28
- ④墓と石塔 29
- ⑤横田の六郎さんと経筒・経塚 40

11. 民間信仰メモ
- ①淡島・金毘羅 43
- ②稲荷さん 48

12. 庶民の哀歓が育てた伝説
- ①高尾の傾城岩 37
- ②和泉式部 39
- ③最明寺入道時頼の廻国 41

13. あれこれ（2）
- 鍛さん蔵 18
- ⑬奥備後の雲州街道（広瀬繁登筆） 20
- 狐にばかされた話 27
- 毛利藩鉄奉行斬殺事件 42
- 義民伝六の碑の建立 43
- 横田の角力とり　（上） 44
- 仝　（下） 45

14. 横田のたたらの歴史
- ①たたらと住民（附たたら復元） 27
- ②たたら遺跡と記録 28
- ③重要視された横田庄 29
- ④京都御所の領地　（完） 30

15. たたら製鉄早わかり
- ①鋼 28
- ②たたら床とたたらか 30
- ③鉄鋼の中玉鋼製造 31
- ④歴史が生み出した文化財 32
- ⑤大鍛冶屋 33
- ⑥近代製鉄法（上） 37
- ⑦　仝　（中） 38
- ⑧　仝　（下） 39

16. 絹の道・鉄の道
- ① 45
- ② 46

17. 横田地域史のしるべ
- ①清和源について 25
- ②荘園と院政 35
- ③横田庄（上）—鎌倉時代末まで 36
- ④持明院統と大覚寺統 38
- ⑤横田庄（中の上）—14世紀 40
- ⑥　仝　（中の下） 42
- ⑦　仝　（下） 43
- みてら泉涌寺 43

18. 年表・地図
- 弥生時代文化年表 2
- 岩屋寺並宝物年表 2
- 横田庄と三沢氏一族をめぐる年表 8
- 横田の民俗資料年表と分布図 9
- 備後北部と奥出雲文渉史 17
- 政治・土地・庄園制度発達史 35

19. 奥出雲地域史研究資料
- 図　書　（上） 32
- 仝　（中） 37

20. 横田町古文書庫収蔵文書解説
- ①馬場の秋山善神—若月家古代大成記 36
- ②岩　屋　寺 38

21. わらべ歌
- ①手遊び歌 1
- ②お手玉取 4
- ③手まり歌 10

22. 資　料
- 観音堂（馬木） 14　疋の今昔 43

23. 古文書コーナー
- ① 18

24. コミュニティー
- ① 3号　② 4号　③ 5号　④ 7号　⑤ 8号

25. 横田で生れた人
- ①勝　平　大　喜 12
- ②角村の三名工 15
- ③青　木　寅三郎 17
- ④妹　尾　勇　吉 22
- ⑤小　林　徳一郎 32
- ⑥雲　照　律　師 48

26. 戦後横田文化小史
- ①書店と本 1
- ②歌　舞　伎 2
- ③音　楽 3
- ④合　唱 5
- ⑤映　画（上） 10
- ⑥　仝　（中） 12
- ⑦　仝　（下） 14
- ⑧読　書　会（上） 16
- ⑨　仝　（下） 18

27. グループ・個人
- 横田民謡友の会 7
- 太田亀甲さん 16
- 森山庫一さん 30

28. 随筆・論稿
- ⑮民芸と焼物つくり（安部宏） 7
- 奥出雲歴史民俗資料館建設を 8
- 近代詩文書と私（米沢天崖） 14
- 民俗学について 39
- 地域文化を育てよう 44
  - —横田での一つの足跡
- ⑮歴史風土論　三成と横田 49・50
  - （その他の小論稿は省略）
- ⑮は、その号全頁にわたるもの

51号	地頭三沢氏の祖先は木曽義仲ではない①	大馬木、山本・杠家③	
52号	三沢氏の祖は飯島氏、木曽氏ではない②	荒木さん　人間と環境Ⅰ	
53号	三沢氏の祖は木曽氏とした偽系図の作者は③	岩屋寺物語④　人間と環境Ⅱ	
54号	出雲と吉備——その接点としての奥出雲——（考古学から）（東森市良執筆）		
55号	現在への50年史Ⅰ——歴史的風土論②——横田の音楽		
56号	奥出雲の古代——横田町日焼田遺跡の場合	大馬木、山本・杠家④	
57号	出雲国風土記の神話——奥出雲の原像を求めて		短歌・俳句
58号	明治維新後の仁多郡立直しの農村構造改善を推進した	仁多郡農談会(1)	岩屋寺物語傑僧快円⑤	俳句・短歌
59号	仝	仁多郡農談会(2)		短歌・俳句
60号	仝	仁多郡農談会(3)	鉄にまつわる話①	俳句・短歌
61号	やさしい鉄滓の見方、（窪田蔵郎執筆）			短歌・俳句
62号		仁多郡農談会(4)	民具と民俗資料	俳句・短歌
63号	入間文化財——小字めぐり④「稲田」藤ケ瀬城縄張図		岩屋寺物語傑僧快円⑥	短歌・俳句
64号	奥出雲における歌道の濫觴①		除草具から除草機へ	俳句・短歌
65号	高殿以前の原始的な製鉄法㊤（窪田蔵郎執筆）			
	奥出雲における歌道の濫觴②		横田銘草木集①	短歌・俳句
66号	高殿以前の原始的な製鉄法㊦			
	奥出雲における歌道の濫觴③		横田銘草木集②	俳句・短歌
67号	発掘された羽口㊤（窪田蔵郎執筆）			
	奥出雲における歌道の濫觴④		横田銘草木集③	短歌・俳句
68号	発掘された羽口㊦　三沢氏をめぐる系図			
	仁多町墓地遺跡（縄文期）		横田銘草木集④	俳句・短歌

「奥出雲」御希望のお方は御申込み下さい。古い号では複写にたよるものもありますがお許し下さい。4頁建が普通ですが6頁建8頁建もありますが、1部100円でお願いします。送料は3部まで50円、それ以上10部毎に50円宛加算下さい。振替口座—松江601番—「高橋一郎」を御利用下さい。

今年の特集予定——奥出雲における歌道の濫觴⑤（絲原記念館蔵・藤原定家の明月記断簡の由来）・中世の横田庄

奥出雲への関心の高まりは

― 三つの研究発表会と来訪者の大群 ―

奥出雲へ奥出雲へ

昨年の十月十一月にはかってない、大げさに言えば有史以来の来訪者が奥出雲へ群をなしてやって来た。山陰の各地はもとより、山陽筋から大阪、東京と三万数千人の来訪があった。これは何と言っても絲原記念館の開館特別展がその主因である。

ふりかえってみると、「地方の時代」が叫ばれはじめると、「日本書紀」「古事記」を片手にする来訪者が多かった。それらの人々の多くは来訪の意図を満足する何ものも得ることなくただ開けた横田盆地の美しさをたたえて帰るだけだった。両書の中の出雲的神話は、中央に於てつくり上げられた神話に過ぎないから当然のことであった。

しかし中世以降の和鉄和鋼生産「たたら製鉄」の何かをと求めてやって来る人には、満足を与えるものが、遺跡、施設、文書に多かった。しかし各種の資料の根本的研究はこれからであるし、遺跡の整備検討も発掘も今後に残されたものが多い。

やがて昭和五十二年秋に、「日刀保たたら」が復元すると、鉄の研究者はもとより、単なる見物者も急速にふえた。若干の日本刀の材料「玉鋼」を生産しながら、その生産技術を後継者に伝承することに重点が置かれているから、いずれ後継者達が一人だち出来るようになれば、その科学的解明が、学際的協力によって進展することになると思われる。

安来の和鋼記念館は専門家向きであるのに対し、絲原記念館のたたら資料展示は、今後の充実によって、一般の人々の啓蒙はもとより、研究にも大いに役立つものであり、遺跡や古文書の整備が進めば、最もたたら研究の便利なところとなる。

何気なく来た人々も、わが国の伝統の製鉄法に非常な関心を呼びさまし、再度訪れたいという人が大変に多いことも、調査によって明らかになっている。

島根大学祭における研究発表

昨年十一月上旬一週間にわたって開催された大学祭の一展示室では、同大学学生歴史学研究会の中の島根中世史研究会が、今年度の重点研究の一つとしていた「横田庄」の中間発表が、写真と図解と説明によって展示され、部厚い研究物も配られていた。主任の井上先生の懇切な指導で、現地調査も加えて、年次別資料集を作成し、さらに横田庄の年表を作成して検討されていて、中間報告ではあったが立派なものであった。

「島根県横田町誌」で果せなかった資料も完全なものを発見して載せてあり、新しい考察も広い視点から加えられているので完成が楽しみである。この地の中世の資料が各方面相当豊富であることは県下でも珍らしいし、それらから五百年間続いた荘園内の社会状況にも特異な性格があったことがわかる。それは中世以降の武士土豪の末孫の幾つかの旧家が歴史を明らかにして現存していることとかゝわりがあるとも推定できる。

また中世半ば以降この地が、わが国のたたら製鉄の中心地になったのも、地頭三沢氏、馬来氏などの領内経営のあり方にも鍵がありそうである。

若い学生諸君の研究努力に期待したい。

第四回出雲国風土記研究会

十一月九日横田で開かれた。横田在住の植物学者丸山厳氏の出雲国風土記にあらわれる植物についての話は、風土記の読み方に重要な視点を与えるものであった。わざわざ兵庫県相生市からかけつけてくれた中浜久喜氏は「仁多地域における古墳時

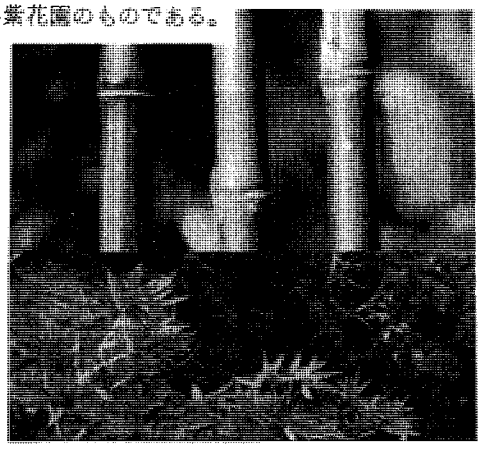
今年の特集予定——歴史的風土論③—観光離れの研究を（小泉八雲の場合）・仝④押花的文化盛行からの離脱（横田の場合）

横田銘草木集（4）

インヨウチク　陰陽竹

× Hibanobambus tranquillans (Koidz.) Maruyama et H.Okamura

島根県伯太町の比婆山中腹と仝町上の台と仁多町上阿井雲崎の3か所が原産自生地。（比婆山頂上の神社付近のものは移植品）長らく正体不明の竹笹として6つの学名が次々と誕生した。1970年から開花しだして根本的な検討追求がなされた結果、このものはSasa属とSemiarudinaria属との雑種起源の新属とされ命名されるにいたった。径3㎝の竹稈に、長さ25㎝、幅5㎝の笹様の葉がつき、雄しべは3～6本で4，5本のものが特に多い。日本竹笹の会はこの竹笹を島根の県の竹に指定した。正に適選であり銘竹である。写真は比婆山中腹の原産地から移植して、繁殖し竹薮となっている横田町中村（蔵屋）の彩紫花園のものである。



と風土記」の発表をした。島大在学中に発見発掘した、仁多町鴨倉の横穴式石室を有する前方後円墳を含めて既発見のすべての古墳を分類し、出雲国風土記の解釈に迫る、貴重なものであった。仁多郡についてこのような徹底した研究ははじめてである。今までの断片的遺跡報告をもとに、筆者が拙著「奥出雲をさぐる」（山陰文化シリーズ）や、「島根県横田町誌」で類推して述べていたことを、より一層明らかにそして確かな方向へと裏付けてくれたことは、まことにうれしかった。この上にさらに類型や出土品の分類を深め陰陽の交流を明らかにすればさらに進展する。他方「高田寺根元録」の再検討も進展するきっかけもでてきた。中浜氏の大成を期待したい。美多実氏の「出雲国造神賀詞奏上と三沢郷」は、日本歴史の中に於ける新しい解釈をなされたものであった。氏は出雲国風土記の新しい解釈に打込んでおられて、その第一であり根本である長尾王の研究を、指導学者の推せんによって、「日本歴史」三月号に発表される予定である。やがてそれに続く論文についで、三沢郷の解釈も明らかにされると、仁多郡の当時の状況が一段と明らかになることと思われる。

第二回陰陽郷土史愛好者懇談会

十一月二十四日横田で開催。九名の発表と日刀保たたらの映画についで実際の操業見学、続いて絲原記念館を見学した。時間が少なくて討議の時間がなかったのが心残りであった。別稿出席者名簿の如く、遠方からも馳せつけて頂いて、地元を含めて百名を相当越える盛会であった。

専門研究者、愛好者の方それぞれに喜こんで頂いて二十人に近い方から、御意見などを含めお便りを頂いたことは、当地の世話人一同にとっては大変にうれしかった。来年は三次、庄原方面ではという意見も出されている。

たたら製鉄は中世半ば以降からは奥出雲が中心地となったがそれ以前の製鉄遺跡の発掘報告が岡山の光永直一氏によってなされた。「キナザコ製鉄遺跡を中心として岡山県を中心とする古代製鉄跡の系譜をさぐる」で中世以降の奥出雲の製鉄技術の源泉地であることを強く印象づけるものであった。

この地に成長した鉄師はほとんどが中世から近世初期にかけて、山陽側から中国山脈を越えて山陰の山ふところに移り住んだ家系であることは、この事との関係を意味づけるものだろうか。

「岡山県北・奥土用たたら遺跡・神庭谷たたら遺跡の発掘調査報告」（岡山・柳瀬昭彦）は岡山県における近世末から明治初期のたたら遺跡のものであった。広島県民の森の六の原たたら遺跡近くと、東城町小足谷のたたら遺跡近くの「三界万霊の碑」の建立者は、横田から進出したたたら師（村下等の技術者を率いた人）である。岡山県哲多町のさる旧家は、当地から進出した大鍛冶屋の末孫である。これらの事実は徳川期半ばすぎに当地で完成した永代たたらの技術が、そこへ移ったことをしめすものである。柳瀬氏発表の遺跡附近の屋号や寺の過去帳の記入事項に興味が向ってゆく。

大会はこゝで「日刀保たたら」の映画をみて、これらの発表を整理するとともに、操業の過程を確認しあった。

そのあと鉄にまつわる民俗学の発表が続いた。「北備舟運と住吉信仰」（庄原・広瀬繁登）「鉄業の推移と田植早乙女ハマリさん」（高野・岡村達男）、「昔の鉄穴流しと公害」「年中行事と慣行の比較」（庄原上田輝男）は農工一体の生産体制にあった中国地方の民衆生活の一面を明らかにし、陰陽の協力による比較研究の深まりの必要性を痛感させた。

「中世三次市附近の城趾の発掘報告」（三良坂・親祖隆太郎）豊富なスライドを駆使しての発表であり、「古代中世の新見庄」（新見・浅草公章）の発表は時間の都合で、短縮して頂いて基本的な段階で終って、奥出雲との交流にふれるところまでは進まなかったことは残念であった。城趾の報告も、類型化して頂いて奥出雲との比較交流の研究へと進めて頂きたい。次回にお願いするか、拙紙に御寄稿をお願いしたい。

いずれも開催の目標に適切に副った発表で興味をいよいよ深めることができた。専門に研究しておられる方々の発表は愛好者・初心者の今後への意欲もかきたてたことは、頂いたお便りに数多く誌されている。十分な運営ができず、心残りが多かったが、参加者の皆さんが、それぞれの立場で少しでも喜こんで頂けたことは、世話人の慰めであった。各方面の協力と当地史談会の協力とで、会費の中で予定した名簿が、このように印刷することができたことで、不行届きを平におゆるし頂きたい。

各地の研究の、相互の連絡研究の一里塚となることを願い、今後の皆様の御発展を祈るものである。

（横田史談会　高橋一郎）

たたらの里
奥出雲の杉木立の中
鉄師頭取の資料館
3月21日土より
有形民俗資料・美術工芸品の
展示替えを行い再開致します。
財団法人 絲原記念館
TEL 08545－2－0151

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第70号
2月号
昭和56. 2. 7
奥出雲編集集団

高野山の田植早乙女
『ハマリさん』（下）
―鉄山業民俗に関連して―

岡村達男
（広島県比婆郡高野町）

たたら衰退後のはまりさん

明治になって洋鉄が輸入されて以来は、砂鉄による古来のたたら製鉄方法は急速に影をひそめた。鉄山経営は幕府時代の藩営から新政府に移ると民間の経営者に変った。

然し時の流れには如何に鉄と言えども打勝つ事は出来得ず、明治中頃には村から姿が消え、第一次大戦中と第二次大戦中には製鉄用木炭産地として製炭業が復活し盛んに行われたが、それも戦争終結とともに終り、今では夢のようにあとかたもなくなってしまった。

たたら製鉄作業がなくなるとそこで働いていた人達は、それ迄の縁故で土着して農業をする人もあり、鉄山経営者が移動すると其の従業員として移動して行った人もいたという。そうした関係でそれまで傭っていたはまりさんを頼む事が出来なくなった。

然し隣接の出雲奥地には鉄山経営者である大山林地主が数ケ所に事業所、製炭所を経営し多数の従業員が働いていたから昔の習慣通りに島根県の飯石郡や仁多郡の非農家や製炭所や縁故の家の婦人連中を、はまりさんに頼むようになった。

はまりさんのしくみ

私達の田植組合は昔は二十余戸で三十余町歩の水田を耕作する一組合でしたが、大正末期より二組合となり、昭和十五年頃から三組合となった。農業経営形態の変遷と共に組合の耕作面積や労働人員等を配慮した結果と思う。

組合員戸数は変化したが、昔から毎年正月十一日は百姓正月とも田打正月とも言っている休み日までに田植組合の日待（ひまち）の祭をし、其の席で神宮さんに祈祷をして頂いて豊作を祈り、田植籤を引いて田植の順番日取りを定めた。その日取りによって田仕事の準備をして苗を育てた。

又、世話をする人がいて毎年田仕事の為に隣接の仁多郡の伯楽（はくらく）さんに鞍下牛を頼みに行き、田植はまりさんは組合の左下さんや世話人達が仁多郡・飯石郡方面の毎年頼んでいる早乙女頭をしている世話好きな人に依頼して、はまりさんの人数・賃金・日時など契約していた。

村内三十余の田植組合は皆同様に、方々からはまりさんを頼み盛大に豊作を願って共同田植をしていた。其の頃は左下さんが太鼓を叩き賑やかに田植歌を唄って楽しく長閑な田園風景が展開され、若くて美しい出雲娘のはまりさんと土地の青年との間にはうるわしいロマンスが生まれるのは自然であり、春の夜のデートは当時は夜這いとも言っていたが、今は老中連中の懐しい思い出話の種となっている。

そうした事から多くの青年男女が結ばれた。その証処には私の町の七〇％以上の家々が、県境王貫峠から仁多郡上阿井町迄の県道副いの家と皆親戚関係にあることで明らかである。

出雲のはまりさんは田植の前日に先ず一番籤の家に全員が連（つ）れ合って各々若干の荷物を持って来ると組合では出迎えに行き挨拶をすまし、翌日は早朝から労働時間も天気の雨風などいとわずに、絣の着物や銘仙に帯を結び前掛けを短かく折ってかけ、下には黒い紺の股引をはいて着物の裾を折って着て、手には手甲赤い毛糸の腕抜きをして襷（たすき）をかけ、朝は寒さ防ぎの軽い背子（なんこ）を着て年令によっては派手なもの地味なものをそれぞれ身につけ形姿によく似合う姉さんかむりで田植姿が出来上る。そして組合で新調しておく田植蓑笠を肩に掛て田植火を焚いてある場所に集った。

苗取り歌のカツマを唄って苗を取り、太鼓に合わせて田を植え、張り田になれば左下さんの調子も綱引きさんの綱を引き上げる手も早くなっていった。田植に始めて出た時に、苗付けをさせられた。苗を田の中に投げこんで早乙女さんが苗を早く取って植えやすくするのがコツだから、なるべく早乙女さんの近くに投げ込むのが上手だと友達と競争していると、手もとが狂って投げた苗束が美しいはまりさんの背中に結んでいるお太鼓の中に当った事もあり、又、はまりさんのお尻の下に投げ込んだりしてはまりの叔母さんから大目玉を貰った事も今は懐かしい思い出となった。このようにして皆一日一生懸命に働き、其の日の籤に当った家の田植が終ると、はまりさんは家の人達よりも早く入浴をして仕事着を着替えて美しくお化粧をし夕食は酒肴でもてなしを受けてから次の家に行って泊った。中には乳のみ子を連れ、子守りさんと一緒に来る人もいたから、本当に一生心安く親類付き合いが続けられた。

はまりさんの消滅

田植の方法も明治末期頃迄は密植ベタ植で田植早乙女の反当所要人員は四・五人役を必要としていたが然し、片正条植の三角枠が普及し次に両正条が並木植となり、株間や条間が次第に広くなって手取除草は八反摺、田打車に変る頃には、早乙女は反当三人役。更に綱引き植は型枠、筋引き前進植えと條間はますます広くなった。保温折衷苗代などと反当苗株数が大巾に減少して農作業が急速に変貌する頃には反当二人役となった。そして家族労働力のみの田植作業となってついにはまりさんを頼む事は絶えてしまった。

出雲はまりさんとの実に長い間の田植交際の幕を閉じたのは、食糧配給制度や生産割当供出制度が大きな原因となっている。

はまりさんと共に失った美しい農村の心は

こうした事や制度の実施によって共同田植は個人田植に変り農民の心をも変えつつあるのは残念である。あの長閑な田植太鼓の響も田植歌も再び聞く事が出来なくなった。農業機械化とか農業近代化の声と共に動力田植機の出現は、ついに田植早乙女を田圃から追放してしまった。

あの白く清らかな姉さんかむりや絣の田植着に赤い襷や黒い腕抜き姿のはまりさんの事など昔話となり、つい二十年前の農村風景であったとは到底考えられない夢となってしまった。

そして今、米の生産調整とか減反割当とかの論議が一段と高くなり、中国山地の私達の生活にヒシヒシと響いているが、これは丁度明治の始め洋鉄が輸入され、鉄山たたらの火が消えたこと、ついで熱資源としての製炭業が石油にその座を奪われたことに何か一脈通じるものがあると思われる。中国山地に住む私達の前途を暗示する何かを更に深く考えさせられる。昔の人が流し込み新田を考えたように次の世代を強く楽しく背負って行く青年諸君の若い力に期待して、拙い私のはまりさんの話の書きとめを終る。

うれしいこと

次　号には徳川末期の庶民生活の一端がうかがえる古文書を掲載し、その読み方とそれにまつわる話を、史談会員の資料提供と採話をもとにしたもので編集してのせる予定。

史談会員の方　残したい写真や古文書を提供下さい。説明やそれにまつわる話は、メモでもよく、お話頂ければ録音して編集しのせたい。

「ハマリさん」に続いて、陰陽の会合で発表の原稿を掲載できるので御期待のほどを。

名　簿によって、文通などで問合せ調査依頼が行われているようで、主催担当、編集者一同よろこんでいる。

春の史蹟めぐり

岡山県高梁市を訪ねる計画で交渉中。そのついでに市の西方で奥出雲と関係深い村々を廻って、祖先たちの交流の地を知ることも考えている。よろこんで案内しようと、昨秋の会の参加者からの申し出でもあっている。これもうれしいことの一つ。

新春の歌

年明けし宿直室の玻璃窓に鎮守の杜の鼓は響けり　伊藤萩雨

真夜覚めて腕を失くせし娘のうへに吾の腕さすりかなしかりけり　畑八重子

こやみなく降る雪のなか大二匹つれて径ゆく主婦寒々と　渡辺観翠

山芋の味ほのかなり亡き父を語りて更くる雪深き夜　景山悦子

新年の一日（ひとと）年賀に訪ずれて短歌（うた）語りつ、夜は更けゆけり　岡田時子

軽がると抱（いだ）き上げたる嬰児（みどりご）の生命の重さの腕に伝ひ来　野村節子

この宿に宴会ありてうた声は次々たかく乱れ聞こゆる　目黒成生

わが佇ちし平行線の真向ひに過疎にひそけき集落のあり　宮廻愛子

夜くだちて客を送りし軒下にぬれたる猫の吾を見上ぐる　永井弥生

寝ながらにさがす眼鏡の位置きまり術後三年起き伏しおりて　常盤はるまさ

旅終へて帰るふるさと雪積る船通山は母のごとなつかし　安部夕波

正　月

仕（つか）え来し歳月露（あら）わ妻の肝（ひも）　岡田蹊花

軒つらら太さ日に日に育ちけり　新出谷一華

藁塚に冬陽（ひ）を積みて峡（かい）に住む　加納信子

着ぶくれていよいよ尖る喉仏　糸原古志

久闊を謝して賀状を書く二日　岡田麗水

軒永柱（つら）孫の棹先及ばざる　中澤斐水

無人駅凍て月の待つ終列車　中田巣鶴

松すぎて帰える我が家の冷え冷と　門脇花子

孫の泣く声に目覚むる寒の入　渡部夕峰

閨に舞う雪や無聊（ぶりょう）の道を消し　錦織富江

冬ごもり妻の眼鏡垂るるまま　高木白虹

初詣無言のままに列につく　小川あきお

白皚々（がいがい）の中に佇たる大欅　浅野としお

お飾りのわずかに歪み老住まい　植田美代子

奥出雲における
歌道の滥觴（覚書）

—註釈編 公家と歌道（上）—

本論に入る前にしばらく公家と歌道について

公家＝公卿

公家（こうけ・こうか　ともいう）とは、皇室すなわち天皇家をはじめ皇族のすべての方々と、これをめぐる廷臣である公家衆（堂上衆ともいう）を含めていう。しかし通俗に公家といえば公家衆の意味で、江戸時代は公卿（くぎょう・くげ）と書いて公家衆の意味としているが、これは通俗的言い方である。

公家衆は地下（六位以上）に対する語で堂上とも称したが、江戸時代は堂上衆ともいった。公家衆の語は近世にはじまったもので、廷臣（朝廷に仕えて官に任ぜられている臣）をあらわす便利な語として、現在学術語となっている。

公卿補任

とは参議以上の官に任ぜられることで従三位以上の位から補任された。非参議とは三位以下でまだ参議にならぬもの、四位で参議の資格のあるものをさした。

摂政・関白　の下に

公——太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣の人

卿——大納言・中納言・参議および三位以上の朝官（四位の参議の出る時あり）の人

をさしていゝ、あわせて公卿と併称しはじめた。また大臣公卿ともいったり、あるいは上達部とも呼ぶ。また唐では参議の別名を宰相といったので、わが国では参議で近衛中将を兼ねるものを、宰相の中将といったこともある。

公家の分類

公家衆は各家に家格があって家業も異った。

摂政——最高の家は摂政（天皇に代って政務をとる）関白となる摂政家＝摂家で、鎌倉時代から五摂家となる。近衛が嫡流・九条は庶流、近衛から鷹司が、九条から一条・二条が生れた。この五家には高下はなく、時の官位次第で上座となった。人臣の上に坐するから、一ノ人、殿下、殿といった。

関白がある時は摂政がなく、その逆の時もあった。関白の父を大閤、法体（出家）すると禅閤といった。摂家は宮中の最も大切な行事を口訣（口伝）で相伝して家業とした。

（藤・は藤原氏、源・は源氏、菅・は菅原氏、平・は平家の家系をしめし、（　）内は最高の官位をしめす。）

清華

摂家につぐ、華族ともいう。藤・系では西園寺（大納言・従一位）、徳大寺（仝上）、今出川（菊亭ともいう、左大臣・従一位）、源・系では久我（左大・従一）ほか計七家で、近世に二家が加った。太政大臣を最高とし一人（天皇）に師範として、重要な四つの有識（ゆうしょく、礼儀、上の法式）を伝えるのが家業。

大臣家

三家があり、藤で正親町三条（後世の嵯峨・左大・従一）、三条西（仝上）、源（村上源氏）で中ノ院（内大・従一）で、近衛府の長官の大将をへないで大臣になる家。摂家は大将を兼ねて大政大臣になり、摂政・関白に至る。清華や大臣家は摂家の君達（子息）の摂関にならないで終った人々の子孫である。

以下は一般の公家衆＝平公家と俗称するもので、数が多く七家格がある。

羽林家（25家）

藤・四辻（大納言・正二）、中山（大納・正三）、冷泉（中納・従二）、清水谷（大納・従一）、四条（大納・従二）、山科（大納・正二）、源・六条（大納・正二）ほか、右の家々は先祖より近衛司（近衛府の官人）をへて中・少将より昇進して、大・中納言、参議となり、武官を兼ねて剣や笏を持った。大納言となれば、節会・官奏・叙位ほかの礼儀上の法式（有転故実）を家業とした。

名家（12家）

藤・烏丸（准大臣・従一）、柳原（大納・従一）、甘露寺（大納・従一）ほかで、先祖の時から文筆の才をもち、儒道を学び弁官（別表参照）をへて職事を兼ねる。名家・才名で有職故実を行う家業。

羽林名家の外の家（10家）

藤・高倉（大納・正二）、唐橋

官職位階表（抄—ほんの一部）

官＼位	正一位	従一位	正二位	従二位	正三位	従三位	正四位 上	正四位 下	従四位 上	従四位 下	正五位 上	正五位 下	従五位 上	従五位 下
官	太政官	太政大臣（摂政・関白）（行政の最高機関八省以下の統轄）	左大臣 右大臣 内大臣（三公のいう政務の中心）	大納言（太政官の次官 大臣ともに政務をとり代理する。（定員 4））	中納言（仝上 但大臣の代理ができない。定員3）のち権中納言（定員 8/10）（定員 7/8）	参議（朝政に参与してその得失を論ずる職（定員8））								
官	神祇官	式部省	兵部省	蔵人所	近衛府（禁中警備 行幸奇供奉 左右兵衛 検非違使）									

書籍は
①蔵人頭（蔵人所の別当（非官職）の下でその長官（蔵人所は機密文書の保管 詔勅の伝宣宣中の一切のことをする）
②太政官左右大弁
③近衛中将
④太政官の左中弁
⑤蔵部省の大輔（次官）（蔵位勲功を司る省）のうちいずれかをしたもの
⑥五ケ国の国司を無事に歴任したもの
⑦三位の位階の中の者より厳選して任命された。

（参議・正三）、菅・高辻（大納・正二）、源・五辻（左馬頭・正三）、富小路（左ヱ門佐・従三）ほかで、中・少将、弁官を経歴しない家である。

新家（19家）

藤・堀川、平・**冷泉下**、源・**久世**、岩倉ほか。いずれも本家より分れて新家をたてたもの。この他にまた**新家**（29家）が出ている。

藤・勘解由小路、**武者小路**、源・東久世ほか

昵近衆（先代）（11家）

勧修寺、飛鳥井、山科、冷泉ほか。

昵近衆と同じ衆（5家）

西三条、堀川ほか

右の二衆十六家は、公方の昵近衆といい、公方家に従って、万事御用を奉仕する。伝奏（天皇・上皇へのとりつぎ役）の役は、この二衆の中から器量を撰んで任命された。

公家の史歴

日本の歴史において公家階級の地位は政治史の上では勿論のこと、文化史の上でも見逃し難い重要なものをもっている。それはそれぞれに優れた人物にも恵まれていたからでもある。

平安時代に於て国風の文化が開花するに至ったことは注目すべきことで、漢詩漢文に圧倒されていた和歌は、「**古今集**」「後撰集」の両勅撰和歌集によって盛んとなった。他方「源氏物語」「枕草子」も生れた。他の文化部門はさておいて、鎌倉時代になると**藤原定家**（明日記の作者）が中央文化の摂取に積極的熱意をもち、中央文化の伝承者を迎えて自らが学ぶとともに、普及に力を尽すようになった。

貧乏公家物語

荘園の収入によって優雅な生活をしていた公家も、武士階級の抬頭と勢力増によって、武士が荘園の本所（領主）である公家の番人の立場から蚕食者へと変ったため、次第に荘園を減少したり、喪失するに到り、天皇家、公家は貧乏生活へ転落していった。こうした状況を訴える公家の申出にも、幕府は武士の統御のため、耳を傾けなかった。戦国時代には荘園は影も形もない有様となった。やがて官位の授与が宮廷の権威を支える主柱となり、官位を望む大名、大師号・禅師号を望む僧侶たちが、献金などで栄位を手に入れるということになった。信長、秀吉は皇室へ献上を続けたが、徳川時代は全く宮廷と大名の関係も断ち、武官の官位も幕府の手中に入れてしまい、天皇は専ら学問に励み和歌を詠まれればよいという状態においこんでしまった。宮廷の費用は幕府の三万石余の貢納のみで、津和野藩主以下の石高であった。幕府は七百万石（うち三百万石は旗本分）と莫大な献上金を得ていた。五摂家の筆頭の近衛家が2,860石で中位旗本、五百円札の岩倉具視家は150石で食うに困り、町方役人が公家邸へ入れぬ特権を活用して、一部を博徒に貸したという。従って下級の公家は30石程度の微禄足軽並であったので袋はりの内職もした。いざ宮中参内となれば、貸衣装、冠であった。絵心のある者は掛軸による絵を、上級公家は揮毫がかなりの収入源となった。また歌道の地方への普及によって公家は生活維持の財源を得ることもできた。

横田銘草木集（5）

丸山　巌

ロゥバイ（蝋海）　**古名　からうめ**

中国原産の落葉花木で、後水尾天皇の時代朝鮮を経て日本へ入ってきた。臘月から初春にかけて咲き四周に馥郁と芳香を放つ。蝋梅の名はその花の色あいからであり、臘月から咲きだすので臘梅とするのは非であるとされている。

花被は多数で、内部のものは暗紫色であるが、全花被が黄色の品もあり、これ　素心蝋梅（ソシンロウバイ）という。写真は普通の花色（すなわち紫心）ではあるが、花被片が濶大な品のオオロゥバイ（漢名は檀香梅）である。低木ながら樹令数百年の古株で、元屋敷から移植された彩紫花園のものである。

（編者註　臘月とは旧暦１２月）

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

たたらの里
奥出雲の杉木立の中
鉄師頭取の資料館
3月21日土より
有形民俗資料・美術工芸品の
展示替えを行い再開致します。
財団法人 絲原記念館

奥出雲

題字　糸原風亭書

第71号
3月号
昭和56.3.6
奥出雲編集集団

古文書を読む集いから②

親をいたわった話

小林房吉

古文書を読む集い

横田史談会のこの集いもこの三月で53回を数える事となった。15名余りの常連の読解力はすばらしく成長した。毎回初見で輪読し意見交換も活発である。県内でも実力は別として、こんな雰囲気の上に、復習の集いまで派生している集団は珍らしいとのことである。一月には正月に因んで、写真の古文書を、例会の終り読んだ。この古文書をめぐる他の文書もあるので、それらを加えて紹介する。資料収集提供者は史談会の小林会員。

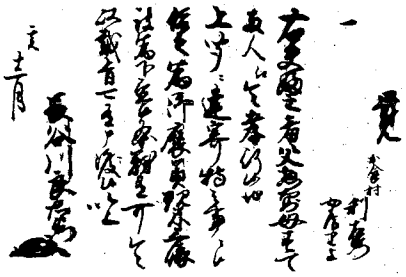
表彰の内申

藩の郡奉行に対し郡家よりの内申書の控の写しが、馬場の山根屋にあった。同家二代前が明治初年に郡家の役人「物書き」として勤めていた時、旧横田村を中心として近くの村々のこと、たたらに関することなどを、控から多数写していたものの中にあったもので、先年残念なことにそれらの貴重な記録は、家の移転の時全部焼却されたという。その直前にこの記録は写され保存されていたものである。

享和三年
加食村利左衛門下横田村喜十
下布勢村斧右衛門両親に対し
孝心行状届書

外に米弐俵宛被二下置一候
御書写し奥に有
亥七日　郡扣
郡扣不慥に付丑八月郡方中より借り此分写し置

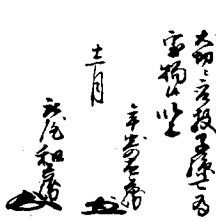
加食村利左衛門下横田村喜
十下布施村斧右衛門右三人
の者とも両親江尽二孝行一



候趣村役人より申出候に付村内人別杯へ悉問合候処兼ての行状左の通りに御座候

加食村　利左衛門
歳四拾壱才

右之者持高弐石弐斗八合所持仕当年九拾壱才に相成候父親併六十六才に相成候母親外に



——こゝからは封の表書き

子供四人利左衛門夫婦共に都合八人之家内にて御座候処家内共に兼て実叮成者に而百姓之風俗古形を相伝家業専一に仕　平日両親の気に従い親より不道理之儀申付候而も一つも不二相済一我身之難儀をも不レ顧兼て両親の起臥に心を付　夜分杯目も合兼候節は何ぞ夜食を拵為レ給咄杯仕夜を明し申上候　若利左衛門無レ拠用事に付他出仕候節は、ケ様々々之用事に付何れ江罷越度、尤いつ頃には罷帰り可レ申段委敷申聞合点為レ致候上　懇ろに暇乞いたし罷越手早に用事仕舞候様に仕、用事相済候得ば無用之所江立寄候杯と申議無二御座、急罷帰り其日之有様を両親に悉為二申聞一候由に御座候　扨又后様他出仕候節は留守中取扱之儀女房江委敷申付置、女房儀も至而深切に取扱仕候

一、父親惣右衛門儀拾年斗以前より歩行不自由に相成二便共に自身に不二相叶一老人之儀に御座候得ば夜により候ては数度の儀に御座候得共、利左衛門夫婦之者常に付従い深切の取扱仕候由に御座候、扨又親惣右衛門儀田畑手入併作物等廻り見申度趣に相見候得ば、外に何程開敷事御座候ても直に負、田畑打廻りケ様々々の手入に仕候と詳に申聞せ候儀は毎年の事に御座候　左

候得ば惣右衛門儀甚歓申候

一、父親惣右衛門五六年以前より老耄仕居候処去々年悴利左衛門儀十月初旬より極月末方迄風疾相煩甚難儀仕居候由の処、十一月中旬にても可レ有二御座一、親惣右衛門より其方儀ケ様に長煩仕候ては纔に所持仕候田地も捨候様に相成候間、此家に置事不二相成一何方へ成共参候様にと追出候由の処、利左衛門より申候は、長々相煩世話に相成候儀一言の断可申様は御座候得ども、何卒今少しの間見合呉候様母女房ともに色々断いたし候得ども聞入不レ申に付、此上断いたし候ては却て親の気に背道理如何仕可レ然哉と母へ相談仕候由、母より又々惣右衛門へ何分の入割能々申聞せ何分病気相調候迄は了簡いたし候様にと申候に付、左候はゞ先了簡可レ致旨申候に付利左衛門儀直に親惣右衛門枕元に寄厚く一礼を申、其後は気分余程難儀に相成候ても昼の内は余り横寝も不レ致様に仕、両親の気を伺毎日の挨拶に此間より気分日々に快相成と為二申聞一安心いたし候様取斗、誠に村内のものを感心いたし居候由に御座候

一、先年大曲村神主下総方老母存生の中行歩不自由にて下総儀昼夜懇に取扱候由承り、下総方江参り其節取扱の模様承度と存居候折柄、下総に出会貴様江些御尋申度儀御座候先年其許御老母存生の中行歩不二相叶一由の処厚く懇の取扱被レ成候由承および申候、如何御取扱被レ成候或御教被レ遣候様相頼候得ば、是は不二存寄一願尋に恥敷事に候愚痴の私格別懇にいたし候事無レ之候間教候儀は及レ断に候段申聞候得ども、達而相頼候に付私母格別懇にいたし候儀は無レ之候得共愚存咄可レ申　両親の起伏喰物等に随分心を付何事も両親之意に不レ背懇に言葉を懸け、我身の難儀を不レ顧身を正直に持両親安心いたし候様取扱候はゞ孝心に相当り可レ申と申聞候由其後は猶更尽二孝道一候儀厚く相成候由に御座候

一、親惣右衛門兼て実可成者にて御座候処近来老耄仕候に付ては時により無体の儀申懸候事も御座候得共一向相背不レ甲惣右衛門意にまかせ取扱仕候由に御座候

（加食村は足立氏、下横田村は中村氏、下布施村は内田氏の祖先である。中村、内田氏分の内申文は書写してなし）

右之者共両親へ対し尽二孝行一候趣村役人より申出候に付相糺見申上候処、兼ての行状如レ此御座候

小身の者共右様両親の気に従い取扱仕候儀至而奇特の事に奉レ存候間御届申上候　何卒御恵を以宜敷御称賞被二成下一候様奉レ願候

左候はゞ外人別の引移にも相成候儀と被レ存候以上

亥七月　与頭太　助
与頭源左衛門
与頭庄　兵　衛
下郡祐左衛門

伊藤其左衛門様

内申によって八月三日付でそれぞれ米弐俵宛の内示があったが、写真のように十二月、三俵の申渡しがあった。

同家では三十六年後の天保十年利左衛門の子亀蔵が、父にならって父母に孝養尽したとして再度郡奉行より表彰をうけた古文書や、その使者の武士が与えた祝いの歌なども保存されている。

覚

加食村
利左衛門
女房里よ

右夫婦之者父惣右衛門母すて両人江令二孝行一候趣上聞ニ達寄特之事ニ候依之為二御褒美一現米三俵被レ為二下置一候条難レ有可レ令二頂戴一旨可レ有二申渡一候以上

亥十二月
長谷川良右衛門（花押）
下郡祐左衛門殿

与頭庄　兵　衛殿
与頭源左衛門殿
与頭十　兵　衛殿（里田・恩田）

右之趣被仰渡候条（上阿井可部屋）御褒美米難有致二頂戴一候様御申付可レ有レ之候以上

与頭庄兵衛（花押）（横田柏屋）
十二月
下郡祐左衛門（花押）（三沢長瀬）
庄屋和兵衛
年寄左兵衛

右之趣御書付ヲ以被レ為二仰渡一扨々寄特之事ニ候則御書付并ニ御褒美米相渡候条猶無レ怠孝行可被レ致候扨又此御書大切ニ取扱子孫可レ為二宝物一候以上

年寄左兵衛（花押）
十二月
庄屋和兵衛（花押）
加食村　利左衛門殿

横田銘草木集（6）

丸山巌

ヒメヤシャダケ　姫夜叉竹

Semiarundinaria Maruyamana Muroi

ナリヒラダケ属Semiarundinaria中最も細稈の種。稈は高さ2～3mで直径は0.5cm、全稈には茶褐色の虎斑が散布して美しく、材は固くて鮮明。稈鞘の下部1cm内外に粗毛がある。葉は長皮針形小形で長さ10～15cm、幅は1～1.5cm、上面無毛下面有毛。原生地の松江市東本町では市街地造成のため除草剤を使用して全部枯死消滅させてしまい、40年前移植して検討した島根県仁多郡横田町大字中村蔵屋（旧出雲国）の彩紫花園に残存するのみである。

しかし、この彩紫花園のものも20年前開花し、その後徐々に再成して今は広い竹藪になっている。銘竹である。

奥出雲における歌道の濫觴（覚書5）

—註釈篇（下）二条派とその歌人—

前回までと本号別表中のなかの中央の歌人で絲原家にかゝわりある人についてのべておく。

頓阿（とんあ）

正応2（1,289）～文中1（1,372）

鎌倉末から南北朝の歌僧で、家系には異説が多く、二階堂貞宗と言ったともいう。幼より和歌に親しみ、二条流の嫡流②為世に私淑し、24才で叡山に登る。のち西行にならって諸国遊行をし、晩年新拾遺集の撰を完成する。弟子二条良基は関白として北朝にあり、室町初頭に残した頓阿の足跡は大きい。定家以来の二条派を再興し、兼好、浄安・慶運とならび、和歌四天王と称せられた。著書歌集に「井蛙抄」（館蔵品に古写本あり）「草庵集」がある。

慶運（きょううん）

～応安2（1,369）70才位で死す

父浄安（二条為世に学ぶ）とともに、南北朝の歌僧として名をあらわす。父の歌は今日残るもの少ないが、幽玄の味に満ちたものであるという。慶運には歌集などがある。

兼好法師

弘安6（1,283）～観応元（1,350）

著書「徒然草」（古写本あり）は枕草子とともに随筆の双璧と称せられる。この時代の社会相を知ることのできる、卓越した珍らしい思索的文章に富む。神道家に生れ和漢の文学・儒学仏典に通じ、和歌にも秀いでた多彩な才人であった。

二条良基

天応2（1,320）～元中5（1,388）

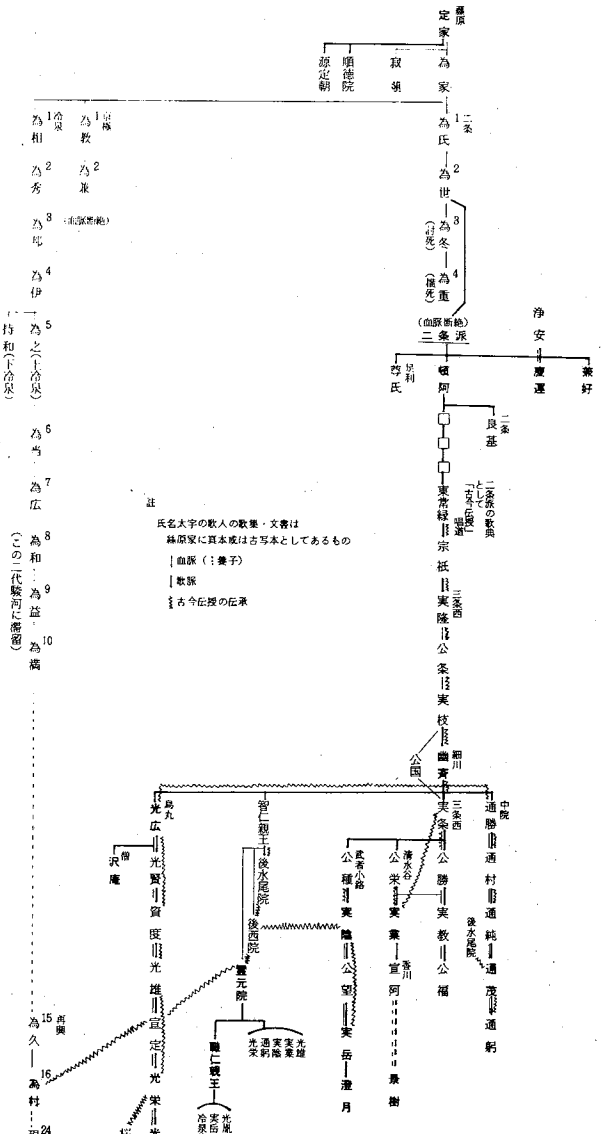
北朝の政治家・歌学者・連歌作者、父に摂政・関白をもち、後醍醐天皇に仕えのち光厳・崇光・後光厳・後円融の北朝四代に歴任、関白・氏長者・太政大臣・従一位・摂政二回に就任、北朝の柱石であった。又文学者としての良基は連歌の文芸的本質を論じて純化をはかり、連歌を和歌から独立させた。著書も多い。

東常縁（とうじょうえん）（とつのつねより）

応永8（1,401）～明応3（1,494）

室町時代の武将・歌人、古今伝授の形式を整えた最初の人。美濃国篠脇城主、古今集の奥秘をきわめて歌名すこぶる高く、文明3（1,471）神前で宗祇（遍歴詩人で全国へ連歌を中心とする堂上文学の庶民への普及の力は大きく、連歌を頂点に達しさせ、芭蕉へも大きい影響を与えた）にそれを伝授した。古今伝授は

藤原定家流歌道御子左家の二条家ならびに二条派の主要歌人



きさらぎの歌

目締に今日とどこおりなし日報のアラビヤ数字は丁寧に書く　常盤　はるまさ

旅終へて帰りし部屋にさぼてんの凍てしつぼみをしばし掌にのす　永井　弥生

鉢植ゑの紅さしそめし寒椿夫と楽しむ抹茶のかほりに　畑　八重子

ふるさとを遠く来ませり海鳴りに潮の香匂ふ海辺歩みて　渡辺　観翠

左手で発註せし花種がとどけりと老父生きいきと春を待ちおり　真綿　博子

節くれし夫の手に触れ鉄路守り家族守りたる幾年思ふ　景山　悦子

夜間工事いま終へて来し人夫らは路傍に暖とる焚火もやして　宮廻　愛子

明神の古杉ゆるがす寒鴉小溝に翔ト り何か喰みおり　岡田　時子

いつの日も身近にありし幼子は長ずる程に遠くなりゆく　日黒　成生

一本の晩酌に足りて熟寝する夫の傍に日記を閉じぬ　野村　節子

突風に岸に積れる粉雪のけむりとなりて川渡りゆく　伊藤　萩雨

立春を過ぐれば斐伊のせゝらぎに春の夢よぶ唄を聞くなり　安部　夕波

立春抄

立春の厨に妻の声転ろぶ　浅野　としお

冬帽をまぶかにひそと老いゆけり　糸原　古志

足早やに往き交う橋の風冴ゆる　植田　美代子

寒月を納杓にうけてゴクリ飲む　岡田　蹊花

診察を待つ間侘しき黄水仙　岡田　麗水

藪柑子コップに活けて春を待つ　小川　あきお

妊る牛大雪掻いて移す厩　恩田　魚跡

客おくり日脚伸たる茶の間かな　門脇　花子

ろう梅のほころび初めし窓寄りに　加納　信子

嫌れの女将を伽に酌む地酒　高木　白虹

足袋だけは洗いたてなる白うれし　田辺　竹野

狛犬の口を目当てに豆を撒く　中田　巣鶴

悔み書く居間の福豆かじりつつ　中澤　菱水

初みくじ大吉しかと枝に結う　新出谷　一華

湯の宿に久知の出会い早春の猥　錦織　富江

夜をこめて漏らす水栓凍厨　藤原　樵夫

廃屋のトタンに激しき雪解水　渡部　夕峰

古今和歌集の中の難解な語句や事項についての古説を伝授したものと言われているが、当時の宗教思想に基くもので、何ら学問的価値はなかったが、様々に神秘化され絶対的な権威をもつものとされた。伝授にあたり師匠と弟子との間には、誓紙類を渡し伝授内容をみだりに暴露するものは神罰をうけるという戒めの根本は、神道の思想であるが、一般に師弟の関係は父子の交渉のように有難いものと考えられた。のち細川幽斉が智仁親王に伝授し、代々の天皇皇族も伝授をうけるに至ると、一層の重味を加えた。今日まで血脈の続いている

冷泉家では②為秀　④為伊のころまでは、二条派を保守的として、革新的歌風を入れてこれと対抗したが、間もなく連歌(これから俳諧が生れる)の中に没入してしまい、和歌の派としてはその後大きな存在性を示さず、⑮為久が家運を復興すると、その子**為村**は霊元院より古今伝授をうけて、歌人として同時代の人々の中では名をなした程度である。歌集「冷泉為村郷詠歌集」(古写本あり)がある。今日冷泉家が脚光を浴びているのは、血脈が続き、失われたものもあるとはいえ、多くの歌道にまつわる古文書を伝承されているところに賞讃されているのである。

細川幽斉

天文3(1,534)～慶長15(1,610)

安土桃山時代の武将・歌人。三条西実枝に学んで古今伝授を受け、近世歌学の祖として室町・東山文化の教養を伝え、烏丸光広(この関係は既述)をはじめ多くの門下がある。歌論書「耳底記」(古写本あり)は幽斉の口述を、光広が筆記したものである。優れた歌集は古今集ついで新古今集とする二条家連続の歌学思想が述べられている。断片的ではあるが過渡期の啓蒙家たる幽斉の歌学観。ひいては当時の歌学思想がわかる好資料である。

清水谷実業

慶安元(1,648)～宝永6(1,709)

祖父三条西実条の血をうけたすぐれた歌人、清水谷の養子となり権大納言まで昇る。学を熊沢藩山に歌道を霊元院(天皇)に受け、才学を当代に鳴らした。僧契沖の詠歌を正して承服させ、門下に香川宣阿(景樹の祖)も出て、歌壇に覇をとなえ、北村季吟もこの門に学んだという。和歌作法に関する口伝書(古写本あり)をのこしている。

武者小路実陰

寛文元(1,661)～元文3(1,738)

従一位権大納言まで累進した歌道の大才で、後西天皇より古今伝授をうけ、霊元天皇より古来より歌人を以て称するもの、人麿・貫之・定家・実隆及び朕が弟子実陰のみと激賞を賜わった。詠風高雅・清新の風あり、流派に偏する甚だしき当時、それを排した歌学上の識見高く、「詞林拾葉」(古写本あり)ほかがある。

その孫**実岳**

享保6(1,721)～宝歴10(1,760)

は、当時の四天王の一人と呼ばれた。その門人に**澄月**(古文書あり)がいる。

烏丸光広と光栄

については既述した。

()内は絲原記念館々蔵のこと

(史談会・高橋一郎)

会員配布一部百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第72・73合併号
5　月　号
昭和56. 5. 2
奥出雲編集集団

奥出雲における歌道の濫觴（覚書6）

—好覩をめぐって—

（覚書③④⑤の資料篇を参照しながら）

福庭吉三郎時代

享保末年の七月十八日付の邑松中（虫くい判読）七精宅から福庭吉三郎宛の一通の手紙がある。その概要を書くと「去る十一日京都に安着。玉造滞在中指導をうけた絵を早速近くの人にも伝授したい。この冬にはまた玉造を訪れていろいろ話しをしたい。筆道については貴地には指導者がいないようであるが、ひまをみつけて精を出してほしい。私も打捨てるつもりはない。私がお貸ししていた茶道についての本（虫くいのため判読できず）をお返えし頂いたのをたしかに受取った。粗末なものであるが筆二対をお届けする。末長く御厚情を」とある。吉三郎十代の終りごろと思われる。

このころ二条流の出雲の歌祖釣月はすでになく、二条流の奥儀（古今伝授）を二人目に釣月からうけた小豆沢勝興が三十才位であったから、これとの交渉が始まっていると思われる。家にあった釣月自筆の「玉造温泉十二景」の文と歌はその一つの指針でもあったであろう。豪商の勝興と土豪福庭家の吉三郎の父とは歌を通じての交流があったと思う。温泉町には幾多の風流人の来遊もあったから、絵・書に秀でた人、俳人・歌人も食客として福庭家に滞留するものもあって、それらの人々の指導や影響を吉三郎は早くからうけて親しんでいたと思われる。

絲原吉三郎

吉三郎が絲原家に迎えられたのは元文三年（1736）二十二才の時である（享保二年生）。この年には養父にあたる先代（六代）勘右衛門は五年前の享保十八年になくなっていて、養祖父即ち五代の徳右衛門七十才が、番頭甚右衛門の補佐によって家業をとりしまっていた。

（養父勘右衛門は下郡として享保十五年来連年の西国地方一帯の夏の冷害、そして病虫害による凶作に心を砕いた。十七年末から十八年へかけては大雪にも見舞われ惨たる有様で餓死者も出た。この窮状を藩に訴えて、救米をうけ村々に配分を終えたころ、過労がもとで十二月下旬四十余才でなくなっていた。）

若くして七代となった吉三郎は祖父にかわり、甚右衛門の協力で家業に励んだ。養祖父は七十五才でなくなった。その二年後は甚右衛門を独立させ分家堀の内とした。吉三郎の二十代の約十年間は家業精励一筋であったとみえて風流の記録は少ないが、しかし多忙の間にありながらたしなみは忘れなかったとみえて、勝興・永岡久宜（白潟天満宮神主）・関戸俊玄からの歌もあり、有沢弐通（かずみち）の山荘に勝興が招れて詠じた歌も届いている。

寛延四年（十月宝暦と改元）の宮中歌会始めの天皇をはじめとする上位宮廷人の詠進歌の写しがあるから、好覩はすでに二条流堂上派（地下流というのは一般にひろまった派）を指向していたようである。この年の四月十五日大馬木を出発し、六月廿五日帰宅するまで二ケ月余り、京都・比叡山・大津・伊勢参宮をめぐって大阪に長期滞在している。見物も精力的で訪れる神社、仏閣、名所はすべて風流人の面目躍如たるところである。大阪滞在中は連日のように鉄問屋の来訪が続いている。

このころは三十五才、鉄業の記録をみても軌道に乗っているころである。旅から帰った翌宝暦二年からは吉三郎は好覩と号し、風流の記録が急にふえてくる。

好覩の歌道

この覚書④⑤で述べたように万葉集をはじめ勅撰集の第一集の古今和歌集、第二第三の後撰集・拾遺集から第八集の藤原定家も撰者の一人である新古今集までのいわゆる八代集の全巻が揃えられている（木版本）。二条流の基礎をかためた頓阿の「井蛙抄（せいあ）」連歌の基礎をつくった宗祇の「愚問賢註」その完成者里村紹邑の連歌、さらに院や頓阿、慶運、兼好らによる百首和歌集、兼好法師和歌集、細川幽斉口述烏丸光雄（光栄の祖父）筆記の「耳底記（にていき）」のほか、数々の堂上派の歌集や歌論などが集められている。

宝暦二年の摂津国の烏丸卿の御領分の天満宮の八五〇年祭の奉納和歌集には、勝興、俊玄ら出雲の数名の歌人のものがのっている。歌才、歌論、添削ともに江戸中期最高といわれた堂上派の烏丸光栄の影響が、濃厚に出雲にこの奥出雲にも及んでいたのである。（光栄はすでにこのころはなくなっている。かつて釣月の生存中に、その努力によって光栄他七人の公卿歌人が大社八景を詠じて奉納している

が、その写しもある）

この年八代を継いだ四男四郎左衛門が生れている。この年は全国各地の天満宮で八五〇年祭が催されていて、松江白潟天満宮、来待の菅原神社にも奉納されている。さらに俊玄と勝興は二人で十五首宛、京都の北野社に奉納している。これらの写しが残っている。白潟天満宮のものは二種あって、一つは俊玄・勝興・久宜らの指導者級、他の一つは一般の人々の奉納歌集である。

好親の歌

次の歌は白潟天満宮奉納の一般歌人集の中にある好親のもので（のち安楽寺の住職となった悦阿のものもある）

春二十首の中の「帰雁」

春ごとに帰る時とか天津空霞をわけて雁（かり）のゆくらん

恋二十首の中の「増恋」

うき人を恋そめしより色もふり袖のちしほをいかにとかせん

宝暦三年二月は、出雲における二条流歌祖釣月の廿五回忌の追悼歌会が催されている。その歌集がある。この年の秋、勝興は隠居し（この時から常悦と号す）歌の弟子ですでに僧籍にあった釈悦阿を伴って京に上った。

この年から関戸俊玄の便りがしきりと届けられている。俊玄は好親から宮中の歌会始めの歌の抜粋の写し送られている。後でのべるように鉄流通の道を逆に、京都の情報は早く入ったようである。それはそのほかの風流や美術工芸・家具調度品にも及びこの道に副って流入している。

この年の九月、故清水谷亜相（実業）御口伝の書で、釣月が伝授されていて、俊玄がさらに授けられていた、「詠歌要意之口決」（既述）を俊玄が筆写し、奥書きに遺漏なきよう相伝せられたいと付け加え署名花押をし、糸原好親雅丈への巻物とし好親の松江出府の折手渡している。

さらに翌四年二月には、当時歌道最高の人烏丸光栄の主著「諷詠覚悟抄」（教訓十五条）の写影書のあとに、「これは尊師光栄公教訓十五条であって、遺漏なきよう相伝され、謹しんで秘蔵有るべきものである」と、俊玄が副書きして好親に渡している。この時好親は新年の挨拶のため出府している。

そして六月四日の俊玄の便りによれば、相当の上納が京都の宗匠家に行われたようである。そこには別便で観応三年（南朝正平七 1352）に、頓門がまとめた慶運・兼好の三人が摂政後晋光園院の詠じた歌百首に評点づけをした歌集を届けたとある。歌の手本としてよろしきものであるとある（この写本現存）

これらのことは俊玄と好親との歌を通じての師弟関係が深かったことをしめすものであるが、現在俊玄なる人物についてはいろいろ手をつくしているが、詳細は一切不明である。しかし俊玄が如何に好親に期待していたかは伺い知ることができる。

好親の歌道精進

好親の集めた和歌に関する書籍は先にあげたが、そのほかに元禄年間以降に出版された（木版）「萩のしおり（詞林綱目）「和歌八重垣」七冊のほか、歌作の基となる参考書、歌の書き方、また歌会の作法や朗詠の仕方の本なども多い。また先にあげた兼好法師歌集は二条流堂上派の歌人中院通村（前内大臣）の自筆書を写したものであり、元禄十五年（1,702）に求められている。

「一帝（仙洞即ち上皇となられた霊元大皇）三臣（中院通茂—通村の孫—清水谷実業、武者小路実陰）百首題和歌」の写本もある。また享保八年石見国柿本社御法楽に殿上人から奉納された歌集（法皇をはじめ関白以下実陰、光栄、冷泉為村ほか）の写しもある。

特に烏丸光栄のものが多く、好親が堂上派の歌道に如何に打込んでいたかがわかるのである。

また宝暦四年ごろにまとめられた「冷泉為村卿百首和歌」を翌五年に好親は入手している。

冷泉家の歌風は二条流と対立していたことは既述したところであるが、二条流は江戸時代を通じわが国の歌壇の主流であった。為村はその対立派であったが二条流の古今伝授を霊元天皇より伝授され、烏丸光栄の指導もうけ、すぐれた歌人として、その風を慕うもの多く、いずれの国にも弟子なきところはない」といわれる程になって、冷泉家の中興者となり、今日の冷泉家をあらしめた人である。為村はこのころは中納言の職にあり四十才で円熟の境に入っている時代であった。しかしその後この派は固硬した歌にとどまって、二条流の蔭にかくれる存在となってしまった。

二条流はまた近世新派の短歌の母胎ともなっていった。この歌集は滞京中の常悦から俊玄におくられたものを借用して写したものであろうか。何にしても最高の歌の修業を好親は心がけていたのである。

常悦・悦阿と好親

六年二月八日俊玄は、娘たみ子をなくしたかなしみの文と歌を綴って三月の終り好親に送っている。

京都にいる常悦は三月三日に姉を失った。二月五日と四月廿二日には相ついで娘をなくし、生者必滅のことわりをわきまえ、仏道に精進し読経し、禅定（宗教的な瞑想）に入っているのにもかゝわらずかなしみは失せず、覚悟をして家を出たといえど愛欲にこだわりが残るの

（五頁へ続く）

奥出雲・昭和56・4・5月合併号（72・73号）

産業考古学のすすめ

森口　保

近年、新しい学問が次々に誕生していますが、こゝで紹介する「産業考古学」もその一つです。この耳なれない学問が芽生えた原因は、戦争や戦後の産業開発と環境破壊によって、かけがえのない沢山の価値ある産業遺産が瓦壊し失われ、そのことに人々は心の痛みを感じたからでしょう。

産業考古学は、産業革命の先駆国イギリスで学界のニューフェイスとして登場したのは一九五一年のことであり、当時イギリスは第二次大戦後の経済復興期にあたり、産業革命期の遺産が急速に破壊され埋没していきました。それらの産業遺産の発掘、保存、復元、展示などとともに、それらを歴史的、組織的に調査、研究する新しい学問領域として産業考古学が生まれました。

わが国においても事情はまったく同じで、すでに史跡や建造物などの文化財の保存にはかなりの関心が集まっていますが、もっともわれわれの生活に縁の深い産業・技術にかかわる遺産については関心が低かったが、ようやくこれら遺産の急激な消滅に直面し調査・保存への関心が高まり、一九七七年産業考古学会が創設されました。

以上のような歴史的背景で生まれた産業考古学は、その歴史の新らしさばかりでなく、既存の学問とはちょっとちがった肌合いをもっています。目的が全国に散在する産業遺跡や記念物の調査、研究と保存にありますから文献研究だけでなく、むしろそれぞれの土地に密着した身近な物の発見・発掘からはじまることが多い。イギリスの産業考古学は市民運動の中から生まれたと言われていますが、アマチュアの調査が基礎となり、比較研究へ発展していきます。

また、地方史、民俗学、社会経済史、技術史、産業史などの既存の学問と重なる学際的領域であり、隣接諸分野との協調の下で展開されねばならないだろうし、研究対象が産業各分野に広がっており、あらゆる産業にたずさわる人々の参加によって進められねばなりません。

産業考古学のいま一つの大きな特色は、調査、研究に終らずに、必要とあれば産業遺跡や遺物の保存にまで発展させるという行動的側面をもっていることです。保存には現場で動態的に保存する場合もあれば、移築復元、あるいは図面、写真、模型などによる記録もあろうが、いずれにしろ、産業考古学は衰退していった技術、あるいは滅びつつある技術を対象としています。技術の衰退過程は、技術の発達過程と同じように技術の本質を教えてくれます。今日、近代化あるいは工業化、産業や技術の発達とはいったい何であったのだろうかと問われています。このことについて産業遺産は多くの重要な手がかりを提供してくれるはずです。

産業考古学会は創立当時、会員わずか四十一人でしたが、現在五百人をこし、金属、鉱山、繊維、水車と臼、電気、農業などの分科会や各地の支部で活動をつづけていますが、さしあたって、わが国の産業遺産の所在と現状を網羅的に把握し、研究と保存のための基礎資料とするため産業遺産の全国的な規模での調査をすすめています。

さいわい島根県には世界に誇る和鋼記念館をはじめ、菅谷高殿や鳥上の角炉などの産業記念物が保存されていますし、また新らしくタタラの古里に絲原記念館が誕生しました。このように産業考古学は企業や心ある人々の理解と協力なしに十分な成果が得られません。

産業、技術の資料保存に産業人、企業家の方々の物心両面からの協力をお願いするとともに、さらに産業遺産への大方の関心の輪を拡大し、産業、技術の先人の業績を通じて、郷土を学びたいし、明日を生きる知恵を悟りたいのであります。

最後に、産業考古学への理解をより深めていたゞくために、研究対象の産業をあげておきます。

こうしたことに関する情報をお寄せ下さるよう併せてお願いします。

A 第一次産業
1. 狩猟
2. 水産
3. 林業
4. 農業
5. 畜産
6. 養蚕

B エネルギー
1. 石灰
2. 石油
3. 電力（電機を含む）
4. ガス

C 建設
1. 建築
2. 橋梁
3. 土木

D 都市・集落・町並等

E 製造業
1. 食品工業
　a 製塩
　b たばこ
　c 醸造
2. 繊維工業
3. 木製品
4. 紙、パルプ
　a 和紙
　b 洋紙・パルプ
5. 印刷・出版
6. 化学工業
7. 皮革
8. 窯業・土石

a 耐火物
b 陶磁器
9. 鉱山・非鉄精錬
10. 鉄鋼業
11. 鋳造業
12. 金属製品
13. 機械工業
a 原動機
b 工作機械
c 自動車
d 時計
e 光学機器
F 交通・運輸
1. 道路
2. 鉄道
3. 海事（造船を含む）
G 通信
H 商業・金融
I 医療・医薬
1. 医療施設・器具
2. 製薬
J 公共施設
K 映画
L 古代産業
M 地図
N その他

（筆者住所並びに連絡先）
島根県八束郡東出雲町
出雲郷二一九
島根県立工業技術センター
次長

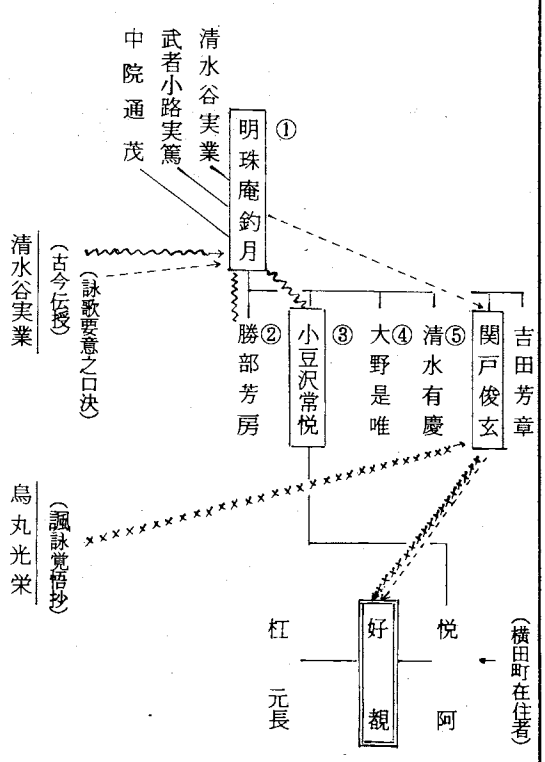
奥出雲における二条流の流れと

糸原好親

前71号の二条流の系譜図の続篇にあたるもので、出雲そして奥出雲に関する部分で、本号の（覚書6）とあわせ読んでほしい。

註（記号）は前号と同じ（高橋一郎作）

前号の系譜の訂正、寂蓮が定家の子となっているが兄に、従兄で養子となっていたが、定家が生れて出家した。

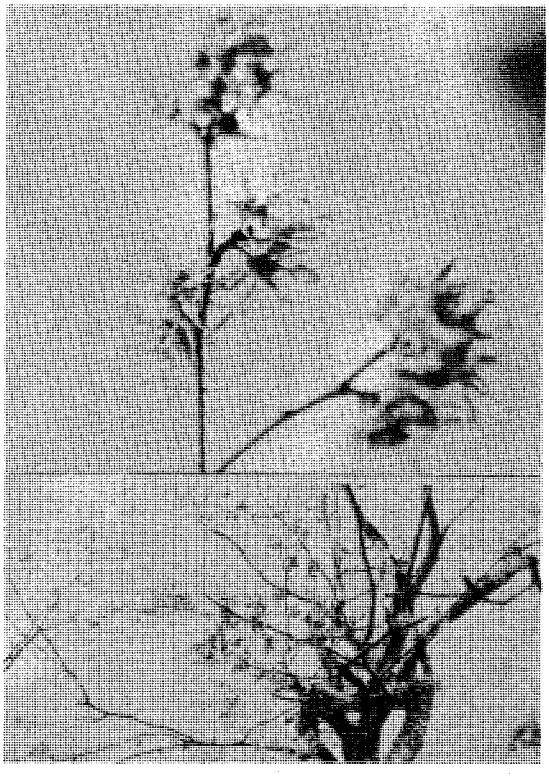


横田銘草木集（7）

丸山　巌

アテツマンサク　（阿哲満作）

日本中部以北に多いマンサクを中心に、マルバマンサクオオバマンサク、マルバマンサクなどの変種がある。
早春葉に先だって黄色で線形4弁の花を枝に集り咲かせるので美しくまた目立つ。豊作を表わす満作が語源だというが、〃先ず咲く〃　の意だとする説もある。中国地方の山地に多いが四国にも分布し、葉裏に星毛がある。備中阿哲郡高梁の臥牛山のものがタイプ。地方名は〃たにいそぎ〃。これは谷…の意ではなく、〃他に先だって急ぎ咲いた〃との意味だとする面白い花物語りがある。そして、〃たにいそぎ〃なる方言は、決してダンコウバイ（方言しらとりぎ、あつまんどー）を含まない。写真は横田町大呂の畑茂氏庭にあるもので、稀に見る大木である。



は慙愧の至りである。

追善のために読経するとは、有縁無縁の人々、万霊を平等に回向するものとはいえ、うき世のことに心をひかれることを、こゝに懺悔するとのべて、六首の歌を間にはさんで便りを好親に届けている。常悦五十一才、好親四十才の時である。

この年の春常悦とともに京に滞在していた悦阿は、国元の事情で帰り、やがて横田の安楽寺の住職となっている。離京にあたって常悦をはじめ仏道修業の師僧たちとの別れの感懐を歌と文とによって書き留めたものが好親の文箱の中にある。この時先の常悦の便りも託されたのかも知れない。

宝暦七年五月廿五日、好親は横田の蔵屋の医師杠氏（和田）を伴って掛合へいき、廿六日松笠の滝に遊んだ。その時の歌に

しら雲もふもとにや見むはるかなる　峰より落つる滝のしらなみ

そしてなくなった清水氏をとむらい、廿七日帰ろうとしたところ、杠氏は病家にとどめられたので、好親はひとり日暮れて帰った。

七月廿日ごろ悦阿ははじめて大馬木の絲原邸を訪問した。絲原好親とは和歌の道に志し深き仲であって、語り合っている友であるが、俄になつかしさがつのって来たので、横田の草庵を出でて絲原氏の館をたずね、夜と昼となく語り合っているうちに、一日、二日もすぎたので帰ろうと思ったが、歌の道のまことの友と思うと離れがたい心地がして、館の前の松に契る思いして七月二十二日腰折れ一首をしるすとして、

悦　阿

幾千代もなほこそとはめこのやどの　みきりの松のことの葉の友

と書き残している。

宝暦八年は杠元長の六十一の賀を祝って好親は歌を送り、そのかえし歌が届いている。一方好親の四十二の賀を祝って、元長、悦阿より歌が届けられている。次の歌は悦阿の祝歌への好親のかえし歌である。

悦阿上人へ

月花をいく世もみよとことの葉の　露の恵みのかかるうれしさ

二月廿四日有沢弐通は安楽寺に悦阿をたずねて来た。弐通は有沢家の五代で、松平直政以来仕える武家で、明和三年家老となり、それからは代々家老として二千五百石を食んだ名家である。

松平不昧が茶に志した時はその師匠であったが、大成した不昧の下ではその門下となり、以来代々続いて不昧流の宗家として現在にまで至っている。横田町に来たのはこの家老になる八年前で、その後十五年を経た安永五年になくなっているが、年令はあきらかでない。歌人でもあった。来訪をうけた悦阿がうれしさの余り二首詠じたところ、弐通は一首かえしている。それから弐通は絲原邸を訪問した。

おそれかしこみて好親は

あさぢ原わけこし君が光には　民のくさはや色まさるらん

三月十二日には好親が安楽寺に悦阿をたずね、桜の花をめでて

鐘の音も匂へるばかり咲く花は、うき世の外のいろかとや見む。

十月には横田町の安清が罪あって戸を閉ざし、謹慎しているのをなぐさめる歌を贈り、重ねて歌を届けて励ましている。どのような事件があったのか、諸古記録にもなくて不明であるが、人のためという詞のあることから、村役人としての立場上の犠牲にでもなったのであろうか。

順調な好親にも悲しみもあった。十月には五才の娘をなくし悦阿からなぐさめの歌を贈られている。

宝暦九年に入ると杠元長六十一の賀を祝った歌を贈っている。二月に台翁という和尚が、好親から竹画をたのまれているが、気分ものらず来月は上京せねばならぬので、しばらく待ってほしいと便りをよせている。この春再び安楽寺を訪れて桜の花をめでて歌を残し、報恩寺にも至りそこの桜の花にも一首を残している。

この年の終りごろの歌に台翁の竹画を歌ったものがのっているから、竹画はあとから届いたものと思われる。

安楽寺の悦阿は好親から後撰集をかりて、古の先達の歌を読んでいると、その歌の味わいはいよいよ尊く有難いと、歌を届けている。好親はこれにこたえる歌をつくっている。

この年庭前に松を植えたが、見事なものであったらしく、悦阿をはじめ数人が歌を贈って来ている。

悦阿はさらに拾遺和歌集も借りて、味わいの深さを歌で好親に感謝している。好親の返し歌もある。

宝暦十年二月付の上京中の台翁の手紙によれば、前の年十一月好親から香茸を届けられうれしかったことを、年頭の挨拶とともに述べている。好親の配慮もあったであろうか杠元房（元長の子）は京都で医道の修業中であったが、台翁は元房が熱心に修業しているから安心されたいとも認めている。また常悦は仏道は修めているようだが、歌はよまないので、出会う機会がない。近年のうちに上京されるのを待つ云々ともある。

宝暦八年からは俊玄との交渉がないが、合翁との交際が深まっている。

残されている書簡や歌文のいくつかを綴りあわせて書いているが、このように好親の風流も

俳句

春泥を気にとめ試歩の杖　浅野　としお
咳ぐすり瓶にのこして月曜日　糸原　古志
上間いっぱい春泥を来し靴々下駄　岡田　蹊花
裸婦像の吹雪の中にみじろがす　岡田　麗水
憩う間を不意にしぐれて雛の市　小川　あきお
父祖よりの梅のほつほつと道祖神　恩田　魚跡
佇ち止りせせらぐ音に春を聞く　門脇　花子
島覆う雪に鴉が声吸わる　柏木　侑
春寒の灯明絶やさぬ喪にこもる　加納　信子
雪解もや呼び交う隣り仲間　高木　白虹
平和祈る数万の集い粉雪舞う　田辺　竹野
日溜へ手招きよせて立話　中田　巣鶴
絵馬ならぬ紙雛かかる梁古りし　中澤　斐水
寒林を抜ければ怒濤岩を嚙む　新出谷　一華
ふくらみし布団に四温の陽の匂い　錦織　富江
牛舎出し歩を春泥にさらしゆく　藤原　樵夫

早春譜

痛むともなき麻酔のあとのこころよき刻の間ありて手術　常盤　はるまさ
おわりぬ
はらはらと桜の花びら散れるがに淡雪舞ひつゝ川面に消ゆる　野村　節子
七年の別離の日々よしみじみと明日座る息の椅子を拭く　真綿　ひろ子
なり
いつになく冷たかりけり娘の腕のいたむ傷あと思ふ霜の朝　畑　八重子
節くれし夫の手に触れ鉄路守り家族守りたる幾年思ふ　景山　悦子
友の葬り送り火燃ゆる雪のなか在りし日偲び寒空仰ぐ　渡辺　観翠
靄深む高原の路に交差する長距離のバス黄砂のせゐつ　宮廻　愛子
共々に酒くみあひて語りたる今なお消えぬ友の面影　目黒　成生
彼岸には筒一杯の猫柳手向けしものを川べりに佇つ　永井　弥生
画面より硝煙匂ふ心地してドラマ二百三高地の突撃を視る　伊藤　萩雨
追憶は儚きものか早春の伊良湖岬に捨てしわが恋　安部　夕波
（旅の日に）

人情もこまやかで、村の人々との友情も深いものがあったようである。

宝暦十年は菩提寺妙綱寺住職の四十二の賀の祝があっている。悦阿は歌をさらに深めたいと好観から前記の二冊の和歌集を再び借りている。

常悦はこの年松江に帰って来た。百忍庵常悦としての便りが届いている。病を得て帰ったのか服薬養生をしている。この年は土用以来不作でもあったらしい。この間は遠路大雨の中をたずねて頂き、毎度のことながらお土産を頂き感謝のほかはない。

朋友も次第に遠く去っているこのごろであるのに、隠居以来十年の間、たえず御懇情を頂いて、有難さ身にしみている。堂上派の御歌会の写しも頂き感謝すると書かれている。

沙門常悦とした便りには、禅の修業を続けている。一度お会いして海山御礼も申上げたい気がしている。京都の勝部四郎左衛門作の筆を二対を届けるとある。

その後好観の来訪うけたとみえて、世を捨てた私の草庵を来訪される変らぬ懇情に

ことの葉の友なればこそすてし身も　とはるる道のまことをぞおもふ

ことの葉の友なればこそすてはてし　身をもとはるるめぐみをぞ思う

と感謝している。

このほか安来の吉田芳章からの歌など多いが、今後の探索にゆずる。

好観の風雅の道の一面を綴ったのであるが、家業に対しては勤倹力行につとめ、次代の四郎左衛門の発展の基礎を固めている。こうした好観の影響は、四郎左衛門やその弟、分家堀の内にも大きく、和歌から連歌、そして俳諧へと発展し、それぞれ以文、徐行、石明と称して、芭蕉門の美濃派と直接に結ばれ、往来がはげしくなっていくのである。こうした流れは、美術工芸品の上にも、諸調度品にも影響をあらわしている。

宝暦十四年の宮中御当座御会始の歌の写しが残っているが、その年好観は四十八才で、生涯を閉じた。嗣子四郎左衛門は十三才、分家の補佐によって、鉄業も一段と盛んにし、安永六年には二十六才で鉄師頭取となった。父に似て風流の道もまた多彩であった。これはまた稿をあらためて連載することにしている。

好観におくれること十二年、常悦は七十才でなくなった。好観なきあとの常悦の孤独は一入であったであろう。悦阿の死はそれからさらに五年後の天明元年で、安楽寺本堂の再興を果してこの世を去っている。（完）

（筆者　横田史談会員　高橋一郎）

おわび

三月末は編集者の公私ともの多忙と印刷所の多忙とで、発行以来はじめて、第一土曜日発行ができず延引を致しました。印刷費の値上りなどにより、とかく収支が不安定でもありましたので、こゝで四・五月合併号とし六頁建で、収支を楽にさせて頂きました。六月からは旧に復し努力を続けます。御賢察の程よろしくお願いします。

会員配布合併号につき二百円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第74号
6月号
昭和56. 6. 6
奥出雲編集集団

現代への五〇年史　2

「横田の茶道」　前史編㊤

―歴史的風土論③―

茶道は華道に続いて連載予定であったが、急に茶道の前史編を載せることにした。

それは現在**絲原記念館**に展示されている軸物・茶道具と、昨秋全館から発刊された図録「湯之廻餘彩」をこの前史編によって、もう一度見なおして頂きたいし、今後も展示される茶道関係のものを見る眼をこやして頂きたいためである。

茶道史を即物的に理解できる記念館を大いに利用させて頂きたい。

緑茶(煎茶・抹茶)と紅茶は同じである。生産の過程で醗酵させるのが紅茶で、させないのが緑茶である。それは紅茶文化圏をつくったイギリスと、緑茶文化圏をつくった日本との、風土と経済と技術の違いである。

しかし今日は紅茶と、茶ではないが、カカオの実でつくられたコーヒーに、緑茶がとってかわられる勢である。経済の向上、嗜好の変化、インスタント性の増大のしからしめるところであろうか。

さて茶道―茶の湯は抹茶(濃茶・薄茶)であって、相当に儀礼化も進んではいるが「煎茶」ではない。

茶の渡来

本家はいうまでもなく中国である。唐の時代(618～907)にすでに茶をのむことが流行し、「茶経」という本がある。それは「団茶」というので、茶の葉をむして茶臼に入れて搗き、団子のように丸く固めて保存する。持ち運びが便利で保存がきく。最近テレビで中国奥地を撮される中でも見たが、これを適当に削り上から熱湯をかけて、その汁を飲むのである。

これがわが国へ入ったのは、奈良時代に中国へ渡った遣唐使などによるとされている。聖武天皇の天平元年(727)の記録が最も古く、団茶である。僧最澄が延暦21年(802)中国へ渡り、数年後に茶の木の種をもって帰った。今日の坂本の茶園はこの時からのもので、日本最古という。このころは団茶を削らず、ほぐして煮だして生姜など甘味・香味を加えて飲んだという。それも貴族の間や僧侶・文人の間で、中国文化の模倣で茶を飲んで詩をつくったりした。遣唐使が廃止されると、漢文学が下火となり万葉以後かえりみられなかった。国文学が勃興すると喫茶趣味もとだえてしまった。

抹茶の渡来

平安時代末、宋との国交が280年振りに復活すると、第一に入宋したのが栄西禅師であった。備中の人で宗から、六世紀ごろ菩提達磨がはじめた禅宗を学んで臨済宗をわが国にもちかえり茶の実も持ち帰った。その時の茶園は九州平戸に今も残っている。

この時の茶の飲み方は唐代の団茶や、明代の煎茶と違う抹茶であった。精選された茶の葉を粉末にしてすべて飲用するから、栄養的にも効果が多い。栄西は中国滞在中に、点て方・飲み方もならって帰った。「喫茶養生記」は抹茶の功徳を栄西が書いたものである。

茶を点て仏前に供養しそれを飲みあった。それを「御仏供」と言い「分・仏供茶(釜)」となり、「分福茶釜」の呼称が生れたという。くめどもつきぬ施茶用の茶釜であったという。

・**絲原記念館**の定家の「明月記」断簡は、茶室用の茶掛となっているが、その日記の一節に日本に抹茶を初めて伝えた栄西禅師のことが書かれているが、定家流のちの二条流の和歌をたしなみ、また茶道にも打ち込んだ絲原家にまことにふさわしいものである。

鎌倉時代の喫茶

栄西について禅を学び、華厳宗を復興した明恵は、座禅修業の睡魔よけに抹茶をすゝめたので、行道の資としてひろまった。

曹洞宗を伝えた道元は、仏に茶を供えて残りを参列の僧侶・大衆が飲むことを、一つの儀式化したので、作法が生れてきた。道元も栄西に師事している。

南北朝時代の斗茶

斗茶が一種の遊技として中国から入って来た。斗茶を行うところを会所といった。客は一階のあけ放たれた客殿で食事をよばれ、食後庭に下りて銀閣寺のような廻遊式庭園を逍遥する。その間、亭主は斗茶の準備をし二階の喫茶亭に客を迎える。まず茶碗を正面の仏画の前に供え、次に抹茶を入れた茶碗がくばられ、給仕が熱湯を入れた瓶と茶筅を持ち出し、客が差し出す茶碗に湯を入れ、茶筅でかきまぜる。一同が第一回飲み終ると新しい茶碗によって同様に茶がすすめられ、何種かの茶を飲み、その本非を当てる。栂尾でとれたものが本茶で、そのほかの産地でとれたものを非茶とした。その当てた得点で贈物が配られた。

「横田の茶道」前史編㊤　和歌・俳句　横田銘草木集(8)

公家・武家などで盛んに行われ、中でも近江国の守護大名佐々木道誉が度々催した斗茶会は、すこぶる豪華であったという。

道誉は近江源氏佐々木氏で、佐々木氏は近江北半国をもつ佐々木京極氏と、南半国をもつ佐々木六角氏とに分れ、道誉は高氏ともいゝ、佐々木京極氏の三代で、その孫は明徳の乱後、山名満幸にかわって出雲守護となった高詮である。その弟高久は尼子庄に住んで尼子氏と称し、その曽孫が尼子経久である。

斗茶会では、茶器は中国渡来の唐物を用いた。茶入はもとは南支那産の薬味や醤油を入れる容器であったが、茶器にとり入れられた。道誉は多数の茶器をもっていた。茶室に掛ける唐絵も、仏画から山水・花鳥の絵にかわった。そして銅器の花入・香合で飾られた座敷で斗茶会が行われた。やがて立花（たてばな）がはじまり、今日の華道のはじまりとなった。

これが一般社会にも広まり、寺の門前で抹茶を立ち売りする者もあらわれた。しかし上茶ではなく、茶筅で泡をたててもすぐに消えるので「その早きこと雲脚（くもあし）のごとし」といゝ、そんな茶を雲脚（うんきゃく）といった。

茶儀の制定

佐々木道誉が康安元年（1361）12月、南朝方の軍勢に攻められ都から退去する時、自宅の座敷に茶道具一式を並べ酒肴をととのえ、給仕人までとどめておいて寄せ手の将士がすぐに斗茶ができるようにしておいたという。その時の道具の飾り方を「書院の七所飾（ななしょかざり）」といって、茶の作法の基本になったという。

しかし基本はもっと古く、鎌倉中期、信州の小笠原貞宗が（清和源氏で稲田土居安部氏の遠祖）道元から禅寺の日常茶飯の作法をならい、それを武家の礼法にこゝろみ、一応完成したのが室町初期の北山時代である。これが小笠原礼法の起りである。武家中心であるから、禅宗の茶の作法とはだいぶんちがっている。作法上の小笠原流はこゝに発している。

中世文化と同朋衆

同朋衆とは将軍に近侍して雑務に当った一群の法体者（出家者）たちのことをいゝ、必ず阿弥号をもっていた。

茶道の系譜にみえる能阿弥・芸阿弥・相阿弥はそれであり、のち茶の湯を大成した千利休の祖父は、将軍足利義政の同朋衆であった千阿弥と伝えている。

この同朋衆の原像は鎌倉最末期から南北朝期にかけて、武将に同道した時宗の僧、いわゆる従軍僧に求められる一遍上人にはじまる時宗の僧―当時時衆というーが武将に従ったのは、最後にあたり十念（念仏十回唱える）を授けて菩提を弔い、死体の処理にもあたり、合戦のあとの戦傷者の治療にもあたった。こうした時衆従軍僧は、鎌倉幕府軍が楠正成を千早城に攻めた時二百人もいたという記録がある。また「奥出雲」（34号岩屋寺物語）で記した明徳の乱で、家喜九郎景政に最後まで付いた時衆がいて、その妻に遺品を届け遺言を伝えた上、最後の有様を語って聞かせている。この妻の子のあとが、岩屋寺中興僧快円であることもふれておいた。

こうした同朋衆の他に、同朋衆ではないが阿弥号をもつ一群の芸能者がいて、それらが将軍の文芸活動の一端をになっていたのである。「道々ノ上手者」といわれた人で、将軍・武家がパトロン（後援者）となることで形成された。武家文化の著しい特徴といってよいものである。

同朋衆でない芸能者に阿弥号がつけられた背景には、鎌倉末期以降、時衆で芸能に秀でたものが少なくなかったということをしめすともいう。将軍足利義持・義教・義政の時代が最も充実した同朋衆がいたという。（信長、秀吉の時代にもいたが）

三代三阿弥

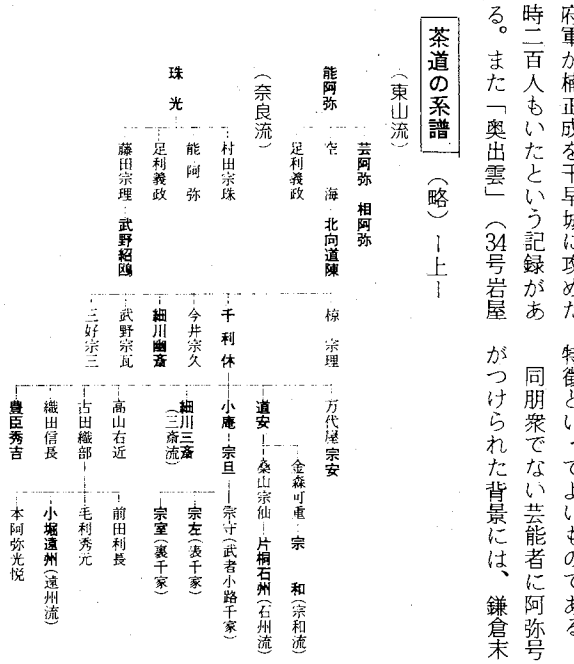
数多い中で後世に名を残したのは、毎阿弥（?～1436ころ）、能阿弥（1397?～1401）、芸阿弥（1431～1455）および相阿弥（?～1525）の四代で、もと越前朝倉氏の家臣であったというが、素性は明らかでない。

前記足利三代の時代に活躍している。

毎阿弥の築いた土台の上にその子能阿弥以下が三代三阿弥として活躍し、殿中の座敷飾を唐絵唐物でする役「唐物奉行」といった。三阿弥は職掌上絵画をよくし、「天下の名人」＝能阿弥、「国工」「国手」といわれたのは芸阿弥や相阿弥である。義政の命で相阿弥は似絵（肖像画）をはじめた。

記念館に現在、伝相阿弥作の「霊昭女」の絵が展示中。相阿弥は茶道にも通じていた。唐物では、展示中のものに「堆朱希袋香合」「唐物青貝楼閣

茶道の系譜（略）―上―



人物中央卓」があり、図録には前者と「建盞天目茶碗—附唐物天目台」がある。

千阿弥と立阿弥

千阿弥は茶に、立阿弥は花（立花）に関係が深かった。千阿弥が千利休の祖父であるといわれる（異説もある）。この二人は同時代の人で、芸阿弥の後半から相阿弥の前半（将軍義政の末期から義尚・義植の時代）に活躍した。

室町時代の文化、ことに京都を中心に形成された武家文化を考える場合、こうした一群の同朋衆の役割を無視できないこと、武家社会を母胎として発展した書院茶の湯は、この同朋衆をぬきにしては考えられないという。

書院の台子飾

記念館の昨年展示で、美術工芸棟二階書院の間の左側にあったもの。

室町時代の中期足利六代将軍義教の同朋衆の能阿弥が、先の道誉の「書院の七所飾」を参考にして、「書院の台子飾」を制定した。台子というのは、茶道の点前に用いる棚であるが、元来は禅寺の茶礼に使用していた道具で、南浦紹明が中国の径山寺から持ち帰ったもので、築前の崇福寺を経て京都の大徳寺に伝わり、足利尊氏の時にその命により夢想国師が使用して茶を点てたと伝えられている。能阿弥はもとは禅寺のものである台子を書院に飾り、武家の茶礼を行ったのである。

能阿弥は義教の死後八代義政の同朋となり、足利家に伝わる唐物の美術品の中から、優秀なものを選び「東山御物」と名づけた。今日に伝わるものである。

能阿弥が制定した書院飾や台子飾の法式は、義政の時代に一応完成したといわれる。そして茶器の扱い方、道具と道具とを飾り合わせる寸法も定められ、茶を点てる法式も能阿弥が小笠原流の礼法を参酌して、今日伝えられるような茶の点て方を考案した。また点茶の際の所作、特に道具を運ぶ時の歩き方などは、能の仕舞の足どりをとり入れている。服装もその職・地位によるもので招待されるようにした。

大徳寺

京都にある臨済宗大徳寺派大本山、茶道の中心ともなった寺で、応仁文明の乱後一休和尚が堺の豪商の援助で再興、千利休も参禅して茶道を完成した。国宝唐門は秀吉が大茶会を催した聚落第の遺構、一休の旧居、武野紹鷗の茶室、国宝井戸茶碗（銘喜左ヱ門）ほか国宝が多く、茶人の千利休、小堀遠州、細川三斎夫妻、小早川隆景等の墓もある。

記念館に現在展示中のものでは、幕末の大徳寺の僧大綱筆の懐紙「花下送日」があり、大綱銘「松」（箱書も）の楽旦入作の縁紬筒茶碗（楽家十代で、50才ころ剃髪紀州公の和歌山西浜御殿に窯をかまえた）がある。くわしくは図録を。前回展示され図録にあるものでは、大徳寺沢庵、大徳寺宙宝の書がある。

茶道の成立

中国に発生した団茶法はもとより抹茶法も中国では廃れてしまい、なぜ日本で発展したかということである。茶のエキスを飲むことからいえば、抹茶より煎茶法が技術的には進んでおり、簡単であるからこれにとってかわられるべきものであるが。

やはり前述のように十四世紀から十五世紀にかけて、書院座敷が現われ、床の間が唐絵や唐物を鑑賞するにふさわしい生活空間として案出されたものであるように、椅子による唐風茶礼から、畳に坐る倭風茶礼への移行がはじまり、わが国独自のものに発展したと考えられる。そしてわが国の似絵の発達、立花の発生、仏具である台子による飾り、やがて草庵の出現によって、日本独自の風土に密着したわび茶へと完成したと思われる。

村田珠光（1433〜1502）

義政のころ僧となったが、若いころから茶を好み、奈良流の斗茶の遊びにふけり、寺の仕事を怠ったので追われ、諸国を放浪したあげく京都の大徳寺の真珠庵に入って、一休禅師について参禅修業を重ねて重用された。

しかし珠光は修業中仏法などとことさららしくいっても、結局日常茶飯の茶湯の所作に見いだされると悟った。つまり茶禅一味の境地を見いだしたのである。茶湯とは禅宗の禽茶禽湯のことで禽の字をとったものであり、これが茶の湯と変る。仏に供えた茶と同じものを飲むことによって、仏と自分が一つになることを願う、即ち一味同心である。相談ごとがきまると一同茶を飲む。共に茶を飲んだのだから、今決められたことに違反しないようにしようという誓いともなる。そして動作の中に思想をもりこもうとしたのである。

茶儀の形式よりも学び行う者の心に重きを置いた。我執をいましめ、へりくだった茶人の心を要求し、藁ぶきの小座敷で外観でなく、客に対する亭主の心づくしを強調した。こうした立場で茶室や茶道具を改革した。

能阿弥の台子飾のある広い書院座敷は心の落着きがないと、座敷を四畳半に区切った（方丈である）。やがて草庵を結んだが完成せずして没した。しかし、象牙の茶杓を竹とし、唐銅の花入れを竹にかえたりして、わびの茶道へ一歩進めた。この理想もうち続く戦乱で一頓座し、平和を、風流を愛する人は京都を離れ、平和な自治制の町・貿易港の泉州の堺へと移った。

武野紹鷗

この人も京を去って堺へ移住した茶人の一人であった。若狭国守護武田氏の後裔に生れた。祖父が応仁の乱に戦没後、父は流浪し堺で武具用の皮産業を営

お願い 世話人の方の御意見もあり一部百五十円にさせて頂きました。史談会費は当分据置きでまかないます。

さつき集

栄達は更に望まぬわれながら期日迫れる報告まとむ　常盤　はるまさ
生涯にまみえぬ土地と知りつゝも黄砂訪ふごと遥か望めり　真綿　博子
転作の作付計画ならぬまにスイートコンの種子数多来ぬ　野村　節子
畑を広く主婦は野の火を燃やしつつ大き煙の輪を拡げたり　渡辺　観翠
遠き日の嫁入りましし み仏の年忌の塔婆百五十年　畑　八重子
孫守りて牛を飼ひつつ暮さんと定年の夫に我も従ふ　景山　節子
自らを戒めつつも繰りかえす過ち多し老化の吾は　目黒　成生
廃屋となりて三年庭に咲く水仙の花今盛りなり　佐藤　喜代子
巧みにも商談の間に庭をほめ牛買人の牛連れ行きぬ　宮廻　愛子
姑に似し嫗の煎餅購ひてぽたんの島の夕風を見つ　永井　弥生
たしかなる手応へありて大いなる岩魚はおどるわが釣竿に　伊藤　萩雨
山峡に燈し火ひとつ月おぼろ若葉は匂ふ夜汽車の窓に　安部　夕波

俳句

唐獅子の阿吽に対す若葉雨　浅野　としお
園児たち大手をひろげ竹落葉　糸原　古志
苔の碑文つぶれ藤房垂れ届く　岡田　蹊花
どの路を行くも嶮しや落椿　岡田　麗水
刻々と伽藍の新樹霧に溶け　小川　あきお
詩に渇れて師の碑をなぞるぽたん咲く　柏木　侑
筍に木芽香を添え客を待つ　門脇　花子
初わらび親しさ分つ両隣り　加納　信子
護摩堂のみ佛くらし走り梅雨　高木　白虹
よわい重ねなお学ぶこと多き春　田辺　竹野
五月晴湖上の漁舟動かざり　中田　巣鶴
御詠歌に法灯暗き花卯つ木　中澤　斐水
芽吹くものみな芽吹きけり土手温し　新出谷　一華
越えて来し運命の道や夕牡丹　錦織　富江
葉桜や別れとありて写つさるる　藤原　樵夫

横田銘草木集(8)

丸山　巌

ヒメザゼンソウ（姫坐禅草）

Symplocarpus nipponicus Makino

早春三井野では残雪目立つ山足や路傍に、枯草や黒ぼくを破って芽を出す。葉のひろがりがウバユリそっくりである。しかし天籍はコンニャクやミズバショウなどと同じいサトイモ科である。ザゼンソウに似て諸徴小柄であるところからヒメザゼンソウの名ができた。しかしこの珍物もザゼンソウと混同されて約20年も陽の目を見ず、1928年やっと栃木県のものから新種として籍が独立した。北海道・東北・北陸・朝鮮にかけて点々と分布する。中国地方でも田代線上の湿地に見られる。このヒメザゼンソウの生態については、1933年三井野のものについてその詳細を私が発表した。三井野では早春葉と共に花を見せる株も多いが、大部分の花は有柄赤褐色の仏炎苞を持って夏の無葉期に次々と出す。5月には葉も花も前年の果実も前々年種子の発芽も見られて面白い。

み一代で産をなした。紹鷗は若いころから歌道に志し、上洛して三条西実隆（奥出雲71号に）に師事し歌道の奥儀を究め、村田珠光の流れをつぐ茶人に茶の湯を学んだ。実隆から歌道の極意ともいうべき藤原定家の「詠歌大概之序」の講義を聞いて茶道の極意を悟り、享禄五年（1532）31才の時堺に帰ると剃髪し、紹鷗と号し茶の湯に専念した。晩年は京に出て茶室を建て、珠光が理想としたわび草庵の茶の湯を完成させた。

茶道の佗びとは足らざることに満足し、慎しみ深く行動することを説いている。紹鷗は百姓家を模したわら屋根の四畳半にいろりを切って茶室とし、信楽や瀬戸、備前で焼いたものや、日用品として焼かれた雑器の中から水指や茶入、茶碗を選んで道具として使った。貴族趣味の遊び、社交的儀礼の一つであったものを、わびという精神をもつ道に成長させ、茶道といわれるようにした。

千利休

紹鷗の弟子である。大永二年（1522）堺で生れた。祖父田中千阿弥は足利義政の同朋をつとめていた。父は堺に移り魚問屋となり納屋衆となった。堺は自治都市であったので、納屋衆が政治・経済などを統轄していた。

利休は幼いころから茶道を好み、能阿弥の流れをくむ北向道陳について書院の茶の湯をならったが、その紹介で紹鷗に師事し、一方大徳寺の笑嶺和尚に参禅し名を宗易と改め、姓も祖父の千阿弥の千をとって千と名のった。紹鷗がなくなるまでの十五年間師事し、その間大徳寺の参禅を続け、各地を歴訪して窯元などを訪ねて、新しい茶器の創案をねった。（この項続く）

記念館展示中のもので、「利休瀬戸茶入」は、利休が指導して焼かせたもので、利休の長男・道安の孫弟子金森宗和の銘がある。（解説は図録に）図録には、利休の孫宗旦の時代の作品「宗長棗（なつめ）」があり、宗旦作の茶杓「小ヒサ」、利休が女婿宗安に送った手紙の茶軸ものっている。また利休と結縁深く楽焼茶碗を完成した楽家初代長次郎作黒楽茶碗「常盤」ものっている。

（訂正）前号(7)の2行目のマルバマンサクは**アテツマンサク**に。

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第75号
7月号
昭和56. 7. 4
奥出雲編集集団

横田に影響を与えた人①

井上栄太郎（上）

――学校教育の確立者

西田千太郎とは同期生

「七日（快晴）　ヘルン氏、井上栄氏来訪」

（西田は井上栄太郎を井上、井上栄、井上英とかいている）

は、「西田千太郎日記」の明治24年1月7日（木曜）のところである。西田は21年に母校松江中学校の教頭に迎えられ、23年8月30日にはラフカディオ・ハーンを英語教師として迎え、ハーンの活躍に積極的援助を惜しまず、その年の暮には小泉節子との間をとりもち、結婚によってハーンの日本永住の決意を固めさせた人である。

この日記の一節は、井上栄太郎が23年10月横田村尋常小学校にふたたび赴任し、訓導兼校長として在職中の冬休みの間のことである。この日記からは井上とハーンとの交渉はうかがい知ることはできないが、井上と西田の生ひ立ちと同級生であった深い関係からすると、いろいろの憶測も可能である。西田の日記に記載されている井上との交渉を、井上の履歴と重ねあわせてみると、井上の転機には必ず西田を訪れているから、級友とし、また才器あふれ世話好きでもあった西田の助言を、うけるためであったことは十分にうかがうことができる。

生ひたち

ともに松江市雑賀町の生れで家は代々の松江藩士であった。雑賀町出身者では少し後輩に、岸清一・若槻礼次郎がいたが、いずれも下級武士で足軽階級が多かった。大先輩には培塾を開いた沢野修輔、その門人でのち共進学舎を興した尾原惣八・進取学館を興した渡部寛一郎がいた。西田も井上も若槻も岸もこれらのどこかで学んでいる。一方茶町には相長舎を早くから興し、北尾次郎（数学者）梅謙次郎（法学者）らを育て、のちには一時松江中学・師範学校の教壇にも立ち、岸・若槻らを教え退職後も続いて長らく塾を営んだ、商家（油屋）出身の内村鱸香がいた。雑賀町は明治初、中期に多くの逸材を輩出している。

中学校卒業から教師へ

井上は生れは西田より一年おくれた文久3年（1863）で、明治5年川津小学校に入学、10年上等高等科を卒業し、11年松江中学校に入学した。12年には二人とも二科（英語科で英語を主とするもの）の甲組（19名）で肩をならべた。（二科の修学者は生徒総数の2/3をしめ、教員も12名中4名が英語教師であった）

9月の試験では群を抜いて首席であった西田は別として、次のグループに井上は位置し、その中で試験毎に順位を上げ、13年2月下等を卒業し初等中学科に進んだ。その年の9月成績抜群の西田は退学し授業手伝いとなったが、井上はとどまった。14年学制が変り、四年の初等中学科（それまでは三年制）とその上に二年制の高等中学年が置かれることになった。この年の1月16日白潟天神境内の鳴玉楼において、第一回の松江青年親睦会が開かれ、西田も井上も参加した。120名が参加しすこぶる盛会であった。

15年7月第三回の卒業生（四年制初等中学）3名が巣立った。その中に井上がいた（第一回以来で計8名）。10月公立西尾小学校教員となり、試験をうけて小学校高等科教員免許状をとり、17年1月より川津小学校に勤務し、仝年4月より知井宮村の私立山本小学校教員となり、18年8月よりは請われて島根県第二中学校雇員として教壇に立った。この間中等科教員免許状をとり、19年6月横田村尋常小学校教員として（24才）赴任して来た。20年9月三成村尋常小学校訓導兼校長に任ぜられたが21年3月願により退職し、松江の私立三州学校教員に転じた。

このころ培塾において沢野修輔について漢文字を学んだ。10月には英語科免許状をとり、三州学校専修科英語科教授もかねた。12月からは私立進取学館教員となり、23年10月ふたたび横田村尋常小学校校長兼訓導として来任し、翌年三成村高等小学校訓導を兼任した。その年8月4日依願退職し、10月からかって勤めた私立山本尋常小学校教員となった。

松江中学校と各種私塾

各種の私塾は別表のような目的によって設立され、士族・庶民ともに自由に入れたが、松江中学校は士族の子弟学校の感があり、第一回の明治12年から19年までの卒業生47人のうちで、35人は松江出身、29人が士族出身で、この時期は特に松江藩の士族学校の性格が強かった。士族も下級士族が多く、身分格式を維持するためにはの感も強かった。しかし廃藩時にうけた一時俸録のまとまった金も、武士の商法で失うもの、預金をすら

れて失うものも多かった。そのための中退者も多かった。また学制が確立していない時代であったことと、実力があれば編入が容易であった時代であったことも中退者を多くした。西田も若槻もそうであった。

この間の事情を知っていた俊才教師井上は、横田において前途有為の少年の進路指導に十分に生かしたのである。

（井上来任前の幕末からの寺小屋教育の名指導者三沢震道律師とその子と孫については続篇において予定している）

（創立・復興）	（塾　名）	（塾　主）	（目　的）	（廃止・合併年）
明治 7年	相長舎	（内村鑑香）	庶民教育振興を提唱	20
9・3月	県立松江中学		当初は士族の子弟学校色強い	
15・7	培塾（復興）	（沢野修輔）	漢文字	36
16	普通学舎	（渡部寛一郎）		21 進取学館
17	共進学舎	（尾原惣八）	関流算法（数学）を中心として	25
19・6	三州学校	（石原光彰）	中学校入学のための文理農法の各科	23. 修道館 29（私立中学となる）40

最初に影響をうけた少年たち

話は明治18年にかえる。西田は松江中学校を退職し、一年間留学のため上京した。19年元旦には井上に賀状を出している。夏休みの8月15日には、鳴玉楼において第2回の青年懇談会が開かれ、西田も井上（横田小学校勤務時代）とともに参加している。11名集った。

翌20年元旦にも西田は井上に賀状を出している。その数は極めて近い友人その他である。この年の4月、横田小学校高級試験に合格し修了した岡崎喜一郎は、青年教師井上の影響を強くうけ、（生存中筆者が直接聞いたことを、家族の話によって確認）松江の三州学校へ入った。

後を追って妹尾勇吉（奥出雲22号参照）は相長舎へ入った。岡崎の在学中、井上は21年3月その三州学校の教員となった。向学心に燃えていた井上が、自らの勉学のためを考えたり、家庭のことも考えたりしたことからであろう。西田そのほかの者のように笈を負うて上京する道をとらず、試験検定をめざしていたようで、その後矢つぎ早やに各種の試験をうけて資格を取得していることが、それを裏付けている。その7月岡崎は学校での教育内容が、かって井上から横田で指導をうけた程度とあまり変らないのに不満を感じ退学帰郷した。

8月西田は27才で母校松江中学校の教頭として混乱していた学校再建の重責を負わされ、県外から迎えられた。10月には井上は英語科免許状をとり、三州学校の専修科の英語科教員も兼ね、さらに進取学館の教員ともなった。翌22年岡崎は井上を慕ってふたたび出松し、進取学館へ入学し一年在学して、23年倉吉農学校へ入学した。札幌・駒場などとならんで、中国地方における唯一の地主層子弟の農学教授のための学校であった。ここで岡崎は津山市の太田清三郎を学友として知り、キリスト教へ関心をもつことになり、本人にとってはもとより横田にとっても一転機をもたらすことになった。太田との交りは終世続くことになる。岡崎が進取学館に入ったころ、妹尾は共進学舎に移った。

（稿を改めて岡山県津山市と高梁市と横田との深い奇縁を綴る予定にしている）

井上の再度そして三度の来任

岡崎が倉吉農学校へ入学した23年9月ハーンが松江中学校へ赴任して来た。その翌月井上は28才で、横田村尋常小学校長兼訓導として二度目の来任をした。

その年が暮れ、年があけた正月が冒頭の日記の部分となる。英語も得意であった井上が、西田と親交があったから、ハーンと何らかの交渉があったとしても不思議はないが、現在までのところ資料不足で推定もできない。5月には三成村高等小学校長を兼任した。6月島根日報記者として藤原銀次郎（のち王子製紙の創立者）が来松した。（その夫人は結婚前の当時は横田小学校教員であった）。横田に来任一年にも満たない8月4日願によって退職し、私立山本小学校教員に再び就任した。その赴任の前に井上は西田宅を訪れている。校長から私立小学校の教員へ、何か期するところがあったのであろう。推測を出ないが新しい時代に適応するための資格向上を願う向学心のため、その翌年新制度の小学校教員免許状を得ている。そして三度、30年4月（35才）横田村尋常高等小学校訓導兼校長（六等級下級俸）として来任した。

〈別の記録によれば27年横田村教育費として金弐円を寄附し県知事から賞状をうけており、28年4月横田小学校に高等科が併設され、仝月29日その新設校の訓導兼校長と（八等級下級俸）なったとあるが、資料不足で明らかでない〉

これから10年余り横田に在勤し油の乗り切った充実した教育時代を築いた。教師陣も発剌とし、幾多の人材を輩出することになった。横田の教育の基礎が確立した。（次頁3段はじめへ）

現代への五〇年史　2

「横田の茶道」　前史編㊥

——歴史的風土論③——

金森宗和—1,584〜1,656（天正12〜明暦2）—の祖父長近は飛弾高山城主で千利休の門下で茶人としても知られ、その養子可重も城主で三万九千石を領し、千道安に師事しすぐれた茶人であった。この名家に生れた宗和は幼くして出藍の誉高く、父から学びのち上洛して茶事を専らとし、宗和流をひらき天皇、公卿衆に教え、将軍家光にも招かれた。大徳寺には彼の作になる茶室庭玉軒があるが、**絲原邸**の庭の南隅の茶室庭玉軒は、それを模したものといわれる。

（前号の略系譜中、武野紹鴎とその下の宗瓦を線で結ぶ）

千利休（続き）

天正六年織田信長に召されたが、本能寺の変後秀吉に仕へ三千石を与えられた。戦国以来落ちつかぬ庶民の心をしづめ、荒すさみ優雅さを失った武将たちの心をやわらげ、武士町民の融和に茶道を利用しようとしたから、このような高禄を与えたのであり、利休も協力した。

関白となった秀吉が聚落第に天皇の行幸を仰ぐころになると二人の間には溝ができた。利休はわびの深さをまし、反対に秀吉はそれから離れていった。利休が自ら竹を用いて道具をつくったのにくらべ、秀吉は黄金造りの茶室と茶道具をつくって得意となり、かえって利休をうるさく思った。それが頂点に達したのが天正十七年で、利休は私財を投じて大徳寺に楼閣を造った。寺ではそれに報いるため利休の僧体の木像を作りその楼閣の上に安置した。それが秀吉の耳に入り激怒を買い、木像を引き下して捨てさせた。ついで全十九年謀反ありとして秀吉は、利休に死を命じ利休は自刃し七十才の生涯を閉じた。

利休はわびの方向で茶器類も改革した。朝鮮から帰化した陶工に自分の創意による茶碗を焼かせた。これが前述の楽焼である。茶入などは瀬戸・備前などでつくらせ、日用雑器の中から茶碗、水指をみつけて使用した。

こうしたことが日本の陶芸や工芸の発達に大きい貢献をした。

利休の門人は、武将をはじめ各界に多い。

道安・小庵・宗旦

利休の先妻の子の**道安**は、九州の細川家に仕えた。—1,546〜1,607（天文15〜慶長12）紹安ともいう。父利休を感嘆させるほどの

（前頁より）

横田の進学者数は郡内十ケ村（温泉村も含む）のうち、他の九ケ村の総数と匹敵するほどになった。明治41年秋糸原善太郎校長に引きつがれ、大正11年までの約15年間の教育の発展期へと進み、昭和初頭には井上の教え子たちの子弟の進学者の数の急上昇をもたらし、旧制の中学校、高等学校、帝国大学への進学者数は郡内で横田のみといってよい程になっていくことになった。

みなづき集

伏字のまゝ禁断の書を読みつぎしふくらむ思ひ今も忘れず　常盤　はるまさ

幼日が耳鳴りのごとおそいくる飛騨の朝市お手玉の音　真綿　博子
（高山にて）

からたちの垣根の今も残る径久に通りぬ故郷に来て　野村　節子

しのびよる老の足音かみしめて日々を語らず妻と飯食む　目黒　成生

黄昏の闇に浮きたるシデコブシ沓き憶ひをひそとくすぐる　畑　八重子

桐の花落ちいし一つひろひ見る友の許へと通ひしこの径　渡辺　観翠

角折れて仔牛の眼血に染みぬ我はたじろぎ叫びもならず　景山　悦子

仁多奥の方言混へて薬やのわが家二代に置ぐすりする　宮廻　愛子

姑に似し媼の煎餅購ひてぼたんの島の夕凪を見つ　永井　弥生

たしかなる手応へありて大いなる岩魚はおどるわが釣竿に　伊藤　萩雨

五月晴谷の畑にひねもすを茶を摘みおればほとゝぎす鳴く　岡田　時子

紙漉ける若狭の村の夕丘に黄色く匂ふみつまたの花　安部　夕波
（旅にて）

しばぐり句会　六　月　抄

街の灯を遥かに置きて螢飛ぶ　浅野　としお

背に青葉まなこ開きて水不動　植田　美代子

夕茜（あかね）遠嶺しずかに宵を待つ　岡田　蹊花

斉（いっ）く地を大蟻一つさまよへり　岡田　麗水

青葉顔お女将の笑みに匂いける　小川　あきお

郭公を山々囲み谿深し　恩田　魚跡

青芝に座して野外の礼拝に　門脇　花子

碑（いしぶみ）の一字隠くるる青葉陰　加納　信子

肌脱（はだぬぎ）の農夫たくまぬ話しぶり　高木　白虹

若竹の皮脱ぎ捨てて親の丈（たけ）　中田　巣鶴

歯朶群生推古の水の滴れる　中澤　斐水

ほととぎす暁の眠りを鳴き破る　新出谷　一華

訪れし旧知親しく新茶汲（く）む　錦織　富江

柿若葉草葺き屋根の旧家たり　藤原　樵夫

白一色今朝の集や更衣　渡部　夕峰

奔放豪覇の茶風をもっていたという。父利休が自刃したのちは、飛弾に隠れすんだが、義弟の千少庵（宗淳）が千家再興を許されてからは、豊前の小倉藩主細川忠興（三斉）に招かれ、禄高三百石を扶持されたが、晩年は不遇であったという。ここから三齋流が発展する。

後妻の連れ子を養子とし、これを利休の娘とめあわせ跡をつがせたのが少庵である。—1,546～1,614（天文15～慶長19）宗淳ともいう。千家二代の宗匠で父利休の自刃ののちは、会津若松城主蒲生氏郷に庇護されたが、間もなく千家再興が許され、典雅で柔かな茶風を保ち、晩年は隠棲した。そこで跡をついだのがその子宗旦であった。大徳寺の春屋和尚のもとで禅の修業をしていた。宗旦を幼少から教育したの利休の後妻の宗恩で、まれにみる教養高い婦人であった。この祖母の指導で茶道全般を青年期にものにしていた。徳川家をはじめ地方の大名からも召しかゝえの招きがあったが、祖父の死から祖父の茶道の精神は庶民の間にあってこそ生かされるもので、ここに於てこそわびが深まると一切応じなかった。千家再興の重荷を負いながら、相当苦しい生活（こじき宗旦ともいわれる）をしたが、茶の心はますますわびに徹した。幼時に養われた禅の思想が加って、「茶禅一味」とまでいわれるほどになって、千家流茶道の確立者となった。町人、文化人、公卿の間に知己を多くもった。

宗旦には先妻と後妻との間にそれぞれ二人の子があり、三男宗左が表千家を、四男宗室が裏千家を名のった。住居の表と裏に住んだからである。次男宗守は住居が武者小路小川にあったので、武者小路千家となのった。

そこで利休の末裔は三千家となった。

江戸中期になると利休の門下から多くの流派が生れた。武将としては先にあげた者のほかに、高山右近、古田織部などがあって、三齋流、宗和流、石州流、遠州流、不昧流などが育った。

始祖はみな一国一城の主人である。近臣のものを相手に茶道をたしなんでいたのが、いつのまにか一流の始祖にされたのである。

これに対し、三千家を中心として生れた流派は、それに比べると庶民的なにおいの強いものであった。

横田銘草木集(9)

丸山　巌

ムラクモアザミ　叢雲薊

Cirsium Maruyamapum Kitamura

船通山を取まく山地の水清き溪流のほとりに咲く夏薊。春咲きのノアザミ大の頭花は明瞭に点頭して紫紅色。総苞外片は粘着し、羽状に中裂する葉にはやや白毛が多い。　この薊は、当初、三井野において水がかれ白毛の多い葉が面白くよれ曲る様からむら立つ浮雲を想い、かつ、おろち退治の神話を憶いそのかみの素尊・稲姫を偲びて、これに名づけるにムラクモアザミをもってする。東亜シナンテロロギーの第一人者北村四郎博士は、キルシウム・マルヤマタムのラテン学名を選んで、筆者の労をねぎらわれた。薊は俳句では春の季題になっているが、日本産70種ぐらいの大部分は秋咲きである。

覚え書

昭和21年、横田町青年会の企画で、「横田音頭」ができて、音楽会や演劇発表会のたびに、踊りとともに発表された。夏祭りにも美しい和服姿で町をねりあるき各所で踊られた。当時の県知事の前でも和服姿で披露された。その当時の娘さんは、今は孫の子守りに追われている人も多い。たまに当時の青年会員の口から、宴会などの間に歌われているのを聞くこともある。時代は移った。その歌ことばは、

「くどき」があるが省略

一、春は桜がォ（繰返し）
心をうかすチョットヨコタコネ
誰とゆきましょ（繰返し）
稲田の堤
ホレヤンレヨイヨイ　ヨコタハヨイ

（以下はやし略）

二、待っていますよ
吉重橋の
月に河鹿が
ころろとなくよ

三、ここは米どこ
稲田の郷よ
瑞穂（みずほ）・垂穂（たりほ）だ
黄金（こがね）の波だ

（以下次号）

あとがき

御協力お願い

先月号から四頁150円とさせて頂きました。独立採算のめどが立ちました。時々増頁できるとも思います。

「奥出雲」保存用綴（とじ）ファイル）

横田史談会員の方（昭和56年1月現在）には、代金は毎年の会費による会運営の残金積立金から支出して、無料で配布します。誌友の方には、一冊300円の実費でお求めに応じます。世話人にお申し出下さい。（背文字・表紙文字は切って各人でおはり下さい）

（本号の二つの連載ものの筆者は、横田史談会員　高橋一郎）

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第76号
8月号
昭和56. 8. 1
奥出雲編集集団

砂鉄製錬史ノート①

「出雲国風土記」の時代とその前後

物語と歴史

去る六月某日、この地方の民放局から「山陰の古代を語る」が放映された。神話学上では「記紀」の中の出雲神話は、大和的出雲神話とされているそれを出雲の現地に立って物語られた。ついでその現代的解釈も加えられた。見るものには史実としてうつり、現代的解釈も当時そうした史実があったように思わせるものがあった。

これをみながら、最近改訂出版された名著「出雲国風土記参究」にある。出雲民族の伝承した出雲神話はどう考えられているであろうかとしきりに思った。

さきごろ来県され、寺床遺跡の重要性を指摘された門脇禎二氏は、出雲神話を生んだ土壌を考古学の業績によって耕し、「出雲の古代史」を著しておられる。「奥出雲をさぐる」「横田町誌」以来一貫して、微力ながらその線で地域史を追っているものとして心強く思っている。

「砂鉄製錬史ノート」を少しづつ書きはじめるにあたっても、この点を明らかにして置かないと、さきの放映の誤りを犯すことになる。

もう一つ明瞭にしておきたいことは、「たたら製鉄史」とせず「砂鉄製錬史」としたのは、「たたら」の本来の意味は猛火であり、のちには「ふいご」を意味した。「ふいご」は鉄鉱石・砂鉄製錬より以前から、銅鉱石の製錬にも用いられている。最近漸く県内でも製鉄遺跡に注目されはじめたことは、よろこばしい限りであるが、地下構造だけでは製鉄史・砂鉄製錬史はその1/3も解明できないものであることを忘れてはならないことである。

スサノオの原像

出雲国風土記におけるスサノオの足跡は、仁多郡と島根半島の平田・大社を含む、出雲・楯縫両郡をのぞく各地に点在する。出雲平野が宍道地溝帯であった時代、そこに注ぐ神門川を少し入った須佐から、その東の山を越えて大原郡に入り、海湖から意宇郡に入ったのが、スサノヲ族の主力で、のち出雲平野の発達によって成長した部族が大和と結んだのが対立勢力となった。それを押さえて新開地杵築を含めて統一したのが、出雲臣と考えるのが多くの学者の説のようである。古墳の形態や発達も裏付となるようである。また延喜式に記載されている韓国坐伊太氐神社の数社の所在地も、意宇郡の中海、宍道湖南側と、神門川が出雲平野に流入するあたりにあることも、これを意味づけるようである。

先進地大陸そして半島から

昭和46年に、中国古代青銅器展と韓国美術五千年展をみた。中国展は紀元前16世紀から3世紀初頭までの2,000年の青銅工芸品の展示で、鋳工技術とその品物の意味する思想内容水準の高さに驚いた。この時代に続くのが魏の国で、この国の史書倭人伝に邪馬台国—当時の日本—が登場する。青銅器が流入して来たのは少し前で間もなく鉄器も流入して日本が新しい時代を開くことになり、古墳時代即ち出雲国風土記の時代の夜明へとつながる。中国ではシルクロードが次第に往来が繁くなりはじめ、仏教文化が繁栄へと向う四世紀である。

後者の展示は、中国文化の影響をうけて半島に開花した紀元前三千年からの美術工芸展でわが国の奈良時代文化の故郷をみる思いに浸らせた。

また53年にみた、日本仏教美術の源流展は、同じように仏教が、中国から直接に、中国から半島を経て入ったことを、まざまざと見せつけてくれた。

出雲国風土記時代の仁多郡

スサノオのオロチ退治と斐伊川の治水を重ねあわせたり、スサノオとイソタケルの共同の植林事業を考えるのは、歴史として当を得ているであろうか。前者は大和神話の裏方としての虚構であり、後者はこの地の豊かな自然の恵みと原住地への思いからの信仰とするのが、記紀編者の真意を読みとることであろう。

出雲国風土記（以下風土記と記す）には、斐伊川の濫乱のことは記されていない。治水や植林のことが出雲族の信仰となるほどであれば、何らかの物語があるべきであるが、豊かな平和な土地としてのみ記述されている。「記紀」の普及、神道の確立とともに後世、信仰として成立したことは諸書に明らかである。たとえ斐伊川が氾濫することがあったとしても、風土記の記述からすれば、その被害をうけるところに人々は居住していない。豊かな樹木の茂る山すそが居住地で、数多い動物の自由なすみかでもあった。徳川時代のこの地の記録でも、その自然の状態は続いている。

つい50年前、筆者の子どものころ、大雨の降り止んだあとす

砂鉄製錬史ノート①　歴史的遺産は中世に集中している　和歌・俳句　「横田の茶道」前史編③　横田銘草木集

ぐに川に魚を求めてでかけることは、年寄りからきびしくいましめられていた。降り止んでから増水するからである。今日では増水は降ると間もなくはじまり、降り止むとぐんぐん減っていく。山の木は雑木が少なく、杉桧が多くしかも若木がほとんどであるから、山の保水力が乏しい。山肌のあらわなところも多く、井手、小川、大川も堤防はコンクリート、道路も舗装で雨水の流出が早い。しかも減反休耕田の貯水能力の減少も大きい。

風土記の時代は全く今日と逆であり、堤防もなかった。

至るところの川の流域は洪水の時は貯水池となったから、今日の洪水の様相は考えることができない。横田盆地の中央の水田地帯は徳川時代中期をすぎてもなお、増水期には貯水池の役割をしていたのである。それでも旧歴の1月〜3月は斐伊川は増水したから、川船がのぼり下りして材木の検閲をしたと風土記にある。中世にも川の水量は豊かで、巨木を流して大社造営に協力している。

風土記の時代には、今の木次駅には新造院があり、この近くの斐伊川の川巾は45m（現在250m）位で、川底は現在より8〜13mも低かったようである。中世末になると土砂の堆積による川床の上昇そして川巾の拡大で、住居地としては適しなかったが、徳川時代に入ると若狭土手の築堤によって、水田の拡張住居地の出現となったが、洪水による被害も天井川の出現とともに大きくなった。地形的にこの地で斐伊川の勾配は急にゆるやかになるからでもあった。

「鬼の舌振」は風土記の時代にもあった。下流から遡行する舟はこゝでさえぎられ、その上流は秘境となった。美女の住むところとの話も生れて来る。外来語の船を意味する「ワニ」説をとると、いよいよ馬木川上流は秘境となる。安来の月輪神事のワニもこの説によると、船による外来人（えびす）とも解されてきて、民話を生んだ古代人の創作力のすばらしさを感ずる。

スサノオのオロチ退治は、神話学上のペルセウス・アンドロメダ型神話であって、大和神話の裏方として組込まれ、裏方となった出雲を舞台としたものであること。剣の問題などは、すでに本誌で詳細紹介しつくしたのでそれにゆずる。外国の地形・風土の中での洪水と、この地方の古代の洪水を同一視したり、今日の地形・地表の変化による洪水を古代にそのまゝあてはめることはもとより、鉄穴流しが古代にあったと感ちがいをしないようにせねばならない。

鉄の製錬技術の渡来

技術の渡来は大陸から、全国的に及んでいて、次々と渡来する人々によって進んだものが入って来ている。そして渡来のルートが安定して来ると、大陸—北九州—瀬戸内海が主力となっている。

風土記の時代は、相当（勿論当時として）進んで、ある程度専業者もあらわれていて、良質の砂鉄を産する奥出雲の飯石・仁多の両郡が主産地となっていたと思われる。

この時代の常陸国風土記をみると、浜砂鉄であり、播摩国風土記では谷川の砂鉄である。出雲風土記では飯石郡は谷川の砂鉄である。仁多郡は明らかではないが、やはり谷川尻に、堆積する砂鉄であると解してよい。

雨が降るたびの増水は急な流れをともない、谷川の両岸をくずし、川底をけずって土砂が流され、流れがゆるやかになるとあちこちに寄洲をつくって堆積する。そこに岸よりに黒々とした砂鉄が沈澱する。これが砂鉄製錬の材料となった。次第に進んで来ると積極的に砂鉄の多いと思われる谷川べりをくずしておき、大雨の降るのを待ったであろう。「鉄穴（かんな）」の呼称もうまれたであろう。さらに谷川べりでなくても水の不便なところで穴を堀って砂をつみあげ、増水の折に小川に流し出したであろう。

そうして得られる砂鉄も少ないもので、製錬の技術も幼稚であり、極めて小規模で第一次品をつくり、第二次・第三次と熱を加えて、次第に精製し、鍛錬して用具をつくり出したものであろうといわれている。

山陽に通ずる奥出雲

風土記時代の郷の区域は、戸数人口をほゞ同じくすることで区切られた。布勢郷は仁多郡の入口で比較的面積はせまいが、三処郷・三沢郷・横田郷と奥地になるほど面積は広い。布勢郷と三沢郷は斐伊川沿いに接し、三処郷は山越えで大原郡に接している。布勢郷・三処郷・三沢郷には各郷に神社が多く、横田郷は一社しかなかった。郷内に分散する人々がそれぞれ氏神をもったことからであり、横田郷は広い盆地の周辺に中心があってそこに寄り集まっていたと考えられる。

縄文・弥生・古墳の各時代の出土品などの特色が、特に仁多郡東部で山陽色が濃いいといわれるのは、山陽系の部族の流れの居住したところとも考えられ、そこで一社を中心としたとも相像できる。砂鉄製錬の新しい技術をもって入って来たものが勢力をもち土着したものであろうか。山陽の品治国の流れとすれば、郡司の品治部は横田の土着民であるか。すると三沢郷は下流から上った出雲臣の一族の来住者で、郡司出雲臣の地盤であって、各地に氏神を祭って居住していたもの、三処郷は大原郡づたいに移った意宇郡の蝮部臣の流れで、郡司の主席で大領となった蝮部臣と考えられてくるのである。

（筆者　横田史談会　高橋一郎）

横田で今日に生かせる

歴史的遺産は中世に集中している

——早急な保存と利用を

たたらとそろばんは、それぞれの関係者の間で、文化遺産の保存と利用が積極的にすゝめられている。今日の横田を今日のようにあらしめた精神的・物質的基盤は中世にある。「横田町誌」の学問的価値を高めている一つの理由は中世史にある。この時代の遺跡を保存することは急務と思われる。ふたたび関心を呼びさますために

岩屋寺・横田八幡宮　何をおいても、横田の精神的基盤となったのは、この二つで、郡外の人でも、その現状を憂えている。

（対策）○**岩屋寺**のかつての諸坊、諸院跡の確認と標柱建立によって往時をしのべる。
横田および仁多の三十三番札所の一番札所としての確認と各札所の整備。山内の札所巡り実現のための地蔵の修復と周遊路の補修。（信仰と家族づれの保健に）
山門以奥は普通は車の乗入れを禁止し、参道は奉仕で自然石による敷石化。
修験場としての再認識と春の弘法さんのまつりの振興。早朝の岩屋寺山からの雲海の美しさを知らせる方途と展望の美しさの強調。（祖先崇拝、報恩感謝をめざし）
○**八幡宮**の放生会祭りにおける神幸行事の復活（古記録詳細にあり）
県指定文化財の公開。

藤ケ瀬城趾　中世の山城であるが、その仕組みは近世の城郭形式への過渡期のものとして、極めて特色のあるものである。富田城が近世に於て堀尾氏によって手を加えられたのと違って、その形を先どりしたものである。

（対策）○第一郭から第一〇郭までの整理と標柱、馬乗馬場、大手門、三沢氏の屋敷跡その他の標柱（屋敷跡即ち根小屋は香月堂から伊賀多気神社まで）
○県道以奥は普通車を入れず遊歩道とする。関連して伊賀多気神社の県指定文化財の公開。晋叟寺も三沢氏の菩提寺として組み入れる。

土居屋敷　遺構の見取図板による往時の土豪屋敷の認識をはかり、あわせて小林徳一郎氏勧請の稲田神社にも結び、その建築美を味わわせる。

横田町の町並み　戦国時代成立の町並み—本通り—の現状を出来るだけ変更しないようにする。高橋常作・村上朝吉・勝平大喜などの人々の生家に標柱を設置すること。

ふみつき集

黒揚げ羽ひとつ大きく舞ひゐたり合はぬ日締めに瞳あげれば　常盤　はるまさ
いつしかに姑の道ゆく吾なりき竹の杖ひき出雲札打つ　永井弥生
朴の葉につつみし草餅なつかしく師の君憶ふ今日のひととき　畑八重子
視界無き霧の峠に名も知れぬ小草の花がおののきてゐる　景山悦子
（北海道の旅にて）
庭池にそそぐ水音高けれど耳なれし今なつかしく寝る　目黒成生
友訪ひて帰る夕べの径ゆけば羽黒鶺鴒尾を振りて翔ぶ　渡辺観翠
老ひ坂に吸はるる如き思ひして夕べ雲の流れの速さにみとれぬ　真綿博子
河鹿鳴く黙って聞こう芦草の河原に田植の足を洗ひつ　宮廻愛子
露草の茂る小径は夕映へて棚田は水の溢れてゐたり　岡田時子
囃ぎつつペタル踏みゆく坂道をマイカー次つぎ吾を追ひゆく　野村節子
松ぜみの声に眠気を覚へつゝ老妻と厨に粽まきおり　伊藤萩雨
人の世の哀愁うとみ尋ね来し浜木綿匂ふ砂丘の径　安部夕波
（白兎海岸にて）

しばぐり句会　七　月　抄

夏あざみ山にはいつも風が住む　糸原古志
俄か雨軒のせまさや夏まつり　植田美代子
青芦の伸びはだかりて川狭む　岡田蹊花
おにやんまのぞきて去りぬ夏座敷　岡田麗水
はまなすの軒端にせまし伊豆の旅　小川あきお
待つことあり既に夕立の昏なじむ　恩田魚跡
つまづきつ踊る輪に入る夏祭　加納信子
首を降るひとり留守居の扇風機　高木白虹
帰省せし息子にかたみの白絣　田辺竹野
釣り人の夏帽流れに沿い動く　中田巣鶴
青蛙庭に棲みつき今日も雨　中澤斐永
初蛍幼児は確と掌の中に　新出谷一華
ふだん着の客を招いて夏座敷　錦織富江
鎌研いで指でしらぶる野に日ざし　藤原樵夫

現代への五〇年史 ②

「横田の茶道」前史編③ ― 煎茶道

――歴史的風土論――

前史編(下)の予定を(3)とし、「煎茶」を記述し ――絲原記念館で7・8月「煎茶式」が一式展示されているので ―(4)として抹茶の続編「不昧流」そのほかを綴ることとした。

茶聖「陸羽」

日本の喫茶の風習は中国から渡来したものであるが、中国の唐代(奈良時代大化の改新前618年から、延喜式ができる前の平安時代907年まで)の喫茶に関しては、唐の文人陸羽が著わした「茶経」がよくその内容を伝えているという。粗茶(いわゆる番茶の類)、散茶(煎茶のような良質の葉茶)、末茶(粉末の茶)餅茶(葉を蒸し、臼で搗いて餅のように固めたもの、前回までにのべた団茶)があった。

この時代に入唐帰朝した僧侶たちが、喫茶の趣味を伝えたのは、陸羽が亡くなって10年ほど後のことであるという。陸羽をはじめ中国での喫茶趣味は、文人趣味として発達したもので、茶を喫しながら、詩、書、画を作り批判したり、鑑賞したりする風習と一体になっていた。従ってわが国にもこのような型で入って来て、著名な学者・都良香(みやこのよしか)や、文人・学者また天満天神として全国的な信仰を集めた菅原道真(845〜903)なども熱心な喫茶愛好者であった。この文人趣味と喫茶趣味との合流は、「煎茶」のもっとも特徴的な性質のひとつである。

ところが平安時代初期、遣唐使が廃止されると、漢詩、漢文学が退潮し、国文学が台頭すると、漢文学に付随する形をとった喫茶趣味は衰退し、ついにとだえてしまった(一般的な飲茶の風習は拡大していっているが)。

それから鎌倉時代に入ると、栄西によって「抹茶」が宋から伝えられ、前回までの記述のように発展していくのである。

ところが江戸も中期以降になると、当時の文人たちの間に煎茶趣味が流行し、多くは唐代の詩精神への回帰を強く主張され文人画(南宋画、南画)とともに盛んになっていくのである。

記念館では絲原邸に長らく滞在した南宋画家 田能村直八の文人画十数点とともに、「前茶式」の道具の逸品が展示してある。

煎茶の始祖は

始祖としては、詩仙堂の名とともによく知られている石川文山の名をあげる人が多かったが、今日ではその確証はきびしく、研究が深まれば深まるほど、この説は影が薄くなった。勿論丈山が煎じ茶を飲んでいたことまでは否定されないが、後の高遊外や上田秋成や田能村竹田(直人の養父)らのように、意図的に取りあげ思想的な背景を持ち込もうとした形跡はほとんど見受けられないといわれる。中国の三十六詩仙を選んだことや、唐代の詩精神の復興に熱心であったが、特別な喫茶趣味は持たなかった。丈山の言行録の中にも、団茶、抹茶を指すものだけであるといわれる。

丈山を始祖とする誤りを犯したのは、梅樹軒東牛著の「煎茶綺言」で、煎茶家系譜というものを載せ、元祖石川丈山―平岩仙桂―舫屋一夢―小川信庵―高遊外―八橋方巌―東牛とし、自らを煎茶家七世の孫、売茶翁(高遊外)三代目としている。これは東牛の系譜の捏造(ねつぞう)とされ、最近の研究書や人名辞典からはのぞかれつつある。

丈山についで、京都宇治黄檗山万福寺(禅宗の一派)の開祖で知られる隠元禅師を祖とする説もあるが、世俗の伝えの域を出ないものとされている。のち田能村竹田もその著書「茶説図譜」の中で、隠元が祖なりの説に疑問をもち、急尾焼(きびやき)を用いて飲むのは、遊外高翁より始まるとしている。喫茶趣味として「煎茶」を考える場合、隠元も丈山と同じようにその役割に積極的なものが見られないのは事実とされている。

隠元が中国から持って来て、座右で茶を喫むのに使ったもので万福寺に寺宝として伝っているものは、今でいうティーポットのようなものである。

江戸時代の中頃に登場した売茶翁こと高遊外の出現によってはじめて、第一歩が記されたということになり、高遊外の文人趣味が先学の丈山と通ずるものがあり、高遊外がまた黄檗宗僧として万福寺で修業していることから、次第に黄檗宗の様式が煎茶式にかたまる過程で導入されて、丈山さらに隠元と名前が登場したといわれる。これは今日明らかになった説であって、絲原家が近郷まれにみる煎茶式の諸道具を所蔵され、その趣味を深めるとともに、それと一体となって発達した文人画(南画)の作家の作品を求め、またその作家の来邸も歓迎されたのは江戸中期の高遊外の煎茶道完成後そう遠からぬ時代であって、この度展示されている隠元・木庵・即非の書・石川丈山の書はいづれも今日もなお逸品であって当時の方式によって整えられた最高のものであったことの価値まで云々するものではない。こゝでは歴史研究の立場をもって、これらの鑑賞を深めたいために要点をのべたのである。

柴山元昭 (売茶翁=高遊外)

元昭の一生は凡庸の人の近づ

き難い、非常に厳しいものであったことだけは確かである。

肥前国の生れ（延宝3・1675）で、11才で仏門に入り、その秀才を認められ13才で万福寺に入山し四代の独湛禅師にまみえ、学問と禅の修業に身をゆだねたが、22才からは九州から江戸、仙台へと一笠一杖、その身は雲水に託し、風雪を犯して修業の旅をつづけ、仙台では万寿寺の月耕和尚（隠元の第一弟子木庵の法嗣であり、仙台藩主伊達綱村―三沢為虎の流れ三沢初がその母――の帰依が厚かった）について禅門修業をしたが、その死後は有徳の人を求めて諸国を行脚した。こうした七年間の修業は彼の心中の不安を解消してはくれなかった。黄檗山万福寺の斜陽だけでなく、思想界・文芸的世界での禅僧の精神的指導力がかつての力を失い、ただ僧堂伽藍といった虚構のみがあぐらをかき、精神的世界の指導力は、儒学など他の思想的世界にとってかわられつゝあることであった。

こうした現実認識や深い内省もなく、多くの僧侶はそのなりゆきのまゝ、人の上に立っていることへの強い反発が、彼を時代の批判者に育て、「煎茶」へのつながりをふかめたのである。

元昭は佐賀藩籍をはなれ、高遊外と名乗ったが、売茶翁の愛称がよりひろまった。

享保16年（1731）55才の時、ふたたび九州に帰らぬ覚悟で京に出て来た。「世俗の世界も、僧侶の世界もともに捨て去り」真の人間としての生き方を求めることであった。仝20年東山に通仙亭という小さな茶店を設け、煎茶による売茶稼業をはじめた。

彼の文人的な才能と、人間的な親愛感に魅せられて、京洛の文人墨客が、この売茶翁の煎茶を求めて集った。詩人・学者・画家・医者といった当時の知識層に共感を得たのである。その中に池大雅もいた。81才の宝歴5（1755）年、長い間愛用した煎茶器具を火中に投じて売茶業をやめ、89才でこの世を去るまでは専ら揮毫によって生計を立て、死後遺言によって遺骨は火葬後粉末として川に流されたという。

高遊外の煎茶

高遊外の茶に対する精神的な取り組みようは、丈山・隠元の意識を遥かにこえるものであった（これ以上は専門書にゆずる）。遊外の理想とする茶事は詩や譜（音楽）を作る芸術的行為と喫茶趣味との融合を計ろうとするものであった。平安期の文人貴族とも通ずるものがあったが、平安時代はあくまでも唐文化・異国文化に対する憧憬に発する模放であって、内的な必然性に迫られるという面がすくなかった。茶の湯（抹茶）は当時の権力者、富者との密接なつながりから、その一大王国がすでに築きあげられていた。為政者たるものの必修教養の一つにもなっていたが、それだけに腐敗堕落といった側面も大きくあらわれていた。高遊外の新しい「煎茶」の主張は当然そうした既成の茶事の世界に対する、するどい批判をもつものであった。そのことは彼の詩作の中にもあらわれているという。形式化した禅と抹茶の世界から、従来の禅を否定し、唐代文人の詩的精神への復古と煎茶を結びつけたのが高遊外で、煎茶道の始祖とされる。これから後述するように漢文学による文人詩人、思想画を本流とする文人画即ち南画が隆盛へと向うのである。

そのあと

高遊外についで大枝流芳らを初期の文人煎茶派とすると、中期としては上田秋成があるといわれる。そして後期派として小川可進があらわれた。医師であったから科学的な目で、合理的な煎茶の法則を立て、煎茶の方式を一つの型にまとめたという。抹茶の礼法をまねたものではなかった。

可進と同時代の南画家には、池大雅の流れをくむ青木木米、田能村竹田がおり、文人としては頼山陽などがいた。共に交流して精神世界の高揚にもつとめた。そしてさらに茶味のことが強調されはじめ、煎法の工夫以上に煎茶葉の改良が工夫され、いわゆる蒸し製の茶が創製され、美しい薄緑色の香気の芳烈な甘味のともなう純良な煎茶が誕生し、味覚の芸術の一面を加えることになった。

これらの文人煎茶家は、茶筅を持ってたてる抹茶を俗と見なして喜ばなかった。茶の色、香気、味を味うためには、白磁・青磁の茶器が最高とされるに至った。

維新以後も煎茶は盛んであり明治・大正年間は茶の湯を圧倒する勢であった。田能村直入・富岡鉄斉など南画家や、漢文学者の世界に広く浸透し、庶民にも深く浸透した。

田能村直入と絲原家

直入が明治11年秋から仝12年秋にかけ一年余り、絲原邸の一屋を与えられて滞在し、煎茶と南画にあけくれることのできたのは、すぐれた煎茶式の諸道具があったからであった。主人の風流に感じ、自然と風物を満喫し多くの作品を残した。与えられた家を「煙霞屋」となづけ、絲原邸をくるめて「重山曲水楼」と名づけたのも、こゝの生活が十分に満足するものであったからである。また南画の賛や楼記に当主が仁多郡再建のために農事試験場を設置して、非常な努力をしていることに驚嘆していたことが明瞭に書きしるされている。

直入の養父竹田の大作中の大作で、自信作の一つとされている「梅溪艤角図」は昨年展示された。竹田が南画家谷文晁・浦

横田銘草木集(10)

丸山　巌

カタクリ（片栗の意）一名カタコ

古名　堅香子（かたかこ）

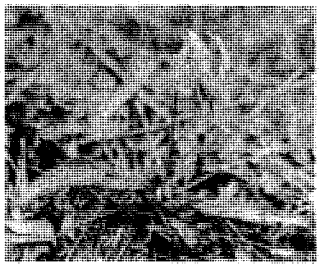
学名　Erythonium japonicum Decaisne

分布　アジアの東北部に分布し、わが国では国後（くなしり）より九州までの温暖林下に生える。学名にはjaponicumの種小名がつけられているものの、わが国特産ではなくて中国にも分布し、中国名いわゆる漢名は猪牙花とか山芋頭とか母猪牙。

ユリ科の多年草で高さ11～20cm。早春広いさじ状の大きな葉を1～2枚出すが、この葉には帯紫色の美しい紋様がある。花茎の先に1個つく花は紅紫色で点頭、径5cm内外、6枚の花被片はそり返る。地下（やや深く）に小鱗茎がある。秋葉を食し、鱗茎から良質のでん粉がとれる。これが本来の片栗粉であり、またクズ根より採取したものが葛粉であるが、今日の片栗粉、葛粉はすべてジャガイモでん粉で代用されている。

万葉集四一四三に　物部能　八十嬬嬬等之把乱　寺井之於乃　堅香子之花　と出ている。しかしでん粉を採った古の堅香子は今のカタクリではないという説もある。

船通山の頂上付近に産し、県内では日原にもある。可憐でしかも優美な小草。登山者は心して保護につとめて、採掘を禁じ、撮影で憶いを満し、この誇るべき貴重な戸外文化財を守る可きである。



上玉堂、漢学者菅茶山・頼山陽、陶工で書画・詩文にもすぐれた青木木米を知り、藩内一撥鎮圧のために、三回に及ぶ建白書を藩主に提出したころ、直入は6才で入門している。竹田がその後、洋風画家で蘭学者であった司馬江漢を知り、陽明学者でのち大塩の乱の中心となった大塩平八郎の学問に傾倒し、音曲にも興味をもったころが、直入の少年後期の時代である。養父のこの学識は直入の幼少年期に大きい影響を与えたのである。

「直入山樵田癖」の癖は痴であり、おろかもののことであるが、仏語では無明・愚昧暗鈍の修業者の心をあらわす意味もある。こうした教養は展示されている作品や賛に十分に読みとることができるものである。

絲原邸で求めに応じて作品を心を養った直入は、京都に帰ると間もなく京都府画学校を設立して、日本画の振興の基礎を確立し、のち自宅に南宋画学校を設けて、思想と詩・人・画一体の文人画の指導に尽し、明治40年94才でこの世を去った。直入に影の如く従ったのは平尾竹霞であった。

展示品

隠元の「玉」にその弟子木庵（師のあとを追って清から来日し、黄壁宗の多数の寺院を開いた）の註釈と、同じく来朝した隠元の弟子即非のことばを添えた軸物。江戸初期の漢学者**石川丈山**の「寿」の軸物。清国の商人で数度長崎に来て、文人画家として清朝の文人画を日本に伝え、特に山水画に長じて池大雅らを育てた**伊孚九**の「福」の文字のある炉屏（伊は来舶清人の書の四大家の一人でもあった）。

伊孚九に教えをうけて日本南画の始祖となった**池大雅**の「指頭山水図」。江戸前期の帰化僧（曹洞宗）で徳川光圀に迎えられて1,700余人の授戒衆をもったといわれる**東皐心越**の「蟹図」（賛の—高致間情は高尚なこゝろばせと忙中の閑かなこゝろの意）。

これらは煎茶用の茶掛としてはいずれもその本格派に属するものである。

煎茶用具・文具については目録にあるので、主な作家について若干の紹介をするのみとする。

永楽善五郎（寛政7 1,795～安政元1854）—京都永楽焼の陶工、初代は室町後期の西村善五郎で、代々善五郎を名のり、10代は楽了入（楽家9代で中興者）、青木木米に学んだ。11代保全はその養子で、永楽を姓とし善五郎を襲名した。

華中亭道人—陶工高橋周平の子で、2代は仁阿弥道八といゝ南画写しを試み、白磁青華を研究し完成した。4・5代を華中亭といった。江戸後期から明治初期の京都の陶工である。

清風与平　京都の陶工で江戸後期に始まり四代を数える。代々与平を襲名、初代は仁阿弥道八の門に入り、京都の五条坂にて開窯し、白磁・染付を焼く。2代は染付の妙手（釉下に青花を出す）であった。禁裡御所や桂宮の御用窯を蒙った。

いづれも煎茶器のすぐれた陶工であった。

文具飾りも舶載品をはじめ整っており、直入が滞在中愛用したものも別に展示してある。このようにこれらから煎茶道の歴史を学ぶことができる。

覚え書（続）

四、昔しのぶか
山ほととぎす
今日も啼きます

藤ケ瀬のそら
五、結び縁（えにし）の
稲田の姫へ
かけた願いが
かわいやいとし

六、お詣りなさ
岩屋寺さまと
馬場の八幡
放生会（ほうじょうえ）まつり

七、霧が晴れます
心も晴れる
やがてみえます
船通山も

八、みやれ簸の川
鏡の水よ
野良へ出てゆく
あの娘（こ）がうつる

九、雲州算盤　本場はこちら
かわいあの手で
はじかれたいよ

一〇、南大市　北六日市
市が立ちます　牛馬の市が

横田史談会夏季講演会

八月八日（土）后一時半
（横田町コミュニティセンターにて）

「オーストリヤの農村事情」
（映写を交え）

西ドイツ首都・ボン大学助教授
E・パワー先生（入場無料）

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第77号
9月号
昭和56. 9. 5
奥出雲編集集団

砂鉄製錬史ノート②

「出雲国風土記」の時代とその前後（続）

天皇と神社と風土記

「常陸風土記」には倭建天皇（やまとたける）の巡行の記事がある。「阿波風土記逸文」にも同じことがある。

「播摩風土記」には応神天皇の記事が多く、景行天皇・神功皇后も若干あるが、但馬に近い内陸には出雲系の神の名が出てくる。九州は景行天皇がでてくる。

ところが出雲には、天皇の巡行・行幸の記事は全くない。出雲だけである。やはり大和朝廷に服属するのがかなり新しく、そういうことを書き加えることもしなかった独立国の意地がみられるという。国譲りの話もない。「記紀」では出雲の神話を体系化し、出雲の神統譜もくわしいが、「出雲国風土記」ではそれがなく、せいぜい親子関係のみである。それらも土着神が多い。当時の自然のまゝが書かれ、作為を感じない。神社数は次表のようで、これは豪族の分布を示しており、官社の多いところはそこの豪族と国造家とのつながりを、またその勢力の強さを示すものという。そして神社名は地名か、食物・風・温泉・水・神霊・樹木などの普通名詞的なものであって、この時代の信仰が集落神的・普通名詞的対象物信仰であったことを示している。地方共同体の精神的支柱、農作業はもとより日常生活のよりどころであって、集落にはすべて神社があった。

（表1）風土記（733）記載の神社数

郡名	官社	国社	合計
意宇	48	19	67
島根	14	45	59
秋鹿	10	16	26
楯縫	9	19	28
出雲	58	64	122
神門	25	12	37
飯石	5	16	21
仁多	2	8	10
大原	13	16	29
計	184	215	399

次表は風土記時代から200年後の「延喜式」の中の神社数の抜粋である。出雲は三社ふえていて、大和・伊勢につぐ数となっている。

（表2）延喜式（927）記載の神社の中の官社（式内社）数

丹波	71	伊勢	253
丹後	65		
但馬	131	伊豆	92
因幡	50	武蔵	34
伯耆	6	安房	6
出雲	187（国造1）	上野	12
石見	34	下野	11
隠岐	16	上総	5（国造6）
大和	260	陸奥	100
山城	122	越前	126

そして固有名詞的な神社がふえて、神に具体的な実体を与えるようになってくる。この数から加藤義成著「風土記時代の出雲」では、神国出雲の名に背かないことがわかるとされているが、全国的にみて歴史を検討すると、そうばかりとは言い切れない。大和朝廷と地方との反抗を示すものという解釈が支配的である。

関東東北をみると蝦夷征伐の過程で、官社がつぎつぎにつくられてゆく。上野・下野・上総ではそう抵抗がなかった。すんなりと中央の支配に入った。上総では国造の数が六人いても、力が弱かったから簡単に押さえられ、官社も5社に終った。式内社が修理される時は国費から費用が出たから、抵抗する相手の要求を入れて、見返りを多く与えたということである。しかし必要最小限にすることが費用節約にもつながったから、できるだけ少なめようとした。九州の国々には官社が少ないが、これは辺境であったからと考察されている。

出雲は独立性が強かったことをしめすが、それが文化が高かったことにはつながらぬとされる。大和の統一者としての偉大さを示すとともに、出雲を懐柔者の代表として遇するために、「記紀」の出雲神話が構成されたことが明確となってくる。

焼畑農業

水田耕作の前段階は焼畑農業であるといわれる。常陸風土記では、どんどん北の方を開拓して、土蜘蛛（つちぐも）をやっつけているがこの話は焼畑農業の民を押さえた話といわれる。播摩風土記には、漢人を招いたり、九州から田部を招いて開拓したとあるが、出雲には全くない。両種の民の交替があったのか、水稲作農民が早くきて、十分に土着して勢力をもっていたのであろうか。雲南地方には樹木のない、いわゆる野山が多い。これをどう解釈するかである。山陽方面の焼畑農業については研究が進んでいる。これとの関連を追う必要も生じてくる。

鉱物

和銅6年の風土記編纂の命令には、「銀・銅を記せ」となっていて、金・鉄は入っていない。

金については、対島の金について大和がだまされた一件があって、金の産出はないとみたではないかといわれ、鉄はありふ

砂鉄製錬史ノート②　碑めぐり①　井上栄太郎（下）　短歌・俳句　横田銘草木集⑪

「カタカナを有難がる」（裏がえせば卑屈）ことから　日本語を正しく生かすことへ

れていたからやめたといわれている。銀・銅はそのまゝ銀銭・銅銭となり、いろいろと他に用途も多かった。それに精錬のやり易すさもあった。

大宝律令(701)で、大和古代国家が制度的に一応完成したといわれるが、鉱産物の産出量の激増したという裏づけを忘れてはならないという。政治の高まりが、藤原京・平城京・平安京と移ったとみるのみでなく、その裏に各業の生産性の高まりがあったことを見失ってはならないという。逆に言えば租(米)は比較的安定しているが、鉱産物の豊かさが、それを自分の下に集中できる力が、古代の勢力伸張であったとみることができる。

そう考えを深めると、出雲が次第にとり残されてゆくことが裏付けられてくる。安土桃山時代は最もよくこのことを見せつけてくれるのである。

治山・治水・利水

前号で治山・治水のことにふれたところ、出雲国風土記の中にはそれについて書いてあるとの指摘があったので、私の見解をさらに述べると。筆者は利水と治山・治水は別と考えていたので、恵曇浦の記述は排水のことで、そのために岩壁を掘りぬいたとあるが、地形・地質学的にみると自然成因説が至当で、天然の恩恵を祖先の功績とたゝえた話とみるべきである。また出雲郡河内郷は利水即ち水利のための導入堤と考えられる。また神門郡古志郷には用水池を設けたとあるが、これも地形利用の利水にあたるものであると考えている。

碑めぐり①

石明しぐれ塚（俳人）

大馬木妙綱寺の境内

石明は雨川・堀の内糸原家の二代嘉平(天文4 1739～寛政6 1794)の雅号で、夜々庵ともいった。本家湯之廻七代吉三郎（歌人楽山軒好観）の影響をうけ、連歌そして発句(俳句ー五七五)俳諧(連句ー七七)をよくした。八代四郎左ヱ門の家業もよく補佐し、共に同じ趣味の道も歩んだ。四郎左ヱ門は号を壺中軒以文といゝ、その弟遅日庵除行も幼くして書・絵とともに秀れた才能を現わし、当時出雲国内はもとより芭蕉門下美濃派の逸材といわれた、大田の中島魚坊（しのぶ庵）をともに師とし、三人それぞれに京方面に行脚し、道を深め、揃って仁多郡のこの道の先達であった。除行が吉野行脚の途次客死したあとは、石明が美濃派五代(再和派の祖)再和坊膨庵朴斎に、ついで六代森々庵松後(岡山住)にまみえ、秀吟が多く将来を嘱望された仁多郡の棟梁であった。紀行文・句集には秀れたものが多い。のち以文の子九代忠三郎(東下)によって、五竹庵子琴の来遊を期して以文25回忌、石明33回忌の追悼句会が催された。この時の記録と徐行の死の直後、魚坊によって編まれた（魚坊は徐行と行を共にする予定であったが、足を痛め同行できず、絲原邸に滞在中徐行の死にあう）追悼俳諧「蝶の夢」を合せて、追悼俳諧「春のおもひ」が、文政7年京都の蕉門書林橘屋より出版された。石明亡きあとは、朋友の阿井の路考が棟梁をついだ。

石　明

七草や二度に買うても数たらず
夕暮れや帆のなき舟も亦涼し

（明石浦にて）

（4頁より続く）

晩　年

41年井上は、中沢と簸川郡長村上寿夫の推せんをうけ、今市小学校の主席訓導となり、教え子中沢の下で、大正4年3月退職するまで代用附属の教育に十二分に腕を振った。

子忠義は大学卒業後若くして校長となり、岩手・広島の視学をつとめ、香川女師の校長から徳島大学教授をつとめて、しばらく前にこの世を去った。父栄太郎は昭和20年6月香川において83才の長寿を全うした。

影響をうけた人々

ー主な人々の氏名ー

松浦寛一郎・石原要道・石原愈・岡崎隆一・宮田要造・三沢典海・妹尾柳太郎・糸原保蔵・日野徳次・杉浦猪之助・石倉具城・茅原虎吉郎・赤水昇・丸山敬延・鈴木於多留・景山節郎・原田宇一・妹尾義雄・白根定一郎・藤原璋夫・田村壮之助・坪倉利・古瀬良逸・杠台造・高橋善之助・加納(横路)藤右ヱ門・卜蔵梅之丞・児玉儀一郎・芝原スエ・加納寅之助・高野兵蔵・真田喜六・田村正修・森山弥頼・景山修蔵・山田隆寛・中沢守衛・卜蔵茂野(真田)・松浦小五郎・堀江好人(妹尾)・伊藤菊之助・安部篤美（本文中に出た人をのぞく）

（筆者　横田史談会高橋一郎）

横田に影響を与えた人①

井上栄太郎（下）

——学校教育の確立者

三度目の来任

井上栄太郎は一男七女に恵まれた。明治30年9月、三度目の横田小学校長として来任した時は長女と長男（忠義29年生）があった。六日市の大津屋の元屋敷をその居宅として、十年間ひたむきに教育に尽粋した。その父林太郎は33年4月、そこでなくなっている。

井上の時代

病気のため帰郷していた岡崎は、志を捨て難く父との間を、横田小学校の雇教師となっていた妹尾に託して、28年暮出郷し再び同志社に学んだ。（この年キリスト教の一派救世軍が日本に伝来）その後妹尾の努力で岡崎の父の怒りもやわらいだ。29年11月妹尾は小学校を退職し上京した。岡崎は今後の日本人にとって英語と国際感覚の重要性を思い、30年1月上京し早稲田大学の英語科に入学した。ついで妹尾は明治大学に進んだ。

存命中に岡崎・妹尾両氏に伺った話によると、井上の影響は大変に強かった。具体的な点についてはつまびらかにしなかったが、文明開花の時代に伸びるためには、志を高くしそれを遂げるためには東京に出て学ぶことであることを力説されたようである。親友や後輩がなし得て自らが遂げられなかったことを、教師として子弟に秘かに託されたものであろう。経済事情の許す家庭でも笈を負うて出郷することには今日とは違って、大変な反対があった。岡崎も妹尾も長男でもあった。岡崎は32年英語科から文科に移籍していたが、父の病気のため帰郷し、翌年父のあとを継いで横田郵便局長となり、他方八雲銀行創設にあたってはその中心となって尽力し、頭取絲原武太郎（先々代）のもとで常務として行務をとりしきった。34年には英人ナイトが来町しキリスト教を布教し、浅山佐一郎（勝平大喜）は松江万寿寺に入門した。自分の志を伸ばすために選んだ道であって（住職大航は仁多町出身で親戚筋にあたっていた高僧）井上の影響を強くうけていた。（以下奥出雲12号参照）36年は留岡幸助が青少年の感化教育のために家庭学校を創設している。妹尾が立教大学を卒えて上野精養軒に入ってもいる。37年妹尾は洋風料理を学ぶためにアメリカに渡った。岡崎の心の友太田清三郎（のち津山市初代助役）が横田を訪れ、留岡は欧州視察に旅立っている。

岡崎の助言もうけた勝平は40年第三高等学校へ進み、赤水（長尾）宗次は東京高師英語科へ進んだ。44年太田清三郎の助言もあって岡崎は相愛幼稚園を創設した。45年勝平は僧籍にありながら同志社大学へ進み英語を修めた。太田の紹介で留岡幸助が横田を訪れたのもこの年である。

井上の志

井上自らの志を遂げ得なかった理由は明らかでないが、遺族の話を総合してみると、井上の家は松江藩士であったが雑賀町に居を置く軽輩士族で、父林太

歴史をふりかえることは　未来に責任を負うことである。

葉つき集

暑き日の務終りて帰るわれに今日の暑さを妻も言ふなり　常盤はるまさ

合歓の花さやかに揺るる朝畑に子ら憶ひつつ小豆の種子蒔く　野村節子

山裾の露の細道こぼれ萩よけて行きてはふりかへり見る　八重子畑

ねむの花咲いて散りしく山畑に夏の日課の葉たばこ摘みぬ　宮過愛子廻

五十年経ちておもふは東京のある庭に見し雨の紫陽花　渡辺観翠

阿寒湖はまりもの住める湖と云ふセトナとマンベの悲恋も聞きぬ　景山悦子

暑き日は何時しか過ぎて夜毎に虫の声して涼風は吹く　目黒成生

露しげき小川の岸に七夕の祈りし文字の沓き日想ふ　岡田時子

生け終へて水面に映るりんどうのうす紫に秋を知りつつ　真綿博子

盆終へて西に東に孫去にて日暮れの縁に風鈴の鳴る　永井弥生

酔ひ覚めて眠れぬ夜半に恋猫は家を巡りてしきりに啼きぬ　伊藤萩雨

若住める海辺の街は夕迫り夏の終りの哀愁ふかし　安部夕波

しばぐり句会八月抄

ひぐらしや鎌の刃こぼれ労わり砥ぐ　岡田蹊花

征果てし碑文切々法師蝉　岡田麗水

帰省子の声はづみおる合歓の昼　小川あきお

鬼やんま又来い見に来いテレビの間　恩田魚跡

蚊遣香孫の重みを確と受け　加納信子

釣り羊歯のかすかに揺れて秋立ちぬ　高木白虹

子の寝顔のぞきてゆるく団扇風　中田巣鶴

施餓鬼僧散華の片に風のあり　中澤斐水

六十路には少し派手なり宿浴衣　新出谷一華

蚊に追われ神楽太鼓の更くる夜　錦織富江

花合歓やうしろ向きなる道路鏡　藤原樵夫

若き子の輪渦の舗道灼け灼けし　渡部夕峰

郎は三代目であった。栄太郎ははじめ雅太郎といったが、藩主松平家に「雅姫」が誕生したので、「雅」を遠慮して「栄」としたという。

廃藩置県にあたり武士は、それぞれに応じて一時金を受領したが、それを有利に生かし得なかった多くの武士の一人でもあった父林太郎は、優れた人材であって藩から親兵として選抜された四人の一人であったが、若い時に今村家で学んだ国学思想を堅持し通し、薩長中心の明治政府には背を向け、県庁にも勤めず、節を曲げずと貧窮に甘んじたという。井上が西田と異った道を歩んだのは、こういう物心両面の状況の中からであった。

しかし常に志を高くもち、時代を先取りする生活態度のあったことは既述した通りである。

これが横田において教育者として貫かれたから、強い影響を与えたのである。従って教え子たちは「謹厳実直な恐ろしい先生」「古武士の風格のあった先生」とも別な面の井上も強く印象づけている。

彼の教も受け敢然と笈を負うて上京し、志を遂げて生を終えたもの、晩年帰郷して悠々自適したもの、学んで帰郷しこの地のために生涯を奉げたものなど数が多い。いずれもが「井上先生」を口に出して讃えていた。

井上以上に家庭の事情で、涙をのんでこの地に留まり（その後も幾度か志を果さんとしてなし得なかったものも）それぞれ所を得て生涯を終えた人も多い。これらの人は果せなかった志を、子や孫に果させて満足した人も多い。井上の志は大枝と小枝にも花を咲かせたのである。

明治中期の義務教育の確立期に、後述する如く体制を確立し内容を充実して、大きい影響を横田に残したことは、今日の横田を招来した理由の幾つかとともにその首位にあるものと考えるのである。今日の風潮がとかく外形的な内容（入試に引きづられた）にのみ向かい勝ちであるが、この精神を生かすことは不可能であろうか。将来を見通せぬ不安定な今日の社会ではあるが、その中で各自がそれぞれの志を発見するために模索することは不可能であろうか。「戦後史を考える」という書籍や新聞連載評論などは、決して模索はは無駄ではないといっている。教育即技術以上の、志は追求できるようである。唯安楽にかっこよくでは得られないようである。

井上教育の一端

32年4月から数ケ月の間、石倉俊寛（海軍主計少将・松江市長）が松江中学を卒業して学校へ入学するまで、小学校に教師として来任した。かすりの着物に袴、ステッキに厚歯の高下駄姿は、少年達を振い立たせたという。（この年、先代絲原武太郎は松江中学を中退し、翌年先々代田部長右衛門も同校を中退しいずれも早稲田大学に入っている）34年5月中沢倉太郎（六日市沢屋）は松江の附属小学校から帰任し、半月ほどで休職し今日の東京理科大学へ進んだ。これが、のち井上の長男忠義が今市小学校教員から中沢校長のはからいで休職して、早稲田大学・東京大学と進学する契機となった。（中沢は37年今市小学校が今市に置かれた女子師範の代用附属校となった時訓導兼校長となり、大正12年本校が浜田に移って附属代用を解かれるまで在勤し、県立今市女学校長に転出した）

井上はさる校区内（鳥上・八川・横田・馬木）の寺院の娘が成績不振のため及落会議の議題にのぼった時、自分の長女も落第させる条件で賛成した話は、当時の井上の教育愛をしめす語り草となったという。風雨の激しい晩には自ら学校を巡視してその保全の万全を尽したという。当時の用器画・絵画（デッサン）の作品などによると、講師を招いて教師の研修をしただけあって、極めて優れたものが残っている。中学校用の英語教科書を筆写し、解説書も作成して課外での自学の便を与えていたことは、英語が新しい時代の必須科目であるとした見識であり、多くの教えがそれに続いた理由となった。木版本による漢文の素読をすゝめたのは、東都に学ぶには英・数・漢が基本であるとする見識からで、多くの子弟がこの恵をうけている。

（2頁へ続く）

横田銘草木集(11)

丸山　巌

アズマラショウモンカズラ（吾妻羅生門葛の意）

Meehania urticifolia(Miquel) Makino var. montes-adzumae Maruyama

著しく伸長する地上匐（ふく）枝を出して根を下し、翌年に花茎ができ、やゝ大形の紫色の唇形花を着けるシソ科の多年草にラショウモンカズラがある。花冠の筒の太さを羅生門で切り落された鬼の太腕に見たてた名である。このものは本州・四国・九州の深山に美しく咲くが、吾妻山の馬木側には、全体やゝ小柄で花色は桃色葉の基が心脚でなくて平たいものがある。これは開花しても結実しない不稔？のようで染色体異常（3n？）と思われるし、ある谷にこの型のものばかりで群落を作っている。未だ正式の発表はしないものの、もう30年近くも彩紫花園にも栽培して観察を続け、いよいよその見解を深め強めている。普通品と混植すると生育負けをするが、雑交はしない。アズマラショウモンカズラは、ラショウモンカズラの単なる花色変品ではない。（シソ科の特徴、対生葉，唇形花冠，4分果，雄しべ4，茎は方形）

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 78 号
10 月 号
昭和56. 10. 3
奥出雲編集集団

横田で生れた人⑦

卜蔵孫三郎（上）

―中海干拓の先駆者―

市町村誌

町村誌として古本の紙価を高めている「島根県横田町誌」も別な角度では、大きい不足部分をみせている。人物誌の部門である。編集の方針とそれによる頁数の割当て（中世史が豊富であり、砂鉄製錬史の資料も豊富であることから、特徴づけようとした）によるが、一面これはこの地でとかく忘れられているこの面を露呈したものでもある。横田町誌発刊以前以後を通じて、この点横田町誌は特異である。安来市誌は人物誌が綴られている。人物誌として独立した部門だけでなく、歴史記述の中でもみごとにえがき出されている。歴史を生んだ主体は人であることを脈々と感じさせる。このことは市町村誌の記述のみではなく、現実の動きの中にも現われている。

安来市の「安来市を知る会」では、役場職員によってまとめられた「卜蔵孫三郎の事蹟」を資料として認識を深め、明日への道も求めている。また市立荒島小学校では、「郷土を開いた人　卜蔵孫三郎」という副読本をつくって授業に用いている。人を尊び、その事蹟の中から学び、将来への責任を果そうとするこの風土は、新しい時代の地域づくりの基礎である。

さる六月、NHK松江テレビジョンの番組「シリーズ山陰のみち」の企画にのって放映したところ、要望が多くて中国地方向けの再々放映となった。私にとっては今まで以上に、電話や便りを頂いたり、来訪までうけた。そこで「島根県史」（旧）、「新修　島根県史」、明治時代にまとめられた「島根県旧藩美蹟」ほか多くの資料をもとに、この文をまとめることにした。

出雲の新田開発

江戸時代における新田開発は、すでに戦国大名が富国強兵策の重点として推進していた干拓事業を基盤として、さらにこれを大規模に発展させたものである。太平の江戸時代、領主たちは内治に力を注いだ。松江藩の新田開発は斐伊・神戸二川の三角洲の出雲平野を主体とするが、まず堀尾氏によってとりあげられ、京極氏について、松平氏の時代に本格的にすすめられた。

その第一は、出雲大社の東南にあった**菱根池の干拓**で、在地の土豪三木与兵ヱの苦心の経営によるもので、堀尾時代即ち元和二年（1616）から正保二年（1645）に至るまでの三十年間を要した。

面積51町歩で現在の高浜、遥勘、高松を含む地域である。

ついで**荒木村の開拓**である。出雲大社の南西の地でもとは砂丘地であった。まず松の防風防砂の森林を造成することに苦心して成功した。そして延宝七年（1678）漸く43名の百姓を移住させた。この中心は大梶家初代七兵ヱであった。そしてその開拓は成功し、宝歴四年（1754）荒木で、水田58町余、畑105町余、松山畑4町余、家数267戸、人数1443人と70余年で飛躍的な発展をした。

第三に**宍道湖岸の開拓**がある。斐伊川下流沖積地の東方宍道潮岸には、平田・灘分・中州・沖州・庄原等の新田がある。沖積地を新田開発によって美田としたものである。それらには平田・三成・木佐・勝部の諸家が自ら移住して中心となって努力した話が秘められている。

第四には**出雲東部の開発**がある。竹崎出身の卜蔵孫三郎が行った、荒島新田・羽入新田・開生新田等の開発である。そして松江の古志原の開発がある。ここは台地状で灌漑困難なところであったが、「水つり井手」で水を引き堤をつくって新田を作った。その中心は大根島から移住した「大根島六人者」という百姓たちであった。

研究によると、松江藩の新田開発は①正保～元禄期　43％　②元禄～天保期　30％　③天保～明治期　27％で、①期の増加率は、全国各地と比較すると著しく高い率である。②期は他地域が増加の傾向にあるのに、出雲は著しく低いものである。③期は数にみえる増加率は低いが、全国的に見れば他地域よりも高く、幕末における新田開発の進展をしめすものである。この数の中には奥出雲の鉄師桜井・絲原・卜蔵・田部の開発したものが入っている。

新田開発には、藩営（官営）と民営（見立新田・村請新田・町人請負新田）がある。松江藩はその初期から財政窮乏に陥ったので（奥出雲の鉄師の事業税にあたる先納銀や、臨時出費にはこれらの寸志銀に期待が多かった）、開発資本の捻出が困難であったため、岡山藩・長州藩の藩営新田が多いのと比べると、比較にならぬほど少ない。従って土豪や豪農などをして新田開発に当たらしめ、開発後はその代償として特権を付与するなどしている。これが松江藩での見

立新田の多い理由である。

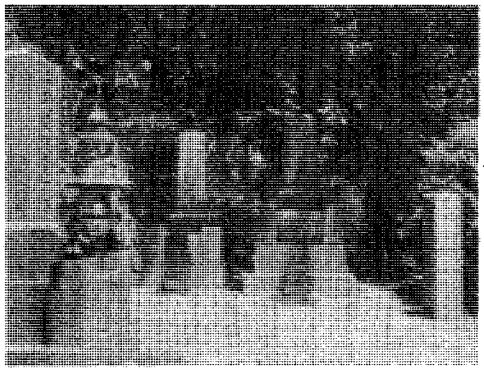
見立新田　土豪・隠遁武士が領主の許可を得て、費用の一部または全部を負担して開発し、開発後郡村役人などの役職が与えられ、特別に免租地として開発地の一部が与えられる。中世末期から江戸初期の近世封建制確立期に、領主の家臣団に上昇し得なかった在地の土豪によって開発せられたから、土豪開発新田とも呼ぶ。奥出雲の鉄師は、砂鉄製錬によって松江藩から、特権を与えられて成長した。一方、鉄穴流しの跡地、流した砂によって谷を埋立てるなどの新田開発にも努力し、幕末には相当の面積となった。

ト蔵孫三郎

竹崎村ト蔵家24代、中興3代（詳細は横田町誌で）甚兵ヱ―2代惣兵ヱの次男（長男甚左ヱ門は前ト蔵創家）――の次男として元禄九年（1696）に生れた。事情あって兄長左ヱ門は分家して堀の内ト蔵を、三男清左ヱ門は山根ト蔵をそれぞれ創家した。

孫三郎は次左ヱ門といって、本家を継いだが家督を弟甚六に譲って荒島に出た。甚六がト蔵家4代となり、孫三郎は荒島ト蔵の祖となった。

初代　孫三郎　宝歴5歿
2代　甚左ヱ門　安永7歿
3代　安左ヱ門（父より先に歿）　安永5歿
4代　孫三郎（3代の弟）　文化10歿
5代　恵重（父より先に歿）　文化3歿
6代　良兵ヱ　文政8歿
7代　武左ヱ門　元治元歿
8代　孫三郎（養子）嘉永5歿
9代　慶蔵　文久2歿
10代　倉一郎　大正10歿
11代　寿



荒島ト蔵家の墓

「当家根元記」

初代孫三郎が書き残し、6代良兵ヱが書き添えたものである。全文を載せ、それをもとに古記録・言い伝えを考証して加え、孫三郎の事蹟を誌す。〔返えり点や（　）書きは筆者〕

一、私儀能義郡日白池新田之存立有レ之候に付、享保六年（1721）丑春　仁多郡竹崎村より罷越荒島村油屋本左ヱ門方に致二止宿一同村庄屋助次年寄忠右ヱ門同安右ヱ門同九兵衛右四人へ新田存付之趣願出候処　何れも承知有レ之候に付　早速願書相認差出候　其節之郡役人中上坂田村下郡新三郎殿安来町組頭与一右ヱ門殿奥書を以て御取継被レ下　御上へ被二差出一候処　願の通り被仰付　八月初旬（享保八年）弟清左ヱ門同甚六　大工伝七山子頭廻細木七兵ヱ山子十五人以上十九人呼寄　まさ鍬打鍬等為レ持候て高清水之下福井川より両水を横に取　夫より井手を堀掛尤水走り百間に付一尺下位に（勾配）して掘立　荒島村より毎日人夫二三十人程つゝ雇添　大勢にて切流候に付果取申候　夫より順々長尾崎へ掘廻し高坪の下どふし谷を掘廻し　才の神を掘　次にたの坂を掘　夫より日白地蔵の上迄井手を掘廻し水取申候　高清水の下より日白地蔵迄井手間数三千八百五十八間（一里半強―約7キロ）有レ之候　兎角水瀬弱く候に付一尺位成大竹を大分買寄せ　一丈二尺位に切り節を貫き　縄にて巻き立候て十二本相併へ　継手には一尺四方位成　四角の木を竹の跡先に差込む様丸にえくり候て　継立〳〵向の乙坂七分目位の所迄　駒頭にて水釣上け申候　尤下たの田には三尺位に床を上げ　其上に十二本の竹を載せ候て水上り候に付諸方より大分見物に参申候　又　乙坂より横井手を掘廻し　夫より二股両谷を掘貫向の白坂山へ棚を釣り切流候得共　水瀬弱く山の土取悪敷候に付　切流し果レ取不レ申漸く三反歩計埋り候に付　又色々工風致し才神に堤を拵水を溜置　坂中井へ井手を掘り　同七月末方　最井手を切通し掘貫　下日白家の空迄水参申候　夫より居屋敷の上より棚をかけ直くに家の後上下切流候処　昼夜水瀬強　上取宜敷故追々埋り申候　夫より下の地蔵の所へ棚を掛　切流大分埋り申候　猶又水井手を後へ廻し　西平権兵ヱ山に棚を掛切流候て　町後蛇ノ口迄埋り申候　夫より切通し上下を切流　追々埋り年数七年振りに　中井手より不レ残下埋末（享保12）六月より申年（翌年）迄に地平し不レ残相仕舞土手の上の池へ泥舟を乗込泥掻にて泥を上げ　地平しの上へ廣立候て稲植付候処　殊外出来立宜敷　最早餘程年数相立候に付　翌春意宇郡能義郡の役人中へ相訴候処　両郡役人中御立合御検分の上　意

字郡役人中より御申被レ成候
は　中川より東は能義郡分
中川より西は意字郡下意東分
に致し可レ然哉と御申被レ成
候得共　以前助三郎新田開発
の節も論談有之候問　何分此
以後能義郡の土にて埋出候は
ゝ　能義郡分又意字郡の土に
て埋立候はゝ　意字郡分と申
合有之　尤に相聞候得共　左
候ては僅の新田両郡に相成事
六ケ敷　殊に本郷つきに相成
候ては　段々に不益等も有レ
之候間　何卒能義郡荒島村内
免別にして別石新田に被ニ仰
付一被レ下候様御上へ頻に願
出候処　御役人様方御見分御
越被レ遊　願の通り荒島村別
石新田に被ニ仰付一　其翌年
御検地被ニ仰付一本地方小池
太次兵衛様　添地方井上九右
ヱ門様　見習小池軍七様　御
吟味方加島十助様　御竿方松
本太吉殿野々村惣兵衛殿　御
添御先手福田弥平次殿　其外
郡役人下郡文蔵殿与頭惣兵ヱ
殿与頭彦四郎殿　庄屋彦次年
寄中御立合　下日白沖より御
竿始有レ之土手より下　不レ
残御打仕舞被レ成候処　反畝
弐町七反八畝拾弐歩に相成申
候土手より上　水代舟にて御
打被レ成候処　一町に相成
都合三町七反八畝拾二歩に相
成申候（棚は木を組んで作った桟）

一、渉り外新田　切流に坂中井に
棚をかけ切流　其次に権兵ヱ
山の下を切流　三年振りに大
方埋申候　夫より地平致　荒
島灘の砂を積取　地平しの上
へ持込砂を土と切交せ候て
畑を開立　則下意東村東郷に
て御竿請候処　其後下意東村
御検地有之候に付　又御竿受
致候

一、其後中土手より上の池内久保
の上　切通り土切流　岩家ケ
谷より尊堀の鼻まで戸井を掛
　同所より池迄棚をかけ切流
候処　一年半程に大方埋候故
順々致ニ地平一稲植付申候

一、兄長左ヱ門儀は折々見分には
参候得共　逗留不レ致候

一、私儀丑春（享保六）罷越　翌寅
の春　作助屋敷に致ニ普請住
居相定候　棟梁は大工伝七に
為レ致　則家守も同人夫婦に
申付候

一、私女房サナ事　郡村（仁多郡）
宍戸喜三郎妹　本家竹崎へ貰
ひ受け　丑年より四年目辰年
二十四才にて下日白へ参候

一、寛保元酉年（1741）元屋敷致ニ普
請一移申候　其節棟梁は大工佐
吉に為レ致候　夫より追々家
富繁昌に相暮し　荒島村下意
東村本田之内高九十石餘並に
東赤江村にて別石も買求　其
上能義郡下郡役をも相勤め
猶又　月吉丸六百五十石積
月形丸千三百石積　自分にて
造り立　上方は勿論北国潟へ
も差遣し繁多に商売も致候
兎角　家業体（からだ）第一
不レ失ニ其分限一家大切に相
守り候はゝ　子孫連々可レ致ニ
相続一候　且此以後格別家の規
拠に相成候儀出来候はゝ　何
れかの代に出来候段　此旧記
に書置可レ申候以上

是時宝暦三酉（1753）三月
（数え年五十八才）

六代良兵衛の書添へ
先祖孫三郎儀繁昌に相暮候に
付　手船月吉丸六百五十石積
　月形丸九千三百石積両艘自
分にて造立　上方は勿論北国
潟へも遣し　中荷等も自分商
売物積廻候処　両艘共に破損
致し損分不レ軽儀故　勝手向
不如意に罷成候に付　東赤江
村別石田地質にして　家島よ
り致ニ借銀一不ニ返済仕一候
に付　右之田所相渡申候　然
る処幼名熊吉儀（3代）は孫の
事故　其の後御差返被レ下候
又々其後四百石積鉄吉丸と申
船被レ遣候にて　右の運賃銀
餘程御渡被レ下　重々大恩の
家島に御座候（依って）月溪妙輝信
女は家島より甚左ヱ門妻に貰
受　則熊吉改号安左ヱ門実母
に候得は　永々大恩に報せん
ため　東赤江別石に古塚を祭
り　卜蔵子孫繁栄祈所に候
　文化十五年戊寅（1828）四月
　良兵ヱ記録す
（横田史談会員　高橋一郎）

斐の上川柳会九月作句（雑詠より）

余生なお明日（あた）へ夢を捨てきれず　高木白虹
石段のひずみが語る古い墓　安部正子
孫娘帰って安堵の息を吐き　目黒申楽
見捨てられそれでも農は稔る秋　若槻白馬
つつましく年金頼りに寡婦と孫　渡辺好之
夏休みなどなくていい母の愚痴　横山まこと
ここに来てる筈店内二度廻り　太田亀甲
孫が去に大風が落ちちと淋し　松浦木公
花かえて仏も今朝はすがすがし　藤原千代子
ハワイ旅行宝くじでも当てゝから　松田牛歩
百二十年今廃屋の庭を掃く　堀江孤雷軒
黄金波秋の大風気にかかる　植田悦子
倒伏の稲穂を追い打つ風うらみ　〃　石原清女

席題「風」より

歴史をふりかえることは　未来に責任を負うことである

しばぐり句会九月抄

捨て猫の住みつきてよりさんま焼く　加納信子
晩夏光あせし簾れをたたみおく　浅野としお
風鈴や音色のすでに秋気満つ　新出谷一華
曼珠沙華草に埋れし塚ねむる　岡田麗水
やがて伐らる運命の神木蝉しぐれ　岡田蹊花
稔り田のおどしテープに走る風　門脇花子
盆終りもとのリズムや種おろす　錦織富江
六地蔵すすきの舞を賞で給う　高木白虹
盆行事も知らぬ嫁こに逆らわず　藤原樵夫
日焦顔路地抜けていく休暇明　小川あきお
十六夜の月の生るる城址かな　中澤斐水
花鮮やか山の校舎に霧晴るる　中田巣鶴

初秋の歌

三十五年同じ職場に働きて過去(むかし)のことをよく語るなり　常盤はるまさ
能率の上らずなりしと云ふ夫と稲かけ急ぐ日暮るる野辺に　野村節子
残る暑さに百日紅の下ゆけばさゆらぐ花のやさしかりしよ　畑八重子
潮騒の音ゆ心にしみるなり浜辺の街ゆく行商の旅　渡辺観翠
国道の名もなき草に埋れ咲く国体参加のコスモス一輪　真綿博子
痛む手をさすりてわびし山畑の作業終りぬ長き夏の日　岡田時子
日に幾度牛舎を覗く初産の予定過ぎたる牛を思ひて　景山悦子
孫娘東京発つと電話あり不安に時待つ十三の旅を　目黒成生
過疎の道をとぎれ途切れに宣伝カー山を遠くに谺しつつ来る　宮廻愛子
夏休みの校庭に蝉声一しきり宿直室に夕闇せまる　伊藤萩雨
子等去にて元のくらしに戻る夕べ秋海棠の雨にぬれいる　永井やよい
香代(かよ)の住む丘の家より見はるかす秋の岬の燈台白し　安部夕波

横田銘草木集(12)

丸山　巌

テリハサワアザミ（照葉沢薊）
Cirsium × Pseudo-lucens Maruyama hyb. n.

生物は各種の隔離 isolation を人為的に破ると、比較的楽に雑種をつくる。わが彩紫花園では地理的隔離を乱して近縁植物を混植しておいた結果、数多くの属内自然雑種を生じてきた。すなわち、ケッセンアキギリ（信州松原湖畔特産のシナノアキギリ×加賀白山山麓のオオアキギリ）、アヤコハギ（マキエハギ×屋久島産小型ヤマハギ）、ノジコハマギク（ノジギク×コハマギクで、仙台のミヤトジマギクに似る）、ノジシオギク（ノジギク×シオギクで一島根海岸のシオギク様のもの、すなわち逸出野生化のイソギク×サンインギクに似る）など、アザミ属・キク属・ヤナギ属・キイチゴ属・広義の Aster など10種以上もある。これ等の F_2 は固定するものも分離するものもある。

テリハアザミは、広島県帝釈峡産のテリハアザミ（C. lucens Kitam.）と三瓶山産のサンベサワアザミ（C. tenuisquamatum Kitam.）との自然雑種。テリハアザミ（元来山陽側の秋アザミであるが、山陰でも鹿足郡蔵木の河津や防石の境茹ケ岳にも分布することが分った）、サンベサワアザミと共に仲秋の候美しく咲く。開花時根生葉があり、紫紅色の美しい大きな頭花は径5㎝で点頭し、サンベサワアザミより小さくテリハアザミより大きい。葉は大形で羽状中一深裂して裂片の幅は広い。全植物体にやや光沢があり、刺はテリハアザミのように痛くなく、また総苞外片のくも毛は僅かに見られる。諸形質はそれぞれのどちらかに片よるか中間型、総合的にいうと、各種の雑種に見られるようにほぼ両親の中間を現している。雑種 hybrid に対するわが国語の〝あいのこ〟はまことによい言葉である。

今月から『川柳』も

斐の上川柳会の御要望により、毎号掲載することとしました。

時々の『増頁』も

会員の方のおすゝめで頒布価格を上げさせて頂いたり、会員の方の努力で会員・誌友をふやして頂きました。お蔭様で今まで赤字を、御厚志や「あるくみる横田」のわずかな利益で穴埋めしていたのが、独立出来るようになり、ホット致しました。

とかく発行日は守っていましたが、よた〳〵の歩みでした。何とか引継いで頂く方をお願いして、これまたホットしたいと思っています。

余裕が出る見通しがたちましたので、76号を2頁増にしました。次号79号も考えています。会員・誌友の方の歴史・文芸・文化についての御寄稿をお待ちしています。

ごあんない

島根県中世史研究会

横田コミュニティセンターで

10月24日(土)13時〜17時

25日(日)9時〜12時

発表内容
・横田庄について
・尼子氏の歴史
・仁多町高田廃寺について　ほか

発表者
島根大学、高校の教師および一般の研究者

（問い合せは横田史談会へ）

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 79 号
（11月増頁号）
昭和56. 11. 7
奥出雲編集集団

古文書研究（3）

高田寺根元録

——①島根県史（旧）の見解——

高田庄の資料として採用

島根県史（以下旧県史とす）の第六巻210頁の「ハ、高田庄」には次のようにこの文書を資料としている。文書1・4号（筆者が原文に仮につけたもので次頁の番号の下段）から、「元聖武帝の勅願寺なる出雲四ケ寺の一なる高田寺ありしが、空海出るに及び真言宗醍醐寺派に属し、玉宝山神宮密教寺（通称高田寺）と称し、院宮摂家の帰依深き古寺なり、鎌倉時代に及びては大覚寺統帝室の御崇敬深かりしは」として

14・15・16・17・18・20・27・28・29・44・30・35・40・41

の各号を列記し、それを証するものとしている。次に

2号

によって、大領神社は、仁多郡郡司大領蝮部臣が西方1キロ余の菅火山にあったのを、高田廃寺の近くに移し（のち現社地に移転）。

3号

によって、大同2年（807）空海34才の時高田寺を建立され、それより大領神社の神宮寺となったので、その本称は神宮密教寺といった。先にあげた資料は高田の庄が大覚寺統の御料庄園であったことを立証するものではないが、29・27・28号からみると当時祈請寄進は宗教的立場で、敵味方の別なく社寺に行われたが、こゝには軍役も課せられているから何らかの主従的関係が生じていたとみなければならない。従って神主右門・僧聖乗が遠く戦陣の巷に出入することになったのであるとし、さらにそれを証明するものとして、簸川郡の鰐渕寺文書の中にある8通の三所郷に関する文書（いずれ提示予定）をあげて、鰐渕寺の勅皇僧頼源が、三所郷の地頭職を賜っており、間もなく

39号

のように頼源は、高田寺・大領神社に土地を寄進している。数年たった正平年中に四回安堵の綸旨をうけている。

これは天下乱離の際に頼源が地頭となったため、旧領主が抵抗をしたのではなく、村中百姓が頼源を奉じなかったためであって、前から大覚寺統御料所であったことを傍証するものであるとしている。そして北貞治5年（1366）の後住僧浄達上人への引継文書（鰐渕寺文書）にも、この旨をしるしていることは、さらにそれを確かにするものであると記述している。

さらに県史六巻348頁では、「ヌ、大領社附高田寺根元録」の項で次のようにのべている。

御料庄園高田庄とし、

21・26・30
31・39・36
34・42・43

の各号をあげ、六波羅探題北条時輔の後室妙音尼の寄進、後醍醐天皇の寄進、頼源の三所郷拝領、そして頼源の寄進、さらに室町時代になっての山名氏、三沢氏の寄進などは、当社が今日では余り著われないが、中世では、朝廷、武将の崇敬厚い神社であって、社領も相当に付属していたものであるとしている。

高田廃寺の丸軒瓦

高田寺根元録の史的価値

については次のように述べている。

史料亡佚の事情——高田寺は大領神社の東にある古刹で大同二年僧空海の創立する処で、大領神社の神宮寺であった。根元録（22・32・33）によれば、天享3年岩屋寺賊衆によって東塔が火災にかかった。岩屋寺は北朝持明院系御料庄であったから、両統の軋轢（あつれき）によったものである。さらに後亀天皇の元中五年の賊徒来襲によって高田寺は火災にあい、旧記宝物悉く散失し、隣の大領神社も飛火で拝殿・本殿も焼失した。

西北両期の争いの余波をこの地方もうけていたのである。

さらに大いなる災厄は、天正十九年以降毛利氏がこの地を直轄領とした時、領主として入って来た冷泉民部少輔と、高田寺の住持深慶が不和で、その職に堪えず大阪生玉へ遁逃した時に幾多の文書什器を散亡させてしまった。このことは次の文書にも明らかである。

自文治頃三沢六郎三郎殿　御代々三沢郷内鴨倉ニ御在城之時　於高田村高田寺依為鬼門

（3頁へ）

高田寺根元録

（筆者により写本の文書に号数を付しそれを年代順に再編したものである。字体は一部常用漢字に改め、○のあとところどころ一字あける。）

年代順番	文書号数	本文
1	1	○高田寺草創。推古天皇ノ御願所。而百済国僧観勒上人。時ニ来国一。逢ニ難風一。出雲潟着船陸路。時ニ吉備越一。踏迷。至ニ此地一。貸ニ一夜宿一。無ニ土俗等一。石於枕爾僻寝。恨ニ其土俗等ノ無情一歌フ占レ口。 胡都婆安良志乃磐渡魔苦螺。那遍狭珂夜間濃視宿能歩訴座興。 其時ニ至ニ老翁妾婦ヲ連レ松明振探一。上人問ニ給汝等者誰耶一。翁曰ク為ニ催ニ上人旅疲慰労宴一。来ルト ニ須我非峯従一。茲ニ松明高焚キ。暖メニ甕酒一。琴弾歌躍シテ上人於是飲レ酒而留伏寝矣。夜明而眼前岩窟威儀正矣。坐ニ神人一。上人給レ問。神人宣吾者観音菩薩也。此山者天竺霊鷲乃艮乃流也。於ニ此浄域一。戎法為レ弘。国津乃尊若姫乃尊与ニ結盟一。汝此山於。有ニ因縁一。茲於居嗣。救ニ妙法唱普衆生一。有ニ仏勅一授ニ鉄乃金剛状一。給ニ忽去一。給ニ上人随喜感歎御跡拝一。給ニ十方諸仏現一。廼主ニ。信心肝銘一時。上人有ニ岩窟一。護法神。祈ニ示現。給レ着下経ニ幾月一推古天皇梵宇拾年壬戌秋都府上。称上此寺ノ草創是也廼寺僧伝上。 推古天皇梵宇。三十二甲申年夏。観勒僧正乃弟子。来役行者此地。護法神示現乃岩窟彫レ造下観音菩薩像上。今存之矣。因號ニ仏石一後石訛琴石云也。然在地鍛冶者数名御供昇レ都。
2	2	○仁田郡乃大領。移ニ須我非乃社高田一。郡家艮乃鎮魂鬼門避建ニ霊社一。郡一乃宮出也。郡人等祭下此社乃御魂上。有レ花時則以レ花祭。又立レ旗。鼓敲。苗吹歌舞而五穀豊穣祈祭。歳毎稲束数多貢ニ社乃雑用一。須我非乃社在ニ三所郷中高田一祭下仁多郡大領遠祖分霊合上。大領乃氏神申伝也。 ○老僧伝曰ク往古仁田郡家乃大領乃祖父蛇部乃臣。至ニ意宇郡舎人郷一ヨリ建ニ二重塔厳堂一。又郡司及従父兄刑部乃臣有従来供ニ建立厳堂。定密教是称百性等高田本塔甲伝也。 ○当高田寺称俗名也。称ス ニ真名是神宮密教寺一也。聖武天皇御霊夢従。当寺本尊阿弥陀如来。聖観音。至長則行基菩薩彫刻安置。建ニ本堂一。夫当山乃境内二里余。諸峯羅立凌レ雲。大原郡境越延二久野一。谿深流水清。松柏楓杉昼暗。麓飛ニ群禽一。諸獣其陰棲。諸無盡乃景色。又往昔大魔所也。推古天皇梵宇三十二年甲申七月十七日観音天ヨリ降弾レ琴。去ニ観世音忽消一化ニ石一之琴石也。列々思。観音。而須我非乃霊神。国若姫命乃化身世恐々。当寺ノ地主権現而大領宮。蔵王権現。桧山権現。小森権現。鐘楼。講堂。廻廊。東塔。西塔。中門。大門。乃諸仏像皆行基菩薩御作也。奥乃院而弘法大師乃自作像申伝也 出雲国内聖武天皇御勅願所 仁田郡岩屋寺。飯石郡禅定寺。神門郡牛蔵寺。当高田寺。 ○宝亀五甲寅年空海御誕生也。延暦廿三甲未年空海入唐也。大同元丙戌年空海帰朝真言を弘む。承和二乙卯年三月廿日空海入定也。仁田郡高田村玉宝山高田寺開基弘法大師也。大同二丁亥空海和尚三拾四歳之高田寺御建立也。 ○承和四年仁明天皇梵梵宇東寺ヨリ真言宗毎年講読密教書一通。 （大虫食紙） ○当山称玉宝山號。高田寺再創。属古義真言宗醍醐派。聖宝僧正トモ云也 ○聖宝僧正ハ洛東醍醐寺乃開祖也。兵部大輔葛声王乃御子ニシテ弘文帝乃末也。十六歳ニシテ真雅法師ニ投ジ得度ス。元興寺ニ学ビ三十四才ノ時ニ洛東醍醐寺御建立。其他圓宗唯識華厳密教ニ至ル迄悉ク究メ性濶大ニシテ邪魅ヲ畏レズ人相伝フ東大寺ノ東坊ニ鬼魅有シテ。僧正之レ叱スレバ即チ滅ス。僧正元慶四庚子年春御三十八歳時宇田多帝ノ勅ヲ奉ジテ出雲国仁田郡高田ニ来リ占シテ真言極秘恵印灌頂国中第一ノ道場トセラレ三年カ、リテ高田寺造営セラレ。法燈再輝仏力弥高クソレヨリ僧侶先達本寺ニ集リテ勤行怠事ナシト云フ。東ハ大山寺僧徒ヲ始メ西ハ石見国出羽ノ先達坊ニ至ル迄密教僧徒常ニ群集セル為メ嘉禄二年丙戌春造営御綸旨ヲ仰テ十二坊大原郡久野乃山上マデヲ拝領シテ山下山上ノ寺坊建立。誠ニ根本霊場トナル。 聖宝僧正ハ又大和国吉野郡鳥住ニ鳳閣寺建立。御五十三歳時仁和三年勅シテ伝法阿闍梨ノ位ヲ賜フ。理源大師トモ申スル也。延喜九年七月六日寂ヲ普明寺ニ示メス年七十八也 ○京都乃東寺ハ正シク教王護国寺ト称シ真言宗東寺派ノ総本山　弘法大師ニ賜フ是レ仏寺トシテ東寺始メナリ

4 (733以後) 3 2 (624) (602) 1

4 7 2 1

9 (909)(887) (1226) (886) 8 7 6 (837) (807) (835) 5 (774) (624)

8 6 5 19 3

則高田村にて百貫文之地御寄附被成武運長久の致精祈、其以後三沢左京亮殿御代天正年中　従鴨倉亀嵩ニ御城替之刻　高田寺を亀嵩へ引寺号巌松山青瀧寺伽藍七坊舎ニ建立被成、依御祈願守鬼門彼地無相違令寺務候　代々数通ノ證文什物等御座候処、毛利殿御旗下冷泉民部少輔の領地の時　住持深慶坊御領主冷泉殿と依不和　大阪生玉江立退申候　其節数通の古證文什物等散失仕候　其後中興開山法印快乗　国司堀尾殿御代に右之申立にて高五石の地御寄附被成　御奉行衆御判形御代々御国司御家老衆之御判形等御座候云々、

右ノ趣ハ中興ノ住持快乗より四世めノ住持快致　致書記置申候ニ付細書付差上申候以上

寛永二年乙酉廿二日

仁多郡亀嵩　青瀧寺　雲仙

高田寺根元録の価値——高田寺と大領神社の史的資料としては実に貴重な古記である。紙数六枚で一冊の巻をなし、用紙は古版礼記の裏書で、紙質は甚だ古雅で、その第一枚は礼記巻序、第二枚以下六枚までのものは礼記巻篇目であって、礼記には朱批を加えたものを裏返して冊子としたものである。

この古記には篇章を設けてないが、一件毎に行を改め、文首に圏点を付して、事件の種別を明かにし、本文にては句読点及反点を朱書し、間々人名異称には朱書の註書をしてあり、古文書を写したるは、方形の輪廓の中におさめ、和歌は短冊形の輪廓をしその中に記してあった。また古文書の大部分は花押も写したものが多く、したがって記録のあるものは古写本古記により抄録し、或るものは原本より騰写したものもあって、この記録は原本に準ずる史的価値あるものと認めることができる。

次にこの記録のできた年代は49号で明らかであり、筆者は快乗で雲仙の覚書にもそのことが書いてあった。深慶が逃遁したころ快乗は、衰頽した当山を再興しようし、この重要な記録の整理から着手したものと思われる。雲仙が中興の住持快乗とする所以である。この古記録は、鰐渕寺の文書や三沢氏関係の文書と、相互補完していくと少しの不一致もなく、その文体は当代の世状にもよく一致しているから、史料としての価値は原本に譲らざるものと信ずると旧県史の編者であり筆者である野津左馬之助ー天籟は誌している。

高田寺根元録の所在

大正12年5月25日、当時の県史編さん委員野津左馬之助の調査によって、郡村字大裏原が風土記時代の郡家跡と確認され、標柱が建てられた。（現在の石碑はその三年後に建立）　その折大領神社の由緒についても調査の必要を認めたが後日を約しその足で大字高田字岩屋にある当地方最大の古墳の調査に向った。そこではからずも大原郡大東町の俳人であり、東京帝国大学理学部の人類学会々員でもあった竹内栄四郎（職業はさんど）の実地踏査中に出くわし、話は両人協力して神社の由緒探索の約束へと発展した。その後竹内の努力によって青瀧寺その他から、高田寺根元録と雲仙の覚書が発見された。これに勢を得て、仝年7月10日付で大領神社の社号復旧願（明治初年以降は諸訓神社という）がまず提出された。その時これらの二文書は資料として提出された。所管の内務省の某考証官はその価値を認め、仝年8月20日付で許可となった。ところが旬日あとの関東大震災で内務省も焼失し、二文書は灰となってしまった。傷心の中にも仝13年1月23日付で昇格願を提出し、昭和3年11月2日付にて内務大臣望月啓介より郷社昇格の許可が下りたのである。

あとで詳述するが高田寺は大字高田字本堂にあった。今は石段が若干残っている。ほかに軒丸瓦等若干が出土し保管されているが、これの時代判定は最近では保留となっている。

以上の経緯は、亀嵩村誌の記述と、当時のこれらの推進者の中心におられ、現在103才の長寿を保っておられる、高田の藤原勇造翁の口述とによって記したものである。明確な記憶をもっておられたので、文書発見とその信用性を確認できた。

従って野津委員が旧県史執筆の時には原本は焼失していなかったとも考えられるが、出版された時にはすでに焼失していたことになる。幸にその控が残されていて大領神社宮司の宅にある。

両文書発見当時の事情を見知っておられる藤原翁の証言は、私のこの探究を急にはかどらせてくれたのである。

再度の検討を必要とするのは

覚書は別として、根元録を読んでみると種々不審の点もあるので、専門とするものでない一物好き屋の手にはおえないと思うが、在地の者として巾広く渉猟して関係する資料を集め、できれば不審な点の解明にいどみ根元録の資料価値を高めたいと思う。

次回からまづ根元録を書き残した快乗が、岩屋寺院主であって青瀧寺住職であったことから解明し、この点の認識にたって一件一件の文書を追って検討を加えたい。そしてこの地方の中世史をこの面からも豊かに描きたいと思う。ただし本誌の性格上通俗的に書くことにもしたい。

（横田史談会員　高橋一郎）

第三回陰陽郷土史愛好者懇談会

十一月二十三日（祭日）

午前九時半〜午後四時

広島・比婆・西城町　開発センター

当地からも発表二〜三名の予定

歴史をふりかえることは　未来に責任を負うことである

神有月集

丈のびし紫苑の蕾と蒼空に踊り子とんぼあまたとび交ふ　永井弥生

沓き日の祖父母の労苦を想ひつつ手扱ぎセンバにて種籾をとる　伊藤萩雨

しば栗の皮をむきつゝ夜の更けを生活のことなど嫁と語りぬ　畑八重子

難無くて二百十日の過ぐる日を稲田に佇ちて群雀追ふ　景山悦子

久に訪ふ山路は葛（くず）にはばまれて枝々たよりて歩を運びおり　真綿博子

澄む空に星またたきて下弦なる片割れ月は光おさめぬ　渡辺観翠

日曜の予定くずれて刈捨の稲田に夜来の雨の降る音　宮廻愛子

短歌よみて筆手にすれば昂ぶれる心はいつか和やみており　目黒成生

祖先より継ぎし棚田の峡き田も草茫々の荒地となりぬ　岡田時子

外食の多しとふ息子の健康を気遣ひにつつ玉ねぎ刻む　野村節子

マブニの丘にそゝぐ夏陽も他愛なく忘らるるものか背筋に寒し（沖縄にて）　常盤はるまさ

夜の扉とざして祈るひとときが生きる明日への夢を誘（いざな）ふ　安部夕波

しばぐり句会十月抄

押花にひと枝手折る秋ざくら　加納信子

夕膳の味覚ひとしお初サンマ　門脇花子

幼姉妹数え分け合う貰い栗　高木白虹

暑すぎてまた朝寒のよわいかな　田辺竹野

湖や一点もなし今日の月　新出谷一華

湯上りに降り佇つ闇の木犀かな　中澤斐水

叢て立つ曼珠沙華なり銀山路　小川あきお

葉の色に褪せさらばいぬ秋紫陽花　岡田蹊花

無縁仏烏瓜の紅艶めけり　浅野としお

秋日ざし棟木打つ音キンととぶ　小川あきお

おだやかな秋の日溜り投票所　錦織富江

鎌を研ぐ水も秋なり手をひたし　藤原樵夫

横田銘草木集(13)

丸山　巌

ハマベヨメナ（浜辺嫁菜）

×Heterokalimeris Maruyamae Kitam.

越年性で海岸に生えるハマベノギクHeteropappus arenarius Kitam.と西部本州の山地村落に多い多年性のヨメナ（カンサイヨメナ）Kalimeris Yomena Kitam. との間に生じた異属間自然雑種の多年草。雑種起原ではあるが、固定して稔性は完全であるので、子孫は依然としてハマベヨメナで繁殖する。この植物の発生発見地は浜田市の桧の浦と外の浦の１０箇所ばかりであるが、これらの自生群生地は道路改修や都市計画に依り全部削り取られ、今は外の浦産の移植品がわが彩紫花園に６箇所残存するのみである。

ハマベヨメナの名は、ハマベノギク×カンサイヨメナの意で名付けた。根生葉は前者に似て先端に粗鋸歯のある長いへら形の有毛、花茎は１m近く伸びて分岐し枝先に多くの紫碧色の頭花を美しく着ける。花径５cm、周囲の舌状花は２輪、pappusは短くはあるがhetero、（中央の筒状花のものが長く、周囲の舌状花のものが短い）。総苞外片は大きくとがる。なお、細胞学的にいうと、ハマベノギクは２n＝36．n＝18．カンサイヨメナは２n＝63，64，66．ハマベヨメナは２n＝54．n＝27.（F_1 の還元分裂は完全正常でn＝27の生殖細胞を生ず）。細胞学の人は片親を２n＝72．n＝36のオォユウガギクと推理してハマベヨメナと同姿の２n＝54．n＝27の固定新植物を人工的に作出しているものの、外部形態や分布などからみると、このハマベヨメナは、ハマベノギクとカンサイヨメナとの混生地に生ずること、２n＝63のカンサイヨメナもその還元分裂において27と36との染色体数を持つ生殖細胞を生ずることの可能を考え、この雑種起原の珍奇貴重な種の片親をオォユウガギクとせず敢えてカンサイヨメナとするゆえんである。

これと全く同様な問題はマンジュシャゲとショウキラン（ショウキズイセン）との雑種の美花シロバナマンジュシャゲに見られる。（もっともこのものは不稔であることが異る。）

長年月をかけて捜し集めた彩紫花園の貴重な生き資料もずい分少なくなった。家をあけがちな私に代って、これらの生苗を護り続けてくれた妻であったのに、その没後これらの数多くが消滅していくのをどうすることもできなかった。

前号の訂正：本文13行（校正落ち）テリハアザミ→テリハサワアザミ

斐の上川柳会十月句会抄（雑詠より）

ほんとうの歳を目尻の皺に聞き　松田牛歩

紫蘇の色しむ指先に亡母おもう　藤原千代子

生唾を飲ませたとこでコマーシャル　松浦木公

迷惑な息が受話器に乗ってくる　松浦愛子

赤い実をちりばめ樹令三百年　ー名樹探訪ー　堀江孤雷軒

選挙戦尾鰭のついた立話　安部正子

子や孫に気兼ねは妻の保身かも　高木白虹

共進会手綱持つ手に汗にじむ　若槻白馬

選挙戦女房愛嬌で票稼ぎ　渡辺好之

投票所でさて誰を書こうか浮動票　太田亀甲

我が呆けは年々増して老いを知る　目黒申楽

「のんの」さんと言う孫名月隠す雲　横山まこと

10 9 ○東寺ノ法系。空海ー實恵ー真済ー真雅ー宗叡ー真然ー益信ー聖宝第八代目ナリ

11 11 ○康保四年正月十日円満院様高田寺大領宮祈請綸旨一通。

12 (1221)(967) 23 ○後鳥羽院依承久兵革遷二幸隠州海部郡一之時。自刻二笛一。高田寺大領宮短冊寄附給也。

13 (1253) 13 ○建長五年癸丑正月元日羅漢堂時二供養一木像画像乃羅漢。放二皆光一照二寺内一　於二寺外乃松上一出現二十方羅漢等一。人々皆拝礼。昔於唐土天台山乃石崖給レ顕。其後曾不聞。於此霊感銘二皆心肝一。斯世無二比類一云。聞二霊徳一忽天聴達。

14 14 ○建長六年三月御嵯峨院祈請御綸旨一通。

15 (1268) 15 ○文永五年亀山天皇梵宇春高田大領権現へ御嵯峨院様短冊御寄付。

八雲立つ出雲八重垣かきつけて
昔語りを見るぞかしこき
（裏面ニ後嵯峨院筆トアル札張テアリ）

16 (1268) 16 ○文永五年亀山天皇梵宇春後嵯峨院様短冊同封入道右大弁藤原光俊様短冊高田寺大領権現御寄附。

千早振この八重垣も春立ぬ
ひの川上は氷解くらし　光俊

17 (1281) 17 ○弘安四年五月後宇多天皇梵宇亀山御院の御祈請及寄進綸旨一通。

18 18 ○同年同月高田寺裏ノ権摩場山為二敵国軍舟全滅一大供養。勧進玄蔵坊。

19 (1302) 20 ○弘安六年後宇多天皇梵宇亀山御院ヨリ高田大領権現御神鏡御寄進。

20 24 ○乾元元年十二月十日信濃坊片切源朝臣高田寺へ滞在礼として刀剣御寄進状一通。　信濃坊片切源朝臣トハ三沢為仲様トノ事也。

21 (1306) 25 ○同年同月同日信濃坊片切源朝臣高田大龍権現御剣寄進状一通。

22 10 ○徳治弐年五月京都東寺一長者實相寺殿御宝物ノ聖観音像御寄進。同年五月大和国巨勢庄實相寺東谷殿両界曼荼羅幅御寄付。

23 (1311) 12 ○応長元年正月十日鷹司実相院僧正様高田寺造宮寄進状一通。

24 (1313) 21 ○正和二年四月五日尼妙音寄進状一通。

奉寄進高田寺大領権現料田
高しば内山野大領権現へ
あべの二部之跡はついぜんのために
高田寺へきしん申所也
仍後日のために状如件

25 (1318) 26 四月五日　尼妙音

○文保二年五月二十一日左衛門権少尉中原権俗名寄進状一通。

一　八百文三所郷琴石
一　壱貫百七十文横田郷大曲村
右之通令高田寺大領権現寄附候永代不可有相違者也仍如件
文保二年五月二十一日
左衛門権少尉　中原朝臣（花押）

26 (1323) 22 ○元享三年正月十日　岩屋寺賊衆寄集東塔火災にかゝる

27 (1332) 29 ○元弘弐年十二月　大塔宮能野下向時之法印右門乃軍忠状一通。

大塔宮御門跡能野御下向時依忠節准拠修学者御免之由被仰出候諸先達其旨可有存知者也依執達如件
元弘弐年十二月日　法印右門
進上御奉行所

28 (1334) 27 ○元弘三年三月廿日後醍醐院より高田寺聖乗法印船上山へ御召の綸旨一通。

29 28 ○元弘三年三月廿日名和長年より大領権現神主右門へ郡内豪族神主乃刀剣集勧誘状一通。

30 44 ○元弘三年三月後醍醐天皇朝敵治平の御綸旨一通。

被綸旨儲
右以王道之再興者専神明之加護也殊仰菅火山大領権現之冥助欲致四海大平仍退逆臣為復正理挙義兵所被企征伐也速得官軍戦勝之利帰朝廷静謐之化旨精誠可祈申勅願令成就勧賞可依請云依天気状如件
元弘二年三月廿日　左中将（花押）

31 (1334) 30 ○建武元年七月五日後醍醐院より高田寺大領権現へ懸仏二個幷出雲国布勢郷中村田畠祭料田に御寄進綸旨一通

32 31 ○建武三年の春地頭職頼源僧都殿三所郷拝領通達状一通

33 39 ○建武三年五月十日鰐渕寺長吏頼源僧正御寄進状一通。

覚
一　壱貫五百文　高田乃神田
一　壱貫八百文　郡村大領原田

一　五百文　　高柴みぞ田
以上大領権現祭料
一　三貫五百文　高田の北山野
一　弐貫文　　湯野あら田
右為志下置所永代不可有相違者也仍證文如件
建武三年五月十日　三所郷地頭頼源
高田寺聖乗へ

34 (1346)　35
○正平元年三月十日後村上院御寄付の釣鐘の銘写
出雲国仁田郡高田荘鎮守大領権現御宝前
右志奉為聖朝文武安穏太平四海長久萬民豊楽
普勧道俗之助成新発新発意鏡之響願上驚和光
聴下覚妄想夢乃至結諸人施与紬素悉成三世之
願望化生九品之宝刹　敬白

35 (1350)　37
○観応元年二月八日足利尊氏祈願書一通
凶徒退治祈祷事大龍権現近日殊可被致精誠之如件
観応元年二月二十日　（尊氏の花押）
高田寺大龍権現衆徒中

36　38
○観応元年七月二十一日足利尊氏祈願書一通
凶徒退治祈祷事転読大般若経一部殊可被致精誠之状如件
観応元年七月二十一日　（尊氏の花押）
高田寺

37 (1351)　40
○正平六年七月十日左馬権頭楠正儀禁制一通。
於大領権現境内並高田寺境内当手之軍勢甲乙等濫妨狼籍之事
右有違犯之族者連可処罪科者也仍如件
正平六年七月十日　左馬権頭（花押）

38　41
○正平六年七月十日後村上天皇御綸旨一通。
高田寺大領権現社僧可抽御祈祷之精誠者綸旨如此悉之以状
正平六年七月十日　左少弁（花押）

39 (1383)　36
○永徳三年八月二十四日前伊予守事務所並寺領安堵状一通

40 (1388)　32
○後亀山天皇御宇元中五年六月十日為賊徒火災旧記宝物悉散失。

41　33
○仝年六月之大火には大龍権現も藁葺にて飛火にかゝる拝殿本社を焼く。

42 (1394)　34
○応永元年正月元日地頭源為昆乃寄進状一通
寄進高田寺大領権現寺社領並人給地事
右為天下安全武運長久所被寄進地者守先例可被致沙汰之状
仰執達如件
応永元年正月元旦　地頭　源為昆（花押）

43　47
○応永廿七年庚子卯月廿八日当時曼荼羅再興修幅。
大原郡大東庄内田中万福寺住持
権大僧都覚威修幅之云云。
筆者　陽春庵坊主　昌瑞　敬書

44 (1483)　48
○文明拾五年癸卯月廿八日　当寺曼荼羅修幅
大原郡大東庄内田中万福寺
権少僧都宥秀修幅ス
住持権大僧都快乗法印

45 (1540)　42
○天文九年七月十五日尼子修理大夫晴久御寄進状一通。
寄進高田大領権現　比田村弐町歩
右為当社領所寄進也者奉寄之状如件
天文九年七月十五日
尼子修理大夫　晴久（花押）

46 (1565)　43
○永禄八年四月十日　三沢為清寄進状一通。
仁田郡三所郷高田荘大領権現拾貫之地寄進之処也
神前而端性抜可致祈念者也仍而如件
永禄八年四月十日　為清（花押）

47 (1583)　45
○天正十一年九月廿九日　高田大領権現再興正遷宮の時三沢為虎神事
相撲御覧百姓一同へ酒被下夜もよほど更申し賑ひ別に三沢様より奉
書包青瀧寺快乗頂戴申。

48 (1591〜95)　46
○文禄年毛利家朝鮮攻メ入ラレシト聞キ大領権現氏子総出武運長久ノ
御祈祷致シタリ青瀧寺ヨリ僧侶十人出申シ。

49 (1596)　49
慶長元年快乗法印筆記写

（文書の年代順番4番までの片カナは送仮名である）

—完—

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第80号
12月号
昭和56. 12. 5
奥出雲編集集団

奥出雲俳諧史(1)　序(上)

芭蕉登場まで

——古文書研究のために④——

貴族的優雅な本連歌と俗な俳諧(こゝでは滑稽の意)の連歌

俳諧(こゝでは発句と連句の意)を国民詩として確立したのは松尾芭蕉であるが、それより約一世紀前から俳諧は行われていた。そのもとである連歌は平安末期からはじまっていた。連歌は共同体の文学である。この連歌が育った芽はすでに万葉集の中にあった。上の句(五、七、五)を尼が歌い下の句(七、七)を大伴家持が歌い続けたもので、これは短連歌という。平安後期すなわち院政期ころから、多人数で上の句と下の句を交互に連ねる長連歌が行われた。そして鎌倉期からの中世に入ると、いよいよ盛んとなった。中世は四世紀にわたって続いた時代で、保元・平治の乱・源平合戦・南北朝の乱・応仁の乱に続いて戦国時代やがて信長、秀吉を経て漸く家康の時代で平和が訪れ中世が幕を閉じたのである。この動乱期にはひとりひとりが孤立しては生きていけない時代で、助けあい協力しあわねばならなかった。こういう時代を背景に、数人で百句も千句も連ねるという連歌がはじまった。

十三世紀はじめの後鳥羽院時代になると、この連歌に二つの流れがあらわれた。有心(うしん)衆と無心衆で、前者は優雅な「古今集」から「新古今集」までの勅撰八大集の和歌の伝統にしたがった連歌で、二条良基(本誌71号3頁参照)が「応安新式」という作法を編集して確立した。優雅をたてまえとし連歌の本流となっていった。

後者は俳諧(滑稽の意)の連歌といって、ユーモラスな連歌をさした。前者はだいたい神前に奉納したりするもので厳粛なもので、文学の神である天神様を祭った北野神社が中心であった(本誌72・73合併号1～2頁参照)。それを朝廷が後援したので次第に権威が高まった。俳諧の連歌はその本連歌のあとで気楽に余興として行われていたので、多くの場合詠みすてで記録に残らないものであった。

明応4年(1495)宗祇らの一流連歌師によって「新撰菟玖波集」が編集された。これはさきの「古今集」などの勅撰集に対して天皇ではないが皇室の声がかりでできたもので、準勅撰集ともいうべきもので、それには本連歌が中心で俳諧の連歌は省略されている。

くだって応仁の乱(1467～1477)以後になると下剋上の風潮があらわれ、中下層階級が力をもってくるようになった。これらには教養はない。本連歌は八大集ぐらいは頭にないと歌えなかった(それらを本歌(もとうた)として歌い続けるため)。それは担当の教養を必要とした。そこで俳諧の連歌は即興を中心とし、自分たちの生活をおもしろくおかしくよめばよいので、教養を必要としなかったので、中下層階級がこれに関心をもちはじめた。それらを集めて明応8年に「竹馬狂吟集」(幼稚なたわいない、おもしろい付句集)があらわれた。——前句が五、七、五の長句ならその付句は七、七の短歌、前句が短句なら、付句は長句であった——

1525年になると山崎宗鑑という近江の浪人が「犬筑波集」を編集した。「竹馬狂吟集」をもとにして編集したもので、準勅撰の本連歌集「新選菟玖波集」に対して謙遜して犬をつけたもので、昔から犬侍、犬畜生といって犬は賤しい意味をもち、本連歌の雅に対する俗をあらわす。俗だという自覚をもちながら、民衆の自己主張がはじまったことを意味するもので、このことは重要である。「犬筑波集」に

(前句＝短句)
無念ながらもうれしかりけり

(付句＝長句)
去りかぬる老妻(おいめ)を人にぬすまれて

(前句＝長句)
秋山に前しどけなき人いりて

(付句＝短句)
松たけなりと人はみるらん

離縁しかねていた老妻を、たれかもの好きなやつがつい盗んでくれた。しかしやはり自分の女房と思えば、別れたくはあるが盗まれたとなると残念でもある。でもよく考えるとよかった。

秋の山に前をはだけた人が入ってきた。何かぶらさがっている松茸だろうというので、記録に残らぬとなると好き放題に気安く(優雅さにはほど遠いが)詠める庶民の自由があった。また

ぬす人をとらへてみれば我が子なり
切りたくもあり切りたくもなし

もある。これが俳諧の連歌である。

天文9年(1540)伊勢内宮の長官荒木田守武が「守武千句」を編

集した。「犬筑波集」は二句だけの付句であるが、これは百句を連ねたものが十種あった。本連歌（雅）で千句やるのが正式な奉納であったのに準じたもの。

伊勢はもとは皇室の祖先神が祭ってあって、平安時代は一般の武士をはじめ国民大衆は参詣できなかったが、中世の武家時代に入ると武家の守り神になり、室町時代になると全国一般の町民や農民の守り神になっていった。それはお伊勢さんというのは天照大神で、農業の神で農民たちは信仰せねばということになり、一生のうちに一度は伊勢参詣をせねばならないという風潮となり、全国から人々の集まる場所となった。「守武千句」は庶民の要求の反映したものであった。その中に

飛梅やかろがろしくも神の春

菅原道真が大宰府に流されて京都をたつとき、わが家の愛する梅をみて「東風吹かばにほひおこせよ……」と詠んだら、その枝が折れて大宰府にとんだ。そしてそこが梅の名所になったという伝説がある。神のことだからかるがると飛んだという意味である。その句の次に

われも〳〵のからすうぐひす

鶯で春、梅の枝が飛んでいくと鳥も鶯までもわれも〳〵とはしゃいでいる。第三句は

のどかなる風ふくろうに山見えて

のどかな春。風吹く楼と梟の掛詞で、もちろん烏鶯へのあしらい。のどかな春風が吹いている楼上から山が見えるというのは、昼は目のみえない梟なのに、山が見えるという意外性、そこに俳諧のおもしろみがある。

このように言語遊戯を主とし、ユーモラスな調子で俳諧の連歌を、本連歌なみに百句ずつ十種の千句詠んだので、しかも伊勢の長官がというので、俳諧の権威は次第に高まっていった。こうして民衆詩として滑稽な余興であった俳諧の連歌が、「犬筑波集」と「守武千句」で独立の機運を迎えたが、このころ天文年間から（信長時代）戦国時代へ突入し、全国各地に戦国大名が所領争いをし、雑兵動員もあって農民も余波をうけ、風雅は勿論俳諧（俗）どころではなかった。そして発展はとまってしまった。

貞門俳諧の確立

やがて家康時代に入り天下の平和がとりもどされると、松永貞徳（1,571～1,653）が登場した。父は浪人で連歌師、貞徳は秀吉の右筆（秘書、書き役）をつとめ、豊臣が倒れてからは浪人して京都にとどまり、すでに歌学や古典を学んだ学者として、一流の連歌師でもあったから、私宅で塾を開き、一般町民を集めて「徒然草」などを講義した。

慶長の江戸開府ころまでは、一般武士も文盲であった。家康は道徳と法律で治める時代であると儒教を採用し、朱子学を本流とし林羅山を登用したので、各藩も次第にこれにならって藩校を設け、侍の教育をはじめた。一方、庶民階級でも貨幣経済の時代を迎えると、読み書きの必要にせまられたので、私立の寺小屋が生れはじめた。さきの「犬筑波集」「守武千句」の時代は読み書きできたのは、上流武

晩秋・初冬の賦

冴えわたる冬の星座と襟を立て歩度をゆるめて峠を越ゆる　常盤　はるまさ
庭石をぬらす時雨にりんどうの色まさりつ、秋の暮れゆく　畑　八重子
愛牛の登録点を確めて友とよろこび肩ゆすり合ふ　景山　悦子
小雨降る山に松伐る女あり雲厚くして日は昏れむとす　渡辺　観翠
脱穀の終らぬ野辺の夕暮に初雪舞ひ来ぬ稲架の上に　野村　節子
秋深み山のみどりはうすらぎて紅葉は日毎に紅を増しゆく　目黒　成生
初霜につぼみふくみしシクラメン出窓に出して冬陽浴びせむ　岡田　時子
昏睡の父に告げたし生れたの平がな四文字の重さに泣けり　真綿　博子
砂に書く沓くなりゆく君の名を老ひ初めし夏の浜に遊びし　宮廻　愛子
釣糸をはるかにとばし魚信待つダムの水面に山紅葉映ゆ　伊藤　萩雨
斐伊川の速き流れにゴム長の足踏みしめて銀杏洗ふ　永井　弥生
君病める病院の窓は閉ざされて逢はずに帰る夕映への道　安部　夕波

しばぐり句会十一月抄

更けて行くベットに手繰る虫の音　恩田　魚跡
種南瓜土つく尻を撫にけり　岡田　麗水
大輪の菊は王者の如く枯れ　新出谷　一華
岩風呂に雫ぽとりと秋の寂　加納　信子
懸崖菊床に移して日々籠る　浅野　としお
旗を差し島を離るるみかん舟　高木　白虹
児らの声戻る秋雨山隠す　藤原　樵夫
念力や大菊蕾割り迸る　岡田　蹊花
立話素足に冷え冷え冬立つ日　門脇　花子
旅の留守庭にひっそり石蕗の花　中澤　斐水
茶の花や豆選る老の背まるく　渡部　夕峰
秋炬燵膝のうすれし古ズボン　錦織　富江
秋茄子の終りとなりしおけ洗う　峰石　美代子
苔庭に山茶花の紅散りしきぬ　田辺　竹野

主、神主、上流の町人ぐらいであったが、100年たった三代将軍家光のころになると、一般武士も百姓、町人も、文盲から解放されはじめたので、定型の民衆詩としての俳諧が普及し、たしなむ時代を迎えていた。貞徳は中流以上の町人を中心に育てはじめた。

寛永10年（1,633）日本における最初の民衆詩集「犬子集」を編集した。やはり犬の子みたいという。中世的な考え方をのこした名前であった。発句が1654句集まっており、二句だけの付句が1,000例あって、人は

伊勢山田100　京都51　堺19
江戸5　因幡（出雲）2　大阪1

の人数で、俳諧の伝統は伊勢で戦乱中も守られてきたことをしめしている。伊勢は武家の守り神の所在地、神罰をおそれて戦乱にはまきこまなかったことがその原因である。このころの文化分布をもしめしている。大阪1名がやがて経済の中心地となると、町人のエネルギーは文化を生み、西鶴、近松の登場で日本文学の中心となってゆくのである。

古代は民族詩集「万葉集」、王朝時代は貴族の詩集「古今集」、近世に入ると本当の民衆詩集「犬子集」、やがて近代になると個人主義的主張が中心となって個人詩集の時代になっていく。俳諧も発句（長句或は短句）—付句（短句或は長句）の連続の共同体意識がくずれ、それが正岡子規によって、今日の俳句（発句のみ）という個人詩へとすすめられていったのである。

「犬子集」の内容は省略するが、文盲から解放されて間もない連中に、わざと幼稚な言語遊戯的なものをつくって、すなわち民衆の水準に降って、一歩ずつ自分の水準に手をとって引きあげていくというのが、貞徳以下の貞門の宗匠たちの方針であった。このころはまだ士農工商とはっきりした階級の文化は生まれていない。侍も少し前の戦国時代には、兵農一体の民で田をつくり畑を耕していて、いざ戦という時に出動している者であったから、風俗の差は少なかったからである。

貞門の指導者たちは、自由に五、七、五、七七で詠えるようになったら、究極は和歌、連歌に進まねばといっている。そこで勅撰「八大集」「伊勢物語」「源氏物語」を暗誦できるようにして置かねばとすゝめたから、貞門の俳諧をやる町人はこれを読んだ。このように貞門の俳諧は民衆に詩形式を与えたというだけにとどまらず、民衆の古典的な教養も高めるという文化史的役割も果した。

それが一方出版文化を刺戟し、歌舞伎、人形浄留璃、浮世絵など、町人たちに独自な文化をもたせはじめた。

やがて言語遊戯だけでは飽きたりなくなり、自分たちの生活を詠いたい。自分たちの風俗も詠いたいという気運が高まってきた。そこに大阪の西山宗因が登場した。

絲原記念館の古文書の中には先にあげたような諸本のほとんどが揃っている。たゞ発行された時に求められたのでなく、鉄師が松江藩によって統制され、五鉄師が成長して強力になっていく一方、鉄業も安定し上方の上・中流町人のこうした文化気運をとり入れるようになった。享保年間末から宝歴年間にかけてのことである。この地の鉄師たちが中心となって、庶民文化の向上に大きい力となっていくのである。次第に明らかにしたい。

宗因の談林俳諧の登場

石山宗因は、貞徳と同じく武士出身で、加藤清正の一族の肥後八代城主の家臣であったが、加藤家のとりつぶしで浪人となり、京都にでて連歌を修めて宗匠となり、大阪に移ってから俳諧をはじめた。神様のためによむ連歌の余興に、自由奔放に俳諧をやったのであるから、不自然ではなかった。俳諧で新らしい町人風俗をどんどん読んだので、町人が集まるようになった。

寛文10年（1,670）65才の時剃髪し隠居し、大阪天満天神宮の連歌所宗匠の職は息子に譲り、公職から自由となって本格的に俳諧の指導をはじめた。

宗因の発句の一つ

風にのる川霧かろし高瀬舟

「かろし」は川霧と高瀬舟の両方にかかっている。次に連句一つ

一封の書状に涙つつみこめ
故郷の妻にやる金もなし

出稼ぎにでたものが故郷の妻に手紙を書くとき、本当は金を入れたいのだが、それがないので涙をという付句であるが、もう言語遊戯ではなく、人生があるというものである。

松尾芭蕉、井原西鶴もはじめは言語遊戯である貞門の俳諧をやっていたが、飽きたりなく感ずるようになっていたころ、宗因があらわれて庶民の生活をいきいきと詠みはじめたのである。二年ほどたつと貞門の俳諧をやっていた大阪の町人たちは、宗因のもとに集まりはじめた。寺の和尚になるための基礎的仏学を勉強する学問寺を談林といった。いつも熱心に俳諧をしに集まる様は談林のようだと、この派を談林派とよび、談林俳諧とよぶようになった。

この派の中で頭角をあらわしたのが、井原西鶴と松尾芭蕉である。西鶴は人生を歌うことに芭蕉は伝統を大切にし自然を歌うことに向った。西鶴は紀事的につき進んでそれを小説へと発展させて小説家となり、芭蕉は抒情を重んじたから、自然の中に心を詠う自然詩人として、俳諧を高める方向へ向った。

形式化へ

芭蕉の出現までは、俳諧は連句百句が一まとまり、すなわち百韻が主流であったが、やがて三十六句の歌仙形式を生んだ。

最初の発句＝立句　（客人が）
二番目の句＝脇（脇句）（主人が）
三番目の句＝第三

最後三十六番目の句＝挙句
といゝ
発句～六句　表
七　～一八　裏
一九～三〇　名残りの表
三一～挙句　名残りの裏
といって、各段階それぞれに詠むについての主題やそれに伴う制限や禁句があった。しかし発句から挙句まで一貫した筋の必要はなかったが、たゞA句とB句との間には一つの世界（詩境・詩趣）があり、B句とC句との間にはつながりがありながらまた別の世界へと展開するというようにして、三十六句の挙句へと詠み続けられていくのであった。これらについては次回についてさらにふれたい。当地方の俳諧は、宝暦年間から幕末まではこの伝統を正式な句会には堅持しているのである。

（この回の記述は、暉峻康隆氏の二書を中心として、東明雅氏の二書および梅原猛氏の論文を加えてまとめたものである。）

横田銘草木集(14)

丸山　巌

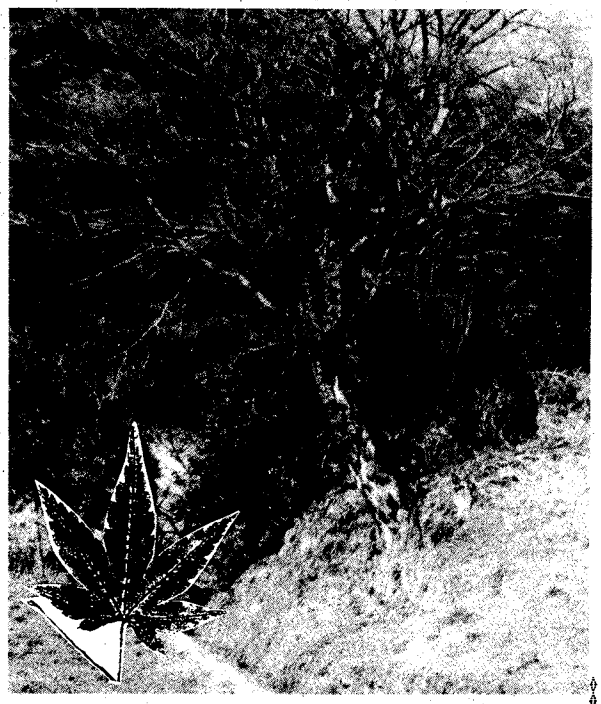
和田（杠家）のイロハカエデ

本樹は〝横田の名樹〟に　和田のモミジ　として紹介されている名巨木である。しかしわれわれから見るとカエデとかモミジとかいう呼び方は、植物学ではユリとかマツとかいうような植物の総合呼称であるので2，3のことを付記して、蛇足かと思われることも意識しながら敢えてこれをする。

もみぢは　色ハ揉ミテ出スモノ、揉ミ出ジルモノ、サレバ露、霜ノタメニモミイダサレルモノナリ　が語原とされ、古くは黄葉の字を当てたがのち紅葉と記されるようになった。つまり美しく紅葉する植物の代表としてこのモミジの名ができた。一方かえでは蛙手の転訛で、これはその葉形からだという。

また我国では楓の字をカエデと詠むが、これは本草学者の当て違いである。中国の楓は牡牧の詩にもある遠上寒山石径斜　白雲生処有人家　停車坐愛楓林晩　霜葉紅於二月花にでる楓（フウ）Liquidambar Formosana Hance という紅葉の美しい別樹で、我国には自生しない（もっとも化石は生じ、ま同属のアメリカフウL. stytaciflua L. は横田小学校庭に1本植えられている。）台湾や中国特産の落葉樹である。中国ではこのモミジ・カエデの類（Acer 属）の木には槭の字を使う。このAcer は北半球の温帯に125種ぐらいあり、我国にも70余品がある。そしてこれらにはすべて、ハウチワカエデ、オオモミジ、などの如くカエデ・モミジの名がきちんと付けられているので、これらをかってに替え呼んではならない。しかし、中にはカエデやモミジの名の付かないものや、モミジ・カエデの両語尾のついたものもある。

ところで和田の大槭樹であるが、これはイロハカエデ（またはイロハモミジまたはタカオモミジ）と呼ぶ特殊な種類で、島根県下には自生しない。樹形が美しく枝がこもり葉が小さく、低地でも美しく紅葉するので、県下のモミジの名所に広く植えられている。Acer palmatum Thunb. subsp. palmatum という学名で、葉柄が長く葉が小さくて7裂し裂片の縁は重鋸歯　翅果は小さい。日光の照射がよく急激に寒冷が襲うと樹木は美しく紅葉する。（写真は許しを得て〝横田の名樹〟から借載した。記之謝之）



斐の上川柳会十一月句会抄（雑詠より）

朝起きをふとんの温みが足を引き　佐佐木　千世
里帰り子をほっといて眠りこけ　久村　美津
家族連れ吾妻の峯でヤッホーと　安部　正子
些かの老を知りけり虫眼鏡　石原　世以
文化祭日頃のうでを晴にたて　渡部　ミツコ
一つだけ余計な口が悔を溜め　藤原　千代子
赤い羽根金額決めて配って来る　横山　まこと
道路鏡紅葉化粧の過疎の谷　松田　牛歩
不心得惜しくも散らす文化財　目黒　申楽
七五三孫の衣裳に見栄を張り　渡辺　好三
西高東低炬燵で柿の皮を剥ぎ　堀江　孤雷軒
今佳境のとこへ電話のベルが鳴り　太田　亀甲
留守番の俄やもめが目刺買い　高木　白虹
コスモスがゆれて思出よみがえり　松浦　木公
嘘一つ添えて病人楽しませ　若槻　白馬

会員配布一部百五十円／六九九ノ一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者　高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 81 号
（1月号）
昭和 57. 1. 2
奥出雲編集集団

岡山県川上町にも移住した
三沢氏の支族

三宅隆通

私の住んでいる岡山県川上町（備中川上郡）内の大字三沢の地は、戸数約百戸。江戸時代を通じて川上郡三沢村と呼ばれ、明治二十二年隣接の領家村・地頭村・七地村と合併して手荘村となり、戦後の昭和二十九年に更に広域合併をして川上町が誕生した。この三沢の地は天正年間、出雲三沢庄から三沢氏一族のものが移住して来た所で、村名三沢村も三沢氏に由来する地名である。

三沢氏は江戸時代を通じて三沢村の庄屋をつとめ、明治の始め庄屋の廃止によって若い当主三沢進は、新しい道を求めて東京に遊学、慶応義塾に学んで後横浜商業学校を創立した。現在の横浜商業高校の前身である。

三沢進氏の没後門下生たちが編集した「三沢進先生伝」によると、元亨年間に三沢宇右ヱ門尉が、手の庄国吉城の城主口羽中務太夫春良を頼って、備中に来て定住したと書かれている。

しかしこの記事は少し違っている。備中三村一族の居城国吉城が落城して、毛利氏の家臣石州口羽の城主口羽春良が代官として国吉城に来たのは天正三年であるから、三沢氏の備中への移住は天正三年以後でなければならぬ。天正五年から天正十七、八年の間ごろと考えられる。

この時、三沢宇右ヱ門尉は数人あるいは十数人の一族郎党とともに集団で移住している。

現在、川上町三沢の地内に仁多郡三沢地方と同じ地名がいくつかある。日出谷（ひいだに）（斐伊谷）、三沢、八頭、馬木、馬路、小原などがあり、また、三沢、津森、中畠、橋本、深田、馬木等、斐伊川流域地方にある苗字もいくつかある。

出雲三沢氏が家運の挫折に遭遇した時、一族中の三沢宇右ヱ門尉なる人物が、津森、中畠、橋本、深田などの人々とともに旧友口羽春良を頼って備中に来り、口羽氏も朋友の好意で色々斡旋し、現在の三沢の地（当時は長通村と称していた？）に居住させ、口羽氏によって村名も三沢村と呼ばれたのであろう。

関ケ原合戦の敗北で口羽氏は慶長五年、長門国へ引揚げたが、その頃三沢はすでに三沢村の庄屋を任命されていたようである。

彼らは新しい自分らの居住地に出雲時代の部落名や屋敷名をつけ、三百年にわたって安定した村づくりをし、明治の新時代になって百姓も苗字を称することになった時、出雲時代の先祖の苗字を復活したであろう。

（岡山県川上郡川上町・郷土史家）

補註3頁にあり

芽をふき出した陰陽の交流

「思うに藩政時代の割拠閉鎖政治圏の時でも、奥備後の民衆は山を越えてその経済交流は、今日想像を超えたものがあったと思われます。明治置県に入り交通機関の発達もあって、その必要を無くし全く鎖された陰陽となって今日に及んで参りましたが、郷土の歴史を探る場合、この陰陽交流の歴史を除いて語ることはできないとさえ考えられます。

本会はその意味で、陰陽の鎖された百年の文化の窓がやっと開かれたという感を強くするものであり、更には地域別同好組織の横の連携を深めることも急務でありますが、その機運を開発する機会ともなり得る点、誠に同慶の至りでもあります。正しく志を同じくする人々の多年にわたる念願の実現であります。　以下略」

は今年度（56・11・23）の陰陽郷土研究会の世話人（庄原市・広瀬繁登）から頂いた礼状の冒頭の言葉である。会場地西城町の研究会をはじめ多くの方々の御協力によって成果があった。新見市・日南町・横田町から馳せつけ、県境を接する備中・伯耆・備後・出雲の歴史を語り合ったことは意義深かった。「クジラの化石」の三浦発表は、帝釈峡・日南町多里の化石研究とあわせてさらに前進し、「弥生期の四隅突出台状墓」発表は、出雲のそれと比較検討して新しい視点を提供するものである。また、中世両山の諸将の動きも興味深いものを含んでいる。さらに近世の砂鉄製錬（たたら吹き）技術は、奥出雲から山陽側へ流出していることなど、今後の研究交流の楽しさと重要さを認めざるを得ない。本号は、こうした研究の交流をさらに促進する意味で編集した。玉稿をお寄せ頂いた三宅氏、「にちなん文化」を恵贈頂いた武内寛氏の御好意に感謝するものである。314号線の中国山脈越えがすばらしい観光長橋を含む道路として脚光を浴びようとしている。それまでにまず両山のこころの交流・緊密が促進されることは「歴史は生きている」をしみじみ感ずる。

三沢氏の支族・陰陽交流・地域史を考える・横田銘草木集⑮・川柳・俳句・短歌

地域史を考える

日南町　中尾慶治郎

「続日本紀」元正天皇養老四（七二〇）年四月壬戌（十日）の条に

一品舎人親王勅を奉て日本紀を修す。是に至て功成て奏上す。紀州巻系図一巻。

とある。これは日本書紀完成の記事である。系図一巻は伝わっていないといわれるが、日本書紀三十巻は読んだ事がある。この事業は、「日本書紀」天武天皇十（六八一）年三月癸酉（四日）の条にある

—中略—帝紀及び上古の諸事を記定せしむ。

に始まるとされている。また、「続日本紀」元明天皇和銅七（七一四）年二月戊戌（十日）の条に

従六位上紀朝臣清人、正八位下三宅臣藤麻呂に詔して国史を撰せしむ。

とあり、天武天皇十（六八一）年を起点として日本書紀が完成に近づいていくのが感じられるが、この間、続日本紀にはまったく記述のない古事記が成立したことになっている。

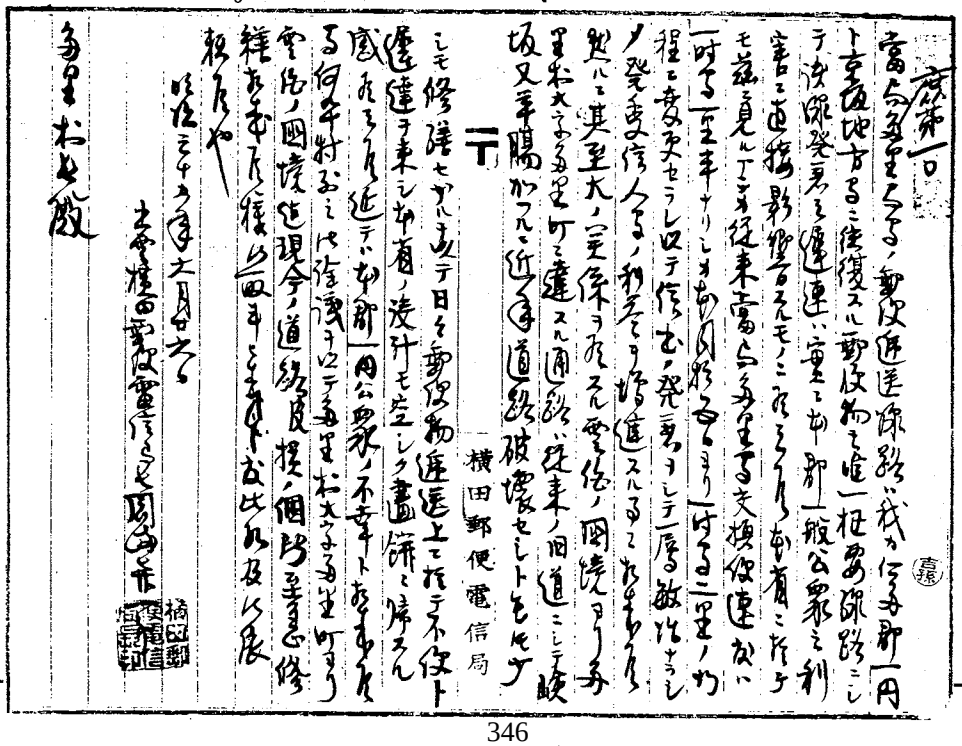
「古事記」序文によれば

—中略—　和銅四年九月十八日を以て臣安万侶に詔して、稗田阿礼が誦む所の勅語の旧辞を撰録して、以て献上せしむ。—後略—

であり、献上した日は、和銅五（七一二）年正月二十八日と記されている。続日本紀は桓武天皇の勅撰による国史であって日本書紀の後を受け、文武天皇元年から桓武天皇延暦十年までの客観的な事実の記録をしたものである。古事記の序文にあるように、詔を受けて始めたらば、当然古事記やそれに関連した太安万侶らの記述がなければならないが、太安万侶の昇進、死去の記述はあってもそれはない。続日本紀の撰者が見落したのか、あるいは古事記の序文は後代の加筆であろうかと思われるが、何れにしても古事記の成立年代と撰者は古事記序文にしか記録されておらず、それを認めるか否かは各個人に委ねられているといっても過言ではない。

また、先ごろ再評価された梶山古墳の壁画についても私たちは考えてみなければならないと思う。これまでの多くの見学者の中には壁画と思う人もいたであろうが、山陰地方には壁画は存在しないという「通説」によって一蹴されていたのである。青木遺跡も、集落の規模で、方形周溝墓等々で「通説」を覆している。

勿論事象によっては通説を肯定するものも多いのであるが、これらの事から考えられる事は、私たちがいかに不確かな根拠の歴史事象を信じているかということと、歴史を暗記する対象とする傾向にあるということである。織田信長に対する知識はあっても、私たちの地域にある亀井山城（生山）がそれと関連していかないことはないだろうか。実のところ、梶山古墳や青木遺跡に限らず、地方の多くの遺跡や史実によって中央史といわれる全国版歴史は支えられているのであり、中央史に記述されている事からは、逆に何らかの形で私たちの地域と結び付いていなければならないのである。


横田郵便電信局

私たちの地域にも、中央史と同じ量の歴史がある筈であるが、その歴史事象について根拠を持ち確かなものにできるのは、日南町に住み、生活している私たちにこそできるものであろう。県史等による戦国時代は、江美城での攻防が日野郡で唯一の戦いかの様な印象を与えているが、これでは私たちの地域に伝えられている戦いの跡は説明できない。地域の歴史事象に根拠を持ち、中央史と関連づけ、確かめることは意義のある事であるし、私たちの地域に対する誇りでもあると思う。

私たちの周囲には、墓石に限らず根拠とするに足る遺跡が数多く存在している。歴史は、通説といわれるものを押しつけられ記憶するものではなく、各人の探求する心に支えられ、確かめ納得するところに成立するものではなかろうか。

日南町中央公民館発行「にちなん文化」第一号（五十六年）より転載させて頂いた。

この文は、地域史は私どもの身の廻りをさがせば、資料は多い。庶民の生活がそこから掘りおこせるし、中央史と関連づけて考えると、生き生きとしてくる。誇りも見出すことができるというのである。馬木地区にある「南無妙法蓮華経」の石碑の碑文を集めても、そこに馬木のその時代の動きを知ることができる。路傍の六地蔵の文字にもその時代の人々の哀愁をも浮きぼりにすることができるのである。

墓石表

元号（年）	西暦	福栄	多里	日野上	石見
寛永（20）	1624		1		
正保（4）	44	2			
慶安（4）	48				1
承応（3）	52			1	
明暦（3）	55				
万治（3）	58		1	1	3
寛文（12）	61	1	4	6	15
延宝（8）	73	3	11	8	8
天和（3）	81	1	2	5	4
貞享（4）	84	0	2	15	5
元禄（16）	88	16	22	40	47
宝永（7）	1704	18	11	26	20
正徳（5）	11	6	15	30	26
享保（20）	16	48	71	131	102
元文（5）	36	16	14	49	30
寛保（3）	41	9	22	29	24
延享（4）	44	25	26	38	24
寛延（3）	48	11	21	32	33
宝暦（13）	51	63	93	112	100
明和（8）	64	38	41	60	92
安永（9）	72	50	49	59	70
天明（8）	81	48	44	56	62
寛政（12）	89	63	86	82	138
享和（3）	1801	16	24	30	27
文化（14）	04	98	74	114	171
文政（12）	18	76	77	97	110
天保（14）	30	84	94	103	167
弘化（4）	44	10	21	18	30
嘉永（6）	48	40	35	40	53
安政（6）	54	22	36	47	44
万延（1）	60	7	10	7	10
文久（3）	61	23	22	15	41
元治（1）	64	6	7	10	8
慶応（3）	65	13	21	23	34
明治（44）	68				

中尾慶治郎調べ

（補註）三沢氏の支族

口羽春良の妻は、横田町馬木住馬来⑥乗綱（⑤道綱は三沢氏から、その子）の娘。母は山内直通の娘で、宍戸隆家の母。夫の死で帰り、乗綱に嫁し二子あり。

三沢⑭為虎の妻は宍戸元続の妹。天正十七年、馬来氏とともに毛利氏に従い安芸へ、のち長門へ。

為虎は毛利藩士中、知行高第十一位の重臣。のち支藩長府藩家老で幕末まで。三沢氏の支族は、川上村、瀬戸内海家島、そして近江。こゝから仙台、九州大牟田、鳥取、伊那へと分かれる。

編集者において本文の補註を入れました。

斐の上川柳会十二月句会抄「雑詠」より

その先は言はぬが花と喉仏　若槻白馬
結ばれた絆抱き合いダイヤ婚（亀甲先生え）　松田牛歩
寝そべって母に甘える里帰り　渡辺好之
旅支度妻は白髪を染めてから　佐佐木千世
七五三晴着に親の見栄も着せ　高木白虹
沢庵が美味しく漬って隣り招び　石原世以
酌の手に絆創膏は色気なし　加納治江
行詰る日もあり大根の白まぶし　藤原千代子
木登りも憶切になり柿たわわ　堀江孤雷軒
丹精のうつわ貰でいる老夫婦　松浦愛子
孫たちのあそびと智慧にふりかえり　真綿よし子
初雪が秋の祭りをおどろかす　立脇新空
五十年振り爪切ってゆく同窓会　安部正子
霜の朝愛犬勇んで我れを引く　目黒申楽
寒空へ山は裸になりはじめ　松浦木公
大山の初雪を見て蕪洗う　太田亀甲

前号訂正　（横田銘草木集14）10行出ヅルモノ　14行かへで　16行訓む　19行 for　（2頁の本文）1行百済国僧観勒上人　17行観勒

横田銘草木集(15)

丸　山　　巌

和田（杠氏庭）のヒイラギモクセイ（柊木犀）

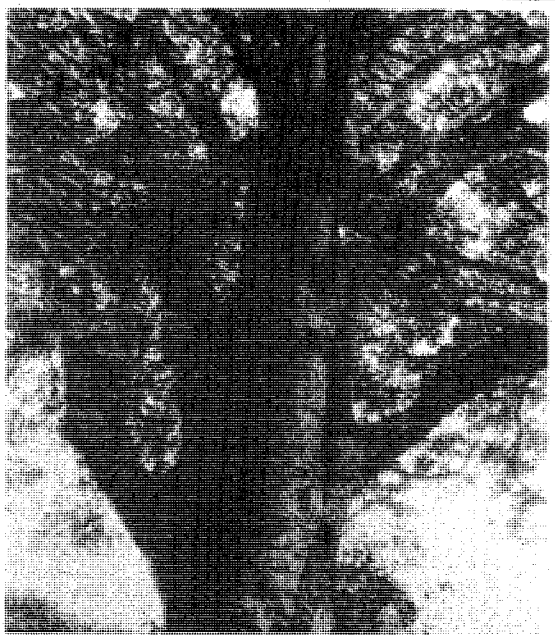
モクセイ科

中国から渡来した常緑花木にモクセイ類がある。モクセイ（ギンモクセイ）は白花、キンモクセイは橙黄花で何れも10月頃開花し佳香を放つ。本属の日本自生の類似品にはヒイラギがあり、この種は白花であるが葉に著しい特徴（いわゆるヒイラギ葉）があり、花期は晩秋、雌木はよく結実する。ところでこのヒイラギとギンモクセイとの雑種が作出されて、これをヒイラギモクセイという。このものはいわゆる雑種強勢で、葉についてはその形も大きさもほゞ両母種の中間、樹勢は旺盛で白花、現在広く栽植され、また各地に老大木がある。そして多くの人達からはギンモクセイ（モクセイ）と誤り呼ばれている。真のギンモクセイは、葉形はキンモクセイに似て少し大きな長楕円形、葉縁には小さい鋸歯があるがキンモクセイより目立つ。

しかし、ヒイラギモクセイのように大きな短刺頭に終る鋸歯はない。すなわち、ヒイラギモクセイはヒイラギに比べて葉は大きいが、葉縁の刺片はずっとヒイラギより大まかで幅広い。そして換言すれば、ギンモクセイはキンモクセイに比べて葉がやゝ大きく、縁に小さい鋸歯が目につくことが多い。

そこで、これらの4品の名を正確に記すと、

1）ヒイラギOsmanthus heterophy llus (G. Don) P. S. Green 柊（国字）日本、台湾に分布



2）ギンモクセイ（モクセイ）Osmanthus fragrans Lour. 銀桂（中国名）銀木犀、木犀　中国産

3）キンモクセイ　Osmanthus fragrans Lour. var. aurantiacus Makino　丹桂（中国名）金木犀　中国産

4）ヒイラギモクセイ Osmanihus×Fortunei Carr. 柊木犀

杠家のものは稀に見るヒイラギモクセイの老巨樹であるが、〃横田の名樹〃にはギンモクセイと誤定されている。モクセイ科Oleaceaeはヒイラギ科ともいう。

（写真は許諾を得て〃横田の名樹〃より転載　謝之）

しばぐり句会師走抄

納豆のへばりつく掌の夜寒かな　加納信子
病む母の眠る一刻時雨くる　小川あきお
石山寺の紅葉を溶かすしじみ汁　高木白虹
稲架収む夫と交しぬ噛の声　渡部夕峰
葉を土に戻し安堵の冬木立　岡田蹊花
障子貼りひと日の部屋を繕へり　錦織富江
吹き溜り落葉散りしく無人駅　新出谷一華
ひびの手をいたわり暇に反古燃やす　浅野としお
夜神楽の出を待つ大蛇煙草吹く　岡田麗水
鉢上げをして葉牡丹の豊かなり　峰石美代子
一棹に野沢菜干して心足り　中澤斐水
あたたかき日は湖の鴨かたまらず　糸原古志
今日の予定一つだけ終え日の短か　門脇花子
木の葉髪天地悠久年せまる　柏木侑
秋夕焼山の鴉寝に急ぐ　恩田魚跡
冬菊を嗅ぐやひとりの悦に入る　藤原樵夫

師走の歌

日々を寒さにふれるあいさつのしきりになりて今年も暮れる　常盤はるまさ
カレンダーに空き間なき迄日程の印のつきぬ師走となりて　野村節子
同窓の友の逝きにし今朝の空残月淡く六十五年　畑八重子
水車小屋朽ちたる跡にりんどうのひそと咲きつぎ水音寂か　景山悦子
ベコニアの挿したる鉢のなかにつぶれ哀れなりけり今朝の強霜　渡辺観翠
終りなき作業打切り日の暮れる庭にひと息山茶花紅し　宮廻愛子
日輪は赤くかがやき東天に鳥上の峰を今昇りゆく　目黒成生
転勤の孫娘は明るく今朝発ちぬ水澄む川の秋の石見路　岡田時子
沓き日の祖父母の労苦思ひつ、千刃組立て種籾を扱ぐ　伊藤萩雨
漬物を終へて湯舟にあかぎれの手足いたわりゆるゆる沈む　永井やよい
冬の夜の港にひゞく汽笛の声心にしみるひとりゆく旅　安部夕波

会員配布一部百五十円／六九九―一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 82 号
（2月号）
昭和57. 2. 6
奥出雲編集集団

古文書研究（3）

高田寺根元録

②岩屋寺との関係

南朝系高田寺と北朝系岩屋寺

根元録文書31・39号にあるように、三所郷は南朝に味方した鰐淵寺の僧頼源に、南朝（大覚寺統）の後醍醐天皇が建武新政にあたっての論功行賞で、与えられたものである。このことは鰐淵寺文書数通にも明らかである。

岩屋寺は南朝と対立する北朝（持明院統）に属していたことは、横田町誌に筆者はくわしく記述しているので、それを参照していただきたい。両寺は眼と鼻の至近距離にある。岩屋寺の寺背の山から北を見ると、眼下に高田寺をみることができる。

南北両朝の勢力が程度は明らではないが、それぞれに浸透していたのである。

14世紀南北朝時代の前の鎌倉時代の北条執政時代の、三所郷と横田庄はどのようであったであろうか。（くわしくは同じく横田町誌の参照を）横田庄は、京都石清水八幡宮の庄園であったが、三所郷の地頭三処氏の、しつような圧迫の下にあって、13世紀の中ごろは苦しい立場にあった。しかし文永年間からは北条時輔、続いてその母の支配下にあって、比較的平穏であったらしく、岩屋寺も僧祐円の努力によって中興の実もあがり、寺勢も大いに振ったようである。

根元録文書　36・32・33　によれば、賊徒によって高田寺・大龍権現ともに焼失するという時代になる。この賊徒はどういうものなのか資料不足である。だが考えられることは、将軍足利義満と山名一族の対立が頂点に達し、仙洞御料所（北朝系）横田庄を山名一族が、かすめとったことに端を発し、明徳の乱が起った前夜のことであると、次のように明らかにすることができる。

高田寺は岩屋寺の末寺となる。

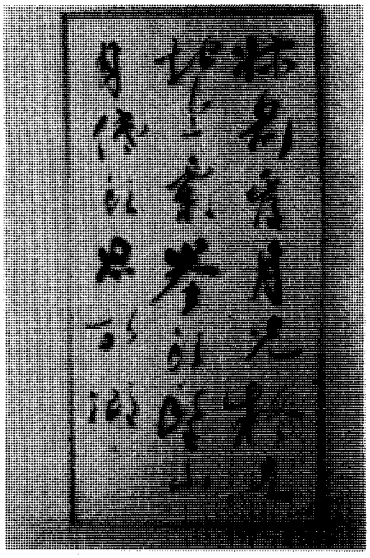
このことを明瞭に書いているのは「大永の古記録」である。「高田寺は岩屋寺の末寺たるによって、代々当寺より住持をつはたしかである。山名一族の敗走によって乱は終り、足利幕府は安定政権の道へと進んだ。

それからあと約一世紀のことは明らかでないが、15世紀末からは岩屋寺僧快円が記録した、「大永の古記録」「快円日記」そのほかの岩屋寺の諸記録、郡内の諸神社の棟札等から推考すかわす」とあって、三沢氏（仁多郡西部の地頭で、当時　地頭請所として横田庄に関係をもつ）の配慮もあずかっていることが記してある。大林坊（岩屋寺の一坊）海順は長命にして、60年間両寺にかかわったとある。また亨禄2年岩屋寺の教蔵坊から、高田寺の住持に入っとあり、天文6～12年の間、高田寺の清尊房宥澄が本寺の院主となったともある。天文12年は三沢為幸が尼子方で、尼子の毛利攻撃吉田城合戦に参加して討死した年である。このあとは惣領才童子丸　4才がついでいる。この年高田寺へは岩屋寺の岩本坊から住持が入っている。この僧は別な記録によれば快春とあるから、岩本坊から快春が移ったものと考える。快円のなくなったのは天文16年と推定される。

高田寺と岩屋寺との僧の交流の一部を年表とすると次のようである。

高田寺は三沢為清が亀嵩に築城してから、その城下（谷奥）に移されて青龍寺と呼ばれた。

	（高田寺）	（岩屋寺）
1544 天文13	快春	
60 亨禄3		快乗
64 〃 7	快春 ↓	
〃 13	快春	
（天正2）	移され青龍寺という	
79 〃 7	快乗	
90 〃 18	権大僧都院主 快乗	
91～95 文禄年間	深慶	



昭和56年県展金賞・安部大然筆

96慶長元　青龍寺中興
快乗
快世
快考
快憲
快致
1654承慶3
74延宝2
95元禄8　**雲仙**
1705宝永2　雲仙
26享保11　雲仙

快乗は天正18年権大僧都として岩屋寺院主となっている。その翌年からが文禄年間になるが天正19年、三沢為虎は毛利氏に従って安芸に移った。毛利氏は別の機会に詳述したいが、領内の各地に新らしい家臣を配置して支配体制を確立した。亀嵩に入ったのは冷泉民部少輔で（のち朝鮮出兵に加わり蔚山で討死し、墓は青龍寺に置かれた）、文禄年間早々であろう。この冷泉と僧深慶が不仲で、雲仙の記するように、寺を捨て去ったために、寺宝が逸散したという。

この地を去った三沢為虎は毛利氏の下で、高禄をはみ重用されている（これはその離反をおそれたための懐柔策であったという見方もある）。かっての戦国地侍のいた各地へは、新しく毛利の家臣を網の目の如く配置した（このことについては、別に紹介したいし、興味深いものがある）。

やがて中興開山法印快乗によって、徳川時代に入るや、初代松江藩主堀尾氏に上申が行われ、高5石の米を頂戴し、急場をしのぐことができた。

岩屋寺も戦国時代に所有していた寺領が、毛利の家臣6人に分割されたために、苦境に陥っていたが、嘆願によって15石の寺領を与えられ、のち30石に加増されて幕末に至った。出雲国内上位の数ケ寺に伍し、多くの名僧も輩出した。

この快乗なる僧は、岩屋寺から高田寺の住持となり、のち岩屋寺に復して院主となった快乗と同一人物であると考えている。権大僧都として院主となり、それを退いて法印と称した例は、岩屋寺にもほかに例があり、高田寺でも雲仙が同様である。或は快乗は岩屋寺院主のまゝ、高田寺を兼ね、その再興に努力をしたのかもしれない。いずれにしても根元録文書49号のように慶長元年高田寺に残されていた諸記録を書留めたのである。

（のちに述べるように根元録文書すべてを書いたのではない）

文書の現物がなくても、かって住持として在職中に見た文書を記憶の中からとりもどし、項目のみを留めたものもあろうと思われる。さらに岩屋寺文書を知っていることから、以前の高田寺の盛時を語るために、つくり書かれたものもあるかも知れない。

雲仙文書によれば、快乗より4世めの快致が、これらのことを書きとどめたとしている。快致が住持であったことは、他の記録からも明らかである。

高田寺根元録の成立についての考証

①高田寺の文書は紛失したものもあった。

②快乗が整理した時
快乗の記憶にある文書の項目をおもい出して書いたものもある。
さらに岩屋寺文書をもとに書き加えたものもあったかも知れない。

③快致がさらにつけ加えたものもいくらかある。

④雲仙の加筆したものもある。

⑤さらにその後に加筆し、或は朱書の註書等も行われている。

以上、高田寺根元録と、岩屋寺その他の寺社の記録をも加えて、成立の事情を考えてみた。次回から、根元録の文書の一つ一つを追って、①～⑤のどれに該当するかを確認してみたいと思う。そして資料の価値の有無の判断またその制限も加えなければならなくなってくるのである。

（筆者　横田史認会　高橋一郎）

「静夜思」

安部大然

一頁写真は横田町中村安部哲夫氏の作品。
次に審査評を
漢詩文作品、鍛えられた響きの高い線質により、一貫して大小・強弱の調和もよく快い韻致の高い作品である。

日本史のことば

運上金（うんじょうきん）　江戸時代における小物成（雑税）の一つ。商工漁猟・林業・鉱業・運送業などの営業に従事した者に賦課した。一定の税率をもって賦課したところに、次の冥加との相違がある。賦課方法や税率はさまざま。

冥加金（みょうがきん）　江戸時代、商・工漁業などの営業に従事する者に賦課された租税の一種。幕府・藩が営業を認可したことに対する代償としての献金的性格をもっていた。一定税率がない点で、運上金と異なっていたが、のちに一定税率が決められ毎年賦課されるようになった。金納が原則であった。

腰林（こしばやし）　腰林山ともいう。江戸時代における個人所持の山林で、一般的には家屋敷、山麓の周囲の森林をいう、広島藩・松江藩などでは、すべての山林をさす。

奥出雲俳諧史(2) 序(中)

芭蕉登場まで(下)

古文書研究のために④

終りなき旅たち

芭蕉が江戸深川の芭蕉庵に入庵したのは、延宝8年1680の冬で貞門・談林両派の俳諧の革新のために、孤独と貧困に耐える決意をした。その翌天和元年の芭蕉38才の春に、門人の李下が芭蕉の一株を植えてから、草庵を芭蕉庵と号し、翌年みずからも号を桃青から芭蕉とあらためた。そして「虚栗（みなしぐり）」をあらわし、蕉風俳諧を確立しはじめた。貞享元年41才の時、江戸を出て郷里伊賀から大和をめぐり、近江・美濃・名古屋をへて帰る、九ケ月の旅に出た。その紀行文が「野ざらし紀行」である。

野ざらしを心に風のしむ
身かな

を首途の吟としてはじまっている。

新しい詩の世界を求め、新しい仲間を求めての旅であった。

道のべの木槿は馬にくは
れけり（大井川わたり）

何とはなしに何やら床し
菫草

夏衣いまだ虱をとりつく
さず（しめくくりの句）

名古屋で新人を発見したよろこびは大きかったという。それから二年あまり江戸で俳風の洗練にはげんだ。そして貞享4年10月、ふたたび関西へ10か月に及ぶ行脚に下ることになった（紀行文は「笈の小文」）。

貞享3年春の作に

古池や蛙飛こむ水のをと

がある。この句ができたときのことを、門人の各務支考（蕉門美濃派の祖）が書いている。はじめに「蛙飛こむ水の音」の中七と下五ができた。かたわらのやはり門人の其角が、上五を「山吹や」としてはと口を添えたが、芭蕉はそれをしりぞけて、「古池や」としたという。山吹やは派手好きの其角好みで、華やかであるが、芭蕉は蛙が飛びこんで、その水音で一瞬、静けさが破れた、そしてまもなく前より深い静寂がもどってきたということをいいたかった。より深い静寂への願望をあらわしたかったのである。

貞享4年春

花の雲鐘は上野か浅草か

がある。その10月旅に出る。笈とは山伏が背におう衣服などを入れて背負う箱であって、その笈の中に収めてある小文（旅日記）という意味である。

漂泊の思いやまず、元禄元年関西旅行から帰ると（紀行文には、鹿島紀行・更級紀行がある）、しばらく江戸の門人を相手にくらしていたが、翌2年3月27日、46才の芭蕉は奥羽をへて北陸へ向った。「奥の細道」の旅である。

新しい詩情と新らしい俳諧仲間を求めての旅は、芭蕉の身についたものとなっていた。この旅は今までにない大旅行であり全く未知のところ険路の東北であった。人生50年が通り相場の時代であったから、余名いくばくもない年を迎えている芭蕉には大きい負担であった。しかもあまり芭蕉は丈夫でもなかった。

「古人も多く旅に死せるあり」（奥の細道の序文）は実感であったであろう。

行春や鳥啼魚の目は泪（出発に）

夏草や兵どもが夢の跡（平泉）

閑さや岩にしみ入る蟬の声

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天河

の豪壮雄渾な句も生んだ。順徳帝や日野資朝・世阿弥その他が流された流人の島であるという、悲劇的な歴史に対する感動と、眼前の暗い風景とが融合した句である。「奥の細道」の紀行文も旅を終えて江戸に帰り五年の年月をかけて推敲に推敲を重ねて完成されたものという。

旅の間の各地では俳諧（前句と付句）が常に行われている。「奥の細道」は紀行文に発句のみ（いわゆる俳句）が組みこまれている。この集の前には「冬の日」「ひさご」「曠野」があ

俳句

雪こぼせし暫くの揺れ松戻る　岡田蹊花
年越しのエプロンはずし仕舞風呂　高木白虹
使者のごと初鳶の飛び舞いている　小川あきお
寒鴉塒争ふ夕茜　岡田麗水
ひと言の重みに我を寒くせり　峰石美代子
古時計刻む音乱し寝正月　錦織富江
かなの文字初めて書けし孫の春　門脇花子
雲海を裾野で払う雪の富士　田邊竹野
朗々と長老謡いて年新た　新出谷一華
雪を掻き父祖の習わし鍬始　恩田魚跡
裸木に押し上げられて月生る　藤原樵夫
志野焼の血にほぐせり寒たまご　加納信子
軒下へ野菜を積みぬ師走の家　渡部夕峰
行きづりの目が遣いおとす冬の川　浅野としお
古障子父の遺品もそのままに　中澤斐水

新春のうた

ハンカチを掌に佇つ汝を見出してただ健在をよろこび合へり　常盤　はるまさ

▲お題　橋にちなみて

幼き日下駄を鳴らせし板橋も永久橋となりて幾年　伊藤　萩雨

豊富なる自給野菜も汗したる日々想ひつつ端まで刻む　野村　節子

行商を了へてバス待つしまらくを笛吹童子のラジオ聴きおり　渡辺　観翠

いつになく冷たかりけり娘の腕の傷あと思ふ霜の朝に　畑　八重子

孫に綱持たせゆっくり水を呑む牛の傍へに夕焼を見る　景山　悦子

ふるさとの味をと作りし干柿に帰郷の子らの食指は触れず　児玉　敏郎

言ひ合いて理くつには勝てど背を向ける夕陽に細き夫を哀しむ　宮廻　愛子

すきまなく朝陽射しくる部屋ぬちに屠蘇匂ふ床の竹わかわかし　岡田　時子

この宿に宴会ありてうた声は次つぎ高く乱れ聞こゆる　目黒　成生

帰省する子等の話に誰も彼も重き荷物ちてバスに乗り込む　永井　やよい

遠くにて犬啼く声を聞きながら雪ふる夜のテレビ消すなり　安部　夕波

斐の上川柳会一月句会「雑詠」抄

座を譲り越した坂道振り返る　久村　美津

老い孤り師走の渦の外と歩く　高木　白虹

母の胸汲めど尽きない愛の井戸　松田　牛歩

それぞれの顔を浮かべて年賀状　若槻　白馬

温順な妻で平和に城守り　渡辺　好之

帰省の孫馴れた手つきで煙草吸い　堀江　孤雷軒

老夫婦犬も仲間に屠蘇の味　佐佐木　千世

エプロンをやっと外してしまい風呂　太田　亀甲

誰もかれも謹んでいる年賀状　松浦　木公

せっかちな賀状が届く十二月　藤原　千代子

くる年に希望を寄せて初日まつ　藤原　のぼる

初詣でそれぞれ十円の願いごと　安部　正子

歯がなくて入歯がほしいと子がぼやく　加納　治江

り、のち俳諧の古今集といわれた、蕉風の句を編集した「猿蓑」、俳文「幻住庵記」をへて、「炭俵」において芭蕉の俳諧は完成をみたのである。

芭蕉は7年10月12日大阪の宿で客死した。5月上京中であった支考は、そのまま芭蕉にべったりと附添って行をともにし、最後まで芭蕉の身辺の世話をし、臨終にいたるまでの動静を日記風に書きとめた、各務支考の「笈日記」（元禄8年刊）がある。

芭蕉の晩年の作に

鞍壷に小坊主乗るや大根引

菊の香や奈良には古き仏達

大阪の辞世の句は

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

で支考にしめして言葉をのこしたという。50才。

葬儀は遺言通り大津の義仲寺にうめる。門人其角の追善発句は

なきがらを笠に隠すや枯尾花

かって俳諧で東西で競いあったが、道を異にして歩み、ともにそれぞれの道で大成した西鶴は、一足先に52才でなくなっていた。

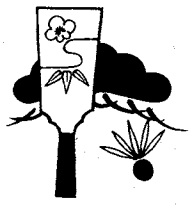
宝永・正保のころから、享保（1,720年代）にかけて、世代の交代もあり、市井の寺小屋も急速に発達した結果、大衆が娯楽を文学に求めはじめるようになっていった。

ところが芭蕉の死後、江戸・上方ともに川柳化の傾向へと流れて行ったから、元禄12年の「ひさご」時代以後、芭蕉に親近しその没後は故郷美濃を本拠とした各務支考の美濃派と、伊勢派が、芭蕉の晩年に確立された俳諧を守ろうとした。

しかし、両派とも農村地帯を地盤としていたから、俗流化に傾いたのは自然の成り行きであった。この平俗な俳風は、三都（江戸・京都・大阪）以外の文化水準の低い地方に浸透し、俳諧の大衆化をうながした功績は大きかったが、詩精神のともなわない。それこそ俗談平話になっていった。

これがゆきつくところまで行った、1,760年前後、宝暦・明和のころ、京都の蕉村らの心ある俳人たちによって、「芭蕉」に帰れの合言葉とともに、中興期を迎えることになった。

（この号のこの記述は、少し横道にそれた感はあるが、奥出雲が美濃派の流れをうけながら、一方「芭蕉」への回帰を指向していた事実が、当地の資料にうかがえるので、あえて綴ることにした。門外漢のひとりよがりになることさけるため、前回記述した諸著に十分にすがってまとめた。本文であげた芭蕉や蕉風の諸著はほとんど、当地にとり入れられている。なお本文に引用した発句は、できるだけわかり易く、また人々の親しんでいるものをえらんだつもりである。）



会員配布　一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一／二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 83 号
（2月号）
昭和57. 3. 6
奥出雲編集集団

奥出雲俳諧史(3)　序（下）

蕉門美濃派の人々とこの地

—古文書研究のために④

支　考（二世）（一世は芭蕉とする）

美濃国山県郡北野に生れる。六才で父を失い（二男）母は再婚九才で村の臨済宗妙心寺派の道場大智寺の雛僧となった。十一才で「いろは葉に出て散りぬる紅葉かな」を吟じたという。十九才で還俗下山、籍を次姉の婚家各務に入れる。元禄三年二六才で大津の無名庵で蕉門の徒となる。

翌年芭蕉に従って江戸に下り、薪水の労を助けた。全五年江戸を立って松島方面に旅し「葛の松原」を遺した。これをはじめに中国・四国・九州・北陸方面にたびたび行脚して、詩心を養うとともに道を弘め、その都度多くの著述を公にして勢力を張った。能文達筆、蕉門の論客として許六とともに著名、その論は自己の利益のために書かれたものもあり、こじつけも少なくないといわれるが、蕉門の俳論として体系づけられており、独創の見解に富んでいる事も認められている。正徳元年四七才で自ら終焉の記を作って郷里に隠れ、変名の門人蓮二房などに託して、幾多の俳論書等をあらわし、自己の業績を称えたりした。こうしたことや才気煥発の活動家で、数度にわたって芭蕉の年忌を花々しく行ったり、数多くの俳論書に芭蕉の数えに託して自説を権威づけようとした野心家ともいわれるが、芭蕉没後の俳壇に美濃派の一風を樹立して、ほとんど全国にわたって各地方の民衆の間に蕉風を普及した功績は大きい。しかしその風は卑俗低調に走ったため、後年蕪村によって蔑視されたが、主として地方俳壇が活躍の舞台であったため、比較的教養の低い人々に対する指導理念から出た自然の結果でもあった。理論家で、葛の松原・続五論・俳諧十論などの述書は、統一した組織的なもので、しかも規模の大きいことは古今無双といわれる。また「笈日記」などの俳文にもすぐれていた。

代表作の発句は、

牛呵る声に鳴立つゆふべかな

魂棚にこちら向く日を待つ身かな

があるが、むしろ発句より連句に自信をもっていたという。

「葛の松原」は前回に書いた「古池や」の句にまつわることなどのように、句作の論集であり、「笈日記」は芭蕉の臨終前後の俳文である。

このほか別項のように支考の著作の多くはこの地に求められており、手にとってみるとよく読まれていることが行間によみとれる。その多くが筆写本で、署名と年令がしるしてあって、あとで述べるように上方から直接入ったことをしめしている。署名や蔵書印は、以文・徐行・石明である。

廬元坊（三世）

支考の門人で美濃派三世をつぐ。美濃国北方村の人で、享保十二年三七才の時、師支考にすすめられて三越路の行脚を決行し、越前敦賀をはじめ越後糸魚川に至るまで、各地の俳人と興行した長歌行・短歌行・各地俳人の名録の句と諸国文通の句を収めた「桜の首途」がある。

享保十四年病中の支考は岐阜の鳥亭を廬元坊に譲って黄山の獅子庵に帰った。翌十五年春廬元坊が支考を訪ねると、「余命も今年を過すべからず、我命のうちに西国の俳諧を聞まほし」と、西国行脚をすゝめられたので、夏から京阪・中国・四国・九州の長途の巡遊にでた。十六年五月はじめ小倉で支考の訃を聞き、十七日は百日忌にあたるので、馬関でその土地の人々と追悼句会を営んだ。その後自分も旅中に大病にかゝり九月になって故山にようやく帰り、梅花仏（支考の戒名）の墓前に、約束の遅滞をわびた。この旅中の各地の俳友との連句及び発句をおさめたのが「藤の首途」である。

「文星観」は廬元坊編の支考追悼集で、「病中の記」は支考の病中から臨終までの詳記で、怪傑支考をしのぶに十分であるという。

従ってこの地には廬元坊、蓮二房の名のある句集や、廬元坊編の支考の七回忌、十三回忌の追悼集などが少くない。

五竹坊（四世）

美濃国北方村の生れで、医を業として東伯ともいった。俳諧は廬元坊に学び美濃派の道統をついで獅子門四世ともいった。安永年中門人以哉坊と確執を生じ、自分の跡は門人の再和坊につがせた。以来美濃派は分裂して以哉派と再和派の二つになり今日に至っている。

五竹坊は出雲のしのぶ庵魚坊の師でもあったから、この地にも五竹坊の句が多くのこっていて、交流のあったことをしめしている。「月のかがみ」は、五

竹坊主催での支考二三回忌追悼句会の句集である。

再和坊（五世）

美濃国北方村の生れで、京都に居住したこともある。医を業とした。俳諧の師は五竹坊である。この地との交流もあり、直筆の懐紙もあり、句も多い。一周忌の追悼句集もある。

以哉坊

美濃国黒野村の豪農の家に生れた。東北地方に吟遊し、「松島や膝でもみきる船のござ」の句を得て師の五竹坊に見せたところ、「松島や景色にもめる船のこざ」と訂正されたが服せず、ために破門されたという。安永初年のことであるが、調停者があって帰参した時、五竹坊が「角なれば互に円うなで火鉢」の句を示したのに、「ぬくめてさがす室咲の梅」とつけた。これは改心していない反抗意識のあるものとして、再び破門されたと伝えられている。しかし安永三年六十才で西国行脚に出た時師五竹坊は「やり〳〵て引や戻さむいかのぼり」と送別したのに、「物に中和の晴をさとされ」と脇をつけて、師の教訓に感謝している。この時はすでに美濃派の道統は同門で十一才若い再和坊が継いでいたから、五竹坊が破門するはずはないといわれている。

この地方には以哉坊の懐紙や句は、西国行脚よりもしばらく前から、再和坊のものよりはるかに多くある。その上両人が同じこの地の句集に肩をならべているところなど、破門も短い期間であったことを思わせる。この地からみると美濃派との交流は道統をついだ再和坊より、年輩が上で指導力のあった以哉坊を通すのが多かったとも思われる。やがてこの地の指導の中心は再和坊から六世の道統を継いだ松後に移ってゆく。

全九年七月五竹坊の没した時病床にあった彼は、「病虫も草の戸にないているばかり」と切々の情を詠んでいる。師におくれること一ヶ月六六才で没した（師五竹坊八一才）。臨終の床で「師にしばしおくれても道の月おなじ」と師を慕っているところをみると、破門問題は何か他に因由があったであろうとされる。先にものべたように、この地における両人との交流は、全く一体であったことをみるとそれを裏付けるものであると思われる。

以哉派三二世清年と再和派二二世玉泉が、昭和三三年六月に二〇六年の永年の行きがかりを捨てて合流したが、全年三二世清斗の没後また分裂したという。

松　後（六世）

岡山に生れ、主としてそこに住んだ。総年寄役として苗字帯刀を許され、四十人扶持を食んだ。六十才で隠居し六七才で没した。俳諧の道統を継いだ実力と、社会的地位が湯の廻と同じような立場にあったこと、岡山が当地から近くしかも上方への途中にあったことなどによるものであろう。当地と松後との交流はしげくそして長い。直筆の句、句集なども多い。松後が再和坊の子の子琴を育てるために編んだ「道の枝折」や、当時の舞台裏の苦労をしるして届けた貴重な手紙などもある。子琴はのち再度にわたってこの地方を訪れている。

松後ははじめは廬元坊のち五竹坊に師事した。ほかに香道・茶道・製陶の技にも通達していたという。こうしたことや先にのべた理由によって、松後はとくに当地湯の廻との交情を深め、以文・東下・東保と三代にわたって長く交流をしたものと思われる。

松後の著作の主なものはこの地に伝えられている。松後編しのぶ庵魚坊序の「続東山万句」は、隠居した翌年に芭蕉の遠忌と五竹坊の十三回忌、再和坊の七回忌を、京都で松後が主催して営んだ大がかりな追悼の記録である。

蝶　夢

美濃派の俳人ではないが、当地にこの人の編著の「墨直し」「鉢たたき」などがあり、出雲に行脚して来ているので記することとした。

安永八年（四一才）の二月、府中より帝釈峡を経て、高野山から阿井に入り、湯村温泉に泊って、今市、大社をまわり松江方面へと行脚を続けている。蝶夢編の「名所小鏡」（天明七年刊）には芙川（のちの魚坊）とその父の芙三の句が数句おさめられているという。これらのことと当地とのかゝわりはないようである。

蝶夢は芭蕉の人格を崇敬し、その遺業を探ることに終始し、不朽の名著を数多くのこした。もしこの人の数多くの芭蕉関係の編著がなかったら、後世の芭蕉学者は、手脚の着けどころがなかったであろうといわれるほどである。蕉風の天明の復興の功績は、蕪村らに比肩するといわれる。

美濃派道統

（　）内は別な号
ゴチックは当地にある往時の筆写本、木版本

一、芭蕉―松尾―（桃青）
冬の日・阿羅野・笈之小文
更級紀行・野ざらし紀行
奥の細道・**猿蓑**・**芭蕉句選**
七部集
二、支考―各務―（東華坊・西華獅子庵ほか・変名蓮二房・白狂ほか）
葛の松原・**続五論**・**俳諧十論**
笈日記・**東西夜話**・**発願文**
十論為弁抄・**続猿蓑**・**白陀羅尼**・東山万句・西華集・東華集・梟日記・蓮二吟集・文星観・**難陳式百韻**・**山中三笑**・**俳諧江湖**

（五頁へつづく）

湯の廻の文芸

—絲原記念館の古文書から—

「明月記」断簡の存在は茶道とともに歌道にも傾倒したあかし

昨春公開されたこの茶掛けは文面のわが国抹茶の祖栄西のこととあわせて、茶人垂涎のものであり、求められた当主の識眼に驚嘆させられたが、他方常掲の「二条流歌道系譜と絲原家」（定家の直系）や古文書を見られた方歌道に関心を持たれた方方は、かつての当主が歌道にも深い教養を積まれていたことに気付かれたに違いない。

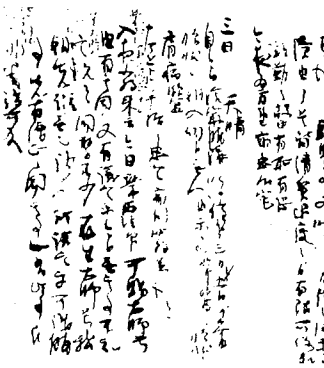
歌道を修める人としての必読の書、万葉集・勅撰集の第一集古今和歌集・第二第三の後撰集・拾遺集から、「明月記」の筆者藤原定家も選者の一人である新古今集までの八代集はもとより、諸物語類さらに二条流の基礎を固めた頓門の「井蛙抄」、連歌の基礎をつくった宗祇の「愚問賢註」、その完成者里村紹巴の連歌、「摂政殿御和歌百首」（院・頓門・慶運・兼好ら）、「兼好法師歌集」、細川幽斉口述烏丸光雄（光栄の祖父）の「耳底記」ほかの数多い、二条流堂上派の歌集や歌論などがそろい、全流の指導者清水谷亜相の「詠歌要意之口決」、烏丸光栄の主著「諷詠覚悟抄」（教訓十五条）等歌道の秘伝書があることは、七代吉三郎（好覩）が歌人としてなみなみならぬ力をもっていたことをしめすものである。好覩は、当時最高の歌人であり歌論にも添削にも第一人者であった光栄の、直接の指導もうけていたようである。

京都から遠く離れた奥出雲にこのような種がまかれたのは、京都から松江に下って来た二条流歌人明珠庵釣月そしてその弟子小豆沢常悦ほかの指導と仲介があったからではあるが、鉄師として成長し常に眼を京大阪に開いて、その地の文物の流入に心掛けていた好覩の識見によるものであることは、幾多の文書を通して知ることができる。

常悦の弟子でともに上洛して修業していた僧悦阿が、出雲へ帰り横田の安楽寺の住職となると、この地に（大馬木）にいろいろの歌人も訪れるようになり、歌友がふえはじめていったが、まだ僧・医師・地主層などのごく一部に限られていた。

松江藩士有沢氏五代弍通（のち家老に、はじめは不昧の茶道の師で、のち不昧が大成するとその門人となった。歌人でもある）もこの地方を訪れた。絲原家では歌とともに茶の湯の道の指導もうけた。

春ごとに帰る時とか天津空
霞をわけて雁のゆくらん



うき人を恋そめしより色もふり袖のちしほをいかにとかせん

あさじ原わけこし君が光には民のくさはや色まさるらん

（弍通を迎えて）

鐘の音も匂へるばかり咲く花はうき世の外のいろかとや見む

（安楽寺にて）

はいずれも好覩の詠んだもので、新古今調の流れをうけついだ、二条流の歌趣あふれたものである。

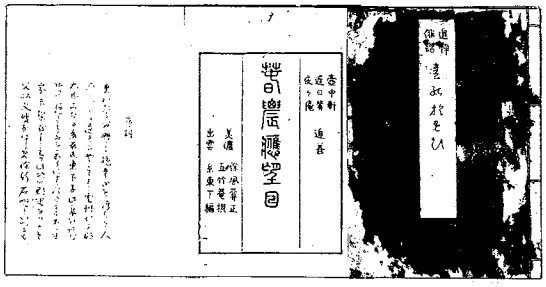
この風流の道が代々引きつがれたことは、明治初年に至るまでの二条流歌人の歌集・墨蹟のあることで、明らかである。

庶民に俳諧が盛んになると、和歌から連歌、そして俳諧へと傾斜し、奥出雲のこの道の先達となり中心となる。

好覩は楽山とも号し、当時の俳諧時代の先駆としての、有心衆すなわち和歌の伝統をもつ連歌（無心衆すなわち滑稽調の連歌でないもの）の流れの俳諧——発句と付句——に関心をよせた。和歌と同じく上方からこれらを摂取したのである。こうした影響を強くうけた、糸原嘉平衛（分家堀之内二代）は和歌より俳諧へと深まっていった（号を夜々庵石明）。そして好覩の子四郎左衛門（壷中軒以文）その弟為次郎（遅日庵徐行）が育っていった。

芭蕉が没した翌元禄八年版の「奥の細道」や「猿蓑」「笈之小文」なども早くから入っていて、十六才の石明はこれらを筆写して句作にはげんだ。（楽山四六才、中島魚坊三十才、以文四才）やがて蕉門十哲の一人で、美濃派の祖となった支考の俳論、句集のほとんどが入り、書を通しての俳諧の土壌がつくられているところえ、大田の中島魚坊が迎えられて、句作が進展していった。

魚坊は幼にして才をあらわし、父芙三（支考の高弟廬元坊とその弟子で同門の五竹坊に師事）と、町内の医師某の感化をうけて成長し、宝暦十三年三九才で直接五竹坊の指導をうけ頭角をあらわした。十四年に楽山は没し以文が跡を継いだ。のちの代をついだ忠三郎（近親者で養子となる。号は東下）はこの年五才であったが、「芭蕉句選」を筆写した。その才能は近隣に評判が高かったという。好覩（楽山）の先覚性の高い教養と風流は、大馬木の「湯の廻」を中心として豊かな文芸の道を育てた。



やがて以文によって魚坊が大馬木に招かれたのは、安永三年（五十才）より少し前、出雲に移り住む数年前のことである。この地の指導者は石明であったが、十才余りの徐行の指導が魚坊に移ると、急に才能をあらわし魚坊に至極愛された。往来もしげくなったとみえて、魚坊の句も急にこの地にふえる。近隣の俳人も数を増し、阿井では何遠・路考・草肥の名がみえる。石明の上方への行脚記録・句帳以文・徐行の句帳なども数多く残されている。

天明五年徐行は吉野行脚の途次兵庫の里で客死した（二五才）。

以文と魚坊と石明によって追悼句集「蝶の夢」ができた。それには美濃派五代宗匠再和坊、以哉坊、のち六代となった松後をはじめ広域の各地から句が届いている。徐行への評価と交友の広さをしのばせるものである。

石明の死後は阿井の路考が、その跡をついで中心となった。

九代東下は文政七年美濃派の宗匠子琴や古梁を招いて、以文三三回忌・石明二五回忌の追悼句会を催し、徐行の追悼句集とあわせて「春のおもひ」を、京都蕉林書房橘屋より出版した。このころの俳壇の中心は阿井から亀嵩に移っていた。翌年東下が没すると、十代東保によって「東下追悼句集」が編まれた。十一代東明によって湯の廻は明治時代を迎えた。

「春のおもひ」から

徐　行

日の長いことを知りけり春の雨

常は気のつかぬ沢なりあやめ草

破れ　秋も暮行く芭蕉哉

以　文

荒砂に箒目きっと牡丹哉

こちの孫はあれかと覗く踊哉

石　明

我宿は戸口ひとつに暑哉

鳴子かなきすが小鳥も馴もせず

歌人与謝野夫妻の来遊

好覩によって集められた和漢の古典・歌書・史書・軍書は、その子以文の目録によって明らかであって、当時地方では珍らしい蔵書数で、その後代々加えられていった。十二代武太郎（敏功）は茶道花道の奥儀をきわめ和歌にも親しんだ。十三代武太郎は鉄軒と号し和歌をよくした。明治四十年東京で病みなくなった父の遺骨を抱いて雨川に帰宅するまでの歌と日記は、若き鉄軒の面目躍如たるものがあり、それ以後の秀歌も多い。

父君のかたみの骨をささげつつ帰る都路淋しきもかな

みな人のあつき心のなかりせばなげきのふちにしつみぬるらむ

さらでだにかわくひまなき我が袖になほしめやかに春雨のふる

かなしみはことごと深したらちをのゆかりありける湖をながめて

（途中松江にて）

直久会の会友としてこの道を深めていたが、貴族院議員となってからは、心にかけながらも、簸上鉄道建設をはじめ幾多の仁多郡の大計実現のために奔走し、遠ざかっていた。昭和五年、明星派の重鎮で女婿の三島祥道の案内で、与謝野鉄幹晶子夫妻を居宅に迎えたのも、この家の文芸の伝統のしからしめたものである。隠退後は静かに和歌にも親しんだ。

こうした文芸が育てた風雅の伝統は、書画、茶道具、あるいは日常生活用具の上にも、色濃くしみ出ていることは、展示される絲原記念館の館蔵品で明らかである。

昭和５７年展示予定

春季展（3/21～7/11）「情熱の歌人晶子と出雲」
夏季展（7/14～9/19）「竹田と大雅その一門」
秋季展（9/22～12/5）「絲原家の祝儀」

財団法人 絲原記念館

横田で生れた人⑦

卜蔵孫三郎（中）

—中海干拓の先駆者—

卜蔵氏の出自

系図によれば、南朝方の武将河内の楠正成の弟正氏と、伯耆の名和長年の弟名和太郎左衛門の娘の間に生れたのが勝太郎で成長して楠太郎左衛門正秀といたのが卜蔵家の元祖という。正秀が成長したころはすでに南朝も衰退し、足利氏をはじめとする北朝方の勢力が山陰に浸透していた。名和氏と一族の主力は九州へ移ったが、一部は伯耆西部・隣接地の出雲の山間に隠栖した。楠正秀は伯耆西部の奥地に残って、伯耆・出雲の守護山名氏の下にいたようである。三代吉太郎（正利）は明徳の乱に山名方で戦い討死した。

明徳の乱

詳しくは横田町誌（一九三頁に）を読んで頂くことにして要点をのべると、将軍足利義満に対して、山名氏清・満幸らの山名一族は全国の六分の一の所領を有して、六分一殿と呼ばれ、足利氏にとってはあなどり難い勢力となっていた。この勢力を押さえるため義満は山名一族間の不和につけ入って、その離間を計った。やがて満幸が出雲守護の立場を利用して、仙洞御料所横田庄を横領したことから、遂に両氏の間に戦端が開かれた。明徳二年の明徳の乱である。山名方は京都で敗れ、満幸は伯耆・出雲で最後の抵抗をこころみたが利なく、九州に落ちた。この時山名方にて討死にしたものに、楠氏や馬木郷の馬来氏などがいた。三沢氏はまだ三沢郷周辺に漸く地盤を拡げていた時代である。

楠正利には子がなかったので、弟吉次郎の子惣兵衛を養子として跡を継がせた。そして竹崎村に移りこゝに土着した。横田庄には山名一族の勢力が扶殖されていた縁からであろう。

四代は吉太郎正利、五代は惣兵衛でこれからこの地で地盤を営々と築いたようである。

十代甚右衛門は明応三年（1,474）三月二十一日、備前城下で二人の子どもとともに討死した。この年三沢氏も備前に出陣しているから、その下で参加したのであろう。このころの三沢氏は横田庄には地頭請所として勢力を扶殖していたのである。甚右衛門にはもう一人子どもがいたが病死したので、伯耆の伯父甚七の子甚五郎が養子として入り、甚兵衛正文となのり姓も楠をはばかり卜蔵と改めた。

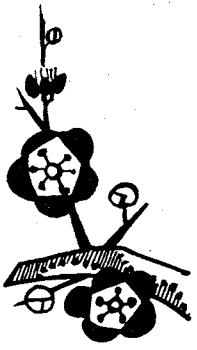
岩屋寺の記録に「永禄元年（1,558）竹崎原の庄卜蔵栄三、寺領寄進」のことがあるが、正文から三代あとの甚右衛門であろうか。これまでの全寺の記録では、寄進者は三沢・尼子の両氏やその家臣たちのみであることからすると、卜蔵氏の成長ぶりを伺うことができる。この地方が中世以降砂鉄製錬の先進地へと成長する中で、卜蔵氏の努力も大きかった故に、このように成長したものであろうと考えられるが、資料も不足であるので、今後のこの地の製鉄史の解明をまたねば断定はできない。

卜蔵氏はこの竹崎の地で製鉄業も営みながら、世代を重ねていった。しかし砂鉄製錬（たたら操業）は一回〳〵に出来不出来があり、家勢も盛衰の繰返しであったことは念頭におかねばならぬことである。

二二代五右衛門は子どもをなくし、能義郡十年畑村の叔父惣兵衛の五男甚吉を後継ぎとして迎えた。惣兵衛と改名し製鉄業をついだ。十年畑の卜蔵氏は尼子の家臣であったが、富田城落城後幾人かの郎党とともに十年畑へ移り住んだ卜蔵一族であった。こゝで地盤を築き、今日ある城福寺の建立もした。その二代目が惣兵衛でその五男が甚吉である。甚吉は竹崎の卜蔵家に入ってから製鉄業に成功し中興の実をあげ、実父惣兵衛（十年畑卜蔵二代）の墓を竹崎に移し、これを初代とし自分が中興卜蔵家の二代となった。その次男九右衛門が十年畑卜蔵家三代を継ぎ、城福寺の前に居住し横田屋といった。それは貞享年間（1,680年代）のことで、さらに分家もふえ十年畑は、約二五〇年後の大正末年、卜蔵・原鈩（高殿）が廃業するまで、竹崎から安来港までの卜蔵家の馬による鉄輸送路の中継地として栄えた。

（六頁へつづく）

三、虎元坊—仙石—（獅子庵・里紅）
桃の首途・**桜の首途**
四、五竹坊—田中—
（五筑坊・琴左・帰童仙ほか）
月のかがみ・七めぐり・春興三吟
五、再和坊—河村—（朴斉・朧庵・白朱ほか）
六、松後—佐々木—（松吾・森々庵・真空坊・師雲坊・道阿ほか）
正風俳諧二見貝・富士の夢・道の枝折・続東山万句・杖の跡
以再坊—安田—（二狂・無事窟）
七、左柳（両岡庵）
八、陶星（楽庵）
九、文柳（徐風庵）
一〇、子琴（五竹庵）
一一、梅二（遅楽庵）
一二、青志（梅庵）
一三、調固（魯松庵）



斐の上川柳会二月句会「雑詠」抄

顔出しておくだけでよい顔となり　松田牛歩
毒舌の友が無言の旅に立ち　久村美津
折たたみ出来ぬ娘の膝坊主　若槻白馬
福引が当り皮肉な視線受け　松浦亜以
給料前カレーの中は芋ばかり　加納治江
すり寄せたほっぺが痛いパパのひげ　松浦木公
甘酒が飲み頃ですと友を呼び　安部正子
スマートに写してくれと女言い　藤原のぼる
すきま風何度張ってもおいつけげ　真綿よし子
おもちゃ屋のチラシはそっと抜いておく　藤原千代子
うたた寝を拍子木の音が目覚めさせ　佐佐木千世
夜勤からの帰へり屋台のそばが呼び　太田亀甲
角力好きテレビにぼけて餅が焦げ　渡辺好之
大雪を言い訳にして炬燵　高木白虹
颯爽、サラブレッド、一億八千五百万　堀江孤雷軒

早春歌

坑深く地底に水漬く屍に思ひ鎮めて吾が耐ゆるのみ　常盤はるまさ
春の月秋の氷雨におだやかな萱葺屋根の又剝がれゆく　永井やよい
久びさに友に出会へば道の辺のつきぬ話に日も傾きぬ　畑八重子
何時の日か栄へし鉱山も過去となり雑草埋もる廃坑のあと　宮廻愛子
若き頃若さを友と語らひき老ひたる今は老ひを語らふ　日黒成生
沖縄と書かれし牛舎に追ひ込みて別るる子牛に涙こらふる　景山悦子
祖先より受け継ぎたりとふ老夫の薪割る音の今日もひびかふ　岡田時子
校庭も昏むばかりに舞ふ雪に低鉄棒が埋れてゆく　児玉敏郎
茜差す明けの空ゆく鳥一羽矢の如く翔ぶ如月の初　渡辺観翠
今産みし五箇の卵のぬくもりを愛ほしみつつ鶏舎を出でぬ　野村節子
有能の友若くして支那に散り無能の吾長らへて古稀に近づく　伊藤萩雨
ひとりゆくわが旅今日も暮れゆけば若狭の海の漁り火わびし　安部夕渡

横田銘草木集(16)

丸山　巌

イズモコバイモ（出雲小貝母）

Fritillaria Ayakoana Maruyama et Naruhashi in The Journal of Geobotany XXVI 4(5, 1979)

天平2年(720)できたという出雲国風土記の秋鹿郡の山野には、貝母や牡丹や百部まで自生するように記されている。しかしこの3品は中国原産のものでわが国への渡来はずっと後年（貝母が薬用としてもたらされたのは享保の年すなわち1724）である。これ等はすべてわが国の植物を漢名（中国名）への同定誤りである。しかしこのこととは別に、近年出雲では神戸川沿いの山地に小形のコバイモ類が発見されて関係者を驚かせた。何分にも、岡山県、山口県、九州北部に分布するホソバナコバイモの分布域に当るので、当初はこのホソバナコバイモと見られていた。しかし、その花の形状（さかずき状鐘形、蜜腺の位置や長さなどからおこる紋様）などからして、独立種の別物であることが分りイズモコバイモと命名されるに及んだ。2個の肥厚する鱗片をもち、5枚の葉は下部は対生で上部は輪生、花は単生で6花被6雄しべ、果実は無翼である。本植物の原産地は山草マニアと道路工事のため絶滅してしまった。しかし幸にもわが彩紫花園には移植品が残存しかなりはびこっている。

この植物の学名の種小名アヤコアナは、この植物とホソバナコバイモとの比較栽培中その相違を最初に発見した丸山絢子を記念したものである。ユリ科バイモ属の多年草で早春開花。

貞享四年竹崎卜蔵家三代甚兵衛は、横田八幡宮に鳥居を寄進した。今日参道の入口にそびえる大鳥居である。この八幡宮は横田郷六ケ村を中心とする近郷の一の宮として、近くの岩屋寺とともに、地域の信仰を集めていたから、卜蔵氏の当時の社会的地位と経済力を知ることができる。この甚兵衛の子が次左衛門すなわちのちの孫三郎で、荒島の新田開発者荒島卜蔵家の祖である。

（横田史談会・高橋一郎）

会員配布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第84号
（4月号）
昭和57. 4. 3
奥出雲編集集団

杠城興亡記（上）

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

はじめに

楪城（杠とも書き「ゆずりは」と読む。一名小谷の要害という）は、私たちの郷土に幼いころから呼びならわされたこのような地名があって、そこは、三村元範という城将が、安芸国吉田庄の毛利元就の軍に攻められて、高尾に落ちのび、石指というところの早乙女岩のもとで討ち果された。そして奥方をはじめとして幼い若殿たちは殺されたり散りじりになって、さしもの天険もついに毛利方の握るところとなったと。

このような天正三年（一五七五年）正月にあった戦国時代の杠落城の悲しい物語りだけが、私たちの耳に大きくクローズアップされて、いままで語り継がれてきたのである。また、近ごろはそれらの歴史的な事実にあやかった郷土芸能が行われたり、杠の名をつかった商品や商号が現われて、はなばなしく喧伝されているが、郷土史考の立場からすると、杠城の歴史的な価値とは別な次元のものと思うのである。

私は、以上のようなわけで、かねてから杠城の興亡について資料をたどって正しい歴史を調べ、それを書き綴りたいと念願し、関連史料の蒐集に努めていたのであるが、中世新見庄の立庄の過程の史料とともに杠城の興された事情が探られなかったために、中途で挫けてしまい、そのままになっていたのであった。

このことは、ほかのことについてでも言えることであるが、因果関係がはっきりして途中の経過が知られなければならない。具体的に言うならば、どうして杠という名がつけられたか、そして、どのような理由でいつの時代に、この大字井村字小谷の天険の要害に、どのような規模の城が築かれたのが、そしてどのような結末をたどったか。言わば、この城の創始時代から破却（はきゃく）までの、日本歴史の背景というものが知られなくてはならない。

私が杠城の歴史を研究してみて、それが日本歴史の中で、如何に大きな比重をもつものであったかということ自体がわかってきたのである。

さて、さいわいにして、ついに近年ふとしたことで、島根県横田町高橋一郎氏の厚意で、「杠家文書」なるものの写本の提供をうけたことで、かねての念願に再燃の動機を得たのである。それにあわせて、備中国新見庄史料・天叟寺文書・石垣家文書・毛利家文書・吉川家文書・小早川家文書・萩藩閥閲録のほか、中国兵乱記、備中兵乱記・森脇覚書・宇喜多戦記・身自鏡などの戦記物などを参考史料として、ようやく記述の構成の見とおしがついたのである。

しかし、その中でも未解明のところもあって、今後の新しい史料の発見や探求によっては、書き改めなければならないこともあり得る。何れにしても歴史の展開なので、歴史用語を抜きにしては表現に困るが、なるべく平易を旨とし、少しでも多くの読者に読まれて戦国の世の郷土の歴史の一端に触れていただきたい所存である。なお、読者のご意見を待つこと切なるものがある。

杠城の由来

杠家文書に「備中国杠城由来」として、「葛原親王十二代孫三浦大輔義明六男重行杠六郎摂津之国杠峯（ニ）居ス故ニ杠ヲ氏トス鎌倉殿ニ参勤文治二年ノ春備中ノ守護トナリ哲田（多）郡矢谷城ヲ取立嫡子行実父子居住ス是ヨリ杠ノ城ト云」と記されている。

次に、これについて若干の説明を加えると、葛原親王は人皇第五十代桓武天皇の皇子で、俗に桓武平氏といわれるものの祖、高望王（たかもち）の祖父にあたる。その子孫は代々関東地方に土着して固い地盤を築いていたが、その後裔はさらに分かれ、いわゆる坂東八平氏として平家の武士団を形成したのである。

そのうち有力な三浦氏の末孫に三浦義明がいたが、その六男に六郎重行なる者がいて、杠氏の元祖となるのである。

義明は、その子息義澄ら男兄弟七人、孫の和田義盛、義茂（もち）の兄弟をもって三浦一族を成し、源頼朝が石橋山に兵を挙げたときに味方したのであるが、同じ一族の畠山重忠の軍との間に手違いが起きて相討ちとなり、治承四年（一一八〇）八月二十七日、本拠衣笠城で、一族を落ちのびさせたのち自害して果てた。

かくて義澄を代表とする三浦一族は、逃亡中の頼朝を探し求めてついに合流した。頼朝はのち関東武士の諸勢力を吸収して鎌倉に入り、画策の末に後白河法皇の十月宣旨をうけ、新しい権威をもつことができた。

そして十二月に和田義盛が侍

所の別当に任ぜられ、五年後の文治元年（一一八五）十一月二十九日、頼朝は、法皇から国ごとに守護、公領庄園に地頭の設置と、兵糧米の反別五升の徴収を許されるに至ったが、その頃摂津国の杠峯に拠っていた六郎重行は、そこの地名をとって杠氏を称え、その翌年の文治二年春ごろ、頼朝から備中国守護職の補任を得て、哲多郡井村に居を構えたのである。

そして、その子佐右衛門尉行実とともに、千矢谷（またの名称を八谷という、今の矢谷のこと）の要害に山城を築き、前任地の杠をとって杠城と命名、この城に居住したといわれる。

さて、杠城の来歴やそれにまつわる歴史的な事実は以上であるが、はじめに言及したように、頼朝は何故に杠氏をこの国の守護として、山間の辺鄙な土地に遣わしたのだろうか。

その当時、備中国は平氏の知行国で、古代からの産鉄地でもあり、古代には主として農工具に加工された鉄も、武士が怡頭する平安時代末期からは、武具の原材料としての重要性が高まって、特にこの地が選ばれたのであろう。

一方では、新見が伯耆、出雲備後、美作に近く、古代からの重要な拠点に他ならなかったことは、吉備国から吉備津彦が鉄を求めてこの地に到り、土豪蟹魁師を従えてのち、伯耆、出雲に遠征したことでも知れるが、それは守護職だけではなく、頼朝政権の重要な御家人として、この地方に源氏の勢力を植え付け、亡びかかっている平氏の勢力を追い払うという大策略であったと理解することができる。

余談であるが、それより後年の備中国守護所も、その地名が判然としないまでも、新見庄から程遠からぬ七里ばかり離れたところに置かれていたという史料からして、最も初期の備中国守護所が、この新見庄の中心部に近い一角に置かれていたということに、疑いをはさむ余地もない。

杠氏の事歴

前回は、杠氏が備中守護職として井村の地に要害を構えたと

桓武天皇……平高望……義明

義宗 杉本太郎 三浦入り
義澄
義久
義春 和田義盛 義重
義秀
重行 杠六郎 杠の先祖、文治二年備中国守護トナリ哲多郡ニ住ス
義連……コノ間三代……貞宗 美作国高田庄地頭職
女 畠山重忠ノ女

行実 杠左衛門尉 備中国哲多郡居住 千矢谷城故杠城云也
杠左衛門尉賢実 杠太郎実澄 備中守

杠氏の系図の一部

いうこと、そして鎌倉政権の御家人として、この備北の要地を中心として、その周囲の国々に頼朝の勢力を扶植（うえつける）したことを述べたが、これは頼朝が守護地頭設置の公許を得てから、わずか半年にも足らぬ間のできごとであったことに、歴史的にみて大きな意義があると思われるのである。

新見の地が軍事的に極めて重要であることは、前回に記したとおりであるが、井村を中心とする最勝光院領新見庄という本所領家一円地（これは後で説明する）に、鎌倉政権の御家人を守護職として投入することにより、荘官の領主化をはかる政策がとられたこととも理解することができる。

事実そのようになったということは、その後の史料が語るのであるが、ここでは触れない。このことは、この地に鎌倉政権の家来（御家人）がいなかったことに起因するが、これよりさき、寿永三年（一一八四）三月、土肥実平が備前、備中、備後三国の守護、また山陽道鎮撫使および勧農使として備中国に下り、大和山城を築いたとも言われるのである。

翌元暦二年（一一八五）四月、同じく土肥実平と梶原景時が惣追捕使に任ぜられたことからして、中国山地内陸部の戦略拠点に、有力御家人である三浦一族の杜六郎を据えて、勢力の拡大を図ったとも推考されるのである。

さて、杠氏の系図をみると、重行ー行実ー賢実ー太郎実澄ー若狭介実泰とつづいている。杠実澄は備中守護職であり、承久元年（一二一九）正月二十七日、源実朝の右大臣就任の拝賀の時、鎌倉鶴岡八幡宮に供奉（お供）したのであるが、この時実朝は甥の公暁のために殺され、ついに源氏の正統は絶えた。

これよりさき、従兄弟の間柄にある和田義盛と三浦義村とが、骨肉の争いをして、義村の一統だけが相模の大名として残ることになった。義村は執権北条義時方として、侍所別当職を勤めていた関係もあって、一族の杠実澄を備中守としたのであろう。そして、その子実泰は承久の変に武功をたてたのである。

このようにみてくると、実澄は杠城を本拠としているにも拘らず、幕府にしたがって鎌倉にいたため、この地には守護代を置いていたと考えられるが、それは恐らく新見庄下司の康仲、頼仲の父子であろう。

また別の説では、正治二年（一二〇〇）に、杠六郎の甥の和田義盛が備中国守護職になったともいう。当時義盛は、鎌倉幕府宿老会議十三人のうちの有力

な一人であって、備中国守護として国元に常駐することができないため杠氏に守護代を委せた。そうしたところ、義盛は建保元年（一二一三）の和田合戦に敗死したため守護代実澄は守護職に格上げされたものであろうと。

次に中世の信仰形態から鎌倉武士の八幡信仰、法華寺院に併設の妙見信仰は、共にこの杠城付近に見られるところである。一つは杠城の嶺つづき坂本地内の八幡風呂として、また字矢谷地内の寺院の遺址とともに妙見という地名とが残っている。

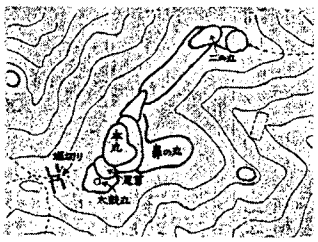
新見庄史料を見ても、文永八年（一二七一）のころすでにこれら二つの神仏田畠が検収されていることから、これらは何れも関東武士出身の杠氏の、この地への土着の証明となると考えられる。

守護と下司

前回は守護代としての杠氏が、鎌倉への常駐で新見庄下司職に又代官を兼帯させたのであろうと述べたが、ここで、新見庄の立庄のいきさつをひととおり説明しておいて次へすすみたい。

備中国新見庄史料によると、大中臣孝正が開発領主で、ついで小槻隆職に私領を譲り、小槻氏はこれを最勝光院領として寄進したという典型的な寄進地系荘園である。

この大中臣孝正の事歴はわからないが、もともと大中臣氏というのは神祇伯でその一族か末裔とみられる者が平安時代のころ二回にわたって備中国司をつとめている。また、延暦十六年（七九四）には朝廷から右大臣大中臣朝臣清麻呂に、備前国邑久郡の荒廃田百余町を賜わっている。



杠城趾の位置図

このような歴史事実からするならば、大中臣孝正もこれら神祇伯の一族で、何かのコネでこの地の官人、例えば郡司とか郷司とかに赴任して、日本歴史の通説のように、「職」の立場を利用して、私的な行動として私領を形成する、こういう動きがあったのだろうと思われる。

次に小槻氏であるが、この家系は律令制の時代から太政官の左大史をつとめ、これを官務家といい、太政官にある書類を司る枢要な職であった。なお、最勝光院というのは後白河法皇の皇后によって建立されたお寺で、小槻氏の寄進と考えあわせると、新見庄の下司職（土地や百姓を管理して年貢、公事、夫役などを領主である小槻氏に納める役）は、この時代の国政の権力である後白河法皇や、小槻氏の近侍者でなくてはならないと思われるが、杠城址に近い坂本の地内に、近藤奥とか正地（庄司）、給分田という荘園に関係した地名が残存していることからして、法皇の北面の武士を務めた近藤宗重か、その一族の者が任命されたのではないか。このことは近江国坂本から侍の一族がきたという、坂本の伝説と非常によく似ている。

このように推理して、杠城に備中守護所があり、坂本に下司が構えていたとするならば、新見庄史料の第一、第二にみられる「まさに兵糧米の責を停止せしめならびに同じく宛文および守護所の自由な下知を以てほしいままに地頭と号し、領家の使を用ひざるの最勝光院領当国新見庄を押領のこと」もうなずける。

これは、反当り五升の兵糧米の徴集をやめたにもかかわらず、守護所が勝手にまた三升の米をとりあげたり、下司の康仲、頼仲父子をそそのかし、われこそ地頭なりと言わせて一般の百姓をしいたげたというので京都の六波羅探題からお叱りの文書が出されているくだりである。

承久の乱の直後のことであるが、杠氏はその後代をかさねて北条氏や、南北朝ごろには足利氏に仕えている。この杠氏文書で見るかぎり本拠はここ杠城のあったと思われるが、杠氏の守護職は承久の乱ごろまでのようで、その後は北条氏の一族に代り、建武の新政の前には得宗領になったのである。

（四頁へつづく）

しばぐり句会抄

門脇花子
ものいえば息からみ合う寒戻り

柏木侑
二月の野光の束の太きが来
今年また亡妹の残せし蘭芽吹く

加納佳子
受験子に何を贈らん祈るのみ
頬紅を少し濃いめの凍て鏡

田辺竹野
凍蝶の生れて打つや古障子

高木白虹
竹反りて鈍さ冬日を戻しけり

中澤斐水
白魚の瞳のほおに彩もたず

浅野としお
着膨れて老爺眼鏡をずらし視る

糸原古志
一鳥の啼くや寒林閑更に

岡田蹊花
国引きの神話の浜や春隣

岡田麗水
育てたる桧挽めし雪丸し

小川あきお
凍てし床少年剣士の気迫満つ

故恩田魚跡
昼の灯を点して老眼毛糸編む

新出谷一華
春物の布に心の旅を縫う

錦織富江
手孫して冬日を負ひて行くさまに

峯石美代子

藤原樵夫

前83号訂正　横田銘草木集(16)10行目　享保の年 → 享保9年

斐の上川柳会三月句会「雑詠」抄

束ね髪一言云はして貰います　太田亀甲
吉と出た相性信じて四十年　佐佐木千世
肩の力抜いてやさしい眼にもどり　松浦亜以
玉砂利を踏んで皇居に襟正し（初めて東京見物に行く）　堀江孤雷軒
梅一輪春待つ心ほころばせ　松浦木公
手作りの人形何か言いたげに　真綿よし子
日曜日子等と遊ぶも楽でなし　加納治江
手のひらを返した様なうそをつき　渡辺好三
道しるべ人それぞれの岐路に佇つ　高木白虹
肉親に会えぬ孤児には戦後まだ　松田牛歩
可愛いよ一言聞いて胸弾む　藤原のぼる
半額の衝動買いで後悔し　安部正子
梅の花春を背負って北の旅　若槻白馬

三月の歌

人あまた地底に置きて水そそぐかかる無惨をうべなふべしや　常盤はるまさ
集りて明るく話す人らにもおのおの生くる者の陰あり　野村節子
観光の地として碑の立つ丘の上御霊は如何にうべなわれしや（沖縄の旅にて）　児玉敏郎
三月の日差しに解け初む霜柱踏む黒土のほこほこ温くし　畑八重子
潮騒になれていつしか眠る夜の後いく夜さで出稼ぎ終る　宮廻愛子
ストーブを囲みて夜半を語りつゞ雪の民宿の客に馴みて　景山悦子
白糖の幻覚の中雪を堀る陽にきらめくをまぶしみにつゝ　伊藤萩雨
父母を恋ひてはるばる尋ねしに唇かみて孤児の去りゆく　松浦愛子
枯葦の荒涼となりし冬の川水鳥遊ぶ速き流れに　岡田時子
歌詠めばおのが心のさびしさに触れて霜夜のわが泪かな　渡辺観翠
年毎に巡り来る季は同じけれ吾年毎に老の身にしむ　目黒成生
苦労なき人ゆえ君は歌詠むと陰口を聞く今日も歌詠む　佐藤喜代子
如月の鎌倉路には人まばら山裾の畑に梅さかりなり　永井やよい
夕映へし恋路ケ浜を歩みゆく人影遠し海鳥の啼く（渥美半島にて）　安部夕波

後醍醐天皇は新政の直後に新見庄の地頭職を京都の東寺に寄附した。そして翌建武元年十二月には地頭方の検地が完了したが、坂本の友貞名・横見の武忠名などはそのうちから除外されていることからみて、坂本に派遣されたとみられる下司職の近藤氏の子孫が、新見庄の地頭職となっていたと考えられるふしがある。

編集者追記

大馬木・山本杠家については本紙46・47・51・56号で明らかにしたが、出自については備中新見庄の杠城の城主であることは、系図から知ることができても、詳細については不明で、今後浅原氏の研究に期待するとしておいたが、このほど新見市の郷土紙「備北民報」に、浅原氏の研究の成果が連載され、新見地方でもはじめて杠氏について明らかになり、好評を得られたものを贈られたので、浅原氏の了解と、「備北民報」の好意とで、今月から三回に分けて連載することとした。御期待を乞うものである。

杠氏の初代常久は杠城落城により馬来氏をたよって大馬木に来た。二代　久は帰農し、三代則久の弟干之助は武士となり、尼子経久に属して、永正十三年阿用城の桜井宗酌攻めに参加した。

この時笛の名人であった経久の嫡男は討死したが、干之助もこの戦で討死した。永正六年には三沢氏が命をうけて、禁裏御料所横田庄を守護するため、藤ケ瀬に築城して移っている。

杠氏はのち天文五年、たたら製鉄業をはじめた。家名が明らかで今日子孫の現存するものでは、奥出雲第一号である。

日本史のことば

御用留（ごようどめ）
御用書留帳・御用向控帳・御触書留帳ともいう。江戸時代の地方帳簿の一つ。一般には領主からの触書・廻状を書留めたものだが、村内からの願届伺書を控えたものもある。村は、廻状や触書を受取り、それを御用留に控えたのち隣村に廻した。

先納金（せんのうきん）
近世、前もって金を払うこと。とくに年貢を先払いする意味に使用された。中・後期になると、財政窮乏のため領内に年貢先納を命じることが多くなった。農民は金をもたぬため豪農や商人から借金し、地主・小作関係などを助長する一因となった。この地では鉄師に藩が営業許可と引替えにこれを求めることがあたりまえとなった。租税先納。

差紙＝指紙（さしがみ）
御差紙ともいう。江戸時代の召喚状の総称。

拝借金（はいしゃくきん）
江戸幕府が大名・旗本・寺社・農民・町人などに行った恩貸金。不時の入用に貸出すもので、おもに火災・出水などの災害・武備充実などに適用された。農民に対するものは無利息年賦償還。
この地方の鉄師が経営の必要上、拝借金をうけたが、利子がつけられた。

——今年の春の史蹟めぐりは六月下旬に、一泊二日間吉備路を予定しています。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 85 号
（5月号）
昭和 57. 5. 1
奥出雲編集集団

杜城興亡記（中）

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

中世の戦乱（一）

杜氏十代の義実は、建武の新政をこころよしとしない足利尊氏にしたがって武功を立てたという。建武二年（一三三五年）十二月十二日、箱根の竹下における新田義貞との戦いに勝った尊氏は、余勢を駆って京都に上り、北朝を樹てるが、義実の孫友久は、応永年間に足利四代将軍義持に仕えている。

その頃新見庄では、熊谷の多治部氏が西方の福本小三郎、宮田三郎左衛門尉を手先に、西方地内で乱暴をはたらいてた。

地頭職の新見清直は西方の領家職を東寺から任ぜられていたが、請負い年貢を納めないので、つぎつぎと代官が交代していた。また大洪水や台風で作物もじゅうぶんとれないうえ、年貢が高くて、百姓の団結機運がたかまっていた。天下動乱のおそれもでてきたのである。

応仁元年（一四六七）五月、山名宗全と細川勝元は京都市街戦の形で激突し、十年戦争の応仁の乱がおこるが、膠着状態が六年目をむかえ、諸大名が京都で戦っている間に、国元では反乱がおこる仕末であった。

このころ高梁の大松山城主秋庭元明は、東軍の細川勝元に味方して京中にあったが、その留守に乗じた小松山城主上野備中守広長が秋庭元明の守護代の地位を利用して、秋庭の被官である杜城主の惟久を攻めた。文明四年（一四七二）のことである。

杜城も築城開始以来二百八十六年、十五代を数えていたので、堅固な名城として近国にきこえていた。

上野広長は大挙して攻めたてた。惟久は十九歳の嫡子荒太郎常久と、十三歳になる次子荒次郎勝久、その家来ともどもよく防いだ。多勢に無勢ながら、天険の要害は守るに固く、上野勢は攻めあぐんだが、ここにも敵に内通する者があって落城するところとなる。

城主、家来みな討死してしかばね累々。嫡子常久は深傷を負いながらも家の子郎党に守られて忍び落ち、一命はとり止めたものの、不具者となり、武士として身をたてがたく、出雲国仁多郡馬木郷の槙上野介行綱の食客となったが、後に軍学兵法の道を修め、同じく槙氏の家臣、重複のため、槙蔵之助の聟養子となって大永二年（一五三二）に歿している。

また、次子勝久は、惟久の今はの際の遺言で、年端もゆかぬ十三歳、父と死を共にするのは余りに不憫、ひとまず城を落のびるよう命じられ、家臣高木源八郎を供として京都に上り、足利八代将軍義政に扶助を乞うた。

そして、次の九代将軍義尚、十代義稙と、代々足利将軍に仕え、明応元年（一四九二）近江国の六角高頼を討ったときに武功をたてている。その後、子孫がまた杜城主として返り咲くのであるが、それはあとで述べることにして、杜城を奪取した上野氏の顛末をつづけたい。

高梁の大松山城主秋庭元明は、常に京都に在って足利将軍家に仕えていた。杜城落城の悲運に見舞われた杜勝久が将軍家をたよったのも、秋庭氏の支援があったからに他ならない。

こうして、強大な勢力を蓄えた上野広長は、杜城攻略直後に、秋庭氏の留守をよいことに大松山城を奪取して、威勢を備中国に振うとともに、三男上野内蔵介維行に杜城番を命じ、備北一帯から伯耆国南部地域を手中におさめ、砂鉄の収奪を図ったのである。

中世の戦乱（二）

前回の秋庭氏が大松山城を上野氏に奪われたことを述べた。秋庭氏はその後、身は京都にありながら新見庄を手中に収めんと画策していたが、熊谷の多治部雅楽次郎が新見庄代官にもかかわらず請負年貢を納めないので、代官の更迭に便乗し明応元年（一四九二）九月、みずから代官となり、新見庄へ進出の手がかりを得た。

しかし、約十年後の文亀元年（一五〇一）三月になって、新見庄地頭職新見蔵人国経に代官職をとって代られ、秋庭備中守元重は心中おだやかならぬものがあった。

国経は新見庄の地頭、領家の双方、言いかえれば庄内全域の実権が手中に入ったので、杜城を攻めて上野維行を松山に放逐し、城を整備して守りを固めた。このころ尼子経久は出雲国守護職を得て、中国山脈の南にも目を光らせていたし、安芸国では毛利氏が野望に燃えていた。

永正八年（一五一一）四月、秋庭備中守利元は新見庄に討ち入り、杜城を包囲してこれを落し、新見庄の中南部は秋庭氏の手中になる。新見国経は、この間の事情を京都の東寺へ次のように書き送っている。

「当年の儀は、国中やぶれ候、

さだめて聞き合わせ及ばれ候か、秋庭との合戦利を失い（中略）知行分は所々やぶれ候……」

杠城に入った秋庭利元は大社山宗浮寺を城の麓に建立した。これが今の天叟寺の前身である。秋庭氏が、代々にわたり神仏の信仰を厚くしていたといわれており、新見庄においても同様であったらしい。

さて、間もなく秋庭氏は撤退したらしく、四年後の永正十二年夏、国衙方に多治部が加勢し、九月には西方で合戦があり、西方の農民は杠城の山小屋に籠城した。このことは、杠城址の中腹の東西に今もって古屋敷という地名が残っているのでわかるが、これが籠り小屋の跡らしい。

このようにして、新見国経が秋庭氏をいち早く退散させた蔭には、尼子経久の触手がこの地にのびていたという背景があり、永正十四年（一五一七）五月には作州高田城（勝山）を攻める尼子氏に合力（協力）を求められ、国経の子息を番替に、作州の要地、おそらく富原か月田のあたりであろうか、警戒と情報あつめのため、いわば分哨のような役目に当らせ、このことを国経は「なかなか大儀である」と京都に申し送っている。当時尼子氏に運が向いていたので、配下の国経も安泰であった。

大松山城主上野備前守頼久は、永正十二年に鳴輪（成羽）で三村氏と戦うが、その四年後の大永元年（一五二一）八月十六日死去したので、その子伊豆守頼氏がその跡を守り、小松山には上野右衛門尉をおいた。

ついで天文元年（一五三二）九月には、出雲の尼子経久が配下をもって作州苫田、勝田に進出、十月になると松山の上野頼氏は、星田（今の美星）の三村氏と結託して備中南部に権益を求めた。このころ杠城は新見氏に代って再び上野氏が握っていたらしい。そのわけは不明である。

天文二年（一五三三）小田郡猿掛城主庄為資は、植木下野守秀長の加勢によって大松山、小松山を落し、また、新見庄杠城の上野左京亮行経も討死して、上野氏は滅亡した。これより大小の両松山城は庄為資が構え、杠城には庄一族の楢崎久之丞時信を籠らせ、新見庄は庄氏の支配下に入ることとなる。

毛利と三村

前回には、いよいよ三村氏が登場するところまでを記した。天文二年になると庄為資のために杠城が落されて楢崎氏が城番となったが、新見国経はその年の十二月に「新見庄もいちおう平穏無事。尼子氏が作州や備後から備中をねらっているので、楢崎もいずれ尼子氏に敗れるだろう」と東寺に近況を伝えている。果して尼子氏は天文七年（一五三七）に備中国を平定し、庄はじめ有力な国人どもをすべて配下とした。

三村家親も尼子の被官として、成羽の鶴首城において勢力を蓄積していたが、天文十年（一五四〇）ごろから安芸吉田、郡山城主毛利元就に通じ、遠交近攻の策をもって庄一族を討たんとした。

天文二十一年（一五五二）尼子氏は、かねてから中国地方東部一帯に勢力をもったので、足利十三代将軍義輝によって、出雲、隠岐のほか因幡、伯耆、美作、備前、備中、備後の八箇国守護に任ぜられた。新見国経もその被官として、また新見庄の東寺代官として請切年貢の納入

日本史のことば③

荘園（しょうえん）

大化の改新ついで大宝律令の制定によって、律令体制が完成し、土地はすべて公地となり、一般人民は班田制により平等に与えられたが、八世紀になると律令体制が崩壊し、土地を主体とした大規模な私的所有地があらわれた。これを荘園という。はじめは自分で開墾した土地を荘園とするものと、班田制の農地を種々の理由により手放すのを買い集める荘園とが多かったが、一〇世紀以降は、中央の権門勢家に寄進しその保護下に荘園の自己領有化を確実にしようとする寄進地系荘園がふえて主流となった。新見荘は前号のように寄進地系荘園である。横田庄は明確ではないが、諸情勢を検討すると寄進地系荘園である。

本所（本家）と領主（領家）

横田庄もはじめは横田郷を開発した領主（横田氏とみる）がいて、京都で勢のよい石清水八幡宮を本所と仰いで寄進したものであるが、鎌倉幕府創設とともに、頼朝によって石清水八幡宮領として安堵され、在地の領主は平家方であったので、領主権を失った。そして本所の荘官として、小池氏（のちの杠氏）がこの地に下って来た。

荘官（しょうかん）＝荘司

荘園の管理のため任ぜられたもので、中央から派遣される場合と在地の有力豪族から任じられる場合とがあった。名称は荘園や時代によっても異なる。中期には庄別当・庄検校・庄司、後期には下司、庄司などがある。

小池氏の名称は明らかでない。のち横田庄の北方三処郷の地頭三処氏が横田庄の預所（あづかりどころ——本所の代理で荘務をつかさどる）の職を得たが、本所への年貢の未進が続いたりして争いが続いた。その記録の中に預所の下級荘官「公文」の名もあり僧であるが、岩屋寺の僧であろうか。その後三処氏は権限を拡張し、横田庄を地頭請所（うけしよ、うけどころ）とする。それから二百年後三沢郷地頭三沢氏も地頭請所とした。さらに百年後皇室領時代、御所の高官が代官として京都で現地を直接支配したこともあった。

に腐心していたが、戦乱のため、だんだんと地下からの納入が減ってきたのである。

明けて天文二十二年二月毛利元就父子は、かねてからの野望を三村家親の請託（ねがい）に便乗して果すべく、猿掛城に迫って庄氏に敗れた。しかし、勝った庄氏からの申し入れで、毛利、庄、三村の和睦が成立し、備中国の国人の多くは毛利の幕下となったが、新見氏は尼子氏から離れなかった。

そのあと尼子氏は、新見庄の新見氏を足がかりとして、松山城の庄高資を毛利氏から離すことに成功し、被官としたが、毛利元就はこころよしとせず、三男小早川隆景をして松山城番吉田左京亮義辰を自害させ、これを契機として備中国内における尼子氏の勢力は漸次おとろえるに至る。これは永禄四年（一五六一）のことである。永禄五年からの毛利軍の攻撃はすさまじく、永禄九年（一五六六）十一月二十八日、月山富田城の陥落によって尼子氏は滅び、新見貞経も新見庄を棄てて姿をくらました。そののち、尼子氏は山中鹿之介幸盛らの遺臣により、尼子家再興が成功し、元亀元年の冬、尼子勝久を奉じて再び備中に攻め入り、国中おおかたの城は尼子氏の輩下となった。

このことを成羽の三村元親の通報によって知った毛利氏が、元清を旗頭に元範の案内をもって元亀二年（一五七一）二月、庄氏父子の固める松山城や、楢崎助四郎時忠の守る杠城などをつぎつぎに落し、松山城には三村修理進元親を、杠城はその弟官内少輔元範、その他諸城に三村一族を配したのである。

その勢いに乗じた毛利輝元が岡山の宇喜多直家と和睦したのが、かえって裏目となる。天正二年（一五七四）八月の、織田信長から三村元親にあてた密書をめぐる三村一族の大評定が、その年の九月に松山城で開かれた。織田方に味方して宇喜多を叩かんとする多数意見に、敢然と反対した成羽城主三村孫兵衛親成、孫太郎親宣の父子は、身の危険を感じて急ぎ帰城し、早速に毛利方へ注進した。

三村元親の謀叛を知った毛利輝元は、直ちに三村一族壊滅のための軍勢を編成し、小早川隆景を総大将として、笠岡に出陣した。

毛利の軍勢は、その年末から、手はじめに猿掛城を落として二手に分れ、一手は中津井の斉田城を、他の一軍は川上郡手荘の国吉城を、明けて天正三年元旦成羽城とともに平定した。

いよいよ毛利軍による杠城攻略の火蓋が切られんとする。

杠城のまもり

元亀二年（一五七一）六月十六日に毛利元就が逝去した。織田信長は毛利制庄のチャンスと判断したのであろうか。

松山城の三村元親は、備中国以西を制覇の野望に燃える織田氏の勧誘で、毛利氏と離反した。これは、これよりさき父家親が宇喜多氏のために作州で殺害された遺恨によるものであり、毛利軍の大軍が、三村一族討伐のため備中入りして、逐次南部から北征、やがて杠城攻撃の機は熟した。

杠城は、永禄八年に尼子氏の本拠富田城が落ちてから、当時の城主新見氏が自然消滅し、その後、楢崎氏について三村一族の三村元範が拠った。

元範は鋭意城の整備拡充をは

卯月集

つぎつぎと遺体は地底より運ばれて冬となる夜の鳴咽の声は　常盤はるまさ
枕辺にきしむ水車もつれづれの四季の詩となり心に通ふ　畑八重子
花嫁となりし倖喜ぶも歌声高ければ尚哀しくて　景山悦子
巡視する夜半の無人の教室に生徒の活けしまんさくの花　伊藤萩雨
乳色にかすめる春の黄昏を仔牛の声の遠ざかりつゝ　野村節子
学業を終へたるらしく髪長き少女は赤きスカートはきて　佐藤喜代子
ひそやかに門をとざせるたたずまい沈丁の香そこはかとなくただよふ　渡辺観翠
盃を重ねる程に酔ふほどに君に不信の愛のさめゆく　宮廻愛子
隣席の若き母子と会話せり車内にありて物言はぬ吾が　目黒成生
かげろうが川のほとりにゆらめきて眉上ぐる子らの額を照らす　児玉敏郎
幼な児をにごりなき人に育て上げしふところ深き中国の母　松浦愛子
旅にあれば切なきまでに旅思ひ家近づきて又旅恋ふるなり　永井やよい
春おそき峡を過ぐればこぶし咲く峠に聞きしうぐひす幼し　安部夕波

斐の上川柳会四月句会「雑詠」抄

愛想よくしたたかな口であしらわれ　松浦亜以
ハネム！ン宿帳にはじめて妻と書き　太田亀甲
舞台裏みたいに子等の部屋は脱ぎ　加納治江
地図出して我が子の居どこ確かめる　藤原千代子
頂上は登った嶺のまだ向う　藤原のぼる
愚痴をきく長い電話に心冷え　久村美津
待ちわびて花見の幹事かって出る。　松浦木公
老いてなお元気はあれどボケが増し　目黒申楽
また一人はかない人生友が逝き　横山まこと
愛のむち涙ながらに丁はっし　渡辺好三
ピカ一年背中でおどるランドセル　安部正子
またひとり有線が同窓を奪い去り　松田牛歩
旅しても帰るあばら屋日本一　若槻白馬
孫巣立ち大人ばかりの夕餉とる　堀江孤雷軒
人の世の明暗越えよもれし子等　高木白虹
おだやかな春の陽射しでやっと咲き　真綿よし子

かり、まわりの端城に家臣を配して防備に努めていた。すなわち、横見の朝倉山城に富谷大炊之助、粒根城に伊勢入道をすえて出雲街道谷内地内の交通の要衝を固め、西方の竹野城（茶白山）に三村元威を置いて前進陣地とした。

話題を少し戻して、天正元年五月のことについて記すことにする。毛利輝元は三村元親からの軍事の協調に対して相談したしたいとの申し入れにより、その家臣、桂善左衛門を備中松山に派遣した。その帰途、新見通路の神代舞尾においてというから、九の坂峠のあたりと思われる。吉田與次郎という者が百五、六十人の兵を二手に分け、上と下の両方から襲いかかった。

善左衛門は配下が十二、三人、元親の派遣した送り役の者が五、六人、都合十七、八人の兵力で、兵具も大して持ち合せていなかった。というのは、総大将元親の要請による行動でもあり、その配下も附添い、かつまた、この地域が三村一族、とくに杠城の見えるところで、当然に危険はないものとして気を許して通っていた矢先のことである。

その吉田與次郎は桂善左衛門が腕ききの弓取りであることを知っての上で、大声で、すなおに腹を切れとののしり、大将と思われる者が二人じりじりと迫り散りになって杠城に逃げ帰るのが見えたのであった。善左衛門は、家来ともども無疵のまま大将を失った追手の兵が、火縄銃のあざやかな手練に驚いて散

四月しばぐり句会抄

麗日に久しく閉だし書を曝す　浅野　としお
花冷えや爪の三日月いつ失せし　糸原　古志
次つぎと帯目潰す落花の斑　岡田　蹊花
誰ぞ呼ぶ声かと惑ふ初蛙　岡田　麗水
春灯や別離の言葉さりげなし　小川　あきお
嘔りに目覚め始まる今朝の家事　門脇　花子
花に添い日の粉舞い降る宴の座　柏木　侑
川越して心遊ばず野火の列　加納　信子
酔眼のたどる碑文字や花明り　高木　白虹
春雷にひきとめられて長居する　田邊　竹野
日本晴れ初鶯を聞きにけり　中澤　斐水
隣の子春陽にかえす靴の音　錦織　富江
それぞれに表情もちし雛納む　新出谷　一華
菜の花のくねくね坂や風走る　峰石　美代子
奥山は雲に隠され芽木の鬱　藤原　樵夫

元親は事の重大に驚き、直ちに書附を以て、「この首はまぎれもなく杠城主元範の手の者であり、このようなことになろうとは、言うもおこがましいが、まったく知らなかったことで、近頃は通路も状況が良く、供の者も少々であったが、私（元親）も今後このような事があっては、名誉を失わぬよう決して忘れわしない。早々に郡山城に赴き陳謝申し上げたい」と詫状を入れたのである。

この事例は、三村一族間の意志が纏まっていなかったということを示すものだが、とくに元範の過激な心情がこのような形になって現われて、毛利氏の不信を買い、織田氏の懐柔政策のとき、いちはやく三村氏撃滅の挙に出た毛利氏の挙動にそれを読みとめることができる。

まってきた。善左衛門は持っていた火縄銃でこれを仕止めた。一人は大将の吉田で、この首をとり、今一人は敵が引き揚げるとき死骸を持ち去った。しかも、もに松山城へ送りつけた。

で安芸吉田庄郡山城に帰り、輝元に事の一切を報告した。

輝元は善左衛門の持ち帰った吉田與次郎の首級を、書状とと

横田史談会より

古文書を読む集い

「七種（ななくさ）宝納記」（松江藩家老の遺書）や町内古文書等を読みあう。

68回五月一日

69回六月五日

いずれも第一土曜日　午后一時半よりコミュニティーセンターで

70回七月三日

新らしい方々の参加を歓迎します。現在15名

第21回 春の史蹟めぐり

6月26(土)27(日)日の一泊二日間

亀嵩観光バスにて倉敷方面

定員28名で経費三,000円程度

宿泊は倉敷アイビー・スクエア（ったの四辻の広場）という文化的情緒豊かなホテル

経路・見学先

（第一日）

生山・新見・高梁・総社から宝福寺・作山古墳

吉備風土記の丘・備中国分寺

こうもり塚古墳・備中国分尼寺跡・吉備路郷土館

造山古墳・備中高松城・高松稲荷・吉備津神社・吉備津彦神社（若干は車中見学で）

（第二日）

大原美術館の本、分館・倉敷民芸館・倉敷考古館・倉敷歴史館・倉敷美術館・日本郷土玩具館・アイビー学館・愛美工房等を選択して見学。

帰りは往路をたどり

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六二ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 ~~87~~ 86 号
（6月号）
昭和57. 6. 5
奥出雲編集集団

船通山の鳥類を探る（1）

内田　映
（島根野鳥の会会長）

船通山は中国山脈の島根県東部と鳥取県西部との両県境に位置し、標高一、一四三m、島根県では仁多郡横田町の奥部である。宍道湖へ注ぐ斐伊川の源流地帶で、地質的には流紋岩質火山砕屑岩から構成されており、山腹は急斜面が多いが、山頂部は平担乃至緩斜な平地がよく発達している。

この高地の平坦面は中国山地に広く分布する高位浸蝕平坦面と呼ばれるもので、古い地質時代には西日本一帶に広く分布していた名残りの一つである。

船通山国有林

船通山の山麓上部からは国有林が多く、その面積は五〇〇ヘクタール程であり、殆んどが水源涵養保安林に指定され、また鳥獣保護区でもある。

この国有林は、昭和三〇年以来国が買入れした森林で、凡その2/3はスギ、ヒノキ等の植林地であり、天然林は1/3に過ぎない。その天然林は落葉広葉樹林で、斐伊川の最奥部支流赤川やユズリハ（杠）川流域の上部に残存している。赤川では奥部の頂上に近いあたりに生育していて、比婆道後帝釈国定公園の一部でもあり、また国有林経営上からは、レクリエーションの森林風景林風致地区となっている。もう一つの支流杠（ユズリハ）川流域の天然林は、赤川流域に比べて、もっと下流まで広く残存しており、上部地帶は赤川同様に国定公園や風景林風致地区となっている。

森林植物の概観

船通山の植物景観は、過去に於ては、現在上部付近に見られる残存ブナ林よりも広く分布していたものと推察される。

現在のブナ林には、ミズナラ、ハウチワカエデ、ウリハダカエデ、オオイタヤメイゲツ、シデ類、ホオノキなども混生し、下層はクロモジ、ムシカリ、ヒメモチ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、チュウゴクザサなどが見られる。そしてブナ林の下部の方では、ミズナラ、シデ類、ミズキ、イタヤカエデ、ケヤキ、カツラ、ホオノキ、ハリギリ、ハクウンボク、ヤマボウシ、クリなどの高木から下層ではクロモジ、ハイイヌガヤ、ムシカリ、ツノハシバミ、タニウツギ、ヌルデなどの低木が生育しておりまた沢通りではサワグルミの顕著な林叢が、リョウメンシダの群落とともに目立つ。

初登山の船通山

船通山へ初めて登山したのは、昭和四三年十一月十六日であった。この時のことは、大町桂月明治三三年の「簸の川上」の紀行文なども引用して島根タイムス（昭和四四年一月号、三月号）に、「簸の川上船通山へ登る」として掲載された。

この日は晩秋にしては良い天気の日であった。この時はユズリハ沢の左岸尾根筋を辿るダムのある登山路を登った。このコースを採ったのは、この道が楽だったからであって、頂上を極めてから帰途の下りで石割ケヤキや鳥上滝を見ることにして登って行くことにしたのだった。

少し歩くと登山路を横切って小さい流れが分流している。タタラ（カンナ流し）跡だろうということだった。荒れ果てた一軒の小さい建物があったが、開拓入植者が一時住み、今は無人となっていた。

シジュウカラやウグイスの地鳴が、若い広葉樹林の中から聞こえていた。クリ、コナラ主体の幼令林だが、アカマツの天然生が混生しているあたりを通ると、ククッと鳥の声が聞こえたのはツグミだろう。

灌木性のユズリハが多く見られるようになる。このあたりは横田町大字竹崎字ユズリハという所であるという。更に一歩一歩登り行く足許には、葉は既に枯れ果てて蔓だけになっているツルリンドウの赤い実が連っているのも美しい。

シジュウカラの声がするので、じっと立ち止まって見詰めていると、付近のコナラの中径木へ三羽連れでやって来た。落葉の山、万目蕭条の秋、この高地で小鳥の声を聞き、またその可憐な姿を見るのは、快いものであった。

やがて下山の時に下って行くことになっている小沢が足下に見えると、渓流の音が聞え出した。やっと深山の感じである。

いよいよ頂上へ結びついたようだ。歩む程にブナの大きい樹木も現われる。イタヤカエデの梢高い所に細い小枝を粗いが円く集めた鳥の巣が寒々とした空に仰がれた。

平坦な笹生地の尾根を歩むようになると、頂上に建てられている「天叢雲剣出顕之地」と記された剣型の記念碑が前方に見えた。頂上一帶は芝草原で、石造の船通宮の祠があり、須佐之

（続）神話と歴史の間 ①

稲田姫の戸籍
斐伊川の地籍

いずれも大原郡にあること

出雲国風土記が誌している伝承・伝説・歴史を中心にすえて、出雲の歴史を考えねばならない。

大和朝廷は壬申の乱の革新後、思想を統一し国内統一の実をあげるために、各地の伝承をひろく集めた。このことは日本書紀の序文や本文に記述されていることであるが、その取捨選択にあたっては、大和朝廷の偉大さを引きたてることが第一であり、その上日本古来の大和を中心とする戊亥（西北）隅の信仰という祖霊信仰と、道教の陰陽思想が神話・歴史の組立ての根底にあった。したがって日本書紀の中にある出雲系神話もこうした立場で創作されたものが多いから、出雲国風土記にある出雲神話にないものが多い。出雲に誕生したもの、伝承したものでないものが多いことは、今日の文献学、神話学、考古学、古代史学の上からも、大筋において一致しているところである。

須我の地とその地の神

出雲西部の文化は神門川（神戸川）の流域に起ったということは、今日考古学、文献学の上から妥当とされている。この川は飯石郡の琴引山を水源として、来島・波多・須佐の三郷を経て神門郡の神戸・朝山・古志の三郷を流れ、西に向いて（当時は）「神門の水海」に注ぐ。

この上流の須佐郷が須佐之男命（記）の説話の発生した舞台である。こゝは神門川の中流で下流には後に神門臣の配下となった氏族が住みついていたから、この地方は神門臣との接触が深かった。出雲国風土記には、**須佐郷**は、神須佐能袁命がこの国は狭い小さな開墾地だが、領地として経営するによい土地だから、我が名は石や木にはつけず、土地の水田にその名をとどめようといって、須佐といったとある。須佐能袁神は明らかにこの地氏族の奉祀する田の神である。

安来郷では、スサノヲ（神須佐乃烏命）は天下の領有する境界めぐりをして、心安けくなったとして安来といった。これは律令制度により出雲の国の範囲が確立したのち——スサノヲが、出雲臣（千家北島両家の祖で当時は意宇郷にすむ）がまつる熊野大社の祭祀と同じに考えられるようになってから——こういわれだしたと考えられる。

出雲平野の開拓時代には、さまざまな氏族が入りこんで（大陸北方が主で、南方からも）、氏族連合政権を作り出し、オホナムチ（大穴持命）信仰——もとは土地開拓の神をすべてこう呼んだ——を象徴として祭っていたが、意宇氏（のちの出雲臣）と神門氏（のちの神門臣）が結んで大和朝廷にくみし、逆に土着氏族を裏切って出雲平野を大和朝廷の下に入れた。そして意宇氏は大和朝廷の威力を背景に出雲平野にも勢力を強め、「出雲臣」として神門臣とともに、氏族連合政権の祭っていた、大穴持神を奉じ、さらに神門氏が在来から信仰していたスサノオを、オホナムチの親神的存在として、そしてまた熊野大神とも考えられるようにしたものであろうと考えられる。

	（象徴神）	（奉祀氏族）	（中心地）
熊野大神	出雲臣	意宇平野	
スサノオ	神門臣	出雲平野南部丘陵地	
オホナムチ	氏族連合政権	出雲平野部	

さて出雲国風土記にみえるスサノオに関する記事を拾うと、**大原郡佐世郷**では、佐世の葉を頭にさしておどった。すなわち鎮魂の踊りをしたところが、佐世の葉が地におちたので佐世といったとある。やはり土地を占有したという説話といえる。

大原郡の御室山は、郡家の東北十九里百八十歩にあるが、スサノヲ（神須佐乃平命）が御室を造って泊られたのでこう呼んだとある。これも土地を占有した説話である。

この御室山は須我山である（須我山山塊の一つが御室山であるか）。

「日本書紀」の第一書の一に、スサノオ（素盞嗚尊）は天より出雲の簸の川上にいたり、稲

（一頁下段より続く）

男命を祀る。また四周は眼を遮る樹木もない。立って四方を眺めると、東方に大山も遥かに雲間にその雄姿を見せ、西南方には吾妻山、南方に道後山などが望め、更に山々が足下に重畳と広がっていて、流石は中国山脈の一雄峰である。

下山は早かった。県指定天然記念物石割ケヤキや八岐大蛇が住んでいたという神話を秘めた鳥上滝も見て、渓流を下って行くと、シジュウカラが数羽、樹木から樹木へと渡って餌をあさっていた。やがて樹林が終ろうとするあたりに鳥上小学校児童が架けた小鳥の巣箱が幾つも見受けられて、何か心暖まる思いになった。開拓地内の道を歩いていると、ホオジロが二羽、チッチーと鳴きながら叢林に入った。

船通山の野鳥について内田映氏に照会したところ、わざわざ登山してその状況を、「しまね野鳥」最近号（29号）にのせられた。それをお願いし快諾を得たので転載したものである。

田宮主簀狭之八筒耳が女の子、稲田媛を妻として生んだ子を、清の湯山主三名狭漏彦八嶋篠と名づけたとあり、別の一書にはこれを清の繋名坂軽彦八島手命（ユヒナサカは湯山主のこと）というとある。

「古事記」の中には、スサノヲ（速須佐之男命）が須佐の地で、こゝは心すがすがしいといって小室すなわち宮をつくって、櫛名田比売（稲田姫）とすみ、その父足名推神をよんで、宮の首（かしら）にといわれ、稲田宮主須賀之八耳神と名づけられたとある。

「出雲国風土記」では須賀の湯山とは、海潮郷の記述の中に、須我の小川の中にある温泉とあることから、こゝであるとされている。また古老のいうのには、この地方の祖神は、須我称命であるという。須我山から流れる須我川の流域の広い地域の開拓者・主神・守護神が、「須我称命」であることがわかる。これを稲田宮主簀狭之八筒耳（稲田宮主須賀之八耳神）と深い関係があると考えられて、同じ神かもしれないとされる。稲田宮主とは須我川流域の水田開拓の祖神であることをしめすからである。その神に奉仕する巫女が稲田姫であるかもしれない。こうした伝承をもつ氏族集団がこの地方に居住していた。

風土記をさらに読むと、大原とは平地で水田が豊かであったとある。「大原郷」という文字はみえないが、須我山に近い須我川流域を大原郷と言った時代があったようである。以前郡家（郡の役所）がこゝにあって、今は斐伊に移っているとある。すなわち先にのべた氏族集団の中心がこゝに住んでいたのであろう。そして郡家があったのが次のような理由で斐伊郷に移ったものであろうか。氏族集団間における勢力の交代である。風土記時代の郡家の主の郡司大領は勝部臣である（主張も勝部臣）勝部は帰化人系の氏族（スグリは韓国の村主の意）で諸国に移住していた。その一群が斐伊郷にすみ成長し、この地方の豪族神門臣に従い、臣姓を得たものであろう。やがて先住の須我地方（大原郷中心）の氏族集団（さヲの須我称命を守護神としてまつる）を押さえて、郡司となったものであろう。

この勝部臣は、樋速日命を祭っている。樋＝斐＝肥と同音であるから、「樋速日」は「肥速日」「斐伊速日」の意で、本来は肥河（斐伊川）の威力を神霊化したものと考えられるのが大方の考えである。ほかに一説、「樋速日」は「火速日」で火の霊力をまつったものというのもある。

さて奇稲田姫という巫女の仕える須我山（御室山）の神の伝承をもつ須我の地方（大原郷）が、勝部臣の勢力下に入って、郡家が斐伊川流域に面する斐伊郷に移った。

こうして稲田姫にまつわる伝説も須我から移って、斐伊郷の西南の斐伊川西岸の木次町熊谷のものとなった。風土記に、

古老のいうのには、久志伊奈太美等与麻奴良比売命が姙娠して出産のため良きところをと来って、大変くまくましき（良き）谷なりといったので熊谷というとある。奇稲田姫にまつわる説話では「出雲国風土記」の中にはこれがたった一つあるのみである。そしてどこにもスサノヲの妃とはないし、生んだ神の名もないのである。

晩春の歌

より惨めなることを並べて気休め言ふかかる円満をわが　常盤はるまさ
憎むべし
原色のセーター着たる乙女らのペタル踏みゆく春風の中　野村節子
一年生の名を覚えむと背を屈め名札に見入れば胸突出し　児玉敏郎
ぬ
袖口を繕ひながら一人兄は遺影の姉に話しかけつ　畑八重子
孫と来て数へて蒔きしえん豆も添ひ竹建つる程に伸びたり　景山悦子
編上げし淡色のセーター孫に着せ仕立上りに充足の今日　佐藤喜代子
若葉風柳のわたを撒きちらし丘の廃屋日々朽ちゆけり　岡田時子
あんず咲く家に逝きにし師を想ふ雨の降るなか落花さび　渡辺観翠
しむ
昏睡の父に介護のすべもなく唯悔涙のおろかなる影　真綿ひろ子
今日も又一日終りて床につく明日の予定を心に描きて　日黒成生
亡き母の摘み漬け置きし山椒の香りなつかし口にふくみ　松浦愛子
ぬ
松山を去り難くして伊予路越すフェリーに結ぶ松山の夢　宮廻愛子
少年は明るき空を仰ぐ如母に縋りて百度踏みおり　永井やよい
（一畑寺にて）
岩魚つりさかのぼる渓に新緑は夜来の雨に雪しており　伊藤萩雨
旅伏山は黄砂に煙りわれ乗りしバスはゆるゆる簸川野を　安部夕波
行く

しばぐり俳句会

花の屑善の悔誘いけり　柏木佑
背中より降り来る花の夜の冷　浅野としお
筍の厨へ転がる二ツ三ツ　新出谷一華
蝌蚪あまた打撲す破目に鍬の先　藤原樵夫
田植機の一服うながすハイヒール　高木白虹
ひと握り三ツ葉を摘んで朝餉とも　中沢斐水
今日を生き大根の花芯となり　錦織富江
落椿むざんにつぶす耕運機　峰石美代子
カメラ手にあまたの牡丹を選り好み　加納信子
落椿大地を染めて地に還る　岡田麗水
母の日に贈くらる服の派手を着る　門脇花子
鯉棲まぬ池ひっそりと桜散る　岡田蹊花
被爆地の噴水高し花五月　小川あきお

こうして風土記の中の、海潮郷の海潮川が氾濫を意味する話。阿用川で若者が一つ目の鬼に食いつかれた話。などをみると特に後者の話は田の神の話に通ずる。くわしくは述べないが、山の神は蛇の姿に通じ、蛇は女を犯すことから、男が女を救う話になると推理すると、これがオロチ退治の話に発展し、斐伊川につながったという説もうまれることになる。この話の成立は大原郡の郡家が大原郷から斐伊郷に移ったころと考えられるから、そう古くはないことになる。

神門臣とともに出雲平野に住んだ日置部臣が、物書きとして朝廷に上ったのが、日本書紀の編集時代であるという研究に従えば、こうした数々の話題が組立てられて、ヤマタのオロチ退治の話の原像となったという説の重みが加って来るのである。そしてペルセウス・アンドロメダ神話として流布していたものと重なって完成したのであろう。その執筆者の中心は百済からの渡来文人であったことはそれをさらに確かとするのである。

斐伊川はどこか

出雲国風土記の中でみると、**出雲の大川**——「源は伯耆と出雲の二つの国の堺なる鳥上山より出で、流れて仁多郡横田村に出て、横田、三処、三沢、布勢等の四つの郷を経て、大原郡の堺なる引沼村に出で、来次、斐伊・屋代・神原等の四つの郷を経て、出雲郡の堺なる多義の村に出で、河内・出雲の二つの郷を経て北に流れ、さらに折れて西に流れて、伊努・杵築の二つの郷を経て神門の水海に入る。これは斐伊川の下なり。」

とある。風土記時代に(現)斐伊川の総称は「出雲の大川」で、「斐伊川」とは地域的な別な呼び名であった。右の中に「出雲の大川」は「斐伊川の下流」という説明があるので、斐伊川の名称の起りは、出雲郡よりも奥地「出雲の大川」の上流ということになる。

横田川——は「鳥上山より出て北に流れて、斐伊の河の上なり」とあって、(現)斐伊川上流であって、当時では斐伊川の上流の川の呼び名であった。したがってこの上流地方では斐伊川とは呼ばれていなかったのである。そして室原川・灰火の小川・阿位川・湯野の小川はいづれも皆、「斐伊河の上に入る」と説明されてあって、斐伊川は仁多郡の通称ではなかった。これが大原郡に入ると、本流は即ち「出雲の大川」の上流は、斐伊川と明瞭によばれ、屋代の川・三屋川はすべて「斐伊河」に入るとなっている。それが出雲郡内に入れば、ずっと「出雲の大川」或は「出雲河」と呼ばれている。つまりヤマタの大蛇を退治したのは「出雲川」の川上というのでもなく、「斐伊川」の河上であることである。すると大原郡内がヤマタの大蛇退治の舞台ということになる。すると足名椎・稲田姫の伝承もこのあたりにあって、この話の材料はこゝに集中しているのである。

「古事記」の中の「出雲国の肥の河上、名は鳥髪という地に降りたまひき」とは、肥の河＝斐伊川の源流は鳥上山から出る。神は高い山。源に降るものという信仰から、このように書かれたものであって、次回でのべるように、古い神の伝承は古さをしめすため「天降る」といゝ場所は「高い山」であるとし、新らしい神の伝承は具体的な地名のところに至ると区別されている例にもれないことになる。そこで14世紀の簸川郡出身の名僧夢巌祖応の詩や、16世紀の「雲州樋河上天渕記」がオロチ退治の物語伝承の舞台を、大原郡の湯村温泉あたりとしているのは、当時色濃くこの地に残っていたことをしめすものである。地名・神社の祭神・伝承物語はこの地に極めて多く、横田盆地には全くない。稲田神社の出現も幕末に、はやり神として登場した歴史の新らしいものである。古典を深く読んでみると、残念ながら、横田盆地はオロチ退治の物語を組立てた原像の材料は一つもないことになる。唯「鳥上の峯云々」のみであってこれも極めて弱い意味しかもっていないことになる。

斐の上川柳五月句会「雑詠」抄

いやな事みんな洗いに里帰り　安部正子
農せぬ嫁慾が出たのか鍬を持ち　加納治江
疑はず子の絵は川を黒にぬり　松田牛歩
虹の水かける稚苗に期待かけ　藤原千代子
外灯の今一息と畦を塗る　藤原のぼる
荷がおりた頃に又もや女の児　渡辺好之
きのう咲き誇るにきょうは花ふぶく　松浦亜以
舞う蝶に親元なんぞ聞くでない　若槻白馬
春一番雑木林に白木蓮　太田亀甲
何もかもうまくいきそないゝ天気　松浦木公
ぢいさんは耳が遠いと言っておる　堀江孤雷軒
妻にだってねぎらいほしい時もあり　佐佐木千世
チャボ雛もひと月たてば親の真似　藤原英生
成人式独りで大人になった顔　目黒申楽
耕耘機いっぷく促がすハイヒール　高木白虹

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 887号
（7月号）
昭和 57. 7. 5
奥出雲編集集団

（続）神話と歴史の間②

稲田姫の戸籍
斐伊川の地籍

いずれも大原郡にあること（下）

斐伊川は由来が、鳥髪山に源を発し神門水海に注入する「出雲大川」の全体の名称ではなくて、この大川の中流域に於て当時固定化されたものであり、それは次のように意義のあるものである。中流といっても大原郡のことである。

斐伊川

前号で、出雲国風土記の記述では、斐伊川の呼称がすべて今日呼ぶ斐伊川の中流にのみ限定して用いられていることを紹介した。しかもその斐伊川の呼称は、出雲国風土記が勘造される年より七年前の神亀三年（726）から民部省の口宣であらためられたもので、それまでは「樋河」と呼ばれていた。これを日本書紀は「簸之川」、古事記は「肥河」とそれぞれ文字をあてゝいる。樋・簸・肥ともに乙類の文字で、意味を大切にし音を同類の文字から選んで書いたものという。そして樋は火に通ずるものであるという。

豪族樋氏

前回のべた大原郡の臣の祖とみられる考えるとその意義が

斐伊川（樋河）に面に樋郷があった。風土記に

斐伊郷　樋速日子命こゝにいます　故に樋という　神亀三年斐伊と改める

とある。風土記にのる地名伝説は、「大穴持」「須佐之男」にまつわるものが多い中で、これは異色であって、一民族の氏神と氏族居住地との関係を述べていて、その点史実推定上、信憑性の強い地名説話とみられている。樋速日子命は樋氏の斎き祭って来た氏祖神である。この樋氏は子々孫々「樋郷」を本貫地として、こゝを中心とした地域を占有・支配してきた一地方豪族であった。この氏族の居住地のため樋郷の名がとどめられ、のち斐伊郷と改められたのである。さらに風土記には、斐伊郷に樋仰支知麻呂という郷人がいて、新造院を自力で建立し、尼二人を住職としていたとある。国分寺建立以前の天平初期かそれ以前に、地方において寺院を建立し住職を定住せしめるということは容易なことではない。余程の実力をもった豪族であったと思われる。当時新造院を建立した地方豪族は、郡司大領が多い。前回は樋氏は郡司大領勝部臣の祖とする説をとったが、（新しい氏姓制のもとで樋を勝部臣と改める）　もし結びつかぬとしても、勝部臣に匹敵する氏であったことは明らかである。

さて古事記から類推すると、樋は「火」であって神霊の降臨する形をいみし、また「霊」とすると神霊の憑り来る神聖ということになる。すると樋氏は聖火崇拝に記因する祖神——樋速日子命——をまつる樋社（斐伊神社今の角杉社と宮崎大明神）を建てて、世々永住していたのが樋郷（のち斐伊郷）で、こゝを流れる川が樋河（簸之川・肥河、のち斐伊川）と呼ばれたのである。

これが郡司となり勝部臣と称したと考えられる。

祭神からみると、宮崎大明神は樋速日子命（火神）、角杉社は水神（龍神）をまつっている。

この火神・龍神の神婚説話は神話の一類型である。この神話は出雲風土記の中にも四つあり、古事記の中にも三つある、一般的なものである。現存する他国の風土記と比較してみても、出雲は龍神信仰の強烈なところである。

ヤマタの大蛇退治の話は、製鉄の説話であるとか、上流の豪族等の抗争を意味するとか、さらには農耕民族と狩猟民族との抗争の神話化であるとか臆測が行われているが、これらとは全く関係がないというのが、今日の主流となっている。

大和で創作された出雲神話であって、日本の統治権の由来を証明する目的で、出雲国譲神話の前段に置かれたもので、全くの政治神話の一群の中の役割をもつものであるという。オロチ退治の話の面白さ、神話群の構成の巧さは、当時の大和中心の神話としては立派なもので、統治権由来を証明できているとされている。

上流の斐伊川の谷が八つに分れていることは八つの尾を連想させ、頭が八つあるのも下流の氾濫原の分流を連想すると考えたり、上流の砂鉄製錬と関係づけて、カンナ流しの影響で赤茶けた川の水を、オロチを切った時の血が流れたためだと説くなどとは、出雲の地理不案内の大和人が、たまたまその神話をこに結びつけて舞台としたのにすぎないのであることを忘れた解釈である。子どもに話して聞かせる楽しいお話として大切にうけつぎ、この地を舞台としてくれた大和人に感謝を。

（続）神話と歴史の間②・杜城興亡記③・地域歴史のことば④・碑めぐり②・短歌・俳句・川柳・横田で生れた人⑦

杠城興亡記 ③

浅原公章
（岡山県新見市在住）

名城落つ

天正三年の杠城攻防戦は、中国兵乱記によれば正月五日、備中兵乱記や杠家文書では八日と記されている。元日に手ノ荘の国吉城を落してから、井村のこの地に進撃するのに大した日数もかからない。五日でも八日でも、時間の経過を問う歴史の展開に不合理はない。

さて毛利は、成羽川から坂本の峠越しに本郷へ、それから宮河内、西川を渡り牛丸から西方へ入る経路をとったであろう。したがって、正田の角尾山城や新見の鳶が巣城の反撃を避けて前進陣地の西方の竹野城をいちはやく落し、井村を北上して、谷内の隘路に迫まり、ここを扼する三村軍の出城、朝倉、粒根の二つの城から、進入阻止の戦いが挑まれる形となった。

備中兵乱記の正月七日、日没までこのあたりの攻防戦は続いた。頑強に抵抗した杠の端城も毛利の大軍にはかなわず、ついに本城へと引揚げた。毛利方はその夜半に木戸部落の鞍部に出て、杠城のかがり火を見て物々しさを感じとった。

伝承によれば、毛利方はこの鞍部に一晩中かかって土手を築き、翌朝からの攻撃に備えたという。ここから矢を射てもとても城までは届かなかったろうが、恐らくこの戦いでは火縄銃もかなり使われ、戦いの方法も一つの転機にさしかかってきたと思われる。

八日の朝は明けそめた。毛利は杠城の難攻不落の地形を、はじめて眼のあたりにした。

また、城将元範は松山城は落されるとも、この杠城は決して落ちるようなことはない。天から吊った吊鐘のような断崖絶壁で、到底攻め登ることはできまいと豪語していた。一木一草ことごとく伐り払い、切り株もなければよじ登る手がかりもない、まったく攻めるに難く、守るに易い名城であると。

ところが、元範がもっとも信頼していた富谷大炊之助ほか曽禰内蔵、八田主馬らは、毛利方武将の中島元行の勧誘で寝返って、城の大門を開き、毛利方を引き入れた。午前十時ごろのことで、それからまる一日中喰うか喰われるかの乱戦がこの山上で続けられた。

端丸からはつぎつぎと火の手があがり、三村方は本丸へと集結せざるを得なかった。短い冬の日はとっぷり暮れて、主従十人ばかり何の手だてもなく、一同城を枕に切腹して果てようと決心しているとき、伊勢入道が「闇にまぎれて誰も知らぬ間道を落ちのびよう。作州高田城（勝山）の三浦氏は懇ろな間で、ひとまず高田を指して逃げよう」と闇にまぎれて坂本側へ下だり、定清地内の鍛冶屋渡りから馬塚の魚切へ、それから山越えして高尾地内の唐内へと廻った。

しかし、これ程までに燃える落城の火を見ては、とても三浦氏は来ないであろう。塩城山の多治部氏の動きも図りかね、ここは思案のしどころ、取りあえずここを南下して石蟹に出て、松山城へ落ち延びようと、高尾谷のとび石づたいの難路をくだっていった。

ようやく空が白み、高尾奥組の家村まで出たとき、案に違わず、多治部雅楽頭景治が五十騎ばかり従えて熊谷から山越えで押し寄せていた。元範主従は逃げかくれして石指の洞窟にたどりついたが、道を絶たれて進退窮まった。

主を助けたい一心の伊勢入道の赤誠もものかわ、年来勝気の元範は、も早やこれまでと、隠れた洞窟から大音声、「元範はここに居るぞ」と出て来て、ついに切腹しようとしているときに、敵の放った矢が、元範の喉輪のはずれに刺さり、うつ伏せになったところを東江平内が首をとった。

碑めぐり ②

路考発句塚（俳人）

下阿井・禅隆寺・趾境内

路考は上阿井の屋号上り原（土地名を屋号としたか）の初代で、上阿井の田中・若月家8代の3男に生れ（享保19年ころ）のち分家した。郡家の記録によれば、天明元年（1781）より天明4年まで仁多郡の与頭をつとめている。寛政9年64才で飯石郡吉田村字上山で歿した。晩年は職務上も家族にも不幸が続いた。

地域史のことば ④

綸旨（りんじ）

蔵人（くろうど）　天皇の側近にあって、詔勅の伝宣や奏上、日常の雑事などに奉仕した役で、機密文書などを蔵人頭（蔵人の長官）に担当させたから、中世では権威があった。仙洞御料所代官安部氏は京都で蔵人の補欠職であった。

蔵人が天皇の意をうけて出す奉書形式の文書。もとは天皇の私的用務を弁ずるためであったが、次第に公的な性格をもつに至り、中世は重い意味もあった。横田庄は重要視され、文永の役から室町時代前までたびたび届けられている。

卯月集

リボンさえ違法と言へば役付は誰れもつっぱりと思われたくなく　常盤　はるまさ

亡き母の田植唄運ぶ風ありて山に卯の花今さかりなり　永井　やよい

病みをれば食事の度に飯こぼす老化現象と云ふもおろかや　渡辺　観翠

身障の吾が娘が姑に仕へるを思ひて吾は嫁を労はる　畑　八重子

夫病めば心は重くねむの花はかどらぬ畑にひとり草ひく　宮廻　愛子

飼葉持つわれに寄り来てエプロンを子牛はしきり喰わへて引きぬ　景山　悦子

植田の緑一時に増えて様替りぬ連休明けの田園風景　児玉　敏郎

園児服すゝぎておればポケットにでんでん虫は乾きていたり　佐藤　喜代子

糸山は音楽つきの遊び場に大草原は都会となりぬ　岡田　時子

奥出雲川釣競ふ釣人等水面に見入る顔はしまりて　目黒　成生

舞ひ遊ぶほのかに白き蝶のごと山ぼうしの花五月雨に咲く　松浦　愛子

緑陰に嫁の運びし茶に憩ふ開パイ畑の初の作業に　野村　節子

釣りあげてわが手中なる岩魚の目黒くまるきが哀れ乞ふごと　伊藤　萩雨

愛すれど結ばれぬ運命（さだめ）の季過ぎて庭のあぢさい今年も咲けり　安部　夕波

しばぐり六月抄

新樹縫う列車に翡翠（かわせみ）り無けれども　浅野　としお

鉢まわし今年は咲きし蘭の花　錦織　富江

粧わぬ娘らの高笑風薫る　岡田　蹊花

麦秋の丘を飛行の影はしる　柏木　麗水

掃き清む後に落ちつぐ柿の花　岡田　侑

峡十戸岩が瀬を替え花うつぎ　藤原　樵夫

すだれ上げ雪舟ゆかりのお茶賜う　高木　臼虹

新樹にて深々つつむ旧校舎　田辺　竹野

鉄線の花にもつれし雨の糸　峰石　美代子

河鹿鳴く峡の湯宿は只一戸　中沢　斐水

庭石を抱きしさつきの花終る　小川　あきお

旅の窓一望に展ぐ麦の秋　門脇　花子

若芽売りホームの灯りを片ほほに　加納　信子

雨を呼ぶとやしきり鳴く雨蛙　新出谷　一華

斐の上川柳会六月分雅詠抄

一喜一憂聞いて安心見て安堵　渡部　好之

命日に育てた花で供養をし　安部　正子

五月雨に卯の花匂う頃となり　真綿　よし子

枯れ草でそっと包んで茄子を植え　児玉　哲呂

あと少し言葉すくなになる日暮れ　久村　美津

占い師自分はこんな裏長屋　太田　亀甲

定期バス時計がわりに畑仕事　佐佐木　千世

泥仕事農婦の手には指輪あり　加納　治江

宝くじ当って竹馬の友が割れ　若槻　白馬

いつの間に人生峠下り坂　松浦　木公

娘のたよりないは元気と老二人　藤原　のぼる

混湯栓湯加減などはもう聞かぬ　藤原　千代子

あてにせずあきらめないで今日を生く　高木　白虹

ふるさとに新茶の香り目に青葉　松田　牛歩

会い憎の雨というけどよい雨ぜ　堀江　孤雷軒

温水を出すて湧いたと案内し　松浦　亜以

子育てが終って浮気が芽生え出す　藤原　英生

下駄ばきろ見てなつかしむ若き頃　目黒　申楽

妻は阿用村の素封家の出であり、長男は大阪で医者修業中に死し、次男は医者として伯耆国に出職中に死んだ。次女は亀嵩の素封家中伊豆屋に嫁した。素封家の分家とはいえ、このような家格を維持できたのは、路考がすぐれた才能の持主でもあったからである。

大馬木の湯の廻絲原の以文（四部左衛門）その弟の徐行、分家堀の内の石明、また阿井の何遠（若翁何遠ともいう）と交りそれらの指導をうけて俳諧に親しみ、この地が中島魚坊の指導をうけるようになってから、郡内の指導者となった石明とも友情を一段と深め、ともに魚坊門下の重鎮となり、石明なきあと（寛政6年歿）は郡内の指導者となり、この弟子から亀嵩の聞善寺住職碩獅が出た。石明のあとは蕉門美濃派のこの地の道統は亀嵩でうけつがれる最初の人となった。

写真の碑には「寛政九年十一月　若月党伊達本右ヱ門直次　俳名路考　路考発句塚　連中造立之」とある。路考の死後ほどなく俳友によって建立されたもと思われる。

横田で生れた人⑦

卜蔵孫三郎（下）

——中海干拓の先駆者

既述したように今日残る大事業は、①新田の開発であり、②道路の改修、③馬潟川尻の浚渫である。ほかに十神山の樹栽・海運業・塩問屋営業である。

新田開発

荒島新田　78号で詳細に述べたように、享保6年こゝえ移住するとすぐ藩に願って（藩主5代宣維）、その後16年の歳月をかけて荒島村日白池に、良田3町7反（明治45年で実高9町8反・220石）を実現した。その間財力不足と用水欠乏の打撃をうけたが、不屈の努力によって遂に完成し、元文4年（1,739）祖税を上納することができた。

その他羽入新田・八幡村新田（現在の竹矢村）・門生村（島田村）新田・別石新田（赤江村）などもある。別石新田は明治45年で40町歩で900余石の収穫があった。さらに渡瀬沖埋立計画は業半ばにして孫三郎の死で中止された。

今日荒島の卜蔵家の墓の孫三郎の墓石は、海運業の盛んなころ尾道から積んで帰った「尾道御影」であると伝える。

道路の改修

道路の改修はすべて私費でもって行った。下意東村坂下道（国道筋の「渡坂」）60間、揖屋明神下道150間そのほかで、完成後も水難による補修などはすべて卜蔵家の私費で行った。

塩問屋

卜蔵家が塩問屋を拝命したのは宝暦4年で二代甚左ヱ門で、孫三郎は家督をゆずって存命中であった。これも孫三郎の年来の功労に報いられたものである。

この業は明治初年まで営業を続けた。

十神山の植栽

安来節に歌われる十神山の今日美しい樹木は、享保14年の孫三郎の植栽の遺業であるという。

海上運送業

以上のような土木関係事業の上に、多額の私財を投じて三隻の船を求め、上方をはじめ北国地方に向って盛んに運送業にあわせて通商を行った。そして二代甚左ヱ門に引継いだのであるが

一、四〇〇石積　宝永3羽州にて八〇〇石積月形丸宝歴2長州にて

一、四〇〇石積　宝歴5北国にて月吉丸

と難波したので、利益を全うできないばかりか、財政の疲弊を来たした。

松江藩の処遇

孫三郎は享保17年松江藩勝手方御用聞仲間に進められ、生涯階具並びに木綿合羽着用を許され、御目見（おめみえ）（御目見得）——藩主に謁見できる身分——を仰付けられた。この頃奥出雲の鉄師たちは漸く松江藩の保護をうけて成長の第一歩を印したばかりであった。宝暦元年移住後30年にして下郡を拝命に、庶民としては最高の栄職に就任し、その在職中宝暦5年病死した。

藩主宣維（のぶすみ）・宗衍（むねのぶ）がよく孫三郎の才器と胆力をみぬき、その奇想天外な着想に腕をふるわせたことも忘れてはならないという。

3頁より

並んで同じく自然石に「芭蕉翁蛙つか」「魚坊塚　山のみか水も動かず今日の月」の文字を刻した二つの碑がある。若月家の祖は毛利氏の家臣でこの地を領して来住した伊達氏と伝えている。

現在、路考の句として知られるのは、魚坊追悼集「庵のかたみ」（乾）におさめられている。

時鳥思ひしまゝの山里ぞ
明星や木兎の目のうるむ時

京都墨直し連中の寛政二年「庚戌墨直」（全）にある。

雉子啼て外山の春もしられけり

徐行・石明への悔み文と句の直筆懐紙（次の二葉）ほかに歌二首のみである。

なき跡や雀さへ老の羽ぬけ鳥
なき跡の思ひや花の朝た夕ア

（横田史談会　高橋）

お願い

同人誌の経続発行は困難なものである。どうしてこんなに長く経続しているか。秘訣はどうか。特志家の寄附によるか。など聞かれることが多い。

内容のよしあしによるものでもない。史談会を中心として、短歌・俳句・川柳・動植物愛好者の方々が、郷土のそれらのことが、歴史のことが載るから、いつか役に立とうと買い求めてとじて下さるからである。

しかし値段が高い。発行部数が200部に満たないから、一部100円では赤字である。そこで寸志や、「あるくみる横田」のわずかな利益で穴埋めしていた。それもつきたころ、史談会の方から値上げを提唱して頂いて、若干黒字になった。そこで写真などを多くするとそれも消えてしまう。たまに2頁増と思いつゝも延びのびである。500部もさばけると、一部40円で採算にあうし、ねだん据置けば16頁位のものが出現する。御理解によって少しずつふやして毎月続けてと思うのが精一ぱい。よろしく。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第88号
（8月号）
昭和57.8.7
奥出雲編集集団

船通山の鳥類を探る②

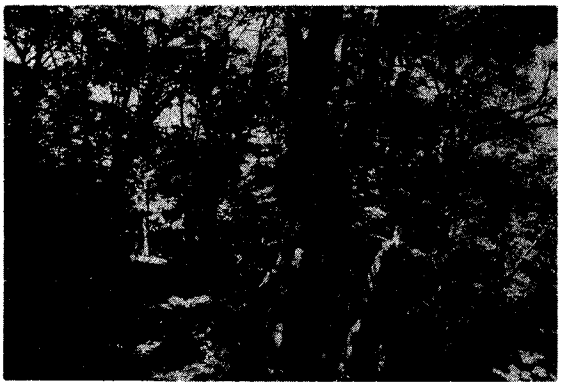
内田　映
（島根野鳥の会会長）

赤川より小雨の探鳥登行

昭和五十六年五月二十三日船通山探鳥会で松江駅から急行ちどり号で横田駅着駅前の浪花旅館に投宿、郊外の稲田神社へも参拝した。翌二十四日には参加者十名が会員の車に分乗して旅館を出発、船通山入口の斐乃上荘着五時半、直ちに此所より愈々歩いて登山となる。ヒヨドリやウグイスの声が耳に入る。ユズリハ(杠)川と赤川の合流点から赤川に沿って歩く。両岸の雑木林からは、ホオジロ、ヤブサメ、ホトトギスなどの声が聞こえる。開拓農家の横を過ぎて行くと、キジバト、ハシボソガラスが飛び立ち、伐採跡地でホオジロの声、付近ではウグイス、シジュウカラ、ホトトギスの声もあった。

六時五分、国有林標識が出て、古いスギ造林地の中を歩く。傍にタタラ跡があって、ちょっとこれを見る会員達もいた。ヤマドリが路上を横切って林に入った。オオルリの囀り、カケスも鳴いた。

六時四十分、登山口に着く。ここで車道が終点となり、歩道の登山路となる。ここに着く少し前から小雨が降り出していたので、一行は雨合羽姿となっていた。そして合流点付近から案内していた千原幸夫会員とは、此所で別れることになった。この登山指導標には頂上へ六十分、斐乃上荘へ六十分とあった。



此所から広葉樹林の中の歩道を小雨の中を登って行った。オオルリ、キビタキ、ミソサザイが鳴く。特にオオルリとミソサザイの囀りは、矢張り船通山探鳥会へ来て良かったという気分にしてくれた。ヒヨドリも此所まで来ていた。沢は小さくなり溪水も細くなると、石畳み路となる。大雨の時は、ここが流路と変るだろう。両岸はブナ、カエデ類を主とした広葉樹林で、石畳みが切れたあたりで、何か鳥の囀にも似た声がすると思っていたら、さに非ず、カエル類の声であった。

遠くからのカッコウやアオバトの声を聞いていると、少し上部の方で、ばたばたとヤマドリ、遠くでは更にオオルリの声、時に七時四十分であった。此所の指導標には頂上へ四十分、斐乃上荘へ八十分とあった。近くではシジュウカラ、ヤマガラ、クロツグミ、イカルの声、前方の尾根からカケスの声、またオオルリの囀りも聞かれた。

八時、ブナ老令林の中の平担な横断道路を歩いていると、ジュウイチの声、遠い下の方ではカッコウの声、ブナ林の中からはコガラも現れた。八時十八分、上り路でクロツグミ、ミソサザイの囀り、またシジュウカラもいた。このあたりはミズナラの多い林で、ホオノキ、カエデ類が混交していた。八時半、ブナ、ミズナラ林の中の上り路が続き、キビタキが出た。遠くでカッコウ、オオルリが鳴いていた。

キャンプ地の小面積の平地に出ると、近くの茂みにヤマドリがいたり、キビタキも鳴き、遠

歴史の眼①
注文の多い料理店

「注文の多い料理店」は宮沢賢治の唯一の童話集の書名で、中に同名の童話がある。この童話を劇化したものは、中学校の学校劇でよく演ぜられるという。私も何回か予餞会などで上演されるのをみた。話は次のようなものである。

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊風をして鉄砲をかついで山奥へ行き道に迷う。そこに立派な一軒の西洋料理店があるのを見る。玄関にはレストラン山猫軒と書かれている。気のきいた店だと思って入ると「どなたもどうかおはいりください。けっして、ごえんりょはありません」と書かれている。二人が扉を押して入ると、「ことにふとったお方やわかいお方は、大歓迎いたします」つぎの扉をあけると「当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはごしょうちください。」と書かれている。気のきいた店だと思って入って行くと、次ぎ次ぎと注文が書かれている。ひげをき

船通山の鳥類を探る②・歴史の眼①・杠城興亡記④・俳句・川柳・短歌・(続)新話と歴史の間③・民間信仰覚書③

くでツツドリが鳴いていた。これで日本渡米ホトトギス科の鳥の四種、即ちホトトギス、カッコウ、ジュウイチ、ツツドリを一山で、然も短時間のうちに、その声を聞くことが出来て、嬉しく楽しい思いで一杯となった。

尾根に出ると頂上へ五分、鳥上滝へ五十分の指導標があった。八時四十五分に頂上へ着く。合、憎の小雨模様での眺望は全くゼロであった。近くの避難小屋に入って、小雨を避けて遅い朝食を取って九時五十分に出発した。頂上より少し鳥取県側へ降りたところの天然記念物のキャラボクを見て、再び頂上へ引き返して、今度はユズリハ（杠）川登山路を下ることになった。

船通栂・キャラボクのこと

この天然記念物キャラボクについては、昭和四十三年の拙著「簸の川上船通山へ登る」の中から次に引用しておく。

南方を俯瞰すると足下陽の当っている部落は、鳥取県日南町の萩山であろう。そして船通山頂へは一番近い部落である。頂上の祠が南面している所を見ると此のお宮は島根県でなく、鳥取県側のお宮さんのようにも思えるがどんなものだろう。

またこちら側の登山路も良い。かねて本や写真で読んだり見たりして船通山のキャラボクは大した樹木だと思っていたが、実地に来てみてもその通り偉大な樹木で、普通の木の観念の外であることが分った。昭和三十二年七月二十七日付で文化財保護委員会の告示で船通山の一位（キャラボク）として天然記念物に指定されている。案内板には次のように書いてある。

〝学名 Taxus cuspidata S. et Z var. nana Rehder

樹木の周囲四・八米樹高五・四米、枝の先端全周六七米、樹令推定三〇〇〇年〟それで日南町の多里方面ではスサノオノミコトの手植の神木として尊崇され、この付近の田植歌にも、お栂様として歌われているという。また船通栂と呼ばれている。このキャラボクの西側に接して胸高直径三四糎と二五糎のスギが二本あり、これより少し離れてブナノキの五〇糎のものがあってキャラボクの従僕のような姿である。

キャラボクは、何と言っても大山山頂付近の純林が日本一で、その占める面積約七ヘクタール（陌）にわたって生育している。勿論国指定の天然記念物である。

船通山付近では、鳥取、広島両県境に聳える道後山（一二六九米）にも分布していると言われる。（写真は船通山腹のブナ林）

杠城興亡記 ④

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

落城のことども

戦国期のさすがの名城杠城もついに天正三年正月八日に落ちた。

この攻防で、秋庭備中守によって永正八年に創建された大社山宗浮寺も兵火にかかって焼かれてしまう。

憤死した三村元範は、生前の帰依もあって、のちに再興された小谷の天叟寺に弔われる。法名を「長月院殿峰雲源高大居士」という。

因みに、創建の秋庭（あいば）利元の法名は「鉄船宗浮大居士」。

また、文明四年に杠城を追われ、上京して代々将軍家に仕えていた杠氏の子孫に宗久なる者がいて、この地の神職を事とする名門、石垣家の聟養子となったが三村元範が杠城主となるや家臣として参じ、杠城攻防のとき討死している。

以上が杠落城戦の大略であり、一族党類の伝説のことは諸書に見えるところで神郷町史などにも詳しく記されているので、こと新しく述べるつもりはないが、このころになると戦いの方法がようやく変りつつあったことは事実であった。

この戦いには弓矢ばかりでなく、なにがしかの火縄銃もつかわれて、ありきたりの戦闘方法は変えられつつあった。おそらくこの地方で、鉄砲の音を聞いたのは初めてのことであったろう。この銃使用について、松山城攻防戦には「三村方鉄砲二百丁許（ばかり）不意に放ちければ、芸州肝を消し」と、また、備前虎倉城合戦では「川越しに鉄砲撃ち合

（1頁最下段より）

ちんとして、はきものの泥を落せとか、鉄砲と弾丸をこゝにおけとか、帽子とオーバーコートと靴をぬげとか注文が書かれている。「壷の中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください」「頭にびんの中の香水をふりかけてください」とある。その香水には酢の匂いがする。二人はあやしみはじめるが、まだ気がつかない。やっとつぼの中の塩を体中によくもみこめという言葉に、注文しているのは自分たちではなくて、向う側であり、自分達はまさに西洋料理として食われようとしているのに気がつく。よくみれば山猫が向う側で西洋料理にして食われんとする人間を、舌なめずりをして待っている。やっと命からがら逃げ帰った二人の顔は、東京に帰っても、お湯にはいっても、もとのとおりになおりませんでしたということで終る。

中学生たちは無気味な物語の劇化を見事に演じて、かっさいをうけるのである。

作者の賢治が生前に書いたこの本の宣伝文には、「ふたりの青年紳士がりょうに出て路にまよ

い仕候」とみえる。

落城前日、杠城内では大事の前の静けさ、元範も何やら心もとなくて、女子、子供まで集めて食事を与えだ。翌八日の早朝には、側に仕えの者共を集めて昨夜の夢物語りをした。「元範の首を元範自身で首実験した」と。

このような時に縁起でもない話題を出して元範大笑い。もう命もながくはないと、側近の者共に太刀などを形見としてやったり、馴染みの言葉ももう今日までと、盃を汲み交した。折しも毛利方は火矢、鉄砲を雨あられの如く打ち込んできた。

いま一つ、杠城落城のとき、太鼓を叩いて士気を鼓舞したという郷土芸能の由来については文献資料で見ることはできないが、それはそれで是としなくてはなるまい。

いままで述べたように、杠城の戦いはまったくの防禦戦であり、事前からその守備については計画的であり、戦いについては心の余裕ももち合せていた筈で士気の昂揚のため太鼓も用意していたかも知れない。

しかし、命と頼む腹心の将たちが急に寝返って、城内で反旗をひるがえすという予期もしない異常事態となる。城将元範の心中は察するに余りあるといわなければならない。

純然たる防禦戦として、計画通りの戦いを展開すれば、敵に手痛い打撃を与えて、織田の援軍が来るまで持ちこたえたかも知れない杠城が、降って湧いた内部崩壊という事態に、城内は大混乱に陥り、事態の収拾に、元範は心を千々にくだき、太鼓を叩かせる暇がなかったかも知れない。高尾石指で討たれた三村元範の首は、成羽の毛利輝元の陣所に送り届けられて、首実検された。八日の朝、城中で語った元範の夢物語が正夢となったことは不思議であると、備中兵乱記の著者は言っている。そしてその首は元範の弟実親の居城、総社の鬼身城に送り、戦意の沮喪を図った。

(続)神話と歴史の間③

神話の基盤

開拓の祖＝部落神の成立（常陸・出雲播磨の風土記から）①

わが国の風土記で最も完備している「出雲国風土記」と、それについでいる常陸・播摩の三風土記を標題の点に視点をむけて比較検討してみると、神話の基盤が浮び上ってくる。しかも三国三様の開拓の変化がある。そこに時代の違いを見ることもできる。

常陸国

古代の神の信仰圏の単位は、一部落、一集団であった。その神の勢力即ち支持者が拡大すると（対立の克服とも言うべきか）、他へ及んで一部落の神は一地

しばぐり句会七月抄

減反田もろこし丈をきそい立ち　峯石美代子
はり窓をよぎりて蛍闇に消え　門脇花子
妊もりし娘の服仕上ぐや遠蛙　加納信子
落飾の鐘の音幽か苔の花（大原寂光院）　高木白虹
堆肥場に自生の夢に瓜太る　中沢斐水
余り苗伸ぶを抜き上げ田草取る　藤原樵夫
図々しくも若竹畑の真中占む　岡田蹊花
つわの葉もなえたる様ちらに梅雨通る　田辺竹野
梅雨暗し一きわ目立つ部屋の汚染（しみ）　浅野としお
紫陽花や訪（おと）わば猫の鋭目（とめ）に合う　岡田麗水
ひぐらしのやゝ落ち着きて夕餉酌む　小川あきお
栗の花咲く丘其所は古墳とや　新出谷一華
風に来る畜舎の匂ふ夏の朝　錦織富江

（2頁最下段より）

い、〃注文の多い料理店〃にはいり、そのとほうもない経営者から、かえって注文されていたはなし。かてにとばしい村の子どもらが、都会文明と、わがまましほうだいな階級とに対するやむにやまれない反感です」とある。昭和初年の作品である。

熱心な法華経信者でもあった賢治は、今日的にいえば、実に深くヨーロッパ文明の将来を思索していた思想家であったということになる。英国風の鉄砲をもった紳士は殺害をたのしむが無限の注文で豊かになった文明が、実はなんらかの巨大な力によって、ほろぼされようとしているのではないか。今や殺害の危機にさらされようとしている。ぜいたくな注文は、彼をほろぼそうとする何らかの力が、彼の破滅を願うためのぜいたくな注文ではなかったか。ヨーロッパ文明によって指導された世界文明の危機を見る思いがする。

賢治は原爆、水爆を知らなかった。しかしヨーロッパ文明の限界と危険を敏感に感じとっていたのではなかったか。

（蓬頭子）

前号川柳の訂正―六月号雑詠抄・合い憎の雨というけどよい雨で・温水を出して湧いたと案内し・下駄ばきを見てなつかしむ若き頃

八月のうた

ふたたびは巡らぬ若き日と言ふは平凡にして愛しきもの
を　常盤　はるまさ

征きしまま還らぬ君は年召さず吾は六十路の坂越えにけ
り　永井　やよい

母里の郷に研修のひと日をわれは来て牛飼ふ人と親しく
語る　景山　悦子

山ぼうしの一際目立つ白花の群がり咲ける狭の梅雨晴れ
　畑　八重子

青嵐ぶどうの蔓を吹き鳴らし老の背延ばし袋かけゆく
　岡田　時子

梅雨空のひととき晴るるさ庭辺に大きダリヤは赤くゆれ
おり　目黒　成生

覚束なき手つきにて若き女教師が紙縒り作りに挑む七夕
　児玉　敏郎

たゞひと夜の命を知るや蜆貝水面に小さき泡吹きており
　佐藤　喜代子

戦ひし日は昔くなれど病床に狂ひし君は君が代うたふ
　宮廻　愛子

気まずさを和らげんとする夕餉どき今日の天気をやたら
口にす　松浦　愛子

茶に憩ふ青葉の蔭に若きらの明るき声の樹間に透る
　野村　子

米寿過ぎて逝きたる媼の納棺の姿はいとも小さかりけり
　伊藤　萩雨

驟雨去り泰山木の花白く匂ふ夕べは亡き妻憶ふ
　安部　夕波

斐の上川柳会七月句会「雑詠」抄

ねぇあなた寄り道するなとボーナス日　渡辺　好之

ボーナスも日曜もない鎌を研ぐ　若槻　白馬

夜業までチマキを巻いて娘に送る　藤原　英生

口紅のぬれる裏街目をつぶり　高木　白虹

力瘤萎びた腕で米作る　松田　牛歩

遠足の昼弁当に母の味　太田　亀甲

国体に参加懸命花育て　安部　正子

趣味があり老を楽しく友と生き　松浦　公

あれやこれ思うて一人「ちまき」巻く　佐佐木　千世

朝露をふんで田畑と相談し　真綿　よし子

ひきかえす勇気がなくて蟻地獄　藤原　のぼる

娘がつけてくれたマニュキヤまだ光る　藤原　千代子

ねだられて子供に返えり螢追う　久村　美津

もぐもぐと兎のようにレタス噛み　堀江　孤雷軒

下手な釣腕より道具自慢にし　目黒　申楽

（3頁4段目より）

方の神となる。そしてさらに拡がって一国の神へとなる。祭る側から言うと、元来の神以外にその地方のより大きい神をもまつり、信仰は二重三重にもなる。そしてその大きい神と小さい神との間に親族関係を成立させる。そして伝説として何らか少しの事実を含んだものが、偉大さをしめす神話の時代にさかのぼらせられて、続いた話となってゆく。地方と朝廷との関係も同様になってゆく。

神の由来をいうのに「天降る（あまくだ）」がある。由来が悠久に古くかつ神聖であることを言おうとするものである。それは「山の上」に天降り、また「樹の上」に天降るのである。常陸風土記ではこれらについて唯一例、この地の松の樹に降るとのみある。出雲では樹とくに山に降るのが極めて多い。出雲は歴史が古いから悠久の昔であるを意味する表現となる。常陸での神は、先のほかはすべて現地に到来する。

このことは新開地であって、神即ち祖先の到来が明らかに伝承されているからである。

神そのものは、記紀の神は理念的・抽象的であり、万葉の神は私的、文芸的、祝詞の神は儀式化している。風土記には古代人の具体的・実際的な神の信仰があらわれているという。

常陸国はもと蝦夷の住処であって、これを鎮撫していった多くの勇者たちを総合し象徴したのが、一人のヤマト（大和）タケル（勇者）である。これは天皇の皇子であり、「倭武天皇」とあがめられているが、出雲風土記の如く、開拓者を総称象徴して、所レ造二天下一大神のような神とはしなかった。常陸の開拓が新らしく生々しくて、開拓者を神とはできなかったであろうという。そのほかに飲み水、灌漑用水としてそれを供給する井が重要な神とされ、それを神としてとらえている。また蛇そのものを神としてとらえている。神聖なる井のほとりにすむ故に神とされたもので、妖怪なかたちや毒をもつからではない。怪奇な浪漫心ではなく、生活の現実であった。これが神の内容であった。こうした香島の一部落神が一地方神となり、常陸一国の神となり、権威づけるために皇孫の高天原よりの降臨に先だって下って、国土を平定をしたという神話が生れる。風土記にはこの神の名はないが、やがて古事記の建御雷神、日本書紀の武甕槌神の話と重なって、この神はタケミカヅチノ神であるとしてさらに権威づけられ、今日の鹿島神宮となったのである。

（次回は出雲・播摩）

民間信仰覚書③
愛宕（あたご）さん信仰

火伏せの神（鎮火神）として愛宕（あたご）社に寄せる信仰。祭神迦具土（かぐつち）が生まれるとき、母を焼き死なしめた仇子（あだご）であったためとも境（さかい）を守る神ともいわれる。京都北山の愛宕神社は各地の本社で、奈良時代すでに従四位下であったから、古来から崇敬を集めていた。中世神仏習合によって多くの修験者がこの山に住み、祭神は愛宕権現太郎坊で、姿は多数の部下を従える天狗とされ、大いに畏敬され、やがて軍陣に勝利をもたらすとされた。のち修験者が全国各地への勧請の手引をしたので、仏式でまつることが多くなり、護符を持ちかえって台所の神とし、火災からまぬがれることを願うようにもなった。祭礼は旧六月二十四日。

会員配布一部百五十円／六九九―一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六―ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第89号
（9月号）
昭和57. 9. 4
奥出雲編集集団

（続）神話と歴史の間④

神話の基盤

開拓の祖＝部落神の成立（常陸・出雲播磨の風土記から）②

出雲国風土記の神は

常陸・播磨の神々より基礎が古く、基盤が固定していて、これらの二国に比べて新開地ではなく、北方の大陸に近いことから、渡来した人々すなわち出雲人の生活の歴史は古く、信仰の基盤も深くなっていた。天孫民族に対比させて出雲民族を考えたり、大和王朝に対して出雲王朝を設けたりするのは誤りである。しかし記紀の中に大きい割合と地位を占めるのは、出雲の古さと信仰の強さの存在と、次のようないきさつからである。

陰陽思想から陰の代表すなわち平定された代表として、とりあげられる国が必要となり、古さと信仰の強さがある上、戌亥（いぬい）（西北隅）信仰からみても、西北にある出雲が最も適していたとされる。記紀ではそうとしても、

出雲国風土記の神の世界は、この地方の実際の信仰を記したものであり、記紀の中にある出雲神話は、中央において考えられ組み立てられた神の物語である。出雲国風土記には、常陸国風土記にある蛇神がない。出雲は歴史が古くて神の思想化が進んでいることをあらわしているという。

出雲の地名起源説話は

すべてが神との関係でとかれていて、18カ所位ある。土地に坐す神の名がもとで、それから地名となったと説明しているが、実際は全く逆であって、地名がもとで神名ができたので、土地の起源・地名の由来を権威づけ、古さをしめそうと神をもって来たものである。

もと〳〵部落の神の名は部落民自身には必要ではなかった。自分らが唯一の神として信仰していればよかったからである。ところが他の部落との交流がはじまると（時には分裂分離もある）、他の部落の神との区別の必要が起ったから、部落名をつけ修飾語をつけて神の名とした。

美保郷（美保関）＝御穂須々美命のように。

風土記の中で思想的・抽象的な名のついた神ほど、部落という地盤から離れた、新らしい進んだ性格の神である。天降った神は、常陸・播磨に一つづゝ、出雲には数例があるが、部落の神の由来を説明するのに、歴史が古いのでこう称したのである

出雲の古さをしめすもの。

また山口や山に神が祭られる例が多い。農耕に必要な灌漑用水、生存に必要な飲料水の源泉として、そこを尊重したからである。

出雲国風土記では、神の親子関係が甚だ多い。常陸では香島と香取の神の子ほか数例あるのみであるが、出雲には29例位ある。諸神すなわち諸部落の勢力の消長（征服・服属）ならびに、相互交渉をしめすもので、関係ない神がそのために、親となり子となり、あるいは兄弟姉妹となったので、やはり記述した時点での歴史の古さをしめすものである。

海岸部では大きい神の子が、交さくして拡がっているのに、山間部（飯石・仁多・大原）では極めて少ない。これは海岸部では部落間の交流が頻りであって、相互に社会関係ができたことをしめし、山間部は孤立していて独立をしていたことをしめす。

スサノオは

天照大神の弟神となっているが、あるところでは夫婦となってもいる。出雲国風土記によると、もとは「須佐の男」で、山間部の飯石郡須佐郷の部落神で、他の神よりも早く、出雲国内特に山間部（飯石・大原）に信仰をのばしていた。すなわち須佐地方の部落が勢力をのばして、出雲神話の中にも大きい地位を占めたが、その勢力よりもあとから次第に伸びてきた、熊野大神・佐太大神・所造天下大神（杵築大神）に圧倒されて、本拠は勢力を失った。そしてわずかに各地に伝説を残すのみであるのは、現実の信仰を失ったからである。

所造天下大神（あめのもたつくらしし おおかみ）

また国引の神八束水臣津野は、まつる神社もなく、所造天下大神の国土経営の前提としてのみ物語られる。現実に信仰される神でなく、神話の中の神となったのは、部落神が出雲の海岸部に信仰がのび、国引きの神として信仰されたが、所造天下大神の勢に押されて、こうなったのである。

この所造天下大神が、大穴持（おおなもち）である。すなわち杵築大社の神である。和戦両様の手段でこの神をまつる氏族が、あとから次第に勢力をひろげ、出雲国内にひろく勢力をもった。そして秋鹿郡をのぞく各郡に、この神の地名の起源を関係づけて説明するほどになった（19カ所）。特に西出雲は杵築に近くて16カ所

（続）神話と歴史の間④・日本史のことば・南画と奥出雲・短歌・俳句・川柳

に及んでいる。この神の子神の神社は7社あるが、三沢郷をのぞく他はすべて部落神で、出雲最大の神の子と称して、その地位を主張している。こうなるとその他の神の子神というものと、所造天下大神とあるいはその子神との婚姻関係が、話の上で成立してゆくことになる。今日の地域社会学や地域社会の心理学が分析してみせてくれる、現代社会・現代人の心理と、神話の成立事情とは同じ根にあることを知るのである。

播磨国風土記

播磨は新開拓地である。常陸は蝦夷地へ大和から入って開拓したが、播磨は周囲の隣国から競って移住し、相互に土地をとりあい開墾した。朝廷の開墾奨励もある。漢人・韓人も来ている。常陸・出雲と異なり複雑な様相を呈する新開地であったから、神の世界も複雑となっている。

地名起源は、出雲は神か、常陸は人がそれぞれ重く、播磨は神と人とが相半ばしていて、これらのことを裏づけている。播磨はやゝ歴史が古い。

① その人の中で、天皇は15の多くにのぼるが、最も多いのが品太天皇（応仁天皇）である。常陸の倭武天皇に匹敵する。このことは播磨の歴史で中央朝廷の存在が大きくものを言っていることをしめすものである。

② 誰々の始祖・遠祖・祖ということが多い。これは周囲の諸国から播磨に入って来た最初の開拓者とされる人々であるが、この草分けの始祖が神として祭られるということはない。（出雲・常陸の両風土記にはない、墓の記事がこの国では10数カ所みえるのである。）

一体、日本の古代では祖先を神として祭るということは一般にはなかったことで、祖先神の考え方は比較的新らしいことに属する。

各地からこゝに入った人々の生業の中心は農耕である。そのためには灌漑用水・飲料水を供する井が重要で、播磨では井の記事が多いが、常陸のように神とはされていない。

開拓者は互に土地を争って占有し、井を掘り田を開き神を祭った。こうして播磨の部落神は生れた。そこでこの国の風土記には、土地争い水争いの話が多い。また日本人と異国人（韓国渡来の天日槍（あめのひぼこ））との争いも数例ある。相闘争して土地を点拠した例は13とりあげてある。出雲から来た神もいるが、出雲御蔭大神などとあって、その大神とされているものは、出雲の勢力の程を示すものといえる。天降った神は唯一つで、他は他国から移った神である。

伊和大神

部落神から出発して、漸次その勢を拡大して播磨の神となったのは伊和大神で、常陸における香島大神、出雲における所造天下大神と同様に考えられる。この神には出雲の八束水臣津野命が、国引きをしたのと似た国作りの話がのっている（国作りは出雲の独占の話ではない）。

この神は播磨国の西部で、27カ所にまつられる。はじめは伊和村の部落神で、これから周辺に拡がったものである。この神の記事には、「占国」が多くでていて、この神を祭った人々の勢力が広がったことをしめす。それは伊和君という豪族である。

さらにこの神と親子関係や婚姻関係に入った神は、その勢力範囲の中に多いのである。

ところが、伊和大神が出雲から来たという伝えもある。これは新開地播磨に対して、出雲の勢力が入ったことをあらわすことでもあって、両者の信仰が漸次重なりあったものと考えるべきであろう。その上大汝（おおなもち）命の信仰が無視できず、両神の一体化をはかった神社が、出現もしているのである。アシハラシコオは、古事記と日本書紀の一書とにあって、出雲の大国主命の別名とされているが、出雲国風土記にはない。するとこれは出雲で生れた名ではない。むしろ半島からの渡来人天日槍の侵入に対して、これを防いだ代表者とみなすべきである。このオオナムチ・アシハラシコオ・大物主そのほかを、大和で大国主命に統一したのである。言いかえれば、すべての信仰に場所を与えた開拓地主神を、大国主命へ統一したのである。

地域史のことば⑤

宛（充）行（あてがいあておこない）

所領の禄物を給与すること。また賦役を割当てることを意味した。中世では田畑・所職（職分のこと、のちにはそれによって得る経済的得分をいう）の知行を公認・許可する場合に多く使われた。

宛（充）行状（あてがいじょう・あておこないじょう）

この知行公認のさい、発行する文書をいう。またこの文書を**充文**（あてぶみ）ともいった。

宛（充）所（あてどころ）

発給文書の受領者のこと、書状・御教書の場合は宛所が日付の後の行に書かれ、下知状などの公文書の場合は宛所が最初に書かれるが、あるいは事書の文中に含まれた。

宛給（あてきゅうす）

所領などを割当て与えること。

宛（充）行扶持（あてがいぶち）

江戸時代に領主が下級家臣に与えた扶持米の意。のちには、適当に割当て、額を決めて米を給与することをさすようになった。

南画と奥出雲

君あしたに去ぬゆふべの
こゝろ千々に
何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに
行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき

蒲公の黄に薺のしろう
咲たる
見る人ぞなき

（原文のまま）

と読みすゝむと、島崎藤村の詩かとも思ってはみたが、深くなじんだ詩集の中には記憶がない。

佐藤春夫あたりであろうかと読みすゝんでみると、「北寿老仙をいたむ」と題する、「春の海ひねもすのたりのたりかな」の作者、俳人与謝野蕪村のものであることを知り、驚いた。

近代詩の創始者といわれる藤村をはるかに一六〇年もさかのぼる江戸中期、将軍吉宗の治世のはじめに生れた、蕪村二九才の作である。蕪村のこの詩にみえる私どもと同時代的な感覚は彼の絵にも時代的な諸条件を超越してあらわれていると、先学に導かれて画集をみると、それは蕪村に内在する共通の（詩と絵に）芸術意志であったことを知らされた。京都定住と旅とをくりかえしながら、絵と詩の二つの世界の研修を重ねた生涯であり、わが国において池大雅とともに築き上げた南画の流れは、それから浦上玉堂そして頼山陽を中心とする文人墨客、やがて田能村竹田、その養子直入、富岡鉄斉へと流れて行ったのである。

俳人としての蕪村の先輩には松尾芭蕉門下の十哲の一人、各務支考がいる。支考は才気煥発の活動家であり、俗臭の多い野心家であったという評もあるが、一方芭蕉歿後俳壇に美濃派の一風を樹立して、ほとんど全国にわたって各地方の民衆の間に、蕉風を普及させた功績は多きいという。後年蕪村によって純粋性を欠き平俗低浅に陥ちて、蕉風の真情には遠かったと批判をうけたが、地方俳壇が舞台であったため、それにあわせた指導理念にもとづく、述作・句作であったためであると同情的見方もある。何ともあれ、この支考を初代とする美濃派が出雲地方に大きい影響を与え、絲原家を中心とするこの地にも入って来ている。そして俳諧と時を同じくして上方の豪商間の風流にたしなまれたのが、南画であった。これがまた、この地の鉄師豪農の間に静かに流れこんだのである。

南画と文人画

南画は発生的には文人画であって、一つは実景を題材として描く「真景図」、もう一つは思想が題材で、思想と絵とがとけ合ったものである。文人がものする詩文とそれを書として書くこと、そして絵が一体となったものである。そのために形式にとらわれず自由な雰囲気で、煎茶を喫飲することによって交る文人の思想・情感が母体となるのである。従って文人画は専門の画家による作品でなく、士大夫である文人高士が趣味として描いた、格調高いものであった。（抹茶は和歌・生花と結び、権力者である藩主を中心として流派が生れ、格式礼式がひどく重んぜられた）

12世紀後半の保元・平治の乱から、13世紀末の弘安の役のころまでの中国の南宋時代が、文人画の全盛時代であった。そして元・明・清（清も徳川幕藩体制完成期まで）でいよ〳〵盛んとなった。そして江戸中期に清の商人・伊孚九によって、長崎に伝えられた。その影響は、池大雅・宗紫石に及んだ。

池大雅

眼を中国にひらいた大雅は、日本文化の母なる大地中国へ強いあこがれを抱き、中国の文人とその生活への憧憬から、中国の版画や、もたらされた中国商人の余技的作品から、その様式をとり入れ、自己の美意識を信じ、室町時代の水墨画、狩野派・琳派・西洋画、そして大津絵までも吸収して学んだ。

幼少から書の天分に秀れ、7才で宇治の黄檗山万福寺に出むいて嘆賞されたほどで、文人画の要素である書はもとより、詩文の才にも恵まれて才能をあら

しばぐり句会八月抄

倖せは背中合わせや茗荷の子　錦織富江
新盆や老師の読経せみしぐれ　小川あきお
高原に夏を広げる声ひびく　峯石美代子
なにもないやもめ暮らしの涼し過ぎ　高木白虹
つっかけの真砂鳴らして萩の庭　岡田麗水
虫干や亡父の形見の羽織かな　金山静夫
早稲田には稔りをいそぎ風を抱く　門脇花子
蚊柱や廃寺の裏の薄明り　加納信子
蕁菜（じゅんさい）一葉一葉をつまみとる　宮田重五郎
はぐれ蝶一羽となりぬ我もまた　田辺竹野
合歓の花揺らして一輛峡を往く　新出谷一華
野かんざし老の歩引摺り山路行く　磯田富子
大日向葵軒より山より高く咲く　岡田蹊花
串立てし数だけトンボ止まりけり　卜蔵木実枝
含羞草まだ起きやらぬ庭を掃く　中澤斐水
指さして吾子も見上ぐるのうぜん花　渡部夕峰
墓石を洗う子の手に一粒の涙　田部りつ子

秋断章

朝やけの空に烏(からす)はわめくごと飛び舞ひし蘇州よ兵たりし　常盤　はるまさ
日よ
畑打ちて疲れし吾に孫の手の肩もむ指は心もほぐす　畑　八重子
残業で帰りのおそき母待てる孫等は小さく笛吹きており　佐藤　喜代子
はろけくも瀬戸の島々見渡して芙美子の詩(うた)の位置に吾佇つ　景山　悦子
息子と孫の出迎へ受けて着く宿に夕餉ととのへ嫁待ち呉れぬ　野村　節子
師の君の今日の便りに心浮き鼻唄次第に高くなりたり　岡田　時子
夏休み終りて孫ら帰りゆき今宵静かに虫の声きく　目黒　成生
夫が在て孫に囲まれど底ごもるかなしみふかくもがり笛聞く　宮廻　愛子
我れに似し面ざし見つけんと一千の仏の前を少女のごとく　松浦　愛子
先輩の上ぐる気炎に疑問をば抱きつつなお巻き込まれ行く　児玉　敏郎
幾度も踏みし足跡また踏みて老いわれ穂田に薬剤撒布す　伊藤　萩雨
息子と住まぬ吾が老先を案じつゝ逝きにし姑の忌の日雨　永井　やよい
暑さ日は短かく過ぎて立秋の声きく朝カンナは紅し　安部　夕波

斐の上川柳会八月句会雑詠抄

拗ねて見て男度胸の脈計り　渡辺　好三
複雑な顔で長寿の記事を見る　児玉　哲呂
義歯だけが真白の漁師喜寿とやら　高木　白虹
誘れて乗った車の事故にあい　太田　亀甲
悔なくも今日という日は二度来ない　若槻　白馬
放牧の牛にもなりたし主婦の座は　加納　治江
夫婦坂二人で越せば暑くなし　松浦　木公
乞うた雨四日も続けば空恨む　藤原　英生
米値上げ葉書四枚買えるほど　松田　牛歩
伯備線電化で東京近くなり　安部　正子
初孫を抱いて頑固な怒り解け　松浦　亜以
布団縫い孫の帰りを待ちこがれ　藤原　のぼる
取り出した風鈴早く秋が鳴り　堀江　孤雷軒

わした。また早くから旅を志した大雅は、美しい景色をうつし出す真景図にも才をあらわした。

出雲を訪れたのは三十代前半という。大雅は白隠禅師に深く帰依した。松江の天倫寺には白隠に学んだ円桂が住職となっていたので、これを訪れたという。

その時以来この他には大雅の作品が多く伝えられている。出雲滞在のころは指頭画（指墨）に力を入れているころであった。

田能村竹田（安永6 1777～天保6 1835）

豊後国（大分県）竹田村に岡藩侍医田能村硯庵の次男として生まれた。代々藩医を務める家柄で、竹田も父の後を継いだが、学問専攻を命ぜられ藩校の教授となった。のち京都へ遊学しては儒者としての経学より、詩に熱を入れ、多くの画家にも会い、これらの道への用意も着々とすゝめた。30才に入りふたたび遊学して頼山陽を知った。自藩の城下で起った二度の百姓一揆に同情をよせ、その度に藩主に建言書を出したが入れられず、37才で職を辞し、一文人墨客として、自由の境涯を歩むことになった。

このころ頼山陽が訪ねて来た。反社会的隠遁者、反体制的心情をもった理想主義者という点でも、よく気の合った仲であった。以後竹田は放浪の旅に出ることなく、竹田村で学問と著作と詩文と画業に静かに過した。茶・歌集・漢詩集ほか20数冊の著作がある。59才でなくなる前の10年間に代表作品のほとんどが制作された。

絵の特色は点苔を生かした山水画・人物画・仏画・花鳥画である。天保2年作の「梅渓艤舟図」は自信のある大作中の大作である。

田能村直入（文化11 1814～明治40 1907）

直入は6才で絵を学ぶため、43才の竹田の下へ入門し、のち養子となった。竹田の影響をうけて詩文にもすぐれ、文人画の流れをついだ。明治11年（65才）秋当地を訪れ、翌12年10月ごろまで滞在し、桜井・絲原両家の間を往復滞在し、多くの作品を残した。

直入は絲原家に所蔵されている、おびたゞしい和漢の書にもふれ、文人画家が愛用する煎茶用具のすぐれたものの愛用も許されて、詩情豊かな作品をものした。当家はもとより岩屋寺・舌震いについての真景図も優れたものである。

この間にあたためた構想をもとに京都に帰るや、京都府知事に画学校創設を陳情した。一カ月遅れて円山四条派も同様に建議書を提出した。絲原家も直入の資金の求めに応じた。明治13年わが国最初の画学校が創立され、直入は校長となった。その後、南画・円山四条派の画風をふまえて、この学校は、京都画壇の近代化へと大きな寄与をした。

おしらせ

横田史談会

歴史書の輪読の集い

毎月第二土曜日の午后一時半より、コミュニティーセンターにおいて開いています。

当分は岩波新書の「万葉群像」を読んで話合います。

今月は11日（土）

秋の史蹟めぐり

11月のはじめごろ、安芸の吉田町を訪れ、毛利氏の居城と三沢氏について、現地見学と話を聞く予定にしています。

会員配布一部百五十円／六九九 —一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一 ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 90 号
10月増頁号
昭和57. 10. 2
奥出雲編集集団

横田庄の中世近世史を貫いている
「惣と一揆の行動」序論（1）
―徳川期後期①

横田の中世近世特に中世には特異な姿がかいま見える。横田町誌の記述にも若干そうしたことにふれたけれども、私の力不足もあって確実につかみきれなかった。幸に最近島根大学の井上寛司先生がこれに眼をつけられ、日本の中世史の中で特異な類型であると探究をすゝめて頂いている。私は近刊の岩波新書「一揆」（勝俣鎮夫著）をよんで、今までの力不足に一つの拠点を与えられた感がしたので、その解明にいどむことにした。

そのため序論と題した。

私どもは「惣」ということばにはなじみがないし、「一揆」といえば、不穏なけしからぬことという罪悪観をもっている。そこで本文を読んで頂く前に、別稿「地域史のことば⑥」を読んで、誤解のないようにして頂きたい。

新書「一揆」によれば

柳田国男の民俗学が、非日常的な場である「祭」を素材として、常民の生活の中における日常的深層意識を見事に解き明かしたように、一揆という非日常性の歴史を通して、日本の歴史の基層に生きつづけた集団心性を堀りおこすことが、可能であると考えるという考え方をもとに、この地の動きをみ、その中心がどこにあったかをみて、民族の本質に深く根ざした側面をおぼろげながらえがき出して、横田地域の特殊性の渕源をこゝに求めてみたいのである。

一揆は「一味神水」という手続きをとり、「一味同心」という連帯の心性をもつ人びとの集団である。一味神水とは、神社に集り起講文を書いて署名し、それを焼いて神水にまぜ、一同がまわしのみして、神と人、人と人とが一味同心となったのである。これが参加者の集団内部での「主体性」の実現、権力からの強い「自律性」などの意識を生んだのである。これを裏返しすれば、一揆の狂気性、神がかり性ともなることがあった。

すると一味同心は民俗的神事、祭祀奉仕集団、祭の胎盤から発生している。祭の行事、作業、意識などで培われた歴史的土壌のなかから、自覚的に創出されたのが一揆である。この民族的意識は豊かで、民族の体質にかかわるものといえる根強いものであった。

横田の歴史を近世から逆にたどって、それぞれの時代の動きをみることとする。それは横田八幡宮が中心となり、横田荘園が舞台であり、そこに特異な中心として「大催」（おおもよほし）職があって、その職を連綿として代々七百年にわたって継承してきた杠家の存在を考えねばならない。そしてこゝを中心として惣が、正当に認められた一揆（争動とか反乱ではない）を行使して、この地を築きあげて来た側面が大きいことを、明らかにする努力をしたいと思う。

大催職譲証文から

大催職の内容を伝えるものは、天保10年（1839）亥十二月の77代市右ヱ門久安が伯父宗左ヱ門富明に大催職を譲った証文にあるのみである。これは寛政十一年（1792）を頂点とする、大催杠家と八幡宮検校木山家との、八幡宮祭典執行をめぐる論争――横田郷内八ケ村の全農民及び松江藩もかゝわる――後、杠家の家計不如意を原因とする、家督とそれに附属する大催職の一切を伯父に譲って、再建を計った時のものである。勝手不如意とは言っても、古格維持の上からで、田畑山林家家敷その他堂々たるものであり、八幡宮例大祭放生会の際の諸収入も後述するように、少なからずあったのである。譲状の内容の主なものは、

地域史のことば⑥

惣（そう）

百姓（ひゃくしょう　古代では　ひゃくせい）は公民制の確立とともに社会の基礎となり、荘園制の展開に従って農民の身分概念が固定化した。室町時代荘園解体期にあらわれた、名主層を中心に郷村単位の村人の共同体的結合で、村民全体の名によって村の意志を表示し、また行動する場合に惣をつくった。そしてさらに自衛のため武装し、また、年貢減免や代官非法を訴えて、土一揆、国一揆をおこした。秀吉によって兵農分離が完全に行われると、検地帳に記載され年貢を納める本百姓と、そうでない水呑百姓、被官百姓に分けられた。

二重構造もあって、村落内の土豪と一般農民の結合である惣村の上に、土豪層の連合組織の性格の強い郷村が形成されることがあり、成立の順序として逆の場合もあった。

一　揆（いっき）

中国の言葉で「先聖後聖、そ

「惣と一揆の行動」①・地域史のことば⑥・船通山の鳥類を探る③・杠城興亡記⑤・俳句・川柳・短歌・歴史の眼③

①八幡宮奉幣使代理のこと
②装束類ならびに行列の品別紙目録の通り相渡す
（別紙目録には——冠・装束・履・先箱・菊桐の幕・仝高張・太刀・長刀・弓・長柄傘・床机・乗物・挟箱・履籠・桟敷・神輿かつぎ装束・警固着用の品・とう子の馬轡（くつわ）——警固の者は8人）
③証拠の証文数通
④大催職と居家屋敷門、屋敷内の神拝所
⑤八幡宮の馬場のすべてと、八幡宮祭礼、遷宮その他の時にそこにおける商人や見世物師などから上る場所代すべて
⑥個人から寄進の祈願幟は大催家門前から、馬場までの道筋にたてること。
⑦八幡宮御供米一斗二升余は五反田・馬場・角各村の庄屋より受けとること。五月祭田からの米、検校より神楽米として上る米のうち先例の割合にて受取ることほか。
⑧祭日遷宮の前日の人夫、当日の大催行列警固ほか、神事入用の人夫すべて、村から相勤めること。
⑨とう子の馬二匹は、毎年樋口・五反田・馬場の三ケ村で出す。その他

で、譲うけた以上は八幡宮への神勤怠りなく仕え、御供米・神楽米銭・地銭（商人等の場所代）等すべて受取られたいと念押ししてある。

譲状中にある証文の天文9年のものは、とう子の馬についてのことであるが、中世においてもそれまで奉幣使代参が続いていたことを証明しており、これは明治中期まで続いたから、700余年連綿と続いたことになる。

大催の神勤のあり方

譲状にあるごとく、もとは勅使代参者であって、このころは代参者ではなかったが、祭礼と遷宮における古格は依然として維持しており、最高の地位にあり行列行事も華やかであったので、費用の支出も多かった。古格維持にはそれを負担する財力も必要であった（免地—上納米免除—を勅使田と称して、特別の田植行事を行っていた）が、各村々の負担や、祭礼の御供米・神楽米・神楽銭の一部、馬も必要であった、各村の負担、祭典から上る収入の一部、馬場使用の全収入も得てそれにあてることができた。

嘉永2年酉（1848）8月に書かれた、杠家の「社用干代之宝鑑」や「神勤録」、八幡宮の記録から、当時の大催職の年間の神社に対する勤めを明らかにすると、

正月元旦　御供献上、干柿
　　御箸は25人前
三月三日　参詣
五月五日　〃
六月十五日　〃
七月七日　〃
八月十四日～十六日　放生会前後
九月三・九日　参詣

放生会（本誌41号に詳細記述）

惣検校（木山）、供僧別当（岩屋寺）、大催をはじめ社人一同、一七（一週間）前より沐浴に入る。

前日14日には八幡宮社前の馬場の原に桟敷かけをし、幡竿を出すなど、そのほか残りなく手配する。とうごの馬（渡御の馬のことか）のことは、林右ヱ門へ前広に申付けておく。村人が寄進する幟は、放生会当日大催家より馬場までの道筋に立て、大催が参拝のため通り終えると、寄進者はこれを下の鳥居へ運びたてかける。この祈願幟を朝立てる人一人々々に、丸盆三つ椀を出した。即ち飯椀にとりつけ餅、向中椀に茶漬引替めし茶汁、汁椀には酒を入れて出す。

いよいよ大催の参拝にあたっては、

警固8人、先払、御幣2人、先箱2人、御剱、御机、持弓2人、長刀、若徒2人、鎗、刀持別当、神子官人2人、跡押2人菊桐高張2人、挟箕、床机、荒薦、駕籠廻4人の計34人が従った。この人々は村々への割当奉仕者であったが、少なからぬ費用を必要とした。

大催が着用する装束は、空色違い鷹羽立つ紋所の統広袖、同色の袴を着用し、床机に腰を掛け、内陣にて神事を勤め、烏帽子、沓等は着用しなかった。この装束は先祖が大内様（大内裏の意）より奉幣使代参を仰付けられた鎌倉初期からであった。出発は神社側から、七度半の使が来てから出発し、無礼の行為があれば、三人までは切捨御免を許されていたという。

（筆者　横田史談会高橋一郎）

の一揆なり」（孟子）とあるように、本来「揆（みち）をひとつにする」意味であるが、わが国では平安時代のはじめに、「一致」「一致する」という日用語化していた。広辞苑に「①道を同じくすること、②心を一つにすること一致団結、一身同心、③中世には同族や一定地域の武士が団結して進退をともにしたこと、④支配者への抵抗、斗争などを目的とした農民の武装蜂起をいう。」とある。

もとは平安時代末から、百姓の抵抗の作法として社会的に正当と認められていた。訴訟という形態、とくに弱者の強者に対する主張の手段として行使を当然としていた。

中世には庄園領主に反抗する庄民の一揆、納税などを免ずる要求を武士、上層名主中心の徳政一揆、守護の支配に反対する国人領主（郡内三沢氏ほか）の国一揆などがあり、近世の徳川時代になると、惣百姓一揆、全藩一揆、広域の世直し一揆へと発展し、体制側からは反抗する「悪」とされた。明治になると争議と呼ばれて断圧の対象となっていった。

船通山の鳥類を探る③

内田　映
（島根野鳥の会会長）

＝ユズリハ(杜)川下山＝

船通山の頂上では深い霧雨の中から、ウグイス・ヒヨドリの声が聞かれ、遠くでカッコウ・クロツグミが鳴いていた。

平担な尾根に沿って歩いてから右側へ曲って、濡れた土に滑るのを注意しながら斜面を下って行く。少し急な所には、丸太を横たへた坂道もあった。丸太坂道が終った所は、ブナ優勢林で、沢の水音とともに、オオルリが囀り、ヤマガラもいたが、例のカエルの声もまた聞かれた。

歩いていると、カワガラスが小沢より飛び立った。また小沢の中の石畳み坂を下って行くと石割ケヤキが見え、その脇に鳥上滝が落下していた。

十五分程休憩して、十一時十五分出発、オオルリの囀りがしきりである所を過ぎると、今度はミソサザイが鳴いている所を二ケ所も通った。「船通山の鳥」の標識板が建てられていて、「船通山は深い森林と清流に恵れた野鳥が多く、ウグイス・オオルリ・キビタキ等声の美しい鳥、サンコウチョウ・ブッポウソウ等姿の美しい鳥、肉食のオオタカ・サシバ・フクロウ等の70種以上の野鳥が見られ、春には美しい野鳥のコーラスが聞かれます」と書いてあった。

十一時二十五分にユズリハ川登山入口に着く。斐乃上荘二、四〇〇メートル、頂上二、一〇〇メートルの指導標があった。平地に出て「比婆道後帝釈国定公園船通山歩道、環境庁、島根県」と書いてある大きな標識板の所の草むらに腰を下ろして昼食とした。

オオルリ・ウグイス・アカゲラ・ホオジロの声が聞こえ、コゲラ・ヒヨドリ・イワツバメの姿が見られた。斐乃上荘の駐車場付近に帰ると付近の叢林ではヤブサメがしきりに鳴いていた。千原氏の話だと、荘の少し下流のダムの所の電線にはヤマセミがよく見られ、またこのあたりではブッポウソウも見られるということだったので、車を駐めてダムまで行ってみたが、ヤマセミは見えなかった。

＝船通山での観察鳥類＝

以上の2回の踏査観察で確認された鳥類は次の26種である。

キジ科（ヤマドリ）ハト科（キジバト・アオバト）ホトトギス科（ジュウイチ・カッコウ・ツツドリ・ホトトギス）キツツキ科（アカゲラ・コゲラ）ツバメ科（イワツバメ）ヒヨドリ科（ヒヨドリ）カワガラス科（カワガラス）ミソサザイ科（ミソサザイ）ヒタキ科、ツグミ亜科（クロツグミ・ツグミ）ウグイス亜科（ヤブサメ・ウグイス）ヒタキ亜科（キビタキ・オオルリ）シジュウカラ科（コガラ・ヤマガラ・シジュウカラ）ホオジロ科（ホオジロ）アトリ科（イカル）カラス科（カケス・ハシボソガラス）

＝千原幸夫会員による船通山の鳥類＝

前述のように第一回登山は晩秋の頃で、秋の山は鳥には淋しい時期であったし、また今春の探鳥会は小雨の天気であったので、これ又野鳥調査には不適当な一日であった。

このようにまことに短い日数であるので、帰宅後に横田町大馬木に在住している千原会員へ照会して、船通山所産鳥類として前記の26種を除いて、ほぼ斐乃上荘付近より上流即ち赤川と江川両域中心の船通山地域の鳥類として生息が推定される鳥種を列挙した表に、今まで観察された種、生息が推定される種に分けて、夫々の記号を記入して貰った上、そしてこれらの鳥類は船通山産としては、妥当適正の鳥類と認められた。

その結果、観察種としては、トビ・サシバ・キジ・フクロウ・アオバズク・ヤマセミ・ブッポウソウ・ツバメ・キセキレイ・セグロセキレイ・モズ・ジョウビタキ・トラツグミ・エナガ・ゴジュウカラ・メジロ・カシラダカ・ミヤマホオジロ・アトリ・カワラヒワ・ウソ・スズメ・ヒバリの23種であり、生息推定種としては、ヨタカ・アマツバメ・カワセミ・アカショウビン・ビンズイ・サンショウクイ・キレンジャク・ヒレンジャク・コマドリ・コルリ・メボソムシクイ・センダイムシクイ・サンコウチョウ・ヒガラ・マヒワの15種であった。

次回は

船通山鳥類目録（64種）を増頁号の折に一挙に掲載して終る予定。

国一揆については別に詳論する予定であるが、京極持清の守護代尼子清定（経久の父）に、応仁の大乱（1467～1477）中、もっとも鋭く対立した国人領主は、安来庄の松田備前守と三沢庄の三沢対島守為在であった。文明2年（1476）には富田城にいた清定に迫った国人一揆が起った。主謀者は三沢対島守（三沢城主）であり、参加したものは出雲東部の広汎な国人層である、多胡・山佐・野波・佐方・飯塚・下笠・小境などであった。尼子氏はこゝで国人層を把握して守護と訣別して大名領国制へすゝまず、守護京極氏の権威を背景として、これらを押さえた。この道が尼子氏の体質となり、後世に悔を残し命取りとなった。

杠城興亡記⑤

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

終焉

天正三年、山陰において尼子氏討伐の軍を進めていた毛利一族の吉川元春の家来今田経高が杠城在番として乗りこむことになる。その頃織田信長の下知で羽柴秀吉は、中国征討の第一陣として、播州上月城を占め、尼子主従をこれに入れていた。毛利軍がこの尼子氏の残党を絶やさんとする作戦のための後詰めの一つが、この杠城であった。

天正三年十一月六日の毛利輝元の書状によれば、楢崎三河守豊景は杠城攻撃の功績により太刀一腰、馬一頭を褒賞として与えられている。この感状には、「杠城首注文」（討ちとった敵の名簿）というのがあるとされているが、筆者はいまだ目をとおしたことがない。

楢崎豊景の孫に弾正忠元兼がいる。この人の室（夫人）は三村元範の妹で、身内の関係にありながら敵同士となった。弱肉強食の戦国の世、如何ともし難く、当時としては、破竹の勢いの毛利に味方するよりほかに生き残る途がなかった。

新しい杠城主今田上野介経高は、兵火にかかって焼失した宗浮寺を天正十一年に再建し、大楪山天叟寺とした。その後吉川氏が岩国に封ぜられたとき経高これに従い、同地にも天叟寺を興したといわれる。法名を「天叟正運庵主天叟永覚大禅定門」という。

経高はまた、新見庄郷原八幡宮を今の江原八幡宮として遷座上棟した。天正九年のことであろうと思われる。

これよりさきの天正七年夏、毛利方の重鎮を杠城に集めて大評定をひらき、作州から伯耆へかけての大作戦を検討しようとしたが、折から山陰の吉川元春が合戦の最中で隙がなく、評定を延ばすようにとの文書を隆景に送っている。

このように見てくると杠城は伯耆や作州に近く、戦国の作戦のために重要な拠点であったことが窺い知れるのである。

かくして天正十年六月に備中高松城が陥落し、羽柴秀吉と毛利輝元との間に和議が成立してその条件の中で備中以東の毛利方の領地の引渡しを要求したが翌々天正十二年正月になって、ようやく高梁川以東の諸城が秀吉の手に引渡された。

しかし備中松山城だけは毛利方も引渡しに難色を示したために、毛利方に残すことで意見の一致をみたといわれる。

さて、天正十五年（一五八七）に秀吉は九州征伐をおこなったが、杠忠久・守久の父子はこれに参加して諸所の戦さの武功を認められ、肥後国赤丸城を預っていた。天正十八年小田原征伐の後、秀吉は杠父子の願いを容れて、杠城主に任じた。杠勝久が文明4年に城を遁れてから約百二十年、その間四代を経て再び杠城の主として、先祖の地を得た。

杠氏は秀吉の恩に報いるため朝鮮征伐に従い、また天下分け目の関ケ原の決戦には秀頼の命によって石田三成に与して戦ったが、守久と嫡子貞久およびそ

しばぐり句会九月抄

主婦の座を得てつゝましく魂迎う　浅野としお
梨を喰む波止場の波に油浮く　小川あきお
漁具の山波止場の西日歩にまとい　高木白虹
君眠る谷を覆いぬ霧時雨　渡部夕峰
抜け道来し靴の汚れを露で拭く　岡田蹊花
秋晴れに産毛みだれし蔦一羽　田辺竹野
秋耕の鍬せせらぎで洗はるる　中沢斐水
流し灯のもつれもつれて潮に消へ　新出谷一華
ばった入り野色一点古畳　藤原樵夫
手の平に小さな夢やそばの花　錦織富江
芋の葉の露を転がす風生きる　加納信子
朝顔の蔓棚よりの会話かな　峯石美代子
穂芒をひそかにゆらし風遊ぶ　門脇花子
葉鶏頭旅立つふたりの日を燃やす　柏木侑
高原の裾野引入る芝原　岡田麗水

斐の上川柳会九月句会雑詠抄

なんとなく今日を過ごして床に入る　児玉哲呂
日は昇る浮世の風にゆれるだけ　若槻白馬
口実があって安心午前様　渡辺好之
国体がきたとサルビヤ赤く咲く　松浦木公
戦争映画今尚我等に問いかける　安部正子
後片付けコマーシャルごとに動かす手　横山まこと
ハーモニカのように玉蜀黍（とうきび）かぶりつき　加納治江
大根を蒔き終え妻と月仰ぎ　藤原英生
虫求め窓に張りつく雨蛙　藤原のぼる
盆団子よりもラーメン食べたがり　藤原千代子
戦後の誌送り火にたいて灰少し　高木白虹
粉喰へば舌でも切りたし鳴子引く　久村美津
米値上げその分台風持って逃げ　松田牛歩
飾らずに昔の顔で盆踊り　佐佐木千世
小石一つ投げた波紋がどこまでも　太田亀甲
向日葵は夕陽の燃えるにそっぽ向き　堀江孤雷軒

の従類悉く討死したという。

やがて家康の戦後処理は、西軍に味方した大名らに大きな打撃を与え、杠城に於いてもその吟味は厳しく、城主守久の三男国久は当時十五歳、留守主として在城していたが、生母と家人の足立六郎を伴い、ひそかに城を脱出して、出雲国仁多郡大馬木に住む杠太郎左衛門をたよって姿をかくし、その地に蟄居した。そして流石の名城も没落し天下泰平とともに廃城となる。

この杠太郎左衛門は、文明4年上野氏により放逐された杠常久から五代目の一族だが、かくて杠城は、鎌倉時代のはじめ文治2年から慶長5年まで、実に四百十五年の長い戦乱の歳月を明け暮れたのである。

——次回で完結、続いて続篇の玉稿をいただいて、紙面に光彩を添えていただく予定、御期待下さい——

十月の短歌

外孫の忘れし玩具は部屋隅におかれしままに真昼ひそけし　常盤　はるまさ

新しき西瓜を与えてかぶと虫孫去にし今日は山へかえしぬ　永井　弥生

畑打ちて疲れし吾に孫の手の肩もむ指は心もほぐす　畑　八重子

風吹きてそこまで来る夕立は小さき集落またぎゆくなり　宮廻　愛子

異郷の地を初めて踏まむ我が胸は着陸せまりて直に高まる　児玉　敏郎

腹張の仔牛をさする夫の腕汗はギラギラ光りて落つる　景山　悦子

鈴虫は今を盛りに鳴きおれり秋の夜長をわがものとして　目黒　成生

三十路にて逝きたる母の墓哀し年経て薄く苔のつきおり　佐藤　喜代子

台風の過ぎたる朝の空深し高き花梨に百鳥渡り来る　岡田　時子

くにびきの花作らんと鍬ふるふ婦人（おみな）の汗に朝日さし初む　松浦　愛子

いずこにて鳴くやかぼそきこおろぎの鳴く音にしばし亡父と対話す　真綿　ひろ子

三キロの重みなれども初孫を湯浴みさすれば汗はしたたる　藤原　信子

沿道に夫の植へしコスモスの開パイ畑に続くを通ふ　野村　節子

抱ける子に乳房ふくませ若き母荷車の上揺られゆくなり　伊藤　萩雨

夏去りて昼の虫鳴く公園にサルビヤ燃へて国体近し　安部　夕波

歴史の眼③

ロマンと亡霊

—保田与重郎忌—

十月四日は日本浪曼派の旗頭であった保田与重郎の一周忌にあたる。保田与重郎は戦前「日本浪曼派」の中心メンバーとして、反近代主義、審美主義を唱え〝保田文学〟として昭和文学史に確固とした地位を築いた文学者・評論家・歌人であって、東京大学文学部美学科在学中二十才の若さで、ドイツ・ロマン派の影響下で民族的古典美の探究をめざして登場し、日本のロマンチシズムの源流となった人である。

近代日本が西欧化の道を進んだとき、歴史の表皮の下にある「日本的なもの」を体現して活動した。すなわち著作「日本の橋」「戴冠詩人の御一人者」「後鳥羽院」「皇臣伝」などは日本的叙情を、ドイツロマン主義の英雄と詩人ないしはその系譜という発想で、体系化しようとしたといわれている。そして転向左翼から右派、さらに古典や歴史を専攻する人々もあわせてその中心となり日本の思想、日本の美と文化について独得の鋭い追求を試みて、日本の伝統を賛美し、戦中派世代の学徒青年に一つの理想主義を与え、そして大きい衝撃と影響をも与えて戦時下の思想を代弁する役割を果した。

戦後「結果的に戦時下の思想を代弁する役割をはたした」としてその戦争責任を批判追求された。戦争中に右傾した多くの知識人は戦後にまた思想を変えたが、保田は一貫して思想を変えず、「便乗文化人との質の違いを示す」ものとして、一九六〇年以降彼の思想ないし日本浪曼派を昭和思想史の問題として内在的にとらえる動きがでてきた。その最初で最も体系的なものは、橋川文三の「日本浪曼派批判序説」で、青年時代に強く影響をうけた一人として、その評価と批判を堂々と行った。ほかに続いて近代化に反抗した土着的側面を再評価する人もあり、最近の「新潮」5月号では、桶谷秀昭による復権をはかる長論文もあらわれている。またある人は時の流れとともに、絶えず再評価される昭和精神史の一つの象徴とも言っている。

右から左までの人々が、堕落と退廃する近代批判と日本古典の顕彰（古代志向）をもめざす保田の下に結集した。戦時、統制による時代閉塞の状況と文化の退廃現象に対するいらだちから、一挙にマルクス主義とアメリカニズムを打倒するため、「

近代」（都会）の毒を一身に浴びながら、すでに喪われた「古代」（故郷）を渇望憧憬することで、自己もろともに日本的近代の爆砕をはかったといわれる。この故に多くの学徒兵は玉砕へと、彼の思想をよりどころとした。保田の言葉をかりると、「この戦争がたとへ無償におわっても、日本は世界中を画する大遠征をなしたのだ。蒙古を流れる黄河に立つとき、私は初めて日本人の大隆政策の世界史に於ける地位を感じた。……思想としての立場からは、今、戦争が無償に終る時を空想しても実に雄大なロマンティシズムである」といっている。勝ち負けは意味をもたなかった。雄大な楽天家で、戦争を推進する積極的な力は、実はもたなかったのであるが。しかし俗流の日本主義の「大君の辺にこそ死なめ」の述志と承詔必謹の哲学の台頭は、「故郷」の風景と歴史に密着ともなり、日本の歴史と伝統への下降となっていった。

橋川は保田の思想の発想を支えているのは、マルクス主義・国学・ドイツ・ロマン派の三要因であるといっている。右から左までの多くの文学者・思想家を結集したのは、ここに原因があったという。こうした雑居のため、そして日本浪曼派は、最も健康で衆にぬきんでて時代精神をにない、そして時代の良心にも積極的であったにもかかわらず、もっとも虚無的であり退廃的になっていった。保田はこうしたところから、こと志と違い、歴史的現実の日本を離れ、美的心情上の日本にのみ走って行き、飛躍の反面、大きい空虚さをもつに至った。「さびしい浪人の心」へと向った。そこにまた当時の青年に魅力を感じさせた。「べきらの渕になみさわぎ……」の心、これは戦后の大衆青年の「勘太郎月夜」にも通ずるのであるが。

三島由紀夫も日本浪曼派の周辺にあって死を選んでいる。

しばらく前、六〇年代から七〇年代のはじめ、現代の情況は彼の思想を醸成した昭和十年代に酷似しているといわれた。しかし学生の時代は挫折した。

今日は大衆の生活の、今日的大きい生き甲斐の部分のシンボルに、ロマンがしきりと掲げられている。かってのように高邁な精神のよりどころとしてではなく、消費に人を誘う手段として、裏をかえせば利益をあげるためとして求められている。

かって保田の下に結集した雑居した人々が熱をあげ、あふったのは、学徒青年（若きインテリ）という一部の者であったが、今日のロマンはもっと広く浸透してゆく情況下にある。この地にも多分に醸成しようとされている。

さらに言えば、大衆が生活原理の位相にすべりこんでくる美意識によって、まどわされ易い状況になることである。その方向がおそろしい。日本浪曼派の美意識と歴史と伝統が、感性に基礎をおいたと批判したことを、さかなですることになりかねない。感性と論理を峻別する判断を喪失してはならない。何でもロマンのスローガンの虚構が、いつの間にか中味を加えて、歴史的実在事実となって迫って来るとおそろしい方向へと向い易くなる。

拙子もかって保田の書を愛読した経験をもち、戦後も読みかへしたし、批判の書も読みかえした。拙子もまだ今もロマンを抱いている。しかしかっての経験や、年令もあろうが、現実の上に立つ論理を踏んだ上で、感性を熱源としたいと念じている。

郷土史をしようこりもなく書き続けて、皆様の御指導を頂きたいと思っている理由も、いままでのべたところに胚胎しているものである。

（蓬頭子）

さる新聞のコラム欄から

男のロマンという調査をしたところ、他人の言動に左右されず夢を追い求め（実現しないとわかっていても＝夢）、損得抜きで誠意を込めた生き方（損得ぬきの男の友情＝誠）、そしてくじけそうになると自分とのあくなき闘い（＝闘）ということになったという。しかし自分の仕事にロマンを感じているものは、70％から29％にへり、「出世」を願うのは16％であったという。50代の働きざかりも、物質・名誉欲から、生き方そのものを見つめ通した内面の充実に目が向き、人間回帰の時代に入っているという。若者の志向は仕事より趣味が強いという。

しかし現実の生活の中で、こうしたロマンも一瞬のうちに打ち砕かれる。誘惑が多い。複雑な利害関係、醜悪な社会機構、人の善意を逆利用する狡猾（こうかつ）。不幸を増幅させる要素は多い。

「理想は我々自身の中にある。同時に、その達成に対するもろもろの障害もまた、我々自身の中にある」（イギリスの作家・カーライル）

こういうロマンの考え方は！

おしらせ

東京の名著出版から毎月発行されている歴史雑誌「歴史手帳」に、本誌の毎号の項目が残っていますので、全国各地からお便りを頂き、毎号購読や研究に関係した号の申込みが続いています。あと10号で、**100号**になることになります。なんとか続けたいと思います。

幸に余裕ができましたので、それをはたいて、今月は増頁いたしました。御礼申上げます。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 91 号
11 月 号
昭和57. 11. 2
奥出雲編集集団

杜城興亡記⑥

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

杜城の遺構

私たちが国道一八〇号線に沿う俗にいうおんやの石灰岩壁の下から仰ぎみる杜城址は、杜氏がここに初めて拠ったとされる文治二年から今日まで、実に七百九十五年の歳月を経ている。また、この地方の人々に強烈な印象を与えている語り草、三村元範の落城から数えても四百六年を閲しているが、典型的な中世山城のその遺構は、見る人々にすぎ去った幾多の変転を想起させずにはおかない。

それにも拘らず、城郭の構造についての文献史料はいっさい残されていない。しかし、今なお残されている地名や語りつがれてきた伝承からその大略を知ることができる。

また、この遺址全体が「小谷の要害」と言われていることは本稿の冒頭で述べたとおりであるが、要害とは中世における用語で、屹立した断崖絶壁と、その麓の水流などによって、守るに易く攻めるに難い、いわば容易に人が寄りつけないところを指す語としてつかわれている。杜城はまったくこの言葉のとおりの地形である。

さて、この城址に関係があると思われる地名を土地台帳から拾うと、元ナル、ヨクメガナル、花ノ丸、古ヤシキ、要害、下要害、要害平、城山、城山平、などがあり、また、伝承地名として、本丸、二の丸、三の丸、太鼓がなる、馬場などがある。

これらの地名を地形地物などから総合してみると、元ナルは本丸、下要害は三の丸、花の丸というのは鼻の丸で出丸のこと、ヨクメは尾頸、太鼓がなるは本丸の北側、尾頸との中間に削平された段で、その中に土塁らしいものがみられる。おそらくこの場所に太鼓櫓が建てられ、城山の下に住いする家臣たちへの連絡の役を果たしたものだろう。

立地条件からすれば、家臣団の居住地は矢谷や坂本側の野田や貞清のあたりと思われる。古ヤシキは大手門址と考えられる十文字峠を介して、矢谷と小谷の両側の中腹にあり、平時の侍たちの屋敷の址と思う。

次に根小屋と考えられる地名はないが、矢谷の古屋と坂本の谷垣内とが対応するだろう。因みに古屋は、文永八年の新見庄史料ではフルヤ倉前やフルヤ横門という名で検収されている。また野田の塔の山には、立派な宝篋印塔があり、かって地ならしをした際に、人骨のおさめられた備前焼大甕が出土した。おそらく城主のものであろう。そのほかに堀り切り、本丸と二の丸の尾根を削り拡げた千畳敷、俗に言う馬場がある。また、城の守護神を祀った八幡風呂、杜氏の菩提を弔ったであろう八谷寺跡、関東武士の崇敬のあつい妙見社などがある。

次に、城址に立って石垣らしいものが殆ど見あたらないことに気づく。この岩山を削平し築いた事実からするならば、必ず多くの石塊が残存していなければならない筈だが、その大かたが見られないことは、おそらく天正三年正月の大合戦に、毛利勢の岩壁登りを阻止するため、上から転がして防戦したものであろう。これらは三村元範がこの地に拠って大きく増築したものの遺構と考えたい。

なお最後に、歴史通論からすれば、慶長二十年六月十三日に発せられた一国一城令の布達により、この城も破却されたとすべきであるが、杜家文書によれば、それは慶長五年のことである。また、正保元年の正保国郡領分地図に弦葉古城と書かれている。古は故であると思う。

（完）

（次回より続杜城興亡記を数回掲載します。）

地域の歴史堀り起しへの

雑学のすすめ

—ヤマタノオロチ退治の話をめぐって

最も多い説明は

「古代出雲」というと、古事記や日本書紀から想像されるように、ヤマタノオロチ神話なども私どもは子どもの時から印象的な教育を受けてきた。

しかし考えてみると、それらは中央で宮廷周辺の有力な氏族に伝わる伝承を整理して作られたもので、中央から見た出雲の古代だ。そのことについては中央でも早くから反省があり、国家の精神的統一のために地方のことを認識する必要があるということで、各国に風土記の編集が命じられた。そして最も完備して出来上ったのが、出雲国風土記である。

と、七月下旬松江での「古代出雲を語る」討論会で、加藤義成氏は冒頭にのべられている。そして最後に、出雲国風土記は庶民の生活がしのばれて興味深く、

（3頁へ続く）

杜城興亡記⑥・「惣と一揆の行動」②・雑学のすすめ・俳句・短歌・川柳

横田庄の中世近世を貫いている

「惣と一揆の行動」序論（2）

徳川期後半②

放生会（続）

明治12年に横田八幡宮から島根県へ提出した報告書の中から祭典の概要を抜書きすると。（行事の本筋は変らぬとしても、明治維新以後は武家社会の風は一掃されはじめ、服装等も簡素化され、行事も縮少したようであるが、この年はまだ次のように往時の名残が多分にあった）

例大祭前一七日（一週間）の間、惣検校（当社の神主をこう称した）・供僧別当（岩屋寺）・大催をはじめ社人一同は斎戒沐浴・精進潔斎して当日を迎えた。

例大祭当日の午后になると、大催（屋号・表）は42人の警固奉仕の村人とともに自宅を出発し、「えへん橋」を渡って神社境内の原に設けられた大催家の桟敷に入る。この行列が終ると大催宅より大鳥居（原の入口、竹崎村卜蔵甚兵ヱ寄進のもの）までの間の道の両側に立てられていた幟（村人がその年の祭礼当日に祈願のため寄進したもの）を、寄進者本人がそれぞれ抜いて、境内の原の上手奥の鳥居に立てかける。この行列にあたり大催は、「表・宗右ヱ門」と認めた袋に銀札一匁（天保15年より二匁となる）を入れて往来方に届ける。別に馬場村の村方へは餅六升分を届ける（神事が行われればさらに三升を届ける）。

これより先社殿の一部において次の御供神楽が行われる。これは正月元旦、三月三日のそれに準ずるものであるが、即ち御供米として横田郷八ケ村の各庄屋の手によって藩の御蔵より、正米三石二斗宛が受けとられ供進される。そこで社人の東祝・西祝・土器師及び一の神子より八の神子・鼓取等各々礼拝後、御供殿において御供米の一部をもって、先づ東祝御飯をたき、土器師膳部を調え、次に八幡三神へこれを西祝及び神子一同が供じ神楽が納められる。

そこえ岩屋寺からは供僧となる住職が到着し、総検校も到着する。一方大催は小憩中の桟敷より警固の者10人をつれて同じく本殿に到着する。こうして三者が揃わなければ祭礼ははじまらないことになっていた。

この大催参入の場合、遷宮の時は次のような鄭重な儀式が行われた。仮宮（本殿より120米位下の境内原の中央に築造常設された、一間半に三間の宮で、古来よりあった）に、惣検校・供僧が揃い、大催のいる桟敷へ七度半の使いを立てる。即ち使いは七回往復し八回目には途中まで大催が立出でて出合い、同道して仮宮に到り、ここで三者揃って本殿に上った。

例大祭の場合は三者が本殿に揃ったころ、輿舁12人が輿殿から神輿3体を本殿正面にすえる。

全員席を整えると（正面前の左に大催、右に供僧、その両側に社人が相対してならび、下座から正面に総検校が正対する）、一同拝礼し、次に供僧別当、次に惣検校の拝礼して国家の安全を祈り、次に大催奉幣して拝礼し、終ると惣検校再び拝礼し、八幡三神（応神天皇、仲哀天皇神功皇后）の御分霊を神輿に移す。

この間大催方では桟敷附近で警固の奉仕に従った者に酒をのませる（2升入りの竹筒に入れて出しきり）。さらに沿道の警固にあたった別な特定の人々には、あんもち三つ、平もち二つ宛を配った（天保14年よりは、握飯五つ宛きなこをつけて配った）。

こゝで、とうごの馬（渡御）が登場する。二頭の馬に各白木綿一疋づつをもって腹を巻き上げ、仲間8人これに附添う。青竹8本に8色の籤（はた）一流宛をつけたものを一本宛仲間がもって馬をひいて仮宮との間を一回宛往復すると、あわせて往復8回となる。この間の距離は、往復で約240米（2丁）、8往復で2粁（16丁）となる。

これが終ると先払い、次に御輿三体、一体毎に警固2人宛附添って非常に備える。つぎに惣検校、供僧別当、ついで警固3人を伴った大催、そのあとに社人一同が供奉して神幸神事となる。仮宮に移ってから本殿同様に着座し、奏楽・惣検校神前に進んで拝礼、次に東祝・西祝より祭員一同に神酒を供し、終って奏楽、（この間警固の者は仮殿の周回を警戒する）終ると神輿とともに一同本殿に復帰して終る。

遷宮の場合には三者の各段毎の行列は形式が異なり、大催のそれは特別に附添その他人数が増加し、その権威は特に高きを示すものとなる。

しかし幕末になるに従い神社側は大催側の行列等に制限を加えようとするが、供僧側はなかなかこれに応じようとしなかったことが、文書によってうかがうことができるが、断片的であってその経過は明らかでない。

次の段階になると、「とうごの馬」の放生神事となる。

三者より12人宛の警固の者が出て、36人が2匹の馬に附添う。

馬には「コゴミ綱」といって木綿の手綱の先に藁しぶ二本をつける。それを馬の轡（くつわ）にとりつける。そして手綱を馬の腹の下に廻して警固の1人が持ちひかえる。上の鳥居のところへ集められていた村人たちの祈願のための幟を一度に倒す

と、その音に驚いて馬は「コゴミ綱」を簡単に切って大鳥居の方に向って走り去る。そこまでは両側に商人や参拝者が多いので、警固の者は長い麻布綱をつけて、走る馬とともに走り引止めようと努力することになっていた。それからあとは綱を放すので馬は走り去り、村の方へ向う。馬がとどまった村はその年縁起がよいとされ、その村は大いに祝った。時には馬は走って飼主の家に帰ることもあった。

（このとうごの馬が大催方にいない時には、村々が順番に出しその上各々米二斗宛を御供した。これは神に馬を捧げることができたよろこびをあらわすものとされたからである。）

これら八幡宮玉垣より下方にかけての一切の神事の経費は、すべて大催方にて支出した。即ち前号でのべた経費、本号でこれまでのべた該当分の経費、さらに十六日の神事角力におけるふるまいの経費である。

この経費は後述するように、往古より（長禄元年1,457の文書から記録が残っている）多額の免地の所持が許され、古格の維持と経費の支出にあてたのである。なほ境内の原一ぱいに張られる商人などの、かり屋賃はすべて大催方が集金した。

16日角力があると、にぎりめしにきな粉をつけて桟敷に持出して配る（但し3升5合飯）。ほかに手伝いの特定の人々にもきなこむすび五つづつと酒1升、角力とりには酒2升を出した。

祭礼前後3日間数人の特別な手配人や廻り役の人々の待遇や日当（1日200文宛）もあった。大催方の桟敷懸仮屋については村方の奉仕ではあったが、縄・麻柄・ほかに米8升などの相当の負担をせねばならなかった。幕末になると惣検校側も桟敷を設けるようになり、その場所・大きさ・参道との出入の距離などをめぐって争いもはじまるようになったが、これについても後述する。

こうした大催家の古格は記録の上では、建久7年（1196）より3年後、代参を仰せつけられてからといわれている。連綿として約700年伝統が続いたということ、後述するように大催が一方的に押しつけてというより、村人によって当然のこととして維持され、大催はそのためにいろいろの苦心を重ねて来ている点が重要であり、深く考案すべきところである。

横田八幡宮の例大祭放生会は昭和十年代半ばすぎ、物資の統制が厳しくなるまで、盛大に続いていた。明治22年の記録によると、200余軒の商人・興行師が石清水八幡宮の放生は、生魚西は下関、東は神戸、南は四国によるものであったが、当社は の阿波讃岐方面からもやってき馬によって行われたということ ていることを知ることができる。にも考案すべき点がある。

（横田史談会員　高橋一郎）

しばぐり抄

機械化をよそに稲架とく月明り　高木白虹

暮れ急ぐ庭に小菊の彩深め　峰石美代子

つわの葉かげにひそみ晴れを待つ　田辺竹野

隠れ潜む鯉へ白萩こぼれつぐ　岡田蹊花

火蛾の舞一夜に果てし今朝の冷　岡田麗水

つつがなき古都の旅路の彼岸花　渡部夕峰

古寺訪ずね峠に憩うきのこ飯　加納信子

国体旗しずかにおりて秋深かむ　錦織富江

延命に掬む掌にこぼる赤のまま　中澤斐水

稲掛けて夜に入り残る夫婦声　藤原樵夫

夕茜空を斜めに鳥渡る　新出谷一華

力士碑の蔦の紅葉に埋れし　小川あきお

（1頁より）

特に伝承の面では古代人の人生観などを伝えるものが多く感動的である。祖先の素朴な生きざまを子孫に伝え、自らも認識しまた中央にもそれを知らせる風土記が伝える神話は、「くにびき」「くにぼめ」「くにづくり」の三つに分類される。

古代人の生きざまをこうした神話に託して伝えるのにも、素朴な古代出雲人のすぐれた英知を見る思いがすると結ばれている。

わが国でも名著の中に数えられる「出雲国風土記参究」そのほかの氏の論考に一貫した考え方である。

この考え方は考古学・古代史学の学者が最も多く支持しているものである。推理作家とか民俗学或は国文学系統の方には、若干、オロチ退治を出雲の史実として考えようとする人もあるが。

昭和30年末ごろまでは、この話に対しても、古い即ち戦前の考え方が支配的であった。非才な私もあれこれ迷い、「横田町誌」には諸説を列挙しておいた。しかし今日では研究も進み、基本はさきのように定説化に向っ

前90号の訂正　1頁3段7行・起請文　2頁3段4行・杠用千代之　3頁1段1行・(杠)　6頁1段13行・大陸政策

斐の上川柳会十月句会雑詠抄

ひと夏のお礼をのべて茄子を抜き　児玉哲呂
花は散り残る枯木をもて余す　若槻白馬
緑門が出来て国体待ったなし　渡辺好之
いやなことみんな洗いに里帰り　安部正子
曲る腰明日稲刈る鎌を研ぐ　松牛歩
年ですねと言われ通院考える　太田亀甲
国体が無事に終って花も散り　松浦木公
国体に合はせて咲かす花の園　藤原英生
機械化に背き続けて鎌を研ぐ　高木白虹
計画を立てた日曜またも雨　久村美津
早い秋残暑見舞を言はせない　横山まこと
夜中まで雨が近いと稲をかけ　藤原のぼる
熟睡の夫へ遠慮な灯をつける　藤原千代子
静かなりプロ野球雨でみな流れ　堀江孤雷軒

晩秋賦

あらあらと日は照りいたりひとところ空瓶山と積まれし　常盤はるまさ
ところに
目にしみる芝生せましと躍動の若者達のたくましき脚　永井やよい
（ホッケー会場にて）
石を積み花も植えたる念願の墓庭の秋を彼岸花咲く　畑八重子
夫と同じ悩みあれどもふれずして実入らぬ峡田に稲を刈るなり　宮廻愛子
国体の炬火通りゆく道ぞひに雨にぬれつつ朝草を刈る　佐藤喜代子
叢雲の剣出現の山頂に国引くしるしの火は今ともる　児玉敏郎
逝きましし人の畑に葛茂りなだりに葉ずれの風に鳴る音　岡田時子
サイロ漬け終りし宵を夫と息子は雨音聞きつゝビール注ぎおり　景山悦子
向ひ合ひ手話の二人はさわやかに語り合ひつつわれを過ぎゆく　真綿博子
秋ふかみ温もる部屋にはえ一つよわき音たて吾が前をとぶ　目黒成生
厨より歌声もれゐし嫁は今日車の免許うかれしと云ふ　藤原信子
兵の日に賜ひし写真は四十路にて今眼の前の八十なる人　伊藤萩雨
胸張りて国のためにと征きませる亡兄の眼元のすずしき憶ふ　松浦愛子
惜しみなく拍手はわきぬ二千人の婦人の踊る風土記の世界　野村節子
妻逝きしときも然りきあかね雲夕べの空に長く燃へたり　安部夕波

ている。そこで私も良心的で確かな諸説を数多く読んで、「神話と歴史の間」と題して、本誌に次のように連載してきた。

①あめのむらくもの剣は銅剣時代　29号
②神話のよみ方　30号
③記紀と出雲風土記の神話の違い　31号
④稲田神社　33号

「続　神話と歴史の間」

○稲田姫の戸籍・斐伊川の地籍、いずれも大原郡にあること。　86 87号
○神話の基盤ー常陸播磨・出雲の風土記　88 89号
そのほか
○出雲国風土記の神話　76 77号

この誌はできるだけやさしくという方針上、引用した著作・論文・研究者の氏名等は一々遠慮させていただいた。しかしこれらの方に謝意を表し、読者の皆様の研究の助けになればと思い、機会をみて一挙に紹介したいとかねてから考えているところである。

雑学に流れ易い私も、学界の流れ、研究者の系統も正しく把握して、最大の注意を払い、最も大方の支持ある説に従って書いたつもりである。町誌発行後十数年間の折々の渉猟の一区切りである。

古代王権の由来と支配の正統性を示すために撰録された古事記

や日本書紀について、今年はじめ、14年の才月をかけ、6人の学者が中心となり、比較神話学・文化人類学の関連学者の協力を多数得て、古代歴史学・国語学・国文学の学者が発刊されたのが、岩波書店の日本思想大系66巻の最後の配本、第1巻「古事記」である。多くの学者がこの長年月毎月研究討論を重ねて公正を期しながら著述されたもので、今日わが国学界の最高の信頼できる書とされ、大きい価値をもち貢献度の高いものとされている。過労のため急死された学者、病臥された方もあるという。これらのほか個人の著作・論文を含めて40冊余の渉猟。

ただ私の菲才のため意を尽し得なかったところは、これらによって補っていただきたい。

この地のものとして、オロチ退治の話を追求すればするほど冒頭の加藤義成氏の言葉と同じになって行った。これを信仰すれば別であるが、地域の郷土の歴史を正しく追求して、そこに今と明日への何かを得ようとすれば正しく歩まねばならない。

この地のものとしてたたら製鉄史を深めるためには、どうしても通らねばならぬことである。

たたら製鉄については、中世以降この地がわが国の最高水準になったことはもう定説化している。しかしそれが中世のいつからであるか、これは今後に残された課題である。

そのためには、三沢氏・馬来氏・杠氏（山本・表）・安部氏さらに岩屋寺・横田八幡宮の歴史も、そして卜蔵氏・絲原氏なども調べねばならない。外濠をうめてはじめて、たたら製鉄の本体が浮びでると考えている。

最近たたら製鉄の構造の歴史に精力的にとり組んで頂く方があって心強い限りである。

このようなロマンに、即ち解明の仕事に暇をつぶして頂ける若い方の成長を切に願っているものである。

（蓬　頭　子）

会員配布一部百五十円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎（横田史談会世話人代表）発行／奥出雲文協／仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第 92 号
12 月 号
昭和57. 12. 4
奥出雲編集集団

続・杜城興亡記

浅原公章
（岡山県新見市在住郷土史家）

当編集者から――「杜城興亡記」が新見市の地方紙に掲載され、多大の反響があったので、それにこたえて筆者が補筆されたのが、この続編である。

当方の求めに応じて快よく掲載を許されたことに感謝する。

なお拙子も度々本誌に杜氏を書きながら、本文が問題にしている「杜」と「杜」について疑問をもっていたが、これによってこれも明瞭になったので、二重の感謝をいたしたい。――――――

杜城史を掲載しはじめると、予想をはるかに超える大きな反響を呼んだことを、多くの読者に紙面を借りてお礼申し上げる。

もともとこの記述は、当初の編集計画から大きく拡張して、十二回をもって一応の完結をみたのであるが、その間に、読者から寄せられた意見をしん酌して、文章の表現を配意し、かつ、（　）をもって簡単に注釈も加えておこなった。

だいたいにおいて、この稿をおこすにあたり、杜城の起源と、天正三年正月における落城の前後関係の事情とを、ほぼ重点的に記述するつもりであった。

また、杜城の創始については、新見庄の立荘の過程とも大きくかかわっていると考えるので、従前までの筆者の研究成果を踏えて、歴史的な考察を試みた。いわば学術的な地方史研究の一端であるが、無味乾燥な論考では、一般読者の共感を呼ぶにはいたらないと思ったので、学術論文の体裁を採らなかったまでである。

ところが、ある読者から「杜文書なるものはまったくの偽作で、杜城は新見四郎兵衛尉祐信が、南北朝の頃室町幕府の下知によって、領主となり開基したものとした上で、三浦氏の系図も後世の偽作であり、筆者の言う杜城の創始者杜六郎重行は、杜（もり）で杜（ゆづりは）ではない。したがって、杜城というものは南北朝時代に開かれたもので、筆者の記述それじたいが、新見氏築城説を無視した荒唐無稽なもので、新見家の子孫に対し名誉毀損になると指摘した投書があった。

このほかにも、いろいろの意見や指摘、はては家に伝わる系図があるとか、いちいち記す余裕ももたないが、これらの反響に対する応答を一括して続篇として、筆者の知見をもとにした私見を述べることにした。

摂津国杜峯

摂津国は、大阪府から兵庫県のおのおのの部分にまたがった地域で、その版図のうち、東北部一帯の山地は、政治の中心地である京都に近く、戦術の要地として京阪地方と丹波高原の一帯を展望でき、古来からとくに重要視されたところである。

「ゆづりは」の発音に似た大阪府高槻市出灰（いずはい）村の南東丘陵、ポンポン山のあたりが杜家文書にいう杜峯ではないかと考えられる。また、出灰は譲羽に当り、当地の杜城が譲羽古城にあたることは、それぞれの文献資料で知ることができる。

なお、滋賀県永源寺町には、「杜葉尾」というところがあって、古文書ではこれを「譲」や「杜葉尾」と記して、「ゆづりを」と読ませている。このように、古文献には「杜」を多いたものが用いが、現今では「杜」に統一されているということは、近年に出版された角川日本地名大辞典にみられるところで、本朝武家系図や姓氏家系大辞典に記されている杜六郎重行の「杜」は「杜」と読んでも間違いないものと考えるのである。

歴史の眼④ 奥出雲とはどの地域をさすか

この秋、飯石郡に「奥出雲」の名を冠した、休養施設が生れたとたんに、奥出雲の名称を奪われたという人が、巷間にかなりある。大体「奥出雲」とはどこを指すのかという質問もかなり多かった。

本誌31号に書いたが、戦時中に仁多郡を奥出雲と表現したところ、「仁多の山猿」といえば腹を立てる人もあるのに、出雲の奥の奥地を如実にあらわす、「奥出雲」をもって仁多郡を言うのは差支えないのか。その文を載せる地方誌の編集者から、遠慮したいから奥出雲の言葉をのぞいたらと忠告？があったことがある。今日ではあちらでもこちらでも、「奥出雲」の奪いあいである。奥出雲観光協会にみるように、奥出雲は雲南三郡のようである。

島根県の地図をひろげてみると、飯石郡と仁多郡は出雲の奥地に位している。しかしあれこ

新見氏の築城説

筆者のいう杠氏の杠城築城説は、その名称の示すとおりであり、かつ、杠家文書と東寺百合文書とに加うるに、日本歴史の通説を時代の背景として構成したものである。

古戦場備中府志にいう新見氏の杠城築城説との年代差百七十六年という根本的に大差がある。そこで、この新見氏の築城説に対して検討を加えてみたい。

古戦場備中府志（以下府志と称する）には、『杠城、当城開基源氏朝臣新見四郎兵衛尉祐信、足利将軍ノ武者所畠山氏部少輔貞国執達書ヲ以テ領主トナル。康安二年山名伊豆守時氏ニ興シ云々』と記されている。

康安二年といえば、南北朝時代の北朝年号で紀元一三六二年にあたり、この時の将軍は足利義詮である。

次に、武者所は、建武新政がその緒についた元弘三年（一三三三）八月ごろ、中央組織のうちの一つとして、侍所とともに軍事および警察を官掌するために置かれたとされているが、この設置の年月も判然とはしない。けれども「梅松論」の元弘三年の記事の中で設置の事実を知ることができる。

文献によれば、この武者所は、京都警衛のためのものであったらしく、後醍醐天皇側近の武士で編成されていることから、天皇の親衛隊とみるべきである。また、建武三年（一三三六）十二月の南朝吉野御所の機構にもこれがみられることからして、北朝よりは南朝方の機関であったと考えられる。

だいたいにおいて、京都市内の警察権は、北朝では、朝廷の検非違使庁が官轄し、応安二年（一三六九）ごろに幕府の侍所がこれを受けついだとされているので（上島有・「戦乱と一揆」八九頁、講談社）、康安二年の当時に、足利政権の機構の中に武者所という名称が存在していたということは考えられない。

また、畠山貞国については、姓氏家系大辞典によれば、畠山氏第四代で三代の時国の子、式部大夫・民部丞で、府志にいう民部少輔の役職ではない。

さて、備中国新見庄史料（以下庄史料という）での新見氏の初見は、旧来は、建武四年六月二十五日、「法印信尊契約状案」に、横見（現在の新見市上市字横見）・半代・リ（里畠のこと）について、新見氏とその当時の押領使と考えられるところの村社氏との土地の取り合いの争論をしている。新見氏は鎌倉時代から、この新見庄内で勢力を蓄えて濫妨を働いていたことが知れている。

次に府志にいう新見祐信は、庄史料にみえる新見貞直や新見太郎左衛門尉と同一人物かという問題である。太平記にいう伯耆国船上山への新見氏の忠勤は、まったく貞直であると思われるが、これこそ、府志などに記してある系譜は無稽なもので参考にならぬと、地方史家であった故松尾惣太郎氏は自著「備中国の荘園と国人」で決めつけている。

因みにある質問者はこの府志を権威ある書物と担いでいる。

鎌倉政権の新見庄支配

さきに、新見庄は開発領主大中臣氏から官務家小槻氏に寄進したと述べたが、その間の事情をいま少し掘り下げて分析したい。

関白藤原兼実の日記「玉葉」の文治元年十二月六日の条に、

一、解官事、参議親宗・左大史隆職、同意行家義経、欲乱天下之凶臣也、早解官見任、可被追却之、

十二月六日　頼朝（在判）

これは朝廷の参議以下、とくに小槻隆職らが後白河法皇の意のままに、義経の実力を過大視して、義経の要求によって頼朝追討の宣旨を出させたとに対する責任を追及した官職剥脱という、頼朝の強い姿勢が伺われるのであるが、それに追い打ちをかけるように、さらに強力な圧力をかけていった。

すなはち、「吾妻鑑」文治二年二月二十三日の条に、『前大史隆職宿弥、不忠の逆臣として所職改替の身なり、なお、官知行の保を押領し、公要の重書等を抑留せしむる由の事、その沙汰あり、京都に申さるべしと云々。大夫史広房、内々三品に訴へ申すが故なりと云々』（新人物往来社版「吾妻鑑注釈書」による）

このことは、隆職が公領（国衙領）の保（＝平安後末期ごろに現れた地方行政単位、公領開発のための特別な行政区として

れ総合して判断すると、仁多郡と木次町温泉地区と広瀬町比田地区をあわせて、奥出雲というのが最もふさわしいようである。

まず古代史の上からみるとこの地域が最もふさわしいし、中世史の時代になるとさらに明瞭である。

民俗学上民衆の生活習慣、年中行事、生活用具（民具）を比較してみると、やはりこの地域が奥出雲というにふさわしい。すなわち飯石郡は備後と石見の影響を強くうけて色彩が他地区と特に変っている。大原郡は出雲平野方面の影響が著しい。仁多郡は能義郡とともに、松江市及びその周辺の色彩をもっている。

そこで本誌では、この問題を各分野別に連載して、奥出雲の特色を明瞭にしてみることとしたい。次号からまず、原始時代とそれに続く古代史の初め、即ち考古学の対象時代の仁多郡＝奥出雲を、ついで歴史時代に入った古代史そして中世史、そして民俗学上からみた、出雲国の三地域の特色の比較を、それぞれの研究者に執筆願う予定である。

（蓬　頭子）

しばぐり句会十一月抄

里帰る嫁も古りたり秋祭　中澤斐水
切り張りの障子のひとこま草紅葉　加納信子
夕時雨老眼おぼろな針の糸　錦織富江
達磨忌や野の花添える僧のあり　中田巣鶴
カレンダー一枚残す朝の雨　藤原樵夫
干竿を陽にむき替て日の短か　門脇花子
扉開きし土蔵の暗み花八手　岡田蹊花
墨をする手許に冷えのしのびより　峯石美代子
黄昏て秋蝶今日の翅収さむ　浅野としお
野分して満天星紅葉地に還る　小川あきお
石庭の白砂にうつる秋の翳（京都竜安寺）　渡部夕峰
山峡の低き家並や十三夜　岡田麗水
枯れ穂ぽつり佇ずむはぐれ鷺　高木白虹
行く秋に追われし如く稲架たたむ　新出谷一華

斐の上川柳会十一月句会雑詠抄

余る米それでも百姓落穂拾う　松田牛歩
ふと目覚め戦火の友が夢たどる　高木白虹
丹精に応えて咲いてくれた菊　松浦木公
サルビヤも一役終えた顔になり　佐佐木千世
旅鴉矢張り古巣を恋しがり　若槻白馬
入念に書いた日記を誰が見る　太田亀甲
主婦の座を嫁に譲って若返り　渡辺好之
引退を決めて心も軽くなり　藤原のぼる
発熱の孫に不安な顔重ね　藤原千代子
在りし日を語ってつきぬ初七日　安部正子
一人旅多勢の中で孤独かみ　目黒申楽
仰向いてきり／＼廻り蟬の鳴く　堀江孤雷軒
風見鶏笑うわたしも風を見る　児玉哲呂
ひざ当てや尻あてもない現代児　藤原英生
使い捨て　使いきれない貰い物　久村美津
落日にふる里思う旅の椅子　田中志奈

成立したもので、荘・郷・保と併称した）を押えつけて支配したというので、頼朝が後白河法皇に、隆職の左大史いう官職を解くように強く申し入れたことに対して、隆職の甥の広房が内々で頼朝と事の曲直（＝正否）を公に争うというものである。

右の史料に対する好例の一つにこの地新見庄の立荘のいきさつがある。新見庄を寄進した事情が、本当に大中臣氏の税金のがれの策であったのか、それとも、隆職が備中国司という地位を悪用しての、大中臣氏への圧力によった押領であったのか。

この後者の考え方を裏返せば文治二年の二月下旬の当時から、頼朝は隆職に圧力をかけて、この備北の産鉄地新見庄を鎌倉政権下に組み入れるべき策略を考え、その後間もなく有力な御家人三浦一族の杠氏を守護職として、この地に移封した。

杠氏はかねてからこの新見庄を管理していた下司職を抱き込み、画策の末に荘の重要地域に勢力を保持させて、遂に頼朝から新補地頭として補任に持ち込んだのだと推考される。そして守護地頭という政治的な形で、鎌倉政権の権力を扶植したのである。

こうした鎌倉方の軍事拠点として、また、西国への勢力の扶植という大きな目的をもった新見庄地頭職は、鎌倉幕府の崩壊の後もながくつづけてこの新見庄に君臨したと思われる。

なお、新見庄の諸事情については未知のところが非常に多い。その一環が壬生文書の中に残存しているらしい。将来これが公表されれば、新しい知見のもとに更に詳しく展開できるかも知れない。

むすびに代えて

杠城にまつわる伝承について記したいと思ったが、いろいろの事情で省く。ただ破却（廃城）された後の杠城址はどうなったのか。荒廃にまかせられていたとき、ここに生い茂った葛の根が、天保の大飢きんで飽えた百姓らの食物となったという。

さて、杠氏については、先述の如く文明四年初回の落城のとき、城主常久は出雲国仁多郡馬木郷に逃亡した。その後三代目の則久は請百姓の傍ら、天文五年に同地に鈩稼業をおこしたという。代を累ねて鉄山事業には浮沈はあったものの、明治中期ごろまで操業を続け、一族大いに繁栄、この地方では稀にみる名門に成長して、今日に及び、その直系は現在下関市に住む。

引用した杠家文書は、損傷が甚だしいので江戸時代の中ごろ、十二代重郎左衛門安清が謄写したと注記されている。その後太平洋戦争のさ中、下関市の爆撃で焼失したという。さいわいにして再謄写のものが残存し、こうして引用でき杠城の由来が明確になったわけである。

新見氏は永録九年に新見庄を捨てて行方が知れなくなった。現在も『新見』を称する一族一派が各所に存在している。近くは哲多町から久世町、倉敷市児島裨田を中心に三十数戸、広島県東城町川東に数戸、鳥取県江府町吉原および袋原に数戸、そして四国徳島県板野郡土成町に十数戸のものが、中には「先祖が備中新見から遁世した」と言い伝えをもつ集団もあって、それぞれ利を得て発展している。

これらすべてが地頭新見氏の系譜を引くものかどうかは不明確である。かって、徳島県の新

前91号訂正　3頁3段　2ケ所「考察」

見氏一族はその代表者を仕立てて来訪し、杠城の故地に木柱を建て親しく先祖の霊を弔った。同地では毎年の旧暦九月十五日に、その本家の屋敷内に建立されている新見神祇に、一族相い集って盛大な祭礼を執り行っているということである。

三村氏を称するものは新見市内中南部に多く、詳しくは岡山県美星町史に載せられている。鳴輪城主三村親成の後裔、孫四郎元房は、この城の落城の後哲多郡井部村（現高梁市）に移住し、後にその孫久三郎親吉が新見に居を構え、子孫は商業に励んでいる。

楢崎氏は助四郎時忠が元亀元年（一五七〇）に杠城主になったが、その年に毛利元清の攻撃に堪えかねて周防山（大佐町）築城を企て逃走し高田（勝山町）の近傍、月田（同）あたりを占拠したらしい。その後天正三年毛利輝元の配下となった弾正忠元兼が、織田信長の密使を因幡の関所で捕へたことは有名である。現在のところ楢崎氏を称する者が大佐町に若干あるが、その系譜は詳でない。

筆を擱くにあたってとくに強調したいことは、この辺境の阿新地域が、かっては日本歴史の表舞台に躍り出たという事実である。古代からの産鉄地であったという認識から、この地の争奪が、古代における波区芸県の設置・条里制・中世における新見庄の立荘・戦国期の戦乱など、さまざまな現象をひきおこした。

その間にあって、新見庄の時代には、国の中枢、京都と同じような文化水準をもって、政治経済がなされていたということを雄弁に物語っている。筆者はこの史実を読者に明らかにしたかったのである。

（完）

横田庄の中世近世を貫いている

「物と一揆の行動」序論③

徳川期後半③

こゝでこゝまで続いて来た小池氏の古格の裏付けとなる、財産の公的部面の数字を、年代を追うであげて、簡単に説明をしておくことにする。

徳川時代の水田1反当りの収穫は平均して中田1石2斗（3俵）である。

三沢氏が仙洞御所の命をうけてその荘園横田庄の治安維持をはじめたのは、長禄元年（1457）ごろで、この年三沢氏は3町歩の免地を安堵している。当時所有地の半分が普通であったとすると6町歩が所有地となる。それから212年を経た寛文9年（1669）には10石2斗の免地を松江藩から認められている。約8反5畝位となる。翌10年には検地が行われ免地を失っている。その後のことは不明であるが、元文2年（1737）には持高50石のうち25石の免租をうけている。持高は4町歩位にあたる。これを宝歴年間の「雲陽大数録」の数と比較してみると、その財力を知ることができる。樋口村250石、加食村50石、岩屋寺30石、馬場八幡宮8石である。

延享4年（1747）免租がなくなったが、願いにより毎年10俵が与えられ、宝歴11年（1761）よりは生涯8俵を与えられ神事に精励するようにとせられた。藩主不昧になると藩財政窮乏のため中止せられ、度々種々の申請をしてその補いをして行ったようである。寛政11年以降次回からのべる惣検校との論争の時代となる。文久2年（1862）に120余年前のように25石の免地申請をしている。所有地の変動は少なかったもののようである。

1457	長禄元	免地3町
	212年間	（不明）
1669	寛文9	免地10石2斗
	仝 10	0
	68年間	（不明）
1737	元文2	持高50石中 免地25石
1747	延享4	0
	?	毎年10俵頂戴へ
1761	宝歴11	生涯8俵頂戴へ
	明和4	（松平不昧藩主に）
1768	5	0
1774	安永3	たたらと売酒許可
1789	寛政8	売酒許可
1792	仝 11	（論争はじまる）
1839	天保10	（家督譲状）
1849	嘉永2	
1862	文久2	免地25石の申請

師走のうた

ひと夜降る雨に濡れたるうづら豆を惜しみてやまぬ妻と
豆引く　常盤　はるまさ

枝古りし垣根に咲ける茶の花の蜂遊ばせる初冬の真昼
野村節子

音ひとつ絶へればもどる静もりの無限に酔へる冬の黄昏
宮廻愛子

ひそかにも朝露にぬれしか小紫つぶらけき実の朝日に光る
畑八重子

五十路に入りたるばかりの友なのに入口肛門に後生送ると
佐藤喜代子

女（おみな）二千布なびかせてひれ伏しぬ古えの民の祭
児玉敏郎

もかくや尖り立つ荒波砕く絶壁を眺めて巡る隠岐の遊覧
藤原美世栄

優勝と父の名ありし有放に児等も勇みて牛をたたき合ふ
景山悦子

朝冷への厨に何をきざみゐむ遠住む嫁の仕草浮べり
岡田時子

忍び寄る老ひの思ひをかみしめて日々を語らず妻と飯食む
目黒成生

山畑に小豆引く手を休むれば枯葉一枚落つる音のす
藤原信子

古寺訪ね友と帰り来深山路の草かげにひそと冬苺赤し
松浦愛子

秋の夜の部屋は静けく床板に引きたる渋の匂ひただよふ
永井弥生

晩秋の若狭の海は青く澄み常神岬の燈台白し
安部夕波

会員配布一部百五十円／六九一六　島根県仁多郡横田町横田一、六一／二　編集責任者・高橋一郎（横田史談会世話人代表）発行／奥出雲文協／仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 93 号
（1月号）
昭和58. 1. 1
奥出雲編集集団

奥出雲の古代社会①

－古墳文化と『出雲国風土記』を手掛りにして－

中浜久喜
（兵庫県相生市在住）

一、はじめに

棚田と風化した花崗岩質の山肌は、奥出雲独特の風景となっています。のどかな、しかしきびしいこの奥出雲で、どのような特質をもって古代社会が展開したのでしょう。

この問題は、単に奥出雲だけでなく、出雲地方全体の古代社会を考える上で大変重要になってきます。なぜなら、「出雲国」という統一領域が、いつ頃、どのように成立したかという問題とも関連してくるからです。さらにこのことは、直接的にではないにしろ、日本の古代国家成立の問題とも当然かかわってくることでしょう。

それでは、奥出雲の古代社会を解明するにはどんな方法が最も有効でしょうか。

私は、当地域に残されている古墳等の遺跡を調査・研究することから始めなければならないと思います。遺跡は、古代に生きた奥出雲の人々が直接刻み込んだものだからです。また、出雲地方古代史研究の一級史料である『出雲国風土記』（以下、『風土記』と略す）も手掛りにすべきでしょう。

事実これまで、古墳等の遺跡の在り方や『風土記』から多くのことが明らかになっています。

すでに『八川村史』（一九五九年）は、多くの古墳を紹介し、そのほとんどが後期（六～七世紀）に属するものであることを明らかにしています。

また『横田町誌』（一九六八年）では、古墳の内部構造である横穴式石室や横穴墓（山肌に直接穿った古墳）の形態に注目し、出雲地方平原部や山陽方面との文化的交流に言及する一方、を導き出しました。門脇氏はまず、前半期の古墳（横穴式石室や横穴墓が出現する以前の古墳）が横田地区に多く他地区に少ないこと、後半期においては、横田地区で横穴墓が主流であるのに対し他地区では横穴式石室墳が主流を占めることを指摘し、前半期における横田地区の先進性と後半期における他地区の優勢を説きました。次いで『風土記』の分析から、各郡司の性格を明らかにし、その拠点を比定しました。さらに、当地域出土土器の検討と以上のことを踏まえて、独自の地域社会を形成していた当地域に、「古式土師器」の中頃（四世紀末頃か－筆者）、平原部の強力氏族が浸透、鉄の量産体制を組織し、さらに成長して特色ある後期古墳文化を出雲地方平原部に生んだのではないかと考えました。

私は、以上のような先学の成果に学びつつ、個々の古墳や古墳文化全体の在り方を再検討する中から、奥出雲の新たな古代史像を素描したいと考えているところです。

『風土記』から各郡司の拠点を比定し、横田郷の特殊性を示唆しています。

さらに門脇俊彦氏は『邑智町誌』（一九七九年）において、奥出雲の古墳文化の検討と『風土記』の分析から、出雲地方全体をも視野に入れた大胆な仮説

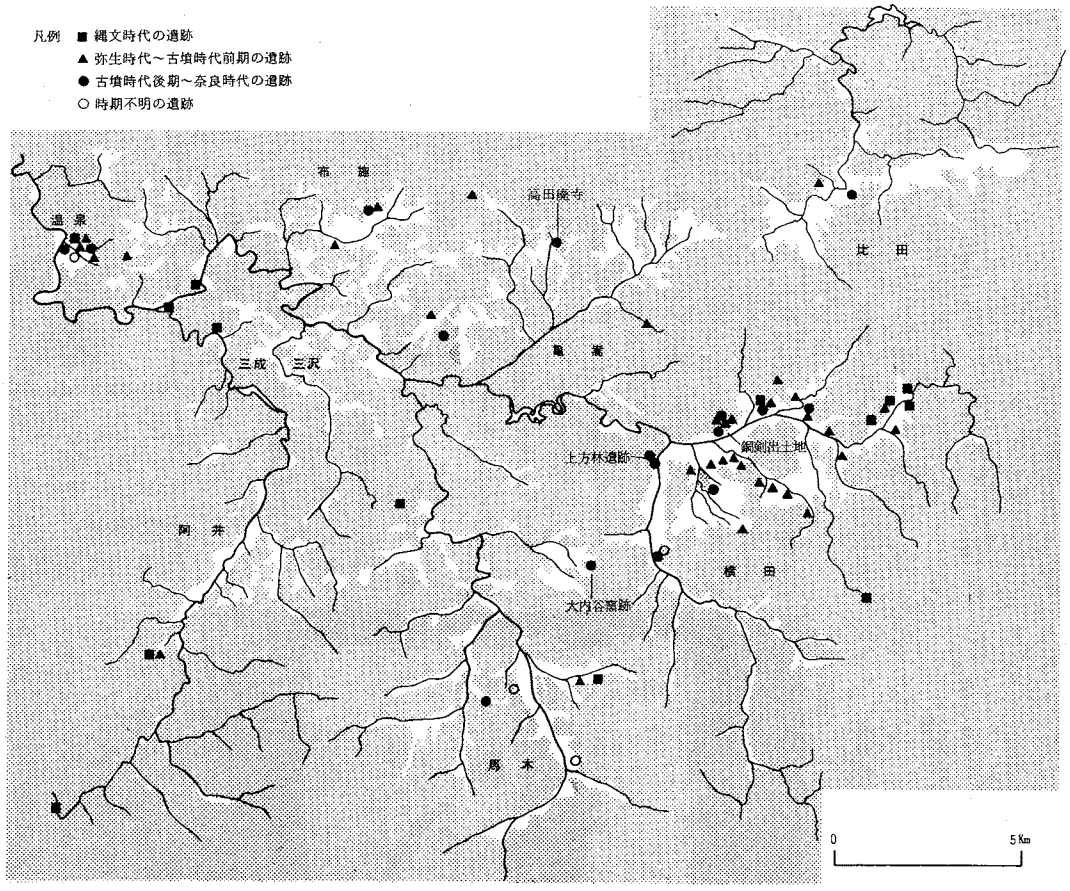
二、地理的・歴史的環境

一般に奥出雲と呼ばれる地域は仁多郡に当たります。ここでは、『風土記』に示された仁多郡（大原郡木次町温泉地区、能義郡広瀬町比田地区も含む）を取り上げて考えていきたいと思います。

中国背梁山地に源を発する急流は、花崗岩質の山間を縫って斐伊川本流を形成しています。その流域にはいくつかの盆地や小谷が展開し、人々の生活の場となっています。

当地域は、水系及び地形により、さらに次の八小地区（現在

奥出雲の古代社会①　惣と一揆の行動序論④　短歌・俳句・川柳



第1図　地理的・歴史的環境

の地区とは異なるので注意）に分けることができるでしょう。

①横田地区…斐伊川の源流と下横田川の流域に当ります。両川の合流地点周辺は横田盆地と呼ばれ、当地域最大の水田地帯となっています。近世～近代の米の収穫高は仁多郡全体の二八％～三六％を占めていました。『風土記』の横田郷に比定できます。

②馬木地区…景勝鬼の舌震以南の大馬木川と小馬木川の流域です。大馬木川流域に少しまとまった水田がありますが、他は狭小な谷水田となっています。

③阿井地区…阿井川ダム以南の阿井川流域です。中央部にややまとまった水田がありますが、他は狭小な谷水田です。

④三成・三沢地区…阿井川ダム以北の阿井川と三成以西の斐伊川本流で囲まれた地域で、三沢川流域を中心とします。水田は極めて少ない。

⑤温泉地区…斐伊川本流が大きく北に流れを変える地点以北を中心とした地域です。水田は少ない。温泉が湧いており、『風土記』にもみえます。以上の四地区は『風土記』の三澤郷に比定されますが、『和名抄』によると、後に阿位郷（馬木地区・阿井地区）、三澤郷（三成・三沢地区）及び漆仁郷（温泉地区）の三郷に分立したことがわかります。

⑥布施地区…八代川と三処川流域です。次の亀嵩地区とは城山で区別されます。谷水田が多い。『風土記』の布勢郷に比定できます。

⑦亀嵩地区…城山以東の亀嵩川流域です。谷水田が多い。

⑧比田地区…飯梨川の最上流域に当ります。比較的まとまった水田もありますが、棚田が多く、後世の開墾に負うところが多いと考えられます。以上の二地区は『風土記』の三処郷に比定できます。

次に、古墳以外の原始・古代の遺跡について概観しておきましょう。

先土器時代の様子は不明です。が、縄文時代には人々の生活が始まったことがわかります。山間奥部と中流に近い地区を中心に十数ケ所の遺跡が知られています。弥生時代になると、横田地区を中心にして水稲耕作が営まれ始めたのでしょう。弥生時

代〜古墳時代前期の遺跡は、数規模とも横田地区が他地区を圧倒しており、水稲耕作に適した土地柄を窺わせます。とりわけ横田地区において銅剣が出土していることは、注目すべきことです。逆に低地の少ない三成・三沢地区では、遺跡は未だ確認されていません。

古墳時代後期〜奈良時代の遺跡は、前時代に続いて横田地区に多い。注目すべき遺跡として、上方林遺跡（横田地区）は、底に孔を穿った須恵器大甕・横瓶、冠と思われる金銅製品等が出土しています。大内谷窯跡（馬木地区）は、須恵器窯として奈良時代から生産が始まったものと考えられます。高田廃寺（亀嵩地区）は、石列、石段が認められ、出土瓦より奈良時代創建の寺院跡と思われます。また最近、同じく亀嵩地区の郡村で、奈良時代の郡家（郡役所）もしくは郡司層の居館かと考えられる遺跡が発見されています。遺物として、円面硯（すずり）、墨書土器（墨で文字の書かれた土器）、木偶（木製人形）など注目すべきものがあります。

当地域の遺跡分布調査は十分とはいえませんが、以上でおおよその傾向は把握できると思われます。

なお、七三三（天平五）年に勘造された『風土記』によると、亀嵩地区に郡家が、横田、阿井、温泉地区の各地区に正倉が置かれていたこと、各地区に一〜二社、計一〇社の神社が成立していたことが推定できます。また、「以上諸郷所出鉄、堅尤堪造雑具」と記されており、奈良時代のこの地で採鉄と鉄器の生産が行なわれていたことを窺い得ることができます。

横田庄の中世近世を貫いている

「惣と一揆の行動」序論（4）

——中世三沢氏時代①

国内各地騒然となりはじめる

横田庄をめぐっての問題が導火線となって起った明徳の乱ー将軍家足利氏と勢力張り合う山名氏一族との対立——が終ったのは明徳2年（1391）であるが、その余波はなおこの地方でざわめいていた。山名満幸にかわって出雲守護は京極高詮に与えられた。数年たつと周防の大内義弘と将軍の対立である応永の乱が起る。その後将軍家内の対立内紛は、その統制力の弱体化ももたらし、各地に一揆が起った。国人層による守護へのもの、名主層の指導による土民たちのもの、それぞれの要求をかかげて立ち上った。なかには闕所地（中世・知行人の欠けた土地）を押領するもの、全国各地が騒然として来た。やがて近江の正長の土一揆・播摩の永享の土揆などを経て、全国を東西両派に分けて10年間争った応仁の乱（1467〜1477）の時代を迎えるのである。この地方も直接間接その影響をうけたのにちがいない。

横田庄内

横田庄内の精神的まとまり信仰の中心である横田八幡宮の、

新春のうた

腰痛を妻とかたみにかこちつつ小春日かけて蒟蒻を掘る
この山の霊気の中に吾ひとり遠鳴る風は亡き父母の声
賀状書く嫁の筆文字鮮かにいささか吾はひるみておりぬ
喜色満面ガッツポーズの無邪気さよ第一ゲート通過
したれば
薪樵る山にハンターら入りしより吾が胸ぬちの平穏

常盤はるまさ
永井弥生
畑　八重子
児玉敏郎

くずるる
鬼岩とふ弘法大師の足跡に立ちて見渡す街は小さし
孫と遊ぶ散歩の路も冬枯れてつる梅もどきに心和みぬ
山畑は枯野となりて草の実のはじけて裾にまつはりつきぬ
青空に千切れる如き白雲は高き山よりその上に浮く
秋菜を持ち牛を迎へに牧場原山は落葉に道埋りぬ
先輩に指導を受けし歌の道生甲斐知りてひととせを経ぬ
持参せし大根白菜湯気立ちて孫らと囲む夕餉明るし
裏山に初雪降りて山帰来の実はあざやかに赤く光れり
ストーブにかじかむ掌かざしつつ障子張り替ふ師走の一日
堤道を仕事終りて帰りくる土工ら夕陽に黒き影ひく

伊藤萩雨
景山悦子
佐藤喜代子
岡田時子
目黒成生
宮廻愛子
藤原美世栄
松浦愛子
藤原信子
野村節子
安部夕波

冬うらら

白樺の白なずませて冬晴るる
咲き実り地に葉戻して木々眠る
忘れあるおもちゃに冬日うららかに
窓越しの冬陽あたたむ棕梠竹
麓より牛の声湧く冬うらら
雪晴れて今朝はうれしく仔牛はね
鳥翔ちて冬日一瞬撒らしけり
冬麗ら落葉の一刻陽を吸えり
うす化粧せし山々や冬日和
遠山の山々幾重冬晴るる
句作するうなじに冬陽片かげり
山寺やそこだけ暗し冬日射し
山々に峰雪粧う冬うらら

糸原古志
岡田蹊花
渡部夕峰
高木白虹
中沢斐水
田辺竹野
浅野としお
新出谷一華
峰石美代子
岡田麗水
加納信子
小川あきお
門脇花子

訂正 92号1頁4段22行 「杠」を用いたもの

大催・神子別当職として長い伝統ある古格を維持している小池氏の、祭祀権にもとづく指導力、御所領としての横田庄の荘官として、京都から下って来た（明徳の乱中10年野にある）安部氏の権威によって支えられていた横田庄も、それにのみ頼っていても不安であると御所側ではみたのであろう。三沢氏に横田庄内の治安維持を命じた。

三沢氏は郡西部（温泉・三沢・阿井・布勢・亀嵩・比田）に、三沢城を拠点とし国侍として勢力を扶殖していた。横田庄はこの後の種々の記録によると、比較的忠実に貢納を続け、御所としては頼りになる荘園であったようである。かつての明徳の乱の轍をふまぬよう、三沢氏の蚕食に先んじて命じたのかもしれない。その年代は明らかでないが、横田八幡宮の永享11年（1439）の遷宮の棟札に⑤信濃守為忠の名がみえるから、これよりしばらく前か、それとも明徳の乱後しばらくした、14世紀はじめごろであろうか。

三沢氏は横田庄へは代官を派遣するのみで、荘務はそれまで通り安部氏にまかせ、当時統治の重要な中味であった祭祀権は小池氏にまかせたのである。

安部氏の記録によれば、永正6年（1509）三沢⑧遠江守為忠が藤ケ瀬城に入ってはじめて、荘官を退いている。⑤近豊で初代来住より111年目であり、ずっとのち天文年間に12年間復職していい文書）それは兄弟の間での、大催職とその裏付けとなる財産についての争いに関するもので、代官為信は惣裁判の通り、大催職神子別当職および免地三町歩については、双方折半して永代相続すべしというものである。

惣裁判のことはこれ以上明らかではないが、横田庄6ケ村が惣組織をもち自治が強いものであり、惣の中心八幡宮の役職についても、発言できるだけの団結力もあったことを示すもので、近畿地方では14世紀後半に惣組織が発生し強力であった。

斐の上川柳会十二月会員近詠抄

披露宴固さほぐれて本音吐き　渡辺好之
井戸端の会議はないが世間知り　目黒申楽
花を待ち球根植える秋日和　安部春恵
まな板のリズム鮮やか嫁古し　若槻白馬
大根は年寄り顔でぶら下がり　児玉哲呂
夜業して赤いダイヤをよりわける　藤原英生
柿の木が無くて嬉しい貰い柿　高木白虹
見えぬもの探がせば見えるとこにあり　松浦木公
平行線たぐれば遠い意地の山　松浦亜以
飼い主もないのに野良猫よく肥り　久村美津
俺が先き私が先と隠居部屋　太田亀甲
山茶花の色も褪せきて冬仕度　真綿よし子
過ぎ去ったこの一年が短かくて　藤原のぼる
泥まみれまみれまみれて土に生き　松田牛歩
節太のこの手は寡婦の人生譜　安部正子
掃き出せば足長蜘蛛の踊って遁げ　堀江孤雷軒

あとがき　おことわり

今月号から連載をはじめる「奥出雲の古代社会」の**執筆**者は、考古学を専攻する熱心な若き教師中浜久喜君です。島根大学在学中、三沢の前方後方墳の発掘に加わってから、以来仁多郡を愛し山野をかけめぐって、この地方の考古学時代と出雲国風土記時代を結ぶ、貴重な研究をみごとにまとめて好評を得ました。一昨年横田での研究会にも発表し、続いて専門誌にも載ったものです。この度、特にお願いしてよりわかり易く書いて頂いたものです。御期待下さい。

かつて編集子が昭和40年に出版した山陰文化シリーズ「奥出雲をさぐる」に再録した。このことについての幼稚な推理の話題も、考古学上の研究の成果にもとづいて、みごとに考察した論文で、仁多郡のこの方面の解明に光彩を添えるものです。

最初の頁の賀状は、東京在住の本誌の愛読者である若い婦人の作品です。これも特にお願いしたもので、本誌はじめての多色刷としゃれてみたものです。

前92号の「続・杠城興亡記」に、文章が数行脱落しておりました。校正上の手落ちであります。執筆者ならびに読者の方々におわび致します。左記の数行ですが、別に印刷もして本誌に添付してありますので、切りとって前号2頁の2段目の最終行の次へはって下さい。

の新見九郎（貞直）であったが、昭和五十五年一月からの東寺百合文書の全史料の公開により、文永八年（一、二七一）二月「備中国新見庄領家方里村分正検畠取帳案」

そして3段目の「に横見（現在）……」と続きます。

百号が近くなりどうしたものかとまどっています。続いてという御意見もあり、それならばいっそ内容をひろげて2頁位増やして、その赤字を埋める為の誌友増へと進めてはとも考えています。さて前途多難ですが。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 94 号
（2月号）
昭和58. 2. 5
奥出雲編集集団

奥出雲の古代社会②

—古墳文化と『出雲国風土記』を手掛りにして—

中浜久喜
（兵庫県相生市在住）

三、古墳の概要

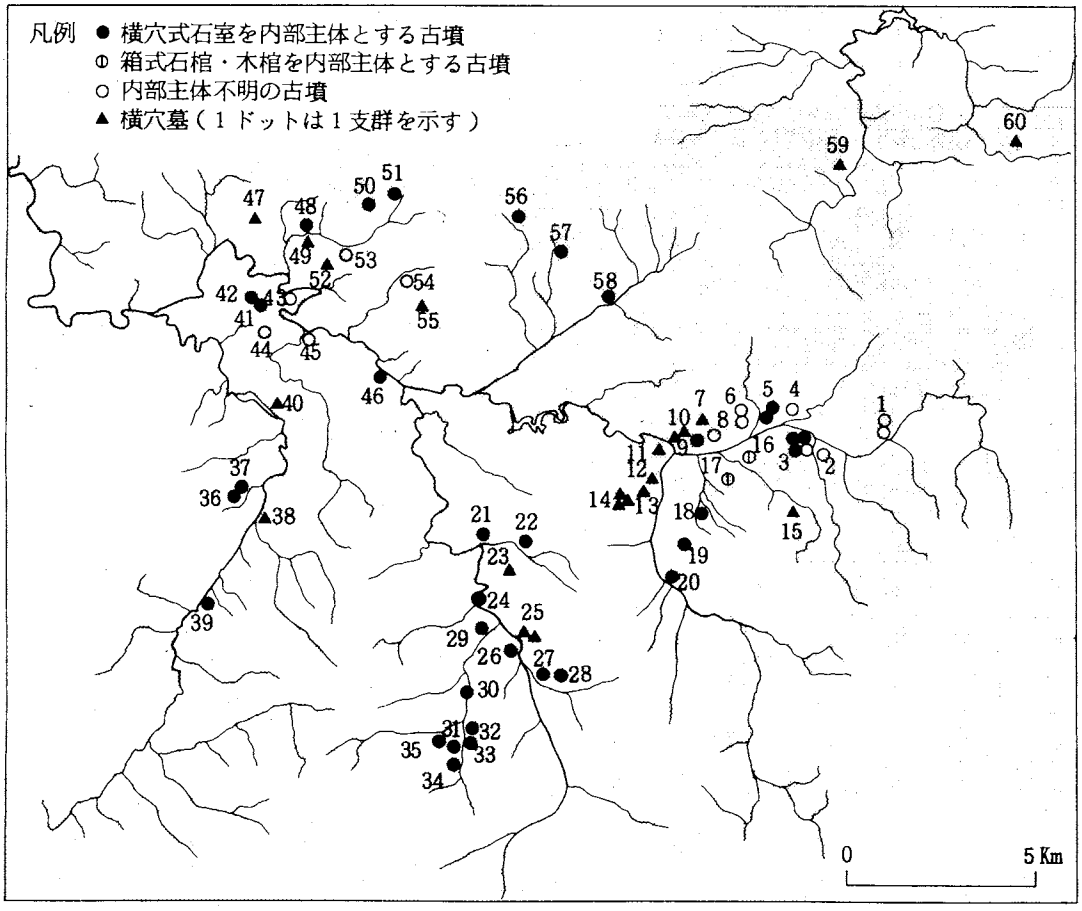
各々の古墳の詳細を記すべきですが、紙面の都合上、概要の表示と主な古墳の紹介に留めたいと思います。

3. 多久野塚古墳群……円墳と思われる四基が群集していますが、消滅したり変形したりしていますが、三基は横穴式石室である可能性が強い。石室の規模や構造、遺物については明らかでありません。

7. 岩屋寺山横穴……テント形妻入りの玄室（遺体を安置する部屋）で、長さ二米、幅一・八米、高さ一・三米を測ります。中央に溝があり、両側が台のようになっています。遺物は多数出土したと聞きますが、現在知られているのは、須恵器多数、大刀二、耳環一（銀製）、勾玉三（メノウ製、水晶製）、切子玉三（水晶製）、管玉三（碧玉製）人骨三体分です。

14. 大堀横穴群……現在八穴が確認されていますが、他にも存在するようで、三支群以上に分けられそうです。玄室の形態や規模は多様です。遺物として須恵器蓋坏・提瓶・坩蓋・耳環等がありますが、それぞれ何号穴から出土したかは明らかでありません。

17. 日ノ出林古墳……径一〇米、高さ二米の円墳で、幅一米前後の溝が周っています。内部主体は、長さ一・二米、深さ〇・一五米の土壙内に木棺が納め



地区	番号	名称	墳形	内部主体	遺物 土器	大刀	刀子	玉類	耳環	その他
横田	1	神垣内古墳群	円	?						
	2	家の上古墳	円	?						
	3	多久野塚古墳群	円?	横穴式石室?						4基群集
	4	安部富重宅上古墳	円	?						
	5	大田山古墳群	円	横穴式石室	○					2基
	6	小池古墳群	円	?						2基
	7	岩屋寺山横穴			○	○		○	○	
	8	勝田宅裏古墳	円	?						
	9	愛宕下古墳	円?	横穴式石室?	?					
	10	藤ケ瀬横穴群								2支群以上
	11	天狗松横穴群			○					数穴
	12	内田万造宅下横穴								
	13	老祖山横穴								
	14	大堀横穴群			○				○	3支群8穴以上
	15	大仙子横穴			○		○			人骨1体
	16	藤原盛行宅横古墳	?	箱式石棺	○					人骨1体
	17	日ノ出林古墳	円	木棺	○					土師器のみ
	18	手場古墳	円?	横穴式石室						
	19	白石迫古墳	円	横穴式石室	○	○				鉄滓
	20	古屋上古墳	円?	横穴式石室	○					
馬木	21	太源寺古墳	?	横穴式石室						
	22	吉ケ口古墳	円	横穴式石室						
	23	平ケ谷横穴			○					人骨2体
	24	杭木古墳	?	横穴式石室						
	25	観音原横穴群			○	○				2支群3穴以上
	26	袋尻古墳	円	横穴式石室	○					
	27	中女良木古墳	?	横穴式石室?	○			○		
	28	亀井古墳	?	横穴式石室						
	29	上市古墳	?	横穴式石室	○	○				切石
	30	中原古墳	?	横穴式石室						
	31	矢入1号墳	?	横穴式石室	○	○		○	○	
	32	矢入2号墳	円?	横穴式石室	○	○				
	33	矢入3号墳	?	横穴式石室						
	34	矢入4号墳	円?	横穴式石室	○	○				
	35	下垣内古墳	?	横穴式石室						
阿井	36	無木1号墳	円?	横穴式石室	○	○				
	37	無木2号墳	円?	横穴式石室	○	○				
	38	下阿井横穴			○	○				組合せ箱式石棺
	39	中学校農場古墳	?	横穴式石室?	○			○		
三成	40	八頭塚横穴群			○	○			○	人骨8穴以上
	41	穴観1号墳	円	横穴式石室	○					
	42	穴観2号墳	前方後方	横穴式石室						
三沢	43	林原古墳	?	?						
	44	どけや古墳	円?	?						
	45	深谷古墳	?	?						
	46	郡屋敷古墳	?	横穴式石室	○	○		○		人骨
温泉	(未発見)									
	47	尾白横穴群			○		○			
布施	48	中山古墳	?	横穴式石室?	○			○		
	49	上布施横穴群			○					3穴以上人骨
	50	穴観音古墳	円	横穴式石室						
	51	東部古墳	円?	横穴式石室						
	52	すげた横穴群			○	○		○		
	53	堂の前古墳	?	?						
	54	三出平古墳	?	?						
亀嵩	55	松尾政吉宅向横穴								
	56	琴枕古墳	円?	横穴式石室						
	57	岩屋古墳	円か方	横穴式石室						切石
	58	梅木原古墳	円?	横穴式石室						
比田	59	古市横穴			○					
	60	松本横穴			○					

第1表　古墳の概要

(番号は第2図のものと一致する)

られていたと考えられます。遺物として、周溝内より土師器椀二、墓壙に近い表土下より土師器片一が検出されました。

19. 白石迫古墳…径八米前後、高さ二米を測る円墳です。内部主体は、箱式石棺様の横穴式石室です。側壁と奥壁は扁平な切石を立て、その上に小割石を小口積みにしています。規模は全長二・九五米、幅一米、高さ一米を測ります。攪乱のため遺物は少なかったのですが、須恵器片、大刀一、鉄滓が出土しています。

29. 上市古墳…封土は完全に失われ、墳形・規模等は不明です。内部主体は横穴式石室で天井は自然石を用いていますが、側壁はやや大きな切石を二段に積んでいます。天井及び前方が失われていますが、現存長二米幅一・一米、高さ一・七米の規模をもちます。遺物として、須恵器蓋坏・瑞・提瓶・大刀が出土したといいますが、詳かではありません。

36. 無木一号墳…かなり変形していますが、径一〇米足らずの円墳と思われます。内部主体は平面「L」字状をなす横穴式石室です。玄室は各部表面を整えた割石一枚を基本とし、足らないところは小割石を補充しています。規模は長さ〇・九米幅一・九米で、横に長い。羨道（玄室に通じる道）は小割石を小口積みにしており、長さ二・六米、幅〇・九米を測ります。遺物は須恵器壺一、大刀一が知られていますが、詳細は不明です。

37. 無木二号墳…一号墳と四〇米程離れて存在します。一号墳と相似た構造ですが、石室はやや大形で袖が逆になっています。現存長四・二米、玄室長〇・九米、幅二・一米、羨道部幅一米を測ります。遺物として須恵器長頸壺二、大刀一があります。

38. 下阿井横穴…割石を組合せた箱式石棺を内蔵するテント形妻入りの玄室をもちます。規模は全長四・四米、玄室長二・六米、幅一・六米、高さ一・六米です。遺物は、須恵器蓋坏数組・壺・大刀二が知られています。

41. 穴観一号墳…若干変形していますが、径一五米、高さ三米程の円墳と思われます。内部主体は割石積みの袖無型横穴式石室（玄室と羨道の区別がつきにくい石室）で、全長六米、幅一・二米、高さ一・五米の規模をもちます。側壁はわずかに持送りがみられます。遺物は須恵器高坏片が知られるのみです。

42. 穴観二号墳…一号墳と八〇米程離れて存在します。若干削平されていますが、前方後方墳であることがわかります。復元規模は、全長二九米、後方部一辺一四・五米、前方部幅一四・五米、くびれ部幅七・二五米を測ります。墳丘の西側には後方部で幅七・二五米を測る周溝があります。内部主体は、主に割石を用いた袖無型横穴式石室ですが、天井に段を表現したり、側壁に材質の異なった切石を用いるなど、明らかに玄室と羨道を区別しています。側壁は主として長い石材を横にして整然と積み、持ち送りは見られません。石室の基底部は墳裾よりかなり低い。全長七・五米、玄室長四・三米、幅一・六米、高さは堆積土砂面より一・四米を測ります。遺物は不明です。

50 穴観音古墳…径一二米高さ三米程の円墳で、北及び西側に周溝が認められます。内部主体は割石を使用した横穴式石室です。門状の施設で玄室と羨道を区別していますが、それを除けば袖無型のものと変わりません。側壁は持送りが見られ、天井は前方ほど低くなっています。全長五・六米、玄室長二・四米、幅一・五米、高さ一・八米を測ります。遺物は明らかではありません。屋根上に立地し、草木がなければかなりの眺望が得られます。

57. 岩屋古墳…やや原形を損ねていますが、径（辺）一五米高さ三米程の円墳もしくは方墳と思われます。内部主体は、主に花崗岩質の切石を用いた全長七・三五米の横穴式石室です。玄室は、長さ二・六五米、幅二・一米、高さ一・九米を測り、各壁及び天井は切石一枚を基本に構築されています。玄門は両側に桂状石を立てて表現していますが、西側のものは側壁に組込まれていません。羨道部も表面を整えた比較的大きな石を使用しており、幅一・六米、高さ一・九米を測ります。遺物は不明です。

58. 封土はかなり流失していますが、径八米、高さ二・五米程の円墳と思われます。内部主体は箱式石棺様の横穴式石室です。奥部は各壁とも扁平な割石一枚で構築することを基本にしていますが、側壁と天井石の間に小割石、川原石を詰込んでいます。前方がやや崩れていますが、全長三・二米、幅一・〇五米、高さ一・二米を測る。遺物は明らかでありません。

むかし・いま・あす

――旧暦の正月

（今年の元旦は二月十二日）

元旦――旧暦ではほとんど深い積雪の中で迎えた。一家こぞって明けやらぬ内に起きて洗面、恵方（えほう）を拝む。新らしい手桶にシメ縄をかけ、それに若水を汲み神に供へ、続いて氏神や恵方にあたる神社に参拝。主婦は若水で雑煮の準備。新火も五ケ日はつくらず、埋め火に生シバをたいて火種をつくる。その青息い臭いと、パチパチはぜる音とは正月の気分を添える。雑煮は平餅の澄し汁で、海苔をのせ青い菜つ葉を添えたもの。煮豆などとともに神酒にそえて神棚に供へ燈明をともし家内の無事息災を

斐の上川柳会一月会員近詠抄

子の背丈伸び母の乳下へ伸び　松田中歩
猪（亥）年でもゆっくり無事にゆくときめ　松浦木公
ゆっくりとつまらぬことを言っている　児玉哲呂
年賀状未だ見ぬ孫にも投げキス　渡辺好之
ひと廻りして地球儀の元の位置　若槻白馬
住所録親しい友が又も減る　安部春恵
不況風北風と吹く十二月　横山まこと
すこやかにみんなが揃い屠蘇祝う　安部正子
「よしや」「よしや」そこまで聞いておりません　太田亀甲
青竹を踏んでひと日の終りとし　松浦亜以
着物着てハンドル握り同窓会　佐佐木千世
すこやかに庭を掃いたと便りする　真綿よし子
平和なり嫁のプランにのったふり　高木白虹
ニューリーダー自ら鷹の羽を折り　堀江孤雷軒
料理本見るだけなのに趣味といい　加納治江
水炊きのふぐにきびしい子の視線　久村美津
初詣不況退治へ願をかけ　藤原英生
サンタさんスキーくれたと得意顔　藤原のぼる

きさらぎのうた

許されてかけし眼鏡の視野のなか活字は水族館の魚の如し　常盤はるまさ
地蔵尊のみ手の甘柿うちたきみぞれまじりの時雨はしりぬ　永井弥生
あれこれと好物厨に整えて祖母は孫らが帰る日を待つ　児玉敏郎
掌合せるすべのなき娘が小春日の夢に肩もむ双手のありて　畑八重子
隣席のおとめの食ぶるみかん匂ふ列車にゆられ目つむりており　伊藤秋雨
穫れ過ぎし大根なのか山畑に置かれしままに初雪がふる　佐藤喜代子
すこやかに仰ぐ初春空青し去年に残せし悔いよぎりゆく　松浦愛子
乳離れの仔牛は今朝の積雪に曳かれてゆけり寒風の中　岡田時子
よき年を願ひて永めし福寿草黄金の花を日毎待つなり　藤原美世栄
幼児の顔ひき締めて懸命に野球試合を頼もしく見る　目黒成生
初詣で娶伊川土手を列なしてライトの明りは大社に続く　藤原信子
売らるるを怡るか牛は踏んはりて車に乗るをたぢろぎてゐる　景山悦子
暮れ早き夕べの道に会ひし友乳牛の香のはつか匂へり　野村節子
幸うすき愛ある限り明日の夢捨てずに生きるわれの連命（さだめ）か　安部夕波

祈る。一同雑煮を食べる前にその神酒をいただく。この日男は寺・代宮（よこ）家・医師宅ほか縁故深い家へ廻礼して馳走をうける。

女は回礼の来客の応接に忙し。

二日—仕事始めである。男は山入り始めとて槙の木の梢を伐り、弓なりにして家にたて、手の出始め仕事始めとして草鞋作る。

女は紙袋の三方を苧糸で縫い、白米一升・干柿・するめなどを入れて神棚に供える。子どもは書初めをする。弓と書初めはとんどにもやすのである。

三日—岩屋寺の毘沙門さんへ福もらいに参詣する。

四日—坊主正月といゝ、寺・代宮家から返礼の札配りの日。一般は回礼にまわらない。三ケ日の忙しさにこゝで一息入れる。女を休ませる知恵である。この日シメ縄をとる。坊主がこれをくぐると悪いということから。

七日—深い雪をかきわけて採取した七草を入れて、かゆや雑炊を作る。長い冬、雪の下に芽吹く草にその年の豊凶を判じ、生命の息吹きに心の躍動を覚え、ビタミンCの補給による鳥目を防ぐという経験のあらわれでもあるか。

はつはる

時雨去りいつしか薄れし虹の脚　浅野としお
返り花あざやかなればこころ憂し　糸原古志
枯れつくし落ちる実もなし峠道　岡田蹊花
いさかいし事も思出帰へり花　岡田麗水
昼街灯ともりしままに寒波来ぬ　小川あきお
雪おりて教会奉仕の小走りに　門脇花子
花鋏置けば膝より冷えの来る　加納信子
冬涛のみなと漁船の吹きだまり　高木白虹
古都の旅茶粥に一葉秋惜しむ　田辺竹野
我が庭の花暦違はず実南天　中沢斐水
池の底沈む枯葉の石を抱く　新出谷一華
縁に這う余命かこつや冬の蝶　錦織富江
雪起しの夜陰とどろに山居住　藤原樵夫
大根抜く背を渡り行く迷い蝶　峰石美代子
大夕映湖岸に寄りぬ浮寝鳥　渡部夕峰

九日—山の神が木の数を調べる日で、この日に会うと死ぬといって山にはゆかぬ。炭焼連中は酒を窯に供えて酒宴を楽しむ。

十一日—田打正月、主人が毎年一定の田へゆき、恵方に向って「一鍬に千石、二タ鍬に万石、三鍬に数知らず」と唱えながら土を三べん掘おこし、その中央へ用意した小松をたてるなどして御神酒を注ぎ御洗米を供えて豊作を祈る。この日はそのほかいろ〳〵の行事がある。

十五日—とんどさん、今日では昔の習慣が続々復活して年毎に賑やかになる。

二十日—この日から麦飯に切りかえ、元旦からの米飯をやめる。

二十五日—全部落の戸主が当家に集って村方の締合いの協議をする。組内にて不都合を働いたものを吟味する日。かっては部落民の白粛自戒には深刻過ぎるほどの効果があった。隣家が本人に代って酒肴を持参して部落へわびを入れ、将来を保障して、「村はぶき」を解除してもらへる道もあった。郡内で戦後三十年代まで、この遺風のあったところもあった。昭和の初年私はこのことをこの目で見たことがある。（由来も書いて今後連載）

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 95 号
（3月号）
昭和58. 3. 5
奥出雲編集集団

資料紹介

日焼田遺跡出土の土器

東森市良

日焼田遺跡は横田町稲原の横田中学校へののぼり口の丘陵傾斜面にあり、以前杉原清一氏が調査され、本紙に紹介したものである。その際杉原氏から横田中学校蔵品の中に弥生時代中期の土器のあることを教示された。

今回紹介しようとする土器はほぼ杉原氏の調査と前後して採集されたもので採集者は当時横田中学校二年生在学中であった立花浩二君（現横田高校二年生）である。

立花君の手記によって採集時の状況をみると、

「中学二年生の頃の事です。私が発掘（採集）した場合は地面から土器片を掘り出すというよりも、むしろ工事によって削られた所の斜面から削り出したという方が正しいと思います。竹べらやスコップを使って一回の発掘に一五センチから二〇センチ程に土を削りました。そこの土は全て黒土でした。私が復元しようとしていたものも、もちろんその黒土から出土したものです。出土した土器の状態は黒土が付着し、草木の根が全体にからみついていて、土器片の形状、色、同種の土器片の有無などは全く確認出来ませんでした。それ等は幾枚か重なるようになっていたり、一枚一枚であったりしました。特に重なっていた土器片と土器片の間には、土がほとんど入り込んでなく、わずかに草木の根が入っていた程でした」。

立花君の説明によると採集地点は杉原氏発掘地点よりも道路ぞいで現在宅地化されている部分の崖面先端部にあたり、高さも杉原氏調査地点より低いようである。崖面における落ち込みの状態など明確さを欠くが、現場の状況よりするとカットされた竪穴住居の中の黒土に土器片は含まれていたとみて良い。

いまその採集品をみると三個体の甕形土器が復元出来る。

その(1)は口径一四センチ、胴部最大径一六、三センチの薄手の作りの甕で、器の厚さは〇・三センチである。く字状口縁をなし、口縁端内面をやゝくり上げにしている。頸部の屈折部分は、内外面とも一線を画することが出来る。器の調整は内外面とも細いハケ目仕上げで、内面頸部下一センチの部分をヘラなでしている。また外面も約二センチはヘラによる横なでの下をハケ目調整し、胴部最大径以下には縦方向のヘラなでが部分的にみられる。焼成は良好で胎土中に砂粒を含み、褐色を呈し、器肉が薄いせいか、比較的軽量である。なお外面にはススが附着している。

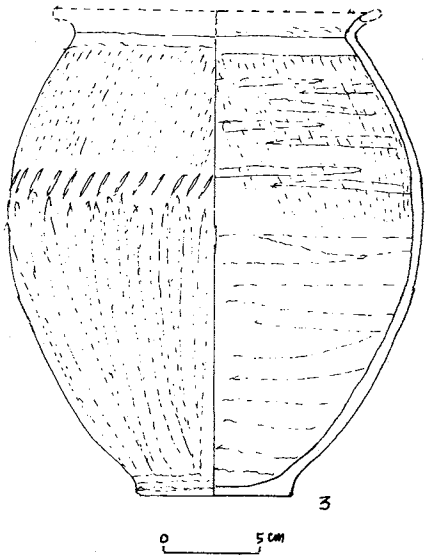
その(2)は口径二四・五センチ胴部最大径二七・四センチの甕形土器で、く字状口縁をなし、口縁端がやゝつまみ上げ状になる。(1)に比してやゝ器の厚さはあつく部分的には〇・五センチをはかる。調整は外面は胴部に縦方面のヘラなでが認められ、内面は頸部二センチ以下をあらいはけ目仕上げののち部分的に横方向のヘラなでを行っている。焼成は良く、外面は褐色、内面は明灰色で、外面にススが附着している。(1)に比してがっちりした作りである。

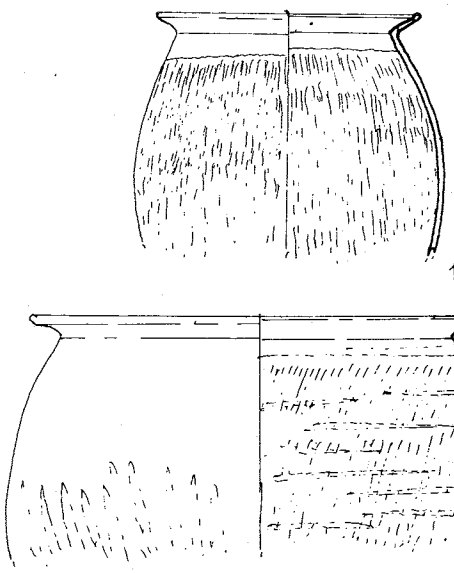
その(3)は口縁部を欠失しているが、全器物をうかがうことの出来る甕形土器で復元口径一七・五センチ、器高二五センチ、最大径二二センチ、底径八センチをはかる。く字状口縁で胴が張り、ふくらみを持ちながら底部にいたるもので例品のようにしぼみがない。器肉は〇・七センチでしっかりしており、三個体の中では一番がっちりしている。調整は外面は頸部約一センチ下からととのったハケ目仕上で胴部最大径以下は、はっきりとした縦方向のヘラ削り仕上げが認められる。内面は頸部約一・五センチを横方向のヘラなでとし、以下をハケによって調整し、その上を横方向のヘラなでとしている。なでは胴部中央までは、下のハケ目が見えるほどまばらであるが、胴下半部は見事に横なでされている。なお胴最大径部外面に斜方向のヘラ刻み文がめぐっている。焼成は良好かつ硬質で、胎土中に砂粒を含み表面茶褐色、内面明灰色であり、表面にススが附着していることは前二者と同じである。

この他にやゝ時期が降ると思われる胴部片その他があるが同時期のものとしては以上三箇体をかぞえる。

これ等の土器をみると(3)の下半部など、海岸部のそれとはやや異るものの、手法においては共通した面も多く、弥生時代中期中葉に当ると思われる。類品を海岸部に求めれば出雲市天神遺跡などをあげることが出来よう。これは山陰の弥生土器編年の上ではⅣ期に当っており、奥出雲においても同様な弥生文化の展開があったことを示している。

なおこれらの土器が、日焼田





遺跡の居住開始の時期を示す点でも注目され、弥生時代中期中葉以降連続的に古墳時代初頭＝鍵尾Ⅰ・的場期まで生活が展開したものとして興味のあるところである。日焼田遺跡出土の土器の量は多く、今後整理される中で生活の様相は勿論、奥出雲の弥生式土器の編年に役立つことを願っている。

なお資料紹介に当って高橋一郎氏、発見者の立花浩二君に謝意を表する次第である。

（県立横田高等学校教諭）

奥出雲　56号（54年12月号）の「奥出雲の古代」とあわせお読み下さい。

横田庄の中世近世を貫いている

「惣と一揆の行動」序論（5）

——中世三沢氏時代②

譲状問題の解決

小池氏の惣領と弟との間に先代の譲状についての争いがあった。兄三郎左衛門は弟左衛門四郎に、八幡宮の諸社役の半分と免地三町歩を譲り渡さねばならなかったのに、それを履行しなかったからである。このことが惣裁判にかゝり、そこで譲状の通り履行すべきことが結論となったのである。御所より横田庄代官として、祭祀権をもつ小池氏と徴税権を含む荘務を握る安部氏との、監督をまかされていた三沢対島守為在は、兄の大催三郎左衛門に譲状の通り、永代にわたり弟に諸社役の半分と、免地三町歩を譲り渡し、今後押領することがないようにという、厳しい書状を渡し、弟の神子別当左衛門四郎へは、別当職として諸社役半分と知行地は間違いないものである。惣裁判や、代官対島守の判形と、その代人の判形によって、これは末代までの証拠となるものであるとの書状を渡した。

大催職と神子別当職がこゝで両立したもののようであるが、この職分の内容については明らかではない。神事をとり行うものが神子別当で、大催は伝統の勅使代参という最高の祭祀権をもったもののようである。すなわち小池氏の記録（久国慶長記）によれば、それより72年後の享禄2年（1529）に、樋野口村に住んでいた田中弥平次の二男次良兵衛を馬場村に移り住まわせ、神社に仕えさせた。この年の八幡宮の棟礼には、大催治良右衛門・神主田中和泉守となっている。神子別当である弟のことは明らかではないから、こゝで専任の神主ができて、別当職の内容を引継いだとも考えられる。

あとで述べるが、免地3町歩の安堵についてみると、当時は所有地の半分が免地となったという例もあることからすると、二人は各々6町歩の所有地をもったことになる。当時の三沢氏家臣の給帳と比較すると、重臣家老級となる。それも土地所有高であるから、横田庄内の土豪として重きをなしていたことがわかる。

大催職の確認

このことから20年たった文明8年（1476）の三沢氏の横田庄における代官中村為磐他14名の連判状がある。それは火災によって焼失した大催職であることの証拠を、これによって地下衆に

日々の断章

雪しまく道歩みつつはてしなき暗き洞穴に吸わるるごとし　常盤はるまさ
底ひより湧きおこる如き山鳴りに雪の生活を言ひて別れき　永井弥生
春蘭の根をすりつぶしあかぎれに塗り居たる亡父冬くれば憶ふ　伊藤萩雨
いきいきと吾の心を覗くかに沈丁の蕾日毎ふくらむ　畑八重子
お風呂場のくもるガラスに名前書き春待つ孫とわれのしあわせ　佐藤喜代子
明日雪の予報を聞きて黄昏るる畑に冬菜を摘みて帰りぬ　岡田時子
粉雪が横なぐり舞う登校路体斜めに子どもらの列　児玉敏郎
かえり咲くぼけの一輪いとおしくさらぎの部屋に夫と楽しむ　藤原美世栄
はろけくも瀬戸の島々見渡して芙美子の詩碑の位置に吾佇つ　景山悦子
戦ひに勝たんと翼に鉄うちし昏き日憶ひマーチ聞きおり　松浦愛子
今日もまた一日終りて床につく明日の予定を思ひ描きて　目黒成生
悲しみはかくす術なき朝の視野奥津城への径雨にけぶりぬ　宮廻愛子
暮れ早き夕べの道に会ひし友乳牛の香のはつか匂へり　野村節子
妻逝きし家を閉ざして旅に出づ夕べは故郷の夢を見るなり　安部夕波

斐の上川柳会二月会員近詠抄

葬式をジャズでやっては泣いている（ロイゼームス）　児玉哲呂
猪突する気配へ齢が釘をさし　松浦木公
小さい葉っぱでも裏あって表あり　加納治江
雪までも不況のためか降って来ず　横山まこと
新年に係の歳聞く老いの連れ　藤原英生
収賄も汚職も国の為という　松浦亜以
引き出しに貰ったま、の封のかね　太田亀甲
我が旅路主権をゆずり道を変え　安部正子
もう一度振り返って見よう忘れ物　若槻白馬
逆夢か真夢か気になる夢をみる　久村美津
誕生日梅一輪の祝い咲き　佐佐木千世
福寿草縁起かついで咲き揃い　真綿よし子
縁談は降る程あって女老け　渡辺好三
マネキンのくやし涙は胸で涸れ　松田牛歩
齢重ね無理を合はせるこつ覚え　高木白虹
耐えることに馴れて女の狭い視野　藤原千代子
楢山へ行くにもこれから旅費が要り　堀江孤雷軒
松飾り下して漸く年の計　安部春恵
政治家もふところ具合で風見鶏　目黒申楽
まだ来ない返事の真意はかりかね　藤原のぼる

対する証拠とするというものである。この年八幡宮は創建以来5度目の遷宮が行われているから、そのためのものであったことがわかる。

享禄4年（1531）はそれからさらに55年たった時代であるが、尼子経久が横田藤ケ瀬城を攻めている。その時城主三沢為国より籠城のために年貢協力を大催は要請され、協力し感状をうけた。しかし藤ケ瀬城は落ち為国は捕らえられ富田に幽閉され、のち塩谷で斬られた。その後横田は三沢城主三沢為幸の代官である石原伊賀守義扶が入り、この時にも小池氏は大催職の安堵状をもらっている。

大催の対外的地位

藤ケ瀬城は落城より前の永正6年に三沢遠江守為忠によって築城され、為忠はこゝに移って御所の代官としての支配を強めた。

仝11年（1514）尼子経久は為忠の強大になることを恐れこゝを攻めたが攻めあぐみ、これに加勢した岩屋寺に火を放って引き揚げた。その復旧のため住職快円は天文年間（1532～1555）20年の年月を費した。快円のこの復興記録「快円日記」の中の寄進者名は、尼子三沢両氏の一門と重臣のみで、唯一人大催の名がある。

また仏像の新造立や修覆も武将の寄進で行われているが、ここにも唯一人大催が加わっている。それが根本堂の本尊十一面観音（光背の裏天文11年修覆大催とある）であることは、大催の立場の重さをあらわしている。

こうした大催の地位と実力をしめすものは多いので、さらに書きそえると、

さきの永正11年焼失後の仝18年、為忠の子為国が岩屋寺本堂復興のために任命した作事奉行（のちの普請のこと、このころは作事といい、普請は土木事業のことを言った）の三人の中の二人は家臣の重臣であり、ほかの一人は大催であった。

天文年間、横田の町づくりの折再興された伊賀多気神社の棟札には大催の名があり、その後も近世末まで続いてのっている。

天文13年には大催六郎左衛門は横田庄六ケ村の村役人となり、神事以外にもかゝわりをふたたびもちはじめた。天正15年（1587）三沢14代為虎は大催職永代・横田庄六ケ村の小役人を安堵した。全17年御所御料は終止符を打ち毛利領となった。三沢氏は安芸の毛利城下に移った。小池久国は備後高野山まで送った。

それからは毛利氏の使いに同伴して安芸吉田城へゆき、横田庄内長役を仰せつけられ、たたら製鉄関係の諸役の支配も仰せつけられた。（史談会　高橋一郎）

むかし・いま・あす②

節分と旧暦二月

節分（せつぶん・せちぶん）

もとは季節のうつりかわる時、立春・立夏・立秋・立冬のことをいったものであるが、特に寒の明ける立春の前日、冬から春への節目をいうようになった。

今は新暦で日を定めるので正月行事と関係がないように思われるが、旧暦の昔は元旦から七草の間、時には少し下った日に位置していたので、年とりともいい、元旦に半分年をとり、残り半分を節分にとった。そして節分の年とりには、サンショの木で作った箸で正月と同じ料理をたべ、ところによっては、こんにゃく、そばを食べて、食物

前号訂正（脱落）3頁3段終、58梅・木原・古墳

とともに飲みこんだ砂をおろした。

これは転じて一切の毒気を下すとした。

豆撒きの行事は、追儺といって、宮中行事の一つで、1300年前の文武天皇のころ、古い中国で始まったものを伝えたもので、旧暦の大晦日の夜に行われた。舎人が鬼に扮装した者を大儺といい、それに20人の童子の小儺が従って、内裏の四門をめぐって逃げまどい、殿上人たちは桃の弓、葦の矢でそれを射た。それが後世社寺、民間にも伝ったものである。

鬼は一方では桃太郎に宝物を、一寸法師には打ち出のこづちをもたらすものであったが、仏教思想の地獄の鬼説などの影響もあって、逆な立場に立たされ、追出されるものとなったという。のち福をもたらすエビス・大黒の信仰が普及すると、これと組合わされた。近世になると民間では弓矢の使用が禁止されていたので、これを大豆にかえて節分の夜に行うようになった。

いった大豆を「おにうちまめ」といい、一升ますに入れて神棚に供え、夕方「福は内、鬼は外」いち豆を入れて宮に参り、大きい福を入れて帰るという位になって除かれるとされるようになり、年の数だけ撒いた豆をたべねばという習慣も加った。さらに柊（ひいらぎ）の枝、あるいは葉をさした竹串に、鰯の頭を焼いたものをさしたものを戸口に立てる（ヤークサシ）習慣も加わり、豆打ちをぬけて家に入ろうってしまい、戸口に竹串を立てることなどはほとんど行われない。今年　破魔矢を神社でうけるということもできるようになった。

暦の上より、節分という言葉以上に、春立つというほのぼのとした季節感を与え、邪気を払いるのである。古代人からみれば極楽と思える現代でも、人間はやはりより幸い——健康と境遇——を求める志向の強いものとみえる。

自然のまにまに農耕を営んでいた大昔の人々は、節分は農耕の準備への節であった。季節による自然の恵はもとより、ものすべてに精霊を感得い、その恵、加護に感謝し励んだその心は素直であり豊かであった。

二月一日　ひてい正月

「ひてい」は方言で終日という意味である。こゝでいよいよ冬の雪の下での、長かった正月に別れをつげるのである。

二月八日　針供養

この日は針を使用せず、折れたり曲ったりした針を供養し感謝する日とされた。ものに心の宿るという昔の人の考えのあらわれである。今日比べられない程、縫うため繕うために、女は心をくだいた。針はその最も大切なものであった。古針を豆腐やこんにゃくにさしたり、紙に包んだりして流すところもあった。ところによっては十二月八日にするところもあった。

初午（はつうま）

陰暦二月最初の午の日（今年は3月19日）であるが、新暦で行うところが多い。稲荷の縁日で、和銅四年（711）二月の初午の日、京都伏見稲荷の祭神が、山上に降ったのを帰化人秦公伊呂具（はたのきみいろぐ）が祀ったのがはじめという（奥出雲48号参照）。田の神の祭りとこの信仰が結んで全国にひろがった。一方商売繁昌の神さらに産業とも結びつく神となった。昔は午の日が早いと火事が多いと、つゝしみ深くしたという。この日をいりものの初めの日とした。

この地方ではこの信仰は薄かったようで、特殊な行事もない。

雲陽誌（享保2年1,717刊、出雲国の地誌中心の書）によると、松江1、大原1、八束2、簸川3、平田3、仁多3、の稲荷社の小祠があった。仁多郡の稲田のは里田、上阿井、稲田のもので、は土居安部氏が15世紀に伏見稲荷を勧請したものである（奥出雲34・63号参照）。八代や大市のものは極めて新らしい。

しばぐり句会きさらぎ抄

凍蝶の凍湖を背にし身じろかす　浅野　としお
黄な花の吹けば春立つ奥出雲　糸原　古志
大人靴履き豆撒きへ孫跳き来　岡田　蹊花
暮早し終着駅の土地訛　岡田　麗水
寒の雨孫と湯舟に数数う　小川　あきら
白鳥の群れてゆたかな湖となる　柏木　侑
丹精の鉢置き忘れ霜枯れぬ　加納　信子
藁きぬた打つ音山家の春遅し　高木　白虹
一葉の賀状に絆つながりぬ　田辺　竹野
鱸旬殿お好みの奉書蒸し　中澤　斐水
冬の海ロマンの岸辺人ぞなき　中田　巣鶴
ふと目覚む寒月天にはまりけり　新出谷　一華
手を振りて別れはしばし黒セーター　錦織　富江
新雪に杖の穴引く二度童子　藤原　樵夫
押しあげて紅のぞかせし寒椿　峯石　美代子
想い出を綴る窓辺に雪の積む　渡部　夕峰

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第96号
（4月号）
昭和58. 4. 2
奥出雲編集集団

奥出雲の古代社会③

—古墳文化と『出雲国風土記』を手掛りにして—

中浜久喜
（兵庫県相生市在住）

四、古墳文化の特色

前節で記した六〇カ所が当地域内で知られている古墳です。（つい最近発見された古墳も一、二あるようですが詳細不明のため除きます）前期古墳（四、五世紀に造営）は発見されておらず、未掘墳を除けば全て後期古墳（六、七世紀に造営）です。しかも、大半が横穴式石室を内部主体とした古墳か横穴墓で占められています。

横穴墓の形態については十分明らかにできていませんが、床面縦長でテント形妻入りのものが主流を占めています。一方横穴式石室の形態は、割石や自然石を使用した袖無型のものが主流を占めますが多様で、私は次の六類に分けることができると思います。

A類…全長三・五米～七・五米で、主として割石、自然石を用いたいわゆる袖無型のものです。

B類…A類の石室に門状の玄門施設を加えたものです。

C類…全長三～四米で、箱式石棺、或いは石槨様を呈しています。側壁は扁平な割石または切石を立て、その上に小割石や小川原石を詰め込んでいます。

D類…全長七・五米で、他類と比べると抜群の規模を誇っています。柱状石を立てて玄門を表わし、玄室は各部切石一枚を基本としています。羨道も大形石材を用いています。

E類…D類ほどの規模はありませんが、比較的大きな切石を組み合わせて構築しています。残念ながら、前方及び天井部が破壊され詳細はわかりません。

F類…全長四米前後で、平面「L」字状をなし、玄室は横に長い。各壁とも表面を整えた割石一枚を基底にすえ、足らない所や羨道は小割石を小口積みにしています。

墳形は、前方後方墳一例と円墳、方墳の判断のつきにくい一例を除くと、全て径一五米以下の小規模な円墳と思われます。

副葬品もこれといった特徴はありませんが、馬具や農具が発見されていないこと、武具でも鉄鏃が未発見なのに対して大刀（木装・直刀）が一古墳に一～二本と一般的にみられることを指摘しておきましょう。

以下、各地区別に特色をまとめておきたいと思います。

(一) 横田地区

他地区の古墳が、未掘墳を除いてほとんどが横穴式石室を有する古墳か横穴墓であるのに対し、当地区では、木棺や箱式石棺を内部主体とする古墳（日ノ出林古墳・藤原盛行宅横古墳）が認められます。これらの古墳は、横穴式石室や横穴が普及する以前に造営されたものと考えられ、その時期は六世紀前半～六世紀第三四半期頃と思われます。

次に、後期通有の内部構造（横穴式石室・横穴）をもつものについてみると、横穴墓が多く、逆に横穴式石室墳の少ないことが指摘できます。しかも、横穴墓は群集するものが多い。また当地区に限ってみると、北西部、即ち斐伊川本流と下横田川の合流地点付近に集中してみられます。中には、岩屋寺山横穴のように副葬品の比較的豊富なものもあります。当地区の横穴墓の造営は六世紀第三四半期頃からで、奥出雲における横穴墓、横穴式石室墳の中で最も早い。一方横穴式石室を有する古墳は、ほとんどが散在的に分布していますが、一部群集形態をとるもの（多久野塚古墳群）もあります。石室は、小形で箱式石棺様のC類が主流をなしており（大田山古墳群・手場古墳・白石迫古墳）、その造営時期は六世紀第四四半期以降と考えられます。

(二) 馬木地区

横穴式石室墳が最も集中しています。小谷水田を単位として、一～四基ずつまとまって分布しますが、群集せず散在的です。石室形態は、側壁に切石を使用したE類の一例（上市古墳）を除いて、中国山間部に普遍的にみられる割石積み袖無型のA類です。造営時期は、横穴墓も含めてほとんどが六世紀第四四半期以降と思われます。

(三) 阿井地区

耕地面積と比較して古墳は少ない。下阿井横穴は、石棺内蔵例として当地域唯一のものです。また無木一号墳・二号墳は、F類と呼ぶ平面「L」字形の特異な石室をもち、周辺地方においても例をみません。造営時期は早くとも六世紀第四四半期以降とみられます。

(四) 三成・三沢地区

奥出雲唯一の前方後方墳である穴観二号墳が存在します。墳丘規模はそれほど大きくありませんが、端正な形状を示しています。石室はA類ですが、石材の加工、構築に特徴が認められます。他の古墳（穴観一号墳・郡屋敷古墳）の石室もA類です

が、その規模は相対的に大きい。造営時期はいずれも六世紀第四四半期以後とみられます。

(五) 温泉地区

既に記したように、古墳は確認されていません。

(六) 布施地区

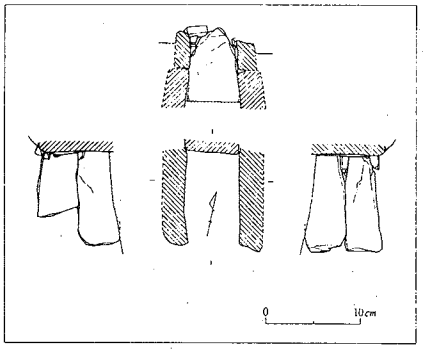
注目すべき古墳として穴観音古墳があげられます。石室形態はB類で、玄門施設を有する割石積みのものです。造営時期は、いずれも六世紀第四四半期以降と考えられます。

(七) 亀嵩地区

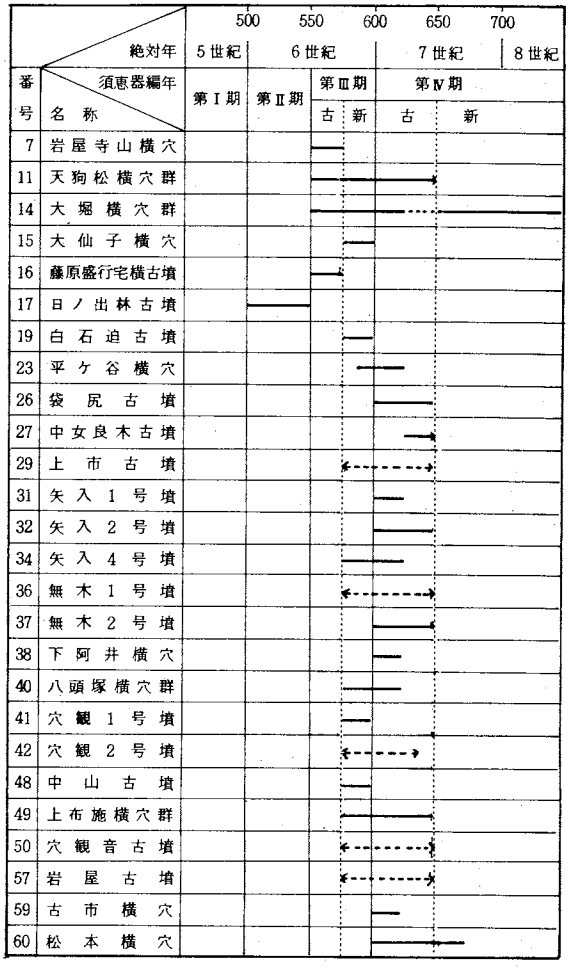
古墳は少ないが、石室形態は多様です。岩屋古墳の石室は、切石を使用したD類と呼んでいるもので、その規模は当地域内で群を抜いており、加工、構築技術も注目に値します。造営時期は六世紀第四四半期以降、とりわけ七世紀代と思われます。

(八) 比田地区

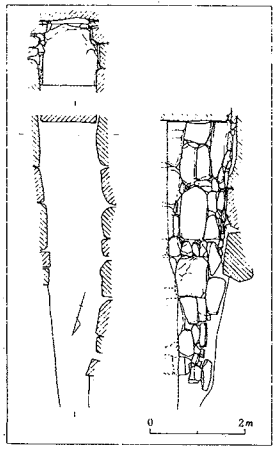
横穴墓が二穴知られるのみです。後世の開墾とされる棚田が多く、その様相は首肯できます。



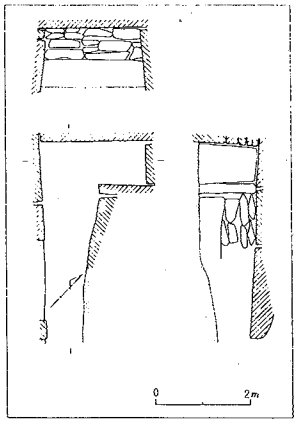
第4図　上市古墳石室実測図（E類）



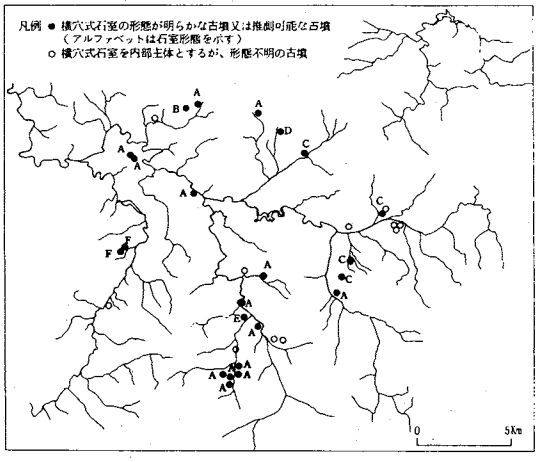
第2表　出土土器による古墳の造営時期
（←------→は土器以外の要素より推定）



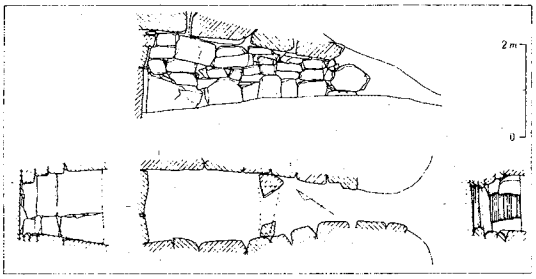
第6図　穴観1号墳石室実測図（A類）



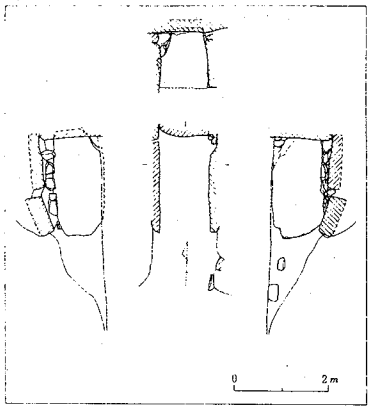
第5図　無木2号墳石室略測図（F類）



第3図　横穴式石室の形態別分布



第７図　穴観音古墳石室実測図（Ｂ類）



第８図　梅木原古墳石室実測図（Ｃ類）

むかし・いま・あす③

―旧暦三月・ひなまつり

三月といえば、春の彼岸とそれから始まる札打ちと桃の節句である。

五節句とは正月七日（人日）・三月三日（上巳）・五月五日（端午）七月七日（七夕）・九月九日（重陽）

彼　岸　は一七日の間、墓と寺まいりによって祖先の霊をなぐさめる家庭行事である。彼岸すぎ暖かくなると、

札打ち　がはじまる。それまでの一年間になくなった幼な子、若者、そして家族の冥福を祈るため、病気平癒を祈るため、報賽（祈願成就の礼）のため礼打ちち巡礼に出る。出雲札は出雲の仁多郡を除くほぼ全域にわたって、三十三カ所の観音堂を廻った。横田ではこゝだけの横田札があり、ひろく知られている。前者の一番は大社町の長谷寺、最後が玉湯の岩屋寺で、四、五日から一週間かけて、二、三人から四、五人で杖をつき鈴を鳴らして歩いた。札所の近くでは縁台を出し茶菓の接待もし、宿もしてくれた。それが仏への供養となると信じていた。いわゆる善根宿である。横田札の一番は岩屋寺、終りは晋叟寺で、この札打ちは彼岸の中日をはさんで、二日間で廻るのを常とした。

最近は出雲札もバスや自家用車でぐるりと廻るのが盛んとなった。歩くも大切な修業・健康法としたのは昔の人の心。

桃の節句

陰暦三月最初の巳の日（上巳）であったのが三日となる。

今日の人は切実に必要とせず、宣伝であふられるから、雛人形を買わぬ親は子どもをかわいがらぬ親といわんばかりに売込まれるからとするものも多い。

冬から春へのはじめの濃くなったこの季節に、紙や布で小さい人形、いわゆる形代としてヒナをつくって、これに一切の身にふりかゝる災厄を負わせ、川や海に流したり、祭壇に置いてしあわせを祈ったのがおこりで、農耕労働の開始にあたっての切実な行事でもあった。今も鳥取にのこる流しビナは、その素朴なものの名残りである。流しビナの役目が女の役であったので、桃の節句が女の行事にもなったという。

こうした古い行事も中世になると、人形をつくることが発達してきて、この人形を贈りあうような習慣が生まれたという。近世の徳川時代に入ると、さらに精巧な華麗な人形づくりの技法が進み、その上、さまざまの調度品のヒナ形もあわせてつくって、貝や菓子を供えることが、武家や豪商の家で行われるようになった。それが江戸時代の末になると、今日のような形式となった。

すなわち当時の公家・宮廷は今と違って、一般の人ののぞきがたい、九重の雲の別世界であったから、それへの一種のあこがれをよせ

斐之上川柳

針を持つ業で親子が支えられ　安部春恵
そんな筈無いのにこんなことになり　松浦木公
酒なし日きめたとたんに客のくる　児玉哲呂
勉強を見てやる親が教えられ　目黒申楽
さゞ波に夕日の映える旅の宿　久村美津
五十年やっと世帯に花が咲き　渡辺好之
まめですかふるさと恋しい人に会い　松浦亜以
突撃のチャンスを狙う猫の目　若槻白馬
警察官は大きに／／でポケットへ　太田亀甲
オイハイで毎日無事な老夫婦　藤原英生
ランドセルピカ一年はおいまわす　真綿よし子
除雪車にエンジンかかる雪が降り　佐佐木千世
寒ぼたんベトナム難民今朝のテレビ　石原世以
荒海へ小舟で舟出の子を祝い　横山まこと
なつかしい友と相引き温泉（ゆ）にひたり　安部正子
凍傷に愚痴もこぼさぬ嫁不憫　藤原のぼる
お迎えの少女笑顔にふっとなり　藤原千代子
意識不明永劫の闇のぞき見る　堀江孤雷軒
受験児がうなゞに重い母の日々　高木白虹
世が荒れて修身の本を想いだし　松田牛歩

水ぬるむ季節

肉親を名乗れぬことも記事となり三十八年はあまりに長し　常盤はるまさ
会長の重責果たして黄昏を急ぐ道辺に白梅匂ふ　野村節子
祖の恩を子孫に還さんと檜枝打つ百年後の美林を信じて　伊藤萩雨
いきいきと吾の心を覗くかに沈丁の蕾日毎ふくらむ　畑八重子
厨辺の枯れたる葱の春待てりナイロン冠りて黄色く芽吹く　岡田時子
福寿草吉報の証かほっこりと咲きたる今日に孫の生るる　景山悦子
毎週に峠越し来る豆腐屋は春めきしことを挨拶とせり　佐藤喜代子
ふいごの音響けばたたらの火ははぜて昔ながらの焔揺がす　児玉敏郎
寂光土へ吾に先逝く孫智栄子墓石に刻む滴四才と　藤原美世栄
毎日が追わるるごとく心せわし豊かな生活あるはいつの日　目黒成生
教え子に刃を向けし教育のゆがみ深まる日々におののく　松浦愛子
大勢の友に送られ一人発つ息子送れば風花の舞ふ　藤原信子
午後よりの心の重荷は処理できず不眠の朝に胃の痛みあり　宮廻愛子
足うらにやさしく応へる畦道に指先ほどのふきのとう萌ゆ　永井弥生
傷心の愁ひひとどき忘れむと夜の酒場ののれん潜りぬ　安部夕波

しばぐり句会三月抄

雪掻くに腹空しやと通り去る　藤原樵夫
ブランコにゆれ合う孫に日脚伸ぶ　門脇花子
残留の孤児は悲しも春立ちぬ　加納信子
紅梅のしだれて丸く納まりぬ　峯石美代子
降りしきる春雨屋根に音こぼす　錦織富江
春昼やたがゆるませてたばこの輪　柏木侑
日脚伸ぶ地蔵の温り掌に伝う　新出谷一華
先考の齢も過ぎて蕗の薹　中沢斐水
藪椿春待ちかねてほころびぬ　田辺竹野
春の花活ける教師の背の温む　渡部夕峰
梅日和獣医は孕み確と告ぐ　岡田蹊花
軒つら、落ちる運命の刻に耐ゆ　岡田麗水
丸い背に陽差しのこぼる種選み　高木白虹
地に浸みし梅が香洗う今朝の雨　浅野としお
日脚伸ぶ嬰の瞳空ろや小さき拳　小川あきお

るものもあり、内裏雛、官女、五人ばやしなどを、赤いもうせんの雛段に飾る雛人形となり、今日の雛祭となった。しかし、それも武家、京、大阪、江戸の豪商の間でひろまったものであった。

桃の節句の宮中での節会は、平安時代から曲水の宴がはられていた。清涼殿の庭に曲折した流れを設けて酒杯を浮べて流し、その岸辺に文人たちが列席して、自分の前を杯が流れて、通りすぎるまでに詩や歌を作り、その杯をひろいあげて酒杯の酒を飲むというものであった。

武家豪商の間に今日の雛壇形式がひろまるころ、庶民の間では、やはり人形のつくり方の進歩から、一度きりでない人形が流行しだし、泥天神がつくられはじめた。春の季節となると庶民は天つ神の降臨によって、こうなるのだとも思い、その降臨を願うところから、テンジンという言葉が出来、それは菅原道真とされ、人形つくりの普及は「流さぬ」泥天神となった。庶民から宮廷人となり、その上に学問の神様と仰がれた菅公は、武家豪商が宮廷人にあこがれるのに対する、庶民のあこがれとなった。

出雲地方でも、天神さんは女の子のためよりも、男の子のために飾るというのが一般的であった。古来からのひな祭りはねらいが大きく変ってしまった。そうして大正ごろまでは次のようであった。男の子が生れると、初節句に母の里などから天神さんが贈られる。それを前の月の廿五日に出して飾る。床の間に絵図を掛け、その前にまず父親のを飾り、長男、次男と家族の序列によって飾る。三日がすめば片づけて終る。梅やねこ柳を飾り、いり米（モチ米、モチ花、唐キビなどをいってまぜたもの）や、菱形に切った、よもぎ餅と白餅を供えた。それらを節句が終ると重箱に入れて、新嫁の里などに配った。天神さんも持主が死ぬると、荒神さん、あるいは氏神さんの本殿の床下などに納めた。生きている間は大切にし、死ねば立派なものでも手放すというのは、古いヒナ人形信仰の名残りである。

昭和に入って、ボツボツ今日の雛壇が地方にも流行して来たが、やはり子ども中心の思想の強くなった戦後普及しはじめ、高度経済成長下、爆発的にひろまった。

大神楽

このころになると、伊勢の大神楽がのどかな笛の音とともに訪れた。大神楽はコマ廻しや、操り人形などと同様に一種の興行物で、本神楽は一日かかるが料金は米一俵（半神楽は時間も料金も半分）で、古くはタイケ（素封家）の気張り（おごり）でやったという。私の知るころは、世話人が有志の人から集めてやった半神楽が多く、こっそり見た記憶が多い。大神楽は獅子の修祓に始まり、傘廻し、茶碗つぎ、手まりや剣の乱どり、獅子まいつき獅子の嫁入りなど、手に汗を握るハラハラする場面もあれば、太夫と道化のこっけい問答に腹の皮をよじらせる場面もあって、折からの春光のもと、心から解放気分にひたったものである。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六—一／二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 97 号
（5月号）
昭和58. 5. 7
奥出雲編集集団

奥出雲の古代社会④

—古墳文化と『出雲国風土記』を手掛りにして—

中浜久喜
（兵庫県相生市在住）

五、古代社会の展開

ここでは、先学の明らかにしてきたことを基礎に、これまで記してきた古墳文化の在り方と『風土記』を手掛りにして、奥出雲の古代社会像を素描しようと思います。

弥生時代中期（紀元前後）以降、当地域でも生産力の飛躍的発展をみました。とりわけ横田地区は、地理的環境と遺跡の様相から水田耕作に適した土地柄を窺わせます。南及び東方から発する多くの小水系は斐伊川本流に合流し、横田盆地を構成しています。このことは、農業共同体ともいうべき結合（開墾と水利土木事業を基軸とした地縁的編成）を強め、より生産を高める要因になったと考えられます。横田八幡宮附近出土の銅剣は、この共同体の農耕祭祀に使われたのでしょう。古墳時代前期～後期初頭（四世紀～六世紀初頭）の首長墓は未発見ですが、従来の農業共同体を基礎に引き続き独自の政治的社会が成立、発展していったであろうことは想像に難くありません。一方他地区では、横田地区のような農業共同体的結合を可能にする地理的条件はなく、その痕跡も見当りません。恐らく小規模な谷水田を基盤に徐々に生産を高めていったのでしょう。

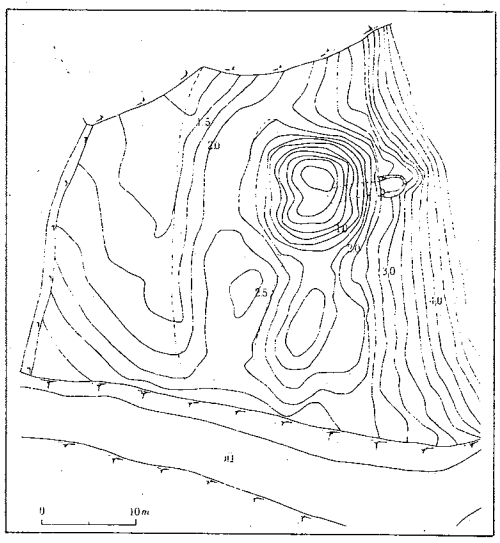
生産力の発展は、やがて農業共同体の分解と階層分化を導きます。家父長を中心とした奴隷をも含む大家族（家父長制的世帯共同体）の成立は、新しい古墳文化を生むことになりました。横田地区に最初に現われた木棺及び箱式石棺を内部主体とした小規模な古墳（日ノ出林古墳・藤原盛行宅横古墳）は、その端緒とみることができます。さらに横田地区では、平原部に遅れることなく横穴墓が造営されます。六世紀の第三四半期頃と思われます。ただ、横穴式石室墳が同時に現われなかったことは注目してよい。

ところが、六世紀も第四四半期になると様相は一変します。他地区でも横穴墓、横穴式石室墳の造営が始まるのです。そして、内容的に横田地区を凌駕する地区もあり、地区間にかなりの不均等が目立つようになってきます。

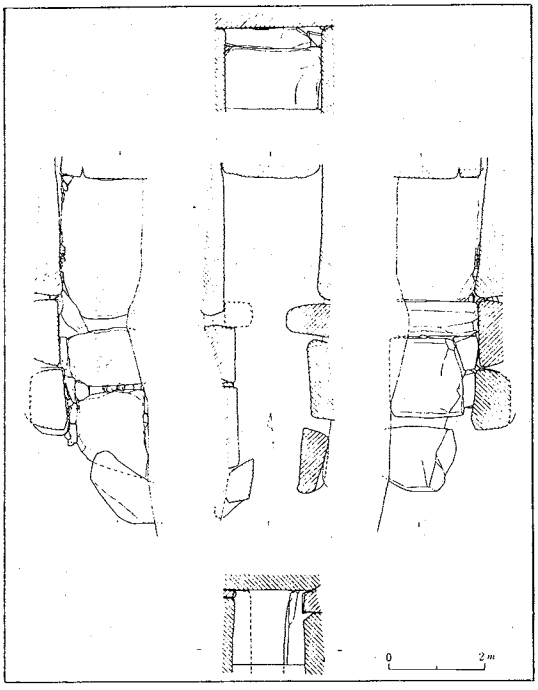
一方同じ頃、出雲地方の平原部でも、生産の発達にともなう農業共同体の急速な解体と家父長制的世帯共同体の自立が進んでおり、平原部の首長層はこれまで通りの共同体支配が不可能になってきました。そこで彼らは有力首長を中心に階級的結集をはかり、自立しつつある家父長制的世帯共同体を個別に支配できるような政治的結合体を形成しなければなりませんでした。六世紀初頭頃まで平原部の単位地域（農業共同体）において盛んに造営されてきた世代ごとの系列的首長墓が、六世紀中葉を境に姿を消し、その後は松江市域及び出雲市域を中心に造営されるのは以上のことの現われとみることができます。しかし、新しい政治的結合体の形成は、全国支配を目指す近畿政権に従属することによって可能になったし、成長を続ける有力家父長層を結合体組織の中により制度的な形で組み込むことによって可能になったのでしょう。

同時にまた近畿政権も、各地方に支配の楔を打ち込んでいました。以前のような首長の共同体支配を認めた上での支配従属関係を目指したのではなく、自立しつつあった家父長制的世帯共同体の直接的掌握を目的としたのでしょう。六世紀半ば以降横田地区が、同じ頃かやや遅れて阿井地区及び温泉地区がその支配下に入った可能性が強い。温泉地区において古墳が全く認められないこと、阿井地区において、F類という特異な石室（無木一号墳・二号墳）が存在するものの古墳が相対的に少なく、石棺を有する横穴墓（下阿井横穴）が存在すること、横田地区において、後期通有の内部構造をとる古墳の造営が横穴墓から始まり、後も小形石室墳（C類）とともに主流を占めること等、古墳の造営に関して強い規制のあったことを窺わせます。言い換えれば、以上の三地区において、近畿政権による直接的個別人身的支配が貫徹され、首長権が否定されたのではないでしょうか。とりわけ横田地区は、当地域内で最も農業生産の見込める地区で、遺跡の数、規模とも群を抜いていますが、後期古墳の内容は非常に貧弱なものとなっています。また上方林遺跡出土の冠と思われる金銅製品は、中央からの直接下賜や身分の高い中央派遣の官人の存在を想起させます。いずれにしても、横田地区の後期古墳の内容に相応しくない遺物であることに変わりありません。

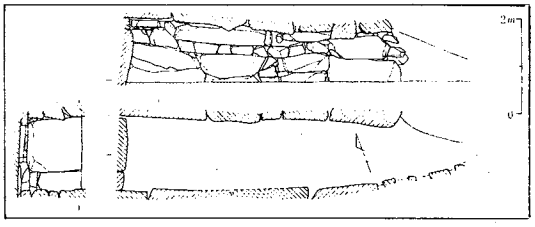
ここでひとつの手掛りを『風土記』記載の「正倉」に求めようと思います。正倉（政府に納



第９図　穴観２号墳墳丘実測図



第１１図　岩屋古墳石室実測図（Ｄ類）



第１０図　穴観２号墳墳丘実測図

める正税としての穀物などを納める倉庫）には郡家（郡衛）に集中して所属する集中型と数カ所に分散している分散型の二類型があり、後者の起源を屯倉（近畿政権の各地域に対する農業生産物の収取が倉の政治的掌握の形をとった）に求めようとする考え方があります。出雲国の正倉の在り方は、分散型に属しています。『風土記』によれば、仁多郡内の正倉は横田地区、阿井地区及び温泉地区に所在したと考えられています。分散型の正倉の起源を屯倉に求めることができるならば、既述の三地区におけるミヤケ制的な支配を認めることができるかもしれません。いずれにしても、当地域にも近畿政権の直接的支配が及んだ可能性が強い。

しかし、階層分化の激しい在地においてそれは困難であったにちがいありません。やがてその打開策として、平原部有力首長層を官僚化し（国造や後の郡司など）、それをテコに間接的な形で目的を貫徹しようとしたのでしょう。それは、動揺していた首長層にとっても自らを安定させることになりました。

奥出雲の民衆は近畿政権の直接的支配を頑に拒否し続けました。「脱籍免課」の抵抗をしたのかもしれません。結果、彼らにとって初めて社会的に自己実現（古墳を造営）する方向に進んでいったのです。でもそれは同時に、出雲地方全体に形成されつつあった新しい政治的結合体の支配組織の末端に組み込まれることでもありました。副葬品の乏しさは彼らの階層の低さを窺わせますが、一方平原部の要素の強い古墳を中核にした成層的な古墳の存在形態と山間奥部の小谷に至る古墳の遍く分布は、民衆の強い要求と彼らの要求を受け入れざるを得なかった近畿政権及び新しい政治的結合体の性格を表わすものです。

既に述べた横田、阿井、温泉地区や比田地区に比べて、その他の地区では質の高い古墳が多く認められます。三成・三沢地区の穴観二号墳（前方後方墳、特異なＡ類の石室）を初め、馬木地区の上市古墳（Ｅ類石室）、布施地区の穴観音古墳（Ｂ類石室）及びそれぞれの地区における比較的大形のＡ類石室墳（杭木古墳・穴観一号墳・郡屋敷古

墳・東部古墳・琴枕古墳等）がそれにあたります。特に、穴観二号墳、上市古墳、穴観音古墳、岩屋古墳は平原部に所在する古墳の要素が強く認められ、各小地区の中核的位置を占めます。これらの古墳の被葬者たちは、有力家父長であると同時に村落の首長として人々を支配し、中規模な開発を指導したり、『風土記』記載の社などで宗教行事を主宰したにちがいありません。さらに穴観二号墳と岩屋古墳が、横田・阿井・温泉・比田地区をも含む仁多地域全体の中核をなすことは、規模、内容からみて十分考えることができます。

ここで今一度、穴観二号墳と岩屋古墳について考えておきましょう。穴観二号墳の造営時期を決定することは極めて困難なことですが、敢えて推測すると、同系列と思われる一号墳から六世紀第四四半期のものと考えられる須恵器が出土していること、一号墳の石室と比較して新しい様相がみられることを考慮すれば、六世紀第四四半期以降の時期を与えることも可能でしょう。

現在のところ、出雲地方において五〇基前後の前方後方墳が確認されており、前期古墳である一例を除いて全て平原東部に分布しています。その内、確実に横穴式石室を有するものは、四基です。一基は『風土記』にいう島根郡の中心部に、他の三基は意宇郡の中心部にそれぞれ存在しており、これらの地域との関係を窺わせます。ただ、石室の形態や構築法はかなり異なっています。

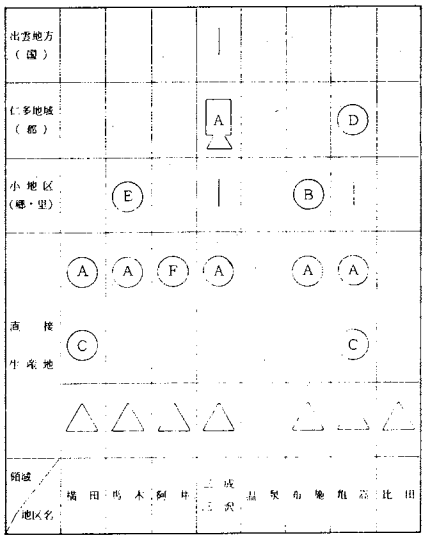
ところで、穴観二号墳について考える場合、『風土記』の仁多郡三澤郷の条は重要な示唆を与えてくれます。三澤郷の条には他郷に比べて多くの紙幅が費され、「国造神吉詞奏参向朝廷時、其水沼出而用初也。」と記載されています。つまり、出雲国造が新任に際して神賀詞を奏上するために上京する時、まずこの水溜の水を持ち出して身を清めたことがわかります。また『風土記』には、仁多郡の少領（郡司の二等官）として出雲臣の名がみえます。

以上のことから推測すれば、穴観二号墳は、在地の有力首長が平原部の最有力氏族である出雲臣氏と同族関係を結んだことを契機にして造営されたと考えるのが最も妥当でしょう。さらに前方後方という墳形を考慮すれば、被葬者は、出雲地方全体に完成しつつあった政治的結合体支配の一翼を担っていたとも考えられましょう。

岩屋古墳の造営時期も推測困難ですが、石室の構造からすれば、六世紀末を遡りえないでしょう。被葬者は、石室規模と石材加工技術の水準からみれば、当地域の最有力者の一人とみてさしつかえありません。『風土記』によると、仁多郡の大領（郡司の長官）に蝮部臣がみえ、郡家が付近に所在したことが推定できます。実際、近くで郡家もしくは郡司層の居館と思われる遺跡が発見されているし、当地域唯一の古代寺院（奈良時代創建か）と考えられる高田廃寺が同一丘陵上に存在します。

以上のことからすれば、岩屋古墳の被葬者は、仁多地域内最有力氏族の大領蝮部臣と系譜的に直接つながる者とみてまちがいないでしょう。

ところで、穴観二号墳や岩屋古墳を頂点とした成層的な古墳分布の在り方を国造制による領域的支配の現われとみることができないでしょうか。平原部の要素の強い古墳を中核として成層的に古墳が出現することと、山間奥部の小谷に至るまで広く古墳が造営されるということは、平原部有力首長（出雲臣、蝮部臣等）を中心とした新しい身分秩序、支配体制（国造制による



（△は横穴墓を示す・アルファベットは石室形態を示す）

第12図　古墳の分布構造概念図

斐之上川柳

孫巡り宝の様に扱われ　若槻白馬
冬越しの蕗豆芽ぶき手入れまつ　安部春恵
ふざけては歌にまぎらす四畳半　渡辺好之
自己を視る目はふさいでる偏眼帯　松田牛歩
寝たきりもいまだバトンを渡さない　太田亀甲
また値上げ明日から禁煙すると決め　横山まこと
お彼岸に雪の中にて香たむけ　安部正子
妻病んで妻の多忙を知らされる　松浦木公
エンプラの寄港に空母また震え　松浦亜以
知った人居ないか六階の窓のぞく　堀江孤雷軒
沈丁花ふと立ち止り匂い香ぐ　久村美津
煙草駄目酒はいいわなご返盃　児玉哲呂
巣立つ子よ育ての暦あしたけり　高木白虹
退職を祖先の土が待っていた　藤原英生
ひとつ消えひとつ生れる蟬（おくつまい）り　藤原千代子
愛のムチ暴力となる今の学　目黒申楽

領域支配）が成立したとみてよいのではないでしょうか。しかも、やがては横田地区、阿井地区、温泉地区も包括するような支配体制を完成させていったのでしょう。七世紀初頭のことと考えられます。これは、成長を続ける民衆の社会的自己実現（古墳造営）の要求を認めることによってのみ可能になったのです。その支配領域及び組織は律令制下の「国・郡・里（郷）」にほぼ継承されたものと考えられます。

最後に今一度『風土記』に目をやると、仁多郡各郷の推定領域は明らかに不均等を示します。耕地面積と古墳の分布状況を合せ考えれば一目瞭然でしょう。横田郷と布勢郷はそれぞれ一地区と対応しますが、三処郷は二地区（亀嵩地区・比田地区）と対応し、三澤郷に至っては四地区（馬木地区・阿井地区ー後の阿位郷、三成・三沢地区ー後の三澤郷、温泉地区ー後の漆仁郷）に対応するのです。この実態を推察するに、律令制下の地方行政区分・組織は七世紀初頭の支配関係を基礎に成立したものと考えられます。四地区に対応する三澤郷と二地区と対応する三処郷に、被葬者が郡司層につながる穴観二号墳と岩屋古墳が存在することからすれば、少なくとも八世紀前半頃の仁多郡及び各郷の領域・組織は、両古墳の被葬者等在地首長の支配関係をそのまま継承したものと考えられるのです。

六、結びにかえて

奥出雲の後期古墳文化は概ね二様の展開をみせることが明らかになりました。成層的に古墳の現われる地区と均質的に現われる地区の二相です。前者は、平原部の要素の強い古墳を中核にして質の高い古墳が造営されるのに対し、後者は、貧弱で同質に現われ、古墳造営に対する規制を窺わせます。このような古墳文化展開の在り方を二つの異なった支配体制の現われとみるならば、間接的重層的支配と直接的個別人身的支配とそれぞれ表現できるかもしれません。またそれは、国造制支配とミヤケ制支配の問題に関わることも十分考えられます。そしてやがては後者が主流になり、律令制下の地方支配組織に継承されていくのでしょう。

とにかく、以上のような古墳文化の在り方と支配形態は、在地における階層分化の激しさ、したがって民衆の成長（生産力の発展による家父長制的世帯共同体の自立、発展）に規定されて出現するものと思われるのです。

思い出・いま・あす④

——旧暦四月・卯月

四月八日は花まつり お寺へ詣って甘茶を頂き、花御堂の釈迦像に甘茶をかける。ところによっては「卯の花」を迎えて門先に置く。祖霊の依代として。

二十一日は岩屋寺の弘法さん

くわしくは奥出雲既刊号で。

二十四日は大山さん 稲田大山へ打ちつれて登り、老若男女お祭りをし弁当をひらいて直会。古くからの山から降りて来る神を迎えて祭る習慣が、大山の修験道の活動と重なり、二百余年前から、大山に詣る替りに大山の見える山へ登るようになった。

大山が牛馬市の中心地となると牛馬の祭りともなった。東比田の牛馬の神縄久利さんもこの日。代替の山は各地にある。

稲田神社観桜句会にて

寂然と花に対する齢なり　糸原古志
ひよどりの一声けわし花散らす　岡田麗水
親子連円座に花のふりかかる　渡部夕峰
気兼ねなく方言飛ばし花筵　中沢斐水
園児等のはしゃぐ坂道花吹雪　加納信子
物忘れせしごと落花頻りなり　岡田蹊花
咲く花を無情の嵐散らし過ぐ　新出谷一華
子供等の声にまつわる花吹雪　峯石美代子
どりどりの春着遊ぶや姫の庭　高木白虹
この花のこの花の道姫神　田辺竹野
はら／＼と散り敷く社の花句会　錦織富江
廃校の残り門柱に桜花の散る　小川あきお

春日断章

山間に明るき子らの声のして家並はずれに辛夷の大樹　常盤はるまさ
ちぎり絵に春の心をあそばして嫁は丹念に花暦貼る　畑八重子
春光に映えて解け初むる峰の雪君との別れをただ惜しむかに（送別式にて）　児玉敏郎
何処より散りて来にしか椎茸のほだ場にこぶしの白き花びら　野村節子
妙厳寺の裏手の山に鶯鳴き歌詠む御堂に風はやさしく　景山悦子
春雨のけぶる朝をさ庭辺の紅あざやかにもみじ萠え出ず　松浦愛子
新しきノートをひらげて孫のため就学日記今宵つけ初む　佐藤喜代子
登り来て竜頭が滝の紅葉に流れは清し雄滝と雌滝　藤原美世栄
町に来て笛の鳴る音の湯わかし買ひき忘るることのしばしばありて　岡田時子
今日もまた湯ぶねに浮かぶ腕をさすり生活に細るわが身気にして　目黒成生
行商せし父の手の汗にじめるペン形見となりて四十年過ぎし　藤原信子
月山の出城の跡の夏草に佇ちて思へり遠き攻防　伊藤萩雨
事故車みて他人ごとでなし娘は今日も遠く乗りゆく若葉マーク着け　宮廻愛子
昨夜よりの雨にけぶりて万作の黄の花おぼろ裏の岩山　永井弥生
雨けぶる伊良湖岬に萬葉の歌碑みておりぬひとり旅来て　安部夕波

会員配布一部百五十円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六ー一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 98 号
（6月分）
昭和58. 6. 4
奥出雲編集集団

むかし・いま・あす⑤

屈原と端午の節句

—旧暦五月・さつき（五月・皐月・早月）—

五月五日は、端午（たんご）の節句、菖蒲（しょうぶ）の節句、重五（ちょうご）の節句などといわれて、今から1,000年余りも前から祝われてきた。

端午の「端」は、はじめという意味で月の始めの午（うま）の日で、それがのちに五日に定まったのは、先にのべた三月上巳（じょうし）の節句が、やがて三月三日に定まったのと同じだともいうし、また午と五は音読みが同じであるので五日になったともいう。五の字が重って重五とか五五とかいって祝うことが多くなったともいう。

菖蒲の節句は、三月三日が桃の節句というように菖蒲がそのころの季節の植物だからである。

いらかの波と雲の波
重なる波のなか空を
たちばな薫る朝風に
高くおよぐや鯉のぼり
……
柱の傷はおととしの
五月五日の背くらべ
ちまきたべたべ兄さんが
……

鯉のぼりとちまきと言えば、すぐに五月の青空とさわやかな新緑の色とを想い浮べるが、旧暦の五月五日といえば、もう暑い盛りに入っている。

中国の習俗の渡来

既述のように五節句は中国から渡来したもので、次第に日本の風土に育ったものである。中国の昔、節句になると水辺に出て、みそぎをして汚れた気をはらい、薬草を採って病気を避けるという習慣があり、後世はこれが三月三日の曲水流觴（しょう）（水の流れに杯を浮べて詩を作ること）の遊びとなったり、五月五日の競渡（舟漕ぎ競争）となったり、九月九日の登高（茱萸（しゅゆ）ハミカン科で果実に香気辛味があり健胃、利尿によい—をとって、丘に登って遊ぶ）の行事となった。

中国の「荆楚歳時記」（500～562年ころの著書）によれば、五月五日を浴蘭節（蘭の香をつけた湯に浴する日）といゝ、人々は草摘みにゆき、艾（よもぎ）をとって、門戸の上に懸けて邪気を払い、水上では舟を漕いで競争し、人々は川辺に集まってこれをみる。またこの五日に、五色の糸を臂（ひじ）に掛けて、禍をさけるという行事もある。（五色の吹流しはこれによるか）。また夏至（げし）の日、粽（ちまき）を食べるとあるが、この夏至の行事がいつのまにか、端午の行事と混同したものらしい。1,400余年の昔の中国の習俗が、私どもの生活の中に生きていることになる。

また後述するが、この日は屈原が汨羅（べきら）に身を投げた日で、その霊魂を救う日であるともいう。当時の人はこの日になると、竹の筒に米を入れ、水に投じてまつった。長沙の欧回という人の前に、屈原であるという人が日中にあらわれて言うのには「君がいつも祭ってくれるのはまことに有難い。ただこれまで贈られた食物は、皆蛟竜（こうりゅう）にぬすまれた。

今後もし恵まれるなら、棟（おうち）の葉でその上をふさぎあや糸でまとってほしい。この二つの物は蛟竜がこわがるものだから」といったので、回はその通りにした。今日粽に棟の葉を五色の糸を使うのは、その名残りであるとも、その本には書いてある。してみると端午に粽を作って屈原を祭るという民俗は、ずい分前から中国であったことになる。

米の粉で作ったモチをササの葉に包んだちまきは、これから起ったという。

ついでであるが、瀬戸内海地方では、五月五日の日に、この日に生れた者がいっしょに、舟乗りして遊んでいると、竜があらわれて水の中に引き込むぞというおどしがあったという。また沿岸には三月三日に海辺の丘に弁当を持ってゆくことがあるという。石見地方でも最近までこうした事が行われていたという。

菖蒲

「続日本紀」の天平19年（747）5月のこととして、天武天皇がこう言ったとしるされている。

「むかしは五月五日には菖蒲をかつらにしたものであるのに、このごろ行われなくなった。これからは、この日に菖蒲のかつらをつけない者は宮中に参内してはならない。」

かつらは髪につる草などをまきつけて飾りとしたもので、もう古代にはそういう習慣があった。日本で五月五日が菖蒲の節句として、古くから祝われていたものである。菖蒲は薬草で、悪魔を払い、火災を除くものと信じられ、酒に浸して飲んだり、風呂に入れたりすると、身体が丈夫になり、同じく薬草のよもぎとともに軒先にさせば、悪魔や、へびが家の中に入って来な

いと言われた。いまでも菖蒲湯とともにこのことは残っている。

屈原が五月五日に投水したという証拠はないが、中国の江南の習俗が屈原と結びつき、ちまきの行事がつき、五月五日に定まって日本に渡来した。日本ではずっと後の江戸時代に、幟、鯉のぼりを立てる習慣が加わったのである。

屈原の死がこの日とされたのは、その死がいかに後世の人々に傷まれたか、いかに後世の人が屈原を敬愛したかをしめすもので、こうした心は日本人にも通ずるものでもあった。

今日の端午の節句のはじまりは

武者人形や、顔の廻りがひげだらけのしょうきや、よろいかぶとを飾るようになったのは新らしくて、江戸時代からである。

菖蒲は、武士をとうとぶという意味の「尚武」に通じるというので武士によろこばれた。はじめは厚紙に人形を彫りつけ、薄い紙でかぶとを作り、コモという植物で馬を、木を削って槍や刀を作り、幟や旗などとともに、家の外に垣を作って立てたのが、だんだん室内に飾られるようになり、幟だけが外に立てられるようになった。

鯉のぼりを立てるようになったのも、かしわ餅があらわれたのも江戸時代半ば以降で、鯉は出世魚と言われたところから、男の子の前途を祝う意味をもっていた。

この地方では、菖蒲とよもぎを軒先にたて、菖蒲湯に入り、男の子が菖蒲で長さ二尺位の鞭をなって、これではお互いの「尻叩き」をしたり、いやがる娘や花嫁を追い廻したりするのがすたれたのは、そう古くない。

また四日の朝、熊笹の新葉一枚に包んだ米の粉団子に、笹の茎をさして柄をつくり、さらに団子の部分を数枚の笹でていねいに包んで、い草で巻いて仕上げ数本ずつ束ねておく。節句の日の朝、釜でゆでて神前に供える一方、黄粉や砂糖醤油をつけてたべる。こうしたマキを初節句の家では、産婆、名付け親、母の実家、親類などに配る。

この地方で幟が特定の家の外に立てられるようになったのは大正末年、横田で横山伴次郎さんが染めて作られるようになってかららしい。鯉のぼりは、大正10年ころ、相愛幼稚園の教材として、30センチほどの色紙の鯉をつくって、クレヨンでうろこを書いて、短い竹につるし、「屋根より高い鯉のぼり、大きいまごいは……」と歌ったのが、都会の風習をまねたはじめのようである。昭和10年も半ばになると、小学校で吹流しの鯉のぼりが立つのが珍らしいものであった。これが一般家庭に普及しはじめたのは戦後しばらくしてからで、解放感を味わった。これが高度経済成長で、町並の上に林立するようになった。しかし幟はみられなくなった。

「鯉幟　日本男子こゝにあり」

今日では、矢車の音も賑やかに、吹流しも普通となった。

屈原のこと

汨羅（べきら）の渕に波騒ぎ
巫（ふ）山の雲は乱れとぶ
……

の歌は戦時中、若い将校の間で歌われたものであった。

一行目は、中国湖南省の北部の川汨羅に身を沈めた屈原の心情を歌ったものであり、二行目は、中国四川省の巫山県の東の巫山の雲を歌ったもので、楚の襄王が昼寝して、巫山の神女に遇った夢をみた故事から転じて男女の情のこまやかなことをたとえた言葉を「巫山の雲」という。高潔な正義心と恋心、これは当時の青年の身を投ずべき最高の目標とされた。

汨羅に身を沈めた屈原は、紀元前403～221年の間の時代の人である。この人への追憶の情が、中国で端午の節句の中に入り、わが国にも伝っている。屈原の研究は、時代とともに厚味を加えて出版されている。私の手元にも数冊あって、時折ひもとく書となっている。それらの書から引用して屈原のことをのべ、中国でまた日本で、時代とともに見なおされるのはなぜかを考えてみたいと思う。

桃の節句と同様に、中国で育った生活文化が、このように日本に土着し、日本の風土化しているのはなぜかにも通ずるものを探ってみたい。

屈原の何が訴えるのか

丁度48年前の今ごろ、年老いて今なお健在である詩人教師木島俊太郎の若かりしころの名講義に、心をゆさぶられていた。わが国の大陸進攻が次第に激しさを加える時代であった。教科書は「古文真宝後集」一巻で、その中の「漁父の辞」は、私の若い心に、今なおぬき難い感銘を残したのである。この文は屈原のものと教えられたが、今日の研究によると、屈原の死後、さる人が屈原と漁父の問答の体をかりて、屈原の心もちを述べたものであるとされている。岩波新書「屈原」にやさしく書かれているのを転載すると、

屈原は追放されてから、揚子江の渕をさまよい、沢のほとりに行って、嘆きつつ歌っていた。顔色はやつれ、その姿はやせ衰えていた。漁父がそれを見て、「あなたは　三閭（りょ）大夫さま（楚の王族の三家を取り締る職名ー屈原のこと）ではありませぬか、どうしてこんなところと問うと、屈原はいった、「世間は皆濁っているのに、私ひとりが清んでいる。人は皆酔っているのに、私ひとりが醒めている。だから追放されたので」と。漁父はいった。「賢人はもの

「奥出雲の古代社会」の連載を終えて

中浜久喜
（兵庫県相生市在住）

私が初めて奥出雲の地を訪れたのは、今から丁度六年前、一九七七年の初夏のことで、落ち着いた横田の町並とのどかな田園風景が大変印象的でした。その後十数回、奥出雲各地を廻り、多くの遺跡を見て歩きました。

最初は知り合いもなく、不安で苦労もしましたが、回数を重ねるにつれ、在住の方々より物心両面からの暖かい援助を受け楽しい調査ができるようになりました。失礼になりますが、この紙面をお借りして、お世話になった多くの方々に対して御礼を申し上げたいと思います。

さて、四回にわたって連載させていただいた小論は、当地の古墳、遺物の紹介とそこより導き出される古代史像を提示したもので、島根大学文理学部に提出した卒業論文をもとにしています。その論旨については、一九八〇年秋に、横田町コミュニティーセンターで発表させていただきました（出雲国風土記研究会例会）。また詳しい考察については、「出雲地方における後期古墳文化の展開ー特に山間部を中心にしてー」『松江考古』4号（一九八一年）及び「仁多地域の古墳文化と『出雲国風土記』ー古代地域史研究の前提的作業ー」『風土記論叢』（一九八二年）を参考にしていただければ幸いです。

僅か二年間の調査で奥出雲の古代社会が解明されるべくもなく、また私にその能力もありません。不十分な面は私自身重々承知しております。以下、今後の課題となるような点を簡単に述べ、責の一端を果したいと思います。

最大の課題は、奥出雲の成果を出雲地方又は斐伊川流域の古代史とどう結びつけるかということであります。それには他地域の考古学成果を期待するのはもとより、この奥出雲においてこそ調査、研究を深化させるべきでしょう。たとえば、穴観二号墳・岩屋古墳・無木一号墳・二号墳のさらなる意義づけをおこなうことや、集落遺跡の展開の在り方を解明し、古墳文化と関連づけた総体的な古代史像を描き出すことが大切だと思われます。

今ひとつは、以上のことを実現させるために、遺跡の保存を十分におこなうことが不可欠になってきます。幸い当地域においては、多くの方々の努力により遺跡が守られてきました。今後とも遺跡をランクづけすることなく、奥出雲の皆さんの共有財産として保護、活用してほしいものです。

最後に、連載に当りお世話になった高橋一郎先生に対して心から謝意を表したいと思います。

編集者から

貴重な論文を快く登載頂いてありがとうございました。厚く御礼申上げます。今後とも仁多郡のために御研究をお願いします。協力もさせて頂きます。

来月号より続編ものを掲載するとともに「東部奥出雲の旧家物語」（読売新聞の依頼で連載したもの）を一部補正して、長期読物として連載致します。

斐之上川柳（五月）

飛び出した蛙に思わず声をかけ　松浦亜以
嫁ぐ娘に親の涙は感無量　若槻白馬
花だよりどうでもよいか風冷える　堀江孤雷
月給日のれんか妻かで会社退け　渡辺好之
喧嘩して玩具片手にとぼとぼと　横山まこと
畑仕事腰が痛いが好きでやる　安部春江
竹の子は嚙むより前に口にとけ　児玉哲呂
老眼鏡探せば妻がかけている　太田亀甲
何も無いがと馳走並べられ　松浦木公
なんとなくオイと言う名の妻と生き　高木白虹
野菜市片うでとなる猫車　安部正子
宴会はへたな歌ほど人気あり　加納治江
新たなる標に向いてひげを剃る　藤原英生
愚痴を云う明治の声は死語と聞く　松田牛歩
役受けて外出多き妻となる　藤原千代子
日展を猫に小判で見て帰り　目黒申楽

にこだわらず、世につれて移ると申します。世人が皆濁っておれば、なぜ御自分もその泥水をかきにごし、濁流の波をおあげになりませぬ。人々が皆酔っているなら、なぜに御自分もその糟を食い、糟汁までをすすりになりませぬ。どうしてそのように思い込んで、高潔にふるまって、かえって自分から追放の禍をお招きなさいまする」と。屈原はいった。「髪を洗ったばかりの者は、きっと冠の塵をはらってかむり、浴みしたばかりの者はきっと着物を振って着るという。どうして清らかな身に、よごれたものがつけられようか、いっそ湘水の流れに身を投げて、江魚の腹に葬られようとも、どうしてこの潔白な身に、世俗の塵埃を蒙られようか」

漁父はにっこり打ち笑い、舟ばたをたたいて歌いながら去った。その歌に曰く、「滄浪の水が澄もうなら、冠のひもを洗いませ。滄浪の水が濁るなら、こなたの足を濯ぎませ」と。そのまま去って、それ

しばぐりさつき抄

入院の娘は春の紅薄くひく　浅野としお
落椿日がないちじつ陽が射さず　糸原古志
鶯や園児の列の乱れがち　岡田蹉花
春愁や書架の背文字の金鈍し　岡田麗水
川芹を洗う妻の背薄日射す　小川あきお
囀りに目覚めし孫の機嫌よし　門脇花子
人の恋もつれる噂花菜乾す　柏木侑子
子等去にて破れつくろう春障子　加納信
北壁の春を許さぬ去年の雪　高木白虹
雪解水峡を潤し住一戸　中沢斐水
髪を梳く女明るき四月かな　中山大
蕗味噌の香りに酌めし宵の刻　錦織富江
雛の間を灯せば雛の語りかけ　新出谷一華
啓蟄や老の錆鍬担ぎ出づ　藤原樵夫
投げかえすボールはずみて土堤の春　峰石美代子
朱に燃ゆる五重の搭や春の海　渡部夕峰

季節の断片

はと娘を逢はす証しの銃剣の傷に静かなるごみあぐるもの　常盤はるまさ
笹の根をひろひつ打ちゆく山畑にすももの甘く匂ふ風吹く　永井弥生
今宵又走る救急車の音かなし還らざる友の命日にして　畑八重子
確かなる牛応へありて大いなるいわなは躍る吾が釣り竿に　伊藤萩雨
はじめての丸をもらひしノート持ち老眼鏡も添へてくる係は　佐藤喜代子
春日野に鹿とたはむる一時を契り交せし息子等とゐる　景山悦子
集会の運営そつなく終えたりと子等の眼に満足溢る　児玉敏郎
山裾の宿の湯舟にゆったりとひたりて静かに雨の音聞く　藤原美世栄
麗日の垣根の下を春猫の呼び交しつつ追ひつ追はれつ　岡田時子
夫も息子も孫も話題を持ち帰り夕飯の香りほのぼの匂ふ　藤原信子
窓外の緑連なる折折にむらさきのふじ今盛りなり　目黒成生
舞ひ遊ぶ白き蝶のごと仄かにも山ぼうしの花五月雨に咲く　松浦愛子
友の死を聞く夕べなり追憶をたどれば外は雨となるらし　宮廻愛子
一人子の小二の孫は傍に小犬のぬひぐるみ抱きて眠る　野村節子
海に沿ふ丘に群れ咲く花の名を肖待草と香代は教へし　安部夕波

っきり語ろうとはしなかった。

である。

屈原は戦国時代の楚の国の愛国の人であり、詩人であった。懐王、襄王をたすけたが、讒せられて江南に遷され、「懐沙」の詩を作って汨羅に投身した人である。その詩の中に

人は角を削って円とするとも
私は一定の法度を変えぬ
初めの志を易えるのは
君子のいやしむところだ

玉と石とをごきまぜて
ひとかきに升で量る
……
美しい玉を持ちながら
誰にも見せる人が無い
……
路をすゝんで北に宿れば
日はうす暗く暮れかかる
憂を晴らし悲しみをなだめ
やがて死を以て結着しよう
……
世は濁って私を知る者なく
心は誰にも訴えられぬ
もはや死は避けられぬと知った

願わくはこの身を惜しむまい
明らかに世の君子に告げる
私はこの世の法となろう。

ほかに「離騒」という375句の長篇の詩があるが、それにはここではふれない。

それから2,000余年、時代時代の学者、文人が屈原を慕い、「離騒」の文字にその憂悶を托したのである。最近では郭沫若が戯曲（屈原）を書いて、戦時中の中国の政治家を強く諷刺している。

屈原の文学は、けんらんたる文辞にひかれるばかりでなく、後の人がいつでも、自分の信ずる道が行われず、政治の不合理と国家の危機、人民の艱苦を痛切に憂え思いながら、その身は不遇で出る路のないとき、きっと心に強く蘇って来たものである。

高貴な精神と、すぐれた政治外交の能力がありながら、それを生かして祖国を救うことができなかったことは、楚国の人々のながく痛惜するところとなった。屈原の姿が大きく浮び上ってきたのは、やがて秦が亡んで漢代に入ってからである。

これが土壌となり、中国ではいくたの民話も生れて今日生きているという。その死が五月五日であったとされたのは、わが国で三月三日の桃の節句に、「こち吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れぞ」と配所の大宰府でなくなった菅原道真が、のちまつられて学問の神として、わが国庶民の崇敬をうけたのと同じである。

中国の民話の中に生きつづける屈原の人柄、行状は、多くの庶民にも愛せられているという。

五月五日の節句の行事はそのあらわれたものである。

わが国で武者幟から鯉のぼりになって毎年五月の空に飜るのも

高く泳ぐや鯉のぼり

の高潔な庶民の心が持ち続けられているからである。鯉は出世の象徴だけであってはならない。

人間の高邁な精神の夢とロマンであらねばならない。

戦時中屈原の詩が精神が、憂愁と慷慨（こうがい）の源泉にのみ歌われたことには今日同調しがたい。今日、歴史はまた繰返えすかと感ずること頻りである。歴史に学ばねばならない。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第99号
（7月号）
昭和58. 7. 2
奥出雲編集集団

奥出雲東部の旧家（1）
横田庄を築いた横田氏

《急使》

寿永三年（一一八四―平安末）鳥上の峰（船通山）ふもとの谷間の田んぼのあちこちにまだ雪残る晩冬のある日。若い横田兵衛尉維行（ひょうえのじょう・これゆき）は早朝の日課である弓のけいこに余念がなかった。突然、朝の静寂を破るヒヅメの音とともに門前に現れたのは吐く息も白い二人の若武者であった。平家の告文をたずさえた二人の若武者の労をねぎらった維行は、直ちに父の館（やかた）におもむいた。父はすでに毘沙門堂（びしゃもんどう＝礎石、石段ほかが残る）に入って、朝の勤めに座していた。

告文は平家の将、阿波民部大輔良成（以下、一の谷合戦までは源平盛衰記による）からのもの、西国で平家に年来伺候していた豪族どもの名を連ねていた。趣旨は京都に迫っている源氏を敵として、平家一門これを迎え撃つため、摂津と播磨の境・一の谷に参集されたしというものであった。

日が昇ったころ、呼び集めた一族郎党の主だった者を前に、父は参戦の決意を告げた。すでに、父の心を察した維行は、馬を駆って伊賀多気の社（出雲国風土記記載の神社。現在地の東南に、当時はあった）にもうで、和田山近くの祖陵（古墳あり）を拝し、岩屋寺（現存）に阿闍梨（あじゃり）を訪ねて館に帰っていた。

ちなみに、堂に安置してあった毘沙門天の像（現存）は維行の祖父が京都より持ち帰ったものであった。毘沙門天はもと北方を守る守護神としてわが国に伝えられたのであるが、平安後期には、病気平癒（へいゆ）の効験があるとともに、財宝を得させ、幸福を授けるという信仰に変わっていた。一門への招福はもとより、土地が命であった横田氏は、横田郷の安泰を願って、堂を建立し安置していたのである。丈余の豪快なこの像（平安中期の作という）は一本のクスノキから三体造られたものの一つで、他の二体は京の鞍馬と因幡の倉吉の寺に分けられたと伝えられている。

《一の谷へ》

一日置いて、維行は十数騎の郎党とともに比田の社（現存）にもうで、大管の峠を越えた。南下して備中、備前と進むにつれ、各地の兵が加わり、総勢千余騎となった。山陽路は暖かい早春の風がそよいでいた。晴れ姿で勢ぞろいした軍勢にまじって馬を進めることは、維行にとっては初めてのこと。若い血潮はたぎり、心も高鳴ったが、それを引き締めるのは、平素から父に諭され、とくに出陣にあたって懇々と語られた数々の事どもであった。

地方武士の命は父祖伝来の土地であり、それを耕してくれる百姓たちであるということはその最も強調したことであった。父は禁裏警固の役として京都にあった若きころ、保元、平治の乱を目のあたりに見た。そして、今、全国的な内乱の上に、源氏と平家の決戦が始まろうとしていた。勝ち残った一方の棟梁（とうりょう）は全国の支配者になるという、中世の開幕の時が来ていたのである。維行の父に、もとよりこうした情勢の判断はできなかったにしても、目のあたりに見た対立の様相は、やがて領地を含めた争奪へと進展することを膚で感じていた。伝来の安住の地はなんとしても守らねばならない。

《横田荘の出現》

横田郷は、横田氏の父祖が郡司に任ぜられて以来、心を注いで良田を広げた地である。ついでに書くと、さらにさかのぼって、吉備の品治国造（ほむち・こくそう）の流れがこの地に入り、製鉄神ともみられる伊賀多気社を氏神として製鉄に従い、品治部と称していた。これが郡司となった。出雲国風土記にみえる郡司中最も位は低く、異国系のようである。

さて、横田氏は、山を越えて山陽から招いた新しい砂鉄精錬の技術者を組織して農具生産を盛んにし、武具の製作にも手を染めていたもので、維行の曽祖父は、隠岐に流された源義親が、出雲に舞い戻って乱暴し、朝命を受けた平正盛によって血祭りにあげられたことがあって以来、ひそかに平家に心を寄せていた。禁裏警固で京都に滞在していたとき知りあった備中の妹尾氏を介して、平家そして院へとつながった。石清水八幡宮に横田郷内の幾つかの名田を寄進し、自らその荘官としてそれを管理することによって、地位の保全と財力の増強を計った。

平正盛とその子忠盛は、合わせて二十年間、備前守として山陽の豪族を家人とし、平家の基礎づくりをしていた。その中に強大な戦力を構成していたのが備中妹尾（瀬尾）荘に住む妹尾太郎兼康であった。しかし、時は移り、兼康は備前に進撃して

奥出雲東部の旧家①・森鴎外と中江藤樹・むかし・いま・あす⑥・短歌・川柳・俳句

きた木曽義仲の大軍と戦い、壮烈な討ち死にをとげ、一族は四散していた。

維行は恩と義理のある平家のためとはいえ、主従ともに散って、土地と百姓を捨てることは出来なかった。四百年も前から吉備と通じて開発を進めて来た父祖に対して、それでは済まない。父が毎朝対座する毘沙門天の像も、しきりと維行のまぶたの裏に明滅していた。

《選んだ道》

平家は一の谷でも敗れ、主力は海上を屋島へと落ちた。維行は、主力から離れた西国の諸豪族とともに、山陽路を西へ西へと急いだ。源範頼軍の追撃は厳しかった。維行は備前より北に折れ、美作から出雲路に入った。途中で恩義ある妹尾一族に出会った。その願いをいれて幾人かを伴って横田に帰った。早い田植えの終わった横田盆地の水田が、春の日に輝いているころであった。

維行の父は、外に目を向けることなく、横田荘を守ることを、維行や郎党に誓わせて背水の陣をしいた。源頼朝の平家残党に対する追撃は容赦なく進められた。西国は平家の地盤であり、中でも石清水八幡宮領はその核であった（石清水八幡宮文書による）。今は源氏がそれを欲したのである。平静を装ってはいても、妹尾氏の残党をかくまっている横田荘は、不気味にも思えたであろう。源頼朝の腹心、梶原景時は、終始一貫源氏方であった石見の益田氏に下文を寄せ、大原郡の豪族岐須木次郎兄弟、横田兵衛尉らの討伐を命じた。

（益田家文書より）

勢いづいた益田氏は岐須木氏をほふり奥出雲に馬を進めてきた。維行の父は妹尾一族の脱出を計った。横田荘がこれ以上戦乱に巻き込まれないためには、この策しかなかった。維行は一族を護衛してかねてから親交のある備後へと向かった。女、子供もいたので山道の歩行は苦しかった。

（以下この地の伝承によって）

持参したわずかの荷物も途中で残し、小八川を抜けて坂根へとたどりついた。その時残された観音像を里人が拾ってまつり、草坂の観音さんと呼んだ。今に伝わるものである。坂根の山で一夜を明かした一族は、「益田氏迫る」の知らせで、あたふたここをたって、中国山脈越えに向かった（平家の一夜城という）。

この時進言するものがあって、三井野原から直ちに備後へ越さず、木立深い山を尾根伝いに、阿井郷大馬木の里をめざした。これが幸いした。益田勢は三井野から油木へと通ずる山道を進んだので、討伐の難を免れることが出来た。

しばらくの日を置いて、一部は南の六の原を越えて奥油木へ移った。今日この地の平家の子孫と称する数軒の家がある。大馬木に残ったものも、誇り高くこの地方で生きていったと伝わっている。この地の妹尾姓をもつものはこの末孫であるともいう。

平家が屋島の戦に敗れ、壇の浦の戦に敗れて一門滅亡したのは、それから八か月後の寿永四年二月のことである。横田氏の一族は生きながらえて、今日その子孫がこの地に住んでいる。

（この文はかつて本紙にのせたものであるが、年数も経過しているのでこの連載の序論としてあえて修正しのせた）

むかし・いま・あす⑥

——旧六月　みなづき（水無月・水月）——

この月の由来については諸説がある。字義通り「水無月」つまり梅雨も終わって水も枯れ尽きる意とするもの、田植えもすみ田ごとに水をたたえている月だという「水月（みずつき）」。「大言海」では、田水之月（たみのつき）の略転という。あるものは、田植えも終わり、大きな農事を皆しつくしたから、皆仕尽（みなしつき）の略であるという。また「かみなりづきの上下を略した」ともいう。この言葉はすでに万葉集にあらわれ、新古今集にあらわれているから、極めて古い。雨の多い梅雨あけの、そして田植の終ったころにふさわしい月の名といえよう。

レンゲ　6月15日のことである。麦を持って氏神さんに詣り、小麦粉団子をつくってたべるところ、また塩鯖をたべるとか、そうめんやうどんをたべるところなど、いろいろある。田植えも麦刈りも終り、暑い夏にかゝる時期であるから、こゝらあたりで一服し、麦の収穫を神仏に感謝し、秋の実りを祈るという。農村にとっては、大切な日であった。

半夏生（はんげしょう）　夏至から12日目をいう。七月二日ごろで、半夏とはカラスビシャクという多年生植物のことで、これが生える時期であるためにこういう。盛夏を前にした季節の一つの折目、田植終了の生活の節である。当地では、ささまきを作ってたべる。生活の折目を示す儀礼食である。

土用

土用とは土気のはたらきをいう意味で、立春・立夏・立秋・立冬の前18日間をいうが、普通には特に夏の土用をいう。酷暑なので、農事や保健衛生上の多くの伝承が伝っている。水田の水を落して土に亀裂を生ぜしめ土壌に空気中の酸素を供給することを行うのは前者で、丑の日にうなぎなど営養あるものを食べることは後者である。夏やせとうなぎのことは万葉集にもある。

森鷗外と中江藤樹

最近江戸初期から敗戦までの著名人の筆蹟二十数点をみる機会を与えられて、いろいろのことを思い、書物もひもといてみたことをしるしてみたい。

森鷗外を知ったのは、松江に学んで国語の授業で、「高瀬舟」をならった時からで、「キタ・セクスアリ」「山椒太夫」「雁」などを読んで、胸をときめかせたものだった。そう数多くは読まなかったが、鷗外全集を求めてから少し数もふえた。

津和野を訪れ、旧藩校の中庭御書物庫の白壁の前に建てられた、鷗外の遺言碑「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」を読むと、国の内外において軍医として医事行政家として、各方面に寄与した偉大な功績とともに、文豪としての事蹟と名声の著名さも、その生涯を通じて魂の成長の裡に「郷土石見人として」が厳として存在していたことを深く感ずる。それはくびすをかえして、またその旧居を訪れる気持ちに誘うのである。鷗外が母とともに勉学に心魂をかたむけ、天性の資質をみがいた左手の四畳半の部屋の前にたたずませるのである。

鷗立の旧居の前庭の左手にある大きい石碑には

南山のたたかいの日に
袖口のこがねのぼたん
ひとつおとし
その扣鈕（ぼたん）惜し
べるりんの都大路の
ばっさあじゅ電燈あをき
店にて買ひぬ
はたとせまへに

（「うた日記」の中の詩〝扣鈕〟）

と佐藤春夫揮毫で刻まれている。

年のせいであろうか、鷗外の「小倉日記」のせいであろうか、森家の墓所のある津和野町内の永明寺に足がむく。

「小倉日記」は鷗外が昇級したとはいえ小倉に実質左遷をうけるとともに、東京の大学（上野美術学校・慶応義塾）の講師（美学・文学）も中止せざるを得なかった気持を底流として書かれたものである。だが鷗外はこれを克服し、やがて山縣有明に見されることになった。私生活において老いた母を一人東京に残して、自らもひとり田舎町でのわびしい生活を営んだことなど、日記の記録を補う幾多の著作をあわせ読むと、面白いといわれるが、そこまで私は手がまわらない。この日記は三年間一旅行者としての眼で貫かれてもいるという。「小倉日記」の中には、森家の墓についてのことも書いてあるが、こゝではふれない。

古刹永明寺の境内前、少し小高くなった墓地に森家の墓所がある。その近くに大阪夏の陣で千姫を救出しながら悲劇の人となった、津和野藩主坂崎出羽守の墓石もある。

永明寺は曹洞宗の大本山永平寺を開いた道元の法孫月因性初の開基で、応永27年（1420）津和野城主吉見氏の創設にかゝる。吉見氏12代300年ののちが、出羽守1代16年、そして亀井家11代で明治維新になる。鷗外はその藩の典医の子として生れた。

永明寺はかつて、名僧智識の

季節の断章

ひとつの歌にこだわりおれば坐りいしかたえの妻がひそと立ちたり　常盤はるまさ
笹の根をひろひ打ちゆく山畑にすももの甘く匂ふ風吹く　永井弥生
五月晴孫の通へる中学の青葉の道は遠く続けり　畑八重子
新入の児を待つ園舎静もりてブランコ四基風にゆれおり　佐藤喜代子
大掃除畳めくればしきつめたる古新聞の見出しなつかし　児玉敏郎
母の日に孫の車に揺れながら孤児のこと語りつ赫山を行く　藤原美世栄
裏木戸の小径にこぼるる桐の花うす紫に匂ふ夕暮　岡田時子
七百の道標は雪に倒れいて峠の谷に鶯の鳴く　宮廻愛子
白ふじの今年は咲きぬ池の面に花の映れり微風にゆれつつ　藤原信子
窓外の緑連なる折折に紫の藤今さかりなり　目黒成生
たんぽぽの黄もあざやかに咲きそろうみ堂に歌友の集ひたのしく　松浦愛子
幼な児は茶を摘む我にまつはりて日がな語れり飽くこともなく　景山悦子
ガンに逝きしわかき釣友憶ひつゝ人なきダムに糸をたれおり　伊藤萩雨
補植する田の面に青葉の影うつり風さわやかにつばめ飛び交ふ　野村節子
匂やかにひとつの想ひを秘めて咲く浜木綿の花の白き夕暮　安部夕波

斐の上　川柳

ホットする田植や茶摘み終えた宵　安部春恵
人間が今日は地震で坐りこみ　児玉哲呂
能書に迷うて薬かえて見る　松浦木公
泥まみれまみれ／＼て土で老い　松田牛歩
午前様やっとたどれば落し鍵　渡辺好之
革新もお布施の効め当てにして　松浦亜以
珍味にと野菜山菜冷凍庫　安部正子
竹の子が隣りの家敷を一寸覗く　若槻白馬
衣替え痩せて出てきたナフタリン　太田亀甲
集会所誰かサロンパス鼻にくる　横山まこと
晩酌は己が限度を心得る　藤原英生
革新と保守の違いでずれが出来　目黒申楽
五月晴れ垂れて美を増す藤の花　真綿よし子
泥舟を老いた鬼は知っている　堀江孤雷
辞めてからやる約束が多過ぎて　藤原のぼる
体操にまだ／＼惜しい命なり　藤原千代子

もと、山陰唯一の専門道場であったというだけあって、伽藍結構はさすがに立派である。町内から西に向って老杉の下の坂道を登ると、津和野城にあった、総門をそのまゝ使用している山門がある。こゝに明僧東皐心越の筆蹟になる「覚皇山」の扁額が掲げられている。一時は200人にも達する雲水がいたというが、今はない。

東皐心越（寛永16 1639～元禄8 1695）は江戸前期の帰化僧である。明が滅び清国が興ると隠栖した。同じ明僧澄一の拓きに応じて39才の時来日し、長崎の興福寺に入った。のち徳川光圀に迎えられ、水戸の尺徳寺に住み、授戒した衆は1700人余に及んだという。

島崎藤村の「山陰土産」の一節に（旧片名遺いのまゝ）

「養老館には学則風のものを書いた古い額も残ってゐる。国学、漢学、蘭学、医学、数学、武術——鷗外漁史の学問そっくりで……津和野に来て見ると、こゝからはすでに長州の色彩が濃い。石見からするものとの落ち合ったところが……その辺の微妙な消息は、人の気質にも、言葉にもあらわれてゐよう。私は自分の郷里が信濃の西のはづれにあって、殆んど美濃に接近しているところから、斯うした津和野のやうな土地柄には特別な興味を覚える。その意味から、こゝを鷗外漁史の生地と考えて米子市加茂町の国際ホテルの向い側、葛の葉の巻いた一本の木の下に、「中江藤樹先生成長之地」と陰刻した白御影の石柱がある。その横の碑には、近江聖人中江藤樹は幼年のころ、米子城主に仕えた祖父とこゝに住み、藩校就将校で文字をならい孝養を尽して、41才でこの世を去ったが、学徳兼ね備った生涯を慕う人々によって、後世近江聖人とよばれた。この碑によって、私は藤樹と米子のかゝわりに思いをはせたのである。

香川景樹は（明和5 1768～天保4 1843）鳥取藩士の次男に生れ、師香川氏の養子となり、洛東上岡崎に住み、諸国より遊学する門人を指導した。その数1000人を越えたという。「歌はことわるものにあらず調ぶるものなり」と古今集の伝統をつぎ、藤原定家の流れ二条流から遠ざかり、加茂真渕・本居宣長・平田篤胤らの国学派の復古主義、功利性の歌論にも反対した。明治期に入っても宮中御歌所を中心に桂園派として勢力をもった。書は理智的な彼の性格をあらわし、上品ではあるが、面白さにかけるといわれる。

絲原記念館の夏季展は、花の器と著名人の筆蹟である。展示されるものを中心に館蔵品などをみると、松平直政・松平不昧（秋季展に）松平直應（春季展に2品展示済）など、鉄師として松江藩主と関係の深かったことをしめすもの、7代吉三郎が好覩といってわが国歌道の主流である二条流の歌人であったことをしめす諸作品のうち、澄月・香川景樹・与謝野晶子のもの、蕉門・美濃派俳諧の仁多郡における先駆者を出し、代々その推進者であったことをあらわす中島魚坊の筆蹟、茶道の深く長い伝統をあらわす東皐心越・石川丈山・大綱宗彦・近衛文麿のもの、漢学・儒学にも造詣の深かったことをしめす、林羅山・頼山陽・中江藤樹・貫名海屋・小野湖山の書などが展示されている。いずれも書家としても著名な人々である。貴族院議員としての交友のあとをしめすものとして、有栖川宮親子・三条実美・伊藤博文・副島種臣・徳川家達・千家尊孫・近衛文麿の書などがある。

いずれも、漢詩・自画賛、あるいは自作詩や和歌で、その内容はそれぞれの人柄、個性をあますところなく、うかがい知ることのできる筆蹟である。

「奥出雲東部の旧家」とともに

高橋一郎記（横田史談会）

しばぐり五月例句会抄

花曇り花の昏さがからみ合う　浅野としお
鶯や着流しで曳く杖軽く　岡田蹊花
廃れ庭昔を今に岩つつじ　岡田麗水
春愁や海は白くして虚空うつす　小川あきお
筆太に新茶入荷のビラを貼り　門脇花子
遅霜や火種ひとつの炬燵かな　加納信子
杖を借る門前庵の竹落葉　高木白虹
初蟬や根っ子踏み踏み奥宮へ　中沢斐水
耕運機桜吹雪も田に入れて　新出谷一華
黄タンポポ舗装の隙間に強く咲き　錦織富江
庭椿落ちて紅のみ寄り合へり　藤原樵夫
孫去りしあとの余韻や春炬燵　峰石美代子
牡丹散り片のかさなり庭の隅　渡部夕峰

藤村の風土感覚も面白い。昭和二年のことで、この年に藤村は大作「夜明け前」の準備に入っていた。また「千曲川旅情の歌」の詩碑も信濃路に建てられてもいる。

はじめ、学問に励んだとある。滞在したのは一年ほどだが、その生涯を定めた一年であった。後年老いた母のため官を辞し、郷里小川村に帰り私塾を開き、農民を相手に質素な生活をし、産業を興し学を興し、ひたすら見ることもおもしろい」

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一、〇六一ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成、植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 100 号
（8月号）
昭和58. 8. 6
奥出雲編集集団

奥出雲東部の旧家②
荘園の代官小池・安部両氏

◇小池氏（後の杠氏）◇

——頼朝が送り込む

平家が滅亡したのは文治元年（寿永四年＝一一八五）二月であった。その前月、源頼朝は石清水八幡宮領出雲国横田荘ほか八荘に、八幡宮領として安堵（あんど＝所領などをそのままにすることの保証）するとともに、平家追討の争乱の間は、その他の武士たちが年貢を横領したり、兵糧米を賦課したりして、神領の年貢徴収がとどこおることを許さない旨の下文を届けた。

間もなく平家が亡ぶと後白河法皇は、頼朝、義経の対立を利用して、頼朝追討の院宣を義経に下した。頼朝は法皇を「日本国第一の大天狗」と、その無責任を痛撃して院に迫り「今度は天下草創也」として、各国各地に守護、地頭を設け、自らは将軍としてこれを掌握する鎌倉幕府を創設した。

かつて平家方に属した八幡宮横田荘へは、横田氏を押えての領地を確保するため、荘司を送り込んだ。それは将軍頼朝と同じ多田源氏の末流で、北面の武士小池刑部久朝であった。久朝は建久七年（一一九六）この地に下ると、横田郷の中心中村の土豪田村治郎右衛門の娘以久を妻として荘務をつかさどった。その後二代から七代までは、京都の諸公卿家から妻を迎え、家格を維持している。

——押　領

このころの八幡宮の社殿は、現在の八川八幡宮のところにあった。時代が下るにつれ岩屋寺は八幡宮の護国寺として次第に力を加え、荘務をつかさどる立場も持ち始めた。すると、横田荘の北三処郷（広瀬町比田、仁多町の亀嵩、郡、上三所）の地頭である三処氏が、土豪地頭として蓄えた武力を背景に、横田荘内のこうした事情を巧みに利用し、押領の手をのべて来た。そして三十年間、石清水八幡宮との間に争いを続け、ついに文永七年（一二七〇）墻田荘の半分を領有することを執権北条氏の名によって認めさせたのである。

ところが、その翌年、執権北条時宗の異母兄時輔が六波羅探題になると、横田荘は出雲国内の数か所とともにその所領とされてしまった。間もなく北条家内部の争いから、時輔は時宗の刺客によって討たれたが、この荘は、その母妙音尼によってその後二十数年間保持された。妙音尼はとくに岩屋寺を敬って寺領、宝物を寄進し続けた。加えて僧祐円の声望は高く、八幡宮は岩屋寺のある金厳山の山ろく、現在の社地に弘安四年（一二八一）移された。

——神事の執行者に

小池氏の荘司としての役務は弱まった。「大催」（おおもよおし）という職名で神事をつかさどることに重点が移り、八幡宮の真南で斐伊川をはさんで一キロの台地に居住した。八月十五日の放生会（ほうじょうえ）には、ここから勅使参向の行列と同じ様式によって行列を出し祭典を執行した。このときが小池氏七代である。八代よりは全く土豪として祭典にかかわる特殊な家格を残すのみとなった。そして明治中ごろまで六百年間この古式は続いたのである。

十五世紀半ば。三沢氏が院宣をうけて地頭請所（うけしょ）としてこの地に入ると、真っ先に小池氏の「大催」職を安堵している。その後、馬場八幡宮をはじめ伊賀多気神社のすべての棟札に小池氏は大催として名をつらねている。戦国時代末、毛利氏からは横田郷の村役人に任ぜられ、広島築城のための砂鉄製錬による鉄材を集荷する役も負わされている。松江藩からは古格維持と神事執行のため、扶持米をうけるか免租されて幕末に至っている。神事執行、行列などの夫役は村人が分担した。祭典は大催と神主、岩屋寺の僧の三人がそろわなければ始まらなかった。

——タタラ勢力登場

小池氏は徳川時代の初め大馬木の杠氏から養子を迎える条件の一つとして改姓を約し杠氏となった。杠氏が奥出雲で最も早く組織的なタタラ製鉄を始めて、力を加えた背景があったことにもよるものであった。

この地方は一つの転機を迎えていた。すなわちタタラ師が総合的経営者鉄師へと成長することによって、従来の指導者であった貴種土豪にとって変わる時

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と暗をてらせる
その塔のすがたかしこし
むさぼり厭かぬ渠ゆえ
いざこゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

奥出雲東部の旧家②　むかし・いま・あす⑦　俳句・短歌・川柳

代が到来した最初の現れである。やがて鉄師の競い合いによって郡内では桜井、絲原、卜蔵の三家が指導者として登場して明治時代へとつながって行くことになる。

◇安部氏◇

―近江鍛冶と出雲の鉄結ぶ

安部氏は、十四世紀中葉、荘司代官として下った武士であり、今日なお中世の土豪屋敷の遺構を残して現存している。

この地が妙音尼の死によって北条氏の支配から離れたころ、後醍醐天皇は石清水八幡宮領として安堵し、その力も求めた。ところが岩屋寺は（後世当山派修験者の拠点となる）武家と結び、当地は北朝の上皇の仙洞御所の御料所となった。そして上皇は代官として、院の蔵人所役人であった安部氏をこの地に遣わしたのである。安部氏は清和源氏、信濃国守護であった小笠原氏の末で、京に上って仙洞御所に仕えていた。

室町時代、安部氏は代官として日本海―敦賀―琵琶湖―大津―京都の道を貢納のため院に伺候し、かたわら鉄の商いをした。時の出雲国守護京極氏の本貫地は近江国で、姉川近くの大平寺山はその居館。その近くが国友鉄鍛冶の居所であり、奥出雲とここの鉄のつながりも深くなった。

―帰農

三沢氏が横田に築城して入ると、安部氏は代官を退き、土豪として開拓に力を尽くした。現在の横田の町づくりが始まったのは尼子氏が一時横田荘を支配した天文年間（一五三二―一五五五）である。中村の五反田に住んだ田村氏が移ってその中核となり、五反田屋といった。慶長年間には約四十戸の町並みが生まれていた。そのころ安部氏の当主は源太左衛門。三沢氏の勧めで尼子に仕え、その滅亡とともに吉川元春（毛利）の支配下に入った。備中高松城の水攻め、朝鮮出兵にも参加したが、徳川時代の到来とともに帰農。以後代々、郡の下郡役を務めた。

松江藩の初代藩主堀尾忠晴が入国して国内を巡遊したとき、備後との国境坂根でタタラ製鉄を営む村下炭坂（職名）をみて、その努力を賞した。ついで五反田屋に泊まり、翌日は安部源太左衛門の案内で裏の藤ケ瀬城跡に登り、かつてこの城に拠（よ）った奥出雲戦国の雄・三沢氏の話を聞いた。三沢氏はすでにこの地を去って毛利に仕え、重臣十人の中に入っていた。五反田屋は、この宿泊の縁で許されて屋号を富田屋と改め、今日に至っている。

むかし・いま・あす⑦

―旧暦七月　文月（ふづき）・女郎花月（おみなえしづき）・初秋

七日七月　七夕祭（たなばたまつり）

六日の宵祭――土用三日に秋風が吹くという諺のように、八月になると、星もすっかり秋らしく冴えて、人の子もものを思うことしきりとなる。六日の朝は、硯を洗い、芋の葉の露を集めて、五色の短冊に、天の川・七夕とか、古歌などを書いて、若竹二本にこよりでつるす。この竹を左右にたてて、その間の棹竹に、ズイキ・長ササギ・枝豆・ホオズキなどを吊るし、縁側の小机に西瓜・唐もろこし・瓜などや、さらに珍菓も供え、灯明をともしてお祭りをする。

そもそも七夕というのは、牽牛・織女の二星が、親の許さぬ恋に落ち、遂に天帝より七月七日に一度逢うよう申し渡され、一年一度の逢う瀬をたのしむために天の川の両側にあらわれる。

もし一粒の雨でも降れば、天の川は洪水になって逢うことができない。地上の凡人は気の毒に思い、晴天であってほしいと祈る。女子が主となる祭である。

各家々の子どもの祭であるが、大原郡の七夕祭は全町あげて、子ども中心の賑かなものである。その由来は伝えによると、中世の終り毛利氏が出雲を支配したとき、代官として児玉某が大東に駐在した。住民たちは児玉の支配する手腕に対して、感謝をしその気持をあらわすために、短冊にも書いて、多くの農作物を添えもって、感謝の行列をして代官屋敷へ繰りこんだことに由来するという。

七日――子どもは朝早く起きて、七夕送りとて、短冊の竹を川岸に向い合わせて立てる。かつてはこの日を「萩の節句」といゝ、萩酒を神に供え餅を搗いて長寿も祈ったという。

盂蘭盆会（うらぼんえ）

盂蘭盆はお盆ともいう。梵語（ぼん）（古代インドの文章語）ウランバナの音訳である。烏藍婆摩（うらんばなと）とも書くが、倒懸と漢訳され、逆（さか）さづりの苦しみを意味している。

餓鬼道の飢えや渇きの苦しみが、あたかも逆さづりのひどい苦痛に似ているところから、こういわれたものである。これがどうしてこのような行事になったかというと、昔、釈迦の十大弟子の一人である神通第一の目蓮が、母が餓鬼道に堕ち苦しんでいるのを知って、自分の神通力ではかなわないので、目蓮は母を救う道を釈迦にたずねたところ、「僧侶が外出しないで一夏の間、修業する夏安居（げあんご）の最終日にあたる七月十五日、百味の飲食（おんじき）を調へ、十方の聖僧を招いて供養せよ」と教えた。

目蓮は、その教え通りに実行して、母を餓鬼道の苦しみから救うことができたという。これが先祖の聖霊（しょうりょう）を供養して、餓鬼界から救うという盂蘭盆会の始まりであるとされている。勿論、それを通して、一人一人が信仰心を高め深めることが根本にあることは申すまでもない。心を

大切にすることを忘れたくないものである。

盆を七月十五日を中心と定めたのには、やはり中国の考えに由来する。古く中国では一月・七月・十月のそれぞれの十五日を、上元・中元・下元といゝ、贖罪の日としていたことによる。

これがわが国に入ったのは、奈良時代のころといわれている。

そしてわが国に伝わっていた日本民族固有の先祖祭りの信仰や行事と組み合わさって変化をとげながら、今日に伝わったものである。くわしく考証することはぶくが、仏壇の前に供えるものなど、中国や仏教の行事に基づくというより、古来の魂祭りの習慣の流れであるという。

この期間を中元といって贈りものをするのは、季節の折目であるからである。

十三日　迎え盆

この日に精霊棚飾りすなわち仏飾りをする。仏壇には萩・おみなえし・ききょうなどの花を飾り、苧殻でつくった棚に、かけぞうめん・里芋・ほうずき・長ささげなどをつり下げる。仏壇の前には机をおき、なすやきゅうりでつくった牛馬や、飾り菓子・団子を供える。

一方墓にも同じく花を立て水を供え香をもやし、灯明をともし、なすをきざんで入れた米をまつる。

また家の門先で、迎え盆の行事をする。夕方家の庭先で、苧殻・麦わら、ところによってはこえ松などを燃やして、桐の葉に、黄粉をまぶした盆団子も供えて「盆さん盆さん、この明かりでござっしゃい、ござっしゃい」「じいさんばあさん、この明かりでござっしゃい」と仏を迎える。祖先の精霊とともに一緒に来るかもしれぬ無縁仏もここでまつる。そして縁側にぬれ雑布を敷いて、迎える精霊の足場とし、仏壇にも灯明・線香をともしてまつる。

十四・十五日の両日は、種々季節の精進料理（御飯や油揚・なす・こんぶなどの珍らしい物で煮〆を作り）を仏壇に供え、あとでいただく。この日までに世話になった家へ中元として御礼の品を届ける。また昨年の盆以後なくなった、親戚や懇意先の人々の霊を慰さめるため、「初盆まいり」といって、先によって線香のほか、米とか灯ろうを届けて拝み、接待もうける。

盆の行事は先づ墓掃除からはじまる。昔は八月七日にするとしたものであったが、今は都合のよい時に行う。わが家の墓ばかりではなく、近くの無縁墓も行うから、墓掃除は大変であった。そして盆花取りをする。そうはぎ（みそはぎ）・ききょう・こごめばな（女郎花）で、花立ては、竹をもってつくり、毎年新しくした。

十六日　仏送り

早朝送り団子をこしらえ、香・花・飾り物などとともに香をたき、川端で送る。この時無縁仏に供えた供物は川へ流す。ほかの供物は持ち帰って、切込み雑れ飯をこしらえて精霊飯と称していただくところもある。ここでは迎え盆と同じく、桐の葉にのせた黄粉団子を供え、これをいただくと一年間はれ物が出ないとも言ったと伝えられている。

十五日の夜には、農村の唯一の娯楽として盆踊りを行う。口

しばぐり句会六月抄

きつつきの餌返りぬ山菜採る　浅野　としお
卯の花嗅ぎ子牛母牛に蹤く　岡田　蹊花
柿落花庵主不在の日々続く　岡田　麗水
老鶯近く郭公遠し朝しずま　小川　あきお
マネキンの肌艶やかに初夏を着る　門脇　花子
洗い髪なびかせ夏の風となる　加納　信子
甘酒に旅の終りを告げて去る　高木　白虹
山なみを植田鏡に深みどり　田辺　竹野
新緑の香りまといて柚戻る　新出谷　一華
皿一つ夫婦でかこむ梅雨の入り　錦織　富江
野苺の色に想い出さがす町　峯石　美代子

夏来る

死待つほか術なき癌の人看つつわれの終焉に思いめぐらす　常盤　はるまさ
朝早く夫の声聞く小庭には泰山木の花の咲きそむ　畑　八重子
岩を縫ふ舌震ダムへの山径をランプたよりに釣場に向ふ　伊藤　萩雨
山や川愛し哀しと歌ひたる啄木の生涯を友と語りつ　景山　悦子
晩酌も終へてくつろぎ台所に妻と音立て皿洗ふなり　児玉　敏郎
毎日の体重の減りをメモをして癌なるを知るや友の眼哀し　佐藤　喜代子
降り続くもの憂き日々も梅雨も咲く多彩の花に明るさ保つ　野村　節子
月あかりを背にわが影を踏みにつつ田の草取りし若き日おもほゆ　藤原　美世栄
峡の田のかげ間を植うる手の先に田蛙鳴きて雨雲呼べり　岡田　時子
朝霧のはれし山路に露草のむらさきふかくつゆをふふみて　藤原　信子
憂きことの多き雨の日部屋ごとに紫陽花さしぬ心足らへり　松浦　愛子
久びさに梅雨空晴れて田面吹く風はそよぎて早苗波うつ　目黒　成生
さ霧降る山の牧場に仔を呼べる親牛の声長く尾を引く　永井　弥生
浜木綿は夏の香りを告げて咲く白兎海岸ロマンを秘めて　安部　夕波

説を唄い囃子をつけ舞い踊る。そして十七日まで村々を踊り廻った。この日に寺へ参詣するのもならわしであった。

盆踊り

日本の芸能には、大きくわけて「踊り」と「舞い」の二つの流れがある。「舞い」は旋回運動、「踊り」は跳躍運動である。発生時には舞いは神がかりの所作であり、踊りは精霊をしづめる所作であったとされている。そして盆踊りは、先祖の御霊について、この世に現われる悪霊を鎮圧するための踊りというわけであった。

具体的には、空也上人（903～972）一遍上人（1239～1289）らによって始められた念仏踊りから発し、小町踊りや伊勢踊りの要素が加わったものともいう。

旧暦七月十五日の満月の夜は、もっともふさわしい踊りの季節である。

しかし時がたつと、こうした信仰も忘れられ、踊りだけが習慣として残り、やがて盆踊りは仏の供養とか、娯楽慰安のために踊られるようになり、衣裳や鳴物もいろいろと趣向をこらすようになってきた。

江戸時代には、八百屋お七などの世話物が踊りにとり入れられ、現在では盆踊りが、炭坑節や五輪音頭にまで変ろうとしている。

しかし一方、古い形が残って都の四条河原で興行して評判をとった念仏踊りは、やがて小唄踊りに変り、これが近世芸能の大きな展開のもとになった。

盆踊りの多くは、広場の中央に櫓をもうけ、これをめぐって踊る。普通は老若男女だれでもいるものもあって、隠岐の一部で行われている、新盆の家で踊るという盆踊り、黒い布で顔をかくして踊る津和野の盆踊りなどは、悪霊を追い払うことゝ関係があるようである。

慶長のころ、出雲の阿国が京のであったようであるが、近世になって口説歌が関東から関西、中国地方にかけて流行し、今はもっぱら音頭の口説歌によって踊られる。踊りの振りは行進の振りにわずかのシナをつけたに過ぎないものが多いが、手拍子そろった美しい踊り姿のものもうまれている。

明治・大正年代は風紀をみだすという理由による厳しい取り締りがあったことなどは、近年の復興ぶりからは、想像もできない。

二十四日の大呂の愛宕祭

天明二年（1782）中丁の卜蔵家の分家が中心となって、京都から分霊を勧請した。その時「通り物」と称する山車と、「愛宕囃」によって、豪華な夏祭り風景を展開する。

（本号の筆者　横田史談会・高橋）

斐之上川柳

競馬場若しやもしやの馬券買う　若槻白馬
帰り待つ留守居の姑に和菓子買う　安部春恵
空仰ぎねころぶ下は牧草で　真綿よし子
ひとり旅気ままと孤愁が走馬燈　高木白虹
手おくれが趣味も娯楽も遠くにし　佐佐木千世
花束をかばってこんだバスに乗り　松浦木公
ストライキやればやる程身が細り　渡辺好之
食足りて米の味まで吝をつけ　松田牛歩
酒ぐせの悪さを示す服のかび　横山まこと
乳イッパイ飲んで胸の児語りかけ　松浦亜以
菜園の茄子八百屋より高くつき　藤原英生
菖蒲湯に菖蒲酒好きだった父　太田亀甲
この枝も切ってしまえと調子だし　児玉哲呂
不発弾抱いて終着の駅近く　堀江孤雷
梅雨入り一つぬいだり又着たり　安部正子
役人のにわか商売高姿勢　目黒申楽

御礼

100号を迎えることができました。皆様が辛抱強く購読頂いて支えて頂いたお蔭と、厚く御礼申し上げます。

横田史談会員そして世話人の方々、短歌・俳句・川柳の会の方々の御協力の賜物であります。

100号記念の4頁増の特集号を計画し、原稿も用意しておりましたが、奥出雲の古墳時代の、すばらしく貴重な論文を寄せて頂いた若き学究者中浜君の熱意にこたえて、毎号沢山の図版をのせ、それにその貯えを注ぎました。考えてみると100号に先がけて、その記念論文として中浜君が内容を充実してくれたのでありまして、増頁に優る記念であったとよろこんでおります。

現在、増頁の機会が時々うまれる経済基盤が固まってきていることも、これまた100号発刊がもたらした、記念であるともいえましょう。ありがとうございました。

100号を祝う意味をこめて、次の講座が、100号発行日に併せて横田史談会によって開催されます。

◎第9回入門講座—考古学
8月6日午后1時30分～3時30分
横田町コミュニティセンター
講師　県教委文化課々長補佐
蓮岡法暲先生
「最近の郡内出土品の意味と、それの語る奥出雲古代史」

◎第83回古文書を読む集い
8月6日午前10時より同所にて

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六二ノ二　編集責任者・高橋一郎　発行／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

編著者　高橋一郎紹介

［略歴など］

大正五年十月二九日生まれ、昭和十二年島根師範専攻科卒。以後県内にて教員（音楽、社会科担当）。昭和五十年横田中学校長を退職後、無職のまま郷土史研究や、文化運動に専心。横田史談会、山陰考古学会結成に貢献、横田町文化財専門委員会、島根ふるさと伝統産業審議会委員等歴任。鉄師頭取・絲原家「絲原記念館」、「奥出雲たたらと刀剣館」、「雲州そろばん伝統産業館」の企画展示の責任者、開設後の委員・役員として貢献。横田町文化祭の歌、横田音頭など作詞作曲多数。

［著書　］

＊「奥出雲をさぐる―古代・中世の奥出雲―」　昭和40年、今井書店（松江）

＊「雲州そろばんの今昔」　昭和52年、松江文庫（報光社内）

＊「あるく見る横田」昭和53，58年、奥出雲文庫１（奥出雲文化協会―高橋一郎内）

＊「奥出雲のたたら製鉄覚書」昭和53年、奥出雲文庫２

＊「奥出雲横田とたたら」平成２年、奥出雲文庫３

＊「横田町誌」昭和43年、編集、執筆に中心的役割を果たす。

＊　たたら製鉄に関する中央・地方刊の専門誌や専門書に研究論文多数発表。地方新聞、地方刊行物に随筆、評論等多数執筆。

［最新執筆］：02年の「奥出雲」刊行中止前後以後

＊　横田町教育委員会「鉄師絲原家の研究と文書目録」05年。高橋一郎整理の分類目録を基礎に文化庁、県補助で悉皆調査、再整理、分類、研究した報告書。A4・514頁。

＊　鉄の道文化圏推進協議会「鉄の道を往く」平成14年、山陰中央新報社所収、「奥出雲におけるたたらの成立と発展―鉄師糸原家文書にみる―」

＊　不昧公生誕二百五十周年記念出版実行委員会「松平不昧と茶の湯」２００２年（非売品）所収「茶書を通して見る一貫性と深化」、「たたら製鉄と松江藩の関係について」

＊　共著「江戸時代における奥出雲たたら製鉄の経営の展開」「鉄と鋼」２００５年Ｎ０．１（ＶＯＬ．91）（日本鉄鋼協会刊）所収。

＊　特掲：「出雲の近世企業たたらの歴史―錬鉄が主要製品であった―」、「ふぇらむ」（日本鉄鋼協会）１９９６年11月号所収。（被引用が多い）

［受　賞］

地域振興文部大臣賞（昭和60年）、産業考古学会長表彰（たたら研究、平成２年）、通商産業大臣表彰（伝統産業育成強化、平成６年）、日本観光学会長表彰（鉄の道文化圏提案と推進、平成７年）、山陰中央新報社地域開発文化部門賞（平成７年）受賞。叙勲「瑞宝雙光賞」（平成16年）。

しめじだけ

しめじだけさん
れつをつくつて
遠足するのか
雨もふらぬに
大きなかさをさして
どこへいく

（評）きのこのかさは日がらかさ、
雨のふる日は雨のかさ

児童雑誌「幼年の友」の「私の童謡」入選。
濱田廣介選。大正15年1月号、小学3年生。

発行
「奥出雲　―　第一分冊」編著者代表・高橋一郎
（横田史談会・奥出雲編集集団）
発行２００６年４月

無断転載、出版を禁止します。
著作権は高橋一郎遺族が所有しています。